

月刊「国民同胞」目次総覧

第51号 (41・1)

十二月八日未明 事実とそれに伴う憤慨

新刊の「今上陛下御製集」について 小柳陽太郎

十余箇国の境を越えて……………桑原暁一

新春隨筆(海都隨想津下正章・男らしさといふと
と長内俊平・新年御歌會始に欲進しよう 脇山
良雄・赤面心理三重野悌次郎・「人間の建
造を説いて磯貝保博・心をし勞作する中
原正昭・人情について森重忠正・批判につ
いて思ふ井上慎一)

☆和歌・国文研十周年記念出版物に寄
せて……………松田福松

第52号 (41・2)

大学の自治と学生の自治について(1)

—附・東大当局発表のパンフレット「大学の自治と
学生の自治」を説いて……………小田村寅二郎

小歌うたひて—大京配より……………桑原暁一

古典の窓(宮本武蔵・五輪書)……………小柳陽太郎

第53号 (41・3)

大学の自治と学生の自治について(2)

—附・東大当局発表のパンフレット「大学の自治と
学生の自治」を説いて……………小田村寅二郎

1号〜50号「国民同胞」目次総覧

第54号 (41・4)

大学の自治と学生の自治について(3)完

—附・東大当局発表のパンフレット「大学の自治と
学生の自治」を説いて……………小田村寅二郎

比較山西教寺合宿の記……………福島義治

第55号 (41・5)

農山村に在つて—その荒廢の現状と問題点—

愛国者の日……………戸田義雄

比較山合宿を終つて——(感想文から) 日羅のこと——聖徳太子研究の一こま

和歌・神宮勤勞奉仕……………青山新太郎

和歌・二月靖國神社に詣つ……………小柳陽太郎

第56号 (41・6)

神社について考へたいこと……………幡掛止浩

明治天皇御製と山……………広瀬 誠

ロバに水を吞ますもの……………名越二荒之助

—中共緊縮運動とシベリア民運運動— 古典の窓(源実朝・金神集)……………小柳陽太郎

第57号 (41・7)

天皇家の伝統—小泉信三先生の追憶— 川井修治

固定概念の打破—天皇と國家の問題— 山田輝彦

田代順一歌集—雲か萍か—を読んで 稲津利比古

第58号 (41・8)

教育觀の是正を要す……………加藤敏治

大學問題の行方—日本の文化史的使命に及ぶ—

心田荒る……………上田通夫

讀書案内(小泉信三「福沢諭吉」・竹山
道雄「京都の一級品」・鯖田豊之
「肉食の思想」)……………山田輝彦

古典の窓(伊藤野呂・仁香日記)……………小柳陽太郎

第59号 (41・9)

—第11回合宿教室特集号—

交流の苦斗の後に……………岸本 弘

合宿教室の経過 参加者の感想文から
合宿詠草から……………

第60号 (41・10)

日韓親善のかけ橋に……………川井修治

—日本学生團體事務所報告記— 訪韓印象記(徳田浩士・古川修・福島義
治・磯貝保博)

現代流行歌批判—日本回帰の歌おここれ—

自自行ずることより—伝統繼承の道—

古典の窓(山権龍・津田只介)……………小柳陽太郎

第61号 (41・11)

歌御会始、詠進のこと……………関 正臣

ソ連という古い国……………倉前義男

和宮の御生涯……………宮脇昌三

第62号 (41・12)

心を用意を……………加納祐五

古事記研究……………今林賢郁

—道にありて— 歌集紹介(井上道興「白山黒水」・川並博徳「水華」)

某月某日……………夜久正雄

行為と道義心と……………江里口淳一郎

古典の窓(新渡戸寛・同意考)……………小柳陽太郎

太宰府合宿報告記……………島津正数

第63号 (42・1)

天皇御歌(昭和四十二年元日発表)

「清き一票」と「日本の政治」
—ワスコメへの提言—……………小田村寅二郎

日本の岐路—P・W・ツイツグ氏の所説—

—桑原暁一氏著—「日本精神史鈔」——親鸞と実朝
の系譜——紹介……………夜久正雄

小田村理事長婦國報告会から……………上村和男

☆各地区合宿だより……………

第64号 (42・2)

—富山・南九州・京都・東京—

☆同胞歌壇……………

今上天皇御歌拝誦……………夜久正雄

述而不作……………山田輝彦

「日本」病氣のこと……………瀬上安正

鬼の話……………小柳陽太郎

—夜久正雄氏著—「古事記のいのち」紹介……………高木尚一

大東亜戦争は正義の戦争であった……………

—「戦の支地に落ちて死なば!」名越二荒之助
(韓国からの便り)— 一衣帯水のな地理的条件……………朴 鉄柱

慰靈祭歌詠

☆各地の集り—新薬師寺・東京・鳥兜島—

☆同胞歌壇

和歌・病床にて……………小林国男
「きつな」合宿教室女子社員との交際関係について

☆同胞歌壇
第65号(42・3)

本有への帰郷……………幡掛正浩
―竹山道雄著「瓶の木と藤」から―

馬子の問題―聖徳太子研究會……………桑原暁一
スタンレー・ウオッシュバンの「乃木」
を読んで……………古山 修
毛路線は一つの掟―果てしない反逆主義論争―

本会の運営を担う若手グループの集い
上村和男
和歌・「国民同胞」33号の合宿歌壇を読む
青山新太郎

第66号(42・4)

「つけ加へる」といふこと……………長内俊平
三井甲之と斎藤茂吉……………広瀬 誠
大学における勉強とは何か……………宝辺正久
三井甲之著「今上天皇御歌解説附・万葉集」
刊行のことは……………亀井孝之
自他を分かつたず―聖徳太子研究會……………桑原暁一
藤沢女子合宿の記録……………梅田咲子
昭和42年春季太宰府合宿……………井上慎一
太宰府合宿感想文抄

第67号(42・5)

生と死……………山田輝彦
未成熟な言葉……………加藤善之
落語「日本国憲法七不思議」
名越二荒之助

心の据え所……………春藤純生
生の充実を求めて……………片岡 健
「学友諸君に訴う」……………早稲田大学信和会

和歌・二月十一日……………青山新太郎
第68号(42・6)

ゲーテとハイゼンベルク
現代思想と企業思想に関連して……………高木晃吉
マルクス・イデオロギーからの脱却のため
に……………川井修治
特攻隊の記……………加藤善之

第69号(42・7)

合宿への積極的参加を……………小泉一也
草莽非運の志―赤報隊相良総三のこと
を……………宮脇昌三
防人の歌……………沢部寿孫
クラブ生活に求めるもの……………岸本 弘
中東動乱とマタイ伝……………瀬上安正
「合宿教室」事務局からの緊急のお知らせ

第70号(42・8)

現代日本における一つの疑念点
「戦争」と「平和」についての錯覚と迷宮―ベトナム問
題をめぐる「学友作家グループ」等の発言
川出麻須美先生……………小田村寅二郎
黒上先生の御本を読んで思うこと
夜久正雄
靖国の銀杏……………磯貝保博
古典の窓(菅原道真)……………関 正臣

第71号(42・9)

人生事実とわれら国民の道……………凶師博隆
合宿教室の流れ……………志賀建一郎・小柳左門
合宿詠草より
参加者の感想文より
初参加の韓国学生団を迎えて

第72号(42・10)

漱石とナシヨナリズム……………山田輝彦

歴史の学―亜細亜大学々大由新造先生の阿蘇合宿に
おける御挨拶
心理的鎖国からの脱却……………倉前義男
大韓民国訪日学生団の案内をして
三宅将之
慰霊祭献詠
古典の窓(山與大式・柳子新詠)……………小柳陽太郎

第73号(42・11)

「時勢」を見る目―松宮巖山と山與大式―
明治天皇御製について……………小柳陽太郎
和歌・紀州勝浦にて友を偲ぶ……………夜久正雄
現世的愛情について(愛見の悲)
―岡山大学パルカソンの会―……………伊藤三樹夫
東西文化と日本……………瀬上安正
☆同胞歌壇

第74号(42・12)

今後の日韓関係はいかにあるべきか
―第一回日本学生防衛研修隊行団報告―
訪韓報告座談会―大学・高校訪問を中心に―
国防を考える―鹿児島大学・坊の陣舎宿―
明治大学「国政研究会」から
松本昭・土岐直彦
繁水正博・豊島典雄

☆同胞歌壇

第75号(43・1)

背私向公の道を進もう
―過去の否定と忘却に反対する―……………浜田収二郎
人間最高の宗教……………奥田克巳
白鳥の記……………桑原暁一
美しい便り……………長内俊平
元旦随想……………高木尚一
「大学自治」に関する一資料
青年の思想……………古川 修
和歌 広瀬誠・白井伝・丸山行雄

第76号(43・2)

昭和四十三年元旦発表の 今上御歌を拝誦して
廣瀬 誠
菊水の記……………桑原暁一
私の生き方……………亀井孝之
人間の品位といはゆる「生活」について
三宅将之
偽者はゆるせない……………田村 潔
九大における不法占拠をめぐって
―九大信和会の活動―……………田中康希・小柳左門
国文研相統体制の樹立について
和歌・車中にて……………沢部寿孫

第77号(43・3)

国の個性―権力・反権力をこえるもの―
自治権・運動組織・天皇の問題
―小田村理事長を囲む座談会―……………田村 潔
北山林業の山本翁を訪ねて……………行武 潔
観心寺の記……………桑原暁一
「若い国文研グループ」第二回目の集い
沢部寿孫
ベトナムの堅琴―水島上等兵の手紙―
名越二荒之助

第78号(43・4)

学問の力……………小柳陽太郎
日本の大学の明・暗二題……………小田村寅二郎
古典を読むころ
―女子高生生の「十七美憲法」誌後感想文から―
信貴山の記……………行武靖枝
八幡・大正寺合宿の記……………桑原暁一
☆八幡大正寺合宿詠草
―今夏の合宿教室をめざして―……………白石 肇

第79号 (43・5)

いざ立たん、学園正常化……川井修治
孝明天皇の御製について……夜久正雄
葉彌の記……桑原暁一
葉山女子寄宿草より
早大紛争と私……今林賢郁
かけがえのない友を得たうれしさ
山田苑枝

第80号 (43・6)

真実の報道とは何か……浜田収二郎
情操と学問と
——高校生に懸す折々のことば——
宮脇昌三
磯長・天王寺の記……桑原暁一
勝鬘経義疏から……梶村昇
情意の世界……江里口淳一郎
大いなる生命に目覚めて……岸本弘

第81号 (43・7)

日本はどうなるのか……高木尚一
「学生問題」を考える……小田村寅二郎
三条実美と前田慶寧……広瀬誠
「黒部の太陽」から
——太田恒氏と般若心経——……岡村義一
古典の窓(雨月物語・菊花の約)……小柳陽太郎

第82号 (43・8)

「日本を守る」とはどういふことなのか
思想の原点、古くして新しい問題「国家」……長内俊平
山田輝彦
山田輝彦
有情の記……桑原暁一
文明の戦い——日本文化再発見の意味と経緯——
加藤善之

長崎大学信和会から
——川井修治先生講演会を開く……白石肇

第83号 (43・9)

第13回合宿教室開催さる……三宅将之
合宿教室の経過……斎藤利明・川中輝和・安藤幹雄
参加者の感想文から
合宿詠草から
第84号 (43・10)
宝辺正久

第84号 (43・10)

白鷺の記……桑原暁一
日本国憲法について……亀井孝之
日本の知識人と生活人……柴田悌輔
「五ヶ条の御誓文」……磯貝保博
昭和43年の慰霊祭献詠
第85号 (43・11)
黙過できない暴走と怯懦

第85号 (43・11)

心の抛りどころ——近ごろ思ふこと——加納祐五
世界戦略の見方……倉前義男
岡潔先生にお会いして……小柳左門
学園に「信」の場を回復しよう
——富山大学信和会合宿を目標して——
岸本弘
外国人の見た明治百年……関正臣
つじの記……桑原暁一
戦没学生の手記に思ふ……松木昭

第86号 (43・12)

「明治・大正・昭和選集」刊行のことば……高木昇吉
川端氏の記念講演について……長内俊平
——ハイゼンベルグ博士の講演も想起して——
「明治・大正・昭和選集」刊行のことば……亀井孝之
第三回葉山合宿——若いグループの集い——
野間口行正

第87号 (44・1)

昭和43年元旦発表の今上御歌を拝誦して
広瀬誠

第88号 (44・2)

何とも理解しかねることの統出
——大学問題をめぐって——……小田村寅二郎
名もなき民の思ひ(「国のおきて」序論)
長内俊平
「天皇陛下下」……丹治正平
野菊の山……三宅教子
各地大学の研修だより——岡山・東京・富山・長崎
和歌木村松治部・高橋瑞助・青山新太郎・広瀬誠・沢高孝
珠・田川美代子・久富啓子

第89号 (44・3)

悲しみの感覚……山田輝彦
名もなき民の思ひ(「国のおきて」試論)
長内俊平
川端氏の記念講演について……高木昇吉
——ハイゼンベルグ博士の講演も想起して——
「明治・大正・昭和選集」刊行のことば……亀井孝之

第90号 (44・4)

人の生き方を正す学問を……沢部寿孫
勇者・正岡子規……小柳陽太郎
内乱はこうして起る……名越二荒之助
地方教師の憂い……村田英雄
☆同胞歌壇

第91号 (44・5)

「日本思想」の系譜全五冊の出版を終えて——最終巻の「ほしがき」から——小田村寅二郎
日本思想の系譜(全五冊)の目次
生徒と共に……小林国男
卒業にあたって……第六葦牙同人
——かなたの生命の流れの中で——伊藤三樹夫
大学紛争について思うこと……野口明宏
新しい学生運動と同信相続……加部隆三

第92号 (44・6)

「わだつみの像」私感……山田輝彦
東洋と西洋……瀬上安正
「東大紛争両主役の考え」について……宮脇昌三
勇気の源泉——「日本思想系譜」全五冊の刊行をよる
ことば——小泉一也
オキナワ返還問題について……朴昇浩
——韓国一市民からの苦言——

第93号 (44・7)

制度の改革が全てか……三宅将之
大学立法をめぐって……
——政府・文部省に「行政責任」の自覚を——
小田村寅二郎

第94号 (44・8)

万葉集防人歌について……広瀬誠
古典雑感……小柳陽太郎
反骨精神……磯貝保博
大学のみが学問の場にあらず……岸本弘
いざ立て、思想の戦いに……田村潔
混乱からの脱却を求めて……今林賢郁

第95号 (44・9)

自国サデイズの典型
——極東文化批判としての教科書検定記事——
戸田義雄
天皇・皇后両陛下の行幸啓を富山県植樹
祭にお迎へして(てがみ)……広瀬誠
お伊勢さま雑記……関正臣

第96号 (44・10)

自国サデイズの典型
——極東文化批判としての教科書検定記事——
戸田義雄
天皇・皇后両陛下の行幸啓を富山県植樹
祭にお迎へして(てがみ)……広瀬誠
お伊勢さま雑記……関正臣

第97号 (44・11)

自国サデイズの典型
——極東文化批判としての教科書検定記事——
戸田義雄
天皇・皇后両陛下の行幸啓を富山県植樹
祭にお迎へして(てがみ)……広瀬誠
お伊勢さま雑記……関正臣

「動物農場」の著者……………桑原暁一
父への手紙……………長内俊陰
☆阿蘇合宿教室しきしまのみち詠草抄

第95号(44・9)

第14回合宿教室特集号

第14回々合宿教室々開催

—大学問題の核心に迫る—……………沢部寿孫
この合宿に実現しよう、ほんとうの「教育の場」を!!……………今林賢郁
合宿五日間の経過……………山口秀範・岸本常明・伊藤哲明・北川文雄・石村善怡
参加者感想文
合宿詠草より
和歌・合宿教室終了のしらせをいただきて……………三浦貞蔵

第96号(44・10)

宇宙時代の限界……………名越二荒之助
科学と教学……………奥田克己
夢から覚めよ……………北島照明
子規と啄木……………山田輝彦
素朴な道学者……………桑原暁一
反「安保」のねらいは何か……………山内健生
☆慰霊祭報告

第97号(44・11)

日本民族の正念……………高木尚一
—平和の大海へ注ぐ一滴の水(三井甲之憲)をよみて—
高校教師はこれでいいのか……………国武忠彦
田所兄の憶い出……………桑原暁一
中部太平洋を訪れて……………倉前義男
レフター著「ヒューマンニズムの経済学」を読
んで思うこと……………津下有道
和歌・法隆寺頌……………夜久正雄

第98号(44・12)

ゲートと社会主義……………桑原暁一

独断的教育を排するため……………名越二荒之助
—教科書裁判の法廷に立つて—……………川井修治
鹿大封鎖無血解除の記……………長内俊平
和歌・青砥君への便りのはしに……………青砥宏一

第99号(45・1)

昭和四十五年元日発表の
今上御歌を拝誦して……………広瀬 誠
波に日の出……………脇山良雄
観念への奉仕者……………三浦貞蔵
再び「動物農場」の著者について……………桑原暁一

モノとココロ—企業経営者の首任!—……………高木晃吉
「高教組脱退」に関すること……………岸本 弘

第100号(45・2)

「心身共に穎敏なるを欲す」……………山田輝彦
百号記念・回顧座談会
二つのエッセイ(紹介)……………桑原暁一
☆出版予告
1. 憂国の光と影—田所広泰遺稿集
2. 欧米名著邦訳(明治)集
☆「国文研論叢」発行事業計画

(以上)

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州→東京←全国)
東京都中央区銀座
7-3柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町3 宝辺正久
振替 下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価 一部 20円(送料別)
年間360円 (送料共)

十二月八日未明

— 事実とそれに伴う情操 —

漱石の「三四郎」を読んでいたら、次のようなことが目についた。

「現代人は事実を好むが、事実に伴う情操は切棄てる習慣である。切棄てなければならぬ程、世間が切迫しているのだから仕方ない。……」

漱石は仕方がないという。仕方がないとはいうものの、彼はそこで簡単に問題を投げってしまったわけではないので、漱石の生涯を貫いてなりひびく不気味な底音はすべてここに発し、この一見単純に見える主題に、深い手傷を負って彼はその一生を終えたのである。

ともあれ事実には必ずそれに伴う情操がある。水に投げられた石はそのまま底に沈むが、その周囲に拡がってゆく波紋に、ぼくらは石が水に落ちたという、その事実を確認するのだ。波紋はその事実に伴う二次的な現象かもしれないが、もしも波紋を無視してしまえば、そこには、ただ石が水に落ちたという物理的な事実だけがわびしく残るだけだ。現在のぼく

らの生活は、漱石の言をかりれば、この波紋を切棄て「次の石を投ずること」にのみ専念しなければならぬ程「切迫している」。波紋が生れ、そして次第に消えてゆく、その僅かの時間さえ、その静けさにつきあおうとはしない。その、秒を刻む僅かの時間に耐えようとはしない。そして一つの点から次の点へ、何の意味もない、手応えもない抽象化された線上を、ぼくらはわたりあるいているのである。

十二月八日がふたたびめぐってきた。テレビの画面には真珠湾攻撃の写真がうつり、人々はあたたかな平和の日射しのもとで「あの日」のさまざまな思い出にひたりながら、異口同音に、二度と戦争をくりかえすまいと誓う。だが、日本の長い歴史の中で、最も壮大な劇の場面を展開したあの日米開戦という事実に対する回想が、すべて戦争反対という結論のみ集約され、更には、そのような結論にむすびつけなければ、回想することすら許されないというような現代の風潮は

一体何を意味するのだろうか。ぼくらはここにもまた漱石のいう「事実に伴う情操を切棄てる」風習の、そのいたましい姿を見出すのである。

十二月八日未明、西太平洋上において、日米は戦闘状態に入った。その事実が簡明だがその事実が曳く長い影を理解することは決して容易ではあるまい。戦争が始まった——戦争は悪だ——だからあの時代の人は悪を犯した。ただそれだけの論法の中に、人々は複雑な歴史のかけを封じこめてしまう。倫理的判断だけが、しかも他愛ない感傷によってひきずりまわされる判断だけが、他の一切に優先する。

事実に伴う情操という場合、その情操とは、汲めどもつきぬ微妙な人生の、深い味わいを意味するはずである。一輪の花が地上に咲くためにさえ、どれほど長い時間をかけたか、複雑な自然のいとなみがあるか、まして日本の民族にとつて、決定的な運命をもたらした日米開戦という事実の背後にはりめぐらされた運命の糸筋の複雑さは、まさに人間の片々たる知恵を絶するものがあるはずではないか。日米開戦という事実が、その背後に無限に深く、そして長いかけを曳く。だが人々はそのかけに迫らうとはしない。戦争が始まった、戦争は悪だ——そして判断は中止してしまう。だが、そのかけに迫ることなしにぼくらはどうして日米開戦という歴史の一頁を読みとることが出来るよう。事実がまさにその周辺に情操を伴ってはじめて事実になる。

情操といえば人々は文学的だという。歴史という学問に情操は不用だという。

だが事実を綴るのが「社会科学」で、それに伴う情操を扱うのが「文学」だという、そのような分化によっていかに人々の心が荒廃をきわめているか。われわれはむしろその分化の当否をこそ問わねばなるまい。情操を切り捨てて瘦せほそった事実が、いかに他愛なく感傷の餌食になるか、十二月八日という日を、戦争反対という前提よってしか回想出来ないという風潮は、その間の消息を如実に示

目次

- 十二月八日未明……………小柳陽太郎 (1)
- 新刊の「今上陛下御製集」について…夜久正雄 (2)
- 十余箇国の境を越えて……………桑原 暎一 (4)
- (新春隨筆)
- 神都隨想……………津下 正章 (5)
- 男らしさということ……………長内 俊平 (5)
- 新年御歌会始に詠進しよう……………脇山良雄 (6)
- 赤面恐怖の心理……………三重野徳次郎 (7)
- 「人間建設」を読んで……………磯貝保博 (7)
- 心を尽し労作する中に……………原 正昭 (8)
- 心柄について……………森 重忠 (8)
- 批判について思う……………井上慎一 (8)

している。

ぼくらは歴史を「理解する」ことは出来ない。ただぼくらに許されていることは「味わう」ことだけだ。精神のきびしい緊張によって、事実の周辺にただよふ情操をしっかりとらうとけつて、道はない。航空母艦の甲板を離れて真珠湾にむかう飛行機の、あのはりつめた姿を見るとき、ぼくの胸をよぎる感慨はただそれに尽きる。

(修猷館高校教諭 小柳陽太郎)

新刊の「今上陛下御製集」について

夜久正雄

福島の青山新太郎氏が「今上陛下御製集」を謹編、刊行された。本文五七頁（非売品）、普通の新書版よりちよつと大長で、簡素な白表紙なのがまことに気品がある。奥付は昭和四十年七月七日発行となつてゐるが、編者の御病気で実際は十一月三日頃出来上つたといふことである。

青山氏は昭和二十九年に「今上陛下御集」を謹編、刊行された篤学の方で、今上天皇の御歌の研究について屈指の御人といふことができよう。戦後毎年宮中の清掃に奉仕しつづけておられるとも承つた。拙著「歌人・今上天皇」を精読して下さつて数々の御教示を賜つたのが御縁で、先日はお目にかゝつたのである。篤信の御仕事に頭が下がつた。

昨年の元旦には松本善之助氏の「盲人に提灯」の新年特別号として刊行された「今上陛下御製集」を手にかゝることができた。神社本庁の「今上陛下御集」が昭和三十一年の刊行になつてゐるから、爾來十年ばかり御製集の刊行はなかつたわけだ。「盲人に提灯」の「御製集」は、私にとっては私蔵の御製集の活字化ではあつたが、大方にとつて読誦と研究との便宜を提供しえたと思ふ。しかし、その

後記にも書いたとおり、調査に万全を期することができず、そのために多少の不備をまぬがれなかつた。ところが、今度手にした青山氏の「今上陛下御集」は、精密な調査にもとづくものであつて、校正もまた——これは私も手伝つたのでちよつと気がひけるが、結果としても——厳正で、ほとんどまちがひがない。四十年発表までの御製集として、最も権威のあるものである。青山氏に深謝する。前の御製集は今度の青山氏のものによつて訂正する。

校正をしてゐると細かなところに氣のつくもので、例へばある御歌では、「いたつき」とあり、ほかの御歌では、「いたつき」とある場合がある。戦前の御製の表記には濁点を使はなかつたが、戦後は戦前の御製にも濁点をつけて読み易くしてゐる。しかし、「いたつき」「いたつき」ともに戦後の御歌の中の言葉である。

「広辞苑」によると八平安時代には「いたつき」と清音Vとあるが、「いたつき」「いたつき」両方同じ言葉となつてゐる。かといつて一方に整理するわけにはゆかない。あるひは、音調なり語感なりの差があるのかもしれないのである。御製はその点表現は勿論、表記のすみずみまで

作者の懇切な心が行きわたつてゐるものであるから、編者の私意でうっかり整理してはとんでもないあやまちをおかすことにならう。そこで本書ではそれぞれ宮内庁発表どほりになつてゐるはずである。ふり仮名も宮内庁発表のものに抱つてゐる。これが細かな点まで正確を期した事例である。

大きなことの一事は、（終戦後の御製）として次の御製が発表されたことであらう。青山氏の洩れ承つたところを謹編に加へたのであるから、他の御製とは発表の形式がちがふが、終戦の御心境を洩された御製といふ点で、ありがたい配慮である。

（終戦後の御製）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとめけり
たふれゆく民をおもひて
昭和二十年の御製の「社頭寒梅」と「折にふれて」の間にこの二首が加へられた。

社頭寒梅

風さむきしよの月に世を祈るひろま
へ清くうめかをるなり

折にふれて

海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとたたいのなるなり

「社頭寒梅」の御歌について広瀬誠氏は「この御歌は、一度よみくだしただけでは分らぬ。寒風、霜夜、月、世を祈る広前、薰る梅……と材料を頭の中でよ

くく味つてみて、その歌境を組立ててみて、やつとうなづける。この材料の複雑は、あれやこれやと心労絶えなかつた当時の寂慮そのままである。一首は危く分裂しそふになつて、わづかに「なり」でふみこたえている。ただ「世を祈る」それが天皇にとつてすべてであつた。この世を祈るお心が凝つて、敗戦の最悪危局が救われたのであつた。それまでにどんなに苦しみつづけられたらう。十九年二十年の御歌は、この事実をいたしたしくも示すのである。」と言はれた。（拙著「歌人・今上天皇」所載広瀬誠氏論文「御歌歌風の展開」）

そして、「折にふれて」の御歌については、「孝明天皇御製を偲ばすような荒々しいリズムである。第三句を『この民の』と字余りに力を入れてよみつけられこのころにこもる無量の思い。当時のご苦労を偲ぶいたしよ。しかし、十九年、二十年御歌とちがつて、既にあれこれの躊躇はなく、苦悩しつつも、今は行くところへ行くといった、まっしぐらの力がある。」

今上天皇御歌歌風の展開を、歌風そのものの上から、戦前昭和十六、七年頃まで、戦中・終戦直後、戦後昭和二十一年十月以後の三期に分けたのは広瀬氏の卓見である。昭和二十年の御歌は、この第二期に入る。広瀬氏は第一期を「行く水のように自然で清くてもこうごうしく氣高い御歌」と言ひ、第三期を「他力易行・自然法爾の、おのづから吹く風に

乗託するような御歌風。」と言ふ。そしてその中間の第二期を「苦悩の御歌」とされた。

「終戦」は文字通り戦争を終止することであつて、人間の政治的意志的行為である。最大の破局をはらんだ終戦前後において、国政の最高地位にあつた今上天皇の意志決定が、どのようなものであつたか、とてもわれわれに推察することはできない。最も自由で最も強靱な意志のみよくするところであらう。その意志決定の根本動機が、身をすてて国民をおもひたたまふ御心であつたことを、(終戦後の御歌)二首ははっきりと強く示すのである。二首は反覆であるが、連作の形で、対照的な繰りかへしである。第一首の御歌は、「……………いくさとめけり」まで、全く一氣に、しかし五・八・六・七といふ字余りを含んで強くありのまゝに詠んで、最後に「身はいかならむとも」と九音でしつかりと重くとどめてある。「爆撃にたふれゆく民」に作者の心はとらへられてゐて、己をかへりみる余裕はない。国民の破滅を救はうとして終戦の決心をされた時、その決心はおのづから捨身のものであつた。そういう風なお心の展開がうたはれてゐる。文字通り、「悲心抜苦」の菩薩道の実践である。次の御歌はこれを逆に、「身はいかならむともいくさとめけり」と、己れを捨てて終戦にのぞまれた御心を一氣にのべ、「ただたふれゆく民をおもひて」と深い同情の御心を最後にのべられたの

である。第一首の最後の「身はいかならむとも」といふ字余りの句の重い調子と第二首の最初の句の「身はいかならむとも」といふ2・3・4の調子とが対照的で、作者の心の動きがそこでまた一転して元へもどる、という風である。そして、その心は変らない、回転して変らない、不動の、無限の信が詠まれてゐるような、不思議な二首の連作である。

この、身を捨てて国民をおもふ天皇のお心に感応して国民は戦ひに身をさゝげたのである。天皇と国民との信頼感、爆撃も敗戦も崩すことができなかった。そしてそれが、地方御巡行をお迎へする国民の熱狂的な歓迎となり、働らく気力のもととなり、戦後の復興が行なはれたのである。終戦の詔書、戦中、戦後の御歌が、現代日本復興の力の源となつたのである。このことを忘れないためにも、(終戦後の御製)二首の加へられたことはありがたいことである。昭和四十年度は、既に新聞に次の二首が発表された。

鳥取県における植樹行事に際して
静かなる日本海をながめつつ大山の嶺
に松うゑにけり

穴道湖
夕風の吹きすさむなべに白波のたつみ
づらみをふりさけてみつ

最初の御歌は、一読、すぐその雄大さが気がつく。「静かなる日本海」も、象徴的で、見るものの安堵をさそふものがある。雄大な平和な大自然の中で「松を植ゑ」る作者の行為の感激が、おのづか

らこの雄大な一首を生み出したのであらう。「大山の嶺」といふのであるから、そこにのぼって日本海をながめた人も数限りないであらう。そこに松を植ゑた人も数限りないであらう。しかし、かう純粹には詠めなかつたであらう。私などには言ひあらはせない、何ともいへぬ、無心のひろがりがあるのである。そして、雲仙岳にて

高原にみやまきりしま美しくむらがり
さきて小鳥とぶなり

の御歌にあるような、一種の宗教性が感じられるのである。日本海、大山といふ大きな自然の中で、植樹をする作者は自己の行為に対して、自然の営みに參ずる深い大きな感動を味はふのである。われわれもまたこのような行為の感激を味はひたいと思ふ。今上天皇は毎年植樹の御歌を発表なさつてゐる。昭和三十九年の

長野県八子が峯の植樹行事
や八子が峯にはかに雪のふるなかもろ
びともなへうゑをはりたり

といふ雄壮なしらべの御歌である。
昭和四十年「穴道湖」の御歌も強くを
をしいしらべの御歌である。何か、か
う、きびしい強い御心情が近年の御歌に
は強く拝されるような感じである。それ
が、日本の国民生活の危局と関係のない
はずはないと思ふ。御歌のしらべにこも
る御心もちを仰いで世に処したいと思ふ。

さて、この「御製集」の頒布について、

青山氏は、「今后毎年新版を刊行、御希望の方には何部にも無代にてお送り致します。つきましては本書の刊行に御協力願へますれば悦びこれに過ぐるものはありません。」と書いてをられて、頒価のごときものを決めてをられないから、御趣旨にそつて、申込まれたい。申込先 福島県内郷市高野町榎木 三九〇二

青山新太郎様
(筆者、夜久正雄氏は亜細亜大学教授)

国文研十周年記念

出版物に寄せて

松田福松

みちゆけば電信柱にべたくと共産党のはりがみ見にくし
かつて世に労働党のはびこりて凶逆意志をたくましくしき
いまソ連と社会党、中共と共産党うでくみあはせみくににせまる
滔天の凶逆意志をうちくたくやまとをごころいづくにもとめむ
「国防とは国民精神をもて国民精神をまもる」いひなり
亡き友のみたまよ今によみがへりみそなはしたまへみくにのすがたを
友よ友よ異変のきさしありくわが身にせまるたゞさらめやも
(昭和四〇・一一・一六)

十余箇国の境を越えて

桑原 曉 一

歎異鈔の第二章に――

おのの十余箇国の境をこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころさし、ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり云々

とある。関東の農民たちが、信の問題一つのために、はるばる、京にある師親鸞をたずねた、という、日本精神史の上で最も感動的なパセージの一つである。ところで、ぼくはさきごろ、ふと「身命をかへりみずして」と云うのにひっかかった。道中の苦勞を思つてのことばと思えばそれでよいわけだが、それにしても少しことばが過ぎてゐるのではないかと

思われたのである。阿仏尼のごときは、五十七才にもなった女の身で京から鎌倉へ下向している。また明月記(元福元年八月八日の条)に「宗行卿後家、憑む所の周防宇美庄、資経卿忽ち申給す。宗氏世途を失ふ。母尼、時刻を廻らさず、関東に馳せ下る」とある。阿仏尼の前にすでに阿仏尼があつたわけである。阿仏尼にしても、この母尼にしても「身命をかへりみずして」鎌倉に馳せ下つたのだ、と云えぬことはない。しかし、年とつた女性でもやれたことを犬の男が、しかも「おのおの」とあるように、何人か連れだつてのことであるのに「身命をかへりみずして」というのは、いかげなものか、と感じられたのである。これについて思いあわされるのは、親鸞を慕つて上洛し

た円仏房のことである。

この多ん仏房、くだられ候。ころろさしふかく候ゆへに、ぬし(主)などにもしられ申さずしてのぼられて候ぞ。ころろにいらておほせられ候べく候。この十日の夜、せうもう(焼亡)にあふて候。この御房、よくくたづね候て候なり。ころろさしありがたきやうに候ぞ。さだめてこのやうは申され候はんずらん。よくよごきかせられ候べく候。なにごともなにごともいそがしさに、くはしう申さず候。あなかしこく。

十二月十五日 親鸞花押 真仏御房へ

親鸞の書簡のうちで、ぼくには最もなつかしく思われるものである。ありがたしいことには真蹟が伝えられている。円仏房は、親鸞を慕つて自家にもことわらず、下野国から京へ上つた。それは親鸞が焼亡に遭つた直後のことであつた。それだけに親鸞のよごきかは非常なものであつたと察せられる。ところで、この「十二月十五日」とあるのは建長七年のことと思われる。と云うのは恵信尼文書の建長八年七月九日附及び九月十五日附の書状によつて、最近に親鸞が焼亡に遭つたことが知られるからである。それはさておいて、この円仏房の上洛こそ「身命をかへりみずして」と云つてもおかしくはない。それでも「ころろさしの深く候ゆへに」と云うにとどまつている。それで、

こうまで云わねばならなかつた事情がありはしないかと、あれこれ考えてみて、一つ気づいたことがある。それは、やはり真蹟の、慶信宛返書に添えられた蓮位(親鸞の側近にあつた)の書状にあることである。

そもそも覚信房の事、ことにあはれにおほえ、またたふとくもおほえ候。そのゆへは信心かはらすおほられ候。……のぼられ候しに、困をたちて、ひといち(不明)とまふししとき、やみいだして候しかども、同行たちは、かへれなんどまふ候しかども、死するほどのことならば、かへるともやみ、とどまるとも死し候はむず。またやまひは、やみ候は、かへるともやみ、とどまるともやみ候はむず。おなじくは、みもと(親鸞の)にてこそおほり候はばおほり候はめ、とそんじてまいり候也と御ものがたり候し也。この御信心まことにめでたくおほえ候云々とある。この覚信房は慶信の父である、というから、慶信の親鸞宛て質問書簡は、父の覚信がふところにして上洛し、その手から親鸞にわたされたのであろうか。そうだとすると、慶信書簡は十月十日附であり、蓮位添付は十月廿九日附であるから、わずか十五日ばかりで下野から京まで行きつき、間もなく覚信は亡くなった、と云うことになる。ほとんど昼夜兼行で途を急いだのか。おそらく病める覚信を同行が交替で背負い、覚信のいのちのあるうちに、師のみもとに行きつきたいということであつたであろう。この一行を迎えては「身命をかへりみずして」と云わざるをえまい。

さて、この十月十日あるいは十月廿九日というのは正嘉二年(親鸞八十六才)のことと思われる。この翌年(正元元年)閏十月廿九日附高田入道宛書簡(これも真蹟)に「かくしんぼう(覚信房)ふるとしころ(旧年頃)は、かならずくさきだちてまたせ給ひ候らん」とあるからである。このように「十余箇国の境をこえて、身命をかへりみずして」の上洛を正嘉二年のこととする、これに対応するものが見出される、それは何か。――有名な、獲得名号・自然法爾の法語のあとがきに「正嘉二歳戊午十二月日、善法房僧都御房、三条とみのこうちの御坊にて、聖人に、あいまいらせてのききかき。そのとき願智これを書くなり」とあるもの、すなわちそれである。願智も「身命をかへりみずして」上洛した同行の一人であつたにちがいない。この「ききかき」は「……この道理をこころえつるのちに、この自然のことは、つねに沙汰すべきにあらざるなり。つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるなるべし。これは仏智の不思議にてあるなり」でおわつている。歎異鈔の第十章に「念仏には義なきを義とす。不可称・不可説・不可思議のゆへに、とおほせさふらひき」とあるのはこれと別のことではない。願智の筆録した法語は、歎異鈔の筆者・唯円もいっしょに聞いたものであろう。それを簡単にしたのでこの第十章にはかならぬのではないか。「十余箇国の境をこえて身命をかへりみずして」たづねてきた東國の人々(その中に願智、唯円、覚信がいた)に親鸞が云つてきかせたことばは、第二章だけではなく、十章までの全部がそれであると考えられる。第二章のほかのほとんどもすべての章が、第二章とおなじく、念仏のことを主題にしているのである。

新春隨筆

神都隨想

津下正章

国民同胞

ただ第四章にだけは、念仏ということばは出ていない。しかし、そこにある「他力をたのみてまつる」ということは念仏申す、と云うことにはかならない。また、十章にわたる親鸞のことばを記しおわって、ことばをあらためて――

もそもそかの御存生のむかし、おなじころざしにて、あゆみを遼遠の洛陽にげげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけしともがらは、同時に御意

趣をうけたまはりしかども云々とあるのは、十章にわたる聞きがきの全部が、同行のものが同時に聞いた「御意趣」であることを示すものではないか。

なお、この正嘉二年から翌正元元年にかけては、暴風雨のための飢饉が全国を蔽い、これに加えて疫病が流行して、死ぬるものが多かった。正元元年の翌年文応元年十一月十三日附の親鸞の書簡に――

共感をよび、明るい日本の将来を予想させ、心強さと頼もしさを感じさせたことと思ふ。国民文化研究会の皆さんも大学教官有志協議会の皆さんも、あの文集を読んで、学生諸君の進歩振りを殊にハッキリ認めて嬉しく思はれたことと考へる。そして、十年の歴史の尊い年輪が刻まれてゐると思はれたことだらう。また多数の人々の善意と努力の集積が、この立派な結果を見せたことと、この向上の歩みが、同様にしてこの後より一層充実発展してゆくに違ひないとの予見とを誰しも信じて疑はなかつたと思ふ。

「国民同胞」や「文集」を読み、何かほのぼのとした明るさを感じた私は、寓居に程近い伊勢の内宮様にお参りした。そこには修学旅行の生徒達、団体の参拝客、家族連れの睦まじい人々、新婚らしい二人組、その後からは老夫婦らしい人達等、各種各様といつてもよい人々の群れが見られた。神々しい神域を、サクサクと玉砂利を踏みながら静かにお参りにゆく人々の流れが、何のよどみもなく奥へへと進んでゆく。どの人々の顔も、こころで和やかで美しい。すがすがしい。従って外やかで美しい。

私はハッと思った。みな日本人だ。この神域にある限りはみな同胞日本人だ

なによりも、こそことし、老少男女おほくのひとびと死にあひ候らんことこそ、あはれにさふらへ」とあるのは、この世相に触れたまふらへ」と彼等の上洛はこのような悪条件にもかかわらず決行されたのである。この点からも、それは、まさに「身命をかへりみずして」と云ってさしつかえないものと云わねばならぬ。

昭和四十年十二月廿七日記
(東京都立千歳高校教諭)

そこには意識するとなしに抱らず日本人に生れた者の喜びが溢れ出でゐる。その姿、その顔が、一様にそれを語つてゐる。日本国民の同胞感を、私はこの神域に於て如実に体験したのである。

御遷宮

もう昨年のことであるが、私は縁あって神宮の式年御遷宮の行事である御木曳の盛儀を宇治橋のほとりて拝観した。御十鈴の清流の中を川上へと奉曳される神木(新しい造営のための用材)の神々しい白さと青い水、法螺貝の音と木漬りの歌声など、今も私の眼と耳に彷彿と浮かんて来る。今年もこの御木曳の盛儀は市民にとつても最も大きい光栄ある行事として営まれ、やがて昭和四十八年に第六十回の御遷宮が完了されるのである。この御遷宮は二十年毎に執る行はれる千三百年来の由緒深い民族の大祭典であるが、二十年毎の御神殿の御造営は、またそのままた二十年毎の民族精神の更新発展を神示されたものとも考ふべきではなからうか。神宮の御神殿が外人一流の建築学者をして「世界最古にして最新の最も優れたる建築物」と讃歎せしめたのも故なきに非ずである。ギリシャの諸神殿が大理石の石材を以てして尽く廃墟に帰してゐるのに比し、木材を以てして今日な

は最古の結構と国民的信仰の中心となつてゐる事実の前に、私共は活眼を開くところがなければならぬ。

終戦後二十年、痴呆の迷夢に終始したかの二十年は既に終つた。私共も神宮の式年御遷宮に學んで、昭和四十一年からこそは、本当の日本人として、新しい次の二十年への魂の遷宮へと発足すべきではなからうか。

(神宮皇学館大学教授)

男らしさと言ふこと
長内俊平

先日朝のテレビにフランス陸軍士官学校の卒業式の模様が写つてゐた。なかなか華麗なものだったが、妻に「この若者達をどう思ふか」と聞いたところ、黙然として男らしい感じだと言ふ。そこで途々うちの家内も女性の端くれだとしたなら「一体何が女性をして、この青年達を男らしいわ、と感じさせるのか」と考へて見た。結局、この若者達には「命を捧ぐべきもの」が明確にあるからではないか、といふ結論に達した。

そこで次に、それなら、今日の我々日本の男性軍はどうなのかと考へてみた。とどうやらこの「命を捧ぐべきもの」をどこかに忘れ去ってしまった様に思はれてならない。生命を尽して守ろうとするものの喪失：裏を返せば、人生の目的が、人より楽な、良い生計をすること以外になくなつてゐるとしたら、そこからは決して、女性が惚れ惚れする男性が生れて来る筈がない。……

ところで、つい最近テレビで実に面白いことをあるブレイボーイが言ふてい

た。その要旨は、女性性が結婚する相手は男性な筈であるが、今の女房の多くは、自分の旦那を男性でなくしよう、なくしようとする。例えは夜は時間にキチンと帰り、口には女房子供を遊園地にでも連れて行く様な所謂模範亭主にしようしようとするが、そのことが知らず知らず自分の背の君を「男性から女性へ」性転換をさせてゐることに気付かない。即ち一生懸命努力した挙句、自分が結婚した筈の男性でなく、いはば男の外形をした女性と同棲してゐるといふ奇妙な結果になつてゐるのである。どうして夫を家から解放して、思ふ存分生命をかけるものに熱中する様仕向けないのであろうかと。

なる程面白い見解だと思つたことである。そこで人をして男性らしくあらしめるものは一体何かをも一度考へて見ると、結局その人が物事の本質を体得してゐるといふこと。別な言葉で言ふなら、この世で最も大事なものは、生命をかけて守るべきものをあやまりなく感得する不慮の力が本人の心に確立されてゐると言ふことではあるまいかと。それが世の殺戮袋に超然とし、汚れなき幼児を見てはほほは笑み？不正なものに対しては、身を震はして激怒すると言ふ真に男性と言ふにふさはしき人柄を生ましめるものなのでないか。しからはこの様な力を如何にしたら自分のものにし得るのか。

先日東京の合宿で、ある学生が、不正を心から憎むのだが、自分にはどうしてもそれに対決する勇気が湧かない。私を棄てることかどうしても出来ないといふ

悩みを訴へたが、これに対して私は、君は私を棄て得ないといふことを悩んでゐるが、その前に君は本当に心の底からその不正を憤つて居るのか。そうでないのではないか。本当に憤るといふことは自分の事も思はず忘れて憤ることをいふのではないかと答へたのであるが、それは実に私自身に言ひきかせたことだったのである。……真に男らしくなる秘訣はその辺にありそうだと思ひつづけてゐる。今である。

(電源開発本社勤務)

新年御歌会始に

詠進しよう

脇山良雄

一生に一首古今の絶唱といわれる程の歌を残したいこと、一生に一度新年御歌会始に預選の光榮に浴したいこと、この二つを私は青年時代からの願ひとして今も持ち続けている。すでに四十数年になるが、心算中戦地からも詠進した。歌道に於て最もよい行事と心得てゐるので多くの人に勧めてきたし、国文研でも大いに奨励されることを熱望してゐる。

新年御歌会始の御儀は明治二年古例に依り創められたが、十二年に一般の詠進の道が開かれたので、すでに百年の歴史を閲している。歌会といふことは昔も今日も宮中でも民間でも極めて頻繁に行われてきたが、外国で詩の会合がこんなにあらゆる階層でこんなに頻繁に催されるという話を聞かない。日本独特の風習だと思ふ。

三十一文字の和歌という形式は万民に理解されやすく、歌会を催すに極めて適している。古来歌は巧みにもものを描写するといふ客観的な価値の他に、相手を目指して意志のやりとりをはたす役目が非常に大きい。

万葉集冒頭の「籠もよみ籠持ち……」の御歌も、古事記の「やまとのタカサジヌを七ゆくをとめども……」

の御歌も何れも天皇が菜摘の乙女に呼びかけられる歌である。その他相聞歌はうにおよばず通信応答の歌は限りなく天皇と臣下の意志の疎通は歌によつて完全に直通するのである。歌の世界に於ては君民をへだてる雲はありえない。中間搾取もありえない。

明治以来子規を先鋒とする所謂新派の歌人は因習的となつてゐた宮廷風を嫌つて万葉の「ますらをぶり」の自由詠を強調したのはよいが、題詠をきらい且つ新年御歌会始の行事に対し冷淡であつたようである。題詠だけが歌であつてはならないが、題詠ではよめないとか、よんではいけない、となすのは限りである。時と場合で共通適当なテーマを選んで歌をよみ合うことはお互の心を通わせるのに一層よい方法であらう。アブストラクトの油絵にさえ題はあるものを題詠を敬遠する法はない。

和歌の道に家元はないけれども強いて求めれば皇室をもつて歌の宗家と申すべきであらう。昔から歌は全国万民によまされたといへあらゆる時代に宮中が歌の有力なる拠点であつたことは疑えない。又勅撰和歌集というものがなかつたらば、今日の歌の隆盛は考えられない。歌

の宗家の天皇が新春を期して万民の歌をお召になる。之に応ずるのは歌人としての冥利であり礼儀である。之をおこたるのは礼を失することである。私は考へるが故に毎年欠かさず詠進してゐるのである。

明治天皇御製に

子等はみな軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらむがあれは、預選歌の中に「御製にめし出されて我が背子はいづくの野べに春迎らん」と答えるものあり

四面の海みなはらからと思ふ世に 乃ど波風のたちさわぐらむの御製あれば「四面の海みなはらからとなりて後おやと仰がん国はこの国」と答える預選歌がある。

今上陛下の御製に数々の名歌があり、夜久先生が暫々御説きになつてゐる。私が拝察するところでは戦後の御製は悉く苦難の道を通りこえて國の再興を願われ國民をばげまされる御氣持で貫かれていてあたかも終戦の詔勅の後段を拜する思いがする。戦後は選者も新派の歌人が主力となり大いに新風を吹きこんだのはよいが、君民応答のよみぶりがややうすらいだ感がある。その中に忘れえぬ預選歌「沖繩の支那原みちの古泉水清かりきもあらんか」の一首は北白川祥子様のごこの丘もこなたの山も戦の激しきところさくもくちをしのの歌も連想されて涙がこみ上げて来るようだ。

要するに新年歌会始はこれこそ世界最高の文化的行事と心得、益々隆盛におもむくことを祈るのである。明治天皇の頃は詠進歌はすべて乙夜の覽に供せられ一首も余さず目をお通しになつたと洩れ承る。

明治天皇御製

千万の民のことは年毎に

すすめさせてもみるぞたのしき

(長崎・宇宙書房主)

赤面恐怖の心理

三重野 悌次郎

強迫観念症の中に赤面恐怖症というのがある。これは人前に出て、自分の顔の赤くなるのを恥かしく思い、これを恐怖し、苦悶するものである。他人から見れば、何とも理解のできぬバカげたことであるが、当人にとっては死にも勝る苦しみである。

この赤面恐怖症は、他の強迫観念症と共に、なんら器質的な病気ではなく、勿論精神病でもない。謬った思想による心の迷いである。だから少しも薬を用いなくとも、正しい人生観を得て、事実があるがままに見ることができるようになれば治るのである。

この「病理」は、政憲忠医大教授森田正男博士によって発見され、その森田療法によって、殆どの者が短時日の中に治るのである。私はかつて、この森田博士の思想と、国文研に連なる諸先輩の思想との酷似に、希有の思いをしたものである。

赤面恐怖症の患者は、神経質―内気、小心で精神的向上慾強い―の素質をもった者が、何かの機会的原因、たとえ、心ひそかに愛する異性の前で、顔の赤くなったのをひやかされて、ひどく恥かしく思った等の経験によって「発病」するのである。患者はその時の、恥かしい嫌な気分が拘泥・執着し、顔の赤くなるのを苦しめ、こんなことでは優れた人にな

れないと思ひ、いろいろと工夫をこらし心をやりくりして努力するのである。が、努力すればする程、症状は悪化するとして人前に出るのを苦痛に感じ、そのような自分悲観し、勉強も仕事も手につかず、遂には学業も職業も捨てるに至る者もある。それ程でなくとも、以上のような苦しみで悩む者は意外に多い。

このような赤面恐怖症患者の心理を分析すると、心ひそかに愛する者の前でひやかされれば恥かしいものである、という人情の自然を知らず、又、そうした心の事実を素直に忍受することができない愛する異性の前でも、大勢の人の前でも、平気でいられる人格を観念的につくらなければならない人間にならなければいけない、とするのである。眼前の敵たる事実があるがままに見ることができず理想や理窟を先に立てて、事実をまげようとするのである。我々はともすれば、自分の心は自分の力でどうにでもできるように夢想し勝ちである。が、五尺五寸の身長を、いかに思念をこらしても、五尺六寸にすることができないと同様に、心の事実もはからいによって如何ともすることができない。唯、時間の経過によって、心理の法則のままに消長するのみである。

こうした患者に対し、森田療法では、自分は人の前に出れば顔が赤くなり、恥かしかる者だという事実を素直に認め、顔の赤くなるまに、声のふるえるまに、その時自分のなすべきことを、嫌々乍ら、苦しみ乍らでもする。という心の態度を体得するように指導する。それによって患者は、顔の赤くなる感じや、恥かしい気持のままに、必要に応じてなすべきことをなし得るようになる。このよ

うな状態を、かつて森田博士の指導を受けた倉田百三氏は「治らずに治った」と云った。そのようにして、苦しいままに日常の学業や仕事をすると、自己本来の面目、精神的向上欲が発動し、学業や仕事もよりよく進み、遂には、人の前に出ても顔の赤くなるのを忘れるに至るのである。

森田博士は「自然に服従し、境遇に従順なれ」といって、自分の現実を素直に肯定し、人情の自然に随って努力することを教え、「事実唯真」と云い、是非善悪を云わず、敵たる事実に立脚することが最も易しい道であり、「かくあるべし」という、理想主義の、遂に虚偽に陥ることを戒めたのである。

病気の性質上、博士の所論は思想的なものに見えるが、医学的な研究から導き出されたものであることを附記する。
(大分県国見町教育主事)

『人間の建設』

を読んで

磯貝 保博

新潮社から出された岡藤・小林秀雄の対話録『人間の建設』はすでに十万余部を越えていると聞いています。この本がたった二ヶ月でこんなにも多くの人々に読まれているということは、なんといいてもそこに、お二人の心と心の触れ合いをじかに感ずるからでしょう。

私は過去二回の大合宿でお二人の話しをうかがい、その後東京での講演会にもことあるごとにお話を聞いて来ました。しかしその時にはとうとう私にはわからないようなお話の内容もこの本を何度か読みかえし考え、考えながら読んでいく

うちに、だんだんとわかってくるようであれしい気持ちになります。しかし、私にとってそれ以上に心楽しいことは大合宿等て話をされた時のお二人の話し方やその時の表情がされた時のその中の随所で再び思い出されてくることです。そして対話の場を想像しながら読むことによって何か日前で実際にお二人の講演会を聞いているような気がしてきます。

最初のページで、小林さんが大文字の山焼の話をされたところ、岡さんは「私はああいう人為的なものには、あまり興味がありません。」と云って、そんな話をしに来たのではないかと実ははつきりとしたものです。小林さんも又、雑誌屋さんのためにお会いしたのでない。いっぺんお目にかかってお話をしたのでない。思っていたので出向いたと、答えています。

私は最初からこんな調子では、これから一体どんなお話をされるのだろうかとびつくり致しました。読んでいくうちに私はお二人の会話が時に火花を散らして鋭くぶつかり合い、そして深いうなずきのうちに次々と話が展開されてゆき、しかもお互に相手の言葉を確かめ合いながら問題が次第に深まってゆく所が多いのに驚きました。この本の中で、言葉というもののそこには心が合るといっています。この心と心が触れ合ったのですから一冊の本になるほどの長い話も出来たといえるし、深い思考のやりとりも行われたのだと思う。私はしらぬうちに息を殺して読んでいく自分に気が付き、思わず息をはき出すようなこともあり、この本を読んでいくと心おどるようで楽しくてしかたありません。

(中央大学法学部三年)

心を尽し労作する中に

原 正昭

今日良く耳にする文化人と称されるべき人の言葉や行動にさえも、強い感動を与えて呉れるものは極めて少ない。それには種々な原因が考えられるが、私は現代人の職業観—自分の役割に課せられた一番大切なものへの使命感欠如と云う事が、それを齎らすのだからと思う。愛とか善とか平和とか良く我々は口にする、が果して何程深く此等の言葉の持つ尊い世界を実感出来ているであろうか。確かに真理を象徴している言葉ではある。しかし多くは単に形式的信条告白と云う、生命を有しない次元に留まっているに過ぎない。古人が自らの生活の中に実践して来た言葉の真価は喪失状態で、ミイラだけが残っているのが現状では無からうか。真理を表すべき言葉が人々の話題に上る時、言葉としては表現されても其の人の生活原理にまでは成っていない。真理を象徴する言葉は、其れ自体独立して価値を有して居るのでは無い。飽迄人間が心を尽し労作する中に初めて生命を有するものである。医者は病人を救う事がその務であり、生活に困窮し治療費の充分に払えぬ者にも、広く門戸を開いて病苦から救う事に尽力するのが至誠である。「医は仁術なり」と云われた所以も茲にある。又教師たる人は、教える子に對する無尽の愛情熱情をもって、子供の為には最善を尽す確固たる決意が無くてはならぬ。然るに現在はどうであろうか。医師会然り、日教組然り、最早説明を要しない程にその精神は零落している。其の如何なる職業についても、其を聖

職ならしめるべき尊き任務があるはずなのに、其を大切にしていけないから随分惨めな姿を呈している。我々は、人を愛するとか平和を守ろうとか云う類の概念の翻弄に終らずに、先ず自分に現在課せられている仕事の一、番大事なものは何か、どうしたら其が具現出来るかと直接自ら実践する事に心を勞し、深い反省と熟考の下に、それが全うされるまで精進し努力を続けて行きたいものである。其こそが人生に、又真理に忠実に生きると云う事であると思う。

人柄について

森重 忠正

(玉川大学工学部二年)

利己的な人間が「利己主義はいかん」といっても人は感動しない。遊び太郎が「学問は真剣にすべし」といっても誰も耳を貸さない。それは、その言葉がその人のものになっていないからである。

岡先生は「人は知情意の内、知や意が満足しても情が満足しなれば本当に満足しない」といわれた。この情を満足させるのはこちらの情を以てする他ない。情というのは人柄といってもいい。だからこれを言いかえると「人は理論や言葉で納得しても相手の人柄に納得しないかぎり本当に納得はしない」ということになるだろう。右翼とか左翼とかのイデオロギー以前に自分自身の人柄が相手の態度に大きく影響している。

ひとつの会が盛衰するのはその内容が充実しているというより人と人とのつながりがうまくいっているかどうかにかかっている。人柄に失望すれば人は離れてゆく。実にあらゆるものの根本は本人の

人柄にあるというてもけつて言いすぎではないような気がする。理論や言葉は勉強すればいくらでも正すことができるが、この人柄となるとそうはいかない。自分で本当に満足できる人柄をつくりあげるのは一生かかるかも知れない。一生かかるかも知れないということは同時に一生かかってもできないかも知れないということだ。

だから「私にはそれをする資格はありません」というのは一見謙虚に見えるが、実際は言い逃れに用いている場合が多い。

われわれのような若い者は人から「何かやれ」といわれれば自信が無くても引き受けた方がよさそうだ。というのは出来そうにないことでも懸命に努力してやってみれば、意外と出来ることが多いからだ。自分の人柄を直すのは、そういう実際の活動を通じてやる以外にないようにこのころ思うのである。

批判について思う

井上 慎一

(長崎大学経済学部三年)

現在の学生運動については、学生の間にも実に様々な批判があるし、それを支持する者は、よく意見を聞いてみるとごく少数であることに気づく。それにもかかわらず学生運動はいっこうに衰えようとしなない。それを批判する人達自体がそれを支えていると言えぬのではないかと考える。批判すること自体が正確にまともを射ていず、ただ相手の頭の中で、どっちあげているにすぎなかったり、何となくいやだというムード的な発言になったりしてはいる。

元来ただ批判するというのは、非常に

簡単なことであろう。本当に批判するということは事態を心の底から愛え、それに対して憤っている人しか出来ないし、それは必然的に自分の意思、行動として現れるべきものである。自分が自分の問題としてこの事態をどう解決していくか、それにどう対処していくか、そこから問題は提起されねばなるまい。学生運動批判が、自分達は何もしていないという一種の弱みと後ろめたさをもって述べられる時は、それは無責任な放言となる。批判するにはそれだけの覚悟が必要だと思ふ。「学生は勉強が本分だ」という学生運動批判が何と弱々しく、言い訳じみて聞こえることか。しかし、ほくは何も組織には組織をもつて対抗せねばとか、自治会の役員に立候補して活躍せねばとかいっているのではない。無論それよりも僕自身に欠けていたと思うし、現在ももっともせねばならないと思うのは、一晩かかって良い、徹底的に学生運動をやっている人と議論し尽くすことだと思ふ。きわめて平凡な道だが、これが一番重要なことだと思ふ。言葉だけで「お互に心を開いて話そう」とか、「議論は空しいものだ」とか言ってみても、全然通じないということを感じて、議論を徹底的にやっつけてはじめて出てくるべき言葉だろう。

(京都大学法学部二年)

編集後記 津下先生はじめ諸先生、諸友の随筆や御労作で新年号が飾られたことを喜びます。数々の予感をもって迎へる新年に當って心のこもった国語の威力が、我々の思想と行動の中心となるべきを期待し、この小さい月刊紙がそのお役に立てばと念じておます。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町3 宝辺正久
振替下関1100 電話22.1152
毎月一回10日発行
定価一部 20円(送料別)
年間360円 (送料共)

大学の自治と学生の自治について (1)

— 附・東大当局発表のパンフレット「大学の自治と学生の自治」を読んで

小田村寅二郎

(本会理事長)

一、先ずはじめに、労働運動と学生運動とを明確に区別しよう

昨年以來、国立・公立・私立を問わず全国各地の大学で幾多の学生騒動が起きたが、その紛争の内容は、まことにさまざまで、その理非曲直については、概に学生側の行き過ぎだけを攻撃するわけにはいかないものも見うけられる。

しかし多くの場合、ひとたび騒動が起きたとなると、学生自治会の活動がいきわ目立って尖鋭化し、大学当局に対して「自分らは、学生の自治を守るために立ち上ったのだ」と、もっともらしく宣言する。自分らには既得の自治権があり、その権利に基いてストライキを行うのであるから、ストライキは自治権の行使にすぎない、という言い分で、いかにも正

当の権利に基いて行動しているかのことく振舞う。そして学生集団を強化拡大し、デモ、シブレヒコールをくりかえし、大学当局に対して「団体交渉」を強要するのが常である。

このような場合にわれわれ国民は、もっと常識を働かせてこの学生たちの言動の当否を判断して然るべきであるが、新聞・テレビ・ラジオをはじめとする報道の上でも、また少なからぬ数の時事評論家たちも、つい迂かつに、学生たちが使う言葉も、そのまま報道の上に、評論の内容に取り上げてしまふ。例えば「〇〇大学の騒動では、学生側がスト権の行使を宣言した」とか、「××大学当局は、学生側の『団交』要求を拒否した」とかいう風に。

だがよく考えてみれば、これはまこと

におかしな報道の仕方であり、評論解説の扱い方である。なぜならば、学生側にかりに学生自治会という名称の全学的な機関が出来ているにせよ、また学生たちがある種の「学生の自治」を認められ既得の自治権を持っていると解するにせよ、そこに「スト権」があり得たり、「団交権」が附与されていたりするなどということは、事実無根も甚だしいことである。

たしかに世間一般では「スト権」だの「団交権」などという言葉がよく使われそれらの言葉にわれわれは平素から馴染んでいるが、それは法律で認められた労働組合に関する用語であることを忘れてはならない。従つて世の中で「スト権」の行使がいわれる場合は、それが合法的に行使される場合とそうでない場合とがあるにせよ、その行使の合法・非合法が問題となるだけであつて、労働組合は規定された範囲でストを行なう権利をそれ自体、本来的に持っていることは疑う余地がない。団交権についても同様のことが言える。

これに反して、学生集団や学生自治会は、それがいかに全学的結果をしても、またその主張について全国民的な支持が得られるような場合であっても、労働運動でいうような「権利」の範囲としてのスト権や団交権は、そこには本来的にひとかけらも存在しない。さらにいうならば、労使の関係は一種の雇傭関係であるがゆえに、被使用者としての労働者を守るため、それに関連する法律が存在しそれに基いての「スト権」や「団交権」が認められているが、大学当局と学生と

の関係は、いうまでもなく、このような雇傭関係ではあり得ない。大学における大学当局と学生の関係は、学生の入学時における誓約書の提出にはじまり、大学当局が入学を許可する、という「誓約と許可」の一方通行的な関係、いいかえれば「教えを受けた」という学生側の願いに対して、大学当局は、君がわが大学の学則に従う意志があるならば、という条件

つきで入学を許可した」という関係である。

そこで、大学における「学生の自治」ということも、次第にはつきりしてくるわけであるが、それは、大学がその行なう大学教育の目的を達成するためによりよき教育上の手段として、学生たちをして自治活動の体験を得させるように取り計らつたものである。それゆえに、「学生の自治」は相手方、すなわち大学に対して自己の対等を主張しうるような通常の概念でいう権利にはなり得ない。それは、「与えられ、許されたもの」であつて、同時に「学生が学生の身分に反しない限り、」というきびしい条件付き

目次

大学の自治と	
学生の自治について	小田村寅二郎 (1)
小歌うたひて	桑原 暁 一 (6)
古典の窓	小柳 陽太郎 (7)
国文研だより	(8)

☆ 同胞歌壇

の許可事項であり、いわば監視付きで「一時的に与えられ、許されているもの」に外ならない。従って、一步譲って、そこにも自治権という権利が存在するではないか、という反問が出るならば、私はたしかにその通りである、と答えるが、それと同時に、「学生が学生の本分に反しない限り」という「学生の本分」を判定する権限は、つねに一方的に大学当局側にあることを忘れるな、といひ添えねばならない。こうした一方的な判定、監視付きの許可事項であつてみれば、いかに学生の自治権といつてみても、実質的には「権利」の名に値するほどのものではない。

とにかく、「学生の自治」に附随する自治権なるものが、権利の名に値するが否かにすでに疑問が起るほど、それが薄弱なものであることは、当事者のみならず、世人もまた、よく心得ていなければならぬ。このことについての認識が世間一般に徹底していないために、学生自治会の連中には、「自治権の侵害だ、」と大学当局に迫り、挙句の果ては、「スト権の行使を予告する」とか「団交に応ぜよ」などと呼ぶ。それをまた報道陣がそのまま受け売りする。すると一般国民は、その通りに思い込む。国民は、弱者に加勢したつもりで同情的な眼で学生たちを見る。そのうちに、大学当局者さえもが、労働運動において使用者側が団交に臨むのとそっくりそのままのような姿勢で、学生連中と「団交」なるものを始めてしまう。報道陣は「今日の団交の結果は……」という風にさらに報道を続ける。

学生たちは、自分らの行動が次第に世間に反応を呼んでいくので少しの反省のいとまもなく、さらに図に激しさを加えてデモ・シュプレヒコールは派手さをつけてさえ、時に「このやろう」呼ばわり(その実例はいくらかある)を憶面もなくするようになる。団交といつても、正規のルールによつて行なわれる労働間のそれとはちがって、学生たちは集団の威力と若さのエネルギーを思う存分傾注するのに対して、大学側は高齢でヨボヨボした虚弱な老教授たちであるから、形勢は断じて若者たちに有利である。そのうえ学生たちは、時に長時間交渉という、相手の生理的限界をねらう非人道的な奥の手を使つて、深夜もいとわず持統作戦を展開するから、大学当局の旗色は次第に悪くなる。

そればかりか、老教授たちは、このよるな場での取引きには余りにも不向きである。大学当局者たちは、労使関係の団交に出かけていく使用者側代表たちのように、平素から団交のコツなどについて十分に研究を積んでいないから、怒号の交錯する場での応接そのものが一向に思ひのままにならず、ずるずると学生たちのペースに引きずり込まれるのが関の山である。いきおい、学生たちの要求に対する譲歩がはじまり、その譲歩そのものは、団交の意義を確認したところになつてしまふ。かくて大学の秩序は崩れ、教育の場であるというのに、労働争議の場と見え見られないような主客顛倒の様相があらわれる。そして「団交方式」は慣例としての実績を確立し、大学の教育機関

としての権威は失墜の一路を辿る。…… : : : というわけである。

もつとも、教育的信念に燃え、捨て身の姿勢でわが倒れるもおそれぬような立派な人々がおられる大学当局は、決してこのようなことにはならない。しかし、個々の指摘はここでは省略するが、昨今見る多くの大学騒動では、遺憾ながらさきのような傾向が少なくない。これはまことに歎かわしい事態であるので、とにかく、私は先ずここで、大学当事者がたに対して、労働運動と学生運動の根本的相違について、はっきり認識しなおしていただきたいと願ひ、かつまた学生たちが労働争議まがいの言動を恣にするこの傾向に対して、「教育の場としての権威」を確立し直し、敢然として学生をいさめる決意と自信を取り戻していただきたいと念ずる。また報道陣や評論家の方々にも、今日見るような報道の仕方や解説用語の使い方について再検討を願ひ、誤まった学生たちのペースに乗らないよう先輩としての誇りを取り戻していただきたいと切に念願する。

二、「学生の本分」と「学生の自治」の関係、ならびに「大学の自治」との関係について

さて、学生たちの種々の言動に対して果たしてそれが学生の本分に反したものでかどうかの判定は、さきにいふように大学当局の一方的な(独善的という意味でない)判断によることである。しかし各大学は、それぞれに独特の学風を持つものであるから、その「判断の仕方」は

大学によってまちまちなものになる。すなわち、どの程度の行動を、学生の

本分に反したと見るか、という段になると、刑事事件のようなものは別にして、各大学によつてかなり見解の相異が見られるわけである。そして学生たちのこのような言動には、いつも「学生の自治」とか「自治権に立つて」という考え方が伴なつているから、「学生の本分」の限界のみならず「学生の自治」の範囲もまた、各大学によつて相当の開きがでること当然である。A大学における学生自治会のある種の行動は、その大学当局によつて何等の処罰を受けないが、B大学の学生自治会による同じ行動が、B大学では処分の対象となる、ということが起る。ことに、思想の面で特異な傾向を示す大学は、この点でもかなり開きのある差異を見せる。しかしこの場合、A大学もB大学もその不処分と処分という自分たちが取つた措置については、双方とも同じように国家・社会に対してその当否についての責任を負うものであること、もとよりいうまでもない。ということは、その処分と不処分という差異によつて、その大学の学風風を世に問うこととなるからである。

それとはかくとして、このように「学生の本分」について大学が持っている判断の基準は、いきおいその大学の学生が取り行なう「学生の自治」の範囲を決めることにもつながっていく。従つてここで言えることは、「学生の本分」とか「学生の自治」とかいうことは、各大学で大変に違うことであるから、その「本分」の基準や「自治」の枠について、客

観的、具体的に一律に定義づけることは不可能である、ということである。この点は、「大学の自治と学生の自治」の内的関連を考へる場合に、ぎわめて重要な一つのポイントになるのであって、「学生の自治」が「大学の自治」と本質的に相異するところとして忘れてはならないことである。

そこで、次に問題になることは、以上のように「学生の身分」「学生の自治」ということが、大学当局の主観によって判定されるとなると、「学生の自治」に対する各大学の主観の内容に関心の対象が移っていく。そしてその「主観の内容」を生み出す母体としては、各大学に外ならぬ「大学の自治」が蔽存するのであるから、各大学における「大学の自治の精神」こそ、その大学の「学生自治」の指標たるべきものとなるわけである。

このことが何を意味するかというと、ある大学における「大学の自治の精神」が正しければ、その大学の「学生の自治」もその影響を教育的感化によって受け、外部に対して独善的な姿勢に立つことをもって、大学自治の一つの本質と考へるようなことがあれば、その大学の学生の自治もまた、同じような独善性をその運動方針の中に持つに至る。またある国立大学が、その大学の運営について、上位行政官庁である文部省や政府からの干渉を排除して「大学の自治」であることと、文部省や政府筋に對して、いわば自治権侵害の可能性をもつものという對抗意識をもって、「大学の自治」を考

えていく場合には、その大学の「学生の自治」は、もとよりその感化をうけて、文部省や政府筋を目的としてこれに敵対する言動を恣にするようになるに相違ない。

そこで「大学の自治」について考察する際に、最も大切なことは、「大学の自治」が、その大学の中で、どのようなシステムで運営されているか、どのシステムの当否についての問題よりも、大学人が「大学の自治」をどのようなものと理解しているか、「大学の自治の精神」の内容の方が問題である。殊に、国立大学の場合に、上位行政体である文部省や政府筋に對して、大学人が、どのような心構えで相對するか、その根本的姿勢の方がいれほど重要な問題かわからない。

いま私は、この小論において、さきに東大当局によって作成され、その教官および学生に配布されたという「大学の自治と学生の自治」最近における学生運動に關連して「と題するパンフレットを取り上げ、現在の東大当局者が抱懐する「大学の自治」と「学生の自治」についての「見解」に言及しようとするのであるが、それを取り上げ、それに言及しようとする私の基本姿勢は、いま述べたような「大学の自治」についての私なりに見る「肝どころ」に主眼を置いてのことである。

この「肝どころ」から見た東大パンフレットは、たしかに一つの統一した「大学の自治」観・「学生自治」観を示している、その作成に當つての苦心のほども、窺われる。しかし「学生の自治」についてのその見解は、一見はば的確であるか

に思われるが、その本源ともいふべきで「大学の自治」についての見解の方は、大いに問題を含んでいるようで、その大学自治の内容においては、私の見る限り、重大な誤りを犯しているように思われた。詳しくは以下に記すことにするがやはり「大学の自治」ということは、今日において大変混乱している現代的問題だということをも、改めて痛感させられた次第である。

それと同時に、学生自治会の活動が無軌道とどまるところを知らぬほどの歎かましい現状も、実は必ずしもその学生たちだけが責めらるべきではなく、この東大パンフレットに見るような大学当局の大学自治観が、むしろ学生自治会の逸脱の原因を生み出しているようにも感じられた。私のこのような推理にもし誤りがあれば、それは大学のためにまことに幸いなことであるが、もし私の所感の方が万一にも適確であるということになれば問題は邦家の前途にとって、ただごとではなさそうである。なぜならば、大学人のこうした基本的な物の考え方に反省を求めざるは、いまの日本では容易に見出し難いからである。

三、東大パンフレット作成の動機を語る教授陣の談話、ならびに、パンフレットの内容と、その指向する「大学の自治」について

週刊誌朝日ジャーナルの本年一月十六日号は、「学生自治への東大見解、(これに)對する複雑な反応」と題して、六

頁にわたる意欲的な編集をした。そしてそのあとに、前記の東大パンフレットの全文を四頁にわたって掲載してくれた。この「東大パンフレット」または「東大見解」は、ともに通称であるが、大学の自治と学生の自治についての東大当局のほぼ正式な見解であり、昨年十一月一日に公表されたものである。同誌によれば、「この小冊子は全国的な注目をあびて、私立大学を含む全国の大学から引合いが殺到し、」その印刷部数も三万部を下らない数に及んで隠れたベストセラーといわれている」ということである。

同誌はその記事のはじめに、「ここでは、この小冊子が危機に立つ大学自治にどんな意味をもつかをさぐり、あわせて小冊子の全文を紹介する」と記しているすなわち、同誌が「その意味をさぐった」記事が約一万二千字、東大当局発表のパンフレットの全文が約一万字というものである。

私は、これによって、いわゆる東大パンフレットの全文を読むことができ、あわせて、これを作成するに当たつての動機や姿勢などについて、大河内一男総長をはじめ、幾人かの教授の談話と、一部の学生の感想などに接することができたと同時に、(これもまたたいへん重要なことであるが)、朝日ジャーナル編集部が、大学の自治と学生の自治について、日頃からどのように考へているか、朝日ジャーナルグループのその見解についてもまた、その編集ぶりから、かなりはつきり窺い知ることができたのである。しかしここでは、同誌が取材した諸教

授その他の談話などを参考にさせてもらって、それと東大パンフレットの内容との照合にはいりたいと思う。

なお、この東大見解が作成された経過であるが、朝日ジャーナルによれば、次のごとくである。すなわち「起草の任に当たったのは、学生問題についての総長諮問機関である東大學生委員会の委員長、大内力・経済学部教授であって、「この学生委員会と学察委員会の教官の手で作成され、学部長会議にもかけられ、大河内総長がいごまで手を入れた」という。従つてこの「東大の見解」は東大首脳部によって作成されたと思つてよいであらう。

ついで作成の動機であるが、朝日ジャーナルの取材した教授連の談話をみるとこれがきわめて複雑なものであることに気づく。しかしそれに触れる前に、この全文が、教官および学生に、とくに活動分子としての学生に対して訴えようとしているところ、すなわち「学生の自治」「学生の本分」について述べるところを本文の中のいくつかの言葉から拾つてみることにする。まず冒頭に

「最近いくつかの大学において、当局と学生との間に紛争がおこり、世間の注目をひいている。本学においては、幸い今日まで、重大な紛争は起っていないが、各学部自治会および中央委員会の名簿提出の問題(筆者註、大学当局は学生自治会等にたいして委員全員の名簿の提出を求めたのに対し、学生側は、議長名を通告するだけで連絡の用はたりる。全員の名簿を提出することは、文部省の管理にまき込まれることになる、といつて

応じなかった。朝日ジャーナル) 学察の入寮選考の問題(筆者註・入寮選考を形式的にも実質的にも学生たちの手でおこなおうとした一同誌)などをめぐつて、一部の学生諸君には本学の真意が十分理解されていないためか本学の方針や慣行を無視しようとする動きがみられ、そのため自治会の運営や学察の利用などがかならずしも円滑におこなわれないような事態が生じていることは、はなはだ遺憾である……この意味で、今日学生諸君に、

本学の意のあるところを明らかにし、……学生の自治活動が正常な路線をふみはずすことのないよう諸君の注意を促すことが必要であると考える」この書き出しは、大変真剣な訓示であり教育不在の声を寄せられる東大としてはまことに珍しい奇祭の熱意が感じられる訴えでもある。また文中、

「大学内において学生のもつ自由な自主性は、大学自体が学外にたいして主張する自治とは次元の異なるものである学生は批判的精神を要求されるとしても、なお修学中のものである……その研究活動については、……なお教員の指導と助言にしたがわなければならない。」

とあって、大学の自治と学生の自治の「次元」の異なることを示し、また学生が教育を受ける立場にあることをさとす。また

「自治活動は一定の規律に服し、……自制の精神をもつておこなわなければならない」等々、もとより判りきつたことではあるが、微に入り細を穿つて訓戒が展開する。学生の自治が、大学当局に

よつて「与えられ許されたもの」であり「学生の自分を守る限り」という条件のもとで「与えられているもの」という「学生自治」の本質については、余すなく教示しているかのごとくである。

しかしながら「学生の自治」についての大学当局のこのように立派な「見解」が訓示されても、「学生の自治」は本来その大学の教育精神の中で成育するものであるから、その本源となる「大学の自治」についての大学当局の「見解」が、もし万一にも行政秩序の上位団体への反抗心に満ちているようなことであれば、学生もまた同じ反抗の戦列に並ぶのは当然である。そうなると、大学当局は文部省・政府筋に反抗を示しておいて、一方で学生に対しては大学に従順に従へ、といつていふことになり、これではいかに学生への訓示の内容自体が正しかりうとも、所詮その効果を求めることはむずかしくなるは必定である。

すなわち、学生側からいへば、学生が大学に反抗して学生の自治権を主張して反抗的姿勢に出るのは、大学が文部省や政府筋に反抗して大学の自治権を死守しようとするのと何の相違があるか、という反問も出てくることであらう。

また大学当局が、大学が文部省や政府筋などの国家権力の大学の干渉を絶対に排除しようとしているのは、大学には自治権があること、なぜ自治権があるかといへば、大学は「真理探求の場」であり「学問の自由を守る」ために外部勢力を排除してよい場であるから、と説明したとする。すると学生側は、いかにもそうかも知ぬれど、が、「真理の探求」とか「学問の自由」とかが侵されたかどうか

は、大学側が判定しているではないか、大学には「大学の自治権」があつて、それを「守るため」ともいつて排除してゐるではないか。すなわち、判定者は自治権を有する者の側にあることを主張しているわけだ。だから学生が、学生自治権を守ろうとし、学問の自由・真理の探求について学生自体もまた、自ら判定する権利をもっている、と見るのがなぜ悪い

それどころか「大学の自治」そのものを守るために、今日まで学生がどれほど努力してきたか思い返してみよ。学生の協力なしに、大学のいう「大学の自治」が守れたと思うか。学生の判断の正しかつたことを、大学当局は過去の事件を通じてよく知っているはずだ。今更、学生の自治の限界など訓示される筋合いでもない。と強く反問するにちがいない。朝日ジャーナル前記号は、大学院経済研究科のある学生の談を掲載して、そのことを弁護する。その学生は、

「……また過去のレッドパージ阻止ポボロ座事件、大学管理法案反対闘争などでは、学生が頑強に戦つたため、政府が社会不安を醸成するのを恐れて原案を撤回したのであつて、大学の自治を守つた主力は学生であつた。一部学生が政治的判断を誤つて、大学当局の心配するような無用のトラブルを起したことがなかつたとはいえないが、それは九牛の一毛というものだ。部分的誤りをタテに、本質を見逃してはならない。」(同号十二頁)

と。この大学院の学生のいいたいことは「部分的誤りをタテに本質を見逃してはならぬ」ということ、すなわち、敵に対する立場としては、大学も学生も同一の

立場にあるではないか、といっていることになる。そして過去に学生の行きすぎがあったとしても、それはその時の学生が「政治的判断」を誤ったからのもので、「事情の読み」が甘かったからであり、いわば反抗した姿勢が悪かったのではなく、もっと次元の低いところで間違ったにすぎない、と主張したのである。しかし、それもこれも、もとはといえば、こうした学生側のいい分が罷り通るのは、大学自体が外部に対して常に闘争的姿勢に立ってきたからに外ならないではないか。

さてそれでは東大当局は、果たして文部省や政府筋に対し、また「外部」なるものに対し、それと大学との関係をどう扱っているか、それを東大バンフレットの中から求めて見なければならぬ。まず「(a)大学の自治の本質」という項のはじめの方に、こう書かれてある。

「大学の自治が、学問の自由を守り、一国の、ひいては人類の、文化と福祉の向上をはかるために、ぜひとも尊重され発展せしめられなければならないものであることは、今日世界的に公認されている原則である。」

とあり、「大学の自治」の由来を「世界の公認のこと」という所に求め、それに

「それは本来つぎの二つの事実を根拠をもつものである。すなわち、ひとつは、大学は、高度の研究とその成果の教授とを使命としており、この目的を追求することをつうじて、人類社会に奉仕する役割を担っているということである。もうひとつは、学問の研究と

その成果の教授とは、それが外部の政治的、経済的、社会的、宗教的等の諸勢力の掣肘をうけることなく、自由自主的におこなわれるべきで、もつとも豊かな成果をあげることができるといふことである。後者が、多年にわたる苦い歴史的经验を経て、人類が到達した貴重な叡智であることは、あらためていうまでもない。」

と書かれている。要するに「大学の自治」の由来は、それが「世界的公認のこと」であるがゆえに權威あることであり、「一方その「大学の自治」の内容である「学問の研究とその成果の教授」については、「外部の政治的その他の諸勢力から掣肘をうけない」で行なわれるべきことは、「人類が苦い経験を経て到達した叡智」であるがゆえに、こゝまた、「動かすべからざること」であると説明する。私はこの一節に書かれたことに決して異議を申し立てるものではない。(教育についての点には異論があるが、そのほかは)。「大学の自治」の權威づけをそのように解釈することは人の自由であるし、大学が不当な外部勢力の掣肘を受けないで自由に自主的に研究と教授を進めると同感する。しかしながら、この大前提の中に、

「外部の政治的、経済的、社会的、宗教的等の諸勢力の掣肘をうけることな」と記した以上は、そこにいう「外部」についての認識について、意識の統一がはからなければならない。このバンフレットの主力は、実はその点に集中されるべきではなかったか。この点についての意

識統一を欠如しては、以下の文章は、読む人の勝手にまかされる、ということになつてしまふからである。

殊にこの東大バンフレットは、その文中できわめて頻繁に、この「外部の……」を連発する。文章の前後を省略して引用するのは慎しまねばならぬが、その頻繁な登場の具合だけでも紹介すると「……外部の勢力が本学の研究・教育に介入することを容認するものではない。」(一章(一)項)

「……外部のいかなるところからも掣肘をうけるべきではない(二章(a)項)」

「……外部からの政治的介入を拒否する反面……」(二章(a)項)

「教育内容の決定の自主性こそは、大学の自治の重要な要素のひとつであり学外からこれにたいする介入のおこなわれることは、大学自治にたいする重大な侵害を意味する。」(二章(c)項)

「大学の自治は、大学の教員の組織が意思決定にあたり、教員によつて選ばれた総長・学部長等がその執行にあたることによつて維持されている。万一、この体制のなかに、学外の勢力が介入する余地を容認している事実があるとすれば、それはこのような大学の機関が自治能力をもたないことを意味することになる。」(三章)

等である。これによつて見る通り、このバンフレットは、きわめて神経質に「外部」なるものを扱うが、しかしさき指摘したように「外部」とは何か、ということには一切触れるところがない。ある場所における「外部」の意味は、大学の研究と教授とを妨害するような不当な勢力の意味をもち、別の個所では、文部省

・政府筋をはじめ、大学の行政上位機関一切を含めての「国家権力」を「外部」と扱っているように見るところもある。しかしいづれにしても「外部」なるがゆえに「大学の自治」と相容れないことになるのか、「外部なるもの」が「大学の自治」を侵す意志を持つがゆえに、これを敬遠しようとするのか、その点もこのバンフレットには記されていない。簡単にいって全文を通じて「外部」なるものを排除する意志に貫かれてはいるが、一向に「外部」の意味が理解できないということになる。

そこで私は、このバンフレット作成の動機を朝日ジャーナルにのつた教授たちの談話に求め、それによつてせめて執筆者たちの考える「外部」の意味を理解しなればならぬとなつたのである。(以下次号)

紙面の都合で、それについての記述は、次号に廻さなければならぬとなつたが、そこには、上位行政機関たる文部省に対して、敵意に満ちた発言さえあり、ある教授はこの東大バンフレットは「学生と同時に文部省にものをいっているものだ」と理解してはしい」とさえ語っている。

私は次号においてこれらに言及するとともに、私の考える国家と大学の関係(それは、国立大学が文部省のいいなりになれ、というものは断じてないが、東大バンフレットに見るごとく反抗的、対抗的のばかり立つこと誤りもはなはだしい、とするものである)について書き記したいと思う。

小歌うたひて

—— 太平記より ——

桑原 暁

一

興国元年（暦応三年）の四月の初めつ方、新田義貞舎弟脇屋刑部卿義助は、四国の官方を統率すべく、伊予国へ渡つた。しかし五月四日より病をうけ、わずか七日をすぎてはかなくなつた。官方の最後の拠点は大館左馬助氏明のこもとところの世田城であつた。寄手の大将細川刑部大輔頼春は一万余騎を七手に分けて城の四辺に陣々を構えた。城中、すでに矢尽き食乏しく、防ぐべきようもないので、九月三日の暁、大館左馬助主従十七騎をはじめ士卒みな、城を出て壮烈な死を遂げた。しかし篠塚伊賀守一人は例外であつた。大手の一、二の木戸を広く押し開け、ただ一人突つ立っていた。降人に出るためかと見るに、さにはあらず。紺糸の鎧に龍頭の甲の緒を締め、四尺三寸ある、いかもの造りの太刀に八尺あまりの金さい棒わきにはさみ、「よそては定めて名をも聞きつらん、今は近づいてわれを知れ。畠山庄司重忠が六代の孫、むさしの国に生い育ちて、新田左中将殿（義貞）に、一騎当千とたのまれたりし篠塚伊賀守と云ふ者こゝにあり。討つて勲功に預かれ」と大音声挙げて名告るやいなや、百騎ばかり控えていた敵の

中へ、少しのためらいもなく走りかゝる。その勢い、骨柄の勇鋭たるのみならず、かねて聞き及ぶ大力なればこれに手向かうもの一人もなく、百騎の勢はさつと東西にひきのいて、途をあけて彼を通す。彼は馬にも乗らず、弓矢も持たないたゞ一人のこと。何ほどのことがあろう、遠矢にて射殺せ、とつて返さば馳け追まして討て、とて二百余騎、彼の跡を追う。ところが――

篠塚は少しもさわがず、小歌うたひて、しづかにあゆみみけるが、敵近づけば、「ああ、御辺たち、いたう近づいて頭にあたりな」と、あざ笑つて立ち止まる。敵矢先をそろへて射れば、「某が鎧には、かたがたのべろく、矢は、よも立ち候はじ。すは、射て見給へ」とて、うしろをさしまかせて休み居たり。篠塚、名譽の者なれば、一人なりとも、もしや討ちとどむる、と追つかけたる敵二百騎に六里の道を送られて、その夜の夜半ばかりに今敵浦に着きにけり。

その沖には敵の乗りすてし、水手だけ残つてゐる船があつた。彼は鎧を着たまま泳ぎつき、「われは官方の落人に篠塚と云ふ者ぞ、この船出いて、われをいんの島へおくれ」とて、おどろきさわぐ

水手を尻目に、廿余人がかりで繰り上げの碇をやすくと引き上げ、十四五尋ある帆柱をかるくと押し立て、屋形の内にて高枕のいびきをかいて寝てしまつた。水手掘取、これにおそれをなして、彼をいんの島に送りつけたのであつた。（いんの島は因の島、すなわち瀬戸内海の小島であらう。）

二

それより数年後のことである。――

楠帯刀正行は父正成が先年湊川へ下りし時、思ふやうあれば、今度のかせんに我は必ず打死すべし。汝は河内へかへりて、君のいかにもならせ給はんずる御様を見はてまゐらせよ、と申し含めしかば、其庭訓を忘れず、この十余年、我身の長ずるをまち、討死せし郎従其の子孫を扶持し立て、いかにもして父の敵を亡ぼし、君の御憤りを休め奉らんと、明けくれ肺腑をくるしめてぞ思ひける。光陰過ぎやすければ、年つもつて正行已に廿五。ことしは殊更父が十三年の遠忌にあたりしかば、供物施僧の作善、所存の如くにいたして、今は命惜しと思はざりければ、其勢五百余騎を率し、時々住吉・天王寺辺へ打出で、中嶋の在家少々やき払ひて、京勢今やかゝるとぞ待たりける。

高氏はたゞちに細川陸奥守顯氏を大将として、都合三千余騎の討つ手を河内国へ向かわせた。彼等は八月十四日（貞和三年）午の刻に、正行の館から七里を隔てた藤井寺に陣した。正行は相手の油断を見てとつてこれを急襲し、散々な敗

北を喫せしめた。そこで足利方は十一月廿五日、山名伊豆守時氏・細河陸奥守顯氏を兩大将として六千余騎を住吉・天王寺へ向かわせた。正行はまず住吉の敵に攻撃を加えた。半時ばかりの合戦に彼我の死人戦場に充滿した。敵の大将山名時氏も切紙を受け、その手当をしていた。ちよどその時――

楠の勢の中より、年のほど廿ばかりなる若武者和田新登意源秀と名のつて、三尺余の鎧に大太刀小太刀二ふりはいて、三尺余の長刀を小脇にはさみ、しづくと馬を歩ませて、小歌うたうて進んだり。其次に一人、これも法師武者の、長七尺余もあらんと覺えたるが、阿間の了願と名のつて、からあやおどしの鎧に、小太刀はいて、柄の長さ一丈ばかりに見えたるやりを、馬の平頭引に引そへて、少しも擬議せず駈け出でたり。

その勢いと云い、事柄と云い、尋常の者ではないとは見たが、あとに続く勢がないので、「ありや何だ」とだけで、山名方の大勢はおどろくこともなく控えていた。これがいけなかつた。この二人のために思ふ存分ひかきまわされ、氣勢あがつた楠方に抗すべくもなく、ついに山名方は退却を余儀なくされた。この退却の流れに天王寺の勢も合流し、渡辺の橋から寒き落されて河中に流れるもの多かつたが、その五百余人を救い上げて手厚く介抱した正行の恩讐を越えたなさに感じ、正行の手に属して、後日四条繩手の合戦に正行と死を共にしたのもあつたという。

古典の窓

兵法の道において心の持ち様は、常の心に替ることなからず。常にも兵法の時にも少しも替らずして、心を広く直(すく)にして、きつくひつばらず、少しも弛まず、心の片寄らぬやうに心を真中に置いて、心を静かに揺がせて、その揺(ゆら)ぎの利那も揺ぎやまぬやうによくよく吟味すべし。(宮本武蔵・五輪書)

☆

年譜には、初冬、熊本城下西郊にある岩戸山の靈巖洞に籠り、五輪の書を著す、時に寛永二十年、年六十歳と記してある。武蔵が歿したのは六十二歳、すなわち五輪書は死を二年のあとにひかえた武蔵が、その一生のおもいを傾けて書きとめた留魂のことばである。

宮本武蔵という剣術家の名前はあまりにも有名だし、この五輪書という彼の著作もその名前のかけにかられてしまつて、武蔵が書いたものだから読んでみようかというほどの、興味の対象としか扱われないのが現状のようである。だがあらためて五輪書をよんでゆけば、数多くのサスペンスとロマンスに満ちた物語の主人公武蔵の姿も、すっかり色あせて見えてくるから不思議である。五輪書の中に書きとめられた言葉の緊張と、そのえもいわぬ美しさに比すれば、吉川英治の名作もその精彩を失わざるを得ないのである。ともあれ武道の達人が、かくも美しい言葉を残し得たということは、日本の歴史を細くもにとつて、実にありがた

いことであつた。剣の道もついに「ことば」によつて客観化されざるを得ないし、その客観化に耐え得たところに、武蔵の剣術の偉大さがあつたと見えよう。

「心を静かに揺がせて、その揺ぎの利那も揺がぬやうによくよく吟味すべし」一歩ふみはずすと、心を弄ぶということにならかねない言葉だが、それが息をのむよきな表現に到達しえているのは、筆者の精神のきびきびとしたところ。心はその揺ぎのきびきびとした死滅す。緊張の瞬間にもかすかに息づく心の温さを、掌にじつとつけとめていなければ、それはついに日本における剣の道とは言えない。というよりも、緊張の瞬間に心のゆらぎを「すなわち「常の心」」を確保する道が剣の道だつたのである。

「心を広く直にして、きつくひつばらず、少しも弛まず、心の片寄らぬやうに心を真中に置いて……」この言葉もまた、その言おうとしているのは自然さながらの人の心の持続である。常の心を失うまいとするはげしい内心のたゞ、かいてある。常の心を失つたとき、武蔵にとつて言えど、剣の働きが、人生を硬直せしめたときに、そこに待つているのはたゞ「死」だけであつた。その死のたゞ、かいて、武蔵の生涯をかけたたかいかいであつた。

いかなるものによつても心を縛られない、心を硬直せしめない訓練「それが日本における「道」の本来のありようであつた。われわれが武蔵の言葉に惚ぶものは、かゝる日本古来の脈々たる道統である。(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

三

住吉・天王寺の敗戦後、すぐさま足利方は、高武蔵守師直、越後守師泰兄弟を兩大將として、四国・中国・東海廿余箇の軍を催し、都合その勢八万余騎、うんかの如く淀・八幡に着いた。正行・弟正時二人は、十二月廿七日、一族若党三百余騎をひきつれ、吉野の皇居に参り、その心中を言上した上、必死の覚悟をきわめて吉野を打出で敵陣へと向かつた。この四条合戦の模様については述べることにはさしひかえる。結局、「馬にははなれぬ、身は疲れたり。今は是迄とや思ひけん、楠帯刀正行・舎弟七郎正時・和田新発意三人、立ちながら刺しちがへて、同じ枕に伏したりけり。吉野の御廳にて過去帳に入りたりし兵(百四十三人)、これまでなを六十三人打ちのこされてありけるが、今はこれまで、いざや面々同道申さんとて、同時に腹かききつて同じ枕にふしにけり」ということであつた。ところが――

和田新兵衛行忠はいかゞ思ひけん。只一人一縮(鎧、甲に身を固め)しながら徒立になつて、太刀を右の脇にひっさばめ、敵の首一つとつて左の手に提げつゝ、小歌うたひて東条の方へぞ落ち行きける。

これを見て安保肥前守忠実、只一騎馳せ寄つて、「和田・楠の人人皆自害せられたのを見捨てて一人落ちるとはなきけない、返えしなされ、見参せん」とことばをかける。すると新兵衛につこと突つて、「返えすに難いことか」とて、四尺

四寸の太刀の見しのにぎに血の余っているのを打ち振つて走りかゝる。忠実は一騎討ちではかなはじと思つたものか、馬の首を返えす。忠実が止まれば行忠また落ちてゆく。落ちてゆけば忠実また追つかけ留めんとする。追えば返えし、返えせば留まり、路一里ばかりを過ぎるまで、互に討たず討たれずして、日すでに夕陽に及ばんとした。かくては討ちもらしてしまふと思つてゐるところに、忠実方の二騎駆せ来つて射かける矢に、七寸じまで射立てられて、新兵衛はついに忠実に首を取られたのであつた。

(以上神田本・太平記による。)

あとがき

少し調べたいことがあつて、久しぶりに太平記を取り出し、あちこち拾いよみしてゐるうちに、「小歌うたひて」というのの心ひかれて、そのことばの出でくる右の三箇所を取り出しつてみた。それは、わざと平静を装う、ということではむろんあるまい。さりとて相手呑んでかかつてゐる、といふだけのことでもなさそうである。心中何のわだかまりもなく、自然に口に出たもののように思われる。死はもとより辞せず、さりとて生を恥ずることもない。死も生も、何も彼も、すべてを通りぬけた、いわば透明な虚無の声である。しかし、云うまでもなく、これはばくなどの実感をほるかに超えたもので、ただおぼろげの感触である。

(四一・一・六記)

国文研だより

待望の出版近づく!! (左記いづれも三月末完成の予定)
故黒上正一郎著

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

(A5判、上製本、約三三〇頁の予定)
これは昭和五年、三十才の若さをもって死去された篤学の士、黒上先生のも著書です。本書は、いまから三十年前、当時の「高陽信会」によって出版されて以来、絶えて「全巻」の出版を見る事ができませんでした。しかし、この書によってもって多くの青年学生が、日本文化の真髄を知り、上代日本への近親感を深めてきていますので、本会は、ここに大方諸賢の御要望にあわせ、とりあえず「資料」として全巻の上梓を果たすことにいたしました。

夜久正雄著

(亜細亜大学教授)

「古事記のいのち」

(新書版、約二五〇頁の予定)

この書は、夜久教授の三十年來の研究の成果であり、遠い昔の世界に去ってしまっていた「古事記」をわれわれの身近かなところに近づけてくれる著書です。書中、「神話と伝説」ということについて、それが日本國家の創設

にどういふ意味合を持っているか、それを解明したあたりなどは、おそらく前例を見ない本書の特色の一つに数えられるでしょう。また「古事記」の歌謡、和歌の格調の中に読者を自づと引きこんでいく不思議さ、いうなれば、著者自身がそれらの歌謡の作者の心を、全心身の努力を傾けて追憶しているためではないでしょうか。それに、高校生にも「古事記」が親しめるように、との配慮で書かれた書き方も、けだし独創的な記述と思われれます。本会がこのたび国文研シリーズ第一輯に本書を選び、「資料」として上梓するに至った所以も、以上のことで御推量いただければ幸いです。

男子幹部学生春季

「結集合宿」

来る三月十五日から十八日まで三泊四日、滋賀県坂本(琵琶湖畔)で、幹部学生約五十名の自主的合宿が営まれることになりました。場所は京大グループによる交渉によって、名刺「西教寺」と決定。全国から参集する学生諸君によって今夏の第十一回合宿教室(雲仙)への前進の体制と、あわせて物情騒然たる全国大学学内騒動への積極的な姿勢が打ち出されることであろうと思われれます。刮目してその成果を期待したいものです。

女子学生の初の「自主合宿」

来たる三月二十八日から三十日まで二泊三日、奈良の名刹「薬師寺」で、国文研創設以来はじめての女子学生だけの合宿が持たれることになりました。

た。昨年の夏、別府城島高原の合宿教室に参加した女子諸君は、とくに班別対論の時間に岡澤先生御夫妻の御声咳に接することを得、そうしたこと契機となって、その後も「和歌通信 No. 1」(No. 1)の発行・消息交換などを続けて活発にお互いの心を磨き合ってきた。東大の陽山さん、武蔵女短大の田川さんのお二人が首頭をとられて、私達の知らぬ間に、ついに薬師寺合宿のプランが実現することになった模様です。よき合宿であるように心から祈っています。

同胞歌壇

しきしまのみち

長内 いし

四十すぎしわが子三人が孫つれて秋の一日を釣に出かけぬ
病むわれに四十路の吾子が不器用に香り
たつ番茶を運びてくれぬ
たまさかに長男夫婦帰り来て風呂沸かし
くれ食膳にぎわし
岩木嶺の間近に見ゆる断崖に観音像の建ちてゐたりき
たちまちに雲下り来て日屋谷の川の岩群
かけ暗くなりぬ
師走せまる上北高野に日は照りて冬山裾
に當盤樹光る
書き忘れか差出人のなき賀状達筆なれば
思ひこたわる

東京合宿から帰り、姉の手術とき、
東京 長内 俊平
故知らず胸苦しくてねむられぬ一夜明け

編集後記

今月は発行がたいへん遅れたことをお詫びします。維新百年が真近に迫ったこと、日米安保の七〇年が接近してゐることなど、今年になって更に感を新たにさせられます。暖冬をあやしむうちにも、全日空機の惨事やベトナム戦乱の進行は、誰の胸にも痛ましい緊張をおこさせてゐます。各地で頻発する大学騒動のニュースは、かうした一起一伏の国家波動の本にある学問と、それに携はる英知に關はるところを場所として起つてゐるだけに、その事実と正確な照明を当てることは、何にもまして重要なことかと思はれます。本誌では巻頭から五頁をさいて小田村理事長の論説を掲げました。「國家と大学」に關する、同氏の長い経験と研鑽から得られた、貴重な考察と警世の文と思はれますので、玩味いたゞければ幸甚です。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南都町3 宝辺正久
振替下関1100 電話22.115.2
毎月一回10日発行
定価 一部 20円(送料別)
年間360円 (送料共)

大学の自治と学生の自治について (2)

附・東大当局発表のパンフレット「大学の自治と学生の自治について」を読んで

小田村寅二郎
(本誌専員)

四、東大当局のいう「外部」とか「外部勢力」とかいうのは、一体何を指しているのか。それが明らかにされ、それについて国民的な納得がなされない限り、「大学の自治」の解釈は、いつまで経っても安定点に到達しない。

この東大パンフレットを読むと、誰でもすぐ気づかれると思うが、私が前号に指摘したように、「大学は『外部』からのあらゆる介入を排除する」「そこに大学の自治がある」という風ない方が、繰り返し書かれている。だが、パンフレットの全体を通じて、その何処にも、いうところの「外部」が何を指しているのか、その範囲と内容については、「政治

的、経済的、社会的、宗教的等の諸勢力」という風に抽象的に書かれているだけで、一向に具体的な指摘はなされていない。

しかし詳細にその論述の筋を辿っていくと、東大当局自体は、自己が国立大学であるという自覚に欠けていて、国家秩序からさえ独立しているかのごとき口吻が洩れている。それゆえに、文部省や政府筋に対する異様なまでの強い対立意識、大学の自治権を文部省や政府筋から獲得して死守するのだ、というような気負い立った姿勢などが目に映ってくる。そして、その反面国に対する大学の責任についての論及は、真理の探求とか社会への貢献とかいう表現に托して大学存在の理念を述べようと努めていて、なぜか「国」に直接する使命に触れることを

極力避けるかのようなのである。そこでこの小論を通じて、東大当局のそうした姿勢を、東大パンフレットその他の資料によって指摘し、その間、政府・文部省と国立大学の関係、「国」に潜在する国民的理念と大学自治との関係などにつき、あるべき姿の一端を述べてみたいと思う。

まず東大パンフレットの中で、直接に對文部省のことに触れている箇所、具体的には、大学内に奉職している事務職員について、一部の学生運動家がこれを「学内に文部省の優先機関がある」といって批難するらしく、大学当局は神経質にそれを取り上げて、「わが大学にそのようなたはあり得るはずがない」と反論する一節を取り上げることにする。批難も批難だが、反論の論拠がおおよそ良識を逸脱していると思う箇所である。私としてはこうした事務職員の身分や職務内容についてここで論及するのはあまり大人気ないと思ったが、それを重大問題のように扱う東大パンフレットであるから、そのベースに合わせて所見を述べるほかはない。事務職員と大学と文部省の関係よりも、もっと大切なことは、教授と大学と文部省の関係の方のことであるこというまでもないが、パンフレットはそれについて直接触れることを避けているので、やむなく右の点から論及をすすめることにした。しかしここでいう私の論点の大部分は、ある程度、教授についても類推しうると思う。なぜならば教授たちは、事務職員とは職責の違いこそあれ、同じく国家公務員という共通の基本的身分に立っておられる方々であるからである。

「第二に、最近一部の学生運動には、学生部や学部事務部を文部省の優先機関であるとして学生全体の不信感を煽る傾向がある。」と指摘し、続けて

「しかし学部長の職員は、法令上も、総長・学部長等の指揮監督に服する立場にあるし、とくに本学においては、長年の慣習によって、職員のみならず、この規律を重んじ、大学の自治の尊重すべきことを十分に理解しているのであるから、本学の職員の行動について何らの具体的な根拠もなしに、ことさらに不信感を煽るような言動をあえてすることは、本学の学生にあるまじき行為といわなければならない。なぜなら、そのようなことは、ただたんに事務系職員自体を誣めるものであるばかりでなく、そもそも大学の自治の体制そのものを侮辱するものといわなければならないからである。」

大学の自治は、大学の教員の組織が意思決定にあたり、教員によって選ばれた総長・学部長等がその執行にあたることによつて維持されている。万一この体制のなかに、学外の勢力が介入する余地を容認している事実があるとすれば、それはこのような大学の機関が自治能力をもたないことを意味することになる。本学の体制がそのようなものであると、一部の学生諸君が誣めるなら、そのようなあらぬ事実をも

目次

大学の自治と学生の自治について

小田村寅二郎 (1)

1号50号「国民同胞」目次総覧…………… (5)

つて多数の学生諸君を欺くことは、み
ずから大学の自治を軽蔑する行為であ
ることを厳しく指摘して反省を求めた
い。(朝日ジャーナル一月十六日号に
転載の東大パンフレットから。同誌十
九頁)

右はやや長い引用であるが、注意して
読む必要があると思う。この二節は、そ
のはじめのところで、先ず、一部の学生
たちが「学生部や学部事務部は文部省の
出先機関になっている」と悪意にみちた
いい方をしているのを東大当局がとらえ
しかも、「それで学生全体の不信感を煽
っている」と指摘することにはじまっ
ている。実は、この指摘の仕方問題が発
見されるわけで、すなわち大学当局がこ
こでいう「不信感」という言葉の意味は
「学生部や学部事務部に対する不信感を
煽っている」という意味になるが、その
言葉の裏をかえせば、「学生部や学部事
務部は文部省の出先機関ではないぞ、大
学には自治権があって、文部省の介入は
許さぬことになっているのだ」と宣言し
ているのと同じである。

それを裏づけているのが後段の文章で
あって、「大学の職員は、法令上も、総
長・学部長等の指揮監督に服する立場に
あり」「職員のすべてがこの規律を重ん
じて大学の自治の尊重すべきことを十分
に理解しているのであるから」、「本
学の職員について」、「不信感を煽るよう
な言動をするのは」、「本学の学生にあ
るまじき行為だ」、と学生に訓示し、そ
のような行為は「たんに事務系職員自体
を誣めるのみならず、「そもそも本学の
自治の体制そのものを侮辱するものだ、
ときめつける。そして、その大学の
自治そのものは「大学の教員の組織が意
思決定にあたって」おり、「教員によつ

て選ばれた総長・学部長等がその執行に
あたることによって維持されている」か
ら、実に権威ある自治運営になっている
はずだ。だから、「万一、この体制のな
かに、学外の勢力が介入する余地を容認
している事実があるとすれば」……と
文章が続くので、ここまで迎ると、さき
の前後にでてきた「文部省の出先機関云
々」という、その文部省は、ここでいう
「学外の勢力」と同義語となり、文部省
の行政が、大学内に及ぶようなことが万
一にもあるとするならば、それは「学外
の勢力が、大学の体制のなかに介入す
ることを容認した事実」になる、という論
法になる。この論法は、とりもなおさず
「学生部や学部事務部は、なんで文部省
のいいなりになるようなことがあるか。
総長以下の執行部のもとに純一なる忠勤
を励んでいくられるの」に純一なる忠勤
わけである。この論法の背景にあるもの
、それは大学の自治権に立て籠って文
部省の行政管轄を否定する思考以外の何
ものでもあろうか。しかもそれは、学生に
対しての訓示の形において、行政権無視
の宣言をしているのと同断ではないのか。

前記引用文の後段の後半を続けて解説
すれば、文部省の勢力が、学生部や学
部事務部に影響を及ぼしているような
「介入を容認している事実があるとすれ
ば」、それはこのような大学の機関が自
治能力をもたないことを意味すること
になってしまい、「本学の体制がそのよ
うな（自治能力をもたないもの）である
と、諸君が誣めるなら」、「そのような
あらぬ事実をもって多数の学生諸君を欺
くことは、みずから大学の自治を軽蔑す
る行為である」として「厳しく指摘して
反省を求めたい。」と結んである。まさに

文部省に対して、学生をその共同戦線に
さそい、以て徹底抗戦の宣言をしている
のと同じではなからうか。東大当局とも
あろうものが、果してこのような姿勢で
あってよろしいものであろうか。

学問の分野に、政治・行政の面からの
いたずらなる介入や干渉が及ぶことは、
もとより恨まなければならぬ。しかし
そうであるからといって、政治・行政そ
のものを本質的に学問追求にとって邪
魔になるもの、大学自治の妨害者に決ま
っているもの、と決めてかかることは如
何なものであろうか。すなわちそれは政
治・行政を、学問の府にとつては「悪」と
きめてかかる考え方に立つから、そうな
ると、国立大学そのものが成り立たなく
なるのではないか。しかし、いま私が引
用したパンフレットの箇所が、このよう
に政治・行政を悪と考えるほどの徹底し
た考え方に立つものではない、ともし
われるならば、事態はさらに愚劣であつ
て、すなわち右の引用個所の示すことは
偏狭な権力の繩張り争い以外の何もの
でもなく、さらに次元の低い低劣な範囲
での論述になってしまふ。この場合を考
えてみると、それでは、東大当局もあ
らうもの、あまりにもみじめな心境が
見すかされてしまつて、それを観察する
こちらの立場までがなまけなくなつてし
まう。東大当局ならびに教授の方々の中
には、学問の自由とか、真理の探求とか
の大義名分に溺れて、自らの立っている
現実の大地、日本という国家の一員、國
家公務員としての責務をも忘れ去つてよ
ろしいとする、度はずれたウヌボレがな
ければ幸いであるが。

しかし、現実にはこのようなパンフレッ
トを出される以上は、それなりの信念が
あられてのことと思うので、煩雑ではあ
るが、さきの東大当局の所信を取り上げ
て細密な追求を試みたいと思う。

まず大学事務職員について考えてみよ
う。

彼らの身分は、基本的には国家公務員
であり、かつ文部事務官という職責に立
つ。文部事務官である以上は文部省に所
属するがゆえにこそ、大学に配属されて
いるのであって、大学の職員たる当面の
従属関係に先立って、彼らは文部大臣の
任命のもとにある人々である。このこ
とはどうしても無視するわけにはいかな
い。大学の職員が総長・学部長等の執行
体制下にあることは、もとより当然であ
るが、ただそれだけの理由によって、行
政上位機関と彼らとのあいだにある基本
的文部事務官たる職責を含めての一切
の権利義務を切断してしまふことは不可
能である。

そこが完全に切断されない限りは、彼
らにとつて総長・学部長等は、当面の職
務の上司であるにとどまり、ただそこに
「大学の自治の枠内にある任務」と
いう特殊性が加味されるだけのことであ
る。そこでこの特殊性をどのように評価
するか問題が移行していくが、大学と
文部省とのあいだに、依然として、なん
らかの上下行政秩序が存続される限りは
さきの基本的身分の關係は、決して消滅
しうるものではない。

それゆえに大学の学生部や学部事務
部が文部省の直接の出先機関でないこと
はいうまでもないが、それは直接の出先機
関でないだけのことであつて、文部大臣
の広義の管轄系列に立っていることを否
定することにはならない。彼らが大学に
当面奉職しているからといって、文部省

が文部省の直接の出先機関でないこと
はいうまでもないが、それは直接の出先機
関でないだけのことであつて、文部大臣
の広義の管轄系列に立っていることを否
定することにはならない。彼らが大学に
当面奉職しているからといって、文部省

の大学々衛局に赴いたり、次官・大臣に所見を求められたりしても何の差障りがありうるわけはない。

さらにこのことに関連して、いま一つ拙見を述べておきたいことがある。それは、さきの引用第二節の冒頭に、「大学の職員は、法令上、総長・学部長等の指揮監督に服する」と書かれてあって、わざわざ「法令上」という言葉が勿体らしく使われていたのが気にかかる。なぜかというところ、そこを讀んでいると、つい反射的に「法令上それ以外の者には服さないでよろしいことになっている」という考へに誘われ勝ちだからである。試みに国家公務員法を開いて確かめてみると、たしかに同法第九十八条には、「法令及び上司の命令に従う義務」として、「職員は、その職務を遂行するについて、法令に従い、且つ、上司の職務上の命令に忠実に従わなければならない」とあるが、その条文を制約する条文が、その前におかれてある。すなわちそれよりも前の第九十六条には、「職務の根本基準」として、「すべて職員は、国民全体の奉仕者として、公共の利益のために勤務し、且つ、職務の遂行に当っては、全力を挙げ、これに専念しなければならない」とあり、第九十七条には「職務の宣誓」として、「職員は人事院規則の定めるところにより、職務の宣誓をしなければならない」と書かれてある。

すなわち、東大当局のいう通り「法令」によれば、ということになる、大学職員といえども国家公務員である限りは、その職務について、第一に「国民全体の奉仕者」であり、第二に「国家公務員としての職務について宣誓をしてきているもの」であり、第三番目になつてはじめて「上司の命令に忠実に従うべきもの」

とされている。東大当局が「法令上」という言葉を添えて学生に訓示するならば自分に都合のよい第三番目の職務規定だけに準拠して物をいうなどは、いかにも学者らしからぬ不明朗さ、というほかはない。

さて、学内事務職員について、東大当局のこのような判断の誤りが、何に起因したものであろうか。私が思うには、一つには、大学の自治という場合の自治権の由来について、東大当局にある種の誤認があること。二つには、その誤認の影響を受けて、大学教授の義務の責任の内容が空洞化してきたこと、いかえれば「国」に対する責務と「人類・社会・世界」に対する責務とを、次元の異なる価値に序列してしまつてゐること、さらにかにも学者として正しい心の姿勢であるかのような錯覚に陥つてゐる、ということである。

いま、この二つについて述べる前に、ことは事務職員から教授の方に移つていくので、東大のパンフレット作成に加えられたというある教授の談話を引用して教授という立場の方の赤裸々な心境の一面を見ておきたいと思う。朝日ジャーナル一月十六日に、同誌記者が取材した一節から（同誌十一頁上段）

「この(パンフレット)作成者の一人である、ある教授は『大学のなかに政治を持ちこんだりすることは、文部省から足をすくわれる原因になる。地方の新制大学は、すでに文部省のいいなりになつてしまつたし、残る旧帝大のなかでも、北大はもともと文部省ベッタリ。強いと思つてゐた東北大までが、さいきんの騒動で文部省に一本とられ

た形になつた。残るは東京のほか、京都と九州くらいしかない。もしこの(パンフレット)から、あまり肩をいかせられた姿勢を感じるといふならば、それは学生と同時に文部省へも、ものゝいてゐるからだと理解してほしい。』といつてゐる。

と取材してあつた。そのいうところの「大学の中に政治を持ち込む」という言葉の意味がつきりしないが、対政府・対文部省に関係する事柄を差すのであろうか。しかし、地方の新制大学が、かりに文部省と上下秩序を維持する姿勢になつたからといつて、(そのことはむしろ正しい)部面を含む場合の方が多いと思われ(る)が、それを「文部省から足をすくわれる」とか「文部省ベッタリ」とか「文部省に一本とられた」などという文部省に対する敵対的意識を露骨にしたようなあまり品のよろしくない、そして闘争的な言葉で言い表わす所が、すでに問題であらうと思う。また、新制大学は文部省にすでに屈服したものとし、他方、旧帝大のうち東大・京大・九大の三校を以て「大学自治」の残るとりであるかのよう、にいうその態度は、国立大学に東大側から優劣をつけるような不謹慎さもさることながら、「これは学生と同時に文部省へも、ものゝいてゐる」のだ、という大胆な反抗意志を示すほどになると、東大教授としてのこの立場は、一体いかなる法的根拠に自己の立場をとつて、かくも強く行政秩序からの超脱の姿勢をとられるのであろうか。それとも「国」とは全然別個のなんらかの権威に拠つておられるのであろうか。

「学問の自由」が大学になければならぬ、ということ、文部大臣と国立大学とのあいだに行政秩序が確立して

然るべきだ、ということとは、「国」のためにも、「国立大学」のためにも、双方を矛盾なく両立せしめなければならない課題である。それを、この二つのことはどうしても両立するわけがないという先入観が、もし大学人の頭脳を支配してしまつてゐるとすれば、事態ははじめから切迫した状況を呈してゐる。現在の日本は、いうまでもなく三権分立の体制で国家秩序の基幹を構成し、立法・司法・行政は、それぞれお互いに相手の領域を侵さぬことを立て前として独立を保ち合つてゐる。しかし、さきの東大教授のような考へ方、すなわち、行政の一環の中にありながらも、全然別個の権威に準拠して行動しようということになると、たか

も三権の外に、いま一つ「大学の自治」なる権利が登場し、四権分立の体制でも連想しなくては、この事態の急迫状況を打開する道はなさそうに思われてくる。

一体、「学問の自由」「真理の探求」ということが原因とはいへ、なぜこうまで幣上な意識に立たねばならぬというのであろうか。かような反権力の立場に自己をふまえる。その姿勢は、自己の特権と優越性を主張する意味から、実は、新たな権力を要求してくることにほしくないか。反権力イコール権力欲求とならなければ幸いである。

五、大学の自治の由来ならびに本質について、東大当局に重大な歴史的誤認がありそうである。

東大パンフレットは第二項「(a)大学の自治の本質」で「大学の自治が、学問の自由を守り、

一國の、ひいては人類の、文化と福祉の向上をはかるために、ぜひとも尊重され発展せしめられなければならないものであることは、今日世界的に公認されている原則であるが、それは本来つぎの二つの事実に根拠をもつものである。すなわち、ひとつは、大学は、高度の学問の研究とその成果の教授とを使命としており、この目的を追求する役割を担っているというところである。もうひとつは、学問の研究とその成果の教授とは、それが外部の政治的、経済的、社会的、宗教的等の諸勢力の掣肘をうけることなく自由に自主的におこなわれるとき、もっとも豊かな成果をあげることができるといことである。後者が多年にわたる苦い歴史的经验を経て、人類が到達しえた貴重な教智であることは、あらためていまでもない。」

他の独裁的な後進諸国は、必らずしも同様とはいえないかろうと思う。一部東大教授たちは、決して後進国ではないが、しかも思想統制の枠の中で、きびしい監察がなされているといわれているから、そこでは、文部省を公然と敵視しようような大学自治は、求めたくも到底求め得られはしないであらう。そう見てくだけでも「世界的に公認されている原則」などといういい方は、すでに正確な表現とはいえないではないか。

だが、かりに目を蔽うて、論者のいう通り「大学の自治」が「世界公認の原則」であったとしても、日本における国立大学に、大学の自治が認められたのは、決して「世界公認の原則」に則つてのことではなかったかと思う。もっと自主的に日本という国と日本国民の納得が、それに先立っていたのではなかったか。明治初年に、明治天皇の教学に関するお志を中心とする文明進取の挙国的な気象と、先進国に遅く追いつこうとする日本国民の勤勉と教智とが、然るべき程度における「大学の自治」を是認したと見るのが、日本における大学の自治の由来について、の常識的な見方である。

終戦によって日本の政治体制は大きく変化した、依然として「大学の自治」は是認され続け、以て今日に至っているこの現代について考えても、同じく現代に生きるわれわれ日本国民の同意に基いてこそ「大学の自治」が存在し、そうした合意に達するために、なにも大学の自治が「世界公認の原則」であるがゆえに、それを妥当視したのではなからう。明治のはじめ以来の国民的向上心を継承してもっと積極的な意義と、自主的

な判断によって、日本もまた世界に劣らぬ国になろうとすべく、諸外国に負けぬよう学問の研究と探求に向かつて挙国的な努力をしようと思志し、「大学の自治」を理解してきたものであった。すなわち日本の大学における自治は、大学人が日本国民や時の政府や時の行政権力と相争って闘い取つたものでもなかったのである。

日本における国立大学の自治についてその発生の由来と、現存の根拠とを、このように事実と立脚して見ておくことは、たいへんなことであって、前記引用文の後段の解釈にそれが大きく響いてくることになる。すなわち、さきの引用文によると、「大学の自治が今日世界的に公認されている原則」となつたことには、「本来二つの事実に根拠をもつこと」であるが、「その第二の事実として挙げられているのが、「外部の諸勢力の掣肘をうけることなく、自由に自主的におこなわれる」という東大当局の、いわゆる「外部峻拒の姿勢」(それが文部省をも含むものであること前述の通りである)が、「人類が多年にわたる苦い歴史的经验を経て到達した貴重な教智であつて、あらためていまでもない」ことである」とつけ加えている。この個所で東大当局がいおうとしていることは、要するに、人類は、大学が外部の諸勢力の掣肘を受けて、多年にわたつて苦い歴史的经验を積んできたので、その経験から「外部勢力峻拒の姿勢」を得た、それがすなわち「外部勢力峻拒の姿勢」である、そしてこの事実(苦い歴史的经验)に基いて、さきに行った「大学の自治が世界的に公認される」という「原則」が生まれたのだ、と主張したのである。

これらは、諸外国、主として中世紀の西欧の大学の歴史を回顧しているに過ぎないではないか。イギリスのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、フランスのパリ大学などの歴史は、たしかにいまそこに記述された通りの苦い歴史的经验を持っていた。オックスフォード大学の敷地内にいまに残存する城跡は、当時オックスフォードに集まった学者、僧侶たちが、自衛のために立て籠つた城跡であつたといわれ、世俗的な政治勢力と、学問探求の意義も解せず、宗教的な求道的環境をも無視して振舞つた当時の政情では、大学の歴史は、まさに自治という名をもって評する以上に、自存自衛の急に迫られていたきびしいものであつたに相違ない。プリンス頓大学々長のロバート・F・ゴヒン氏は昨一九六五年プリンス頓・クォーター夏季号に「大学に対する学生の責任」と題する一文を草しているが(日米フォーラム本年一月号参照)、その中で

「昔の大学は、もう一つ別のさらに現実的な意味で、守護神々の役割を果たしたことがあつた。パリ大学やオックスフォード大学のような中世紀の施設を作り上げた学者は、協力のためばかりでなく、保護を求めて集まつたのであつた。オックスフォードの古城や城壁の遺跡を見れば、学者と市民が同じく武力の脅威を受けていたことがわかつたことを思わせる。一七世紀中葉の追放では、議会がオックスフォードの学寮から、約四〇〇人の特別研究員(フェロー)や学者を除いた例がある。一六五三年、骨と皮の議会(タロンウエルが一六五三年に招集した議会のこと)訳者註)は、実際に学寮や大学

を接収する気配を見せたが、大学側を代弁したセス・ウォードはそれに答えて「われわれは真理の旗を立てる者がだれであっても、その後には続かなければならない」と力説した。」

とまことに興味深く書いています。

このゴヒーン学長の説明と、東大当局の見解とは、西欧における「大学の自治」の発生の由来とその本質について、ほぼ一致するもの、といつてよからう。しかし、なぜ東大当局は「大学の自治」の由来と本質を自国の大学生に訴えるに際して、日本の大学における自治と全く無関係な、このような中世紀の西欧諸国を連想しなければならなかったのか。そのいずこに必然的なつながりがあるというのであろうか。しかも、オックスフォードやパリ大学は、国立大学ではなかった

1号 / 50号

月刊「国民同胞」目次総覧

(内は頁数)

- 第1号 (36・11)
- 発刊に当って……小田村寅二郎 (1)
- 二〇年前の学生生活から……学問・友情・祖国 山田輝彦 (2)
- 日本の晴姿をここに……津下正章 (3)
- 「国民同胞」発刊を祝して……黒岩一郎 (4)
- 鹿児島大学合宿記…… (5)
- 慰霊祭から……亡き師友に献ぐる歌…… (6)
- ☆先哲の言葉 (山鹿素行・謫居童間)
- ☆第二回雲仙合宿感想文
- ☆各地だより ☆図書推薦
- ☆高校生を見た合宿
- 第2号 (36・12)

- そしてそれらの大学が中世紀において外部からきびしい迫害を受けたからといって、日本の現実の政治勢力・行政権威を、なにも大昔のイギリスやフランスの世俗的政権に對比して考える必要は、少しもあり得ないではないか。東大パンフレットに見る東大当局の「大学の自治の本質」なるものは、日本を忘れ、日本国民が大学と学問に寄せた篤信の信頼感を全く無視したも同然の所論である。感々が平素から指摘する「国民同胞」の期待とは、まさに正反対に、懐疑と不信に貫らぬかれた見方が窺われ、大学外のもの一切に対する不信に満ちたその姿勢は、とても教育に従事する者のとるものではなさそうである。そのうえ、それこそ中世紀的な時代おくれも甚だしい
- 精神の回復と道義の確立を……川井修治 (1)
- 現代教育の内側に欠けたもの
——ある教師志願者の手記——……国武忠彦 (2)
- ありとあらゆるものを持ってゐて
自分自身を捨たぬ日本……野口恒樹 (5)
- 集団によるつるしあげは民主主義における合理性に果して合致しうるか
小田村寅二郎 (6)
- 旅 (短歌)……夜久正雄 (7)
- 第一号を読んでこう思う……
☆先哲の言葉 (福沢諭吉)
☆カメレオン学者 ☆杜詩二題
☆歌のてびき ☆大教協別府会合
- 第3号 (37・1)
- 変らないものの上に立って変化の大勢を直視しよう……宝辺正久 (1)
- 「保守主義の本領」をよんで
小田村寅二郎 (2)

- 政治観・行政観だといわざるを得ないのである。
- 日本における政治・行政は、お世辞にも立派なものだといえる義理合いでないことは、いまさらいうをまたないが、物を見る基本的姿勢の中ですでに大学外の一切を軽蔑して、自らひとり真理探求者として自負し、そのうえ法外な自治権を主張する姿……さきによつた四権分立思想でも評さなければ評しようのない独善的な姿勢は、国民全体から見ても決して好まざるといふことはできない。しかも自国の歴史を顧みず、日本における国立大学が受けてきた環境（それは物質的に見て、必ずしも好ましいものではない）をうけて発展してきたものに外ならなかった）の安寧さに対する感謝の心
- (小説) 歴史共和国探訪記「自叙傳型記者」の事件が歴史共和国の歴史で輝き出す、読むのが、口の三人と面談した話
- 名越二荒之助 (4)
- ☆意見往来 (野間口行正・平田正彦・古市洋子・沢部寿孫) ☆短歌
- ☆読者のたより
- 第4号 (37・2)
- 大学の門を出る諸君へ……同人会議より
黒上先生といふ人……われわれの思想上の恩師として 高木尚一 (1)
- 護憲論への疑問……森三十郎 (2)
- 意見往来……七夕照正・上村和男 (4)
- ☆先哲の言葉 (親鸞・教行信證)
☆福岡会議から ☆提案 ☆短歌
- 第5号 (37・3)
- 戦後史からの解放……人の事件と共に歴史の条件を 名越二荒之助 (1)

- もなく、勝手に外国史だけに心を奪われそうした立脚点で「大学の自治」を説明しおぼせようとする。こうした東大当局の物の考え方、把え方を通じて感じることは、根底的なところに、なにか大きな「誤認」がひそんでいようと思われることである。
- 日本の国立大学は、あくまでも日本という国と日本国民とのあいだに生まれてきたものであり、その国立大学における「大学の自治」は、国と国民によつて「与えられ、許されてきたもの」にはほかならない。それ以外の権威、神とか仏とか真理の探求とか学問の自由とかいう権威に立脚しているものではない。この「大学の自治」の由来の確認こそ、何にもまして大切な問題点である。(未完)
- 恋愛論序説……神々の誓言と人間の道歩 江里口淳一郎 (2)
- 書評・丸山眞男著「日本の思想」 山田輝彦 (4)
- 意見往来……仲和俊・酒匂優一
ベルグソンの言葉から……高木尚一 (5)
- 無信の信……桑原暁一 (6)
- ☆先哲の言葉 (本居宣長・源氏物語・玉の小櫛) ☆読者の便り ☆短歌
- 第6号 (37・4)
- 日本外交の脱皮……小田村寅二郎 (1)
- 私の宗教観……神と人間と人類と……山田輝彦 (2)
- ジャーナリズム批判・綜合雑誌「論争」に注目する……名越二荒之助 (4)
- 意見往来……斎藤正治・大勝洋祐 (6)
- ☆先哲の思い出……小泉一也 (7)
- ☆先哲の言葉 (兼好・徒然草)
- ☆短歌 ☆第七回夏期学生青年合宿

第22号(38・8)

合宿教室に思うこと(一)・(二)回に参加したる

師友寸描……………上村和男
夜久正雄
教職に在って……………関根康弘
ことばの道にいなはれて 厚地 章

熊本合宿歌集より……………(8)(6)(5)

☆古典の窓(出雲国風土記)

☆短歌

第23号(38・9)

第8回合宿教室特集号

革命によらずして日本をよくする道
—小田村理事長の開会挨拶……………(1)

竹山道雄先生の講義
—物の考え方……………(2)

木内信胤先生の講義
—最近の世界と日本……………(3)

木下廣居先生の講義
—現代の政治的危機……………(4)

合宿おぼえがき……………(5)

感想文—合宿を終えて(参加者手記)
合宿歌集より……………(6)

第24号(38・10)

日本人であること……………田口讓二
海原のうた—和田山儀平君の遺歌—
山田輝彦……………(1)

話し合ってみたい疑問の中から
—結着者の倫理感について……………田中敬一
合宿より帰って……………小林國男
東京慰霊祭だより……………(7)(6)(4)

☆古典の窓(北村透谷)
☆短歌

第25号(38・11)

日常生活をつらぬくわれらの目標
小泉一也……………(1)

精神交流の時代……………高木尚一
爬虫類とイデオロギ—
名越二荒之助……………(2)(1)

東京八日会の紹介……………柴田悌輔

師友寸描—学徒戦死者の歌
夜久正雄……………(5)

白服と白靴かかえて……………地田直彦
☆古典の窓(松尾芭蕉・栖去之弁)
☆短歌……………(8)(6)

第26号(38・12)

他を責める前に考えよう—或る会話から
長内俊平……………(1)

社会主義と共産主義……………川井修治
長崎大学信和会だより……………(2)

知られざる思想家—森田正馬博士—
三重野悌次郎……………(4)

無信の信……………梶村 昇
☆古典の窓(高木田独歩・岡本の手帳)
☆短歌……………(6)(5)

第27号(39・1)

年頭の思い—物価と心理の要諦—
小田村寅二郎……………(1)

所謂「人間天皇の宣言」について
野口恒樹……………(2)

共に手をとりあつて前進しよう
合原俊光……………(6)

古典教育について思うこと
小柳陽太郎……………(8)

☆新春寸言(黒岩一郎・斉藤知正・津
下正章・羽田重房・峰辰次・森三十
郎・大沢勲・酒匂優一・徳地康之・
宮脇昌三・岡村義一)

☆同胞歌壇
☆刷りぶみ「和歌通信」の紹介

第28号(39・2)

国家観を正せ—トニヤチの足に學ぶ—
川井修治……………(1)

昭和三十九年新年発表
昭和三十九年の御歌について……………夜久正雄
両陛下の御歌について……………(2)

昭和四十年の御歌について……………
昭和四十年の御歌について……………
39年「前進の集い」開く

聖徳太子讃仰研究……………徳地康之

合原俊光……………(3)

徳地康之……………(8)

前進の集い「短歌抄」……………柴田悌輔
和歌相互批評のメモから……………山田輝彦
合宿を終えて友に……………合原俊光
☆前進の集い参加者名簿

第29号(39・3)

本会顧問 尾崎士郎先生の訃をいたんで
小田村寅二郎……………(1)

開かれた交流—前進の集い通信より……………
まごころを持つということ……………加藤善之
シニバイツァー博士の思想に接して
田村 潔……………(5)

高校生活の思い出……………宝辺正久
☆古典の窓(日本書紀)
☆同胞歌壇

第30号(39・4)

波立ちはじめた政局……………川井修治
桜島合宿を目指して……………西元寺敏毅
講孟余話……………田村 潔
合宿歌集抄……………(4)(2)(1)

実朝の歌……………山田輝彦
皇居清掃奉仕に参加して……………山田美智
歌心と人生観……………宝辺正久
☆同胞歌壇

第31号(39・5)

青年たちはいま安定ムードの中に放置さ
れている……………山田輝彦
マスコミ展望—日本再発見の動き—
名越二荒之助……………(1)

和歌と人生……………徳地康之
科学と短歌……………江里口淳一郎
國土・田所広泰氏の書簡から
上野和七郎から二十二年を顧みて……………岡村義一
☆同胞歌壇……………(6)

第32号(39・6)

憲法論議の空転を憂う……………川井修治
「信」を求めて—学生の書簡集から—
絵と歌と—田代二見画伯・寸描……………(2)(1)

岡山合宿記……………夜久正雄
千年の英傑—史上最大の教師—
名越二荒之助……………(5)(4)

☆古典の窓(寺田寅彦・化物の進化)
☆同胞歌壇

第33号(39・7)

政治恵について……………小田村寅二郎
新しい学生生活の展開—吉賀訓・全林賢作
ヒロイックということ—激石のことばから—
山田輝彦……………(2)(1)

マルクス主義の革命理論とロシア革命の
現実……………川井修治
和歌・南伊豆ゼミ旅行……………夜久正雄
和歌・今日の佳き日を……………白井 伝
☆古典の窓(平家物語)
☆同胞歌壇

第34号(39・8)

良識という事……………柴田悌輔
「ますらを」の歌—歴代名歌詠—
夜久正雄……………(1)

「紫の火花」—調律師著—を讀みて
高木尚一……………(2)

悠々たる心を……………長内俊平
雑感三題—山内九、歴史、鎌倉地獄—桑原暁一
わが回想の招信会……………宮脇昌三
第35号(39・9)

—第9回合宿教室特集—
体験と認識……………西元寺敏毅
合宿教室の経過……………徳地康之
参加者の言葉……………(2)(1)

和歌創作から……………(8)

第36号(39・10)

祖国のいのちともろともろ……………高木尚一

……………(1)

……………(8)

……………(2)

……………(1)

殉死と大逆―ナチソナリズムとの関連において

女性として思うこと……………山田輝彦 (2)

松下村塾を訪ねて……………今林賢郁 (4)

世界最終の革命……………名越二荒之助 (5)

慰霊祭だより…………… (6)

☆古典の窓(伴林光平・南山踏雲録) (8)

☆古典の窓(今昔物語巻十九) (9)

☆同胞歌壇…………… (10)

☆同胞歌壇…………… (11)

☆同胞歌壇…………… (12)

☆同胞歌壇…………… (13)

☆同胞歌壇…………… (14)

☆同胞歌壇…………… (15)

☆同胞歌壇…………… (16)

☆同胞歌壇…………… (17)

☆同胞歌壇…………… (18)

☆同胞歌壇…………… (19)

☆同胞歌壇…………… (20)

「まごころをつくす」に思う……………西元寺敏毅 (5)

吉田松陰について……………今林賢郁 (6)

「期待される人間像」をめぐって……………川井修治 (7)

☆同胞歌壇…………… (8)

☆同胞歌壇…………… (9)

☆同胞歌壇…………… (10)

☆同胞歌壇…………… (11)

☆同胞歌壇…………… (12)

☆同胞歌壇…………… (13)

☆同胞歌壇…………… (14)

☆同胞歌壇…………… (15)

☆同胞歌壇…………… (16)

☆同胞歌壇…………… (17)

☆同胞歌壇…………… (18)

☆同胞歌壇…………… (19)

☆同胞歌壇…………… (20)

☆同胞歌壇…………… (21)

文化を創造する力……………長内俊平 (1)

モスクワで会った学生たち……………若泉敬 (2)

一ジャーナリストの内政所感……………島田好衛 (3)

現代思潮に見られる致命的な盲点……………合原俊光 (4)

一つの提案……………上村和男 (5)

神を知る心の欠如……………高橋勇 (6)

古事記を読み終りて……………今林賢郁 (7)

☆同胞歌壇…………… (8)

☆同胞歌壇…………… (9)

☆同胞歌壇…………… (10)

☆同胞歌壇…………… (11)

☆同胞歌壇…………… (12)

☆同胞歌壇…………… (13)

☆同胞歌壇…………… (14)

☆同胞歌壇…………… (15)

☆同胞歌壇…………… (16)

☆同胞歌壇…………… (17)

本物だと感じさせられる……………木内信胤 (3)

いちばん因縁深いグループ…………… (4)

志を貫いて苦難の道を進ませよ……………山本勝市 (4)

女子学生もともどもに…………… (5)

合宿訓練は道統継承の唯一の方途……………坂田道太 (5)

邪悪なものに戦う覚悟を…………… (6)

「五箇条の御誓文」が日本のビジョン…………… (7)

自分の生地をそのまま出そう…………… (7)

日本男子の心意気に生きよう…………… (8)

二十一世紀を拓開救済するもの…………… (8)

全力を尽して目的達成へ…………… (9)

道統の先覚者を偲びて…………… (10)

「学生十人委」活動方針…………… (10)

☆「国文研」十周年の集い出席者…………… (11)

☆「合宿教室十周年記念の集い」資料…………… (12)

☆同胞歌壇…………… (13)

☆同胞歌壇…………… (14)

国民同胞

発行所

社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南瀬町3 宝辺正久
振替下関1100 電話 22-1152
毎月一回10日発行
定価 一部 20円(送料別)
年間360円 (送料共)

大学の自治と学生の自治について (3) (完)

附・東大当局発表のパンフレット

「大学の自治と学生の自治」を読んで

小田村 寅二郎
(本会理事)

六、「大学の自治の由来ならびに本質」についての誤認が原因となつて、日本の国立大学なかんづく東大には、いろいろの欠陥を生んでいった。

前項までに指摘したように、東大パンフレットに見られる所の「大学の自治の由来および本質」は、中世期の西欧におけるそれに拠っているもので、日本に創設された国立大学自体の経験とは、ほとんど無縁の事柄に立脚しているために、それは根本における大きな誤認に出發したものであるはかばかであった。

しかしこの誤認は、なにも今日の東大に限って見られる傾向ではなく、明治時代に創設されたその当時から、その傾向が強かつたものと判断される。すなわち

旧制帝大といわれる数少ない戦前の国立大学(帝國大学)においても、主として人文系統の学風の中には、「学問の自由」と「政治権力」とのかね合ひについて、微妙な背馳を生むことが少なくなかった。このことはやがて、八十年を越えるそれらの大学の歴史の中で、大学の自治の問題を、必要以上に複雑なものにしてしまつたのである。

すなわち、反文部省、反政府という氣質が、学問に従事する姿勢からにじみ出てくるような内在的生命的なものである限りは、せめてそれでよかつたのであるが、それがいつしか外形的觀念的な角度に立つたものになり、ついに文部行政をも「外部」という言葉に含めた「外部」なる觀念が固定化し、その「外部」からへの介入の一切を峻拒していきさえすれば

「学問の府」が「学問の府らしく」立ちゆくのだ、という錯覚を生むまでの段階に及んでしまつた。それもはじめのうちには、反文部省、反政府という、時の行政および政治に対するていどのものであつたが、時が経つにつれて、「現存のもの」「既存のもの」の価値を一応は否定することこそ、真に「学問らしき学問」である、という自然科学的研究における通念から(ここでは自然科学分野でのそのような姿勢を、人文科学にもそのまま適用してしまふという、学問上の誤りを更に犯すことになるが、いまはそれには触れずにおく)、日本の伝統の軽侮、さらには、自ら服務と忠誠を宣誓していた國柄そのもの「古い表現をかりれば日本國體ならびに天皇」についてまで、反抗的・否定的な姿勢へと移行していったのである。

それは明治末年から大正に及び、さらに昭和前期に至るあいだ、徐々にその反日本的性格を濃化していった。とにかく日本の国立大学の前身、当時は帝國大学といつたが、それはまぎれもなく、天皇の意志によつて成立を見ていた国立大学であつたにかかわらず、いいかえれば、天皇および「國」ならびに國民からの全幅の信頼によつて「与えられ」「許されていた」「大学の自治」であつたにかかわらず、一部大学にそれについての自覚と責務感とは、残念ながら年とともに稀薄になつていった。そして、以上述べたような現実的具體的實在的な「大学の自治の源泉」は、当該大学人によつて別に考え出された抽象的觀念的な「ただ大学の自治という名がついているだけの權威」の前に、全く「くらひ負け」した感じになつていったのである。この傾向は同時に個々の教授たちの思考の中でも、

同じように天皇の官吏、國の官吏としての自意識を自然に減少させ、「真理の探求」という神聖な仕事に従事しているがゆえに「学問の自由」があるとなし、「学問の自由」がある以上はその必然的結果として反文部省、反政府、ひいては反祖國などの立場までが、当然にその人々に認められて然るべきだ、という觀念を生んでいったのである。それは無意識的のこゝろであつたかも知れないが、人間のいへば一種の増長慢のたぐいであり、エリート意識に立つ独善さに近いもの、ともいえたと思ふ。とにかく、一部の人文系学者は、自己の立場についての自意識を、そのようなところに固着させてしまつたようであつた。

こうして昭和の後期になると、さきの第二次大戦の全面敗北を迎へることになつたが、アメリカをはじめとする占領軍は、日本軍隊ならびに國民の、強烈な愛國心を骨抜きにする政策を打ち出してきつた。その時、この東京帝國大学を中心とする旧帝大の人文系諸学者達は、どう振舞つたことであろうか。資料を繙くまでもなく、いまだに我々の耳目に生々まじり当時の印象が残つてゐる。すなわち日本國體が占領軍によつて否定されたその瞬間から、「待つていました」「これで日本も近代化した」「我が意を得た」と欣喜雀躍したものだが、その中に何人かおられたのではなかつたか。それは

目次

大学の自治と学生の自治について

小田村寅二郎 (1)

比較山西教寺合宿の記

(8) (6)

合宿・和歌創作より

思われてならない。すなわち、団体ならびに日本の伝統を意識的・信念的に軽視する思想が、「大学の自治」の内面に温存されてきたからこそ、敗戦による政治変革を、信念的姿勢で喜んで迎えたのだ、と見る方に重点をおくことになるわけである。そう判断する理由については、戦前の東大における該当学説その他を引用すればよいわけであるが、それよりも、現実のいまの東大を見て、過去をそのように見た方が、いまの東大を理解し易くなる、ということも決して無視してはいけない理由になると思う。

今日の東大は、旧帝大のように天皇のもとにおける国立大学ではないが、くりかえし指摘するように、まぎれもなく文部省管轄下の国立大学である。その教官たちの中には、戦前にもましてこのごろは、反文部省・反政府の言辭をくりひろげること、きわめて激烈で、そのほか、数年前の安倍、昨年の日韓などをはじめ、政府のなす内政外交万般の施策に亘って、なにか事がある、よく有志教官という連名などの形式や、取ってつけたような一時的その場限りのサークル名を入れて、大ぜいの国立大学教官たちが堂々と「反対」の声に加わることが多い。その声名文を読んでもみると、明らかに保守政党的な立場を露骨に出し、言論の自由についても、それが政治活動を意味するところがきわめて多くなった。時には社会党あるいは共産党の代弁をしているのかと思われ、ほとんどの「政治的」であることも多い。また、時には反米・反帝などという政治所見をまるだしにし、中共・ソ連を代弁して、自国の政府に物を申し立てるようなものに出会うことも、決して稀ではなくなってきた。

このように「大学の自治」を宣言しながら、自分らは、こうした政治的発言、政治的声明、さらにはデモ参加、集会宣言などを勝手放題にやりながら、しかも「大学の自治」に文部省や政府が物を言うことは罷りならぬ、というのであるから、今日の「大学の自治」は具体的に見ても、明らかに祖国に対する反逆の立場を意味することが決して少なくない。「大学の自治」とは「反祖国・反國家の前提に立ってよろしいもの、学問は自由だから」という意味にまで「政治色」を帯びてきているのではない。

こうした今日での「大学の自治」論である以上は、この現実的な学内の実相と一部の教授たちの反祖国意志を不問にして、ただ単に「大学の自治」は大切なもの、と、いって抽象概念としての「大学の自治」を論じて合っても、大して意味がなくなってきた、と思う。

もし万一本に共産主義革命が実現するような事態が起きたらと考えてみられたい。さきの終戦のおりに、多くの大学教官が、自分らの昨日までの人生価値であったはずの日本国体を、占領軍ともいっしょになつて否定したように、こんどは、その共産革命を実現した連中のところに行つて、同じく欣然として迎合することが窺い知れるような気がしてならない。現に東大における一部教官たちの現実の行動がそれを暗示しているばかりでなく、過去の実績もまたそれを十分に物語っていること、前述の敗戦時の例の通りであるからである。

七、旧帝大に起きた事件史は、政治の干渉の行きすぎを示すのか。それとも大学内部の行きすぎた放恣に起因したのか。

前々項(五)、前項(六)で私が述べたことに對し、おそらく東大関係者ならびに一部の読者の方からは、次のようなきびしい反論が私に寄せられるかも知れない。すなわち

「大学の自治の発生の由來について、西欧と日本との相違をはつきりと意識してかかれ、明治以前からの長い間に従うにしても、明治以来の長い間に日本の大学における思想事件は決して少なくなかったではないか。時の政治や行政が、大学に加えた圧迫をお前は、どう解釈するのか」

私は、たしかにその反問に一種あることは認める。しかしここで平面的に事件の存否と起伏を把握して論ずることは誤りであると思う。なぜならば日本でのこれらの事件史に見られる多くのケースは当初から日本独特の問題を主題としたものであつて、世界に共通する課題ではなかつたことが多かったからである。というは、その多くは、天皇についての問題、日本の歴史の把握方見方についての問題、団体についての解釈の度合についてのことなどであつたからである。たしかに、大学教官の所説や著書についてのそれらの問題に對し、政治的な発言に端を発して、いく人かの大学教官がその地位を去られたことは事実であつた。しかし、ただそれだけの点を衝いて政治が学問に介入しただけのことではあつた、という結論にはならない。

日本の帝國大学においては、明治以來

沢山の講座が設けられてきたが、その政治学科その他の人文学科において日本の國柄や天皇を理解し得るために、どれほどの熱意と真剣さが払われてきたであろうか。多くは、それらのことを以て、

単に国民的の常識であると片づけて、ま

ともに学問の研究対象として扱うことを避けてきたのが、一般的に学者先生の風潮ではなかつたであろうか、もっとも少数の学者が古くはそれに取りくんでおられたことを除いて。かりに、天皇や日本の國柄についてのことは、基本的には情意的課題であるとしても、日本人としての人間生活の信条として根幹的に深い關係をもつものである以上は、政治・經濟・宗教・藝術・哲學・歴史などの諸学の面においても、それはまともに取り上げられなければならぬ管の對象であつたと思ふ。ところがそこに十分な学問的努力が傾倒されなかつたばかりか、逆にそれを学問外のものとして独断的に決めてかかつて除外してしまつた、というその一事が実は、人文諸学の学的姿の大きな欠陥ではなかつたであろうか。いつてみれば、日本人としての心情が本格的に鍛えられなかつたということである。これでは問題が起きるのが当然であつて、政治と学問の背馳でも何でもなく、国立大学としての学問的責務感の欠如から生じた事故の連続に過ぎなかつた事件である。もし日本の大学の学風が、日本の伝統と歴史とに對して、敬虔な姿勢を持ち続けていたとすれば、また天皇親政という外國に類似例の全くない独特な文化の所産に對して、それにふさわしい謙虚な追求を怠らなかつたならば、それらの問題の大部分は、当初から起きもしなかつたであろうし、政治家や行政官たち自身の方がもつと大学に近づいて、逆に大学に教えをどう姿勢になつていたにちがいないと思われてならない。原因と結果の關係を安易に取り扱つて大学事件史をみることは間違ひであると思う。

八、研究成果を教授することだけ

八、研究成果を教授することだけ

で、「大学における教育」の使命が果たされるであろうか。

なお、東大パンフレットを読んでいまいつ気にかかることがある。それは「教育」ということについて東大当局の考えている内容が、果たして妥当かどうか、という問題になるのだが、同パンフレットは、さきに五で引用したように大学の目的に二つのことがあるとし、一つは「高度の学問の研究」であり、いま一つは「その研究の成果の教授」である、とす。後者がすなはち東大当局のいう「教育」を意味しているようだ。というのは本文中「大学における教育」ということにふれるいくつかの箇所があるが、いずれも「研究の成果を教授」することを指して「教育」と名づけているからである。例えば第二項(「学生の自治」)のところで、

「大学における教育は、たんに既成の学説なり、觀念なりを固定した権威のあるものとして教えるものではない。大学は一面で研究機関であり、そこにおける教育は、研究と一体化しておこなわれるところに、高校以下の普通教育とは異なる特色をまつている。」
とい、研究成果を教授することに、大学教育の中心があるように書く。「研究成果の教授」はたしかに大学授育の骨子をなすものでなければならぬが、そこに重点をおく、というより、それだけで教育の任務が果たされる、という考え方には、国民的立場からどうしても納得しかねる。なぜかといえば、研究成果はいわば人間の要素の知・情・意・徳・体のうちの知に偏したものであり、教育機関としての大学が、それを以て義務を果たしている、ということではできない

からである。総合的な人間の鍛錬を目指してこそ教育の名にふさわしい場となるわけである。東大パンフレットの示すところは、教育の本義の把握方において、すでに大きな欠点をもつこと以上の通りであるが、その欠点は直ちに第二の次の論述とからみあって、いよいよ大きな欠点を構成していく。すなはち、前記の引用文につづけて、書かれている次の一節では重大な問題を、こどもなげに書きながしてしまっているからである。すなはち、

「そして研究である以上、既成の権威にたいして批判的であるのは当然であって、自由で自主的な精神なしには大学の研究も教育もそもそも成り立ちようがない。」

読者各位は、この一節をどうおとりになされるであろうか。私にとつては、しかくご説の通り、とは速断し難くなる。「大学の研究」はそれでよいかもしれないしかし「研究も教育も」ということになると大変である。なぜならば、「研究である以上、既成の権威に対して批判的であるのは当然」にしても、すべての過去・現在の「既存の権威」——その中には当然に國家の伝統や民族の伝承精神、さらには現実の國家機構ならびに秩序を含み、ことに日本の場合には、天皇を中心とした民族的な心的結合などは、まづつきに「既存の権威」の最たるものに扱われるに相違ない——こうした「既存の権威」に対して、基本的に、一方的に「批判的」立場で立つこと、それがとりもなおさず「自由で自主的な精神である」ということになるかどうか、それ自身が「研究」の課題としても重大な意味を持つて来ることになる。それにしても、このパンフレットのように、「自由で自主

的な精神なしには」「大学の研究も教育もそもそも成り立ちようがない」という前提は正しいにしても、「既存の権威にたいして批判的である」のが、研究姿勢であり、同時に「大学における教育」イコール「研究成果の教授」という建て前で「既存の権威にたいして批判的である研究の、その成果を教えること」が「大学における教育」の定義だ、ということになると、そのまま見過すわけにいかない問題になってしまふ。なぜならば、大学生という年齢は二十才を前後する青年であつて、高校を卒業したからといってまだまだ既存の権威を充分に理解するに至っている者たちではない。

大学生は大学に入学して、はじめて一人前の青年らしい付き合いを認められ、社会人としての本格的素養を身につける段階にいたつたところである。既存の権威についても、自然科学の部面、純数理論の部面においては、既存の権威について一応の理解に立つた後に、批判的立場をとりながら、その研究を進めるのが妥当であるかも知れないが、人文科学、社会科学、精神科学部面の、いわば人生体験そのものを全体的に研究対象とする諸学においては、人類が積み重ねてきた精神遺産を、一生をかけてもなかなか理解し難いものである。ことに現代の世相のように「國」を思うことを、なんとなく軽蔑するような世相や学風が流行するときには日本の國のよめに、大昔から國家・民族が一体となつて発展した伝統は、つい未開の封建的な古くさいことに思われがちになり、數百年にわたつて自國の祖先たちが実践してきた物の考え方、見方、感じ方などについても、それを謙虚に学ぶ姿勢がなくなる。こうした環境に学生たちをおいた上に、さらになまはんかな批

判的立場を、その学生たちにとらせることを以つて、「大学の教育方針」が定義づけられたのでは、人の子の親としての國民的立場は、全く無視されてしまうことになりはしないか。それのみでなく、学生たち本人の身になって考えても、國家民族の明日を背負う青年学徒をして、徒らにその人間的な努力を空転、磨滅させてしまうことになり、國家民族としても、人類の広い視野からみても、個性豊かな國民を世に送ることにはならないであらう。

そこで「大学における教育」が、東大パンフレットに見られる目標から、一歩も二歩も根本的に「教育」についての姿勢を正し、國家と民族の正しい発展に心を教育する、という見地に立ち返らねばならないと痛感する。それなくしては、國立大学の存立意義がゆらいでしまひはしないか。時の政府に迎合する人間に育て上げる、というような軽薄なことは断じて相違することであつて、民族の個性と情意が、どれほど人類社会ならびに世界文化の根底要素であつたか、という基本問題に関連する重大な問題である。決して軽視すべきことではない。戦前の日本では、大学の存在目標を法令で示し、大学令第一条には、
「大学ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及ビ応用ヲ教授シテナラビニ其ノ鞏固ヲ攻究シ兼テ國家思想ノ涵養人格ノ陶冶ニツトムベキモノトス」
とあつた。戦時中右の文中の「兼テ」に代えて「當ニ皇國ノ道ニ基キ」という表現になつたが、それはともかくとして明治以來八十年にわたる日本の國立大学における教育は、「國」という目標を明確に持つていたものであつた。今日におけ

る日本以外の世界各國すべてに共通のことであるが、戦前の日本もまた同じく國民にとって、「國」のためを念うということとは、人類の幸福・世界平和への祈念の基底をなすものとして疑う余地がなかった。この戦前の大学入試第一条は、いまでも世界のどこに持ち出ししても恥じないものである。戦後の日本はというと、この戦前の大学令第一条に代わって、とくに法令を以て大学の教育目標を明示したものは見当たらないが、せめて求めれば、昭和二十二年、戦勝國の占領中に公布された学校教育法の第五章、大学の項の冒頭に、同法第五十二条(大学の目的)として「大学は學術の中心として、広く知識を授けるときに、深く専門の學芸を教授研究し、知的、道德的及び应用的能力を展開させることを目的とする」と記されてある。占領下の作文であるにしても、大学における人格形成の目標は全く空漠化したものにさせられてしまった。東大パンフレットは、大学の目標をここに置いてつくられたものであろうがこの東大パンフレットと比較して、同じ昨年のものであるが、アメリカのプリンストン大学学長ロバート・F・ゴヒーン氏が「大学に対する学長の責任」と題した一文で

「第二次大戦後の現代では、國家の安全、國民の安全、經濟の力と動き、世界各地でアメリカが担った國際的な任務の達成など、いろいろな理由により、優秀な人材や進んだ研究成果を生み出す中心としての大学の役割が、ますます重要になってきた。」(日米フォーラム一九六六年一月号)

と云って、國家と國民同胞の安全ということ、心の中にしっかりと祈念することが、大学の役割の第一に掲げられて

るのが、ひどく對象的に見つけられた。そして同学長は、その文中で「大学における教育」ということにも言及して「教会以外の施設として、大学は人間を導く唯一の力ではないにしても、最もすぐれた力強い存在であり、人間の潜在能力を正しい根拠に基づいて導いた生活、ごたごた、一時的な行きづまり状態を越えた目標に向かって進ませる働きをもっている。」

と、大学を「教会」の教育的・宗教的機能と比較させるまで、もっていきこうとするこの学長の教育的気魄は、まことに同感を禁じ得ないところである。「教会以外の施設として、大学は人間を導く唯一の力ではないにしても、最もすぐれた力強い存在」に、日本でも意図してもらいたいものである。こうした教育的情熱を離れて、大学教育そのものを考へてきてしまっているところにも、重大な誤りがありはしないであらうか。

九、「大学の自治の精神」の抛り所とその運営の心構えについて

東大当局が、さきに東大パンフレットにおいて学生に訓示したところは、要するに「学生の自治」は「大学の自治」と同じ自治精神を持つていてくれなければ困る、ということであった。パンフレットのいわんとするとこちらは、おそらくその一言に尽きるといってもよいほど、そのことは重要性をもって述べられていた。その論法は、そのまま日本の國ならびに國民から、大学当局に対して寄せる基本的な要望でもあるわけで、国立大学における「大学の自治」は「國の自治すなわち國の自主独立」と同じ精神を持つていてくれなければ困る、ということである。

学生の自治は、大学当局によってその教育効果達成のためのよき方法ということとで、学生に対して与えられ許されたものであり、それゆえに、大学当局は、「学生の自治」が「大学の自治」と同一の精神と指標を持つべきことを訓示し得ているわけである。

それと同じく、国立大学における「大学の自治」は、日本という「國」(その中には建國以来祖國のために死んだ無教無限の祖先の意志もまた含まれていると見べきもの)および國民の信頼に依ってこそ、自治の存続が許されるべきものであるがゆえに、それを逸脱して大学の指標を定めてよいはずはない。従って当面の政治・行政にだけ協力するかは別にしても、國の独立のために情熱を傾けることは、學問に取り組む以前の要請事であり、同時に革命によって百八十度も國の性格を變革しようなどということは、國ならびに國民から「与えられ許された自治」の限度を、はるかに逸脱した感覚であると指彈してよいと思う。それは「政治と大学」などというもったいぶった問題以前の國民的課題である。そこに現在の日本における「大学の自治」ならびに「学生の自治」の奔放無軌道な是正する基準がおかれるべきであると思うし、その努力を怠って「大学の自治」を運営しようと思志することは、国立大学教官としては二重人格的な立場に陥ることを反省しなければならぬ。

しかしこのような「國の自治」「自主」「大学の自治」→「学生の自治」における自治精神の統一の指標を考へる場合、われわれは、國家というもののもつ

人類的文化的な役割について、いまいちど謙虚に心を定める必要があると思う。なぜならば、日本の人文科学における學問の世界的通弊として、いまだに國家の文化価値がいまいちのままにされておき世界・人類といえは大きく、國家といえは狭いもの、というつまらない表面判断が、意外に人々の心を与え、社会といえは近代的で、國家といえは封建的なものに感ずるといふ一種の錯覚がいまもって是正されないでいるからである。

それと同時に、最近ナショナルリズムの復興が叫ばれるにつれて、青少年のあいだにも、ようやく愛國の心情が正確に把握され出して来た傾向は、まことに喜ばしいことであるが、「日本人としてナショナルリズムを自覚する」ということは、あわせて祖先ならびに祖先が生命を捧げた日本という具体的な國の生命についてまでの自覚を持たなくては到底意味をなさないし、國は愛するが天皇については、切らぬ、などという、およそ國と文化とを切り離して平然としているようなナショナルリズムでは、とても中途半端で日本におけるナショナルリズムの意味にはならぬことを気付きたいと思う。われわれ國民は、こうした点についても、やはり謙虚に考へなおしながら「大学の自治」をはっきりさせていきたいと思う。

そこで、これらの課題について、くわしい論述のスペースもないので、ここでは項目的な羅列にとどめるより仕方がないが、小論の締めくくりの意味で左に三項だけ整理しておきたいと思う。

一)個人と國家は、文化における補足概念を構成しているもので、決して矛盾概念ではない。文化の基底は個人にある

と同時に、ことに同一國語を語り同一の風土と習慣の中に生死してきた伝統的な民族国家の場合、国家もまた、文化の具体的な基底をなすものとなるそれを離れてその個人と文化とは結びつかない。その場合、人類・社会・世界というような概念をよく使うが、実はそれは全く別範圍にあるのが民族国家であって、文化といつても、世界文化とか社会文化とか人類文化と名づけてみても、いずれも抽象的な概念の域を脱しない。いつも文化の具体的な内容は、民族国家を基底として生成発展してきたものに外ならない。それゆえに文化という角度から見ると、世界・人類と民族国家とは、同一範圍における大小の差を構成し得るものではないのである。このことを決して見のがさないことが大切と思う。従って

比叡山西教寺合宿の記

昭和四十一年三月十五日より十八日まで、三泊四日の日程で比叡山の麓、大津市坂本の西教寺で、夏の雲仙大合宿を目ざして幹部学生約四十名による合宿が行なわれた。この合宿が具体的に決定されたのは、昨年十月十九日に中心メンバー十名が国文研十周年記念パーティに出席すべく東京に集合した時であった。この時、場所を関西、日時は三月十五日前後三泊四日と大体の事が決定され、具体的な事は関西の学生が中心に決めることになった。合宿の内容をどんな風にするかで意見が分れた。が、結局運営は学生を主体とし、形式は大合宿と同様にする事であり、夏の大会宿の中心メンバーと

「大学の自治」が、その存在目的を考へる場合も自国の伝統と独立を軽視してしまつて、いたずらに人類・社会・世界などを目的概念に取り上げるとすれば、それは明らかに文化的な誤りを犯しているのと見るべきである。両者を両々相まつてその指標の中に両立可能な概念として取り上げることこそ「大学の自治」指標にならなければおかしなことである。

なる人であるから各人相互の意思の交流を重視するという事になった。人選は十一月のゴールデンウィークを中心に各地で行われる小合宿の後決定することになった。その後東京では明治神宮、関西では京都日向大神宮、福岡では太宰府天満宮、鹿児島では霧島神宮と、各々新しい友を求め、友情の絆を強める為に力強く地区別合宿が行なわれた。

「大学の自治」の場合でも、「学生の自治」の場合でも、その内部で考えられることと、その外部との見解に、意見の齟齬を来たすことはありうることである。そうした場合に、集団的圧力をもって対決するのが今日の流行になっているが、これは、学園の府にあるものとするべき道ではなからうと思ふ。学生自治会が、教授たちを監察同様に

同時に各地区学生間の意思交流を計るべく「雄叫」という小冊子が一回目は東京、二回目は福岡を中心として作製された。国の内外、問題の多かった昭和四十年も押つまつた十二月二十七日、太宰府飛梅会館に幹部学生十名が集合して具体的なスケジュール等いろいろの問題がてきば

燃足するなども、交渉の態度を逸脱したものであるが、大学側が、全国大学の意見をとりまゝとめて「自治問題」での態度を決定するような場合、「東大当局を中心として全国国立大学協会の総会が六月ころ開かれ、その問題の結論を出す」ということであるが、数に物をいわせて権威づけようなことをすれば、それも同じ、同じ疑問を感じさせる方法のような気がしてならない。この世の中では、正しい見解といふものは、きわめて少数者の同意しか得られない場合が決して少なくなく、多数なるがゆえに正しい結論とはいへない場合も多い。「大学の自治」というような問題を審議する場合も、国立大学の人たちがその結論を出す資格を持つてゐるのではなく、全国民が「その陣」をきめる資格者であることを忘れて

きと決められた。今年に入り京都で合宿地とのこまかな交渉、案内文の作製、人員の確認等が忙しい試験期のあいまをぬけて行なわれた合宿の始まる前日の三月十四日に鹿児島大の川井先生と学生十名が合宿地に行き台宿の準備に取りかかった。最終的に日程表を作製し、各スケジュールの責任者を決定した。前日まで中心になって合宿に力を注いで来ていた京大の井上、溝江両君が家族の不幸の為合宿に参加出来なくなったことは合宿の前途に暗い影を投げかけ、人生の生死動乱を目の前に見せつけられる思いがした。又専任事務員が一人しかいない為、全員に仕事が生担がれ負担が重くなったことは確かであるが各人が自分がやらねばという気になったのは、不幸中の幸であつたと言えるであらう。

まった。国歌斉唱に続き京大の稲島君が学生を代表して挨拶をし、鹿兒島大・川井先生が岡文研を代表して挨拶をされた。日本の南の端、鹿兒島からお忙しい中をおいで下さった川井先生の御言葉は殿しい中にも先輩の優しさがあつた。我々が日頃経験している教師と学生という立場ではなく、同じ日本人同胞として共に考えてゆこうという姿勢で語られる言葉は我々の若い心に直接響いてきた。開会式の後、中央大の磯貝君のオリエンテーション、この比叡山合宿に至るまでの経過や心構えなどの説明があつた。続いて京大粟本君による諸注意、特に西教寺は重要文化財等の貴重な歴史的遺物が多いので注意をうながされた。三時から机を長方形に並べかえて自己紹介にうつつた。互に顔を見合せながらこもごもの思いを述べていった。合宿に来るのが不安で一日前になってやっと決心をして来た、と言う者もあれば、学園内の混乱で自分までがすさんでゆく様な気がして、それを癒し新しい勇気を得る為合宿が待ち遠しかった、と言う者もいた。始めは皆緊張して言葉も少なかつたが、進むにつれなごやかな空気になり活発に発言するようになった。続いて各班に分かれて個人的接触を深めていった。班は五班に分け各班八名平均である。始めて会つた者同士という場合も少なかつたが、ずつと前か知り合つていた友の様に思つた者が多かつた。五時から寺側の説明と寺の内部の案内があつた。今回の合宿では前もって和歌を作つて来ることになつてしたが、締切の時間になつても出来ないうらしく、あちこちで苦吟している姿が見えた。夜に入り、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創生」の全体輪説が始まつた。

従来の輪説形式と違つて、あらかじめ各々の部分を担当者が読み、本に則して自分の感想を発表し、それに関連して各自が自分の思や疑問点などを述べるといふ形にした。輪説中「自他の二境を分たす」という言葉と「内に支まざる同胞生活」という言葉についてさまざまな意見が交された。我々が真剣に考えねばならぬ問題がこの二つの言葉の中に集約されているような気がした。班にもどり輪説



(慰 靈 祭)

を続けたが、「大学生でありながら国家の事を真剣に考えた事のない自分がかんざしい」「自分は自己完成といふことに力を注いで来たが果してこれでよいのだろうか」「私は他人を意識していか何事もなすことはできない」などといつた率直な意見が出て来た。夜十時に日程が終つた。遠方から来た者は夜行の疲が出たのか早めに休んでいたようだが、事務局では明日の和歌相互批評に間にあ

すべく夜おそくまでガリ切が続いていた。第二日・十六日、西教寺に泊る者は皆朝六時半から三十分開寺の本堂でお務をしなければならぬ。眠い目をこすりつつ本堂に小走りに集合した。春とは言えまだ寒さの残つている本堂で三十分も正座をするのは寒ではないが、一日の出発にあたり気持をすっきりさせるには大変良い事である。時折説経の声に混り鶯のさえずりが聞えて来るのも人里離れた寺ならぬ事であつた。続いて御製拝誦、挨拶。

学生の研究発表は最初に長崎大の森重君が「日本の労働運動」と題して、専門の分野からさまざまな問題を我々に投げかけた。労働運動の歴史、政党との関係などを整然と説明してくれた。次に九大の古川君が「中共の対日政策」について研究発表をした。「人民日報」「紅旗」などの資料を中心に、中共の世界革命戦略特に中間地帯論についての説明があつた。日本の国防問題と関連して議論が進んだが、関心の深い者の発言にかたよる傾向があつた。最後に鹿兒島大北島君が「日本人の国防に対するエゴイズム」という研究発表をした。彼は「大部分の日本人は外国の青年の汗と血で日本の安全が保たれている現実を無視した言動をとつている」とのべた。末巻とはいえず学生が学校で研究している事を中心に、特に社会科学の分野での研究発表が多く、借りものの知識ではなく堂々と自分の意見を発表する態度は頼もしい気がした。神戸大の黒岩先生は比叡山の僧の勢力争と現代の政治運動の動きを対比させながら歴史の中に生きた人物の言動を生々と伝えて下さつた。午後に入り山田先生が和歌についての講説をされた。短時間

ではあつたが和歌創作の基本についてと相互批評のやり方を指導された。自分の感動を素直に正確に客観性を持たせて表現すること、批評する場合相手の気持をくみとる努力をすることなどを語られ、「心主詞從」ということを強調された。続いて班別で相互批評を行なつた。自分の思いを正確に和歌に詠み込むことの難かしさを学びつつ、班員の心の交流が行なわれた。一見無口でおとなしそうな人が情熱的な歌を詠み皆を驚かさすような事も度々あつた。それが終り比叡山登山頂上で行つた。ケールが登るにつれ琵琶湖がその全景を現わして来た。太陽の光線の加減で、ある所は青く又ある所は緑色に見え、遠くの方は春霞にかすみ、なんとも言えない景色であつた。歴史を秘めた堂々たる根本中堂で僧の話を聞きうつつと暮る杉木立の中を散策し、しばしの間自然の美しさをしみじみと味わつた。夜に入り、小田村先生が個人と國家について講説をされた。我々は家族までは関心が及ぶが何故その範圍が國家まで拡大できないのか、今まで二千年にわたり日本の國を守り育てて来た祖先にまで心をはせることが出来ないのか、など激しい言葉で我々の盲点を指摘された。夜九時から我々の合宿では始めての試みである慰霊祭を行なつた。全員で境内の一角を清掃し、しめ縄を張り祭壇を設け篝火を焚いて準備した。全員が黙禱に始まり、祝詞の奏上、一人一人による参拝と敬肅な儀式が進むにつれ、我々にとつて始めての体験である慰霊祭が各々にさまざまな感慨を呼び起し、この美しい日本がただ存在するのではなく、幾多の先人により守りはくくまれて来たのだ、とい

う事を実感した。

慰霊祭の後、澄み切った空に宝石を散りばめたように美しい星空の下で、若々しい命の如く明々と燃える篝火を囲んでささやかな酒をくみ交し、勇壮な「進めこの道」を川井先生の指導の下に高らかに合唱した。

第三日・十七日、川井先生の講義、マルクスエンゲルスの「共産党宣言」を用いて共産主義の根本的批判をされた。一字一句をおろそかにされず、とかく軽視

合宿・和歌創作より

中央大三 磯 貝 保 博

われも又この日の本に命受け神の御前に参るうれしさ

かより火にうつしだされて友ら皆神の御前に手をあはしいのる

重細重大三 岩 越 豊 雄

大きな杉の木の間にいるはしく朱ぬりの御堂日にかよやけり

うすぐらぎ御堂の中にもえつゞく消えずともしびほのかにゆらくも

かすかなる光をうけてふくよかに文珠菩薩はしづかにあます

献進歌

我がいのちがそめならず日本をうけつぎ守りし祖思へば

九州大ニ 古川 修

先生の献進歌詠まれる御声は冷えこむ夜にろうくんと響く

空は沓え星の光は美しく御霊祭りの夜にふさはし

式終へてかより火囲み友とちとますらの歌高らかに歌ふ

かより火は風にあふればちばちと勢ひさかんに燃え上るなり

しがちな助詞や副詞に充分注意を払われた講義は、読書の基本的なあり方を改めて教えられる気がした。続いて伊勢神宮の幡掛先生が、伊勢神宮は単なる宗教とは違ひ國の宗教とも言うべきものの中心である。日本は稲作を中心とし、上に天皇を戴く神ながらの國であると説かれた。皇から学生運動についての討論にうつった。先づ現在授業料値上問題にその端を発し、学園封鎖、警察官導入という異常な事態を引きし、未だ收拾のついていな

京都大ニ 福 島 義 治

美しき星空のもとますらをが集ひて祖先の御霊をまつる

つたなかる我もまことの日の本の道をいはずにきはめんと思ふ

長崎大ニ 森 重 忠 正

御魂をば祭りし後にそら見上げ星美しと友はいふなり

火をかこみ酒くみかはし師の君と語りて歌ふ一夜なりけり

鹿児島大ニ 黒 木 清 亜

みことなる杉の林を見下しつ比叡の山にわれら登りぬ

深緑にかこめる流るゝ谷川の清き流れに見入りけるかも

みわたせばはるか広がる近江の湖古人の歌のしのばゆ

ゆたかなる近江平野に広がりし町の白壁かよきてをり

献進歌

岡山大ニ 伊 藤 三 樹 夫

國のため世々につくせし人々の御魂しのびつゝ静かに祈らむ

吾ら又御祖のいのちにつながらりて吾らの御國を守りつがまし

い早大紛争について、早大の今林君から説明があった。学内サークルの動き、政党との関係など、苦心して調べた報告書を説明する彼の顔には、神聖な学園を混乱に陥れた一部学生運動家、及びそれをバックアップしている指導者への激しい憤りがあり、とうかがわれた。早大紛争は、我々が新聞テレビ等で知っている単なる学費値上反対運動ではなく、日共が革命の利器として、学内の混乱を上手に利用して日共細胞を用い、反日共の失脚を図り自治会を一举に民青が独占できるように紛争を拡大したものである、との報告であった。又長崎大の森重君は昨年新聞紙上を賑わした長崎大学学園問題について説明をした。一部の過激な学生運動家によって、学園の場である大学が乱され、学内のいたる所に赤や青の毒々しい看板が立てられ、授業時間中すらスピーカーでアジ演説をする風景があちこちに見られる。この異常な事態を異常とも思わなくなった一般学生に今後どう我々が対処してゆかなどさまざまな問題が討論された。今日、自分の学校では何も問題が起ってないから学生運動に無関心でいてよいなどと決して言えることではない。統一して小田村先生から「国民同胞」の読み方の指導があった。

これは普通の機関紙ではなく、いつの時代にも通用する立派な文章のみがのせてあるのだから心して読むようにとの御指摘があった。夜に入り連絡会友が持たれた夏の大合宿まで一人でも多くの友を得るにはどうするかという問題が討論された。地区によっては読書会や和歌相互批評会を持ったり、班ごとに通信文を出しあうなど具体的な計画がなされた。

第四日・十八日、朝、小柳先生が「教育思想家としての伝教大師」と題して講

議をされた。乱世の中を苦しみながらも誰々しく生きぬいた伝教大師の言葉は胸を打つものがあった。「凡そいかなる教育理想が説かれ、その内容が学問的に精微であっても、之を人間生活即ち具体的には国民生活の上に実現すべき体験的基礎を欠く場合には個人的思想になり終るべきである。」との御言葉は我々が学問とてであろうと思われる。

二回目の和歌相互批評は緊張した合宿地での作の為か立派なのが多かった。班員同士が親しくなったせいであろうか、かなり厳しい批判が互になされた。午後になり、こもこもの思いを感想文にしたため、閉会式を行なった。国歌斉唱の後、京大の栗本君が力強く閉会の挨拶をし、小柳先生がお、らかに生きて下さい、と述べられた。最後に皆で「螢の光」を歌って全日程が終了した。さまざまな思いで自然に涙が出て来るのを禁じ得なかつた。閉会式後、梅の咲き匂う境内で記念写真を写し合っている姿があちこちに見えた。夏の雲仙での再会を約し新しい希望を抱いて思い出深き西教寺を後にした。(京大生 福島義治記)

編集後記 二月号から三回に亘って、小田村理事長の「大学の自治と学生の自治について」を掲載しました。日本人としての生き方・文化の道統に思ひを潜めるものにとつて、現実の国家政治の問題は大学のあり方に行き当らざるをえないと思ひます。紙面の都合でかなりのものを割愛してをりますが、各界の御批判をいたゞければ幸甚です。春休みを利用して行はれた西教寺合宿、また女子学生による薬師寺合宿も大いなる成果をのこして終了しました。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町3 宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

農山村に在って

— その荒廢の現状と問題点 —

農村問題というと、マスコミの上では、大たい観点が固定化していて、三ちゃん農業・嫁と姑・嫁の払底・農婦病・兼業農家の増加・難農難村特に若者の離村・非文化的の生活等々であり、少しく経済的視点を加えると、酪農・協業協同化・耕地改良・構造改善・工場誘致・米価値上げ等々であり、外に行政の見地から町村合併、産業道路の開発・新産業都市の建設などを挙げる事ができよう。

どの問題をとっても、およそ人間の生活の不幸にかゝるものであるから、無論ないがしろにはできないが、その現われ方や取扱いがひどくばらばらで、そこには何か根本的な欠陥錯誤、あるいは人間観の誤謬というか、人間不在というか、不毛空転を危惧させるものがある。

わたくしは、いま地方の一都市に住み山村の片隅に老母の留守する一茅屋を持つているので、時々老母の安否を気づか

って帰省するのであるが、その都度今日の農村の荒廢ぶりに慨然たる思いを重ねている。それは決して経済的不振のみによるものではない。

冬、雪にお、われた山野の冷えん、した眺めは、今も昔も変りはないのであるが、今日見る荒涼さは、何か心の底まで冷え切ってしまったような趣きがある。

農繁期、さん／＼たる陽光が注いで緑したる中で、青稻の波のさや／＼渡る風景は、わが少年のころと同じであるが今日たまたに田んぼのあぜ道を通ると、無人の境をゆくようなたよりなきを何となく感ずる。昔も春から夏への農事の最盛期には、昼げのあと、きまっていたいつ時の昼寝をしたから、われわれ少年が水泳に天竜川に下るころは、広い水田地帯に

人気がなかつたが、そのころかかってなかつたわびしさが、今日野面にちら／＼人の姿の見えるときでもきままつてつきま

うのである。

その理由はいったい何であろうか。わたしはかつて農村問題とは、そのまゝ、人生の問題であると言ったことがあるが、いまもその考えはかわらない。農村問題という、何か限定された、対症療法で何とかなりそうなものとの安易に考えがちであるが、そんなものではない。人生のごとく複雑で不可説である。従って今日の農村のわびしさ味気なきの由って来るところも、複雑で容易には解きかた

いものがある。

しかし、先ず第一にあげられることは国民的連帯感の徹底的破壊の中においてあるいはこれとともに、村落共同体としての実質が、善かれ悪しかれ、崩壊し去った点にあると思う。

かつて農村生活においては、重要な節目(ふしめ)であり、また歡びの日でもあった村祭もお盆も、今日ではたゞ曆の上にならぬ日があるというばかりの、また形ばかりのものとなって久しい。

今日農業技術の発達には、作物のできを安定させ、年の吉凶をさほどわかつたなく

なつたというものの、冷害や早魃の憂いを断つには至らず、作物ばかりでなく人命まで大量に奪う洪水の危険は、むしろ昔以上である。

その地の人々が心をあわせて、豊穡を祈念し、また感謝する行事は、今日も亦その意義を失なっていない。神祭る昔の手ぶりは、人々の心を結びつけるのである。クリスト教徒なら、感謝祭において

同じ気持を捧げることが出来る。

生活の合理化・主婦の労力の軽減など

いう名目によって、農村の若者たちは、老若男女の歡びを奪い、同時に農村の荒涼化を進めて、農家への嫁入りを忌避させ、自らの首を締めたのである。

第二に、今日の農山村の衰頹を来した

ものとして、在村青年の荒廢を挙げねばならない。今日の農村における最大の貧困は、青年そのものにある。

今日、農村の中学校を出る素質頭脳の比較的优秀なものは、普通科の高等学校に進学し、普通科のみならず職業を主とする高校においても、ほとんどその者が、またその中の比較的優秀なものに残らずと云つてい、

ほどに、大学に進学し、また都会に就職して農山村に止まることが

ない。勿論、それにはそれなりの理由は充分であるが、いまその理由を問わず、現状のみを記せばかような状況である。

従つて農村またはその地方に止まる青年にのみ、農村疲弊の責を負わせるのはあまりにも酷に過ぎるのであるが、わたしもその責を負う一員として、あえて直

言するのである。

農村において、あるいは農家を負うて

わが家を盛りあげ、ひいてその地域のた

目次

農山村に在って……………	宮脇昌三	(1)
愛国者の日……………	戸田義雄	(2)
比叡山合宿・感想文……………		(5)
日羅のこ……………	桑原曉一	(6)
☆ 同胞歌壇		

めに何か為さんとするとき、容易ならざる困難に逢着せざるをえぬ状況は、わかりすぎるほどにわかるのであるが、その為めにこそ若者は手をつなぎ、研究意欲を燃やし、地域の適切な指導者を自ら選んで研鑽し、協力して前進せねばならぬのである。

今日の農村青年の最大の不幸の一つはよい指導者を得ることが殆んど不可能でかれらに声をかけるものは、何か下心ある政治屋の触手かコミュニティズの流れの末端の誘い以外にはない。

わが郷土を精神的にも物質的にも盛りあげるために己を空しうして研究努力するかわりに、かれらは原潜寄港反対の署名集めに狂奔する。保育園の設置というような村民の支持を得る運動にしても、そのやり方は、あたかも自由労務者が役

所に押し寄せて年末手当を要求するがごとくで、そこに青年の熱誠もって訴えて相手を感動させ実施に到るという妥当な方法を用いない。

篤農とも言うべき技術ある青年はまあるにしても、かれは自己の目前寸分の利益に汲々として、相共に農村の今後を開拓しようとする志に欠けている。

かつて陶淵明は、田園まさに蕪(あ)れんとするを思い、帰去来の辞をもって帰郷した。そこにはわが心を慰める「親戚の情話」があり、春を告げる農夫があった。

今日の農村は物心ともに荒廃せんとして、ある。逆に五斗米を求めて故郷を棄てんとする状況下にある。(執筆時、長野県松本志深高等学校教頭・現、岡谷高等学校校長 宮脇昌三)

愛国者の日

戸田義雄

今、本学(国学院大学)の日本文学研究所に、ハーバート大学神学校ドクターコースのハンツベリ君が研究にきている。昨年の四月十九日、彼の家に私共夫婦は晩餐会によられた。大抵、夕食を共にするのは、土曜か、日曜のことで、この日は月曜日だし、はておかしいとは思

ったが、別に理由も聞かずに済ましてしまった。その後、アメリカの話をするように依頼されたことがあって、資料を整理

していたら出てきたものがあり、はっと気付いた次第である。私はうっかりして忘れていたが、四月十九日は、「愛国者の日」であった。

アメリカ独立とは、イギリスの国王指令による代官の支配を脱して、アメリカ本土に自分からの政治支配を確立したことを意味する。そのために、当初、農民を中心とする義勇兵士が結束して立ち上り、イギリス駐屯軍を打ち破った。この

斗いは、アメリカ東部の州サマチュエッツにおこった。それがやがて、全米に戦場を拡大するに至るのであるが、そもそもこの独立戦争の発端は厳密には何時何処でかと言うと、ボストン郊外の、アーリントン、レキシントン、コンコードにおいてであった。時は一七七五年四月二十日である。その前の晩、一人の愛国者が徹夜で、イギリス駐屯軍の動勢を監視し、合図によって、馬をはしらせ翌二十日の黎明に、上記の村々に警鐘をならして、義勇兵士にイギリス軍の来襲をつげたのである。彼の名は、ポール・リビア、職業は銀製品屋、今も彼の家は、ボストンの港に近い高台の一角に歴史的建造物として保存されている。内々に、ボストン駐在のイギリス駐屯軍がアメリカ義勇兵士を襲うかもしれぬと言う不穏な空気があり、いよいよ今日明日あたりが危いと言う時、ボストン市民で秘密裡に自発的に動き出した内偵と通報者が彼だったのである。彼は友人と示しあわせ自らは、ボストン市とケンブリッジ市の境界を流れるチャールス川の対岸にあって、馬に乗り、何時でも馬を走らせる待機の姿勢にであった。若し、イギリス駐屯軍が、行動を開始し、陸上から行くようだったら一つのランタンの明りを掲げよ。若し水上から行くようだったら二つの明りを掲げよ。場所は、今日もオールド・ノース・チャーチと呼ばれているその教会の塔の上、と言う打ち合せであった。

案の定、しるしのランタンが教会の塔の上にかげられた。チャールス川の対岸

で待機していた彼は、この報らせをうけて、すぐ一大事と馬をはせた。これが四月十九日、夜中近くのことであった。彼のしらせは、翌二十日の夜明け、村々の農民兵に伝わった。遂にコンコード川をはさんで、四月二十日夜明けに両軍対峙し、遂にアメリカ義勇軍は最初の勝利をおさめるに至ったのである。アメリカ人にとつての、輝かしい独立戦争の勝利は東部の州のコンコード村における戦勝にはじまる。その戦勝は、実にボストンの一町民、ポール・リビアの愛国的行為による、と言うことから、四月十九日は愛国者の日として永く記念せられることになったのだ。

私が、一九六三年六月、アメリカに別れを告げる時、ボストンで親しく交ったハラデイ夫人から記念品をおくられた。元来、彼女は家内の私的な英語教師だったが、家内を通じて相識るようになった。スタンフォード大学出の歴史の好きな女性で、私がまた歴史が好きだと言うので話があった。彼女は、薄いアルバムで、ボストン記念帖を作ってくれたのである。お世辞にも上手だとは言えぬ体裁のものだった。

表紙の裏には、「よき友、戸田さんへ何時までもボストンの思い出を持ってくださるでしょうね。ジャネット・ハラデイ」と書きこみ、ボストンの町で普通どこにでも売っている絵葉書をはりつけたのであった。ただ違うのは、一々、自分のペンで説明が書いてあることである。殊に、ポウル・リビアの絵葉書をはった下には、ヘンリー・ロングフエロの「

リビエアを讃える詩」を黒いインクで書いてくれた。

お聴きよ、私の子供達よ。

お前達は、ポール・リビエアが夜中かけて馬をさせた

あのことに耳を傾けるでしょう。

時は、一七七五年、四月十九日

かの有名なあの日、あの年を記憶して

いる人は

今は生きていない。

(拙訳)

にはじまる、子供のための詩である。作者のロングフェロウは、十九世紀、エマスの四つ年上であって、ハーバート大でスペイン語とフランス語を教えた有名な詩人だった。その彼が、「子供に、尊い歴史、尊い先人の偉業」を語りつこうとしたのであった。

「お聴きよ、私の子供達よ」

この呼びかけは、正に歴史の継承を目的とした生々しい声である。そうして、又そのことを、手づくりの記念帖に書き込んで、帰国する異国の友に、「己が国の褒らざる思い出」としておくってくれる

「アメリカの市民、ハラデイ夫人の心情もまた、「歴史の継承」の系列に位置する

と思われ。更に又、速く、異国日本に勉強に來ていて、何かと不自由な中を私共を招いて夕食の会を、かの記念すべき、「愛国者の日」にひらいたハンツベ

リー夫妻の心境もまた、祖国の歴史を祝いつつ、その伝統の継承に参劇するもののようにうけとれる。特に、この日をうたわず、暗黙のうちのことをすすめた彼

らの心根は心にくいばかりである。

戦端をひらいて、初の勝利をおさめた

コンコードは、樹々の深い、実に美しい

郊外の住宅地で、秋の紅葉した頃の美しさは、たとえようがない。日本から友達

がみえると、必ず案内することにして

たし、私自身、疲れて気の転換をはかる

時は、必ずと言ってよい程、この地を選

んだ。こゝは、私の

好きな思想家、エマ

スンのゆかりの地であ

る。彼に愛された文

学者ソロウの小屋跡

のある池(ウオルデン・ポンド)は歴

つないように美しく

且つ旧姿をとどめて

いる。

彼の小屋が建てら

れた池のほとりの土

地はエマスの所有

地を借りたのだっ

た。義勇兵士と、イ

ギリス駐屯軍が相対

峙したと言われるコ

ンコード川は、原

川の川を思わせるように、どす黒い。川に

は丸木の橋がかかり、たもとに一軒の土

産物屋がある。それも四月から、九月最

初の月曜日である国家の祝日、レイバ

デーまでで、あとは閉つて了う。橋を渡

った正面に義勇兵士(ミニツ・マン)の

銅像がある。若い農民兵が銃を持ち、腰

に牛の角をつけている。初めは何のため

の角か、わからなかったが、やがて、当

神宮勤勞奉仕

青山 新太郎

朝熊嶺はまだ見えずやと夕さを急ぐ車内に胸をどらせぬ

官川をはやも渡りてわが電車夕茜す

る伊勢市に入りぬ

皇神に仕へまつると年のはに古殿地

の落葉拾ひてぞ来し

年のはに友らと抜きし古殿地の小草

あら草またなつかしも

斎館の冬を飾りて円らなるむらさき

しきぶの実のたわなり

皇神の大み祭に仕へむと御井道の小

草抜きたてまつる

大神のみ垣の下をたもとほりみ民の

幸をかみしめて居き

時の弾薬入れ、つまり薬塗だとわかっ

た。これについては、色々面白いあげ

らしい思い出がある。この種の銅像は、

ニューイングランドには沢山ある。たい

てい、公園の中にだが、単にみられるた

めの銅像ではなく、「愛国者の日」には

ポークスカウトや土地の各種団体によ

つて花輪がさきげられ、現実に崇敬され、

生きている。ここに

も、歴史の顕彰が歴

然として生きている

証拠をみる。

さて、コンコード川

の傍に立つ義勇兵士

の銅像の台座正面に

は、かの有名な文学

者エマスの「コン

コード讃歌」と題す

る詩が刻んである。

この詩は、一八三七

年の六月四日、この

場所(橋の手前正面

)に「戦勝記念碑」

が建設された、その

日につくられたもの

であった。

世界にこだまする銃声、火を吹きしぞ

(拙訳)

エマスの詩情は、当時の農民兵士の銃

の如く、彼らへの追憶をこの一点に凝縮

して、燃焼するかの如くである。

私は幾度もここに立ち、この詩を口ず

さみ、感懐あらたなるものを覚えた。

まことに偶然の一致と言おうか、この

戦いのあった橋の手前、向って左手に牧

師館が残っており、土産物屋と同じで、

春からレイバデーまでの間なら内部を

みせてくれる。

案内人のおぼちゃん、例えば二階の

窓から外をのぞき込みかげんに、さも当

時のありさまをそのまま見たように「エ

マスンのお父さんは当時子供でしたが、

この窓から、独立戦争の闘いを見ていた

人である」と説明する。

さてよ、エマスの誕生は一八〇三年

独立戦争は一七七五年、その間二十八年

がある。成程、今かりに、父が三十才頃

にエマスが生れたとすると、エマス

の父は独立戦争の当時、三つか、四つ

の子供と言うふう計算され、成程、話

はうまくあう。真偽の程は別として。

エマスの祖父は牧師の職にあり、こ

の牧師館に住んでいた。エマスの父

はこの牧師館で育ったのである。

エマス自身、晩年は、コンコードの

町中の家に住んだ(今日も保存されてい

る)が、それまで、彼の祖父が住み、父

が子供の時育ったこの牧師館に住んで

たのである。

何れにしろ、祖父伝来の家が、コンコ

ード戦の主要地であり、弾も飛んでこよう程、目先にある。この地理的因縁は、エマソンのこの歴史的事件に対する心理的因縁を深くする要因であったと思われるてならぬ。

かくて、彼の詩魂は、アメリカ史の輝かしい猪首に結びつき、その統声に触発されて、花と咲いたのである。

ロングフエロウやエマソンと言うアメリカ文学史上の偉才は、何れも、このように、歴史の息吹に直接する作品に、自己を燃焼させているのである。

余談になるが、「緋文字」や「七破風の家」で鳴る特異な作家、ホーソンは、エマソンが、コンコードの町中の家に移り住んでから、この牧師館に住んだことがある。

「この窓ガラスの楽書きは彼のものです」と例のおぼろやんが意味ありげに説明してくれたが、今はそれも懐しい思い出の一つとなった。

アメリカ大陸の発見はコロンブスにより一四九二年になされた。その大陸に、白色人種が移りすむようになるのは、その後、百年程時の経過を要した。

一六〇七年、イギリスは今日のヴァージニア州、ジェームスタウンに初めて公的の植民を試みている。

ジェームスタウンは絵に描いたように美しい海岸にあり、昔も昔のままに復元され、昔の衛兵も当時の服装そのままに振るまわっている。狭い昔の中央に、教会があり、「斗いつつ折り、折りつつ斗う」姿は、植民開拓と不何分に結びついて

いるのに気付くだらう。アメリカの記念物は、かりに復元するにしても、当時の場所に、当時の現寸のままに現場を復元するのが通例である。同時に、当時の生活も復元する。つまり、当時代人の服装そのままに、また、立ち振舞も保存しようとする。

つまり記念物は、或る時代の時間的な距たりを超えて、そこに過去を過去のま

まに生かす仕組である。この種の企ての最大の規模は、ジェームスタウンから数マイル離れた所に位置するウイリアムスバーグなる町の復元である。

ウイリアムスバーグは、イギリスがアメリカ植民地における主都としたところである。ここに、国王の命をうけた代官(ガヴァナー)がいた。

アメリカ独立のための謀議は、この主都において、愛国者達の間で秘密裡にすすめてられたのである。その謀議を行ったとみられるホテルも室も残っている

ロックフェラー財団は、巨額の富をつぎ込んで、歴史の町、ウイリアムスバーグの完全復元にのり出した。今尚、完成途上にあるが、大方は復元せられた。アメリカは金に任せて何でもよくやると言

われるが、今世紀の最大の企ての一つとして私はこの復元を重くみている。すると、これは、単に金に任せて、何でもやる式では出来ないものだと言わることがわかる。単なる経済第一義では出てこない

ことなのである。つまり、アメリカ建国史上重要な歴史の町を、如実に復元すると言うねらいは

歴史の保存のためには、全力を尽すと云う、歴史主義が中心にあつてのことであることがよくわかる。

訪問者は、先ず、立派な建物の「インフォメーション・センター」で、何時でも自由にアメリカ建国史の一駒をとったパラマウント映画社製の、カラー・フィルム映画をみせられる。約一時間の作品だ。

次に、このセンターから、バスが数分おきに町に出ている。切符を一枚買えばどこで降りようと、どこで乗ろうと自由である。

つまり、歴史の町、ウイリアムスバーグの町の中を、好きな道を、好きな建物を選んでそこに行けるようになって今、映画でみてきた歴史の町に、今、現実に自分が生きてくることになる。これは夢かとばかり。

センターには、きれいなホテルもついているし、味のよい、且つ清潔な大きなカフェテリアもある。幾日でも、のんびりと歴史の町に生きることが出来るようになってい

町には、当時の床屋があり、当時の床屋さんが、当時の髪型をつくっている。銀製品屋も同じことだ。

たとえて言えば、かりに東京の京橋、日本橋地区全体を全く二百年前の姿に復元し、そこに復元された建物の生活も完全に復元する仕組である。

「歴史を生かす」「過去を生かす」とは、かくの如く具体的なのである。勿論ウイリアムスバーグの床屋は、夕方五時

二月靖国神社に詣づ

小柳 陽太郎

久々にまゐるみ社み友らとふむ玉砂利の音のすがしも

玉がきの外は車のゆきかひのかまびすしけれど心すみゆく

今はなき人の妻子にのこしたるうた記しありみ社の辺に

記されしもうた忘れじとくりかへしくりかへしよめば去りがてにして

帰るさに仰げば今し大鳥居の上しらじらと月のかゝれる

とこしへに忘れめやいま靖国の社に仰ぐ夕月のかけ

さがてにふりかへりみつたぐるゝ空にそびゆる大きみやしろ

になればお勤めだから吾が家に帰る。廿世紀の近代人に戻るのは勿論であるが。

人は言うかも知れぬ。「アメリカは歴史の若い国だから歴史がほしいのさ」とだからと言って、このような具体的且つ

大規模な歴史保存が出来よう筈がない。日本は歴史の古い国だから、ほこりの

ついた古い歴史は捨ててもいいなどいうそんな理論が出てきたらそれこそ世界の

笑い者になると思うのだが、近頃の「明治百年を捨てて……戦後二十年をとる」

と言った巷の世論には、こんな嗅いぐする。(国学院大学教授・文学博士)

（三月十五日―十八日） 比叡山合宿を終って

―感想文から―

「生」の自覚

京都大学・文三 空本 雅之

私は今迄合宿で得た信念を、自分の心の中でだけでもあそび、その信念が命の河となつてあふれてゆき、同信の友を求めていこうとは思いませんでした。

それは自分が完全でなければ何も言えないという気持が自信を失わせていたのです。この春、四回生となる私はもう自己完成を口実にためらったり、自分の中に閉じこもってはいられません。今「出家」せずしては一生何もせずに終つてしまふでしょう。何もせずに終る一生、死ぬ真際になって後悔するような人生を思うと、もうどうしてでも生き生きとした生を生きたいと思わずにはいられません。何となく過した大学生活も後一年となつてはじめて「生きる」ことの意味を小田村先生の御言葉にはっと気付いたのです。

友らと共に雄々しく

早稲田大学・政経二 今林 賢郁

日本の命脈を断とうとする者に対しては、身を挺してでも戦え、という言葉の実感が益々つくよくなる。足らぬ点は多々あるけれども、我も日本人、志を同じくする友らと共に雄々しく生きてゆきたい。心を通じ合つて生きてゆく事の素

晴らしきに、激しく感動することのできる心を私は誇りに思う。事しげき世にあって、心から信頼して、その方々に無条件についていけるような先生方にめぐまれた私はしみじみ幸福に思う。小田村先生の歌をよみながら、その事をこれほど痛感したことはない。

国民同胞感の土台

鹿児島大学・教二 徳田 浩士

まず第一に驚いたことはこゝは寒い。朝晩特に冷えこんで身体がキリリと引きしまった、と同じく心もキリリと引きまらる感じであった。火鉢があつた。それに暖まるのと同じように、真に心をかよわせることの出来る友達との接触は、実に実に心暖まる感じであつた。

私達がこの合宿でお互いに語り合うことは決して頭と頭のくらべあいではないからである。知と知のつながりではなく私と彼との間には、情と情の流れが感じられるのだ。君と僕とが融合されるというところに、私は真の喜びを感じるのだ。胸の中がいっぱんに明るく大らかになる思いがしてくるのだ。私はこういう心広がる気持をもつと多くの友へ伝えなければならぬような気持がするのだ。

国民同胞感というものも、こういう気持が土台にならずして本物にはなれないと思う。死んだ言葉と言葉のつながりからはこういう気持は生れてこない。私は常に生きた、生命の流れた言葉と言葉のつながりあい、いゝかえるならば生命と生命の融れ合いをしてゆきたい。そういう語り合いのできるというものがこの合宿なら

ではと、参加するたびに思わせられる。

活潑な展開を!

九州大学・法二 島津 正数

たゞ一つ残念なことがあります。「我々はスローガンのようなものをたて、運動をしていきたい」と自分が述べたのは何もいゆる自治会等に対抗して人数をかせぐ運動をしようといったのではありません。自分が述べたかったのは、我が国の多くの大学生の中には、学生運動には自治会の如き運動しかないと思つたり自治会に賛同するものではないけれど、個々人では元氣よく意見を述べることが出来ず沈黙し、学生々活を楽しく過せずに居る人が非常に多いと思うんです。そういう人達に対して、我々が活潑に運動することによって手を差しのべることが出来ると思うのです。

この合宿に参加するものは日本各地の大学からとはいふものゝ、必ずしも津々浦々の色々な大学からとは言えません。自分達のようにこのような会があると知つた者は幸運ですがこの会の存在を知らずに居る人には、気の毒だという以外にはありません。自分は無理に数で他を圧倒するつもりは毛頭ありません。我々皆で、会の存続を知らずに居る人に大い手を差しのべべき活動をしたと思つたのであります。皆さんどうか、真剣にしかも活潑にやっついていこうではありませんか。雲仙の合宿での再会を祈ります。

真心を知る

亜細亜大学・経二 長谷川賢司

人の真心がわかるということを始め経験させられました。感動ということであつたかもしれませんが。それは小田村先生が東京から送つて下さった和歌六首によつてでした。特に「きびしがることのみ多く笑みひとつ見せず去りしを許したまへや」のお歌から目が離れませんでした。講義の時の力強いお言葉、帰られる時のあの姿が思い出され、人間の心の深さを始めて感じた強い衝撃を、どう表現したらよいのかわかりません。

新しい経験

中央大学・商二 磯貝 保博

過去何回かの合宿を経験し、班長としてやつた合宿経験もこの合宿で三度目になるわけだが、今回が一番班員の友らと心が通じあえたという実感が、いま合宿を終ろうとしている時にしみじみとしてわいてくるのが心楽しい。

何故こんな気持になつたのだろうかと考えてみると、何といつても自分の卒直な気持を班員の人人にすなおにぶつつけられたからだと思う。自分の言い過ぎた所や、間違つて考えていた点などを、しばしば指摘されたのも、結局自分のありのままを言つたからこそ、それに班員が答えてくれたのかも知れない。

この経験は、今までと違つた新しい問題がこの合宿でとりあげられたことにも関係があると思う。学生による研究発表、又小田村先生の気魄あふれる御講義、そして、慰霊祭を通して何かしら身近に素朴に祖国とか神とかが感じられたことなどである。

日羅のこと

— 聖徳太子研究の一こま —

桑原 暁 一

推古紀に新羅征討に關して不思議な記事がある。すなわち——

十年春二月己酉朔、來目皇子を撃新羅將軍と爲し、諸の神部及び國造、伴造等併せて軍衆二万五千を授く。夏四月戊申朔、將軍來目皇子築紫に到る。乃ち進みて島郡に屯み、船舶を聚めて、軍糧を運ぶ。六月丁未朔己酉、大伴連嚙、坂本臣糠子、共に百濟より至る。是の時、來目皇子臥病みて、征討を果さず。

とあるものである。來目皇子は聖徳太子の同母弟である。「大伴連嚙、坂本臣糠子、共に百濟より至る」とあるのは、「九年三月甲申朔戊子、大伴連嚙を高麗に遣し、坂本臣糠子を百濟に遣して、詔して曰く、急に任那を救へ」とあるのを受けているのである。

十一年春二月癸酉朔丙子、來目皇子薨す。仍りて賦使して奏上す。爰に天皇聞しめして大に驚きたまひ、則ち皇太子と蘇我大臣とを召して詔して曰く、征新羅大將軍來目皇子薨す。其れ大事に臨みて遂げず、甚だ悲しきかな、仍て周防の娑婆に瘞す。……後に河内の埴生山の岡の上に葬る。

とある。そこで
(十一年)夏四月壬申朔、更に來目皇子の兄當麻皇子を以て征新羅將軍と爲す。秋七月辛丑朔癸卯、當麻皇子難波より發船す。丙午、當麻皇播磨に到る。

ところが
時に從へる妻舍人姫王、明石に薨す。仍りて赤石の檜笠岡の上に葬りぬ。乃ち當麻皇子返りて征討す。

と云うことになったという。このあと聖徳太子の生存中は新羅征討のことはない。さて、妻が亡くなったからとて征討を中止する、というのかわからないが、不慮の事態が一度ならず重ねて出来ているのは不思議というほかはない。それは、大伴連嚙と坂本臣糠子が共に百濟から帰国したこととかかわりのあることかと察せられる。この二人が任地に赴いて何をしたのか、それは全然記されていない。為すべきことはしないので、為すべからざることをしたのかもしれない。それはともあれ、來目皇子の死といい、當麻皇子の妻と死といい、偶然のことではなさそうである。何人かの手によって一服盛られたのではないかと。

これよりおよそ二十年さかのぼる。敏達天皇は任那復興を策し、その相談相手に火葦北國造阿利斯登の子達率日羅といふのが百濟にあるのを呼び寄せようといふので、それで十三年秋、紀國造押勝と吉備海部直羽島を遣わしたが、百濟國王は日羅を惜しんで聴許しない。そこでその歳のうちに、また羽島を遣わした。羽島はいきなり日羅の家の門を訪ねた。しばらくあって、家のうちから糠婦が出て来て、韓語で「汝が根を用て、我が根の

内に入れよ」と云って家のなかに引つ込んだ。羽島はその意を覚って「魚心あれば水心ということか。」女のあとについて内に入った。すると日羅が出迎え、手把つて座につかじめ、ひそかに言うのには「百濟國王は、一旦自分を日本に帰したら再び戻してはくれまいと思つて自分を引き止めているのである。だから天朝の勅を伝える時には血相を変えて迫り有無を言わさず自分を呼び出すようにせよ」と云うのだった。この手を使って日羅を連れもどすことに成功した。日羅に從つて来たのは、恩率、德爾、余怒、哥奴知、參官、舵師、德率次干德、水手等若干の人であった。さて日羅一行は吉備兒島屯倉に到着した。朝廷では大伴糠手子連を遣わしてその労をねぎらつた。また大夫等を難波の館にやつて日羅を訪わしめた。この時日羅は甲を着、馬に乗つて門のもとに到り、庁前に進み、悲痛な声で「槍、隈宮御寓天皇(宣化天皇)の世に、我が君、大伴金村、大連、みかどのおほんために海表に使はし、火葦北國造阿利斯登の子、臣達率日羅、天皇の召したまふとうけたまはり、かしてみてまわけり」。そこでその甲を解いて天皇に奉つた。そこで阿斗桑市に館を営んで日羅を居らしめ、何不自由ないようにならうと待遇した。そして阿部目臣、物部費子連、大伴糠手子連を遣はして、國政の要を問はしめた。彼の對えて云うには、「まず第一に人民を護養すること、むやみに兵を興すのはかえつて滅亡のもと。上は臣連二造より下は百姓に及ぶまで、皆富み榮えて乏しきことなからしめよ。かくすること三年にして、食足り兵(武器)足り、悦びを以て民を使うならば、

水火をも憚らず、たれしも同じように國のわがわいをうれえるでありましよう。然る後に多く船舶を造つて津ごと列ね異邦の客人に觀せしめ、恐懼の念を生ぜしめよ。しかしてよき使を以て百濟に使せしめ、その國主を召されよ。もし彼が來ないならば、その太佐平王子等を召されよ。來たならば自然に心つしむ婦伏の心を生ずるでありましよう。その後には百濟人が謀つて、「我に船三百有り築紫を貰うたい」と、と云うかもしれない。實際に申し出てきたら、いつわつて与えたまへ。すると彼はあらたに國を造らうとして、必ずまず女子小子をわが國に送りつけるであらう。その時に、屯岐・對馬に多く伏兵を置いて、その至るをうかゞつて殺したまへ。かえつてあざむかれませぬように。要害の所に堅く壘塞を築いて防備したまへ」と。さて日羅について來た恩率、參官が帰國する時に臨んでひそかに德爾等に云うには「自分らが築紫を通過する時分を計つて、汝等ひそかに日羅を殺せ。さすれば工に申して取立ててやろうし、一身及び妻子、未永く榮えしめよう」と。德爾、余怒はこれを引きうけた。參官等は血鹿を船出す。日羅は桑市村から難波の館に還る。德爾等は日夜手ぐすねひいて日羅を殺さうとするが、日羅の身がはのはのごとく光るので、これに恐れて殺すことができない。しかし遂に十二月つごもりに光の失せたのを見すまして殺してしまった。ところが日羅はさらに蘇生して、「自分を殺したのは自分の召使いどものしわざである新羅人ではない」と言ひおわつて息がたえた。そのころ新羅の使が來合わせていたので斯く云つたのだという。德爾等をとらえて究明すると、恩率、參官

の指金によるもので、部下として従わざるをえなかつた旨白状した。彼等の身柄は弥克島葦北君等が貰い受けて皆殺してしまつた。日羅のなきがらは葦北に移して葬つた。

日羅の進言は、要するによく内を固め戦わずして相手を屈服せしめる方途を提示し、みだりに兵を動かすことの無意味をさとしたもので、まことに時宜に適つたものであつた。彼の父は宣化天皇の世に百済に渡つた、とあるから、幼少の日羅が父につれられて彼地に往つたとすれば、百済に在ること四十余年である。

とすれば、百済の内情も、また彼我の折衝の経緯も知悉していたであらう。その彼の進言は千金の重みがある筈であるがその後それがいかに生かされたかは明らかではない。また、彼の身体から光を放つた、ということは理解しかねるが、眼光炯々、英気あたりをばらうものあつて心やましきものは、ともに目を向けられなかつた、ということではあつたであらう。その殺されたのが十二月つごもり、といふのは心にしみる。天地暗く、歳まさに逝かんとする日、彼は凶刃に仆れたのであつた。

このあと推古朝までの間の朝鮮征討の記事は次のとおりである。

(敏達)十三年春二月、難波吉士木蓮子(いたご)を遣して新羅に使せしむ。遂に任那に之を遣して新羅に遣せしむ。

同十四年三月、天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使と為す。この時に属りて、天皇と大連(物部弓削守屋)と、にはかに瘡思ひ(か)れ遣すを果さず。橘豊日皇子(用明天重)に詔して曰く、考天皇(欽明天皇)の勅に

背くべからず。任那の政を勤め修むべし。

(崇峻)四年秋八月、天皇群臣に詔して曰く、朕れ任那を建てむと思欲ふ。卿等如何と。群臣奏して言く、任那の官家を建つべきこと、皆陛下の詔したまふ所に同じ。冬十一月己卯朔壬午、紀男麻呂宿称、巨勢臣比良夫、狭臣、大友噺連、葛城鳥奈良臣を差して大將軍と為し、氏々の臣連を率ゐて、裨將部隊と為し、二万余の軍を領ゐて、出でて築紫に居らしめ、吉士磐金を新羅に遣し、吉士木蓮子を任那に遣して任那の事を問はしむ。

(推古)八年二月、新羅と任那と相攻む。天皇任那を救はむと欲して境部臣に命じて大將軍と為し、穂積臣を以て副將軍と為す。則ち万余の衆を得ゐて、任那の爲めに新羅を撃つ。——新羅はたちまち降伏した。しかし將軍等が還ると、すぐまた任那を侵すのであつた。

推古朝における新羅征討の企てについてはすでに述べた。ところで聖徳太子の薨去したあと、再び新羅征討の議もちあがつた。すなわち推古三十一年秋、新羅、任那を伐ち任那、新羅に付く。こゝに於て、天皇は大臣馬子をはじめ群臣に新羅征討の事を謀つた。これについて田中臣と中臣連國との間で議論が分かれた。田中臣は即時征討に反対で、まず使を遣して先方の実情をたしかめてからでも遅くはない、と云う。中臣連は、すみやかに新羅を征伐して任那を取り、百済に付けるならば、むしろ新羅を手中に収めるに役立つであらう、と主張する。これを反駁して田中臣は云う、いや、さうではない。百済は反覆多い国で、道路の間も尚許る。(わかりかねるが、使が来てそのまた帰りがかぬうちにすでに違約す

る、ということか。)凡そ彼の請う所皆非である。百済に付けるべきではない、と。衆議まちまちであつたため、征討は中止して、吉士磐金を新羅に遣し、吉士倉下を任那に遣して、任那のことを問わしめた。新羅国王は、八太夫を遣わして新羅国の事を磐國に告げ、且つ任那国の事を倉下に告げた。そして約束して云う

には、任那は小國なれど天皇の附庸である。どうして新羅が勝手に領有してよいものか従前通り内官家を定めたらば、煩いではないであらう。これがわが願うところである、と。そして奈末智洗連を遣して磐金に副え、また任那人達率奈末連を倉下に副え、兩國の調を責進した。ところが磐金等がまだ還らないうちに、數万の軍衆が新羅征討に向かうた。磐金等は船発しようとして天候をうかゞつていたところであつた。そこに船舶海に満ちて押寄せて来たのである。兩國の使人はこれを見て胆をつぶし、引きかえしてしまつた。そして堪遲大舎を代理として任那の調使とした。磐金等語り合つて云うには「この軍を起すことは話が違つた。これは任那の事は成功すまい」と冬十一月磐金、倉下等が帰國した。馬子は先方の様子を問うた。彼等は事の次第を對えた。それをきいて、大臣曰く、「悔しきかな早く師を遣しつることを」

と。これについて時の人は、「この軍の事、境部臣、阿曇連、先に多に新羅のまいないを得たので、その味が忘れられず大臣に勧めたので、使の旨を待たないで急いで押しかけたのだ」とうわさした。境部臣難麻呂は中臣連國と共にこの征討軍の大將軍であつたのである。「先に多に新羅のまいないを得た」とあるのは、推古

八年二月の征討のことを云うのである。話をははじめに戻す。推古朝において皇子を新羅征討の將軍にしたのは、ほかのものには任せられぬ事情に促されたにちがいない。戦うも和するも、はつきり筋を通したものでなければならぬ。國の大事を私の利害で左右することはもはや許されぬ。これはおそろく聖徳太子の意図に出たものであらう。太子はわが身代りとして弟皇子を立てた。しかしそれは空しく終わった。自分たちの闇取引きがあらばれるのを惧れたもの手が廻つたものと察せられる。敵は外にあるよりも内にある。太子は、朝鮮出兵のことはきっぱり断念して、意を内政に、とくに國民教化に向けられた。それは日羅の遺言を生かしたものといわねばならない。日羅はもつぱら百済対策について進言した。

ところが今まで見てきたところでは百済のことは表面には出ていない。彼は日新を戦わしめて漁夫の利を占めることをもくろんでいたのかもしれない。裏には裏があり、仕掛けは複雑である。新羅だけが相手ではない。歴朝さんごん手を焼いた朝鮮をさしおいて、太子は一転して大唐との国交を開らいて、その文物を取り入れ、国力の質的充実に資せしめたのであつた。

崇峻天皇の四年夏四月、詔語田天皇(敏達)を磯長の陵にをさめまつる。これ其の姫の皇后(欽明天皇皇后・石姫)の葬られたまひし陵なり。とある。太子の父帝用明天皇の御陵は磐余池上陵とあるが推古元年秋九月、河内の磯長陵に改めをさめまつる。とある。太子の陵は磯長にあることはいふまでもない。用明天皇は敏達天皇の異母弟であり、敏達天皇の皇后(推古天皇)は同母妹であられる。

用明天皇の御陵を磯長に移したのは、推古天皇及び聖徳太子のはからいであろうか。それは敏達天皇への敬慕の念のしからしめたものかもしれない。とすれば敏達天皇がとくに重んぜられた日羅のことが太子の念頭によく刻銘されていなかっただとは思われぬ。——推古天皇が太子のためにお建てになったと云われる橋寺に日羅像というのがある。弘仁期の製作にかかる名作であつて、実は地藏菩薩像である、といふことである。しかし、それが日羅像であると伝承されて、太子にゆかりの深い橋寺に伝えられたことは、意味あることと思われる。

(都立千歳高校教諭)

同胞歌壇

—しきしまのみち—

薬師寺合宿より

玉川大 勝山 啓子

ふくよかなみ掌をひらきて坐りたまふ薬師如来の御姿仰ぐ
簡素なる師のお住居の片隅に群がりさける三色すみれ(岡潔先生を訪ふ)
装ひは質素なりとていつの日も心豊かに生きたしと思ふ

学習院大 小田村 静代

連れだちて友どちと行く大和路はあしびの花の今さかりなり
病おし玄関先にいでたまふ師のまなざしはやさしかりけり

東大 脇山 早久良

薬師寺の塔の姿は黒々と浮び出にけり月の明かりに
春雨のあがりしあした友どちと古寺をたづぬる時ぞうれしき
病床の日々の長さぞしのばるゝ御師の顔のいたくやつれて

武蔵野女子短大 田川 美代子

葉のさやぎ日の光さへみやびたる古き都路あゆむたのしき
友どちと語りあひつゝ木の間よりもれる日さしうけてあゆみぬ
今こゝに語りひるも尊しとひとみかゝやかせ友は語りぬ
母となることを思へばこの身さへおろそかならじと友は語りぬ

東京女子大 梅田 咲子

しつとりと雨にぬれたる砂利道をふみしめあるく薬師寺の庭
朝早く人もまばらな境内を友とめぐりぬ塔みあげつゝ
うすぐらき御堂の中の御仏を心静めてをろがみにけり

新潟大 水野 雅子

戸を開けてみやれば雨のふるなかにけぶりて立てり薬師寺の塔
友どちと胸はずませて佐保の道たどり行きけり師のお住居に
女子栄養短大 長内 美穂子

ともすれば心の狭くなりゆくをくやしと思ひて涙おちけり
一年を勤めし後に学ばむと心に決めしその日と思ふ
こゝろざし貫き通せといふ父の言葉の何と力強きか

法華寺の土塀のかたの天空のあぎの色

の美しきかな

東京 石井 恭子

襖越しに聞える声なごやかに女子合宿はすゝみゆくなり
みとせ前ふりかへりつゝ帰りたる薬師寺の塔今仰きみる
朝な夕な御寺の塔を仰ぎつゝ学ぶつどひはうれしかりけり

東京 島田 好衛

みほとけの深き慈愛をかゝぶりて求めゆき給へをみなの道を
みほとけを守りたちますみ姿に遠きみ祖を偲びてやます(十二神将をみて)

東京 夜久 正雄

薬師寺の合宿たのし朝鳥のさへづる声にゆめさめにけり
起き出でてみ寺の縁にたゝずめば薬師寺の塔目の前に見ゆ
朝がすみこめたるそらに東塔の水煙たかくそゝり立つ見ゆ
日の本のをみなの道をまなばむと集ひ語らふまとゐたのしも

比叡山合宿より

心豊かに元気に合宿を終られるをいのりつゝ歌六首(三月十八日午前一時十六分東京より打電)

東京 小田村 寅二郎

近江の海琵琶湖のかたに我が思ひの馳せゆき止まずさかり来ぬれば
さびしかることのみ多く笑みひとつ見せず去りしを許したまへや
一夜なれど相見しわかきみ友らのま光るまなざし今もうつゝに

我が思ひのたけをつたへし言の葉は足らぬなれど聞きてたばりし

夕闇のたらしみ寺のきざはしに見送りにける友らなつかし
み国守るみおやのみ靈祭りにしきのふの夜半のこともしるげく

岸和田 岡村 義一

さざ波の志賀のみやこにほど近き西教寺にて合宿開かれり
風寒き比叡の山より眺むれば雲とかすみて坂本見えす
坂本はあの辺かと指させば友らのこと胸に迫り来

友の待つ坂本近しと心はずみくだるケイブルも遅く思はゆ
ケイブルを降りて歩けばいしぶみに「西教寺一〇〇米」と書かれてありき
春日さすのどかな道をあこと二人語らひつゆきぬ西教寺さして

「あの丘の麓高きがその寺」と道べの人は教へくれにき
つまさき上りの道急ぎつゝ汗ばみて寺間近きにしばし休みぬ
いつかしき覺つらなる西教寺は人の影なわわれらを迎ふ

この森に若き友らはつどひ来て語りあふらむ皇国のゆくてを
編集後記 五月好季節。今月は宮脇、戸田、桑原各諸先輩の好論説を掲載することが出来た。時代と心になじろかず、それを見つめることが、そのまじろかずと人心の真理を現はす。学徒(論者)の志が、そこに迫らしめるのであらう。

▽今春大学を卒業した合宿教室同期生による、論説集「第二葦牙」が発行されてゐる。夜久教授「古事記」、合宿教室資料「日本への帰郷」なども出版真近である。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←東京←全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南都町3 宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

神社について考へたいこと

日本文化の特質は何か、といふことを定義めいて説くのは本意ないしぐさである。だが歴史を一貫して、そこには高天原の古から、神を祭ってきた我々の祖先の暮らしと、信仰の消義が多彩に美意識として陰翳してるといふ点は、やはり言っておかなければなるまい。

私はもともと田舎の社家に生を受けた者だから、幼い時から、こういふ日本の国の文化の特質を、いはゞ民俗の本然として感受してきた。もとより神を祭るといふことは、神社に於てだけ行はれる事ではない。然し、神社に於ける祭は、その公の、最も大がかりなものであったといふことだけは言へるであらう。

日本文化について考へる時、日本民族の固有信仰をぬいては意味をなさないにも拘らず、それにも拘らず、このやうな祭とか社とかいふものに、すでに或る種の違和感なしには近づきにくいといふのが、今日の日本の教養人一般の精神

状況であるらしいといふことは悲しい現実だ。ニーチェは「教師のごとく語る」ことを極度に嫌ったが、私も亦努めて、神主の如く語ることを避けてながら、その辺のことについて少し考へて見たい。

これらの事情もとづく原因を、日本の敗戦と、その後に行はれた占領政策に求めて説明することは、これまで多くの人々によって為されてきたところで、現に今もなほ続けられてゐる者であるが、私は歴史の歯車をもう少し六、七十年ばかり廻ぼらせて、明治の開化政策、就中文教政策の中に求めたい。

周知のやうに、帝国憲法は、あの時世としては、何人もそれ以上を望むべくもあるまいと思へる程に、伝統と進歩の調和といふ点に苦心を払ったものであり、又それにふきはしい成功を収めたものではあったが、怒濤のごとくよせてきた西歐の思想と文明を前にして、なほ一足を靴に合はせる」といふが如き無理が無い

訳ではなかった、といふことはまことに余儀なき事実であった。

その一例が、第二十八条に規定された「信教の自由」の原則であった。もしも此の条文の精神が、唯単に文理解釈としての厳密さだけで貫かれようとするならば、伊勢神宮や靖国神社への礼拝すら神道信徒といふ一セクトのものとしての制約を蒙らなければならぬ。それは、その出発点に於て、鞏固なる近代的統一国家の完成を至上命令とした明治政府の耐え得るところではない。ここに、この条文が後に「安寧秩序ヲ妨ケズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限リ」と「条件」づけられたものの拡大解釈によって骨抜きにされてくるといふ事情が生ずることになるのであるが、もつと大きな作用として、その期に於ける一國文教の指導精神が、教育勅語といふかたちに於て発布せられなければならなかった、固有信仰の生理から来る必然的要請があったと観なければならぬ。

そこには表面宗教とか信仰とかの文言は全く使用せられてをらぬにも拘らず、それが、「国体」といふ渾一的な用語を以てせられることにより、全国の神社のあたかも共通の教義の如き役割を果さしめられることになり、こゝに神社は、その歴史的信仰の中に本有してきた宗教的な面を強ひて抹消せられ、代つて他の一面たる国民道徳の象徴的存在となつたのである。

それが大体明治以降、今次終戦に至るまでの神社のすがたであった。敗戦による占領政策(神道指令)と、それを受け

た日本国憲法の宗教に関する規定は、この明治の憲法の中に採用せられてゐた、西洋種「信教自由」の原則の、より狭義な、より苛酷な、より峻厳な徹底にはかならぬ。尤も今回は、神社は道徳の側から宗教の側へ、百八十度廻れ右させられたといふ、丁度明治政府の政策と反対の不幸をまぬか

れなかつたのであるが。

神社は宗教であるか否か(道徳であるか)といふ論争は、明治開国以来、絶えることなく続けられてきたその論争の争点を要約して紹介することは容易であるけれども、今はそれら的一切を削ぎ落して次の如き譬喩を出して私の

答案とし、今日の神社について考へる人の参考供にしたい。或は最少限度の知識教養であるやう知れぬ。

神社は言はゞ果汁酒のやうなものである。それを酒類として税金を課するか、或は、こんなものは清涼飲料水にすぎないとして税金を掛けないか、といふことは一にその国の政治の政策の問題であつ

目次	
神社について考へたいこと……………	幡 掛 正 浩 (1)
明治天皇御製と山……………	広 瀬 誠 (2)
ロバに水を呑ますもの……………	名 越 二 荒 之 助 (4)
☆ 古典の窓	

て、果汁酒そのもの、本質の問題ではない。税金が課せられようが、課せられまいが果汁酒の中味に変わることはない。(このことは世界各国の宗教法規を見れば一目瞭然であらう)

あたかもその如く、神社が宗教であるか宗教でないとするか、といふことはこれを取扱ふ政策の問題であつて、神社そのもの、本質の問題であつてはならない。強いて言ふならば、敗戦以前の日本人はアルコールに強く、果汁酒の中の微量のアルコールごときは問題にせず、それは清涼飲料水であり、婦人子供も飲んでよいとしてゐたのが戦後の日本人はアルコールに弱くなり、その程度のアルコール分にも騒ぎだつて、これは婦人子供には禁止せねばならぬと強調してゐるにも比定されようか。

私はさきに、明治の帝国憲法の中にさへ「足を靴に合はせる」やうな無理があつたと書いた。その無理は現在の日本国憲法の中には随処にある。果汁酒の譬喩で言へば、果汁酒といふ「足」が法といふ「靴」に無理に合はせられてゐるのである。その無理を直すのは、しからばど

うすれば一体よいのか、答は至極簡単にある。それは「革」(法)を「足」(神社)に合はせる様に改らためればよい、それ以外にない——と。

神社を規制する現在の宗教法人法(その親の法として憲法がある)が、いかに無茶なものであるかといふ例を一つだけ挙げて置こう。現在の宗教法人法によれば、伊勢神宮でも靖国神社でも、わずかに数名の責任役員が決議さへすれば、解散も出来れば売却も出来、これに対して政府は何らそれを差し止める打つべき術(て)をもつてをらぬ。

人は、そんな馬鹿な非常識なことが起こるものか、と言ふであらう。私も亦實際問題としてそのやうな事が現実になるなどとは夢想もしたくない。だが、事は起るか起らぬかといふ事実問題ではない。法律といふものはあくまで国の意志の表現であるといふ単純な事理を指摘し注意してをるまでであり、「国の意志」として、伊勢神宮や靖国神社でも、数名の役員のみで解散出来るやうにしてをって、それでかまはぬのか——と言つてをるだけなのである。

ここで私の本当に望み度いことは、唯単なる法の改正といふことではない。もう一度、さきの譬へ言ふならば、日本の国の体質そのものを、アルコール分に強い、強健な体質に造り鍛へることである。それには、単なる法の改正だけでは不十分で、もっと広汎な、思想と生活の全領域にわたる、目覚めとあらたまりがなければならぬといふことは言ふを要しないことであらう。

言ふならば日本といふ国が、固有本然の神・道味のある国となることである。そうすれば、宗教だ道徳だといふやうなこちたき論議は直ちに雲散霧消するであらう。恐らくは、そういふくらしの仕組から変へることなくしては、おほかたの教化の努力といふものも、つまるところ徒勞の沙汰に了りはしまいかといふことを憂へる。それが文化といふものの、本質であり宿命であると私はかねがね考へてゐる。

私は日本の神社は、決して西洋流の概念に於けるセクト(宗派)ではないと言ふことを、生活と離れぬ固有信仰の面から、春の田植えや秋の新嘗祭から明らか

にしたかつたのであるが、矢張り現在の神社がおかれてゐる法上の立場に目をうつる訳にゆかず、はからずもそこにかかずらつて、紙数を失つてしまつた。

唯神社は敢て言へば、高天原の弥生式農耕の時代以来、皇孫尊を日嗣のにき稻の幸はひの御魂として仰ぎつゝ、一つの国民同胞をなしてきた、我々の祖先がくらしの中にもそそぐ文化精神の、なつかしくもおどろかぬ文化精神であり、この文化精神を不断に繰り返し、たしかめ、更新することによつて、常に芸術上の創造に於てのみならず生活の全領域に、世々の維新を成し遂げてきた民族智慧であり活力であつたといふことを、私の好みや偏向からではなく、普遍的な日本歴史の実証として言ひたかつたといふことである。

私はこの固有文化の精神が、今冬眠状態にあることを深く悲しむものではあるが、しかしそれは決して本当に変質したり、死滅したりしてしまつてゐるものではないといふことを、なほ心寛うに合点してゐる者である。

(神宮司庁教学司 幡掛正浩)

明治天皇御製と山

広瀬 誠

月みればまづこそ思へ旅寝して近くむかひし山のけしきを(をりにふれて)

明治四十二年の御製である。この一首を

拝誦すると、月の光に鮮やかに照らし出された山の姿が彷彿として迫ってくる。天皇の御心に深々と回想された名も無き

山のたたずまいは、御製を味はふ者の心に、ありありとうつつてくるのである。抒情的なるほひが流露してゐるともどこかに帝王ぶりともいふべき威厳があつて、まことに感銘深く、私のつねづね愛誦したてまつる一首である。

明治四十二年といへば御晩年である。晩年のみかどが月を見て、まづ第一に思

ひ出されたのは、かつての旅寝で近々と御覧になつた山のけしきだったのである。明治天皇御集には、このほかにも

秋の夜の月にむかへば旅ねして見し海山のおもかげにみゆ(月・36)

ひとめみし野山のけしきうかぶかなすみまきりゆく月の光に(月・37)などと、月を見て海山・野山を回想され

た御歌が目につく。「ひとめみし」の一句は極めて印象的で、漂渺たる月の景色を作者の強い主観で統率してゐるのである。さらに

はれわたる空にむかひて思ふか新高山の月はいかにと(月・34)

と、まだ見ぬ台湾の高山にまで憧れの御心を寄せられた。(ちなみに新高山といふ山名は明治天皇の御命名である。)

○ 徳川幕府はきびしく朝廷を拘束し、歴代の天皇はほとんど御所の外へ出られることがなかった。それで、孝明天皇が旧例を破って行幸されたとき、はじめて賀茂川を御覧になって「あの白く帯のやうに光るものは何か」とたづねられ、「あれが川といふものか」と驚かれたといふ。

維新の大業が成ると、明治天皇は全国くまなく巡幸され、国民の姿・国土の姿を親しく御覧になった。天皇の御歌には旅に出て国民の姿を見る喜びを歌はれ、あるいは、ま近くたづねた民のなりはひを旅寝の夢に見たと詠まれ、あるいは細続きの野辺に宿って農夫の声をま近く聞いたと詠じてをられる。国民に接することのお喜びが一首一首にもりこぼれてゐる。そしてまた民草に対すると同様「治めしる国」の山川にも、限りない情愛を注いでをられるのである。

高殿の窓をのびらきて旅やかた山をまちかく見るがめづらし(旅・39)
旅にいでてまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふなりけり(山・42)
みやこいでてまづめづらしとみるもの

はつねみぬ山のすがたなりけり(旅・43)

めづらしき山のけしきをまもりてやすらふやどに時をうつしぬ(旅・43)
旅衣たちとどまりてみてゆかむ都にしらぬ山のけしきを(旅・35)

「山をまちかく見るがめづらし」とは、まことに子供のように卒直な御表現である。「都にて見なれぬ山」「つねみぬ山のすがた」「都にしらぬ山のけしき」をいかに楽しみとしてをられたかがわかるのである。

富山県東端朝日町の馬鬣山は、明治十一年巡幸の折、天皇が「馬のタテガミに似てゐる」とおっしゃったところから名づけられた山名だといふ。真偽のほどは定かではないが、土地土地の山の姿に新鮮な感興を催された帝の御心を記念したいという地方住民の念願がこの伝承に息づいてゐる。

小車のまどうちあけてみつるかな伊吹山の雪のけしきを(雪・43)

伊吹山はヤマトタケルノミコト遭難の山である。古事記が伝へるミコトの物語はまことに悲壮で美しい。ミコトは伊吹山の荒ぶる神に敗れ、大水雨に打ち惑はされて敗退し、力尽きてなくなられた。その魂は白鳥となつて故里へ飛んだが、つひにとまるところとなかつたといふ。明治天皇はお若きころ「まつろはぬ熊襲たけのたけきをもうち平げしきをををしも」と詠じてミコトの武勇を讃へられた。そのミコトゆかりの伊吹山の雪まみれの姿を、つくづくと御覧になつたのである。

天皇は夢にまで山の姿を見てこれを歌にされた。

いつのまに山路をこえてわがころとほきたかねを夢にみつらむ(夢・42)
おもひやる山べにゆくとししゆめををしくも風のさましけるかな(夢・40)

うたたねのゆめの直路にみつるかな見まほしとおもふ山のけしきを(夢・43)
「おもひやる山」「見まほしとおもふ山」をいつも御心に持ってをられたのであつた。

○ 天皇はまた雨ぐもはれわたりゆく大ぞらにつね見ぬ山もみゆるけさかな(山・41)
冬がれの野末に見ゆる白雪は何のあがたの峰にかあるらむ(枯野・35)

と、雨後あるいは新雪時に、平生気づかなかつた山の見えるのに御心をとめられた。山々の眺望の微細な点にまでお気づきだつたのである。新雪の山岳景観を緊張したシラベにうつしだされた御歌は実に数多く、

秋かせの吹きはらしたる大ぞらにふじの高ねの雪ぞ見えける(望山・34)
嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさきゆる今日かな(雪・34)

五百重山つらなるみねの奥までもさやかになりぬ雪のつもりて(雪・38)
大空はみどりにはれて山といふ山みなしらく雪ふりにけり(雪・38)

こがねのふきはらはしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ見えける(雪・40)
の如き御作がある。甲斐の高根は南アルプスであらうか。初冬の空に冴えた雪山

をみとめられ、このやうに力強い一首をものされたのである。

○ 明治天皇は、名もしれぬ山の山に限りなく御心をとめられたが、しかし、山に關する御製中、もっとも多いのは富士の歌で、朝の富士・夕の富士・春夏秋冬それぞれの富士・雪の富士・雲の富士と、全く枚挙にいとまがないくらゐである。

天皇はいたく京都を愛されたが「京都へ行くと政治にさしつかへるから」と述べ懐され、京都行幸はなるべく遠慮されたといふ。しかし東京の御生活で、もっとも御心をお喜ばせしたのは、実に富士山であつた。

鳥がなくあづまにすみてうれしきはふじの高ねにむかふなりけり(富士山・39)

とは、その御心持を卒直によまれた一首である。行幸の折にも、朝まだき都をいでてふじのねをふりさけみつづくゆけ旅ちかな(山・37)
心ゆく旅路なりけり大空にはれたるふじの山もみえつつ(旅・35)

と爽やかに歌ひあげられ、帰途には、あづまにといそぐ船路の波の上にうれしく見ゆるふじの芝山(11以前)
ふじのねのみえをめしこそうれしけれ東路さしてかへるたびぢに(富士山・42)

と包みなく喜びを歌ってをられる。はれぬ日のおほきぞ惜しきわがそのに富士見のうてなつくりたれども(富士山・42)
と富士の見えぬ日多きを慨嘆され、

天のはらあふぐたびにもめづらしとおもふはふじのたかねなりけり

(不二山・45)

と徹底的に富士に傾倒してをられる。

ふじのねの雲のひとひらうちなびき大ぞら高く秋風ぞふく(秋天・31)

の如き、まことに爽快の感にみなぎる御作である。

○

明治天皇御集には、さわやかな朝の心持を詠まれた御歌をしばしは拝するが、

おきいでてまづうちむかふ大比叡の山はこころのしづめとぞなる(山・37)

朝まだきこころしづかにおきいでて山にむかふがたのしかりけり(山・35)

ほがらかに明けわたりたる山のはにむかふ心ぞわが世なりける(山・38)

おきいでてまづうれしきはをちかたの山をさやかにみる日なりけり(山・40)

むらぎものこころしづかにおきいでて山をみるこそたのしかりけり

(朝眺望・42)

と、くりかへし朝の山を詠じてをられる。静かな朝の山に向かふことは、天皇

にとつて大きなたのしみであり、「心のしづめ」だったのであらう。そして御みづからを顧みて

ちりひちにまじるころぞはづかしき空にひいでし山にむかひて(山・40)

むらぎものこころのちりもしづまりぬ富士のたかねにむかふ朝は(山・43)

と謙虚に詠ぜられた。朝の山を鏡として一日の政務をとる心の姿勢を正されたのであらう。

天皇は、山岳のもつ巨大さ・神々しさ・清らかさを讃嘆されて、

あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山もありけり(地・38)

大ぞらのすゑにはれたるとは山はつちにつらなるものとしもなし(山・41)

と詠ぜられた。「あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山もありけり

」とは、まことに悠大きはまりなき御感想である。明治三十七年の御製「産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける」には、「母なる大地」ともいうべき神話的発想が揮されるが、この「土よりいでて」の一首にもまた巨大な神話的イメージが揺曳してゐる。この御歌において「あらがねの」枕詞の使用は天地創造神話的発想と密接不可分である。

明治天皇はかくのごとく山に対して深い御心を寄せられ、山に対する感情、思想を数々のすぐれた御製にとどめられたのである。明治天皇御集を拝誦しつつ、私はそびえたつ高山を仰ぐ思ひで、天皇を慕ひまつるのである。

(昭和四一・五・一二)

(注) 引用御製に附記した数字は明治何年の御製作かを示す。

(富山県立図書館勤務)

ロバに水を呑ますもの

—中共整風運動とシベリア民主運動—

名越 二荒之助

郭沫若氏の自己批判
中共の郭沫若氏が四月十四日、全国人民代表大会の席上で自己批判し、その詳細が二十八日の光明日報に掲載された。「毛主席の思想をよく学んでいないため

に、自己改造ができていなかった」「そのためある時は階級的観点が極めてあいまいであった」「私が以前書いたものは嚴格にみて全部焼却されるべきで、少しの価値もない」

日本の知識人は、郭氏の自己批判に今更のように驚き、中共整風運動の厳しさを更めて知ったようである。しかし中共は外交政策における挑戦的な印象に比べて、文芸面ではソ連のスターリン時代ほど厳しくなかったと言えるかも知れない。郭氏は今まで自己批判しているように、思想的に社会主義リアリズムに立っているとは言えなかった。彼は学生時代にロマン主義に基づき創造社を作り、文壇に新風を送っていたことがあるだけに、彼の発想は元来ロマンチズムなのである。

先年岡山市(郭氏は六高出身)を訪れた時も「中共の革命は明治維新と同じである。新中国は日本から明治維新の精神を輸入し、その代りに麻薬を日本に輸出した」という趣旨を述べたことがある。この言葉には多分に外交辞令と皮肉がこめられていたのであらう。しかしそのまゝにとれば、氏にはブルジョア革命とプロレタリア革命の区別さえ言わなかったと言ふことになる。また氏の代表作と言われぬ戯曲「屈原」にしても、テーマは不屈の忠誠心と見ることができぬ。

屈原は戦国時代楚の国の王族に生れた。当時楚国は大國秦と親交を結ぼうとする連衡派と、隣国齊を中心六國が結束しようとする合縱派とに分れていた。屈原は合縱派の巨頭であったが、その政策が容れられず、ざん言にあつて懷王にうとんぜられ、後に江南に流された。楚は次第に衰えたが王への忠誠は変らず、大雄篇「離騷」を残して汨羅の淵に身を投じた。時に年六十八才。郭氏の戯曲「屈原」は全編迫力に溢れていて、屈原の変らない祖国愛を讃仰するロマンの香気高い作品となっている。

このような作品では毛思想が受け容れるはずがない。「焼きすてるべきだ」と言わざるを得なかったのは当然のことである。「屈原」を作品化するのだから、屈原を忠臣として画いてはならない。屈原は階級の戰士として画かねばならないのである。即ち楚の懷王を人民搾取の親玉、屈原はそれに抵抗する人民大衆の代表者、というように両者を対立矛盾するものとしてとらまねばならぬ。屈原はその矛盾性の前に破れて、終に淵に身を投ぜざるを得なかった。言外に毛沢東こそ屈原の遺志を現代に実現した英雄であるというように匂わさなければ

ば、毛思想は受け容れる所とならないのである。

果せるかな郭氏の自己批判に対して周揚宣傳部長は「郭氏の自己批判は漠然としたものである。自分のどの作品のどの部分が、どう間違っているかを検討するのが、自己批判である」として郭氏の自己批判の不徹底さをついでているのである。

前進座の「五重塔」

共産党に集団入党した前進座が、新橋演舞場で幸田露伴の「五重塔」を演じている。テレビで中継録画を見たが、このテーマはのっそり十兵衛の執念に似た職人気質を画くことにある。言わば露伴流の芸術至上主義を謳ったものであって中共の整風運動の眼からすれば、階級的観点は全然見られない。時代が江戸時代であるだけに、封建道徳を讃美した悪質な反動思想を謳歌しているということにならう。前進座は真つ先に槍玉にあげられることは間違いない。前進座だけではない。現在の日本の進歩的文化人と云われる人たちの評論、また左翼作家と言われる人たちの小説で、中共整風運動の立場から及第点をつけて貰えるものがどれだけあろうか。

焚書抗儒以上のもの

悪名高い秦の始皇帝は、天下を平定すると史料編さん所にある秦以外の六国の歴史記録を一切焼き捨てさせた。そして勅令を思い思いに批判する儒者四六〇人を抗に埋めて殺した。しかし中共のやり方はこのような単純直截なやり方ではない。

先年岡山県小田郡矢掛町の町長をしている石井達一郎氏が、郭氏の辭旋で中共に招待された事がある。毛沢東に会った石井氏はぬけぬけと「革命に血をと

なうのは当然だと思いがその段階に於て何人位反対者を殺されましたか」と質問した。すると毛氏は「たいした数ではない、まあ五〇万人位だろう」と答えたという。国連資料ではその犠牲者千五百万人となつてゐるが、たゞ五〇〇万にしようも、人口六億の中の五〇〇万である。日本に直せば一億の中の約十万人である。町村合併が行われる前の市町村の数が約一万あったから、各市町村ごとに十人が人民裁判で血祭りにあげられたことにならう。

市町村人民全員を集めておいて、その前で地主や金持や反革命分子の罪状をあげながら十人程度を銃殺刑にするのである。二・二六事件で僅か数人の政府要人を銃殺しただけで、あれだけの影響を与えられたひ弱な日本人の神経だから、もし日本で中共的人民裁判を、各市町村の都々浦々でやったら、日本の人民たちは一度にちぢみあがってしまうであろう。始皇帝の抗儒四六〇人とは比較にならないのだからである。それに中共の場合、革命成功後のやり方が自信に満ちて巧妙を極めてゐる。書物を焼くと言つても、政府が手を下して焼くのでなく、作者の思想を改造して、書いた作者自身の手によつて焼かすのである。

ヒトラーも焚書を行ったし、反対者を殺し或は監獄につないだ。しかしナチズム下のドイツ人には沈黙の自由はあつた。沈黙して表面的な協力をよそほつておれば、それ以上の追求はされなかつた。しかしコミニズム下では沈黙は許されぬ。沈黙しておれば、それは敵に通ずるとして、一人／＼に思想の点検が行われる。忠誠を誓わなければ忠誠を誓うまで糾弾される。しかも一度忠誠を誓うだけでは駄目である。つき／＼とあらゆる方法で忠誠を示しておらねば、

反動分子の烙印をおされるかも知れない。

しかも忠誠の端的な示し方は、反動分子との斗争に置かれる。自分の周囲における反動分子を摘発することによつて、忠誠の度が測定せられる。かくして相互監視が全人民によつて行われる。全人民が党への忠誠競争をするようになるのである。党員の眼を諷魔化することはできて、周囲の人たちの眼をごまかすことはむづかしい。かくして党の指令は末端にまで容易に滲透することになる。

がらひコミニズムは、始皇帝やナチズムのような政治革命を行うだけではない。政治革命と共に経済革命、社会革命にまで至る。史上最も徹底した革命なのである。だからコミニズムは始皇帝やナチズムとは異質のより徹底した思想改造方式を採用せざるを得ない。これはコミニズムに負わされた宿命的性格なのである。

モスコイ民主主義

だからコミニズムを實踐に移そうとするなら、スターリンのやつたようなソヴェトの人間への改造や毛思想に基づく「洗脳方式」を徹底させなければ、全産業園営下に全人民を喜んで働かすように仕向けることはできない。現在のようになす連修正主義では、とても共産主義社会への移行はできないのである。

私がモスコイに抑留せられていた頃、「民主委員長」は内地帰還人員の決定権を持つことを全員に承認させていた。委員長に反対したら帰園できないことを、露骨に示した。これはソ連の威を借る狐に過ぎないから、心ある人は内心バカにしていた。それに民主委員会の中枢部はインテリで固めていただけに、反動への憎悪心も乏しかった。思想教育と言つても、マルクス・レーニン主義の学習が主であつて、集団による吊しあげや、相互批判、自己批判にまで至らなかつた。

文化祭の時などは、民主委員長自ら東海林太郎よろしく「国境の街」を歌つて得意になってゐた。文芸面の整風運動にまで徹底してゐなかつた。したがつて作業をサボることはお手のものであつたし、拙稿「モスコイに築く城」に書いたような虚々実々の抵抗運動も可能であつた。モスコイの民主運動、それは委員長

の個性が露骨に反映したファッショ的独裁体制と云えよう。復員船に乗つて権力を握つてしまつた。しかしシベリアの民主運動はすっかり違つてゐた。あの頃で言えばスターリン路線、現在で言えば毛思想に基づく整風運動の方式が、運動の中に生き／＼と生かされてゐた。

シベリア民主運動

シベリア民主運動では、インテリ出身者はことごとく追放せられて、労働者あがりの兵隊たちが中枢部を占めていた。フロレタリア民主主義にふさわしい独裁体制が確立されて、プチブルインテリたちは入り込む隙さへなかつた。アクチーブたちが憎悪に満ちたアンチーションをよれば、グループ員、突撃隊員たちがそれに応じた。軍隊のような階級制度はなかつたが、それ以上の組織が生れた。最高幹部が民主グループ指導部、その下に講師団、アクチーブ、青年アクチーブグループ員、突撃隊員というように、闘争力と作業成績とによつて人間に格づけがなされた。しかし自らの組織を守るためには、常に組織の中に反動分子を作つておかねばならない。反動の斗争によつてのみ、自らの組織は強化せられる。すると反動の中にも当然格づけが行われ

あった。私のいたハバロフスク二十分所約五百名のうち、正面きって抵抗した人がたゞ一人いたのだ。堀越君という一兵隊は、最後までソ連への忠誠を拒否した。二十五才、まだ童顔の残った彼は、皆の前ではっきりと言った。

「私は陛下の命令でシベリアに演習に來ているんです。作業をしると言われれば作業はします。しかし共産主義の運動には同調できません」

語尾は震えていたが、確信に満ちた声音であった。生きて帰るために心にもないことを言っただけ同調する人が多い時、彼は自分を裏切ることはできなかつた。

彼はたちまち天皇護持論者に仕立てあげられた。極反動堀越を紛砕せよの相言葉のもとに、一番キツイ作業をみんなに彼におしつけた。よほどやられていたのだろう、毎日顔を土色にはらして作業から帰っていた。それでも追求の手は緩めなかつた。最後まで屈服しなかつた彼は呆けたようになってしまいは一言も言わなくなつた。最後は栄養失調のため病院送りとなったが、その後の様子は判らない。いつ消されるかわからないシベリアで反動になることは死を意味する。それでも彼は敢てその道を選んだのであつた。彼はシベリアの屈原ではないか。

シベリアの大石良雄

私の知っている範圍でもう一人いる。モスコウで反共派の旗頭であつた松本は

ソ連政治部員の手で監獄に入れられた。彼は最後まで節をまげず同志をかばつた。反共運動では言わばベテランであつた。その彼をとりまく数人が、シベリア民主運動で最も鋭いハバロフスク二十分所に転属させられた。

松本をとりまく人々は、シベリア民主運動を最もフナティックなものに育て上げる事を考えた。こゝで露骨な抵抗をすれば、行方も知れぬシベリアの曠野に消されるばかりだ。シベリア抑留生活は飯の生活であつて、本当の決戦場は日本だ。どうしても生きて日本に帰ることを考えねばならない。我々自身が演技で共産主義者になつてみせよう。主義者になる位は簡単に演技できることを知らせよう。そしてシベリア民主運動を一挙に粉碎する方法がある。それは民主運動の先頭を切つて、最もセンセーショナルなものに育てあげることだ。狼のように過激化したシベリア革命軍が日本に帰れば、国民は一度に総スカンを喰わせるであろう。シベリア民主運動のクライマックスに、ドンデン返しを用意するのだ。

松本はハバロフスク二十分所に連行された時は極反動にされたが、勧進帳の弁慶よろしく各種の関門をくぐつて、やがて突撃隊員になり、グループ員からアクチーブ、講師団員、そして終に民主グループ指導部に入った。そこでは青年部長宣伝部長を歴任して、帰国時には民主委員長にまでなつた。

彼のような生き方は、忠臣蔵の大石良

雄や、股くゞりの韓信にあたるのだろうか。身をもつて演技した点は似ているようだが、内容は大分違つている。それはシベリア民主運動のような稀に見る組織に對する抵抗の一変型であつて、松本のような生き方は、史上類例がなかつたと言えるのではないか。(彼は現在岡山県の片田舎に住む。三十才で出家して妙実院住職。今も毎日ソ連全土で亡くなつた七万の英霊のために経文を誦している)

郭氏の心中は何処に

私はシベリア民主運動で受けたショックが強過ぎて、ペンがすべり過ぎたようである。この辺で郭沫若氏に返さう。郭氏の生き方に三つが考えられる。一つは楚の国の屈原やシベリア民主運動の堀越のように、中共整風運動の偏向性を正すべく正論をはくことである。彼に祖国愛があるならば、歴史伝統を抹殺し、人間性を破壊する中共の過激主義に對して、屈原のように忠言して然るべきであらう。彼がもしその道を選べば、中共政府は郭氏の作品も存在も恐らく沫消してしまふであらう。しかし数千年の生命を持つ支那の歴史の中に、郭氏の生命は生き続ける。しかし郭氏はこの第一の生き方を捨てたようである。

だとすれば郭氏はシベリア民主運動の松本のような生き方を選びつゝあるのだろうか。現在のような中共の狂信性を修正することはもう不可能というよりはか

ない。中共幹部が翻意して目覚めるに至るには、大打撃を外部から与えるよりほかない。自分自ら先頭を切つて自己批判し、中共整風運動を最も異常なものに意識して育てあげる。中共の自信過剰は、やがて何らかの墜跌を来すに違いない。既にその兆候は現れつゝある。中ソは分裂し、A A会議は失敗し、インドネシア共産党はシャボン玉のようにつぶれた。陳毅外相は内外の記者を集めて、ソ連修正主義もアメリカ帝國主義も、日本の軍国主義もインドの反動共も、束になつてかゝつてこいと、ヒトラーばりの豪語をやつてのけて、いよゝゝ孤立化の道を早めつゝある。中共が尖鋭化すればするほど、自らの墓穴を掘る時期は早くなる。シベリア民主運動が尖鋭化して、日本国民から総スカンを喰つたように。

それとも郭氏は第三、第四の生き方を選んでゐるのだろうか。彼は迫りくる全国的な総点検運動に耐えきれず、我身が可愛くなくて演技による延命をはかりつゝあるのか。それとも本心から七十年の過去の作品が無価値で焼き捨てるべきだと信じてしまつたのか。

郭氏の心の秘密は時間の経過を追つてみなければ判らないものであろうか。いやたとい歴史が過ぎようと、松川事件の真犯人の心の秘密が判らないように、それは永遠の謎の中に包まれてしまふであらう。(岡山県笠岡商業高校教諭)

古典の窓

慈悲の心を
物いはぬ四方のけだもの
すらだにもあはれなるか
なや親の子を思ふ
(源 実朝・金槐集)

「歌よみに与ふる書」の冒頭において正岡子規は、万葉以来の卓越した歌人として実朝を評価した。子規は実朝を「実に千古の一人」と絶賛し、「真淵は力を極めて実朝をほめた人なれども、真淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候」とまで言った。だがその後、実朝の評価については変わった。「万葉調の歌人」というレッテルはむしろ実朝の世界の独自の輝きを封じこめる役割を果してきたようである。

正岡子規が古今集を批判して万葉を称揚したのは単に万葉と古今の歌風の相違を問題にしたのではなかった。子規にとって古今集の歌が我慢ならなかったのは理屈という知的な操作によつて、短歌の生命が無惨にも分断された姿をみせつけられたからだだった。

子規にとつては万葉と古今の色調の相違などは殆んど問題にならなかった。五七五七七七という短歌形式のもとに、芸術としては似ても似つかぬ歌が、それは必ずしも古今集のすべではなかったが、千数百年の間、日本の歴史を風靡してきたことに対するはげしい憤りが燃えただばかりである。いわば「理屈」によつて蔽いつくされた文芸の風土の中から、新鮮な人間的情感を発掘しようとしたのが子規の短歌

革新の真義であった。子規が強調したのは万葉調という、古今調と相對の世界に立つ一流派への共感ではなかった筈である。

ここに掲げた実朝の歌の哀切なひびきはあらためて説明の必要もあるまいが、例えば四句目の「あはれなるかなや」という小刻みにたゆたうおもいとそれを一挙に押し流そうとするはげしさとの間にみられる緊張した調べはやはり万葉のものではない。そこには平安末期から鎌倉にかけての変転を生きぬいた民族の経験が、仏教思想を内面化してゆく過程に生まれた独特の調べがある。さらに五句目の「親の子を思ふ」という言葉を一術もなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らにさやりぬ」という憶良の歌に比較して見るがいい。はげしく迫るおもいをためらうことなく、卒直に表現した憶良に対して、実朝には、生々しい現実の諸相を、人生普遍の法則の中に客観視えたものだけに許された、はりつめるような詠嘆がある。

「はのはのみ虚空にみてる阿鼻地獄行くへもなしといふもはかなし」「秋の花くれなくまでもありつるが月いでて見るになきがはかなき」これら金槐集の代表作のどれをとつても、そこには万葉調というものには到底概括出来ない、沈痛なしらべがある。このしらべの中に、中世の動乱を生きぬいた民族の経験を偲ぶことなしには、日本の歴史は我々の前に姿を現わしてはこないのである。

(修猷館高校教諭 小柳陽太郎)

案内

第十一回学生青年

「合宿教室」

主催 大学教官有志協議会
国民文化研究会

期日 八月五日(金)午後二時より
同九日(火)午後一時まで四泊五日

場所 長崎県南高来郡小浜町雲仙国立公園小地獄 雲仙ユースホステル

参加者 男子の大学生および社会人、約二百名、女子については紹介又は推薦による

研修テーマ

A 世界の動向と日本の進路
―総合的な現状把握・日本人としての自覚・青年学生の課題

B

基本的な人生観の探求
―学問と読書の態度・人生の表現としての和歌創作および相互批評・国民同胞感の体験的把握

実施要領

①講義「近代化の意味とその克服」
文芸評論家 福田恒存氏

「私の経済哲学」

世界経済調査会理事長 木内信胤氏

②「現代日本における学生・青年の生き方」についての討議

③班別によるフリー・トーキング

④木内・福田両講師を中心とするパネルディスカッション

⑤テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

共同研究

⑥和歌創作および各自の創作作品の相互批評

⑦レクリエーション

費用 参加費、学生・三〇〇〇円
社会人・五〇〇〇円(プリント代等含む)、参加学生片道旅費は主催者側負担

申込先 東京都中央区銀座七の三(柳瀬ビル三階)社団法人国民文化研究会宛

編集後記

維新から百年、敗戦から二十年、日本国民は緊張と弛緩と、栄光と悲慘と、言ひがたい動乱の経験を継続しつつあるといへませう。その間に「決して変質したり死滅したりしてしまつてゐない」と信じられる固有文化の精神が、今冬眠状態にある、その憂うべき顕著な本質面に於いて幡樹先生が言及されてあります▼広瀬誠氏は夜久教授著「歌人今上天皇」の中にもその研究が引用されてゐて、和歌、特に天皇御歌について久しく心を潜めつゞけてこられた若い歌人。すぐれた御製をもろともに仰ぐ心を誘はれます▼本誌には何度も御登場いただいてゐる名越氏抑留中身を以て共産革命の激流を生きた同氏の革命観、中共批判です▼昨夏の合宿教室における岡潔先生、木内信胤先生花見達二先生の御講義などを収録して「日本への回帰・第一集」がこの程出版されました。二九五頁新書版、定価三〇〇円送料五〇円、お申込は東京本部へどうぞ。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル3階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町3 宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

天皇家の伝統

— 小泉信三先生の追憶 —

先ごろ小泉信三先生の逝去が伝えられると、国中の報道機関は挙げて先生の訃を悼み、先生の高邁な人格と卓抜した業績に対し、哀惜の意を表した。小泉先生と僅かにもせよ御縁を有する我々国文研同人にとっても、先生の訃報はまことに痛惜極まるもので、一しお哀悼の念を深うさせられたことであつた。小泉先生が我々国文研のよき理解者であり声援者であられたことは、先生が昭和三十六年八月「毎日新聞」紙上に『国民同胞感』なる一文を発表され、我々の合宿教室と合宿記録に対して、懇切な紹介批評の勞をとって下さったという事実が、これを証明している。しかしこれより以前に、私が先生の御宅をお訪ねした折、先生が口ずから我々に対する温い御気持を示して下さった経緯については、同人の多くの方も熟知してはおられぬと思う。現身の先生にお目にかかることの叶わなくなつた今、私にはあの折の先生の温容と慈愛に充ちた御言葉の数々が、哀別の悲しみ

と共に追想されて来る。特にあの折、私の質問に答えて先生が、天皇陛下の御為りについて話された含蓄深い御教示は私の終生忘れ得ざるところで、今記憶を辿りながらそのお話を再現してみたい。あれは確か昭和三十四年のことであつたかと思う。国文研が初めての大型合宿(第一次阿蘇合宿)に踏み切ろうとした時のことであつた。例年のように合宿の講師を誰方にお願いするかについて会議が持たれたが、席上異口同音に挙げられたのは、件の小泉信三先生の名前であつた。けれども、何せ小泉先生は学界の巨匠である。国文研合宿如きに果して来講いただけるかどうか、と不安と躊躇は覆うべくもなかつたけれども、そこは松陰先生流の『至誠而不動者末之有也』、ま心をもつて當ててみるに如かずというこゝとに一決、その大役は私に課せられた。そこで私は過年度の合宿記録と共に長文の書信をしたため、歎願の条々を纏繞した末に、不日学会にて上京の際に是非お目にかかつて御返事をうかがいたい、と

書き送つたのであつた。今にして思えば青年密氣の非礼の数々、身も竦む思いがするが、幸いにもこの歎願は容れられ、程経ずして広尾の御宅の門をくぐることになつたのである。これが我々と先生との接触の始まりである。先生は我々の合宿記録を読んで下さつたと見えた。幾つかの質問の後に、「君達の仕事は大変有意義な仕事だと思ふ」と、極めて端正な口調でおっしゃつた。それに勢を得て来講の御願いを陳べたところ、その件は健康上その他の理由で不可能と答えられ(事実、先生は戦災のいたましい傷跡を身体に残しておられた)、切角ふくらみかけた希望も一度に萎んでしまふ感がした。私の顔に失望落胆の色が漂つたのであろう。それに同情されてか、暫く話して行つたらということで、西洋史学界の近況とかマルクスとラッサールの話とか、いろいろ話したように思う。その中に私はどうしてもこの機会に、皇室に近いところにおられる先生の口から、天皇統治の真義については是非ともお聞きしたい、という熱願がむくむくと湧いて来て、とうとうそれを口に出してしまつた。

小泉先生が皇太子殿下の傅育を嘱せられた時に、実は非常に考えられたさうである。一般の青年の教育についてならば先生も慶応義塾の経験がおありだし、さして苦にされることもなかつたのであるが、事は将来天皇の御位につくことに定まつた方の傅育なのである。それには一般青年の教育とは異つた特殊性があるべきだ、と先生は考えられた。さればその特殊性を発見するには、そのような特殊の教育を受けたいことのおありになる方から、その経験を聞く以外に方法はない。とすれば、そのような方は現今上陛下以外にはいらざらぬ、陛下に御質問を呈する外はない。恐れ多いことながら責務の重大さにかんがみ、敢て御質問を呈しようと、先生は決心された由なのである。陛下は小泉先生の質問状に対し、暫くの猶予をおかれ、お若い時の日記などをさへ繕いてお答えを用意なさつたという。その質問の箇条の一つに、陛下は物事をお決める場合に、決して御自身を専断によつて強引に決めてしまふことをなさらない。必ず「皆はどうか」と群臣の意見をつくさせて、それで一つの結論が出たならば、御自身の責任において

目次

- 天皇家の伝統……………川井 修治 (1)
 - 固定概念の打破……………山田 輝彦 (2)
 - 田代順一歌集を読んで……………稲津利比古 (4)
 - 陸軍士官学校で学んだもの……………松吉 基順 (5)
- ☆古典の窓 ☆韓国へ学生派遣の計画決定

御嘉納になる。このような御態度は、他の一般の政治家には見ることのできない陛下の著しい御特徴と拝察する。で、陛下がこのような態度を身につけておられるのは、一体いかなる理由によるものか。それはある特定の侍衛の方の教訓によるものであるか。又は特定の名君の伝記などから読みとられた御態度であるのか。或いはその他の理由があるのか、という質問が含まれていたということである。

この質問に対する陛下の御答えは次の

「陛下は実によとみなく答えられた。そのような態度をとるのは、決して特定の師傳の教訓によつたものではない。又何等かの伝記に示唆されたものでもない。それは実に我が家の伝統である、とはつきりとお答えになった。……自分はそれを聞いた時、まことにこれある故と思つた。長い歴史を通じて皇室が国民の欣慕の対象になり続けて来たのは、このような皇室の伝統が不変に一貫しているからだ」としみじみ痛感させられた。このよ

うな伝統に対する御自覚が失われな限り、何時の日か皇室に対する国民の純直な気持が蘇って来るにちがいない。……私はこの折の小泉先生の深沈たる声音が今だに耳底にこびりついており、あの時私の全身を押し包んだ言い知れぬ感動と共に、その一語一語を想い起すことができる。

小一時間の訪問を終えて辞去する私を扉の所まで送って下さった先生は次のように語られた。「君達の運動は今の時勢

(本会副理事長・鹿兒島
大学助教 川井修治)

固定概念の打破

— 天皇と国家の問題 —

山田輝彦

視座を定めよ

一ころ進歩的文化人のリーダーであった清水幾多郎氏が「学問の世界、政治の世界」(朝日新聞六・九、六・一〇)という文を書いた。以後政治の世界から足を洗うという声明文である。安保闘争の時には全学連の思想的指導者であり、その闘争の敗北後は、感傷的な「挫折」ぶしをはやらせ、時流の推移と共に『現代思想』という著書をものしてマルクス主義の崩壊過程を論ずるといふ。その転身の速さは目を見らるるが、かけがえのない青春を傷だらけにされた青年達が一言の抗議も発しないのはいかにも不思議である。「思想」とは大学生の知的アクセサリーに過ぎないのであらうか。日本はまことにめでたい国である。

動物の生存を保証するものは、その本能のみであり、彼らはその環境によって完全に制約される。しかし、人間は選択の自由を持ち、表象の能力を持つことによつて環境をのりこえることができる。思想的天才によつて体系化され、客観化された思想体系も、その最も原初の形においては「生きむとする意志」に外ならない。そして「意志」とは「本能」と全く別物であり、進歩した生物学において、遂に生物学的には究明できぬ「あるもの」である。戦争に敗けようと、国がどうなろうと、動物の生存にとつてそれが何なのだという居直りは、原始的であるだけに極めて強烈な力を持っている。人間が動物的側面を持つ限り、こういう発想はいつの時代にも人間の本能に強く訴える。形式道徳や社会道徳やみえなどは到底この叫びに抗し切れない。無事泰

平の時には、虚偽を承知の上で敢て抑制が行われても、極限状況に迫りつめられた時、こういう本能的な叫びを抑える「意志」を持つことのできる人は極めて少ない。

敗戦は人々から一切の虚飾をはぎとり、動物の生存こそ唯一の生のあかしであることを教えた。だが、その動物的生存もまたビ・ポーン(生れる)という受動態で示されるように、自らの意志によつて始まるものではない。それは、そもそも初めから「死」を内在させているのだ。そして「死」もまた自らの意志によらず、向うから不意に訪れて来る。われわれの生存の初めのポイントも、最終のポイントもいわば「運命」である。死によつてわれわれは所詮一にぎりのカルシウムと水とに還元されてしまふという認識は、一切の感傷を峻拒する冷たい事実を改めてつきつける。キリスト教徒でない我々は「神」に吸収されるのではなく、「自然」の元素に還るのだ。この乾燥した「虚無」の立場から、人間存在の全体像を絶えず問い直すこと、この作

業がなければ「思想」はたちまち風化してしまう。「死」と「無」に視座を据えて全存在を見つめるという緊張感を失つた時、思想は必ず退廃する。我々は改めて自らに問わねばならない。死によつて無に帰してしまふ動物の生存に甘んじ得るか。この間にいのちがけで答えることができねば、その人は遂に「思想」とは無縁の存在であらう。

戦後の人間の解放といわれたものは、一面から言えば「生物」の次元への転落でもあった。一切の価値が崩壊し、飢餓状態が深まる中では、動物的生存が唯一の基準となったのもやむを得ない。「生きよ、堕ちよ」という叫びが一種の鮮烈な印象で受けとられたことは事実であった。そして、既成の価値の中核であった「天皇制」に向つて、否定の意志が集中して行つたのもまたやむを得ない勢いがあった。しかし、徹底して「堕ちる」とはまた再生への契機ともなる。これは

天皇制について

生命の力学の機微である。ムードとしての天皇制否定ではなく、生命の要求としての徹底的追尋からは、必ず何かが生れるはずである。

国家体制や統治機構は、いうまでもなく人間の作り出したものである。ア・プリアオリに存在するものではない。「天皇制」もまた日本人の創作であった。維新前後の、列強の力がせめぎ合っている状態の中で、天皇の権威以外に「国家の機軸」となるべきものはまずなかった。国家生活はきれいなごばかりではない。むしろ現実の国家生活は対立抗争する利害と力のきしみ合う場である。そういう無数の力がひしめき合いつゝともかくもある均衡を保つためには、やはりバランスの軸を必要とする。その軸は、多くの国々では流血の中から生み出された「力」である。権力は血なまぐさいものだという通念は、世界の多くの国々の事実が証明している。もし、「力」とは次元を異にした伝統的権威がその役割を果すならば、それは正に理想的な国家形態であろう。そして明治の天皇制は完璧に近い形でその役割を果したのである。明治天皇の治下に達成された歴史の高まりは、日本民族のエネルギーの結集点として何が最も「有効」であるかという否定できぬ証明を与えているではないか。

勿論、人間の歴史が全く無謬であるはずはない。無謬の歴史とは観念の中に存在する図式に過ぎないであろう。天皇制もまた、時代と共に固定化し、生命を失い、かつては生命の結集点であったものが、抑圧と呪縛の根源となつて行った。天皇の心を傭ふということが全く教えられず、タテマエとしては尊重されながら、神棚の護符のように国民と無縁なものになつて行った。しかし、「海ゆかば

水づく屍」とうたつて死んで行った特攻隊の若者たちを大死であつたときめつての権利を生きている者は持つているのだろうか。人間が強制ではなく、自発的にいのちを捨てるといふことは由々しい事柄ではないか。動物的生存を唯一至上の基準とする者でなければ、特攻隊の若者たちを冷笑することはできない。ともあれ、天皇についての先入観を洗い去つて、もう一度その存在を正確に見つめてみよう。その功罪についての、厳密な貸借対照表も作つてみるがよい。どのような未来政治の青写真でも、何らかの権威の中核は必要であろう。天皇のウエイトに代るそういう存在が外にあり得るだろうか。

「国」の概念を洗い直せ

一人の人間を強制して死地におもむかせる合法的な力は、地上においてただ「国家」だけが持つていて。戦争はそういう国家の強制力をなまな姿で人々につきつけた。戦争がいたましい敗北をもつて終つた時、すべての呪詛は國家にむけられた。個人、社会、人類という人間観が殆んど抵抗なしにうけ入れられた背景には、この國家への呪詛、権力への嫌悪があつたからである。しかし、この発想には、すべての有機体を要素に還元する十九世紀的な要素主義がないであろうか。絶対的に孤立した個人というものは存在しない。ロビンソン・クルソーのよう

★案内

第11回学生青年

「合宿教室」

主催 大学教育有志協議会
国民文化研究会

期日 八月五日(金)午後二時より
同九日(火)午後一時まで四泊五日

場所 長崎県南高来郡小浜町雲仙国立公園小地獄 雲仙ユースホテル

参加者 男子の大学生および社会人、約二百名、女子については紹介又は推薦による

研修テーマ

A 世界的動向と日本の進路
—総合的な現状把握・日本人としての自覚・青年学生の課題

B 基本的な人生観の探求
—学問と読書の態度・人生の表現としての和歌創作および相互批評・国民同胞感の体験的

実施要領

① 講義「近代化の意味とその克服」
文芸評論家 福田恒存氏

「私の経済哲学」
世界経済調査会理事長 木内信胤氏

② 「現代日本における学生・青年の生き方」についての討議

③ 班別によるフリー・トーキング

④ 木内・福田両講師を中心とするパネルディスカッション

⑤ テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

⑥ 和歌創作および各自の創作作品の相互批評

⑦ レクリエーション

費用 参加費、学生・三〇〇〇円
社会人・五〇〇〇円(プリン

ト代等含む)、参加学生片道旅費は主催者側負担

申込先 東京都中央区銀座七の三(柳

瀬ビル三階)社団法人国民文化研究会宛

な特殊なケースを除いては、個人とは人間存在の一つの抽象である。人類という概念もまた全く具体性を持たぬ一種の生物的概念である。個人、社会、人類という系列には倫理的な緊張関係が全く捨象されている。生き、愛し、憎み、つながらず、生命の原体験がすべてきりすてられ、人々は具体的な重苦しい責任から解除される。軽薄な文化人が、軽薄な論理を組み立てるには如何にも都合のよい概念である。そして、戦後の日本人は残念なが

らその軽薄さを愛したのである。それは一つの卑怯な逃避ではないか。人間の生はそんなスマートな論理だけでは裁断できるものではない。「家」と「国」は、その中で現実の生活が展開される場である。否応なしにのつびきならぬ責任が問われるのである。「家」は血縁という動物的生存に根ざしたものであるから、まだ分りやすい。しかし、すでにそこには生物の次元で把握できぬ倫理が入って来る。戦後の文学は

家族相剋の修羅を好んで描き出しているが、家族という小単位でさえも、本能はしばしば倫理を圧倒する、戦後の国家観はそれが拡大されたものである。国家秩序は人間の主張の邪魔になるというムードがある。

国家はわれわれを法的に規制し得る最終の単位であるばかりでなく、われわれにとって選択をゆるさぬただ一つの存在形式である。どの国に生れるかは運命であって、恣意の選択はゆるされない。われわれの人生はその中でいとなまれ、一人一人の力は結集して一つの力となり、実現すべき諸価値は、国家という通路を通らなくては世界に広がってゆかない。いたけだかに基本的人權を主張する人も、それを具体的に保証して呉れるものが、外ならぬ国家であることを忘れて

いる。国立大学が反体制運動の牙城となっているのも誠に奇怪な事実である。国立大学の権威の源泉は外ならぬ国家である。その権威によりかゝって、権威の源泉に挑戦しているのだ。勿論大学は国家権力や政府の代弁者であってはならない。時の権力に対する果敢な批判も必要であろう。しかし国民共同体としての国家に対する責任の感覚が皆無であるばかりでなく、その変革を目的とする実践運動が、国家から扶持を貰っている人々によって傍若無人に行われている事実はおかしい。大学の「自治」は国家という「自治」体の下に帰属する。その逆ではない。国の独立なくして何の大学の自治ぞや。まして、意識分子の目的とする社会主義国家に於ては、大学は権力機関の部品以外の何物でもないではないか。ウルブリヒト政権下の東独の大学や、整風下の北京大学の様子を少し緻密に勉強してみる

がよい。権力の介入や思想弾圧どころのさわぎではない。現代版「踏絵」のような峻烈な異端査問が行われ、批判にさらされた人間は、ポロポロの生ける屍になるまで追求を続けられるのではない。社会主義権力だけは例外だというような言いがれば、人間の名において許せないことである。

国家を制度や構造の面からとらえるのはそれぞれの専門の学問の領域があるであろう。しかし、「祖国」とか「母国」とかいう言葉に示されるものは一つの全体全命である。危機に当って、そのためにいのちを捧げることは、資本主義といわず、社会主義といわず、すべての国に

田代順一 歌集

「雲か萍か」を讀んで

私が田代順一という方の名前を耳にしたのはかなり前のことになるが、小歌集「雲か萍か」を手にしたのはほんのついで半年程前である。恩師から借り受けたこの歌集をめくりつゝ、和歌を讀んでいると、友人達にもこの歌集の存在を是非知らせたいという欲求が起った。かく思つたのも、このまゝにしておくのは惜しいばかりでなく、和歌を生きる支えとして、書を真剣に生き抜いた先人の偽らぬ求道の典型をこゝに見たからで、そういう訳で早速印刷して友に配ったのであった。

おいて「美德」であつたし、今でもその通りであろう。ただ日本だけが、そういう世界の普遍的道徳に背をむけて、一足とびに人類という抽象に向つて忠誠を捧げようとする。同胞のために心をくだく経験のない者にどうしてそれができよう。

うつし世は悲しきゆゑに、詩にきざむいのちの律動、ものみな枯れて、残るは地熱、祖国のいのち。
と詩人はうたつた。その祖国に力あらしめよ。きびしい戒律や教義のような跳躍台なしに、死を克服し得る日本人は幸いなるかな。一四一、六、一八一
(福岡県立若松高校教諭)

稲津利比古

(九州大学・二三)

彼は明治天皇崩御後の大正二年に親鸞聖人の遺跡を訪ねて諸国行脚の旅に立つたのであるが、今日に生きる私達から見れば、いかようにもその意味付けは可能かも知れない。だがその想像を許さぬほどの何物かが、この若き先人の胸に湧きだぎつていたことを、和歌や書簡に感じない訳にはゆかない。私達は応々にして、崇高な事実を見聞すると否定的な解決で臨み、それらに時代背景や何やら夾雑物を混入して黙殺しがちである。こういう錯誤は人を懷疑に誘ひ、更に悪いことに当の個人の純粋な意図を踏みにじ

る結果となるが、田代順一の場合も、「あの時代だったから」というカッコつきの評価でなく、素直な気持ちで受け取りたいと思う。

この波のうち寄するごとひたもおちずわがむなぬちはうごきてあれよ
雲をとばすあら海さしてこぎいづる裸の男児に勇まし
岸をうつ波のうねりの高うねり見るにしぬばゆ底の力の
わたつみの底つゆらぎのひとゆらぎ毎に生るるのぞみ砂丘にひとり立つ白木の鳥居の神々しさよ

むなぬちにとゞろく波をうちたゝみさけびし歌に力あらせよ
ひまもなくとゞろく波の大なる力をいだけ世にふみ出でむ
うなばらにひたにむかひてわがさげぶ歌よとゞろく波の音しのげ
はらからよしましも忘るないくき神まします鹿島の浦のひゞきを

彼は茨城県の福田鹿島をこよなくしたい、なつかしんだ。この連作は沖を見はるかす丘に立ち万葉詞を讀みつゝ、詠んだものであるが、細字で「鹿島と私の生命と如何に共鳴したか、それはこの歌にかすかながら現はし得たかと思ひます」とあるように、彼が海という大自然を目前にして、空間の一点景に過ぎない我が身ではあるけれど、歌で自己を叫ばずにはおられなかった熱っぽい衝動と郷愁に似た鹿島への愛着を、私達は力強く感じ取れる。
旅行とはいへ、荷物といへば宗教や文学の書物ばかりで、貧相な身なりで出で

立ち、旅費は道々町で働いて工面した模様であるが、彼自身安宿に泊まり、出かきに来た最下層の人々の間に交じわって様々の経験を積んだのであった。

家の戸をはつかにひらき宿代をまつとひ入り来ぬわか者三人

いろりばたに腰をおろすやふるさとの飢饉を語る涙をうかべて

かくてたかくればはたらき身を終ふる人のもろ肩にこの世はかゝり

をやみなくつとめたゝかふ雪国の人に

かへりみよねむれる人々

われは南に生まれえられたど雪国の人を

心にかして生きむ

したはしやいとほしきかな汗をあびて

はたらくことより他を知らぬ人

大やまと大和島根をうち建てし八百萬

神みたまたまはね

私は和歌は歌の中だけで創造するのはなく、目、耳、手、とといった、所謂五官を存分に働かせなくては優れたものではないことは理解してはいたつもりであったが、それが単なる日常生活の経験の一コマに止まらず、云わば行動する歌人として作歌に没頭し、生命を賭けて生きてゆくことの厳しさをまざまざと示してあげたのは外ならぬこの田代順一であった。私達が和歌を詠みたくなつた時は必ずといってよい程、「心のけじめ」をつける必要性を感じた場合が多い。時には、不安定な心の状態から逃れ、心の安定へと自己を駆りたてる生活の制御的役割を荷っている時さえある。従って和歌の出来、不出来が尺度となり、精神が統一されていない時には和歌は詠めないという具合に、心の健康度がある程度

計量可能なことは確かな事実である。彼が生活の中に題材を捜すということではなくして、生活が即、題材である点で創作の苦心はいかほどであったかと偲ばれるが、私が、前に「行動する歌人」と言った理由もそこにある訳で、私達が過去に心を移して、とかく内省的な和歌を詠む嫌いがあるのに比べて、彼には未来に開けた、晴々しく逞しい和歌が非常に多いということとは確然としているのではなからうか。

次は北国の雪あらしを詠んだもので、私の最も好きな和歌である。

くろきもの島か見えるまにたちまちにくづれくだけてとび来る雪かもよこぎまにとび来る雪は弾丸のごとくあと曳きうなりてやますしきりなく雪をふきまきほえうなりくろずむ海ばら見るにおそろしほえうなりくろずむ海はわがひとりを怒りめざしてあらぶるに似たり海ばらゆ雪あらしはかしこくも息をもつかずたゞに吹き吹くひまもなくあらぶる雪のたゞ中を足ふみしめていそげとすゝますよるめきたふれむとして顔をあげ見れば大木のかげにわれあり海ばらの雪あらしをまにうけたわみにたわみ立つひとつ松

根もごとに天に飛ぶかかを見るまでに松はゆらげどなほ立ちてをり

長途の旅の動機ともなった親鸞について、彼が師と仰ぐ歌人三井甲之に教えをうけ、信仰の世界に入っていたようである。その間の脈絡を伝える文が歌集にあるので引用してみると、「……稲田に來り宿をとり飯を食つて親鸞のお文を

よんでゐますとふと心に浮んだのはさきのあなたのお説でした。これは教理、あれは文学論だが、その心は全く同じなのに驚き、同時に私の胸はあかるくひろくなり、うれしくってたまらなくなりました。闇からあまねき光の中にとび出した心地がありました。わが行く道がはつきり見ええました。恐ろしくなりました。大胆になりました。自由になりました。どこまでも行かう。たゞ進もう、進むばかりだ、これがすべてだといふ信をいだきしめ得ました。何といふあり難い賜でせう。肩が軽くて飛び立ちたいほどうれしうござぬます。わががあるまゝにさらけ出して、はからはず、わざとせずつて生きていくことが無上道であり、無極の生であり、正定聚の位だといふ信をこれほど

陸軍士官学校で学んだもの

松吉基順

はつきり抱くことが出来たのは何といふあり難い仕合せでせう。これも親鸞のおかげであり、あなたのおかげであると思へばお礼しないでは居られません。……とある。まさに踊躍歡喜の様が目に見えるようであるが、それと共に親鸞を通して結ばれた人との深い人間的つながりの美しさをそこに感じない訳にはゆかない。

私は太平洋戦争が始まって間もない昭和十七年の春、陸軍士官学校に入校した。卒業は終戦も間近い昭和二十年六月であった。その間戦局はわれに利あらず、緒戦の勝利から次第に敗戦の色を濃くしていった。しかし、私たちが「大君のみこと」のままに「戦場に臨むため、ひたすら日々の訓練に全身を没入していた。

研究から逃避することはできなかった。本科は相模原の相武台上にあり、丹沢連峰とくに大山の偉容が眼のあたり眺められた。だが、そこで訓練は、教官から「自然の美しさに心打たれることを忘れて、大山をいかに攻撃するかを考えよ」と強調されるほど激しかった。こうして私たちは本科の一年数ヶ月、戦術研究に明け暮れて過したのであった。戦術は起り得べきあらゆる可能性を抽出して的確な判断を下し、その起こるであろう状況に対処すべき最善の方策を考究するものである。戦術研究の基本は原理原則の徹底的な把握にある。予測困

難なあらゆる戦闘状況に対し、必勝の原理原則を適用して最善の方策を立案する——それは企業経営管理にもそのままあてはめることができる。販売において商品の特性を把握し、それに基づいて顧客の選定などに全きを期するならば、孫子の「敵を知り己れを知らば百戦してあやふからず」となることは間違いない。また細分化された職務について、その職務の果す役割り、目的など即ち原理原則を的確に把握させて能率向上を図ることも企業の戦術である。

軍の戦術における原理原則は、作戦要務令である。作戦要務令はあらゆる戦術に基づいて編纂されたものであり、わが国軍創設以前の先人の尊い血の結晶ともいべきものである。作戦要務令は綱領第一の「軍の主とする所は戦闘なり……」から始まるのであるが、巻末まで終始一貫して強調していることは、指揮官の識見、技術や徳性に関する事項である。軍隊の戦闘力が最高に発揮されるか否かは、一つに指揮官の力が卓越しているか否かにかかっている。従って作戦要務令は、各項目ごとに指揮官としてあるべき姿に言及しているのである。

指揮官は熾烈な責任観念、強固な意志、勇気、決断力、独断能力などを身につけるとともに、部下に対しては骨肉の情をもつて遇せよと厳しく教えられ、私たちが自らも、將たる器々となるべく日夜研鑽を続けたのであった。

私たちは卒業すれば、わずか十九歳で小隊長となり、間もなく中隊長となつて数百名の同胞の生命を預かる。部下の大多数は私たちがより年上の人々である。もとより軍隊の指揮は天皇の統帥権に根源するものであるから、たとえ能力、徳性の足りない指揮官であっても、部下はそ

の指揮、命令に服従しなければならぬ。しかしここで考えねばならぬのは、指揮官の良否が戦闘の勝敗、部下の生命を左右するということである。たとえ二十歳に満たない小隊長、中隊長であっても、部下が心からその指揮、命令に従えば最高の戦闘力を発揮することができ。私たちが日夜心を砕いたのは、実はこのことであつた。

毎朝、雄健神社に参拝して明治天皇の「軍人勅諭」を拜誦し、まことの指揮官たるべく護國のみ靈に祈念した。また夕食後のひととき、現に戦場に戦つている先輩の苦闘を偲び、後に続く者として同胞の期待を裏切ることのないように誓つた。時には消灯後眠れぬままに、この程度の修練ではまことの指揮官になり得ないのではないかと、自己の未熟さを省み自らに厳しく鞭打つこともしばしばであつた。こうして戦術研究に明け暮れた本科での生活は、まことの指揮官たるべく心魂を傾け尽した青春の日々だったのである。

能力や徳性は、頭で理解しただけでは意味がない。これを為すべきだと意識して行なう段階ではまだ完全でない。何らの意識を伴わず実行できるようになつてはじめて真の能力、徳性ということができる。私たちはいかなる職域にあつても、それらを完全に自己のものとし、身につけることが肝要である。

もとより人は生まれながら指導者としての能力や徳性を備えている者はいない。だからこそ私たちは日々の行動にも何を為すべきかを考え、反省を繰り返しつつ、その積み重ねによつて能力や徳性を身につけるのである。これが練磨である。自らを練磨するには勇気が必要であ

る。勇気は小さな自己に捉れていては生じない。自己が未熟であることを自覚し、前進しようと決意するところから真の勇気は生ずる。

陸士では同期生相互の競争心を煽つてその成長を促進する傾向がないでもなかった。私たちは少しでも良い成績を得ようと競争し、いつの間にか自己の栄達という己れの欲望に捉れていく。しかし私たちの使命は戦闘に勝つて国を護ることにある。同期生は共に助け合つて戦う戦友なのである。そのことを強く自覚して、小さな自己に捉れていく愚かな心に厳しく鞭打つたのである。

私たちは間もなく戦場に赴く身であり、必然的に生と死の問題を考えざるを得なかつた。それは究めつくせるものではないが、国を護るという使命を全うすべく毎日の訓練に真剣に打ちこむことによつて「生も死も祖国の生命への帰一だ」と不完全ながらも自覚することができた。祖国の苦難の時代に生をうけた喜びを感じたのである。生と死の問題を克服するためには、日常の行動における本能的な欲求に打ち克つ修練は必要であつた。当時の陸士では食糧事情は極めて悪く、少量の高梁飯と一杯の汁だけで、私は卒業の頃には十キロもやせてしまった。五、六人の同期生と一つのテーブルを囲んで食事をとるのだが、激しい訓練と食べ盛りの年頃のため、少しでも多く食べたいという欲求は当然のことであつた。しかしその欲求に打ち克つて自らは多くを望まないように修練するのである。そのような行動によつて自らの心は同期生の心に通い、お互に助け合う環境が生まれてくる。この場合、人間の本能に根ざす欲求だから無意識に行動が伴うことは不可能だろうが、それを積み重

ねることによつて能力や徳性をおのづから身につけることができるのである。現在の社会には自己拡張欲と事なかれ主義的な行動があまりにも多い。私の職場の金融界では、預金量の拡大が唯一の目的であるかのように激しい競争を展開している。経済界は相互に協力し、支え合つて繁栄することを忘れていくようである。商取引とは、相手に有用なものを与えて相手を富まし、相手に利益を与えらるることによる当然の報酬を得て自らもまた繁栄する——その商取引の基本が顧みられていない。また企業内部においては、上司の機嫌を損うことのないよう小心翼翼と行動し、部下に対しては厳しく育てることなく、頭をなでて仕事をさせようとする——これが昨近の処世道となつていくように思われる。

しかしながら、真に企業を愛するならば、これらの誤りに気づき、それを根底から打破しようと試みる勇気をもつべきである。人間としてまことの生き方を求めて、かけがえない日々を真剣に生きるならば、企業を愛し、自己を支えてくれているあらゆる人々を愛さなければならぬと自覚するであらう。

私もまた国文研の一員として、社会の通弊を打破するため、また共に働く同僚たちを人間としてまことの生き方に目ざめさせるため、現在の職場において微力を尽している。この私を支えてくれているものこそ、私が陸軍の士官学校で学んだ指揮官としての心構であると思われるのである。

(安田信託銀行大森支店長)

古典の窓

面影もまぼろしも、見え隠れつするほどに、東雲(しのめ)の空もほのぼのと明け行けば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草花々として、たゞしるしばかりの浅茅原となるこそ、あはれなかりけれ、なるこそあはれなりけれ。

☆ (謡曲・隅田川)

記紀万葉の世界が、民族の原初の体験を、雄大な振幅の中で、嵐のように表現し得たとすれば、それから千年、大陸の文化を吸収しつくした中世の人々が、上代とはまたことなつた人間感情の絵模様を鮮やかに記しとどめたのが「謡曲」であつた。

謡曲ではその数多くの曲目を、神・男・女・狂・鬼——すなわち神を祝福し(神)、戦の修羅をさまよ(男)男女愛恋の心をつくし(女)、現実生活の苦悩にあえぎ(狂)、超現実の世界にあそぶ(鬼)、という五つのタイプに分類している。しかもその五つの分類は、人生の律動を様式化した「序・破・急」という三つの段階のそれぞれに配置されて、(神は序、男・女・狂は破、鬼は急に分類されている)そこには壮大な人間感情の曼陀羅が織りなされている。ここにかゝけた「隅田川」は「破」の三段、所謂現在物、或は狂女物と呼ばれる一群に属している。

人買いかどわされて遠く東国へ去つたわが子のあとを追つて母はあてどもない旅をつづける。場所は隅田川の渡し場、母はすでに狂乱の態で登場す

る。狂女とはいいいながら、その心情のやさしさに心うたれた人々の口の端から、女はわが子がこの川のほとりて、旅なれぬ疲れから遂に短い生涯を終えたという、いたましい物語りを聞くのである。「その幼き者こそ、この物狂ひがたづぬる子にてはさむらへ」とよ。こうして子供の墓に詣でて涙にくれる母の目に、子供のまぼろしが現われるが、その姿も消えてあとにはたゞ茫茫たる浅茅原が残るばかり、ここに引用したのは、その氷りつくような終末の部分である。

謡曲はまさしく人間感情の曼陀羅である。そこには緻密に組み立てられた思想の大系はないが、目もあやな情感の大系がある。中世の人々の心を去來した、さまざまの心のゆれ動きが無数の角度から追求され、形象化されている。われわれの祖先が描いた、この見事な感情の曼陀羅を、単なる「文学」という範疇の中にとじこめてはなるまい。

明治以来「いかに生くべきか」という思想の命題が青年の心をとらえて久しいが、われわれは「いかに感ずべきか」という重大なテーマをながしるに、情感の訓練を怠つてきたのではあるまいか。「隅田川」の最後に、むせぶような調べでくりかえされる「あはれなりけれ」という言葉にこもる無限の情感を味識することなしに、われわれは日本の文化を語ることは出来ないのである。

(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

★出版案内★

『日本への回帰』(第一集)

大学教官有志協議会編
社団法人国民文化研究会編

昭和四十年八月城島高原における 第十回合宿教室を中心とした 青年・学生運動の新しい展開の記録
新書版二九五頁 定価三〇〇円 75円

目次

一、学問・人生・祖国
私達の学生運動……西元寺敏毅

第十回「合宿教室」のあらまし
二、合宿教室における講義

私の構想する世界の新秩序……木内信胤
日本の情緒について……岡 潔

日本政治の憂うべき動向……花見達二
パネル・ディスカッション

一木内・岡・花見三先生を問ふ

三、古典入門
吉田松陰「士規七則」……玖村敏雄

山鹿素行について……筒井清彦
聖徳太子「勝鬘経義疏」……夜久正雄

天皇と天皇のみ歌……山田輝彦
吉田松陰「講孟孟話」……小柳陽太郎

合宿歌集

韓国へ学生派遣の計画が決定

昨年夏、本会は日韓学生の交換を計画し、日本から韓国を訪問する学生、韓国から来日して夏の合宿教室に参加してもらう韓国学生、いずれも待機してその実現を期したが、ご承知のような当時の日韓の国交状態は、ついにこの計画に日の目を見せることができなかった。

それで本年は、昨年とは別途の計画を進め、八月二十日見当の関釜連絡船によって、十六名の班を韓国に送ることになった。往路は、釜山を起点として研修旅行を進め、三十八度線見学、その他韓国学生との交換などを各地で持ち、十二日間を経て、帰りは空路帰国ということになった。

団員十四名の学生は、昨年度の合宿教室の参加後、一年に亘つて本会の諸合宿に参加した諸君であり、今年の雲仙合宿では、幹部の任に当たつてくれる諸君である。その人選も全国的な選出方法をと、国大研学生チームのベストチームということで派遣するので、乏しい旅費の行程ながら、きつと奔放瀟灑な観察と、細心周到な交歓の実を挙げてくれることを期待したい。

派遣団員は左の通りに決定した。

○団長 川井修治氏(本会副理事長) 鹿兒島大学助教

○副団長 小泉明氏(本会在京幹部会員) 小泉計理事務所長

○団員 稲津利比古君(九大、工学部三年)

古川 修君(九大、法学部三年)

井上 慎一君(京大、法学部三年)

福島 義治君(京大、法学部三年)

北島照明君(鹿兒島大、教育学部三年)

徳田浩土君(鹿兒島大、教育学部三年)

森重忠正君(長崎大、経済学部四年)

岸本 弘君(富山大、工学部三年)

寺川真知夫君(神戸大、文学部四年)
伊藤三樹夫君(岡山大、理学部三年)
磯貝 保博君(中大、商学部四年)
今林 賢郁君(早大、政経学部三年)
岩越 豊雄君(亜大、経済学部四年)
山路 忠重君(亜大、経済学部四年)

小田村本会理事長「アジア西班」の団長を受諾

政府は、皇太子殿下御成婚を記念する事業として、全国から選ばれた青年男女（二十才から二十六才までの者で社会活動・青年活動の経験ある者、大学在学学生を除く）を毎年世界各国に派遣してきたが、本年度（第八回）の青年海外派遣団員十班の団員ならびに団長計一〇二名を、さる五月上旬に決定した。

小田村本会理事長は、すでに数年前および昨年度のこの事業の折に、政府筋から内々に団長就任の委嘱交渉を受けられたが、旅行中における会務の停端を心配されて、その都度、辞退して来られた。しかし、今回重ねての交渉を受けられて遂に意を決して受諾されることになった。もとより本理事会ならびに在京幹部会の意向は、理事長不在中の会務処理に一抹の不安を感じてはいるものの、理事長の団長受諾ならびに海外旅行については、本会の将来についても、少なからぬ成果が期待できるとの観点から、積極的な同意に傾いていた。また理事長勤務先の亜細亜大学においても、学長（本会顧問）の太田耕造先生をはじめ、多くの方々の賛意があつて、理事長の団長受諾ということに至つたようである。

本年度の「第八回青年海外派遣」事業は、南欧、北欧、アフリカ、中近東、アジア西、アジア中、アジア東、北米、オセアニア、中南米の十班になつてゐるが小田村理事長は、本会開催の「合宿教室」の時期との兼ね合いから、出発時期が九月中旬のアジア西班を引き受けられた。同班の主要重点訪問国は、新興国イス

ラエル（中近東地方の中心地域）と決定されており、訪問国名と滞在日数は、主要重点訪問国 イスラエル 十六泊 十七日

一般視察国	ギリシャ	四泊五日
同	トルコ	六泊七日
同	イラン	七泊八日
同	パキスタン	八泊八日
同	インド	三泊四日

というのである。なお、往きは船、帰りは飛行機というのが、この事業の特色で、往路の船中で団員の研修がつづけられることになつてゐる。いまだき一ヶ月近くも船に乗つて

天皇誕生日 平和台競技場における祝祭に参加
修猷館高校卒 小柳 左門
ひ祝をするも

天晴れてけふの佳き日に若きは集ひてはるか天皇祝ふ日の丸の小旗ふり上げ万歳と唱ふる声よ雄々しきろかも万歳の声高らかに若きらも老いもこそぞりて日の丸をあぐ古ゆうけつがれこし日の本の命とことはに絶えざらめやも

平家物語「宇治川先陣」

先がけは我が宇治川先陣
流れて馬うち入るる
おくれではならじと佐々木高綱や太刀抜きはらひ流れにぞ入る
宇治川の流れはいかに速くともこの生食よわたらざめや
高綱と生食先づはもろともむかへ
の岸にうちあがりける
宇治川の速きに流され先がけの駒うばはれし心いかにや

旅行とは、いかにもノンビリしすぎてゐるようだが、それは旅費軽減のほかに、それなりの成果を期待してのことかも知れない。寄港地の中に、香港、マニラ、サイゴン、バンコック、シンガポール、コロンボ、などがあるのも、興味深いし上陸地ボンベイから、ギリシャのアテネへ空路直行というプランも、珍しいコースのようである。

いずれにしても、理事長の行かれる地域が東方文化発祥の地を中心とし、西欧文化が分かれて発達していった地域であることに、われわれも大きな期待をかけたと思う。ただアラブ連合とイスラエルとのあいだの不穏な国際関係だけが気になるが、その制約さえなければ、小田村理事長のことだから、イスラエルを中心にして、周辺の国々に縦横に往き来するプランを立てられたであらうに、とその点が残念に思われたであろう。

九月十五日横浜港を出航、フランス郵船カンボチ号で十月七日印度のボンベイ上陸。以後四十五日間の訪問の間に、各地の青年諸団体と友好的な交歓を続け、十一月二十日か二十一日に羽田空港着の旅程である。

同行団員名ならびに各自の研修目的については、小田村団長の手許の書類によれば、次の通りである。

- 副団長 牧一氏（行政管理局秘書課係長）
- 団員 原田隆君（静岡県藤枝市社会教育課職員、25才）— 青少年活動、組織の現状について。
- 橋本智君（名古屋市中、同朋高校教諭、26才）— 児童・青少年教育の実態と宗教の役割について。
- 茨木国夫君（京都府亀岡市役所保健課職員、25才）— 青少年運動について。

- 和田晴武君（愛媛県宇和島市大浦、米作柑橘栽培農業、26才）— 農業問題・農産物流通機構の状況について。
- 金集昇君（高知県高知市、高知県交通株式会社庶務課社員、23才）— 青少年の奉仕活動の現状ならびに交通機関の現状について。
- 村田輝子君（総理府統計局国際統計課職員、23才）— 婦人の地位とその活動状況・社会福祉の現状について。
- 佐川光子君（川崎市、高田英語学園教諭、22才）— 青少年活動と女性の役割について。
- 巖后登子君（岐阜県農業指導研究会書記、22才）— 農村勤労青少年の余暇利用の状況について。
- 上田町子君（香川県綾南町、農業ならびに家事、22才）— 主婦生活の実態と児童教育について。

以上団長を含め十一名による、二ヶ月有余の旅行の平安を祈る次第である。

なお去る五月二十六日、佐藤首相立合の翌日に全団員に対し結団式がなされ、翌二十七日には、東宮御所において皇太子殿下ならびに同妃殿下に拝謁、各班とも研修プランをご説明申上げ、団長ならびに個々の団員に対してまで、細かい質問をいただいたとのことで、小田村理事長もいたく恐懼しておられた。両殿下からは、さらに帰国後の報告をお待ちします、との有難いお言葉をいただいた由である。

編集後記 八月上旬待望の雲仙合宿教室が近づきました。例年の合宿教室に示される確固たる姿勢と、それに同感するところに発する共通の感動は、まさにタタカヒにはかならぬ人生を、日本人として生き抜くための力源とも感じられてゐます。天候の平安が祈られます。

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町3 宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

教育観の是正を要す

目に見えないものの実在を信じて、目に見えないものの実在を信じ難いのが、現代知識人の通弊であると云うのは極論であろうか。

現代学校教育、特に小、中学校所謂義務制の地方教育行政の責任者として、最近各学校を訪問し、先生方の授業を参観しながら共通した感想として、私はこの様に思うのである。小学生一年生の教室での、児童達の目の輝き、楽しい雰囲気、それが高学年になり更に中学校になるにつれて、参観するものに何か息苦しささえ感じさせるのが一般的な傾向である。勿論、先生により、教室ごとにそれぞれ異った印象を受け、又先生方はいづれも心を傾けて授業されておられることは充分感ぜられるのである。にもかゝらず私は、高学年になるにつれて、教師と生徒との心と心の交流によって生ずる教育活動が疎外される様な印象が強化されてきたのである。

これは、最近新聞紙上で論議されてい

る高校入試制度、更に中等普通教育のあり方に関する改善策として、文部省当局も真剣に衆知を集めて検討中と発表されている如く、私人が痛感していることではないのである。しかし、その改善策が単に現象面の改善に急であって、いたずらに制度面の改正に止まることに終始するならば、何ら抜本的な改善策とはならないことを憂慮するものである。問題は、文部省、地方教育行政機関、現場教師の有する教育観に対する反省から出発されなければならないと思うのである。その為には憲法更には教育基本法に対する検討が、真剣にこれらの人々の間で行われなければならないのである。終戦後の教育制度や教育観は、何れもこれを基礎として発生したからである。

私は、ここで憲法や教育基本法を改正すべきだと言いたいのではない。改正にはそれ相当な方法が必要であり、又是非検討の為に相当な期間も必要であろう。然し現実には日々教育は行われているのであり、若しも誤った又足らない教育観によって児童、生徒達が教育を受けているとするならば、それは一日も早く是正されなければならないと痛感するからに外ならない。

教育基本法は現行のまゝでも、そこに行われている教育を改正する途を一刻も一日も早く、発見し改善しなければならぬのである。その故にこそ、教育観を問題とするのである。

終戦後の義務教育の特色は種々あると思うが、一般的に強調されることは、「生命尊重」の教育、「個性尊重」の教育と云うことであろう。敗戦を契機として、その前後を区別する特色として、この言葉は教育界の一種の常識化している。従って、戦争前の教育は、生命或は個性尊重よりも無視乃至軽視の傾向があったと、反省批判されたのである。

今仮りに、その様な批判が正当であると是認しても、生命とか個性とか言ふ言葉自体の意味内容を我々は、この際反省吟味する必要があるのではなからうか。

私が教育観を問題とする云ふのは具体的には、その様な反省吟味を意味するのである。若しも、従来教師が教壇に立つ場合抱いていた教育観が反省吟味されるならば、子供に伝える言葉は同一であったとしても、その言葉の持つ意味内容は異なった響きとなって、直接聞く子供に受け留められるであろう。それが教育だからである。

確かに我々は、生命をなにもまして尊重しなければならぬと、痛感するのである。しかし、ここで言はれる生命が、我々が現実に感覚される個人の生命にのみ限定されるならば、異論せざるを得ないのである。我々個人個人の生命は、生理的にも、心理的精神的にも過去及未来に連続して存在するのである。我々は生命尊重と云う言葉を単に個人生命に限定せず、確かに現存した、又未だ見えざる祖先と子孫の生命をも含めることを現代教育に要求するのである。

個性尊重と云う場合にも同様である。

大体個性と言ふ言葉は、普通個人が他と比較した際に持つている性格上の特徴と云う意味で理解されるのである。従って、それは相対的な価値しか持たぬものである。それを絶対視すること、それを教育目的とすることに疑問を抱くのである。個性尊重と云う発想が、極限された個人生命尊重と共通の場から主唱されることを我々は批判するのである。

「士規七則」の第一則に、吉田松陰先生が「凡そ生れて人ならば、よろしく人と禽獣に異なる所以を知るべし。」と喝破された様に、個性尊重と共に、又共通の人間性、具体的には人の子として、又日本人として生れたもの持つべき共通の

目次

教育観の是正を要す……	加藤敏治 (1)
大学問題の行方……	高木尚夫 (2)
心田荒る……	上田通輝 (4)
読書案内……	山田彦 (5)
☆ 古典の窓	

心の姿勢が同様に教えられ尊重されねばならぬ事を、現代教育に要求するのである。

個性は伸ばされなければならないが、その伸ばす方向を与え見出させるのが、教育である。我々が共通の人間性に立脚した日本人としての自覚と云い、「国民同胞感」の体認を今更の様に強調する理由は、集団教育の場としての学校教育の期間内に、これ又は共通に一人一人の子供に体感させることを、最低限度の教育目的として現代教育に要求するからである。

大学問題の行方

—日本の文化史的使命に及ぶ—

高木 尚 一

早大の事件が表面的には解決して以来、日本全土を動かした大学の問題もジャーナリズムの社会面から影をひそめたが、学芸欄にその論点を移した観がある。

朝日ジャーナル七月二十日の増刊号は「大学革命への提言」という論文集であるが、秀作九篇の長論文を集めたものである。「大学革命」とはやしオーバーな表現であるが制度論、運営論が圧倒的多数である。中で学生の人の論文では現在の大学生が、アジの人とスポーツする人が勉強する人とに分れてその間のギャップが段々大きくなってゆく、しかも大多数の学生は「俺は一体何なのだ」という混乱の中に生きているといったムード論に終始していて、大学革命といった様な意志的なものは読み取れない。

る。

我々は戦前の学校教育に就ては、それを全面的に是認するものではないけれども、少くとも教育基本法第六条に云う「法律に定める学校は公の性質をもつものであって」と云う「公の性質」に対する自覚と認識が、政府も現場教師の間にも、時代の要請により強弱の差はあったとしても、一貫して存在した点を改めて回顧する必要があるのである。

(八代市教育長 加藤 敏治)

又現在の日本の大学を思想的混乱にまき込んでゐる「思想」について言及している人は誰一人もない。

専門分化した大学の中でお互いの専門を尊重し合うのはよいが、それはなれ合いとは違う。自然科学者は社会学者の説に口出しするな、社会学者は自然科学者を批判してはならない、かういった所から、学問は生命のないバラ／＼なものになってゆく。

「人間この未知なるもの」の著書で世界的に有名なアレキシスカレルは

人間についての真の学問を発達させねばならぬ、それは物理学や化学や力学より以上に

必要である、人間を分析するためにはあらゆる技術が必要である。

人間の分解は無限であるし専門家でない学者が必要である。

真の学者は追々少なくなってゆく。

最高級の総合は毎日生活の煩わしきで気の散るような人間には出来ない。人間の科学の発達には他の科学以上に非常な精神的努力を必要とするのである。

(桜沢如一 人間この未知なるもの)

いつて学問の専門分化の危険を警告しているが、今日の大学の危機は正にこういって「真の学者」の少なくなってゆく状態を指して外にはない。

新政治経済研究会の機関誌「新政経」六月号には、一九六五年四月に米國インディアナ州のノートルダム大学で行われた「マルクスと西方世界」というシンポジウムに、日本から参加された京都大学の猪木正道教授の手記が載っているが、

こういってシンポジウムをなぜ日本の大学は主催出来ないか残念で堪らない。ノートルダム大学はアメリカに於けるカトリックの大学として知られ、一九五六年のハンガリー事件後、この大学には多くの亡命学者学生も集り、反ソ反共といわれる同大学がソ連および東欧の研究をも招いて、マルクスの思想そのものを問題にして、シンポジウムを行った所に

意義があるが、この記録をよんでも、当時の論争は未解決のままに終っている。外国のこれらの学者のマルクスの思想に対する見解がこの程度のものであるとすると、いよ／＼日本が主催して徹底的な批判討論会を行わねばならない事を痛感する。そして研究は自由なりの原則に

基き、学内に於いて何らの政治的圧力を加えられることなく、マルキシズム批判の言論を堂々と展開し、教授学生一致協力して真の学術興隆に努力すべきである。曾って河合栄治郎教授が教場であったが、「大学内でマルキシズムに反対を表明すると出世の途を絶たれるのである。」こうした世俗的権力が学内を支配している様では真の学問の発展は望めない。又反共とか防共とかいってもナチスなども理論はまだ／＼不完全不徹底なものであつて、思想的混迷は依然としてつゞいてゐる。

最近読んだ岡潔博士の著書「月影」の中に又々心ひかれる文章があるので左に引用する。

『私はフランスに留学する途中シंगाポールに立ち寄つたのであつて、その後ずつとパリにいた。そうすると一九三一年に満州事変が起つた。あのときの諸外国の日本に対する非難はすさまじいものであつた。まるで戸外で暴風雨に逢つたやうなもので室内にいた人には想像もできないだろう。私は日本はどうなつていくのだろうと思つた。シंगाポールでの体験のこともあつて私の強い関心はおのずから日本の上に集まつた。私は一九三二年に日本に帰りその後ずつとこのくにいて、したしく日本のありさまを見てきたのであるが、その後日本は心配なほうへ心配なほうへと歩き続けて今なおそれをやめようとしなない、だから私は関心を日本から離す術がなく、とうとう三十年以上、主関心を日本の上に持ち続けて

しまった。真我の位置は主関心の集まるところにある。だから私は普通の人のように小我を自分とは思はず日本を自分だと思っている。そうすると生死に対してどんな気がするかというと、私は日本の情緒の中から生れてきてやがてそこへ帰って行くのだという気がするのである。(八六頁)

私はまる三年パリに住んでみて何だか非常に大切なものがここには欠けていると感じて、帰国してから芭蕉や道元に本来の日本の風光を教えてもらったのであるが、パリに何が欠けていたのかといえは、それは「情」である。『

右はまことに達人の言として何度も噛みしめたい。成程現代フランスの知性は大したものといえよう。

前記のアレキスカレルがフランス系アメリカ人で、同一思想系統のクロードベルナル、ベルゲソンの生理心理学、生理学者で社会心理学倫理学をも論じマルキシズムを鋭く批判するポールジョシヤール、精神医学等のバルマード等々、廿世紀後半に向つて発展をつづける人間の科学は愈々精細をきわめている。

又政治家であると同時にすぐれた科学者哲学者である者も多く、数学者で大統領たりシポアンカレも然り、又数学者哲学者であり同時にフランス革命の渦中に政治家として活躍し革命中政敵に追われ逮捕の追手を避け乍ら「人間精神進歩の歴史」の名著を書き遺したコンドルセ侯爵等枚挙にいとまない程であるが、これらの人々の著書をよんでいても、確かに岡氏がいわれる様に何か欠けてい

る。それは「情」であるとは名言といふべきである。

岡氏は又こうもいわれる、
『実存哲学は形だけを見ればもう東洋哲学が話せばわかりそうなところまできているが、よくみると情の裏づけがまったく逆であるから、なかなかそうはゆくまい。』

さういわれれば、例の実存哲学のサルトルなども一世を風靡しているかの如き哲学者ではあるが、日本の天皇をヒットラー、ムッソリーニと同じ様に考え、霸道的政治を行つたと誌している事は非常な認識不足である。

サルトルの随筆「大戦の終末」渡辺一夫訳には、

「たゞ今日になって、ムッソリーニもヒットラーもヒロヒトも、要するに小っぱけな王様どもにすぎないということに甫めて気づいた。民主主義国の上に襲いかゝり掠奪と殺人を恣にしたこれらの国々は到強であるどころか、ごく脆弱な国家だったのだ。これらの小っぱけな王様たちは、死んだり失墜したりしてしまつたし、その封建的な小さな王国、ドイツ、イタリヤ、日本は地上に倒されている……」

と誌している。「口ひさく、我は忘れじ」という古事記の歌ではないが、「サルトルよ覚えてい給えこの言葉を」である。かりにこの論が一九四五年終戦の時に書かれたものであるにせよ、私はサルトルが来日して日本の国と天皇の意義を今一度考え直すことを切望する。天皇に關しては最近訳されているモズレーの書

いた今上天皇の伝記の方がはるかに具体的である。

そこで前記の岡氏がいわれる「情」についていうならば、氏は最初情という字を和英辞典で引くと「フィーリング」「エモーション」と書いてあるが、これでは浅すぎる。いくら欧米人が罪の子でも情が全くないのではない。そこで情に相当する欧米語を捜している中に、最近ある人から「キリスト教でいうソールがそれであつて、あれを魂と解釈しているのは間違ひです」と教えられた。フランス人は「情」を教会内にしまいこんでいるから、教会外をいくら捜しても見当らないわけだ。人の中心は「情」であつて情の根底は「人の心の悲しみを自分のからだの痛みの中へ感じる心」すなわち観音大悲の心である。と岡氏は説かれてい

る。そしてそれにつづけて
『明治以後の日本はいつても欧米から「教会外」のものを取つてきては、無反省にまねたのであるが、こんなことを続けていると、ついに世に世に一滴の潤いもなくなつてしまつたらう』

といわれている。
たしかに明治以来日本人は外来文化吸収に異常な熱意を注ぎ今尚之をつづけている。併しそのために岡氏がいわれる様な「情」の泉を枯らして行つたのでは文化の吸収どころかその逆になつてしまふ。少くとも精神文化に於いては、日本人は自らの伝統に目覚めるべき時である。

明治百年は単に一を加えてやがて一〇〇に達したという様な平坦なもの

はない。明治維新の志士、日清、日露戦役大東亜戦と祖国防護の戦にたおれた幾多の英霊は、今日の世界人類の苦悩に一寸の光明を示現し得る國家の威力を、日本が一日も早く恢復出来る様に悲願を泣かされているに違ひない。
それには道元禪師のいう「道心ありて名利をなげすて人」が年令地位性別の如何を問はず日本の文化史的使命に邁進せねばならない。

これなくして明治百年祭の意義はないものと知るべきである。
(労働科学研究所維持会事務局長)

★出版案内★

『日本への帰郷』(第一集)

大学教員有志協議会編
社団法人国民文化研究会編
昭和四十年八月城島高原における第十回合宿教室を中心とした、青年・学生運動の新しい展開の記録
新書版二九五頁 定価三〇〇円 下65円

一、学問・人生・祖国

私達の学生運動………西元寺教毅

第十回「合宿教室」のあらまし

私の構想する世界の新秩序………木内信胤
日本の情緒について………岡 潔
日本政治の變うべき動向………花見達二
パネル・ディスカッション
一木内・岡、花見達二先生を問んで

三、古典入門

吉田松陰「士規七則」………玖村敏雄
山鹿素行について………筒井清彦
聖徳太子「勝鬘經義疏」………夜久正雄
天皇と天皇のみ歌………山田輝彦
吉田松陰「講孟余話」………小柳陽太郎
合宿歌集

心田荒る

上田通夫

理窟をいえばきりがないが、東洋第一の詩人はまず杜小陵たろう。ポール・ヴァレリーが、こんな詩は私等には作れぬ、といった真意は若干面倒として、いうだけの実感があったのだ。ところで、杜甫が突如として一人出現する筈はなく、これに先立つ伝統が存する訳だろう。仮りに東洋第一といったが、他の意味で別格の詩家は無論見えるのである。東晋の陶淵明などは尤なるもので、形の上は、さておき、詩心のながれは末遠く後の人々に受けつがれている。採菊東籬下 悠然見南山 という句は、隣の窓から娘が見ていやしまし、と駄弁を弄しつつ漱石が賞めている。初唐の寒山詩の中には、見る目で見れば無縁とは断じ兼ねるものがある。酒を解する第一人で「飲酒」の作を知らぬものはないが、

結廬在人境 而無車馬喧
と淵明がいうとき、寒山の例のウルサイ「形影問答」の中に、

可笑寒山路 而無車馬跡
聯溪難記曲 覺嶂不知重

とあって、当然関連していること、白隠の指摘どおりである。筆者はこんなことが専門でも特別知識のあるでもなく、思いつくまゝ筆のゆくまゝだから、チット

やソットの間違い思ひ違ひはあるだろう、お見逃し願いたい。文章の大意に害はないから。近くは、良寛詩などにも陶潜の影響は現われている。

「猶存社」というのがあった、実はまだある様子だ。北や大川か、そのあたり右翼結社だったと記憶するが、もとより魏徴の「述懐」中「縦横計不就 慷慨志猶存」に由来するのだが、筆者は最初ウツカリ、陶淵明の「歸去來兮辞」に「三徑就荒松菊猶存」から取ったかと思つたものだ。魏徴よりは、より近しかつたという証拠である。

戦国迄、時代を溯ると屈原がいる。この人愛国の熱情詩人だということで、郭沫若が大分宣伝した。尤も、今迄自分の書いたものは全部無価値だと、共産国家特有の自己批判とかいうことを最近やつたので、屈原も一文の価値がなくなつた。

胡適のように、実在人物ではないという論者もいるが、楚辞に韻文が伝わっていることのみは争うところがない。それはさておき、我が国で屈原は一種理想化された、忠節の士として人の心に生きてきた。浅見綱斎の「靖献遺言」は巻頭第一に楚の屈平を挙げ、萩の乱の前原一誠また、

水濁無由洗我纓 行吟沢畔嘆斯生
自今脱脚人間事 売劍買牛自在耕

と詠ずる。いうまでもなく、漁父詩に淵源する。流れはこゝに絶えた訳ではない。昭和十一年二月二十六日、折柄帝都の白雪を血に染めた青年将校等の唱つた「昭和維新の歌」は、「汨羅の淵に波騒ぎ……」の歌い出しより、「止めよ難騒の一悲曲」と、疑いもなくその故事を見つめていたのであつた。実は、屈原は日本人の情緒に合うように、少し変貌しているかもしれない、と思う。その点に就き、最も眼光の鋭かつたのは、前田利鎌であろう。たゞ、歴史は、人の心に訴えるところに意味があり、化学分析のように、客観的事実とやらを、第一最終の目的とするものではない。何よりも、科学的客観性の解明なぞというものは、「意味」を本来的に含む歴史というものを、読み方ではないのである。八月十五日の終戦が十六日になつていたとして、何が歴史に付加されるのか。何よりも郭沫若の屈原が一瞬にして価値喪失したことは、マルクシズム社会の史学が、反科学的である明証ではないか。

△ はてさて、何を語ろうとしていたのだろう。緑の草木も生えぬ灰色の形式論理を弄ぼうとするのでないことは、いうまでもなかつた筈だ。
杜甫に先立って、いわば別格の詩客がいたこと、陶潜はその尤なる……：そう、そう「歸去來兮辞」に話のいとぐちを求めようとの心でもあつたか。曰く。
「婦りなんいざ、田園まさに蕪れんとす。なんぞ歸らざる。」

子が家貧しうして自ら給せず、というから筆者同様食うに困つて、小役人になつたというのだが、偕て清虚、高韻の雅客、官界の水になじめようがない。今の一部の人達の如く、物が人生を支配する。なご、幼稚粗雑な早呑込みをするには心情が適しなかつた。だからいう、誤つて鹿網の中に墮ち、一度去つて三十年と。

田園まさに蕪れんとす、それは即ち我が心のさまをも同時に表白したものであつた。心田將に荒れんとす、の感懐が貧しき旧宅に投影したのである。卒然として官を辞し衣を振るつて歸路に就く、氣持の軽さよ、途上叙景の楽しさよ、心の自由を知らぬものには、到底窺知することの出来ぬ喜びである。貧しくして自ら給せずとは言い、生を全うする余地がなかつた訳ではあるまい。開荒南野際 守拙歸園田 だから。老僕喜び迎え稚子門にうかゞえり、三徑は荒に就けども、松菊は猶存せり。その清韻を懐しむ心あるが故に、筆者は魏徴を思はず、靖節先生を連想したのであつた。心田將に荒れんとす、靖節先生には、なお歸るべき旧宅と田野があつた。暫く問う、汝はそも何処に還歸せんとするのであるか。

△ 先頃、「期待される人間像」という甚だ人為的にして血の気の薄い画像を描いて、世に若干の話題を提供したものがいる。何の間違ひか、筆者はこれに関する所見を求められたので、答えたことがある。

「現在の人心は荒敗している。」という囂頭の一句は同感であり、荒敗せる人心は自ら荒敗せることを知らぬ。と言いつて現世を批評すれば、まさに「人心荒敗」の四字に尽きる。否というものは、須らく反証を挙げて迫るべし。非行少年が多いという。政治が腐敗するのであるか、自動車やゴルフが投票するのであるか、原爆は天然に地から生えたのであるか、世界の底にはナマズが棲むのであるか。現代人類悪を、物や制度の罪に帰しようとする論者は、右の如きを証明しなければならぬ。

嘗て、ものゝあわれ、ということがあった。慈悲忍辱、ということがあった。慈孝があり、友愛があり、俠気があり、人生意気に感ずることがあった。それらは、総べて人のみ他と異なつて尊きゆえんとされた。今や残忍があり、無礼があり、驕慢と狡智と、反転して無智と貪慾と、免れて恥なき無節操と、再び人間のみの他の総べてと異なる、利己排他のイデオロギーの毒気が、世界を蔽っている。物質の豊富と利便の増進と共に、人心は実は空虚であり、孤立感に苛まれている。見るべし、因果は歴然として不味である。

数年前述、筆者は学生をよく叱つた。これは、君達を思うせめてもの親切なんだぞ、と。このこと少しの詐りもない正直な心情の吐露であった。そしてよく叱つた。或時、名生学部長の名を馳せた一教授が、注意している。

「君は甘すぎる。近頃の学生の中に人が親切で他人を叱る、など、信するものがあると思つているのか。今に失敗するぞ。」と。

これには驚いた。そのようなことは夢にも考えたことがなかった。失敗の成功の、それはいうに足らぬことである。いづれ人間のやること、失敗の繰返しに決まっているのだから。但し、苟くも教師が、心から弟子を愛え親切心よりこれを叱責することなくして、教育が存在するだろうか。このことあるを信ぜずして教えが立つだろうか。名生学部長は、教育の不可能なることを知るが故に、名生学部長たり得たのもあろうか。甘い辛いのは、菓子かカレーライスに対する批評として、十分であろう。魂を以て生きていく人間を批判するには、粗雑にしてや、軽薄である。その程度の大学教授がハビゴる日本であり、或いは世界であるが故に、タカがビートルズづれに引つ掻き廻わされるのだから。冷静且つ、沈着に思つても見るがよい。これくらいアホらしい歴史時代が人類史を通じて、嘗て存在したか否かを。

人々は、「進歩」の亡霊にとりつかれている。太陽が東に昇つて西に動くと共に、彼等は自然に進歩し、世界は必然に合理化に向い、やがて理想社会が出現し、月や火星に人類文化が及ぶのだと。思考の空虚なる、哲学の欠如せる。宛として隣家の黄牛の如し。自然科学や技術が跋行進展するのは、実は、人間の思考の怠惰と、「自己に都合の悪いことは一切眼を閉じて見ず、耳を塞いで聞かざる

一卑怯な心理的偏向に原因して、安きにつくからである。若し、英知に長けた頭脳が、あるものがあるがまゝにみ、公正な考察を下す場合に、結論は必ずしも人類に与せざる問題と場合が、当然に起こる。何とならば、万有は人間に奉仕する為めに創造せられたのでは、決してないからだ。しかし、それがあるが儘に認めることは恐ろしい。無限の恐怖を伴う。そこで「進歩論」の板子にしがみつ。それは又、人の虚栄に投ずる点でも極めて有力な一枚の板子であろう。かくて、人間は眼を「まこと」のものから、外に転ずる。そこには、カツコよい文明

* 読書案内 *

小泉信三著 『福沢諭吉』

(岩波新書)

山田輝彦

(福岡県立若松高等学校)

と称する道化が面白可笑しく騒いでいる。根深い不安と恐怖をマヒさせるために、人々はこれを取り開いて喝采する。一瞬の自己陶酔をかうために。心田は不毛の荒地のまゝに。大まかに言えば、人類文明は峠を感じた。いずれ下り坂を辿るだろう。これが筆者の大勢観である。どうすべきか。それに答えて、耳を借すほどの人があろうとも思えぬ。ゆくところまでゆくがよからうというより仕方がない。天意は所詮人間思案のほかにある。

(鹿児島大学工学部教授)

はしなくも小泉信三先生の遺著となつたこの小冊子を読了したのは三月末のことであつた。私は友人の一人に、これは先生が現代日本にのこされた遺言のような気がすると言つたことを覚えていた。戦争中に、記紀、万葉のような古典が、心ない官僚や軍人の手によつて戦意昂揚の手段に使われたにが経験は、年配の誰もが持つているが、戦後の福沢論吉は、もっぱら日本の伝統的文化や国家的威信の否定の手段として使われた。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉が、機械的な平等の強調と一切の秩序の否認のために使われている現状は、福沢という偉人の姿が政治

古典の窓

儒者の学は最も閑味を忌む。其の道を論じ経を解す、すべからく是れ、明白端的なるべし。
(伊藤仁斎・仁斎日札)

江戶時代を風靡した朱子学は、煩鎖な理論の中に人間の心情の自然を封じておこめてしまった。「持敬静座」とはその実践的徳目であるが、その言葉に端的に表現されているように、彼らはこ

とさらに息苦しい精神の世界を設定し、そこに思想生活を重ねあわせることをもって学の正道であると論じた。すなわち欲望を滅して本然の性にかえり、世界の理法に合一するときには聖人となると説くのである。若き日の仁斎は当時の風潮のまゝに朱子学に心酔し、二十九才、遂に俗世との交りを断ち隠遁の世界に入り、自ら称して敬斎と名乗った。

だがその後数年、三十才の半ばにして仁斎の潑刺とした精神は、朱子学の論理の呪縛を断つに至り、敬斎を改めて仁斎と呼んだ。

「其の後三十七、八才、始めて明鏡止水の旨の是非ざるを覚り……語孟(論語・孟子)の二書を読むに及んで明白端的にしてほとんど旧相識(旧い友人)に逢ふが如し。心中の歡喜言論すべからず。顧みて旧学を視れば將に一生を誤らんとせしが如し」これは晩年、當時を回想した仁斎の言葉であるが、ここに用いられている「明白端的」という言葉が、前に掲げた仁斎日札の一節(これは日札の冒頭の部分である)の中にも繰り返されていることに

注意したいと思う。

朱子学から所謂古学への転機が、一体何によつてもたらされたか、伝記は明らかにはしてくれない。だがこゝに使われている「明白端的」というすがくしい人生感覚がその回心の中を、白虹の如く貫いていたのは事実である。

「儒者の学は最も閑味を忌む」——くらしをいとい、明るさを求めてやまないのは、いかにも日本的な感覚である。朱子学にはたしかに壮大な学問の体系があり、その論は精緻を極めている。だがそこには、人生の自然よりも論理の整備を優先せしめる者に共通暗さがあるようめたい、うじくした身を翻えしてのがれたのは、まさにこの暗さであった。仁斎日札にはつづけていう。儒学は「十字街頭にあつて、白日(真昼間)事をなすがごとく」でなければならぬ。更にこれをたとえれば「大蒜子(んにく)を刺ぎ、これを銀盤子(銀の皿)の内に置くがごとき」でなければならぬ。要するに「潔々浄々にして、渾身透明なれ」——

「渾身透明」という言葉は美しい。仁斎がここで論じているのは儒学のあり方だが、この言葉にふれる時ばかりの胸をよきるものは、中国の聖者のおもかげではなく、遠いはるかな古事記の神々の世界である。「渾身透明」明白端的の——それは全身にみまざるおもいをうちつけに表現した、たとえばスサノオノミコトにふさわしい形容ではないか。
(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

「と書いている。進歩的啓蒙家論吉というイメージと孝子論吉というイメージは何と距たっていることであらう。私は孝子論吉によってこの本をとりあられた小泉先生のお心を使って、時代に対する深愛にふれる思いがしたのであった。

福沢論吉は勇敢な民権論者であったが「國權」を無視した形式的な民権論とは鋭く対立した。國權と民権とは形式論理的に相反するものではなく、人間が集団として生活する時の車の両輪のごとき存在であった。本書の第五章「民権論、國權論」の部分には、論吉が如何に強い國の意識を持っていたかが躍如として描かれている。彼は一貫して国会の開設を主張し、藩閥政治の最も強力な対立者であったが、過激軽薄な民権論に対しては「駄民権論」とののしり、「ヘコオビ書生」と嘲ったという。論吉は明治十一年に「通俗民権論」を書いてしたが、それを直ちに出版せず、後「通俗國權論」を書き上げ、同時に出版した。その序文の中で「蓋し内国に在て民権を主張するは、外国に對して國權を張らんが為なり」と明記している。論吉の民権論は「独立の氣力」あり、「國を思ふこと深切」なる人民を育成することを目的とした。幕末の動乱期を「武士」として生きぬいた論吉にとつて、國際的政治とはパワー・ポリテクスに外ならなかった。彼の認識は現在の進歩的文化人のような、生命の安全という前提の上に立てられた觀念ではなかった。彼の鋭敏な感覺は國家の危機を全身で感じていたのである。

論吉は既に「学問のすすめ」の中で「

理のためにはアフリカの黒奴にも恐入り、道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず、國の恥辱とありては日本國中の人民一人も残らず命を棄て、國の威光を落さざるこそ、一國の自由獨立と申すべきなり」と説いていた。「通俗國權論」の次のような激語を聞いて多くの平和論者は腰をぬかすであらうが、これらの言葉をよけて通るような平和論は所詮無力な空念仏にすぎないであらう。

「大砲彈薬は以て有る道理を主張するの備に非ずして無き道理を造るの器械なり」
「各國交際の道二つ、減ぼすと減ぼさるゝのみと云て可なり」
「内安外蕪・我輩の主義、唯この四字に在るのみ」まことにリアルな事実の認識である。

論吉は生涯に於て最も愉快なことのピークとして、明治四年の廢藩置縣と明治二十八年の日清戦争の勝利を上げてい

盛時を見るとは、扱(まて)ても、不思議の幸福・前後を思へば恍として夢の如く、感極まりて独り自から泣くの外なし。長生はず可きものなり。老生の如き、還暦の年までも生き延びたればこそ此仕合せなれ

ここに有るものは民権論者の「イズム」ではなく、日本人の「生命」である。「国の独立如何に係る所に逢へば、忽ち

竹山道雄著 『京都の一級品』

(新潮社)

東山遍歴というサブ・タイトルがついている。もう一年も前の出版だから、新刊紹介という意味ではない。竹山さんは大合宿にも過去二回講師としてご来講いただいている。「昭和の精神史」「ヨーロッパの旅」(正・統篇)「見て・感じて・考える」(以上新潮文庫)等いずれも必読の名著である。

竹山さんは、ある一つの前提から、固定した先入観の上に立つて演繹する思考法を極度に嫌う。事実をよく見るといいう時、それは単なる観察ではない。鍛えられた鋭い感覚と、蓄積された豊かな教養がフルに動員されて、事物の核心に迫ってゆく。竹山さんはすぐれた思想家だが、論理をつなぎ合わせて形式的に首尾一貫させるというような意味での「思想」とは無縁である。その思想はいつちも、驚くほど敏感で繊細な感受性に裏打ちされている。その敏感な感覚が、知的

之に感動して恰も蜂尾の刺」に触れるが如き一人の日本人の俊敏な現実感覚は驚嘆すべきものがある。封建道徳に対する反逆のエネルギーが、論吉の場合にはすべて近代国家のエネルギーに高められて行ったことを、文献に即して明確に指摘し、紅血の脈打つ新しい福沢像を与えて見れる名著である。

な虚偽を許さない正確な論理を生み出してゆくのである。

さて、ここに紹介する「京都の一級品」は、東山附近の寺社や古美術に関する随想集である。ブルノー・タウトには「視線が考える」という言葉があったが、竹山さんの澄んだ眼は古寺の屋根の反りや茶室のたたずまいや、襖絵の色彩など見ながら、それらを生み出した日本人の心、その背後にある日本の文化、ヨーロッパ文明との差違等に想いが広がってゆく。そういう意味で本書は美術書に分類してしまふには余り惜しい広般な文化や思想の問題を包括している。思想や宗教感情を表すものはただ言葉だけで日本人の造形感覚の根源に神道を見出すような卓見も、実に自然に説得力がある。夾雑物を可能な限り少なくした神社建築に、ヨーロッパ芸術の前衛理論の先端と一致するものを見出し、知的に拘束され

ぬ日本人の空間感覚の独自性にふれていたり、まことに面白い。(「黒谷から吉田神社へ」)

本書にはいたるところに心の安らぐような美しい表現がある。次に「詩仙堂」の部分抄出してみよう。

「左に、岩組から滝が落ちていて、その音が心を洗う。

この絶えない水音に交って、もう一つの軽い音が間歇的に鳴っている。これらの音が時間を深めている。

この間歇音は、庭の一段下がったところにある『ししおどし』から聞えてくるのである。太い竹の筒をななめに切って、それに小さな清水がそそぎこむ。一杯になると水の重さで竹筒が回転して、頭を下げた水を吐きだし、もとの位置にもどり、その際に敷石を打って音をたてる。

それはどんな楽器の音にも似ていない。空洞の中のみじかい木霊のようである。竹筒の中にもつた響が水に洗われ、覆った木の葉の中に吸いこまれる。(中略)

『ししおどし』は、五分間おきくらいに竹筒が水を吐いて、石にあたって、時間の中に点をうっている。謡の合唱が、時間を等質化するように、滝の音がそれをして、時間が、その間に鼓のように鳴って、時間を充実させ、静寂に形をあたえている。「感覚と思想が一体になって実に美しい。

竹山さんはまた永観堂の「見返り阿弥陀」にふれて次のような感想をもらしている。

「仏は、ゴッドのように、自分の命に

従う者のみを救って、自分に従わない者には凄まじい呪いをあびせて、ゲヘナの火で焼くというのではない。あのような創造者と被創造者の分裂と契約、汝と我との対立、その仲介者としてのキリストといったようなことは、われわれにはどうも考えにくい。超越的他者が怒り、妬み、呪い、復讐し、その枠内で愛を教えるということは、いかにも取りつきにくい。創造その他の奇跡を行うのではなくて、ただつねに一切の生あるものを救おうとして心を砕いている慈悲の主体があるという方が、分りやすい。この『見返り阿弥陀』はそういう人間の念願を、じつに機微のところであらわしていると思う」

こういう部分は比較宗教史の問題とも関連するであろうが、ヨーロッパ文化と日本文化との根本的異質性を感じさせ、そこから思索を深めてゆく重要なヒントを与えて呉れようである。

本書の終りの部分で「神道」にふれているところには、きらめくようなすどい指摘がある。「神道は、人間がこの清らかな日本の自然に浸って、その原素の力によって浄化されようとする世界感情のあらわれ」であるという、伊勢や出雲のような形をつくり出す感覚は世界のどここの国にもなく、しかもそれが殆んど歴史の始まる前に完成していた点を指摘して誠に重大な問題の提起が行われている。思想とは必ずしも論理的体系を意味するものでないこと、日本人の造形感覚のすばらしさを教えて呉れる意味で、一読をお奨めする。

鮎田豊之著『肉食の思想』

(中公新書)

現代は、ヘーゲルやマルクスのような「大理論」の崩壊の時代だといわれている。それは価値の多元化や政治勢力の分極化というような外的な原因の外に、「大理論」そのものの局地性が認識されて来たことにも原因がある。マルクスが分析したのは西ヨーロッパの現象であり、その領域で妥当する法則が全世界のすべての現象に普遍妥当すると考える方が無理であろう。事実、それは経済学の領域でも哲学の領域でも、果敢な作業によって乗りこえられつゝあり、近代経済学や実存哲学の成果が雄弁にそれを語っている。

唯物史観を克服する様々な作業の中で、近年目立つ一つの動きは、文化の型は地域によって著しく差違があり、歴史は全世界共通の単線型の展開はしないという説である。こういう思考法によるものには、既に遠く和辻哲郎氏の「風土」の名著があり、最近では石田英一郎氏の「東西抄」(筑摩書房)や、村松剛氏「ユダヤ人」(会田雄次氏「アロン」収容所)(いづれも中公新書)などが、西欧と日本の文化のタイプの極端な異質性を教示してくれて参考になる。ここで紹介する本書が、こういう先行のものの影響をうけていることは容易に想像できる。

さて「ヨーロッパ精神の再発見」というサブ・タイトルを持った本書の内容を概括してみよう。日本人と西洋人の最も

大きな差は、前者が農耕民族であるのに、後者は牧畜民族であるという点である。生活の基本である主食の相違が、文化の型の違いを生じないはずはない。事実、ヨーロッパが不可避の行為となるために「屠殺」が不可避の行為となる。パリのどまん中に血だらけの臓もつ

のぶら下った中央市場が、過去八百年近く存在し続けたということは「屠殺」に対する抵抗感や異常感がないだけではない、むしろ、屠殺業や肉屋を名譽ある職業とみる伝統があったからだと筆者はいう。このように「屠殺」が正当化されるためには、人間と動物との間に明確な断絶を設定しなければならない。それは旧約聖書の中で、すべての動物は人間に食われるために存在していると述べて、合理化されている。こうして、神、人間、動物の間には、こえられぬ断絶がある。キリスト教に「輪廻」の思想が存在しないのはこのためだと説かれてい

る。こういう「断絶の論理」が人間に適用されればどうなるであろうか。「本当の人間」はキリスト教徒たるヨーロッパ人に限られる。異教徒やユダヤ人に対する迫害も、こういう断絶の論理によって説明が容易になる。それ故、ヨーロッパ人の意識の中では、神、ヨーロッパ人のキリスト教徒、異教徒、有色人種、動物という階層がでさる。ヨーロッパ人が殆んど良心の呵責なしに植民地支配を

冷酷に推し進めた原因の一つがまさに茲にある。そして、「断絶の論理」はキリスト教徒であるヨーロッパ人のなかにも侵入し、かれらをいくつもの階層にきびしく区分する」に到るのである。

こうして、日本では想像も及ばぬ支配被支配の関係がうち立てられる。

「日本とヨーロッパの支配階級のあり方がちがうのは、根源的には、強烈な断絶論理があるかないかである。断絶論理のない日本では、支配・被支配関係はあまりはっきりしない。支配者とも被支配者ともつかないものが大量に存在し、そのような連中までが支配階級に格付けされる。いいかえれば、支配階級と被支配階級は、なだらかな曲線によって相互に移行するのである。これに対して、動物、非ヨーロッパ人、ユダヤ人を順次疎外していくヨーロッパの強烈な断絶論理が、さいごに『本当の人間』として残すのは、ごく少数の支配階級だけである」

まことに非情残酷な人間観であり、支配の力学である。かつてバルチック艦隊の乗員で、日本海軍で捕虜になった水兵達が、日本では水兵でも努力して将校になれると聞いて驚いた由である。西洋の方が日本よりもずっと階層が固定し、立身出世の困難な社会なのである。西洋は自由な先進国、日本は停滞した後進国というような固定概念は徹底的に打破される。マルクスを生み出したのはこういう西洋の社会の必然であった。階級闘争という形で歴史が扱えられたのも当然である。「マルクス主義者は政權をとると、意識的な差別政策をとることにな

る。伝統的な階層意識に立ち向うために、別のうら返しの階層意識をもち出すのである。ヨーロッパ的条件から出てきた思想の宿命である」そういう意味の人間疎外が広がってゆくのを我々は黙視してよいのだろうか。

七月十八日 館林 山本 十平
この夏は寒さおそふおそれあるといふ東北のくに豪雨にくづれぬとつくにに旅する人の名なつかしみすりふみみつゝ幸あれと祈る
住む土地を探しさまよひようやくくにつくりせしイスラエルの民よとつくにの人人何を求めなりわひを支え来しかをとくみきし給へ

編集後記 酷暑の候お見舞申し上げますこの号をお届けする頃は、雲仙で第十一回「青年学生合宿教室」が開催されておます、八月五日から九日まで。毎年この頃は原水禁にからんできまって中共から威嚇的政治干渉が放送され、特に新聞がおうむ返し非日本の姿勢でこれに接続するのが例のやうです。政治的配慮は当然のことながら、思想的精神的には敗けたることに終始し、殆ど「独立不羈ノ民」たる国民的情緒に背を向けて外侮に内応するのはいかなることか。本号の上田高木両先生の、心の荒敗と混迷を「自分のからだの痛みが如く感じて」文明の将来と人心の帰趨を説かれるところのものには、人の心の威敵と勝利を予想させられるものがあります。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

交流の苦闘の後に

— 第十一回合宿教室に参加して —

我々はこの五日間、雄大な雲仙の山々に囲まれながら、日本人として学生として如何に生きるべきかを、師の御言葉により、班別討論により或は和歌の創作を通じて求め来た。そこに展開されたものは決して借りもののイデオロギーのやりとりではなく、ギリギリのところまで問いつめられた自分の心との闘いであった。

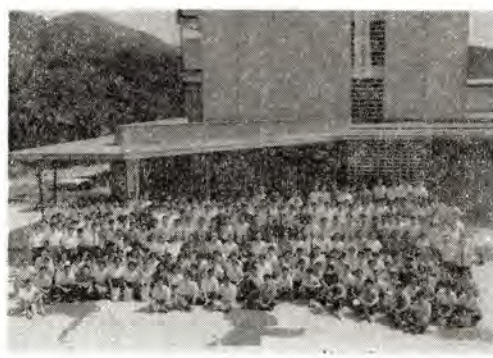
討論といつても決して議論が議論を生むと言う派手なものではなかった。むしろ内に秘められた我々の生命が烈しく燃え上がるか否かが問題であった。「烈しい」と言う言葉、「厳しい」と言う言葉それは決して外に表われた言葉や行動のみを指すのではない、外的な行為が烈しく厳しく表現される為には、自分の信じたいと言う切実な内的要求があつてこそ可能なのである。

福田先生がまずこのことを訴えられ、引続き木内先生も同様に指摘されたが、

「絶望感」と言うことばは我々にとって非常な衝撃であつた。「言葉」のもつ主観的な意味の多様性から、言葉がそのまま、他人に理解されることが殆ど不可能だという切実な指摘であつた。避けられないこの絶望の経験を透して、文明の接触を背景とする混乱のありのまゝが直視され、述べられていった。

今度の合宿はこの絶望感との闘いであつたとも言える。そして今、振返つて見る時、今度の合宿はお互いに絶望感に耐え、それと闘い、さらに乗り越えて余すなく心を通わし合いたいと言う心の姿勢は確立されたと思う。ここに至る毎日の合宿生活は決して容易なものではなかつた。うわべだけなら我々は見知らぬ人とも親しもうと語り合うことは出来た。しかし四泊五日の合宿で一人一人が心の底にあるものを打明け、心から信じ合える仲間であることを確かめ合うことはなかなか容易なことではなかつた。しかし我々はどうかして信じ合えるものを求めた

かつた。我々のこの祈りにも近い願いは一人一人の心の中に日、一日と高まっていった。我々は真剣に師の御言葉に耳を傾けた。真剣に自分の心を問いつめた。そしてどうかして自分の思いをそのまま三十一文字に表したいと思つて全員が和歌を創作した。我々は避ける事なく、真剣に見つめ合い、考え合う事によって打とけていった。



去つて行つた。いつまでも手を振りながら送る友、帰る友。そこには尽きない名残り惜しさと心と心で結び合つた友が出来たと語り喜びだけがあつた。

我々が同じ日本人である以上、心が全く通い合わないというはずはない。我々は自分ひとりだけで生きているのではない。我々は今度の合宿に於て始めて祖先の御霊を祭る慰霊祭を行った。我々が今生かされているのも祖先の苦闘の恩恵

目次

交流の苦闘の後に……………岸本弘
 合宿教室の経過……………
 感想文の中から……………
 合宿詠草から……………

(8) (6) (2) (1)

部屋は光は全て消され、かがり火だけが赤々と燃えていた。シーンと静まりかえつた雲仙の山々に和歌を朗詠される声がかつた。厳肅な雰囲気の中に全員が礼拝して慰霊祭は終つた。祖先を祭ると言うことは理屈ではない。我々は民族の伝統的儀式を通じて祖先を祭ることの尊さを身をもつて体験したのだ。

我々は合宿で得た体験を如何に毎日の生活で実践し、広げていくか、それはもう一度合宿での講義や体験を一つ一つ思い起せば必ず自分から分かることであるが、小田村先生の言葉は、その一つの道を示されたものと思う。先生は進歩という事について「進歩とは決して今までにあるものを破壊して新しいものを打立てたことではない。今までに祖先の築いた文化を尊び守ることに、さらにその上に自分達も努力して一歩でも貢献することである」と言われた。

全国の友よ、手に手を携えて人生を一生懸命に生きようではないか。我々が死ぬまで真剣にやつても大きな歴史の流れから見れば本当に小さな事しか出来ないだろう。しかし小さな事を一生かけて一生懸命にやるのが人間として国民としての務めなのだ。

(富山大・工三 岸本 弘)

合宿教室の経過

第十一回学生青年合宿教室は、長崎県雲仙の「雲仙ユースホステル」に於て、八月五日より九日迄、約二百九十余名が参加して行われた。合宿の二日前には昨秋の関東、関西、九州の地区別合宿、及び三月の比叡山西教寺合宿を通して大合宿に備えてきた三十数名の幹部学生が合宿地に参集し、合宿への新たな決意を心に刻みつけ、合宿参加者を快く迎うべき準備を整えたのであった。

第一日（八月五日）

午後二時より開会式。開会宣言、続いて国歌斉唱。黙禱。主催者側からの挨拶の後、すぐ学生三名によるオリエンテーションに入った。

その中で東京女子大学の梅田咲子さんが「私達の若い日々はもうかえってこない。私達は自分の身の回りに自分の情熱をささげられるものを見つけよう」と合宿経験を語るものにより訴え、参加者の気持を引締めた。

こうしていよいよ合宿はスタートを切ったのであった。

合宿教室の目ざすもの 川井修治先生

この合宿教室は昭和三十一年が最初であるが、これを生み出す母胎が戦前からあった。我々は学生諸君が、学校で教わる思想的表皮をはげば日本人の心が必ず

奮発して其の地を共に培うこの五日を



あるという確信をもってこの運動を進めている。合宿で、思想的キーポイントの一つである天皇統治の問題をあえて取り上げて議論するのは、我々の祖先がともあれこうした文化的血脈を守ってきたことが毅然としてあるからに他ならない。

現在、日本は外目には安泰のように見えるが内実は憂うべき状態だと思ふ。そこに大量の無関心層の問題がある。彼らは自らの目先の利害には敏感であるが、日常生活は惰性に流れ、無目的、無情熱である。これは戦後の個人主義的思想潮流がそのような生き方を助長してきたのだが、彼らに々全体生活への関心々々をよび覚すことが急務である。

社会の矛盾を巧みに利用し、戦術的に敵を明確にするマルクス主義の魅力は正義感、行動力をもつ学生をとりこにしては、日本における左翼革命勢力の実相は穏やかでない。又我々は激烈化する中共の動きに注目をする必要がある。

現代世界史の観点よりマルクス主義の衰兆がみられる。共産党宣言の予言は先進国に該当する事例はなく、ソ連、中共、東欧諸国の革命成功はマルクス主義の真理性を裏証しないのである。世界は資本主義の修正と社会主義の穏健化に向っている。我々は非人間的なマルクス主義の人間観を克服しなくてはならない。今回の中共の文化大革命（整風運動）の実態は我々に何を教えているであろうか。

或る人は「歴史は三十年を単位として時代が変る」と言ったが、その徴候が二十年代に現われると考えてよからう。数年来感知される日本の再確認の動き

は、脱皮する時期に当たっていることを物語っている。将来問題にされる「日本とは何か」についてつきつめるべきその一端をこの合宿は示してくれらると思ふ。

第二日

（八月六日）

「近代化」の意 味とその克服



福田恒存先生

「言葉は道具にすぎない」と表音派の人は言っている。私は道具で構わないと思う。何故なら道具とは「心と心が出合う通路」なのだ。人の喋る言葉を円て表すと重なり合う伝達可能な領域が大なり小なりある。この領域が小さくなっているという自覚が大事である。「平和」とか「民主主義」とかいった抽象的な言葉は、それを使う人の価値判断が加えられており、それぞれが言葉に託して勝手に喋っている。この事実を意識しないから混乱が生じ、いつまでも共通の要素が出てこない。真の伝達はありえないのだ。この「絶望」からすべてがはじまる。それを乗り越える者が始めてよく伝達し理解しうるのだ。

戦後「歴史」という言葉に対しての意識がなくなってきた。歴史は科学でありうるかという点について、科学であるとするれば対象を客観化しなければならぬ。然し歴史とは人間の営みであり、その人の心を客観化することは不可能である。歴史は科学になりえないのだ。歴史をして我々に仕えしめてはならないのだ。「近代化」の意味は明治時代の「文明開化」という意味と同じことで、私は単なる歴史の必然性であり価値とは全く関係ないと思う。先進国、後進国という言葉は文化の面で適用できない。文化とは生き方であり、その中に優劣はない。明治以来「近代化」というのが人間の、又国の生き方として考えたのだが、今日ではこうして進んできた過ちを正さねばならない時期にきている。精神的にいうと後進国はそれがすぐ価値になりやすいのだが、最近宗教の権威がゆらいできて、先進国でもその傾向が見られる。日本における「近代化」と「西洋化」との異同については、後進国では西洋化をとらなければ近代化できなかった。本質的には両者は違わぬが現実の面では同じ様

	8月5日 (第1日)	8月6日 (第2日)	8月7日 (第3日)	8月8日 (第4日)	8月9日 (第5日)
7:00		朝の集い 重藤根博・ 榎 賢	同 左	同 左	同 左
8:00		講 議 (木内先生)	講 議 小田村先生	講 議 小塚先生	講 議 小塚先生
9:00		休 息	休 息	休 息	休 息
10:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
11:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
12:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
1:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
2:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
3:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
4:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
5:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
6:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
7:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
8:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
9:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢
10:00		別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢	別別研修 榎 賢

道を辿らねばならぬだろう。

未来は何も予想することができないのに、社会が共產主義になるであろうと思つたらすぐ変えなければならぬと信じこむ、こうした「未来からの革新」を考へることは歴史の切斷に外ならない。

近代化というところに絶大の信頼をおく人といったふうに反撥する人というのがこれは近代化の必然性に対する適応異常と閉鎖性である。近代化にはこれと同じく「前近代性への依存」「他者の犠牲による独走」などの問題が生じてくる。

「近代化」の克服への道といつても解決があるわけではない。現在の混乱を自覚することこそ、その混乱を克服する唯一の道である。

聖徳太子の信仰思想と古事記のいのち

夜久正雄先生

太子は三経義疏を著し、国民に十七条憲法をお示しになったが、黒上先生の聖徳太子の御本にある如く、「之が具体的内容を表現せさせ給へる御言葉の微妙の脈略は常に太子自らの痛切の御体験を顕示」している。従つて太子に關する研究は単なる外的功業の研究に止まらず、御著作の内的動機を憶念し、研究者の体験に統一されて生命を得るのである。

黒上先生の御本は非常に難しいが、それは文章が詩的な節奏をもちながら緊密な論理的分析が展開されているからである。何度か心を傾けて読んでいるうちに情意と思想の脈絡が分るようになる。古事記は推古天皇の所で終つてゐるが、太子が書かれたという「天皇記」「国記」が古事記の基礎になつてゐるのではなからうか。

黒上先生の御本には「我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隱遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に随順せし情意的人格

である。……古事記に現はるゝ我が民族の生は外なる戦と内なる睡びの踏綜する明暗の交代である。太子が「国家の事業を煩とす」と現生の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく群生に察して大悲息ひなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦闘に随順して、其の切実体験に大陸の学説教義を生命化したまひし綜合的御精神は、この民族生活の劇的生命を辿つてはじめて理解し得るのである。」とある。こうしてみると聖徳太子と古事記とが無関係ではなく、太子の御精神の現われ出つべき源は古事記にあるといつても過言ではなからう。

第三日（八月七日）

私の経済哲学

木内信胤先生



最近、「セマンティックス」(意味論)という新しい学問が発生したそうだが、私はこれが大いに歓迎する。個々の

言葉すら、人により、場合により、その意味はまちまちなのに、どうして一連の複雑な思想、判断、意見、事実の理解や説明といつたものを、相手方に論者の思う通りに伝へることができるか。出来ないのであるが、それが出来ればなれば、セマンティックスの疑念に目覚めた世の中は「コミコニケーション」という学問を、一体、通意といふことは本当に可能なのか、可能とすればそれはなぜか、という哲学の問題にまで推し上げて行くであろう。私は若い頃、他人と自分の間に、思うことの相互交換ということが本当に

出来るかどうか、実は疑問だと考えたりして、怖るべき孤独感に襲われたこともある。

では私は、私なりにどんな実在論、認識論にいまのところ立っているかという、結局は「仏教的哲学による解明」といふべき行き方の一端に、私も連らなっていることにならう。そしてこの行き方にならない行き詰りは、同時にみな解消してしまう。それは実在と自分との関係が主客転倒して、急速に互に一体的な大きな実在の、小さいながら不可欠の一部分としての自分が意識されて来るからである。そのような思索の結果は、おおよそ社会科学に属する事柄の理解については、「一葉落ちて天下の秋を知る」という東洋の古語を、現実実践する以外、よるべき方法はない」という考え方に到達する。具眼の士には、一葉で事は足りる。資料はあまりいらぬのだ。

経済現象は人間心理の作用を抜きにして経済を考へることができず、だから人間社会の全体的な理解によつて理解すべきで経済だけを取出してはだめである。私には、おおよそ学問とは、特に社会科学に属する学問とは、「鍛錬された常識」に過ぎぬかと思われ。

アリストテレスは、すべての学問の位置付けを学問全体を対象にしてやつたというが、私は現在、そのような体系化する人が出ること強く望む。

質疑応答の時間には、木内先生からご自身の体験を語つていただいたが、その物静かに語られるお姿に対して合宿参加者は深い感銘を受けたのであった。先生は大学の時の法理学の先生であつた寛克彦教授から大きな影響を受けられたこと、又法華経は何度も読んでおられて、今日

ある先生の全ゆる基礎となつてゐると語られた。

和歌創作の手びき

山田輝彦先生

和歌を何のために詠むのかについて先づ述べようと思う。現在、我々を取巻いてゐる環境をみてみると「情意」、即ち豊かな感情と統一ある意志が枯れていると言わざるを得ない。世の中は機械が人間生活を征服し、機械が人間の代用をすすめるようになってきている。従つてすべての生活がメカニカルに、又ビジネスライクになつてゐる。自ら情意のない方が生活が営まれやすくなくなつてゐる。所謂「イデオロギーの終焉」といふことがこの場合にもあてはまるが、これはイデオロギーの問題よりもっと重大な恐ろしい状態である。途方もない人間疎外の時代なのだ。情意を錬磨し、その枯渇の回復なしに真の人間疎外の回復は得られない。情意は論理と対立するものかといふとそうではない。論理を軽蔑するのではなく、正しい学問は正しい情意の裏づけなしにはなされ得ないからだ。その情意の錬磨は今日どこにおいてもなされていず、専ら知識にウエイトが置かれてゐる。和歌はこのような情意の錬磨に有力であると確信する。情意は論理をごまかす感傷ではない。ものに感動したとき自づと発せられる瑞々しい心の泉の様なものである。それを三十一文字に託せばよいのである。心が第一、技巧はそれからのことと思う。

この後、我々は第一回目的和歌創作に向い、三日目の一時より山田先生による御講評が行なわれた。先生は作者の気持ちになつて読むに言われ、数十首の和歌に適切、且つ鋭い批判を加へられた。最後に先生は「言葉によるコミュニケーション」は不可能に近いが和歌はそれに対

する一つの果敢な戦いである」とと結ばれた。

山田先生の和歌批判にひき続き、雲仙では三十年ぶりという暑さの中をバス四台を連ねて、仁田峠に向う。仁田峠より徒歩で、今上天皇の「高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり」の歌碑のある野岳へ行き、めざましい展望に心のびく／＼と、三々五々に語り歌った楽しい遠足であった。

パネルディスカッション

夜のパネルディスカッションは、「学生生活はどうあるべきか」というテーマで福田先生・木内先生を中心に大教協・国文研の先生方も参加された。

まず「言葉の機能と哲学」ということについて、福田先生は、言葉による伝達は不可能だ、この絶望からすべてがはじまる、という御講義の言葉にふられ、「あきらめる」というのには、「明らかにする」と「断念する」という二通りの意味があり、明らかにするとは真理を認識すること、それから人間の限界が明らかになるのである、何もやらぬこととは違うと指摘され、「生キテ之ヲ識ルハ序ナリ、学シテ之ヲ識ルハ次ナリ」という古語をひきながら教え論じられた。木内先生も同じ事を、「行動することによって対象を認識する以外にはない」と強く訴えられた。次に「大学のイメージ」について、この会者は要望に對して、木内先生は、今の大学はウソのかたまりである、今の大学は目的意識が混乱している、大学はやめてしまってもっと程度の低いところで専門教育せよ、と鋭くのべられ、現在の大学に学ぶ我々は深く考えさせられた。福田先生からは、教育の理念をはっきりさせてから教育にとり

かゝるべきだ、との指摘があり、それからいかに学ぶべきか、いかに読書すべきか、という問題が討議された。夜久先生は「入る大学に誇りを感じて大学に対する信頼感をもつようにならないか」とのべられ、上田先生が「今の学生は情操が非常に枯渇している、それにすべてがインスタントであり、エネルギーを喪失している」と厳しく叱咤されたのに続いて、川井先生は「一般に国家に對する嫌悪感がある。国家生活と密着した生活を体得させたい」とのべられた。こゝで司會者から多くの問題を含んでいる現在の大学の中にあつて、学生の立場にたつてもう一度考えてみよう、と問題の提起があつたのに対し、木内先生は、「自分自身がしつかりしていればどんな逆境であろうと良くすることができ、逆境であればこそできるのだ」とのべられ我々の奮起を促された。福田先生は、「国家の為の学問」と「学問の為の学問」とは西洋では両立した。何故日本では両立しないのか、この点を深く考えてほしいと訴えられ、最後に「良き師を求めよ」、「読書をせよ」とのべられ、それでこそ学生の名に値するのだ。全て自ら求める努力が必要であると結ばれた。

第四日（八月八日）

われわれ人間は自分一人で生きているのではない。小田村寅二郎先生

人は皆「今日までの自分」は自分なりに立派な「人づきあい」をしてきたつもりでいる。言いかえれば自分自分なりに人づきあいが立派にできる人間だと思ひこんでいる。果して思ひこんでいる通りの中味になっているだろうか。自己流のつき合い方をしてその「つきあい方」それ自体を「考えなおしてみる」ということの重大さに気づかないでいるのでは

ないか。こゝで一步退いてつき合い方を考えて見よう。つき合い方にはつき合う仕方とつき合う心掛けがある。問題となるのは後者である。赤ん坊が乳房をすいながら母親の目を見つと見る、これは母親を信頼しきつていればこそであり母親の目とのつき合いである。言葉を喋るのも母親の口をじつと見てから喋るものだが、言葉を語ることも自然現象ではないといふことまぎれもなく言葉は文化であるといふことが言ひうる。

社会科の教科書には「われわれ人間は自分一人で生きているのではない、而して社会の一員である。」とあるが、これでは一と多との数量的思考法に過ぎない。自分一人で生きているのではないといふのは、社会の一員であると考えざるをやめて、「つきあう」ことに専念する以外にないといふことである。そしてつき合いにおいて、「ある一つのこと」がわかつてくると、人と人との関係というものに一本の筋が通つてきて、自と他とは急に接近しだしてくる。そこには「しみじみと通ふ」ものがあることに気づき、またそれを「しみじみと感じ取る」力が生まれてくるのである。

「歴史とのつき合い」に關連して天皇統治について述べると、天皇が国民につき合われたお気持は和歌に表現されている。天皇が国民につき合われた心の姿勢を論じないで天皇論を論じることが非学問的であり非科学的である。頭の中で考えるより何故に自分の立っている大地を見つめないのか。我々は事実をまともに見る勇氣を出さねばならないのである。

が次第に声は高く大きくなっていった。皆思いきり声を出して歌った。先生の音符の読み方が違ふと言つて爆笑する一コマもあつた。

自己克服

戸川 尚先生



私は昨年フインランドに旅行したとき初めて真の緑を見た。その夏は僅か三ヶ月半である。従つて植物はその間に

能力の全てを出す。これこそ真の緑だと思つた。緑というものを生かせる所以は如何。葉緑素であると答えればそれまでである。スイスの哲學者ビカールは「像は解し、告げ知らせながら同時に『より以上のもの』それが告げ知らされるより以上の何ものか、つまり隠されたもの、神秘のもの、決して完全に解釈し得ないものへと沈黙する」と述べている。私達はもう一度緑をじつと見つめ、告げ知らされるより以上のものを考えてみる必要がある。ここに雲仙の石がある。この石は地球の活動とは無関係でない。且つ又宇宙と。即ち表情は決して完全に解釈し得ないものへと沈黙する。又この石には重心というものがある。それがどのような形をしているか解らないけれど確かにある。「現在」というものもあるがしかしそれを捉えて見ることにはできない。形なくしてあるものを見直してみよう。農夫は路傍の地蔵菩薩に祈りを込める。彼等は傍のものを拜むのではない。「より以上のもの」、即ち背後にある何か無限のものに祈るのである。

人間は無限者ではない。太陽を西から昇らせることはできない。が有限であればあるほど無限に対する憧れを持つ。科学は無限の道理を追求しようとするし、宗教は無限の大生命に帰依し、芸術は無限の美を求めた所以である。その無限なるものの生命と勤勞と節制との結合協和に、平和、喜び、幸福が生じるとフレーベルは述べる。人間性の回復を約し、宗教は阿片であるといったソヴェイトで宗教復活が行なわれつつあることに注目される。何故我々は美しき、清き、秩序を求めぬのか、誰が求めさせるのかという考慮及び勤勞奉仕を伴った節制こそ自己克服の道ではなからうか。

全員が作った和歌の相互批評を班に別れてやる。お互に、作者がどういう気持ちでその歌を作ったか、その気持を表わすのにもっと正確な言葉はないか指摘しあつた。時には爆笑もわき、なごやかな雰囲気の中に進められたが、情意と思想を正確に表現することの難しさをしみじみと痛感させられた時間であつた。

慰霊祭

夜に入って今年初めての試みとして慰霊祭が行なわれた。宿舎の前の広場にメ繩を張り、全ての電灯は消されて、かがり火に火がいがいられおごそかなうちに儀式は始まった。おほらいに代えて国文研の三宅先生による三井甲之先生の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさね守る大和島根を」の和歌朗詠。静寂の中にいきわ高い朗詠の声が付近の山々にこだまする。続いて全員黙祷をささげて降神の儀を行い、祭壇に神饌をささげ拜誦。祖先をしのばれ、戦争に倒れた人を思われる御歌がこれほど素直に心に響

いてきたのは初めての経験であつた。小田村先生による祭文奏上、献詠に代えての全員による「進めこの道」斉唱に続き、礼拝に移る。二拝三拍手一拝の古来よりの作法に従い、祭壇に祈りをささげる。それは、ここに集まっておられるであろう、全ての祖先が、守ってこられた一筋の道、その道に我々もつながりたいという祈念であつた。続いて全員黙祷による昇神の儀によって慰霊祭は無事終つた。空を見上げると、都会では見られない数多くの星がひととき美しくまたいた



第五日(八月九日)

明治の精神 小柳陽太郎先生

僕たちの過去には無限の過去がある。僕たちの生命の泉がそこにあると考えて明治を知ることが大事である。戦後、国家意識を徹底的にぬきさることをやつた。これは現代史における一つの曲り角であり、もう一つの曲り角は明治の終りである。漱石の「こころ」の先生は、「明治の精神は、天皇に始まって天皇に終

つた」と言つた。明治天皇の崩御、乃木将軍の殉死に明治に生きた漱石、鷗外は敏感に反応した。明治の後に出生した芥川は「将軍」という小説で乃木将軍を皮肉な目で取扱つている。それをみてわかれるが、明治に生きた人とそれ以後に生きた人の間には一つの大きな断層がある。崇高なもの、偉大なものに対する軽蔑、たゞ自己のことのみを考える閉鎖的な人生観、これが明治の心をわからなくしてしまつた。

現在の学問は、残された言葉に直接ふれることをせず、学問の入口を示されただけで終つている傾向が強い。明治の精神は、明治人の言葉に直接触れることによってのみ感ずることができるとの。明治人の心の働きは自由であつた。生き生きとした精神があるからこそ自由自在に変わりうるのだ。福沢諭吉は文明論之概略で、「文明の要は唯この天然に稟け得たる身の働を用ひ尽して遺す所なきにあるのみ」とのべ、また「人の思想は一方に偏すべからず。綽々然として余裕あるんことを要するなり」とも述べている。諭吉にとって思想の中立とは心の働きが自由であることを意味した。思想生活が何かにこだわつて偏していること、となつた。こうした諭吉の心のたくましさ、はたつた。「人に接して活潑なるは飛鳥の如く」という言葉に実によくあらわれている。

樋口一葉の塵中日記には、一庶民としてしかも女子の身でありながら、国の事に思いをはせるという気力があつたとうかがわれる。一庶民の中にもこうした気力があつたところに明治の偉大さがあつた。諭吉の「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」という言の如く、日本とはそこに存在するのではなく、統

一への意志と独立の精神によつてのみ見えてくるものである。
正午閉会式。大教協・国文研の先生方並びに学生代表の挨拶の後、尽きせぬ別離の情を「螢の光」にこめて合唱した。かくして合宿は盛会のうちに幕を閉じたのであつた。

参加者一覽 (総員二九三名)

学生(学校名)

- 九大 福岡教大 福大 福工大 西南大
- 鹿児島大 鹿経大 鹿工短大 長崎大
- 熊本大 熊商大 大分大 宮崎大 佐賀大
- 大 下関大 修猷館高 第一薬大 熊本女短大
- 早稲田大 中央大 亜細亜大 玉川大
- 明治大 慶応大 一橋大 東京外大 横浜大 東京工大 都立大 国学院大 日大 順天大 上智大 明治学院大 立正大 学習院大 東京女大 お茶水大 青
- 山女短大 津田塾大 共立女短大
- 京大 神戸大 阪大 関西大 富山大
- 皇学館大 同志社大 岡山大 島根大
- 広島大 広商大 四国学院大 神戸女学院大 松江南高

- 小中高校教師など教育関係者 会社員
- 団体職員
- 大学教官有志協議会
- 戸川尚(玉川大学教授) 上田通夫(鹿児島大学教授) 夜久正雄(亜細亜大学教授)
- 末吉哲(元長崎大学学生部次長) 川井修治(鹿児島大学教授)

合宿だより

夜、ホテルに宿泊している人達、附近に住んでいる人々が、自主的にあかりを消してくれる。厳粛なみたま祭を行なうことが出来たのも、人々の影の協力があつてこそであつた。

参加者の感想文から

日本人なのだ、日本人でよかった

大分大学 教育二 中原 義人

心に感じるものが多くある。先ず愛国心とはこういうものであるという事が諸講師の講義及び態度からひしひしと理解できた。それは「歴史に自分をつき合わせるよ」という言葉からも学ぶことができた。日本民族の世界に類ない高き心情、明治天皇のみ心の雄大さ、日本国家の高き理想、それらをこゝで知り得た時、私は自分は日本人なのだ、日本人でよかった、と痛感したのである。日本民族の血の流れている自分にとっては、古への真の日本人が理想としてきた生活観、国家観、天皇観を自分の最高の理想として生活することに心からの喜びを感じます。

心に残る二つのこと

広島商科大学 商一 中西 弘幸

この合宿ではたいへん多くの講義がありました。心の内に残ったことが二つあります。それは木内先生の「自分で考えてやって見よ」ということ、福田先生の「経験としての読書をせよ」ということです。今私はこの二つの事を実際にやれるかどうか大学に帰って実行して見ようと思えます。そして又この二つの問題にとりくむことに楽しみに似たものさへ感じております。私がこの合宿教室に参加しなければ、知識としてだけの読書におかれていたでしょうし、又空理空論だけに終わっていた今までの生活を改めることはできなかったでしょう。私はこれを機会により一層、大学生活を充実させ

るために、自分で考え自分で実行しているかと思えます。

火花の飛び散る情熱を

九州大学 医四 友池 仁鴨

講師の先生方のお話を聞いていると、一体若さ、情熱とは何なのだろうと考えさせられた。先生方は僕等より一回りも二回りもお年が上の方である。しかしそのお話、考え方の激濁とした若さ、自分でやろうと思っておられることに対する火花の飛び散るような情熱は、とうてい僕の想像も出来なかつた程だ。あの情熱を自分は持ちたい。木内先生のおっしゃる通りに、自分で力んでみたい、徹底的にこれと信ずる事をやってみたい。

何かに熱中をさへけたかった

鹿児島大学 法文二 岡師 博隆

実際のところ感動することが連発的に続いて今は収拾のつかない状態である。先生や友の話を聞きながら、心に何か通ずるものがあるのか、あるいは単なる感傷的なものか、そこところはさだかではないが胸に迫って涙がにじんできるときもあつた。それから最後の夜の慰霊祭においては深く感銘した。僕は今まで儀式的なものに反撥を感じていたが、自分が、この場合、祖先の御魂に対して真に感謝の気持を持ってみれば、やはり儀式とのみ蔑視すべきでないことをじかに感じた。全体意見発表のとき、不思議に何かに黙祷をさへげたいような気持にひたりつゝ友だちの感想を聞いていた。

舞ひ飛ぶ英霊

九州大学 農一 浦牟田高雄

私は今興奮している。何がそうさせる

のかわからないが、実に多くのことを学んだ。言葉、歴史、祖先等……。私の心をそれぞれのものが駆けめぐっているように言葉とならない。それらの一端を拾い出して見よう。

慰霊祭について。あたりの電燈を皆消した中に二つのかわり火から舞いあがる火の粉は、われわれの思いを喜んで舞っていた。祭壇に向かい詠みあげられた明治天皇御歌の数々や祭文は、雲仙の山々にひびいていった。国の為に死んでいった益良雄を我々にかわって悼んでおられる明治天皇の御歌の一つ一つは、私の心に涙をさそわんばかりにひびいてきた。何もいわずに国を護っている英霊に対し私は国を、日本の国を、強く念じた。

素直に物と言えた

中央大学 法一 飯田 勝一

参加してみて感動した事や、経験に照らしてみても胸をうつような事は数多くあつたが、今現在の気持で物を言うならば自分の心にあるものが自分でも驚く位、口にすらすらと素直に出て来たということが一番うれしいことであつた。通常の学校生活では何か相手の意見をねち伏せようとしていたのに、何故こゝにきたらそういう気持になつたか。不思議に感じられるがとにかくその気持ちは、これで理由等をくつつけなくてもよいと思う。その気持がとにかく嬉しいのだから。

頑なさが崩れはじめた

早稲田大学 法一 斎藤 実

こんなに多くの人々、私にとっては十四、五名でもそう思えるのですが、同一

の話題でこんなに深く話し合えるのか、そしていろいろな人によって受けとり方がこうも違うのか、一見典型的にみえてもその実は決して類型的なんかじゃないんだ、と思えるようになったとき、私の抱いていた頑なさの一部が確実に崩れたと思つたのです。

私はこゝにきて非常に魅力のある人を見つけることができました。その人は朴訥なのですが非常に心のやさしい、あの心のやさしさは少しづつとり入りたいと本当に思うのです。

しんから暖い目で

四国学院大学 文三 垣内 一夫

私はこの合宿に初参加であつたが、自分でも驚くべき体験をする事ができたのを感謝しています。私がこの世に生をうけて二十一年になるのだが、こんなに自分で自分が素直になりきれたことはないと思ふ。何故か私にはその理由がよくわからないが、多分一日／＼真剣に生き抜こうと努力しつづけた「たまもの」ではないかと思ふ。何か自然と心が安まり、はらはらすることなく、暖い目で人を見つめることができるし、自然物に対しても感謝する気持ちに自ずとなれたのである。今までの私にはそんな安らかさ、本当の意味での安らかさは決してなかつた。いつも心の中で疑ったりねたんだりしていたが、この合宿では真から暖い目で全ての物を見ることができた。

ふわ／＼していたらだめだ

鹿児島大学 教育三 徳田 浩士

福沢諭吉の「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」という言葉が自分

を突き刺すようだ。まず自分がふわ／＼していて天下国家を思うことなどできたものではない。そういう人間が祖国を論じるようであれば、偽善であるばかりか国へ対しての侮辱であろう。現代の日本の混乱もそのあたりにあるのではなからうかと思う。帰宅してのち、心をはりつめて勉強をしたい。福田、木内両講師の姿をみて感じて。まず自分がしっかりやってのち、来年も友と肩をたゝきあって会えることを願っている。



班別研修

考えが壊れたたが楽しい

神戸大学 工二 高橋 豊

自分は自分なりの考えを持っていた。だから諸先生方の御講義の内容には反発するものが非常に多かった。しかし班別討論において、自分の考え方の違っているのが指摘され、これでもか／＼と追究される。逃げ出したい。しかし逃げられない。苦しい。そして自分の考えが壊れ

てゆくのがわかる。心に穴があいた。だが今は楽しい。壊れたものを正しく組み立てられるのだから。

今まで厳しさが欠けていた

京都大学 法三 溝江 優

今思うことは「友とのつき合い方」に誤りがあったことです。私は友情という言葉を含め、その考えを余りにも安易に考え、その考えを実行してきました。友の願いは全て聞き入れてきたし、又私も友が私の願いを聞いてくれるのが当り前だと考えていました。今こゝにきて感じたことは友情という名に甘えずきていたのではないかと思えます。私には厳しさが欠けていました。友にもたれかかりすぎていたのです。合宿での班別討論は私には苦しいこととの連続でした。話をしようとしても言葉が出てこないのです。そして友の言葉のあとを辿ってわかつつとするのもやつの事でした。

乱れたる心秘めつつ友どちの言葉かみしめ聞きをりにけり
今ふりかえると実にはすがすがしい気持ちになります。

素直な感情があふれてきて

早稲田大学 政経三 河原 倫子

この合宿に来まして日一日とすこすこ追いくうちに、今まで自分の心の中から追いついていかなかった素直な感情のようなものが胸いっぱいにあふれてきて、それが福田先生はじめ諸先生方のお話しの中での一つ一つの御言葉によってしっかりと裏付けされていくように、合宿教室をお開き下さった方々へ「ありがとうございませう」と手をついてお礼を述べたい程でした。

また今でも見も知らぬ友との話しの中であるいは和歌の中に、友の素直な心が感じられて自らを反省する最高の契機をそこに見出し出した気持ちがしました。

つき合いの真の「コマ」を見た

東京女子大学 文理二 久木ゆり子

全体意見発表の時の、司会者と小田村先生はじめ諸先生方とのやりとりによって、人と人とのつきあいの真の「コマ」を見たような気がしてとても感激してしまいました。意見発表が何かかた苦しい感じがして、素直に感じたことを発表できないような雰囲気を感じてになり、これでは最後のしめく／＼りとしての意見発表が皆の心に迫ってこない、と真剣に合宿の事を考えておられたからこそ、司会者の足りない点また先生のお考えをはつきりと述べられたのだと思います。あの時の言葉のやりとりと真の人と人とのつき合いというものを感じたのです。何か自分一つ一つの解決への道が開けたようであるにうれしく思っております。

このような教育こそ

熊本市城東小学校教諭 木多 繁男

四泊五日の合宿教室に参加して現在の社会生活の中ではなかなか見られない経験を得ました。講師の方も国文研の指導者の方々も全く同じ考えのものと、家族のふんいきの中で、希望と実践力を身につけさせ、新しい学問を産み出させる素地が培かれたような気がしました。参加者全員がそれぞれ一個の人間としてなまの体験や考えをぶつつけ合って、心と心を通わせて行く間に自己の頑な、殻も

破れ皆とのつきあいによって真の友情が、真の愛国心が養われていく、このような教育こそ、現在の日本にとって最も大切なものであり私達教育者の待ち望んでいたものでした。私は心から感動致しました。

教師としての姿勢を正された

熊本市竜南中学校教諭 松浦 良雄

自分としては案外立派な先生だぐらいに思っただけで来たが、本当に大切なことを教えてきたのだろうか、何も教えてきていない自分、その自分を先生と呼び師と呼ばれる自分がいかにも「恥かしい」「すまない」という気持ちである。しかしそれだけにこれからの私の仕事の中で又私の精神生活に於て、取り返す様なつもりで精進したいと考えを新たにしている。情性に流れがちな日頃の生活の中に涙の出るような心の躍動を感じたこの合宿。やはりきてよかった。私の一年間の中で一番心をねるときになったと思う。

一期一会

亜細亜大学学生主事 関 正臣

七日の日だったかと思う。日曜日の日の昼、偶然テレビを見た。そして、自分が数日来テレビは勿論のことラジオも新聞も無関係だったことに気付いた。しかも、そのことについて、少しも悔いが無いことにも気付いた。さういう生活であった、本期間は。

開会式の折「螢の光」を合唱しながら涙が出て仕方なかった。「もうこれで終りなのか」という別れの悲しさだった。別れの悲しさがあるような生活を生きた。いい。

合宿詠草から

中央大 磯貝 保博
きざまるる御歌にこもる大らかな御心し
のびくりかへしよむ

九州大 小松 大輔
目に映ゆる濃ゆき緑の樹の間よりはるけ
き海に見ゆる島々

令弟の訃報を聞きて帰る福島君に

富山大 岸本 弘
何一つなぐさむ言葉も口に出ず君を送り
て心苦しも

長崎大 山崎 太
流れ落つ汗をぬぐひて行く我に山あひの
風すがしかりけり

中央大 飯田 勝一
岩山に登りきたればはるかにもかすみか
かれる有明の海

四国学院大 垣内 一夫
誠実に生きむと願ふ友知りて我が心根は
素直になりぬ

木内先生の御講義を聞きて

修猷館高 小森 秀人
しみじみとしみこむとき御言葉になや
みぬかれしあどを感じぬ

九州大 島津 正数
おのが身の心の奥まで響きけり良き師も
てとの師の御言葉は

上智大 津下 有道
真直なる友より出づる言の葉は我が胸内
をつきさすごとし

友に 京都大 井上 慎一
我が君に言ひし言葉に嘘なきかたたただ
深く省みらるる

うちつけに君に言ひたきことどものおま
た残れば文にたくさむ

早稲田大 広瀬 清治
友どちの顔色悪しと我に問ふその言葉し
もありがたかりき

明治学院大 井上 佳彦
とつとつと真心こめて語りをる友のまな
こは生き生きとして



仁田峠登山路より

玉川大 二井 康雄
足わろき友の体をかばひつゝ山より下る
姿うるはし

亜細亜大 岩越 豊雄
ひと夏のいのちのかぎりをなきそふひ
ぐらしぜみの声のかなしき

友とちと声高らかにますらをの歌読みゆ
けば涙こみあぐ 亜細亜大 宝辺 幸盛

九州大 脇阪 佳秀
みはるかす大海原のをちこちに白き尾を
ひき船のゆく見ゆ

友どちのうたへるうたに声あはしうたへ
ばおのづと心なごむ

立ち並ぶ檜林に日のさして木ずゑ明るく
輝きてをり 鹿大 黒木 清亜

福田先生にお会ひして 早稲田大 今林 賢郁

いくとせもしたひまつりし師の前に出て
てみ教えをうくるうれしき 神戸大 井上 雅円

真心のこもりし友のことのはの胸にひび
きて心ゆさぶる 津田塾大 友清 啓子

今上のすめらみことの御手になる御歌詠
まむと足はやまりぬ 学習院大 小田村 静代

流れくる玉の汗をばふきまさず教へ給へ
る師のありがたきかな 神戸女学院大 足立 啓子

日は照りて山の谷間にうちつゞく木々の
みどりの濃くうすく見ゆ オリエンテーションにて 東京女子大 梅田 咲子

大勢の友等の前で語りゆく拙なきことは
に心をこめて 語りゆく拙なき話を一心に聞く友達のま
なざしうれし 西南大 内野 敏子

山道に繁れるすゝき分けゆけば汗ばむほ
ゝに涼風の吹く

鹿児島興業信用組合 伊集院 豪
たどたどし言の葉なれど心こめうたひあ
げたし敷島のみち

長崎島原高国見分校 川山 勝
はろばろと広がる海の遠ち方に青く霞め
る肥後の国かな

筑紫女学園中 田村 常武
道説かる師の一言ももらさじと聞く若人
の瞳かがやく

福岡県糸田中 大森 俊輔
すめろぎのみゆき給へる高原のうたふみ
のみまへは去りがてぬかも

福岡県川崎中 向山 正
亡き道友を偲びて 癌と知る道友を残して旅立ちしこそこの合
宿よみがへりくる

亡き道友の生きてしあらば雲仙のこの合
宿に來たりしものを 熊本市健軍小 相良 正典

かたりてもかたりてもまだつきせぬを灯
消して今日を終りぬ 旧き友らと語る 国文研 川井 修治

み友らの熱き心に支へられひたに生き來
ぬ十まより一年

編集後記

本月号は大合宿に参加した九大を中心
とした学生九名が編集に当って作成しま
した。各人、丹念に筆記されたメモを持
ち寄つての討論が再び繰り返されるとい
う場面も続出したりして、皆の心はまだ
合宿地雲仙にあった感がありました。

(福津利比古記)



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州→東京←全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル3階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152

毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

日韓親善のかけ橋に

—日本学生親善訪韓団報告記—

川井修治
(本会副理事長・鹿児島大学助教授)

国民文化研究会の初の企画、学生海外派遣の最初のころみとして、韓国への親善訪問が此の程実行された。全国の大から選抜された十四名の学生団員に、私と小泉理事が団長、副団長となり、八月二十六日から九月五日まで十一日間の旅程であった。炎暑の下、食・住の習慣が丸つきり違う異国の地で、毎日スケジュールどおりに行動することは、決して楽なことではなかったが、団員諸君は強固な意志と美事な団結をもってよくこの試練にたえ、全員無事に帰国することができたのは、何よりの幸いであった。

海を越えた友情の確立へ

当然のことながら、我々の訪韓は所謂観光目的のものではあり得なかった。我々の目的は、韓国の風土や国民生活の真相に触れて、直接に友邦の姿を見聞すると共に、海を越えて両国青年の間に友情の絆を確立することが、最大の狙いであった。この狙いは、旅程の事前打合せが充分でなかったことから、必ずしも満

点の成果を得たとは云い難いが、それも朴鉄柱氏傘下の学生グループをはじめ、前後四回韓国学生との座談会を持つことができた、あの条件下ではまずまずの成績と云えると思う。毎夜のように旅宿を訪ねて来て、英語を混じえつつ話合った韓国の学生達、彼等と我々との間に芽生えた友情は、今後文通によっていよいよ確められ、拡げられて行くことであろう。滞韓中我々は丁国務総理を礼訪する機会を持つことができたが、丁総理は「国と国との間にはかけ引きもあり困難なことも多いが、皆さんのように純粋な青年どうしの接触は、両国の親善に大いに裨益することがあると思う」と、懇切に挨拶をされた。我々は努めて整々たる団体行動をとるよう心がけたが、税関でも旅行社でも、旅宿でも新聞社でも、我々の真面目な意図目的を感じとられて、頗る好評であったと聞く。我々の十一日間の行動が、直接間接に触れ得たすべての友邦の人達に、清潔で真摯な印象を与え

たとすれば、それは両国民の相互理解と信頼の上に、小なりとはいえず貴重な一石を投じたものとして心から満足に思う。

新しい建設の息吹き

韓国の人達の生活レベルは、正直に云って高くない。統計数字は、一人当りの所得が日本の七分の一であることを示しているが、おんぼろタクシーやひしめく大群(かなりの部分が失業者とか)、驚くべき低賃金、貧弱な家屋……はこれを生の形で証示してくれる。けれども、このような低水準からのび上ろうとする建設意欲は、まことに逞しく、「増産・建設・輸送」の標語は街々の至る所に見受けられる。仁川で見学した実業学校の生徒達は、毎朝五時に起き七時から実習と勉強に励むという。我々はこれらの年若い少年達が、懸命に旋盤に取りこんでいる姿を見せられたことであつた。韓国の識者達は、十年二十年後を見ていくれ、と高言して憚らない。アメリカは食糧と完成品しかくれなかつたので、韓国の産業育成には役立たなかつた。日本に期待するのは、韓国の産業基盤の建設に役立つ資本と技術である、とも言っている。友邦韓国の産業振興―生活向上―政治安定は、同時に日本にとつても死活的重大さを持つ課題である。請求権基金をはじめ今後経済援助は、この友邦の真剣な期待を裏切つてはならない、と切に思う。

痛々しいまでの反共姿勢

韓国の反共立国は、痛々しい程の迫真性を持つている。休戦ラインの彼方は、何の変哲もない田園風景を見せていたが、我々の目に届かないところでは武装した力の対決が、日夜続けられていると云う。そう思う故か、板門店見学の日

は異様な疲労感を伴つた一日であつた。今でも肉親の消息を求めて、三八度線を潜り抜けようとする人もあるという。南北分断の悲劇はここに極まわりと云うことができよう。しかし韓国の人は云う。「ドイツはまだ幸せだ。二つのドイツは分裂はしているが、お互に血を流して殺し合つたことはない。けれども韓国の場合は、例の韓国動乱で三度殺戮のローラーの下に押しひしがれた。南北統一ということは、理窟では解つていても、この経験が消えな以上心情的上でもどうにもならない。結局力のみでしか解決はできないのだ」と。私は返す言葉も知らなかつた。予算の三分の一を軍事費にあてベトナムにする敢て出兵するも、この必死の構えゆえなのである。第三者の観念や感傷では律し得ない厳しい現実がここにあるのである。そしてこの厳しい対決の姿勢が、事実において我々の日本の国防につながつているとすれば、我々は、この友邦の痛ましいばかりの耐苦の姿を、どのように受け止めるべきなのであるか。

「近くて近くなりつつある仲」
「近くて遠い仲」というのが、これ迄日韓関係を示す通り文句であつた。しか

目次

日韓親善のかけ橋に……………川井修治	(1)
訪韓印象記……………	(2)
現代流行歌批判……………名越二荒之助	(4)
自ら行ずることより……………長内俊平	(7)
☆ 同胞歌壇 ☆ 古典の窓	

し我々の得た総合的結論によれば、この文句は次のように訂正されねばならない。即ち「近くて、近くなりつつある仲」と。韓国人の対日感情は決して単純ではなく、正しくはその深層心理に迄立ち入って検討せねばならないと思うが、現実の政治・経済上の要請からみて、日韓両国は親善友好の道を辿らねばならないというのが、今や韓国人の常識と化しつつあるのは、疑いなくところである。そ

訪韓印象記

してより深い文化的・人格的交流は、今後いよいよその必要度を増すことと信ずる。「表面だけで、今までの日本は悪かったと謝罪して廻る人がある。こんなバツボーンのない日本人には、我々は合たくもない。皆さんは別だが……」と叫ぶように立った或る学生の言葉、我々はこの言葉に答え得るものを準備して、今後の真の日韓親善に備えずばなるまい。

本会学生訪韓団は多大の成果を得て帰国した。見聞の詳しい報告記はやがて全団員が体験を整理集録して出版する予定であるが、こゝには学生四君の旅行記を附して報告の一端とする。一行は左の十六名であった。团长川井修治 副团长小泉明 学生団員古川修 島津正数(九大) 井上慎一 福島義治(京大) 北島照明 徳田浩士(鹿児島大) 森重忠正(長崎大) 岸本弘(富山大) 寺川真知夫(神戸大) 伊藤三樹夫(岡山大) 磯貝保博(中大) 今林賢郁(早大) 岩越豊雄 山路忠重(亜細亜大)

緊張の日々

鹿児島大学教育学部三年 徳田浩士 私達一行が訪韓第一日目の釜山市内をマイクロスパスで見学している時のことである。街頭のスピーカーから、ものものしいただならぬ声が耳をつんざくかのように入ってきた。朴大統領のメッセージである。ベトナム派兵の壮行会の模様をソウルからラジオで全国に実況中継しているのである。大統領メッセージと軍歌の鳴り響く中を、軍用トラックがけたたましい音をたてて通り過ぎて行く。我々の眼に異様なものが飛びこんできた。民家の土塀に、工場の塀に、鉄橋の鉄板に真赤なハンゲル文字が太く力強く書かれているのである。我々は思わずガイドの李さんに聞いてみた。「あれは漢字で読

むと『防共防諜』となります。韓国では共産主義者及び容共的態度をとるものは、ただの一匹たりともはいることはできないのです。防共法第四条により、すぐ引く捕らえられてしまいます。あなた方は韓国の津津浦浦いたる所で、今からいやというほどあの文字が目にかかるとしよう。」とのことであった。我々一行は訪韓第一日目にして、海一つへでた隣国のただならぬあり様をこの目で、この目で実感させられた。

ソウルへ立つ朝の慶州駅でのことである。韓国国旗を手に手に持つ小中高校生と大人が駅構内にひしめきあひ、大統領メッセージと軍歌がスピーカーから鳴り響いている。韓国陸軍最強精銳といわれる「白馬部隊」がいよいよベトナムに

派兵される日だったのである。ソウルから釜山へ向う「白馬部隊」の見送りに集まった群衆であった。さあソウルからの「白馬部隊」の専用臨時列車が慶州駅に着いた。スピーカーからの軍歌はいっそう高らかになり、群衆の間から軍歌の大合唱が始まった。その中にある一人の老婆が近寄り、汽車の窓越しに若き兵士に何事か一心に話しかけている。若き兵士は褐色に日焼けした顔から真白な歯をのぞかせ、老婆の肩を軽くたたいて慰めていた。我々はこの「白馬部隊」のベトナム派兵に胸を打つるものを感じつつ、別れを惜しんでソウルへと向った。

ソウルではまず国軍墓地を参拝した。ここは韓国動乱の際、共産軍との戦いで倒れた自由の戦士四万七千人が眠っているのである。緑の芝生の傾斜地に真白な四万七千の柱が岡また岡に続いている。我々はこの自由を守らんとし、戦い倒れた英霊に対し、同じアジアの自由の同胞としての深い祈りをささげた。時間同じくしてかのベトナムの地で戦死した十七柱の英霊の国葬が国軍墓地で行われていた。我々は国葬をじっとみつめながら、吹奏楽の静かに流れゆくのを耳にして、同じアジアのいや最も近き、海一つ隔てた隣国のただならぬ様を今一度見つけられたのであった。この十七柱の英霊の中には結婚三ヶ月後にして倒れた人もあるという。その新妻の思いはいかばかりであろうか。その父母は、その兄弟姉妹の思いは、また異国ベトナムの地で新妻の顔をみることもなく倒れたその兵士自身の思いは、我々にはただただ頭を深くたれるのみであった。また戦死者の一人李大佐という大丈夫は、ベトナムのゲリラにあり、手投げ弾を投げつけられ、それ

を自分自身の手で受けとめ、自分のふところ爆発させ自分のみ倒れ、そのまわりには部下は無傷で帰国したという。李大佐には若き妻と幼き女兒があったという。ガイドの李さんは「こういう光景は韓国でなければ見られないでしょうね。」と国葬をじっと見ながらもらしていた。私はこの李さんの無表情な態度でいわれた言葉がいやに頭にこびりついて離れなかった。韓国動乱の際、数ヶ月間共産主義の支配下であり、多大なる流血の代償を払い、そしてつかと固くにぎりしめたのが自由であった。彼らは身を持って自由の尊厳さを体験し、自由を守らんとしてベトナムに現在もおお五万人もの同胞を送っているのである。我が日本はどうなのであるか。自由を守らんとする意志はあるのだろうか。日本における数多くの平和屋や自由論者にも聞いてみる。「自由」と「平和」がいかに多大なる代償の結果として得られたものであるかということ。「青年よ、銃をすてよ。」という平和屋よ。銃なくして何処に平和があるか。平和は銃を取るものの上にもある。戦わずして戦う気力のあるものの上にもある。国軍墓地を後にしながら思うのであった。

板門店に行った時も緊張の連続であった。一面いかに静かでも、穏やかに見えるこの三十八度線に、冷厳なる空気があふれる。それはこの地での多くの兵士の眼をみればすぐわかる。彼らには明日という日は約束されていないのだ。三十八度線から二キロ南下するとそこには地雷が林がひかえているのである。三十八度線から北韓をみると青い田園が続き、高き山々がつついている。眼を下にやると「帰らざる川」が流れている。韓国の悲運

釜山印象など

九州大学法学部三年 古川修

八月二十六日、私達は板付空港より釜山に向かつて出発した。台風一過、好天気に恵れ、機上より見下す朝鮮海峡は青々と輝き美しかった。僅か五分足らずで、韓国が見えはじめてきた。「いよいよ韓国だ。」という張りつめた気持ちで、眼下に過ぎ去って行く島、けわしい岸



ソウル駅頭にて

壁、迫りくる山並を見つめた。

釜山空港について、陽は少し傾きかけていたが、空は青く澄んでいた。空気はひんやりとしていて、韓国の乾いた季候を感じさせる。こゝはもう朝鮮半島である。

朴鐵柱先生が手をふって出迎えておられるのがすぐわかった。昨年の春の八木山合宿以来である。とてもうれしかった。釜山空港から宿のある東萊までは、起伏する山に沿って道路がつづいている。

山というより丘のようで、緑の木々よりも赤土の色の方が目につく。秀山という程ではないが、日本で見ている山の感じとは大分違う。一本一本の木がはっきりと区別できる程である。道行く人達の姿は日本人とほとんど変らない。ほとんどの人が洋服であるが、時々、韓国服の短いひきしまった上衣と巾の広いスカートを着た婦人や、ゆるやかな白色の外衣と巾の広いズボンを着た年寄の姿を見かける。頭に荷をのせた韓国の婦人の姿も時々見かける。東萊は、釜山から少しはなれた温泉街である。夜散歩に出ると、暑かったせいか、大勢の人達が街路に出ていて、まるでお祭でもあるかのようににぎやかであった。東萊などには、まだテレビやその他の娯楽施設が少ないのである。遠慮がちに日本語で話しかけると、少しびびくりしたようであったが、すぐに笑顔で応じてくれた。中年以上と思われる人は皆流暢に日本語を話す。二十一年ぶりに日本語を使ったと言って笑いながら話してくれるおじいさんもあった。もちろん中年以下の人は、ほとんど日本語を話すことができない。十代・二十代という私達の世代が今後つきあっていく上で、言葉の障壁は大きな課題となるであろう。

二日目・三日目は釜山・慶州を旅し、四日目から一週間ソウルに滞在した。ソウル滞在中の国軍基地参拝・丁総理との会見・板門店見学・大学訪問・大学生との懇談等、是非報告したいことは多い。国交正常化後、漸く一年になる今日、未だ両国の理解は乏しい。それが故に、今回の旅行は一層貴重であったし、私達の見てきたものを多くの人に伝えたいと思う。

仁荷学園韓独実業学校の黄校長が「韓国は工業面において日本に六十年ほど遅れている。私達は六十年前の日本人のような気持で頑張っていますよ。」と語りながら言葉が、現在の韓国の気持を代表しているであろう。日本における南北統一の甘い考えを撥付けてしまふ南北のきびしい対立の中で、目下国家建設に懸命になつて邁進している韓国の実情を日本人は真剣に見つめてみる必要がある。

慶州から板門店まで

京都大学法学部三年 福島義治

韓国は戦後近くて遠い国であった。今日では福岡釜山間を僅か五分で飛ぶ、期待と緊張を載せた飛行機、空からの韓国は山の緑が少なかつた。岩山とかつての乱伐の為に、日本より十五年位遅れているなどという第一印象。それは最後まで消えなかつた。全体として日本と実によく似ている。違つているは言葉と食事位か。「米とキムチ(朝鮮漬)と練炭があれば生活出来る。」という言葉は韓国の生活を端的に表現している。

慶州は奈良に似た町であった。かつて新羅王朝の薫り高い文化の花が咲き誇つた町であった。だが蒙古の侵入、秀吉の朝鮮出兵、韓国動亂等数々の戦がその文化の大部分を灰塵に帰せしめた。僅かに残つていゝる遺物から当時を偲ぶだけだが、皮肉にも少ない遺物がかえつて当時の息吹を生々と感じさせる。韓国には良質石が豊富だ。幾多の風雪をくぐり抜けてかなりの石仏や石造建築が生き残っている。当然ながら石仏は飛鳥、奈良時代の仏像を連想させる。奈良や京都で出会つた兄弟の面影がそこにあった。李朝以後の仏像及び装飾品は輝く金と毒々しいまでの原色の赤青緑を主体に色彩がほど

こされていった。どうも親しめなかつた。焼物はさすが本場、高麗焼青磁等が博物館の片すみで歴史に磨かれた光を放つていた。問題はあるにせよ奈良京都鎌倉等日本にはまだ昔の姿があらこちに残つている。それらを実際に見、肌で感じるものが出来るという幸せば、それらを失つた時本当にわかる幸せかも知れぬ。慶州の駅でベトナム派兵の兵士を乗せた特別列車と出会つた。映画や写真でしか見たことの無い戦前の日本の姿がそこにあつた。国旗を手に手に兵士を見送る小中学生や一般市民、一見陽気そうに軍歌を歌い手を振る兵士、異様な感動が込上げて来るのを禁じ得なかつた。国費の半ば以上を軍事費に費さねばならぬ国情、自由主義陣営の一独立国として精いっぱい国際社会においてその役割を果しているけなげな姿、現在の日本にはないものが韓国にはあつた。

飯門店は静かなる戦場であつた。引締つた兵士の顔、地雷地帯、見え隠れする兵器、今はレールの敷いて無い鉄橋、兵舎に鮮やかに描かれた境界線、いやおう無しに緊張感が五体を支配する。蝶が舞い舞う一見のどかな丘陵地帯を支配しているピンと張りつめた緊迫感、ここでは歴史が生きている。反共と国防が一体となつて韓国全体に重たく乗しかかつていゝる。甘いヒューマニズムやオプティミズムは吹っ飛んでしまふ。南北統一は遠い将来の問題のようだ。

ソウルは人が多かつた。駅でも、街でも、公園でも。ソウル駅に「輸出増産建設」と国家目標を掲げている。新しい韓国の建設があらこちで急げつつ進んでいた。やつと韓国は自分自身の足で歩き始めたのだ。最新設備を誇るホテルや学校、薄暗い店や民家、盛装をして外車

を乗り回している人、素足で物を売って
いる老人や子供達、シャンデリアの輝く
デパート、ゴミゴミした独特の臭いのす
る商店街、新と旧、美と醜とが渾然と一
体になっていた。教育熱はすごい。日本
と同等、見たにればそれ以上であろ
う。だが大学生の就職率は六割程度との
事。頭脳や技術を生かすだけの社会がま
だ出来ていない。おしい事だ。韓国の安
定が直接日本の安定につながると言っ
ても過言ではなからう。真の理解と信頼が
今こそ必要なのだ。互いの将来のため
も、日本の旅行を陰に陽に支えて下さ
った、日韓両国の方々の厚意を肝に銘じ、
韓国の真の発展を祈りつつ帰途につい
た。近い将来、再び韓国の土を踏み目を
期待しながら。

ソウル郊外の農村にて

中央大学商学部四年 磯貝保博

京城に來てから四日目、今日は仁川工
業地帯へ向う班と農村地帯へ向う班に分
れた。

私達農村班は日本文化研究所(韓国社
団法人)の学生三名を含め計七名であ
る。そのうちの一人玄君(京城大学)の
実家へ向かった。玄君の家は京城の西約
四〇km、京畿道・内谷里と呼ばれる村に
ある。京城郊外から北へ向う長距離バス
に乗り約三十分、二つの小高い丘陵に狭
まれたいわゆる近郊農村である。米、麦
のほか野菜も作られている。二一〇戸、
千五百人のこの部落は、韓国農村全体か
らみれば、中程度の規模だといふ。
バスを降りた我々は、まず玄君のお宅
へ伺った。ここが私の家ですぐといっ
て玄君は我々を招き入れた。葦葺屋根の
口形をした家で、一方に門がありその両
側は牛小屋と物置になっている。門をく

ぐると猫の類ほどの中庭があった。玄君
だけは日本語が話せない。しかし英語は
我々よりはるかに上手である。彼は指さ
しながら、ここがキチン、その隣りがリ
ビングルームと説明してくれた。日本語
でキチンなどといわれれば、冷蔵庫やガ
スレンジのそろった広い台所を連想させ
るが、ここ玄君の家の台所は煤けた三疊
ほどの土間で、薪の山と二つのカマドが
あるだけであった。水道などなく、共同
井戸から水を汲んでくるということであ
る。

我々は玄君の家を出て裏山に登り、持
ってきた弁当を開いた。この小高い丘か
ら部落全体がよく眺められる。水田地帯
の真中に川があり、閑閑な農村風景であ
る。日本の農村風景と何ら変るところが
ない。稲は青々として順調に成育してい
るように見えた。しかし、それは間もな
く我々の錯覚にすぎないことがわかつた。
日本では刈り、韓国では里長と
呼ばれる家へ挨拶に行ってお話しを聞く
うちに、その実態はスキとクワと牛とに
よる農業であることを知らされた。青々
とした稲も収穫量は反当り二石、日本の
半分程であろう。こうした低収穫は、毎
日の食事に反映されている。我々は韓国
旅行中、何処へ行っても三度の食事は麦
飯であった。ラジョも里長さんの所に一
台、村はランプの生活である。治水事業
も整わず、村を流れる川はしばしば雨期
になると氾濫するという。

里長になって約十年、村はあまり変つ
ていましてと語る言葉の底に、働いても
働いてもこの程度にしかならない。しか
たがない、ただ黙って働くだけで、とい
うような言外の気持がうかがわれる。皆
働くことで精一杯、村中で祭りを楽しむ
というようなことはないらしい。日本の

秋祭りのような、村中で収穫を祝う余裕
のないほど貧しいのであろうか。

京城の駅頭に大きな文字で、増産・輸
出・建設と書かれてあったことを思い出
した。いつれをとっても現在の韓国経済
にとって、大切な問題に違いない。一つ
農業だけに援助の力を与えることも許さ
れないのが現状だ。

且又、こうした経済事情の貧しいこと
に加えて、北と南とに分断された冷い国
際政治の厳しきの中で韓国人々は生活

現代流行歌批判

—日本帰りの歌声おこれ—

一億総歌謡曲時代

高校三年生を連れて工場見学に行った
ことがあった。帰途貸切バスの中で「のど
」を競うことになった。生徒は我先きに
と歌いだす。ところがどの歌も流行歌は
かりなのである。童謡とか軍歌とか歌曲
とか詩吟などというものはひとつも出て
こない。しかも生徒の歌う流行歌は無尽
蔵といつてもいい、位に沢山ある。その量
の余りにも多いのに驚いて、生徒の持つ
ている「平凡」別冊付録「歌の大行進」
を見せて貰った。それに載っている歌手
の数だけでも百五十人もいる。これだけ
の歌手が次々と新作を発表してヒット曲
を狙うのである。しかも発表の舞台はい
くらでもある。テレビやラジオの番組の
三分の一は歌謡曲と言われる。まさに一
億歌謡曲時代である。

更に「歌の大行進」を読んでみる。と
ころがどの歌詞にも々しらべつというも
のがない。厳しきとか緊張感とか余韻と

しているのだ。平和と繁栄は人々の願う
ところである。何国ととも同じであろ
う。だがしかし、平和の回復と経済繁栄
の一日も早からんことは本当に願ってい
るのは韓国の人々ではなからうか。その
韓国の人々の心情を思うと、日本で、同
じくよく口にされる、平和だとか、繁栄
だとかいうような言葉とは、およそ次元
の違う厳しきを感じざるを得ないのであ
る。

名越 二荒之助

かが感ぜられない。どの歌詞にも、星、
港、霧、夢、恋、別れ、涙、幸せなどの
言葉が散見される。こんな言葉を羅列し
てゆけば、いくらでも作れそうな気にさ
えなる。言はば全体が感傷的マンネリズ
ムなのだ。

例えばレコード大賞を貰った「上を向
いて歩こう」というのがある。これはな
か／＼題がいいではないか。上を向いて
歩くのだから男性的ではないか。上を向
いて歌詞を見ると、「ひとりぼっちの夜は淋
しくて、涙がこぼれないように」上を向
いて歩くとなっている。この歌の主人公
はよつほどの甘ちゃんなのだ。こんなひ
弱なセンチメンタリストだったら、ドラ
イな社会に出て就職もできないのではな
いかと心配させられる。
更に大賞を貰ったものに「今日は赤ち
ゃん」がある。赤ちゃんにこんにちとは
挨拶するものかどうか。それに歌詞を見
れば、赤ちゃんを「あなた」と呼んでい

る。あなたというのは成人した大人同志の間で呼びかわす言葉ではないか。また最近よく歌われるのに「骨まで愛して」「愛しちゃうたのよ」等がある。また「死ぬほど愛して」「キスしてね」などという歌詞もある。これなど余りにも露骨でオーバーではないか。恋愛というののもっと真剣なものであつて、こんな甘ったれた意識の中からは人生の感激は味わえないだろう。戦前の流行歌の一節に「惚れていながら惚れないそぶり、これが男の恋とやら」というのがあるが、恋愛の歌もこゝろあたりでとどめておくのが、余韻があつていいのではないか。

それが不足している。作曲のモチーフが安易で、創作への衝動が乏しい。だから聞いていても魂の中心にまで響いてこないのである。中にはいいものもあるが、このような大量生産の中からは、名曲として後世にまで残るようなものは殆んどないと言つてよいであらう。

先年勝部真長氏(お茶水女子大学教授)がドイツに行かれた時、土産にマヒナスターズのソノシートを持って行かれた。ドイツ人に聞かしたら「これは女の歌ではないか。いや男のようでもある。中性の歌かな」と言つた話を苦笑をもつて語つておられたのを思い出す。

祖国と民族を喪失した歌謡曲

要するに現代の歌謡曲ブルームは、感傷とナンセンスの氾濫である。ブルームに愛情と言へば恋愛に限られてしまつた。その恋愛も戦争のようなきびしい環境下に育つた恋愛などは省みられない。そして「戦友」のような戦場に生れるしみじみとした男と女の愛情も歌われぬ。もちろん「冬の夜」のような沈痛なばかりの家庭愛も、「仰げば尊し」のような師弟愛

も歌われない。況んや民族の連帯感や、祖国讃美、祖国への忠誠を歌うような歌は、全然と言つていゝ程歌われないし、作られもしなくなつた。

それでは日本以外の外国の場合どうか。「うたごえ運動」などで盛んに歌われる「ソ連の」とも「しび」といふ歌がある。これは単なる恋愛の歌ではない。戦線に赴く兵士と故郷に残る恋人が、それぞれ胸に抱く美しい愛情こそ、ソヴェトに捧げるともしびであるという主題なのである。映画「シベリア物語」の主題歌「シベリア大地の歌」も、バルリンから故郷シベリアに凱旋する時の感激あふれる歌である。「バルカンの星のもと」も遠くバルカンに遠征した兵士が、遙かに祖国に思いを馳せる歌なのである。また最近流行の「祖国」といふ歌の歌詞は

祖国わが祖国よ
自由と平和の歌
輝く山に満ちて
ゆるぎなき祖国よ
ゆるぎなき祖国よ
というように、真正面から祖国を讃美した歌なのである。現在のソ連が非効率な国営組織の中で、経済政策の修正を迫られながらも、あれだけの軍備を持ち、宇宙競争に於てアメリカと太刀打ちできるのも、国民の間からこのような祖国意識が根強く生きていふからかも知れない。

ところがこのような祖国主義的な歌が歌われているのは、ソ連だけではないのである。各国で最もよく歌われる国歌を見れば、この事がよく判る。どこの国歌も共通していることは、短い歌詞の中にまず祖国を讃美し、最後に祖国防護を誓う言葉で締めくくられてゐる。

スイス国歌

祖国の山に
自由の歌を歌おう
国のためスイスのために
血も命も捧げよう
フリーッピン国歌

国旗に画かれた星と日の
永久に輝きわたる美しき国
愛の国の胸の中にいこえども
ひとたび事起れば
国のため命捧げん
インド国歌
ガンヂス河が君の幸を祝い
君を讃えて歌えは
ヒマラヤの山にこだまする
救えよ、わが国を
君こそインドの運命を担う
君に勝利を、勝利を君に
トルコ国歌

あゝ星、あゝ三日月の輝きを
命をかけて守る
わが民族の英雄の血統を信じ
事あらば血潮を捧げる
独立こそは正義を愛する民族の
当然の権利なる故
韓国国歌
高くそびゆる白頭山を北に仰ぎ
永遠に神守る国
花咲き競う美しき祖国
皆で守ろう、育て、ゆこう

紙数の関係で一部しか紹介できないが、どの国歌も真似たように構成が一致しているのでも、しかし私の持つてゐる資料の中にあつた二つの例外がある。日本と英国の国歌である。これは二つとも国家の元首(多岐)の繁栄を歌う歌で、直接祖国の防衛に触れていない。しかし他の国々の国歌を讀んでゆけば、軍歌を讀んでいるような錯覚にさえとらわれる。特にフランスやソ連や中共の国歌は、血

なまぐさい暗煙の匂いさえたちこめてゐる。これらはいずれも血をとまう革命(フランス国歌ラ・マルセイーズはフランス革命の斗争歌)を主題にした歌であるからであらう。

いずれにしても世界各国、民族の心を一つにまとめるために、祖国防衛の精神喚起にとつてゐるのである。

現代の日本には軍歌を歌うことさえタブー視される風潮があるから、祖国防衛の歌を求めることは至難なのであろうか。ところがその日本に祖国の責任を担う歌がある。それは陸上自衛隊歌「治安の護り」である。

さつそうと光をあびて
勢い起つ我らは祖国の楯ぞ
炎の息吹鉄の意志、盛りあげていざ進まん
力力は若き、栄ある自衛隊治安の護り
しかしよく読んで見れば、これも祖国の防衛をはつきりと明示している訳ではない。二番三番を讀み進むと、祖国の防衛からは離れて、国内の治安の護りがその骨子になつてゐる。戦後祖国を防衛する歌が作られたことなく、そして防衛の歌が国民の口にはのぼらない国は、世界の中で日本だけかも知れない。

歌は世につれ、世は歌につれ
岡潔氏が常に述べられるように、思想の母体は情緒であるから、情緒を支配する歌は、その時代の精神を伺うことができる。まことに健康な時代には健康な歌が生れ、健康な歌はまた健康な時代精神を育てる。

現代に健康な歌声をひびかせようと努力しておられる安西愛子さんは、講演と歌唱指導の初めに、必ず紹介される言葉は「歌は世につれ、世は歌につれ」であ

る。歌はさながら時代精神の正確なる反映なのである。

だとすれば現代精神はどう評価したらいいのか。私は民族の精神生活が最も衰弱した時代と評さざるを得ない。それは日本の過去の歌と対比してみればよく判る。

日本の過去には素晴らしい歌と時代があった。その軌範を遠く古事記や万葉や実朝の時代に求めなくても、手つとり早く明治の時代にそれがあった。

例えば尾崎士郎氏が日頃愛唱し、死に臨んでも尚歌ったという「桜井の別れ」がある。これは死地に身を投ずる者の忠誠の意志と父子の情を、切々と歌いあげている。「この一振りは去にし年、君の給ひしものなるぞ、この世の別れのかたみにと、汝にこれを送るにむ、行けよ正行故郷へ、老いたる母の待ちまきむ」歌詞とメロディが一体となって、日本歴史の名場面が、ふかふかとした抒情をもつて甦ってくる。また「水師官の会見」は「昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、われはたゝえつ彼の防備、彼はたゝえつわが武勇」に代表せられるように、敵味方、勝者敗者を超えて、両将の人間性が交流する感動の一瞬である。更に「抜刀隊」の歌は、西南戦争を歌った軍歌であるが、冒頭「吾は官軍わが敵は、天地容れざる朝敵ぞ、敵の大將たる者は、古今無双の英雄ぞ、これに従うつわものは、共に慥悍決死の士」で始まる。朝敵である西郷隆盛を古今無双の英雄と讃え、それに従う将兵を決死の士と歌うのである。「赤旗の歌」(歌詞はパブリック・ドメインの斗争歌)や「インターナショナル」(国際労働組合斗争歌、一時ソ連の国歌となる)は階級の敵を憎悪で色どっているが、「抜刀隊」は敵の人

格を認める武士道精神が根柢にある。こゝらに明治維新が血で血を洗う西歐諸国の革命とは違う点は何えるのである。

そのほか明治の頃の歌は皆力が内にこもって雄渾なりズムをたゝえていて。「道は六百八十里」「元寇」「雪の進軍」「日本海海戦」「日本陸軍」「橋中佐」等々、どの歌も皆具体的で一種の叙事詩に強がりがない。謙虚に素直に歌ってあつて力がない。読めばそのまゝ、情景が髣髴と甦ってくる。

そして昭和も支那事変中になると、軍歌が感傷に流れて、歌謡曲調になってきた。例えば「父よあなたは強かった」などという歌が作られた。自分の父を「あなた」と恋人でも呼ぶように呼びかける歌が、何の不思議もなく歌われていた。そして次第に大東亜戦争に近づくにつれて、表現がオーバードになり観念的になってくる。「東洋平和のためならば何で命が惜しかろう」「死んで還れと励まされ」「何が何でもやりぬくぞ」など魂の波動をとまぬ安易な歌詞に変ってくる。情報局選定の「愛国行進曲」は、「見よ東海空あけて、旭日高く輝けば、天地の正気激刺と、希望は躍る大八洲」というようにずいぶん美文調であつて、内にもつとめが稀薄である。大政翼賛会選定の「アジアの力」も「雲と湧くアジアの力、十億の自覚の上に、大いなる朝は明けたり」というように言葉だけは大ききだが、内容が空ろで具体的に迫ってくるものがない。

現代の精神の衰弱は、大正から昭和の初期に既にその予兆があつたと見るべきであらう。

それではこのような絶望的とも思われる現代精神の衰頽を救う道はどこにあるのであらうか。

岡潔氏は最近の読売新聞で記者の質問に答えて「若の浦に潮満ちくれば濁をなみ輩をさして鶴なきわたる」ような新しい万葉的な緊張の調べがある、日本人の心の中に甦るには、あと百年位かゝるだろうと言われた。「緑の日本列島」の林房雄氏は、歴史はフンゼネレーション、即ち三十年をもつて測るべきである。日本は戦後二十年にして経済的復興を完全に日本は精神的にも立ち直るであらう。その端緒は既にいくつか現れている。日本回帰の大潮流は今足もとから起りつゝあると、実例をもつて述べられた。

日本民族の魂の回復はあと百年かゝるのか、十年かゝるのか。それは私には判らない。私に判ることはこの衰弱の姿を一人でも多くの人々に訴えることだけである。

むすび 日本の歌声を起そう

私たち日本人千五百人は、昭和二十一年モスコの国際ラーゲルに連れてゆかれた。そこにいたドイツ人の中に、三十人ばかりのサロン・オーケストラがあつた。バイオリンもクラリネットもピアノも、全部彼らが抑留中働いているレンズ工場で作成したものであつた。彼らの音楽熱心は、日本の音楽を聞かせてくれた。私達は次々と紹介した。私達は「荒城の月」「赤とんぼ」「お江戸日本橋」「海ゆかば」等に彼らは異様な興奮をおぼえた。彼らは私たちに聞いてきた。

「君たちはこれらの作品と、ベートーベン、シューベルトと比べてどちらが偉大と思うかね」

「それはベートーベンだよ」私達は躊躇することなく答えた。するとオーゲストラの指揮者は言った。

「ベートーベンとは巨大な作品を作つた。しかし音楽の質からすると、私はベートーベン以上のものが東洋にあるような気がしてならない」

更にもう一つの例。現在ドイツに留学している私の義妹が、ハイデルベルグの料亭に行った。その主人は「黒田節」「さくらさくら」「お手手つないで」「荒城の月」を名曲として高く評価し、それをピアノで聞かせた。彼女はしみ透るような日本の調べを異国で聞いた感激を詳しく書いてきた。

音楽では世界の最高水準にあると自負しているドイツ人が、感心するような古典の名曲は、探せば日本に無数にあるのである。

私はこれらの話を各クラスに行つて生徒に話した。そしてこゝに書いたような現代流行歌批判をやつてみた。すると生徒の眼はたちまち輝き始めた。生徒たちは今までのような事を知らされてなかつたのだ。歌に対する価値評価の基準も何もなく、ただ新しさを求めて流行歌のメロディを追うてきたのだ。生徒が悪いのではない。教えない大人たちが悪いのだ。聖徳太子十七条憲法の二に曰く「人はなほだ悪しきもの鮮し、能く教ふるをもて従ひぬ」

その年の本校の運動会には、「日本歴史名場面集」が仮装行列に登場したし、予餞会には流行歌はすっかり影をひそめて、日本の古典的名曲が次々と登場した。日本の文化的遺産も大人たちが自信をもつて能く教えることによつて、純真な生徒たちの魂の中に甦ってくる。教えなければ十年たつても百年たつても、日本への回帰は期待できないであらう。

(岡山県立笠岡商業高校教諭)

自ら行ずることより

—伝統継承の道—
長内俊平

私の手元に今二つの新聞の切り抜きがある。一つは「やっぱりヤマもよかです。無限のエネルギーを開発できるのはヤマ以外にはな。男の仕事ですばい」と語る昭和三十七年に高校を出、ケイ肺でたおれた父のあとを継いで、三池で鉱夫をしている野口英恵君の言葉であり、今一つは、石川達三氏が自分の家の改修を委せたある棟梁の意気地ともいうべきものである。この棟梁は、石川氏の友人から「当代まれにみる紳士」として紹介されたというが、改修工事中に軽い卒中で倒れた。仕事は配下の大工が一切とり仕切って工事は完成したが、勘定をとりに来ない。三、四日電話で催促すると、やっとその棟梁の長男という青年が訪ねて来て、「父は、おれが治ったら石川さんへお詫びに行つて、仕事の出来あがりをつつかり調べて、それからでなくては一文だつていただくわけにはいかない、と言うものですから」と言つたというものである。この二つとも一年位前深い感動をおぼえて切り抜いておいたものである。

ところでこの夏の合宿で福田恒存先生が「日本の文化、伝統を正しく継承しているのは職人達である。教育改革には、教育理念の確立が先決であるが、例えば職人が職人として尊敬されるような文化理念が同時に確立されなくてはならない」という意味のことを言われたときに、今迄に気付かずに重大なことを忘れていたことに愕然とさせられたのである。即ち今までの私は、前に述べた職人氣質というか、意気地と言うものに深く感動したといつていながら、その感動は、そういう職人のあとを継ぐ者は誰なのかとまでは考えず、少くとも自分の子供ではあり得ず、誰かかかり合ひのない他人の世界の出来ごととしてみて、感動していたのではなかったかといふことである。これ程虫のよい感激ということがあつてよいのであろうか。そこに気付かず、非常な感動をしたような気持になつて、人に向つて物を言つて来たことが恥ぢられてならぬ。

本場の感動というものは、その人の立場に自分をおき、その人の生をわが生き方としよつとする意志と行為につらなるものでなければならぬ筈のものではないか。そういうことに気付かせられたのである。

我々も既に大学へ進むべき年代の子女を有する年輩になつた。後輩に対し、大学のあり方、学生の心構えについて先輩として語りかけている自分が、一体自分の子女のことについて、その能力を本當に考へて、その進路を決定し、またはしてやろうとしているであらうか。今の大学は、教養を身につけるには不適合なところであると叫び、大学は何らかの意味で創造的なことが出来る能力のある者以外行くべきでない、といひながら、いったん自分の子女のことになると、自ら別であつて、やはり、今時大学位は出ていなければ、という安易な先程述べた虫のよい、気持が少しでも働いていないかと反省したのである。私は、率直に言つて、この合宿参加者のなかに大学に入るより、ここで大学の

役割は何かについて、私の考えをはっきりさせない限り、以下独断のそしりを免れないが、割愛をゆるしていただく。職人としての道を選んだ方がいいと思ふ人が少なからず居るように思われながらなかつた。私が「学生生活はいかにあるべきか」のバネルデスカツションのあと、班に掃り「諸君のなかで今すぐ大学をやめようと思ふ者はないか」と問うたのも、そういう思からであつたし、私自身もそう問われるべき一人である。しかし未だ子女については取返しつかないところまでに至つていない筈である。自分の子女の能力を考へて、大学へ進むべきものと、職人へ進むべきものと、はつき

同胞歌壇

—しきしまのみち—

雲仙合宿第二日（八月六日）作詠草より

会員 徳永 正巳

はげましつはげまされつ、道を求め求めつゞけし十まりとせ
年ごとに若きいのちの新らたなる友のまなざししかゞやきて見ゆ

同 小林 国男

合宿に馳せ参せんと勤務さきのつとめおほせて駅に向へり
うちつゞく暑き日照りは今日もまたうすもやがかりて山の中ゆ筑紫野の稲の野辺路を見つづ過ぎゆく

り、進路を示してやるべきである。そこに初めて、日本の伝統は、職人によつて継承されているという言葉を、我々自らの行動において確めることになるのである。そこから始めなくては文化理念も一歩一歩形成されてゆくのではなからうか。誰かがやるのではなく、一つよりない生を、その道に献身する一人一人の存在が、文化継承の実内容であらう。東郷元帥が、その長男を小学校の先生のすすめに従つて百姓にした。その心を、赤い帽子を冠り赤い服を着た人の首をとれと言つて、蛮人の弊風をたつために自らの身を捧げた呉鳳の心を思うことしきりである。（電源開発株式会社本店勤務）

同 押川 公親
防人の昔のきまをしのびつ、三角の涙の鳥門くぐりぬ

同 山田 輝彦

一とせに一たびまみえたままゆらにはすゑまひよ友はなつかし
二十年の月日は経つともごもに面輪みつめて語るうれしき
赤松の幹並み立てる雲仙の山夕暮れてひぐらしは鳴く

同 加藤 善之

ともどちと語りつ歩みつ思ふかな今年も我はこの道を通ぬ
合宿のあかり見えけりぬばたまの暗き夜の彼方に高く

同 加部 隆三

合宿の道しるべありしるけくも友よと書けるその旗なつかし
その旗を求め求めて道いそぎ友いぎなむて坂おりゆきぬ

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3 宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

歌御会始、詠進のこと

今年、歌御会始の詠進を、しそこねてしまった。口惜しくて成らない。近年は、十月十日が、切日と決つてゐるのに迂調だったのは、それ程、生活が間拔けて居たのだと今更反省させられる。

僕のうたは、人に見せられる代物ではないが、年に一度は、陛下に御覧頂きたいと思つて詠進し続けて来た。「一向うまく成らぬ」と笑はれるのは承知だが、もう二十年にも余ることになる。そして他人の評価は兎もあれ、自分自身としてはギリ／＼解脱の心持を詠進して来た。僕にとっては、詠進するという行為そのものに意義があり、無上の喜びがあるのだ、今年、其の喜びを味はずじまひになつてしまった。

僕は、御題が発表されると直ぐにそれを手帖に記しつける。そして其の一年間を、其の御題で以て過すことにする。つまり、御題を念頭に置きながら、自分にも問ひ外界にも接するのである。さ

うすると、一年中、光に注意し続ける。そして、只一つの光をつかまへようとして努力する。何故なら、光にもいろ／＼あり、色々な感じが生まれて来るのに、詠進は「一首」と限られてゐるから。

今年「魚」だった。僕は誰にも言はなかつたが何時も魚を追ひ廻して来た。魚河岸や海にでも行かねばなるまいと本気に考へもした。ところが、偶然にも雲仙の近くの田んぼの溝で、大きなオタマジャクシが一杯泳いで居るのを見つけてこをどりする程嬉しかった。然しオタマジャクシは蛙の子であつて魚ではない事に間もなく気付いて、がっかりしてしまつた。かういふ当り前の事にも気付かぬ位、とらはれてゐたのかも知れない。伊豆の三津にも、その後で、出かけたが、やはり駄目だった。

僕は今年、魚を取り逃してしまつた。しかし、陛下は必ずしかりと綱までおいで遊ばすので、それを早く拝見させて頂きたいと今からお待ち申上げてゐる。

「泉」一窓「一紙」といふ様な、目に触れるものは良いが、「朝雪」とか「春山」とかに成ると、そろ／＼むつかしく成る。思にもつかぬことだが、僕は、朝雪と雪朝との様に違ふのかについて相当長く考へ込んでしまつた。雪の種類についても調べたりした。その副産物として、文学的な雪には八種類はあることや明治天皇が「夜雪」をお詠み遊ばしてをられることも知つた。

今、言つた様に、此の程度ならば、まだ良い方である。何とも閉口したのは「若」であつた。「若い」なのか「若さ」なのか、さっぱり見当もつかないまゝ、殆ど諦めかけて居た時「僕にとつて『若』とは皇太子そのものなのだ」と気付いて、すっかり思ひ開かれたことも、今省みて懐し。しかも此の時、陛下は、ローマ・オリンピックで活躍する若人の姿を、はつきりと、つかまへていらつしやつた。それが何ともいへず嬉しかった。

分らぬと決め込んで居たものが、実は簡単なものであつたり、一見簡単至極のもの——例へば魚——が頭出来なかつたりといふのは、何かしら暗示的だが、打ち込み方の問題であることは確かである。

僕が、こんなに考へ続けるといふのは陛下の思召を、何とか具体的に——といふのは、自分のものとして——畏まうとする気持からである。陛下と國民とが、一つのことを考へ、一つのものを追及しながら一年間を送る——これは実にすばらしいことではないだらうか。思ふだけに心が弾んで来る。かういふわけだから、僕の詠進といふのは、陛下に対する一年間の生活レポートといふことに成る。然し、一つの事を思ひ続けるといふこ

とは中々出来にくいことだと実感する。話は飛ぶが、松陰に痛烈に批判された梁の恵王は、実は一つのことで——国家統治の問題——を切実に思ひ続けて居たのに違ひないと想像する。其の秘め方が足らなかつたから秘密に言へば「切実に」ではなかつたことになるし、所詮、傍観者流であり近頃のジャーナリズムと変わらぬわけであるが、「卒然」といふ態度の中には、「一进り」といふ一面がある様に思へて成らない。

「土」といふ御題があつた。僕は其の頃、常に死を決して居たの上は即ち墓所であつたから、そのやうに詠進した。ところが、陛下は「草を植ゑるためにやはらげる土」をお詠み遊ばした。これは僕にとつては、大変な驚きであつた。僕は、自分の力しかへつた姿が表にはづかしく成つたし、センチメンタルな態度を吹き飛ばされたやうに感じた。

かういふ感じは、実は、毎年、必ず、体験せしめられるのである。勿論僕は、自分の詠進歌を、御製とくらべて見ようなどといふ不埒な考へを決して持つものではないが、自分の、いはゞ全力をこぼつた上で拜する御製には、いつもきまつて叩きのめされた様な——どうも適確に形容出来ないが——そして溷然と眼前が開けた様な実感を味はふ。これが「一分」といふものであらうか。

とも角僕は、今後も詠進を続けるつもりだ。逆者に取捨選択されて、没にされる世上の募集とは全く異り、詠進は、しさへすれば、上手下手にかかはり無く、必ず陛下が御覧下さるといふ、それだけで満足至極であるから。

(亜細亜大学学生主事 関正臣)

ばかりの予算の中から、すでにソ連の極東海軍を上まわる戦力が再建されていたのです。今、米海軍が極東から引上げて、日本の方が海上兵力ではソ連より優勢に立っています。その結果は、忽ち、ソ連の対日融和政策として表われてきた目で、最近のソ連の対日ニコニコ政策のひとつの裏づけは、ここにあったのです。この厳然たる事実を我々は忘れるべきではありません。

千島、樺太、沖縄、小笠原などの固有領土の返還問題も、日本が独立国家としての威厳と力を備えた時に、はじめて可能になるのであって、空念仏で実現されるものではありません。

ところで、今日のローマン・カソリックは昔のような膨張のエネルギーを失ない、他国の政権を顛覆させるような真似もしなくなっています。勿論、布教は今も熱心にやっています。昔は、昔のよき悪戦の侵略性はなくなっており、人間内心の問題に真面目にとりくんでいるようです。これと同じようにモスクワのクレムリン法皇庁も、革命後五十年たった現在、かつてのような情熱とエネルギーを失ないはじめているように見うけられます。それは、まがりなりにも一応の産業革命に成功し、教育の普及と相まって、ロシア人の心理も漸く近代化はじめた事から、ロシア正教的布教意欲が減退しはじめた事に起因しています。最近のソ連が、その大きな工学力や武力にもかかわらず、東欧からも、北京からも、多分に軽くあつかわれはじめた原因も、このような点にあると思われまます。もはや、クレムリン法皇庁は、一昔前のような魔力を発揮できなくなり、日本の左翼も、一部の者を除いては、クレムリンの指令に盲従しなくなりつゝ、ありま

す。これは、時代の変化のしからしむる所で、ロシアは、これからのち、むしろ拡張しすぎた版図を維持するために苦勞しなければならぬでしょう。私は、むかしスペイン領やポルトガル領が次々に分離独立していったように、ソ連という名の旧教藩国も、やがて、いくつかの民族国家に分裂すると確信しています。

そして、クレムリン法皇庁の衰退に乗じて、今度は北京法皇庁が、一われこそは世界の救世主なるぞよと、お託宣をならべて登場してきたようですが、これも、シナ伝統の中華思想とマルクス・レーニン主義をカクテルにした偽似宗教であつて、ソ連がロシア正教の三位一体説的手法で布教したのに比べ、諸氏百家、孔孟、朱子学的手法で布教しようという訳でしょう。しかし、シナがすぐれた文明をほこつたのは千年以上昔のことであり、平安時代には日本が遣唐使の派遣を停止した頃を境として、日本は、すでに社会構造の面でも、心理構造の面でも、シナを追い越していたのであつて、鎌倉時代に禅が入ってきたのを最後として、その後、日本はシナから何ら学ぶものはなかつたのです。シナ文明は、蒙古に支配された頃から、停滞を続け、殆んど進歩のあとを見せかけておられます。そのような、きわめておどろき後進的なシナ人の心理から発した夜郎自大の毛イズムなど、世界にうけ入れられる筋のものでもないし、日本にも入つてこれる筈はありません。勿論、どこかの国、いつの時代にも淫祠邪教をあがめる愚か者はいるものですから、毛イズムの片棒をかつぐ者も少しはあるでしょうが、それが日本を左右できる訳はないのです。

問題は、このようなイデオロギーなどというものは、結局、舞台用の借り衣裳にすぎないのであつて、ロシアとシナとアメリカと日本と、その他、世界の各国が、アメリカの国家的利害をかけて、秘密をつくして、わたりあつていようという事実だけが、本当の偽りのない姿であります。国家的エゴイズムというものは、日本という国は、日本語という言葉を基盤にしてつくられた一つの文明単位であつて、我々日本人は、この日本という文明単位なくしては、自己を全体化し、世界に立つた事はできないのであつて、世界の日本国家の自立と尊厳を守るための努力と献身なくしては、世界史の中にも参加できないと云えましよう。

大東亜戦の敗北も、今から考えてみれば、巧妙な、米ソの策略に乗せられた不覚から招いたものであります。一九三五年(昭和十年)モスクワで開かれた第一回コミンテルン大会で採択されたテロは、「砕水船テロ」というものであります。それは、「日本とドイツを砕水船に仕立てあげよ。日独両砕水船が削つて進んだ水の道を、我々はうしろからついていけばよいのだ。決して自分の手で水を割ろうとするな。劣するだけ損である。そして、日独両砕水船が削り開いた水路(つまり、日独が荒らしまわつた地域)を、そっくり、そのまゝ、自分等のものにすのだ」というものでした。

そして、『アジアでは、「日本と蔣介石のシナV、ヨーロッパでは八ナチスドイツと英仏Vの間に戦争をおこさせよ。そして、疲勞した日独の前に、アメリカを立ちほだかせよ。日独の敗北は必ずである。その時こそ、日独が支配していた地域は、そっくり我々のものになる』とクレムリン法皇庁は指令したのであります。この指令にもとづいて、昭和十二

年、シナ事変がおこり、日本はシナ大陸の泥沼に足をふみこんでしまつたのですが、これによつて、ソ連は、日本が満洲からシベリアへ北進してくるのを予防し、南進させる事に成功したのであります。この背後の工作を担当した者こそ、ゾルゲと尾崎秀実という人物等であつたといわれます。また、日本が蔣介石軍を叩いた事によつて、延安に追いつめられていた中共は恩をふきかえしたのであります。蔣介石軍は日本軍に叩かせよ、日本軍はアメリカに叩かせよ、これが毛沢東の戦略であつたのであり、この意味からも、シナ事変は、日本を長期戦の泥沼に引ずりこんで疲弊させた上、叩きのめそうという陰謀によつておこされたものであつたと云えます。この点は小田村先輩がシナ事変のさ中に、くり返し力説しておられた事であり、その為、憲兵隊に逮捕された破目になつた程ですが、あの当時、『シナ事変は明らかに陰謀である』と喝破された見識には今さら敬服に耐えないものがあります。

我々は、あの当時から終始一貫して、日本という文明単位を守るために、かつてきたのであり、外交政策の面でも、表面的なもので迷わず、射程の長い長期的構想を踏まえた上での行動をとるべきであります。ソ連との外交問題も、中共相手の工作も、国家防衛のあらゆる努力の裏づけなしに、単なるムードだけで動いては極めて危険であると云わざるを得ないのです。――昭和四十一年十一月二十五日――

(注) スターリンとルーズベルトとの間の暗黙の默契、『ロシアでは日本とシナを、ヨーロッパではドイツと英仏を、まづ戦わせよう』という秘密謀議について、また、あらためて述べたいと思ひます。(重細重大学講師)

和宮の御生涯

宮 協 昌 三

皇女和宮(かずのみや)は、幕末維新の動乱の中に、しかも当時の政局の中樞近くにあつて、国の歩みとともに生きた婦人の典型として、多くの脳裏を去らな

いたものがある。
わたしが、和宮のことについて強い関心を持ったのは、文久元年十月下旬、將軍徳川家茂のご降嫁のため中山道を下られたとき、幕命によつて、その沿道にあたる村々が前古未曽有の運搬人夫の大動員を受けた記録を見てからのことであつた。

たとえば、信州伊那郡(高遠藩)川下り郷西伊那郡村の名主根津平治は、「文久元年西年十月 和宮様御下向諸事控録」といふ、人馬徴発に関する詳細な記録を残した。

この記録は、先ず信州伊那郡羽場村外二十七ヶ村名主組頭宛の、道中奉行一色山城守及び酒井隠岐守の、助郷(すげこ)差出の予備命令から始まっている。

此度 和宮様御下向御迎御用役の為に上京相濟候迄、沿道の村々、中山道福嶋宿上松宿須原宿へ当分助郷申付候条、右各宿役人共より相触次第、人馬無滞可差出もの也

西九月廿六日
(刷印) 山城 御

(追書) 豊後
追て此触書早々相廻し、承知の旨別紙請印状相添、留り宿より村継を以本文宿方の内へ相返し、夫より宿継を以山城役所へ可相返候也。以上。
助郷とは、言うまでもなく、各宿場備

付けの伝馬への臨時応援荷運び人夫と馬をさしている。以下この記録は、和宮御下向御一行(前後四日間にあつた)の休日の日程を記し、木曾問屋より申越しの人馬の出動数を記し、人馬仮宿のための下給施設費、また食料費など詳細に記している。

この時、信州では、どんな小部落でも、役人(纏(旗)各一人、人足十五人)を下らず、しかもこれだけでは中山道大通行のため間に合わず、越後、甲州まで動員されて、これらの人足二万人、外に開人足(予備)一万、計三万。直接お伴の公卿は、中山大納言、菊亭中納言、千種少将、岩倉少将ら殿上人十二人、その外幕府のお迎役人、宮付のお役人など、相当の有資格者四百人、下方及び人定は京都側約一万人、江戸側一万五千人、通し約二万五千人、計三万人。総計六万をこえる人数と数千頭の馬が、中山道沿道にひしめいたのであつた。

そもそも和宮は、仁孝天皇第八の皇女、孝明天皇の御妹君、家茂ご降嫁の折、芳紀正に十六歳であつた。

ご降嫁に到るまでのご生長ぶりやその経緯は、「静寛院宮御日記」(上下二巻、昭和三年九月刊)、正親町公和編、皇朝秘笈刊行会発行)の、御年譜に要を得ているので、それを抄記したい。

- 一歳 弘化三年 閏五月十日 橋本邸ニ於テ御降誕。御母権納言橋本実久息女経子
- 四歳 嘉永二年 五月二十三日 初メテ参内
- 六歳 嘉永四年 七月十二日

有栖川宮熾仁親王ト御婚約ヲ結バル

十二月九日

深曾木之儀ヲ挙ゲラル

十二月十一日

御鉄鑪初

十五歳 万延元年 二月二十三日

桂御所へ御移住

四月十一日

所司代酒井忠義老中奉書ヲ奉リテ御降嫁ヲ奏請ス

五月四日

勅シテ御降嫁ノ請ヲ却ク

五月十一日

所司代酒井忠義関白九条尚忠ニ就キ重ネテ御降嫁ノ勅許ヲ請願ス

五月十九日

宸翰ヲ関白ニ下シ再ヒ幕府ノ請ヲ却ケシム

七月二十九日

幕府攘夷実行ヲ誓ヒ御降嫁勅許ヲ切願ス

八月六日

宸翰ヲ下シ橋本実麗ヲシテ宮ニ御降嫁ヲ勤メシム

八月八日

宮上書降嫁ヲ固辞ス

八月十三日

宸翰ヲ関白ニ賜ヒ皇女寿万宮ヲ以テ和宮ニ代ラシメントノ聖慮ヲ内示セラル

八月十五日

宮恐懼御降嫁奉命ヲ決意セラル

八月十八日

宸翰ヲ下シテ降嫁勅許ヲ幕府ニ内達セシム

八月二十三日

有栖川宮和宮トノ婚儀延期ヲ出願ス

十月九日

將軍家茂特使ヲ派シ和宮降嫁ヲ請フ

十月十八日

勅シテ皇妹降嫁ヲ聽許セラル

十六歳 文久元年 三月二日

幕府東海道水害ト人心不穩ナルヲ以テ和宮御東下ノ延期ヲ請フ

四月十九日

内親王宣下御名ヲ親子ト賜フ

八月二十四日

勅ヲ幕府ニ下シ和宮御希望個条ノ実行ヲ誓ハシム

十月十五日

東向御請暇ノ為メ参内

十月十七日

特ニ隨從勅使岩倉千種兩卿ヲ召見シ宮御擁護ノ救慮ヲ内示セラル

十月十七日

右の記事について若干の注を加えるならば、孝明天皇が宮のかわりと考えられた皇女寿万宮は、前年の安政六年生まれで、当時わずかに二才、天皇は、「一人の女子で、あまり幼年であるので、少々哀憐も加わるけれども、公武一和ということには替えがたく、天下のためであるから」と言われた。ここに和宮のご決心が定まったのである。和宮ご希望個条を幕府に下したという、ご希望個条は、結婚の期日や「結婚後も万事御所風に」などという五つの条件であった。後の話であるがこれらも充分には守られず、千代田城の大奥に和宮の忍苦の生活があつたわけである。

かくて文久元年十月二十日、京都で発興、東向の旅路に上り、中山道の宿場宿場の泊まりを重ねて十一月十五日江戸に御着、清水邸に入御された。
文久元年十一月朔日、木曾三留野、二日上松、三日敷原、四日日本山、五日下諏

訪、六日和田峠と泊まりを重ねられて、中山道を東行せられた。下諏訪本陣屋は、和宮のお泊まりになったお部屋を大切に今でも当時のまゝに保存している。先日小堀遠州流の庭園を前にしたその部屋を拜見して感慨深いものがあった。

「静寛院宮御日記」中の「御詠草」には、年代不明として挙げられているが、明らかに木曾路を始めこの旅中の述懐と覚しき左のような歌を載せている。
旅衣ぬれまさりけりわたりゆく心もほそき木曾のかけはし
宿りする里はいづこそ峯越えてゆけどもふかき木曾の山みち
遠ざかる都としれば旅ごろも一夜の宿も立ちうかりけり
山くらき夕日の影にいそがれてやどりもとむる旅のもろ人
ふる里をおもひ忍ぶの草枕幾夜かむすぶうき旅の宿
すみなれし都路出でて今日幾日いそぐもつらきあつまちの旅
都出でて幾日きに行けんあづま路やおもへば長きたびの行くすゑ

このご降嫁は、前述のご年譜の記事からも察せられるように、明らかに、世に言う政略結婚の最たるものに違いない。そして右に記した歌には、当時としては、一月の旅を要する江戸という遠隔の地、蕃夷跳梁の地への道中の憂苦が述べられていて、宮の心中には、意識するとならないにかゝらず、おのずからなる使命感があり夫君への愛情をも含めて、やさしい中にも雄々しい、けなげな心情をたぐえていたことは、こののちの、さまざまの御行実のうちに感得できるのである。わたしが特にこの宮にひかれるのは、実にこの点にある。

宮の歌に

述懐

数ならぬ身こそつられければ、世もきみがからに成るよしもなき
また、
為君祈世
なすわざもなき身なれども君が為めみだれあらじと世を祈るかな
などを誦すれば、宮の志操の根幹を知ることができるのである。

かくて翌文久二年二月十一日家茂とのご婚儀を挙げられたが、翌三年二月、家茂は攘夷決行誓約明証を強いられて上洛、尊攘の志士横行する騒然たる中において、宮はひたすら夫君の無事を祈念せられた。家茂は同年六月十六日一旦江戸に帰還したが、翌元治元年正月早々、再度上京を余儀なくせられ、更に翌慶応元年五月、長州征伐のため進発したまゝ、翌慶応二年には大阪滞陣中に歿した。文久二年のご婚儀以来わずかに四年のはかない契りであった。

文久三年の春將軍上洛中のご詠と伝えられる宮の歌に、
惜しまじな君と民とのためならば身は武蔵野の露と消ゆとも
再びはえこそかへらね行く水の清き流ればくみて知りてよ

この二首の歌は、次の、夫君家茂急逝を悲泣する歌とあわせ読むとき、宮の自然にして高貴な情操がしのばれるのである。
三瀬川世にしがらみのなかりせば君諸共に渡らまじものを
空蟬の唐織ごろもなかせん綾も錦も君ありてこそ
着るとても今は甲斐なきからごろも綾もにしきも君ありてこそ
世の中うきてふうきを身一つに取り集めたる心地こそすれ

こののちの宮のご行実については、紙面の関係もあり、「ご年譜」による。

二十一歳 慶応二年 十月二十三日 家茂ヲ増上寺ニ葬ムル

十二月十九日 御難髪静寛院宮ト称セラル

十二月二十五日 孝明天皇崩御

十二月二十五日 慶應三年 正月九日 明治天皇踐祚

十月十四日 將軍慶喜上表シテ大政ヲ奉還ス

二十三日 明治元年 正月三日 鳥羽伏見ノ変起ル

正月十二日 前將軍慶喜海路江戸ニ還ル

正月十五日 宮慶喜ヲ引見謝罪歎願ノ事ヲ議セラル

正月二十一日 上臈藤子ニ親書ヲ授ケ急ニ上京セシム。徳川氏救援ヲ歎願センガ為メナリ

二月九日 有栖川宮織仁親王ヲ東征大総督ニ任命ス

二月十二日 慶喜上野大総院ニ入りテ謹慎ス

三月八日 宮江戸市民鎮撫ノ教諭ヲ発ス

三月九日 山岡鉄太郎駿府ニ至リ歎願書ヲ大岡督府ニ呈ス

三月十一日 宮旨旨ヲ山王社ニ下シ民情静穏ノ折柄ヲ修セシム

同日 宮上臈藤子ヲ沼津ニ遣ハシ官軍ノ江戸進撃中止ヲ東海道先鋒總督ニ歎願セシム

三月十三日 宮老女玉島ヲ板橋ニ遣ハシ東山

道先鋒總督ニ進軍中止ヲ請ハシム
三月十四日 勝、西郷高輪薩邸ニ会見官軍ノ江戸攻撃中止ノ事決ス

三月十八日 宮軍ネテ江戸市民鎮撫ノ教諭書ヲ發セラル

四月四日 勅使橋本実斐等江戸城ニ登リ徳川氏処分ヲ勅命ヲ伝ヘ家名相続ノ恩命ヲ下ス

十月十三日 明治天皇御東幸、是日江戸ニ著御アラセラル

十一月朔日 宮勅命ニ出テ參内天顔ヲ拝ス

かくて、宮は、江戸の市民また徳川氏の安泰を見届けて、わが身の江戸にあること、新しき世のさわりたるべきことをも考えられたのであろうか、明治元年十二月二十三日、増上寺に参詣、徳川氏の廟とご生母の墓所とを拝し、暫しの袂別を告げられ、翌二年正月東京を発つて京都聖護院の仮御所に入御せられ、五年有半まで京都に逗留された。

明治七年七月、東京に帰還、麻布の邸に入られ開けゆく代を喜びながら、花鳥風月を楽しみつゝあつたが、明治十年八月病を得て九月十三日、箱根塔の沢元湯に療養中歿せられた。享年三十二歳であった。ご遺言によつてご遺骸は増上寺の昭徳院(家茂)の廟所に夫君と相並んで葬られた。

「御日記」上巻々頭の詠草の写真を見ると、そのご筆蹟は、女手と思えぬ雄勁と鷹揚があり、明治天皇の玉蹟を思わせるものがある。

(長野県立岡谷東高等学校長)

慰霊祭 献詠

今年も九月二十三日、飯田橋の東京大神宮で恒例の慰霊祭が厳修された。本会の道統につながる同信師友物故者のみたま祭りに、年を逐つて参加者の数も増し、全国各地から寄せられた献詠も多くにのぼった。当日の盛會を偲んでここにその一部を掲載する。

御遺族

山梨 三井みほ子
年ごとにあまたの人のあつまりて慰霊のまつりおこなふけふかな
青森 長内 いし

大東亜戦の勝利信じて征き征きし学徒たりし君ら再び還らず
調布 長内 俊平

難きことに遭ふそのたびにかくせよとふみ霊の声をきく心地して
東京 松吉 基順

兄逝きて二十年余を経つれども思ひはつきずありし日偲びて
東京 勝田 文子

はらからのなきけ忘れじと詠みましゝみ心いだきわれ生くるなり
東京 勝田 文子

いとし子の教へを守るかひありてすやかに生くる年老ゆれども
仙台 加藤 俊和

敬老の日母と一番丁を歩みて
み眼のかすみ幾ばくにても晴れませと舶来の老眼鏡連れ立ちて買ひぬ
国思ひみ親偲びついでたらし兄の心と共に捧げぬ
東京 高木 尚一

みたままつり年を重ねて皇神のみまもりいよ、仰がるゝかな
ゆるがざる国のいしづゑ示します大み教を忘れてもへや

ますぐに立ちますぐに進めと告げたまふ神のみきとしかしこみまつる
日立 額賀 千代

吾子達のみたままつりに大神に詣でんとして夜もいねざりき
同人

神集ひ醜草茂る日の本をいかにかすらむ嘆きあるべし
埼玉 松田 福松

亡き友のこゝろしぬびて生きゆかむこのわがいのちみそなはしたまへ
君あがめみ国まもらむこの道をあゆまむねがひみそなはしたまへ
東京 伊沢甲子麟

亡き同志の心を学び日々にただに忠義の道を歩みつつけむ
東京 石井 良介

天つ日を覆ひたる霧うすれゆき道見えそむる戦場ヶ原は
長崎 三根 淳

国の為君の為とて散りゆきしみたまいづくをあまがけるらむ
東京 田中 米喜

師のきみのまた友どちのみたまいしづまりませとたたいのるなり
東京 戸田 義雄

外つ国の櫓の突もちて婦り来ぬみたまのよらむ現ししるしを
名古屋 高橋 鴻助

世はいかにくだつともつひに国民のもとつ心のおこらざらめや
乱れてはまた立ちぬべき国民のもとつ心をたよりとせむ
東京 井上 学啓

かくり世の人のみたまもかくこそとおもふこゝろをうたに詠まばや
富山 広瀬 誠

どよもして雨吹き荒れたり亡き友も歎く

かこの世を怒り哭くまでになき人を思ひてあれば家をゆるする雨風の音うしほのごとし
虫の音も絶えて聞えずわが心乱れに乱れ友思ひやます
館林 山本 十平

このたびはいのち消ゆとも戦争のたくらみくたくとみたまに告げむ
徳島にて
佐賀 副島羊吉郎

師の君の「夕ある雲」をうたひまししその裏山にもの思ふかな
長野 水野 龍介

現代は乱れに乱れ亡國の兆あらはる悲しからずや
天にますみおやのみたまよしきしまのやまとだましひを守らせ給へ
会員

海路、中近東に旅立つ前夜九月十五日の夜半に
昨日今日秋風立ちてみたままつるととき近づくを覚えつ過しぬ
今年ほもみたまのまもりししみと身に泌み覚えしことめつらしき
亡きとものみたま現しくまもります日の本つくにわれらがみくには
岡谷 宮脇 昌三

秋空を遠くはるけみ過きしかたの過ぎにし人をしのびつるかな
ありし世に國愛ひたる先人の憂ひは忘れじ今のうつゝに
年ごとに祭忘れず嗣ぎきたる思ひひとすぢのたふときろかも
東京 大津留 温

百武礼之兄を偲ぶ
胸ぬちのたぎる思ひを抑へつゝ言葉静かに説きし君はも
江頭俊一兄を偲ぶ
友どちの激しき論議にこやかにうなづき

ながら聴きし君かな
長崎 脇山 良雄

年ふとも友の情の忘らえで霊祭りするならひうれしき
国思ふまことの道に通ひ合ふかくりみの友うつそみの友
秋空はかなしきばかり澄みわたり今年も友のたままつりする
秋空の青きにも似て真心の澄めるを君の霊に捧げん
けふ
東京 桑原 暁一

くもりがちのけふのけしきよ亡き友をしのおほいなるいくさにいのちききげたる友お祭りにつひかますらむ
年月はいやさかかれどもなき友のみ顔み言葉今も忘れず
ぬはたまの夜空みあげてなき友のありし日しぬびぬ虫なくなべに
岡山 名越二荒之助

たゝかひにたふれし人を犬死と言ふ人今も尚あまたあり
敵軍の侵略受くればカブに乗り逃げると答ふる平和主義者よ
英霊は平和を求めつゝありわれも又人殺し戦争すまじとも言ふ
国のため命捧げしものふは身をまて示しあり守護る心を
国民の心一つに結ばれて祖国防戩に立つ時もがも
福岡 小林 国男

敵かき霊まつりの庭しのびをればひとすぢの道いよよ身にしむ
みおやらののこしたまひしひとすぢの道につらなりわれも生きなむ

みおやらのこしたまひしひとすちの道
はみ国のいのちなりけり

下関 加藤 幸之
吹く風の涼しと思ふ年毎にしらせくるな
りみたままつりを

東京 小田村四郎
夜深くひとりし居ればわが庭の虫の音し
げく秋だけにけり

御国おもひのちきぎげしすらすらをのみ
たまをまつる日のめぐり来ぬ

なすことのなきを恥ぢつゝ一すぢのみこ
ろざしをしをびまつるも

新潟 広川 敏郎
めぐりきしまたままつりを肌寒きこしち
の国ゆおろがみまつる

東京 相原 良一
亡き師友のみたままつるとたまあへる友
短つどふことのかしこき

おどろなるいまの世直くせんために昔の
み霊の力貸してよ

北九州 山田 輝彦
亡き数に入りし友の名かぞへつゝもの思
ひ居れば虫鳴きしきる

東京 江里口淳一郎
秋深むころとはなりぬみたまらは帰りき
ませりこのみやしろに

みたまらを慰む祭り年ごとに国のまもり
となるを祈らむ

仙台 星野 正雄
国をおもひつたふれし人の御魂やすか
れとともに祈らむ都の友らと

先輩のみたまをまもり人づくりに我いそ
しまむまなびの庭に

長崎 田口 謙二
はたしえぬ思ひのこしてゆきし人の心し
思へば勇氣湧きくる

山口 直彦
故小山和雄兄の御長男をたすねて

友のみ子良くもにたまふうり二つ友在り
し日のみ顔みる如し

埼玉 今泉 重郎
夜もすがら鳴く虫の音をききよればこゝ
ろもしぬに亡き人しぬばゆ

大君のまげのまにまに省みず散りにし男
子愚ふ今日かな

折々のみ声その顔浮み来て胸せかれけり
月口過ぐれど

散りてゆく木の葉を見ては御霊らの深き
悲しみ思はざらめや

若くかへしよみゆくほどに永への生命思
吹けり御文御歌に

若くして生命すきにし神々の思ひに連な
りひたに励まむ

慰霊祭の知らせを受け故黒土先生の遺
著をひもときて

秋立ちて霊祭の日のみ知らせを受くるが
まに昔ひもときぬ

遺されしみ言葉たどればひたすらに国思
ひまししみ心偲ばれぬ

美しく澄みししらべにふれしとき悲しき
までに胸たかぶりぬ

いちづなるまこと貫き国のため命すきに
し師のみ霊はも

昨年のお慰霊祭に出席した折に
若き身を祖国の為に奉げしつめえり姿
の写真うつくし

をちこちゆ集くるらむみ歌をは献げて
みたましのぶ今日かな

山口 西元卓 敏毅
日本の本の国守らむと誓れにしはらからの
靈祀らむけふは

をたやさじと思ふ

東京 広瀬 清治
合宿のかの感動を思ひだし喜びいさみ
てうたよみまつる

生前のみ姿知らねどさまさまによまれし
歌に御心憑ばる

やすらかにしつまりませとをちこちの友

福岡 行武 潔
大阪 岡村 義一

各地の集り

新薬師寺合宿
十月八日夜より三泊三日の日程で合宿
研修会を行った。

参加者、山本伸治(東京水産39年卒・キ
ュービー学母工場) 諏訪田陽三(神戸大
学38年卒・神戸市立湊中学校) 大川寿雄
(日大40年卒・東京鋼鐵工業浜松営業所
) 高村光紀(亜細亜大学39年卒
) 沢部寿孫(長崎大39年卒・日
商)

動機は合宿研修会をやることにより同
信生活の開展をはかろうとするものであ
る。八日の夜遅く五人が顔をそろえた
時、ほっとしたやすらぎの中にかげがえ
のない時を過ごしているのだという緊張
感がわきおこってくるのをどうしようも
なかった。二日目の午前中は前以つての
約束通りにお互いの研究発表を行った。

山本兄はベルゲゾンの言葉にふれ一瞬一
瞬がかげがえのないものであることを説
き、次いで「哲学における正確さとは対
象に全く密着するものであってその間に
空白があつてはならぬ。説明は対象にし
か適合しないし、対象は説明しか受け入
れないものが科学的なのである。」とい
う言葉をとらへ現代の社会科学、人文科
学の言葉自体のあいまいさやそれによつ
てもたらされている混乱をすどく指摘

らつどひてみたままつりぬ
すみたわる秋空かけて帰ってくる友をむか
へむけふの住き日に

熊本 瀬上 安正

友に寄せて
十有余年の長き月日をみたままつりにつ
くせし君は今旅にきて

歴史は古く国新しきヨルダンの荒野の果
てを旅ゆくらむか

した。これは諏訪田兄が建国記念日を二
月十一日にするかしんかの論議におけ
る反対論が科学的なることを自称しなが
らその実いかに非科学的な説得力のない
ものであるかを例を上げて説明した内容
と合致するものであった。大川兄のアポ
カリプス論(黙示録)はキリスト教の本
質にふれるもので今後の研究に大いに期
待するものである。

高村兄は日常の生活体験の中から悩み
苦しみをうちあげたがそれは又我々の共
通の問題でありそれらに對する答え
が松陰先生の「講孟餘話」(沢部研究発
表)の中や三日目に行つた論議「聖徳太
子の信仰思想と日本文化創業」の中に生
き生きとはなわかつて来たのは実に驚き
であり喜びであった。和歌創作は第二日
目の午後夜久先生の城島合宿の和歌の創
作の手引きのテープを聞いた後に、行い
次いで相互批評を行った。三日目は城島
合宿における小柳先生の「講孟餘話」の
テープを聞き次いで輪読を行った。最後
に終戦直後の今上天皇の御歌をはじめそ
の他の歌をひろうしあいお互いに味わつ
たものであった。今後尚一層の同信生
活の開展をはかるべく和歌創作に特に力
を入れることを誓つて別れた。

(沢部寿孫記)

同胞歌壇

—しきしまのみら—

雲仙合宿第三日(八月七日)作詠草より

会友 山口 為次

雲仙合宿に参加して
けがれなき学生に触れて思ふかな五十路
のわれは恥を重ねし
あたくはかき師のおさとしを膚寄せて聞き
入る君の眉のさやけさ
夢路よりうつしにかへるひとくきをたえ
てなかりし蟬の声聞く
胸の思ひひかにつたへむことのはのいや
ひなしきをいかにすべきや
連絡船上にて 会員 行武 潔
うねりなき海原押し分け白波を立てつゝ
進む船は勇し
漁舟へさきをあげてエンジンの音軽やかに
進むゆくなり

山田先生の和歌講評を聴きて
まごころの歌詠みませと説き給ふ師のみ
まなこは輝けるかも
まごころを詠みたる歌は必ずや人のこゝ
ろにひびくとのたまふ
はかなかるいのち何をば目的に燃やして
生くるかと問ひ給ふ君

今上天皇御歌の石碑を拝して
折り折りに写真に拝せし石碑はもいまう
つしくもこゝに仰ぐも
夏草のしげみが中に天皇のみ歌の石碑を
仰ぐかしこき

「和歌講評」で山田先生が歌を直され
ゆくのをきいて
生命なきも蘇へりみづみづしくいきづ
きそむるを見る心持すも

同 三重野梯次郎
同 小林国男

同 小田村寅三郎
木内、福田両先生の御三泊下されし御
心情に感激しその御講義を聞き
蒸し暑き場内に満ち壇上は暑さひとときは
きびしかるらむ
涼しかる土地なるべしと案内せし山雲
仙にこの暑さとは
おふたりの大人はこもこもみ思ひのたけ
を傾け講義し給ひぬ
ことのはのみだるささまを手にとるがこ
とくに示したまひける大人
語りたまへ一言一語語る人の篤き心を現
しく伝へ来
聴く者のまなごころごとくまやきて語ら
ふ人の面にそゝがれぬ
しきしまのやまとのくにのことのはのみ
だれたささむとききぬかいま
「悲しがる思ひ」と大人のたまひしそ
のことのはの忘れかねつも
従姉みまかりぬ 同 行武 靖枝
まことかと耳を疑ひ弟にいくともたつね
ぬ訃報を聞き
三日間のわづらひのちみまかりぬと聞
くうちにはや涙あふれぬ
知らざりき君の病ひも知らざりきわがい
で立ちし日にみまかりしとは
「ご殿様」の刺し方を習ひに君のもとに
通ひし日々はことの頃なるに
合宿に心はけりつめ君しのふいとまもなく
て一日経にはけり

同 小泉 明
合宿運営にあたる若き友ら
いくとせをともに学びし若き友らがたく
ましく行ふ合宿教室
休養のときをもちに若き友らは合宿運
営に情熱を注ぐ
事務をとる疲れに眼閉するとき烈しき討
議聞こゆいま午前三時

早稲田大学信和会合宿
早稲田大学信和会は、大学史上はじま
って以来といわれたあの早大紛争のさ中
において、無惨にもふみにじられていっ
た人の情意を回復せんとする願いの下
に、全力を傾けて結成した会である。五
月十日を信和会結成の日として、而来、
週一回の読書会を欠かすことなく続けて
きた。毎回満足すべき読書会が運営でき
たとはいえないにしても、会員の熱意と
真剣さとは、お互いの心の中につねに新
たなる勇気を与える源であった。
こうして続けてきた読書会を基礎とし
て、我々は信和会結成後をはじめての合宿
を、十月八日より十日まで、藤沢市のユ
ースホステルで運営した。この合宿の主
な目的は、各自の夏休み中の研究テーマ
を発表する、各自の夏休みの研究テーマ
を考えている諸問題についても、勿論真剣
な討議を行った。参加者は学生九名に、
国武、小幡、日本の三先輩を加えた十二
名。八日の夜、皆が集まるのをまつて、
早速「学生生活はどうあるべきか」につ
いての三時間近くの討論より合宿を開始
した。翌九日は、朝八時から夜十時まで
昼食、夕食と若干の休憩時間を除いて、
一日中、各自の研究発表を続行した。研
究内容は、「日本近代の問題」「愛国心
について」「新憲法成立過程について」
「大学の理念」「古事記研究」の五点、
各自約一時間の研究発表と一時間半にわ
たる質疑応答の時間をもった。夜に入り
ますに疲労感を覚えたが、実に充実し
た一日であった。十時半から一時間、今
後の活動に関する協議をして二日目を終
了。翌十日は、国武先輩による小林秀雄
の「社会化された私」をめぐる講義、
和歌相互批評を主な日程として午後

四時頃合宿を終了。お互いの力を合せ
て、はじめての合宿を運営できたうれし
さを参加者一同深くかみしめたことであ
った。
尚今合宿の内容は、十一月下旬までに
記録にする予定である。
(早大 今林賢郁記)

鹿兒島懇話会

鹿兒島懇話会会報(八月一日号)によ
れば、この会の旧発起人の援助と指導を
受けて鹿兒島市内在住の二十〜三十名の
青年社会人研修グループによって、新た
に再開されたものという。主として川井
鹿大助教授の薫陶を受け、国文研合宿教
室に参加した十数名の諸君によって運営
されている。発起人の一人江口正弘君の
挨拶に、「本会に対します私共の願いは
A祖国V及び祖国と切り離せない八人生
Vの問題について、真実の言葉が交わさ
れることとあります」とある。
九月二十一日、第七回例会として、川
井修治先生の「韓国の実情と日本の反省
」と題する講演が行われ盛会であった。
この例会に際しては特に果敢経営者協会専
務理事小牧辰志氏から、本会を紹介して
市内各事業所の中堅の社員の参加を呼び
かけて頂いていた。

編集後記 この夏の合宿教室参加者全員
の感想文集が百余頁にまとめられて、こ
の程出版された。それん、苦惱があり感
じられる切実な感動があり、苦惱があり
心を開いて感じ語る青年の交流こそが、
学問、人生、祖国への志を生むことをあ
らためて知らされる。左右を問はず選萃
やイデオロギーとの悪因縁にからまる大
衆政治家の言行の動機について、その理
由を思へば、深々と腐敗乱の様相を見
る心持がして懸隔の対照を禁じえない。



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州—東京—全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南郷町25-3宝辺正久
下関市下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

心の用意を

東西抗争の集中的発現ともいふべきベトナム戦争は世界の関心の的となつていく。我々は地理的にはそれに極めて近くに位置していながら、心理的には甚だ遠く存在であるかのごとき錯覚におちいりやすい。戦後の被占領によって一時、国際社会に対する発言力を失つた日本は、同時に厳しい国際社会に対処して生きるも構えも失つて今日に至つては、保証されているという錯覚は、自らの国は自らの手で護らねばならぬという自明の事理をも忘れさせた。きびしい外部の環境には、これに適確に反応し、あらゆる病原体の侵入には、これと勇敢にたゝかひながら、自らの鍛錬によって人はその生命をまもり持続して来た。人間ばかりではない。すべて生あるものはみな、このようにして自らのいのちをまもり育てきたのである。利便の環境を過保護の

状態のもとに育てられた戦後児童の、体位は向上したものの、体力は却つて低下したと報告されている。戦後の日本は、世界の目をみはらさざるような経済的発展をとげたが、それは必ずしも国の生命の健康であることの保証とはならぬ。例えば、国防費負担の軽かつたことは日本経済発展と生活水準の向上に甚だ利便であつたことは疑いないが、現実を無視した平和論議は、あたかも無菌の世界を夢想するに等しく、真の国力の充実を阻んでいることも疑いない。

ともあれ戦後日本のおかれた環境は「国家」の存在と意義を忘却させるには恰好のものであつた。自らの国を自らの手でまもることを考えることなしに、ともかくも「平和」であり得たし、またそれが如何なる条件の下に可能であつたかを精確に追究することを怠れば、夢想の平和論をもてあそんでいることもできた。戦争のごく近くに位置していながら、心理的には甚だ遠いところにいる如く錯覚

するとはじめに書いたが、なるほど日本においてもベトナム論議は喧しく、いかに盛んである。しかしそれは、現実の問題として、若くは国家の命運に拘わる問題として論議されているのではなく、現実から遊離された個人の生活の安否に拘わるところから出発して論議されているので「米国が手をひけば平和が来る」式の責任のない議論になつてしまふのは、つまりはそこに原因している。無責任の、従つて大変気軽な言説が横行している姿を見ると、ベトナム戦争は遙か遠くに戦われているように思われてくるのである。

抽象された個人を中心として考える人々にとつては、国家は個人に対立する権力機構としてまず目に映る。それは往々にして個人にとっては好ましからざる存在である。それらの人々にとつては、国家とはせいぜい個人生活に役立つ限り有用のものであると考えられるらしい。そういう見地から望ましい国家として、或いは「平和国家」といふ、或いは「福祉国家」などと名をつけて国家の性格をほし、いまに限定している。平和な状態にある国家や、国家に福祉制度のあることは、もとより好ましいことであつて、誰しもそうあつて欲しいところであるが、かといつて、「平和国家」や「福祉国家」といふ実体があるのではない。それは、丁度、人は健康であることは好ましく、真面目であることが望ましいことであつても「健康人間」や「マジメ人間」といふ人間が存在しないのと同然である。人間にせよ、国家にせよ、それはいづれ

も、それ自身統一された生命体であつて、恣意によつて一面的に規制限定されるものではない。重要なことは、生命活動としての意志であり、努力であり、精神活動である。健康とは、一切病気をしない筋骨たくましい肉體そのものではなく、実は、環境の変化や病原の侵入を予想しつゝそれに抗して生命をまもろうとする健全な生理的心的活動であること、平和とは、平和憲法を持ち、軍備を抛棄すればそれによいのではなく、平和を乱すことあるべき、内外要因の多数現存することを認めつゝ、しかもこれを克服して平和をまもろうとする精神活動をこそ指していうべきであらう。福祉国家という実体概念に偏倚すれば、すべてを社会制度に依存しようとしてやがて隣保互助の精神は忘れられ、各自自立の意志も失われてゆく危険がひそんでいるのである。

目次			
心を研究する	加納 久	(1)	万部雄一郎
古歌集	今夜	(2)	祐賢正
某月某日	江里口	(6)	淳一
行為と道義	溝江	(7)	優
宰府台報告	津島	(8)	正
☆ 古	窓		

古事記研究

今 林 賢 郁

(早稲田大学 政三年)

違っている」という言葉が流行語にさえなっている世相にも示されるように、いまの世態人心が何か異常であることを誰もが感じていながら如何にすべきかその方途に迷っている。都会の人工の生活に疲れた人々はその身心を癒すため時折広大な自然の天地を求めて旅ゆくことを知っているが、現代の病弊をおさめるためには観念論議の世界をはなれて、ときには悠久の歴史的精神生活のうちに戻ってゆくべきことには思い及ばない。精神生活本来の姿は、他と心の通う生活であり、

他と心の通う生活の現実具体の姿は国民同胞生活である。歴史的生命を断絶し、精神の優位を放棄すれば、そこには絶えざる分裂があり「永久革命」が待っている。精神生活としての国家生活を味識することは、現代の病根を癒し、精神の威厳と人間生活の基本とをまもるための痛切の要求である。我々の、そして日本の生命を防護するために、まず我々のうちに素直にて雄々しい精神生活を復活させなければならぬ。それが心の用意である。(日特金属工業取締役 加納祐五)

ぼくは今年の夏、韓国を訪問したが、その帰途、機内より見た日本の緑の美しさが忘れられない。その自然の美しさを見ながらおのづとぼくに想い出されたのは、倭建の命の
倭は国のまほろばたなつく青垣山隠れる倭し美し
という歌だった。で、また古事記をひもといひみたくしたのである。
ぼくが小柳先生の御指導で友ら数名とはじめて古事記を読んだのは、高校二年の時だからもう五年程前になる。古事記の主題や構成とかいったものは皆目わからなかったが、古事記の中に散りばめられた実に味わいある言葉を見つけては、

それを口ずさみ、一人でよるこんでいたように思う。特に、これは今でも一番印象に残っているのだが、「鳥々の生成」のところの「かれ二柱の神天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下して盡きたまひ、壺こころをろに盡き鳴して、引き上げたまひし時に、その矛の末より滴る壺の積りて成れる鳥は、液能暮鳥島なり」という部分で、「こころをろに盡き鳴して」とは何と味わいある言葉だろう、などと感心したものだ。また冒頭の「次に国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、葦芽のごと萌え騰る物に囚りて成りませる神の名は、宇

摩志阿斯訶備比古遲の神一や、須佐の命が穴牟遲神を黄泉比良坂まで追っていつて語りかける言葉——「底津石根に宮柱太しり、高天の原に水榎高しりて居れ。この奴」など、その表現のさわやかさや豪快さに驚いたり、よるこんだりしたものだ。そして、二度目に古事記を読んだのが、大学一年のときで、その読後感をぼくは次の様に記している。
「よみおえての感想はいろいろありますが、やはり何と云っても一番印象に残るのは古事記の世界のスケールの大きさです。古事記の中にあられる無数の神々や英雄は、実によく笑い、泣き悲しみそして烈火の如く怒る。それは人間本来のありのままの姿であり、湧きいづる強烈な感情の表現なのでしょうが、とにかく瞬間／＼をうめつくすすべてが精一杯生きていこうに思えるのです。そして私の心が躍動するのです。」

その後折にふれ古事記をひらくにつけ、この感想は益々強くなっている。この研究発表では、ぼくにあって殊に印象深い建速須佐の男の命と倭建の命について、多少の感想を述べようと思う。建速須佐の男の命と倭建の命との生涯を比較する時、この神と英雄がいずれも波乱万丈の生涯を生きたという点では同じだとしても、その最期において特に象徴されるように、倭建の命の生涯は、須佐の男の命に比べてはるかに悲壮であり悲痛である。須佐の男の命は、その名も示す通り「暴風雨の神」であり、この神のつきすすむところ、つねに無限のエネルギーの放出をおもわせる。

須佐の男の命は、母に会いたいといつて、長いひげが胸元までのびるまで泣きわめくのであるが、その泣く有様は、青々とした山の草木を枯山のように泣いて枯死させ、海や河の水を涙ですっかりさらえつくしてしまふ——青山は枯山なす泣き枯らし河海は悉に泣き乾き——というものすごさである。須佐の男の命は、母を慕ってあまりに泣きわめいたために、父伊弉那岐の命の怒りにふれ追放された後、「然らば天照らす大御神にまをして罷りなむ」といって、高天原に上っていくのであるが、その様は、「山川悉に動み国土皆震りき」とある。すなわち、山や川はすべてとどろき、大地はすべて震動した、というのである。たけり狂う暴風雨そのままである。こうした須佐の男の命の強烈な感情の表出は、不思議と倭建の命の最初の登場とにているように思われる。倭建の命は、天皇から、

どういうわけでお前の兄は朝夕の食食に出席しないのか、出席するようにお前から教え申せ、といわれる。ところが五日たつてもやはり兄は出席しない、それで天皇は再び、まだ教えないのではないかと、命に問われる。その時命は答えて「既にねぎつ……朝暮に則に入りし時、待ち捕へ、楡み拙きて、その枝を引ききて、薦につつみて投げ棄てつ」——十分に教え覚えました。……夜明けに兄が則に入つた時、出て来るのを待つて引つ捕えて、つかみつぶして、その手足を引きまきいで、薦につつんで投げ捨てました

「……といわれる。そこで天皇は、命の「建く流き情」に恐れをなして、熊曾建の征伐に遣わしめられるのである。激情のおもむくままに大胆にも生きていく、この古代の神と英雄の出発点における不思議な一致は、この神と英雄の波乱多き生涯を暗示しているかの如くである。

須佐の男の命の高天原における「悪ぶる態」は、有名な「天の岩戸」となり、其の後この神は再び追放され、地上にはなたれるのであるが、ここで例の八咫の大蛇を退治し、櫛名田比売をめぐり、須賀に到って、「吾此地に来て、我が御心清淨し」とのたもう。この「清淨し」という言葉のもつさわやかさは、須佐の男の命の「青山は枯山なす泣き枯らし河海は悉に泣き乾しき」という最初の登場から、ここに至るまでの起伏多い生涯に思いをいたす時、実に生き生きとした語感をもってぼくらに迫ってくるのである。

そして須佐の男の命は
八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣つくる その八重垣を

という新婚のうれしさにみちた愛の歌をうたわれて一旦古事記の世界から姿を消されるのであるが、夜久正雄先生は、その著「古事記のいのち」の中で、「そこに私は、海上をさまよひゆかれた悲劇の築風雨神—スサノヲノミコト—の上にも、家庭恩愛のやすらぎのおとづれたことを思つては、ほっとするのでは……」とのべておられる。三十年もの間、古事記をよみ続けてこられた先生と、感想が全く同じだ、などというのおおこが

ましいのだが、ぼく、こゝききでても、このような気持が心からわきあがってくるのを覚えるのである。

さて倭建の命の御生涯はどうであろうか。命の御生涯は、国家の建設に従事した当時の人々の悲しみやよろこびを率直に表現したものであるからだろう、そのいつわりのない人間の真実が、読むほくらの胸に惘々として迫ってくる。命は天皇の命をうけて、熊曾を征伐され帰つて、東の方十二の荒ぶる神や服従しない人々を鎮定せよ、と命ぜられる。そこで命は叔母倭比売のところにおいて泣きながら訴えられるのである。

「天皇既に吾を死ぬと思はせか、何ぞ、西の方の悪ぶる人どもを撃りに遣して、返りまゐり上り来し間、幾時もあらねば、軍人をも賜はずて、今更に東の方の十道、道の悪ぶる人どもを平けに遣す。これに因りて思へばなほ吾を既に死ぬと思はしめすなり」

ぼくはこれに何らかの説明をつけ加える力も勇気もない。ただ「吾を既に死ぬと思はしめすなり」とまでいわしめるほどの辛い仕事であっても、それが国民全体のためとあれば、無数の人々がその辛い試練に耐えながら、生き、死んでいったのだという厳然たる事実だけは決して忘れまいと思う。

「波瀾起伏の生活の中に、さまざまな心情を生起させる人生の真実といふものは、そのまま素直に捉へることが大切なのです。……人間の真実の心のまゝに従

ひながら、しかし自己一身の感情をこえて一つの大きな国の生命の流れといふものの中に、身を捧げていったからこそ、始めて真の英雄といふ資格を獲得するのだと思ひます」(古事記のいのち)という夜久先生の言葉は、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の中の次のような言葉と正しく符合する。

「……此に偉人天才とは単なる英雄偉人を指すのではない。それは真に苦惱濁乱の人生に徹し、蒼生の共に帰趨すべき大道を体得して、之を実生活の複雑闊達と不断転化の裡に実現せられたる総合的指導精神の具現者をいふのである」
「……我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隱遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に隨順せし情意的な人格である……古事記に現はる我が民族の生は外なる戦と内なる睦びの錯綜する明暗の交代である……」
ところで命は、征旅の途中「走水の海」では、その後、弟櫛名田比売が「さねさし相換の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」の御歌をのこして命に代りて海に入りますという悲劇を経験されるから、苦しい旅を続けられるのであるが「酒折の宮」に到りましては、

新治筑波を過ぎて 幾夜か宿つると歌よみしたもう。「幾夜か宿つる」という言葉のもつ感触は無限だが、それは長い征旅を経験された命がふともらされた旅の苦しみであつたらうか。

さて伊弉岐の山に到りましては、命は「この山の神は徒手に直に取りてむ」とのたまいて、剣もたずに山にのぼりた

まうのであるが、山の辺の白猪がふらした大雨のために命は打ち感わされてしまわれる。このあたりから、迫り来る命の御最期が暗示されているような気がするのだが、それは次の「當雲の野」にいたつて急テンポで語られる。ほくにはこの「當雲の野」の描写からにわかには場面が変り、命の悲痛な運命が思つてくひまもなく一気に記述されているとしか思ひようがない。命は「當雲の野」の上に到りまして「吾が心、恒は虚よ翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩かず、たぎたきしくなりぬ」とのたもうのであるが、この言葉のもつ悲痛さは容易に理解がたいとしても、この言葉はほくらを深い悲しみの世界へ引きずっていく。「三重の村に到りましし時には、命の狀態はもう「吾が足三重の勾なして、いたく疲れたり」というほどになる。そこをいでまして「能煩野」では

倭は国のまほろばたなづく青垣山隠れる優し美し
の歌をそしてまた
命の全けむ人は 覺馬 平郡の山の熊
白樹が葉をうずにさせその子
と歌よみし給うのである。迫り来る死を愈々目前にひかへて、ふるさと大和への、また生存者への深い愛情が悲しくも、益々浄化されていつているかのごとくである。そして遂に命の最後の瞬間がやつてくる。

ほしけやし 吾家の方よ雲居起ち来も
こは片歌なり。この時御病いと急になりぬ。ここに御歌よみしたまひしく

嬢子の床の辺に吾が置きしつるぎの大
刀その大刀はや

と歌ひ竟へて、すなはち崩りたまひき。
「歌ひ竟へて、すなわち崩りたまひき」

——三度、「古事記のいのち」から引用
させていただこうと思ふ——ここにも日

本人の「冥想によって悟りを開くといふ
ことは別の、人生に没頭して最後の瞬

間まで努力して、「息絶えて逝く」とい
ふ、非常に強い現実主義の心境が、如実

に現はれてゐます。死ぬ最期まで力い
っぱいの努力を尽して、そして死んでゆく

さういふ生命が積み重ねつみ重ねられて
いく、それこそ人生なのだ、と信じて、

最後まで努力を尽すのです。いまはの極
限まで、生命を生きぬいていくといふ

姿。別に神の救ひを呼ぶのではない。文
字通り、うたひをへると同時に息が絶え

た、といふ、さういふ生涯といふもの
に、古代の人は非常な価値を認めたもの

のやうです」

そして、命は「八尋、白智鳥」になり
て、天翔りて、浜に向きて飛びいでます

のであるが、ここにその后や御子たち
が「小竹の薊材に、足切り破るれども、

その痛みをも忘れて、哭きつつ追ひいで
まじき」という最後の記述は、命の御生

涯を示すに、余りにも象徴的であり、そ
れ故余りにも悲しい。命の御生涯を辿っ

てきて、ばくは今、このような思いに深
くひたるのである。最後に夜久先生の「

古事記のいのち」は、最近読んだ書物の
中で、殊に心を動かされたことを記して
おきたい。

——この発表は、十月八日から十日迄藤
沢で行われた早稲田大学信和会の合宿
の記録「しんわ」第一号所載による。
同合宿ではほかに、宇田川真人君「日
本近代の問題」斎藤美君「愛国心につ

歌集 紹介

歌集「白山黒水」(著者坪井道興氏)

歌集巻末の「著者略歴」によると、著
者は一岡山一中に学び大に志を大陸に伸

さんと欲し満州鏡泊湖園に入る。学園解
散後同志とともに学園村塾を創め、躬

行自資、口鮮満の少年を教育し乍ら学園
再建に尽力、終戦後ソ連に抑留され二十

四年末帰国す。」とある。歌集は、次の
歌ではじまる。

防人の心を(昭和九年秋)

人すまぬひなにすすめど悔みなしすめ
らみくにの民にしあれば

早春賦(昭和十年春)

はりつめし堅き氷のとけそめて春風わ
たる鏡泊のうみ

山の峽わがこえくれば雪どけの水のな
がる、音もなつかし

木々はみな枯枝ながらしすがに下草
もえて春はききにけり
著者は大正三年生れといふことであら

いて「鴨志田富夫君「新憲法成立過程
について」井出真鉄君「大学の理念」
が発表討議され、同学先輩国武忠彦君
の講義「小林秀雄の『社会化された私
』をめぐって」が行われた。(編集部)

夜久正雄

(重信県大学教授)

から、岡山一中卒業後、満二十才で、「
防人の心を」自らの心として鏡泊湖園に
向つたのであらう。

鏡泊湖は、地図で見ると、中国東北、
黒龍江省の大湖である。昔風の言ひ方を
すれば、朝鮮と満州とソ連との接点に近

い、辺境の地である。そこに立てこもつ
て、著者たちは、青春を開拓と国防とに

献身されたのであらう。文字通り、国の
ために生命をささげる覚悟がなくてはで
きないことである。

その当時学生だった私は、たしか「原
理日本」誌上で、誰の作だったか忘れた
が、鏡泊湖畔で詠まれた歌をよんで深い

感動を覚えた。鏡泊湖の名はその時覚え
こんだのである。たまたま、昨年のこと
だったとおもふ、国文研の会員の柴田君

の紹介で、本書をいただいたところ、偶
然にも、鏡泊湖の歌があつて、なつかし
さにたへなかつた。その上、作者坪井道

興氏は、旧名小池輝夫氏といふことであ
るから、あるいは当時私がよんだ「原理
日本」誌上の歌の作者その人ではなかつ
たかと思ふ。三十年も昔の記憶で不確か
だが、魂の縁とでもいった感じがして、
私には実になつかしい名と歌なのであ
る。

歌集を読むと、昭和九年から何回か故
国との往來があり、出立ちの日の歌、言
志の歌、友を弔ふ歌、湖畔の歌等を主た
る内容として昭和十八年、「先師の故郷
都城を訪ね奥津城に詣つ」一首を以て終
る。
吹く風も囀る鳥もなきひとの声かとの
みぞしたはれにける

「先師」とは、歌集巻頭の歌の詞書
の中に「山田先師」とある方で、昭和九年
「五月十六日於大廟嶺戦死」とあり、集
中に、「弔烈士」と題して次の二連作が
ある。

大廟嶺戦跡ヲ過ギテ口吟

五月若葉わけのほりゆく岩かげにあた
ひそめりと思ひけむやは

銃のひびき谿にひびきて岩さけしあゝ
激戦のそのひとときよ

烈士碑前ノ詠

世とともに語りつたへむ君のためいの
ちささげし丈夫の名は

すめろぎのみいづ輝くからくににたて
しいさをよるづよまでに

しかばねは水漬け草むせ大君にさゝげ
しいのちあにくちめやも

著者の開いた学園村塾の内容は次の一連
にうかがふことができよう。

張生を送る(塾中少年張生波、母ノ

病重キヲ以テ帰家看病セントス。之レヲ村境ニ送ル。行ク手ハ凶匪出沒スル陰阻ナル山路ナリ。独リ淋シクソノ山路ヲ去リユク少年ヲ思ヘバ別離ノ涙トマメ難シ。ヨリテ思ヒテ陳ブル歌

たらちねの母の病を憂ひつゝ去りゆきし児のあとぞしのぼる
あしひきの山路を越えて如何に汝が心は家にいそぎゆきけむ
ちゝのみの父はやく逝きて弟妹の多きに家は貧しとぞ云ふ
なりはひの貧しき中にも求道の心に燃えて来りしものを

卓をたゞきて亜細亜復興を説くときの汝のひとみは輝きぬしか
憂愁に沈みてかへる汝を送りのちの心のすべもすべなき

たらちねの母の病のよくなりてとくかへりこよいのりてまたむ

日本朝鮮満州と異なる民族の差をこえてひとつにむすぶ情意がうたはれてゐる。満州国の国是ともいふべき「五族協和」は、鏡泊湖畔の村塾には実現されたのである。歌はその真実のあかしである。

生死の境に身を置いた著者の緊張した精神は、自然の美しきを見事にうつし出してゐる。とりわけ次の歌はすばらしい。

湖畔暮色

夕焼の雲をうつしてゆたゆたと金波ただよひうみくれむとす
日は落ちてのこんのひかりうすれゆく湖面に魚の躍るひとゝき
くれてゆく湖のみぎはにわたたてばさ

びしからずや湖は声なし
渤海の古き姿は今はなく無心の波のみよせてはかへず
見わたせば緑しげれる高麗の城趾は静かにねむれるが如し
ねぐらには雛かまつらむうちつれてはかせせはしく鴨かへりゆく
かへりなむいざとみさくる大空にひかりともしき夕月の影

(昭和四十年十月一日発行、B 五版六〇頁、非売品、著者岡山県吉備町西向・坪井道興氏)

歌集「氷華——ソ連にありて」(著者、川並将慶氏)

宮脇昌三兄から送っていただいた本歌集の著者について私は何も知らない。巻頭にキーツの詩をあげてをられるところなどから想像すると著者は英語に堪能な方であるようだ。歌集は、昭和二十年「満州にて抑留中」二首を以てはじめ、シベリヤ抑留中の歌を中心として、二十二年十二月一日函館入港四首に終る。

歌集の歌によると、著者は昭和二十年敗戦によって満州に抑留され、シベリヤに輸送され、ラーダ收容所に入れられ、エラブカ、ボルシヨイボル伐採地等、私などの聞き知らぬ土地に転じて辛酸を嘗められた様子である。その間、著者は、抑留生活に起る心の顛覆を自らいましめ、友人諸氏とたすけあつて、日本人としての自然の情意をつらぬかれたのである。抑留生活が比較的短かく、歌集に

よる限りでは、人民裁判にかゝるようなこともなかつたらしいので、迫害もある程度ですんだのであらうが、捕虜として抑留され、陰に陽に思想的な圧迫を受けながら、自分の思想を貫くといふことは容易なことではない。著者が、戦後二十年終つた今日、当時の記録としてその歌をまとめられたのは、著者自身当時の志操をかへりみてそこから己れの力をくみ取らうとされたものであらうが、また、同時に、シベリヤの野の果てに、人知れず立てられ守られた興国の祈りと心の通ひが、戦後復興の力源であることを示さうとされたものであらう。

昭和二十二年一月一日異境迎春の心を

とつづくに迎ふる春の重なれば国を思ひて安げくもなし
国思ひいねがてぬ夜も幾度かこの身かひなく春たちかへる
果知らぬ白銀の野に薄日さし遠き異境に春たちかへる
父母はいかにありへむいのちいきて我とつづくに春迎ふにも
とらはれの年はふるとも遠長き国の榮えをかへさずてやは
とつづくに年はふれども国思ふはやり心のせくべくもなし
立ちつくしあけゆく野辺を望みけり南の国の春をしのびて
故国偲びかひなくすきしこの身にも春たちかへるとつづくにして
初日さしあけゆく野辺を望むにもたゞなつかしきふるさと
薄日さす遠き異国に春迎へ南の国の幸

を祈りつ
日本の邊つみ国の幸はひを祈りつ迎ふとつづくに春
歌集の題は次の歌から取られたものであらう。

十八日夜短歌会にて肉身といふことを
をあかときに光る窓への氷華見つ、母の面わをふと思ひ出ぬ
また次の歌には短歌といふものの存在価値が実感をもて述べられてゐる。

十三日
黒パンの目になれたる味はひにとつづくにへし年を思ひぬ
とつづくにうたよむ時ぞ言霊の国に生れたる幸極まりぬ

著者は同年十一月帰露の途上につき、十二月一日函館に入港した。
朝本土見え午後函館に入港す
わが胸の思ひ抑へむすべもなし本土の見ゆと人いふまきけば
ひたすらにすりによりて眺め入る夜のあかりの函館の町
五日朝下船開始、心おどるものありかへり来し面輝かせ思ひみち列を守りてタラップを下る

この土は日本の土かわが足のつくともなくて小走りにゆく
このよろこびこそ戦後の復興の源であつたことを思ふにつけて、これらの歌の価値が知られるのである。戦後二十年、この歌集を刊行された著者のお気持もまたここにあらうのであらう。六十六頁の小冊子の歌集の語の意味は無限である。人手方法不明。

某月某日

江里口淳一郎

私の生活態度といえは、どう鼠目にみても、決して立派なものとはいえない。しかし国文研の皆様には長いことご無沙汰しているし、近況報告のつもりで少し生活の一端を書き綴ってみようと思うが、はたして編集子のご期待に副いようかどうか、危惧の念をいだかざるを得ない。

私は普段の日であれば、大体午前九時から九時半の間に病院にでる。患者さんがあればすぐ診察にとりかかるが、そうでないときは看護婦のO君を相手に正岡子規の「歌よみに与ふる書」(国民文化研究会編)を読み合せることにしている。

こんなことは今迄にはなかったことで、独りで本をよむよりも、二人三人で読み合せるほうが、楽しみが大きい。でもやはり、相手によってそんな気になる人と、ならない人があることがわかってきた。

それでも学生時代のように読み合せて専念するわけにはいかないもので、患者さんが見えたら途中でやめなくてはならないし、ちようどいいたところで電話がかかってきたり、なんとも落着かない読み合せではある。

しかしO君が、意外に熱心であるのは驚きと同時に、はげましにもなって、断片的とはいってもすこしずつ進んでいる。わからない漢字にぶつつかれば辞書を引いたり、どうも納得のいかない文章にあたりと、時間をかけなくてはならないといった具合で、およそその辺にある週刊紙を読むようなわけにはいかない。

私は文章家でもないし、歌人でもない。子規の文章について、とやかくいふほどの能力はないし、子規が他人の歌を批評しているところなど、どうしてそんなに感じられるのかと気をもんだり、合点がいかなくて悩むところもたくさんある。

それでも子規の、行間にはじみでている短歌改革へのはげしい情熱を感じることができ。病床に伏してなを改革意志をすてなかつた子規の姿をまぶたにかへるとき、身のひきしまるような思いがする。

「墨汁一滴」抄のなかで、落合氏の歌わづらへる鶴の鳥屋みてわれ立てば
小雨ふりきぬ梅かをる朝
を評しながら、「此朝の字をここに置きたるが氣にくはず。元來此歌に朝という字がどれ程必要……凶に乗って余り書きし故筋痛み出し、止め。こんな些細な事を論ずる歌よみの氣が知れず、などという大文学者もあるべし。されどかゝる微細なる処に妙味の存在無くば短歌や俳句や長い詩の一句に過ぎざるべし。」

筋痛み出し、止め。と思うと、さらに氣をゆるめず、一刀のもとに大文学者を切るの氣概は、子規の人生に対する態度であるし、生きようとする強い意志のあらわれではないかと、ただただ感歎するのみである。

冒頭にある中村不折画くところの子規像をながむれば、ただ凡俗の歌人でなかつたことを知らされる。

正午の時報を待っているようにして、

私は食堂にとびこむ。栄養士さんは心得ていて、すぐ中食を用意してくれる。無我夢中でめしを食う。なんでそんなにいそいで食べなくてはならないかと思うほどいそぐ。のどにつかえそうになるとお茶をのんで流しこむ。

○時十分ぐらいになると、竹刀をもつて病院をでる。向うは郵政省の道場である。郵政省は病院から自動車で約五分内外のところにある。道場につくと、竹刀の音がきこえる。私の体のなかの血がおどり出す。それでも、このごろは寒いので体のうごきがよくないので準備運動に念をいれる。

真つ裸になって稽古着にきかえる。肌がかさつとしまる。瞬間、寒いと思うが、みんなの顔は真剣である。道具をつけ、小手をはめるとき手がつめた。鏡にむかって竹刀をふつてみる。形を正すのである。「よしやろう」という氣持がわいてくる。七段級が三人もいて指導にあたる。今日の相手は興梠七段。熊本県の出身で、大分国体が東京が優勝したが、その時の副将。

いつかバーに行ったとき、そのホステスが「ヘーシンクに似ているわね」といった、そんな堂々とした体軀である。道場内にひびきわたる声。私は無心になつて立ちむかう。なかなかあたらぬ。相手の剣だけが私の体にあたる。呼吸がみだれてくる。体中に汗がでてくる。相手の剣をのり越えて行かなくてはならない。こちらが打とうとするときは相手も打とうとしているのだ。「先の先をとれ」という。

一呼吸の何十分の一という極めて短い時間に剣がふりかかってくる。逃げてはいけぬ。心の隙を打たれるのだ。一分の隙も許されぬ。正しい剣をつかわな

くには有効打とはならない。心と形。これほどはつきりあらわれる競技は他にないように思われる。それにリズムだ。リズムがなくては動けなくなる。リズム。それは無心の状態でない。打とうと思つても打つて出でこない。進もうと思つても進めるものではない。相手の剣が冴えているのだ。ただ相手にぶつつかうだけである。無心。それはやわらかい、それでいて燃えていなくてはならない。硬い、つめたい心では相手は切れないのだ。豊かな、丸い、熱いそんな心を一瞬のうちに凝結してこそはじめて相手は切れるのだ。

私は倒れそうになる。それでも頑張らなくてはならない。相手の剣は容赦なくわが身にふりかかる。疲れきつた私に教士は「よろしい」という。呼吸はあらく、自分自身がどうなっているのかわからない。

面の道具をとって手拭で汗をふく。胸を大きくふくらまして空気を吸う。幼児が母の乳房を求めするように、私はただ胸をふくらませ空気を吸うだけである。そしてまた、面をつけ、あらたな相手をみつけてとびかかる。

剣友は道具をはずしすわりはじめる。もう午後一時をすこしまわっている。整頓から静座、しばしの静寂が道場をつつむ。よくやつた。みんなの顔は赤く上気している。丹田に力を入れている。教士と先輩、同僚に礼を送る。

剣道。小学校の四年の頃から親しんだ剣道。剣道をやりながらいつも思う。いつも教わる。技をいかに強烈な気合で、剣道は気合であるということ。久しぶりにはじめた剣道をやりながら思い出すのは、小学校時代のA教師のこ

とである。道場の床をならし、対校試合に勝った日のこと、負けて泣いた日のこと、遠い少年の目を追いかけるように、その教師の追憶にふけるこのころであ

行為と道義心と

京大・法三 溝江 優

私達は日本国憲法の下で生活してしまふ。この憲法には、戦前に見られなかった程の数多くの国民の自由や権利が規定されていく。それ故国民の生活は、過去の幾時代よりもよりよく保障されています。国民の義務なるものは勤労の義務、納税の義務等しか規定されていません。だからこの義務を守り、法律と抵触さえしなければ、何もしくてもよいんだという気分が無意識のうちに生活に浸み込んでいます。私は時々そのことに気づき、愕然とすることがあります。他人が困っているのを見ても、その災いが自分に及ぶのでなければ、あえて立ち向う必要はない。他人の苦勞困難は、それを扱う警察が役所にまかせればよい。そして他人の苦痛を誰かが除くと、それを善事だ、またこのような善意の持主がいると、ジャ・ナリスムが書きまわっている。その本人に聞くと、臉を書きまわして驚いたような顔をして、「ただ私は当然の事をしただけです。」と答える。それを見て、新聞雑誌は謙虚な慎み深い人だと報道する。当り前の事をしたと思っ

る。教師は若くして死んだ。(東京 古川橋病院)

だけではなからうか。なぜやろうとしな

いのか。我が身に災いがふりかかるのがそんないなやなか。心の中ではないのかもしれないながら。これは小さな事だが、非常に重要なことだ。森鷗外は軍医の立場でこう言っています。「軍医は職務を遂行しているだけでは駄目だ。その際には道義心を満足させねばならない。例えば重病の民間人の治療を拒否することは職務遂行としては当然の事だ。しかしそれが道義心は満足するであろうか。その人が肉親である場合を考えて見よ。そうすればどういふ態度をとるべきかわかるであろう。その様に人に行え。」この言葉には重大な事が含まれています。人間生きていく為には行為をすべしと共に、それを支える道義心をも満足させなければいけない。森鷗外はこの考え方に立つて自ら実行した人ではない。それでなければこのように強い言葉を吐く事は出来なかつたでしょう。「他人を肉親の如くに扱え」肉親愛だけなら他の動物も持っているでしょう。ゴリラの雄は、雌や子供達を人間や他の敵から守る為に、自ら立上つて胸をたたいて相手と闘かし、家族を逃がします。しかし人間は他の動物とは異なります。人間の、他の動物に対する自負心の一つは、肉親以外の人に対しても、自ら行ってほしい如くに、人に施す事が出来るという事です。気持だけではいけません

古典の窓

(賀茂真淵・国意考)

凡そ物は、理(ことわり)にきとかがかることは、いば死にたるがごとし。天地と共に行はるるおのづからの事こそ生きて働くものなり。

江戸時代の国学を一貫して流れているものは、この真淵の言葉に代表されるように「自然の中に生を、理論の中に死を」見出す感覚であった。理論はそれがいかに精緻に組み立てられたものであっても、所詮は現実の要求によって産み出されたものにすぎない。「全体」は明らかに現実であり、理論はその「部分」である。だが現代ではこの現実と理論との関係が恐るべき倒錯を示しているのではなからうか。人々は理論と現実を対比する。そして理論通りに描かれた見取図の中に「理想」を見出すのである。平和は永久に守られるべきであり、平等や自由はいかなる場合においても保障されなければならない。それは誰一人として文句のつけようのない理論ではないか、なのに現実とは——ということになるのだ。現実には常にこの明白な理論を裏切る罪人として冷たい目で見られ続けている。複雑怪奇な現実からくりの前に、理想は奮みにもじられる。現実と理想は常にこの様な図式として人々の脳裏に描かれているのである。若しこの図式を肯定するとすれば人々のとるべき道は、あくまでも現実とた、かつて理想に殉じるか、或はた、かゝいの矛盾

収めて、現実と妥協し、せめて一歩なりとも理想に近づくように努力するか、その二つしかあり得ないのだ。人々は前者を理想主義、或は革新主義と呼び、後者を現実主義、或は保守主義と呼ぶ。青年が前者を選ぶこと、また当然であろう。かゝる図式を自明のこととする以上は。

だがこの図式は果して自明のことであろうか。基準を常に理論におき、その中に描かれた理想におく。そして現実、常にそれに近づくべきもの、修正されるべきものとして感覚されている。これが果していいのか。だが真淵が書きのこした言葉は、かゝる現代の図式とはお、よそ無縁である。「理にきとかが、よそ無縁である。死にたるがごとし——理論通りに行われること、それは「理想」どころか人間の「死」を意味するのだ。理論の網の目では、到底すくい上げることの出来ない、悲喜愛憎の交錯した、この切実な人生——戦争と平和と、平等と差別と、自由と束縛と、そのすべてが混濁と入り乱れる人生、そこにのみ「生きて働く」力が湧き出るのである。理論が無意味だというのはない、だがそれは現実と奉仕する「部分」にかえらねばならぬ。「部分」で理想は理論の中にはなく、現実の中に、「天地と共に行はるる、おのづから」の中に求めなければならぬ。この理想のあり方をわれわれの先人は「神ながらの道」と呼んだのである。(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

ん。行為によって示さねばなりません。当然の事です。それを自分として当然の事として見る事が出来ないことは、何と悲しいことでしょうか。対人関係で当然の行為をするようには教えているのが、道徳というものではないでしょうか。今日に於ける車内暴力や喫煙行為は、他人に対して自ら欲しない行為をしないという当然の気持から止める事が出来ます。

道徳がかような人間本来の性質の上に立つものならば、教育としてとり上げて、幼き子に教えるのが当然です。他人を肉親の如くに扱う態度で国民一人一人と接する。この態度なしには一日たりとも自ら満足して生活は出来ません。これが国民同胞感の一つの表現ではないでしょうか。

私は親になった時次のことだけは子供に教えます。「私達は法律内の権利・義務・自由だけを遵守して生きていくだけでは駄目だ。それを支える道義心を満足させなければ駄目だ。私達はこの事を弁えて生活して行こう。」と。

(京都に於て我々は毎月曜日浦田君の下宿で輪読会を行っています。又大阪で十一月月中旬から読書会を始めています。まだやり始めたばかりでどうなるかわかりませんが、出来るだけの努力はしていきたいと思っています。)

太宰府合宿経過報告

九六、法三 島津 正数

「私は何かを求めたい。自分が生きていくことを感じたい。良き先輩、良き友と心をあらわに語るとき、安らぎと希望を覚える。」これは九六一年浦田君の合宿に向う気持ちの一節である。私共学生が日本人として、学生として充

実した生活を送りたいと願うのは当然である。だが実際はどうであろうか。私共はもっと、もっと、この問題について考えてみてよよいのでは無いか。これが私共の合宿に先きだつての気持であった。「如何に生きていくべきか」の答を求めているのではない、真剣に話し合える場をもち、自由に胸襟を開いて語る事、そのことを求めているのである。私共は合宿のテーマを「今迄の日本はどう生きてきたか、これからの日本はどう生きていったらよいか」として十一月十一日夜八時から十四日昼過ぎまで福岡市郊外、学園の神様「菅原道真公」を御祭りしてある太宰府天満宮で寝食を共にし、真剣に語り合った。この合宿は九大を中心にしたものでしたが大分大学の中原君、花木君、福岡大学の大草君が多忙の中を参加してくれました。早朝に国旗掲揚、体操、神社に参拝して御製拝誦することは実に清々しい心持だった。午前中一古事記の「のち」を中心に古事記を輪読する。古事記の持つ調べを身体で味わうために全員声を合わせて読む。研究発表に入り、片岡君は福田恆存氏の「人間・この劇的なるもの」を引用して、自分が失敗したりすると私達はそれが必然だったという口実を捜し求めるがそれは自己欺瞞であり、そんなものは宿命ではない。宿命は内的なものであり、自分はこうしなくてはとでもおれぬ、これが自分の進むべき道であるとする心のある何物かである。人は自分を越えたより大きなものを柱に生きるより仕方がないのでないかと訴えた。古川君は三井甲之氏の「明治天皇御集研究」より「個人と国家」を引用し、まこと人間でありが故に、私達は、まこと人間であるが故に、共に生きていくことを真剣に考えねばな

らないと語った。友池君は自分が何故医学を勉強しようと思ったかを話した。稲津君は下村湖人氏の「論語物語」を参照しながら論語の「渡場」を中心に「生きる」「生き方」と題して語った。能力を最大限に生かして社会肯定して生きている生き方、現状に批判的に生きる生き方をしても傍観的な生き方だけはすべきでない。三日目に入り、志賀君は「戦争は如何なる理由といえども避けるべきではないか」という問題提起をし、「戦争を選ぶか否かよりも、もっと大切なものがあふはしないか。祖先の残した価値を受け継ごうという姿勢がなければならぬ」と小柳先生が語られた。その後、九大教授中国古典担当の岡田武彦先生が「中国思想の三つの流れ」について語られた。親切というものはよくても自からわいた親切でなく、全て計算に入れた親切である。中国にはこの功利商戦が強くこれを認識せねばならぬと泰の商戦、李斯の話をされた。現在の中共を知る上で非常に有意義な話であった。小松君は「教養部半年の生活を通じての大学の学問、社会科学に対する疑問」が提起され、三、四年生の体験等から、話し合を行った。和歌相互批評は小柳、小林両先生を中心に歌の引締まる思いのする批評がなされ、和歌が如何に自分の心をする批評あらずかを再認識した。コンパは静かではあったが、酒をのみながら、人と人とのつき合いの火花のごとく真剣に語りあった。最終日は古事記の輪読、感想発表、感想文執筆して三泊四日の短い期間ではあったが各人が自由の、素直に自分の意見を述べ、相互信頼のもとに夜更けまで語り合えたことを喜び、これからの毎日を潑刺と過すことを誓い合つて紅葉の太宰府を後にした。

(太宰府合宿歌稿より)

朝合宿地につく 小柳陽太郎
降る雨にあたりしつけき部屋ぬちゆ古事記よみます声きこえくる
みたまふ声いつかきき
みおやらのことばに波うつおそかのし
らべきながらに友らよみゆく
楠の太木は雨にしとどめれて神の社の朝しづかなり

合宿の諸兄を偲びて 山田 輝彦
にきはしくつどひるまきむ友どちのかん
ばせ偲ぶ暗れぬ思ひに
筑紫路の秋深ければ紺青のみそら口ごと
に澄み透りゆく
集ひるる若き友らも筑紫路の榎のみみち
葉めで給ふらむ
書を読み世をなげかひてたまきはるいの
ちかたむけ学ぶべしいま
くぐもれたる心放ちて火らかに生くべし
み
國ただならぬ日も

編集後記 東亜隣国を含めて内外激動のうち、昭和四十一年が過ぎ去らうとしてゐる。殊にわが国の政党腐敗は、国を忘れ民族の心を失つた一時代の終末現象で、祖国の大地に立ち帰る克復の転機たらしめたいと祈られる▼去る十一月二十日、本会理事長小田村寅二郎氏は二ヶ月余の海外旅行を終へて帰朝された。川井副理事長率ある今夏の学生回國訪問などと共に多事の一年であった。また国文研證書No.1として刊行された夜久正雄氏著「古事記のいのち」につぎ、No.2として桑原晩一氏著「日本精神史鈔」親鸞と実朝の系譜」も近く刊行され、研究資料として有志の方々無料配布される予定である。

国民同胞

発行所

社団法人国民文化研究会
（九州→東京→全国）
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南都町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円（送料別）
年間 360円（送料共）

天皇御歌

道後の宿にて

晴れわたるこの朝ばらけはるけくも霞む四国の山なみを見つ

五色台に少年団の訓練を見て

日本にはじめて結成されし頃のことを思ひいでて
この岡につどふ子ら見てイギリスの旅よりかへりし若き日を思ふ

飛行機の旅にて

飛行機の翼のました工場を雲間に見たり水島のあたり
晴れわたる大海原ははてもなし八丈島も遠にうかがびて

秋季国民体育大会

秋ふけてこの広庭に子らはみなふるさとぶりの踊見せたり
若人の力のこもる球はとぶ高崎山見ゆるテニスコートに
由布岳の麓の庭に若人は力つくしてホツケーきそふ

山下湖畔の宿にて

しづかなる山下湖には白鳥のうかぶ姿も見えてくれゆく

（当地の新聞から以上八首集めました。発潮として雄大な御歌に、年頭から
顔の熱くなるやうな感激を味ひました。八首とも載せたのは、富山・北陸中
日の二紙だけで、北日本は二首、読売・産経・日経各一首。朝日と毎日には
見当りませんでした。——広瀬誠）

「清き一票」と「日本の政治」

—— マスコミへの提言 ——

総選挙の投票日が近づくにつれて、いつも耳にする「清き一票」というスローガンが、また喧しく聞えてくる。だが、「清き一票」という、その「清き」とは一体何を意味するのであるか。われわれ国民は、買収、響応のさそいに注意したり、「黒い霧」を追放するように心を使って投票しさえすれば、それで「清き一票」行使したことになるのであるか。

総選挙における投票は、いやしくも一国の政治の動向が問われる行為である。まかり間ちがえば、明日の日本の運命がどう転換するかも測り知れない。一連の「黒い霧」ならびにその疑いのあるものや、買収響応のうごめくものは、もとより投票の対象たるに値しない。それらは、神聖な政治が、「私」に結びついていいる最も顕著にして低劣なケースであるからである。と同時に、それらは、かりそめにも「政治」を口にする場合の、問題点以下の所行であることを忘れてはならない。それさえなければ政治はよくなる、などは、とんでもないことである。それならば、「清き一票」の「清き」を何処に求めればよいか。いうまでもなく、それは、買収、響応、黒い霧を超越した段階における各人の心構えについての課題でなければならぬ。

まず第一に心すべきは、総選挙が、国会議員その他の選挙と本質的に異なることである。後者は、それにふさわしい人を選ぶこと、すなわち、人そのものに重点をおいて投票に臨むことが望ましい

が、総選挙の場合は、まず政党の選択を先にしなければ、投票の意味は空虚化してしまう。どんな人物でもよろしい、というのではないが、政党が一国の政治を担当したり、反対したりして議会政治が運営されている、という議会政治の厳然たる大前提に目を蔽うことは許されない。「清き一票」の「清き」行使は、それゆえに、投票者において、政党に対する投票をするのだ、という心構えが確立されていこそ、はじめて、その第一歩を踏み出すことになる。

第二に心すべきことは何か。それは、「国民一人一人が、日常生活において平素所属しているもろもろの組織から、完全に一人の自主性ある人に還元され解放され、もって各自の自由意志と創意に基づいて投票相手を選択する」という課題である。すなわち、どの政党どの候補に投票するかについては、すべての人々が、職域その他の関係から完全に独立した姿勢に立つて判断をなし、かつ投票がなされなければならない。これこそ「清き一票」の「清き」の骨子をなす点である。もしこの姿勢が、国民全体に確立されていなければ、「清き一票」など、いくらマスコミで喧伝されても、結局のところ、空念仏に等しいといわなければならない。それでは、この点についてわが国民の現状は果たしてどうであろうか。試みに、投票について世相を一つとすると、次のようなことが常識化されている。すなわち、ある会社に勤めている者が、その社長や上役の、いいなりに投

票したり、農村、漁村、町なかの商人たちが、その地域の有力者の指令に従って投票したりすると、きまつたように「投票は各自の判断で自主的に行なうべきもの」という批判が起こる。そして、投票は本来、神聖な国政への国民一人一人の参画である、その投票を、そのような「直接自己の卑近な利益に結びつけるという根性が敷かましい」と、攻撃する。

だが一寸待ってもらいたい。このようなマスコミの論調に、私は決して異議を申し立てるものではないが、なぜマスコミは、「清き一票」への「清き」の啓蒙を、その時点だけに止めてしまおうか。私には、そこがどうしても納得のいかないところである。

従来総選挙に見られる特徴の一つは、労働組合に所属している者は、その単座ないし上部機構の連合本部の幹部が指名する候補者で、劃一的、組織的に投票する、ということであった。こういう投票の仕方は、果たして何を意味しているのか。

労働組合は、もともと労働者の利益のためのものである。会社にとめるに当たって、よりよき待遇を獲得するための自衛団体としてもよからう。会社の従業員が、会社の上役の意に従って投票することが、もし、「投票を、直接自己の卑近な利益に結びつけるがゆえに」、非自主的投票行為として指弾されるならば、組合員にとっては、会社よりも組合ならびに組合連合体の方が、一層各人の利益を守る役割をしているわけである。従って、組合幹部の指令に従って投票すること以上は、「一層、投票を、直接自己の卑近な利益に結びつける」ことを意味しているのではないか。前者の場合に「清

き一票に反した」というならば、後者の場合がどうして「清き一票の行使」といえるのか。まさしく非自主的な投票権の使い方でなくてなんであるうか。買収や響応とのちがいは、先の場合に述べたと同じように、その享受する利得が「直接すぐにその人のふところや口にはいらぬ」というだけで、私に利益を求めての投票——それこそ実は、「清き一票」の精神にもっとも反するもの——といわれても致し方あるまい。

この錯誤がいままで罷り通ってきた理由には、色々なことが指摘できるが、何よりも大切な点は、労働組合という組織そのものが、本質的には組合員の福祉——厳密には直接的利益——をかなめにして出来ているもの、ということが忘れられてしまったからである。労組が、その本分を逸脱して、政治斗争と経済斗争を合一させ、政治斗争なくして経済斗争はあり得ない、という勝手放題な考え方を、世間が是認してきてしまったためでもある。

それ故に、選挙という、国民一人一人の良識を反映させるべき神聖な機会とその投票の榮譽を、組合員は、惜しげもなく、平素の組合から受けている享受に対する一連の報償義務として、各自の志操を提供してしまつたのである。これは、政治と経済の区別を忘れた姿であり、政治と労働との区別をも無視したものである。政治を正しくする、ということとは、政治を政治として扱うことに帰一する。利害打算を政治に加味するから「黒い霧」も生まれるのであるし、政治は黒い霧がえた国民が、組合活動即政治運動としてしまつたところに、政治の混迷がくりかえされてくる。くりかえしているが、「

清き一票」の行使は、「各自が平素所属するもろもろの組織から自由に解放されて投票対象を、各自の自由な自覚に立つて選ぶ」こと以外には求めるべくもない。

さらに最近台頭してきた公明党即創価学会については、まさに宗教と政治の混同これに極まることはない。政治の中には、宗教的情操がたたえられていなければならぬが、一宗派のしかも一派が、その会長の命のままに絶対に服従して、単一な投票を行なうなどということは、国民としての本質的責務を忘れ去つた姿といつても言いすぎではなからう。政治が経済と別のところになければならぬのと同じように、宗教的情操即宗派即政治とは、どう見ても成り立つ筋ではない。「黒い霧」の摘発も結構だが、公明党なる党は、その立党のあり方や選挙の仕方から判断しても、せいせいその程度のことしかすることがないのではなからう。

うか。

労働組合にせよ、創価学会にせよ、その他職域連合体、各種団体、いずれについてもその構成員を自由にさせて投票場を送りこむことが軌道に乗つたときこそ、「清き一票」は、はじめてその言葉の真義を獲得することになるのではなからうか。マスコミ関係者の一考再考を煩わしたい所である。(本会理事長小田村寅二郎)

同胞歌壇

——しきしまのみら——

十二月九日 いわき 青山新太郎
失はれし二月十一日と戻すよき日の朝
空も晴れたり
朝晴れて初冬のおもひふ日肇國を
祝ふ日のよみがへる
民族のいのちこゝより甦へるおもひし
て仰ぐ建国記念日
万葉集のうた(田無合宿にて)

東京 高木 尚一

七五三年(天平勝宝五)二月二十三日興に依りて作れる歌二首
春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも
わがやどのいきさき笛竹吹く風の音の

かそけきの夕かも
二十五日作れる歌一首

うらうらに照れる春日に雲雀あがり
こゝろ悲しも独しおもへば
千年の年へだたれどうぐひすの鳴く音
かはらず大和島根に
うち沈む春日の心うちほらひますらを
の歌君はうたひし
揚雲雀み空にきこえうらうらと照れる
春日のともしきろかも
一すちの歌よむ心いにしへに通ふ一と
きうれしかりり
万葉のうたのしらべのひし／＼と身ぬ
ちし迫るこの日頃はも
歌よめばみくに思はゆ歌よめばいにしへ人と共にあることし

目次

天皇御歌	(1)
清き一票と日本の政治	小田村寅二郎 (1)
日本の岐路	川井修治 (3)
桑原暁一氏著「日本精神史鈔」紹介	夜久正雄 (4)
小田村理事長帰国報告会から	(5)
☆ 同胞歌壇	☆ 各地合宿だより

日本の岐路

P・W・クイック氏の所説

川井修治

師走の巷には例の如く宣伝カーが「黒い霧を払え、佐藤内閣打倒……」と叫び廻っている。街頭の電柱には共産党や社会党のビラが、同じようなどきついアジ文句を連ねて、ところ狭しとばかり貼りめぐらされている。解散含みの政局に対応して政敵の気運は濃厚、特に野党側の攻勢は甚しく急調の様である。黒星統の佐藤内閣は来るべき選挙戦において、果して自らの地歩を保持し得るであろうか？

佐藤首相の政治指導に幾つかの欠陥のあったのは事実であろう。しかし佐藤内閣打倒にくみする人達は、佐藤内閣を打倒したあかつきにかなる政局が到来するかについて、果して思い及んでいるだろうか？ もし佐々木社会党委員長の社語する如く、次またはその次の総選挙によって社会主義連合政権が成立するとすれば、その後の日本が急転直下共産レジームの奈落におち込むことは、殆んど必至と見られる。確信的なコムニストは別として、ムード的に内閣打倒の掛声に惹かれて、いる人達は、この見通しに対する賛否を内心に問うてみる必要がある。もし一時の気分的な社会正義感から、それ自体は是として、革命勢力に政権獲得の足がかりを与えるとするれば、日本はかの一九三〇年代の人民戦線期のフランスの如く、涯し無い混乱状態を現出するほかはなかりと思われ。そしてそのような混乱状態が左翼革命の直接的前提となることは、言わずとも明らかである。

この意味で、最近世界週報に載ったフーリン・アフニアーズ誌の主筆P・W・クイック氏の所説は、日本にとって貴重な警告を含んでいると思う。クイック氏は日本における奇妙な逆説として、次の一連の事実を挙げている。「日本は余裕綽々とした過半数を擁する保守連合によって統治されているが、政治的にも知的にも左翼によって牛耳られて、国際連合は圧倒的な人気がたが、憲章で認められている平和維持部隊を日本も出したらと言いつつ政治家は一人もいない。おそらく他のどの国よりも多くの外国書を翻訳している国が、知的には孤立している(知識層がマルクス主義に一切倒れている意)。……政治的雑言の洪水はあるが、真剣な討議はほとんどどこにもない」と。そして感傷的平和主義や中共に対する安易な宥和主義が蔓延していることを慨嘆した後、「大半の日本人がぼんやり望んでいるのは、三千世界いいことづくめという事だ」国防の安全は保障される、軍事費負担は他国にお願いして、自身の危険は最小限度にしぼり、しかも屈辱的だと自ら感じている外国軍の駐留はなしに、といった具合に。」と、

いとも辛辣に指摘している。こう逞言われると、少しく癪にさわる気がしないでもないが、しかし如上の風潮が現在の日本に在るのは事実である。これを「アメリカ人の言うことさ」と言い捨ててしまえない意味があるように思う。クイック氏は更に言う。「日本政府としては一大教育運動を起さねばなるま

京都合宿への参加を誘ふ友の電話をききて夜京部へ来る
京都にて友ら集ふと云ふ友の声きゝてこそ心たのしも
和歌山 徳地 康之

来ぬるか合宿の地に
このひととせ会はざりし友らに会ひまみえくさぐさのこと語らむかこよひは静かなる参道歩みつゝおとしの秋の集ひをなつかしと思ふ
富山合宿 東京 長内 俊平
いま三重県の熊野市から東京へ帰る寸前、汽車を待ちつつ書いております。
わが車見えざる迄手を振りて分れ惜しむか若き友らは
帰るさに神通渡れば雪白き遠山嶺は薄日に映へあつ
おのおの特色ありてかればせも語りしことも心に残りぬ
つたなかる話なれどもよろこびで聞く友あるは嬉しかりけり
とほしかる小遣ききてわが為と土産をたびし若き友らよ
見返れば神通川の川上の山なみすそにかすみたなびく
同 富山 廣瀬 誠
しぐれ暗く降りし夜道踏みなづみひた急ぐなり傘かたぶけて
暗やみの御堂の中ゆあかかと灯しもれたり友らがまどろむか

い。勇を鼓して左翼や平和主義分子から攻勢を奪取せねばならぬ。何故なら一九六〇年のモップの暴動から、一九七〇年日本政府が現行の安保条約を維持するか、打ち切るか、それとも改定するか選択できるようになる際における計画的

冷え透る夜の御堂にあひ集ひ学びの道語る友どち
冷えたみに友らとあならび火桶の火つきつと語るくぢちゆく夜を
日の本のまことの学びの道求め努むる友らたのもしきかも
語りやめ息つくときに寒々としぐるる響き屋根すぎゆくも
別れ告げま暗き夜道出づる時わがつく息は霧の如し
指宿・南九州合宿にて
鹿児島 川井 修治
暮れなづむ指宿のうみ潮みちてよする波の音耳にしるけし
見はるかす海のかなたにはのけぶり眠るが如し大隅の山は
北の辺の魚見が岳は茜きす夕陽をうけてかがやきてをり
若きらと夕の一刻つれ立ちて歩を運ぶかも海岸道を
しき波のよする浜辺を歩みつついやししくしくにも思ふかな
和やかに暮るる国原そが上に内外の危機は迫らむとすも
むらぎもの心かたむけ祖國の思想の危機を説きたり我は
若きらの直き心に通へかしと念じつつ歩む口に言はねど
砂浜によせては返す白波の水泡に似たり人の生命も
はかなかる生命なりとももろむけて燃やしつゝかき生ける限りは

暴動への中途をもう通り越しているのに、日本政府も、その他の有力指導グループで、日本人のナショナル・インテレストの合理的解釈の根底となり得るような諸事実を日本人に伝えたり、どういふ別の対策があるかを述べたりしようとする

る向きはいない。」からだと言う。だからして「そんなことは政治的に不可能だとか、時期尚早だとかいうおきまり文句はやめて貰わねばならぬ。時期はどうに熟しており、そして遅きに失するぐらいだからだ」とクイック氏は言うのである。クイック氏はアメリカの責任ある評論家として、国際政局における日本の煮え切らない態度に対する焦慮を卒直に直言したものと解される。その所説の詳細については異論がある(沖繩問題など)しまた日本が真に国民精神を振起すためには現行憲法を中心とした日米関係そのものについての再検討を要することが触れられていないけれども、友邦の一人として「政府内外の人士による強力なリダーシップ」の必要を切言していること

桑原暁一氏著

『日本精神史鈔』—親鸞と実朝の系譜— 紹介

夜久正雄

(鹿兒島大学教授)

は、蓋し頂門の一針とも言うべき貴重な警告であろう。我々が為政者に望むところもまた、日本民族としての確信に発するところの堂々たる指導力であるからだ。月余の後に予定されている総選挙は、日本が左翼革命の路線に一步近づくか、それとも漸進的改革の方向に己を立て直すかの重大な分岐点を形成している。革命勢力が道徳家面をしてあばき出した「黒い霧」の摘発は、その実人民戦線戦術の再版にしか過ぎぬ。彼等の企んでいる日本民族に対する犯罪は、比較にならないほど大きいことを知るべきである。アメリカ人でさえ憂慮を直言しているではないか。日本人たるもの、あに奮起せざらんやである。(鹿兒島大学助教授)

桑原さんの著書が世に出ることになった。桑原さんはこの著書を「日本精神史鈔」と題して、そのはしがきの冒頭に、「ぼくの旧稿がまとめられて一本となることになった。初めての著書であるだけに、この上よろこびはない。」と書いてられる。ぼくら友人もほんとうにうれし。

って、私は目のさめるやうな思ひでむさぼり読んだものである。今度の著書のはしがきに「旧稿」と書いてをられるものは、そのようにして知友の間に読み伝えられ、その価値が確かめられたものである。ジャーナリズムに強制された文章を書く人や、自分を売り出すためにものを書く人や、自分の生活のために書く人の多い世の中にあつて、桑原さんは全く別の道をとられたのである。それは、桑原さんの信ずる親鸞上人の御消息のごとく、心から友に呼びかけられたものであらう。だからこそその文章は、十分に練られてあつて、われわれ友人だけに通ず

るといつたていのものでなく、また専門家しかわからぬといふやうな偏狭な文章でもない。万人に通ずる文章なのだと思ふ。

桑原さんの書かれるものをぼくはいつも熱心に読んで教へを受けようとする。平易なことばつかひなので一言一言はむづかしくない。心から納得できる。しかし、時として、全体としてみるとよくわからない場合がある。それは、桑原さんの文章には独特の文脈があつて、その文脈が筆者の人生観にむすびついてゐるのだが、その脈絡がよくわからない場合がある。そんな時、何遍も何遍も読み返す。さうすると、自分の考へてみた筋道がちがつてゐることに気がつく。自分の軽率な判断とかうぬぼれとかが見えて来て、桑原さんの言つてをられるところが真実であることが納得されてくる。そんな場合が多い。

いつか国民同胞誌上に載つた「無信の信」といふ論文がさうだつたし、最近送つていただいた「罪なくして配所の月を八花山院物語・余論Ⅴ」という論文もその例だつた。この論文は、「徒然草」の中に出てくる顕基の中納言の「配所の月、罪なくして見む」という言葉から説きおこして、この言葉につながるさまざまの人たちの精神生活をたどり、いはば結論として、かう書いてをられるものである。

見た月とはまったく別の月である。そのことを顕基は祖父(源高明)の追懐をこめて言つたのではなからうか。」と。

顕基の中納言のこの一言は、ぼくも「徒然草」の中で読んで、よくわからぬままに、その逆説めいた表現に魅力を感じてゐたが、田安宗武の「歌体約言」は、その最後に、万葉集の「くるしくもふり来る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」を新古今集において「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたり雪の夕暮」と詠み変へたことを批判して、「かくくるしき事をもおもしろきやうにより待ちぬべき。さてこそ罪なうして配所の月を見んなど、ひがひがしきころも出で来し人、おほくさへなれるなるべし。」とあつたので、この宗武の考へに同調して、単なる隠遁趣味の言だと思つてゐたのである。ところが、桑原さんの結論は太子の「世間虚仮、唯仏是真」の御言葉に通ふものがあるといふのである。だからぼくは桑原さんの結論にはすぐには納得し兼ねた。しかし、心をこめてくりかへし桑原さんの論文を読んで、はじめでその言葉の生れ出てくる生きた背景がわかつた。顕基が、無実の罪で太宰府に流されたと思はれる源高明の孫であることも、道長に近づいた俊賢の子であることも、道長の妻明子の甥であることなども、全然目にしなかつたわけでもあるまいが、桑原さんの論文ではじめてよくわかつた。その一言の背負つてゐる重み、血の通つてゐる一言としての意味がわかつたのであらう。宗武にはそこまでわかつたのであらう。さて、今度刊行された「日本精神史鈔」は、親鸞と実朝の精神生活に焦点をあ

ニラ湾の夕焼けを見ながら、乗船カンボ
チ号は一路タイのバンコックをさして進
んで来た。甲板に出て暮れゆく陸地を見
やっていたとき、それが第二次大戦の古
戰場、バターン半島やコレヒドル島であ
ることを知った。団員諸君に、その話を
してあげた。団員たちは、こんなに遠く
の土地に自分らの日本人としての先輩が
生命をかけて戦ったことに思いを馳せた
のであろうか、感慨深い面持ちで、私の
話と、去りゆく景色とを眺めていた」

「青年たちは、青年たちで物を見、物
を判断していく。マニラ湾でのそんなこ
とがあつてから、タイのバンコックをす
ぎて、船がシンガポールに向うころであ
つたらうか。団員の一人が私のところに
来て、「団長さん、このあたりでも大勢
の将兵が戦死されたんですよ。ぼくた
ちは、その霊を慰めようと思つて千羽鶴
を折ろうというところになりました。団
長さんも一緒に折りませんか。折り方は
お教えますよ」と。私は目がしらがあ
つくなつた。国のために亡くなられた人
々を憶う心は、日本の若人の心の中に、
自らなるものとして実在していたのだ。
美しいことだ、尊いことだ、と私は自問
自答していた。小さい船室の床の上に、
車座になつて十一名全員で心をこめた折
鶴がつくられていった。それを糸につな
ぎ、夕闇のとぼりの下りた海上に整列し
て黙禱と共に海に投げ入れたのも、全て
団員達の発意によるものであつた」

「私はそのあと、こんな話をみないし
た。「シンガポール海戦といふのは第二
次大戦の初期のことで、イギリスの不沈
戦艦といわれたプリンス・オブ・ウェー
ルスをわが海軍の急降下爆撃隊が一挙に
轟沈したこと。レパルスという巡洋艦も
併せて撃沈した。それでイギリスの制海

権は全く地におちて、わが軍のシンガポ
ール上陸に至つたのだ。このように士気
の高揚が見られた第二次大戦は、実は、
万已むを得ずして起こされた戦争でもあ
つたのだ。日本が開戦に至る直前には、
日本はA・B・C・Dラインに包囲され
て完全な経済封鎖に追いこまれていた。
このままでは、どうにもいたし方がない
破目にあつた。「私の話をさえきつてあ
る団員の質問が出た。「そのA・B・C
・Dラインというのは何ですか。聞いた
こともないことですが」と。私は、Aは
アメリカ・Bはイギリス・Cは支那・D
はオランダなどの国々の対抗戦体制と
日本を経済封鎖しようとしていた意図を
話してあげた。すると、その団員は、「
それでは、日本が侵略したというだけ
はならないではないか」と反問してく
た。そして彼は、物思いを伴なつたよう
な、また憤りを伴なつたような声で、「



なぜ、ぼくたちの若い人々は、そうい
う大切な歴史の事実を教えてもらえな
いのか」とポツンと語つた。」
「この一言は、どんなに私の肺腑をえ
ぐつたことでしょうか。今度の全旅行を
通じて、いつも脳裡から去ることのなか
つた言葉になつたのです。
私は、団員のこの「今の教育は、なぜ
事実を事実として教えてくれないのか」
という言葉を聞いて、私たち大人の世代
を代表して一身に責められたような気が
したのである。そしてその声は、こうい
う意味をも伴なつて私に迫つてきました。
「過去の事実を、事実はどうであつた
と教えることこそ、青年たちに対して大
人たちがとるべき道ではないか。それを
大人たちは、自分勝手に判断して、こ
ういふ話をすると青年たちは、きつと侵略
者になるかもしれない、と決めつけてか
つて、事実を選択して話す、というやり
方をしてきた。これは、大いにまちがつて
いる。かつて事実としてあつたことに
ついての価値判断は、青年が青年として判
断すればいいのだ。それを知らせない
というのは、大人たちが青年たちを信用し
ていない証拠になりはしないか。『青年
を信頼する、と口にはいふ以上は、』青年
教育の仕方をしては、どうにもなら
ない。もっと、ぼくたちが青年を信頼せよ
今の日本の大人たちよ』という声にもな
つて聞えてきたからです。」
さて、小田村理事長の報告は、訪問団
のうち、パキスタンにおける回教、ヒン
ズー国に於ける皇帝による白色革命、トル
コにおけるケマルパシヤの遺業と対日好
感情、ギリシャの古代遺跡などについて
簡単ながら、いくつつかの印象を述べられ
た。しかし、全体としてのお話は、十六

泊十七日滞在されたイスラエルにしば
つて話された。
イスラエルの四千年の歴史。今のイス
ラエル国のある土地、即ち地中海東岸の
パレスチナ地方について、東西諸国(ア
ツシリア、バビロニア、ペルシヤ、ギリ
シヤ、ローマ等)の奪い合いの二千年の
足跡、十字軍の二百年にわたるパレスチ
ナ奪回の意図をはじめ、モーゼによる回
教、キリストによるキリスト教、ユダヤ
人によるユダヤ教の三つの宗教が、パレ
スチナ地方の中心点、エルサレムをわが
ものにししようと争い続けた様相などをか
なり詳しく語られた。
二千年前にパレスチナ地方から完全に
追放されたユダヤ人は、世界各地(特に
ヨーロッパ)に散り散りになりながらも
生きていくうちに一度はエルサレムに詣
でて、古代ヘブライ王国のユダヤ人の祖
先の遺跡を訪ねようとし、こうして二千
年の月日を一途な気持で過した。そして
第一次大戦の最終段階に至つて、イギリ
ス外相バルフォアによつて(一九一七年
のパルファオ宣言)ユダヤ人達はパレス
チナ地域での建国をやがて許されるとい
う約束をとりつけるに至つた。これは、
第一次大戦下のドイツにいた沢山のユダ
ヤ人たちの反独利敵行為に原因すること
であるが、これが第二次大戦中に於ける
不幸なるユダヤ人六百万人のヒットラー
による逆殺を生むに至つた悲劇の遠因と
もなつていった。
そしてお話は、いよいよ現実のユダヤ
国再建の折の、一九四八年のパレスチナ
戦争をたまたかいつた状況に及び、建国
の鬼と化した当時のユダヤ人のたまたか
いぶりが説明された。しかし、周辺アラブ
六ヶ国、即ちアラブ連合(エジプト)、シ
リア、レバノン、シヨルダン、イラク



サウジアラビアなどは、いまもってイスラエル国の存在自体を認めるわけにはいかないとし、他日必ずパレスチナ地方は回教の聖地として奪回する、と宣言していることもあわせて附言された。そうしたアラブ側の破壊活動のなかには、イスラエルにとって命よりも大初な水について、すなわちタイベリアス湖に入る水を自国内の川で、水をせきとめてしまおうとしているシリヤをはじめ、ジヨルダン側からのゲリラ隊のイスラエル国内への投入などの、敵し苦境に立ちながらも、なお着々建国の実績をあげようとするユダヤ人たち、また、十年前のシナイ戦争によって、紅海への出口、エイラット港の確保と、紅海航行の自由を獲得したいきさつなど、すべては、国民の生命を捧げての祖国再建のいとみなみであったことが話された。

こうした中で、イスラエル国の資金面の援助をつづける全世界のユダヤ人の団結機関「ユダヤエイジエンシー（ユダヤ機関）」の活動。十九世紀末以来のシオニズムの運動。世界各地からイスラエルに帰還を促進しての国民増大政策。南部の砂漠（正確には水がないだけで上質は肥えていて土漠といわれる）ネゲブ地方への配水政策。

そしてこれらの建国戦争、国防、農業の自給自足などに一貫して活躍してきたキブツと呼ばれる共産制農業集団組織、それにや、個人の自由を加味したモシヤブと呼ばれる同類の組織。更には男女とも二年二月の義務兵役に欣然として服していることなど、小田村理事長のイスラエル観察は、時の経つのも忘れて続けられていった。

そして最後に、二千年来厳しく守られてきたユダヤ教徒としてのユダヤ人の概念について、それが、イスラエル建国とともに、かえって、何を基準にしてユダヤ人と呼ぶか、というユダヤ人についての概念規定が、自然に緩和されざるを得なくなってきたこと。そしてユダヤ教のうち、オーソドックス三三%、コンサーバティブ一五%、リベラリスト八二%という数字が披露された。

大様以上のような報告のあと、小田村理事長は、ボケッから古色蒼然とした岩波文庫本（古事記）をとり出され、次のような、思いもかけない、締めくくりに言葉を述べられた。

「さて、翻って日本を考えると、戦後二十年という期間は、日本国民として日本の国防という厳肅な問題を、ともに考えないで、事が足りた時期であった。このたび訪れた十数ヶ国の、どの一つの国をとってみても、国防即政治の国々であった。近世の歴史をひもといても、二

十年ものあいだ、国民が自国の国防を念頭に入れないで生活できたような国は、まともな国としては、世界中に一つとして類例をみません。

考えてみれば、われわれ日本人は、この二十年間、物事をまともに見ないで生きてきたようなものであった。いわば、『長い間眠り続けていたようなものではなかったか』。私には、そう感じられてならない。そしてこの旅行が終わり近くに從って、『私の脳裡に浮んでいたのは、日本の古典「古事記」の一節ではない。それは神武天皇御東征の折、熊野というところで、熊の毒氣にふれて全軍の将士が眠らされてしまうところの一節でした。そして、やがて目が覚められたとき

富山合宿

十二月十日と十二日、富山大学々生十名を中心に熊野神社で合宿研修が行はれた。その記録を騰写刷りしたもの、最初に次の一文がある。

「自らの生活の中に古典の生命を求めて」

十二月十日午前八時大学の正門に「学園に心の交流の場を求めて富山信和会合宿」と墨黒々と書かれたカンパンを立てた。自分の欲目であろうか、今まで学園のところがまわらず立てられていた政治運動のものと比べ何とも言えない清々しい気分になった。

心の交流の場は何も信和会の合宿にのみ求められるべきものではない。人はそれぞれ自分の生活の場をもっている。我々は自分を取巻いているあらゆる生活の中に心の交流の場を求めなければならないだろう。

素直な心、美しい心の触れ合いというものも高遠な理想の会社、又は昔物語り

に、天皇は「長寝しつるかも」とおっしゃいます。その『長寝しつるかも』という一句が思い出されてならなかったのだ。日本は、この二十年間、本当に『長寝』しておいたのではないだろうか。

教育も文化も政治も、全ては根本から考えなおされるべきときではないでしょうか。」と訴えられた。そしてその古事記の一節を、朗々と読まれて、二時間にもわたる報告を終わられたのであった。

なお引き続いてなされた質疑応答では坂田前厚相から、ユダヤ人の性格については、かなり精緻な質問がなされ、世間一般にみる報告会にはみられないような、真剣な学究的な質疑応答がとりかわされた。

(文責 上村和男)

にのみ求めるべきではなく、現在我々が生きているこのごく身近な生活の中にこそ求められなければならない。

我々が富大で初めて古典の輪読を始めたのは昨年の十月です。それから友達も少しづつ増え今年の六月に富大信和会を結成しました。我々が古典を読む態度もごく身近な生活の中に求められなければならないと思います。長内先生も同じことをおっしゃったと思いますが、古典を古典として読み解釈するに留まる時は、そこには何らほつらとした生命を感じることが出来ないかと思えます。それは単なる古めかしい知識の集積にすぎないと思います。

祖先が悩み、苦しみ、一生をかけて残していったものを簡単に理解できるものなら何の苦勞もありません。我々が古典の言葉を本当に理解する為には、古典を残していった人と同じ苦しみを、いやそれ以上の苦しみを味わわなければならない。その時に初めて本当の意味が分かる

本当に生きた知識として古典の生命は我々の生活の中に蘇って来るのだと思いません。古典は目で読むのではなく体で読まなければならぬと思っております。

身近な生活を通じて得られたものが古典とは遠くへだたったさきやかなものであろうと、如何にちっぽけなものであるうともかまわないと思っております。それは生きていくが故に感じるこの出来た事実です。体を通して得られた最も信頼の出来る事実です。

もちろん身近な生活の中から得られた知識が絶対だとは思いません。我々は常に古典に帰り高い目標を求めたことも忘れてはならないと思っております。

僕はこの合宿で真剣に生きるということが如何に素晴らしいものであるかを感じてきました。真剣に生きている人の言葉は淡々と語られても人の心を打ちました。先生のお話を聞きながら一人の友の目から大粒の涙がこぼれ落ちました。素直な心が素直な心に触れた時、友は何を感じたかそれは言葉には表わせなものでしょう。

友達がこの合宿に集まって来てくれたこと、広瀬先生がこの神社で声高らかに歌を読まれたこと、友の素直な心を直接に自分の心で感じたこと、長内先生が富士山駅に降りられたこと、先生を囲み、友と手拍子で打って歌い、夜がふけるまで語りあかした事、これは皆んな夢ではない。本当にこの目で見たんだ。本当にこの耳で聞いたんだ。そう思うと僕は嬉しくて嬉しくてならないのです。

こんな嬉しい合宿を経験出来ましたのも国文研の諸先生方、全国の諸兄の心からの励しがあったからこそであると深く感謝しております。お忙しい身体にもかかわらず県立図書館

の廣瀬先生、東京から長内先生、京都から福島君、溝江君が応援にかけつけて下さいまして我々の初合宿に対する不安もいっぺんにふっ飛び、本当に有意義な合宿生活を経験することが出来ました。本当に有難うございました。この合宿の感動は、この合宿記録に著されるまでもなく合宿に参加した一人一人の心の中に終生留められるでしょう。(工三岸本弘)

南九州合宿

九州南端、指宿の海岸に臨む圭屋ユースホステルに、鹿兒島大、鹿経大、鹿工短大の十五名が集い、十一月二十五日、二十七日、合宿が行われた。日本、その歴史と現実をどう見るか、と題する共同討議。川井修治先生の講義「危機に立つ日本」。学生の研究発表、福寿君の漱石の「こゝろ」について、戸沢君の武士道、北島君の思想と実生活。和歌創作、松除「講孟割記」の輪読などが行なわれた。

合宿詠草から

研究発表「武士道」の準備に

鹿大 戸沢 正志
時のぞみその一身を捨つるべしもの
の道のほかくやありなむ
夕暮の指宿の海寒々と月の光にゆれてありけり
鹿経大 横手 満男

鹿工大 竹下 和繁
海の上に光一すち伸ばしたる夕ぐれ時の
月白きかな
鹿工大 宮園 朴
寒々と海辺にゆらく浜木綿にすぎにし夏
を思ひいつるも

鹿大 北島 照明
指宿に夕さきりくれば沖つ波白く光りて闇
に消えたり
鹿大 松木 明
陽はいまだ沈まぬうちに月の影海にうつ
るは不思議なるかな

京都合宿

洛東、日向大神宮で十一月二十一日、二十三日の間、京大、阪大、関大同志社の学生十名が集って行われ、浜田収二郎、沢部寿孫、徳地康之の三先輩が参加された。主に研究発表と輪読を中心とし、京大浦田君の和辻哲郎「風土」について、京大溝江君のロストウの「高度大衆消費社会」に関する問題点、関大柴田君の感謝のこころ、京大福島君のベトナム中共問題、京大井上君の橋際寛の歌について。輪読は吉田松陰「講孟余話」。

合宿詠草から

京大 榎本 雅之
直き心そをば命と生きゆかむ厳しき人の
世に生くるとも
内宮の前にて御製拝誦
京大 溝江 優
詠みまつる歌の調べは流れゆく早瀬に似
たる心持するなり
あふれくる胸のうらなる熱きものを我と
どめえずことばにつまりぬ

京大 福島 義治
初雪の舞ふ早朝の御社に参る気持のすが
すがしきかな
皆寄りて夕餉の仕度せし後に笑み交しつ
つ食むは楽しも
福岡の古川兄よりの電報にこたへて
京大 井上 慎一
雪の降る寒き朝に友とちとそるひて神を
おろかむすがしき

東京合宿

京大 浦田 嘉人
かくほどに直き心の友どちに我も述べた
し直き思ひを
十一月二十三、四の両日、東京地区
では早稲田、中央、亜細亜、慶応、
玉川、明治、上智、東工大の十六名
が武蔵野の田無で合宿した。高木尚
一先生、長内俊平先輩が参加された

合宿詠草から

鹿大 小山 絹夫
荒れ果てし神の社に響きゆく御製の調べ
の美しきかな
玉大 山本 満
御社に友と馳せゆく靴音の軽しも霜の武
蔵野の朝
まだ寝ぬる友らの食事作らんと心はやり
てとどき起きにけり
早大 今林 賢郁
立ちのぼる湯気をふきまつつ食ふ今朝の友
らの手になるあさげうまし
長内先輩の話を聞きて
鹿大 岩越 豊雄
今立たずば我が一生はただ無為に過ぎゆ
くばかりと切に思はる
先輩の言葉を黙って聞く友の感激我にも
伝はる覚ゆ
橋の上にて友と別れし時
東工大 内田 敏彦
学園に一人たりともわが思ひうちつけず
して過ぐすべきやは
友の手を握る折しもことさらに冷き風の
吹き上げて来ぬ

学生委員選ばれる 本年の夏期合宿地は
阿蘇に決定されたが、それを目指して、
年間の運営と指導を担ふ四人の委員が次
の通り決定された。福島義治君(京大法
三)今林賢郁君(早大政三)古川修君(大
九大法三)徳田浩士君(鹿大教三)

編集後記 正月の新聞に発表された天皇
御歌を、富山の広瀬さんが書き写して東
京の夜久さんの許に送られた。少し発行
の遅れた一月号の巻頭に、それがかうし
た形で掲載出来たことは怪我の功名、実
にありがたいことだった。それにしても
折角発表された御製の一首も載せない大
新聞といふのはひどい。言論洞開を塞ぐ
塊りがマスコミの実勢の中にある。昨秋
全国の各地で開かれた学生研修合
宿で、学生諸君が真剣に求めたものは、
まことのこゝろであると思ふ。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州→東京→全国)
東京都中央区銀座22-1152
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

今上天皇御歌拜誦

夜久正雄

(帝塚大学教授)

新年御発表の今上天皇の御歌(前号巻頭所載)について広瀬君は「雄大激潮」と言はれたが、私も全く同感である。

道後の宿にて

晴れたるこの朝ぼらけはるけくも霞む四国の山なみを見つ

大景が簡潔にとらへられてゐるところが「雄大」である。「霞む四国の山なみを見つ」といふ、ただ「霞む山なみ」と言はずに、「四国の」といふ表現が、卒直で、自然で、「激潮」としてゐる。今上天皇の御歌には、地名を詠みこまれた御歌が多いが、この「四国の」の一句は実に生き生きとはたいてゐると思ふ。

このやうに、無造作と見えるばかり自然に、はじめて歌を作る人の言葉つかひのやうに素朴に、しかも大きくゆたかに地名がはたいてゐる歌も少ないだらう。土地の全体の姿が、作者の心に一瞬にとらへられて表現されるのである。古事記の国生み神話の四国の条を思はせられる。土地柄の本質がずばりと把へられ

に移る旅の空より

るといふふうである。実に具体的であるが、少しもごてごてしてゐない。「山なみを見つ」といふ結句の「見つ」も、御歌に多い「つ」でとまるとめ方で、簡潔明快で力強い。さう言へば、今上天皇の御歌にはかういふ雄大な御歌が多い。

朝空(昭和二十六年)
淡路なるうみへの宿ゆ朝雲のたなびく
空をとほく見さけつ
鳥取県における植樹行事に際して
(昭和四十年)
静かなる日本海をながめつつ大山の嶺に松うゑにけり
次に、「飛行機の旅にて」二首について。
飛行機の翼のました工場を雲間に見たり水鳥のあたり
晴れたる大海原ははてもなし八丈島も遠にうかびて
昭和二十五年「飛行機上より」と題され、松島も地図さながらに見えにけり静か

の御歌がある。飛行機上より俯瞰した光景が「静かに移る」かと思はれる飛行機の動きとともに、文字通り「ありのまゝに」表現されて、作者の無心の心の感じられる御歌である。かういふ御歌を拜見してゐるので、今度の二首に特に驚きはしないが、しかし機上からの大観が適確明快に詠まれてゐて、作者の雄大な自由な御心をつたへるのには、感嘆のほかない。「工場を雲間に見たり」といふ5・4・3の音調が、一瞬の印象をのこした作者の心のリズムをさながらにつたへるのである。第五句「水鳥のあたり」は八音字あまりで、ゆっくりと印象に反省を加へる、その時の心の動きがそのまま言葉になつてあらはれるという感がする。それがまことの表現といふものであらう。御歌は無技巧といふのではない。表現技巧の努力のあとが見えないほどの表現の努力がはらはれてゐるといへる。それはその時の言葉の上だけのことではない。経験そのものにおける心づかひが歌にあらはれるのであるから、歌は日常生活の努力の結晶ともいへるものである。それを心境とでもいふならば、御歌は、「神情開朗にして小葉の疑滞なし」(聖徳太子の御言葉)とでもいふべき、日本精神の最勝の御表現である。

「秋季国民体育大会」二首の、「高崎山見ゆるテニスコートに」「由布岳の麓の庭に」大自然を背景にくり広げられる近代スポーツの熱戦と、作者の精神とは一体になつてしまふ。さうした意味で、天皇御歌には、対象への非常な心の集中があつて、それが対象の本質を全身心をもつてとらへる過程となつてゐる。現実がそのまま精神そのもののもつ自由な発露を示して、精神の最高の価値を發揮し、そこに普遍の原理が啓示せられる。天皇御歌にある、作者の心と対象との不思議な共感と融合とは、かうした作者の精神の緊張によつて生み出されるのであらう。

御歌を拜誦すると自然に、太子の御言葉が思ひ出される。御歌を声を出して朗読すると、御歌のしらべにみちびかれ、自分の心もひろくゆたかにひらけゆくかと思はれ、勇気がわいてくる。雄大な天皇御歌を朗誦して新年の第一歩を踏み出すことのできるのは、まことにありがたいことである。ただ、大新聞が、この御歌をほとんど無視するのは、本当に困つたことである。	次 雄彦正一郎 助柱男 正輝安陽 荒鉄 国 久田上柳木 越二 林 山瀬小高 名朴 小 鬼「古事記」の便り 大東 戦争の正史 韓国から 便り 病 床に歌壇	目 天皇御歌のこと 御病気のことは正義 日本「古事記」の正史 今述「鬼」大東 戦争の正史 韓国から 便り 病 床に歌壇
--	--	---

魚 歌会始の天皇陛下お歌

わが船にとびあがりこし飛魚をさきまひとしき海を航きつつ

述而不作

山田 輝彦

述べて作らず、信じて古を好むとは、論語の「述而」篇冒頭の言葉である。

これは孔子が先王の道を「祖述」して、自ら「創作」しないという意味であり、歴史に対する孔子の謙虚さを簡にして難弁に語っている。孔子にとって、古人の言葉も行為も「信ずべきものであり」「好むべきものであった。信も好も、その根底には無条件の愛情がなければ成立しない。これは「保守主義」というような一定の立場の表明でもなく、無気力な追従でもなく、「信」という心の姿勢から自然に出て来る学問の方法であり、生きる姿勢であると了解されるのである。

現在のさかしらな人達は、ともすれば全く反対のことを考えているのではない。「批判して作り、疑いて古を憎む」という歴史への対し方が、この二十年風靡して来たのではないか。自分の好みに合わぬものは容赦なく切り捨て、好みに合ったものは不自然に誇張し、こうして国民が永い間温めて来た歴史像は完全に歪曲され、寸断されてしまった。歴史は社会のメカニズムの自己運動であり、人間はイデオロギーの図式を説明する将棋の駒にすぎない。中共ではすべての歴史の評價が「時価」いくらに換算されると書いている。けだし名言であつて、今の日本人にこれを笑う資格はなさそうだが、「時価」で歴史を測るのは中共だけでは

ない。ソ連の百科辞典では、時の権力者の考えによって、ドストエフスキーの評価が猫の目のように変つてゐる。十年前フルシチョフによつて完膚なきまでに批判されたスターリンは、中央委員会の合議によつて再評価が始められたらしい。革命五十年の歴史にスターリンの名を全く出さぬわけにはゆかぬからというのがその理由である。高度に文明化された現代の世界で、こういう「非科学的」のことが平気で行われてゐるは、「科学的」社会主義が泣きほしくないか。香具師のたき売りのように歴史があつたかわれてはたまらない。

古事記や日本書紀は、皇室を権威づけるための創作だと進歩派の歴史家の強弁である。書紀は能う限りの異説を「一書に曰く」として列記しているし、皇室に極めて不利な事件や事実も細大洩らさず記述している。天晴れな史観というべきである。建国記念日が二月十一日というまゝだ。何にもましてめでたいことである。「科学的」でないという批判が執拗にくりかえされたが、日本は残念ながら「科学的」に建国の日が算定できるほど歴史の浅い国ではないのである。書紀編纂の八世紀の人々にとつても、建国は既に「科学的」に跡づけ得ないほど遠かつたのである。歴史の「事実」と神話の「真実」の区別をちゃんと神武東征の大きな神話を教えればよい。ともあれ、述べて作らずという先人の経験への畏敬をもう一度とりかえすべき時であろう。

(福岡県立若松高校教諭)

「日本」病氣のこと

潮上 安正

昨年「熊本」国文研の例会で黒上先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読を終り、其の後夜久正雄先生著「古事記のいのち」の輪読をつづけて居ります。

毎回十名余りの会員主として小中学校の先生方の集りですが、教育界の病根の深さを語り合つてゐます。

さて、聖徳太子(維摩経義疏に「第三に文珠問ひて言く、居士よ、比の疾は當に如何が滅すべきと。浄名(維摩)答へて言く、一切の衆生病めるを以て、是の故に我れ病む」とありますが、四千年前の印度には、病深きものがありました。仏教の達人も亦「病」にかゝつて居ると申して居ります。

病に気付くことが病を直して行く唯一の方法ではないかと思ひます。今の日本は何となく変だと思ふ人は多いでしょうが、「病」に罹つてゐると思つていな

いのでしょうか。政治では自民党に黒い霧がかつてゐるといつて社会党は喚き散らしましたが「社会党よ、お前もか」と新聞は述べて居ります。日糞、鼻糞を笑うの類と思ひます。

私は、時々大学に参りますと、政治のスローガンが汚いまでべたべた張つてあります。正しく大学は赤旗に占領されてしまつたと思われまふ。特に文科系の人達がひどく犯されて居るようです。果し

て文科系の大学出は、きらわれて、中学や高校の卒業生は引張旗だと仰うことは、大学に於ける教育の悪効果を世間一般は知つて居るのだと云えると思ひます。唯知らないのは文部省文のように思われてなりません。一体文部省はどのような教育の在り方を期待し、又効果を期待しているのか。大学を卒業した人達がどのような思想になつてゐるのかを判定して居るのでしょうか。

萬全の策があるなら今直ちにその策を研究して欲しい。たとえそれが行われたとしても、二十一年の教育の空しさは今に於て如何ともし難いではないか。

東大校長は小さな善意運動を提唱された。悪いことではないが、学長自身は、自ら責任を持つべき東大生がどのようになつて居るのかを御存知なのだろうか。

先生の言葉を学生達は冷やかに保守反動だと心におおきく聞いて居る現実に対して、どのようにお答えなのだろうか。試験問題に対する答えが例え八十点だといつてそれは最高の教育の効果であるとして満足されるのであろうか。学生達は唯問題に対する回答の名人ではあつても、物事を、人生を本質的に捕えて行くには小、中学生にも劣つて居るのではないのだろうか。

全ての大学がスト突人の寸前にあります。之に対して国民は、文部省は、教授達ほどのように考へて居るのでしようか。

親鸞は萬川長流に流るゝ草木を「まへはうしろをかへりみず、うしろはまへをかへりみず」と申して居ります。

「落へ」と進み行く日本の姿をながらてはないでしょうか。

然し親鸞は「先なるは後をみちびき、後なるは先をとぶらひ」と人の世の在るべき姿を鮮かに画いて居ります。

「日本」は病気になるて居るのでしよう。自分をも含めて、国民の一人一人が「病」に罹っているのだと気付いたら問題は早く解決するのではないでしようか。(熊本県林業研究指導所)

鬼の話

小柳陽太郎

徒然草五十段に次のような話がある。鎌倉時代末期、花園天皇の

御代、広長年間のこと、或る者が伊勢の国から女が鬼になったのを連れて京都にやってきましたという噂が立った。噂は噂を呼んで京中誰一人として知らぬ者はないほどだが、さりとてその鬼を「まさしく見たり」という人もなく、かといって「虚言」だと言いきる人もいない。昨日は入道前太政大臣藤原実兼の邸に行つたという噂が立ったかと思えば、今日は院の御所へ行つたかと思えば、今日やかにふれてまわる。「上下たゞ鬼のことのみ言ひやまず」という有様になった。そのころ兼好法師は所用あつて京の町に出たが、夥しい人々が一条室町のあたりに鬼がいると口々に叫んで北をさして走つて行く。殺到する群集のために道は通ることも出来ない。半信半疑だった兼好もさすがに「はやく跡なきことにはあらざんめり」すでに間違ひなく鬼はいるにち

がいない」と考へて人をやって見せたところ、驚くことには誰一人として鬼を見る者はいなかったという。しかも日が暮れるまで騒ぎはやまず、遂には喧嘩までおこつて人死にさえも出るという始末。元寇弘安の役より三十年、建武中興に先立つこと二十年、鎌倉時代末期の妖雲たゞよう世相を反映した物語だが、さりげなく筆をすゝめてゆく兼好の目に見えた人の心の奇怪な動きはまことに無気味である。

兼好が世を去つてより六百年、今では「伊勢の国より、女の鬼になりたるを、ゐてのほりたり」という噂が魔力をもつ時代は去つたようである。だが人の心は、はたして鬼を幻想するこの奇怪な心理と無縁になり得たのだろうか。例えば去る十二月九日、建国記念日が二月十一日に決定したことを報じた新聞の紙面に、社会党と公明党の談話として、それら、「反動政策に迎合」という言葉と「神道復活につながる」という言葉が記されていた。その記事を目にしたとき、私の胸をよぎつたものは、この一条室町の雑踏の中に現われた鬼の幻想であつた。反動という言葉はある、だがその実体は一体どこにあるのか。「まさしく見たり」という人はいはしない。しかし万人が口にする「反動」というものが、ありもしない幻影だと言ひ切るのもさすがにためらわれるのだ。人々はそのように迷ひ、そしてざわめくのである。「神道政治」というのはいかに突飛だが、それにしても繰りかえし「ジャーナリズムがとりあげれば、それも反動」という言葉と同じ

作用を人々の心に及ぼすに違ひない。

兼好の時代から現代まで、というより人間が生きている限り、そこには得体的しれぬ一匹の鬼が住んでいる。ほくら人間はその鬼には永久に勝つことは出来ぬかもしれない。だが少くとも鬼の存在を知ることは出来るはずだ。そして今こそその鬼の奇怪な動きに注目することが人間の将来にとって決定的な意味をもつことになってきたようである。なぜな

☆ 紹介 ☆

夜久正雄氏著 古事記のいのち (国文研叢書1)

高木 尚



古事記のいのち

間の永遠の真実にもふれる一読み方を、読者と共にしようとする著者の心は、日本の建国の昔につながり、無限の未来につながっている。第一章古事記への道の中に著者はいう

昭和四十一年三月に発行された「古事記のいのち」は、東洋大学文学部の夜久正雄氏が学生時代から文字通り「身読」して来た「古事記」のいのちをさながらに記した雄渾な生命のあふれる書である。

著者が大学卒業後も数名の同志と長年

にわたつて古事記を読み合せ古事記の歴史的背景を究め、古事記について国内のあらゆる研究書を究めつくし乍ら、その一々の註釈を追いまわす事をせず、古事記を通して「永遠の中の自己」を見る、時代思想の相違、社会制度や慣習の相違をのり越えて「古典の中に輝いている人

ら、鎌倉の末期には鬼の存在はせいぜい京都の人の心を穿たただけにとゞまり、少々の死人や怪我人が出ただけですんだようであるが、近代の文明が驚異的に発達してしまつた現在、印刷技術、更には兵器の威力の極端な増大によつて、鬼の及ぼす惨禍はまさに人類の生死を賭ける程の力をもつようになつたのだから。

(福岡県立修猷館高校教諭)

はれてゐる素材をつつ、む社会制度や慣習の相違、作者をつつむ時代思想の相違とか、乗りこえ難い障壁はなほ、一つや二つにとゞまりません。しかし、それでもわれわれは、その厚い壁を通して、古典の中に輝いてゐる人間の永遠の真実にふれることができます。時代がへだたつてゐるほど、場所や習慣や思想のへだたりが大きければ大きいほど、かへつてそこに時の流れや空間の距離に消されることのない人間の深い真実にふれることができるやうであります。

本書の順序は第一が右に掲げた「古事記への道」で、古事記の成立、古事記と現代思潮、古事記はどういう態度で読めばよいか、という事を述べ、第二が「古事記の魅力」で、サホヒメの伝説、神武天皇の苦戦、スサノヲノミコト、日本武尊、タケミカヅチの神、イザナギノミコト、天の岩戸等、第三が国作りの叙事詩で、神話伝説と国家の形成、神々と英雄、第四が古事記の主題、第五が愛の歌で、有名な「や雲立つ出雲八重垣」「狭井川よ雲起らわたり」「梯立ての倉橋山は」等の歌について述べ、第六に古事記のあらすぢを上、中、下巻について述べている。

現代日本の若い人々はとかく一つの書をゆつくりと読み味はうことをしようとしないう傾向がある。書物というものをその様には考えない事に対して、夜久氏はわかり易く力強く古事記のいのちを説き明し、読者と一緒に著者も読んでゆかうとする熱誠が感じられる。

(労働科学研究所維持会事務局長)

本書は昨年三月、研究資料として各方面に配布されましたが、好評をえてお申込みをいたゞきながらお頒けすることが出来ず御迷惑をおかけし

大東亜戦争は正義の戦争であつた

一粒の麦地に落ちて死なば……

日本版「極東軍事裁判」

連合国が日本を裁いた極東軍事裁判は、一種の復讐裁判であつて、「公正」の名を返上した茶番劇に過ぎなかつた。このような一方的立場でもし日本がアメリカを裁いたら、大東亜戦争はルーズベルトの恐るべき大陰謀によつて起つたといふことになる。ちよつとアメリカ側の資料(米歴史学会会長チャールズスピアードの「ルーズベルト大統領と一九四一年の開戦」、文春一月号所載バーンズ「だまされた山本五十六」)により、その陰謀の背景を明らかにしてみよう。

昭和十五年六月、ドイツの電撃作戦の前にフランスは僅か三十五日で降服した。イギリスはダンケルクに撤退してヒトラー軍は今にも英本土に上陸せんとしていた。アメリカは是非でも英国を助けなければならぬ。もし英国が破れれば、米は太平洋と大西洋で包囲される。ルーズベルトはどうしても参戦したい。チャーチルからは参戦を矢のように催促される。

しかし米国内の世論の八割強は参戦に

てをりました。その後ようやく販売用として第二刷が出来てをります。定価二八〇円送料五〇円。

大東亜戦争は正義の戦争であつた

名越二荒之助

反対である。選挙でも民主党は「攻撃されない限り参戦はしない」と公約している。米が参戦するためには、日本に先下手を出させねばならない。ルーズベルトはあらゆる手段で日本を使惑した。蔣介石政府の全面援助、日米会談の拒否、ABC D包囲陣による日本の封鎖、そして最後にハルノートをつきつけた。「日本は支那大陸及び仏印より全陸海軍を撤退せよ」「両国政府は重慶政府以外の支那におけるいかなる政府も支持せず」

パール判事は「このような最後通牒を出されたら、モノコヤルクセンブルグのような小国でも立ちあがつたであろう」と評しているが、日本も最終に対米戦を決意せざるを得なかつた。

ルーズベルトは日本の真珠湾攻撃の時期も規模も、暗号電文の解読で知悉していた。しかしその事を現地司令官に知らせなかつた。心中ひそかに日本の不意打ちを期待していたのである。

日本の奇襲によつてルーズベルトは「真珠湾を忘れるな」の相言葉のもとに世論を結集し、アメリカの参戦、第二次大戦の拡大に成功したのである。そしてト

ルーマンは戦争末期、広島長崎に原爆投下を命じて、約三十万の非戦闘員を惨殺した。

実に大東亜戦争の挑発者はルーズベルトであり、非人道的暴挙を敢て行つたのはトルーマンであつた。

次に日本の立場からソ連を断罪したらどうなるか。これは余りにもひどい火事場泥棒であつたために、健忘症の日本人もよもや忘れまい。日ソ不可侵条約を破つて僅か五日間の参戦(ソ連側発表)で、満州、北鮮、カラフト、千島を侵略した。この大胆なる国際法違反を認めたのは、ヤルタ秘密協定に参加したルーズベルトでありチャーチルでもあつた。そのソ連は明治以来の日本の業績の大半を、殆んどの犠牲なく略奪してしまつた。その上ポツダム宣言に違反して日本人五十数万を俘虜として抑留した。抑留者には徹底した思想教育をほどこし、天皇鳥敵前上陸「まで敢行させた。長い者は十一年間にわたつて奴隷労働を強制し、榮養失調その他による死亡者は七万人にも及んだ。

更にイギリスはトルコから支那大陸に至るまで、おとなしい羊の毛を刈るよう(トインビー「文明の実験」より)搾取をほしいまゝにし、オランダは何十年にもわたつてインドネシアを植民地にした。

もしあの時点で、日本版「極東軍事裁判」を行つたら、米ソ英蘭の指導者たちは、一斉に断頭台に送られることになるであらう。

第二次大戦の審判

以上は極東軍事裁判の方式を、日本の立場に置き換えて展開した紙上裁判であった。

それでは第二次大戦を客観的にながめてみた場合どうなるか。私は今こゝで、どこまでが日本の責任で、どこまでがアメリカの挑発で、どこまでがソ連の侵略だなどという煩瑣な議論をしようとは思わない。そもそも戦争というものは、それぞれ国家意志のからみあい、最終に爆発して起るものである。とても一角だけを切り取って、責任の範囲を決めることなど、できる代物ではない。

たゞ第二次大戦後のあの時点で裁判した場合、「日本無罪」を主張したパール判決書以上に、私は言うべき言葉を知らないのである。

がらに戦勝国が、戦敗国に対して復讐裁判をすることは、歴史を混乱に導くだけである。戦争の公平な審判は、人間の力で行われるべきものではない。長い歴史の経過によって、自ら判定が下ってくるのである。

それでは第二次大戦後二十年、この歴史の経過から大東亜戦争を判定した場合どうなるか。大東亜戦争こそ「歴史の必然性にそつた正義の戦争であった」と断定するよりほかないのである。

大東亜戦争の歴史的意義

大東亜戦争はそもそも侵略戦争ではなかった。日本は南方諸地域に進出すると、フィリピン、インドネシア、ビルマ、カンボジア、ラオス、ベトナム等に

独立を与えた。決して米、英、蘭が東南アジアで試みたような植民地にしたのではなかった。侵略という言葉を使うならば、大戦前の英米蘭や、大戦末期のソ連のやり方こそ、侵略の名にふさわしいものであった。

それに反して日本の正義の一撃は、そのまゝ、歴史の必然性にそつものである。だから日本は敗れても、独立の火の手は戦後も燃え広がった。東南アジアから中近東を経てアフリカにまで。その数約六十ヶ国。その規模大な独立波及の姿は、歴史にその例を見ない。しかもこれらの独立は、ソ連が東欧を共産主義のもとに独立させたような人為的なものではなかった。極めて自然発生的に起つた真の意味での独立であった。

「一粒の麦地に落ちて生きなば一つにであらん。死なば多くの実を結ぶべし」二百数十万の人々が、大東亜戦争という戦火の中に焼け死んで、これらの国々の間に不死鳥のように甦つたと言つたら言い過ぎであらうか。

ともあれ日本のこの捨身の一撃がなかつたら、到底今日のようなアジア・アフリカの変貌は期待できなかったであろう。トインビーやウエルズも「大東亜戦争の壮挙は、今後数世紀にわたつて世界史に影響を与え続けるであろう。何人も大東亜戦争の世界史的意義を黙殺することはできない」と言っている。

そして大東亜戦争はいまなお現代史を大きく動かしつつある。国連加盟国のうち過半数がA諸国によつて占められてゐるのも、その遠因は遠く大東亜戦争に

あると言つべきであらう。また最近南北問題が登場するようになって、日本を中心とするアジア広域経済圏が考えられ始めた。アジア開発銀行、アジア極東経済委員会、第二世界銀行等々。それらの動きも、大東亜共栄圏構想が日米合同の形で再現されつつあると見てよいであろう。

それでは同じ敗戦国である独伊はどうか。ヒトラーは「欧洲新秩序の建設」を呼号した。しかし戦後できあがつた秩序は、共産圏と自由圏による欧洲の分裂的秩序ではないか。そして気の毒にもドイツ自身が分割されるという民族最大の悲劇に見舞われてしまった。独伊は戦争によつて得たものはなかった。

それでは戦勝した連合国の方はどうか。イギリスは戦争に勝つて植民地をすべて失つてしまった。インド、ビルマ、マレーからアフリカ諸国に至るまで、すべての独立を認めて孤島に閉じこもるよりほかなくなった。アメリカはフィリピンを失つて、日本をはじめとするアジア諸国の反共防波堤の役割を果さざるを得なくなつてゐる。

それでは彼らの戦争目的は達成されたであろうか。彼らの目的はファシズムの打倒にあった。たしかにこの戦争によつてファシズムは打倒された。しかしそれ代つてファシズムよりもより強力な独裁力を持つコミニニズムの出現を許した。ファシズムは政治独裁であるが、コミニニズムは経済と生活の末端まで党と官僚によつて統制する政治経済社会の独裁体制である。チャーチルも第二次大戦

回顧録の序文で、「我々が打ち勝つたよりも、さらに大きな危険にさらされるようになったことは、人類の悲劇これより大なるはない」と言つて、第二次大戦を「無用の戦争」と結論付けている。英国の戦争指導者の目からすれば、たしかに、それは「無用の戦争」であつたであろう。そして連合諸国や独伊の戦死者は、「犬死」（使いたくない言葉であるが）であつたかも知れない。しかし日本の戦死者二百数十万の死は決して無駄ではなかったのである。

英霊は黙して語らず

にも拘らず現代の日本では、極東軍事裁判に対する国民的批判が起らず、大東亜戦争に対する劣等意識からまださめない。マスコミも教科書もことごとく「大東亜戦争」を「太平洋戦争」と呼称する始末である。

更に祖国のために殉じた戦死者をまつる靖国神社は、一宗教法人として片すみにやられたまゝである。靖国神社の国家による護持さえ実現できない現在だから、小中高の教科書からも黙殺されている。身をもつて困難に殉じた英霊の精神は地を払つて、防衛精神を謳う教科書は一冊も見当たらない。外国が攻めてきたらカブに乗つて逃げろという「平和主義者」がウヨウヨといる。

このよつた日本の偏向に対して、英霊は今何を想うか。彼らは「大東亜戦争は正義の戦争である」と訴えているのであろうか。英霊は沈黙して語らず。英霊の心を断定することは英霊の冒瀆となる。

芙蓉は恩讐を越えて歴史の彼方に立ち給う。私はこゝに芙蓉の心に思いをはせつゝ、祈りの歌を歌うのみである。ますらをのかなしき命つみ重ねつみ重

(韓国からの便り)

一衣帯水的な地理的条件

在ソウル、日本文化研究所長

朴 鉄 柱

(この一文は、昨春秋、朴氏から本合副理事長―訪韓団々長―川井修治氏宛に送られてきた手紙であるが、訪韓の学生諸君に回覧してもらいたい旨が記かれてあったし、文意まことと心のこもるものであって、一部の回覧にとどめるのは惜しい気もするので、あえて本誌に掲載することとした。日韓両国の親善に役立つことともなれば、うれしい限りである。)

謹啓
このたびは、御会学生訪韓視察団をお迎へいたし、緊密なる学生交流とおもてなしも出来ず、かへすがへすも残念に存じ深く恥ぢいてをります。経済的事情と、デリケートな客観的位置を御高察の上、いたらなかつた点を御容恕下されば、幸甚に存じます。

(中略)八月二十六日、釜山の水宮空港にお待ちしますと、やがて、航空機が着陸し、待ちに待った八木山合宿以来の

ねまもる大和島根を
(以上は昭和四十一年十二月十一日岡山県井原市遺族大会にまねかれて講演した一節、岡山県立笠岡商業高校校諭)

なつかしい顔ぶれが、ぞく／＼とタラップを降りてきたときには、正直なところ私の胸は、一ぱいになって、或る種の錯雑した感動をおぼえたのであります。もと／＼皆様を、私がお迎へいたすべく、招請もし、又私のもとの学生を招請していたゞいて、相互の学生交流を実現すべく苦勞した去年のこともが、思ひ出されて、まことに感慨無量でありました。

空港に降りられた諸君の、端正なる服装と、礼節ある態度は、異彩をはなち、その立派さは、税関の官吏をも感動させた程であります。東葉温泉のホテルにいたるときも、スリッパを外向きに整然とならべてぬき、正座する皆様に対して、ホテル従業員達も、びく／＼して嘆息をもらしてをりました。スリッパのことに言及すると、自然一昨年春にお伺ひしました八木山合宿のときのことが、思ひ出されますが、あの「青年の家」で、私が偶然乱れてゐるスリッパを直してゐたところを、理事長の小田村先生のお眼にとまり、閉会式の折に、過分なるおほめの言葉をいたゞいて、赤面したことがあります。

かくの如く、皆様がいたるところで、あらゆる層の人たちから激賞されるのを聞きまして、私は、私自身がほめられるよりも、もっと心強さと名譽心とを、おぼえたのであります。それは、皆様の挙措動作の中に、いき／＼とした日本精神を発見し、皆様による日本の精神的復讐を、私が確信し得たからであります。やはり、両国間の諸懸案も、皆様と私ども青年の、協同の尽力によらねばならぬ、といふことを、両国の学生諸君の態度から、実感した次第であります。

一時、西欧の膨張主義のため、明治維新の真精神が歪曲され、両国間には、思はずはしくない暗い時代がありましたし、その後、御国の敗戦混同期と、私どもが、頑固な政治家に指導されたため、交流が断絶し、両国間に深い断層が出来てしまつたのが、従来の実状でありました。

だが、一衣帯水的地理的条件と、有史以来のたえまなき相互交流の密接度から考察しても、その様な不和関係は、不自然不条理極まるものであります。歴史には、必然の流れがあるもので、沈滞して地底を流れ様と、やがては、大きな流れとなり、大洋の水となる如く、両民族は、不可分離な歴史の必然性と実績とによつて、結びに結ばれた関係であります。故に両国は、協同の運命の自覚のもとに、ともに栄へ、あひたずさへて

ゆかねばならぬ、といふことは、当然の理といはねばなりません。皆様の訪韓を実現にいたらしめた唯一の原動力も、実にこゝにあつたと存じ、皆様の若い世代の使命感のほとばしりを、皆様に接して、しみ／＼と実感いたしました。両国の正しい提携協力は、実に、皆様の雙肩にあります。どうぞ、しつかりと私共の学生諸君と手を握りあひ、肩を並べて勉強し、将来にそなへて下さい。

両国の真正なる紐帯こそ、アジア復興の礎となり、アジア連結の主軸となるのであります。どうか、皆様の訪韓の御経験が、竜頭蛇尾にだすことなく、両国のため、画竜点睛的な役割をはたしていただくべく、念願して止みません。私どもも微力浅学ではありますが、両国民が、心と心からシツカリと結び合ふ日を熱望しながら、さ、やかながらも、努力しつゞける存念であります。

皆様の御接待には、未備缺點だらけでありましたが、今後は、学生同士が合宿しうる寮とか、民泊等、もっと実質的な行事が出来る様心がけます。つたない文章であります。学生諸君に回覧願へれば多幸に存じます。

では川井先生を始め皆様の御健闘をお祈り申し上げます。

九月二十日 朴鉄柱拝呈

川井修治先生 学生御一同様

病床にて

小林 国男

妻庭に咲きしバラを持参してわが病床の枕辺の花瓶に活く

頃もよく咲けりと妻はわが庭のバラを手折りに病院に持ち来ぬ

ふくらみし蕾のバラの花びらは花瓶にさされてほころびはじめぬ

バラの葉は濃き緑にて花びらはうす紅とうす黄色なり

三年まへ庭に植ゑてしバラの苗今病床の我をなごます

けふ

今日一日晴天つゞき太陽の光ひねもす部屋にいそぐ

朝どきの雲ひとつなきみ空には遠山の姿つばらかに見ゆ

温室の部屋ながらに太陽の光ベッドにいそぎつゞく

太陽の光をあびてひねもすを友に知人に便りしたゝむ

夕やみの迫ればアジア大会マラソンの実況放送す携帯ラジオの

パンコックの異国の土地に日の丸ふりに留邦人の応援すといふ

三十度を越すマラソンに君原重松は一位二位へとゴールに入れり

病院の屋上のながめ
曇どきの冬日ともしみ病院の屋上にのほり四方をながめたり

冬の日はあるかくてり山群の上になつよふ雲のどかなり

福岡の街並つゞく東北の空のかなたに山脈がすむ

立花の山のふもとは妻子らの住むあたり
かもしたはしきかな
井野山も三郡峯もなつかしきわが学舎を
めぐる山々
妻を思ふ歌
12・16

はしやく娘をたしなめてあれどおのつから心なごむよ妻としあれば
あひかたりあひみる時に限りあれば過ぎゆく時ははやき心地す
夕ぐれの迫るひととき屋上を妻娘と歩く
うましき思ひよ
12・16

電車は走り自動車は動き人はみな働きてあるにわれは憩へり
二十年のつとめの後の一月の休養と思へ
と妻はいへども
歌をつくり歌をよみてはねむるころにいこふ心にその日はすきゆく
○

朝の日にてりかゞやけば鉢植ゑの花をうつして窓の外に出す
女教師の友鉢植ゑの寒牡丹たつさへ来まして花ぞへにけり
12・17

歌つくり歌よみゆけば心たかまりはてしもしらずひろがりてゆく
この思ひ誰にかもつけむつきく〜に歌ごころわくにきはしき思ひよ
12・18

昨日より降りくる雨のつよまりてふりしきるなり今日の午より
遠山の姿もきえて雨雲の空をおほひて雨しとゞ降る
降りしきる窓の外の雨部屋内にきこえて

くるなりかすかなれども
中庭の所々に植ゑられし柳の枝葉のや、にゆらくよ
雨の中相合傘に看護婦の肩よせあはせ石づたひゆく
かへし(山田さんに)

湯あがりの吾をまつごとく病床の枕辺にありつ君がみ便り
吾を思ふ君がみ歌をよみゆけば心のなごみいはむかたなし
あたたかきみ友らのなきけを身にうけてわれ療養すありがたきかな
12・19

わかれ歌を送ればこだまかへること君歌つくり送り給へり
球をうちその球はずみうちかへす球のごときも君がみ便り
わが歌にならひて君はみ便りにはじめて歌をつくりしといふ
かけがへのなき友なればとわれをよぶ君が言葉のおもはゆきかな

皇太子殿下御誕生日に當時を思ふ
日の本の日嗣ぎの御子の生れましし昭和八年十二月二十三日よ
北風の寒き広場に日の丸の小旗かざしてことはしき日よ
先生も両親もこそぞりてよかつたとはれや
ざしおもはしきもなつかし
日嗣ぎます御子生れますとサイレンのなりひびきけり故郷の島にも
国民のひとしく待ちし日の御子はいま三十三の年を迎へ給ふ
12・23

妻の誕生日によせて
もろびとの祝ひよろこぶクリスマスのもろ日に生れしはしきわが妻

二十年を故とともにもすゞしきてはしきわが家のたのしきろかも
クリスマスケーキをかこみわが手らは母の誕生を祝ひをらむ
二十年の月日めぐりてわれらには思つゝ間とてなかりけるかな
土地を得て家をつくりて子供らを四人そだてしこの年月を
ひと思のつきしといふにはあらねどもホトナスの一部はじめて貯金す
子の育ちわが家を巣立ちゆくまでは親のつとめをともに果たさむ
男の子たくましくあり女の子すこやかにありてわが家たのしき

かにかくに汝ひとすちに家のため子のために身を粉にしてつくせし
やさしがる汝にてあるよときたまにはげしくいかり子らを叱れど
よろこびもかなしき心もあふれいつる生命のまにまにゆたかに生くべし
○

クリスマススイブのしじまの病棟に看護婦の歌流れくるなり
ほのぐらき廊下に看護婦列つくりともしびもちて静かに歩めり
讃美歌の歌おごそかにきよらかにまひき
姿の乙女らは歌ふ
12・25

退院宣言
よくなりぬ退院よろしとレントゲン終り
湯上りに医師の告げたり
てすぐりの気持もさえて窓の外の背振の山の白雪を見る
お見舞のシャツの毛はだもあたらしく湯上りの後初着するなり

(福岡県立宇美商高教諭)

同胞歌壇

—しきしまのみら—

一月二十七日 福岡県 国武万春生
中共の反党四氏のつるし上げの写真誌売新聞紙に見る

生々し新聞の絵に中国の野蠻無秩序見られ痛まし
学校は休校権力闘争に明けては暮る、中国の民

野獸にひとし六億の民うごめて果なき
中国見守る外なし

紅衛兵を思はず日本のデモ学生政治家ありて騒がしきかな

南北の又東西の壁なくし世界を一つになすよしもがな

三反百姓三反百姓の我等には兼業により日々の安けし

かざられし上地にしあれば工場に上方に仕事あるが嬉しき

明治より大正昭和と生き来たる六十五年のあはれなつかし

○ いわき 青山新太郎
幼らと駆け足しては急ぐなり冬の夕の山の湯の道

寒月がわが石段に落したる影を踏みつゝ、

元且の雨をさぶしみ日のみ旗三日の空の碧き上ぐる

正月の水光りつゝ流れゆくかたへに立てり昨年のかゝしは

齡三千年を経しという十二畳敷の大楠に参りて

九大学院 行武 潔
参り路の空うすぐもり山々の真白き姿間近に見ゆる

神さびて鞍がことき根をふまへ天にそびゆる猛き大楠
そより立つくすの真中はうつろにて上見あぐれば天の仰がる

大楠の中に入りてともどもにみ鈴み歌をさゝげまつりぬ

一月七日太宰府天満宮に「鬼すべ」の神事を見に行く 福岡 小柳陽太郎

しつまれる夜空のもとを鬼すべの祭見かゝとて妻らと来つ

声高く鬼ちや／＼とよほひつゝ、随ふりかざし人らつどへり

人みなの見守る中に天を焦がす大松明の坂をはせくる

広庭は松明の火燃えさかり鬼やらふべき時の迫りぬ

被殿のめぐりせましと積まれたる松葉藁くづ燃えはじめたる

たちまちに燃えあがるのはほ燻手らは大団扇にてあふぎやますも

あふられし炎たけりて殿内は煙うづまきたゞならぬかな

たちこめし煙の中を鬼警固は樋とりもちてなだれ入りにき

飯屋なる殿の板壁つき／＼に樋もてくだく音のはげしき

鬼警固と燻手狂はしく入り乱れ祭のにははたけなはにして

よみの国の軍やらひしいぎなきの古事いまにつきこしといふ

古へのでぶりさながら今の世につきこしならひおもはざらめや

燃えくるふ炎はいまし殿をめぐり夜空こがしつ神代ながらに

渦をまく煙夜空に立ちこめて狂へることし祭のにはは

合宿教室女子班々員の交流機関誌

「きずな」について

一昨年の城島高原合宿教室で、特に岡深先生御夫妻に班室までお運びいたゞいて、親しくお話を伺ふ機会をもった女子班の学生達は言ひしれない感銘を分ちあ

つた。岡先生のいはれる「日本の情緒」の回復が、強く望まれるいま、殊に女性としての人生的感激をいづれも、殊に女性

け、励ましあつて支えとするために、その後も通信による交流を願つて機関誌が発行され、「きずな」と名前がついた。

城島合宿が終つて十月に第一号が発行された。先輩の跡を受けて、昨年の雲仙合宿教室の女子班二十名の間で、「きずな」が継続発行され今年の一月で十六号を数へる。

機関誌といっても、雑用紙の騰写刷りを二つに折つてホツキスで止めて、八頁から十六頁位のもの。一人か二人宛の輪番制当番が編集し、ガリを切り、発送してゐる。一度だけコピー複写のものであつたが、どれもきれいな字でびっしり詰まつてゐる。昨年九月号以降の発行当番を紹介すると、九月勝山啓子さん(玉川大) 十月延近史子さん(長崎大医附看) 林しのぶさん(熊本女短) 十一月河

原倫子さん(早大) 小田村静代さん(学習院大) 十二月満本万里子さん(青山女短) 久木ゆり子さん(東女大) 一月梅田咲子さん(東女大) 山田苑枝さん(共立女大)。通信文と和歌がその内容で、歌の勉強は尚一層奨められてゆかねばならないと思ふが、いかにもものび／＼と感想が語られていて心暖まるものがある。單

なる近視報告で終はらないでほしい、といふ意見もあつて、きびしい中にも女性らしい求道の意欲が「きずな」を継続させる力になつてゐると思はれる。

河原倫子さんの「母なき世」を流んで「いふ所感の寄稿から極く一部を抜いて紹介する。

「近頃私は々人ととのめぐり会いという事をしば／＼考えます。この々人のめぐり会いがどれ程私にとっては大きな考えとなり、勇気づけてくれるものであるかゞ感じられてゐるのですが、以前にもましてこの々人ととのめぐり会いを大切にしたいと思ふ私の心の中には、やはり々感恩々という要素が大部分を占めてゐる気がしてなりません。……

家庭は単に女の人にとっては逃避の場所にすぎないという考えを持ち続け、そういう人達が将来母親となるのであれば、これは重大な問題だと思ふのです。母によつて子が々感恩々を学びとる家庭に於ては、家庭は女の人にとつて逃避する所という様ない、かげんな考えはなく、母と子の間にもつ／＼積極的な心の交流があるのだと思ひます。……」

編集後記 前号所載の天皇御歌について夜久さんの感想をいたゞいた。熟読すべき和歌研究の文章と思はれる。ことばを味はふ心と天皇をお慕ひする情は、二つものではない▼なほ、前号に発表した学生委員に、岸本弘君(富山大三) 伊藤三樹夫君(岡山大理三)を加へて六名とし、本年の活動の中心となつてもらふことになつた。

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←東京←全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

本有への回帰

幡掛 正 浩

作家の尾崎一雄に「虫のいろいろ」といふ小品がある。これは文芸家協会が日本の戦後文芸を外国に紹介する目的で、数篇か十数篇かを選んで翻訳した中にも入ってゐたと思ふが、仲々面白い。その中ののみの話を御紹介しよう。

の・みをとらへてガラス瓶の中に入れると、の・みは外に飛び出さうとして、透明なガラスの壁に向つて幾度か無駄な努力を試みる。かくすること数日にしての・みはすっかり跳躍の自信を失つてしまふ。曲芸師はこの時のみをガラスの外にとり出し、種々の芸をしこむのださうである。

この話をした作者が、馬鹿なのみ奴、もう一度だけ跳躍の試みをやってみればいいのと言ふと、相手の青年が「の・みとしては、もうその最後の一本もやりましたのでしよう」といふ一話はこれだけである。

私がこの話を読んだのは、もうかなり

前だが、私はその時、何とも言ひ知れぬあはれを覚えたことを記憶してゐる。私の連想はあまりにも奇矯かも知れぬが、私はこのあはれにも馬鹿気たのみに於て、実は愛する祖国日本の占領下の姿を思ひ浮かべてゐた。

然し、同じくば、今少しく適切なる比喩を以て祖国の現状を嘆きたい。私は占領期間中の日本を、猿廻しに捕らへられた猿に譬へたいと思ふ。捕はれた限り、猿廻しは芸を仕込み、猿はこれを習はざるを得ぬ。所謂好むと好まざるにかゝらずである。しかるに、この猿をつないでゐる縄が昭和二十七年四月二十八日にパツパツ切られた。成程猿廻しは、なた豆煙管をくわへ、こわい顔をして猿をならめてゐる。然し猿は兎にも角にも自由を得たのである。独立を得たのである。

大方の観衆は、恐らく猿はその本性のまま、山に逃げ帰るなり、柿の木によち

登るなりするであらうと考へてゐたであらう。しかるに、何と猿は猿廻しの顔色を盗み見しながら、あはれ、捕はれの期間に仕込まれた、いとも滑稽なる、かの踊りを熱心に踊りつゞけたではないか。自己の意志に於て！自由意志に於て！

世上、逆コースといふ言葉が使はれ、復古調といふことが言はれる。私は、猿は山に帰るのが本来であると考へるから、大体に於て逆コース復古調には大賛成な方である。逆コース復古調反対の者は、猿廻しに一杯飲まれた連中か、或はこの阿呆猿自身であらうと考へてゐるが故である。

然し私は、単純な逆コース讚美論者でもないつもりである。私が内心心配してゐることは、山に帰る猿が、「自分が捕らへられた原因は何であつたか」といふことについての、どれ位真面目な反省をすることかといふこと、これである。

もしもこのことに対する深い反省を欠いならば、恐らくは猿は二度、三度捕らへられる愚を繰返すに違ひあるまい。多分、この次の猿廻しは、切れる様な縄ではつながらないであらう。

然らば、猿が捕らへられた原因は何であらうか。私の見るところでは猿の愚かさ、今少し具体的に言へば、その「人真似」が猿をして捕はれの運命におとし入れたと思ふのである。

てゐることを知つた彼等は、一応武力に訴へてこれを退治することを断念し、その代り少々単純な頭の持ち主であるこの猿を相手に、籠絡の手段を講じ始めたのである。即ち彼等は先づ、彼等の所有する文明の利器が如何に重宝なものであるかをみせびらかしにかゝつたのである。三百年間孤島の山中にとじこもつてゐた猿共は、うは

べきらびやかなるこの西人の所有物に忽ちコロリと参つてしまつた。猿の「ころ」はこの時に西人の捕らへるところとなつて了つたのである。

然し乍ら、明治の猿は、流石に祖先伝来の猿魂を失ひつゝすことはなかつた。

彼等はその得たところのものを以て、日清、日露の面役を戦ひ、西人によつて荒廃せしめられた東洋の畑に、まさに斃死せんとしつゝ、あつた野兎、野豚の群に向つて「目覚めよ、亜細亜」とすら叫んだのである。

ところが、明治の御代が大正へ、やがて昭和へと移つてくると、売つたもの(魂)と買つたもの(西歐文明)との均衡

目次

本有への回帰	幡掛 正浩	(1)
経験の束ねる力	小柳陽 太郎	(3)
馬子の問題	桑原 暁一	(4)
スタンレー・ウオッシュパンの「乃木」を読んで	古川 修	(5)
毛路線は一つの錠	浜田収二郎	(6)
本会の運営を担う若手グループの集い	上村和男	(8)

がようやく破れ、その弊害が目につきたした。然かも一度この主従関係が逆転しだすと、その後は驚地に進むものである。

西欧文明に己が魂を売りつくした者は、先づ最初「我々は到底彼等にはかなはぬ」といふ劣等意識にとらはれる。次にこの劣等意識を告白発表することにより、自分だけは少くともそこで言ふ「我々」の例外であるといふ優越感に替上する。やがてこの僥上意識は自分も西人と同じ様にやれる、同じにやらなければならぬといふ錯覚を惹き起すにいたる。ここまで来ると猿は必然に猿人の「人真似」を開始するわけである。沐猴にして冠せる猿人に対しては、さきに驚嘆と畏敬の眼を以て敬仰した野兎、野豚と雖も憤激の情を以て反噬せざるを得ない。かくの如くして猿の悲劇は始まったのである。言志録の著者は、「己を喪へばここに物を喪ふ、物を喪へばここに人を喪ふ」と申してをるが、あはれなる東海の猿は、その初め、己が魂を売ったばかりに、その身体と財宝の一切を挙げて、つひに敵手に捕はるゝ悲運を喫したのである。

翻つて私は此処で、東海の猿がかくも惑乱せしめられた西欧の「文明」について、いさゝか検討してみたいと考へる。結論的に言ふならば、それは人間の歴史は進歩するものであり、その進歩は人類に幸福の量の増大を約束するといふ考へ方を内実とするものである。

この様な楽夭観が、如何にして近世ヨーロッパに生れたかといふことには、色

々と事情があつて、それを綴つてゐるときりがないので省略させて貰ふが、このような西欧人の考へ方を、哲学といふかたちで集中的に表現してをるものが、有名なヘーゲルである。

ヘーゲルによると、人間の歴史は自由を実現して進歩するものである。最初東洋には一人の人が自由であつた。ギリシヤでは多数が自由であつた。而して近世ヨーロッパに於てはじめて万人が自由になつたといふのである。随分得手勝手な考方であつて、これが歴史的事実をふまへたものでなく、ヘーゲルその人の頭の中の理念の自己開展にすぎないことは、その後ランケその他の史家によつて徹底的に反証されつゝしてをるのであるが、大切なことは、亜細亜と西欧とが古代と近代といふかたちで、実は原始と文明の両極に配置されてをること、及びその原始より文明への開展が、人類の幸福を無限に増量するといふ考方と緊密な結合を示してをることである。ここに近代的「近代的」といふことは西歐的といふ意味でもあるが「考へ方」の一つの典型をみる事が出来る。

東京大学の哲学助教をしてゐる原佑といふ人が「近代から現代へ―世界的考察」といふ本を書いてをる。この人もヘーゲルを以て近代的精神の学問的完成者となし、その崩壊の跡から近代と區別させるべき現代が発生する所以を説いてをる。だがこの人の図式論は失礼だがお粗末なほどに単純である。この人は神(中世)、人間(近代)、世界(現代)といふ存在論的図式ですべてを説かうとして

るが、しかも世界の内美とするものが社会であるが故に、現代に於て世界觀的中心視点はマルクシズムではあるまいか、といふが如き空想論理を、もつたいらしくのべたてゝゐるところは、そつけない言へば、冗談のやうなものである。

私はこの人たちが違つて、ヘーゲル哲学完成の中に、亜細亜を搾取して繁栄した十八世紀ヨーロッパのおこりを、そしてその崩壊の影に、自覚せる亜細亜の反抗と、まさに没落せんとするものゝ悲哀の声を聞くものである。即ち未開なる亜細亜は進歩せる西歐にとつて手段たるべきことが西歐人にとつては公然と合理化され、地球表面の四分の三が彼等の植民地として神の義認下に搾取されてきた。当時のヨーロッパの人口と彼等の前になげ出された亜細亜の資源とを対比すると、文明の進歩(幸福の増大)が殆んど無限であると考へられたことも故なしとしない。こゝに西歐進歩主義の楽夭観を裏つける歴史の根柢をみる事が出来る。

然るに日露戦争の勝利は、亜細亜十億の善隣に深大なる影響を与へた。西はエジプトより東は支那に及ぶ、所謂「アジア不安」の火は実にこの不思議なる勝利によつて点ぜられたと言つても過言ではない。それは実に二百年に亘つて磨げられた亜細亜有色の民がその桎梏を断つて再び昔日の榮光と自由とを回復せんとうごめくあへきに外ならなかつたのである。トルコを除く全亜細亜の協力によつて戦はれた第一次世界大戦は、その終結と共に、この運動を一個雄渾なる史的シ

ンフォニーたりしめた。而してこの大戦の落し子たりしロシア革命と共に、傲れる西歐人の楽夭観を一挙に根柢よりゆすぶることになつたのである。私どもはニールチェやシェンクラーや、カイザリーンク等の名前を次々に想起し、西歐人の心をくまどるニヒリズムが如何なる歴史的背景をもつか把握しなければならぬ。

原子爆弾の出現を以て終結した第二次大戦後の今日、文明の進歩を単純な楽夭観を以て信ずるものは、もはや世界に一人も居ないと言つて過言ではあるまい。かつて十七世紀のヨーロッパ人が信じた進歩の觀念は、今や宇宙時代と言はれる今日と雖も、憂はしき一つの夢となりかけてをる。不安が哲学の主要概念となり、危機が神学をゆきさぶつてゐる。実存と言ひ、虚無といふ。頹廢と没落と魔業と靈媒と、一言にして覆へば反生命の一切が地に満ちてうごめいてゐる。かつて日本島の猿を驚かせた西の「文明」はその華かさに於てであつたが、今日この高の猿を魅惑してをるものは、その同じき「文明」のベンシズムである。一度魅惑をかうつた脳髓の習性とは言へ、何となさけないことではないか。

然し乍ら、我々は亜細亜は「文明」を進歩の意識に於て考へる以外に、すぐれた今一つの智慧をもつてはゐらなかつたであらうか。

ネール前印度首相に「娘インディアへの手紙」といふ著書がある。この書は偉大な印度解放の戦士たる彼が、英国官憲の圧迫を受け、物心ついて以来の大半を送つた獄中生活の中、特に一九三一年か

ら三三年のその間に、當時家に残した
輪十四才の愛娘インテラに宛て、送った
龐大な書簡集より成る世界史である。即
ち彼は日常寸暇なき身を却って獄中生活
に「隔離と閑暇」を楽しみ、暖い父親の
愛情に被護する余裕としてこれ迄になか
た、たゞ一人の幼い娘を、当時の印度
否アジアを席捲する欧米思想の悪弊から
救はんと、始めてアジアの優越を語り、
アジアの解放を説き、彼女に歴史教育を
始めたのが期せずしてこの書を成したの
である。

ところで我々は、本書中、一九三一年
一月一四日の条に、次の如き印象的な文
字を見出すのである。

「私は習慣通り、今日も星のきらめく
中に起きた。あたりはまだ暗く、大気
の中に漂ふ一抹の冷気が、僅かに夜明
の近いことを物語ってゐた。そして座
つて本を読んでみると、暁の静寂を破
つて遠くから騒々しい物音が聞えてき
た。私は今日はマーガ・メーラ祭(註)
の最初の日のサンクラウンティである
ことを思ひ出した。そしてこれは数千
人の巡礼が朝の水浴をするために、ガ
ンジス河とジャムナ河が落合つて、眼
に見えない、サラスヴァティ神も又来
り会すると言はれる合流点に向つて隊
を組んで行進する物音であることを知
つた。巡礼等は歩きながら唄を歌ひ、
時々母なるガンガ河を「ガンジスに榮
光あれ」と讃へ、その声はナイニ刑務
所の壁を越えて私にも聞えた。私はち
つと聞き入り乍ら、この夥しい巡礼の

群を河へ引きつけ、彼等をして、暫し
その貧しさと悲惨な生活を忘れしめる
信仰の力の偉大さを考へた。そして又
数百年來、数千年來、来る年も又来る
年も、巡礼者が「三つの河の合流点」
目指して進むことを考へた。人の世は
移り変り、国又興亡の跡を辿る時古き
伝統のみは絶える事なく、祖先代々そ
の前に額づくのである。伝統はその中
に多くのいゝものを持つてゐる。」

註 マーガはヒンズー教で第十月を指す。その最初の日
をサンクラウンティ、即ち大朝が新しい月に入るこ
とに大いに祝ひ、神を礼拝するのである。

思へ、祖国の祭壇に己が碧血を油脂と
捧げ、今因はれの身を幽暗の獄裡に座
し、明日をも知らぬ露の命に同胞のきん
ざめきの声をきく志士の悲憤を！先駆
者と己が名を呼ばんほどの者の踏むべ
き、峻しい運命の姿を髣髴としてそこ
に思ひ浮かべることができるところはないか。

だが私の言はんとするところは別にあ
る。「人の世は移り変り、国又興亡の跡
を辿るとき、絶ゆることなく生き続ける
古き伝統」―数百年來、数千年來、来る
年も来る年も―繰り返されるこの民衆の
愁ひを知らぬきんざめきの本質は何であ
るかといふことこれである。進歩主義者
として自他に許すネールは、「彼等をして
暫しその貧しさと悲惨な生活を忘れ
しめる信仰の力」と言つてゐる。果して
然るか、素より私もそこにネールの言ふ
ところのものを認めぬといふのではない。
然し乍ら、数千年を経てなほ今に不
断に伝習されたるこの行事の中には、
合理的な知性のとゞかぬ、何か深い生活

の秘密があり、よるこびがあり、智慧が
ありはしまいか。

雪舟や山楽の絵は、進歩することによ
つてセザンヌやゴッホのそれになると考
へることが出来るであらうか。あまりに
も馬鹿氣た比喩である。然し、人は嘗て
マジメにそれを信じた。否、今でさへそ
れを信じてゐる多くの人がゐる。こうい
ひ替へたらどうであらうか。マーガ・メ
ーラの祭は原始的で、クリスト教のミサ
は文化的だ。どこにさきの比喩と異なる
ところがあらう。しかも人は後の場合は
これを心ひそかにうけがらつてゐるのであ
る。「進歩」の觀念は、実に驚くべき深
い影響を我々の心に印してをるのであ
る。

然し今や私は、ようやく我々のものを
提出すべき段階に達したやうに思ひなが
ら、この紙数を失はねばならない。残念
ではあるが、今回はこれを以てこの稿を
とちることとする。(神宮司庁教学司)

経験を束ねる力

―竹山道雄「樅の木と
薔薇」から―

小柳陽太郎

「戦争の体験は私にとっては何れも戦争
の体験ではありませんでした。それは人
生の体験でした。生きていくということ

が、これを契機として、そのかくれてい
たきまぐれの相を露呈したのです。」

竹山道雄氏の「樅の木と薔薇」という
一文はさ、やかな短篇ながら、第二次世
界大戦が生んだ最も美しい戦争文学の一
つだと思ふ。とはいつてもその美しさが
強烈に僕の目に映つたのはほんの最近の
ことである。この小冊子が僕の本棚に並
んでからもう数年になる。たしかに一度
読んだ記憶はあるが、なぜか印象はかす
かだった。ところが最近読むとものなしに
頁を繰っていたとき、最初にかゝげた部
分がはげしく僕の目を射たのである。目
を洗われるような気持で全文をよみ直
し、今さらのようにこの短篇が戦争文学
の白眉であると確信するようになった。

無数の人が戦争を経験し、身近かに迫
る危機のさなかで、たゞならぬ日々を送
つた。僕もまだ二十才前後の若い日々
を、死を目前に見ながら息づまるように
生きてきた。そこに「まかしたはなかつた
し、僕は僕なりに精一杯だった。しかし
いま「戦争体験は私にとって人生体験で
した」という、このさりげない言葉にほ
じまる筆者の心の重さには、何か虚をつ
かれるようなおもひがあった。誰しもが
同じことを経験する。しかしいまでも
ないことだが内容には驚くほどの違いが
あるのだ。それは「経験を束ねる力」と
でもいふのか、ともあれ達人にとつて
は、経験は、その人の人生の構図の中に
他にどうはめこみようもないほどのだし
かさで、その所を得るようである。例え
ば本書の一節、

「かつて一日に数回も空襲がくりかえ

されたとき、私はその合間に、洞窟を出て、畠を耕して、種子を蒔きました。そしてサイレンが鳴るとまた待避をして、胸をとどろかしながら、雲のあいだから地上に炸裂するもののねをききました。あれは戦争中の生活でしたが、実はかくあるのが人生そのものの姿だと思えます。これが今の実感です。」

戦争が終ったあとの筆者の感慨であるが、戦争によってはじめて露呈された人生の真相を、心の奥深くに味わっている、作者の静かな息づかいが聞きとれるような文章である。そこには、波立つ水面をくぐって、深く深く沈んでいく一つの石が、かすかに海底にふれたときのような、静かな手応えがある。水面から海底までの長い距離が、作者の経験に深い意味を与えることが出来た、そのような気がしてならない。

経験を支え、それに重味を与える力、

馬子の問題

— 聖徳太子研究覚書 —

桑原 暁 一

聖徳太子に対する不信の最大の理由は、崇峻天皇弑逆の元兇・蘇我馬子を太子が見遁しただけでなく、重く用いてかわらなかつた、と云うことにある。そしてこの不信の理由をくつがえすに足る正当の弁明を、今日までぼくはきいていない。しかしこの弁明はきわめて簡単であると云うことに、ちかごろぼくは気づいた。

それが人生にとっぴかにかかけがえのないものであるか、——たとえ最近、週刊朝日の特集した「一枚の写真をめぐる日本人の反応」というのがあった。例の紅衛兵たちに手足を押しえられた中国要人の悲惨な写真についての各界の感想を集めたものだが、それを読みながらしみじみ思った。あの写真が意味するものは、単なる中共批判という角度からだけでは了解出来まい。そこには長い——歴史の、あまりにもいたましい凝縮がある。あの一枚の写真のもつ重さは、まさに「人生の体験」として、僕らの心の奥深いところでもたしかめる以外にはないのだ、騒然とざわめく時事批評のなかで、歴史の足音に静かに耳をかたむけ、それを他ならぬ自らの人生の中に位置づけていく力を養わなければ、僕は毎日の新聞を見る資格さえないのかもしれない。

(修猷館高校教諭)

それは、天皇暗殺の元兇が馬子であることをすっぱぬいたのは日本書紀であつて、太子のよく御存知なことだつたのではないか、と云うことである。暗殺の下手人東漢直駒を己が手にかけて殺したのは、彼を手先に使つた馬子自身である。むしろ書紀は、馬子が天皇弑逆の罪を責めて駒を殺した、とは云つていない。しかし「真相」を知らなければ死人

に口なしで、犯人をわが手で断罪した、と云う錦のみ旗は馬子のものになるわけである。これが「事実」として通用していたのではないか。書紀の記事はこの「事実」を「真相」の形に引き直して、書いたものにほかなるまい。書紀は云う——

是の日、東漢直駒、蘇我嬪河上娘を偷み隠して妻と為す。(河上嬪は蘇我宿弥の女なり)馬子宿禰、爰に河上娘が駒の為に偷まれたるを知らずして、死にきと謂へり。駒の嬪を奸せる事顕はれて、大臣の為に殺されぬ。

嬪というのは妃とか夫人とかいふのとかわりはあるまい。河上娘は崇峻天皇の嬪であつたと思われる。だから「奸す」と云われているのであろう。「死にきと謂へり」とはどういうことか。わが女が行方知れずなつたので、入水したかどうか、とにかく天皇の御後を追うて死んだものと思つて、と云うことであろうか。ところが、実は駒がこつそりかこつていた。すなわちこれを奸したことがばれて馬子に殺された、と云う。腑に落ちぬことである。もしも河上娘を駒がわがものにしたらと云うならば、それは盗んだのではなくして、馬子が取引きの具に供したのにはかなるまい。こゝで大事なことは馬子がわが手で駒を殺した、ということだけで、殺す口実は何であつてもよいのである。これによって、彼は、おのれの罪を隠しおおせると云う以上に犯人処断の美名をわが上に冠らせることができた、と考えられる。

蘇我入鹿がやられたとき、その父エミシを援けて抗戦を企てたのは漢直等であつた。これで見ると、漢直一族は依然として蘇我氏に忠勤をはげんでいたらしい。もし、馬子が駒を使って自己の野望を遂げておきながら、口実を設けてその駒をわが手にかけた、と云うことがわかつていたならば、これはちよつと受けとりにくいことである。大罪を犯せるものゆえ、泣いてこれを斬つた。しかし一族に累は及ばさぬ、とか云うことで、かえつて恩を売つたのかもしれない。これはよくの言い過ぎ、考え不足であらうか。

一方において——馬子はわが罪の重大性をさして意識していなかつたのではなからうか、また馬子にかざらず一般に、いわゆる「大逆」の觀念は乏しかったのではないか。この点を考慮しないで太子を責めるのは見当ちがいであらう。——このような考えもあるかもしれない。しかしこれはまちがいである。そうであるならば、歸化人の駒を使つて暗殺せしめるという手段は執らなかつたであらうし、その駒を殺すこともなかつたであらう。そんなまねはしないで、あからさまに天皇に立ち向かつたにちがいない。この事件のすぐ前に、彼は、物部守屋と好かつた穴穗部皇子を攻め殺している。その時には「炊屋姫尊を奉めて」、その名の下に兵を起して皇子を攻めさせた。用明天皇崩御のあとには皇后の炊屋姫尊が最高權威であつた。その權威の下に事を成したのである。しかしいまの場合には天皇以上の權威は存在しないのであるから天皇弑逆の正当性を保障するものほどこにも求

められない。そのことをよく知っていたればこそ、彼は隠密の手段を用いて事を成し、しかもその秘密の洩れるのを惧れて駒の口を永久にとぎしたのであった。また事件の直後、駆使を筑紫の將軍に遣して、「内乱に依りて、外事を怠るなかれ」と戒めているのも、この事件の重大性を裏書きするものである。

以上、馬子のごとで太子に不信を向けることはいわれない旨をあきらかにしただ、しかし少くとも太子もまた他の人々とともに馬子にあざむかれた、ということとはまぬがれないか。いや、太子はあざむか

スタンレー・ウォッシュバン

の「乃木」を読んで

九州大学法学部三年 古川 修
私は、中学二年の時、偉人の日弁論大会で、乃木大将について話しをした。その時は乃木大将の何に感銘しておったのかはつきり思い出せないが、はつきりしていることは、母から乃木大将について話しを聞いたことに感動して、その時の内容をしゃべったのである。

私の中学には、養の木が植えてあった。それは、乃木大将とステッセル会員の時の養の木に由来しているということを見から聞いたことがあった。

昨年の暮、乃木大将を主人公とした「まごころ」というテレビ番組があった。テレビの内容には、どうも納得しがたい不満があったが、この番組によって十年前の乃木大将に対する感動を思い出し

た。
小林秀雄の「歴史と文学」という作品

むかれなかったかも知れない。しかし馬子のなせるわざ、というたしかな証拠は何もない。してみればあざむかれなかったとしても、知らぬ顔をしているよりほかにないわけである。馬子は太子の在世中は借りてきた猫のようにおとなしかった。あるいは、猫をかぶっていたと云ってもよい。その様子が書紀に見てとれる。それは太子の馬子をごらんになる目

が、また馬子が太子を見る目がどのようなものであったかを暗示している。

！四一、九月八日記
（都立千歳高校教諭）

の中に、乃木大将について述べているところがある。スタンレー・ウォッシュバンの「乃木」と、芥川竜之介の「將軍」という作品のいかに違うかというところを述べてある。世人の考えている英雄乃木というものに對し、人間乃木を描いて抗議したいという気持の芥川竜之介の作品とまるで違っている点は、乃木將軍という異常な精神力を持った人間が演じねばならなかった異常な悲劇というものを洞察し、この洞察の上になつてすべての事柄を見ているという点です。という。

ウォッシュバンという人は、日露戦争当

時の、『シカゴ・ニュース』の従軍記者で、旅順攻囲戦の陣中で、乃木將軍に接し、この非凡な人間に深く動かされ、乃木將軍自刃の報が、アメリカに達した時、この事件が、アメリカの国民の間で実にわけのわからぬ事件とされているのを見て、憤り、一気呵成に、この本を書き上げたということである。

この本は絶版になつているので、小柳先生からお借りして読んだ。記者らしい誇張のない淡々とした文章であるが、読んでいくうちに、作者の乃木將軍に対する深い感動が自づから迫つてきて、胸打たれるものがある。最後の章「斯くの如き人」で作者の気持は最高潮に達する。この本の庄巻である。

「……先帝の靈輦、いよ／＼東京を発して、御陵の地へ向はんとする時、号砲によつて普ねく其の時刻を報ずることゝなつて来た。將軍は謹んで自邸に退き、第一発の号砲と共に、泰然として割腹した。そして古い武士の家の系図の最後の人となつた將軍の靈は、登遐し給うた天皇の神靈に随つて、永久に現世を去つてしまつた。吾人遠く英米に在るものよりみれば、這般の行爲は聞いてだに戦慄すべきことであらう。しかし乃木大将を知つて、聊か將軍の理想を解し、先帝に對する崇拜の赤心を解するものよりみれば、何等怪しむべきことに非ず、ほとんど自然の進退とするほかはない。」
（目黒真澄訳一二五頁）

乃木將軍の辞世

うつし世を神さりまし、大君のみあとしたひて我はゆくなり

を静かに味つてみれば、おのづからウォッシュバンの述べているところが理解できる。歌は読んで意を知るものではない。歌は味うものである。乃木將軍の心に、心のうちで従つてみようとする心となしには、辞世を理解することはできない。辞世を味うことのできない者に、どうして乃木將軍を語ることができようか。乃

木將軍を語ることができなくては、日露戦争を語ることもむづかしいであらう。こゝに、現在の歴史解釈の鍵がある。

「斯くの如き理想を抱いた斯くの如き人物が、今日の此の時代に現存したことは吾人西洋の生活に育てられたもの、愕かすにはおられないことである。偉大な人傑の生れ出て、位人臣を極めたり、大望を達したりすることはある。しかし其の影には、何処となく自己中心思想の潜在することが多い。偉大なる愛国者の興起することもある。しかし満身唯だ忠誠、個人的存在を没却して、純理想主義に立脚する点に於て、近世誰あつて此の日本の古武士乃木大将に匹儔することが出来よう。古代希臘の勃興期に於ては、かうした人傑の輩出したこともある。しかしそれは全く環境を異にした時代の人々であつたのだ。」（一二七頁）

冷やかな目で歴史を分析していくこと

の流行している今日、日本の一將軍に深い信頼と尊敬を以て、その人となりを記している本のあることは尊い。絶版になつてい

ることが非常に残念である。

「国民同胞」六三号の合宿詠草

を讀む いわき 青山新太郎

神国を無窮に護る若きらの心のむすび尊くもあるか

むすびたる心の灯し数増してみ国い照らす時近みかも

日本の未来を信ず眉あげてわれにま向ふ若きら見れば

とことはの若きもわれに甦へるこの若きらの心にふれて

毛路線は一つの掟

＝果てしない反修正主義闘争＝

浜 田 収 二 郎

一、毛沢東は何を考えているか

一九六五年末から六六年春にかけて上海、北京に起こった「文芸整風」をきっかけに、六六年八月の「紅衛兵」登場による中国全土をおおう異常な騒ぎは依然続いている。中共の党と国家の運命にかかわるこれら一連の激動は、周恩来首相によれば、文化大革命（六六年四月発言）であり、一般に紅衛兵運動とも、革命造反団の奪権闘争ともいえよう。また毛沢東主席、林彪国防相らによる粛清ともいえる。毛・林派が接収したとみられる都市は、北京、上海、ハルビン、太原、西安、武漢、福州、広州など。大部分の各省については、奪権闘争が一進一退、辺境の新疆ウイグル自治区、チベット自治区、内モンゴル自治区では反毛勢力が強いという情勢が続いた。

文化大革命という怪物について、断片的に記事や見聞が伝えられ、その全貌をとらえたい事情のなかで、いったい毛沢東は何を考えているのかと推察するのも意味があるかと思う。ここ数年来の諸情勢から、米ソに対抗して自主独立の道を歩むほかにないとの信念は、毛沢東の心の奥に不動のものとなっていたと思う。中国七億の民族の統一と団結をもう一度練り直す必要に迫られてきた。毛沢東も今年は七十三歳。後継者を考え

なければならぬ。彼は一九三〇年代の延安精神に立ち返って国内を総点検し、

革命精神の復興と民族の団結を図ることを深く期したのではない。スターリン死後のソ連の歩いた「修正主義」の道を顧みながら、生きていく間に中共の体制を作り上げておきたい。目の黒いうちに毛路線の正しさと威力を実証しておかなくてはならない。そして次のリーダーは今年五十九歳の林彪だ。

二、修正主義との闘争

中ソ関係の変化が、毛沢東に重大な衝撃を与えた。現在、中ソ国境で相互に兵力を増強していることは隠れもない事実である。両国大使館の機能も全く失われている状態だ。十七年前、スターリンと毛沢東が結んだ軍事同盟条約はホゴとなった。中ソ対立の根は深い、対立の根本問題はソ連は修正主義だということである。毛沢東は五七年の中共全国宣伝工作会議の講話で

『形而上学的な観点からマルクス主義をみて、それを硬直したものとするのが教条主義である。マルクス主義の普遍的真理を否定するのが修正主義である。修正主義はブルジョア思想の一種である。修正主義は社会主義と資本主義の区別を抹殺し、プロレタリア独裁とブルジョア独裁の区別を抹殺する。』

彼らが主張するところは、実際には社会主義路線ではなくて、資本主義路線である。現情勢下では、教条主義に比べて修正主義の方が有害である。われわれの現在の思想戦線における一つの重要な任務は、修正主義に対する批判を展開しなければならぬことである。（毛沢東語録）

と述べ、修正主義は資本主義路線と決めた。彼がソ連をこのような修正主義者とみ、敵として警戒しはじめたのは、かなり前から考えられるが、六三年ごろからフルシチョフの米ソ平和共存政策に対して露骨に反発した。フルシチョフはにくむべき修正主義者であり、エセ共産主義者である。最近では昨年八月、四年ぶりに開かれた第十一回中央委総会で「帝国主義に反対するには、どうしても現代修正主義に反対しなければならぬ」と決定している。これはソ連にとっては「修正主義者との闘争」という口実で、砲火はことごとくソ連に集中され、その粉砕が帝国主義との闘争の前提条件であると公言されている（ソ連共産党機関紙プラウダ、六六年十一月）となり、決定的対立に及んでいる。プラウダはさらに今年一月「毛とそのシンパの反ソ政策」と題し

『毛沢東の政策は、中国人民のソ連に對する敵意をあおりたてるだけである。両国関係を完全決裂に導こうとしている。中国指導部が内外政策で数多くの誤りと失敗を繰り返して孤立に追い込まれたため、ソ連にホコ先を向けることにより、自らの直面する困難か

ら国民の目をそらすためだ』と述べ、さらに毛崇拝は偶像崇拜の段階まで進み、激烈な権力闘争が展開されていると指摘し、これは毛一派の強きよりも弱さを現わしていると断じている。毛沢東弾劾である。毛沢東にとってはかねての念願どおり、内外の修正主義者のことごとくねじ伏せねばならぬのだ。

三、紅衛兵登場

五九年、当時の国防相彭徳懐は人民公社の行き過ぎを批判したため、たちまち失脚した。反革命・修正路線をたどるものと断定されたのである。しかし中国の統治はその広大な地域、七億の民族、歴史、経済建設など、どの面からみても容易でないことは推測にたかない。現実の社会制度、生活の中に新旧思想が入り乱れ、統治・行政・運営、管理の実際面では、急進と現実がからみ合い、混乱は避けられないことであった。この処理にあたって実際派ともいえるべきいわゆる「実権派」が生まれる。一方対外的には、対ソ問題に直面したのをはじめ、A会議や対インドネシア政策の失敗、ベトナム戦争の推移と、つぎつぎと難問をかかえ、まさにのっぴきならない非常事態を迎えつつあった。中共主流派幹部にとって国内の現状がいかにもなまぬるく、修正主義者の横行、革命精神の沈滞として浮き彫りにされたとしても不思議ではない。

毛沢東らは覚悟を新たに、生死存亡をかけて革命百年の大計に取り組んだ。このさい真にたよりになるものは何かと自問したのではない。それは統制あ

る解放軍であり、青少年層であつたのであろう。とくに解放軍は六〇年ごろから毛思想教育が徹底的に反復され、その機関紙「解放軍報」に掲載した毛主席の著述、言論が「毛沢東語録」として六四年に出版された。六五年には、解放軍内の階級制度が廃止された。一方、六四年八月、人民日報は革命の後継者養成をよびかけ「真のマルクス・レーニン主義の実行者を育てることは、毛主席が提起した革命の成否にかかわる重要課題である」と述べている。このことから紅衛兵が準備されてきたとみてよい。紅衛兵は労農出身者や革命幹部の子弟を中核として組織された。大学、高校、中学内では、急進派の学生が中心となっている。小学生の場合は今後「紅小兵」を組織するとい

四、毛、上海で指揮

毛沢東が文化大革命をどのように仕組んでいったか真相は明らかでないが、大筋は次のようなことではなからうか。いわゆる実権派の代表として、劉少奇国家主席、鄧小平党総書記があとどりがたい力を持っている。北京市長の彭真も、簡単にたたくとすことはできない。北京市内では、毛主席絶対安泰とはいいたくないし、策は極秘のうちに練らなければならぬ。毛主席は六五年末から約半年、行くえがわからなかった。外国使節団との会合にも顔を見せなかった。このころ毛沢東本説が世界に流れたのである。しかし重体説でも死亡したのでもなく、六六年五月、上海のアルパニア首相との会見でいきなり姿を現わした。毛沢東は上海で文化大革命の指揮をとつた

いわれるのはこのためである。彭真北京市長が反党、反革命として解任されたのは六六年六月で八月には劉少奇の格下げが明らかとなった。これに先立ち、六六年四月から解放軍報は、反党、反革命分子に対する階級闘争をよびかけはじめている。人民日報編集長が五月に免職となり、代わりに解放軍報副編集長が乗り込んだ。

五、破旧

これでも毛主席が北京に腰をすえる下地が整った。第十回中央委総会が北京で開かれたのは六六年の八月である。紅衛兵の大集会が開かれたのも八月である。この総会で「資本主義の道をゆく実権派打倒」を正式に決定している。このころ文化革命小組が発足し、毛夫人の江青女史が第一組長となった。革命造反・奪権運動の行動隊は紅衛兵である。そのふるまひは内外にショックを与えた。彭真市長らの首に札をぶらさげて引き回した。その四旧(旧思想、旧習慣、旧伝統、旧道德)の破壊よりは徹底したもので、一般住民も恐れをなしたと伝えられたのである。しかし中共幹部にとっては革命の実習であり、毛路線のあとを継ぐ新しい世代の誕生を期していることとを織り、同時に実権派打倒の有力な決め手であつたろう。

これに対し革命小組側は「三國志や紅樓夢が家にあつてもかまわない。毛沢東は紅樓夢は今後も出版すべきだと語つた。これにはよい序文をつける必要がある。青年に封建的支配階級の家庭を見せ、支配階級を理解させればよい」と述べ、さらに「ある種の本は一般の青年大衆に不必要なものだ。仕事に役立つ本とは何か。劉少奇は孔子、孟子を読んだ教養をつかむことを提唱したが、これは役人ふう、旦那ふうがあの振る舞うためのものだ。われわれがあのような古いものを読まなくなったのは大きな解放だ。しかし少数の人はこれを読まねばならない。歴史を研究するために読み、批判するために読み、マルクス主義や科学を發展させるために読む」と指示している。論語や孟子などは仕事に役立つ。少数の人が読むのは批判のためだ」というわけである。なるほど物知りになるために読むとすれば、そのような一面も出てくるだろうし、教養の俗物はこの国でも強くいましめられているところだ。吉田松陰は講孟余話の冒頭に、経書を読む心構えを鋭く喝破している。それは、役人ふうになるためのものではない。これは無論のこと、批判するためのものでもない。これは明らかである。孔子、孟子のすぐれた体験と理想を汲み取らねばならないのである。「劉少奇が提唱した」と述べているのも奇異の感を受ける。旦那ふうになるための読書を提唱する劉少奇国家主席は、資本主義の道を進む者にとでもなるのである。革命小組のこのような指示は、カベ新聞が伝えたものであるが、これを読んだ紅衛兵は、旧破と打倒劉少奇へ向かつていよいよ突進することとなる。

紅衛兵は中共だけのものではあろうか。そうは思わない。わが国でも組合員紅衛兵、大学紅衛兵がかなりいると思う。彼らと百花齊放・百家争鳴の論議をたたかわしてみたい。

六、毛路線は控

中共における修正主義打倒のための奪権闘争は、反党、反革命の名において今後も続くであろう。いったい修正主義なるものは、人間本来の姿ではないのか。実人生は魂の成長の記録であり、日常の社会生活は不断の修正の道程であると思ふ。毛沢東はいう。

『われわれの最高綱領は、中国を共産主義社会にもつてゆくこととするものであり、これは確定的なものである。いささかも疑う余地のないものである。われわれのマルクス主義世界観が、この将来の限りなく輝く美しい最高の理想を明確に指し示している』(語録、四五年)『社会主義制度はついに資本主義制度に取って代わるものである。このことは、人びとがその意思によって変えることのできない客観的法則である』(同、五七年)

鮮かく美しい最高の理想、意志によって変えることのできない客観的法則——毛主席はこれを最後のよい所として、中国の直面する困難に対処し、その団結を守り通そうとする。団結を崩さぬために、第二、第三の文化大革命が展開されるであろう。権力闘争と粛清は、毛路線が続く限り避けがたい必然である。毛沢東の「輝く美しい最高の理想」——それは実は、何びとでも実証せず、また保証することができないものではないか。すなわち毛路線は、中国の一つの掟(おきて)に過ぎないのである。

(共同通信整理部長)

本会の運営を担う若手グループの集い

第一回国文研霧島合宿（昭和三十一年）以後、毎年夏、九州のいずれかの地で合宿教室が開かれて来て昨年の雲仙合宿で第十一回になった。過去十年の間に、その運営に直接携わってきた先輩会員の殆んどが四十才を超えてきたこの近年、毎年新らしく参加してくる学生との間に生じつつある年令的断層を埋められる若手グループの抬頭が、本会で、久しく望まれていた。その期待が、昨年の合宿教室の運営を若手グループ（国文研合宿教室参加経験者で社会人として活躍している青年会員＝通称若いOB）に委託するという劃期的な試みとなり、かなりの成果をおさめた。

合宿運営に携わった十五、六名の若いOBは、合宿教室が終るや、各自の反省した結果を整理して、今後の合宿運営のあり方を理事会に示し、また四十代会員と学生との中間に位置して、その断層を埋めるべき努力をなしつつある。そこには国文研の道統を継承しようとする意欲がうかがえるのである。今では若いOBの存在を無視して会の活動があり得ない程になってきた。

在京組が中心になって、全国各地に別れ住む若いOBに結集を呼びかける方途等が検討された際、何としても、若いOBだけの合宿をもち、全国にいる友らに呼びかける基盤を作るべきではないかとの強い要望があり、今回の葉山合宿をもつことになった。場所は、アサヒビールの坂東君の骨折により、同社の葉山寮で、一泊二日（二月十一日、十二日）の合宿が行なわれることになった。費用は、交通費等合宿に要した一切の費用を



人数制による均分負担とした。東京地方ではめずらしく大雪が降ったサラリーマンとしては惜しい明日からの連休日を厭わず、その日（十日）の勤めを終えた足で、東京五名、横浜三名、千葉、浜松、大阪、和歌山、各一名、計十二名が集った。彼らの中には、結婚して間もないもの、小さい子供がある者など、生活に、仕事に追われ、経済的にも、時間的にも余裕のある者は殆んどいない。正しく、寸暇を惜しんでの集いであった。その夜は、大学生生活や、合宿教室の憶いが、職場の中で、どう生かされていくのかについて、各自簡潔に意見を述べ合った。それぞれ現実生活とのギャップに苦悩しているようだった。要は、人と人とのつながりを求めて其々に生きようとする心構えが大切ではなからうかということになった。

この葉山合宿で印象深かったことは、国武君を中心とした黒上先生の「聖徳太子」の御本を輪読した際「篤く三宝を敬へ」というくだりで、三宝とは仏法僧なり仏は礼拝帰依の対象であり、法は礼拝の道を教える教典であり、僧はそれを実修する姿であると解釈が述べられると、礼拝云々となく、礼拝

とは、帰依とはと鋭い言葉が取り交された。各自が自分の生き方に照して意見を述べた中に、仏とは生き方にとって天皇であり、法とは永久生命の信であり、僧とは国民である、と述べた亀井君の促え方と、そして各々が合宿教室の憶いを実生活の中に生かしていた発言は全員之感銘したところであった。このようにして論議が行なわれてゆく中に、身も心も太りに惹きつけられて、三頁読むのに四時間もかかった。論議が終わった時は全員心身共に疲れていた。

お忙しい中にも拘らず、降る雪の中を小田村理事長が参加され、理事長を囲んでの合宿教室に関する討議は、その殆んどが、質疑応答の形でなされたものではあったが大変意義深いものだった。質疑の中に「情意情懐の錬磨を如何にして、現状分析の判断に反映させるか」とか「学生リーダーの指導方法について」等多くの問題が提示され、理事長が「今後共皆と一緒に考えて行こう」と云われた言葉を全員真剣な面持でうけとめていたことは、無意識のうちに、今後の合宿教室のあり方を自分の生活の一部として考えてゆくことである。最後に和歌を作り、書き留め、夏の阿蘇で会うことを誓って各々別れて行った。

参加者、上村和男 鹿大三三卒 千代田コンサルタント、坂東一男 長崎大三六卒 アサヒビール、三宅将之 岡大三七卒 岡山県探山高校教諭、七日照正 鹿大三七卒 山一証券、国武忠彦 早大三七卒 神奈川県翠嵐高校教諭、福田忠之 鹿大三八卒 神奈川県平沼高校教諭、野間口正三 鹿大三八卒 新技術開発事業団、福島宏之 早大三八卒 川崎鋼板下葉工場、沢部寿孫 長崎大三九卒 日商

本社、徳徳康之 滋賀大四〇卒 和歌山三井銀行、柴田佛輔 中大四〇卒 三菱石油、（山本伸治 水産大三九卒 キュービー）豊田は参加する予定であったが合宿の前々日突然眼を痛めて不参加、まもなく回復（上村和男記）

☆ 紹介 ☆

終戦の第三集 あ、八月十五日
思ひ出の第三集
本書はゆがめられた歴史が普遍化されつつある今日、何とかして終戦当時の事情をありのままに書きのこし真実を伝えようとして編まれたもの。第一集は昭和三十三年に、第二集は三十九年に出版され、本書第三集はその完結篇である。「敗戦によって分解された日本人の心」を人々の胸に呼び戻し、新しい民族の一体感をよみがえらせる大きな臍帯となることを確信する」とは編者の言であるが、本集は五十二の玉稿を収め、まことに読む者をしびれさせずには置かないものがある。A五版三四三頁。発行所北九州市八幡区竹下町五丁目倉光晴爾方 八幡師友会。頒布実費五〇〇円（非売品）

編集後記 漸く寒も解けて彼岸が近い。地方選挙も近づいて政界は忙しい、といふべきか知らないが政治の本当の動きは感じられない。我々の妄執や、唯物弁証法の迷家にとりつれた政治家の振舞は躍動的な自由な精神をもつ多くの国民にとって迷惑大敵以外のものではない。人の心を収めたる程の勇氣ある政治家のことが喝望される。私達は失われた日本の心を取り返すために、一筋の日本の道を明らかにするために、遠い過去も近い出来事もはめつくりしてゆかねばならぬ。本誌の記事はささやかではあるが、執筆者諸氏の一念をお受けとりいただけたら幸ひと思ふ。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州→東京→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南翠町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
年間 360円(送料共)

『つけ加へる』といふこと

なくなられた小泉信三先生は、その絶筆「国家の死亡」のなかで、日本民族の「A man over forty is responsible for his face」と森鷗外「人間生ながらのそのまの顔で死ぬのは恥ずべきことである」の言葉を引用されて、この言葉の意味は、生れながらの顔にその人自身がなにかをつけ加えなければならぬということでしょう。同じような意味において、われわれは、祖先から受継いだこの日本の国土を、ただそのまま次の世代に引渡すのは恥かしいことではないでしょうか。今日、われわれ日本人は、われわれの祖先がこの国土に残したものの、この国土につけ加えたいもの恩恵を受けております。それと同じように、われわれの次にくるところの子孫、またその次にくるところの子孫に対しては、われわれが祖先の恩恵に浴しているように、われわれも彼らに何ものかをつけ加えて伝えなければならぬのではないのでしょうか。青年に訴へてをられる。

先生は、青年達にそうした使命があることを語りかけ「何物かをつけ加へるには死せず」との立志を求めてをられるのであります。私は非常な感動でこの本を読んでをりましたが、ふと、一体「つけ加へる」といふことはどういふことなのかと考へさせられたのでした。そしてこの「つけ加へる」といふことには、極めて重要な問題を含んでゐることに思ひ至りました。

何か先人のやらなかつたことをするところが、ここでいふ「つけ加へる」ことではないことは明らかであります。例へば、奈良の大仏に、ミニスカートを穿かせたとしたら、誰だつて気遣ひと言ふでせう。しかしミニスカートだけをみれば、たしかに何物かをつけ加へたといふことになります。先生の申されることは決してさういふものではないといふことは、さういふことなものでせうか。

一昨年でしたか、日本でミロのビーナスが公開されましたが、私もその美しさに数刻足を釘付けにされた一人でした。

ところで、あの像には、両腕がありません。初めから無かつたのか、振り出す時に無くしたのか分らぬらしいですけれども、若し腕をつけ加へるとした場合、あの美しさを損ふことになり、つけ加へる人は、永遠に出ないやうに思へるのです。若しさうした人が現はれたとしまししたら、その人は、つけ加へらるべき、ミロのビーナスそれ自体について、作者と同じ美の境地に到らぬ限り、それと一体をなすつけ加へる仕事は出来ない筈であります。もつと言ふならば、その人は、作者の境地に到底至り得ないといふ深い嘆きを味はつて、つけ加へるといふ大それた企てを断念する人に相違ないのです。

つけ加へるといふことは、つけ加へらるべき物の本質を觸むことから始めなければならぬでせう。人を慰める場合、相手の悲しみが何かを識ることなしに、そしてその悲しみを自分の悲しみにして分けもつ思ひなしには、その人の悲しみを柔けてあげることが出来ないのと同じでせう。

そこで我々は、何物かをつけ加へようとする以上、我々の祖先が残してくれた遺産はどういふものなのか、そしてそのころは何かを汲みとることを先ずしなければなりません。しかしそれに一歩足を踏み入れた時、我々は、何物かをつけ加へようと思つてゐたことが如何に思ひあがらうと思つてゐるか、かうかうして、つけ加へようといふ意志は、いつの間にか沈潜して、先人の前に跪き教へを求めぬ境地に辿りつゝ、かうして先人の教へに跪く生活のなから、初めてつけ加へる何物かが、生れてくる

のではないだらうか。即ちつけ加へようといふことは立志として意味があるのであつて、つけ加へること自体は、つけ加へようといふ意識的行為からは生れず、何一つつけ加へることは出来ぬといふ先祖に対する畏敬の念と深い嘆きのなかからはじめて、後世の者がつけ加へたものとして認める何物かが生れてくるのではないだらうか。人或はそれは芸術、宗教等の精神文化について言ひるので、自然科学については否であると言ふかも知れません。

しかし、岡澤先生が言はれましたやうに、「自然とは何かといふことについては、何ら分つてゐない」のである、或はつけ加へたものもののが奈良の大仏にミニスカート

流の付加であるのかも知れないのです。その証拠に物質文明の発達を、人を真に幸せにしてゐると言ひうるでせうか。物豊かにして、心貧しき人間にわれわれ自身なりつつあることは一体何故でありませう。それは、つけ加へるべき客体(本体)それ自体の究明が足りないことからきてゐるのではないでせうか。

(電源開発本社 長内俊平)

目次

「つけ加へる」といふこと	長内俊平	(1)
三井甲斐と藤茂吉	廣瀬誠	(2)
大学における勉強とは何か	宝辺正久	(4)
自他を分かつた(聖徳太子研究覚書)	桑原暁一	(5)
三井甲斐著「今上天皇御歌解説」刊行のこと	亀井孝之	(5)
藤沢女子合宿の記録		(6)
春季太宰府合宿		(7)

三井甲之と齋藤茂吉

広 瀬 誠

齋藤茂吉はその著『柿本人麿』（昭和九）の中で、三井甲之の論文「柿本人麿の生活と作歌」（アカネ一ノ四明治四一）を紹介して、「三井氏一流の鋭敏な批評を以てしてゐる」と評して居る。

一般に、茂吉と甲之とは不倶戴天の論敵の如く考へられ、また事実その通りで、尾山篤二郎は『明治歌壇史』（昭和四）の中で「茂吉は武者ぶるひして甲之の歌を難じた」と書いて居る。茂吉は「僕は三井と喧嘩で、このあついのに額に青筋たてて……」（書簡 大正六）といひ、「僕は何時でもよい甲之と鉄拳を闘はず」（書簡 明治四二）と宣言し、実際、甲之の家へなぐりこみをかけたとか、かけようとしたとかいふ物騒な逸話さへ伝へられて居る位である。二人の論戦は近代歌壇論争史の数頁を飾り、茂吉全集の各巻に精彩を添へて居る。歌壇の檜舞台における両者の論戦が、遠い昔語りになつた昭和十五・六年にも、なほ甲之の歌評を見つけた茂吉は烈火の如く怒り、その激憤を手帳にぶちまけて居るのである。

そのような激憤の間柄であつたが、しかし茂吉は心の隅のどこかに甲之に敬服するところがあつたのであらう。多数の人聲文献解説中、茂吉が「氏一流の鋭敏

な批評」などと紹介したのは、他にあまり見当らぬのである。

茂吉の『短歌私鈔』（大正五）に対して甲之は「歌に関する著書で学術的見地から研究されたものは稀有であるから、齋藤茂吉氏の『短歌私鈔』の如きはこの点からよい著書のうちに数ふべきものである。氏の詩人的素質は序文の書きやうにも現はれて居る」と讃め、これにつづけて「氏の歌も批評も此の詩人的素質にもとづいて微妙に過ぎて主観的冥想に陥りやすいところに弱点を有する」（日本及日本人大正五年七月一日号 『和歌維新』収録）と批評して居るが、その『短歌私鈔』を見ると、「予は古事記に八尺入日命といふのがある処から思ひついで『八尺入日』と詠んで居る。三井甲之の氏も『八尺の入口』と使つて居る。」と、仲よく甲之を引合ひに出して居る。（その実例は茂吉の『赤光』中の「小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は入らむとす」「あぶらなす真夏のうみに落つる日の八尺の紅のゆらゆらに見ゆ」の二首、『三井甲之歌集』中の「磯に打つ波におどろきかへり見る山に傾ぶく八尺の入口」の一首であらう。）

土屋文明は『折り折りの人（二）』

（昭和四一）中の「三井甲之」の項で「齋藤茂吉などもこのころまで学校の講義のあいた時間があると、甲之の所へ行つて話したりしたらしい。アララギの間では一番後まで甲之に接したのはおれだと茂吉が話したことがある」と書いて居る。二人とも、所信は断乎として貫き、あのように激しく喧嘩はしながら、お互ひに認める点があつたのであらう。

アララギは喧嘩に強いといふ定評があるが、そのアララギの喧嘩大将が茂吉で、彼の論争ときたら、雷のやうな威力で相手を叩き伏せ、「訂正するだけの男らしさが君にあるのか」「余計なことを言はずに左の件について明答が出来るならしたまへ」と迫り、「そんな女々しい回避的な逃口上は、防禦力として何の役にも立たぬと思へ」ときめつけ、「こんな屁間なことはあるものか」「この語を持って帰らたまへ」（いづれも『童馬漫語』）などと、どこか愛嬌のある罵声を縦横に放つて居る。まことに痛烈な（共鳴する側からは痛快胸のすくやうな）文である。茂吉の面目が躍如として居る。

これに対して甲之の姿を彷彿させるのは、川出麻須美の「三井君と私」（新公論四号昭和二八）である。その中で、明治四一—四二年ごろ学生時代の甲之に初めて逢つた時の思ひ出が次のやうに書かれてゐる。

「三井君は羽織袴だった。黒々とした髪に色白く、霞んだ様なやさしい目付の人だった。一枚の半紙に毛筆で何か書いてあるのを両手に開いて高く掲げ持ち、

からだを右に傾けて、殆どその紙から目を放すことなく話された。如何にも恥かしさうに低い声で、非常に主観的な述べ方であつた。終つた時、多くの人はよく分らなかつたといふ表情をして居た。話のうちに晶子から明星派の歌風を非難して『感覚的できれいなうっとりさせる様な歌はつまらんと思ひます』と云ふ言葉があつたが、芳賀先生はそれを捉へ『ほくはきれいでうっとりさせる様なのがよいと思ふが』と笑ひながら云はれ、それに対して三井君は自説を説明されたが、その鋭い文章とは反対に、かすかなほそ／＼とした物の言ひ振りに先生始め多数の人々には一向理解出来なかつたかに見えた。私は三井君の気品と敏感と情熱に打たれ、その近くにいて居た椅子に移り話しかけた。私は興奮して声高になり、次第に椅子を近づけて顔と顔と接せん許りになつた。（以下略）」

「何をばかな。大茂吉が甲之なんかの影響を受けるもんか」といふであらう。実作品を示さう。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

これは大正二年の連作「死にたまふ母」の中の一で、茂吉の代表作ともいふべき歌。「遠田のかはづ天に聞ゆる」の句は、母親の死と一つになって恐しい力に迫ってくる。ところが甲之の作に

道おほふ細竹の葉そよぎ風起り遠田の蛙天に聞ゆる

といふのがある。明治三八年「故里にて山に木を採りに行きて作れる歌」の中の一歌である。茂吉の作には沈痛重厚のひびきがあるが、甲之の歌は未明の山道を登ってゆく時の作で、清爽の感がみなぎっている。茂吉の場合、夜明けも近づいて蛙の声はむしろ天に遠ざかってゆく感じである。茂吉は天をテンと読ませて居るが、甲之の方はアメであらう。細竹はシヌ（またはシノ）と読ませるつもりであらう。一首全体の調子に依じて結局「聞ゆる」は重々しく、「聞ゆる」は爽やかに結ばれて居る。しかしとにかくこの「遠田の蛙天に聞ゆる」といふ驚嘆すべき表現が、決して茂吉の独創でなく、甲之のものであったのである。甲之の作はアシビに発表され、当時、左千夫をして「小生を驚かしたるは三井甲之君・胡桃沢勘内君に候。その製作の手腕は偏に先進を押し申候。如此無造作に進歩するものにやと実に呆申候」（アシビ消息）と感嘆させた時期のもので、これを茂吉が

知らなかったわけではなく、無意識のうちにもせよ、このすぐれた表現から学び取ったのであらう。

あかときの妻戸を押せばとりよろふ竹群がへに星輝けり（甲之 明治38）

しもの夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥に朱の月みゆ（茂吉 明治40）

底浅き汀に見ゆる石の間に砂ゆるがして水の湧く見ゆ（甲之 明治38）

かがまりて見つつかなししみじみと水湧き居れば砂うごくかな（茂吉 明治42）

ここにも同様な影響のあとがうかがわれる。勿論、歌風は相違し、甲之の歌はよどみなく一直線にのみくだされて居るが、茂吉の歌はそこから、そのまゝ戸外の情景につながってゆくが、「戸を押すや」には場面の転換がある。「砂ゆるがして水の湧く見ゆ」はまさに目に見ゆるままであるが、茂吉は「水湧きをれば砂うごく」と因果関係に分析し、「しみじみ」とか「かがまりて見る」と

かかみ間延びのしたものを加へて居る。茂吉には力強く迫る作品もあるが、この歌の如き、けだるいやうな、悲しみに浸ったやうな、時にはおどけたやうな気分

の作も少なくない。その独特の気分を愛する人は、愛する人の自由であるが、

甲之は、源実朝の歌を論じて「湧き出づる泉の外の空気に触れたばかりのやうに新鮮の微妙の歌は、心の底から深くこもって居った命が湧いて来たのである」

「心の底からやむなき衝動によって発せられたる声は悲しき声である。強き思は

悲しき思ひである」（「源実朝の歌」ア

カネ三ノ四 明治四四）と述べて居る。そこに甲之の歌の理想の一端が示されて居る。甲之は『詩集消なば消ぬかに』（明治四〇）の序で「空漠なる感情の絵画的記載」と「冗漫なる技巧を弄して消閑の具たらしめむとする」ことを排し、「和歌入門」（アカネ四号 明治四一）の中

で「歌は自然に心に浮び、眼に映ずるまを詠ずべきで、趣向などいふ自覚的の作歌法はいかぬ」「美しいことを歌はうとするより先づ真実を歌はうとする方がよい。優美とか神秘とかいふことを心懸くると自然実地の感情を捨て、つまらぬ空想に耽つて、微細な感情を誇張するやうになる」と説いて居る。

「遠田の蛙天に聞ゆる」「砂ゆるがして水の湧く見ゆ」と歌った時期は、甲之の「自然の鑑賞と技巧の練磨の時代」（改造社版『現代短歌全集』三井甲之集 後記 甲之自記 昭和六）であつて、いまだ甲之の真面目は發揮されて居ないのであるが、たちどまつて冥想せず、技巧に溺れず、見たまま感じたままを、まっすぐに詠みくだす態度は終生一貫して居る。人あるいはこれを幼稚といふであらう。しかし、まっすぐに詠みくだしたとき、甲之の心の中に清新なそよ風が起つたのである。自然隨順はおのづから人生隨順・祖国隨順となつて、古神道の神ながらと、親鸞の他力易行道と、ゲーテの人生肯定とを、甲之は内心に渾融して味

はつたのである。甲之はこのさわやかな風を、広く日本人の心から心へ吹きわた

らせたのであらう。ひとたび、さわやかな風に乗托することを知った者に

わやかな風に乗托することを知った者に

とつて、芸術的技術をこらすことな

か、つまらぬことに見えて来たのであらう。甲之はかうして歌壇といふものから遠ざかるに至るに至つたのである。

甲之の縁で歌に志し、後に茂吉と並んでアララギの重鎮となつた土屋文明は「甲之のいいところは、何といつても、その豊かな抒情的詩人的天分であつたのではないかと思はれる。その稀なる天分が、当時としては稀なる好境遇による教養によつて十分に發揮される機会

のなかつたといふことは、私のやうに初めて歌を作ることを彼によつて導かれたもの一人としては、惜んでも惜みきれないやうに感ぜられるのである」（土屋文明著『伊藤左千夫』昭和三七）と甲之に對する強い愛惜の情を述べて居る。

茂吉はかう書いて居る。「三井甲之君を訪へる折り、詩歌特に短歌の如き抒情詩的のものを作らむとならば、長く少女ごろの様な心持で居らねばならぬと話されし事ありき。さもあんなか」（アララギ明治四二年一月号『童牛漫語』収録）。「さもあんなか」と茂吉は甲之に相槌を打つて居るのである。論敵となつて相槌を打ち、歌に對する態度も全く違つていつた二人であるが、初期における甲之の影響を考へずして茂吉を論ずることはできないであらう。近代短歌史上における甲之の位置と意義は、あらためて見直されなければならないのである。―昭和四二・三・二七稿―

（富山図書館勤務）

大学における勉強とは何か

宝 辺 正 久

数年前、国文研の合宿教室で木内信胤先生の御講義の一節に次の様なお話があった。終戦直後のころ大内兵衛氏らグループが、第一次大戦後のドイツと同じ様な破滅的インフレが日本にも来ると言っていた当時、私はあんな壊滅的なインフレは来ないと言った。占領政策が経済的壊滅をもたらした当時のドイツの出来事は、人類にとって重大な経験であった、通貨にしてもインフレーションにしても、世界の学者が実地に学んだところである。インフレーションの概念規定だけを基にして分析判断せず、経験を学んだこの常識があつて、かつ占領軍は日本人の生活を壊滅させるものではないといふ方針を確かめれば私の判断は出ている、といふ意味のお話であつたと思ふ。人類は経験をおろそかにしない、といふこと、平素は万遍なく物を見てゐていざといふ時に理論的判断を下すといふ先生のお話は、身近に学問の權威を実感させられていつ迄も感銘が残つてゐる。こんなお話を聞くと、学問は平素のものの方が大事で一朝一夕になるものでないといふことがよくわかる。同時に専門家でなくとも、社会科学のおもしろさ、恐ろしさが新鮮に感じられる。

さて、大学に入らうとしたり、入つてゐる学生達は大学は勉強するところと一応考へてゐるはずである。だが一体、大学で勉強しようといふのは何をであらうか。時代の隔りに随つて大学生気風に、違った面も同じ様な面も感じられる。社会的な来達の門として、こゝをくぐら

うとするのは、いつの時代でも大学入生の根強い動機であつた。動機は裏表をなすが、日本の国家、社会が要求する学問を修得することは同時に指導的地位に登ることでもあつた。明治開国以来の大学の伝統は、まさに日本が要求する西洋学術を貧るごとくに修得するところに由来したと思ふ。西洋の侵略のまゝに、閉鎖的な泰平の世を破つて独立の国風を興すためには国民一人一人の活力が要求された。わが国伝来の生存様式としての一君万民の政治体制にあらたまったことは、そのことを可能ならしめる大きい豊かな基礎作りであつたことは勿論である。かうして開国以来、西洋の思潮に促されながら、日本の実情から見てもうなづけるところである。こゝに新しい政治運営の学が求められ、西洋の力に抗する軍事を養ふ一切の技術が求められ、同時に日本民族が世界に向つて生活してゆくための産業貿易制度の発展とあり方が追求された。言葉は適当でないかも知れぬが、いはゞ日本民族としての生活技術の学が血眼でもつて求められたといへるだらう。

然しながら、もともと西洋の近代社会を開き、そこに生きる生活技術の学として発展していった西洋の社会科学を学んだのであるから、あちらに個々の宗教的社会的生存様式とのつながり、即ち個々の人間観が、こちらが生存し來つた個々の習俗と人間観を圧倒し去らうとし始めたのも勢ひであつた。それでも、維新を

成就し明治の国運を支へてきたヴァイタリティの存するうちは、即ち西洋の学を学ぶ切実の要求が生きてゐるうちは、個々の氣質を存してその中に学びとらうとする活潑な意志があつたと思へる。

第一次大戦後のヨーロッパの倦怠と革命の嵐は、そのまゝ日本の大学に吹き荒れる。未曾有の経済的活況と不況を経験する社会的激動の中で、民族的自覚運動が一方で起りながら全体としては西洋社会における生活技術を唯にまねる根無し草の様な状況ではなかつたらうか。中国における毎日排日の動きは、さうした日本民族の状況と無関係ではない。東亜の動乱はその頃に始つて昭和を迎へる。

大学に入るのは就職のためだ、と一般に今日の意味で言い出したのも、またスポーツと映画とセックスが大学生活に結びつけられて言はれたのも昭和に入つてからではなからうか。アジアの諸民族にとつても、まして日本にとつて輝かしい変革であつた明治維新とその後国民的諸経験を、全体として把握継承することなく、一般的な社会構造変革の諸概念に分析し、遂には歴史の必然性の名の下に国民文化の実態とは無縁の、全く新しい社会にとつて代らねばならぬとする、一種の社会実験(社会主義革命)が大学で宣伝されてくる。個々の文化は変革されるべき、恥づべき国風として蔑視される風潮が、主として大学より発し、一方日本は国際的緊張の嵐に突入した。

戦後大学の風潮はこの戦前の学風に直結してゐる。西洋近代の生産技術を学び、これを取り入れることの出来た日本民族の潜在能力は確かにすばらしいと思はれる。国民が大学に要求する役割は、明治開国の時もさうであつたし、今日もなほ、新しく開発される生産技術に即応

した民族の生存発展能力の担ひ手の養成であらう。

然しながらこゝに、日本自身の個性と氣質を——民族の歴史が始つて以來、数々の異質の文明に向つて大胆に自らを開放し、それらを苦闘のうちに自分達の体験の中に、自分達の通ひなれた道の中に化して踏み固め、かくして貫ぬいた一筋の道を国の歴史とふり仰ぎ、百年前に再び訪れた西洋文明との接吻の危機に、伝統的な一君万民の協力的体制に復りたその初心をわが研究者自らが失ひ、蔑視し否定したわが国大学の学風は重大な問題を残すのである。

既に義務教育課程に於て、歴史地理など基本的な具体的知識を教へる科目を廃して、社会科学といふ、社会開展の概念的な法則を教へようとする科目を新設した占領政策が、今日なほ踏襲されてゐる如きは、右の問題と同じく大學における哲学の欠如を示す顕著な一例である。最初に述べた木内先生のお話も、社会科学のまぢがった研究方法と対比して、それを指摘されたものであつた。

伝統的日本の心と文明の程度は、実験的な改革をあへて試みねばならぬほどに野蠻なものはない。建國して今日に至つた長い一筋の文化の戦ひを、更に戦ひ守るためにこそ、新しい国際的政治、産業の世界に立ち向ふのである。そのため大学の学風である。木内先生は万遍なく物を見てゐる、と御自分の研究方法を話された。概念規定から現実的判断を下すのではなく、平素の経験と知識から胸中に生れる一つの問題を、更に凡ゆる見聞と知識の中に浮べながら暖めてゆく。だから判断する時は、いろ／＼な見聞知識が経験化されてゐるから総合的な直観のはたらきで下す、こんなやり方はヨーロッパ

人と話してゐて、珍しがらるるやうだから私の東洋流なのでせうねとお話しななつたことも思ひ出される。
先生流の勉強が初学のものにいきなり出来るわけではない。たゞ平素の生きた姿勢が学問の内容を左右する。姿勢を正す

自他を分かつたず

聖徳太子研究覚書Ⅱ

維摩経(菩薩品)の経文に、「心淨く歡喜シテ賢聖ニ近ツクコトヲ起コス。惡人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス。」とあるについて、聖徳太子は、「心淨く歡喜シテ賢聖ニ近ツクコトヲ起コス」とは、即ち人をして心淨く和悦せしめ愚に近づけば即ち憂苦を生ず。惡人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス、とは、苦し能く自ら調伏すれば即ち三毒起らざるが故に、惡人をも憎まざるなり。」と注疏せられている。一見、経文を逸れた、無理な訓み方のようであるが、よくよく考えてみると、なるほどどうなづくほかはない深い訓みである。体誥でも云うべきか。――賢聖に近づく、と云うと、愚者とは手を切つて、自分だけ別の途を往く、と云うことになりかねない。それでは自他を分かつことになる。そのことは太子のことも戒められたことである。賢聖と愚者とは別々のものではない。おのれの愚を自覚せるものではない。賢聖である。われこそ賢聖なりと自任するほど愚かなことはない。したがって愚に近づく心がいたむ、と云うのは、その愚は他人事とは思われぬ、と云うことであり、彼我共に愚者である、との自覚に促されて、共に

こと自体が学問のうちだと思へる。学問にも眞實三通りがあるから、ほんとうの勉強をしようと思ふなら、ほんもの、學問にめぐりあはねばならぬ。志と勇氣をもつて「師」と「友」を求めねばならぬ。(下関・実業)

賢聖に近づく、と云うことでなければならぬ。経文の「歡喜シテ」を「和悦せしめ」と云いかえてあるのも、このよきな理解に基くものであろう。「歡喜シテ」は、自分ひとりのよろこびを表わすものであり、「和悦せしめ」は相手に向かう親しみの表情である。次に、経文の「惡人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス」とあるのは、自分は惡人ではなくして、他の惡人を調伏する、というように受けとられることをおそれ、「自ら心を調伏すれば云々」と訓まれるのである。自分ととも惡人であることにはかわりはない。ただ自分はそのことを自覚せるものにすぎない。飢えて盗みをはたらいた、少くともはたらかうとした覚えのあるものならば、そのような盗みをしたものを憎むわけにはいきまい。またそのような覚えのあるものにしてはじめて、彼我手を取りあつて惡の調伏に向かうことが出来る。このようにして太子はどこまでも「自他を分かつたず」と云う立場を離れない。
ばくは義疏の熱心な研究者ではない。ただ折にふれて、あちこち拾ひ読みして、その間に心にふけるものを見出してよろこんでいるにすぎない。さきごろぼくの目をとらえたものの一つをここに書きしるしたのである。
(四二・三・二〇記 桑原暁一)

三井甲之著「今上天皇御歌解説 附・万葉集論」刊行のことば

斑鳩会 亀井 孝之

一昨年の四月、小田村先生と夜久先生にご無理をお願ひして、「天皇と天皇制についての基本的思考」といふ書物を、私たちの手で出版する事が出来ました。この事によつて、私たちは次の事に気がつきました。

天皇が日本国民統合の象徴であるといふ事は皆知つてゐるが、天皇になられた御方がどのやうなお人柄であるのか、またどのやうな事をされてゐるのか、について私たちはほとんど何も知らず、いや、知らうとさへしてゐないといふ事です。天皇の公的生活は憲法によつて決められた範囲で固執はされてゐるわけですから、天皇の仕事については憲法を讀めば想像出来ますが、お人柄については、天皇御自身が書かれたものを讀むほかには、知る方法がありません。天皇御自身が書かれたものといへば、今上天皇には生物の御研究書もありますが、それは特別のことで、歴代の天皇は和歌をお残しになつてをられるのです。

はなれないといふことを感じるやうになりました。そして明治天皇や今上天皇が和歌を作られたことも、趣味などといふものとは全く違つた次元にあるといふことが、またお二方に限らず、歴代の天皇が和歌をお作りになられてゐるといふことが、大変な意味のあることだ、とわかつてきました。

和歌といふと、百人一首などが思ひ出されて、現在では趣味的なものと思はれがちです。といふより私自身が大学二年までさう考へてゐました。そして、自分には技巧を要するやうな文学的表現は苦手だから、和歌は自分には作れないと考へ、和歌などは文学的センスのある人が作ればよいのだと單純に考へてゐました。従つて、明治天皇や今上天皇が和歌を作られる事も興味でお作りになられてゐるものとふ思つてをりました。ところが、亜細亜大学在学中に夜久先生のお話を伺ふ機会が多くなるに従つて、和歌が單なる「月花のもてあそび」―趣味で

歴代天皇が和歌を作られる意義について、三井先生は本書の中で、「吉田松陰が『神州不滅』といつた『神州』とは實際には『天朝の御学風』であり、具体的には『和歌』である」と述べられてをります。が、私たちが日本の天皇について考へるとき、殊に歴代天皇の御人格について考へるときに、和歌を切りはなして考へる事は出来ないのではないかと思ひます。歴代天皇が和歌を作られると言つても、それがつまらない和歌であれば、大して意義もないといふ事になります。しかし、「天朝の御学風」と言はれるだけに、どれも素晴らしいものだと思ひます。殊に、私たちが直接、国の象徴と仰ぐ今上天皇の御歌は、明治天皇とならび称せられるほど素晴らしいと言はれてをります。そこで、私たちが自身は今上天皇の御歌を研究し、常に声に出して詠むと同時に、広く日本人の間で讀んで貰ひたいものであるといふ願ひから本書の刊行を思ひ立つた次第です。幸ひ三井先生御遺族のお許しを得ることが出来ましたことを感謝いたします。

☆

本書を発行した斑鳩会は、昭和三十三年に亜細亜大学を卒業した亀井氏ほか数名の会員を以て成り本書は一昨年

羨ましかり
いつの日か母となるらむ友も我もおみな
の道を正しく歩まむ

延近 更子

訪ぬれば竹やぶかけの離れ家ゆ笑い声高
く流れて来たり
くいらっしやい々と明るき声の友を見て
思はずわれも笑みかへしたり
生徒らと共に歩みます先輩の話を耳を傾
くる夜

山出 苑枝

電報といふ声聞けば病みませるふるさと
の母のすぐに思はる
上京の我のためにと正座さへかなはぬ母
は料理したまふ
心ではありがたきことと思へども感謝の
言葉素直にいず

皆できずなを読み 梅田 咲子
幾月も前に書きたる文なれど今読み返せ
ば思ひ新たなり
思ひこめて書かれし友のふる文の言葉一
つもおろそかならず
口頃より気心わかりし友なれど今いっそ
うのきづな強めむ

昭和四十二年春季

太宰府合宿

福岡市効外太宰府に於て一二年生を中
心とした合宿を開こうという案がでたの
は一月のことである。それは今後学生の
活動の中心となつてゆくべき一二年生の
諸君に、今まで中心となつてきた三年生
の諸君が、自分達の思い、経験を伝え、
今後共に勉強してゆく姿勢を整えたい、
現在の乱れた学園をなんとか我々の手で
改革してゆく機縁となるべき場を持ちた

いという念願であった。その計画運営に
は次の六名があつた。早大今林賢郁、
富山大岸本弘、京大福島義治、岡山大伊
藤三樹夫、九大古川修、慶大徳田浩士
参加者は全国十六大学三十名、大部分が
昨年夏の雲仙合宿教室参加経験者であつ
た。今林君は前記六人を代表し散文を草
した。「……俗にいう集合的な運動、対
決的结合だけが問題ではない。もつと本
質的な姿勢は何か。これは我々に課せら
れた緊急かつ最も重大な問題であつて瞬
時の遅滞も許されることなく我々に迫つ
ている。……学園の正常化のためには、
まず我々一人一人が意志ある人間に
統一された精神をもつ人間、そして人の
心がわかれた人間とならなければならな
い。それは我々自らの決意と修業によ
つて生れ出るものであり、この世に生き
る姿勢を整えるところから生れるもので
あろう。学問（とくにイデオロギー的な
ものを含めて）は、志ある者にとつての
み、生きざる学問としてうけ入れられて
然らざる者には、知識の集積と精神の分
裂とをもたらすのみではなからうか。も
しいいかげんな人生の生き方、まぢがっ
た学風、生命を寸断して平気でいるよう
なイデオロギー、そうしたものに直面し
た場合には、生ける生命がそれを黙視で
きないはずであり、そうした生き方にと
した生命を内にたたえるような人物にな
りたいと思う。そうしてこそ邪悪に相対
する時には、たとえ無力なわれ一人であ
ろうとも、千万人といえども相対しうる
気迫に満ちた人間でありうると思う。そ
こをお互にみがきあいたい。……」

大稻津君が指導に加わつた。
続いて古川君のオリエンテーションに
うつる。古川君は今までの自己の体験を
のべ、「参加三十数名全員と、目と目を
あわして自分の思いを真正面にぶつて
話しあうことができたという合宿にし
た。」と結んだ。
自己紹介は参加者全員が皆の前にて
短かく所信を述べた。
続いて班別討論。参加者全員を四つの
班に分け各班に班長として三年生が一人
ずつついた。
二日目、朝七時起床。国旗掲揚に続いて、
明治天皇御製拝誦を早大斎藤君が行
なつた。御製拝誦は、和歌を通して天皇
の御心を実感することであり、現代のあ
まりにも観念的な天皇論にあきたりない
我々の、厳粛な心となみである。この行
事は毎朝続けられた。
午前中は福島君の体験発表に続き、黒
上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本
文化創業」の全体輪読にうつる。この本
をあらかじめ精読してこくことは参加者
に課せられており、それを再び皆と一緒に
読む。一語一語に著者がどれだけの心
を傾けているか、それに注意して輪読す
るよう指導され、古典を読む時の姿勢、
古典を読むことの重要性をあらためて認
識したのであつた。
午後、古川君の和歌についての体験発
表。古川君は、和歌を作り始めてから現
在までの自作の和歌を印刷し、良い歌は
やはり、心が緊張している時でなければ
出来るものではないと、彼自身の経験か
ら語つた。
ひき続き第一回和歌相互批評。時には
辛辣な批評もで、又爆笑を誘う一コマも
あつた。
夜にいきり山田先生の講義にうつる。先

生は『論語』の「朝に道を聞けば夕に死
すとも可也。」の言葉を引用され、道を
聞くということは生命をかけても悔いぬ
ものであり、生命よりも尊いものがある
。それを求めてゆくことが学徒としての
使命ではなからうか、と強く訴えられた。
参加者全員は、否応なしに自分の生
きる根本姿勢を考えざるを得なくなり、
次の班別討論の時間も話題はその点に集
申した。いくらきれいごとを言つても友
の心には通じない。自分の心だけを直
接に訴えてこそ友の心に通じろのだ。
三日目午前中は徳田君の体験発表に続
き、聖徳太子の御本の班別輪読。午後は
折からの雨の中を、和歌創作の時間も兼
ねて、近くの石庭及び史跡を見学した。
夜に入りせめて少しの間だけでもと、
発熱をおして参加してきた今林君の体験
発表。今林君は散文を読みながら、今後
我々が学園にもどつていかにすべきか、
自分の体験も交えながら力強く語つた。
四日目午前中は班別討論に続いて第二
回和歌相互批評。午後は、稲津君と徳田
君が研究発表を行なつた。稲津君は、寺
田寅彦の文章を読みながら、物事を見き
わめるには、赤子のごとき無私無我の気
持ちを持ちねばならぬことを説いた。徳
田君は、昭和四十五年の安保改定期の問
題について述べ、我々がそれによってどう対処
していくべきか、それは将来の問題でな
く現在の問題である、と訴えた。
続いて小田村先生による一、二回の和
歌創作の総合批評。先生のきびしき中
にもユーモアのある的確な指摘の中に、一
同和歌を通して作者の心を感じとる姿勢
を学んだのであつた。
夜に入り小田村先生の講話。先生は現
在大変に誤解されている日本の天皇統治
の政治体制、それを支えてきた天皇に対

する国民の心について話され、「我々にとって一番大切なことは、志をたてるといふことであり、これは人が助ける方法はない。個人／＼で考えるべき問題である。」と我々の奮起をうながされた。

続いて少しばかりの酒を皆で酌み交しコンパを行なった。合宿最後の夜と思うせいか、語る言葉はつきることなく皆が寝静まったのは午前三時も過ぎた頃であつたらうか。

最終日、午前中一杯を連絡会議の時間にあてる。今後いかにして夏の合宿教室までの姿勢をととのえるか、どのようにすれば自分のまわりの友達に自分の思いを伝えていくことが出来るか等が中心議題であつた。ここで確認されたことは、自分がこの合宿で得た感激を決して自分のものだけにせず広くまわりの友人達に伝えていき、夏の合宿教室には出来るだけ多くの友達を連れて参加すること、又今後の全員の意志疎通と連絡のため、夏までに二回程連絡文集を作製すること等であつた。

続いて感想文執筆、感想発表。(感想文は後ほど整理されガリ刷の感想文集が発行された。次にあげる感想文はその一部である。) 昼食後閉会式を行い全日程を終了した。

おいそがしいなかをわざわざ参加して助言して下さい、小田村寅二郎先生、加藤敏治先生をはじめとする国文研の先生方に心から感謝したい。

(京大法四 井上慎一記)
太宰府合宿感想文抄
親友を得た

熊本教三 永井 幸男
全国各地の全然知らなかつた友と心から話しあい、親友を得たこと、これが第一の感激です。なにもかも心のはずむよ

うなうれしきで一杯です。先生の御講義もいつも忘れないようにしつかりと聞きやきつけて帰ります。このような立派なお話を聞き、たくさんの友を得たことを大きな自信としてこれからも一人でも多くの友によびかけ共に学んでいこうと思つた。一言これからは何もいへませんが、たゞ一言これから一生懸命頑張ることを約束します。

心に残つた一つの言葉

九大法二 小松 大輔
「他と共なる人生」これがこの合宿で知り、そしてその意味するところの重要性を学んだ語句である。私はこの言葉が哲学的の人生論を論述する意志は毛頭ない。ただこれを自分自身のすぐそばにある身近な言葉として事あるごとに熟考し、常に自分を省みてゆきたい。「他と共なる人生」それは単に人間が一人では生きていけないという消極的な内容を意味するばかりでなく、人間関係の間には切つてもきれない、いわば「絆」ともいへべきようなものがあり、その「絆」を一層強めてゆかねばならないということを示唆しているのではなからうか。

卑近な例では親子の間に流れている本能的な愛情である。また友人間にも友情という「絆」が流れている。しかし「他と共なる人生」は、唯頭の中で考え憶測してこんなものだと思つて自己判断してもその真価はあらわれないと思つ、日々の生活の中で、この言葉を体験的に納得することによつてはじめてその意味を理解出来るのではなからうか。

いちばん感激したこと
富山大工三 浜岸 悦生
僕は人生に於て今日ほど感激したこと

はありません。今日ほど幸福に感じたこともありません。小田村先生の最後のお話です。僕はここに我々日本人にとって根本的な真心を本当に心の底から感じとりました。僕は今日まで、キリスト教と日本人の真心のへだたりというか、矛盾というものにずいぶんと悩んできました。しかしそれはもう解決されました。自分はこのことでこういう訳で解決されました。自分はいまもって自分も解決されたことも出来ません。自分はただ心に感じました。ただそれだけしか言えません。最後の「螢の光」の歌を歌う途中でもううれしくて涙がでて仕方がありませんでした。今の自分にはこれだけしか書くことが出来ません。諸先生方、諸先輩に対して心から御礼を申しあげます。

新しい転機となるべき合宿

九大法二 志賀建一郎
この合宿が自分の新しい転機になるであろうことは確信できる。それだけの話を聞き、生活を送つたような気がする。どこが変つたかを具体的に述べると、今までの自分に底辺がなく頂点も見えずただ単にその間をボウフラのように行き来してはと気付いたのである。

自分は今まで祖先がかく生きようと思ひそしてそう生きてきた道を歩いていないばかりかそれを知らさえないではないか。自分はこれを恥だと思つ。しかし最も力強い言葉を最後にお聞きした。「日本人の中には昔の人達が生きていた、その魂だけは生きていて」と。だから「このまま進んでいったとしても百年、二百年後には日本文化は西洋文化を消化して大道ともいへべき日本の進む道をはつきり見出すことが出来ることを信じている。」と。さあ勇気を持って歩いてゆ

こう。自分の心の中に日本的情緒が生きていることを信じて。

涙がにじみでてくる経験

中央大法二 飯田 勝一
去年の雲仙合宿では、自分の意見を十分述べ、人の意見も十分聞いて自分なりに理解したつもりでした。しかしこの合宿に参加して痛感したことは人の意見、考えの理解の仕方が自分で考えていたほどには十分でないということであり、それは即ち自分の意見のそれにも言えることでした。しかし自分の意見の不十分さ、欠陥は、班の友達から又諸先生方から指摘され、自分でもいまままで自分の見ていなかった観点よりそれらの人々が見てをられるということに気づきハッともしました。教えられもした。こういうことはいろいろな条件もあつたらうが、自分はずいぶんながらも自分の心の中のものをすべてだしたということに存すると思つます。班の友人の、僕の出した問題に対する考え方を教えて下さるうとするその目つき、言葉つきには深く心をうたれ、目を閉じていると涙がにじみ出てくるような経験も初めてしましたし、同時に自分のいたらなさも感じました。

編集後記

経済的には高度の実力がありながら、その生きる姿勢と責任について何一つ世界に向つて宣言せず、理解されようとしぬ日本についての海外の批評はかたなり我々の耳にも入る。長内氏は、伝統と創造を体験的に論じて生きる姿勢を語つた。我々の先人はその道を生きたいのではなかつたか。三井甲之先生について偶々二つの記事が集つたが、先生は今日究められるべき先達の一人であられたと思ふ。

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州→東京→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階
 月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 年間 360円(送料共)

生と死

三月末、京都の化野(あだし野)の念仏寺を訪れる機会があり、その境内に並んだ約八千体の石仏の群に異様な衝撃を受けた。それは決して不愉快な印象ではなく、むしろ死によって連想される陰惨さからは遠いものであった。うららかな陽が照り、石仏の群の中かざんで写真を撮ってもらっている童女の姿などは、周囲の地蔵尊とよく調和して、あどけなく美しくさえあった。しかし、その累々と並んだ石仏は、まさしく、かつて墓石であったものだ。化野は京都の風葬の場所であった。徒然草で「化野の露、鳥部の烟」と並記されているその化野は、かつて累々と死屍がかさなり、鴉が無気味に肉をついばんでいた場所であった。それらの無縁仏をむらうために立てられた石仏は、永い風雨に朽ちもせず、土中に埋まったまゝ今日に至った。

鴨長明の方丈記には十二世紀末の大
 火、地震、旱天、洪水、飢饉などのすまじい記事がみえる。唯美的な王朝の生活が崩壊する寸前の地鳴りのような不吉なひびきが、その行間から立ちのぼって来る。「築地のつら、道のほとりに、飢ゑ死ぬるものたぐひ、数も知らず。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界にみち満みて、変りゆくかたちありさま目も当てられぬこと多かり」と、それは語っている。無数の石仏を目で追いがら私は無意識の中にそういう文章を思い浮かべていたのかも知れない。

芥川龍之介に「羅生門」という王朝物がある。蛇の切り身を干魚といつてあこぎにかせいでいた女。その女が疫病で死ぬと、その髪の毛をぬき、着物をはぎとる老婆。主家を追い出されて生きる道を失った下人は良心の一瞬の制止をふりすてて、その老婆の獲物を奪い着物を引きはいでしまう。人間はそれぞれのエゴイズムを持って生きており、他人のエゴイズムの存在がそのまゝ自己のエゴイズムの肯定となる。この世は無数のエゴとエ

ゴの戦いによって、はじめてバランスがとれるという思想なのだ。生物的生存が唯一最高の価値ならば、その思想は肯定できる。しかし、それは無限に修羅を生み出してゆくばかりだ。黒洞々たる夜の中へ消えて行った「下人の行方は、誰も知らない」という「羅生門」の結末は暗い。

方丈記は前記の飢饉の描写の次にこんな意味のことを書いている。離れられない夫婦の中では愛情のより深い方のものが必ず先立って死んで行く。その理由は、わが身は次にして、相手をあわれに思うので、まれまれ得た食い物も相手にゆづつてしまうからである。それ故、親子で暮しているものは「定まれる事にて――必ず親の方が先立つのである。母の命が尽きたのも知らないでいとけない子が、なおも乳房を吸っているものもある。こゝに私は生物的生存を越えた人間姿を見る。芥川の近代的知性がとらえられなかった人間の本当の姿がある。「必ず」という言葉には人間性への確信がこもっている。約半世紀程前、ロイド・ジョージが「英国をして生きるに価する国」にしようといつた言葉をうけて「日本をして死するに価する国」にするのが政治家の使命だといつたのは故河村幹雄博士であった。無償の献身というのは人間だけに能力なのである。

われわれは人間の生と人間の死について、もう一度たしかめる必要がある。生物にとって、死とは生の終点にある一つの必然的事件にすぎない。しかし、人間にとってそれは単なる事件ではない。死はそこでは一つの「意味」である。われわれだけが、他の生物と違って死を予測することができ、どういふものに生命を賭けるかによって、われわれは死をえらぶことも出来る。いかに生きるかということ、いかに死するかという事は別様ではあり得ない。死は生を中断させるといふよりも、むしろそれを完成させるものだといつてもよい。

戦後思想の弱さの根本には「国」と「死」の脱落がある。人間はいつまでも生きるものだという前提で一切が考えられている。従つて、そこには生命を賭ける対象がない。いのちをかけるというようなことは「ヒューマニズム」に反するからである。流行思想の「ヒューマニズム」とは所詮生物的生命の擁護であり謳歌であるにすぎない。生き甲斐のないかなしさが広がり、にせもの安直な思想が、正確に言えば思想めいたものが、青年の心を腐蝕して行く原因の一つがある。

方丈記は前記の飢饉の描写の次にこんな意味のことを書いている。離れられない夫婦の中では愛情のより深い方のものが必ず先立って死んで行く。その理由は、わが身は次にして、相手をあわれに思うので、まれまれ得た食い物も相手にゆづつてしまうからである。それ故、親子で暮しているものは「定まれる事にて――必ず親の方が先立つのである。母の命が尽きたのも知らないでいとけない子が、なおも乳房を吸っているものもある。こゝに私は生物的生存を越えた人間姿を見る。芥川の近代的知性がとらえられなかった人間の本当の姿がある。「必ず」という言葉には人間性への確信がこもっている。約半世紀程前、ロイド・ジョージが「英国をして生きるに価する国」にしようといつた言葉をうけて「日本をして死するに価する国」にするのが政治家の使命だといつたのは故河村幹雄博士であった。無償の献身というのは人間だけに能力なのである。

目次

生と死	山田彦彦	(1)
成熟な言葉	田加藤	(2)
短歌「日本憲法七不思議」	藤越二荒之純	(3)
落語「日所求」	藤越二荒之純	(4)
心の充実に	藤越二荒之純	(5)
生友	藤越二荒之純	(6)
学友	藤越二荒之純	(7)
	藤越二荒之純	(8)

(福岡県立若松高校教諭 山田彦彦)

未成熟な言葉

加藤善之

テレビドラマや小説、又は、われわれの日常生活の周辺に於て時々耳にする言葉に、人の同情は受けたくない、というのが、この、セリフと言った方がピッタリする言葉に、何んとかく賛意らしきものを感じながらも、どうも腑におかない思いをその都度、だいでしてしまうのだが、それがもう長い間続いていた。岡潔さんが小林秀雄さんとの対話の中で、「知性や意志は、感情を説得する力がない」と述べられたが、気持の上では丁度このようなものだったかも知れない。このような感情が心の底に潜んでいる時には、それを大切にしなければならぬと最近つくづく思う。

我々は、その時、こうだと適確に意志表明ができないばかりに、賛成しようもない結果になってしまう経験をよくするものだが、些事ならばいざ知らず大事に及んではおしなげなまゝい。そうした腑に落ちぬ事や言葉については忘れる事なく、折にふれ時に臨んで考える忍耐と努力を続けなければならない。然し乍ら一般的にはそうした努力を仲々しない、政策論議ならば判りやすいのか、よく論議の対象とされるのだが、どうも思想に關係してくると簡単に避けてしまう傾向が強いようである。斯る状態の続く限り精神文化の発展はおぼつかない。思想修練の第一義は、これぞと感じた問題やなんとなく納得しがたい事を忘れない事で

ある。長い間自らの人生の体験に照してあたためぬめぬめ続けることである。社会学や精神科学の実験はこれ以外にはない。考えてもはじまらぬ、得にはならぬと捨ててしまつたら、その直後から忽ち老化現象が開始される、若年寄とはこの謂であらう。

自主性とか心の独立という事は、こうした自己の感情を整理して、それを納得できる日々の努力そのものを指すのである。感情を意志や知性で制禦すべき時もあるが、そうした場合の感情は人に対する憎悪感や怒りに対する場合には限られるべきであり、人の心を傷けそうな己の感情に対する時にもみ使用すればよい。物事の道理、是非に関する限り、この己の感情、直感は大切に取扱うべきである。「大東亜戦争は侵略戦争であった」「特攻隊は犬死をした」等々、この種の言葉は戦後多く人の口に膾炙された。心の底では承服しかねる言葉ではあり乍らも、即座に抗弁する手だても心の余裕もなく、不本意乍らにも同調した人々は多かつた。そして結果的には魂の底まで打ちひしがれてしまったのである。沈黙し考えねべき年月は余りにも長く人々はそれに耐え得なかつた。然し乍ら、最近になると逆に、「日本はもっと日本人らしく日本よ」ということを主張すべきである」という類の説が色々と軽々しく口にされる。これにしても同じ事であり、浅はか

な迎合趣味には困つたものである。こうした言葉のうちで、最もひどい言葉は「人間尊重」という言葉である。ちなみに「人間尊重とはどういう事ですか」と人や自分に一言尋ねてみればよろしい。先ず答えられる人は殆んどあるまい。各自宿題とされるよ。なんとなく反対の余地のないきれいな言葉には警戒を要する。ムードや概念で誘うだけで中味が伴わぬからである。沈黙することや、何んの反応も示し得ない淋しさや苦痛に耐えられず、それを避けてしまうのは自ら墓穴を掘るに等しい。大げさに言えば世の中全体が道を誤つてしまふ。

小林秀雄さんが、今の世の中では沈黙が忘れられている。と言われたが、沈黙するというのは、心の底で温め考える事であり、苦痛に耐え浅慮を慎むことを指すのである。人の同情は受けたくない、というセリフにしても同じ事である。これは声にして出すべき言葉でなく沈黙して心の底に沈めておくべき言葉であると思う。この言葉は人の自主性や独立心を示す言葉として抗弁し難い響きをもっている。これについて、成程これは至言だという印象を誰しも強く感じているのであらうか。長い間私はそうは感じきれなかつた。十数年もたった今日になつてようやく少しは沈黙を破れる気持になつたのである。

それが腹立たしいのか、同情されたところでもなるものでもなく自ら解決するのだ、というのである。裏にそう思うなら自らその事を心に期して堂々と自らの人生に立ち向えばよい。口にすべきではない。口にすればならぬ、どうもありがたう、とこそ言うべきであらう。

次に、人には、人の事を思い心配する心がある。人を気の毒に思い、出来事なら何んとかしてあげたい気持はあるが、どうすることも出来ない事が多いのである。それが同情の態度となつて現われるのは自然の道理であらう。そうした人の気持を察する心が自分の心に欠けていて、その事に気付かぬが為のセリフとなつて人の心を面前で切り捨ててしまふ、そうした人の心を自らの心となし得ない事の方が余程恥辱であらう。

もう一つ、それは自分が一人で物事を解決できる位に思っている思いあがりである。人は一人では生きられないものではない事に對する心からの自覚の欠除がそこには感じられる。その自覚があれば、これ程の大見栄はさらされるものではない。まさか無条件に一人で生きられると思つているものは有りもすまいが、社会の一員であるというのではなくて、人間は二人以上の人のつきあひの關係の中にあつてはじめて人たりうるのであつて、自分は一人だと思つている間は人間の資格はないという自覚が大切なのである。「私は頑張ります」というのならよろしい。しかし、「私は一人で生きる」というのは嘘である。自分の力は全体の何萬分の一何十萬分の一にしか過ぎない

関係で生きていく、ということこそ肝に銘ずべきである。

自己の権利、自由、自我を強調するの
もよからう。自分が自我を主張し守らね
ば自ら埋没してしまう、誰が守ってくれ
るのであろう、結局、天は自ら助くるも
のを助けるのであるけれども、その事は
自らに自らの実力をつけるという意味で
あって、人の思いや、人の心を傷けた
り、人に迷惑をかけるような事に思いを
致さなくてよい、という事とは別の事だ
である。又同じ自己主張ではあっても、自
我を伸ばした利己のための主張もあれ
ば、自我を排した己を捨てた段階での主
張もあり、この両者は明確に区別を要す
る。こうした区別もなしに、己の利己に
近い自我の主張や人の心を傷けるよう
な、人とのつきあう心がけの欠けている
態度は慎むべきであろう。そうした上
で、自分の素直な意見、素直な思いを吐
露する純情を忘れることなく生きたいも
のである。

人の世の中は個人が先にあつて出来て
いるのではなく、当初から、個人では生
きてゆけない世の中に生れついているの
である。それを覚悟すべきである。何も
好きで生れたのではない、生れさせられ
たのである、自分の責任ではない、だか
ら世の中の方が自分が生きてゆけるよう
にすべき義務がある。親がそうすべきで
ある、という自分を中心とした考え方が
ある。然し乍ら世の中がそうした個人の
面倒のすべてをみる筈がない、だから自
分は自分のやりたい事をやりたいように
するのだ、人の同情など受けたくはな

い、となるのかも知れない。然し乍ら、
この事は必ずしも逆しき生活力を意味し
ない。こうした考え方が充満すれば、世
の中は斗争の修羅場と化してしまう。そ
うでなくして、人に迷惑をかけないよ
うに、その意味で、自分の事は自分で始
末をつける、という気持をもつ事の方が
大切なことであり、共なる生を営む人間
同志の在り方としての自主性ある態度と
云えよう。

情けは人の為ならず、という言葉が
あるが、この言葉は、人間関係が孤立し
ていない二人以上の関係である。然し乍
ら、人の同情は受けない、という言葉は
人間関係を断ち切り、個と個を断絶する
作用を持っている。前者はこうした個と
個が断絶してない人間関係であつて、
その上で独立の精神と自主性を育成しよ
うとする共同生活の知恵が生んだ言葉で
あろうけれども、後者の場合は、むしろ
当初から人間関係を断絶したものと解釈
した上での自主性を自ら表わす意志であ
らう。従つてこの精神は個人主義社会に
於ては美德かもしれない。適者生存、弱
肉強食の世界ならばこの態度で勝ち抜く
外に生きる道はないかもしれない、そ
うした世界での生活原理としては結構な処
世観でもあろう。人から同情を受けると
いうことは、敗者の列に並べられた存在
である事を他に認めさせた事になるから
であり、それには耐れられぬ恥ずかしさ
を感じるからであらう。従つて斯る世界
ならば美德としての価値もあるかも知れ
ない。然し乍ら、日本人は元来こうした生
活原理を好まない世界を形成し行んで

た筈である。そのような個人と個人の相
廻の社会はむしろ低級なものと考えてい
たし、又事実、それは文化の程度として
も次元は低いであらう。そうした低き
中であるからこそこの言葉は美德として
の値打ちがあるのである。こうした言葉
を誇らしく使う事が、自らは勿論、自
らの周辺の文化の水準を下げる働きをする
ものである事を我々は知つておくべきで
ある。とするならば断る言葉に価値を認
めている今の世の中の在り方にも大いに
問題があるとみねばなるまい。それが民
主主義に於ける自主性を示す言葉である
とするならば猶更一考する必要がある。

即ち民主主義の中には、共同生活をす
べき人間の心構えの在り方として極めて
未成熟な思考が潜んでいることになるか
らである。この「点」だけからしても、民主
主義、民主的という言葉にとれ程価値を
二 月 十 一 日 青山新太郎
民族の春を呼ばむと声あげて建国記念
日祝がざらめやも
草莽にみ国の誓め言祝がむひたぶるの
祈りかなしきろかも
大君を仰ぎまつる夢を見てとく醒め
にけり建国記念日
悦びの日を迎へたる悦びを眼醒めては
おもふ二月十一日
いはき野に稀に零る雪今日の日の浄め
の雪と二日零りけり
甕れる建国記念日悦ばむ友らが息吹間
近く聞ゆ

認めるべきか疑問である。私は民主的に
やりたいと思う、とか、民主主義を守
り、人間尊重の政治をやります、とかい
う言葉の裏面には、人間同士がつきあ
う在り方の点について未解決、未整理、未
成熟の内容が他にも沢山あるに違いない
まい。そうした事を理解しないままに、
その言葉だけを軽々しく口にするのはよ
ろしくない事である。それを言葉にする
方も、その言葉ならばそれとなく受け入
れる方も、共に問題がある。日本人は徹
底しないという一例であらうか。こう
考えてくると、以上のような点につい
ても本来もつとつと沈黙し考え続け
るべきであらう。好きでなつたとはい
え今の政治家は衰れた存在である、自
らの心の中で未整理な言葉を駆使して、即
ち、自らの思想そのものが未成熟な状態
のまゝで日夜種々の決定をしなければな

哭に泣きてなき師のきみにも告げまつ
らむ建国記念日今日よみがへる
十あまり九年ぶりに声あげてみ国の誓
め言祝がまつる
あな醜め皇国おもはぬたぶれらがアカ
ハタ振りて今日をけがすか
まつろはぬアカハクの徒ら必ずや皇國
の風に言向けむいざ
いわけなく涙を流るつひにして今日迎
へたる建国記念日
肇國のよき日を天も言祝ぐといはき同
原雪に輝く
小さなるもの、眼に凝きつけと日の丸
の旗翻へし行く(自動車パレード)

らない。ちつとも日本人の大半が同じ未成熟な段階であるから、それでも通用するであろう。ヒラミッドの底辺がつかまらなければ頂点つまりマニラの事は已むを得まい、恥しき限りである。一人の立派な人物が出来るといふ背後には無数の傑物が存在した上での事であろう。という事は未成熟な言葉が未成熟なまゝに通用し

落語「日本国憲法七不思議」

ており、その事に関心が示されない国民的精神状況にも関係がある。そうした世の中では心が鍛われない、心の鍛錬されないところから傑物の輩出す道理がないからである。未成熟な言葉に気がつけよう、まずそこから出発する事だ、即ち沈黙することから始めることだ。
(山陽電気軌道宇部営業所長)

名 越 二 荒 之 助

国民同胞てえ会は、皆さん勉強家の方々のお集りで、むつかしいお話が続くそうでございます。こゝらでお前出て肩のこらないお笑いを申しあげると、宝辺さんの方から頼まれてな、出向きましたような次第で……

大も少くば棒にあたるという言葉がございます。平素余り勉強しません私が、今年には憲法施行二十周年にあたりますのでヒョロヒョロと憲法というものの中に足を踏み込んでみました。ところが驚きましたでござい。これは大変なことだと思ふようになりました。読んでゆけばあつちこつと棒にあたるんですな。三本や四本どころではない、一事が万事という言葉もございませうが、とうとう全部にぶちあたってしまったして、一席申しあげることになりました。

民主国か君主国か

憲法の前文を読んでみます。文章が暖味と言うんでしょうか、よほどぼろり返さないと意味が掴めません。翻訳文といふものは読みずらいもんですな。前文の

中に「こゝに主権が国民に存することを宣言し」とか「国政の権威は国民に由来し」とか厳密かに謳ってあります。なるほど日本は民主国なのかと思つて象徴であり、日本国民統合の象徴と、象徴を二度も使つて強調しておられます。二条では皇位は世襲だと言つておられる。三条から八条までは、天皇に元首の機能を認めている。しかし元首とはっきり書いてある訳ではない。元首を規定してない憲法だからおほそのない人間みたいで意味が悪いんですな。それじゃ日本は民主国なのか、君主国なのか。政体がはっきりしませんでせう。

今度都知事になった美濃部さんの敵である達吉氏は、天皇機関説を唱えた有名な憲法学者でしたが、氏は「新憲法下にあつても、わが国は君主制の国家であつて、共和国ではない(新憲法逐条解説)」と説いています。そのほか各種年鑑や百科事典にも、イギリス、オランダ、スエーデン、ノールウェー、ベルギー、タイ等と共に日本を君主制の国に入れている。外国人が見たらたしかに君主制なんでしょうな。しかし日本人の中には「立憲民主国」と言う人もあつて、共和制と言う人もあつて、学校で教えている教科書を見て見ますと、日本国憲法の三大特長の筆頭に「主権在民」をあげています。第一条にも、天皇の地位は「主権の存する国民の総意に基づく」と書いてあるんですから、民主国と言っても正しいでしょうな。しかし憲法全体を括弧した言い方は思えない。だつたら「民主的君主国」あるいは「君主の民主国」と言つたらいいの。しかしそれじゃ政体ははっきりせず何のことやらわからない。人間で言つたら中性人間、国家で言えば中性国家みたいなもんですな。

国語的検討

憲法を読んでいけば、文章のまさきに耐えられなくなりませう。英文そのものがまずいのか、翻訳が下手なのか、恐らくその両方でしょうな。前文には「恵沢を確保し」なんて言葉が見られます。恵みてえものは受けるもんでしてな、「恵沢を享受し」なら判るが、「恵沢を確保し」は頂けませんな。また「国事に關する行為を行う」とか「食事に關する行為を行う」と言つたら、中学生でも目をパチクリさせてしまひませう。それに「行為を行う」なんて言ひ方は「登山して山に登つた」とか「馬から落ちて落馬した」とかいう表現と同じで、小学生でも吹きだしてしまひませう。これは「国事をいう」と訳すべきでしょうな。

また「天皇は内閣の助言と承認により「国事を行うことを、こつ事に二度も(三条と七条)謳つておられますが、これまたおかしい言ひ方ですな。第一内閣が天皇に助言すると言ひ方がおかしい。助言とてな、憲法上天皇は元首の働きをするんですから、内閣の上に位置する。下の者が上の者に助言するなんて日本語はない。「進言」とすべきでしょうな。それに内閣が助言しておいて、その内閣が承認するなんてことは、主體と客體のゴチャマゼですな。「君のお饅頭はおいいしよ。食べ給え」とすゝめておいて、進めた本人が食べてしまうようなもんで、すな。ですからこれは「内閣が進言して、天皇が承認する」と書かねば、文章の空まわりになりますな。

メイド・イン・アメリカ

そのほか憲法の悪文ぶりについて、言いたい事は山ほどあります。こんなすつきりしない文章を中学生や高校生に読まして、始めから日本人の発想で全部書き直さんと、とても読める文章にはなりませんな。

まあ日本国憲法がこんなことになつていけるのも俄か作りの憲法だからでございます。原案はホイットニー民政局長が、佐官級の部下に命じて、五日間位で作させたそうです。五日間の作文ですから、私みたいなズブの素人にも矛盾が目につくんでしような。憲法調査会とやら、学者先生が沢山の国費を使つて、七年間にも渡つて検討されました。ともあれ何としても私たち憲法に不信を抱きますのは、外国製ということでは

ざいいます。小田実さんなんか、「何でも見てやろう」と外国廻られて、大いに日本国憲法の進歩性を吹聴なさいました。メイド・イン・アメリカの憲法を自慢されても、くすぐったくなかったんでしょうか。

今世界に百三十ばかりの独立国があるやに聞いていますが、外国の憲法を参考に作る国はあっても、外国製の憲法を頂いている国はないんじゃないですか。それを日本では二百数十万の犠牲によってから取ったなどと言う人がありますが、戦死者たちは「日本国憲法」のために戦ったんでしょうか。戦争目的は「日本国憲法」獲得にあつたんでしょうか。歴史と事実を歪めるも甚だしいもんですな。この憲法を有難がるであいに至ってはまさに悲しきピエロですな。これじゃ自主性と民主主義という言葉が泣きますわな。

憲庭事件と第九条

昭和三十七年に北海道で憲庭事件というのがありました。恵庭町に住む野崎兄弟が、自衛隊の演習のため牛の乳量が減るといつて、ペンチで射撃命令伝達用の通信線を七ヶ所にわたつて切断しました。ところがおかしいんですな。現地まで聞けば三十六、七年は、恵庭の乳量の収穫が北海道で一位になって農林大臣賞を買っているんです。ですから野崎兄弟のやったことは事実上反すると言つて、素朴な地元民は勿論、地区労さえ積極的に参加しませんでした。地元民は「あれは野崎兄弟のやった事件で、憲庭事件などと呼ばれるのは迷惑な話だ。我々は野崎事件と呼んでいる」と言つていろいろですな。「論争ジャーナル」五月号より「だから私、憲庭事件には大きな謀略が

働いていると見ざるを得ません。だってそうでしょう。通信線を切断したという小さな事件に、弁護士が四〇〇人(彼らは史上最大の弁護団と呼号していますが)そして三十八年(これは「現地調査」と称して、何と五〇〇〇〇人は恵庭に繰り出したんですからな。もうこうなれば単なる通信線切断事件ではない。自衛隊違憲を全国的規模で訴える政治的デモンストレーションなんですな。

通信線切断事件がこんな大きな騒動にまで発展する。憲法第九条は日本人の精神構造をかくも動揺し易いものにしてい

るんですな。考えてみれば自衛隊員は二十万、国費の一〇パーセント前後を費消しているレッキとした軍隊なんですな。火力だつて戦前の五倍以上と言われている。

この巨大な戦力集団が、合憲か違憲かはつきりせずに「日かげもの」のまゝ放置されてい

るんですな。今はまだ強力なアメリカの庇護下にあつて、まがりなりにも平和が続いているから、ごまかしが

きいています。しかし国内情勢も国際情勢も年々変つていきますから、やがて間にあわなくなる時が来ましような。

国連中心主義と第九条

岸内閣の頃でしたかな。外交三原則を掲げたのは、一、国連中心主義、二、自由陣営に協力、三、アジアの一員(今もこの原則は変わらないようですな。日本はこの原則に基いて国連には熱心に協力しているようですな。安全保障理事会の非常任理事国になつたし、経済社会理事会の構成員にもなつたし、先日はエカフェ総会を東京で開きました。それに国連の会費にあたる分担金なども真先に払

れば、日本は国連の模範生なんですな。その模範生が一つだけ国連に協力しないことがある。国連警察軍です。この編成に参加を呼びかけられると日本は尻込みしてしまふ。コング動乱の時は、日本に自衛隊を出してくれと頼まれました。自衛隊員も内心は参加したかった。しかし政府は断つた。家庭の事情があるんですな。日本国憲法の第九条に「国際紛争を解決する手段としては」武力を行使しないとなつていますからな。これじゃ国連中心主義の原則が泣きますわな。考えてもごらんなさい。今でも田舎じや火事が起つたら隣近所から行って火消しに協力しとります。そののに「日本」という家からは火消しに参加しない。日本さん、あんた何故出てこないと問われたら、「家じやよそ様の火消しには行かない」という家憲があるから」と答えたら、ほかの人たちはどう言います。「そんな家憲なら早く改正して、人並のつきあいができるようにせよ」言うのはあたりまえじゃありませんか。憲法の前文には、この憲法は人類普遍の原理に基くものとありますが、これじゃ普遍の原理に基かない憲法ということになつてしま

靖国神社と憲法

靖国神社というのは、祖国の危機に際して身を捧げた方々の魂を祭る所なんですな。どこの国も戦死者を祭る所は国家が予算措置を構じて護持しているやに聞いております。ところが日本では靖国神社が国家護持の対象になつていない。これまた憲法の「いかなる宗教団体も、国家から特権を受けてはならない」という条文に拘束されているんですな。靖国神社は創備学会やキリスト教会と同じよ

うに、宗教団体と見なされている。しかし靖国神社にはキリスト者も、仏教徒も神道信者も、ひとしく国家防護に命を捧げた人としてまつられていて、単なる宗教法人とは違う。しかし戦死者を神道方式で祭るのがいけない、神社という名前がいけないと反対されると、政府も気兼ねしてしまふんですな。ですから小中高の教科書には靖国神社のヤの字もないし、防衛のため倒れた戦死者のことも教えない。ところが最近他国の軍人が集団で靖国神社におまいりする例が見られるようになりまして、それでも日本の自衛隊や防衛大学は、靖国神社に集団では参拝できないんですな。こんな珍現象を外国の軍人たちが聞いたら腰を抜かさんばかりに驚くでしょう。そんなら憲法に触れないように、靖国神社から神社という名前をとつて靖国廟とでも直したいの、か。そしてあの大鳥居を取り除いてその管理者を神主さんではなくて、公務員に変えたいの、か。しかしもしそんなことでしたら英霊の心を裏切ることになつてしまふ。英霊は皆死んだら「靖国神社で会おう」と誓つたんで、靖国廟で会おうなどとは夢にも言わなかった。それに英霊たちは靖国神社に祀られることに反対した者は一人もいなかった。ですからもし靖国廟とでも変えたら、数百万の英霊は銃をとつて立ちあがるかも知れない。

私は火星人ではないか

私憲法について、世界の常識からはずれている事ばかりを選んでお喋りしているうちにもう六つになつてしまひました。そのほかあげればいくつもあります

論者に答えよう。「太上師」天、其次師レ人、其次師「経」と「言志録」にある。マルクスレーニン主義もまた経である。現代の戦争、現代人の疎外に対して認識と克服への偉大なる武器たりうる。しかし、経即聖者の教えは尊いながらも死物である。最上の道である天を師とするのは全体への認識ではない。天は僕らの心ではないであろうか。問題は僕らの内発力なのである。「日月の光の踰ゆべからざるなり、しかも心は日月光明の表に出る。大干沙界の外に出ず。其の大虚か其の元気が心は即ち大虚を包み元気を孕

生の充実を求めて

九大経三 片岡健

むものなり、天地我を待って、覆載し、日月我を待って運行し、四時我を待って変化し、万物我を待って変化し、万物我を待って発生す、偉大なるかな心哉。榮西禪師の興禪護国論の序である。「我を待って」という我、それは自己の確立などと言う言葉だけのものとは異なる。鍛えれば鍛えるだけ広がる心、そこでは全体の認識なぞ問題にはなるまい。経に書かれたものが経を超えた全体として把握できる我々の力であり心の広さである。まずはそこに胆を据えることである。

ひとは、世の中は進歩したと言う。確かにそうは、昔は数日ばかりで歩いていったところへ、我々は日に何度も往復することが出来る。生活は容易になり便利になった。個人のあり方にしても、過去の人がどうして想像しえぬほどあらゆる束縛から解放され自由になった。これは疑いもなく進歩といつてさしつかえない。しかし、一人人間の生命の充実という観点から、この世の中を見直してみると、先に述べた進歩をそう手軽に喜ぶわけにいかないことに気づくだろう。その進歩を我々が自由に使いこなすには相当の努力が必要であることに思い至るだろう。僕の目には、少なくとも現在は、この進歩を自由に享受できるもの、うまく適応できず、かえってこの進歩に振りまわされていくとしか思えぬ。勿論、他人ごとではない自分をも含めてそう感じるのである。

例えば、男女の間においても、「純粋な恋愛」という近代的価値観が先きにあって、現実の男女間の交りはすべてそれで裁断される。或る女性を好きになつたとする。昔はそれでよかった。「好いた」「好かれた」「惚れた」「振られた」で事がはこんだようである。ところが現在はそのはいかぬ。少なくとも大部分の人にとっては、「好いた」「好かれた」「惚れた」「振られた」「振られた」ぐらゐでは安心できぬ。「愛して」「愛される」ところまでいかねば承知しない。相手の男は煩悶する。果して、自分は本当に彼女を「愛」しているのだろうか。更に進んで自分は「愛」する資格があるのかしらと思ふようになる。資格があるのかしらと思ふようになる。男はいつのまにか袋小路に迷い込んだことに気がつかぬ。そして二進も三進もいかなくなる。あげくの果て、最初の好きだという素朴な感情までも疑いはじめ

る。二人の間は何かわりきれぬまま、うやむやのうちに断たれてしまふ。僕は男女間の問題を抽象的に論じて、この無意味を自ら承知している。たゞ、ここで言いたいことは「愛」だの「純粋な付き」だの「個人と個人との自由な結び付き」などといった、実際はわかりもしない観念に捉われて、素朴な自分の気持をおろそかにしてはいないかという点である。男女間の問題に限らず、我々は自由であるといわれながら、意外とこのような実体の伴わない観念に振りまわされて、かえって、我々の精神を自由に発露できないのではなからうか。僕は万葉や古事記に限らず昔の人の生き方に、特に白鳳、天平期、平安末、室町末、戦国、徳川初期、近くは明治維新の志士たちの生き方に何かしら強くひかれる。その感情は一種の郷愁にも似た腫れとでも言つたらよいであろうか。しかし、今の僕にはまだよくわからない。たゞ、確実に言えることは、彼らの生き方が非常に生き生きとしていて充実していると言ふことである。現在の人々から、束縛された、不自由な、不平等な、非科学的な時代といわれているにもかかわらず、そこには現在とは比べものにならないほど生き生きとした生命の躍動が感ぜられるのである。彼らには、先にあげたような現代人の悩みはない。彼らにはそんなあるかないかわからぬような観念にこだわっているひまはなかつた。現代では盲腸は病気のうちに入らないうが、彼らにとって、それは死を意味した。風水害などの自然の恐怖は我々の想像を絶する。古代の防人は、たとえ戦死を免れたとしても、再び故郷の土を踏むことができないとは限らなかつた。妻子や父母にあてた歌は辞世の歌でもあつた。

忘らふと野行き山行き我くれど我が父母は忘れせぬか。死を身近に感じていた彼らは常に真面目であつた常にならなかつた。またそうならざるを得なかつた。油断をすれば何時足元を払われるかたれなかつた。いかに細くても弱くても自分の足でしっかりと大地に踏張つていなければならなかつた。そのような彼らに自分の感情を疑う余地などなかつた。常に、その感情は真実であり、それが生きる源泉でもあつた。言葉は常に実体を伴つていた。平和は正しく平和を意味し、戦いは正しく戦いを意味した。我々はもはや、万葉や古事記に見られるような大らかな生き生きと生を感ずることができないのであろうか。「いかに生くべきか」この問題は我々にとって常に内在する問題である。少なくともまともな人間なら、一度は逢着せざるを得ない問題である。この問題を抜きにしては我々は一步も前進できぬのである。社会の悪を論じ、社会の矛盾をいかに細かく暴露しようとも、それ自体我々の前進とは何ら関係がない。それを前進と思うのは錯覚にすぎぬ。むしろ我々はそういつた分析を通じて、理想と現実とのギャップに当惑するのが落ちではないだろうか。大切なことはそのような矛盾に満ちた、我々の思いのままにならぬ現実を勇ましく受けとめることから出発しなければならぬ。何故なら我々は現実の社会を離れては生き得ぬからである。現実の社会がいかに矛盾に満ちていようとも、その中でしか生きえぬとすれば、我々はそこを基点として我々の進むべき道で、可能性を追求しなければならぬ。

学友諸君に訴う

早稲田大学信和会

(この一文は、先輩学生が新入生に訴えた呼びかけの一例としてここに転載する。同様のことが他の大学でも行はれた。)

新入生諸君、入学おめでとう。このたび難関を見事突破された諸君に心からお祝いの言葉を送りたいと思う。

一、大学の現状を正確に認識しよう
大学はいうまでもなく、あくまでも真理を追求する場であるべきだが、残念ながら現状は、およそ諸君が考えているような「真理探求の場」などといえる様相からはほど遠い。

学園の中には極端な政治主義と個人至上の原理が横行し、その結果は、悲惨にも益々深まりゆく人間不信の情となつて現われ、学園の中に流れる殺伐たる空気はいかんともしがたい。

こうした状況下では、学生各自の人生観はいきおい虚無的になり、その間隙をぬつてマルクス理論が圧倒的勢力をはるにいたつた。こうして学園の中には相も変わらず、アジ看板にアジ演説が続けられているのである。

諸君は、このような学園の中で、これからかけがえない四年間を送りはじめようとしているのだ、という事実をまずはっきりと自覚してほしいと思う。

二、偏狭な思考法を排す

私たちは、人の尊い生命を寸断しても平気でいるようなイデオロギーに対しては、きびしく対決していかなければならないと思う。また、そのような特定のイデオロギーを信奉して、他の考え方を一切認めようとはせず、斗争目標達成のためには、学則や社会的規律をふみにじつても少しも反省することもしない学生の行動は、断じて許すことはできない。

大学生の政治思想の表明は、もとより、おのおの自由であるべきである。それが「学問の自由」というものである。然るに、日頃あれほど学問の自由を主張していながら、自己の政治的見解を唯一のものとしておしつけ、それに反対する者に対しては、「考えが甘い」「ナセンス」「勉強不足」とかいいた言葉で斥けて平然としているのは、大きな矛盾ではなからうか。

私たちは、大学に学ぶものとして、かかる政治主義の横行を黙視することはできない。

三、自己の体験に根ざした言葉を語る
ろう

私たちが学問を志す者である以上、専門分野における理論体系を求めるのは当然であるが、その場合でも、それをとりあつかう者の心の動きが柔軟でなければ、その理論は形骸となるのではなからうか。

また、ある理論体系を身につけたからといって、そのみで複雑多岐な人生を鮮かに裁断できるなどと思ひこむのは、あまりにも安易な思考態度といわなければならない。

そうではなくて、この人生には、一塊の理論ではとうてい解決できない多くの事実があるのだということを体験的に知り、その体験をひとつひとつ積み重ねて、着実な思考方法を身につけることが要求されるのではなからうか。

私たちは、お互いの間で空虚な知識のやりとりを排し、自己のかけがえのない体験を通して学問の道求めてゆきたい。体験に根ざした言葉を語るといふこと、それはまた、人生を真剣に生きていることではないだろうか。

四、生きた学問と友情の世界

私たちは、枯渇した思考法を排し、同じ世代に生きる青年として、共に学び、共に語り合う学問の場を確立するために全身の努力をかたむけたい。そこに根拠をすえてはじめて生きた学問は芽生えると思う。

それはまた、友のよろこびや悲しみを、自分のものとして感じることでできる友情の世界の実現でもある。

五、文化・伝統に真剣にとりくもう
現在の私たちは、文化・伝統に対して、真剣にそして謙虚にとりくもうとする姿勢に甚しくかけているのではあるまいか。文化・伝統から学ぶべきものはなにもない、という風潮の中で、私たちは、日に日に自己をひからびさせてきたのではなからうか。生のむなしさをつのらせるなかで、あるものは自己の内面に、あるものはセツナの行動の中で生の充実をばかろうとした。だが、そのむなしさも極に達した感がある。

ここに際して、私たちは、祖先の業績

に無私な態度で接し、意欲的に取り組んでいくことが強く要請され、それが今日の精神の空白状態から脱却する第一歩だと考えるのである。

時に人はこうした態度を、右翼とか国粹主義とか呼ぶけれども、もしここで私たちが、自国の文化・伝統を謙虚に学ぼうとする姿勢を失くしてしまつたら、一体私たちはどうなるのだろうか。日本人が真の日本人たらんとして努力し、その中で共に生きていくよろこびを実感することによって、私たちが、失われゆく人間性を回復しうるものと確信するのである。(後略)

六、心をこめて古典にとりくもう
日本にはすぐれた古典がたくさん残っている。私たちは祖先の業績を偲ぶてだてとして、古典の中から、古人がみずからの一生を託して残していった言葉を、ひとつひとつ心をこめて味っていききたい。そうした努力をたゆみなく続けることによって、私たちは、失われゆく人間性を回復しうるものと確信するのである。(後略)

編纂後記 国文研叢書№3として高木尚一氏著「弁証法批判の歴史」(新書版二四一頁) 同じく№4として小田村寅二郎氏編「日本思想の系譜—文献資料集(上)」(古代・中世の巻)(新書版三二〇頁)が出版され、前回同様、各方面の社会教育関係者に贈呈された。非常な苦心の払はれた卓抜な内容で大きい反響を呼んでゐる。出版事業の一端のお知らせまで。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←東京→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

ゲーテとハイゼンベルク

現代思潮と企業思想に関連して

いつも、そんなに見ない『朝日ジャーナル』誌の六月四日号に、量子学者として有名なハイゼンベルク博士の講演『ゲーテの自然像と技術・自然科学の世界』が載っているのを新聞広告にみつけ、早速、買い求めて、むさばり読みました。内容は、ゲーテと現代々といったもので、ちょうど、LIFE誌五月二十九日号に“Challenge For Free Men in a Mass Society”という新連載が載り、興味深く、併読することができました。

LIFE誌では“Evokes the modern mood of uniformity under pressure, of distorted scale and distorted values, that can lead to a sense of emptiness and anonymity”といふ、*“Artists have ceased to play their art”* といっているが、ハイゼンベルクは、私たちが、当時の芸術の傾向であったロマン派に対するゲーテの拒否の態度について、ひとこと言っておかなくてはなりません。主観主義、狂信、

極端なものや無限なものへの脱線、むかしかぶれ、弱々しい耽溺、要するに媚と不正直。ロマン派のように、この世から、遠ざかり、現実世界を発言しようとするので、芸術家のたましいのなかに、その反映をしか発言しようとするめ、不満なものとしかみえませんでした。(中略)自己の内面にひきこもり、世界を直接の現実のうちに形成しようとする芸術に転じえないのをゲーテは歓迎できなかったと言っている。なにか、LIFE誌がEmptiness, Anonymityと現代批判をしているのと通ずるものがあるように感ずるのであります。

LIFE誌は、その現代思潮の病根探索を次号に譲っていますが、ハイゼンベルクは、私たちがこんにちでもゲーテから学ぶことができることは、合理的分析という一つの器官のために、そのほかのすべての器官を萎縮させてはならないということです。肝要なことは、私たちに与

えられているすべての器官をもつて現実をとらえるとき、この現実には本質的なもの、すなわち『ただ一つの善にして・真実なもの』を反映することになる、そのことを信頼することです、と結んでおり、このハイゼンベルクの言葉に大きな救いを感じないではおけないと思われるのであります。そして現代の社会的思想的病根は、合理的分析という一つの器官のために、そのほかのすべての器官を萎縮させているところにあるとハイゼンベルクは指摘していると思うのであります。

さらに、ハイゼンベルクは「色彩論」の序編から一節を引用して、と、この中には、ただ見るだけでは私たちが促すことにはなりません。見るということは、かならず考察へ、考察は思想へ、思想は統合へ移ります。それでは、世界を注意して見るときは、かならず、理論化している。そのように言うことができ、私たちが、意識して、自己認識をもつて、自由に、もし大胆な言葉を使わしてもらうならば、イロニーをもってやりとげなくてはなりません。私たちの怖れている抽象を無害なものにし、私たちの希望する経験の結果のかよった、有用なものにしようとするならば、その機転をはたらかすことがどうしても必要であります。このところを挙げています。このゲーテの怖れた、抽象を、二十数年前、私たち浜松高等工業(現静大工学部)で和魂会を作っていたとき、南海で戦死した故奥村克郎君が最も強く指摘していたのを

思い出すのであります。エンジニヤの卵だった私たちは、ハイゼンベルクの近代物理学とともにゲーテの自然科学に強い関心と共感をもっていました。そして、明治天皇御製、照憲皇后御歌、萬葉集と一緒に、ゲーテ詩集を机上において、読み合わせをしたものであります。とくに、故奥村君は、ゲーテに深く心酔しておりました。

なによりも先に強調しておきたいことは、ゲーテの自然科学のなかでは人間とその直接の自然体験が中心をなしている、その中心から諸現象は一つの感覚的秩序のなかへ組みこまれるということです。そのことは、ゲーテの自然科学とニュートンのそれとのあいだの大きな相違をなしています。(中略)ゲーテの確信から言うと、人間は自然のなかで、神の秩序と、目でもって対面しているのです。とハイゼンベルクは言っていますが、このことはをきいたら故奥村君はどんなに感激したでしょう。それを思うと、熱い悲涙がこみあげてくるのであります。

目次

- ゲーテとハイゼンベルク……………高木晃吉 (1)
- マルクス・イデオロギーからの脱却のために……………川井修治 (2)
- 特攻隊の死……………加藤善之 (4)
- ★新案内「日本への回帰・第二集」
- ★予告・第12回学生青年合宿教室開催

ゲーテに力を入れし若き日の友を偲べば涙あふぬ

此の論文捧げまつらんみんなの海に沈みし友のみ靈に

なき友は正しかり今にしてハイゼンベルクの論文見れば

さらに、ハイゼンベルクは、ツエルター宛のゲーテの手紙から、いまは有能な頭脳、のみこみの早い実践人のための世紀であります。そのようなひとは、そんな機転を心得ていてたとえ最高の天分を授けておられないとしても大衆に対する優位を自負するのであります。三井甲先生の『黒上兄の四周年のみ霊のまつりに』のなかのみことば、黒上兄の勤労は過度であったが、それでもなほ、労作を所得に換算し、経歴を地位に次第しつつある世俗への遠慮をもまた全く放擲せざりし謙遜の人情は、ただしき人格の発露以外ならなかったの御文を思い出さな

一部現代日本財界人の如く、大衆に優位を自負している。ようでは、現実の政治指導などできるものでないし、自らの解脱もできないと思うのであります。

黒上先生の『聖徳太子の人生観と政治生活』に「凡聖彼我の相對觀念を超越して始めてそこに一切に囚われざるべき真実解脱は成就せらるべき」とあるも、キリストの悔改めよ。天国は近しくも、ハイゼンベルクがゲーテの確信から言ふと、人間は自然のなかで神の秩序と目でもって対応している、といっているのも、総べて帰するところ同じ自然隨順の精神であると思うのであります。平常、私たちが生活している企業はなかでは、このような深い洞察の基盤はなく、極く単純な思想が支配しているのであります。

す。例えば、労働力不足を補うのは何かという問題に対して、機械化と反射的に答えられている現状であります。機械化すれば固定費が増嵩して、損益分岐点が上昇し、利益減少に効的ではあるが、確実な内容改善策を積み上げて行く苦難の道を考えようとしないうし、目に見えない企業対策である生産技術の質的向上、モラルの昂揚など損益分岐点を上げない総合経営への展開は思ひもよらないのであります。資本自由化対策として簡単に、技術振興を唱える人が多いが、技術振興は簡単に出来るものが多い。血みどろの苦斗の末に陽の目をみる事ができるきびしいものであることを知っているのでしょうか、その人たちは。その点、同じ朝日ジャーナル誌六月四日号の『ツライスラー(六大陸にきらめくペンタスター)』のなかで、クワイスラーを起死回生したタウンゼント同社長は「一九六一年以来、わたしたちの目標は、すべての部分をまとめて、全体の利益をあげることでした。わたしたちは、過去におけるように、技術の優秀さだけを重視したり、スタイルのみを力を入れません。わたしは天才肌ではなく物事を系統だて、組織だてで考えるたから。ただ気をつけたのは、もれるあらゆる基本に触れようと努力することでした」と言っています。私たちの競争関係の企業であります。素嗜し発言と思えます。また、先出のLIFE誌が、パウエル・クーツ教授の「It is organization which confer for power, not individuals」を紹介しているのが思い合わされるのであります。ゲーテが背後に悪魔メフィストフェレスがひそんでいてと警告していた合理的分析という一つの器官、抽出

象々々実益をいま、またハイゼンベルクがゲーテを通して戒めている意義は大きい。とくに、LIFE誌にみる如く Many young people have turned inward. "The old ideologies and slogans leave these Young people co-Id" management expert Peter Drucker has observed, "but there is a

passionate groping for personal commitment to a philosophy of life"であるならば、ハイゼンベルクをゲーテ観は現代世界の思潮に大きな影響を与えろと信じますし、そうあるように折り願うのであります。(元サンケイ新聞記者、現太平洋工業企業室勤務 高木見吉)

マルクス・イデオロギーからの脱却のために

川井修治

一、「マルクス主義の信仰」
現在の日本の学界・思想界に、未だ根強い影響力を持っているもの一つに、「マルクス主義の信仰」があることは誰しも知っている。敢てマルクス主義の「信仰」と言ったのは、それとマルクス主義の「理論」とを区別しなければならぬと思うからである。理論というものは、特に人文・社会科学の分野では考察の対象とした事実の説明であって、もしそれが事実と合致せず、事実を説明できないならば、廃棄されるか修正されるか。ところか信仰というものは、それと反対の証拠をつきつけられても、断じてひるむことなく固守されるもので、仮にその信仰の教義が事実と一致しない場合にも、信者は事実の方を否定するか、或いは教義の解釈をやり直すか、どちらかするのである。マルクス主義の理論が今日の世界史の事実、特に資本主義の修正・変容が進みつつある先進国の現実に合致しないことは、も早疑問の余地もない程明らかである。欧米の学界ではこの事

は殆んど常識化されており、マルクス主義は社会科学上の古典としてしか位置づけられていないと言う。我が国でも林健太郎氏などは早くからこれを指摘しておられるし、私も本誌上で屢々「共産主義の衰兆」を論じたつもりである。日本の思想界に残存しているのは、敢て言えば理論ではなくしてこの「マルクス主義の信仰」であり、これも時の経過と共にやがては消えて行く運命にあるものと思われる。しかし、一部の人々の間では、尙未だ「マルクス主義の信仰」に魅入られて、階級斗争を煽り階級革命に狂奔する向きのあることも事実で、政治と国民心理の安定を欠く今の日本に、もししかすると大きな禍乱をまき起こさぬとは言えない節もある。特に学生運動の分野では、概ねの一般学生の思想的・政治的無関心に乘じて、組織と資金を有する左翼系の学生アジテーターが幅をきかせている現状であるので、樂觀は許されな。全国の各大学において、学生思想と生活の浄化のために日夜心を砕いておられる諸君に、何程かでも役に立つこと

があれば幸と思い、この一文を草する次第である。

二、マルクスも所詮は時代の子

歴史学の立場からすれば、マルクスであろうと他の誰であろうと、人間である以上すべて彼の生きた時代の子である、ということが出来る。それは、歴史学が元来すべての対象を時間の相において具体的に把握する学問であるからであるが、この程度のことは何も歴史学をもち

出さなくとも、常識であろう。ということは、例えばマルクスの下した或る種の判断にしても理論にしても、結局マルクスが生きていた当時の政治や経済の状況を素材にして、出来上ったものだということである。つまりマルクスは外ならぬ彼自身の限りある生活体験から、彼の判断なり理論なりを立てたのであって、この時間的空間的制約なくして、はじめから樹時空の普遍的な認識に到達することは、いかにマルクスの頭脳が秀でていたとしても到底不可能なことなのである。

それができるのは全能者神だけであらう——この事は我々自身の思考過程を省てみれば当然納得されることで、我々もやはり二十世紀後半の日本の上でものを考えているという時間的空間的制約を免れることはできないのである。マルクス自身この事に気づいていたらしい。晩年に至つて彼は「自分はマルクス主義者ではない」という有名な警句を吐いたが、これは自分の言ったことを金科玉条視して無批判に追隨するのを止めよ、という意味を並流者達に警告したものと解される。ところがどうかマルクスの信奉者達はマルクスの言論を無上万能の権威と見做し、例えば中ソ論争に見られる如く、マルクスの名において全く相反する主張と悪罵を投げつけ合つて

いる。日本のマルクス主義者にしても、何とかしてマルクス流の概念を流動変容する時勢にあてはめようと、苦しい解釈・再解釈に憂身をやつしている有様で、例えば「国家独占資本主義」の如き、マルクスやレーニン時代とは機能と内容が全く違つてしまつた今日の経済体制を、無理にこの概念の枠にはめようと苦心修飾している現状である。不毛の論議とはこのことであらう。

そんな無理をなくとも、先程述べた人間通用の制約「人間はすべて時代の子である」という事実を、素直に受け容れてはいかがであらう。マルクスは彼の時代の境位の下での階級斗争・プロレタリア革命論をうち立てた。それは彼の生きた時代に対しては、一面の真実をついた点もあつた。しかし共産党宣言以来百二十年を経た今日、マルクス理論を生んだ基盤である十九世紀中葉の事情が、そのまま残つている筈のもではなからう。この百二十年間に、政治状況も経済構造も、階級関係も人間思考のレベルも、殆んど根本的と言へる程の変化を来している。特に二十世紀の三十年代以来の所謂資本主義の変容は急ピッチである。この百二十年間の時差、その間の社会の根本的变化を認めるならば、マルクス主義が現代の社会に妥当する理由も、殆んど失われたとしても過言ではなからう。

三、階級国家論の歴史的基盤
ここに一つの例、マルクス主義の階級国家論をとりあげてみよう。マルクス主義では「国家は階級搾取の機関」、つまり支配階級（資本主義下ではブルジョアジー）が被支配階級（プロレタリアート）を搾取の枠内に止めておくために警察や軍隊などで固めた権力体であるとされ

る。これを最も露骨に揚言したのがレーニンの「国家と革命」であり、マルクスもまた「現在の国家はブルジョア共の委員会にすぎぬ」と言つたのは周知のとおりである。このテーゼは果して正しいと言えるだろうか？ しかも二十世紀後半の今日にも妥当すると言えるであらうか？

マルクスの著作を調べてみると、政治関係の引用材料は十九世紀中頃のフランスとプロシアが殆んどで、一八六〇年以降の民主化されたイギリスの政治などはまるで問題にされない。前記の「国家は階級搾取の機関」という断定は、当時のフランス・プロシアの政治的現実をマルクスが自分の目を通して見た結論である、として略々間違ひはないと思う。それではその頃のフランスやプロシアの政治的現実は何のようなものであつたらうか。

フランスではルイ・フィリップの七月王政とナポレオン三世の第二帝政の時期に当る。この時期のフランスの政治は、マルクスならずとも憤慨するように、全く支配階級の私物と言つてもよい程であつた。議会はあつたけれども民意を代表するといふには程遠く、七月王政は金権寡頭政治のサンブルと評され、第二帝政は十三世の側近政治の色合いが濃ゆかつた。フランスの民衆が七月革命・二月革命・或いはコミューンの乱と、恰も桜島の噴煙のような間歇的爆発をおこしたのは、支配階級の政権独占に対する止み難い抗争であつたらう。その革命反覆の歴史が、マルクスに終極的革命的必然的到來の予想を抱かせたことは想像に難くない。

プロシアとても嚴重な階級支配がしかれていたのは同様であつた。ここでの支配階級は貴族（大地主・軍人）とブルジョアで、四八年の革命動乱以後憲法が制定され議院が設置されたが、それも悪名高い三級選挙法が採用されていた。ここでも無力な大衆の意向を反映する政治的手段が欠けていたことは、フランスと同様である。ユダヤ的憎悪の情念を胸中に宿し、亡命と貧困に辱まれ続けたマルクスが、現存国家を「階級搾取の機関」と断じ、それを一挙革命によつて転覆せんとする執念に生涯をかけたならば、マルクス自身のおかれた境位からすれば、やむを得ざることにしても差支えないのかもしれない。また帝政ロシアの厳酷なツァーリ体制のために、肉親の兄をはじめ多くの先輩や同志を失つたレーニンが、「国家は階級対立の非和解性の産物」と唱えたのも、同様にレーニンの境遇からすれば当然の帰結であつたのかも知れぬ。

四、階級国家論の今日的妥当性
しかし問題は、このような階級国家論のテーゼが、果して今日の我々に妥当するか否か、ということである。十九世紀中頃のフランスやプロシアを素材にしたマルクスの判断、ツァーリズム・ロシアの状況から生れたレーニンの断定に、現代に生きている我々が簡単に聴従しているかどうか、が問題なのである。「時代の子」の論法からすれば、時代的背景が異なれば、聴従できないという理窟になるではないか。

しかし、時代の背景が異つて、私は公言したい。そして偏見なき諸君は、この百年の時差の間に先進国の政治的事情が根本的に変容してきたことを、認めるのに躊躇しないと思う。現代は大衆民主主義の時代だと言われる。字義通り大衆の意向がそのまま政治の上に実現される、とまでは言えないが、百年前と格段の相違のあることは否定し得ないだ

る。これを最も露骨に揚言したのがレーニンの「国家と革命」であり、マルクスもまた「現在の国家はブルジョア共の委員会にすぎぬ」と言つたのは周知のとおりである。このテーゼは果して正しいと言えるだろうか？ しかも二十世紀後半の今日にも妥当すると言えるであらうか？

ろう。少くとも百年前の制限選挙は今日姿を消している。大衆の福祉増進のための社会立法（労働者の保護や組合の法的承認・公教育の拡充等）は、一八六〇年代イギリスで先鞭がつけられて以来、今日では普遍の現象となっている。特にニュー・ディール以後は、一層広汎な福祉政策の立法化が進み、経済の全般にわたって国家権力が介入することにより、財政・金融・景気・雇傭から厚生・福祉の方面に至るまで、行政的手段によって適正化が図られるようになった。「富める者はいよいよ富み、貧しい者はいよいよ貧しくなる」というマルクスの大衆貧窮説は、歴史の事実によって反証され、大衆の所得は漸次向上し、反面労働時間は短縮された。何よりの証拠は、おしなべ

て先進諸国ではマルクス流の革命勢力は漸次退潮し、フェビアン協会流の改革勢力が抬頭して来たことである。嘗てマルクス主義の主力を形成したドイツの社会民主党やオーストリア社会党でさえ、今日では綱領から革命や国有化の旗印を削り去ってしまっている。時流は既に革命の熱病を卒業してしまつて、改革の大道を徐々ながら堅実に歩み始めているのである。我々の日本についてみても、程度問題はあるが、大体においてこの資本主義修正の流れに沿いつつあるものと解してもよからうと思う。

さて、かかる改革の楯干をなしたものは、言わずと知れた国家の権力であった。マルクスが「階級搾取の機関」と罵倒した当の国家が、少くともマルクス以後は、階級融和・大衆福祉のための奉仕的役割をはたさずになつたのである。主客はまさに転倒したと言わねばならぬ。従つて、もしこの国家の様態と機能の変化を正直に認めるとは、同時にマルクス主義の階級国家論に対し、その死滅を宣言しなければならぬ筈である。

五、イデオロギーの終焉
今日の合言葉は「イデオロギーの終焉」である。マルクス主義はそのイデオロギーの代表的なものであるが、事実よりもイデオロギーの色眼鏡を先行させる風潮は、もはや過去のものと化しつゝある。例えばアメリカのラーナー教授は「民主的機能主義」という方法を提唱している。これは資本主義とも社会主義とも言い切れない現在の状況に即応して「要するに人々が最も欲しているものを、人々に持つてくる」という民主的的にとつて、どの形態が最も機能上効果的に作用するかを発見する」方法で、同教授はこれについて「基準として競争を用いること」が最適であるとしている。ソ連経済の変容という今日的事態と併せて、興味ある指摘と言わねばならない。要するに、国家にせよ経済にせよ、古びたイデオロギーの色眼鏡をもつて見ることは歪みをもたらすばかりで、そうした大前提を脱却して、直接目に触れ心に触れるものをしっかりと受けとめること、これが思索の第一歩なのであろう。このような新しい感覚と思索が芽生えて来ることを、若くして柔軟な世代の頭脳に切に期待したいと思う。（鹿児島大学助教）

* 特攻隊の死 *

加藤善之

昭和四十二年四月二十七日毎日新聞夕刊の「憂楽帳」に次の様な記事があった。

〃同期の桜〃
いくたりか わが友はゆき
いくたりか わが友の死にし
この道

この道をわれも歩まむ
日野原孝治（昭和二十年四月十六日戦死）―「あゝ同期の桜」より
（中略）歴史の流れが大きくかわろうとして、日野原君のような青年たちが、その流れの前に立ちほだかつたことを、われわれは誇りに思う。彼らは敗戦にころがり落ちて行く日

本をくいともめることはできなかったけれども、日本人の精神を救つた。

昭和十九年押し迫つたある日、マニラ郊外の海軍航空隊基地に司令の大西瀧次郎中将をたずねたことがあった。

最前線であつた大西さんは、やせ細つて、航空兵器総局の総務局長室におられたころの面影はどこにもなかった。

「こうやっている時にも、どこかで特攻機が突撃していると思うと、胸が痛んでね」

「特攻隊の力で、戦局をくつがえすことができる、わしは思わない。し

かしの、彼らが若いのちをなげうつて出撃するのを、わしはとめようとは思わない。日本の青年たちがどう戦つたかを―われわれの子孫たちに知ってほしいからだ」

戦いが終つた日に、大西さんは割腹して死んだ。

読みながら胸がつまり胸が熱くなつてきた。今日も又泣かされた。うれしい文章ではないか。

大東亜戦争中、日本には大西中将があり、特攻隊があつた。特攻隊は日本を救つた。戦いには敗れたけれども日本人の心を救ひ、民族の魂を継承した。現に、この私の心を支えていくれたのは特攻隊の出撃であり死であつた。

戦い敗れて後十幾年の間、一体幾度耳にしたことであろう、毎日のように、新聞にラジオに、ドラマに教室に、色々の

雑誌に書籍に、そして友人の言葉の中にも、

「お前も陸士に行つていたのでだから軍閥の片割れだ」

「特攻隊は気狂いだ、犬死にしたのだ」

「日本は侵略戦争をしたのだ」

「国民は騙されていたのだ」

「大東亜戦争は間違つていたので」

一体どれほど心を痛め続けたであらう、しかも、これらの言葉の背後には厳然として存在する理論があり思想があつた。それは長い間雌伏し潜み、幾多の試練をくぐつて培われてきた、深く大きな思想であつた。単純な批判位で崩れるような代物ではなく、長い歴史の中にあつて何らかの真実をもつていた。それは激流となつて敗戦と同時に怒濤の如く奔流し渦巻き、多くの日本人の魂の底まで

突進してきた。而もそれは単なる怒濤ではなく、よく整理され体系化された論理があった。この論理の前に立ちほだかるべき論理も言葉も、多くの日本人は一つ持たなかった。その気力さえもなかった。私にしたところで同じであった。

それどころか、この理論の中には成程と理解せざるを得ない論理や、我々の知らない事実も数多くあった。とりつくしまもなく、知識の面では黙って肯くか、そのまゝ沈黙してしまふか以外にすべを知らず、又その試練を経ていなかっただ。それらは我々の肺腑を貫き通し、心を痛めつけ、苦痛に歪んでしまった。堪えるにはあまりにも痛く素直さが我々の心にはあった。そうしてこれらの思想は我々の心の隅にまで浸透しはじめた。

その知識、理論、それは自由であり民主主義であり、唯物論であり唯物史観であった。これらの思想から醸し出されるもの、それはそれまでの我々が生きてきた生命観とは余りにも隔絶していた。そのどちらかの思想の持主と自ら信じられる人はよいが我々大半の日本人の魂は錯乱した。肉体という生命を維持するだけが精一杯であり、己が生き家族が生きることにのみ専念して、考えることを停止した。一つ一つ剝ぎとられていた私の人生観、私の考えは間違っているのではあるうか、と必死になって考えた。勉強する気になれない事はしばしばであった。頭の中も心の中もぐしゃぐしゃに崩れ暗黒と泥沼にとりかこまれてしまった。たゞ一つの事を除いては何一つ護り切れるものはなかった。その一つ一つの思い、一つの精神だけはどうしても譲ることは出来なかった、又それをしも屈服せしめ得る論理や思想は、さしもの巨大な激流の中に

もなかった。だがその事を解ってくれる人も皆無に等しかった。みな、誰もが迷っていたのだ。学者も文化人と言はれる人々も皆同じであったのだ、私がおとずれた人々も例外ではなかったのである。

しがみつくようにして護り続けた「一つの精神」それは「特攻隊の死」であり、「日本は勝たねばならぬ敗けてはならぬ、その為には自分も死のうと決意していた私の心」であった。その一つの心が間違ひであり無駄なことであり、騙されたものであった、又、気の毒なことであったということさえ自分の心に定める事は不可能であった、どうしても肯く事の出来ぬ護歩できないことだった。それは死ねと云われるに等しいことであった。このことに関する限り私は毅然として、だが事実は淋しくてやりきれなくて言った、「特攻隊員が羨しい、俺も死んでいた方がよかった、あの純情さが今日程踏み込まれる位なら、あのまゝ死んでいた方がよかった」と。自分の心に嘘をつくことはできなかったのだ。死んでいた友人、同僚、自らの生命の全てを捧げていたと私にもはっきりわかる父の心、そうした人々の心を断罪するような考えに、自分の心を同調させる事は何んとしてでもできるものではなかった。

「まあ、そうかも知れんぞ、そう言われてみるとそう思われないでもない」ということさえ口に出せる言葉ではなかった。だが、そうした中でも、何時も人には私が明るい人間に見えたようだ。いつもよく笑った、山にも登った、恋ももあった、朝寝坊や授業中の居眠りは常習犯であったし、猥談も好んでした。どんなに悲しい時でも人は飲み食い眠ることが出るものらしい、それが出来なくなつた時こそ本当に死ぬのであろう。そうでな

いところをみるとそれほど苦しんだのではないかも知れない。苦しみの程度を測定したり、人と比較したりする事は出来ないのだからな。誤りだ。

戦後、父は戦争映画を一度観に行つた。そしてかんかん腹を立てながら帰ってきて言った。「あの映画は嘘だ。二度と再び観にはゆかん、戦争の話も一切しない」と。父はいまだに戦争の話をして読んだ時にはこう言った。「これでは自分も生き返つた、もう言うことはない」と。父と同じ思いを抱いている日本人は無数にあるに違いない。そうした人々は殆んど沈黙していた、たゞ毎日の生活に働いた。戦争中に一生懸命に真面目に戦つた人ほど戦後は沈黙したであろうと思う。その心は痛み傷つき苦んだであろう。戦いの価値を否定され、戦場につきもの殺人や暴力を責められ、戦場の置場はない。戦死した人々は沈黙している、生き残つた人々もその多くが、同じく沈黙している。沈黙にも色々あるが、「美」とは人を沈黙させる絶対的体験である、という言葉は、北九州在の山田さんから聞いた。それを体験した人は本当に沈黙したまゝこの世を去つてゆくであろう。

このように沈黙している人々の心に嘘はつけない。「特攻隊の死」と「切腹」十年前までは、この死を笑う事は当然のことであり、恥しいことではなく遠慮する気づかいも必要であった。その死を平然と笑う人は、その全てではなからうけれども、きまつて唯物論者か民主主義論者か、要するに進歩的と称せられる者えに少くとも同調する人々の中からであった。そうした人々からよく聞かれた言葉に「戦争が終つた時はホツとした、悪

夢を見ているようだった」嫌で嫌でたまらなかつた」と。又嘗つての將軍の中にも「私も本当は戦争には反対であった」と言う人もいた。こうした言葉を聞く度に自分がみじまなかつた、救われようのない断罪のひびきがした。このような発言の中には、真面目に戦つてきた人々への思いやりがあるとは考えられなかつた。人を責めるのはよそう、それにはそれなりの然るべき大きな理由があり、又そうした問題とすべき事実もあつたのであるから。人々は黙つてこれらの言葉を聞いていた。

聖徳太子憲法第十条に、々忿を絶ち瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有り、彼是とするとときは則ち我は非とす。我是とする時は則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理証ぞ能く定むべき。……とあるが、今更の如く、この言葉を偲ぶ。思想や理論の是非問題は「恕す」とか「寛大さ」という心の態度で処置できるものではないかも知れぬが、最後は人の心が、そうだと定めなければ納得した事にならぬ以上、理論の世界と雖も感情の世界を通らぬわけはゆかぬであろう。

私の母も、戦争中の防火訓練やその他の行事に対する行動力では、男に勝る勇猛さを発揮していた。それは子供ながらに驚嘆するほどの活躍であった。必死であったのだ、決して戦争は嫌いだ、などとは一言も洩らさなかつた。だが私は門司の駅頭に送る時は泣いていた。私は涙一つこぼさなかつたが、しかしながら、戦い敗れて私が陸士から帰つた時に母は言った。「よく帰つたね、よかつた、よ

「母にそう言われた時に、私は髪も振り乱さんばかりに怒った事を憶えてる。「日本が敗けて、よく帰ったとは何事か」と。でもこの母の思いも又多くの日本人の思いであったのだ。戦争に人々は疲れきっていたのだ、日本人と雖も超人ではない。悲しいことには、この母の至情が、戦争や捨身に対する反動の対極的感情となつて戦後二十年もてはやされ、「特攻隊の死」を捨て去るうとする意志となつて、国内に充満していった事である。父の思いは無残にも断罪され続けたのであった。思想的にも戦後は女の感覚が支配した。

日露戦争の従軍兵士猿田只介の有名な連歌がある。

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなとはなしに
君が為國の為なりとはいへど老いし父母思はぬにあらす
勇ましきはたらきせよといひさして涙にくもる母のみことば
ふた親に妾つかへむ國のためいざとほげますけなげなる妻
門の辺に送るみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるゝ
手をつかへなみだぐみたる教へ子の姿を見れば胸さけむとす
いざやいざ朝日のみ旗おしたてゝふみにじらなむ露の醜草

この連歌は、雄々しき心と、優れし心のおりなす作者とその親、妻、教へ子の心情がそのまゝ感じられ胸を打つのである。だが今次大戦中には、こうした人の心情の素直さを拒否し猛々しいもののみを重視する傾向があった。だが、戦後二

十年間は又それとは裏返しで、同じく人の素直な思いを拒否し雄々しい心情を軽視する傾向がみられた。いずれも何等かのイデオロギーや目的、主張を基準として人の素直な思いを軽視してきたのである。その意味では戦前も戦後も変りはない。

終戦後間もなく一番最初に行ったのはキリスト教の教会であった。買った本もキリスト教関係のものはじめであった、真宗や禅宗の寺にも天理教や大本教、生長の家等々その他にもあらゆる人々を訪れた。何物かを自分でもそれがわからぬまゝに求めていたのであろう。何がわかれぬのかそれがわからなかつた。自分自身の若さからくる人生観上の悩みとごつちやになつてさまよい続けた。只々にビタツとくることば、胸にピンとくるもの、そうしたものを求めていたようだった。それは思想であれ仕事であれ人物であれ同じであつたように思う。これが大体十一年間続いた。

戦後半年たらずの頃であつたらう、或る夜教会の牧師さんを囲んで数人の人々と語りあつた事がある。その折に、予科練より帰還した人が一人質問をした。「先生、先生は特攻隊をどう思われますか」——牧師は、正座をしていた膝をやおろぐずし、手を後手に支えて体をのけぞりながら言った「あれは気狂いですよ」。私はこの時の事を極めて明瞭に記憶している、忘れることの出来ぬ、戦後最初の衝撃であつた。忽ち私は烈火の如く怒つた、すんでの事で殴りつらばかりであつた。すくなくとも國を護るために自らの命を捨てて死んでもいい人々に對して、なんとという態度だ。死んでいった人に対する言葉であるまい、確かこうした

意味の事をたゞきつけたと思う。牧師さんとその質問をした人は今も私の町に住んでゐる。二十年もたつた最近になつて、ある日偶然にその人と話す機会を得てその話を聞いた。しかし、その人の記憶には既になかつた。人間の心の順応性というか、それは、忘れることができるという有難さかもしれない。だが、この私には生涯忘れることはできない。

こういうこともあつた、五、六年遅れて入学した故もあつた、九大の学生時代、ある学生が言つた、「あんたも軍人を志望して陸士に行ったのだから戦争協力者だ、軍国主義者だ」と。これに類似した言葉は学生時代に数度、社会に出てからも二度あつた。この種の事に関する限り私の記憶は確かである。こうした言葉を投げかけられた時の私の反応は何時も定つていた。猛然と反撃した、本當に生命を賭して反撃した。「もう一度言つてみる、たゞでは済まさんぞ、貴様等が大学にやつてきたのと、俺が陸士に行ったのとはそもそも訳がちがう、貴様等は大学を出ればいゝところに就職もできよう、いゝメツチエを見つけることもできよう、出世もできる、そう考え、そういうコンタンがあつて来たんだらう、然しこの俺が陸士に行ったのは、そんな下らぬ欲で行つたのとは訳が違う、アメリカに勝たねばならん、日本は敗けてはならん、敗けることは亡びることだ、その為に俺も死のう、そう心にきめて行つたのだ、あこがれがない訳ではなかつたが、およそ貴様らの様な根性とは根本がちがう、感違ひする事な、と、まあざつとこのような意味の事をたゞきつけた。本當に殺してやりたい程に腹が立つた。これ程堪えがたい侮辱はなかつた。この思いを捨てることは屍になることであり

我慢ならぬことであつた。こうした時の相手の反応の中には、むしろビックリしてあつてにたられてゐる人もあつた、何て不思議にみえたのかも知れない。私のこの反撃に再度攻撃をしかけてくる人は殆んどなかつた、たゞ一回女性が反撃した、戦争が好きかというのである。

だが、こうした勢いも経済学部に進学してからは大分おとろえた。其処は唯物論と唯物史観の牙城なのだ、その論理と理論の前で私の人生観は素裸にされ総崩れとなつた、心を支える一つの精神だけが心の底でかすかにうごめき、そこだけが唯物史観も侵入できない場所だつたが、堪えきれなくなつて、ある進歩的と言われる著名な教授にこう尋ねた、「戦争中、平和のために死んだ人も、又國を護ろうとして死んでいった人も同じように私は立派だと思ひますか」と、随分卑屈な質問であるが今にして思う、戦時中のそれは、平和を願つて抵抗した人もあつたらうけれども、實際は唯物史観、自由主義という思想の故にこそ抵抗した人が多かつたようだ、してみれば的をはずれた質問であつた。教授はそれに対して「私もそう思う」と応えた。この程度の質問をするのでさややつの思ひであつ程に、私の心はその知識と理論の方向へ同調する傾向を辿り崩壊寸前であつた。私のいう「一つの精神」それは純粹で素直な体験があるだけであり、その背景には思想も理論もなかつた。だが相手側にはそれを圧するような思想があつた。その心に支える何物か、即ち日本人の心をしてそうせしめざるを得ぬ何物かがある筈だ。長い間無意識のうちにそれが何だかわからぬまゝに、それを模索していただのであろうか。

丁度、MSA問題が盛んに論じられ、国内経済の沈滞した就職難の昭和三十年に卒業した。心の中は真暗であった。日本の将来は暗黒であるという印象を教室で強くだいていたが、そのまじけは未だに出た。然し乍ら少くとも心だけは未だ挫折はしていなかった、元氣もあり誰がみても潑刺とみえたらしい。苦勞しらずの坊ちゃん育ちなのではないかと云われ、そうかも知れないと思つて笑つていた。所謂社会人としての生活が始り色々とあつた。昭和三十一年の十一月頃に下関に住む宝辺さんを知る機会を得た。この出合はまさしく邂逅というか機縁であつた。求め続けていた人を得たという思いが胸中に燃えひろがつた。渴ききつた土壌にしめりが加わつた。宝辺さんは云つた、「日本が今日乱れている根本の原因は明治この方、論理が先行しているからだ」と。この言葉が私を縛りつけて脳裡から離れなかつた。斯くして国文研を知り二人が、三人、四人と続々増えていった。「特攻隊の死」を心から悼み、それを真にわかつてくれる人々にめぐりあえたのである。そしてその「一つの精神」の背景に厳存する巨大な詩情というか、そうした何物かの輪郭の存在を知つた。それは思想とか理論とかいう世界とはまるで異つた世界であつた、そうした世界が今の世に滅失しかけている事に気付いたのである。

電気の火花の如く往復する約八年間の毎日が続いたのである。そして日本に於ける思想の混乱は、この詩情、情緒の世界と、論理や理論の世界とが混濁し人の心の中で消化し整理されていがないが為のものである事を悟つた。

今にして思う、民主主義はギリシヤ以来の、そして唯物史観は西欧文明の積年の落し子としての夫々数千年の歴史の重みの中から生れた思想であり、人間の生きてゆくべき理論としての原理の一つであつた。それは西欧人にとっては数千年の重みと試練を経た文化の遺産であり実力であつた。それを第一期に明治維新に於て、その第二期を今次敗戦という一大衝撃の中で、我々日本人は全身心をこして受けざるを得なかつた、重荷としてこれ程の重荷はなかつた。これに耐え得るものは同じくそれと同等か、寧ろそれ以上の文化の実力と実績をもつものを持ち、而も強靱なる意志と忍耐とのみであらう。換言すれば、日本の二千年の歴史の総力を結集したものをもって、それが果してその重荷を支えうる力をもつかもたぬかにかゝつていたのである。私にとっては、「特攻隊の死」という「一つの精神」の生命、それがその支えであつた、そしてその事実が日本の二千年の歴史の重みそのものであつたのではなからうか。一朝にして起りうる事実では到底ありえない、米英軍將兵にとつての特攻隊に対する畏怖はその二千年の歴史の重みへの畏怖であつたのだ。「特攻隊の死」それは理論の文化では生み出し得ぬ事実であり、この事実を生み出す文化は他国には無く日本にのみ存在していた。この事実を育てあげる文化の資料(単なる形としての資料でなく、その内の資料も指す)は日本以外の他の世界には存在しな

かつた。他の世界の資料を基準とする批判や否定、それは日本そのものの過去、現在、未来の全てを批判し否定することになる。即ち「特攻隊の死」を笑う心は日本二千年の歴史を笑ひ否定し抹殺する行為に通ずるものがある。私を救つたのはその意味での「特攻隊の死」という事実であつた。私は生きた、血潮が波打つた。それがわかるという実感は、日本が生き返つたという実感であつた。他の世界には存在しなくて日本にのみ存在するということが如何にも異常であるが如くに感ずるのは間違いないのである。それを信ずる勇氣を日本人は欠いていた。岡潔さんの「私は普通の人のように小我を自分とは思はず日本を自分だと思つている。そうすると生死に対してどんな気がするかと」と、私は日本の情緒の中から生まれ生きてきて、やがてまたそこへ帰つて行くのだという気がするのである。という言葉をそっくり特攻隊の人々に贈りた。日本の文化の重みは、この日本の情緒にあつたのであり、理論の文化には存在し得ぬ中味があつた。

二、三年前だつたと思う、中学時代の同期生で、私より一年早く陸士に行つた友人に久しぶりに出合つた時、呑み屋で歓談した。その中で、彼はこう言つた。「お前はよく挫折感が彼ほらなかつたな」と。この一言をつぶやく心情は実によくわかつた。私はからくも救われる契機を把み得たが、そうでない人々は多かつたのだ。その人々の為にも、という気がした事だつた。

昭和三十八年十二月三日、東京水産大学の山本伸治君が下関に来た。そこで、宝辺さんと下関市大の学生三人と香港飯店という小さな店の二階で色々、と話しだ。話題がたま／＼創立間もない市大の

★新刊案内★

『日本への回帰』第二集

大学教官有志協議会編
社団法人国民文化研究会編
昭和四十一年八月、雲仙における
第十一回合宿教室の講義を中
心として

いのちをかけて守るべき価値を持つたぬ時代の中で、鬱屈し、低迷する青年の生命は何かを待っている。それはみずみずしい生命の必然の要求である。どのような形であらうと、われわれにはそれに応える義務がある。われわれが年毎に行う合宿教室は、その一つのさきやかないとなみである。日本の伝統と生命を断とうとするイデオロギーの組織に對して、われわれは一人から一人へと生命の組織を抜けてゆく外はない。その願いの一端をこの小冊子からくみとりていただきたい。(はしがきより)

目次

- 一、思想と人生
マルクス主義の超克……川井修治
われわれ人間は自分ひとりでは生きて
いるのではない……小田村寅二郎
- 二、合宿教室における講義
「近代化」の意味とその克服
……福田恆存
- 私の経済哲学……木内信胤
- パネルディスカッション
三、日本のところ
- 聖徳太子のお言葉と
古事記のいのち……夜久 正雄
- 自己克服……戸川 尚
- 明治の精神……小柳陽太郎
- 短歌入門……山田 輝彦
- 新書判三二〇頁定価三〇〇円下50円

学生自治会の在り方に及び、全学連系の学生との意見の衝突などで、この三人が仲々苦しい立場に置かれ迷っているようであった。そうした話の中で、宝辺さんは、市大自治会委員長藤田君に「大切な事は、君が委員長として、学園を立派にするにはどうすればよいかを自分で真剣に思い考えて、その主張を持つ事だ。自治会の組織や制度や規約や民主的運営方法というようなことに、心をわずらわす事も大事であるが、それは二義的なことだ、君自身が君の人生観を持つて、その中で君の信ずる事を述べ訴える事の方が遙かに大切なのだ。それが人を動かすのだ。民主主義は政治原理ではあっても生活原理ではないのだ。」と確かこうはハッと心に閃めきがあった。けれど、これだ、と丁度天の啓示に触れる。直ちに手帳を取り出し「民主主義は政治原理ではあり得ても生活原理ではない」と書き留め、帰宅して簡単にその日の事を記録しておいた。

結論から言うならば、この言葉を得て、私は戦後十八年間の心と思想の迷える遍歴から解放され呪縛を脱出し新なる道を拓いたのである。今の日本に於ける思

世界経済調査会理事長

開催予告

第十二回学生青年合宿教室

主催 大学教官有志協議会
社団法人国民文化研究会

期日 八月七日(月)午後三時より
同十一日(金)午後一時まで
四泊五日

場所 熊本県阿蘇郡阿蘇町黒川字松の木「阿蘇の司」

参加者 男子の大学生および社会人、
約二〇〇名(女子については
紹介または推薦による)

研修テーマ
A 世界の動向と日本の進路
——総合的な現状把握・日本人としての自覚・青年学生の課題を含めて

B 基本的な人生観の探求
——学問と読書の態度・人生の表現としての和歌創作および相互批評・国民同胞感の体験的把握

実施要領
①講義「世界の転機と日本」

「日本文化の二十年周期説——民族の中核性格について」
作家 林 房雄氏

②「現代日本における学生・青年の生き方」についての討議

③班別によるフリー・トーキング

④木内・林の両講師を中心とするパネルディスカッション

⑤テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

⑥和歌創作および各自の創作作品の相互批評(思想および表現の正確さを修練するために)

⑦レクリエーション(阿蘇登山)

費用 参加費、学生三〇〇〇円、社会人五〇〇〇円(食費・宿泊費・プリント代を含む) 参加費・プリンター代を含む) 参加

申込 学生生の片道旅費は主催者負担
申込書送付先・東京都中央区
銀座七ノ三柳瀬ビル内 社団

法人国民文化研究会

想的混乱の真因を解く鍵がこの一言の中に秘められている、とその瞬間に直観したのである。こうなるまでには、書けば際限のないほどに先人や先輩、恩師、書籍等から色々の言葉を教ええらるって道を求めてきたが、この言葉が大きき一つのもの、日本人の持った生活原理の評価という点であり、西欧から做おうとしていたのは西欧の生活原理ではなく西欧の政治原理であったし、それが西欧の依ってきた生活原理に発生することに無頓着であったのだ。日本とは生活の基盤の異なることはつきり知るべきなのだ、だが今では、それに気付くことなく、その生活原理は政治原理を通して大分染りつゝある。眼は内から外へ向かった、そして少しは見えるようになった。

こうして昭和三十九年の年頭から、何とかしてこの事を書き残したい衝動にとり憑かれてしまった。何度も書いた、だが、ものにはならなかった、インスピレーションが湧けば、手当たり次第どんな紙にも書きとめた、食事中も、バスの中にも、歩行中、睡眠中も無関係であり、封筒からチリ紙に至るまで利用した。時間も場所も空間もなかった。そうして宝辺、山田の両先輩に見せては教示を受けた。そのうちで、それとは別個に、フット「新ルネサンス」をその年の十一月に書いた。四百字原稿用紙僅か八枚足らずの短いものだったが、書き終えた時、解脱感というものを初めて味わった。何時死んでも思い残すことはなかった。

然し猶も書き続け続けた。四十年十月に「人間尊厳論の暗い影」を脱稿した、原稿用紙二十五枚であった。又その先を続けた。もはや何回書きあらためたのかわからなくなった。若松の山田さんの宅へも数回訪れては教示を受けた。そして、文明の戦いと題して原稿用紙一二〇枚程度のものを四十二年の二月に脱稿した。ものを書くという事の困難をまざまざと体験した。それは書くというよりも己の本心をあらわすことであつた。ものを考え行こうに当つての根本の原理はどこにあるかという己の体験の漂白作業であつた。その内容の価値はともかくも、こうした国の進運に関する熱意を述べる気をもてたという体験が重大事であつた。そしてその気を起こさせるような、そうした国に生れたことを、こよなくうれしく思った。国が興るとはこのよ様な事実からのことであろうか。日本は亡びなかつた、自分が亡びることが日本が亡びることであつた。あの「一つの精神」の甦つたことが遂に私をこゝまで導いてくれた。

「特攻隊の死」が日本を救つた。そしてそれを心を知る時多くの日本人が夫々の姿で悠久の世界を歩み続けるのである。

昭和四十二年五月十八日記
(山陽電気軌道宇部営業所長)



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル3階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南郷町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間360円

合宿への積極的参加を

「国文研」の合宿は、この夏、阿蘇で行われる。今年も又、多くの青年学生諸君が参加してくれるであろうと期待しておるもの、一人である。

この合宿は、何時も考えておることであるが、主催者と参加者がわかれて営むものではない。私共が日常接しているような、新聞と購読者、劇場での役者と見物人、舞台と観客席とへだたつたものではない。このことは、他の所謂、練成合宿とは異なるものであり、それ故に、過去、年一回ではあつたけれども、何のひるむことなく、現代学生の生活に、「ほんとうに生きる道」を発見する原動力となつて今日に及んでおり、同時に、この合宿が、日本の運命——国のいのちに直結して行こうとしておる唯一のものであらうと、私は確信しておる。

だが、私自身のことを反省してみると、日々多忙を口実に、合宿参加を積極的に呼びかけることも怠り、合宿成立に格別の御協力をしていただいた方々、運営

に文字通り献身的な努力をされてる先輩諸兄に、何の力添えもしていないのではなからうかと、合宿も迫つた今日、痛切に考えさせられる。昨年夏、酷暑のもとで、思いがけなくも、諫早(長崎県)のバス停留所ではつたり、鹿児島大の川井先生にお会いし、ほんの二言三言話したま、何だか、いたまれない気持ちとすまない気持ちで、そのまゝ、私は東京に戻つて行つたのを思い起すと、どんな事情があつたにせよ、怠慢はせめられるべきもの、こんなことではいけないとの思いが先立ちます。

とりわけ、今日の学生諸君が、所謂「自治」の名のもとに、民主主義と自由を謳歌し、真の学問とは、人生とは、国を守るとは等々の根本的命題にとり組まないで、単なる就職の為の高専常識を備えることで易々としているのだとしたら、これ程、残念なことはない。

この頃の雑誌にも指摘されたように、大学が、「大学卒というパスポートをほ

しさにやってくる」とすれば、イギリスの大学教育にみられるように、「在学中は返済しない鍛練が必要である」として「学生たちは常に勉強することを余儀なくされる」とすれば全く、大きな差と云わねばならないでせう。一〇年後に有望な職業は「何か」と云う問いに答えて内容をみれば、「宇宙科学技術者」「情報サイピス業者」「コンピュータシステムエンジニア」「化学技術」等、我々、人文科学、精神科学、の重要性を特に考えているものにとつては全く重大な問題を提起しておると思へざるを得ないし、かゝる科学の進歩が優先される時代はわかるとしても、わずかにヒューマンリレーションを強調するだけではも早、それは一つのテクニクにしかすぎぬと思うのは私一人だけであらうか。何れにしても真剣に生きるということが、我々も、又青年諸君にも充分考えてもらわねばならぬことでありませう。

或る学生は、「日本文化を研究する」という言葉を聞いただけで抵抗を感じるのともし、おりました。考えてみれば、本人は、その事を「日本語」で話しております。日本人が日本語を話すことに抵抗を感じるというのと同じ発想法ではなからうかと思われまふ。だが、殆んどこの学生が、そのように受取つておるとすれば、まさに日本も、くらげなすたゞよえる国に、もつと極端な云い方をすれば、日本のヴェトナム化に、精神的には通じておると言えるのではないかと案じられますし、その根本原因は深く、根強

雑誌「経済往来」に、国学院大学教授の戸田義雄さんは、「現代青年の感性と思索」と題し、きめつけの論理の横行を批判しておられますが、私にとつては、是非、現代の青年諸君に読んでもらい、且、わかつてもらいたいもの、一つであります。同氏は、最後に、聖徳太子の御言葉を用ひされております。即ち、「悲心抜苦」「苦しむ者と苦を共にし、苦を別ちあう大悲心、これあつて人の苦を救うことが出来る」と。「人格的共感が救いの根本である」との教えである」とし、きめつけの論理の横行する精神状況は、共感世界の消失を物語つておると、結論しておられます。特に私が印象に残つたのは、「心」の問題です。人生には、ある転機によつて人間が精神の突然変異とでもいふべき変化が立派にあり得るのだとし、(以下原文のまゝ)著者は亡き恋人の死を思つては泣きに泣いた。言葉では言い尽しえない恋人の死の動機を思つた時、それまで世にありうる悲しみの深さはすべてを理解することができ、批

目次	
合宿への積極的参加を	小泉一也 (1)
草莽非運の志	
—赤坂隊相良三のこと	宮脇昌三 (3)
防人の歌	沢部寿孫 (5)
クラブ生活と求めるもの	岸本弘 (6)
中東動乱とマイ伝	瀬上安正 (7)
☆ 合宿教室事務局から	

評することが出来ると信じていた頭脳の尺度をはるかに越えるものがあることに目覚めしめられた、この時点において著者はじめて、頭脳を通してではなしに心によって、何が真実に幸福であるか、不幸であるか、おぼろげながら察するものが出来るような気がしたと言う。(この悲劇的体験が著者の人格に生かされ、まもられ、それを育て、ゆく)

私共は、日頃、「心を開いて語り合う」と申しておりますが、このことは、普通に私共が考えておる、それも頭脳の尺度で考えておるよりはるかに次元の高いものを求めて行こうとしておるのであり、若き青年学生諸君にこのことを合宿で体験してもらいたいと思う。と同時に、日本文化は、それ程高度なものの、威厳のあるもの、言いかえれば、人間一人一人が生きる原動力となるものであると申しても決して過言ではないと私は思うし、このように生きていき度いものと念願しており、それは又「同胞感」と云えませう。

しかし乍ら、現実はどうか、或る人は、新聞を読んだだけでは事の真相はわからぬと云う。ニュースはニュースではない。尤も最近の新聞、特に「朝日新聞」の記事はおだやかでない批判されておりますが、簡単に云えば、ジャーナリズムは、無責任の代表かも知れませんが、もつと卑俗な言葉で云えば、「犬が人間に喰いついて」あたり前、「人間が犬に喰いつかねば」ニュースにならぬからであります。最近の、週刊朝日のグラビア欄をみますと、第一頁にカラー

で、佐世保に入港した、米國潜水艦(ソ聯潜水艦と衝突)の写真数葉、次は、大留学中のヴェトナム人(帰国を命ぜられた学生の反対運動)の記事、そして、裏表紙のグラビア記事が皇太子御夫妻の南米御旅行の記事となっております。これは、あきらかに編集者の意図が問題になります。ニュースがニュースでしかないことは、マンモス都市、「東京」に住めばすぐわかることです。けれども目の前の事に一喜一憂しておつてはとも人間、心豊かに生きることが覚つかないうにも思えます。

或る人は、私に、よく本を読む暇があるのかと皮肉つています、事実、私の生活はそれほど多忙でもありません、逆に云えば、そのように自分自身を追いやっておるのかも知れません。それだけに、もてる鈍才をもつて普通の人以上に努力をしていかねばならないし、私はそれは出来ると思う、一國文研の事を思うとき。國の将来を思い、國の内外におこる一連の変化—或は激動とも申せませう—を考へる時「学問」に真の情熱を傾け、「日本文化」の「開展」に一層の努力を、時代をになう青年諸君と共に続けて行かねばならぬと思う。

合宿まで残された日数は少ない、レジヤープルームも眼のあたりにあるが、安易な考え方を排除して、合宿参加を決めよう。それが今後の人生の方向を決めることにならうかと思う故であります。

私共は、眼のあたり、自分の生命をかけて最後のエネルギーを燃焼させようという渾身の力を発揮しておられる姿をみれ

ば、多忙といふ苦しみといふもの、数ではないように思う、そして自分も又、「姿勢」を正し、ニガニガしい人生からニギニギしい人生へと変化さすべく最大の

努力を重ね、ばと思う。一度はイノチをすてた筈である故。
(三菱重工長崎造船所 小島一也)

開催予告

第十二回学生青年合宿教室

主催 大学教官有志協議会
社団法人国民文化研究会

期日 八月七日(月)午後三時より
同十一日(金)午後一時まで
四泊五日

場所 熊本県阿蘇郡阿蘇町黒川字松の木「阿蘇の司」

参加者 男子の大学生および社会人、
約二〇〇名(女子については
紹介または推薦による)

研修テーマ

A 世界の動向と日本の進路

——総合的な現状把握・日本人としての自覚・青年学生の課題を含めて

B 基本的な人生観の探求

——学問と読書の態度・人生の表現としての和歌創作および相互批評・国民同胞感の体験的把握

実施要領

①講義「世界の転機と日本」
世界経済調査会理事長
木内 信胤氏

「日本文化の二十年周期説
—民族の中核性格について—」
作家 林 房雄氏

②「現代日本における学生・青年の生き方」についての討議

③班別によるフリー・トーキング
④木内・林の面講師を中心とするパ
ネルディスカッション

⑤テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

⑥和歌創作および各自の創作作品の相互批評(思想および表現の正確さを修練するために)

⑦レクリエーション(阿蘇登山)

費用

参加費、学生三〇〇〇円、社
会人五〇〇〇円(食費・宿泊
費・プリント代を含む)参加
学生の片道旅費は主催者負担

申込

申込書送付先・東京都中央区
銀座七ノ三柳瀬ビル内 社団
法人国民文化研究会

草莽非運の志

——赤報隊相楽総三のこと

宮 脇 昌 三

明治元年より数えて、明昭和四十三年が満百年を閲することから、明治百年か戦後二十年かという論争が続いている。

明治維新からこの百年の歴史の継続か、敗戦という革命的な事態によって一変したのだから、戦後を別個特異な社会体制として考えるべきではないか、という論点があったようである。民族や固有国土において著変がないのであるから、後者の考え方は、明治百年ということによって、復古思想や新たな国家主義が再現することを警戒し、全面降伏・民主主義導入の時期を強調することによって、戦後を、明治大正八十年と断絶した時期と規定すべきであり、さように自覚することによって国民が現在享受しつつある平和・民主主義を押し進めようとする意図があると解釈されるようである。

明治百年ということとは、国民一人一人にさまざまな感慨と思想を呼び起すのであるが、後者、即ち戦後二十年論者に目だつ点は、歴史的文化的事実として、一つの生命体である国家についての認識や痛感の欠除である。連続であるから生命体であって、非連続の生命体ということがときは、事実と論理に背反するのである。

国家が歴史的な生命体であるというとき、それは停滞することなく変転変貌するのであって、日本国家は、太初以来、生々発展という国民的宗教的念願によつて支えられてきた。生命体である以上、それは不断の変革によつて更新されねば生命の根源は枯渇すること必至である。変革には、時に天地顛動の大改変も起りうるのであつて、大化の改新や明治維新がそれであり、敗戦被占領も、エポックメイキングな変革であつた。しかしながら、それによつて、日本国という生命体が断絶したわけではないのである。

時運によつて国家生命は、時に細く閉塞し、時に豊かにひろがるのであるが、それが連続不断的生命体であると確信するとき、その生命を、豊かにまた深らかに、培かうものとしての、諸事象諸文物の価値規準は自ずと治定されるのであつて、この観点にたつ論争は、たとえいかに激烈であつても、実り多きを約束されるのである。

さて明治で一新以来百年という、その維新開闢という一大動乱変革の時期においては、個人の運命はまさに端倪すべからざるものがあり、一步の進退、一時の去就が、千里の距りや親疎恩讐正閏を決し、敵味方を分つに到るのである。勝てば官軍、敗れば賊軍という場合もあつて、その歴史的批判は、後世に委ねられるのであるが、その場合、何よりも先行すべきは、当事者の、不幸にして就らなかつたにしても、志すところ、那辺にあつたかを明弁することである。

当地諏訪郡下諏訪町に、相楽(さくら)塚(きがけ)が立っている。大少二基あつて、大きい方には

相楽 総三

- 渋谷 総司
- 大木 四郎
- 西村 謹吾
- 竹貫 三郎
- 小松 三郎
- 高山 健彦
- 金田源一郎

と記し、隣りの一基には、「招魂之碑」として、金原忠藏・熊谷和吉・丸尾清・北村与六郎の四名の名を記す。前者は、赤報隊総裁相楽総三以下隊士で、慶応四年三月三日、東山道総督府の令によつて断頭梟首されたもの、氏名であり、後者は、明治三年八月、その霊を慰むべく建碑した人々の氏名である。

相楽総三

右之者御一新之時節ニ乗ジ 勅命ト偽リ官軍先鋒嚮道隊ト唱ヘ総督府ヲ欺キ奉リ勝手ニ致シ進退一刺(ハ)諸藩ヘ応接ニ及(ビ)或ハ良民ヲ動(カ)シ莫大之金ヲ貪リ種々悪業相働(キ)其罪数フルニ遍アラズ此儘打捨置候テハ弥以(テ)大変ヲ醸シ其勢制スベカラザルニ至ル依レ之誅戮梟首道路遍(ク)諸民ニ知ラシムルモノ也

三月

また大木四郎以下七名については、冒頭「右之者共相楽総三組シ」と記し、

以下相楽の場合と同文である。

この偽官軍また強盗の所業という罪名によつて処断された相楽総三とは、いかなる経歴のものであろうか。相楽について多くの見たのは、「諏訪史料叢書」(巻十三)中の「相楽総三関係史料」(昭和五年八月刊)と、長谷川伸著「相楽総三とその同志」(昭和十八年五月刊)の二書その他で、それによつてかれの略歴を見ると、――

本名小島将満といひ、相楽総三はその変名である。下総の郷土で江戸赤坂に住み豪富であつた小島兵馬の末子として、天保十年江戸赤坂に生まる。総三、幼時より幕臣酒井錦之助に養われ、二十歳ごろは文武の道に秀で、特に兵学を得意とした。二十二歳の折は既に弟子百余人あつたという。何れの師についたかは明らかでないが、平田派の学に通じ、尊王攘夷の思想に立ち、二十三歳のとき父から五千両を譲りうけて飄然家を出て、同志を糾合し、これより東奔西走、京師に上り、王事に画策した。その当時の著「華夷弁論」は、長州藩主の嘉賞するところとなり、その跋文を賜わり、欣喜省躍した和歌を残している。

みな人のえがてにすよふぬ川の底なる玉をわれはいまえぬ

海士の子が浦わに出でゝあさるてふ

真玉もしかじ君が言の葉

当時薩藩西郷隆盛と相知り、その冥約のもとに、江戸で浪士を糾合し、江戸の騒擾を計つて幕府方を挑発させ、討

幕の名目を得んとした。慶応三年十二月の、幕府諸藩による薩摩軍敷焼打がそれである。当時薩摩には、総裁相楽総三以下、同志落合直亮（直文の養父）・渋谷総司・石城（がき）東山（諏訪）など数百名があり、この時の焼打ちによって、相楽らは、薩摩藩の軍艦翔鳳丸によって逃れ、再び京師に上る。西郷南洲は、この幕府方による江戸薩摩焼打ちを大いに喜んだ。幕府方挑発されて、翌慶応四年正月、徳川慶喜は兵を率いて京都に入ろうとして、いわゆる鳥羽伏見の戦となり、薩長軍は、官軍としてこれを破るに到った。ついで総三は、西郷の奨揚により、綾小路俊夷・滋野井公寿両卿の討幕先鋒となるを奉じて、官軍警備隊一番隊（赤報隊）を組織し、その隊長となり、道を東山道にとつて、ゆく／＼沿道諸藩に布告し、勤王の実効を検断しつゝ、慶応四年二月初旬、信州下諏訪に着陣する。

かくて同月下旬、いよいよ東山道総督の本営（総督岩倉貞定・副総督岩倉八千丸）が下諏訪着と聞いて、二月二十七日、相楽以下赤報隊の一行は、下諏訪の本陣をひき払い、下諏訪より和田峠に近い樋橋村（現下諏訪町の内）に移ったが、二月二十九日夜、御軍議有之候間、即刻、総督御本陣へ、御出頭可申有之旨、御沙汰ノ事 総督府参謀 という出頭状が届けられ、その夜捕縛され、三月二日には、

総人数、早々参著可申致モノ也 総督府執事 と、相楽直筆の、別紙の通り被仰渡候間、早々総人数共、御本陣迄、罷出可申候 以上 相楽総三 という呼出状によって、隊員一同喜び勇んで、下諏訪本陣に到ると、二、三回ずつ、脇本陣に呼び込まれ、総員捕縛され、下諏訪明神の並木の下に連行されて、木に縛りつけられ、翌三日夕方、相楽以下八名のは、下諏訪のめれの友之町矢木崎にある張付田（森田）という刑場で斬首された。処刑当事者も誰ということもわからず（総督府参謀は、後藤象次郎、板垣退助の両名であった）、辞世をとゞめる余裕も便宜も与えず、まこと無惨非情の取扱いであった。

前記断罪の高札に示された偽官軍また強盗掠奪の所為の実否について追跡してみろ。 慶応四年正月、京都に在つて滋野井・綾小路両卿に従ひ、討幕軍警備隊として出発するに先だち、相楽総三は、太政官に建白書、歎願書を奉つたとき、次のごとき勅諭書を賜わっている。 滋野井侍従・綾小路前侍従 其手ニ属シ候草莽士徒前勤 王之志不浅趣殊ニ関東民情并知之間モ有之候間旁以尽力可仕三道官軍打入之節ハ御印之品朝廷ヨリ下賜候間其節ハ速ニ東下億兆士民 王化ニ服候様嚮導先鋒可仕夫迄之処著ニ兵力 儲ニ糧食 機会到来ヲ相待无過日被ニ仰付ニ候通り東海道鎮無使之隨ニ指揮ニ候様可申候 御沙汰ノ事 正月 但今度不レ爾干支ニ至候儀ニ付テハ万民塗炭之苦モ不レ少依レ之是迄幕領之分總テ当分租税半減被ニ仰付ニ候昨年未納分モ可為同様に米已年以後之処ハ御取調之上御沙汰可申被レ之、在候儀ニ候間右之旨分明ニ可申付事

強盗掠奪という罪業については、二月二十四日の令達には何ら触れず、語るに落ちる趣がないではない。然し赤報隊加盟の中には無頼漢に類する一旗組も尠からず、庶民を脅喝し金品を食つたものも皆無ではなかったが、全体の規律は嚴重で、各藩献納の金品は、明細の記録を残し、米穀類は約束の量を記載報告し、現品を受けとらない。

赤報隊処刑の前夜を目撃した下諏訪本陣の主人岩波太左衛門の談話は同時に、当時の一般民衆の印象であった。その談話を要約すると、どうも目のあたりこの処刑を見た人々の心にはわり切れないものがあった。総三が以前から諏訪に來て交つたのは飯田武郷や石城東山など指導者階級の人々であったこと、総三の態度が目立って立派であり、宿の支払いも十分、人使いもおだやかで、特に衆人環視の中をひかれて行くときの平然たる態度、首をさられる時のおちついた有様など、どうしても悪い人とは思えず、このことが同情になつて、その当時から総三こそ勤王の人だと言つていた。そして弱い子や夜泣きの子には魁家の土を枕元においてやるとなるといつたり、悪性のかげが流行すると相楽かせといつたりした。そして地元の人々がずっと早くからこの塚のまつりを絶やさなかつたのは、こうしてめぐまれますにたおれた総三の真心をいとおしむ気持が深かつたにほかならない。云々。

○ 相楽総三には、姉はま子が筆録し、落合直亮が撰した「將滿詠草」（短歌二十

六首、長歌六篇)があり、本稿の最初の意図は、この詠草によって、かれの志操のありかを闡明しようとしたのであるが、紙面が足りなくなつたので、その詠草の二・三を抽出するに止める。

野旅 都出でて日数立野の夕露にしほれ果てけり旅の衣手

今年当三元治乙丑一而余年二十有七。未達其志一、坐觀二世之姿態一、徒見三白駒之過隙。是豈志士之所レ

防人の歌

沢部 壽 孫

『アジアは今、激しくゆれ動いている。後進地帯への共産主義の衝撃が、到るところで激しい動乱をまき起しているのだ。……』
これは国文発行の「日本への回帰―第二集―」の冒頭の一文である。昨日今日の新聞はイスラエルとアラブ連合の動乱の報道で一杯である。一瞬としてどまることなく実に世界はゆれ動いている。戦車と戦車、飛行機と飛行機がぶつかり合っているのを目を奪われすぎてはならない。思想と思想ははげしくぶつかり、戦いをくりひろげていることに注目しよう。……このように力と力が軋み合い、火花を散らしている国際政治の世界で、日本だけが驕のように泰平である。他国がの意思によって、いつても侵犯できるような脆弱な「平和」が続いている。……『戦後思想の最大の盲点』は、われわれの視野から「国家」と「死」の觀念がすっぽりと脱落していったことであつた。……「ずしりと胸にこたへる文章である。ベトナムや中近東の戦乱を本当に知ろうと思うならば、この戦後

為乎。憤激感慨之情迫二千此一乃作歌あめつちにたまらひませる。玉ちほふ神の心をたのみつ、吾いのれどもしるしなく月日はまかり。あらたまの年は来へゆく。うまこりのあやにかなしも。何しかもうたひまきぬか。いたづらに。かくしもあらば。いけりともかひもなければ。たまきはる吾いぬちをら。天地の神しは。をしけくもなし。(長野県立岡谷東高等学校校長)

最大の盲点即ち「国家」と「死」ということに對して各自がひとりひとり身をもつてきたへる事が出来なければならぬ。昨今の新聞、テレビの報道にしても、政府の外交あるいはその他の政策の面にしても、この一番大切な問題を避けているため、闇のびしてしまつてひとつも緊張した姿勢が感じられない。このような姿勢で一体何がわかるのであろうか。自分自身がいかにも価値ある人生を生きよつと必死でいる時私達ははじめて他人の悩み、苦しみをそれとして受けとめうるのであろう。いい加減な気持ちで他人の苦しみ、悩みを知つたとすれば他人に對する冒瀆になるであらう。
私は学生時代に友と共に書を読み生活を共にするという貴重な体験を得たが、その折友と一緒に読み味わつた防人の歌を忘れることは出来ぬ。日数が経つにしたがってますます生き生きとしてせまってくるような気がする。
防人とは上代より平安初期にかけて辺境の要地を準備した東国出身の兵士のことである。任期は大体三年が基準だつた

らしいが当時の三年と現在の三年では全く意味が違う。それこそ明日をも知れぬ思いであつたらう。防人の詠んだ和歌は万葉集の巻二十に収められているがそのうちの一首か二首にはおおかたの人がふれた経験のあることだらう。今の様に鉄道はおろか道さえもろくにはなかつたような時代に関東の各地よりはるばる道なき道をふみわけて難波津(今の大阪)に集つて、そそより速く旅立つて旅立つて行つた防人たちの心情はどのようなものであつたらうか。それを知るには彼ら自身の詠んだ歌にふれる以外に方法はないであらう。私達はよく歴史を平面的に図式化したり、又そうすることににより概念的に体系つけて理解しようとする気になつたり又それをもつて批判したりすることが多いようにも見受けられる。歴史がその時代／＼に生きた人々の精神の積み重ねだとすれば私達はまず何よりも先にそれらの人々の遺した文献にふれて確かめてみなければならぬ。それが正しい研究方法であらう。自分の眼あるいは心で確かめることによらずして、他からの借りもの知識で歴史を眺めたり、断罪したりすることは歴史に對する冒瀆に違いない。私達が歴史を語る場合にはまず何よりも先に過去に生きた人々の遺した言葉を正確に理解しようとする姿勢が必要である。

畏きや命被ふり明日ゆりや草がむた寝む妹無しにして
わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず
時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出来ずけむ
父母も花にもがもや草まくら旅は行くともさきこて行かむ
勅命を受けて筑紫(今の九州)へ任務

に赴く際の気持ちを詠んだ歌や旅の途にの歌である。明日よりは寝食を共にした妻とはなれて草を枕にしなげける妻のいのちかと嘆く歌や井戸水にうつる妻のおもかげが恋しくしてたまらぬといふ歌、あるいはもし父母が花であつたらば遠い筑紫までも手にさげてゆくのだがといふ歌もある。どの歌にも最愛の妻、父母に對する悲痛な思いがこもっている。

水鳥の鶯の急ぎに父母に物言ず来に
て今ぞ悔しき
わが妻も畫にかきとらむ暇もが旅行く
吾は見つししのほむ
出で立ちの時のあわたたしさがそのまま
伝わってくる感じで防人の純朴な思いが
胸をうつ、もし筑紫で国の防護にあたる
といふような使命がなかつたならば彼ら
は一家の中心として父母や妻子らと穏やかな家庭生活を営んでいたのであろう。
吾等旅は旅と思へど家にして子持ち瘦
すらむわが妻かなしも
忘れむと野ゆき山ゆき吾来れど吾父母
は忘れせぬかも
使命をおびてゆく自分は祖国防護といふ
目的のある旅だとは思ふが、家で子供を
かかえて苦労している妻のことを考える
とたまらぬ思いがする。又任務に赴く
以上は雄々しく出で立たねばならないと
自分自身に言い聞かせながら野を越え、
山を越えて来たけれども父母を忘れるこ
とは出来ないのだといふこの歌は、統一
しようとしてもどうしても統一すること
の出来ない防人の心を素直に表現してい
る。この歌は私の最も好きな歌の一つで
ある。
天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の鳥を
さしてゆく吾は
さまざまの思いをいだきながら東国より

旅して来たが、既に灘波津を過ぎて今は筑紫へ向う船上である。今はただ神に祈って任務をまっとうするだけである。「天地の神を祈りて」というこの言葉のうちにこもる思ひは強烈である。「幸矢貫き」という言葉も統一された意志を感じさせて力強い。このように名もない防人

達の心が一千年も経た今日でも生き生きとしてせまってくるのは防人の歌に永遠に消えることのない生命がこもっているからであろう。歴史とはこれら名もない防人達の心が継承され続けることにより作られて来たのだということに肝に命じておく必要があるのではなからうか。(日商株式会社)

クラブ生活に求めるもの

岸本 弘
(富山大学・工学部四年)

人は自分の死が知らされた時、目前に迫っている死を感じた時、生きていくことの大切さをこの上もなく強く感じ、もはや一日も無駄にたくなくと言う気持ちになるのではないか。適切な例えとは言えないが、卒業の日が、日、一日と迫っている自分の気持ちもそれに似たものと思

う。四年間という大学生活は今まで本当に長く感じられた。いつになっても卒業などまだまだと言う気持ちであった。ところが四年になってからの日の立つのの速いこと、心ばかりあせり、何一つ満足に出来ないままに日が立ってゆく。そろそろ卒論にもとりかからなければならぬが、今までで学業の面では実に怠惰な自分であったから、せめて最後の卒論だけはまともにとりかかると言う気持は十分にあり。しかし現在の自分は、まだまだ卒論のみに没頭する気にはなれない。僕にはそれ以上にどうしても卒業の日までやり通さなければならぬ事がある。それはクラブの事である。

僕は大学に入学して以来今日まで、ひたすらラグビー部活動に徹して来たつもりである。初めはクラブ活動は自己の鍛練の為であった。いや単に自己の鍛

練、修養に止まらず、団体生活を通じての楽しさ、喜びと言うものも感じていた。そしてクラブ生活から得られたものは大学生活のある一面であると考えていた。しかし今、クラブ活動は単に大学生生活の一面に止まらず、自分の学生生活に大きな意義を投げかけている。

ある以上、ひるがえって先づ大学とは何かを考えなければならぬ。大学はいろいろの学部に分れている。工学部、教育学部、法学部；等に別れ、その各々の学部は又多くの学科に分れている。そして大学を卒業すると言う事は、一つの学科の極く限られた範囲の専門知識を修得することである。現にそうであるが、果してそれで大学の意義は全うされているであろうか。僕はそれは納得がゆかない。大学生は知識の多少によってのみ、高校生や中学生と区別されるだけではないか。その他には安っぽい処世術を身につけているだけではないか。

僕は大学に限らず、現代の「学問は何か」と言う、それ自体を疑うのである。明治になって西洋文明が輸入される以前、日本古来の学問は「修身齐家治国平天下」と言われるように、それぞれ環境の中で、身を修め、道を求める事であったと思う。道を求めるとは永久不変の真理を究める事であり、命がけの仕事であった。そしてそれが学問であった。ところが明治に入り西洋の文明が輸入されると、それは著しい隆盛を見せ今日に至っている。今日では、科学的に得るもののみ、又数量的に表わされるものこそ学問であると考えられている。科学は確かに我々の生活を便利にしてくれ

た。しかし生活が便利になったことと、人間の根源的な悩みが解決されたこととは全然関係のない事である。人が如何に生きるかと言う悩みや苦しみは依然として変らないものであり、科学も又永久に解答を与える事は出来ないと思う。さすれば我々が科学に絶対的な価値を置く事自体、偏見であり、科学的に物事を追究する事をもつてのみ学問と称する事もおかしい話である。

ここで再び大学について考えると、大学とは専門知識を学ぶ以前に、人生には何が一番大切な真剣に求める事が必要であると思う。この事は多くの先人が命がけで取組んだ問題であり、四年間の大学生生活だけでは決して大したものがあるとは思わぬ。しかし自分は何に価値を求め、一生を何に捧げるべきかと言う人生の目標は掴めるものと思う。僕らがそれをたずねて友を求め、その友と共に古典を学び、思想生活を鍛えようとしている、そしてそのつながりを広く求めようとしている。それを「学生運動」と呼ぶならば(政治的イデオロギーの旗をふりかざす、よくある学生運動とはがった意味で)、それは、学生時代にのみ止まるものであってはならない、一生求めて止まないものでありたいと思う。又

人生とは決して理屈ではない。だから我々が「学生運動」を通じて求める態度も決して理屈であってはならない。あくまで体からぶっかってゆく積極的な態度が必要である。我々が悩み、苦しんでいる問題について、既に先人は幾多の解答を与えていた。しかし我々に必要なのはそれらの解答をうのみにする事ではなく、一つ一つ実践によって確かめ、生きた知識として身につけることであると思う。

再びクラブのことに戻るが、僕は今まで、学問に対する考え方、又学問の実践としての「学生運動」を通じてクラブ活動の意義を考えて来たつもりである。つまりラグビー部の活動も立派に一つの学生運動であり、それ故にクラブ活動に求める態度そのものを学問と考えているのである。

さてクラブ活動の一面を紹介すると、クラブとは先にも述べた様に確かに自己の修養、鍛練の場と言う意味をもっている。自己の鍛練とは即ち自己との闘いである。自分の力の限界を毎日の厳しい練習によって少しでも高めなければならぬ。自分との闘いは実に苦しいものであるが、先づ自分との闘いに勝てないようではクラブ活動を続けることは出来ない。上級生になればなる程、先づ自分に厳しくなければならぬ。

次にこれは四年になってから考えさせられている事であるが、自分一人が真剣に求めても又部員のめいめいが、自分の思い思いに求めてもクラブの意義は全うされないと思う。クラブが団体生活である以上、一人の部員の悩み、喜びが生きて求めようとするものは即ち他の全部員の悩みであり喜びであり、そして共に求めるものでなければならぬ。ここに至

て初めて、とかく形式に流れがちな運動部の秩序も正しく理解されるものと思ふ。現在またまた至らざる自分の態度を

中東動乱とマタイ伝

瀬上安正

一、イスラエルは自国を守り通した
イスラエルとアラブ諸国との戦争は、開始以来十日足らずで終つた。世界が三度う予感に動揺しつゝあつたし、現今も国連では戦後処理のための激しい論争が交わされ、更にその無能をも示して居る。

然し此処で忘れてならないのはイスラエルは自らの国を自ら守り通したということであらう。

イスラエルは建国以来二十年を経過してはいない。その大きさは四国位の大きさであり、人口は二六〇万、熊本県よりは僅かに多い丈である。四国といえは緑の島であるが、テレビで見るとイスラエルは砂漠である。此の砂漠や岩の山に遠くより水を引き果樹を植え、又植林している。「緑のある所はイスラエル側、緑のない所がヨルダン側です」之がパスガールの説明の合言葉だといふ。

片やアラブ諸国はエジプトから中東東に亘る長大な面積と人口を擁し世界の一勢力ではないか。世界屈指の石油資源を持ち、スエズ運河を手中に収め、アジアとヨーロッパとアフリカの接点にある。一見此の対比はイスラエルの劣勢を思はせるにも拘らず、イスラエルは自らの手でその危機を棄つた。

日本国憲法には「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全

思い知らされるが、クラブに対し精一杯の誠意を尽してゆきたいと思つて居る。

と生存を保持しようと思つた。」と語つて居るが、自ら守ることを意志せぬ国を誰が代つて國を守つて呉れるであらうか。

二、マタイ伝に現れた建國の祈り

二千年前イスラエルは建國を祈念渴望しつゝあつた。新約聖書の全ては、建國の祈りとさえ思はれる。マタイ伝が編まれたのは建國のならざるまゝのローマの圧政下である。

ユダヤ人の王たるべき人が生れたと聞いたローマ人のヘロデ王は、二才以下の男児を皆殺しにし、為に「慟哭なり。いとどしき悲哀なり。……子等のなき故に慰めらるゝを慟ふ。」天国と直感されるのは、自らの祖國ではなかつたかと思はれる。

「バベテスマのヨハネ来り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言ふ。『なんぢら悔改めよ、天国は近づけり』』とあるその天国とは具体的にはユダヤ人の國そのもの、祖國イスラエルそのものであらう。圧政の下に於ける建國の英雄達は天国と云はざるを得なかつたのではないか。

第一次大戦中のユダヤ人の利敵行為、その終了後ドイツのマルクの暴落を種にして、ユダヤ人がドイツに集まり、大儲けをして、ナチにユダヤ人排斥の根拠を与え、又第二次大戦中ナチによるユダヤ人六百万の逆殺の悲劇ともなり、ユダヤ

人自身が自らの國を持たぬということ、逆に世界の禍乱をも招いたのである。

二千年の間建國の夢を子々孫々に伝へたといふことは偉大であるし、流亡二千年の未漸く得た祖國イスラエルを、今後は全てを捧げて自らの手で守り抜くであらう。反面自ら守る決意を捨てた日本の将来を憂うるのである。

中東動乱を見つめて改めてバイブルを読み直して感じたので書いて見た。

(マタイ伝第十章)「イエスの十二人を遣はさんと命じて言ひたまふ。「異邦人の途にゆくな。又サマリヤ人の町に入るな、寧ろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。往きて宜べつたへ」天国は近づけり」と言へ。」

こゝに異邦人とは非ユダヤ人のことであり、住む家も無きユダヤ人の所に行けと命じて居る。

「視よ。我なんぢらを遣はすは羊を豺狼のなかに入るゝが如し。この故に蛇のごとく、蠍のごとく素直なれ、人々に心せよ。それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭たん。」

また汝等わが故によりて司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに証をなさん為なり。……われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず。反つて剣を投ぜん為に來れり。それ我が來れるは人々をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嬢より分たん為なり、我よりも父または母を愛する者は我に相応しからず。……又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相応しからず。生命を得るものはこれを失ひ、我がために生命を失ふ者はこれを

得べし。」

此処に述べられているのは異邦人ヘロデ王の圧政によつて亡國の旅を続ける人々に對し、人々が自ら立ちて、自ら國を持つべきための信とアピールであらう。見よ、今のイスラエルにギブツがある。之は祖國防衛と産業開発の担い手であり、今度の戦争において、恐らく中心的な役割を果したであらうと思ふ。

祖國イスラエルの為には、財を持つ者は財を、生命を持つ者は生命を、子を持つ者は子を役じて始めてイスラエルの國は護り継がれて行くのであらう。

「この故に汝らはかく祈れ。『天にいます我らの神よ、願はくば御名の崇められんことを。御國の來らんことを。みこゝろの天のごとく地にも行はれんことを。』」

こゝに「御國」とは祖國イスラエルであらう。ユダヤ人達が全てを得るためには、祖國イスラエルを先づ持つことであつた。

※註(キブツ)イスラエルの國には、約二百四十のキブツがある。之は大は二千名から小は六十名位の共産制農業集団組織である。

(本誌一月十日付、小田村理事長婦國報告会からの記事を参照)

三、故河村幹雄博士とキリスト教

河村幹雄博士遺稿集(斯道会編、井上書房発行)「基督の信について、祖國愛のうかがはるゝ節々」に河村先生は次の様に書いておられる。「馬太伝の記者は斯く録して居る。『イエス人々に語りをする時、その母と兄弟彼に物云はんとて外に立ちければ、或人イエスに曰ひけるは、なんじの母と兄弟なんじにも云はんとて外に立て

り。イエス告げし者に答へて云ひけるは、我母は誰ぞ、我兄弟は誰ぞや。手を伸べその弟子を指て曰ひけるは、是わが母、わが兄弟なり。(十二章四十六節)

水を治むるに急にして、幾度家門を過れども入るに遠なかつた。馬にも乗へようか。國のため家をも身をも顧みず、生死を共にする者はわが母わが兄弟と彼は信じたのである。」

祖国イスラエルの復興を思うイエスの心は之より外には云い様もない程適切な言葉と思う。

キリスト教を、単なる困境を越えた宗教と見、或は唯単なる個人の救済と考ふる誤を、河村先生は発見された。キリストの言葉の中より真実の日本に目覚むることが根本であることを発見し、今に生

「合宿教室」事務局からの緊急お知らせ

ことし八月七日からの第十二回合宿教室は、あと一ヶ月の後に迫ってきた。参加申込みをされた方々も、心身ともに鍛えられて勇躍、合宿地「阿蘇」に夢を馳せられておられることと思う。

すでに参加許可証といっしょにお送りしてある日程表はごらんになったと思うが、急に第四日目の日程の中に、

(一)経済学博士 山本勝一先生の「ベトナム問題について」の御講義が加えられることになった。山本先生は、昨年ベトナムを訪問され、その後ベトナム問題について内外の評論を本格的に取り上げて研究を続けて来られた方である。合宿教室への御来講については、快諾を得たので、その御講義は、期待して待ちたいと思う。なおそのため、第三日夜のパネル

語る者の道を、祖国日本と題目を唱えながら進み行く道を、キリスト者としての河村先生は見出されたのである。

四、中東動乱の宗教的意義

中東動乱は、アラブ連合側からのアカバ湾閉鎖を宣したことから始まるが、それは外見のことである。エルサレムをめぐる歴史的背景が深くして遠いことは、小田村理事長福岡報告会から「に記されて居るが、更に福岡の学生達に小田村理事長が述べられた言葉は次の如くであった。(此の話は中東動乱発生以前である)イスラエルの問題は、印パ紛争や、ベトナム戦争と異なる点に特に注意して覚えて貰いたい。イスラエルはユダヤ人(ユダヤ教徒)にとっても、回教徒にとっても、キリスト教徒にとっても聖地である。

きる者の道を、祖国日本と題目を唱えながら進み行く道を、キリスト者としての河村先生は見出されたのである。

デイスカッションには、木内、林両先生の外に、山本先生も加わられる公算が大となった。

(二)本会は先ごろ韓国政府に対し、この合宿教室に韓国から大学生の参加方を招請していたところ、在日大使館を通じて、左の通り団長以下男子七名の参加が決定し、当会の招請に応諾される旨の返事が到着した。この方々は、合宿全日程を参加されますので、ここに日韓国交回復以来、はじめてともいふべき、両国大学生の四泊五日に及ぶ合宿が実現することになりました。この韓国の大学生諸君と心を開いて語り合うことが出来ることを、私たちは参加者諸君とともに喜びたいと思う。

団長 文教部奨学官

る。これらの人々が聖地を奮回しようとするのがイスラエル問題である。トインビーは、「文明は一方が他を喰い尽くすまで闘う」と云って居る様に、パレスチナ戦争はなかなか解決しないので何度でも起るであろう。唯、日本は「古来の宗教」と外来文明である仏教、儒教を融合し取した。それは聖徳太子の生涯を捧げ尽しての三教義疏の御述作に負うところ最も大であるが、宗教問題を内的に解決する以外には此の問題を解決することは出来ない。

されば、将来此の問題を若し解決することが出来る者は日本であろう。此のことを特に忘れないで欲しい。と云って居られた。中東動乱が大事にならずに終わった今日、特に強くこの話が心に残っていたので記した。(熊本県林業研究指導所)

Mr. Lee Sung Jo (51才)
韓国外国語大学 日語科三年
Mr. Kim Jae Jung (25才)
友石大学校大学院 国文学科
Mr. Cha ChungJin (25才)
ソール大学校 文理科大学
外文学科三年
Mr. Chang Jae Young
(以下日本字不明) (21才)
高麗大学校 法科大学 法学部三年
Mr. Lee Hyung Mo (21才)
延世大学校 法政大学 行政学科三年
Mr. Pang Sang Kil (22才)
慶北大学校 師範大学 教育科四年
Mr. Kim Kyung In (22才)

★新刊案内★ 『日本への回帰』第二集

★新刊案内★
『日本への回帰』第二集
大学教官有志協議会編
社団法人国民文化研究会編
昭和四十一年八月、雲仙における第十一回合宿教室の講義を中心として

- 目次
一、思想と人生
マルクス主義の超克：川井 修治
われわれ人間は自分ひとりだけで生きているのではない：小田村寅二郎
二、合宿教室における講義
「近代化」の意味とその克服
私の経済哲学……………木内 信胤
パネルデイスカッション
三、日本のこころ
聖徳太子のお言葉と
古事記のいのち……………夜久 正雄
自己克服……………戸川 尚
明治の精神……………小柳 陽太郎
短歌入門……………山田 輝彦
年間活動報告……………磯貝 保博
この一年の歩み……………磯貝 保博
第十一回合宿教室のあらまし
歌集一学生、青年の作品より
新書判三〇〇頁定価三〇〇円 50円

編集後記 現憲法の枠内で靖国神社を国家が維持する方法を構じようとする、捨てねばならぬと云ふ古来の一変たりを、日本人の心の深い処で虚偽と軽率を反省せねばならぬところに到着したと思はれる。阿蘇の合宿が近づいてきた。未知の若者二百名が夜空に炬火をかざして、國と道に殉じた英霊を祭る祭事がことしも行はれるだらう。社会に出て国につくすはたつきは全くなすこともないと思ふ身にとっても、祭を通して国のいのちをわが身に感ずることが出来ることは、無上の仕合せである。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル3階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間360円

現代日本における一つの疑惑点

「戦争」と「平和」についての錯覚と虚妄―ベトナ
△問題をめぐる「学者、作家グループ」等の発言―

小田村寅二郎

二十数年前、きびしい敗戦の試練を体験したわが国民は、それ以来、「戦争」の反対語である「平和」という言葉にたいして、無節操なまでに心を許して飛びついてしまった。「平和」というスローガンに出会うと、そこでは、いまにも平和の女神がほほえみ始めるかのような錯覚も起こし、こと「戦争」という言葉にでも接すれば、その背後にどんな発生源因があるのかも見ようとせざに、ただちに目の色をかえてこれに背を向けるようになった。

それにしても、わが国民が受けた敗戦の痛手は、それなりにきびしいものではあったが、むしろ思い出すべきは、終戦直前に、長崎、広島に投下されたアメリカの原子爆弾による痛手と、同じ頃、窮余の一策として当時の第三国であったソ連に向かって、戦争終結の調停を依頼しようとした時、ソ連がいち早く日本の急迫を察知して逆にわが国に宣戦の布告を

してきた、という二つの悲しむべき出来事についてであった。

その結果、日本は一瞬にして腹背に強敵を持つことになり、ついに無条件降伏を選ぶ以外に方法がなくなったのである。もしわれわれ日本国民が、戦いの終結した後もなお、「ついに、戦いに敗れた」というその事を、深く歎き悲しむ心を持ち続けていたとすれば、一負けしたこととを喜ぶ国民は、世界中に日本だけしか見当たらないが、われわれは第二次大戦の回顧にあたって、何よりも日本の敗戦を決定づけたさきの米ソ二国の惨虐行為を忘れることはなかったはずである。そして同時に「なぜ敗れたのか」という命題こそが、戦後の国民総反省の最大の課題にならなければならなかったと思ふ。われわれはそれを通り越して過去の日本の否定という方向に取り組んでしまつたのである。

しかし、それは日本国民の自発性によ

るものだけではなかった。こうした中で占領国は何を意図していたか。まずアメリカは、戦時中に日本人の勇猛誠実さやいやとひどいほど見せつけられたので、占領中のこの機会に「日本人を骨抜きに」というわけで、なんでも「平和」なら、「平和」という言葉のとりこになつていられる日本人を中心にしてやたらにおだてあげた。それは彼らにとつてみれば将来にわたつて日本を無力化するために、またとない絶好のチャンスでもあったからである。また昭和の初期から、日本の赤化を意図していたソ連は(中共はその時はまだ生まれていなかった)、お手のものの「戦争と平和」論を柱にして、それに同調する日本の共産主義者(社会主義者の一部を含む)をして、日本国内の思想動向をその方に誘引する挙に出していたが、これも日本に赤化革命近しと見ての成算を含んだことであつた。こうして、敗戦直後の日本は、米ソ両国の思想戦にも完敗した形であつた。(もつともアメリカは朝鮮動乱を経てその考え方を後悔しだしたのは衆知の通りである。)

たしかに敗戦国、日本の国民は、有史以来はじめての体験という「敗戦」という事態に、精神的に自信を喪失し、生活目標を失い、既往の考え方一切について否定的な傾向にひた走り走つた。それは敗戦処理について未経験であつたことが最大の原因ではあるが、同時に、戦前、戦時下の思考、思想が、国民一人びとり、とくに社会指導者層・学者・官吏・政治家たちの心の中で、本質的な定着を見ていなかつたからにはかならない。私は、ここに重大な問題が伏在していると思う。(しかしここで一言しておきたいのは、戦前の思想が当時の有識者たち

の心に定着していなかつた、というそれだけの理由で、戦前の思想のすべてが間違いであつた、ということにはならない。定着させ得ないいた人々の方に、その人生姿勢に真剣さの欠けるものがあったことを見逃してはならないと思うからである。)

いづれにしても現下の日本国民は、いまなお「平和」という言葉に魅せられたままである。

早い話が、ベトナム問題での論争を見て、依然として、本質的にはその域を出ていない。また中東戦争についても、日本の国論がまともに論ぜられる段階に至らなかつた。いわば国民全体が「平和」なる言葉のトリコになつて、まさに右往左往しているところであらうか。

目次

現代日本における一つの疑惑点	小田村寅二郎	(1)
川出麻須美先生	夜久正雄	(3)
黒上先生の御本を読んで	磯貝保博	(6)
靖国の銀杏	関正臣	(7)
古典の窓(菅原道真)	小柳陽太郎	(8)

そこで私は、日本はいつまでも敗戦の余波の中で浮沈してはならないことを思い、その脱皮のために、時流的な物の見方にたいしてここに二、三の所見を述べてみたいと思う。

一、「戦争」そのものについて

われわれが生活するこの地上から、戦争とか戦乱というような血腥い出来ごとを無くしたいのは、なにも日本人だけの

悲願ではあるまい。それは世界全人類共通の願いだと思う。それに近代戦争では、戦闘員と非戦闘員との区別がなかなか見分けにくいと思われるし、局地的な戦乱といつても、必ずといってよいほど、地域ぐるみの戦闘が繰り返されてしまう。罪もない良民を巻き込む、といつてみても、空(から)念仏に終わることの方が多であろう。

にもかかわらず、世界各国にと文明諸国は、現実とその軍備の充実をはかつて不時の事態に対処しているし、また現実にはベトナム、中東に見るような避け得ない悲惨な事態が繰り返されてゆく。その間にあって人々は、各自の心の奥深く書き流ける「戦争、殺戮のない地上社会の到来」を瞬時たりとも忘れるどころか、その渦中に近い人々ほど、より強烈にそれを嚮望しながら、あえて戦乱の中にわれとわが身とわが同胞を投じ、さらに盟邦諸国民までをさそってそれに突入していく。そして、相戦いつつある両者は、ともに、やがて自らの手でちか取るであろう勝利の後に、地上のしびれの平和を到来させようと考え、その場合の平和のあり方について、各自各様に思感をめぐらしているであろう。しかし現実には、彼らなりに已むに已まれぬ理由あつてのことであるが、戦争という非情なものに全力を傾注するのである。こうした現実はいつてみれば、この世における一大悲劇であるが、世上の人間はことごとく、その現実と共存しなければならぬ運命に立たされていく。「戦争を否定し平和を願ふこと」は、誰れにでもできる。しかしそのような犬の遠吠えにも似た役に立たない観念論は、世界中を見渡したところ、いまの日本において他の国々では到底見出し得ないようであ

る。世界というのは、自分たち、日本人だけでつくっているのではない、という当たりまえのことを、いまいぢどよく考へたいものである。そして「人生」とは何かということについても、深く考えなおさねばならぬのではなからうか。

二、戦争の両当事者について
さて、マルクス主義に心酔している人たちやその影響下の人々の発言に多く見られることであるが、ある戦争が発生すると、その場合に、その一方は必ず侵略者であるはず、と決めてかかる風潮が見られる。一方が侵略者に違いないと決めるから、他方は自然に被侵略者という立場で評価される。そのことはベトナム問題をめぐる日本の所論に圧倒的な傾向となつてあらわれている。

数ある戦争の中には、たしかにその見方に該当する戦争も少なくないことであろう。しかし、「戦争はかくあるはず」という決め方は、まことにおかしい。戦争には、もっと多様な原因が介在しているのが普通である。これは非常に大切なポイントの一つであつて、これに目をふさいでしまった人々は、過去の戦争を見るときにも、おおむねその勝つた方の側を侵略者扱いにしてしまふことが多い。自国、日本の存亡がやぶまれたかの日清・日露両戦役に対してすら、日本が勝つた、というそれだけの理由によつて、日本は当時侵略戦争を企てた、と決めてかかるなど、まさにこの戦争観についての重要なポイントを見失つての錯覚でしかない。戦争の両当事国がある枠に入れた見なければ気がすまない、というこうした錯覚、それから生れる誤解、まずその辺からわれわれ各自を解放しなくてはならないのではないか。

三、戦争における局外中立国が 果し
て「公正なる調停者」の力を發揮できるか
さる七月二十三日の朝刊各紙は、大内兵衛氏を中心とする「学者・作家グループ」と湯川秀樹氏らの「世界平和とアピール七人委員会」とが合同して、佐藤首相の南ベトナム訪問に反対して要望書を提出したと報道した。それは所報の通り、まさに日本の「トップクラス」(朝日)の有名人たちであつた。ご参考までに紙面をいとはずご紹介すると、有沢広巳(東大名誉教授)、大内兵衛(同)我妻栄(同)脇村義太郎(同)石井照久(同)南原繁(元東大大学長)茅誠司(前東大大学長)江上不二大(東大教授)今西錦司(岐阜大学長)弥永昌吉(学習院大学教授)中川善之助(同)谷川徹三(前法大総長)宮沢俊義(立教大学教授)務台理作(教育大名誉教授)湯川秀樹(京大教授)上代たの(前日本女子大学長)渡辺一夫(明治学院大教授)平塚らいてう(婦人団体連合会名誉会長)植村環(日本YMCA名誉会長)石川淳(作家)伊藤整(同)大仏次郎(同)川端康成(同)芹沢光治良(同)広津和郎(同)の計二十五名である。

でないならば、公正な調停者の資格を放棄するにひとしい。
三、政府は、まず北爆停止を米国に求め、北爆停止を基礎に和平交渉を開始することや戦争当事者のすべてに働きかけることである。
と。要望書という所は、「日本はいつまでも局外中立者の立場を取れ」と要求し、「公正なる調停者として登場せよ」と指示している。なお戦争終結のために「北爆停止」だけを叫んで、「南進ゲリラの停止とソ連、中共からの武器援助の停止」に言及しないところなどは、どうみても「公正なる立場」の者のいうところではないが、そうした見えすいた反米論はともかくとして、前二点について少し所感を述べておこう。
ある戦争が長期化していくと、世界中の国々は、次第にそのいづれかの側に加担していく。それは、戦争を一日も早く終結させたいという人間の本心も働いてのことであつて、終結を早めることに心が高まれば高まるほど、加担の決定が拡大されていく。具体的な派兵の有無、物資援助の有無にかかわらず、各国は、各自そのいづれかの側に加担する姿勢を整えていくものである。過去におけるすべての例がそれを示し、今回のベトナム問題についても、非文明国を除いた文明国では、いまだに国論を二分したままでいて、その間「平和論」(実は北側支持者が圧倒的に多いのがこの論者であるが)だけが高唱されて一向にその去就を明らかにし得ないのは、ついに日本一国となつてしまった。
相戦う両当事者は、それこそ個人的には生命がけ、国としてはその浮沈をかけた勝負の最中である。力もない者が高見の見物席から「公正な調停者」顔をし

たとて、一顧の値打ちも認められはしない。それどころか、両者は、双方とも、そうした第三国——日本のような——を一日も早く味方に引き入れるのに懸命なはずである。いまのベトナム問題はその時点まで来ていると思う。従って、こうした要望書が二十五人の全部ではないまでも、何れかの側のさそいまたは同調者の意図に基いて行なわれる可能性は、き

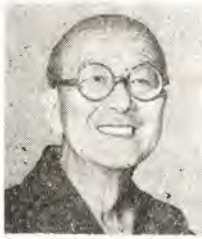
川出麻須美先生

夜久正雄

川出先生がなくなられた。「一卷の歌集を残せばよい」と言はれた先生のお言葉のとおり、明治・大正・昭和三代にわたる大歌人、近代の人磨とも言ふべき大天才は、ひっそりと、しかし、さくやかな歌集一卷を残して世を去られたのである。

先生の歌集「天地四方」(昭和二十八年十月「昭和篇」、昭和三十二年一月「明治篇」)の「序」に先生はかう書いてをられる。

「一卷の歌集を残せばそれでよいと私は昔から考へて居た。それ以外には途がないと思つたからである。しかし歌



川出先生遺影

わめて濃厚な段階と見てよいであらう。この要望書がどちらの側に向いているかは読む人の自由であるが、平和の主張や中立の呼わりなどで事が足りるほど、現実の世界もわれわれの人生も、生まやさしいものではないことを銘記したいと思う。そしてこの要望書署名の方々は、すでにそのことを十分に承知されている方々と思われのだが。(本会理事長)

でもまだ足りない、もどかしさがあるけれど、それはどうにもならない。「先生のおいのちは、歌でもまだ足りないもどかしさ」はそれとして、その歌にこもってゐる、と、私は信じる。八十三才の御生涯は歌にかけられたと言つてよいであらう。

かつて先生はこんなことを語られたことがあった。たしか、故雑賀博愛氏(「福本日南に師事し、次で赤木格堂に親炙」し、「鹿野歌稿」を遺了。)とのことだったとおぼえてゐる。雑賀氏から「慕親帖」を送られて、深く感動して歌を作つたが、その歌を送らなかつた。あとで何かの折に雑賀氏の遺族がその歌を見て、非常に喜んでくれたので、やはりさういふ歌は送っておくべきだと思つた。しかし、わたしは、歌を作ればそれで相手に通ふものだと思つてゐる。だから送らなくてもよい、歌を詠むことで私の表現は完結する、といふやうなお話だつた。このお話をうかがって、歌を詠む

といふことが先生にとつて行為そのものであることを憶つた。先生が好まれたホイットマンは、彼の「一卷の歌集」ともいふべき詩集「草の葉」について自から、「これは単なる本ではない。これを手にとる者はひとりの男にふれるのだ。」(This is not a book. Who touches this touches a man.)という名句を残したが、先生の歌集も、単なる本ではない。先生の歌は、先生のいのちそのものと言へるだろう。

それでまたこんなこともあつた。昭和十二年、私をはじめ川出先生からお歌をいただいた時のことだが、先生が年賀状に、誰だったかよく覚えてゐないが私の既に亡くなつておられた先輩のどなたかに年賀状をくださったので、そのことをお知らせした時のこと、先生のかういふお歌がある。

今はなき人とも知らず年賀せしは誰にかましけむなつかしきかな
世にあるもなきも同じぞたまきはふ命はかよふ萬代までに
爾来このお歌は私の心の中で鳴りつゞけてゐる。
先生は、歌を詠む行為によつて人と語り故人とまじはりまた子孫に訴へられたのである。「国民同胞と歌集」明治篇(昭和四年発行)といふ本は、「日本及日本人」の三井甲之先生選歌の歌を集めた歌集であるが、われわれはこの歌集ではじめて川出先生のお歌を読んだ。その裏表紙に先生の次のお歌がある。
神風の伊勢の大宮あらむかきり我歌生

きむやしまのたみに
とつくにの華に呻かむまごらによき
かてのこせますらを吾兄
先生はそのお歌が先生の生をこえてひびきつたへられることを信じてをられた。自らの力を信じてをられたといふよりも、歌そのものを信じてをられたからである。それはまた日本の永遠の生命に對する信仰でもあつた。

五月二十五日東京信濃町千田谷会堂において神式により仮通夜がしめやかに挙行せられた。私も参列させていただいて祭壇場の遺影と御遺骸にお別れを告げた。王串奉奠を終つて式場を出ると、そこに二首のお歌が掲げられてあつた。
墓碑銘
極ればまたよみがへる道ありていのち
果てなし何かなげかむ
辞世
「明るく」とゲーテは言ひきチャーチルは「いも、う、沢、山」と「ねむり」かしかわれば
参列した人々は特許庁長官の御長男の御知り合いが多いらしく、政治家とか実業界とかの方々に、普段歌に親しんでおられるやうには見受けられなかつたが、「い、歌だなあ」という囁きが、そここに聞えた。集る人々はみなこの墓碑銘の歌に救ひを感じ、辞世の歌にユーモアと達観とを感じて、心のひらけるのを覚えたことだろう。私もその一人である。
ちようど——といふのはへんな言ひ方だが、その時私は仕事の上の悩みごとがあつて、心がうはつづつておちつかなくなつ

た。しかし、このおうたをよんで、豁然と心のひらける感がした。自分の心のもちように道がひらけたのである。歌が現実的なからをもつてゐることを、私は、川出先生のおうたを読んで実感する。

青年時代に、陰湿な俳句など作って暗く心が閉ざされてどうにもならなくなつた時、私は川出先生に救ひを求めた。その時いただいたのが、次のお歌である。

白雲にのりてや来つる思はぬに君がみたより机の上にあり
ましみづの流るゝ如きみ歌よめば漏れにし心ながるゝごとし

若き人らあひつきつきてしきしまのまことの道はたゆる日なからむ
老いぬればかなしみ多し若ければなやみ多きぞ人の世にはある

物みななのやみ集まる現し身を投げ出し生く天のまにまに
次に前掲の「今はなき人も知らず」一世にあるもなきも同じぞ」の二首があつて、次の一首で終る。

東京はただそこもとぞひむがしのかたぶく空のやまにつくあたり

この一連八首のおうたは、爾来三十年、私の心の中に生きつゞけてゐる。私は、その時、この歌で救はれ、その後ずっとこの歌を忘れなかった。

先生のお歌で私の忘れぬ歌は沢山あるが、その中の数首をあげる。

かなとでに妹がわたせしふみよめばやさしことのは見るに堪へずも
火を噴きし昔ゆめむか開聞のみ岳もた

せりゆふべの空に

佐多の門に船ちかづけばおほなだの俄

にかたぶき疾吹くあま風

海角にかがやくともしあな悲しゆらぎ

だにせず荒海にむかひて(明治時代「航海」連作二十七首のうち)

朝日さす庭のしげみにかがやきて星よりも濃き露ひとつあり(昭和十七年十八年「朝」三首の中)

青年は愉快なるかな風の日は平生よりも出席多し(同右「颯風」七首の中)

おのづから通れる道はいかづちのくづれ撃つともそのまならむ(昭和十一年「夏雑詠」七首の中)

あめりかたろしやの力とりすべて立ちあがる日本の神を信ぜむ(大正末年又は昭和初頭の作)

高空はつね晴れたりき大地は雲はびこりてやまず動けど(昭和十一年「友に、田所広泰宛」五首の中)

大倭あぐる歓呼をよものくにきつゝ、いましなに念ふらむ(昭和八年、皇太子殿下御降誕をことほぎまつりて三首の中)

かうした歌は、いままた強く私の心の中で鳴りひびく。そのお歌のしらべは強く明るく雄大で私の心の内部から私をみちびく。改めてそのことに気づいた。この感謝の心を先生の御靈前にさげたいと思ふ。

戦後、私は、南波君とはじめて川出先生を小坂井のお宅にお訪ねした。先生は奥さまと御一緒に私共二人を本当にあたたかく迎へて下さって、沢山のことを話

して下さった。「宇宙をサガミに嘔むものは詩人である。詩人の目には宇宙は言語の急流である。」と若き日に記した(「古代日本語」より)この詩人の口からあふれいつる言葉の大きな流れに私は圧倒され渾身させられてしまった。それは言葉といふよりも生命そのものと言ふべきものだった。私は、「言語の急流」にもまれて心身ともに変化するのをおぼえた。この時の先生のお話ほど感動を受けた話はない。いまでも思ひ出すが、先生が話の中で、「驚いた。」と言はれると私は飛び上って驚いた。明治天皇の御大葬と昭憲皇太后の御葬儀の折の御霊柩車のわだちの音を再現されるのを聞いて心が戦慄した。最後の参内に参上する馬上の乃木大将と目札をかはされたといふお話もその時うかがった。またその時私は不健康で、先生に手をあてていただいた口に出すことができなかった。しかし、先生のお話は、私の心身をゆり動かし、身体にたまった毒が排泄されてしまったやうに感じた。あとで、先生は、「言葉で治療した」と語られたそうである。勿論私の希望を見抜いてをられたのである。私もさう信じてゐた。千里眼の霊能を持ってをられるといふ噂があり、触手療法の達人で、遠隔療法をなさる先生に、目前の私の希望がわからないはずはないと思つたからである。またその時、腸閉塞を手のひら療治で直されたといふお話があつて、後、私はその恩恵で、自分の息子の腸重腸を助けることができた。と、思つてゐる。川出先生は歌

の師であるが、同時にいのちの恩人といふ感じがある。先生の歌がさういふもの、と言つたらよいか、あるいは、本当のうた、とか、ことばとかは、さういふものだといふべきだらう。

三井先生が、概念の形を借り、思想的に述べて一般化せられた内容を、川出先生は、具体的に、生の体験そのものを以て表現された。古事記、万葉への傾倒・連作短歌創作・長詩への開展・明治天皇憶念・てのひら療治・短歌を中心とする思想といふ思想的開展を、お二人はそれぞれ各自に平行して迎られたのである。三井先生は、それを一般化し形式化し概念的思想を以て表現された。川出先生は、

具体的体験の直接的表現にほぼ終始された。三井先生は、談話の中では、私の音声をも真似なされるやうなことは、私は聞いたことがない。川出先生は、鳥の声、ものの音、すべて再現しようとする音声をも真似された。独自で、模倣や口まねを絶つぎびしきがあるが、一般化されないから伝達不能である。それを先生は歌にこめられたのであらう。先生の歌は、独特で、言葉に粘りがあり、言葉のつながりが強く、全体として、雄大な胸廓と健康な体軀からあふれ出る呼吸そのものである。ホイットマンは先生の愛する詩人だったが、その調子はよく似てゐる。

たしか昭和二十五年頃だったと思ふ。「ホイットマン詩選」をお送りした時、かういふお言葉をいただいた。

「……私は青年時代彼の詩を読み、海原の様にふくれ浪だつてくる興奮を禁じ得なかつたのですが、今この訳詩

の師であるが、同時にいのちの恩人といふ感じがある。先生の歌がさういふもの、と言つたらよいか、あるいは、本当のうた、とか、ことばとかは、さういふものだといふべきだらう。

を見て同様の感激を覚えるのです。広く、すこやかに、清く、あかるい彼のたましひは吾々の遠い祖先の魂と相通するものが多分にある。この魂を把握すれば日米相戦ったことや冷めたい戦争がいかに愚かであるかが分ると思ひます。東洋に古くからある陰陽の思想からすれば、ソ聯は陰で米国は陽でせう。陰陽は相反撥するけれども亦相引くものでもあるでせう。吾々は正に冷熱に拘らず相反撥する戦争を駆逐する中心に立つべきでせう。飽くまで実践し、その実力を養ふところに日本再建の方向があるのではないか、それは天の如く海の如く新しき太陽の如く、あゝ生命のいぶきは朝霧の如く吾々の面を打って来る。」

御子息様のお話によると、なくなられる数日前、先生は、大正時代の長詩「海の舞踏」の中に間違つた箇所があるから訂正するように、といふことで、夜久に伝へるように、話されたさうである。仮通夜の夜、小田村君からの伝言でこのことを承って、すぐしらべたが、私の手元に、この長詩はなかった。例によつて、広瀬誠君に問ひあはせたところ、早速、かういふ返事をいただいた。――「昭和二十四年川出先生にお目にかかったとき、先生は朗々とこの詩を誦誦されました。当時のこと、限りなくなつたくしく回想されます。その後、『人生と表現』の切抜で、この詩を送っていただき、書き写して、返送したのですが、印刷に『磯とは浪は』となつてゐるのを、ペンで『磯うつ浪は』と二字訂正してあります。おそらく先生は、この誤植が氣にか

かつて居て、それで遺言されたのではな
いかと存じます。この詩は、先生が富山
中学教師のとき、教壇で朗誦され、当時
の生徒が強い印象をうけたといふこと
です。この民謡的な明るい歌を、いま手
写しつづつ、うたた感慨にたへません。」

海の舞踏

してさつき！
海のどなかでうづまく浪は、
中はつめたくうはべはあつく、
底のまた底あひとしほあつて。
してさつき！

あ、こりや！
とはる白帆は日月の印、
権威をみとめぬいたづら子僧、
とつてまるめて尊王攘夷、
これ排泄のうごかぬ原理。
してさつき！

しらなみ立つは暗礁のしらせ、
島にひびくはとはなみなみ、
裾をからげて磯うつ浪は――
おれらの力だ！！
さつきい！ えつきい！

ちどもとびこめ、ばゞさもおいで、
わかい女子はなほさらだ！
あ、来たぞ！
「いゝかこんやは？
磯湯のかへり………」
「はいよござんす」
（みつけた男が）
「こりや何ちや！」
「おりや知らぬ」
「いま云つた」
「いや云はぬ」
して又せんとはいはつたりものだ！
さつきさつき！

ひばりのふところ陣笠小笠、
うちふる手足にみなきる力は
すべてを生かす神らのいきほひ。

どーどーと、
そーそーと、
ろーろーと、
ほーほーと、
こーこーと、
吹きだすしほかせ、
ひたひをくろめて、
なやめるものは
いきかへれ！

（十月十四日夕）
（「人生と表現」大正一年十一月号）
素朴で強靱な古代精神に通ずるこのしな
やかさとたくましさとは、明治日本のウ
アイタリテイの言語表現そのものであ
る。

六月四日、先生の御郷里の小坂井で行
なわれた御葬儀に参列させていただいた
私は、そこで、広瀬君と会った。あるい
は、とも思つてゐたが、富山に住んでを
られることでもあるしするので、まさか
と思つてゐたので、驚ろいた。二十年ぶ
りではなかつたかと思ふ。しめやかな雨
のふる中に、広瀬君と並んで、先生の葬
儀に参列し、はるかに、祝詞の奏上に耳
を傾けた。

「……アカネ、人生と表現、原理日
本に歌を発表し、……思はざる人の
まことにふれて歌集『天地四方』とはな
りぬ……」といふ祝詞の言葉が、戸
外に立ち並んでゐた私どものところまで
流れてくるのを承って、私はありがた
く、悲しいなかに心の晴れるのを覚え
た。
あとで、広瀬君に、「海の舞踏」を川
出先生が、「暗誦された」といふのは、

文字通りかどうか確かめたところ、全部
暗誦とのことであつた。「ひばりのふと
ころ陣笠小笠」とはどういふ意味か訊い
たら、それは不明といふことであつた。
元來この詩を、先生が広瀬君に暗誦して
聞かせられたのは、万葉集中の意味不明
の歌について話をされ、御自分の詩の中
にも意味のわからないところがあるとし
てこの箇所を暗誦されたといふことであ
る。先生は御自分の詩も歌も暗記してを
られた。詩作が行為であつたからであろ
う。昭和二十四年に訪ねた広瀬君に大正
元年の長詩を暗誦せられたのである。

川出先生のは前述のごとく、「ア
カネ」「人生と表現」「日本及日本人」
「原理日本」「七高校友会誌」等に発表
された。うち、明治のものは、「天地四
方」明治篇にはほままとめられ、昭和の
ものは、その「昭和篇」に昭和二十七年発
行までのものがまとめられてゐる。その
後のお歌も多く、その他、洩れたものも
多いと思ふ。大正時代のものは、小説、
詩、歌、評論と多彩で分量も多いが、
未集録である。

本年賀状に「年頭一首」と題して次の
歌を残された。
老いの坂のぼるがまゝにひらける視
野茫茫と天につらなる

先生の詩歌の研究は、広瀬誠君のもの
が唯一の貴重なものであるが、「興風」
誌上に一部発表されたもののほか、ほと
んど未公表である。写真は昭和三十五年
十月、小山吉之助君の撮影で、先生の非
常に喜ばれたものである。――昭和四十二
年六月二十一日稿了（垂細亜大学教授）

黒上先生の御本を読んで思うこと

磯貝保博

(編集部附記) 文集「第三葦牙」より転載。これは国文研主催の「合宿教室」で学び合い、この春大学を卒業した有志によって発行された。はしがきに「こうして四年間の学生生活を終え、いま社会に出ようとするに当って、私達は、お互いの生活の場がさまざまになつてしまふことを考え、せめて卒業するにあたって、今一度学生生活をふりかえり、心に期したことなどを書き残し、さらに私達のつながりを継続させて行くのではないかと決めたのです。」一昨年と昨年、同じように卒業していった先輩の文集「葦牙」、「第二葦牙」に続くものとなる。執筆者はほかに、京都大・粟本雅之、西南学院大・内野敏子、長崎大附看・延近史子、神戸大・寺川真知夫、長崎大・森重忠正、亜細亜大・山内健生、皇学館大・堺修、亜細亜大・岩越豊雄の諸君があり、四十数名の短歌詠草を収む。筆者磯貝君は中央大学卒、講談社勤務。

(一) 私の思想生活

大学に入って間もない頃、私を一番驚かせたものは上級生の会話であった。始めて聞くような「言葉」が次々と会話の中に出てくるのを聞いて、いかにも大学生らしく思えたことを思い出す。私も早く上級生のような会話をしたいものだ、当時本気で考えたのである。そんなことがあって、先ず「言葉」を知るためにあれこれ本を集めて読むよう

になった。今までの文学書にかわって、専門書、思想書と呼ばれる本が私の本棚に多くなつていった。そうして四年間、様々な経験と読書を重ねながら、間もなく大学生活を終えようとしていた。本棚を前にして、あらためて一冊々々の本をながめてみると、四年間の私の心の遍歴とでもいうようなものが感じられてきて、感慨無量なものがある。大げさな表現を使えば、私の思想遍歴の跡を本棚は語ってくれる、ともいえるのである。考えてみると、「思想」という「言葉」を私がいくらか知るようになっては、読書というもののお蔭でそんなにくはなかつた。しかし、「思想」という「言葉」の意味内容にふれることができたのは大分遅かつたように思う。「思想」という抽象的な「言葉」を自分の頭で考え、身近なものとしておぼろげながら実感できるようになつたのは、ある機縁によつて知ることができた国民文化研究会の「合宿教室」へ参加してからであつた。

「思想」ということを単に人の考え々と思つていた私は、「思想」とは理論であり、その前提となるものは知識である。というようなことを何の疑問もなしに考へていた。従つて「言葉」をいかにうまく使つて自分の考えを相手に伝えるかが大切であつた。ところが、私が一番大切だと思つていたことが、「合宿教室」に参加してきて、あまり意味のないこととて、忘れることのできない貴重な体験となつた。人はお互いに心を通い合わせようと努めなければ、日常の生活はいうまでもなく、すべての人間生活を円滑に運んでいくことはできない。言葉はそのための伝達手段である。しかし同じ言葉も、使う人の心の在り方によつて、言葉は直接人の心と心をつなげることもできるし、できなくもしてしまふ。私が「合宿教室」でお聞きした諸先生方の御講義はいずれも御自身の生き方に根ざした御言葉で語られていたように思う。私は諸先生方の一言一言に言い知れず心が引き付けられて耳を傾けたことを思い出す。生きな言葉の持つ鋭さ、重さというようなものに触れることができたからに違いない。その時は夢中でわかなかつたのだらうけれども、今から思えば、不思議という他はない。

「合宿教室」で得たこの実感は、自身自身の生き方に裏打ちされた言葉と思想でなければ、その思想は空転し、無内容に等しいということを私に教えてくれたように思う。「思想」は我々が生きてゆくこととするものの姿勢であり、我々が日頃処して行くべき生活態度であるといえのるだ。「思想」の内容を大変難しいもののように考へていた私は意外に簡単な、身近な内容であることを教えられ、本当だろうかとその時は疑わしくも思つた。しかし、こうした私自身の心の変化は、今から思えば、私の本当の意味での思想生活の始まりを意味するものであつたように思う。ともかく、私は「合宿教室」が終つたとき、この合宿で得た体験と印象とを大切にしようと思つた。こうして、私の思想生活は、東京に帰つてから毎月八の日に行われる「東京八日会」に出席することから始まつた。しかし、思想生活といつても、私にとつては、何もあらためて思想書を読んで勉強するというようなものでもなかつたし、イデオロギーを身につけるといふような大げさなものでもなかつた。ただ自分自身の生き方を正しくして、毎日の生活を送らうということに過ぎなかつた。つまり、自分自身の生き方についての、正しき筋道を踏んで行かねばならないか、ということであつた。

(二) 癡心求道ということ

その後、大学にあつては、「学問の姿勢」というようなことが、日常生活にあつては「友との付き合い方」というようなことが、絶えず私の心を占めるようになった。殊に「合宿教室」以後、何度か参加した小合宿は、いわば「心の姿勢」といふべきものを正そうとしてゆく修練の場であつた。そこでこの問題は、常に自らの心に問い返されてきた。それだけに心の緊張の伴う実に苦しいものであつた。特に「和歌創作」は、自分の心を正確にみつめながらそれを和歌に表現してゆかねばならず、その難かしさに随分悩まされた。しかし、自分の思いを素直に歌に表現できたときは、実に嬉しかつた。和歌の相互批評の折に、自分の殻に閉じこもつている自分の心の姿を自分さまに指摘されたり、それによつて自分の心の不自然さということに気がついた時、はつと自然な気持の転換が得られて不思議と大らかな気持になつていったものである。そうした時、友が語ってくれる言葉や、先生方の御言葉ほど有難いものはなかつた。

靖国の銀杏

関 正 臣

靖国神社表参道の両側に銀杏並木になつてゐることは、どなたも御承知だと思ふ。

しかし、毎年その実が落ちる頃になると、毎日未明にどこからともなく現れて、その実を丹念に拾ひ集める老人が一人居ることは、あまり御存知あるまい。彼は、何百何千と拾ひ集めた実を、総べて播く。やがて苗木に成るとそれを丁寧に掘り、紙にくるんで参道の傍にそつと置く。その時彼は、参詣者が持ち帰つて呉れるやうに祈りをこめることを忘れない。

神門をくぐつた直ぐの所に、その苗木の包みは絶えず補充されて、いつでもある。それに気付いた人は多からう。けれども、その一連の作業を続けているのが一人の老人であることや、その老人の悲願に気付いた人は多くあるまい。彼は一日も休みはせぬが、黙つてその行を続けて居るに過ぎないのだから。

老人はその壮年頃、支那大陸を転戦してゐて、樹が少いことに気付いた。そして、さういふ土地には人の心の安らぎは生まれぬといふことにやがて考へ及んだ時、直ぐにそれに着手し続行した。それ——緑化植樹運動である。彼は、敵国人に迎合するセンチメンタリストといふ軽蔑や警告を受けたが、崇敬する「乃木さん」が支へ続けて呉れた。やがて終戦となつて復員し、先輩同僚部下のみたまに奉告すべく靖国神社に詣でたが、荒廢した境内に立つた時、彼は啓示を受けた——大陸で続けて来たことを、今、祖国に於てこそ始めよ——と。

それは英霊の現しき声であつた。日本人として悔い慚ぶることなく戦つた彼の余生はこれで決つた。

祖国の復興——国土の緑化——靖国の銀杏といふ系列は彼の心中に於て一本であり、英霊の祈りをいのちの限り継承具現しようとする彼には、戦前戦後のけじめは無かつたが同志は分れ住み自身は無一物だつた。しかし幸ひなる哉、境内には毎年無数の実が落ち、それはタダであつた。拾つて播いて苗木にしさへすれば良い。苗木をひろめることは参詣者が必ずやつて呉れる。

爾來九年間、名利の伴はぬその劣作の爲に、すっかり日に焼く、節くれた指は泥くさい。その為か知らぬが、息子の様な若者に小馬鹿にされたこともあるが、妨害を受けたことが無いことは有難い。そして苗木は、今や全都道府県に隅なく移植せられ、沖繩にも運ばれ、西ドイツに迄届けられた。彼は、それはみたく自然にひろがつて行くのだと固く信じてゐる。頒布一年目四三五本が、昨年度は二万八千本に達し累計七万五千本を超えた。

読者、機会あらば、神門内側、能楽堂手前の小屋を尋ねられよ。老人の溜りである。留守なら富国生命本社（元遊就館）東側空地を尋ねられよ。今日も老人は、苗圃で土にまみれてゐる。手伝つたらなほ良い。

老人、元戦車連隊長大佐、吉松喜三といふ。

（吉松さんは御自分のことを話されぬので、これだけに纏めるにも実は三年かかつた。発表したらお叱りを受けさうだがそれでも構はぬ。御迷惑は萬謝、とも角私一人のものにしておくに忍びない）

（重熙堂大学学生主筆）

✓こうした喜びは和歌相互批評の折だけでなく、古典の輪読の際にも味わうことができた。著者の言葉を正確にとらえようとするためには、著者の心に自分の心を馳せてゆかねばならない。それには、自分自身は自分の心を正確にみつめてゆくことを必要とした。国民文化研究会の先輩方が、長いあいだくりかえして学んでこられた黒上正一郎先生の御著作、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」というテキストを論議する折には、そうした自分の心の姿勢をいつも問ひ返されることが多かつた。その本の中から、ここには是非とも書き留めておきたいと心に残つている一文がある。それは太子が「維摩經義疏」の中で仏陀が説教を聞く人々について、その中にいろいろの人がいるが、といて、声聞、菩薩、凡夫という順序を仏典に記され、その意義を論じられてゐる箇所があるが、そこから始まる一文である。

「声聞（の人）は生死を厭ひ涅槃を求む。凡夫は生死を愛し涅槃を畏る。二つながら皆仏の深旨に違ひ俱に中道を失へり。故に前後の二辺に列ぬるなり、菩薩は心益物を存するが故に生死を厭はず、万徳常果を証せんと欲するが故に涅槃を畏れず。凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得たり」

この太子の御言葉の内容については、仏語の詳しい意味も知らない私であるから、だいたいのところしかわからない。しかし、次の黒上先生の御言葉によつて、これは単に太子の仏語解釈ではなく太子御自身の体験から発せられた御言葉であり、人生觀である、私には深く心に留まらざることだけでも、私には深く心に留まる一文となつた。すなわち

「ここに声聞とは即ち小乗教徒を指す

のである。人生の痛苦無情を觀じ生死の解脱を願ふ心はこれを否定すべきではない。而も彼らが解脱を一我の天地に願求して他と共なる人生を願みざる思想は、ついに現実生死の裡の苦悶を厭ひ、理想を現実生活の外に求むるのである。太子はこの個人の超脱の人生觀を排し給ふのである。けれども生死意欲煩惱罪惡の儘を愛し、発心求道の念慮なき凡夫の生活も又決して真実の道ではない。太子は常に大乘菩薩の願行を念じたまふのである。心つねに衆生救済の慈悲を抱くが故に生死動亂の間に処して厭はず、永久生命の信を念ずるが故に発心求道の願ひを相続するもの、これまことに太子の示させ給ひし道であつて、勝鬘經義疏に自ら仰せられて、「大士の懐を立つることは、但自らの爲には非ず、必ず先づ物の爲にすることを明かすが故に、衆生を安慰せんと言ふ」とあるは、更にこの御精神を顕彰するのである」

長々と引用したが、どうしても途中で切ることができなかった。少なくとも、これだけ引用しなければ、聖徳太子の御人格に傾倒されながらこの本を書かれた黒上先生の御氣持をくみとることができないと思つたからである。この一文を読んで私が思つたことは、太子が繰り返して繰り返して御心の中で問い返し続けたら、先生が全身全霊を打ちこまれて太子の御心に触れられようとしたに違いない、ということである。「発心求道」と表現された御言葉にそんな思いがこめられてるように思われてならない。先生が太子の生きられた御姿を憶念された時、そこに「発心求道」という御言葉が出てきたのではないだろうか。そして、

古典の窓

去年今夜侍清涼
秋思詩篇独断腸
恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香

☆ (菅原道真)

道真といえはすぐ思い出すのはこの一篇の漢詩、そして誰しもが幼い頃から親しんできた北野天神縁起絵巻のこのまでである。画面の中央には恩賜の御衣を前にしておもいに沈む菅公の姿があり、庭先には秋草が乱れ、軒端は朽ちて菅公の周囲に侍る人々の姿にも謫居のかなしみが画面一杯に漲っている。身に濡れ衣をきてもあらわな抵抗を試みることもなく、まして策に対して策を弁することもなく、たゞまごころを天に訴えて、敗残の余生を人知れぬ陋屋に送りながら、天皇への思慕にむせぶ老臣の心情、それは日本の民族が久しく心の中にあたゝめつゞけてきた、最も美しい人間像であった。そのいみじき表現として、冒頭の漢詩がこれま

でよみつがれてきたのである。
去年の今夜、清涼殿にはべつて詠んだ「秋思」の詩一篇、その折に拝領した御衣はいまここに。この御衣にこめられた天皇の残り香、それを日毎に拝しつゝ、天皇をお慕いするという、この大地にしみ入るような、つつましいところのあり方が「日本のこころ」だった。

藤原氏は権謀術数の限りをつくして全盛を築いた。だがその時代が過ぎ去ったとき、民衆の心に刻まれていた映

像は、あの流謫の地に、恩賜の御衣を捧げて祈る道真の姿だった。全国の各地に祀られていく天神の社は、この道真のかなしみといきどおりを鎮めようとする民衆の鎮魂のいきどおりのなみだつた。あれほどの権力をもって栄華をつくしても、藤原氏は所詮民衆とは無縁の存在にすぎなかったのである。

すべてのものが移り動いてゆくこの世の無常に対して、われわれの祖先は実に敏感だった。だがそれとともに、千変万化するこの世にあつて、とこしえに絶えることなく貫かれる人のまごころを、正確に見抜く眼識をもあわせ具えていたことをわれわれは心から感謝しなければならぬと思う。北野天神絵巻の一こまは、かゝる民族の輝やかなしい叡智の表現だった。術策たゞならぬ藤原一族の盛衰を描いた「大鏡」の筆者が、とりわけ道真の配流のために長いスペースをさいて、思いをこめてその生涯を描写したのも、又同じ日本民族の情操に連なる者ならではの表現であった。

道真の詩に「遷客悲愁陰夜倍 冥々理欲眞冥々」という言葉があるが、冥々の理―人知れぬおもい―は天に訴える以外にはないという、その悲痛な生涯、私のさかしら心なきがゆえにたどらねばならなかった悲劇の生涯、それをわれわれの祖先は見逃さなかったというよりそのようなかなしみを胸の奥にたたえしていない人、われわれの祖先は信用しなかったのである。
(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

心の正しい姿勢を求め、自分を立派にしてゆこうとするのが人の正しい姿である、ということ、そこで示された、と思うのである。

こうして考えてみると、私が「思想生活」と呼ぶものは、その内容はといえ、人としての正しいあり方を求め続ける姿、つまり「発心求道」ということに他ならないことだ。と感じられてくる。

私は黒上先生の御本を輪読する時、先生が太子の御心と一体になろうと努力される、そのひたむきな姿勢と御言葉に対して、素直に喜びながらできた自分を本心に嬉しく思う。黒上先生の御言葉の氣迫と厳しさをみつめてみれば、よく々無批判に人の考えを受け入れたり、信じたりますことは主体性がなくなるなどという俗論が、いかにも浅薄なものに思われてくる。それとともに「讃仰研究」と呼ばれるこうした国文研での研究方法も、世の中に知られてほしい。それが少しも顧りみられない現代の学問教育風潮が、とても残念に思われてくる。

戦後、民主主義教育のお蔭で、我々は個人尊重ということをお教わり、個人は全体のために犠牲を強いられるようなことがあつてはならないといわれてきた。一方、物の考え方も、科学的に考え、一方に偏することなく中立的でなければならぬといわれる。ところが科学的で中立公正な論証を説きながら、結局のところ、自己を絶対化し、自分の考えが一番正しいのだ、というように見せて、他人に自分の考えを一方的に押しつけていることに気づかない人が多い。

大学にあつても、特に「政治主義」に走ってしまったる学生自治会の活動家などは、マルクシズムの理論を得々として語り、これこそ科学的な理論であ

り、これによってのみ学問の真理探究がなされると主張している。その人たちは、その人にとっては借り物でしかない理論とロジックを、概念化してしまつた言葉でしゃべっていることに気づかないでいる。こうした風潮に、多くの学生が知らず知らずのうちに巻き込まれようとしている。正しい教育が一日も早く生まれなければならないと思うこと、切なるものである。

黒上先生の御言葉といい、聖徳太子の御言葉といい、そこには概念化された言葉とおおよそ違つ々響きが聞こえてくる。私はこうした黒上先生の御言葉によって人としての生き方とその正しい筋道を指し示していただけたように思います。そればかりでなく、学生時代における学問方法も教えていただいたといえます。これから社会に出て働く私ですが、社会にあつても、黒上先生の御本を輪読したことを心の拠り所として、先生の御言葉を心にとどめながら生きていきたいのです。

編集後記 連日の暑さ御見舞申し上げます。来る七日から九州阿蘇高原で始まる「合宿教室」の参加者並びにこの行事に御関心を寄せていたゞいてゐる読者各位にこの号をお届けいたします。真夏の猛暑を迎へると、かつての戦闘とその終結の思ひ出をよみがへらせるは或る年配以上の人情の織りまざつた共なる一つの歴史を回想する能力は、つねに新たに継続して發揮されねばなりません。浅野晃作詩「天と海」(三島由紀夫朗読)のレコードを最近聞きました。雄大な結構で、繊細にかつ高らかに歌はれた詩篇、民族の記憶を留められた数々の作品の一つと感じられました。事実の判断、予見は記憶の回想を抜きにしては、空しいものではないでせうか。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

人生事実とわれら国民の道

— 第十二回合宿教室に参加して —

学問・人生・祖国

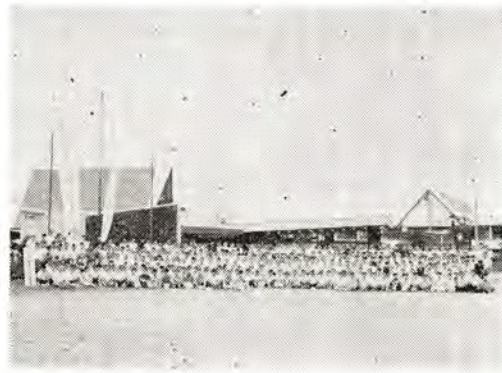
僕がこの合宿を知ったのは昨年の雲仙合宿である。そこではものごとを考える場合、常にその根源に立ち戻って、見究めること、又そう努力することを教えられた。そして今年の阿蘇合宿においてもこのことは各講師の方々、先輩のお話の中に一貫して流れており、われわれ参加学生の中にも日一日と浸透して行くように思えた。しかし、ものごとの根源に立ち返って考えるということとはなみだいでいいことではない。特に今まで観念の上でのみものごとを割り切るといった思考法に慣れていたわれわれにとって、そのことは実に苦しいことであった。だがわれわれはその苦しみを共にする友の心に思いをいたし、班別討論などにおいてお互い真剣に問題に取り組んで行った。学問、人生、祖国、これらは決してばらばらのものではない。学問は人生や祖国の

運命を抜きにしては語れない。人生を語る時、祖国を語る時、これらは常に融合し、それぞれがお互いに、それぞれの土台となり、牽引し合っていくのである。このことを心に留め、われわれは凡ゆる思考を展開させていかねばならぬ。

戦の奥にひそむもの

聖徳太子の十七条憲法の講義において、小柳先生は「凡夫としての醜さを凝視することによって和の世界が実現されるように、平和を達成せしめるには一人一人の心のうちにひそむ戦争への心の動きを見つめなければならない。即ち戦争と平和は別の人によってではなく、一人一人の人間の内部において、演じられるものだ」といわれた。この指摘は理想と現実とが乖離した今日の「平和論」を鋭くついたものであった。戦争当事者において戦争を避けたいという念願にもかかわらず戦わざるをえない実情に思いをいたすこと

なく、人々を裁こうとする態度をすてない限り今日のベトナム戦争を批難したところで何の解決にもならないのである。山本先生はベトナムの実態を具さし話された後、米国の孤立した中での痛ましいほどの努力に言及され、われわれ日本人が門外漢の立場にあって米国を批難することは許されない。われわれは「共産革命の戦争は正義の戦争である」と云う北



側の恣意的な言葉や、戦力の強い方が侵略国であるといった上っ面の偏った見方や人道主義というなまじっかな言葉に感わされるべきではないと話されたが、まづ現実を、そしてその底にあるものを直視することの意義を痛感したのである。

国民的同胞感の回復

今日われわれの住んでいるこの日本は

目次

(第十二回合宿教室特集号)

人生事実とわれら国民の道……… (1)

合宿教室の流れ……… (2)

☆合宿詠草より

参加者の感想文より……… (7)

初参加の韓国学生団を迎えて……… (8)

祖先が築き上げてきたものである。日本人は古来、利害、我欲の現実を無視することなく、あるがままの人間性をうたい、あるがままの人生事実の認識の上に立って、寛容と調和を愛してきたものである。この国を自らの混乱によって崩壊に導いてはならない。亡国は自殺行為といわれる。その原因は決して外からのみ来るものではない。木内先生も言われた通り日本の経済的発展は世界の驚異であるがその政治思想はあきれるばかりだ。経済によつてのみ国力が支えられるものではない。その国の人心の乱れが亡国の危機をもたらすのである。それは歴史の示すところである。国民の一体感、同胞感をお互いの胸の中に培うことが、その国を生命あらしめることにならなければならない。

祖先は魂を留め、われわれはその魂を受けついで誠実に努力していく。これが祖先の御霊を慰めることとなり、われわれが日本人として世界に貢献していく基となるのである。

全国の友らよ、次代を担うわれら若者は今は無き御祖をはじめ多くの理解ある人々から暖かく見守られているのだ。

(鹿兒島大 法文三 園師博隆)

合宿教室の流れ

三百三十七名の参加者

第十二回学生青年合宿教室は、阿蘇五岳の麓「ホテル阿蘇の司」に於て、八月七日より四泊五日にわたって行われた。三百三十七名という合宿教室始まって以来の多数の参加者には、韓国から来訪された学生団五名の顔も見られた。男子学生十八班、女子学生三班、社会人五班、計二十六班という大編成であった。昨秋の関東、関西、北陸、九州の地区別合宿及び三月の太宰府小合宿、藤沢女子合宿を通して大合宿に備え勉強してきた二十数名の幹部学生は合宿の二日前から準備を整えて全国から集ってくる友を待ちうけていた。

第一日(八月七日)

午後三時よりいよいよ開会式である。祖先の御霊に対する黙禱と、国歌斉唱に続き、大学教官有志協議会の長崎大学の植木九州男先生の御挨拶の後、国民文化研究会副理事長川井修治先生は「我々の生活においては、学問、人生、祖国の相互の連関を正確に把握し、そのいずれに対しても真剣な態度を失うまいと心ゆかまで学び、語り合ってもらいたい」と述べられた。それに対し学生代表の熊本大学永井君は「この五日間を本気になってぶつかりたいと、期待と決意を述べた。オリエンテーションでは、富山大学の岸本弘君が、自分の体験に基き毎日真剣に生きることに尊さと豊かな心を持つことの大切さを述べ、訴えられた。続いて韓国学生団の紹介の後、式は終了、全員緊張した面持ちで最初の講義に望んだ。

わが民族に課せられた輝かしい宿題

小田村寅二郎先生

現代の思想の混迷の一例として「我々は日本人であるよりも前に人類の一員である」という考え方があつた。この前提に立ち、多くの平和論等が生れているようだが、果してそれでよいのか。私はこの中に宙に浮いた物の考え方、つまり人間の生き方における具体性の欠如を見る。もし右の言葉を口にしようとするとき、我々は一体誰に對して言えば良いのだろうか。成程、犬に對して我々は人類なのだとは言えるかもしれぬ。だが人間に對しては人類であるとは言えぬ。何故なら、我々は日本人という具体性を持った人間であり決して抽象的な人類などというものではないからだ。

国は単なる政治単位ではない。我々が具体的に日々の生活を営む場が国なのである。人は生まれると同時にどこかの国に運命的に属する。そして親子、夫婦、兄弟と云う具体的な人間関係において生活を開始し、固有民族の言語を修得し、文化伝統を継承し、発展させて行く。その意味で我々日本人にとつて日本は、政治単位であるにとまらず文化の母体であると言わねばならぬ。だが現代日本人は生きる基盤である文化を生み出した祖国を見失つたのではなからうか。歴史の見方の誤りがこの風潮を助長しているように例えれば日清日露戦争を単に侵略戦争として片付ける人が多いが、明治維新により生れ出たばかりの日本がどうして眠れる獅子清国や世界の大国露国に對して侵略を企てることが出来ようか。両戦争は日本が自分自身を敵しい世界状況の中で守り、生き抜く為の必死の戦いだったのだ。当時の日本人族に運命づけられた対外関係、民族の生き姿を把握することなしに正しい歴史はつかめない。

更に、現代日本人は、日本という運命共同体の中における自己の位置づけが全く分からなくなつてしまつて、日本の発展の為に各自がその職責を果さねばならぬ筈だが、政治、経済、教育のいずれの分野においても権力、金力に振りまわされてすでに久しいのだ。

日本文化は不思議な力を有している。今までは日本は仏教、儒教をはじめとして種々の外来文化を摂取したが、決して日本そのものを見失わなかったばかりかそれらを融合して世界に誇るべき文化を創造した。それは、一宗教に固執しない広い宗教的情操が民族性の内にあつたからである。ところが、明治時代に、西洋の絶対神の神を「神」と訳して日本古来の祖先神としての神との混同が始まつて以来、日本人は文化の中核として長い歴史の間に培われてきた神そのものを見失つてしまつた。

我々をはかる宗教のもつ本質に取り組むことを根底において、西洋文化の摂取における正しい姿勢を確立することを宿

	8月7日 (第1日)	8月8日 (第2日)	8月9日 (第3日)	8月10日 (第4日)	8月11日 (第5日)
7:00	国旗掲揚、 体操、食	同	同	同	同
8:00	朝 挨拶 太田先生	講義 義林先生	講義 山本先生	講義 義林先生	講義 夜久先生
9:00	講義 木内先生	講義 木内先生	講義 木内先生	講義 木内先生	講義 木内先生
10:00	休	休	休	休	休
11:00	別班研修	質疑応答 義林先生	別班討論	別班討論	感想文執筆
12:00	クリエーション 中食	記念撮影 中食	クリエーション 中食	クリエーション 中食	閉会式
1:00	質疑応答 木内先生	挨拶 太田先生	質疑応答 木内先生	講義 小柳先生	和歌講評 山田先生
2:00	別班討論	別班討論	阿蘇登山 和歌	別班輪読	別班輪読
3:00	開会式 オリエンテーション 韓国学生団紹介 別班の自己紹介	講義 名越先生	阿蘇登山 和歌	別班輪読	別班輪読
4:00	夕入散	同	同	同	同
5:00	食浴歩	同	同	同	同
6:00	講義 小田村先生	講義 山田先生	別班討論	別班討論	別班討論
7:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論
8:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論
9:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論
10:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論
11:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論
12:00	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論	別班討論

題として生きてゆかねばならない。

第二日(八月八日)

指導者の教養

太田耕造先生

指導者が修むべき教養には、経学と史学の二つがある。経学とは、哲学であり思想である。学問、思想のない国は衰れたと云うが、現在の日本の政治家には、それらが欠けている。残念ながら、彼らは、如何にして国民を安楽にさせるかということだけしか考えていない。史学とは、歴史の流れを見る眼を養うことである。これまで、幾多の国家が興りかつたんだ。しかし、その亡国の原因は、みな国民精神の衰退に依る。国家は、その外からではなく、内から亡びていく。すなわち、「夫耕やさざれば、天下その飢えを受く。一婦織らざれば、天下その寒を受く。」のである。

国民一人一人の胸内に国の命が宿つているのだ。

最後に、三井甲之先生の御歌を一



太田耕造先生
最後に、三井甲之先生の御歌を一

首誅までいたで終りにする。ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

世界の転機と日本

木内 信胤 先生



最近の世界の大きな特徴として、今まで権威とされたものがその権威を失いつつあることをあげることができよう。

例えば国力に於いて抜群の力を備えていた米国は、ケネディラウンド関税一括引き下げの不首尾や、昨年秋に金融危機が起こりそうになった事実を見れば、経済的にも政治的にもその権威を失墜しつつあることは明らかである。

又E.C.C.最近のドイツ経済の行きづまりやオランダ経済政策の破綻、加盟国間の関税の全面撤廃による混乱などによって最近話題にもならない程である。中東紛争に於いて、国連は自らの責任のもとに作られたイスラエルに対し何の力も発揮し得ないでいるし、共産主義社会に於いてもソ連においてはマルクシズムの権威は急速に衰え、中国における混乱は周知の通りであるが、すでに党はその権威を軍に譲り渡してしまつた感がある。

右のような事実から察せられることは文芸復興以来偉大なる成果をあげた西洋思想がその限界を示しているということである。

現代政治を支える議会制民主主義は、激しく互いに権利を主張するが故に遂に殺し合わざるを得ないような西欧の精神風土から生れた思想なのであるが、この

ような思想が殊更権利を主張しない日本人には似つかわしくないことを考え、このような問題についても根本的に考え直すさねばならない時期に来ていると思う。

又、広い意味での左翼思想、つまり社会が個人の面倒を見るべきだとする思想は現代を風靡しているが、その為には人々は社会を顧みようとしないようになってしまった。この事は、後進国援助が逆に後進国をしていつまでも一本立ち出来ない状態に置いてあることにも見られる。

更に計量統計経済としても発展してきたケインズ経済学も物量思想にとらわれ既に限界を示している。これらの西欧思想にとって代わり次代の人類の文化を支えるものは新しい宗教であり、その徴候は既成宗教がそのドグマを棄てつつあるという点に見られる。私はその新しい宗教の具体的な姿をここで言葉にすることは出来ないが、ただ、現世における生のみを考えるのではなく、来世、前世にまで思いを致すものであろうということと言える。

日本は驚くべき経済発展を示す、世界におけるユニークな存在であるが、その政治思想等はあきれるほどだらない。一体何故そのようなか。そこが追求されねばならぬ。かくして日本人が自ら生きていく道を見出すときに、現代の混乱に光を与え得る何物かが生み出されるであろう。

古典に見る日本世界像の系譜

名越二荒之助先生

私がソ連に抑留されていた時、大部分のものが洗脳された日本の古典に親しんでいたので、とうとう洗脳の嵐に耐えて赤化

をまぬがれたのである。これは、日本の魂とも言うべきものが古典に流れてい

たからに他ならない。その魂を探ることが、調和の精神がその中核をなしていることがわかる。古よりこの精神を以てて民を治められてきた天皇は、即ち、国民と共に生きてこられた天皇である。これは日本書紀などにもすでに明らかに示されている。聖徳太子は、十七条憲法の第一条に和を説いておられるが第十条には常に相対する人間のありのままの姿を凝視され、それ故にこそ欠点多き自己を自覚し、共に和していかねばならぬことを記しておられる。

さらに古事記には、人間の悲喜ともこの激しい姿がそのままに表現されている。これに代表されるように、あるがままの人間性を凝視し、これを尊重していることが日本思想に見られる一つの特徴である。

次に親鸞が、「無義をもって義とす。」と言った言葉の意味は、固定観念を排するということであるが、ここにも日本思想のもつすぐれた特色を見ることができよう。この固定観念にとらわれず、古いものを失わず、新しいものを撰取する我々祖先のおおらかな心は、抱納無窮の精神（聖徳太子のお言葉）とも表現できよう。そこには、良いものに對してはただちに共鳴共感していくという開かれた心の世界があった。以上のような特徴は寛容と調和という言葉に集約できるかもしれない。私は、このような思想が古典に見られる日本世界像であると思う。

短歌入門

山田輝彦先生

芥川龍之介は「羅生門」において無数のエゴとエゴの戦によってバランスを保

ちつゝ生きている人間の姿を描いた。その思想はいかにも残酷で非情だが、そこに私は、理性が情意を侵蝕していく近代の精神を見るのである。しかし、ひとたび古典をみるとく時、我々はその中に救いを感じずにもたらぬ。芥川らの近代文学に見られる非情さはそこにはない。人間らしい情緒は文明の進歩に伴って、逆に失われつつある。我々は今こそ素朴な人間本来の根底に返る必要がある。これは決して後退ではない。我々がこの合宿で短歌を作るのは、この豊かな情意の回復を除いて思想を語ることが許されぬからだ。

万葉集の防人の歌は、親や妻子と別れる悲しみを隠さず歌っている。公の爲にとはいってもどうしても拭い去れぬ私心を人間は持っている。その私心をのりこえて天皇に尽すという美しい緊張感が人生の真実ののだが、万葉集以来、先人は痛切な歌のしらべの中にその思いを留めて死んでいった。我々にはその思いを受け継ぎその豊を慰める義務がある。すなわちこの「留魂」と「慰霊」という二つの形式が日本では古来歌という形において表現されてきた。祖先と我々は歌によって結びついて来ているのだ。

夜に入って班別討論に移った。そこでは色々の問題を自分自身の問題として考えようとするのではなく、単なる知識のやりとりになりがちであった。この安易な態度を克服するのは困難ではあった。しかし先ず友の述ぶる事を友の気持ちになって聞くという努力をした時、あたかも心と心が触れあうような喜びを知ったのだ。そこでは又、自分の心を素直に見つめ、正確な言葉で話すという基本的な学問の姿勢を確かめたのだ。

鹿大 松木 昭
胸の内確かめるごとく語りゆく友の
言の葉心に残れり

東大 石村 善悟
消燈の時過ぎぬれど話尽きず庭に出
でてぞ語り続ける

心習院大 小田村静代
なにゆゑか心閉してうちとけ得ぬ友
とも語りぬ夜の更くるまで

は輝やき来夜の更けゆけば
西南大 古川 慶子

初めての友と語りてこの夕べ暮れゆ
くまゝに心うちとく

第三日(八月九日) 日本民族の中核性格について

林 房雄 先生



日本人が国際社
会の一員である為
には、なによりも
まず日本人でなけ
ればならない。日
本人としての宿命

を荷い己を成熟させ、そして日本の文化遺産を身につけて国際社会に参加しなければならぬのだ。このようにお互いの民族の長所を發揮しあつてつきあつてゆくことが、国際社会には必要なのである。その長所ともなるべき民族の中核性格、すなわちコアパーソナリティというのは、その民族の先史時代に形成された文化的基礎にすぎず、それが今日まで根強く残っているものである。日本の場合、文化的基礎のでき上がった先史時代について記したものはいうまでもなく神話である。神話は、近代科学、特にダーウィンの人類進化論をそのままうつつした社会進化論等の批判によって自然消滅すると考えられていた。ところが、プロロジックだ

と考えられていた神話が、最近では近代科学を生んだ科学精神にも劣らぬ思考方式によって生みだされたものであるときえ言われるようになった。又、最近、神話を若い世代に教えることに反対する意見として、「事物中心の歴史を教えられた新しい世代ができつつあるのに、再び神話というあいまいな歴史を教えたのでは元の黙阿弥ではないか」と、いうようなものもあるが、ヤスパーも言っているように、「歴史」というものは人間の行動史」なのであって、神話が歴史の中に占める位置は重大である。だから、我々が民族生命の連続性を感じる為には、神話を読むことが肝要なのである。さらに言うならば、日本をこれまで立派にしたのは神話だけではない。事物のように蓄積できない個人の人格、精神などが大きく作用しているのである。我々はそういう祖先の精神の苦闘のあとを歴史から学ばなければならない。

大学教官有志協議会挨拶

△平岡禎吉先生△聲に閉じ込められた個人や団体であつてはいけない。外国の事情をよく理解し、自分の国に閉じ込められないように思考法をしなければならぬ。
△峰辰次先生△終戦時の韓国での経験から、国際間には嘘が多いということを強く感じた。諸君が物事を判断する時は決して軽率に走らず、そのものの真の姿を見抜くようにせねばならない。
△奥田克己先生△長崎の原爆によって妻子を全て失った私は生きる望みを全く失ってしまった。その時の虚脱感から何とかして立直つた事は貴重な経験であつた。
△吉田靖彦先生△私は数年前米国に渡り、毎日ロシア語を学ばねばならぬとい

う厳しい生活を強いられたとき、和歌を詠むことで精神のバランスをとった体験があるが、和歌が歴史的にも日本人に心のやすらぎを与えてきた事実を目を向けたい。
△梶村昇先生△神の存在の有無を論じようとしても、結局神というものは人によって千差万別であつて一概に論じることができない。自分自身を深く見つめてゆきることによって宗教というものは理解できるのである。

いよいよ阿蘇登山である。かなたにかすむ外輪山を眺めつつ、バスは白煙を噴く中岳に向つた。山頂では火口を背に記念写真をとりあう楽しげな姿があらこちに見られる。下山の途中草千里にて一時休憩。雄大な阿蘇で合宿の緊張をほぐされた楽しい登山であつた。

- 防衛大 宮本 健治
- 山はだの大石小石踏みくれば山風涼し阿蘇の頂き
- 鹿大 黒木 清亜
- 山はだの荒れすさみたる阿蘇を仰き噴火のさまに思ひはせけり
- 岡山大 伊藤三樹夫
- 地の底にこもる火のあふれ出て永遠に燃ゆるか阿蘇の火の山
- 東京女大 梅田 咲子
- 灰色の雲の下り来て草原の彼方の馬のかげうすれゆく
- 実践女大 青砥 直子
- 友どちと肩くみ合ひて笑ひつゝ写真とりたる火口のふちで
- 鹿大 武島 延子
- 大空にわきくる雲のむくむくとふくれゆく夏陽に映えて
- 入江興産 岡本 博幸
- 大阿蘇の火口に立ちてながむればやまなみはるかかすみてみゆる

続くパネルディスカッションは「現代日本の最も重要な課題は何か」の演題のもとに行われ、まず木内、林、山本三講師及び国文研の久々、川井両先生が各々重要と考へておられる問題を述べられた。

木内・西欧思想を脱却して、政治と教育を日本的で正しいものにせねばならぬ。特に小学校、大学の教育に問題がある。

林・現代は曲がった学問をしている者が大衆に迎合してまかり通っている時代であるが、このような曲学阿世の徒は早く世の中から排斥せねばならぬ。

山本・現在の政治が優柔不断で勇がないのは、思想が混沌している為それに感わされてはいるからである。

夜久・何が間違っているかを見極めて早く世の中から消し去り、日本人として進むべき道を探つてゆかねばならぬ。

川井・国民みんなが統一された目標に向つているような日本になりたいが、まず国民同胞感確立の為の啓蒙運動が急務である。

次に木内講師から戦後の国語教育の誤りが無理な漢字制限、表記法の変革等にあつた事を説明された。続いて曲学阿世と共に浅学阿世の問題が林講師から述べられた後に山本講師から現憲法の根本精神を要するとしてする団体がその憲法下で認められているのは憲法だとされる。林講師は現在あるのは憲法ではなく、占領基本法にしが過ぎぬと述べられ、不備は認めながらも現実には憲法であることは尊重せねばならぬと主張される。山本講師との間に鋭いやり取りがかわされた。時間が少かつた為徹底的な討論を聞けず残念であつたが講議の時とは違った違った講師の意気が感じられた一時であつた。

第四日(八月十日)
ベトナム問題について

山本勝市先生



アメリカの共産主義封じ込め政策により、多くの国が共産化されることから救われた。アジアでの自由への道はアメリカと提携する事に求められよう。「ベトナム侵略反対」というその侵略とは、どこからでてる言葉か。ベトナムでは多くのアメリカ人青年の血が流されているのである。この言葉はアメリカを孤立させようとする意図から生れた言葉なのだ。ベトナムでは北と南に地域意識があるが、北の者は南から言えば好戦的であるが、北自身は進歩的であると云い、南の者は北からはのろくて田舎くさいといわれているが、南自身はわれわれは真の平和を追求すると言っている。このことは産業面において、南はほとんど全部農民で、北においては鉱工業が盛んである事に原因している。なお一般に北と南に分けるが、中部にも特殊な性格があり、彼らは自分達は文化の中心であるといっている。しかもこのように、一民族が二つにも三つにも分れているとはいえず、それほど統合への意志は強くないといえる。

第二次大戦後一九五四年三月ジュネーブ協定が締結され、十七度線を境にして休戦、外国兵器を用いてはならない、非武装地帯はかつてに連れぬ、南北交通は自由であるという事を決め、南ベトナムとアメリカは調印しなかった。南ベトナムが調印しなかった理由には色々あるが、この協定について南ベトナムの意

向は全く無視され、専ら北ベトナムに有利に事が運ばれて来たからであった。アメリカは南ベトナムに同調するとともに調印はしないが、決してこの協定をぶちこわす戦いはしない。だが北ベトナムが南ベトナムに侵略するならば戦は辞さぬことを表明した。韓国、ベルギー、フィリピンはそれぞれ独立に対するアメリカの援助、又は他国からの侵入を排除してもらった過去のアメリカに対する感謝からアメリカを支持する意見を述べている。今、アメリカがベトナムから引きあげると、今後アメリカは凡ゆる防共協定を破棄せねばならなくなり、これは世界平和に重大な危機をもたらす。また、南ベトナムには北ベトナムに圧迫されたキリスト教徒住民、ベトナムのテロの被害を受けた国民の利害が渦巻いており、アメリカ引上るの後はむきだしに憎悪感による数倍の流血が見られるであろう。またラオス、カンボジア、マレーシア迄共産圏の手が伸び混乱してしまおうであろう。うなった時の日本が受ける被害は想像を絶するものがあるにちがいない。日本の現在なすべき役割は、アメリカが侵略に抗して戦っている事実を日本のみならず世界に知ってもらう事である。

聖徳太子の十七条憲法について

小柳陽太郎先生

我々が古典を読む時、故人の心を偲ぶ縦横無尽の心の働きの肝要であり、そうする時、古典は我々の前にその姿を現わしてくる。その働きとは換言すれば、古典の一語一語を正確に読みとり、その関連性の中に故人の思いをくみとる努力をしてみる事だ。

現代の教育に於ては、十七条憲法という「和を以て尊しと為す」という第一

条の冒頭のみを取って、それ以上教えようとしな。だがこの言葉に秘められた太子の御心はその先を読む事によって、正しく偲ばれるのである。即ち、「人皆党有り、亦達れる者鮮し」は、自己中心の世界に閉じこもりがちな人間の醜さ、それはどうにもならない人生の事実であるという太子の深い悲しみを表わしておる。それは又、第十五条において「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉にも表われ、お互いに足らざる現実の自分である事に自覚めて、「衆に従ひて同じく挙へ」つまり皆と同じ心になって苦しむ事なしには和という統一された世界は開けてこないと述べられる。「和を以て尊しと為す」の御言葉はこのように読んでではじめて生きた言葉として我々の胸に訴えてくる。次の第二条「篤く三宝を敬へ。」は太子が単に仏教を導入された事を示すだけではない。太子が心をくだかれたのは先ず国民生活であつて、その根柢は教育教化に依らねば実現せずという強い確信が第二条に現われているのだ。十七条憲法は中国の古典、仏典などからの引用が多いと言われるが、実はその内容は外人生体験に融化して書かれたものである。例えば第三条における「君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす」は管子の「君臣相与に高下処を異にするは天と地との如し」とよく比較されるが、太子に於ては、天と地が生命化された全体としてとらえられているのに対し、管子は上下の階級観に基いて冷たい対外的秩序を論じているにすぎない。「滅私奉公」という言葉があるが、太子はそうでなく「背私向公」を勧められた。「私」は滅ぼせるものではない。滅ばせない苦しみを減らせることこそ公に尽すというのが人間の本当の姿だと言っておられるのだ。

和歌全体講評において山田先生は、歌一つ一つについて注意され、物事のあるがままをもつと正確な言葉で詠むようにし、余りに主観的な言葉は排していくようにと、又歌は情を詠むのであり、理窟を詠むのではない事を繰り返して述べられた。その後各班に分れてお互いに批評を行ったが、時には痛烈な批判が出たり、笑い声の興る場面も見られ、いよいよ班の中に親密さがまじった感じがした。

慰靈祭 国の為に誠を尽し命を捧げられた多くの御祖の御霊を偶びまつらむと三百余名の会するうちにろうそくの光にほの暗き祭壇の前で明治天皇の御製が拝誦され、国を守り御祖の魂を受け継がむとの強き決意が述べられ、全員が声を合わせる。海征かばの曲をもつて慰靈祭は終った。

慰靈祭にて 共立女大 島田 寿子
国のため生命ささげし人々の苦しみ 悲しみいかにあはらむ
慰靈祭にて 九州大 稲津利比古

ほの暗き祭壇に向かひ祖先らのみ霊 なくさむ今尊し
海征かば 皆と歌へば胸内の思ひ 高まり涙出で来ぬ
海ゆかばの歌を歌ひて 長崎大 安東 巖

歌ひつつ涙こぼれぬ国の為命を捨てし英霊思へば
慰靈祭の折りに 国文研 寺川真知夫
窓ゆる入る風のさやきもみなこれに降り来ますらむ霊の御業ぞ
降り来ますらむ霊の御業ぞ 降り来ますらむ霊の御業ぞ
はかそかにさゆらぎてをり

第五日(八月十一日) 今上天皇の御歌について

夜久正雄 先生

先生は先ず国民精神と国家の關係から話しを進められ、天皇を今日まで存続せしめたのは、尊嚴なるもの、まことあるものを仰いでいこうとする国民一致の精神であった。我々はそこに、天皇がまことに民を思われていたという事実と共に、祖先が天皇を信じていたという事実を見る々と述べられた。次に人間の行為や思想はその人の感情によるもので、それらを知るにはその人の言葉を見るしかない。幸いにも日本においては歴代の天皇は和歌を作つてこられ、それを詠むことによつて我々は天皇のお人柄を知ることが出来るし、天皇の御政治とのつながりもそこに見出せる。と言われ、具体的に天皇の御歌の解説に移られた。先ず大正天皇の

たふれゆく民をおもひて

を挙げられたが、我身をかえりみず、ひたすらに民をお救いになろうとされる天皇の尊い真心について語りつゝ先生は壇上で絶句され一瞬水を打つたような厳肅な空気が講堂を包んだ。この大きな感動のうねりのまま講義は終わった。

正午から閉会式。「螢の光」の合唱と共に四泊五日の合宿は終わった。故郷に帰つて行く友の心は喜びと新たな決意に満ち溢れていた。(文責 九大 志賀建一郎・小柳左門)

合宿詠草より

韓国の学生と話して

東大 田代 民治
未熟なる私の英語を苦にもせずほゝゑみながら聞く君やさし

明大 向田 正志
友人と寝床でかはす語らひに疲れもわずれ夜はふけゆく

韓国の訪日学生団の友に韓国の国家目的について問ふ

京大 井上 慎一
我ら問ふに二人の友のすぐさまに答ふる姿に心うたるる

我が国の目ざすゆくてはこゝにありとさつと答ふるその目ざすよし

オリエンテーションにて

富山大 岸本 弘
全国ゆ集ひし友に我が思ひをいかに伝へむと心さわきぬ

我が声の高まりゆくを覚えてつたただひたすらに語り尽せり

長内先生を囲んでの最後の夜の集ひにて

歌を歌ひつづけぬ

韓国の学生と接して

九州大 田中 康裕
戦ひたる国より来にし学生のひかるひとみにきびしさありけり

言の葉のちがひをこえて伝はり来国を思へる強き心の

全体意見発表を聞ききて

共立女大 寺田 和子
壇上に胸張り立てる先輩の声胸にとどむ後の日までも



〔合宿地より見た阿蘇〕

韓国来訪団の方の挨拶を聞ききて

早大 河原 倫子
国を超え言葉を超えて胸内に友の御声は響きくるなり

オリエンテーションを聞ききて

中央太 飯田 勝一
力強き思ひをのべらるる先輩の御言葉きけば力の湧き出づ

熊本県大道中 中満 重明
カルデラの夜空を裂きて雷雨来ぬ討論のさはやかに朝明けは来ぬすさまじき阿蘇

の雷雨のしづまりしのち

熊本県鹿南中 永田 憲二
若人の列にまちりて日の御旗おろがむ今朝の心すがしも

休憩の時若い学生達と情熱をこめて話していられる師の顔を見て

熊本市江南中 広瀬 和夫
ひとこともまじりのがすまじと見つめをる姿うつくし師をかこむ友

熊本県京陵中 郡 保雄
我が心晴れゆくがこと雲さりて日の丸の旗ひるがへるなり

亜大学生部 三谷 文雄
夜を徹し国を語れる友を見てあらたな力湧きくるを覚ゆ

火の国の大阿蘇の野に友集ひ国の命を語り合ひけり

参加者一覽 (総員三三七名)

- 学生(学校名)
鹿兒島大 鹿兒島経大 鹿兒島工業短大
熊本大 熊本商大 長崎大 九大 福岡大
西南大 福岡教育大 修猷学館 山口大
広島商大 四国学院 神戸大 京大
関西大 皇学館大 富山大 金沢大
東大 東工大 防衛大 玉川大 早稲田大
法政大 中央大 日本大 亜細亜大
横浜国大 学習院大 東京女子大 明治大
慶応大 一橋大 二松学舎大 明星大
国士館大 拓大 上智大 国学院大
順天堂大 山脇短大 実践女子大 日経短大
共立女大 東化大
社会人
小中高校教師など教育関係者 会社員
団体職員
招待 大韓民国学生会
大韓教育有志協議会
奥田克己(明星大学教授) 植木九州男(長崎大学生部) 峰辰次(長崎大講師) 岡嶺吉(鹿兒島大教授) 筒井清彦(大分大教授)
国民文化研究会

参加者の感想文より

胸にジーンとくる思い

長崎大 教二 安東 巖

慰霊祭の時、「海征かば」の歌を唱いながら胸が「ジーン」として来るのを僕はどうしようもなかった。又涙がにじんできたのも押さえる事が出来なかった。僕には「日本人とは何か」を口で説明することはできない。しかし、このような感激、胸にジーンと来るような思、これこそ日本人のみにしか解らない心情ではなからうか。日本の危機が叫ばれている。しかし、若者にこのような気持、言葉では表現出来ぬが「ジーン」と胸に来るもの、これらが存在する限り日本は滅びないと僕は信ずる。

真心をもって接す

明星大 理工三 平井 隆洋

今考えてみると、真心をもって人と接することの重要性がひしひしと胸に迫る。この感じを強くしたのは、和歌の講義においてであった。班別討論の時には自分にこだわった話しをしていたのに、和歌の御講義を聞いている時は、何のこだわりもなく、作者の心になって歌を理解しようとしていた自分に気がついた。この心で班別討論の時に臨んだのだが、とても対話が楽しく、又、他人の考え方の理解を通り越して、相手の心が分かるようになった気がする。このことこそ真心をもって接することだと感じた。

真心の通じ合う尊さ

九州大 医一 小柳 左門

夜久先生が御講演の中で、今上天皇の終戦後の御歌をお詠みになりながら声をつまらせて、かなしみをじっとこらえて

いらっしやいました。僕も天皇の民の上を祈られる美しい御歌にまぶたの熱くなる思いでしたが、それとともにその夜久先生の姿に、本当に尊いものを見た気がしました。涙があとから／＼湧いて来ました。全体意見発表の時にも、皆の話される事もよく聞こえず、ただ夜久先生の



〔朝の体操風景〕

その姿がまぶたの裏にかちりついていました。

真心をもって語りかける人に我々は真心をもって答えずにはおかれぬ。天皇陛下の真心と夜久先生の真心がぶつかって光を放つていくようにした。真心が通じあうというものはこんなに尊いかと感じ、それをはっきりとこの目で見られたような気がただでなく、この合宿は尊かったと思います。

限らない喜びを感じた

防衛大 三 大隈 末雄

私は古典を読み、和歌を創ることによる、純日本的なものへの限りない愛着と自信と誇りをあらたに見出した気がして、嬉しくて仕方がない。強烈な意識と共に大きな安心感を覚えるのである。又全ての問題を自分のものとして考え、という態度の厳しさに思いを致す時、誠を尽すということの困難と重大性を感じずにはいられなかった。それは、韓国の学生と話した時に強く感じた。四泊五日の合宿に限りない喜びと、湧き上がる力強い意気を感じた。大切にしたい。

進むべき道がはっきりと

亜細亜大 経二 大場 一知

私は今まで人生や学問に浅学ながら真剣に取り組んできたつもりだ。しかし、それは焦点のあわない近視状態であったと、合宿に参加して初めて判った。さらにこの合宿でメガネを得たようだ。なぜなら色々な問題や自分の進むべき道がはっきりと見えてくるような気がするからだ。若人が心を開いて時を忘れて語り合う、短くもあり長くもあつた四泊五日は本当に充実したものであつた。私はこの合宿で得たメガネを一刻も早く自分の目にするよう努力しなければならぬと思つている。

自分は再出発をするのだ

長崎大 経二 佐藤 健治

第一日目の小田村先生の御講義から始つた諸先生方の御講義は私にとっては耳新しいものばかりで、ただ／＼感心を感じました。そうしているうちに三日目ごろから頭の中がひどく混乱してしまつて、それから自分なりに小さくまとまっていた価値観、世界観がくずれさつてしまひどく面くらいました。それが三日

目に和歌を創り、四日目の夜に批評をした。あつたとき、頭の中に光がさしこんできた。たまたまの気持になり、それまでもやもやしてそれまでの自分を静かに思い返して見ました。その時私の胸の中に湧き起つて来たのは、自分がいかに利己的であつたか、他人の言葉をもっと尊重しなればならないという最も根本的な点でした。考えは色々に発展してゆき、真心ということも考えました。信頼ということも考えました。そうして自分は再出発をするのだと思つていました。

日本人ならではの理解できない世界

慶応大 法一 小山 浩夫

私は慰霊祭で「海征かば」の歌を聞いて、涙がこぼれる様な湧き上がる感動に襲われました。それは父を思い出すのです。何故か、それは自分でも理解できません。不思議とそう感じるのです。それは「海征かば」の歌自体に日本人に何かしら訴えるものがあるような気がするのです。又、それは短歌の世界にも言える事です。死を前にして遺したそれを読んでもわかります。日本人ならではの理解できない世界があるのだと思います。天皇の御歌にはいつも頭が下ります。何故にあのような純粋なお気持を国民に向けたいさるのだろう。本当に立派な人だと思つています。あのような天皇という人を我々の上にもまわして幸福だと思つています。は何にもまして幸福だと思つています。

友情のきずな

九州大 法一 水永 正憲

ほんとうに友情のきずなを結ぶには自分はどうあればいいのかわかりません。それは班の友達を身をもってやってこられた体験で話された時、僕は実感として知つた。今までの自分が、自分の言動が空虚に感じら

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

漱石とナシヨナリズム

明治二十二年から二十五年にかけて、

子規と漱石の間にやりとりされた手紙は、人生、学問、文学、恋愛等にわたって、いかにも若々しくエネルギーな当時の学生生活を垣間見させる注目すべき文献である。こういう交渉の中で子規は詩文集「七呷集」を書き、それに刺激されて、漱石は漢文による房総紀行文「木屑録」を書いた。これは漱石二十三歳の作であるが、吉川幸次郎氏によって、日本人の手になる最高水準の漢文であると評されている。漱石は文学者になることを目的とした、いわゆる「文学青年」の時代を持ったことはなかった。彼は「文学」というものを、漢文学から学んだのであった。そして、他の文学者たちが、ヨーロッパ直輸入の文学理論にとびついて、容赦なく古い日本を切り捨てて行ったのとは反対に、頑固なほどに、自分の体験を大切に、それに固執したの

であった。

この事は、彼の宗教観にもよく表われている。当時の文学者の多くが、例えば、透谷や藤村のように、キリスト教へ入信したのに対して、彼にはキリスト教体験というものは全くなかった。明治三十三年、漱石はドイツ船プロセイン号で西へ向ったが、義和団の事件で中国を追われた宣教師たちが、上海から家族づれて大勢のりこんで来た。それらの宣教師たちと、彼は「教義問答」をしたらしい。神について書いた英文の断片があるが、その中で彼は「絶対的であるが故に、相対性をふくむ一つの名によっては呼ばれることが不可能な無」と規定している。これはまさに日本人のもっている典型的な「神」の概念で、彼は真正正銘の「異教徒」であった。ロンドンの下宿の女主人が「貴君は Pray する気にならぬか」といった時に「余は Pray すべき

ものを見出さぬ」と答えて、親切なその女主人を泣かせてもいる。

この彼の頑固さが、彼を大成させた原動力であった。彼は英文学を学ぼうと覚悟した時、「洋文学の隊長」になろうと思つた。しかし、事はそう簡単には運ばなかつた。彼はロンドンで神経衰弱になつた。つかみどころのない「英文学」というものと悪戦苦闘した。そうして「自己本位」という言葉のみつて、やっと泥沼のような自己喪失の状態から脱却できたのであつた。「自己本位」とは勿論、他人に対して自己のペースで行くというのだが、ただそれだけではない。「西洋人何者ぞ」という言葉からすると、それはまた、他国に対する自国の自覚でもあつた。つまり漱石の「自己本位」とは「インディヴィジュアル」であると同時に「ナショナル」なものの自覚でもあつたのである。その二つの接点に漱石の「自己」があつたといふべきであろう。こうして彼は「狼群に伍する一匹のむく犬」のようなコンプレックスから立ち直り、自分の感受性と力を信じて「文学論」の述作にとりかゝつたのである。小宮豊隆氏のいう通り、「文学論」は「漱石の外国文化に対する独立戦争の宣言」であつたのである。

日露戦争が始まつた年の五月に、漱石は「帝国文学」に「征軍行」という激烈な征露の長詩を書いた。彼にとって、日露戦争とは、何よりも「西と東」の文明の戦いであつたのである。彼がロンドンでなめた、殆んど生理的苦痛ともいふべき西洋文明の圧力をはねかえす日本の力

を、彼は現実のものとしてうけとめ、確認し得たのであつた。「僕は軍人がえらいと思ふ。西洋の利器を西洋から貰つて来て、目的は露国と喧嘩でもしようといふのだ。日本の特色を拡張するため、日本の特色を發揮するために、この利器を買つたのだ。文学者が西洋の文学を用ゐるのは、自己の特色を發揮する為でなければならぬ」と言っている。国運を賭した戦時、祖国の勝利を素直に喜ぶのは当然の人情である。勿論、漱石は戦勝後の日本の状態に對しては容赦のない鋭い批判を浴びせている。しかし国家存亡の時、に際しては、無条件に国とその運命を共にしようとした。「反戦」を売物にしなければ文化人といえぬ現代とは著しい相違である。日露戦争の勝利は、たしかに漱石の創作活動を著しく「鼓舞」したのであつた。

漱石は Pray すべき「ゴッド」を持たなかつたけれども、「殉死」に値する「明治の精神」を持つていた。漱石の全作品は、この激烈な魂が、西洋文化という巨人と戦つた悪戦苦闘のドキュメントであつたのである。

(福岡県立若松高校教諭 山田輝彦)

目次	
漱石とナシヨナリズム	山田輝彦 (1)
経史の学	太田耕造 (2)
心理的鎮国からの脱却	倉前義男 (3)
大韓民国訪日学生団を案内して	将之 (5)
古典の窓(柳子新論)	小柳陽太郎 (7)
昭和42年慰霊祭	(8)

経史の学

——亜細亜大学学長太田耕造先生の

阿蘇合宿における御挨拶原稿

古の士大夫（今日の指導者）の学べき学問は「経史の学」であると云われていた。「経学」とは宇宙と人生の意義を教うる哲学で「史学」は治乱興亡の跡より帰納演繹する政治学哲学であると云われている。教訓は東西皆同じ。プラトン曰く「政治家は哲人たれ」と教え、ギリシャの黄金時代を礎いた偉大な政治家であったペリクリスは、彼のアセンスの民に「富」を説かなかつたと伝えられている。西郷南洲曰く、

政府（国家）の本務（使命）を墜しなば商法支配所（今日の会社）と申すものに更に政府に非ざる也と誡めている。

いまや日本の指導者に教養なく、哲学なく、その唯一、重大な政治的関心事はどうしたら国民をして安楽死をせしむることができぬかにある。ある外人の日本評として喧伝されている「魂なき繁栄」「あらゆるものあって自己なき日本」また日本人を評して「エコノミック・アニマル」等々、この評言は必ずしも酷評だけとは云いきれない。



フランスのドゴール大統領が日本の代表的政治家であるわが首相に対し「トランジスターの商人」と冷笑

したというの有名な話であるが、この位馬鹿にされた話は史上空前のことである。国家の権威失墜も極まりというべし。しかも外国からのこれら酷評に対し国民の反省もなく、また義憤、蹶起が見られないのが現状で問題点である。徒らに戯論や低劣の批評のみ多く、創意見識なしというのが現代日本の姿であると思う。これは民族的悲劇であり、また之を放任して居ることは民族的罪悪であると思う。

ある人曰く、罪悪に二種あり、一は罪を犯すこと、これは普通の犯罪である。他は当然為すべきことを為さざるの罪である。国家が侮辱されても、国家の代表者が冷罵されても国民が風馬牛であるというのでは国家滅亡の瀬戸際ではこれにせざるが如きことであるからこれは亡国である。而して之が傍観者は、正に民族的「罪」人であるというのである。されば亡国の原因とは何ぞ。

旧約聖書にアモス書というのがある。アモスという人物は紀元前七百余年の昔、ユダヤに生れた身分卑き牧者であったが、救国の天命を受けて蹶起した予言者であった。かれは声を励まして亡国の原因を語る。

パンの饑饉に非ず、水の饑饉に非ず。エホバの言を聴くことの饑饉也
エホバの言、即ち神の言とはユダヤ建国の精神といふことで「神自身」を指している。即ち神を忘れたのがユダヤ亡国の原因であると喝収したのである。建國精神を忘れるということは、広く国家興亡の原理を明示したものであると思う。わが明治維新の動力を採って見ても之が道理を識り得る。明治維新の志士達の求めた革新原理は之を外に求めずして内に求めたことに興國原理を見ることが出来る。即ち日本の建國精神である一君万民の国体精神に復原すべきことを期し、之がために君民の間を阻害している一切の幕府の勢力を打倒することに勢力を集中した。国家の萎靡不振、腐敗墮落の原因はその国家の勃興発展の動力であった建國精神を軽視忘却したところに主因があると見たからで、この国内悪を一掃し国内善を呼び起して革新原理としたこと流石であった。国家の傾くの風馬牛視するが如き民族悪に対し志士達は我慢が出来なかつたのである。

国家生活は「道義」を背骨とし、仮令道義を以て仆れるとも悔いずとすべきこと夙に南洲も力説したところである。かくしてこそ国家はその永遠の生命を維持し、さらに之を發展せしむることが出来るのである。

日本の産んだ偉大なる経済学者二宮尊徳翁は曾つて印幡沼の掘割検分の命を尊けたが直ちに之に着手せず、先づ儒者を遣はしてその地方民の教化を計るべきを献策したという話が伝えられている。有名なる経済学者アダム・スミスの大著である富国論も倫理学的一篇として彼が著したものであると聞いている。東西の卓

按した経済学者の経済観に対し深く学べきものがあると思う。国家が道義を軸として国民生活を規正しなかつたならば、仮令経済的發展はあつても国民は放埒、鬭争、我儘勝手、遊蕩墮弱となる。而して国家は一時的繁栄現象は見られてもその本来の使命を忘れたら南洲の所謂商法支配所と墮し低級な組織体となり果てること必定である。国家が単なる経済社会となつたなら階級鬭争は日常茶飯事となり、自己中心、享樂万能思想が大勢を支配し竟に民族滅亡の道を急ぐことになること当然である。かくて国民の愛國意識と自立意識と勤勞意識は次第に影を没し、不当の欲望不満のみ大勢を支配し、之が不満の原因は社会の責任であるという亡國思想が横行するに至る。

古語にこういう箴言がある。
一夫不耕天下受其飢一
一婦不織天下受其寒一
マス・プロ時代に何たる囂言といふ勿れ。また、古語を死語といふ勿れ。一人の怠者はやがて天下の怠風を作ることは必定である。理想なき国家、理想なき指導者、理想なき国民は憐れなるかな。宇宙と人生の意義を解せず、その権威に無智無感覺なるもの、末路を想うべきである。西諺に、「神の石臼は廻ること遅きも挽くこと細やかなり」とあるが、何人も何ものも天地自然の定めたる盛衰栄枯の鉄則から免れ能はず、また之に逆行する能はずである。所謂当世流行の叛逆児を誡めたものである。
次に「史学」を語る。

これは前述した「経学」と一体不可分である。明治維新の大動力となった大日本史は水戸の彰考館の修史局で編纂されたものであるが、彰考とは「往を彰に、来を考ふる」から出たもので、過去を明にし将来を考ふるという意味である。論語にある「温故而知新」と同一思想である。過去の日本を知らずして今日の日本を知るを得ず、今日の日本を知らずして明日の日本を知ることを得ない。かくて歴史の重要性を知ることを得よう。しかるに戦後、歴史を無視、軽視する風潮が大勢を占め、たゞ眼前の事象を逐うことにのみ汲々たる有様である。これは占領政策の謀略に因ることも一因であると思う。支那の清朝時代の一学者の言に、「人の国を滅ぼさんとせば先づその史を断つ」とある。占領軍は終戦の年の十二月三十一日の覚書で、日本の歴史、地理、修身の授業停止を命令した。この結果が一因と思うが、青年学生間において自国の歴史を知らず、また自国の歴史に興味を有せざるものが出たが、この非歴史的傾向によって彩られた若者達の中に暴力至上主義者が多いのも思想的根拠を欠く好例である。

改革革新の原理は国民的生命に潜んでいる偉大なるものを認識自覚して之を復興せしむる以外になしということになる。敢て建設原理を外国から輸入する要はない。木に竹を接いだ改革原理は悔を百年に残すこと歴史の明証するところである。

支那では北朝の名臣司馬温公が心血を注いで作った史書に「資治通鑑」という語がある。その他、唐鑑、明鑑などあり、歴史の書に「鑑」即ち鑑みることという語をつけた意味はまことに深長である。我国でも歴史の書に「鑑」という名をつけたものがある。大鏡、水鏡、増鏡などその好例である。人は鏡を見て自分の姿、容を整える。単に外形のみでなく、心を整調する歴史に学ぶべき必要がある。

明治維新史の鏡を見て切に思う。維新の志士たちはいづれも日本の建国精神である「天下一姓」即ちわれらは皆一姓の民であることの自覚の下に、「すめらぎ」即ち日本国民の統一者である天皇を中心とした日本政治に復源すべく一身を挺したものであった。しかるに今や国民は国家の統一者に対しての認識なく服従尊敬の念なし。亡国の兆は国家に中心統一なく、あれども其実なく各個バラバラの生活を営んでいる所に見ることが出来る。

改造革新は一面から見て旧物破壊であるが、真の改革は破壊に始まって決して破壊に終ってはならぬ。破壊は建設のためのものである。而して前述した如く、改革又は革新の必要は国民的生命の沈滞、頽廃から生じたものであるから、

明治維新史を回顧することはさらに昭和維新史を創作する唯一の途であると思ふ。

夜久、小田村尚先生の先師であった三井甲之氏の名歌に

ますらをの悲しきいのちつみかさね
つみかさねまる大和島根を
がある。われらのいのちをつみかさね、

心理的鎖国からの脱却

倉前義男

急激な時代の変化

第十二回合宿教室が三百二十七名という多数の参加者を迎えて、充実した内容で実施された事は、まことに喜ばしい。日本の根強い伝統は、こうして常に正しく継承されてきたのであって、長い日本史の中で考ふるならば、戦後二十数年の国家的虚脱は、ほんの僅かの間の一時的現象でしかなかったと云えよう。とは云え、二十世紀後半の今日の時代のテンポは、例えば徳川時代の十年が、現代の一年に相当する程の早さを持ち始めている。一例をひくならば、昭和四十一年における原油の輸入量は約一億トンであったにかゝらず、今年(四十二年)は一億一千五百万トンをこすと見られる。一年間に千五百万トンの増加である。この量は、大東亜戦争前における日本海軍の石油備蓄量が六百万トンであった事を思えば、およそ想像がつかう。日本の連合艦隊は、この六百万トンで約二年間、作戦し得たのである。昭和十七年における日本の年間総石油生産量が丁度千五百万トンであった事も忘れられない。また、この一億一千五百万トンの原油の九

つみかさねまるべきは正に大和島根、
即ち先人が心根を傾け尽して築き上げ残して呉れた祖国日本である。

〇%をアラビア地域から輸入しているのであるが、それを、かりに三万トンのタンカーに積んで日本へ運んでいるとしたら、アラビアから日本まで、目に見える視界の範囲内、タンカーの列が、ズラリとつながるのである。海洋における視界は五十kmであるが、一年間、ぶっとおして、視界内に入るタンカーの列が、石油を運びつづけているのである。

また、鉄鋼の生産量は昭和四十一年で五千万トンであった。所が、今年には、はや六千五百万トンに達する筈である。これも一年間で千五百万トンの増加である。これに要する鉄鉱石の輸入量も今年には四千万トンに達する。すでに日本の粗鋼生産量は西ドイツを二千万トン以上も抜いてしまった。西ドイツと同じ量に達したと云つて喜んだのは、つい三年前であった事を思うとき、時代のテンポの早さに驚かざるを得ない。では一年間に千五百万トンの増加という事が、どんなに大変な事であるか、見当のつきかねる人も多いと思うが、昭和十七年の日本の粗鋼生産量が八百万トンであった事を思い出してもらえば十分であろう。昭和十七年は日本が米英との戦争に突入して、連

戦運勝している時の事で、大東亜戦争中における最大の生産量をあげた年であった。この八百万トンには日本、朝鮮、満洲の全製鋼能力の合計数字である。これで日本は世界を相手に戦を挑んだのであるが、昭和四十二年の今日では、少しも無理をしないで、国民の大半が気もつかぬうちに、一年間に千五百万トンも生産量が増大しているのである。(注、中共の鉄鋼生産は現在の年間一千万トン強とみられる。伸び率も徴々たるものである)ソ連の粗鋼生産は今年、一億トンに達するとみられるが、大陸国のため、輸送上に大きな障害があるで、今後の伸びは次第に縮み始めると思われる。何故かと云えば、鉄道の運賃は、船の運賃の七倍ないし十倍も嵩むからである。しかも、鉄道というものは、長いレールと附属設備が必要なので簡単には建設できないし、一列車の重量にも限界がある。だが、一億トンの鉄鋼生産をおこなうには、鉾石約二億トン、コークス約一億トン、石灰石約五千万トンその他四億トン近い原料資材を鉄道で運ばねばならない。そのため、ソ連の鉄道の輸送能力はすでに限界に達しており、輸送力の急速な拡大は当分、望めない。その他色々の理由で、間もなく、ソ連の鉄鋼生産の伸びはおくれはじめると見てよい。それ故、日本も昭和四十五年か六年には鉄鋼生産一億トンに達すると予想されるが、設備がすべて海岸に面しており、しかも巨大船舶の建造に伴う海上運賃の引下げにたすけられて、鉄鋼生産でソ連を追い越す日も遠くないであろう。このよう

に、基幹的な生産力の面で、米國に次ぐ力量を備えようとははじめている日本としては、それにふさわしい基本的な国家戦略の策定が急務であろう。

戦後の閉鎖心理の正体

戦後の二十年は、徳川時代の二百年にも相当する内容を持っている。国民の生活水準の上昇と、生産力の増大の比率は、徳川期の三百年より、むしろ大きいかも知れない。だが、徳川時代を通じて、閉鎖的な鎖国心理のために、国民の心理構造には殆んど大した変化は生じなかつたように思われる。それと同じよう、戦後二十年間の日本人の心理にも、徳川時代ときわめて類似した鎖国心理に災されて、一種の停滞現象が見られる。それが、あたかも進歩的であるかのように見えられているのは、巧妙な宣伝のせいもあるが、最も大きな原因は、自称進歩派の一部の人士が、民衆の中の閉鎖的な、頑迷な保守的心情に便乗しているからである。明治のはじめ、電信線が張られた時、「あれには人の血が塗ってあるような」と云っては、電信線の下をくぐる時には念仏となえて歩いたとか、種痘をされると、牛の子を生むなどと称して大騒ぎをしたり、あるいは、鉄道が通ると、悪い人間が入りこむとか、山火事がおこると称して線路の測量を農民が妨害したりした例が少なくなかつた。こういう旧式な人間は、ほんの十%か十五%位のものであるが、これが大むね、ヒステリ婆さんや、カミナリ親爺みみたいな、煙たい連中の場合が多いので、村の衆も、

仕方なしに引きずられるという事になる。うっかり、それに批判的な態度でもとらうものなら、村八分にされかねないし、畑の作物にまでイタズラされるといふ状況であつた。このような貝殻の中に閉じこもる式の自閉心理は、久しい封建制度と鎖国政策によって、もたらされたものであつた。そして不幸にも、昭和二十年の敗戦を契機として、再びこのような心理が抬頭してしまつた。とくにそれを決定的ならしめたのは、新憲法という名の鎖国憲法であつた。新憲法の前文を平たく云えば、今後一切、アジアの問題に關しては発言の権利を放棄いたします。アジアや世界で何がおころうとも、日本は自主的な行動はとりません。また、一切の影響力の行使もさし控えます。そのためには自衛のための戦力も保持いたしません」といふものである。これは米ソはじめ、日本の再抬頭を恐れていた国々が、日本に足枷をはめようとして、与えた一種の催眠術であつた。勿論、日本国民の大多数は、この催眠術にかゝりはしなかつた。しかし、吉田茂などという人は、中々芝居がうまくて、いかにも催眠術にかゝつたふりをして、ダレスやマッカーサーを、逆にだましてしまつた名優である。名演技賞を授けられる資格は充分である。

所が本當にこの催眠術にかゝつてしまつた馬鹿者も若干いたのである。元來、暗示にかゝり易い人間といふものは単純でお目出度い人に多いのであるが、日本の左翼陣営の大部分はこの組に入る人達である。勿論、小数の本物の革命家は、

吉田茂氏と同じように、催眠術にかゝつたふりをして、愚民共を煽動して、目的を達しようとしているのである。最近の左翼陣営が専ら、農村、山村、漁村などの保守的な閉鎖心理をあふり、爺さま婆さま達に被害者意識を植えつけることによって、例えば、新空港の建設問題、原子力商船基地問題、原子力発電所の敷地問題、学園都市問題、ロケット発射場問題、高速道路問題等に、日本の近代的施設の建設を妨害する戦術に出はじめているのも、保守的な閉鎖心理こそ、社会主義思想の温床であり、心理的基盤である事を示知しているからであろう。

ソ連も中共も、その他社会主義國は例外なく、きびしい閉鎖社会である。ソ連がこの頃、少し外国との交流をはじめたと云つても、それは、ほんの一部分にすぎない。その意味からも、日本の社会主義陣営が鎖国憲法を有難がつたり、農村の頑迷な保守的農民の閉鎖心理と結びついたりするのは当然である。

だが、世界の進展はとどまる所を知らないので、閉鎖主義は大むね内部から崩れ去ろうとしている。全世界に存在する色々のタイプの國の中で、閉鎖的な國家は相當に多い。ビルマやカンボジャなども、共產國ではないが、多分に閉鎖的であるし、回教國の國も、殆んど閉鎖的である。よく見渡してみると、開放的社会を形づくっている國は、案外に少ない事に気がつくであろう。しかし、これらの閉鎖的な國々もいやおうなしに、交通や通信の発達などのために、その社会の閉鎖性を失いはじめていく。

実感があつたからこそ、張君がこの一語の日本語に、十八日間の日本滞在の印象を、思いをこめて託して示してくれたのだと思う。

空論でない平和の希求

八月五日朝、渡航手続の關係で、訪日団の一行が果して乗船できたかどうか、不安なまま、小田村理事長始め、合宿地まで随行する者十名ばかりが下関港へ出迎えに行く。さきわい李団長以下、外国語大学の金泰定君、ソール大学外交学科の張在龍君、高麗大学政治学科の李亨模君、慶北大教育学科の金慶麟君の五名の方々が、はずはずのところで現地ビザがあり、乗船来日、下関港に入国手続を済ませた時には出迎えの一同はほっとした。小田村理事長より歓迎の挨拶があつた後、直に一行は、日本側、名越二荒之助先生、アジア大学留学中の金泳国氏、国文研事務局の山内君、九大の島津君、富山大の吉沢、浜岸、山田の三君と僕の八名が加わり萩に向かう。萩の史跡を午後見学して夜は始めての自己紹介を兼ねた座談会を行なう。

戦後二十年余り、我々日本人は、世界にも稀な平和を享受して来た。平和であるという事は、それは理想であることにはまちがいない。しかし、その理想を日本は実現して来たのだと言いうるだろうか。或は日本が大東亜戦争に敗れたというところが、例外的にこの状態を惹起せしめたのであろうか。それならば問題は残る。戦後確かに我々は経済復興に力を入れて来た。現在では諸外国も、その繁栄振りには目を見はっている。しかしその反面、建ち並ぶ高層建築の谷間では、或は良風美俗を誇っていた地方に於てき

え、人心は荒廢の一途を辿っているのではないか。学者は、学生は、恰度サラミスの戦にベルジャを破り、続いてデロス同盟の盟主として繁栄を極め、迫り来るペロポネソス戦争の脅威も知らず、ポリスも正義もノモスにすぎないと説きまわり、ポリスの惰眠に狂気じみた麻薬を調剤する者に外ならなかったソフィスト達とその弟子達と同じく、現実具体の生の依つて立つ所を忘却し、自らの造り上げた観念に振りまわされ狂奔しているの



(岸信介先生を訪問して)

みではないのか。金慶麟君は「韓国の学生運動と日本の学生運動とは屢々同一視されているようだが、我々は、仮え政府に抗議した時にさえ、民族の主体性と、祖国の復興を急じるが故でありそしてこれを妨むものに對しては断乎として戦う気持を持っている。」と言ひ、金泰定君は「日本は経済的に繁榮しているが、何か大切なものを忘れていのではないか。日本的なもの、東洋的なものを大切にしていかなければ

ればと思うが、同じ東洋人として、この問題を日本の学生諸君と話し合いたい」と言う。更に、東南アジアの真の平和と、繁栄を共に祈る立場から色々の意見の交換がしたいことも語り三時間余りの学生と話したいことを語り三時間余りの時間が思はず過ぎてしまつていた。

八月六日夕刻合宿地の阿蘇の司へ到着。合宿期間中の模様は、「合宿感想文集」「合宿レポート」で窺えると思うし、僕自身合宿運営の方で忙しく、韓国の方々との間に於つては、ほとんど事務的な連絡のみに終つてしまつたのでここでは省略する。ただ言葉の不自由にもかかわらず、多数の合宿参加者が三三、五五韓国の学生諸君と、英語を中心に、時々漢字の筆談により、真剣に話していたのは印象的であつた。そのことは、合宿中に試みられた短歌の創作にも現われている。

○ 言の葉のちがひをこえて伝はり来国を思へる強き心の

○ 我國の目ざすゆくてはここにありときつと答ふるその目するとし

○ 我らまたみ国のゆくへ真剣に憂ひてゆかむと切に思ひき

○ 國を超え言葉を超えて胸内に友の御声は響きくるなり

明確なる目標を持って

八月の十一日合宿の閉会式直後山並ハイウエーで別府へ向う。二時間別府市内の観光をした後、小倉の宿舎、望玄荘に到着。日本側は九大の島津君、春藤君、

下関市大の梅谷君、アジア大の金氏と僕の五名。夜は合宿中のことを色々とおこし話し合う。「日本の学生諸君が、真剣に、学問・人生・祖国の問題を考えている姿に深く感動し、強く励まされた」と四名の学生諸君は各々の立場から感想をもらしていた。

八月十二日、八幡製鉄所の見学。後北九州地区、下関の赤間神宮を、吉川工業の林さんに案内していただく。夜は、北九州地区の経営者協会の方々、八幡製鉄所の若い社員の方々、吉川工業の方々と、合宿教室の総合検討会を終えて直に新しく加わつた、名越先生、早大の今林君、富山大の中田君、上智大の津下君、あわせて二十数名で座談会が持たれた。

韓国の学生諸君の念頭に絶えず最も重大な問題として意識されているのは、韓国の経済復興と、民族統一の悲願である。また、同じ運命の下に苦しんでいるヴェトナムの人々に対する甚深の共感、彼等の過去の経験と相一体となり、現実具体の平和に対する、国防に対する彼等の考え方の根底を支えている。

従つて各人確固たる目標を持って大学での勉学に精進し、将来の抱負もはっきり意識されている。張君は外交官としては、李君は国家の実務家としての、金慶麟君は教育者としての、金泰定君は、日韓両国の文化伝統を研究することによって両国の相互理解を深める目的を持つ者としての、それぞれの将来を語ると共に四人とも、あわせて国家の将来の問題を多方面から真剣に考へて行きたいと力強く述べていた。

京都・大阪・奈良・東京

八月十三日小倉をたち、途中山陽線沿

古典の窓

柳子曰く、それ天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧(やす)く、王侯は一を得て以て天下の貞たり。豈た天地と王侯とのみ然りとなくさんや。

(柳子新論)

山県大式が死刑に処せられたのは明和四年、享保の改革によって一時緊張せしめられた徳川の治世も、再び弛緩の一途を辿り、田沼意次が専断を振った時代であった。「柳子新論」は死刑に先立つこと八年、宝暦九年に世に出たものである。全篇を別して十三とすが、ここに挙げたものは、第二篇

「得一」の冒頭の部分である。大式死刑の年は大政奉還より逆算して丁度百年にあたるが、未だに尊王の機運熱せざる時に、敢えて大式が幕府に対して大胆に攻撃の矢を放ったのはまさしくこの「一」に対する確信であった。前掲の部分に続いて言う。「丈夫一を得るに非ずんば則ち以てその家

を治むべからず。士一を得るに非ずんば則ち以てその妻孥(妻子)を養ふべからず、庶人一を得るに非ずんば、則ち以てその身を安んずべからず。父は以てその子を教ふべからず。子は以てその父に事ふべからず。」

とは「二」たるを許さぬ統一感情であり、分裂を許さぬ全体感覚であった。この上に立つてはじめて「故に天に二日なく、民に二王なし。忠臣は二君に事へず、烈女は二夫を更へず」ということが単なる封建道徳の意匠としてではなく、生命そのもののあり方として納得せらるゝのである。生命は瞬時も分たるとことを欲しない。注がるゝ愛情の対象は決して「二」であつてはならぬのである。しかるに今われらが仰ぐべきはそもそも天朝であるか、幕府であるか、その帰すべきところを知らぬ分裂の時代を黙過することは、大式にとつては文字通り「死」を意味したのである。「父は以てその子を教ふべからず、子は以てその父に事ふべからず」そこに待っているものは、精神の断絶であり、文化の崩壊ではないか。大式の心を動かしたものは、所謂「尊皇イデオロギー」というがごときものではなかつた。それはたゞひたすらに統一と持続をねがう生命の必然であつた。

「今の人、婦に二心あるを聞けば、則ち必ず淫なりと曰はん。臣にして二心ある、それこれを如何せん」分裂せるこの世に統一を求めざる者には淫婦を責める資格はない。憲法擁護を口にするがらその第一条を黙殺するとき、まさにこの「一」を失なえるものとして、「生命」の名において断罪すべきではあるまいか。

(修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎)

線の景観を車窓にし乍ら京都の宿舎に着いたのは夕刻であつた。十四日は京都市内観光。竜安寺、金閣寺、平安神宮、三十三間堂、清水焼、二条城、東山ドライブウェイと藤田トラベルのバスによる一指定席の自由」によつて味わう古都の美を、半ば有難くも思い、半ば何処となくもの足りなくも思い乍ら歴訪。

八月十五日は韓国にとつては解放記念日、光復節である。早朝三十分間その式典を韓国の方々は挙行。日本にとつては終戦記念日、隣の部屋で我々は式を行なう。九時にホテルをたち、奈良へ向う。東大寺、春日大社、伏見桃山城、伏見稲荷とJTBのバスで訪れる。ここに於て日本側の我々は、日本の観光行政に対する大きな疑問を覚えた。

夜は、京大の井上君と、張君の知人の猪木君の二人が宿に訪ねて来た。夜遅くまで話は続き、李君は、合宿でもおなじみのあの朗々たる声をもつて、数々の韓国の民謡を紹介してくれた。その一つ一つにこもる雰囲気というか情緒というか、我々のそれとまことによく似通よつてゐる。案外こうしたところに、理屈で考へるよりも一層深い、日韓の文化的同質性が現われているのではないだろうか。

八月十六日は高槻市なる松下電子産業を見学。翌日東京に向う。夕刻東京駅に着いた一行は、訪日団招請に関して非常にお世話になった川崎グループの寺岡二郎参与、小田村理事長、韓国大使館の方々、国文研の方々の出迎えを受け宿舎に向う。夜は、寺岡氏、小田村理事長、昨年副団長で韓国を訪問した小泉さん、今年同じく訪問する上村さんをまじえて会食。色々の話が出たが、とりわけ、韓国の経済復興に深い関心を持たれ、そのた

めに尽力されている寺岡氏の話には一同深く感動した。

翌十八日は、韓国大使館を訪問、大使が恰度お留守で、公使、李相鋳氏から、両国の相互理解、親善に尽してほしいと挨拶があつた。午後は東京都内見学。夜は今林君の発案で、学生の諸君だけで最後のデイスカッションがもたれた。合宿教室での班別討論と同じ気持で行なつたこの話し合から、日韓両国の学生諸君が得たところは多大であつたことである。

十九日は国文研事務局の石井さん、学習院大の小田村さん二人を加えて日光見学。夜は大使館参事官の崔興俊奨学官の案内で渋谷の天安館で韓国料理を御施走になる。翌二十日と二十一日の午前中は自由時間とし、各自知人と会い、買物をして過ごす。

二十一日午後、東南アジア特に韓国に深い関心をもつておられる、岸信介元首相に約一時間にわたつて接見し、日本側から合宿教室の模様と今回の訪日団御招待の意義を話し、韓国側からこの半月にわたる日本滞在中に感じ考えたことが話され、岸元首相からは、「両国の若人が相携えて相互理解を深め、両国の繁栄のために尽し、あわせて東南アジア、ひいては世界の平和に貢献するよう」励まされ日石ビルの岸事務所を辞した。

午後六時、お世話になつた多くの方々に見送られて東京を後にした。車中旅行中に会い話した人々の思い出が絶えず韓国の学生諸君によつて話され、何時の日にか今度は韓国でそれらの方々には是非会いたいものだとも語つていた。

(岡山県立操山高校教諭 三宅将之)

昭和四十二年慰霊祭行はれる

にはかに秋めいてきた九月二十三日、飯田橋、東京大神宮で今年も慰霊祭が厳修された。黒上正一郎先生御逝去後の昭和六年以来、先生をはじめ先生のお教へにつなぐる同志物故者、戦死者のみたまをお祭りする本会恒例の慰霊祭である。今年も、本会顧問金原舜二先生、明星大

☆

山梨 三井みほ子 国のためつくせしきをたへんと今日のよき日にをろがみまつる 東京 勝田 文子 朝夕にお経となへて祈りつゝみにこの前途に榮えあれかしと

東京 松吉 基順 職賭して義を貫かむと決意せり御霊祭りの近づきし日に 東京 高木 尚一 みくに思ふまことの心一すちに命さげ

千早ふる神を祈りてすゝみゆく心ひたすら友らを思ふ 次城・日立 類賀 千代

あたゝかき友の真心に吾子達のみたま安かれとはるかに祈る 岐阜 奥村 松枝 水色の空に浮びぬきはやかに槍や穂高の雪のみねみね

愛媛・西条 長内 俊平

み霊まつる楽しき集ひにこの年はかたり得ざるが淋しかりけり 東京 石井 良介

すめくを思ふ心のひとすぢにつらなり生くることのかしこき 東京 伊沢甲子磨

白菊の花にこもりし亡き同志の清き心を忘る日あらめや 伊勢 幡掛 正浩

魂祭る日のおとつれの文を措きて秋の窓辺に虫の声聞く 名古屋 高橋 鴻助

よき人の教のまゝに後なるは先をとぶらひきはなからしめむ 長野 水野 竜介

さま／＼に迷ふ心もみ霊まつる友らのいのちにすべられて生く 東京 中村 武彦

いたづらに老いゆく我や先立ちし友に誓ひしことも果さず 面影の一人一人に憂き色のみゆるがかなし秋のみ祭り 東京 奥田 克巳

とこととはに君は生きませり今日こゝにっどへる友の胸のおくどに 東京 岡村 誠之

底ひなき悲しみのうちにあめつちはゆるぎ／＼てひらけゆくらし 埼玉 松田 福松

み祭りに侍り得ねどももるともにみ国の行末祈り合はさむ 逗子 花見 達二

かむたま 神み霊秋かせ荒ぶ現し世を贈り守らす尊かりける 長崎 脇山 良雄

年々の祭り絶やさず亡き人を偲ぶ秋空めぐり来にけれ 東京 相原 良一

年々にみたままつりてさかえゆく八十の友垣とこしへにこそ 大阪 木村松治郎

をさなごのあゆみさながらあやふくもこの道ゆかむにまもらせたまへ 東京 桑原 暁一

すぐがせのふきくるまゝになき友の声きこえくるこゝちせらるゝ 病む友をいたはりつゝも夜もすがら語りし山の秋忘れえず 一 晴道山をしのぶ

献げうたよまむとすればおもかげのいまもつゝにみますがともしいまもなほ耳にのこれるみことばは生くる力とわが胸にあり 長野・岡谷 宮脇 昌三

とし／＼のまつりにはにみたまらは帰りきまきむふるさとのごと 東京 夜久 正雄

秋されば虫の音かなしなき師なき友らのみたまのまつり近づくに 国のためひと代き／＼げし友どちのみたまをかざりとまつるけふかな 東京 小田村寅二郎

山青き阿蘇の合宿もつゝがなく過ぎて迎ふるけふのみ祭り 亡き大人の亡きみ友らのふみましし道ふみわけむ生くる限りを 鹿児島 川井 修治

年ごと若き友らも数そひてつとむるさまをみそなはせたまへ 熊本 瀬上 安正

残りたるみふみを君としたひつゝく返しよむまたくり返し 横浜 関 正臣

ひのものとやまとのくにのひとすぢのみたみのみちをゆきしとははやうつしよもまたかくりよもみな共にみ民のくにと思ふかこせき

富山 広瀬 誠 虫の声ききつ今なき清き人をわれ恋ひやまずくだちゆく夜を 鹿兒島 小川 幸男

眉あげて玄瑞の歌高らかに歌ひし友のなつかしきかな 岸和田 岡村 義一 亡き友の残せし文ひた読めば胸にせましくむかし偲びて 東京 柴田 悌輔 先祖らのいのちのすゑにつらなりてみたままつりにのぞむ嬉しさ 長崎 田川美代子 世はかはり時うつれどもみたままつるこのころこそ忘るべしやは 金沢 中田 一義 何一つ出来ぬ身なれど同じ道進みゆきたしみたまともにも 編集後記 八月の阿蘇合宿教室第二日、本会の顧問もしていたゞいてゐる太田耕造先生の御挨拶があった。短い時間で極めて格調の高い内容の凝集した御講義の響があった。幸ひその原稿を掲載することが出来て、再び先生の愛国の切言に傾聴する思ひがある▼韓国からの訪日学生団を送迎して間なく、来る十月二十四日昨年にひきつゞき訪韓学生団が派遣されることが決定してゐます。在ソウルの大



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

「時勢」を見る目

—松宮観山と山県大武—

宝暦十三年、山県大武の著「柳子新論」を読んだ下野の兵学者松宮観山は、その感想を次のように記した。

「この書を読むに深謀遠慮は殆んど似たり。たゞ惜しむらくは両都同背の論に至りては、大いに然らざるものあり。」

「あなたの書物に記された深遠な政治論にははゞ同意することが出来る。だが江戸幕府を朝廷と両立すべからざるものとして、その存在を拒否せんとする論法には到底承服出来ない。勿論私とて現在の政治のあり方が万全だとは思わぬ。だがあなたは性急に「俗風あり、時勢あるを察せず。而して一定の権衡を懸けて以て万方を推」そうとするのだ。この世には「俗風」もあれば「時勢」もある。それを考えることなく、いたずらに一定のはかりにかけて政治のあり方を論ずるといふのは、固定的にしか物事を見ることの出来ぬ漢学者流の偏見にすぎぬではないか。この偏見をとり去って、もっと広い目で現在の政治を見ていけば、たとえそこに区々たる問題はあっても、国の大体はまことに慶賀すべき姿だといえよ

う。すなわち「世々聖主賢臣を獲たまふの徳ありて、而して逆賊農師の頤を神器に架れ、糠を大宝に舐るの念を断てり。宝祚の愈々長く、益々天壤と窮りなきこと猶泰山の安きがごとし。天下有道の士、俱に誠敬誠喜して、誰か頌賀をなさざらんや。」

「代々の天皇にはすぐれた將軍が現われてこれを輔佐し、皇位を奪い、国を亡ぼさんとする逆賊は誰一人いなくてはいないか、かくして天皇の御位はまさに天地とともに尽きることなく、「泰山の安き」がごとくである。天下心ある人、誰かこの泰平の世を歎喜し慶賀せぬ者があるう。」

戦後二十年、さまざまの曲折があったにせよ、天皇を象徴とする新憲法がともかくも定着した観のある現在、政権の座にある人々、あるいはおしなべて波瀾を好まぬ退嬰の人々の論じる泰平謳歌の言は、まさにこの観山の言葉さながらではないか。果然、大武は反駁して言う。

「俗風改むべからずとは蓋し下に在るの言のみ。苟も天下を陶鑄せんとする者

は、何の忌憚る所あつて、茲に苟々たらんや。」

「天下の政治を自らの責任においてきわめんとする者は、どうして俗風のごとくにこだわる必要があるう。」

「たゞ時勢は則ち固よりこれをいかんとすべからざるなり。」

「たしかに時勢というものはどうにも出来ないもののようにだが、それとても手放して放置すべきではあるまい。それが道に反している場合には、あくまでそれが仮りの姿であることに認めつ、「漸く変じて、以て道に至らしむる」のが聖賢の教えではないか。」

「それ道は一のみ、やむことを得ずしてしかる後、權す(かりのすがたをとる)。」

若し然らずして諉(委)して時勢のみ、風俗のみといはば、則ちこれ人の化する所となりて人を化するに能はざるものなり。」

「問題は一つ、自らの責任においてものを考えるか否か、人に化せらるゝ精神の怠惰をとるか、人を化する進取の思想に生きるか、それだけなのだ。」

「俗風改むべからずとは蓋し下に在るの言のみ」という言葉は鋭い。下にあるとは血を思う意志を失った者だ。そのような者にはすでに世を語る資格はない。

さらに大武は続ける。鎌倉以後、幕府が権を専らにして天皇を中心とする政治は崩れ、さらに室町・戦国の世に及び、天下の乱れはゆきつくところまで行きついた感がある。その後徳川の世に至つて、その激動の波は一応静まつて、天皇の御地位は安泰になつたかに見える。だがその実、朝廷の権威は一切剝奪され、さらに皇室の財政の窮乏は甚しく、「それ一大夫の俸祿にさえ及ばぬのだ。」「吾れこれを聞く毎に、すなはち嗚咽して声を呑むに至る。」

「しからばあなたはその

何の故たるかを知らざるなり。」

「痛切に世を憂えた大武の目には、観山には見えないうものが見えていた。日本をして日本たらしめるもの。それなくしては一時的な権力による統一は可能であっても、強権の衰弱とともに国家は崩壊する外に道はないという、一つの根源的な価値、それが大武には見えていた。そのかけがえのない価値を蔽うものが「幕府」という存在であった。己れをして己れならしめな

「己が心のふるさとに帰ることを許さない部厚な障壁、それが「幕府」であった。いかに世が泰平を謳歌してしようと、政治形態がいかに整つていようと、「幕府」ある限り、人の心に統一感とは与えられないし、自らの姿に立ち帰つたとき、あのさわかやかな感情は味識すべくもないのだ。」

大武の死後百年、幕府は倒れた。だが現代が大武の生きた時代と如何に類似しているか贅言の要はあるまい。では一体新たな装いをもって登場した「幕府」とは何か。現代に生きるわれわれの努力は、この新しい「幕府」の真相を見きわめ、これと戦うことに集中されなければならぬのである。

(福岡県修猷館高校教諭 小柳陽太郎)

目次

- 「時勢」を見る目……………小柳陽太郎 (1)
- 明治天皇御製について……………夜久 正雄 (2)
- 紀州勝浦にて友を偲ぶ……………高木 晃吉 (4)
- 現世的愛情について (岡山大学輪読会の記)…………… (5)
- 東西文化と日本……………瀬上 安正 (6)

☆ 同胞歌壇

明治天皇御製について

夜久正雄

(一)

明治神宮編「新抄・明治天皇御集 昭憲皇太后御集」が過般、角川文庫で出版された。昭憲皇太后は明治天皇の皇后であられたが、大正三年におかくれになられたので、皇太后と申上げるのである。明治天皇御集は、さきに明治書院の「新輯・明治天皇御集」(昭和三十九年)が刊行され、御製数約九千首を掲載した。今度の角川文庫の「新抄」は、「新輯」をもとにして、御製一四〇二首、皇太后の御歌五九四首といふ。編者は「新輯」の編者と同じであるといふから、「新抄」はいはば「新輯」の抜粋であるともみられる。戦前の宮内省編の「明治天皇御集」は御製集一六八七首、「昭憲皇太后御集」は一〇九七首といふことである。戦後この宮内省蔵版本の「御集」は刊行されないので、若い人に明治天皇御集を読んでもらふために、古本屋をさがも最近では古本屋にもあまり見かけなくなつてしまつたので、今度の角川文庫の出版はありがたい。前の「御集」より数はやゝ少いが、御集にふれる機会が容易になつたわけである。

「うかがはれよう。」
「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢運れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。……………」
「……………」私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答へました。……………」
明治日本の指導原理の表現といへば、まづ「帝国憲法」と「軍人勅諭」と「教育勅諭」とをあげなければならぬが、これらはみな明治天皇のお名前を以て公布されたものである。御名前ばかりではない、その作成、成立の過程においても、天皇御自身が指導的御立場で加はつてをられたものである。これによつて政治、軍事、教育の大本を定められ、またその時々御勅諭の公布によつて、明治日本の興隆を指導せられた明治天皇は、実に明治時代の最も偉大な御人格であつた、そのことは内外識者の一致した見解でもあつた。

それは明治天皇がおなくなりになられた時に、特に痛感されたところで、漱石ばかりではない、天皇追悼と憶念の至情は全国民のものであつたといふことができよう。宮内省版「明治天皇御集」編纂刊行の主たる動機はこの国民的痛感にあつたと思はれる。明治の精神の体現者であられた御心持の直接の御表現としての御製と歌の編纂刊行を企画されたにちがひない。御歴代天皇の御集の編纂は、今日になつてみると当然のこのやうに見えるが、必ずしも定められた記念の行事といふわけではない。明治以前では、天皇がおなくなりになられたからといつて、必ずしも御集の編纂があつたわけではない。むしろさういふ事例はごく稀であつたと思ふ。勿論、明治天皇には、十萬首に近い御製が残されたといふ驚くべき事実も大きな理由であつたと思ふが、何よりも、明治天皇をおしたひする心持が、御集編纂刊行の動機であつたのであらう。かくして、「大正五年十月二十三日奉旨、大正八年十二月二十日編成奏上」の「明治天皇御集」となり、大正十一年文部省から刊行されて、一般に普及することになつた。

これ以前にも御製が民間に洩れることはあり、特に日露戦争当時、時の御歌所長高崎正風が国民の志気を振立たしめるために、切腹を覚悟で御製を公表したことがある。高崎正風の逸話としても有名な話で、大正十五年発行岩永淳太郎謹輯「明治天皇御製集」所載の千葉胤明謹識「御製の御発表に就きて」に詳しい。しかしその数は限られてゐて御製の一部を示すにすぎなかつた。

大正十一年文部省刊行宮内省蔵版「明治天皇御集」はかうして生れ、大正、昭和の国民道徳、精神の指標として示されることになつた。やがて明治天皇御製は、尋常小学校の国語読本に掲載され、旧制の中学校の国語教科書にも掲載され、その幾首かは人口に膾炙するところとなつた。大正から昭和初年にかけて生れた人々は、明治天皇崩御の折の国民的体験は持たないが、次のやうな御製を覚えてゐる人が多からう。

あきみがこころと澄みわたる大空の広きをおのがこころともがな(御題、天・明治三十七年)

さしのぼる朝日のごとくさわやかにたまほしきはこゝろなりけり(御題、日・明治四十二年)

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ(御題、正述心緒・明治三十七年)

国民の大多数がかうしたすぐれた御製を心におぼえてゐることは、天皇に対する国民の親愛、しかし畏敬の潜在的感情の源をなしてゐると思ふ。文壇では御製は必ずしも高い評価を得なかつたし、学問の世界においては、ほとんど研究の対象とされなかつたと言つてよい。日本の大学は、短歌を国文学の研究対象とはしたが、御製は敬遠されて来た。国体、天皇制等が政治学から、忠孝道徳が倫理学から敬遠、排除されたのと同じであらう。例へば九月二十六日の朝日新聞の書評欄にもこんなことが書いてある。

「明治天皇はどたくさんの伝記、逸話集もしくは頌徳録の類で飾られている日本人は日記・手紙など、日常のことを知るべき直接の史料を残さなかつた。」と。それでは十萬首の御製は何なのか、と言ひたくなる。最も直接的な史料ではないか。一方また御製の価値が問題にされても教訓歌としてとりあげられたりして、かへつて若い人の反撥を買ふ結果が多い。三井甲之「明治天皇御集研究」や井上學齋「御製を拜して」房內幸成「天朝の御学風」保田与重郎「後鳥羽院」小田村寅二郎編「日本思想の系譜」等の著

書は、むしろ例外的な、すぐれた御製の研究である。

しかし、明治百年の意識は、いや応なしに明治天皇憧憬の思ひを生み出し、戦後の卑屈な敗北感情がうすらぐとともに明治の光栄がかへりみられ、その指導者代表者であられた明治天皇に対する敬慕と研究とが勃興して来たのである。明治書院の「新編御集」角川文庫の「新抄御集」の出版はかうした機運を促進する役割をも果たすものであらう。「新抄」御集の解説は入江相政氏の「明治天皇」、木俣修氏の「御製・御歌について」、略年表、脚註等、親切な配慮がこめられてゐる。

(一)

「新抄御集」の次の御製をはじめて読んで、その精妙な表現に驚嘆した。

春雨

には石のぬれたるみればこのねぬる朝けのかすみ小雨なるらし

「このねぬる」は「この寝ぬる」で入寝ておきた今朝のVといふ意味である。

早朝起きてみると一面に霞がたちこめてゐる、ふと目をやったら庭石が濡れてゐる、では、霞と見えるのは小雨なのであらう、そんなにもやはらかな春の雨が降ってゐるのである。——かういつた情景であるが、早朝の作者の無心の心理にうつるしづかな情景が、そのまま生きてゐる感じで、作者の静かな、落ちついた、自然そのもののやうな生活感情が見事に表現されてゐる。自然と作者とは全く一つになつてゐる。題材は自然の情景に対する作者の心情であつて、特殊な決意でも、深刻な感動でもない、日常生活のあ

る一瞬の自然感情であるが、その自然感情が、いささかの弛緩もなくと云つて気負ひもなくありのまゝに表現されたところに、不思議な作者の落ち着き——充足が感じられるのである。それを自然そのもののやうな、と言ふのである。明治四十三年の御製である。明治四十五年の御製に、

春曉月

あけがたの霞のうちにいつとなく消えゆく月のかげのしづけさ

といふ御製がある。充足した老年の落ちつきで、偉大なるものの静かな死を詠歌するかのとき感がある。前の歌と似た落ち着いた無比のしらべであると思ふ。この御製は、宮内省版の御集にもある御製である。

「新抄」でみると、右の御製につづいて次の三首がある。

春雨

春さめの音ききながら文机の上にねぶりのもよほされつつ

しづかなる春の雨夜を歌ひとつよまでふかすがをしくもあるかな

春さめのしづかなる夜にりにけりすずりとりよせ歌よままし

歌をよまなかつたことに対する御反省の御製である。比較するのは恐れ多いが、よく学生諸君に歌を作らせようとする、歌がよめない苦心を歌によむことがあつて、どうかと思つたが、十万首の作者であられる明治天皇にも、歌をよまないですぐ春の雨夜を惜しまれる御歌を拝するのである。歌をよむこと、そこに生の意識があるので、歌をよまぬことは生の意識を欠くこととなるといふのはなからうか。歌をよまないことをかなしまぬやうでは、真の歌はよめないの

あらう。「新抄」には、歌についてよまれた御製が数多くのせられてゐる。

歌

ひとりひてひと日ころのなぐさむはしづかに歌をよむ日なりけり(三九)

をりにふれたる

言の葉のまことのみちをわけみれば昔の人にあふこちせり(三八)

詞

かぎりなきものと聞くなる言の葉の道の高ねをいつか越ゆべき

ささげたる歌によりてぞしられける泉の末の民のころも(三八)

詞

言の葉のみにこころのすすむ日はひとりありてもたのしかりけり(三七)

歌

世の人のおなじおもひもしきしまの歌にてきけばあはれまされり(三七)

をりにふれたる

ことしげき世にもありけりことのはのまことのみちをわくるいとまは(三七)

右の引用の御製のほかに、宮内省版の御製と重複するものが相当数ある。それれ天皇の歌作の御心境の仰がるゝ専い御製である。しかし、「新抄」には「しきしまのみち」といふ御言葉を含む御製があまり見当たらないと思ふがいかであらうか。明治天皇は和歌をただ文芸としてたしなまれたのではなく、ひろく人生の道としてお考へになられたことが、宮内省版の御集の「しきしまのみち」をおよびになった御製によつて知られる。例えば、次の御製は、「宮内省版御集」にはあるが「新抄」には見当たらないやうだ。

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの

道ぞしきしまの道(三七)

道

ひろくなり狭くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道(三九)

寄道述懐

千早ぶる神のひらき敷島の道はさかえむ萬代までに(三六)

寄道祝

かみつよのあとにならひて敷島の道をぞ祝ふ年のはじめに(四二)

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道(四〇)

寄道述懐

ふむことなどかたからむ早くより神のひらき敷島の道(四二)

明治天皇は、短歌のことを、「うた」とも「ことのはのみち」とも「ことのはのまことのみち」とも「しきしまのみち」とも言つてをられるので、短歌の人生の道としてのひろがりを始終お心に持つてをられたにちがいない。「しきしまのみち」といふ言葉は、そのひろがりを知らせてくれるのである。この点は、旧版御集をも参照すべきであると思ふ。もつとも明治書院版「新編明治天皇御集」は「宮内省版御集」の御製をもすべて採録してゐるので、これに拠ればよいわけである。明治天皇の歌についての御製が、全体として、明治三十七、八年以降に多く見られるのは、日露戦争の御体験とその当時の作歌の御体験によつて、歌すなはちしきしまのみちの意義、価値を深思なせる機縁を得られたのであるまいかと思ふ。そこに、「しきしまのみち」と御自覚が一層深められ、引用の御製となつたのだと思ふ。明治天皇の「しきしま

のみち」の御自覚と正岡子規の連作短歌とは、和歌史上明治を記念する大事業であったと、私は信じてゐる。和歌史上の大事業は日本思想史上の大事業に他ならない。殊に、「しきしまのみち」は、明治四十五年は、七月三十一日崩御の年であるから、宮内省版、新抄版ともに、掲載御製の数は少い。宮内省版は、その最後の「をりにふれて」十二首、はじめが、

をりにふれて

敷島のやまと心をみかけ人いま世のなかに事はなくとも
にはじまり、
国民の業にいそむ世の中を見るにまされるたのしみはなし

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ
を含み、
なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

で終る。恐れ多いことであるが、天皇の国と民とおのこしになられた御遺戒のやうにおぼえて畏きことである。「新抄」の最後は、「をりにふれたる」六首で、宮内省版のやうな感じはない。しかし、今度「新抄」の四十五年春夏の御製を読んで、天皇の人生に対する深い哀惜の御感情を強く感ぜしめられた。生の終りが近いことを予感してをられたやうな御歌があつて、壮嚴な感じがしたのである。

花

にはの面の木のもとごとにてたちよりて
ひとりしづかに花をみるかな
あかず見し山べのさくら春の日のくれ
てののちもおもかげに見ゆ

落花

風たため今年春もさくらばな散るべきときと散りてゆくらむ

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

夢

ものはみなゆめなりけりと思ふかなあとはかなくもすぎし世の中

かうした御製を拜誦すると、天皇が人であられること、生と死と、悲喜哀歓、喜怒の感情のたえない人そのものであられることを疑ふ余地はない。しかしそれは人として最も深く、われわれの理想とするやうな形で、深く人生を味はれたことを否定するものではない。われわれが歌にもよめぬやうな醉世夢死の刻々を送るときに、その刻々を生きられて十萬首のお歌をおつくりになったことをおもへば、明治天皇は人として最高の精神生活をお送りになられたと言つてよい。

明治天皇のやうなお方は、日本でなければ出現なさなかつたであらうといふ意味では、天皇もわれわれと同じ日本人である、しかし同時に日本人として最高の精神生活をを送りになられたからこそ世界の諸国民の尊敬を勝ちえられたのである。十萬首の御製とは、いふならば十萬遍の御自覚であり、十萬遍の精神統一の御努力にはかならない。政務軍務最も御多忙であつたと拜される明治三十七年の年間御製数が最も多く、七千五百二十六首であるといふ(入江相政氏明治天皇に拠る)のは、忙しくて歌もできないなどといふのは逆で、たゞ驚くばかりである。ただ天皇といふ地位に即かれたといふだけで偉大なのではなく、ただ天皇の御製だから価値があるといふのではない。

い、天皇の御努力が偉大なのであり、不断精進の御表現だからこそ価値があるのである。御製はこのことを骨髓に沁みこませてくれる。われわれはこの御製を誦むことによつて、天皇の御心の中にいなまれた表現過程を追体験する、つまり天皇の御心を学ぶことができるのである。天皇と国民との間をつなぐしきしまの道の存在こそ日本の国家生活の統一を支へる事実なのである。(小田村寅二郎氏編「日本思想の系譜」はしがき参照)(亜細亜大学教授)

紀州勝浦にて友を偲ぶ

高木 晃 吉

朝鮮平壤飛行場の兵舎にいた時、当時松江の高等学校に在学中だった松尾陽吉兄から昭和十九年四月三十日、中国正大寮発行の「若桜袋」が送られてきました。最大の慰問袋と喜んだのを忘れもしませんが、拙歌も『無果生』のペンネームで載せていただきました。その歌集のなかに次のような「勝浦にて」と題する作者不明のなつかしい歌のついでに

こふ心たのしも

今夏、古くなつた『若桜集』を手に持つて社友とともに、勝浦に従業員慰安旅行をしました。そして、次のような歌を詠みました。

はたとせも遠き昔にはらからの友の訪ねし勝浦に来ぬ
友の詠みし荒磯を見んと岩伝ひ一人走り行きぬしき岩にひとり立ち友を偲ひぬその歌よみつ

いづつめてよみゆけば思ひきはまりぬ此処ぞ詠みまししところと思へて水隠れの岩をこえゆく大波のうねりも増しぬ潮の満つるか

うねり増す潮の高まり底知らにとはのいのちのひたに思ほゆ
神々の御代の偲はゆ百岩のむら立つ荒磯白波よせて
見晴るかす遠き海原静かなり勝良の磯は波荒けれど
釣舟の姿も見えず青き海いまは変りて觀光船行く
はるかなる沖を見居ればみんなみの海に散りにし友の偲はゆ
磯馴れの松のみどりのうへ高く青雲なびき鶯一羽舞ふ
青雲の空舞う鶯はみまかりし友のみ豊かあが上去らず
荒磯に咲ける炬百合はまゆうをみそなはしたまへ友のみたまも
弓張りの荒磯の彼方みずみずし緑の岬沖にのびたる
去りがてに涙しにけり潮騒の勝良の磯の美しければ
若き日の友のつかりし岩風呂に我もいこひぬみ歌誦しつづ
(太平洋工業企画室)

現世的愛情について(愛見の悲)

— 岡山大学バルカノンの会

— 聖徳太子研究・第五回輪読会の記 —

九月十六日(土) 夜七時半より三宅先生の下宿に於て。出席者三宅(将)・保住・伊藤・菅・斉藤・藤井・亀田・三宅(教)・孝忠の九名。黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」一六四頁より七〇頁まで。

長かった夏休みもついに終わってしまった。あのすばらしかった合宿での感激も、ともするとすれがちになつていゝ。悲しいことだが、人間の心といふものはどうしてこんなにも、ゆるみがちになるのだろうか。が、それならばこそ我々は心をふるい立たさねばならないのだ。求道とは決して高遠な聖人の行為をさすのではない。拙い者がそのゆるみがちになる心をひき立てようとする所こそ求道の本義がひそむのではないか。求道とはその怠惰な心に対する烈しい抵抗行為であり、その意味で求道とはまさに出直しの連続なのだ。問題はもう一度ふるい立つことだ。転べば起き上がればよいのである。さあ、これからはさわやかな秋だ。我々も心をひきしめて出発しよう。

さて本文であるが、今日読んだ内容のあらましは、維摩経文殊問疾品の「菩薩は客塵煩惱を断除して大悲を起す。愛見の悲は則ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此を離るれば疲厭の心無し。」と説きたる内容についての解釈の仕方

を大陸諸師と太子のそれとを比較することによって両者の間にいかに深い人生態度の相違があるかを明らかにしようとする旨である。(中略)

さてそく我々がぶつかったのは、「愛見の悲」といふ言葉であつた。「愛見の悲」とは「個我執着の現世的愛情を指し、之に止まるときは教化すべき衆生を善悪好悪に依つて差別して、つひに生死波瀾の人生に在つて平等救済の理想を実現することができない。」といふのであるが、一体我々はこの言葉をどう受け取るべきか、というよりも我々の愛が「愛見の悲」であるということさえ気付いていないのではなからうか。現代はまさに饑舌の時代であるが愛もその御多分にもれない。巷には愛の本が愛の歌が花々しくひしめいている。我々は普段何の抵抗もなく愛といふ言葉を口にす。「人生は何よりも愛が大切だ。」「私はあなたを愛す」——愛がこれほど自由にそして露骨に語られた時代はかつてなかつたであろうが、愛といふものに対する我々の認識がこれほどまでに低く、麻痺した時代もないのではなからうか。我々が普段一度反省して見る必要があらう。一体我々の愛はどのような愛であるのか?

「愛見の悲」——我々はこの言葉にぶつかつて愕然と驚ろかざるをえないのではな

いか。愛見の悲とは対象に限定された愛であり、それは我々の心が一定のところまで止まつていてそれ以上扱がらない閉ざされた態度をいうのであらうが、はたして我々は開かれた世界に向かつて心のひろがりをどの程度まで実践しているであろうか。国家や他人の運命、あるいは友の思いへと、我々の心はひろがりゆきとどいていゝのであるか。愛とは何もう「人を愛する」等といった大げさなものであるに限り、もつとささいな日常生活の中で、どう実践しているかが問題なのだ。

「愛見の悲」我々の愛はこの「愛見の悲」以外のなものでもないのではないが、まず我々はその痛みを知ることが大切ではなからうか。ところで大陸諸師はその愛見の悲は煩惱を増大させが故に捨離すべしと言ふ。さて我々はどうすべきか。ここで重要なことは、愛を我々の実人生から遊離し単なる理想として説くこと、それもそれなりにすばらしいことであるが、所詮我々の実人生とは無縁のものになつてしまふであらう。愛を低俗に説くのもいけないが、いたづらに高遠ぶるのもいけない。我々はまず「愛見の悲」はいけない、だから理想の愛へ云々と語り前に我々自身の愛について深く凝視してみるのが必要だと思う。それ以外に愛を本当に我々の心にとりもどす方法はないであらう。

聖徳太子は決して、それを捨て去れとは言われぬ。「此の愛見の悲は善なりと雖も猶是れ相を存し、自他の二境を平等にして、広く衆生を化する」と能はざることを明かす。我々はまずこの太子の心のやさしさ——それは痛切なもの、強靱なものを我々にさし示している——を

くみとるべきだ。太子は我々人間がその「愛見の悲」からそうたやすく抜け出ることができないことをよく知つていられたのだ。それは、お互い凡夫としていたしかたのないことなのだ。しかしそれこそ克服しなければ本当の人生を送ることが出来ない。苦しいだらうが、そこを踏み越えようではないかと呼びかけられる。太子は「愛見の悲」を断裁するのではなく、そこでの痛切な認識、そこからそ人生を出発しようではないか(せよではない)と言われようのである。凡夫といふ痛感はそのから出てくる。理想と現実との間にわたされた痛哭——それが凡夫感なのである。我々は現実にはみ理没してもいけないし、理想にのみ遊離してしまつてもいけない。大切なことはその両者を二つながらにかかきこみ、悩み苦しみのなかでも雄々しく生き抜こうという態度なのである。この夏の合宿でも、小柳先生が言われたが太子は決して「滅死奉公」とは言われぬ。「背私公向」といふのである。

「この私といふものはそうたやすく滅ぼせるものではない。しかしだからと言ってそれでいいというのではなくその滅ぼせない苦しみを乗り越えて公に尽くすといふのが人間の本当の姿である。」

我々は我々自身の愛についてじっくりと考えるべきであらう。一生涯にわたつて。(中略)

この夜の輪読会は十時すぎに終わったが、その後色々な打ち合わせや雑談などで、切り上げたのが二時頃であつた。外では秋の虫が美しく鳴いていた。(伊藤三樹夫記)——バルカノン第3号より転載。

東西文化と日本

瀬上安正

明治以来日本の学問は西洋の学問を追っかけることであつた。又それで間にあつたのである。然し現在では、日本の自然科学の前進は目覚しく、又工業技術も西洋に匹敵し、或は超越した部分さえある。造船技術とか、東海道新幹線とか、目につくもの丈でも西洋を追いこしてしまつたものも沢山ある。

自然科学では追いついた（西洋を追っかけることのみが学問ではないと、ようやくはつきりした）といつても、人文科学ではやはり西洋の学問に追随しているのである。

吉田松陰先生は講孟余話の第一行に、「経書を読むの第一義は、聖賢に阿ねらぬ事要なり、若し少しにても阿る所あれば、道明らかならず、学ぶとも益なくして害あり。」と述べて居られる。

来年は、明治百年祭が、行事として華々しく開かれることであろうが、当時の指導者ほどのように考えて居たであろうかというのを考えることによって、学問本来の姿に帰つてその本質を追求し、精神科学百年の空白を挽回する機会たらしめたいと思う。その前に東洋文化と西洋文化について少し考えて見たい。

東洋文化と西洋文化

一体東洋とは何をさし、西洋とは何をさすか。

西洋から云えば東洋とは、曾ては不思議な異域であつた。地中海の彼方、或はシルクロードの彼方、古い文明の根元が

東洋にあると考へたであらう。然しコンプスのアメリカ発見以来西洋の武力は世界を征服したかに見えた。

特に日本の学風は、先に述べた如く西洋を追っかけることに急にかゝるに思われるものと思ひこんで居るかに思われる。辞典では、東洋とは西洋に対する対立語として取扱はれるほどである。僕は黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の序説冒頭に、「東洋文化の伝統及び理想を正しく現実保持するものは我が日本である。大乘仏教及び儒教の如き東亜大陸の代表的文化は、すでにその本國に於いて衰頽せるに拘らず、共に我が國土に尊崇して國民生活の体験に融合せられ、その生命を持続開展せしめられて居る。日本文化とは実に東洋文化の総合としてのそれであつて、それは西洋文化と対照補足せらるべき世界文化の重大要素であり、この文化を保持する我が國民は更に東西文化融合の世界的使命を負ふものである。」と表現された一文こそ僕が之から述べんとすることについての最も明確簡明な表現である。

然ししばらく、現在の日本で考えられて居る東洋と西洋について考えて見たい。

地理的に云えば、ロンドンのグリニチ天文台を通る子午線が〇度で東経百八〇度、西経百八〇度となるけれども、我々日本の精神的座標までもが、西洋が中心になつてしまつたことに問題がある。例えば極東と云えば、「我々日本人」の心にも、「西洋を中心とし、之より遙かにへ

だたつた辺境の地」として直覚されて居るのではなからうか。

此のような世界史的観点の間違ひについては「世界と西欧」でトインビーが詳しく指摘している通りである。我々はトインビーが、従来の世界史がヨーロッパ人を中心として描かれ、現時点では、ヨーロッパ人の世界征服という現在迄の世界史の「型」に対して、少く共十幾つかの文明の盛衰の中の一つとして西欧文明を扱えた点、西欧と世界でなく、世界と西欧として物事を考え、又更めて、日本文化を、東洋文化の代表として扱えた点に感謝したい。

同時に我々は、従来ヨーロッパ人の世界征服に対し、少く共日本の敗戦後、殆んど東南アジアに於て一たん連合軍に渡つた日本軍の無統の武器が、そのまゝ植民地の独立軍の手に移り、その力で自らの独立を獲得し今新しく建國創業の大事業を開始した。インドネシアにおいてその事実を此の目で見て、又聞いて来た。之と同じ経路で東南アジアの各国は独立し世界に國家独立の嵐が巻き起つて、世界史の転換が始まつて来たのである。之についてトインビーの次の言葉を引用したい。

「諸々の文明が興りつゝ、亡びつゝ、しかも亡びることに於いて他の文明を興しつゝあるその傍らに、文明の目ざす大事業が絶え間なく前進しつゝあるかも知れません。」（試験に立つ文明）

僕は日本の敗戦の瞬間こそが、此の新しい「大事業」の絶え間なく前進する決定的瞬間の一つであつたと確信するものである。

第二次大戦を戦つた一人一人の日本人の心の奥底には、西洋の支配する世界を打破し、諸國が平等に自らの独立を維持

出来る世界を望んで居たのであつて、西洋の侵略した植民地の支配者に取つて替るう等夢にも考へたことはなかつたのである。此の僕等の心は、歴史の上に、第二次大戦の戦つた者の責任を以て証明して置く必要があると思ふものであつて、少く共、このような僕自身の心だけは書き留めて置きたいのである。

維新先覚者の西洋文化批判（特に阿片戦争を中心として）

林房雄先生の大東亜戦争肯定論の出版が、南洲翁遺訓にあつたので、その遺訓の一部を抜萃すると次のとおりである。

「文明とは道の普く行はるゝを賛称せる言にして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふに非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分らぬぞ。予嘗て或人と議論せしこと有りぬ。西洋は野蛮ぢやと云ひしかば、否文明ぞと争ふ。否な野蛮ぢやと疊みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せし故、実に文明ならば、未開の國に對しなば慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開昧の國に對する程むごく残忍の事を致し己を利するは野蛮ぢやと申せしかば其人口を嘗めて言無かりきとて笑はれる。」

此の一節は明かに阿片戦争（一八四〇—一四二）や、其他西欧の植民政策を意圖してのことであつて、吉田松陰先生の咸豐亂記（一八五五）に於ては、阿片戦争とその後に続く大平天国の乱の詳細が論じてあつて、英國の植民政策のやり方を手に取る如く描いて居る。

此の阿片戦争で得たものの一つが香港で今も英國の植民地として残つて居るのである。私も又文明の名に於て、阿片戦争を拒否する。但し、トインビー「試験

に立つ文明」の中の次の一節は阿片戦争についての西洋人からの批判として私の聞く唯一のつなぐこととして紹介する。「わたしは、子供の頃お母さんに「阿片戦争」のことを訊ね、お母さんがその真相を話してくれたとき、子供心にもありがたいたくには、一般の羞恥の感覚がわたしのからだを通りすぎたからです。」(傍点筆者)

武力の絶対的優位にあった西洋に対して、日本の明治末期の貧弱な国力を以て独立を犯さるゝことなく、日本国が存続し得た事について、不思議な感動を覚える。

大乘仏教と儒教と日本

インドに発生した仏教が、支那の儒教と一緒に日本に入ってきた。之が日本文化との融合は、聖徳太子の御一生を捧げ尽しての研究によって、その大乘の精神(自ら救はるゝことのみを願う個人救済思想を排し、他と共に生を願う精神)が、又等しき心構えにおいて儒教においても取入れられたのである。

トインビーは、前掲「世界と西歐」に於て東洋文化を代表するものとして日本文化の存在を信ずる一人であつて、又彼の云うごとく文明は他の文明の中にも低次のものが先づ入りこみ、遂に元の文明にまで発展して、他の文明を喰ひ尽くすと思つてゐたが、日本に代表される、東洋文化と西洋文化の混合が、今後益々激しくなつて、日本に於ては思想的困乱が益々増大するとしても、我々は迷うことなく、百年の長い学問上の空白を取返すべく努力すべきである。我々は此処にこそ、明治百年を記念す

る意味があるものと信ずる。私は西洋文明は、仏教でいへば個人救済に終るものであると思つけれども、此の西洋文明の本質を撰取して、我がものとし、かつ東洋の理想である大乘の精神を彼等にも伝える為には、我々の内的体験を通して生命がけの研究を必要とするであらう。

アメリカに於ける日本研究熱も又盛んなものと聞いて居る。生花、茶の湯は勿論、萬葉、古事記などの文献に直接取組んで居ると三島由紀夫氏は著つて以前紹介してゐた。日本人がアメリカに行つても困るのは、日本について質問されて答えが全く出来ないことだといふ。今の日本人程日本自身を知らない者は居ないからであらう。

イスラエル問題と世界に於ける日本の使命

イスラエル問題について、僕は本誌七月号において少し述べたが、これは現代版十字軍と言へると思う。此の問題は、一応イスラエル側の勝利に終つたが、此の問題を武力で解決することは不可能に近いと思はれる。二度、三度、何れの日か又起るであらう。

エルサレムに関係する宗教は、ユダヤ教、旧教、新教、回教と、更に其他の国際政局の状況が、その時々を要因として加わり、解決の方途は容易に見出されないであらう。文明と文明との出合いにおいて、聖徳太子の如き一偉人が出現し、宗教的内的改革が夫々の側においてなされる必要がある。然し其の時の到るまでは、十字軍に始まり、今尚同じ「型」を繰り返す、如何にも愚に近い解決の方途しか無

いものであらうと思ふ。世界の交通は容易になった。新たな宗教の収革という最も時間のかゝる問題であつても、之をなし遂げる責務が、我々の時代に課せられて居るのである。

故河村博士について、前回紹介したが、その御弟子の岩越元一郎先生の「大新論(東洋の覚醒)」は、又キリスト教徒として、東洋文化に肉迫するものであり愛国の書である。先生は、支那の古典たる「大学」―修身、齐家、治国、平天下に代表されるが、それが日本に渡来し、その後日本に於て、最も多く、又各時代に亘つて精神の指標となつた書であると書いて居られるのであるが、此処に、日本の全歴史を通じて生き続けた古典とキリスト教との接触を見る思いがする

のである。私も先生と同じ悲しみの思いを以て、日本の運命を見護つて行く外無いのである。或は親鸞の教を奉ずる人のキリスト教研究、又キリスト教徒の親鸞研究、特に聖徳太子の人生宗教の研究が盛になつて来るならば幸いであらう。又其他の宗教或は宗派間の人々の生命がけの内面の体験を通じての研究が起るならば、次第に問題の解決に一步宛肉迫することに思ふ。

特に日本は、西洋文明に覆ひ尽されたかの観があるけれども、その時間たるや、たつた百年で長いようでもあるが、トインビーの文明論の時間の単位は五千年位であるから、問題にもならない短い時間ではないのである。日本に綜合された東洋文化の内的生命が、西洋文明に對するその仕方は、容易なものでないかも知れないが、コロンブスのアメリカ発見に始まる西洋文明の武力による世界征服は一応その終止符を打つたのであつて、この期間も約四百年位でしか

なく、今少く共、世界史の進行方向は第二次大戦を以てその方向を変えたのである。日本における表面の姿は、いかにも西洋文明に覆ひ尽されたかの観がある。然し僕は、終戦の最後の日を見事に乗り切つたことの不可思議を改めて思ふ。戦略から云へば、本土に於ける焼土作戦以外には勝つ方法は無かつたであらう。或は戦つても結局は無駄であつたかも知れない。主戦論と、終戦論との絶対的相克にその終止符を打つたのは天皇陛下の御決断であつた。

今上天皇御歌

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも身はいかになつともいくさどめけりたゞたふれゆく民をおもひて

「わが一身を入鹿に給ふ」との上宮王家御一家の全滅の際の山背大兄皇子の御言葉と一つの精神が、此の度の第二次世界大戦における日本を救うと共に、その御心によつて、始めて、夫々植民地は、又自らの国を取返すことの出来た世界史的不可思議は、奇蹟としか考えられない。

「一人出家すれば魔官皆動ず」と聖徳太子の御言葉にあるが、沖繩に於て示された様に天皇陛下のために日本のために死を決して居た、陸、海、空軍はもとより、全国民が等しく今上陛下の御心に服した此の昭和二十年八月十五日正午に於ける世界史の決定瞬間を私は此の様に感ずるのである。なすことも無く今尚生かされて居る私の心の中を書き綴つた次第である。(熊本県林産業研究指導所)

同胞歌壇

—しきしまのみら—

神宮お木曳奉仕 いわき 青山新太郎

たちねの母が祈りも身に添へて神風の
伊勢に旅立たむとす
見慣れたる街の姿も新しくさわやかに見
ゆ伊勢に発つ朝
八十の翁もつかまり三才の女の子も握る
お木曳の綱

母が背の子は九ヶ月ちさき手をお木曳の
綱に持ち添へにたる
民族の生命の綱とおもひつゝお木曳の綱
友らと握る
よらよちとつまづき歩む女童もしつかり
と握るお木曳の綱

伊勢も知らず奈良も知らず老いたまひ
し母をおもへば伊勢路かなしも
神域にくちなしの匂ふ朝なり明るき雨は
通り過ぎつゝ
アメリカ移動大使ゴドレー夫妻
碧き眼のアメリカ大使も妻を率て大神の
お木曳きたりといふ
日の神の大宮造り外つ国の人も来りてお
木曳くといふ

阿蘇合宿詠草より (八月九日)
亡兄の歌きゝて 松吉 基順
阿蘇の宿に兄の遺せしみ歌をば友らと聞
きて胸ぬちたかなる
靖国のみ社にはた歌まきにかゝげられた
る忘らえぬ歌
忘れじと同胞おもふみ言葉はわが胸ぬち
ゆ離れえぬかも
亡き兄のみ霊よろこび聞きまさむみ歌よ
みあく先輩の声を

うつそみは砕け散りしも兄のおもひ永久
のいのちとうけ継がれなむ
中岳に登る 加藤 敏治
見あぐれば前ゆく友の姿遠く真日てる岩
路ゆくにははしき

山はだをたらなり登る人影のうちにまじ
りて吾子も行くらむ
いだだきはま近しと思ひ足早に登りくれ
どもなほも道あり
道一つかなたに見ゆる中岳の大き火口ゆ
煙立つなり
をやみなく立ちくる煙のぼりゆき果ては
つらなるみ空の雲に

防人の歌の講義を承りて 関 正臣
かなしみにたへつづゆきし防人の歌をし
聞けば涙にじみ來
こみあぐる思ひあふれつづさきもりの歌
の数々くり返しよむ
名も知らぬ若人たちがまごころをうたひ
あげつづゆきしそのかみ
千年あまり経たりといへる防人の心さな
がら継がむと思ふ

待ちわびし阿蘇の集ひに吾子とわれ出で
立つ朝のすがしかりけり
よき友と手をたづさへて日の本のをみな
の道を進みゆくべし
人の世はきびしきゆゑにいくたびもあら
しにたへて生きよと祈る
夜久 正雄

大いなる火口をこめたる噴煙の吹き立て
られて雲と立つ見つ
心しる友らと語りなごみつゝ阿蘇中岳の
山路下りぬ
草千里しづかに立てる馬の目のやさしき
見えて心なごみぬ
中岳山上にて 小田村寅二郎
噴き出づる煙さなし火口底の中段の地割
れ硫黄かと見えぬ

見入る間のしばしもあらず噴煙はたちま
ち多量に噴きかはりけり
ときの間に視界ふさがれ硫黄臭のたゞよ
ふ煙にむせびぬわれは
さきに見し地割れのかたゆ噴き出でし煙
ぞこれはいま噴き來ぬか
わがおもにたゞに吹きくる煙はも地中ゆ
たゞにいま噴き出でし
硫黄臭にむせぶさなかに地の底の生ける
息吹きにふるゝ思ひす
奥田先生のお話をきいて (長崎被爆)

赤きトマト一つはわれに残しきと語りた
まへば涙流れつ
はらからも同じ思ひにみまかりし日はめ
ぐりきぬ合宿の地にて
常日頃忘れしこともうかびきてたまたま
りせん友らと共に
山田 輝彦
石原を嘯き上れば焼け石のはさまに白し
夏草の穂は
心知る友はよきかな火の山の石原をゆく
笑みつ語りつ
火口壁のとがりし岩の頂きに人立てる見
ゆす雲の靡きは白し山風にさからひてま
ふ驚小さきかも

大地の底ひに燃ゆる奇しき火のとこしへ
にわれわらわが祖国
韓国学生との意見交換 小林 国男
歌米に中ソに心うばはれて韓国のこと
かに思ふやと
国おもふ心にかられ日本の対韓関心を
うけましまし
をりをりに笑たたへつづしづかにも語る
面わにまことありけり
聞き知らぬ韓国語なれど思ひつくしわれ
らに語ると思へば身にしむ
阿蘇山頂にて 川井 修治
頂きにのぼりきたれば山高みすず風吹き
て心持よきかな

火の国の大阿蘇が嶺はたえまなく白きけ
おのがじしきみをつくりてたのしげに写
真とりあふ若きらの群
我もまた仲間に入りて若きらと肩ならべ
つつ写真とるかも
ここだの若人こそぞて奮ひ立たばいか
なるわだか成らざらめやも
み国いまだならぬとき燃ゆる火の焰と
なりて奮はざらめや
山田兄の講義をききつゝ、小柳陽太郎
留魂といふことのはひさしくによみが
へりぬ君がことばに
うつし世におもひ残して去りゆきし友ら
のいまはしぬびまつるも
み友らのいまはのねがひをつぎゆかむ道
求めつゝ今日までは來ぬ
天がける友らもみませはたとせのおもひ
をこめしこれの集ひを
慰霊祭場整地作業 名越二荒之助
生ひもなる夏草刈れば玉なして汗は吹き
つ額にふる手に
天がけるみ祖のみ霊喚ばはむと夏草払ふ
いとみな尊し
仕事終へ友らと仰げば大阿蘇の中岳の峯
は事にけり
み霊はや現はれそめしか雲黒くうづまき
やまず雨ともなひて

編集後記 天皇の御歌をくり返し読んで
その御心を学ぶことが、本会の会員の
一人一人が志し、そのことが広くゆきわた
ることを願つてきたが、こんど角川文庫
から「新抄明治天皇御集」が出版された
ことを喜ばれて「歌人今上天皇」の著者
夜久先生が一文を草された▼ベトナム戦
線がますます熾烈化する時、わが国の一
時勢について人は何と見るか。山県大
式を論じた小柳さんの一文も注目すべ
き文章であらう▼本会から派遣された訪韓
学生団一行七名は、先月二十四日元氣に
下関港より出航、本号発行のころは十二
日間の旅を終へて無事帰国してゐる予定
である。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←東京→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152

毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間 360円

今後の日韓関係はいかにあるべきか

―第二回日本学生訪韓研修旅行団報告―

名越二荒之助

きたいのである。

韓国の立場を尊重

はじめに
 昨年の夏、私たちの会は鹿児島大学助教授川井修治氏を団長とする十六名の訪韓団を韓国に派遣した。今年は何蘇で行われた第十二回合宿教室に、韓国文教部長李聖祚先生を団長とする四名の学生を招待し、その後合宿参加学生数名と共に国内を案内し、約二十日間の日程を過ぎた。そして今度十月二十五日から十一月四日まで、我々七名の者が韓団を訪問したのである。

我々の訪韓は以上のような実績の上に立ったものだったし、日韓関係の好転も手伝って、各地で予想外の歓待をして頂いた。報告したいことは文字通り山ほどあって、限られた紙面ではつくきれない。詳しくは後程まとめて冊子にして発刊する予定である。たゞこゝでは滞韓中私たちが貰った態度について御批判を頂

東京大学のいずみせいいち教授が、先日韓国を訪問して「日本の皇室の祖先は韓国人である」と言ったそうである。私たちはこの事を訪韓中韓国人の人々から度々聞かされた。しかし私たちは実証できないことを述べて韓国の歡心を買うようなことはしなかった。また日本の旅行者は、口を揃えて日本統治時代の罪を陳謝するそうだが、私たちは韓国の独立性を尊重するが故に、そのような言葉は述べなかった。私たちは卒直に次のように言った。「日本が大東亜戦争に敗れたからといって、その責任をすべてアメリカのせいにしてしまうとは思わない。そのような戦争を誘発するに至った日本の責任も反省もあるはずだ。それと同じように、韓

国も日韓併合に至った歴史的経過も反省して貰いたい。李王朝末期の韓国内部は、事大党と独立党に分裂し、後に東学党の乱が起り、開化党、閔妃一党、独立協会、皇国協会と入り乱れ、宮廷内部も混乱に陥った。その頃韓国は東洋のバルカンと言われ、諸列強の相克の場となった。そのまゝ、放置していたら、東洋の安定は到底期待することができなかった。この点に思いを馳せず、たゞ日本が悪かったという陳謝では、優越感を残すだけで、韓国自身の民族精神は育たないのではないか」

反日的英雄の讚美

韓国には日本に抵抗した志士たちが、立派な銅像になって、その栄光が讃えられていた。朝鮮征伐をした豊臣秀吉の軍船を、龜船という装甲船で打ち破り、船上で戦死した李舜臣の像は、釜山の龍頭山公園に建てられ、はるかに玄海灘を睨んでいた。また第二日韓協約(明治三九年、一九〇六年)で、韓国の外交権内政権を日本が掌握することによって生じた韓国の窮状を、明治四〇年、オランダのヘーグで開かれた万国平和会議で訴えた閔忠正の像は、ソウルの市中に建てていた。また明治四一年(一九〇八年)伊藤博文をハルビン駅頭で暗殺した安重根の像は、ソウル市内南山公園に建てられていた。

私たちが団員は、これらの像の前に整列して、それぞれ敬虔な黙祷を捧げた。祖国の独立のために、尊い生命を捧げた人々に、心から共鳴をおぼえ、我々の

愛国的精神はそうせざるを得なかったのである。

しかし私たちはある座談会で、訪韓の感想を貰ねられた時この事に触れて次のように述べた。「韓国では反日的志士ばかりを銅像にして讚美しているようだが、それは偏向ではないか。元の国が高麗に攻め込んだ時には、文祿慶長の役で加藤清正、小西行長が破壊した以上の大破壊をしてい

るではないか。北韓が突如として侵略し同胞相喰ひ大殺戮を行つた時には、日本統治三十六年とは比較にならない民族の屈辱を感じたはずではなかったか。正常にして豊かな民族精神は、反日意識からだけで育つものではない」

国軍墓地で

私たちは新装なった国軍墓地にも参拝した。ソウル郊外、三方を山にかこまれた広大な敷地に、三万四千の戦死者の墓標が、はるか山の中腹まで続いていた。衛兵司令所を通過して、用意した日章旗を旗竿につけ、国旗を先頭に整列して進ん

目次	
今後の日韓関係はいかにあるべきか	名越二荒之助 (1)
訪韓報告座談会——大学高校訪問を中心に……	(2)
国防を考える………鹿児島大学合宿記……	(6)
明治大学「国政研究会」から………	(7)
☆ 同胞歌壇	

だ。中央正面に高さ五〇米もある顕忠塔が、緑にはえて白く浮き出たように見える。そこまでの距離は八〇〇米はあろうか。私たちは歩度を早めながら、一宗教法人になりさがって、国家護持さえ行わない日本、靖国神社の事を思った。顕忠塔に近ずくと、意外な参拝者に側の若い衛兵二人はニコニコとして近づいて来た。私たちが敬礼して準備した花束を捧げ、黙祷を続けていると、彼ら二人も我々と並んで黙祷を捧げた。

参拝が終って帰ろうとすると衛門の司令が呼びとめた。「基地の中で日の丸を掲げたのはグレイトミステイクである。韓国動乱に日本は参加しなかつた。参加しない国の旗を掲げて英霊の心が靖まるうか」

私たちは次のように答えた。「国旗を掲げて参拝したのは、日本人として最高の礼をつくしたのである。韓国動乱に参加しようが、参加すまいが、祖国に忠誠をつくした人に敬意を表するのは、人間として当然の責務である。たゞい過去敵国であっても、戦が終ればお互に健闘を讃えあうのが武士道精神ではないか。貴国は今新羅時代の花郎精神(武士道精神)の復活を願っておられると聞くが、花郎精神というのはそんな偏狭なものではあるまい」

日韓関係は川と海

私たちのような無慮慮な指摘に対して、韓国の人々は一様に正直に答えてくれた。「なるほど言われる通りかも知れない。しかし我々の感情が許さないの

だ。一民族が他民族を支配することが、いかに大きな感情の爪跡を残すことか。民族の独立を尊重する君たちには判って貰えるだろう」

「よく判る。痛い位に判る。だから我々は韓国が立派な独立国になって貰いたいし、日本もそうならねばならないと思う。お互に相互の独立性を尊重し長所を見習い短所を指摘しながら手を取りあってゆこう」私たちがこう言って何人かの人と固い握手を重ねたものだった。

それでは今後の日韓関係はどうあるべきか。それは張基榮前副総理と会った時、相互の間にかわした次のようなやり取りに集約されているように思われてならない。(張先生は韓国のブルトローザーと仇名される実力者で、日韓条約締結の立役者であった。今は韓国日報はじめ五つの日刊紙を主宰される大忙忙の中に、我々と会って下さった)

「韓国と日本は川と海のようなものだ。決して片方が相手をおみ込むことがあってはいけぬし、また決して分離することもできない。日本は恐るべき国だから、私は日本を勉強する。君たちも韓国を勉強しなさい。」

それに対して私たちは答えた。「韓国も強国になる条件が整いつつあるように思います。日本も強力な国家として発言できる国にします。お互に強国同志バランスを保ってゆきましょう」

(団長・岡山県立笠岡高校教諭)

訪韓報告座談会

— 大学・高校訪問を中心に —

九泊十日の韓国訪問を終えて、下関に上陸したのが十一月四日、その夜「迎賓館」に「国民同胞」編集長宝辺正久氏、北九州の山田輝彦氏、福岡の小柳陽太郎氏、下関の加藤善之氏、田口謙三氏が来て、以上五氏に司会をお願いして「訪韓報告座談会」を持った。五時間半に及ぶ座談会で、テーマも「訪韓中最も印象に残ったこと」「韓国国民的伝統への評価」「対日感情」「学校訪問」「韓国経済」「忘れ得ぬ人々」「こぼれ話」「韓国から見た日本」「今後の日韓関係」等広汎な範囲に及んだが、こゝでは学校訪問の部だけを集録することにす

る。

報告者は名越二荒之助団長、白石肇君(長崎大・経二年)、志賀建一郎君(九大・工二年)津下有道君(上智大・法二年)斉藤実君(早大・法二年)、それに片岡健(九大・経四年)の六名。上村和男副団長(千代田コンサルタント総務課長)は急用ができソウルから空路東京に帰ったので、後ほど紙上参加した。

慶北大学

片岡 慶北大学というのは、韓国で三番目に大きい大邱市(人口八〇万)にある。地方大学では一番水準も高く、学生数も多いと聞いている。

上村 慶北大学はもとも訪問する予定

はなかつた。ところが今夏阿蘇合宿に参加した金慶麟君が、友人の李錫弘君と共に釜山まで出迎えてくれて、学校ではすべて準備して待っているから是非来てくれと言う。両君は釜山から慶州とずっと我々と行動を共にし、よく世話してくれた。両君の熱意が訪問を実現したことになる。

志賀 学校は郊外にあって、校舎も立派だし、広い敷地の中に静かなたゞずまいを見せていた。訪問したのは十月二十七日午後一時から約三時間。先生が六人、学生が約二十人集って座談会を持った。名越 先生方が最初から鋭い質問を投げかけてこられた。まず我々のメッセージを見て、国民文化研究会は国粋主義団体ではないかと質問される。それに対して私は「現在の日本は偏向しているから、韓国並に愛国心を持った普通の国にしようと思つている」と答えたが、疑惑がとけない。やっぱり反動化逆コースを警戒される。こちらは正常化順コースの道を探求していると言つても、「アメリカとの友好に対してどのような心の深さを持っているか」というように今度は片岡君に質問の矢を向けてゆく。

片岡 反米意識から再軍備問題と、次々質問されて口答試問を受けているようだった。

斉藤 私には武智鉄二のセックス映画「

「黒い雪」に対してどんな受取り方をしているか。日本映画の製作態度は、あんなものが主流を占めているのではないかと聞かれた。これに対して「黒い雪」は見えないし、日本映画は斜陽産業化して影響力はない。今はテレビの時代だと答えておいた。もう一つ、紀元節の復活をどう思うか、これは復古主義ではないかと聞かれた。

名越 真面目な斉藤君は建国記念の日制定の意義を丁寧に説明したので、私は「韓国も紀元節を祝っているではないか。韓国は十月三日、檀君神話に基いて建国の日を開天節として盛大に祝っている。しかも今年には檀君紀元四三〇〇年と聞いている。韓国の方こそ復古主義ではないか」と逆襲しておいた。大体先生方は被害意識が強過ぎると思った。自分の国は六〇万の軍隊、世界第四の陸軍国でありながら、日本の軍備強化に反対するのは大韓帝国主義になるではないか。

上村 韓国のアチコチで、羽田事件に象徴されるような日本の左傾を憂慮する声を聞いたが、慶北大学の先生方は一様に日本の反米的超国家主義の出現を警戒しておられた。卒直に先生方が話されたので大変参考になった。

津下 しかし学生たちはよかった。彼らは反日教育を受けたと言っても実感がないからだろう。すぐに溝がとれて、在日韓国人の法的地位の問題、韓国の印象、日本学生の就職問題など身近な質問をしてきた。

白石 こんなことを言った学生がいた。

「日本は我々から見れば精神的に中進国である。だから学生諸君は派手な服装をしてくるんじゃないかと思っていたが、皆端正な服装をしてきた。私はその点に敬服する」とね。学生服を着て行ったよかったです、来年も行くようなことがあれば、必ず学生服で行くべきだ。

高麗大学

津下 ソウル郊外、非常に広い敷地の中に、山あり林あり、都会の学校とは思えない環境の大学だった。校舎も悉く花崗岩で作られているので壮麗な感じさえする。学生数六千。韓国ではこの大学でもそうだが、日本のようにケバケバしいピラや立看板が全く見られない。ほんのすこしクラスの案内が小さな紙に書いて貼ってある程度だった。聞けば校内の掲示物は、全部学校の許可を受けることになっている。

名越 創立者金性洙先生は、早稲田大学の出身で、韓国新聞界経済界の大立人物、副総理もやった人だから緒方竹虎級的人物ということになるかな。校内に銅像もあるし、学校の裏にはお墓もある。私たちはまずお墓にお参りした。斉藤君を先頭にたて、整列し、一分間の黙祷を捧げた。それから座談会に移った。参加者は各学部の学生代表ばかり七人。(これは事前に川井修治氏の方から日本側と同数出て貰うよう手紙でお願いしておいたからである)高麗大学のシンボルマークが虎であるだけに、参加した学生は野性味があふれて、今年合宿に参加した李亨模君のようにスマートなのはいなかっ

た。ゲリラやバルチザンで鍛えた闘士のような風采を思わした。僕はまず日本人の世論調査によれば一番嫌いな国がソ連、次が中共、次が韓国になっている。韓国の世論調査でも、日本は三番目に嫌いな国になっているようだ。こんな状態はお互におかしいではないかと、ズバリ切り出した。

片岡 座談会を始めたが、座談会にはなかななかった。学生同志思いがあふれて、司会者の指示が待ちきれなくなつて、とうとうアチコチで個々に話し合ひだした。こゝらが高麗大学の持味かも知れない。

斉藤 僕が相手したのは韓国文化研究会に所属した李君で、眼がランランと輝いて印象的だった。僕英語が不得手なもので、筆談を交えたんだが、話はすぐ防衛問題に触れた。彼らは殆んど学業の中途で軍務に服する。それを当然のことのように言う。日本は志願兵制だと言つたら「そんなことではないのか」と首をかしげていた。

志賀 僕が話したのは農学部のおとなしそうな学生だった。対日感情について聞くと、あれは大人の世代の問題なんだ。我々はそれを乗り越えて新しい日韓関係を打ちたて、行こうと力強く言つた。そしてこと農業の問題になると非常にファイトを燃やして、韓国農業を立て直すんだと抱負を語ってくれた。日本の学生はすぐ話が就職につながるが、韓国の学生はまず国家が出てくるのが極めて対象的だと思つた。

白石 僕が話したのは朴秀吉という人だ

つた。朝鮮征伐をした豊臣秀吉の名をどうしてつけたんだと聞いたら、日本統治時代に生れたから父がつけたという答だった。名越先生に聞いたら、ソ連でもカールとかマルクスという名前が多いそうだ。あゝいう名前をつけておけば、共産党に睨まれる度合がすこしでも減るといふソ連人の悲しい知恵だそう。その秀吉君だが、共産主義をデッド・イデオロギー(死んだ思想)だと強調し、今後お互に文通しようとして強く訴えてきた。

津下 僕が話した学生は、日本の学生運動と韓国の学生運動の違いを強調していた。日本の学生運動は政府否定の無責任運動だが、韓国のそれは政府を励ます意味で烽起する。ナショナルインテレストを守るということが根柢にあると訴えていた。その所は同感だつたが国字問題で漢字を次第になくして、ハングル文字に統一してゆくという主張にはガッカリした。この意見は日本の表音派の意見に近い。僕はハングル文字にしたら古典が読めなくなる。やがては一九一九年三月一日に起つた三一運動(万才事件)の独立宣言さえ読めなくなるではないかと言つてやつた。

片岡 僕が話したのは新聞放送学科三年で、韓国民族思想研究会の会長をしていった。それじゃ交流を深めて行きたいと言つたら、オーオーということですがすぐ握手してしまつた。(笑)これから文献交流から始めようということになった。彼は言うことがはつきりして、日本は当然軍備を持つべきだ。お互に独立国として対等にやつてゆくべきだ。自分は今ま

で教育によって日本を嫌っていたが、実際に勉強してみると、日本と積極的に交流せねば駄目だということがよく判った。君の方からも積極的に行動に移して貰いたい」と言う。彼はにがみ走った割悍な顔をしているだけに頼もししい、一番印象に残った。

上村 私は主として全国学生委員長の金浩鎮君と、安全保障について話した。韓国の安全保障については「国連の理想と目的に従うが、決してこれに依存しないで、集団安保の形で解決してゆかねばならない。何はともあれ韓国は経済援助と科学技術の発展に於て北韓に勝つことである。しかし武力での解決方法はできないだけ避けたい」と言っていた。安全保障一つをとっても、北韓の脅威が直接的なので、我々日本人よりも遙かに切迫感があるし、身をもって安全保障を考えているという感を深くした。



(高麗大学本館と図書館)

★越 韓 国の大学にはどの大学にも立派な博物館がある。遺跡発掘の記録が大切に保存せられてある。時間の関係で高麗大

館も駆足で素通りせざるを得なかった。高麗大学を辞去する時、学生たちがマイクパスの所まで来て「梨花女子大学に行ったら、八千の美女たちの顔をよく見てくれ」と言って肩を叩いてくれた。(笑)

梨花女子大学

片岡 梨花女子大学は八十年の伝統を持ち、去年学長はマガサイサイ賞を受賞した。八十年記念式典にはジョンソン大統領夫人も列席している。文字通り女子大としては韓国一、いや彼らは東洋一の名門校だと誇っていた。無精者の僕もその日はチャンとヒゲを剃って(笑)いや訪韓中毎朝ヒゲを剃っていたんだが。緊張と興奮の面持ちで訪ねた。

★越 李聖祚先生のはからいで、我々はまず昼食時行われるチャペルを見学した。四千人が入った大講堂の中央ステージに、我々七人の侍(笑)が並んだ。我々は四千の美女による八千の鋭い視線を浴びながら(笑)、壮厳な儀式を見学した。讚美歌、聖書奉読、お祈り、説教、讚美歌の順序で祈禱会は進められる。学園にこのような宗教的雰囲気は流れることの意義を思い起していた。

慰霊祭を思い起していた。志賀 学生課長の先生が通訳で、学生会長その他五人の学生たちと昼食を頂きながら座談会に入った。最初は韓国の女性観男性観なんていう抽象的な話題をこちらから出したものだから、どうもうまく噛みあわない。三〇分もモタ／＼して突如斉藤君が「貴女たちには反日感情があ

るんですか」という質問をズバリやっただ。そしたら俄然彼女たちの顔色が変わって緊張した。しかし次はソウル大学に行くので時間の余裕がない。彼女たちはその問題についてこそ話したいという言葉を選び切って去らざるを得なかった。この無念さは一生忘れられない。(笑)

白石 梨花女子大学が不発に終わったのは、何としても残念だった。しかしミス尹という埼玉で育った在日韓国人が、この大学に留学しているのに会えた。彼女は留学して(みん)と祖国への誇りを持つことができるようになった、ともらしていた言葉が忘れられない。

斉藤 女子ばかりの学校だし、キリスト信者が三分の二もおる学校であるだけに、学生がしとやかで静かで、実に落ち着いた感じだった。男女共学の日本の女子大生がいかにガサガサしているかが判った。(笑)

上村 先生の先生が、韓国語は英語の発音に近いから、英語を修得しやすいので、祖先に感謝していますと言っておられたのが気になった。インテリと言うのは自国文化より高い文化を見とすぐ真似したがるもの、例を見たとすぐ真似がした。こんな発言がウカソにも出るようでは、この大学も相当にアメリカナイズされているのではないか。キリスト教の隆盛もいゝことではあるが、韓国のインテリは、韓国的なものを静かに見究めて貰いたいと思った。わが日本にもそれはそのまま指摘できる傾向ではあるが。

ソウル大学

片岡 ソウル大学は、日本統治時代の京城帝大のあとに作られた学校で、創立二十二年になる。この大学ばかりはソウル市内のゴタゴタした中であって、日本の大学みたいだった。韓国の東大と言われ、文字通りエリート集りである。阿蘇合宿に参加した張君が学生会長をしており、川井副理事長の松江高校時代の友人徐敏珪氏が教務課長をしておられる。津下 座談会には学生部長と学生課長が通訳にあたられ、徐教授も出席された。大きな会議室で座談会が持たれたが、学生側の出席は我々と同数の五名、慶北大学では受身に立たされたので、今度は攻勢に出た感があった。まず片岡さんが「今後は日韓関係はどうあるべきか、諸君たちは日本がどうあればよいと思ってるか」と質問していった。しかし彼らはいきなりそんな大きな問題を出されても答えられないと言って敬遠した。志賀 続いて僕が「韓国は反共と反目でできあがった国のような感じがする。そんなものだけでは韓国の民族精神は育たないのではないか。もつと韓国的なものを掘り出し、それに根ざすことを考えなければ」と言ったが、質問が抽象的だと言って、これも敬遠された。白石 そこで中国文学科三年のミス柳が「あなた達は日本にいて果して韓国の事を考えることがあるのか。日本には在日韓国人の中に居留民団(韓国系)と朝鮮総連(北鮮系)の二つがあるが、日本政府はどのような差をつけて接しているかの質問があった。後者の問題はよく判らないので名越団長が答えた。

齊藤 この座談会のハイライトは、阿蘇合宿に参加した張学生会長と津下君のやりとりだったように思う。張君は「アジアの反共防衛体制の第一線は韓国、台湾、ヒリピン、南ベトナムである。日本は第二線だが、この第一線が崩れると、日本もまた崩れる。アジアの自由陣営諸国は共に運命共同体である。日本は自国の繁栄ばかり考えず、もつと韓国を始めとする第一線国家に経済援助すべきではないか。それなのに日本はアスベック（アジア外相会議）で、韓国がアジアEECを提唱すれば、それに反対した。これは韓国外交がリード役になることを嫉妬しているのではないか」と微笑をたゝえながらスマートに発言した。それに対して津下君は「前段の意見は同感だが、後段は承服できない。アジアではEECのようなものも実現できない相談なのだ。ヨーロッパは地理的にも歴史的にも経済的にも接近してきてまゝり易いが、アジアは条件が全然揃っていないことを、木内理論で切り返していた。

名越 この座談会では片岡君が最初に「日本はどうかあればよいと思うか」と質問したのが「日本に何をしたいか」と質問と誤訳されて伝わっていたので、彼らは韓国を後進国扱いにしていると受け取って、最後まで引かかっていた。しかしこれが氷解すると両者の距離は急速に縮まった。そこで私は座談会の最後の締めくくりに上村副団長にお願いした。

上村 団長から依頼された時は以心伝心だと思った。私はこゝぞと思つて次のように言った。「新しい日韓関係の道は教

科書にはない。我々の努力と誠を積み重ねて築いてゆく以外にあり得ない。この前提に立たない限り、安全保障の問題も経済協力問題もあり得ない。我々は日韓の新しい道を見出すべく貴国を訪問したのであり、一般的な言葉を並べに來たのではない。我々若い者同志が、今後の日韓関係はいかにあるべきかを課題として考えてゆく所に、道は開けてくると考える」

名越 座談会が終つた頃は六時を過ぎ、外は真暗だった。ソウル大学の学生諸君は「これから交流が始まるうとする時に別れるのは残念だ。あゝいう固い議論よりも、屋台で安酒を傾けながら話したい」と希望してきた。しかしスケジュールにしばられて今すぐと言う訳にはゆよりほかなかつた。

これで大学の訪問を終る訳だが、各大学とも学生課長の先生方が、学生交流の意義をよく理解されて、学生を前面に押さすよう司会や通訳の労をとって下さつた事を、紙上を借りて厚くお礼申し上げたい。

京畿 中 高 校

片岡 京畿中高校は韓国きつての秀才高校（知能指数IQで平均一三〇）で、日本の日比谷高校にあたる。校門の横に高さ三米、幅二・五米の大鏡がある。その両側に「礼節を尊び」「品位を高める」と書かれている。学生は登下校の途次、この鏡に全身を映して服装を整える。韓国には儒教精神が生きているからか、高

校生も大学生も大変に礼儀正しい。名越 この学校は視聴覚教材がよく揃っているのに驚いた。オーバーヘッドプロジェクターもあったし、LL（語学練習装置）もあった。このLLは日本から二百万円も出して買ったそうだ。岡山県には今私立高校に二台しかない。この装置で生徒は会話の勉強をするから、英会話がスゴクうまい。新聞部の生徒が、我々に英語でインターヴューしたいと申し込んできてヘキエキした。

津下 先生たちと座談会したんだが、まず「日本では国家をどう教えているか」と聞かれた。私は日教組の影響力と倫理綱領を説明して、とても国家を教えらるる環境ではないと述べた。名越先生は韓国の教育基本法（壇君神話の「弘益人間」を第一条に掲げている）と日本の教育基本法を対比して、日本のそれは無国籍的であると解説せられた。

名越 続いて私は具体例として両国の領土問題の取り扱ひ方を比較してお目にかけた。韓国では独島（日本では竹島と呼称）を韓国領土として生徒に教えておられる。何人かの学生に聞いたが、皆自信もつて独島は韓国領土だと答える。しかし日本の文部省指導要領には、領土問題を教えるようになっていないので、教科書に書かれない。だから日本の高校生は竹島と言つたらどんな島か知らない。最近になって一部の地理の教科書に、竹島や沖繩小笠原、北方領土などに融れているものがあるが……

城南 中 高 校

片岡 城南中高校は柔剣道を正課としたスパルタ教育をもつて鳴る私立高校である。学生数二千六百、理事長は韓国の国民的英雄と仰がれる金錫源將軍。阿蘇合宿で韓国学生の通訳をして下さつた金泳国さん（亜大三年）の御尊父である。金將軍は日本の幼年学校から陸軍士官学校を卒業され、日本陸軍の大佐であった。韓国独立後は常に北韓侵略の危機を訴え、「目標三十八度線」のスローガンを掲げておられた。予言たがわず六・二五動乱は勃発、韓国軍はたちまち後退、金將軍は部下を叱咤しながら大邱死守を果された。大邱の死守が、その後の国連軍の作戦に大変な好転をもたらした。

志賀 学校の教育方針は、忠武公李舜臣の精神の継承と、新羅時代の花郎精神（武士道精神）の復活にある。講堂には壇君の画像が掲げられ、玄関正面には李舜臣の銅像、玄関横には龜船の模型が飾られていた。

名越 私たちは柔剣道の授業を参観し、韓国第一位を獲得した機械体操の妙技と、プラスチックを視聴した。特にプラスチックバンド部員三十人ばかりが「荒城の月」その他を演奏してくれた時には目頭があつくなつた。私がソ連に抑留されてモスコイ国際収容所に入った時、ドイツ人の管弦楽団が「荒城の月」で迎えてくれた時の事を思い出した。

白石 城南高校は金將軍のもとによくまとまって、全体が家族的な雰囲気だつた。それだけに学校あげて歓待して頂き学校訪問の最後を飾るにふさわしい座談会が持たれた。（座談会の模様は紙数の

関係で省略)
齊藤 ソウル出発前夜、即ち十一月二日の夜の集いは庄巻だった。ソウル大学、高麗大学、そして韓日文化研究協会(朴鉄柱先生主宰)の学生諸君が、我々の宿泊している鐘路ホテルに集った。狭い部屋の中に熱気が溢れ、爆笑と握手が飛び交った。やがてそれは民謡の交換となり、螢の光の合唱となった。

むすび

名越 以上で学校訪問の報告を終る訳だが、どれだけ学生間交流という目的を果すことができたであろうか。スケジュールに追われ通しで、どの学校でも大きな不満を残した。しかし一つのキッカケは作ることができた。今後の学生同志の交流によって、それは更に実を結び拡がってゆくものであろう。ともかく去年から続けた国民文化研究会の学生交流は韓国の各界で注目せられた。李学洙氏(遠洋漁業、出版、印刷等各種の事業を手がけた)、は、来年からは民泊方式で訪韓して貰いたい。自分の手で十人は引き受けるからと強く訴えられた。

私たちを案内してくれたソウル交通公社の張志弘外人担当係長は、帰りの汽車の中で「今まで日本人を沢山案内しましたが、このゲルブが一番手ごわかったし、案内の仕方があった。大いに質問も受け論争したが、それによって心は余計に結びついた。今韓国の青年の心は、日本を飛び越えてアメリカに向ってしまっている。それと同じように日本の青年の心は、欧米諸国がソ連中共に向いている。このまま過ぎたら両国の青年の間に、大きな断層ができる。私はそれが恐い。これを機会に私は会社の事業として

て学生交流を手がけてみたい」としみじみもらしていた。

その他面談した各界の人々は、短い言葉ながら「この事業を毎年続けて積み重ねてほしい」とか「国民文化研究会は韓国以外の外国に浮気をせずに、まず足もとの韓国交流を実のあるものにしてほしい」と訴えてこられた。釜山で会った神原総領事も、日本大使館の上川公使も、そして島本一等書記官も、口を揃えて、学生交流は幾らやってもいい。学生同志

国防を考える

鹿兒島大学社会科学研究会坊ノ津合宿

昭和四十五年の安保再改定を控えて、その選択は国民一人一人に課せられた重大な問題である。現在、問題となっている沖繩施政権返還も、安保体制とからんで、困難な問題点がある。我々が現在、豊かに生活が送られているのも、安保体制と自衛隊の存在によって、平和と安全が保たれているからである。単に観念的に平和でありたいと願っても、それだけで平和が訪れるはずのものではない。そして、国際情勢の急速なる動きは、ますます真の国防の必要性を感じせしめられる。現実には正しく立脚して、国防が考えられねばならない。我々なりに、国防について真剣に考え討論する機会を持つべく合宿が開かれた。

場所、その普通唐使派遣の港として知られる坊ノ津である。日程は、二泊三日(十月十七日、十九日)。参加者、鹿大十二名(内女子学生二名)である。この合宿の目的を、国防問題に焦点をしばっている為か、開会式は、緊張した雰囲気

の話しあいは何を話してもアトクされがない。そして失敗することがない。大いにやって貰いたい、と言っておられた。前後に多忙の中をさいてすべての計画をたて、学校訪問に同行し、時に通訳まで引き受けて下さった文教部奨学官李聖祚先生に、心から感謝を捧げたい。

(紙数の関係で司会者の言葉を全部省略しました。全体の座談会をうまくリードして下さい)司会の方々に感謝します(まとめ・片岡 健)

気を感じるものがあった。

開会式の後、寿美君(法文2)によって、「日米安保体制の焦点」と題して研究発表があった。「安全保障を考える場合客観的な事実認識が伴わねばならない。そして、安保体制のもとで、平和と豊かな国民生活を享受してきたという事実を直視しなければならぬ。」と前置きして、安保条約及び安全保障に関する各党の見解を説明し、様々の事情を考慮に入れるなら、現行の安保体制は維持せれるべきものであるとした。

その後、戸沢君(法文2)によって、「ソ連外交とアジア」と題して研究発表があった。「ソ連の多面的平和共存外交路線や中ソ論争の為に、ソ連の対日外交は、友交的積極的なものとなってきて、その脅威は薄れつつあるが、ソ連が、マルクス、レーニン主義に依っている以上指導者の交代により、政策方針が変化する可能性がある」ということは十分に考慮に入れられねばならない。」とした。

夜の日程に入り、「国防意識について」と題されて、川井先生の講義が行われた。「防衛問題に取組む姿勢として、情意的(心情的)、政策的(知的)な両面がなければならぬ。そして両者は相俟って、一貫したものでなければならぬ。我々の守るべき対象一國とはイデオロギー的ふるいにかける以前に歴史的世界である、それは祖先と子孫と共に現存するものである。」; 国の存亡に

関わる国防問題にもかかわらず、現実には国論が分裂して統一もされてくれないのを、いつも疑問に感じ又もどかしさを覚えていたが、守るべき対象を聞いて、国防を考える上での基盤を与えられたように思った。そして又、祖先は我々に無量の願いを託している。それを無視して、イデオロギー的立場から国防を考えることは決して許されないと痛感した。

その後、「ジャン・クリストフ」を読んだ。と題して、高山さん(法文1)の発表がある。国防問題を討論して、緊張していたが彼女の発表は、それに和やかな雰囲気を与えるものだった。翌朝一海岸で体操。爽やかな気分、この日の日程が開始される。初めに、全体輪読の時間を持った。テキストは「西郷南洲遺訓」である。書き留めた数少ない言葉の中に、西郷南洲の厳しき意志と態度が窺れ、それが、翁の人生体験より出づる言葉だけに、それによって自らを律していこうという意欲を覚えるのであった。

その後、黒木君(文理4)によって、「アメリカの極東戦略」と題して、研究発表が行われた。「その基本には、核による戦争抑止と共産圏封じ込め政策とがある。ソ連は、平和共存外交で、その性

格を変えつつあるが、中共にあっては依然として現状打破勢力であるから、対中共封じ込め政策が、極東戦略の中心となるものである。」とした。

午後、岡本君(法文一)によって、「中共の核戦略」と題しての研究発表があった。毛沢東の戦略構想を説明して、中共の核の使用は考えられない、抑止効果を持つにとどまるであろう、とした。

午後は、レクリエーション、和歌創作に時間が当てられた。小さな漁船に乗って泊の海に浮かぶ島めぐりをした。合宿の緊張感から解放されて、楽しい一時であった。夜の日程に入って、「日本の自衛力」と題して、松木君(法文2)によって、研究発表があった。自衛力を問題にするとき、憲法第九条からいって、様々な問題が起る。現行憲法が国防に対して消極的な規定しかしていないから、防衛を整備充実しようとするなら、憲法は改正されるべきであるが、国論が統一されていない現在、それは余り現実的で妥当だとは思われない。そこで、第九条を弾力的解釈をして、政治の次元で国防は考えられるべきである。」とした。続いて、和歌相互批評に入る。

詠草より

四年 黒木 清亜

エンジンの軽やかな音ひびかせて我ら舟出す泊の海に
湾口を閉ぢたるがごと並びるる小島に波はくだけ散りけり
うねりなし寄せくる波は荒々し敵をのみて白き泡ふく

一年 武島 延子

西空にしらしら光る陽の影に黒くうかゝる兜岩かな
うねうねとゆるる小舟に身をまかせ舟遊びずるわれら楽しも

二年 松木 昭

この集ひさきやかなれど我ら皆国のいのちにつらなりたるぞ
心こめ力つくしてきわめなん国の護りはいかにあるかと
雲間よりも波し出づる月は海に映え岩根によせてちる波しぶき

一年 高山由姫子

ふなべりにふき散るしぶき顔にかかり胆ひやしつづ舟遊びする
見上ぐれば千切れし雲の間より色あざやかな蒼空の見ゆ

一年 岡本 幸信

潮騒のとどろきわたる岩の上でふと思ひ出ぬ母の面影
肌寒き朝おき出でて海岸で体操すれば身もあたたまる

一年 玉田

さび色の荒岩が根に息づけるうす紅の花
たおりて行かむ

三年 土岐 直彦

昨日より降りつづきたる雨もやみ雲間に青き空ものぞきぬ
合宿にて疲れし身体やすめむと泊の海に舟うかべたり
岩頭に立ちたる我の足もとゆちりてくだくる波のとどろく

一年 金津 洋雄

ゆれ動き波しぶきちる舟の上に寮歌うたひつ国事語らふ

二年 寿美博太郎

珍らしき舟遊びして友達の常とちがひし顔をみるかな

川井 修治

三年ぶりにおとのひ来にし泊の海み空くもりて風寒きかも
兜岩の奇しき姿ものぞまれて入江のさまはただになつかし

静なる朝けの海の中空を一羽のとびのゆるやかに舞ふ
ひたひたと磯辺によする白波の消ゆるを見ればもの思はるる

年々に若き友らとうちつとひ合宿するがならひとなりぬ
昭和四十五年内外の危機の迫るとふその情勢はただごとならず
おほけなき歴史とともに伝はれる祖国日本を護らで止まじ
ますぐなる道を心にとりもちてはげみつとめよ若き友ども

三日目、

「国際政治と安全保障」と題して、土岐君(法文3)によって、研究発表があった。「現代の国際政治は依然として、権力政治の時代である。この現実生きうる為には、自ら自国の安全保障するしかない。そして、その基盤を得る為には、国防の重要性を国民に積極的に訴え、国論が統一されねばならない。」とした。

その後、この合宿のしめくくりの意味で全体討論の時間が持たれた。そこで、皆の一致する所は、原則的には単独自主防衛に向はねばならないが、現段階に於ては、安保体制のもので、安全と独立を保つのが妥当であるということであった。

これで、合宿の全日程は終了した。合宿を終えて、感ずることは、国防についてさて今までとかく観念的に考え勝ちであったが、動いて止まない現実を正しく見究めようとする姿勢で国防問題を考えたいかねばならない。そしてそれは国民としての義務でもあるということであった。そして、社共両党にみられる政治的意図を持った、あたかもヒューマニズムに断えるが如き欺瞞は断じて許され得ないと感じた。政府が、積極的に果敢に国防の重要性を訴えるならば、国論統一の道も開けてくるのではなからうか。

合宿後も、勉強会を重ねて我々なりの成果を大学祭で発表して、国防意識の必要を学友に訴えるつもりである。
(松木昭・土岐直彦記)

明治大学「国政研究会」から

夏の阿蘇合宿が終って、はや五カ月目となり、今年も、もうすぐ終らんとしていきますが、明治大学においては、私達、夏の合宿の参加者が中心となって、国政研究会というサークルを作り、お互の研究をはかっております。

国政研究会は、国民としての立場より国の政治一般にわたって、いろいろと研究し、かつ、その成果をより多くの人々に訴えていく、という趣旨のもとに結成されたものですが、同時に又、私達が国の政治について考えていく場合、その基となるものとして、我国の文化伝統の研究にも力をいれています。

まだ結成されて日も浅く、人数もまだまだ多くはないのですが、さる十一月十八日には、明治大学と泉校舎に、参議院議員の源田実先生をお迎えして、午後十二時より、およそ二時間にわたって、「国防と青年」と題する講演をしていただきました。

先生はまず、国際社会において、一国が中立を行うための戦略的、地理的条件について、スイス、ベルギー、オランダ等の例を引いて話されました。中立の条件としては、その国が、スイスのごとく軍事のあまり重要でない地点に存在する事が必要であり、軍事的に重要な地点にある国は、第二次大戦における、ベルギー、オランダのごとく、中立など、ほ

とんど不可能であると説明せられ、そして又、ユーラシア大陸と太平洋の境に位置し、戦略的に、極めて重大な地点にある日本が、中立を守ろうとすれば、米ソをも打ち負かすだけの強力な軍勢力を必要とし、それが不可能である以上、我が国が中立を行うのは、極めて困難であると説明されました。

続いて、米ソの核の手詰りについて話され、米ソとも自国の全滅を覚悟しない以上、核戦争は行えないと説明されました。又、限定戦争については、海上権を握るアメリカの方が、ソ連よりも優位にあると解説されました。

そして又、前述のような状況により、共産側は、ベトナムに見られる様な人民解放戦争型の戦争を志向しており、種々の状況より判断すると、共産側の現在の侵略目標は、東南アジアであると、鋭く指摘されました。東南アジアが共産側の手に落ちた場合、中東より海上ルートを通じて運ばれる石油に依存する我国は、重大な影響をこうむる恐れのある事も指摘されました。

又、無防備中立(非武装中立)などというものは、万が一にも、侵略された場合ただちに、独立を失い、異民族の植民地的支配のもとにおかれる事を意味し、これは、およそ、独立国家の国民のなし得るところではないと説明されました。

先生は、戦後日本の混乱についてもふれられ、その元凶の一つである現在の憲法の欠陥を、鋭く指摘され、そして又、戦後失なわれた日本民族の魂を回復し、現在日本の混乱をそのまま放置する事なく、共に苦しみ、共に楽しむ日本民族本来の美しい姿にもどす様努力する必要がある事を、そして、それを行うのは、君達青年に与えられた重大な使命の一つ

であると訴えられ、六百人余の参加者に多大の感銘を与えられました。

私達は、今後とも、国の政治、そして又、日本の文化伝統について、より深く研究を進めていくと同時に、共産分子に蹂躪されている学園においては、積極的に学園正常化をめざして活動していく覚悟であります。

(政経2 繁永正博・商2 豊島典雄記)

同胞歌壇

—しきしまのみち—

訪韓出発前に
み友らのあつきなさけの集りて訪韓の旅
こゝに開かる

団員の若きらひとみに意志あふれ訪韓準備にいそむ姿よ
わが言葉にいちいちうなづき共鳴の声も
わき出つ夜の集いよ

夕映えの関門の海指呼にして古き歴史の
甦り来る
玄海の波越え大和路訪ねこし百済人らも
あまたありとふ

おほらかに行けてふはげまし胸に抱き我
も行くなり遣唐使のごと
朴昇浩先生のお話を聞いて (釜山)
津下 有道
言の葉にえつくせざる苦しみを耐え抜き
来られし姿のたふとき

韓国より帰り下関迎賓館にて
白石 肇
日の本の国こそよけれ緑なす木々の間に
間に小鳥とぶなり
緑なす庭を歩めば木々の香のそこかしこ
よりにほひくるなり

朴昇浩君ことづけのたばこをいただく
下関 宝辺 正久
われら日本の友を恋ふとふとつくにの友

のおもかげ偲ばるゝなり
はたとせをへてなほ今も日本の友の名い
ひあぐときくかなしき

一人々々にくれし煙草ときくにさへ偲ば
るゝかな君のおきふし
大陸の先端とわが大八洲とへだつる海を
深しと思へや
相偲び生くるを人のいのちぞと思ふに何
ぞかたきうき世や

京都・合宿地「日向大神宮」にて

思はぬに鳥の声きこゆ都より程遠からぬ
み社のへに
石段をのぼりてゆけば目にしみるあさの
しゞまに燃ゆるもみちば

道をゆく人もあらずみ山おほふ紅葉の
色のたゞならぬかな
くれなるに燃ゆるもあればかねいろに
かざやくもありうましもみちば

妻子らに見せたとしと思ふ目もあやにみ山
をおほふもみちばのいろ
み社の裏山ゆけば足音に飛び立つ鳥のあ
りてしづけし

山上に「伊勢大神宮遙拜所」あり
人音も絶えし丘べをのほりくれば石の鳥
居のひそやかに立つ

鳥居よりのぞめばはるかなみつゞく山の
かなたは伊勢にあるらし
さわがしき町をはなれてこの丘に祈りし
ひとの心かなしも

日の本の人のこゝろのふるさとといふも
かしこし伊勢の大宮
光あはき秋の日うけてしづもれるむむが
しの山のすがたなつかし

町中のざわめきすずに遠ざかり空ゆく鳥
の声の身にしむ
京都合宿に参加して
岸和田 岡村 義一

縁ありて集へる友らともろともみ文ひ

た読む日向合宿
み文読み想ひを語るこの集ひきびしくも
ありまたたのしくも

集ふどち心かたむけ読みゆけば太子の言
の葉うづつに聞ゆ
もろ人の行手さとせしこのみ文心をこめ
て読まざらめやも
難解のみ文なれどもひた読みて尊き太子
の想ひはかりつ

記事訂正のおしらせ。前号掲載の「
明治天皇御製について」中、四頁上
段六行目に、七月三十一日崩御とあ
るは三十日のあやまりにつき謹し
みて訂正す、と筆者夜久先生よりおし
らせがありました。

編集後記 訪韓学生団の報告記を座談会
のテープの中からまとめました
短時日の間に全身心をあげてぶつつか
った、いかにも激測とした行動であつたか
と偲ばれます。体質と環境——民族の差
別を超えてちがいに環はさうとする姿
勢と努力は、合宿教室につながる学生団
員達の日常の修練によるところかと思は
れます▼夏の合宿教室のあと各地で小合
宿が営まれてあります。十月には九州大学
信和会十二名と西南学院大一名が太宰府
で、また鹿児島大学でも。(本号記事参
照)十一月には京都日向大神宮で、京大
五名、同志社一名、富山大二名。長崎で
は、九大、佐賀大を交へて長崎大学が中
心となつたもの。十二月に入つてから、
東京八日会(都下各大学)及び富山大学
で▼本年度の学生委員を紹介します。志
賀建一郎君(九州大・工2)白石肇君(一
長崎大・経2)津下有道君(上智大・法
2)齊藤実君(早稲田大・法2)以上四
君、来年夏にいたる迄の企画と運営の中
心となります。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

背私向公の道を進もう

——過去の否定と忘却に反対する——

終戦後二十二年余を経て、経済生活は急速に恢復し、最近では、昭和元録などと安易に呼び慣らわされている。一方では愛国心、国防意識の欠除が指摘され、戦後の精神面の空白について、ようやく各方面で反省の機運が高まっていく。しかし、経済面のこの太平らしさのため、敗戦時の緊張した、偽りのない時代の体験と価値観が、ことさらにかき消され、これを否定することによって安心感を見出すという奇妙な風潮が、より強く一般化したようである。つまり、心の問題、精神の問題が、昔は昔、今は今——何のかわりもないとばかり、あたかも日常生活の付き合いと同じ次元で取り扱われ、人々の心の外へ押しつけられているとみてよいのではないか。このような太平感の中に危険がひそむことを見取らねばなるまい。

まして経済に変動はつきものである。経済成長の足踏みや不況はいつ襲ってくるかわからない。かつて第一次大戦後、果てしを知らぬおごりの生活が続き、それがひとたびくつがえったとき、国民思想がその後長く荒廃の一途をたどったことを見ればよい。当時は立派な明治憲法、教育勅語、相応の軍隊があった時である。つまり国民思想の問題は思想の問題として、真剣に辛棒強く取り組むことを怠つたため、このことはまた現下の事態に対する急務なのである。

聖徳太子の憲法十七条に「十五に曰く、私に背(そむ)きて公に向かうは是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨(うらみ)あり、憾(うらみ)あれば必ず同せず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ」のお言葉がある。ここにいわれる同ずるとは、人と心を共にすること。心から共鳴して共に行なう意と解する。恨と憾は心のわだかまり、執着、先入観、固定概念さらには怨、不平不満などを示しておられると思えてならない。私一恨、憾一同せず——公を妨ぐ。太子はこれらを一連のものとして掌握され、人間内奥の心理を取り出して一気に述べられた感じである。ことに、同ずることがなければ、

国家、国民生活の基本にたがうと、直ちに指摘されている。太子は十五條冒頭に、私に背きて公に向かえと述べられた。背きてのお言葉の中に、私を否定されずに徹底的に見つめられ、時代、人心を身をもって統轄された深い人生体験に基づかれて、太子自らが人と心を同じくされようとするなみなみならぬ念願とその迫力を感じる。己れの心を偽らず、わがまま勝手に付和雷同することなく、まことに心を同じくする方途をズバリと言いつ現わされたと思う。「同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ」に続いて「憾起これば即ち制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか」と迷って十五條を結ばれる。

人と心を共にする、そのように努める、それが人本来の姿だと、太子は教えられているように思う。この心組みがあつてはじめて、記紀万葉の躍動する精神に触れ、天皇を中心とする長いわが国の歴史を、正しくたどることができよう。文化とはこのようなものである。日本民族が事に当たって、総力をあげて国を護る力の根源もここにありと思う。すべての精神的所産を、経済生活の反映とみるマルキシズム流の見方が、立ち入る余地はないのだ。それにもかかわらず、戦後の唯物史観の横行は目にあまるものがある。われわれは、たとえば次の近衛元首相の日記の一節に見られるような、歴史の重要な断面を素直に受け止め、現代に処したいと思う。

終戦後間もなく自害した近衛元首相の日記が、昨年末東京都内で発見された。近衛公が即時停戦を働きかけた意図と結果は、おおむね明らかになってきたところだが、同公が昭和十九年六月のサイパン島玉砕を機に、敗戦必至とみて木戸内府に渡した停戦に関する考えの全文が、同年七月二日の日記に記されている。その中で次の通り述べている。

目次	
背私向公の道を進もう	浜田収 二郎 (1)
人間最高の宗教	奥田 克己 (2)
白鳥の記	桑原 暁一 (2)
美しい便り	長内 俊平 (3)
元旦隨想	高木 尚一 (4)
「大学の自治」に関する一資料	資料 (5)
青年の思想	古川 修 (6)
☆短歌	白井伝・広瀬誠・丸山行雄

「：我共産党も未だ結成せられざるも、左翼分子はあらゆる方面に潜在し、いせり来るべき敗戦を機会に革命を扇動せんとしつゝあり。(中略)故に敗戦必至と見らるる場合、見込みなき戦争を継続することは、国体護持の上より見て最危険といわざるべからず。即ち時停戦はこの意味において緊要事なり」

かと銘記すべきである。進歩的文化人らがこのような事実を離れ過去の全面否定による変革論をほしきままに、今は経済的太平ムードの空白に乗じて飽くことを知らず説き回っている。われわれはこ

☆新春談話☆

人間最高の宗教

奥田 克己

先頃来日した英国の歴史家トインビーは伊勢神宮に参拝して、これこそ人間最高の宗教であると感歎したそうである。彼はまた日本神道は宗教ではないともいったそうである。この二つの言葉は一見矛盾するようであるが、後者はレリジョンの訳字で、前者はもっと広い意味の教である。元来日本では宗とする教が宗教であったのに、今ではレリジョンの意味で用いられているのである。それはそれとして、外国人がここまで気付いたことはすばらしい意見である。日本の学者でさえ神道をそこまで理解している人が果して幾人あるであろうか。日本の学者は日本のことを学ぶにも外国人から教わらなければ安心しないから、彼の一言は日本の学者にとっても良い刺激になることだろう。さてここでは彼の言葉を私なりに解釈して、どうしてそのような結論になるかを述べて見たい。

れに真つ向かう反対する。われわれは理非曲直を明らかにしつつ、心を尽くして背私向公の道をひたすらに進みたいと思ふ。

(共同通信編集局付 浜田取二郎)

くあるべきだという結論が得られたかのような言説を耳にするが、科学からそのような結論が導かれるはずはないのである。そのような結論を得るためには、先ず人間とはどんなものであるかを究めなければならぬ。それは科学では不可能なことである。何となれば科学はすべての外界の事象を客観的に観察して、その間に成立している法則性を発見することであって、観察者自身の主観に立ち入ることとはできないからである。眼は外界の事象を見ることはできるが、眼自身を見ることはできないのと同様に、だから科学智識は楯の一面であって、他の一面すなわち心を心の内側からそのいた智識が必要になって来る。そこに宗教などが登場して来る余地が残されているのであるが、先ず西洋で宗教と呼ばれているものは、自然を超越した自由意志をもつ人格神の存在を信じ、人間がこれと交渉をもつことであるといつても大過はないであろう。もしそうだとすると、これは根本的に自然科学と両立し難いものである。現代の物理学では物質もエネルギーもすべて、絶えず生滅する数種類の素粒子に帰着し、宇宙のあらゆる現象はすべて素粒子の内在的性質に従って必然的に経過しているのであって、人間の大脳の作用といえども例外ではなく、そこに精神とか靈魂とかの、素粒子以外の一切の力の介入を許さないのである。それ故超自然の人格神を信ずる宗教はすべて人間最高の宗教としては失格である。ところ

が神道の神はそれと異り、かつて実在した人物である。本来日本語のカミは尊敬すべき人物の意味であったのに、ゴッドの訳字を神としたために、ゴッドとカミとが混線し、日本人までが間違つてしまったのは遺憾の極みである。しかし日本の内部にもかなり古くから、日本のカミを超自然の人格神に祭り上げようとする思想があったことは事実であり、高天原青空説のごときは明かにその部類である。現に宗派神道と呼ばれるものは、いづれも本来の神社神道にレリジョンの衣をかぶせたものであって、これらは人間最高の宗教としては失格である。ところが故人の面影を偲ぶということとは、これは少しも科学と矛盾することではない。過ぎし大戦の際に祖国の難に殉じた友人知己の面影が今なおありありと胸に浮び、常に吾々を慰め励ましてくれているということは、故人が吾々の心の中に実在しているからである。このことは科学の対象としての楯の一面のことではないが、他の一面における真実であって科学と少しも矛盾しない。神社に参詣することは祭神である故人の人格を思い浮べ、お逢いたような気持ちで対話を交わすことによつて心を清め決意を新たにすることである。天祐神助ということも、もし神が超自然の力を發揮して風雨を起したりなどすると考えると、これは明かにレリジョンであるが、そうではなくて神が人の心の中に内在して鼓舞激励してくれんと考えることは立派に科学と両立することである。この意味で本来の日本神道のすなわち神社神道はレリジョンの意味の宗教ではないのである。然るに終戦後占領軍司令官は宗教すなわちレリジョンであるといふ西洋流の思想に基づいて、憲法の信教の自由を楯として、神社に對

する国家の庇護を徹底的に禁圧したのである。それがために伊勢神宮や靖国神社の祭祀にさえ国費を用いることができなかったのである。これは日本人の魂の生き残つてゐる吾々にとっては到底我慢のできないことである。日本の学者の中にも一人位は神道は宗教でないことを敢然と主張する者が居てもよさうなものである。それ処か文部省は靖という字を漢字制限で切つてしまった。やすしと書けという限で切つてしまった。やすしと書けと書けるだろうか。この際心あるものが相携えて決起し、世論の喚起につとめようではないか。

(工学博士・明星大学教授)

白鳥の記

桑原 暁一

ぼくはこれまでヤマトタケルノミコトを日本の英雄、例えは源義経、楠正成、西郷隆盛などのプロトタイプとだけ考えていた。ところが最近ヤマトタケル伝は聖徳太子伝のいわば種根(いひ言葉)が出て来た(い)ではないか、と思いついた。そのきっかけは書記の次の記事である。

(日本武尊)既にして能褒野に崩れま

す。時に年卅。……より伊勢国(い)の能褒野陵に葬(か)まつる。時に日本武尊、白鳥に化(か)りて陵より出でて、倭の国を指して飛ぶ。群臣等因(よ)りて以てそのひとぎを開きて視れば、明衣空しく留まりて屍骨なし。ここに使者を遣して白鳥を追ひ尋ねれば、すなわち倭の琴原(ことば)に停まれり。よりてその処に陵を造る。白鳥また飛びて河内に至りて旧市邑に留ま。またその処に陵を作る。かれ時の人、この三陵を名づけて白鳥陵といふ。しかれど

も遂に高く翔りて天に上りき。いたづらに衣冠を葬しまつる。因りて功名を録へむと欲す。ここに「明衣空しく留まりて屍骨なし」とあるのは、太子にかかわる片岡山の飢人の記事を思いあわせせる。こちらには

使者還り来て曰く、墓所に到りて視れば、封埋動かす。すなわち開けて屍骨を見れば、既に空しくなりたり。ただ衣物置みてひつぎの上に置きけり。

とあるのである。この二つの記事は酷似してはいないか。むろんヤマトタケル伝と聖徳太子伝とは異質の世界である。にもかかわらずそこに自然呼応するものがある。ちょうどハニワと推古仏とは異質でありながら、ハニワの高貴と清醇とが推古仏に生かされているのに似ている。「わがこころ、恒は虚より翔り行かむと思ひつるに、いま吾が足え歩まず」(「古事記」という痛恨は白鳥となつて虚空を翔けざるをえなかつた。この虚空飛翔の精神は、低俗の現実を超える空観となつて片岡山伝説にもいきついているかと思われ。

それだけではない。オトタチバナヒメのヤマトタケルノミコトへの献身は、ホキキミノイラツメの太子への献身となつて、真実なるもの実在のしるしとなつた。イラツメは、み病の床に臥した太子を看とりつつ、心労のあまり、太子に先立つて亡くなったのである。思ひつめた愛恋の典型がここにある。それは、わが民族のいのちである。ミコトの薨逝を知られた后たち、み子たちは馳けつけた。そして今は白鳥と化したミコトのあとを、よるめきながら追いつづけた。それは太子の場合に国中の人々をとらえた

深い悲しみを、后たち、み子たちにしぼってあらわしていると思われる。

太子の陵は河内の磯長にある。ちょうどヤマトタケルノミコトの白鳥陵の所在地である。書紀は旧市邑と云っているが、古事記には志幾とある。広く云えば志幾、狭く云えば旧市で、別々のところではないであらう。と宣長は云っている。

太子の父帝用明天皇の陵もここにあるし、天皇の異母兄敏達天皇の、またその母後の陵もここにある。欽明天皇の崩ぜられたあと、なぜか旧市でモガリされている。(モガリとは葬儀のことであらうか。)

そして任那を亡ぼして天皇を痛憤させた新羅は弔問使をこの地に差遣している。安閑天皇の陵もこの旧市にある。一々は記さないが、記さぬわけにはいかないのは、ミコトのみ子である仲哀天皇の陵が、河内の惠賀の長川にあることである。さらに天皇のみ子応神天皇の陵が、河内の惠賀の衰伏にあることである。いうまでもなく仲哀天皇のあと歴代はヤマトタケルノミコトの血脈であり、太子もまたそれから外れるものではない。

してみれば太子とミコトとの間は遠いようで実は近いのである。ミコトはおそらく太子のお心のなかに力づくよき生きていたのではなからうか。

「聖徳太子」の呼称は推古紀にはない、太子の薨去を異国に在つてきて悲しんで云つたことばの中に「日本の国に聖人まします。上宮豊饒皇子と曰す。まことに天にゆるされたり。玄聖の徳を以て、日本の国に生れませり。」とある。この「玄聖の徳」とあるのが「聖徳太子」という呼称のもとになつているのであらうか。いずれにせよ、この呼称は、ひとりの人間の私的呼称を超えた、普遍的

人格の呼称にはかならない。それは、イエスキリストとかシヤカムニとかいうのと同じである。ヤマトタケルの呼称がそれである。それはクマツタケルが献つたみ名である。そのことの意味するところが、太子の呼称とあわせて注意しなければならぬ。(四二・二二・十九記)

(都立千歳高等学校)

美しい便り

長内俊平

四国に参りましてから既に半歳。夢我夢中で暮しておりますうちに、この地にもようやく心識る方々を数人数へうるようになりました。今日は、そのうちの二人の方から戴きました美しいお便りを紹介させていただきます。そのうちの一つはこう綴られてあります。

「謹啓、過日は御歌一首ならびに得難い御本(註、日本への回帰第二集)を御惠贈に預り誠に有難く存じます。

聞くうちに心のおが心の統べられてあらたなる力の湧き来る覚ゆ

私は歌を創る術を知らないことをかなく存じます。戴きました御本のハニワのお歌の中から右の一首を拝借して、あのかの私の感じを表現させて頂きます。昨日も今日も戴いた本に親しませて頂いております。読書は好きですが自分でもやりきれない程遅い方でして、まだやと半分ほどです。読むうちに心のおが心の統べられて、心をゆきぶられるような感動の連続でございます。NCPに長内様のお名前と歌をみつけ驚いて所長に報告、ともに拝読させて頂きました。それから家内にも、お泊りになった宿のおばさんにもみせて、よき師とのめぐりあ

わせといふこよなき仕合せを共に喜んで貰ひました。

私は無学でありむつかしいことは分りませんが、日本を愛する心と御皇室を尊敬する気持ちだけは、人様に劣らないよう心がけてきました。三人の子供にもこの心だけは受け継いでいくことを念願して育てて頂いております。他のことには反抗しても、御皇室に關しての話だけは神妙によく聴いてくれるようです。私に出来るたった一つの報恩と心得ております。

当夜社長の訓話に、今や日本は亜細亜の大国にのし上つた。しかし世の中は一人だけ栄えることは出来ない。アジア太平洋諸国と共栄できないならばならない。これらの小国、未開発国援助といふ大きな責任と義務が課せられてゐる。皇室の御安泰と国家の発展に役立つことなら申江産業の一ツや二ツ潰したって、いじやないか。諸君も自分のことだけ考へるようなことではつまらん。常に国際的視野に立つて物を考へる人生観を持って、々とあります。

この日は私にとって心の師としての長内様にめぐり合い、そしてこの社長の下に働く仕合せとよろこびを味うことの出来た記念すべき日でございます。所長もその本読んで済んだら俺にも見せろと所望しております。

それからこれは大それた考かも知れませんが、私も和歌を詠んでみたい衝動を感じて来ました。情意の枯渴をおそれます。むつかしいことかと想像しますが、枯渴すべき情意すら私には、元々なかったかも知れませんが、それならまたそれなりに蒔いて育てる努力をしてみたいと存じます。これからの人生にうお

いを持つ唯一の道と信じます。一時の気まぐれに終らないために早速ながら手ほどきと御指導を賜りたく存じます。」
 私は、このお便りを戴きました時に、ふと山田輝彦氏が、短歌入門の講義のなかで「私は歌といふものは、言葉によるコミュニケーションが絶望的である、不可能であるといふ認識に對する、一つの果敢な闘ひであらうと思ひます。と言はれた言葉と思ひ出したのであります。と言ひますのは、山田氏のおっしゃることは、その通りと思ひますけれども、歌に劣らぬ文章もありうるといふことをこのお便りでしられたように思つたからなのでした。歌とは形式でない。問題は歌のこころの有無であり、深淺さ如何といふことなのであります。今一つのお便りは次の様なものであります。

北岳登尺即南嶺 北岳を登りつくせば即ち南嶺たり

山家俗情逆景観 山家俗情景観に逆ふあり

臨窓開胸得親朋 変に臨み胸を開き親朋たり得たり

遊雲去来無碍境 遊雲は去来す無碍の境

この二つのお便りは小生が補償交渉におもむいた折の当事者の一人であった、会社の所長さんとその所員の方から戴いたものであります。その交渉には、石鎚山脈の寒風峠を越へて行ったのであります。が、なかなか面倒な相手でありましたので、その時、小生は、少し大きな表現であります。日本人同志真心は通はぬ筈はない。どうしても分らぬ時は取組んでよい。そのため会社をやめさせられるようなことになつてもいい、何として

でも日本人同志心の通ふ国にしなければならぬとの覚悟で寒風山を越えたのでした。ところが不思議なことに、心の通ふ道がひらけまして一瞬の間にその方々と親友になり得たのでした。小生はその時困難な事案が解決したことへの喜びよりは、「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」との人生に処する確信を深めることが出来たことによる喜びが、一ぱいでありました。なき父や兄弟のみ霊また友らのみ霊の守りをうつつしく感じながら、「至誠を以て貫く」べき確信を、心深く噛みしめさせていたただきながらこの美しい便りの紹介を終ります。おそらくこの刷文が、皆様方の手に届く頃には、この新しい友と新春を寿ぎつゝ一献酌んでおることにならうかと存じます。

高知県土佐郡大川村船戸 千頭三吉
 伊東 芳男(漢詩の方分) (電源開発伊予電力所)

元旦随想

高木尚一

今年には明治百年といわれ、色々な催し事が計画されていゝが、一般の感覚が、指折り数えて丁度一〇〇年目かといつた程度で、明治時代の古い文物を回顧しなつかしむ事に終始するのでは余り意味がない。NHKでテレビ放送した大仏次郎氏原作の「三姉妹」に一貫する思想も明治維新は結局徳川幕府の権力が薩長に移つただけの事をいうだけであつて、日本民族の文化史的発展に於ける明治維新

の真義に徹する事なく永劫流転の迷路に空転する文人の思想と、それを支える思想界とが、重く日本の表面にのしかつてゐるのを感じる。
 明治時代の外来文化に對する批判撰取に對しての明治天皇の並々ならぬ御指導と御苦闘の事実は、数々の御製の中に漸く今日我等が仰ぐ事が出来るのであるが、天皇が御脚御になるまで御心痛なされた大学教育の自然科学偏重と、精神科学に於ける誤謬反逆思想は、今日に至つて、日本国中に國家に對し國民相互に對する不信感を充満せしめるに至つてゐる。

幕末の黒船四隻ははつきり視覚に訴えて日本國民を奮起させたが、今日の核戦争は電子計算機で精密に計算され乍ら、思ひもよらぬ戦略と全世界にわたる交戦圏とイデオロギーの対立をバックとして、この間に独立國家の生命を防護する為には、並々なぬ教智と不退転の決意と、自己本然の生命の自覚に徹しなければならぬ。

今年には神繩返還をめぐつて新たな国防論議が華々しくなるであらうが、日本國民は古事記のみ國生みの神話、歴代の御製と聖徳太子の御著作、山鹿孝行の中朝事実、ヴェントの民族心理学、皇漢医学の身土不二論、和辻哲郎氏の風土論等々を心読、体読し乍ら、皇室を中心に伝えられてゐる日本の文化史的使命に目覚めなければならぬ。

戦後二十年間タブを破つて国防思想を小学校教育に取り入れるとの文部大臣言明を着実に実行するにも、右の様な方法で焦らずに行う外はない。
 最近流行しているカナダ生れのマクルーハンの思想に對しては改めて論評を加えるが、産業革命以來、人類の物質的生

富山 広瀬 誠
 十二月十一日、神通荘に小田村先輩をたづねついで共に熊野神社に合宿する信和会の諸友を訪ふ吹きしまく吹雪の中を傘かしげ体すくめて急ぎて行くも
 神通の橋の欄干低くしてふぶく川づら恐ろしく見ゆ
 横なぐりふぶく吹雪をこらへつづむからだは汗ばみにけり
 向ひあへば心あかるし語ります君がことばはやはらかきかも
 語るうち雪降りやみぬ目下の白き川原に日ざしまぶしも
 白き中州青き川水雪やみてたざす光に揺らぎてあるかも
 うちつれて友訪ひゆけり雪の中に集ひます友を訪ひてゆきけり
 うづ高きぬま雪踏みこえみやしろの扉開けばよろこぶ友どち
 雪の中の暗きみ堂をとよもして迎ふる友らの笑あひすがしも
 友どちは活気あふれて白き息吐きつつ語るにわれも笑まわれぬ
 帰りゆく車のうしろにいつまでも手振る友どちまさきくありこそ

活が豊かになる反面、精神生活はますますさびしくなり、こゝに東洋に伝わる全的人間を作る教育の復活、全的人間にかへり、原始時代に復歸する精神の高揚を指向する点でアメリカを中心とする異常な反響を呼んでゐる様であるが、これを日本の企業家が企業経営にどう使えるかなどと考えるのは思い上がりであつて、この様な問題を一つ心に各人が思をひそめて考え合ひ、究明し合うのでなければならぬ。

聖徳太子の「和を以て貴しとなす」という御言葉が、三十年前先輩師友の御教示によって、私の全身に打ちこまれて以来、この御言葉は私の心身そのものとなつてしまつた様な感じがして、あらゆる事態に対しても対処し得る心構を与えていた。いた事はこの上なく有難い事である。仏祖の語句はたとえ一片一語たりとも仏のあらゝかなる身であるといつた道元の言葉は耳もとに高鳴つてゐる。原子力の威力は人間の外ばかりでなく、人間の心身の中にもひそむ事を道破されたのは生長の家の谷口雅春氏であるが、日本が世界に誇る素粒子研究所（建設費三〇〇億年間運営費五〇億、人員九〇〇人）が予算が通り乍ら学界の不和と実施計画の不備から第一年は見送りとつたといつた様な事情は、自然科学を総べる日本人の精神的威力と同胞感に於

「大学の自治」に関する一資料

（労働科学研究所維持会事務局長）

一（編集部記）ここに掲載するものは明治二十三年、時の第一高等中学校（のちの第一高等学校（現東京大学教養部））木下広治校長によって創められた寄宿寮自治のための四綱領である。この四綱領を示して、木下校長は、「諸子果して此責任を負ひ自治の精神を奮起する事あらば余は断じて寄宿寮設立の目的を達し得べきを信ず」と訴へた。これに應へて、学生二氏が起つて、「共に此責任を負ひ自ら治むることを得るの決心ありとせば宜しく速かに規約を定め、入寮の計をなさざるべからず」「諸君自ら治むるに意なきか。此絶大なる快事を取るに意なきか。校長の言を諾する勇氣なきか。余は確然校長の命を諾し自治の制に由りて自

いて欠ける一例であつて、格外の力量、過節の志氣と道元がいつた型破りの人間が出て来なければあらゆる方面が行きつまつてゐるのである。今年が苦難の年であると共に「覚醒」の年であると、一先輩はいわれた。「覚醒」とは迷夢からさめることであり、無信の迷路から頓悟入信の血路をひらく事である。年末の忘年会で友らと語り合つたのであるが、今年は特に異常なる決意を要する年なりとの予感が心中にみなきつてゐる。「国民同胞」誌上にみられる様に全国各地の友らの協力により各大学の中に国防研究会、国防研究会が統々生れつゝあるのも同じ思ひのあらわれと確信して一層の前進を誓うものである。

ら治め互に戒めて誓て寄宿舎を維持せん事を欲するなり」とその制度を欣諾して、これに輝かしい学寮自治の制がはじめられたことを示してゐる。この資料については、昨十二月、東京八日会（都下各大学生の会）並びに富士大学信和会が主催したそれらの研修会宿で、本会理事長小田村寅二郎氏が、大学の自治と学生運動、或いは学生の自治と題して講義を行った際に用意されたものである。学生運動もしくは学生の政治運動は、学生の自治活動から発してゐるかのやうに理解されてゐるが果してさうか。大学教官達の政治的活動の根柢には、学園の自由を守るためにといふ名分があり、

そのために大学の自治は昌されてはならないといふ主張があるが一体自治とは何であるか。一小田村理事長は、自治と自治権を混同しては行かないと指摘して講義を進められた。一自治とは自ら治めるといふことで、非常に厳しく内省的なもので、責任と義務を伴ふもの、一方自治権とは権利的なものである。新聞記者や大学教官、学生達の言つてゐる自治は一体どつちなのであらうか。学園の自由を探索するために大学の自治がある、といふ場合、その「自治」は政治的圧力に屈せず、命をかけてもそれを排除して自分の学園の真理は曲げないといふ、義務的責任的なものをいふのかそれとも、国家権力といふ一つの力かたまった政治機関の行政権力があつて、その影響を少しでも受けては学園の自由は成り立たない、だから文部省に対して（大学が行政のタテの秩序の中にある事は百も承知してゐながら）内容については何も口を出させないぞといふ権利的要求的の自治であるのか。残念ながら後者の意味が多数である。かういふ教官の主張のもとは大学の自治と学生の自治は対等であるといふ学生の主張は少しも無理ではない。何故なら、教官が文部省に主張してゐる事と、学生が大学に主張してゐる事とは同質のものであるからだ。自ら治める「自治」といふことを、日本では大学及び学生はどう考へてきたか。発生事実を調べてみると、決してふんどつたといふものではない。学校と学生との間には、緊密な信頼感と心の節操があつた。これに見られる四綱領の中に……の念を起し、情を起し、心を起し、とある努力の要請と、それに應へて、その責任を負はうと決心した両者の触れ合ひも特に注目したいと思ふ。

第一高等学校寄宿寮自治制に関する資料

明治二十三年二月二十四日

木下 広次校長

四綱領

- 一、自重ノ念ヲ起シ廉恥ノ心ヲ養成スル事
- 二、親愛ノ情ヲ起シ共同ノ風ヲ養成スル事
- 三、辞讓ノ心ヲ起シ静肅ノ習慣ヲ養成スル事
- 四、衛生ニ注意シ清潔ノ習慣ヲ養成スル事

夫れ廉恥の心は人の人たる特徴にして若し此心なかりせば人の禽獣に異る所以のもの幾んど希なり。公共の心は社会を組織し国家を維持する要素にして若し此心なかりせば社会は一日も存立する事能はず、国家は瞬時も維持する事能はざるなり。此の廉恥の心は自重の念より発し、公共の心は親愛の情より出づ、人々に貴きものある事を知り其名譽品格を失はざらん事を勉むればこそ廉恥の心も生ずるなれ。若し自暴自棄して鄙陋（いやしい意）の地に甘んずるが如き事あらば何を以てか廉恥の心を生ずる事あらんや、人々相親愛するはこそ同情の感をも起し犠牲の念も生ずるなれ。若し常に相敵視する事あらば何に由りてか公共の心を起すことあらんや。……人相集りて団体を作し切磋砥礪の益を求めんとするには静肅の習慣を養成せざる可からず。此習慣を養成して一致団結の美風を起さんが為には人々互に遜讓する所なきべからず。若し夫れ自ら肆に人に譲る事なくんば何を以てか寮内の静肅を保つを得んや。寮内の静肅を保つ事能はずんば何を以てか一致団結の美風を起し切磋砥礪の益を求むる事を得んや。……（四綱領）之を以て寄宿寮の綱領とな

す。凡そ我寄宿寮に入る者は必ず此綱領を奉載し此自制を達する事を勉めざる可からざるなり。今此目的を達せんが為には区々たる規則に依頼し、或は管理者の手を借りて能ふべきに非ず、必ず諸子が地位と責任を思ひ自ら治めんとする精神を奮起し朋友の間・相切嗟して互に警戒する所あるに由らざる可からざるなり。夫我寮は全国五高等中学の首に位し世間に尊敬せらるゝ事他校の比に非ず。余は充分なる信用を諸子に置けり。諸子互に戒めて自ら治めば余は決してみだりに干渉する事を欲せず。我寮は寄宿寮規程を定めて規律の綱領を示し寄宿寮主任を置きて大体を監督せしめ、寄宿寮を置きて細務を執らしめ、会計に関する事務は会計掛に取扱はしむるに在り、寮内の規約は諸子全体の会議を以て之を定め、学校の整頓の責は諸子をして自ら之に当らしむ。之を要言すれば、従来の干渉の制を廢し諸子をして自ら治めしめんとす。諸子果して此責任を負ひ自治の精神を奮起する事あらば余は断じて寄宿寮設立の目的を達し得べきを信ず。諸子夫れこれを勉めよ。

学生代表赤沼金三郎・衆にはかりて曰く

前日の寄宿舎に在りては、規則を繁鎖にし、監督を周到にし吾人待遇する事児童を待遇するが如くなりしかば吾人は常に不満を抱き吾人の行為或は児童に類するものもある尚ほ幾分の口実を存したり。然るに今我校長は吾人をして自ら治むるあらば従前の制を改めて自治の制となし、新築落成の寄宿寮を挙げて吾人自らの監督に任じ寮内一切の整頓の責は吾人をして自ら之に當らしめ、単に綱領四條を示すに止り寮内規約の編制の如きも

悉く吾人に一任すべしと言はれたり。吾人の之を語せんが為めには十分なる決心なかる可からず。若し軽々、之を語し他日自ら治むる事能はざるが如き事あらば吾人は颯然校長の前に跪き適當の規則を設け適當の役員を置きて吾人を管理せられん事を請はざるを得ず。夫れ寄宿寮を以て生徒の自治に任せ規約の編制を生徒の手に委ねたるが如きは我邦諸官立学校に於て未だ前例を見ざる所にして、今日を以て嚆矢はしめんとす。全国大中小の学校は皆足を爪立て、この結果如何にと着目すべし、全国の教育家は眼を擧げて此模様如何を望見すべし。吾人にして果して好結果を得んか、地方の高等中学も亦之に倣ひて自治の制を行ふに至るべし、若し一度覆きたりとせんか。之が規則を嚴にするも放肆に慣れたる人心を服従せしむるに足らず。不平のうづ積する所は大破裂となり、土崩瓦解して復収拾すべからず、天下大中小の指揮する所となり、天下大中小の嘲笑する所となりて止む可し、指弾や目を閉ちて之に堪ふる事を得む嘲笑や耳を掩うて之を忍ぶ事を得む、然れども一度吾人の位置を顧み我邦の将来を推測する時は決して之を忍ぶ事能はざるなり、世人が吾人に望を屬し国家が吾人を期待するは明白なる事実以下には吾人が将来世に立つ地位も亦中等以下には非るなり。吾人にして自ら治むる事能はず頭を俯して再び規則の監督を受けんとするに至れりとせんか吾人は何の面目ありて世に立つ事を得んや。斯る無気力なる青年が如何でか立憲制下の人民となり聖旨を奉載して國威を伸張し、國光を輝かす事を得んや。此時に當り斯る不体裁をなし世人に笑はれんよりは寧ろ今日に當り校長に乞ひ適當なる規則を設け適當な監督を施さん事を請ふの優

れるに如かざるなり。吾人は今共に胸襟を開きて意見を吐き確然たる答を校長に述べざる可からず。而して果して共に此責任を負ひ自ら治むることを得るの決心ありとせば宜し速かに規約を定め、入寮の計をなさざる可からず。余は徳義会を代表して此言を以て諸君に告ぐ。願はくば諸君充分に討議を尽されんことを。

岩岡保作氏起て曰く

「今吾人は自治を許さる。吾人は実に歓喜に堪へざるなり。我校生徒の気象活撥にして勇武の風に富む。今共に砥礪徳義の進修を図り自治の制を利用して放肆

青年の思想

——九大信和会二、二年生の為に最近思っていることを書きおくりました——

古川

(九州大学医局)

小林秀雄の「歴史の魂」を読んでいて、僕は自分の心が次第に躍動してくるのが不思議であった。僕は、書物を読む場合は、一頁ほど読んで心に響いてこない書物は読まないことにしている。又人の話しても、しばらく聞いておいて心に響いてこない話しか、いい加減に聞いていることが多いし、しかし、この小林氏の文章は、何度読んでも僕の心を動かす力を持っている。それは一体何故であろうか。僕はそのことを少し考えてみた。「歴史の魂」という文章は、小林氏がゼークトという人の「一軍人の思想」という本に心をうたれ、それについている」と自分の感じたことを述べている文である。別段、注釈を加えたり批判をしたりしてはいるのではない。ゼークトとい

に流るゝ事なく、徳義の点に於ても全国の諸学校に冠絶すると称せらるゝに至らば、豈に絶大の快事に非ずや。吾人の父母親戚の故郷に在りて門閭に倚り(一家の門と村の入口の門)吾人の成業の日を待たば其の感情果して如何。諸君自ら治むるに意なきか。此絶大なる快事を取るに意なきか。校長の言を諾する勇氣なきか。余は確然校長の命を諾し自治の制に由りて自ら治め互に相戒めて誓て寄宿舎を維持せん事を欲するなり。」と……自治の制を喜び校長の命を諾する事は全員同意して一人も非とするものなし。

一軍人の思想に心を動かされて、どのように自分には心を動かされたかという、その心の動きをそのまゝ言葉にしたという文章である。そうであるから、読んでみると、小林秀雄という人の躍動している心の動きというものが、自づから感じられてきて、僕の心も又、小林氏の心の動きに従って、動きはじめるのである。僕は、今迄読書というものには、知識を得る為に読むものだと思っていた。ところが、この「歴史の魂」を読んで「なるほど」と感じるところがあった。読書の喜びというものには、書物をとうして作者の躍動する心に触れ、自分の心が動きはじめて、その心の動きが、我々に喜びをもたらす、それを言うのではなからうか、と思つたのである。そう思うと、こ

のことは、単に読書ということのみでなく、我々が「生きる」ということの意味を深く考えさせていることに気付いたのである。

我々は毎日々々をまぎれもなく生きてはいる。しかし、その日々をふりかえった時、悔いのない一日であったという喜びがはたしてあるであらうか。論語に「朝聞道夕死可矣」という言葉がある。以前は、この言葉には、大変深い意味があつて僕には到底わからないものと思つていた。しかし、それ程深く考えなくとも、大変すばらしい話しを聞いた時、我々は理屈なしに深く感動することがある、その時の気持を述べているのではな

大阿蘇の嶺に

対島 白井 伝

阿蘇合宿の感想文集を贈られ一読感激おくれたはず、読後感懐二十首

あさじものみちしくくにおもほゆる
わかきとものちのかたるをきけば
わがきのつちのそこのひのひともゆる
わかきいのちをきくはうれし
萬獄もやかむおもひをしづかにもかたりつぎけるこのわかきらは
草千里ひかりしづけおほのほらひろきをごろこここにきほふる
くにおもふなほきこころのひたひたとあふるることしむねもしむがに師をとをうたをおもひてみねすとふわかきひとらをごふらくおもほゆるからくにのともつどひてあそがねゆひとつこころにもえにけらしも
やまとあふたるなつかしきかな
おものとのみちのあかしをあかあかとかかけきませしひとらおもほゆる

かろうかという気もする。深く感動するというのは、自分がその一瞬に本当に「生きていた」のだということを実感するからではなからうか。「そして、本当に「生きていた」ということを実感し得た時我々は、いつ死んでもよいという清々しい心境になるのではなからうか。「死すとも可なり」という言葉は、非常にわかりにくい言葉だと思つていたが、あまりむづかしい考えなくともよいのではないかと気がする。

それと言うのも、僕は、「一体自分は何の為に生きるのであろうか」ということを大分長い間考えつづけてきた。そして、生きるということは、将来に目的がひとすちのまことかきかねて十余年ふうせつのみちしみじみおもふ
すめろぎのみうたづしつすゆのまをことたへましとふうしをおもほゆる
たまたみつみづくかばねとおもほゆる
たまきはるいのちささげしみぶやらもみそなはしませこれのわからを
きよわかのをとめのとらねもごろによりてかたらふみゆるごとしも
ちよろづのわかきいのちゆこそりたちくのにさんがとたざらめやも
めつむればみどりにしむあそそのねゆるしるしのはたのかげになるがに
狂暴のちまたにあふるときにしもきよくしづけくゆかざらめやも
みつしほのあふるることくよびかひてやまとしまねゆおほはざらめやも
みちばんりなほとはけれどまゆあげてくのに志操とたざらめやも
わだつみのむみやうのいのちなほいきてわれはもゆかむとらおひつづ

あるからではない、何の為に生きるのかという答えがあるからではない、現在生きているというこの一瞬々々こそが「生きる」ということなのだと思つたのである。

「歴史の魂」の中で、小林氏は、「仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣」という孔子の言葉について、「理想といふやうなものに遠いところにあるのぢやない。仁については深刻高遠な性質を説くといふ様な事は空言である。仁は眼の前にあるのだと言ふのです。仁は眼の前にあるのだことは実に大事なことである。仁について深刻高遠な性質を説く時、我々は、現に今生きているという「今」という一瞬を忘れてしまつてゐる。それでは一体生きるということは何を意味するのか。今の一瞬を生きているということ、それなしには「生きる」というのではないじゃないか。仁は眼の前にあるというのには、眼の前の「今」に我々は心を尽して「生きる」しかないということである。

「〇〇思想」という思想大系が大事なものであると思われたり、いろいろなスローガンがもてはやされるのも、結局は自分の生きる答えを探し求めているにすぎない。そしてそのことは、現に今生きているというのを大事にし、現に今生きている。眼の前にある「今」という一瞬に、しみじみと自分の「生」を実感できないならば、一生生きるということとはわからないということである。「生きる」ということが将来の理想が説けようか。スローガンを叫ぶ人々の心が、いつも自分自身がどう生きてよいかのわからないうからである。生きる目的を将来に求めているからである。或いは、少し意地悪

く言うならば、スローガンを叫んでいるその瞬間に、彼らは自分の「生」を満足しているのかも知れない。何故なら、彼らも又、「今」という瞬間にしか生きることはできないからである。いかにスローガンが将来の理想であっても、生きているのは、「今」という時間だからである。それならば、何故、スローガンを叫ぶ、叫び方を工夫しないのか。そう考えはじめれば、その人はもう、スローガンというものがいかに馬鹿々々しいものであるかということが気付くであろう。「平和」ということをスローガンにして叫ぶ人達が、いかに平和を無為に過しているかということを考えてみれば、すぐにわかることである。

ゼークトという人は、スローガンというものを非常に憎んだのであつた。彼はスローガンというものが人の精神に対して一番厄介な頑固な敵だと言つてゐる。彼は、ヒンデンブルグの後にドイツの参謀総長になつた人である。そして、「一軍人の思想」という本は一九二三年に書かれたものだそうである。第一次大戦後のウイリソン大統領が提げた「平和主義」というスローガンや、ソーシャリズムというスローガンを提げたものが叫ぶ「帝国主義打倒」というスローガンに感わされないで、自分の見た現在から明瞭に判断を下しただけなのである。人が皆スローガンに感わされて、駆け出す時にちつとしていたのである。そして、ヴェルサイユ条約で十方に制限されたドイツの国防軍をじっくり訓練していったのである。小林氏はゼークトについて次の様に言つてゐる。「戦争が終つて皆んなホッとして、将来戦争をなくさなければならぬと考へ先走つてゐる時に、今やつて来た戦争の性格をちつと考へてゐただけ

なのです。たゞそれだけのことが彼を予言者にしたのだと僕は思ふ。つまり皆んな先頭をきつて駆け出した、それが皆んな途中で疲れてしまつて、遂にはちつとありあまる人が先頭を切る事になつたのであつた。予言者となるといふことがむづかしいのぢやない。将来を見るのがむづかしいのであろう、或はかういふやうな理想、希望を持つといふことは易しいことだ。けれども實際自分の眼の前にある事態のなかに将来の萌芽が、ちら／＼見えさういふ萌芽が見えるまでちつと現在の事態を眺めてゐる人が稀なのです。さういふことをゼークトがやつたに過ぎない。原理は非常に簡単だ。彼の思想が実際に打てば響くといふやうな調子を持つてゐるのも、やはりそこから生れてゐるのだ。ちつとも空想がない。」

小林氏の言うことは、現在を真剣に生きてゐる人の言葉である。空想がない。ということば、自分の眼の前にある事態の中にしか自分は生きることができないということを知つてゐるからである。我々は過去をふりかえることはできる。しかし将来を見ることはできない。いかに将来を云々しようとも一寸先きは闇である。そうであるとなつていながら、何故我々は将来を空想しようとするのであろうか。それ程に現在といふものは不安なのであろうか。不安なのは現在ではない、自分自身なのである。現在に生きることから逃げていこうとする自分の怠惰な精神が不安なのである。「今」といふ一瞬に、自分の生命を賭けてゐる人にとつて、生きるということとは、その一瞬一瞬でしかない。スポーツ選手の競技してゐる姿をみればよくわかることである。我々がスポーツの試合に何故興味を

ひかれ、フラインプレーに感動するのであろうか。僕は、先日、日本と韓国のサッカーの試合を半分ほど見た。この試合は、オリンピック出場権を争う試合というだけであつて、非常に白熱したものであつた。サッカーは、ラグビーにくらべると、多少闊達に欠けるものだと思つてゐたが、そういう先入観は美事に打破された。確かに、タックルとか、体あたりといったやうなラグビーのはげしさはないのであるが、我々の心を打つものは、むしろ決められたルールの中で、プレイヤーが最大限に自分の力を發揮してゐるという姿にある。「どうしてもつとすばやくボールをパスしないのだからか。」「もつと早く走ればよいのに。」と口では言いつつも、プレイヤーが自分の限界に挑戦して、ベストを尽してゐる姿に、深く感動してゐるのである。第三者から

見れば、「あゝすればよかつた。こうすればよかつた。」ということになるのであろうが、プレイヤーは、プレイしてゐる一瞬々に、自己の全能力を發揮してベストを尽してゐるのである。プレイするから試合の経過がわかり、結果がわかつてゐるなら、我々は試合を見ようとしなから試合の経過がわかり、結果がわかつてゐるなら、プレイヤーも又、ベストを尽してプレイするということはないであろう。しかしかういふ心配は不要なのである。どう電子計算器が発達しようとも、歴史の法則が云々されようとも、スポーツの原理は永遠に変わることはないし人間の生き方も又同じだからである。歴史といふものは、その時代々にベストを尽した人達の足跡である。プレイヤーが、試合一瞬々にベストを尽すやうに、我々も又、現在の一瞬々にベストを尽すしかない。過去の人は皆そうして生きて来たのである。そして将来も又その原理は同じなのである。試合の終つた後にプレイヤーの「技巧」をあれこれと批評することは易しい。試合の結果をとやかくいうことも易しい。しかし、自分も又、歴史といふ大きな流れの中で、一人のプレイヤーであることに気付くことは難しい。

筑後川流域を訪ねし折に

神奈川 丸山 行雄

筑後川岸に燃えたつ赤き葉の木を「はぜ」なりと友は教へぬ
見渡せば森に原野にはぜの木の赤き葉群の目に泌みて見ゆ
赤々と燃ゆるはぜの木緑なる木々にまじりてたゞに美し
筑後川流れに沿ひて上りゆけば日出の平野の急に広がる
ひろがる原野も川原も見はるかす遠山並の美しきかな
川幅は狭きまきよきて大石小き石のひしめきあひぬ
すさまじき水の力は数多き石押し流し川原うつめつ
(四十二・一二・四)

そのことに気付いてゐる人は、歴史といふ無限のプレイをじつと眺めているだけである。そして、その時代々の決められたルールの中で、自己のベストを尽してゐる人の見事なプレイに深く感動してゐるのである。常識を越えた見事なプレイに我々は、たゞ賞讃をおくるだけであるのと同じ様に、歴史の中で、自己の生命を賭けて生きていつた人達に対して我々は、その生き方を偲ぶといふ以外に何ができるというのであろうか。

小林氏の言う「歴史の本当の魂は、僕らの解釈だとか、批判だとかさういふやうなものに拒絶するところにある。……吾々の解釈、批判を拒絶して動じないものが美なのだ。……本当の美しい形といふものが、歴史のうちに、儼然としてあつて、それは解釈しようが、批判しようがびくともしない。」といふことを、我々は深く考えてみなければならぬ。小賢しい知恵で歴史をあれこれ解釈したり、批判したり、将来で云々する前に、我々は歴史のびくともしない姿をしみじみと味わつてみるべきである。そしてそれは、自分が、現在といふかけがえない時間に、自己の「一生」をしみじみと実感することもある。

小林秀雄の「歴史の魂」を読みながら僕は、我々青年の生き方が重大な危機にきていることを思つた。我々青年が生きている力を失へば、深き考えてみなければならぬのであろうか。深く考えてみなければならぬことである。

(昭和四十二年十月十八日)

編集後記 明けましておめでとうございませう。今年も諸友、諸先輩の心のこもつた文章と歌で新年号が出来たことをうれしく思つてゐます。今年も明治維新百年当時日本の危機に挺身して若くして亡くなられた多くの人達を思ふこと切なるものがあります。いま太平の世に、人間の生きたいにして長くも平年数と(その死と)、職の貴賤なく地位の上下なくその持場を生き抜く直剣と(多くの勤労者の生涯と)、また年月と遠近を超えて無限に通ひあふにぎ／＼しい(永世ともいふべき)心の世界と、それらをひきくらべかみしめてみると、なま／＼しい百年前の開発と苦闘とのつながりを思はざるをえませぬ。——君父の恩。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20号(送料別)
(送料共)年間 360円

昭和四十三年元日発表の

今上御歌を拜誦して

広瀬

誠

孝明天皇御陵

百年の昔しのびて陵ををろがみをれば春雨のふる
春ふけて雨のそぼふる池水にかじかなくなりここ泉涌寺

明治百年といはれ、いろいろ行事も執り行はれてゐるが、その明治維新直前の激動期に、身も心も砕かれ、御年三十六才といふ若さで崩御された孝明天皇を追憶する者の少ないのは残念である。孝明天皇の数々の御歌のうち元治元年の述懐「さまざまに泣きみ笑ひ語りあふも国を思ひつ民おもふため」「天が下人といふ人こころあはせよるづのことに思ふどちなれ」、慶応元年の独述懐「人しらず我が身ひとつに思ひつくす心の雲の晴るるをぞ待つ」、文久三年の書「日々日々の書につけても国民の安き文字こそ見ましくほしけれ」、水鳥多「むらがりて何を

かたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥」、これら数首の御歌を拜誦しただけで、天皇がああ激しい時代に処して、どんなに国と民のために御心を砕いて居られたかが、ひしひしと迫ってくるのである。
天皇陛下は孝明天皇御陵にまうでて、春雨そぼ降る中で、しみじみと百年の昔を回顧され、曾祖父天皇の御苦衷をしのばれたのである。
二首連作である。一首詠じ、なほ尽くせぬ思ひを第二首に詠ぜられたのである。「かじかなくなり」で切って、結句を「ここ泉涌寺」と添へられた。「ここ

泉涌寺」には深い感慨がこめられてゐる。泉涌寺は歴代天皇の御菩提で、孝明天皇の後月輪東山陵もその境内にある。古びた池のほとり、けぶるやうな春雨と蛙の声にひたりながら「ここ」、こここそは列聖御陵のある泉涌寺であると詠ぜられた。自然の風物は史的憶念によって

強く統一されて居るのである。「ここ泉涌寺」といふ結句はまことに比類のない表現である。
なほ明治天皇の明治三十六年の御歌に一月の輪のみさきまうでする袖に松の古葉もちりかかりつつ」とある。今上御歌に併せて拜誦したいと思ふのである。

秩父市秩父宮記念市民館

弟をしのぶゆかりの館にて秋ふかき日に柔道を見る

ありのままを、つくろはず、飾らず詠まれた一首である。「柔道を見る」とは日常用語そのままであるが、日常語のままであるところが、かへって新鮮に強くひびく。平凡なやうであつて平凡でない。

昭和三十三年発表の御歌に、大昭和製紙吉原工場と題して「母宮のゆかりも深きたくみ場に入りてつぶさに紙つくり見る」とある。併せて拜誦すると、弟宮・母宮の「ゆかり」の場所に深く御心をとどめておいでになることがよくわかる。

「秋ふかき日に」は文字通り秋深き日であるが、この一首を味はつて居ると、亡き弟宮を追憶せられる深い御心が、この一句にこもつて居ることが感ぜられる。深みゆく秋の日と、故人を思ふ深い心もちとがひとつにとけあつて居るのである。

「つぶさに…見る」といふ御行動はすなはち切なる追憶の御心なのである。
今上御歌には、この単純な「見る」で結ばれた作が数首ある。その無技巧・無造作の結句に天皇のお人柄がしのばれるのである。

武甲山登山口の散歩

山裾の田中の道のきぶねぎく夕くれなるにほへるを見つ

武甲山は埼玉県にある一三三六メートルの山。その山すその田中の道に咲く紅の貴船菊に目をとめられたのである。「見つ」の「つ」は完了の助動詞。「動作が完了して、その結果が存続して居ることをのべる」と文法書には説明されて

居る。ふと目にとめられた野の花の印象が、歩みを移された後も、いつまでも御心に残つてゐるのである。そして、この一首を読み味はつた者の心に、この御歌がいつまでも消えぬ印象をとどめるのである。

私の生き方

亀井孝之

とある。そして前述したように、水に船の紋をさすけられたのである。名和長年については「あやしき民」と云っている。それは正成については云っていないけれど、当時の社会通念から云えば五十歩百歩であろう。天皇と、この「あやしき民」との間に立ちふさがってわがままにふるまったものが、鎌倉幕府の片割れ・足利氏とその一味徒党であった。

正成(一族(和田・橋本を含めて))には、ほとんどすべて、その名前に正の字が付いている。正成以前の人で、この字をもつ著名人は平正盛くらいしか思い浮かばぬ。すつきりとした、よい字であるのに、あまり使われていないのである。

それで正成およびその一族がこの文字を使うのにはなにかわけがあるのではないかと考えざるをえないのである。——倭の大覚寺を創められたのは、嵯峨天皇々々正子内親王(淳和天皇々々后)である。生母は橘嘉智子である。仁明天皇は正子内親王と母を同じくする。その諱(いみな)は正良である。この諱について北畠親房は神皇正統記で「これよりさき御諱たしかならず。多くは御乳母の姓などを諱に用ひられき。是より二字たゞしくましませばのせ奉る。」とことわっている。そして親房は仁明のみ代について「わが国のさかりなりしことは、この比ほひにやありけん。」と云っているので

ある。橘氏が世の前面に出ていたのもこのときまでで、このあとは学者の家柄としてそばそと命脈を保っていた。ところで正成は、自ら橘姓を名のっていた。淡川神社蔵・法華経奥書署名)それで橘氏と大覚寺統と、二重にゆかりのある「正子」「正良」の「正」の文字を、勅許あって、用いたのではないかと臆測せられるのである。後醍醐天皇の皇子はどなたにも「良」の字が付けられている。それも「正良」にかゝわりがあるのではないか。かゝわりがあるとすれば、それは親房の進言によったのではなからうか。——四三・一・五記——

(都立千歳高校教諭)

めしたいと、ただそのためだけに命がけで海を渡るなどといふ事は馬鹿げてゐるかも知れません。しかし、自分が尊敬する人に對しては、損得など考へる事もなく尽して悔ない、といふ生き方に私は大変感銘しました。そして自分にもこれだけ慕ひ尊敬出来る人が居たらどんなによいだらうか、と考へました。

二つ目の理由は、昭和二十年八月十四日に、今上天皇が連合国への降伏の御聖断を下されて、太平洋戦争が終結したといふ事実を大学三年の時

男は友や妻や職業を自分の意志で選びますが、これは自分の生き方を選ぶ、といふことだと思ひます。そこで、私がどんな生き方をしたいと考へて、日頃生活しているかについて書いてみたいと思ひます。

といふ意志があるわけです。「天皇陛下の為に死ぬ」などと、時代離れた偉そうなことを言ふやうですが、これは私にとっては観念的な事ではなくて、具体的な事なのです。もし誰かが天皇に危書を加へてやろうと、考へて襲つてきたら、護衛官がそれを防ぐか、あるいは代りにやられるかのどちらかなのですから、実際に天皇陛下の身代りに死ぬといふ事が明日起きるかも知れない事なのです。そして、その為になら万一生命を失なふ事があつても悔はない、と大学三年の時に考へて皇宮護衛官になりました。

人間の生き方に大変感銘をしたことで麻鳥といふ人は、宮中の楽士の家に生れたのですが、崇徳天皇が退位された時に、慈悲深い天皇を慕つて、自分も宮中を辞し、崇徳上皇の御院の水守りを一生の仕事にします。水守りといふのは、院の庭に柳の水と言はれる名水が湧く井戸があり、供御や上皇の飲料に用ひられるので、いつも傍の小屋に居て、水の清浄を保つてゐる役目です。水守りとなつて十数年後に保元の乱が起り、御院は焼けて、上皇は敗れて讃岐に流刑されてしまひます。麻鳥は焼け跡に小屋を建てて、柳の水を守ることを続けるのですが、誰も上皇を訪ねる人がないと知つて、おなぐさめしたいと思ひ、命がけで四国に渡り、配所の草むらで笛を吹いて上皇をおなぐさめするのです。

客観的には、いかにこの上ない主君と仕へた人の為であつて、ただ水を濁らさないためだけに自分の大事な人生を費やしたり、得意の笛を聞かせておなぐさめしたといふ事は、ただそのために命がけで海を渡るなどといふ事は馬鹿げてゐるかも知れません。しかし、自分が尊敬する人に對しては、損得など考へる事もなく尽して悔ない、といふ生き方に私は大変感銘しました。そして自分にもこれだけ慕ひ尊敬出来る人が居たらどんなによいだらうか、と考へました。

私は皇宮護衛官を自分の一生の仕事に選びました。皇宮護衛官といふのは、天皇陛下をお護りする事が任務ですが、そのためになら死んでも悔はない、

悔はない、と考へるやうになつたのかについては二つの理由があります。一つは高校三年の時に読んだ新平家物語(吉川英治著)の中に登場する阿部麻鳥といふ

客観的には、いかにこの上ない主君と仕へた人の為であつて、ただ水を濁らさないためだけに自分の大事な人生を費やしたり、得意の笛を聞かせておなぐさめしたといふ事は、ただそのために命がけで海を渡るなどといふ事は馬鹿げてゐるかも知れません。しかし、自分が尊敬する人に對しては、損得など考へる事もなく尽して悔ない、といふ生き方に私は大変感銘しました。そして自分にもこれだけ慕ひ尊敬出来る人が居たらどんなによいだらうか、と考へました。

二つ目の理由は、昭和二十年八月十四日に、今上天皇が連合国への降伏の御聖断を下されて、太平洋戦争が終結したといふ事実を大学三年の時

今上御歌を拝して	廣瀬誠一	(1)
菊水の生き方	桑原曉之	(2)
私の品位といはゆる生活について	龜井孝之	(3)
偽者はゆるせない	三宅将之	(4)
九大における不法占拠をめぐって	田村潔水	(5)
国文研相続体制の樹立について	信和壽	(6)
	沢村壽	(7)
	孫	(8)

ふから、この際先方の申入れを受諾してよいと考へる。どうか、皆もさう考へてもらひたい。さらに陸海軍の将兵にとって武装の解除なり保障占領といふやうなことは、まことに堪へたいことで、その心境は私にはよくわかる。しかし自分はいかにならうとも、万民の生命を助けたい。この上戦争を続けては結局、我が国が全く焦土となり、万民にこれ以上苦惱をなめさせることは、私として実に忍び難い。祖宗の靈にお応へできない。和平の手段によるとしても、素より先方の遣り方に全幅の信頼をおき難いのは当然であるが、日本が全く無くなるといふ結果にくらべて、少しでも種子が残りさへすれば、さらにまた復興といふ光明も考へられる。私は明治大帝が涙をのんで思ひ切られたる三国干渉当時の御苦衷をしるが、この際耐へ難きを耐へ、忍び難きを忍び、一致協力、将来の回復に立ち直りたいと思ふ。」(藤田尚徳著「侍従長の回想」から抜き書き)と申されたといふ事を知って、私は涙をこらへられませんでした。そして、この立派な天皇陛下がをられたからこそ今日自分達は生きてゐられるのだ、と考へ、天皇陛下の爲になら、死んでも悔はないと考へたのです。

それでは実際に天皇及び天皇制に反感を持つ人が天皇陛下に危害を加へようとするだらうか、と言ひますと、私はそんな日本人はゐないと考へてをります。ただし、正常な精神の持ち主ばかりであれば、といふ条件が付きます。つまり世の中にゐる気遣ひやノイローゼの人もたくさんゐるのですから、中に一人ぐらいは馬鹿な氣を起さないとも限らないのです。ですから、もし「君は一生の間に起らないかもしれない事に人生の意義を見出し得るのか」と言はれるなら、私はさうだと答へます。これが一回目の人生です。

二回目の人生は国民生活です。私の両親にとつては私がどんな人間になつても息子でしかないのですから、私の妻にとつては夫でしかないのですから、子として夫として、父として、友人としての人生を、人の道にはづれないやうに生きて、一人の国民として国に尽したいと考へてゐます。国に尽すといふのはどういふ意味かと申しますと、国は一人一人の国民によつて成り立つてゐるのですから、たとへば一人だけがいゝ加減な生き方をしても、その分だけ日本といふ国がくずれやすくやつてしまふわけですから、そこをいゝ加減な生活をしていゝやうに心掛けて毎日を送ることによつて、国に尽す事になると考へるのです。

誰でも職業と家庭を持つてゐるのだから、この二つは一回の人生に当然含まれてゐるものだと考へる人ももちろんあります。確かにさうでせうが、近頃のやうに、罪を犯した少年を調べてみたら、親が相当な地位にある家庭に育つてゐて、何も生活にこまつてやつたのではないといふことが多いのは、その親が職場に於ては立派でも家庭生活は全然だめといふことで、この人は国民生活を持つてゐない、といふことになると思ひます。

車中にて(十二月二十九日)

東京 沢部 寿孫

仕事終へあはたゞしくも走り来て乗ればたちまち汽車走り出づ
今頃はいかにいますかたちちねの母はさぞかし待ち給ふらむ
今日も又こがまし受けてたらちねの母は畑に働きましか
ふるさとを思ふ心はいやまさる刻一刻と汽車近づくに
水底の石あざやかに見ゆるまで澄みたる海のほになつかし

全体の責任として採上げるべきではないか」と書いてをられますが、私は全く同感です。

以上書いてまゐりました四回の人生は、私にとりましては一つのものなのです。ですから、四回生きるのでからその一回ずつは私の人生の四分の一なのかいふと、さうではなくどれも四分の四なのです。数学なら四分の四の四倍は四になります、私の人生では一になるのです。

人間の品位といはゆる「生活」について

三宅将之

現代英国にあって健筆をふるっているコリン・ウィルソンが、若冠二十七才の時、彼の評論の第二作として書いた「宗教と反抗人」の第二部序論で、彼は自分の立場は、「反ヒューマニズムである。ヒューマニズムとは何か。それは次のルソーの一文に要約される。『人間は自由になれ、自由は抑えられぬ。』」にも拘らずあらゆる所で鎖につながれてゐる。『拙著「アウトサイダー」』(彼の処女出版の本の題名で二十五才の筆になるもの。英国はもろろん世界中で注目をあび、日本では福田恆存、中村保男共訳で紀国屋書店から出版されてゐる。)の目的はほかでもない、この一文がたわごとになすぢぬのを証明することにある。人間は自由なものとして生まれ出はしない。社会的自由の喪失なぞよりも遙かに人の品位を落とし、志気を沮喪させる鎖につながれて生まれて来るのだ。それは倦怠と徒勞の鎖である。人間に目的を与へ、人間自身の無目的性から人間を救ひ出して、無目的の紀律なくしては人間は無なるのだ。

四生尽国などと、力もない無名の一国民が言ふのは、大変思ひ上つたことかもしれないが、自分は何の為に死ねるだらうかと考へてみたとき、両親や妻子の為に死なるといふ自然の感情の他に、自分が生きたいと思ふ人生の為なら死んでも悔はないと感じるのです。私は日頃かういふ生き方、すなはち死に方をしたいと考へて生きてをります。

(皇宮護衛官)

と言つてゐるが、この言葉が自分を強く打つたのは、外でもない世界史上未曾有の何れの国も経験したことのないほどの社会的自由を享受してゐる現在の日本に於て、まさにこの一言は、その真を突いてゐるといふことがうしたのだ。敗戦により焼土と化した祖国の物的面の再建には、我々は日夜励んで来た。さうして気がついた時には、絶大な社会的自由と経済的繁栄を獲得してゐた。が同時に、人間自身の無目的性から人間を救ひだしてくる全ての価値、目的、紀律を振り捨ててしまつてゐた。

とも十九世紀の末までは、それまでの英帝国を支へて来た精神のよつて立つべき価値といつたものがまだ生きてゐたやうだ。然るに今世紀に入るやWBイエイツの「二度目の到来」といふ勝れた詩で示されてゐるやうに、

万事がばらばらになり、持ちこたえる中心がない。ただ混乱だけが世界にのさばつてゐる。

といった価値観の喪失を見るやうになる。そのやうな状況の下に置かれると人間は、自己を超越すべき方向を見失なつてしまひ、日常の単なる「生活」に埋没してしまふ者は別として、少しでも人間の間たる由縁を求める者は面くらつてしまふ。何か自分の生き方には一本足りない所があると思ひながらも、ずるずると単なる「生活」のレベルで日々を送つてしまふやうになる者も出て来る。

米國に生まれ恰度このやうな英國に帰化した詩人、T・Sエリオットは彼の未完の詩片の一つの中で、スウィーニーといふ人物をして、

出生と交合、そして死
つきつめてみれば、それだけのことだ
出生と交合、そして死
俺は生まれてきた。一度でもうたくさん……

と言はれてゐるが、生物学的次元で人間の生命を具体的につきつめてみれば人生は無意味である。日常的生活に埋没した人生は、つきつめてみれば生物学的レベルでの生命の消耗なのだ。「社会的自由の喪失なぞよりも遙かに人の品位を落とし、志気を沮喪させる鎖につながれて生まれて来るのだ」と言ふ所以だ。

人間は、人間の無目的性から人間を救つてくれる目的を現に持つてゐるではないかといふ反論も出よう。なるほど学生は受験勉強に勤しみ、できるだけ良い学校に入学し、卒業してはできるだけ良い会社に入り、青年は美人を求め、壮年は家族を養ひ、できるだけ早く要職につき多額の退職金を得、定年退職後は、庭いじりをし、釣を楽しむといふ目的を持つてゐる。

しかし、かういつた人生をたどつたあかつきに、果して何人がスウィーニーとどれだけ異つた感慨を持つだらうか。

我々は嘗て「國を守れ」とテロを実行し自らは自決して果てた十七才の少年を知つてゐる。またそれと相前後して、彼等の主観に於ては同じく「國を守る」といふことで集団暴力をも辞さない一連の学生運動を見てきてゐる。少なくとも彼等の人生の目標は、自分一個の単なる生活を固く守る徒輩のそれとは異つてゐる。ところが彼等を批判する人々の態度はきまつて「民主主義を守れ」を題目のやうに繰返すのみであつた。これは単なる思想のズレ違ひよりもっと深い所に原因があることを示し、折角の批判も全く隔靴搔痒の感をまぬかれない。即ち両者の間にある「生命」そのものの把握に大きな隔りがあるからである。批判される側の者達にとつては、人生の出发点に於て、既に単なる「生活」の中で倦怠と徒勞によつて一刻一刻と虫喰されて行く自らの生命が強烈に意識されてゐるのだ。彼等は真の意味での「生命」との出合ひを求めその声の語りかけて来るであらう方向をあてどなく探し求めて彷徨してゐるのである。彼らに、人間の品位と志気の振起を促す目的と目標を提示することは彼らと同じく、単なる「生活」を憎み真の「生命」の声を聞かうとする者でなければできない。

一片の権威を振りかざし、その下に集

治は周囲の人達への自己主張にも、身体を動かす実地行動あるいは文章によるアピールにもなりましようが大切なことはその実行だと信じます。自分だけあるいは数人の友を得て偽者カッパにだまされるなど頑張っていても多勢の正直者は次々に偽者ガツパに河へ引きずり込まれていくのです。

さて「勇氣ある友」と云ってきた「友」は実は簡単に「あたりまえの友」と云うべきでしょう。「勇氣ある友」即ち「あたりまえの友」は集まりにくく、集まろうとしません。しかし「あたりまえの友」をより多勢の人に理解してもらうのと同時に偽者退治を完遂するには「あたりまえの友」が力を合わせねばなりません。いつも自己を厳しく見つめて生き行きしかも「あたりまえの行為」を実行するには友が必要です。そして一人でもよいから「あたりまえの行為」を友行して行くことはあたりまえで、必ず友は得られます。「あたりまえの友」と力を合わせ「あたりまえの行為」を実地にやっ行ってこうではありませんか。

九大における不法占拠をめぐって

— 九大信和会の活動 —

九大では一月十日前後、三派系学生の教養部占拠がほぼ確実となり、学内の活動が動き始めると周囲は急に騒然となった。このような中で、われわれ九大信和会は、一部の政治活動家によって動かされている現在の自治会、及び全学生に対しての反省を促すべく、十二日に掲示板にほぼ次のような主張を発表し同文のビラを学内に配布して運動を進めた。

「大学と学生の関係は、誓約と許可」

の関係であるから、学生自治会が労働運動の如く力関係によって現実を自己に有利なしめんとするような運動は許されないと、大学の自治とは大学当局の管理のもので、学生と学生という、教育者と被教育者との信頼関係に基づいていなければならぬ。学生が政治を批判することは、当然あってよいが、その行動が今回のごとく、学内不法占拠や全学ストライキなどに至っては決して看過できぬ。学生という名に甘えて、それがあたかも社会的な特権であるがごとく学生運動は根本から改めねばならぬ。」

十三日には、教養部一〇五番教室に於て、九大生長の家主権、九大信和会後援による国文研理事小柳陽太郎先生の講演会が開かれた。先生は「祖国を守る道」と題して話されたが内容は後掲の通りである。表では学生集会やデモが行われ盛んにスピーカーの鳴りひびく中で、百名余りの学生が外部とは対照的に静かに真剣に講演に聞き入っていた。

十七日には再び掲示を出して一般学生の自重を求め、いまとなっては学生一人一人が学園を混迷から救うべく立ち上る以外にはないと訴えた。この日は、三派系全学連はすでに第一回の佐世保デモに出発したあとであったが、掲示板の前には多数の学生が足をたどめ、我々に質問をあげせかけける学生も多かった。今回の九大占拠、佐世保斗争事件を通じ、我々としては一応できる限りの努力はしたつもりだが、その間に自らの不勉強を痛感することが実に多かつた。現在一応の波はおさまったものの今後事態はさらに深刻の度を加えるであろう。しかしわれわれに残された道は学園のあり方をもっと本質的に、もっと真剣に考えて、学園の混迷をそのもっとも深いところから打開

する以外にないのである。

九大教養部一〇五番教室における小柳陽太郎先生講演の要旨

— 祖国を守る道 —

現在の学生は、物考える時に固定された観念でがんじがらめに縛りつけられているように思われる。だが学園というものは、自分達をしぼりつけている観念を解きほぐすことから出発しなければならぬ、一十一日である。だが、学園は果してその答がすべなるのかという素朴な疑問から、すなわち大前提から考え直そうとすることから始められるものだ。「米帝国主義は云々」という言葉が盛に使われるが、そこには米は資本主義だ、資本主義は戦争を起す、戦争は悪だから米は今ベトナムで帝国主義的侵略という悪事を働いている、という構図が始めから何の疑もなく出来て了っているのだ。しかし僕達は、資本主義は必然的に戦争を起すものなのか、戦争は、簡単に悪と呼んで片付くものなのかという所に問題を発すべきだろう。

事柄が全て善悪どちらかにしか見えないうのは、子供が三原色だけを使って絵を書いて満足しているのに似ている。自然は無限の色どりで満ちていることは誰しも知っている。木々を描くのに緑一色を使っただけで満足する人はいないだろう。そのくせ戦争の問題になった途端に善悪の二色しか見えなくなると、その間にひしめきあっている様々の色どりには何も感じなくなるのだ。物事を大前提から考え直し、そこにある無限の色どりを感ずるところに真の自由がある。かかる心の働きを見失った者に、どうして本当の自由が確保できよう。

勿論、アメリカにもエゴイズムはあろう。しかしエゴはソ連にもあろうし、中共にもベトナムにも日本にもある。いやエゴを否定し非難している我々の内心にこそエゴが秘んで置けることを忘れてはならない。世の中はエゴとエゴがひしめきあっているという事実を見逃して世界情勢を語ることはできない。そういう現実から目をそらすために、人々は日米安保条約を非難しながら、その前年(一九五〇年)にとりきめられた中ソ友好同盟についての目をつぶつておいてはいない。この同盟は露骨に日本を仮想敵国として締結されている。それを放っておいて人々はなぜ安保条約だけを責めねばならないのか。エンタープライズ号の入港に反対するなら、日本海にはソ連の原潜が走り、提察機がいつも日本の上空に近づいていることにもはげしく抗議すべきではないか。

羽田以来の三派系全学連の動きを桜田門外の変になぞらえる俗論がある。井伊直弼がさしづめ佐藤総理で三派系全学連が水戸浪士という事になるのだがこの対比のさせ方には根本的な誤りがある。その一つは全学連には、ソ連とか中共とかの外国勢力の後援があり、それに甘えたところから、彼等の行動が生れていることだ。しかし水戸浪士はそのようなものは何もなかった。頼れるものは自分達の力だけしかない。その悲愴な覚悟が彼等にはあった。さらに彼等は井伊大老を殺さねば日本は守れないという強い確信を持っていた。だが人が人を殺すという一点は道徳的に許されぬことだった。それを破るからには破るだけの責任をとらねばならぬ。念願を果した後、彼らは全て自決又は自首をしたのである。道徳は無視しても制度を改革すればよいとし、自分

達の責任をのがれて平然としている全学連の態度は水戸浪士と比べるべくもないのだ。

徒然草の五十段にこんな話がある。京の町に鬼があらわれたという噂が広がった。人々はその鬼を見ようと大騒ぎしたが「まさしく見たりといふ人もなく、虚言と云ふ人もなし」その一匹の鬼の噂のために京の町はただ騒乱に化しただけであった。現在の我々の回りに、あるかなきか誰も正体を掴んだことのない一匹の鬼、すなわち日本の軍国主義化や米帝國主義という言葉が人々の心をいたづらに騒がせている。私をはじめに大前提から疑ってみようといったのは、この鬼の存在を知ろうということなのだ。

全学連の人々も日本を愛しているという。しかし過去の日本を軽蔑し主義を異にする人々に対するはげしい憎しみから生まれた世界、それはすでに日本ではない。人々のかなしみのはっきりと感じられる豊かな世界こそ我々の祖先が大事に伝えてきた祖国日本なのである。従って祖国を守るということは言葉をかえればこの日本的な情緒を守って行くことなのだ。われわれは、日本を守ると叫びながら無残に日本の情緒をふみにじる人々の手から真実の日本をとりもどさねばならぬ。

(九大法一田中康裕・医一小柳左門記)

国文研相統体制の樹立について

沢部 寿 孫

——(編集部註)国文研とは当会、国民文化研究会の略称である。本会の主要行事たる夏の合宿教室に参加した大学生諸君が社会人となってから、事業

の相続に具体的に加はって来たのは一昨年あたりからであった。沢部君のこの呼びかけは、二月九日から十一日まで、葉山のアサヒビル寮でこのことについて話し合はうと、約二十名の友達に向って出されたガリ刷りの書信である。

私事から書き出すことは、大変僣越ですが、私は大学卒業後大阪に三年余り勤め、今年六月に東京へ転任し、東京在住の国文研の諸先生がた、先輩たち、また八日会を通じて学生達にも、出来るだけ努力して、その方々に接するようにしております。

そうこうしているうち、論説会や大合宿の打ち合わせなどを先生がたや先輩たちがなさっておられる実態を見ておりました。国文研の諸活動の背後には、なみなみならぬ苦勞と、すばらしい献身的作業が積み重ねられており、しかもそれが長い年月に亘って継続してきつきました。ということにはじめて気がつきました。

大合宿、日韓交流、合宿記録作成、月刊国民同胞の発行、国文研シリーズの発行などの諸事業の遂行のみならずさらにそれらに匹敵するとも劣らぬ困難な資金集めなどを遂行しておられる実情を見ますと、それぞれにお仕事を持たれながらも、これだけの活動がよくも出来るものだな、とつくづく思われました。総体的にはそこに同信協力の世界の広やかさと力強さがあることを強烈に印象づけられたのですが、それを同時に、私達若いグループもこれからの先輩たちに、抽象的な掛け声や自分勝手な期待を寄せている現状を即刻脱皮して、具体的に、もっと意欲を叫んでいかねばいけない、なをいままでもポヤポヤしていたのだからとそう強く感ずるようになったのです。

三年前から大合宿の運営を上村さんを中心に担当されるようになったこと、上村さんのご決意など、改めてわかつてき

ました。そんな決意に支えられて本年の「感想文集」の編集は憚越ながら私が中心となってお引受けしたので、「感想文集」は出来上ってみれば百二十頁程の小冊子ですが、在京の同志諸君が、おのおの勤務を終えた後や日曜、祭日はほとんど連続して二人、時には五人と入れ替り、時に二、時には五と入れ替り、編集にたずさわり、やっとなか助言にこぎつけたのです。それでもその間、先生がたや先輩たちに、どんなにか助言を、いただかなければならなかつたことか、いま思いかへしてみても、自分らの決意や意欲などという主観的なものだけでは、どうにもならない未熟なことが多く、自分たちも、余程の体験を積み重ねていかななくては、一人前になることは不可能だ、とつくづく思ったことでした。と同時にこんな小さい冊子を作ることでも、とうてい一人や二人で出来ないことなのだ、どうしても、多人数で心を協せなければ、これだけのことも「いい加減な出来」になってしまうとしみじみ感じました。

私たちは、どんなに忙がしい仕事を持っていても、十の力を出す人だけでなく、110でも、120でも力を出してくださる方々の心と力を結集する方法を発見していかなくては、と痛感させられました。この課題を同志諸君に提示し、その打開策を是非とも樹立するためにご協力をお願いしたのです。

急激なる変化を遂げつつある内外の情勢の中で、地道に、たゆむことなく続けられていく国文研活動に、この際、心を定めて積極的に協力する道を見しようではありませんか。諸先生がたの御努力を何時迄も座視するとは出来ませんし、やがて年がたつては私達か、ほかの誰れかがやらねばならぬことです。祖国に対する私達の責務の重大さを考えるまでもなく、せめて「国文研の相統」くらいのことには、出来なくてはお話しもならないような気が致します。やるべきことは沢

山ありましようが、まず国文研の相統から着手、ということでも再出発しようではありませんせんか。

九州、中国、関西、東京その他の各地で、学生が、左翼思想、合理主義偏重の時流の中で、せめても心を通い合はせて、新しい学風を興そうと戦っています。各地の私たち同人が学生達の相手となることは不可能ではないと思います。やる気を起してスタートすれば、どんなにか学生たちは喜ぶことでしょう。そこから、その時点から私たちの国文研への協力のスタートを開始しようではありませんか。

さらに、ここに私ははじめ在京同人のプランとして次のように会合の計画を立てました。諸兄には、さぞかし参加を躊躇されるご事情が御ありになることと存じますが、この際はどうか乾坤一擲在京の私どもの微意をおくみとりくださって、万障お繰り合はせの上是非参加して下さいませせんか。ぜひともうれしいご返事をお待ちしております。(柳日商勤務)

編集後記 今年も元日に発表された天皇御製の全部を、広瀬兄のおかげで拝誦することが出来る。普通の大新聞には掲載されることがないからである。感謝に堪えない。▼建国記念日が近づいた。日記に記され、数千年を一貫して皇室の中に護持され、維新の時に回想された建国の因は実に実におほらか、雄大なものである。目には見えないが、いまの日本国民の中心性格もここに帰すべきものと思ふ▼ベトナムの戦闘、日本海の事件、何れも総合的国防への意志を強く湧き起させる。共産主義用語が報道面で常識的に使はれてゐる現状は、いまに始つたことではないが、この際強く憂慮される。



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

国の個性

— 権力・反権力をこえるもの —

羽田、佐世保事件に参加した学生諸君は、口々のように「国家権力と戦う」という。彼らはこの言葉に酔っているようだ。何かに反逆し、対象への抵抗感の中に生を実感するというのは一つの青春の必然でもある。反逆の対象のない時には架空のものを作り上げることさえある。彼らは機動隊とにらみ合っている時、始めて生の充実感を感じるという。それも分らぬことではない。しかし創造や献身の喜びを彼らから奪い、精神を空洞化してしまったのは一体何か。心ない思想家や学者によって、切り刻まれ、抹殺されようとした歴史の復讐ではないのか。長い強い伝統の力は、一時代の個人の好みや意志ではびくともしない生命力を持っていることに、人々はもう気づき初めてもい、のではないか。

それにしても、国家権力の打倒を叫ぶ彼らに権力についての青写真があるのだろうか。反帝、反スタというばかりで、何の具体像も持っていない。それはばかりか権力とは何ぞやという、ごく初歩の知識さえ持っていないかどうか疑わしい。人権擁護の大義名分に守られ、先ず生命の危険はないという前提のもとで、機動隊に「突撃」する。太平の世に満たされぬ、ヒロイックな悲壮感も満足できる。ヘルメットとアノラックと角材の集団。「角材は凶器ではなく手の延長である」という妙な激励をおくる教授もいる。彼らが暴走するのは当然である。

先日、NHK教育テレビで、全学連をまじえた大学生の「行動」についての放送を見た。その中で岡村昭彦氏が、ゴージェンジニム政権を倒したサイゴンの大學生たちは、皆真白なカラーをつけ、凜然とした表情で行進していた。しかし三派は皆うすよれて、衝突前からすでに死後硬直のように顔がひきつっていた。あんなことで革命など出来るかと言っていた。本当に死を覚悟していないからだという。思想的立場を全く異にするが、これは印象的な言葉であった。

ところで、権力についての専門的分析は政治学者でもない私の手におえないが、権力はそれ自身悪だとする説と、権力そのものは中性だとする説がある由である。権力そのものが悪だというのは、反体制運動の発想の根本にある思想である。しかし、人間が集団生活をする場合、全部が聖人君子でもない限り、秩序を維持するためには、最終的には物理力の行使も已むを得まい。社会主義国家の権力は、日本などは比較を絶するほど強い。それを弁護する人は、それは全人民の権力だという。だが、選挙による交替のない権力が、どれだけ民意を反映しているかは誰も測定できない。合理的な政権交替のないところでは、権力闘争という力学だけが現状を変更する唯一の契機である。

権力構造の最終的なものは物理力である。しかし、物理力だけで政治ができる筈はない。昔から権力者たちはさまざまなシンボルやコミュニケーションを使って、人為的な権威の創出に努力した。権力が外圧的に服従を強制する力なら、権威は内発的な献身をうながす心理の実在である。ブルボン王朝やロマノフ王朝は勿論、ヒットラーやスターリンが如何に人為的な権威に壮厳されていたか。そしてそれらの王や独裁者の末路が如何に悲惨であったかは歴史の語る通りである。明治天皇は崩御の三ヶ月程前と思はれる頃に次のような歌をよまれた。

惜春
あかずしてくれゆく春はあひおもふ友
にわかるるこころこそすれ

恐らくは死の予感があったのである。この切実なかなしみのどこに、威圧し、君臨し、支配する権力者の面影があるであろうか。再びは会うこともないであろう春との訣別を、君側にあってまごころを尽してくれた人々——それを「友」と表現しておられる——との別れになぞらえて、ひたすらに惜んでおられるこまやかな感情。われわれが仰いで来た天皇とは、かゝるご存在であった。天皇制、軍国主義戦争というような連想が如何に粗雑なものであるかもよく分るであろう。それは「権力」という言葉によって代表される政治とはしかに異質のものでふくんでいではないか。かつて小林秀雄氏が「天皇制の問題も単なる政治問題ではないでしょう。それは単なる政治的制度ではないからだ。日本国民という有機体の個性です。生きている個性です」といった言葉を、二十年後の今日改めてかみしめるのである。

国の個性	山田 輝彦	(1)
小田村理事長を囲む長崎懇談会	田村 潔	(2)
北山林業の山本翁を訪ねて	行武 潔	(3)
観心寺の記	桑原 暁	(4)
若い国文研グループ	沢部 寿	(5)
第二回目の集い	名越 孫	(5)
ベトナムの竖琴	荒之助	(6)

(福岡県立若松高校教諭 山田輝彦)

自治権・運動組織・天皇の問題

——小田村理事長を囲む長崎懇談会——

田村 潔

(長崎大学医学部専門課程)

二月十九日小田村先生を長崎へお迎えて長大信和会に縁のある学生二十八名と社会人十名との懇談会を催すことが出来た。小田村先生を迎えるにあたって我々学生は「立派な人格に直接触れることが出来る」と云う喜びをめいめい心に懐いていたが、その希望は十分に満たされた。しかも先生をお明で交わしたお互の言葉と先生のお教えが明日からの生き方に「実にさわやかな自信」を与えたことを参集した友の述べる感想から窺い知った。

勇氣ある友を代表して安東君(長大教育二年)は「日本の大多数の大学が直面している混沌を真に打開するためには、今自分が置かれて居る場において何を為し得るかを真剣に考え、同時に考えたことはすかさず実行する以外に方法が無い」と説いた。彼の言葉は体験から生まれたものであり、吉田松陰先生の言葉「至誠而不動者未之有也」に直結するのではなからうか。小田村先生は「至誠と云うことは、自分の一生懸命にやっていること云う主観的なことではなく、直面した当事者としての自分が為し得ることの全てを自らの責任において考えることも含む」と述べられた。そうすれば「自分の至らぬことを反省し、よりよき方法を見い出すに違いない」からである。

「学生自治」について疑問を持つ友に、小田村先生は東大寮生時代の類を見ない自治形態を説明されながら「我々の寮生当時もあきらかに寮の自治権が学生にあった。しかしその自治の運営に関して大学側は学生に人間的に全面的な信頼を寄せた。要するに相互に人間的に信じ合おうということにおいて、自から欠けることのない様にと努力した。そのことは内容的には平等と努力である。」と話された。「そう云う意味で学生の自治が発生した時点に於ては、自ら治めるといふことでは人の世話にならない精神があった。そこで現在の学生の自治を考える自治権と云うことに固執しているため自治権は大学から与えられたものだと思積する人と、大学の存在と同時に自治権が存在すると解釈する人がある。しかし両者とも間違っているのである。自治の権利は与えられたものではないはずで、自治と云う精神の理解がお互いであって、それが運営されて行く中にお互いから互いに侵さざるのを生ましめて行つたものであり、それを後から来た者が権利と名付けたのである。また天賦の人權は人間そのものにはついて居るが学生の間にだけ自治権が与えられたと云う様な思ひ上がった考えは世界中のどの学問をひもいでも出てこないはずである。」と言葉を続けられた。

一人の学生が次の様な希望を先生へ申し出た。「組織をもっている国文研を動かして学生運動の正常化を進めてほしい。」と。これをお聞きになった小田村先生は、すかさず「国文研はそのような組織作りはやらない」とお答えになり「それは左翼の運動は現在ある秩序並びに倫理を否定しそれらの制約を受けないのだから、ぶつこわしつこわしつに居ればよいのである。ぶつこわしつこわしつにかかるとは暴力が物を云うので暴力を温存するための運動方針をつらぬこうとする。従って彼らの倫理は団結であり団結だけが彼らの能力なのである。ところが日本には非常に古くからたくさんのすばらしい文化(生き方)が残っており、日本人は長い期間のうちには仏教も取り入れたし、儒教もキリスト教も取り入れたのである。色々の事をしながら世界各國の文化を日本に集めて来たのである。色々の型において日本人のもちよつたそれぞれの文化に大きく寄与している。どうしても一つにならないうちで日本の文化の深さがあり、日本人自身の多面性も生命づけられて居るのだと云える。ただ事がある時にそのばらばらに分かれた小さい単位が一つ心一つ心になつて事に当るといふことは有り得ることである。その一つ一つの事件が落着いたときは又きれいに分散する。あの明治維新を考えて見ても幕府を倒すと云う意味において随分多くの各藩の志士が結合して行つたが、一度明治維新になった後はどうしてもそこに葛藤が出来て色々のことをしているのであつて、守つて行く立場は難しいものがある。そう云うことも関連しているのだから、国文文化研究会と云う同人の小さな集りがいくら背のびをしても全国的組織になる訳がない。従つて組織と云うことには未組織の組織があつていいのではないかと考える。」と述べられた。「一番

大切なことだが組織体に頼らずに一人一人の人間が力強い者になつて行つてほしい。そして自分が居る場で何が出来るか云うことが愛国心の問題だと安東君も云われたが、その通りだと思う。ただ過信しないでほしい。また感謝の気持ちをもつて進んでもらいたい。」と云われた言葉に長崎の勇氣ある友も「はっ」と緊張させられた。

「天皇問題について現憲法第一条を解釈するとき、天皇は、平和の象徴がハトであるように日本国民の象徴としてあると解釈してよいのだろうか。」と云う学生も居た。先生は「乱暴な云い方かも知れないが、そんなことは解釈にも何にもなつていないのであつて、天皇が無くなつた時点におけるデモクラシーの立場から天皇問題を論じている恐れはないだろう。現憲法における象徴と云うものは、人間は皆平等であるにもかかわらず、人間だけは別の人だと云うことを国民が認め合つた意味が一体何なのか、それを辿つて遡源して行く努力をしなければ分からない。日本の文化を辿る以外にそれを解釈する力は生まれてこない。將來出来るであろう第三憲法の様な立場から天皇のことを論ずることはやめて頂きたい。なぜかと云うと天皇は日本だけにあるもので外国にはない。従つて日本の体験と立場とを離れては解釈の道も理解する道も全くないと思う。諸君達の祖先がなぜ天皇を大切にされたのであろうかと云うことを謙虚に自分で調べてみるという姿勢が無いから天皇論をやつてほしい。」と云うことを謙虚に自分から言つてほしい。自分達の民族が非常に古い時点に於て民族の統一と國家の統一



(懇談会々場)

を成しとげたこと云うことを諸君は喜ぶ気があるのかないのかと云うことである。その時の中心は天皇であったのだから自分は喜びたくないと思つてしまふのかどうか。

天皇を考えたときの疑問点をこの様に適確に提起されたことは我々の多数にとつて始めての経験であった。天皇を考へるとき、掘つて立つべき立場が全く天皇を否定したものであれば、天皇問題を論ずべきでないことをはつきりと我々の心にやきつけることが出来た。「歴代の天皇の御製をたどりながらなお不分明なところをその時々々の詔勅によつて確かめに行く勉強の方法をする」と天皇と云う方の人生観と云うものが非常にはつきり浮かび上がつて来る。その天皇と云う方の人生観を具体的に考えたり、自分達の人間としての心境と天皇が国事並びに国民に相對された人生姿勢と云うものとの心を味わつてみた時から、始めて天皇を論ずる資格がそこに発生すると思う。それがなければ後は全て自分の方からの推察で事をなすこととなるからどうしても突飛なところへ論点が行つてしまふ恐れがある。そこで歴代の天皇の御製をずつと

迎つて行くと、自分と云う私心ではなくて、どんな人々であろうと皆が幸福になるようにと云う事を心憂えていらつしやる御製が非常に多い。そして多勢が住んでゐる自分の国が、永遠に平和であることを祖先の神々に祈つていらつしやる方々が非常に多く、人間としては権力を背景として人の上に立つと云う姿から連想するものとは全く異質なものがそこに見

北山林業の山本翁を訪ねて

行 武 潔
(九大農学部大学生)

い出される。「小田村先生の言葉を聞いている時、動乱の世の中に生きて行く者が己が心の安らぎを何に求めることが出来るかをはつきり浮彫にすることが出来たと思う。日頃の学生生活に於てあるいは家庭生活に於て我々の心が安らかに帰するこの出来るのは、天皇の御心を全身に感ずる時ではなからうか。」

昨年の春、東京であつた学会に初めて出席、その帰りに大阪の木材市場を見学ついでに奈良まで足を伸ばし、念願の法隆寺夢殿にお詣りをした。

四月十二日期せずして救世観音菩薩ご開扉の日に法隆寺夢殿参拝

今ここに我は立ちたり大聖の政事なされしこの夢殿に
遠つ御世聖の君の祈られし夢殿なつかしこの石床の
ひじりの君の守り神てふ観音のゑみを
浮かべて吾を迎へらる

穏やかなるふみ濡られれ諸で人ら清め給ふよ光放ちつゝ
かつて聖徳太子がここで、諸人の上安かれと祈つていられたのかと思うと、なつかしい想いで胸が一杯でした。

後髪を引かれる想いで、法隆寺を立ち、明日は北山林業を見学しようと思ひ立ち翌日、帰りの汽車までの僅かの時間を利用して京都の北山林業地を訪れました。京都駅から周山行きバスに揺られる

こと約一時間、谷間にそつて左右に展開される枝払いのされた真直なスギの林にまず目が奪われました。中川村にて下車、停留所から五分程歩くとい目的の農業協同組合長の山本翁宅に着きました。山本翁はちやうど屋久島の大王スギの苗木を植え付けておられる所でした。材の良さをよく知らぬ私も、目を見張るように立派な天井板、床板、柱で出来た応接室へ案内されました。一本の床柱が三〇万円もするそうで、材のもつ真の美しさをわかつてもらおうと、見学者のためこのような立派な造りの家を建てたのだそうです。北山のみが丸太の歴史は、およそ一千年を経ているようで、一つのスギの株から毎年百本の精英樹の苗木がとれるという樹令三百年のスギをみるとときは一千年の歴史をそのまま物語っているように、その木の美しき、気高さに感無量でございました。山本翁の話によりますと、北山のみが丸太は良質の材を得ることを目的としその目的達成の

ため、次三つの事が特色としてあげられる。
一、苗木の識別、二、技術者養成、三、時期を選ぶこと、
三番目の時期とは、挿し木、枝払い、伐採、製目、乾燥などを何時するかの時、二番目の技術者養成とは人を選ぶことで、いかに優秀なスギでも枝打ちする人の心か曲がつていれば、木は人の心をそのまま表わして曲がつてしまふ。したがつて、技術者の腕と心を磨くため、五年間の技術者養成の期間を設けているとの事。一番目の苗木の識別、木は一本一本がそれぞれ個性を有しており、そのもつて生れた個性を生かすために、苗木の識別を行う。ニリツトルの種子から三万本の実生苗ができ、うち三分の一は販売価格の平均に達せず育てがいのないもの、残り三分の二が商品価値をもつ。これを如何に生かすかが問題で、苗木が三年生のときすでに将来表わす特徴を有しているようで、(三年生の実生苗がもつ皺一つにも、その木の使命が顕れておりこれらの特徴は百年たつても少しも変わらないとの事)この三年生のときに識別をする。これはどういふことかといふと、ある木は、「自分は五十年生きて床柱になる。」とか「五百年生きて床柱になる。」と己れの主張を語りかけてくる。その語りかけてくる木の心にそつて、育てていくのが一番大切な「コツ」なのだそう。枝打ち技術の奥義も実にここにあり、枝打ちによつて木の欠点を除いて精英樹を育てる。精英樹とは真善美の三つがそなわつたもので、「真」は真直ぐなことを、「善」は円いことを、「美」は内外不変であることを現わす。すなわち神そのものを現わす完全な姿である。このような木が真の「みがき丸太」とな

るといふことです。したがってこの精英樹を育てる人間が、木の心わからず、真善美々の三つが調っていなければ、木は完全なる姿をとらずまがってしまふ。木と人が一体になつて始めて真実の木が生れる。

精英樹を育てるには、まず品種の選定を行う。精英樹は一万本の実生苗中、一本の割合で生れる。これを挿し木して、親木の優れた性質をそのまま受け継ぎ育てていくのである。醜くまがつた木、役に立たぬ木は焼き捨ててしまふ。それが木のためにもなることである。一株から年に百本のスギ苗がとれるという精英樹の横に、同じく三百年を経た株スギが並んでいました。山本翁の話では、「これからとれる苗木は、皆ゆがんだ役に立たぬものばかり、切つて焼き捨てた方がよいのだが性根のゆがんだ木は、そのまま醜い姿を現わしどんなに手入れをしてもいつまでたつても直らない。素直な心の木は素直なままの姿を現わしている。木は素直であらねばならない。このことを見学者の人にわかつてほしいため、このままにしてあるのです。これは私がいうのではなく、木が私にそう語りかけてくる。」ということでした。全き姿をかけた木の横に並んで、雨にぬれながらゆがんだ姿を現わしている木が、心なしか私には、悔い改ためて涙を流しているようにみえました。山本翁は更に「日本は外国から木材を輸入しているのは間違いない。外国に木材を輸出するだけ力をもつていて、にもかかわらず、外材輸入に依存しているのは、木の心がわかる人が林業界にいないため、精英樹を見つけて出すにしている。自分はこのことにたくさん精英樹を集め、それを挿し木して増やしている。木の心がわからなくてはだめ、

観心寺の記

桑原 暁

昨春、桜の花のさかりの時分にはぼくは河内の観心寺をたずねた。そこには桜はなかったように思う。ときどき小雨の落ちる暗い日でもあつて、しめやかな空気が漂っていた。ここは楠氏の菩提所であり、正成の首塚がある。後村上天皇の行在所となつたところであり、天皇の御陵はここにある。国宝である金堂はいわゆる観心寺様式の代表的遺構である。方七間の単層入母屋造りで、それに三間の向拝が付いていて、けつして小さいものではないが、胸を張つて天空を望む、といった堂々たる構えではなくして、伏目がちに何か思いを凝らしているような、沈重な姿である。それは、この地上に存在する、最も美しいものの一つである。金堂の右手に単層の塔がある。ちょうど修理中で、四方をかこつて、屋根の上には二、三の職人の姿がちらつていて、これは正成が三重の塔を造るつもりであつたところ、高氏の叛でにわかに出陣することになつて、造りかけたままになつた、とお寺では云つてゐる。しかし金堂は正行の再建したものであることは、ほかならぬ観心寺文書にあることだ。してみれば、この塔を造りかけたのも、正成ではなくて正行である、としたほうがよさそうである。

とにかくこの金堂が六百年後の今日まで生き残つたことは不思議というほかにない。法隆寺や薬師寺三重塔は別格として、六百年以前の木造建物で今に存しているものはどのくらいあるであろうか。おそらく十指には余るまい。

この本尊の如意輪観音は、大和室生寺・摂津神呪寺のそれとともに日本三如意輪と云われ、しかも隆一のみ美しさをたえられたといわれる。弘仁・貞観期(九世紀)のものとして、ぼくも参つたとき、その拝観は許されなかつた。ところで正行は決死の出陣に當つて吉野に参り、主に今生のお暇乞いを言上したあと、如意輪堂にて、その板壁を過去張にして、一族郎従百四十三人の名字を書き連らね、その奥に、「返らじ」との歌を書き留め、「逆修のためとおぼし、各々髪を切つて投げ入れ、其の日、吉野を打出で、敵陣へとぞ向かはれる。」とある。太平記にはこれにつづけて、「師直・師泰は、淀・八幡に越年して諸國の勢を待ち調へて、河内へ向かふべしと議しけるが、楠すでに逆寄せにせんため、吉野へ参つて暇申し、今日河内の往生院に著きぬ、ときこえければ云々」とある。これによれば、正行は守眼を惜しんで、菩提所の観心寺に参るかわりに、本尊を同じくするこの如意輪寺で告別の儀をすませた、と云わねばならぬ。

であつた。和田・楠方は、赤坂・平石、八尾などに城をこしらへて、これに對した。太平記は寄せ手の畠山勢について、こんなことを云つてゐる。――

さるほどに、始めのほどこそ禁制も用ひけれ、兵、次第に疲れければ、神社仏閣に乱れ入りて、戸帳を下ろし、神社を奪ひ合ひ、狼藉手に余つて、制止に拘らず、獅子駒犬を打破つて薪とし、佛像經卷を売つて魚鳥を買ふ。前代未聞の悪行なり云々

というのである。正行逝いて十二、三年経つた時分のことである。このような、何をしでかすかわからぬ徒輩の爪牙もなぜかここ観心寺には及ばなかつた。くりかえして云う。正行の造建した観心寺が六百年後の今日に伝えられているのは不思議というほかにない。ぼくはその地に立つて、夢ではないかと疑つた。しかし、正行の電光石火のような、短い、しかし激しい生にくらべれば、六百年の歲月こそ、むしろ夢ではないか。不思議なのは、観心寺が今日まで遺つていること、そのことのほうが不思議である。岡澤先生の近著「春の雲」に――

吉野を出でて打ち向かう
飯盛山の松風に
なびくは雲か白旗か
響くは敵のときの声
と歌うと、ピリピリと電光が背骨を走るのである。

とあるのをよんで、感奮してこの一文を草した。

― 四三・二・四・節分の日 ―
(都立千歳高校教諭)

「だ。」と何度も繰り返して言われま
した。真実の木を育てることに全てを託
しきつてゐる翁の姿に心打たれ、真善美
の三つ備わった木を心ゆくまで観て下山
しました。
森林に携わるものは木の心がわかると

「若い国文研グループ」第二回目の集い

——昨年について、相続体制の樹立をはかる——

昭和三十一年の第一回霧島合宿以来、
毎年夏に九州の各地で開かれて来た合宿
教室も昨年の阿蘇合宿で第十二回を数え
た。今年の夏は奇しくも合宿発祥の地、
霧島で合宿が開かれることに決定してい
る。当初三十代の青年だった先輩会員に
よって十二年の間、合宿教室が開かれ
て来たのである。同信協力の献身あつて
はじめて為し得る事業であつた。

その間全国の学生達がこの合宿に参加
し、得難い体験をした後、社会に巣立っ
ていったが、その中から少数の者たち
が、合宿運営に加わって、後継者層を形
成していった。大ざっぱにいえば先輩ら
ちから二十年若いこの層は、時代の断層
を埋める役割も果たして来たといえよ
う。

これらの若手グループは、「若い国文
研グループ」と呼ばれてきたが、昨年の
阿蘇合宿の終了後参加者全員が書き残し
ていった感想文を「文集」に編集する作
業にも従事した。また国文研が行なつて
きた日韓学生交流事業にも協力し重要な
役割を果たすようになった。

こうした「若い国文研グループ」の形
成は、自然にできていったとはいふのも

まではいかなくとも、木は生きものであ
り、山本翁のいわれるごとく、「人と同
じく心をもち、こちらが真心尽せば、そ
のままに感応する生きものである」とこ
を忘れずにいたいものと心に強く思つた
次第です。

の、実は昨年の二月十一日前後二泊三日
間、全国から神奈川県葉山に集つてお
互いに研鑽し、お互いの決意と友情を新
たにし、その体制のままで、昨年の阿
蘇合宿に臨んだわけである。多忙な勤務
のかたわらでのそうしたお互いの努力が
「若い国文研グループ」生成の背後にあ
つたのである。

前期「会宿感想文集」の編集が終わつ
た十一月下旬ごろ、在京の若い人々が集
まつて、これからは一層結束を固くして
「国文研相続体制の樹立」を図ろうでは
ないかと申し合わせた。直ち「国文
研相続体制の樹立について」(月刊国民
同胞前号掲載)の呼びかけが全国の若い
同人に発せられ、全国各地からはそれに
呼応して力強い共鳴が寄せられた。すな
わちその目的に向かつての第一歩「第二
回葉山合宿」が決定し、約二十名の参加
のもとに、本年二月九日(金)と二月十
一日(日)、二泊三日の合宿が開催され
た。場所は昨年と同じく、澄みきった海
を目の前にした静かな環境の「朝日ビー
ル葉山寮」を借り、費用一切を人数割に
よる均分負担とした。

合宿前日の明け方に降った雪は昨年の

雪一色におおわれた「葉山合宿」をまき
まきと思ひ出させたが、合宿当日はから
りと晴れ上がった好天気となった。それぞ
れの職場でその日(九日)の勤めを終え
た足で岡山、大阪、浜松、千葉各一名、
神奈川五名、東京九名の計十七名が集り
その夜は各自の近況報告に始まり討論が
夜遅くまで続けられた。体験談をお互い
に語り合ううちに、みな職場での苦勞を
話しながら、自分というものにとらわれ
ずに職場全体のためになるにはどうした
らよいか、という問題が中心になつてい
った。

翌日午前中に行なわれた「聖徳太子の
信仰思想と日本文化創業」の輪読で、憲
法第十条の「……我独り得たりと雖も衆
に従ひて同じく挙へ」との御言葉にふれ
て、ある人はこう述べた。

私達は日常生活でもすれば心を閉ざ
しがちであるが、太子はこれをかくと戒
められ、心を尽くして他人と交わる根
本的な姿勢を忘れてはならないことを教
えておられると思う、と。それを聞いて
いた全員は、その友の述懐に深く心を留
め、さらにお互いの体験を披露し合った
のは印象的であつた。午後二時からの「
研究発表」は、参加者全員によって行な
われ一人の持ち時間三〇分の短い時間
にもかかわらず、たいへんすばらしく又楽
しいものであつた。各人が自由に選んだ
多種多様な課題を、さまざまの角度から
とらえて発表したが、その多様性にもか
かわらずお互いの意思が縦横に交流し
て、一層密接な心のつながりが生まれ
ていった。志を一つにするのが共同
研究や発表会としては、かなり理想的な
成果があげられたと自負した次第であ
る。私達が直面している沢山の問題に対
して各自がそれぞれに意志を統一してい

くことの大切さが、改めて強く認識され
た。

翌十一日朝、晴れ渡った青空の下で、
明治天皇の御製拝誦が行なわれ、引き続
き国歌と紀元節の奉祝歌を高らかに斉唱
した。これも又大変すがすがしい気持ち
であつた。

その日の午前の日程では、夏の霧島合
宿に対する各自の希望が提起され、午後
の日程では「国文研相続体制の樹立につ
いて」というこの合宿の中心問題が活発
に討論された。その結果次のような結論
が生まれた。

- 一、各地の若い国文研グループの連絡を
一層密にして今まで以上の交流をはかる
こと。
- 二、各地の大学生との交流を深め、国文
研活動の開展をはかること。
- 三、国文研の諸活動にもっと積極的に
参加し、最大限の協力を行なうこと。
- 四、共同研究を行なうこと。(在京のグ
ループでは第一テーマとして「国防につ
いて」をとり上げる。)
- 五、各地ともに輪読その他の方法で研鑽
を積むこと。

以上を決定した後、各自が別れを惜しみ
ながら、前記の決定事項の具体化を急ぎ
夏の霧島合宿での再開を誓ひ合った。

最後にお忙がしい中を合宿に参加して
下さった小田村、浜田両先生はじめ葉山
合宿にお寄せいただいた諸先輩の御心に
深謝します。又合宿に参加出来なかつた
三十有余名の諸兄の心と合宿参加者の心
が連なっていることを信じ諸兄の御健闘
を祈ります。

なお本合宿の記録は「若い国文研グ
ループ、合宿記録「第二集」として四月に
発刊予定です。

合宿参加者及び研究発表の際のテーマは

左記の通り

上村和男(鹿大33卒・千代田コンサルタント昭和史)坂東一男(長崎大36卒・アサヒビル国防について)国武忠彦(早大37卒・神奈川県翠嵐高校教諭乃木将軍について)三宅将之(岡大37卒・岡山県操山高校教諭人間の品位と「生活」について)福田忠之(鹿大38卒・神奈川県平沼高校教諭ウイーン体制よりビスマルク時代)福島宏之(早大38卒・川崎鋼板千葉工場国防について)野間口行正(鹿大38卒・新技術開発事業団東京裁判)亀井孝之(亜細亜大39卒・皇宮護衛官日本国憲法下に於ける天皇)沢部寿孫(長崎大39卒・日商歴代天皇御製について)柴田悌輔(中央大40卒・三菱石油日本の知識人

ベトナムの豎琴

——水島上等兵の手紙

——(編集部註)竹山道雄氏作「ビルマの豎琴」は戦後文学の名作として名が高い。ビルマで敗戦を迎えた或る部隊に、その物語の主人公・水島上等兵がいる。沈着で瀟灑な、部隊の人気者水島は豎琴の能手である。彼はある日部隊から消えた。戦野にさらされた無数の遺骨を弔うため、戦友の搜索と敬慕から身をかくし、遂に日本に帰らないのである。

はじめに——その後の水島

なつかしい日本の皆さん、私は竹山道雄先生の「ビルマの豎琴」によって紹介された水島上等兵です。最初は私のこと

と生活人)大川寿雄(日大40卒・東京鋼板工業業歴について)中川裕司(神奈川大40卒・旭興業入社時の初心をふりかえつて)浮田昌次郎(早大41卒・後樂園スタジアム韓国訪問感)磯貝保博(中央大42卒・講談社五箇条の御誓文)森重忠正(長崎大42卒・沢村商事職場体験発表)岩越豊雄(亜細亜大42卒・教員志望安岡正篤著「東洋思想の一淵源」読後感)今林賢郁(早大四年・八幡製鉄内定真の学生運動とは何か)以下不参加・山本伸治(東水産大39卒・キュービー株)山本博資(早大大学院・川崎重工内定)西元寺敏毅(九大41卒・三井石油化学工業)(日商・沢部寿孫記)

名越二荒之助

が活字の上で書かれただけでしたから、そうでもなかったのですが、映画になり、芝居になり、連続ラジオドラマにまでなつて、すっかり面はゆくなつてしまいました。もう日本へは帰れない。帰ったら日本の人たちの心の中に作りあげられた水島上等兵のイメージがこわれてしまふ。もう私の生きる場所はビルマしかない。このまゝ、自分はビルマの土になるのだ。そう心に決めてビルマの山野を歩き続けたのです。

各地に散らばった日本軍人の屍を集めて、慰霊塔をいくつも作り、すべて立派に合祀することができました。これも決して私ひとりの力ではなく、死者の霊を

こよなく敬うビルマの人々の協力のたまものであったのです。ビルマの人々は私の努力を高く買つて、私をラングーン郊外にある大きな寺院の高僧として安住させようとしていました。しかし私はキツパ断つたのです。何万というビルマでの戦死者のことを思うと、どうして私だけがそのような恵まれた生活に甘んずることができましようか。

それでもあきらめきれない彼らは、私を寺院に連れてゆこうとするので、逃げ惑いました。断るのに困つていた時でした。ビルマの近くにあるベトナムで、仏門に入った僧侶が焼身自殺したのです。私はその報を聞いて一晩中眠れませんでした。それにベトナムには同胞相喰ひ国内戦争が起つて居るのです。そこにはむごたらしい屍が、またしても戦野にさらされて居るに違いない。そう思いはじめると、私は矢も楯もたまず、タイからカンボジャを過ぎて、南ベトナムに入りました。

ベトナム僧と会う

私は最初に焼身自殺した高僧の弟子であるテンアン氏を始め、何人かの僧侶たちに出会いました。彼らは口を揃えて、現在のチュウとキに代表される「軍事政権」を攻撃するのです。

「我々の先輩と同僚が、焼身自殺という方法で訴えたのは、当時の政権がクーデターをやつて政権を奪取した非法政権であったからだ。焼身自殺による悲惨な抗議が実を結んで選挙が行われたけれど、現在も『軍事政権』に変わりはない。それは不正選挙の結果生れたものであり、独裁政権ではないか。これは何としても許せない」

「彼らはビルマの僧侶たちとは比較にならない激しい政治意識に燃えています。この国は政治がすべてに優先しているようにです。私は聞いてみました。」

「あなたたちは、アメリカ軍の駐留をどう思っているのですか?」
「それは賛成です。我々はベトナムの領土と文化を共産主義の侵略から守らねばならない」

「だったら、南も相当に厳しく国内体制を固めなければ防衛できないのではないか。北はホーチミン大統領のもとに、独裁体制を十数年にわたつて続けてきている。共産党の組織が国民生活の末端にまで行き渡つて、南から北へスパイを送ることさえ容易でないと聞いている。北は文字通り党と軍部による独裁体制の国ではないか。その敵しさはチュウとキの政権の比ではない。そしてベトナムを使って南の内部擾乱をやつて居る。焼身自殺するんだつたら、北のこういう独裁ぶりとも、内政干渉に対してこそ抗議すべきではないか。仏典に『函蓋相称』とか『空有相即』という言葉がある。ものは相関関係でなりたつざるを得ないことを意味している。北が独裁でかためれば、南もそれに似た体制をとらざるを得ない。仏典の言葉はこの宿命的な人間性、国家間の関係を言つたものとして受けとつていい」

「それでは水島さんは、チュウとカオキの連合政府を支持せよと言うのか?」
「支持するとか、支持しないとか、はっきり決めてた、かうのは、軍人とか政治家のやることです。政治と宗教は次元が違います。仏教徒としては、もつとほかにやるべきことがあるのではないかと私はそれを見つげるためにビルマ

からやってきたんです」

ベトコンの指導者に会う

僧侶たちとの会談が終ると、私はベトコンの指導者を求めて山中に入りました。私がベトナムに平和を願う一人であることを知った解放戦線の兵士は、親切に私をバン・チンという「サイゴン地区解放司令官」に紹介してくれました。頬骨がとがった褐色の司令官の顔は、もう七十才が近いとも思われます。彼は私の掌を握ると誇らしげに語り始めました。

「我々はディエンビエンフーで仏軍を破り、その後山にこもって勢力を蓄えてきた。バルチザンとして山にこもった者が六千人、この六千人の十数年にわたる辛苦が、今日の作戦の成功をもたらした……」

もうすつかり老人だと思っていた彼の声は、四十才位のはりをもつて聞えます。私は質ねました。

「ディエンビエンフーの後に結ばれたジュネーブ協定（一九五四年）では、すべての外国軍隊は撤退するとなつています。それなのに皆さん方は、北へ帰らなかったんですね」

「我々はベトナムだから、北に帰ろうが南におろうが、同じだよ」

「しかしジュネーブ協定で南ベトナムの独立が認められたんですよ。だって貴方たちは外国軍隊になる。それでですね、当時北にいたカトリック教徒は、軍人でもないのに南に追放されてしまった。それと同じように南のベトコンも北に帰るべきだった。なのにベトコンは帰るどころか、南の山中で『解放』戦争の準備をしていた。このジュネーブ協定違反が、今日の混乱を

もたらしたと言わざるを得ません」

「ジュネーブ協定に違反しているのはアメリカだ。君は何故アメリカを攻撃しない？」

「アメリカを弁護するつもりはないが、アメリカも南ベトナムもジュネーブ協定には調印しませんでした。これは事実として申しあげておきます。」「君が何と言おうと、我々の戦は正義の戦だ。我々はアメリカ帝国主義とそのカライイ政権を追い出すために戦う。このた、かいに反対する者は、アメリカと南ベトナムの一部の指導者を除いては、世界のどこにもいなくなつた。いかな君も我々のた、かいに反対はすまい」

彼は激越な口調でまくしたてます。私は静かに質問してみました。

「米軍と南ベトナムの指導者を追い出してから、そのあとでどんな社会を作るんですか」

「我々ベトナム人によるベトナム人の国を作る」

「もっと具体的に言えば？」

「搾取のない理想の国、九五パーセントの人たちの望む社会主義国家だ」

「それじゃ、現在北ベトナムで作っているような国です。するとこの国は農業国だから、まず農業合作社を南ベトナム全土に作る訳ですね」

「まあそういうことになる」

「農業合作社はソ連で言うコルホーズみたいなもので、生産率もあがらず北では失敗しているそうですね」

「いや、そんなことはない。現在の合作社は、二、三〇〇人の小さな規模だから、もっと大きなものにしてゆく」

「大きな規模にしたら余計失敗しますよ。ソ連で苦い経験をして来ているん

ですから。コルホーズは自分の土地でないから、みんな本気で働かない。収穫高がガタ落ちして餓死者を多数出してしまった。やむを得ずレーニンはずつ政策を採用した。住宅私有地と称して、一人あたり五アール程度の私有地を認めた。私有地だけで現在穀類は全収穫高の三〇パーセント、酪農は五〇パーセント以上をあげている。それでも生産が不足して、小麦を年間九〇〇万トンも、カナダやアメリカから輸入している。ツァー時代は農産物の輸出国だったが、今は輸入国になつてしまった——」

「お前の言うことは、全部デマではないか」

「ビルマのような自由主義国におると、共産主義の長所も短所も皆判るんだ。しかし司令官のように共産主義の独裁国に住んではいては、一面的な見方しかできない。片眼でしか物を見るんが、それができないから遠近が判らなくなる。いわんや十数年も山にいたのでは思考法が停止してしまうんです」

その時横の方にいた二、三人が、「スパイではないか」というささやきが聞えました。

「スパイは帰れ」

後の方から大きな声が飛んで来ました。司令官は彼らを制して続けます。

「しかし、君のように、農業の失敗だけで全体をおしはかつてはいけませんよ」

「一事が万事という言葉があります。農業以外では経済政策は失敗です。しかも今あなたは南ベトナム全土に、合作社を作ると言ったじゃないですか。だから答えたんです。もしあなたに合作社を成功させる自信があるなら、立

派にやつてみせて貰いたい。それが成功すれば、ひとりでに南は共産化されますよ」

「そのためにはまず米軍を追い払わなければならぬ。民族の独立なくして農業政策もないからね」

「アメリカはベトコンを十七度線より北に帰らせることが戦目的だと言っています。あなたたちが北に帰って、人類の理想境を作つてみれば、人はひとりでに北の方に向いてゆきます。民族の独立は平和裡に達成できますよ。にも拘らずあなたたちは、南ベトナムの山中にこもって武力を蓄えたと言われる。だとすると、あなたたちこそ戦争の挑発者じゃありませんか。南ベトナムの内乱を起したのは、あなたたちがベトコンと言うことになる」

「何と言おうと今は南ベトナムの米軍を打倒して、民族の独立をもたらさねばならない」

「あなたたちの強気は無暴というよりばかりありません。大東亜戦争にあれだけ底力を示したアメリカが、引つ込むはずはありません。アメリカのフロンチャ精神は、野獣のような力を発揮することがあります。いよいよ最後になったら、彼らは無差別爆撃から原爆使用の可能性さえあります。今は平和競争の精神に立ち帰って、北で理想の共産社会を実現することです。それが長い眼でみて北ベトナムの勝利になる」

「そこまで言つた時でした。突如慄慄な面構えをした三十才くらいの男が、私に銃を構えたのです」

「三分以内に立ち去れ、さもないと撃つ」

米軍の高級参謀と会う

私がベトナムの司令官に会ったことを知った米軍は、私をサイゴンの大使館に招待してくれました。私が応接間を待っている、スチュアートという参謀部の中佐が現れました。彼は最初から核心に触れてきました。

「支那事変で日本は大陸の点と線（都市）を占領しただけだった。とうとう収拾できなくなると、蔣介石政府の背後にある米英を相手に戦争するよりほかになくなった。米軍も今は南ベトナムの点と線を確認しているだけだ。南ベトナム政府は頼りにならないし、米軍がベトナムを急追してゆけば、彼らは中立国であるラオス、カンボジアに逃げてしまつて、手がつけれない。このまゝゆくと、ベトナムと北ベトナムの背後にある中ソを相手に戦争するよりほかになくなる。ベトナム戦争の解決策を聞きたい。アメリカはそれを真剣に求めているのだ」

「私には判りません。たゞ判ることは共産主義という二十世紀を特徴づけるイデオロギーは、武力や北爆では解決できないということです。共産側にお願ひしたいことは、武力や煽動で他国に社会主義を押しつけるのでなく、まず自分の国に理想の社会を作つて貰うことです。そしてマルクス主義的社会主義と、自由を基本として改良してゆく方式と、どちらがよりよい社会になるか、対等の条件で競争することです。何十年もかけて、二つの実験を人々の前で見て貰いたいのです。それをやらずにアメリカが武力で共産側を抑えつけたら、イデオロギーへの魅力はどうしても残るんじゃないでしょう

か」

「私もそう思う。だからアメリカが願うことは、北ベトナム軍もベトナムも北に帰つて貰うことだ。そして共産主義と自由主義と、どちらが人民の幸福を約束するか、競争したいのだ。米軍の本音はそこにある。だから今米軍は北ベトナム軍とベトナムの武力を排除しようとするだけなのだ」

「しかしアメリカの意図がそのまゝ、ベトナム人民や世界の各国に伝わっていないですね」

「その通りだ。今までも誤解を受け続けてきた。その理由はいろいろあるが一つには政治競争や宣伝合戦になると、社会主義陣営の方が優位に立つようになっている。社会主義側は、国内を共産党独裁で固め、自由主義諸国の中に、共産党を始め民主民族戦線というトロイの馬を作る事ができる。それに較べて自由陣営側は、共産党を合法化して、こちらから社会主義国に「人民戦線」を作ることができない。政治的には敗ける体制になっている。（しかし経済競争では、全産業団営の社会主義では能率があがらない。自由競争を原理にした自由主義国が勝つ）だから政治競争に自由陣営側は、ゲリラによる共産側の政治攻勢に対して、北爆などという飛躍した戦術で立ち向うよりほか方法がないのだ」

アメリカが予想以上に深い反省に迫り込まれていることを更めて知らされ、私はこの反省の中から活路をアメリカ自身で発見して貰うよりほかないとつけ加えました。彼は続けます。

「世界の論者たちはまず、この宿命的な両者の対比に気づいて貰いたい。アメリカよベトナムから手を引けという

人があるが、ベトナムから手を引いた時、南ベトナムが共産化しないという保障があるのか。南ベトナム政府とベトナムとの連立政権ができたらどうか。南ベトナムの政情は落ちつかず、テコスロバキアをはじめ東欧諸国が共産化しと同じような経過をたどることは明らかではないか。アメリカは今どうすればよいのだ？」

南ベトナム政府軍の中に

「ビルマの堅琴」の水島上等兵は、ビルマの中に消えてゆきました。やがてビルマの土になるでしよう。しかし第二の水島上等兵は、いつの間にか南ベトナム政府軍の一兵士として志願して、文字通りベトナムの土になろうと志したのです。

私は最初僧侶たちと話した時には、余りにも政治意識が露骨で、抵抗を感じていました。しかし南ベトナムの抱える多くの問題を知つて、政府軍に身を投ずるよりほかなかったのです。

ベトナム戦争の真の解決は、もつと政府軍がしっかりと、前面に出ることです。もともと米軍が出るからおかしいのです。それから私の祖国日本の運命も考えました。もし南ベトナムが共産化すれば、集団のフアナリズムは、東南アジア一帯に更に広がるのが考えられます。日本やアジアの政治経済に与える影響は、はかり知れないものがあります。私がこういう処置をとったことは、誰にも報告すまいと思つていました。勿論竹山先生にも言わないつもりでした。にも拘らず私は敢てペンをとりました。それは私を紹介して下さいた竹山先生が、朝日新聞その他日本のマスコミに

よつて、大変な誤解を受けておられることを知ったからなのです。竹山先生の心の中が理解されず、余りにも皮相な所で議論されているのが、たまらなかつたのです。

第二の水島「ニーホン・ジン」の行動が、果して日本の皆さん方に共鳴を得るかどうか、そして私の選んだ道が成功に通ずるかどうか、私は論ずる所ではありません。たゞ私は自分の良心を裏切る事ができなかったのです。良心に基いて行動し、あとは後世の歴史に審判をゆだねたいのが、今の心境です。

恐らく私の選んだ道は険しく、悲劇をもつて終りを遂げるでしよう。多くの人の笑ひものになるかも知れません。しかし正しいということは、多数の意志で測れなかつた前例が、歴史上余りにも多かつたということも知つて頂きたいのです。

そして私は最後に申しあげます。水島が間違っていると思う人も、正しいと思う人も、これだけは信じて下さい。水島は今も音楽を忘れず、南ベトナム軍の特別宣撫班の中まじつて、堅琴をかき鳴らしながら人々の心を鼓舞していることを。そして戦死者の屍は敵味方の区別なく集めて、丁寧に合祀の行を続けていくことも。

(岡山県笠岡高校教諭)

編集後記 出版事業の進行をおしらせしようと思ひながら余白がなくなつたが、「日本思想の系譜」シリーズ五巻のうち二巻が刊行された。日本思想そのもの、各時代留魂の文献集である。担当諸先輩諸友の三十年にわたる同僚協力が開花したようなもので、多忙の中に重ねられてゆく打合せと進行は、楽しげである。はれる。心にしみるうれしさである。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

学問の力

山鹿素行の言葉に「玩物衷志」というのがある。

「書を読むに学の志を以てすれば、読む所の書篇悉く日用にあり、書を読むを以て学と為さば玩物衷志となる」(山鹿語類卷三十四)

書物を読むのが学問、たゞそれだけの知的興味に終って、学問が「日用」の間に生きて働くことがなければ「玩物衷志」に終るといふ。このことは誰でも言いそうなことで、平凡な常識のようだが、実際になかなかそうはいかないようである。

世の人は大学を出た者は必ず学問があると考へ、大学の教授は学問のトップレベルに立つ者として尊敬され、中学校を出たばかりで就職する者は、自分には学問がないと思ひこんでしまつてゐる。このような「学問」に対する考え方もまた常識なのだが、この常識に立つ限り、素行の言葉は到底わかるはずがない。

「詩三百篇を誦すれども、之に授くる

に政を以てして違せず、四方に使して専対すること能はずんば、多しと雖も亦爰を以てか為さん——これは素行が冒頭の文につゞいて引用している論語の一節であつて、その意味は「たとえ詩経全篇を暗誦して学問の深さを誇らうとも、実際の政治を委ねられても業績を残すことが出来ず、四方の国々に使しても、自身の判断で、臨機応変の処置をとることが出来なければ、如何に深い学問があるうとも、それが一体何の役に立つか」ということである。いかに多くの知識を身につけていようと、複雑な現実の前に施す術を知らなければ、その人を学者とは呼べない。ということはいかなる歴大な思想大系も、現実を具体的に解明する力をもたず、いたずらに観念の操作に終るならば、それを学問と呼ぶことは許されないというにもなるのだ。「多しと雖も亦なにを以てか為さん」という言葉はきびしいが、現実の力なき学問を情容赦もなく切つてすてるそのきびしさ

の中に、学問の真の姿は浮き彫りにされていくのである。学問は常にこの現実からの問いかけの中に立つている。というより、この問いかけに対する答えを鍛えるのが学問なのである。「読書は弟子餘力の学ぶ所なり」という素行の言葉もこの間の消息につながるものだ。読書は決してイクオール学問ではない。学問と呼ぶことの出来るのは「生きた」読書だけであり、素行の言をかりれば「志を以てする」読書だけのものだ。その志を外れた読書は、いたずらに人の心を蝕むだけであつて、「学をいたし候へば、いよいよおろかに成候様に我れ等は覚え候——配所残筆」ということになるのである。この志を外れた学問の態度を素行は「玩物衷志」と言つた。「物に対する接し方を誤れば志を喪う」——その救いようのない風潮の中から「学問」を救ひ出すために、素行はその生涯をかけたのである。

学問という言葉は、素行のいうような正しい意味で用いたのが、幕末の吉田松陰であつた。安政六年十一月二十日、処刑の前にして父や兄にあてて書かれた「永訣の書」は「平生之学問浅薄にして至誠天地を感格する事出来不申、非常之姿に立到り申候。嗚々御愁傷も可被遊拜察仕候」という言葉ではじまり、その次に有名な「親思ふ心にまざる親ごころけふのおとずれ何とさくらん」という歌が記されているのだが、その最初の言葉「平生之学問浅薄にして」というときの「学問」とはまさしく素行のいう「学問」であつた。学問の力足らざらずに人の心を動かす能はず——そこでいわれる学問とはいうまでもなく読書の量のごときではな

い。現実日用の間に鍛えられた心のもつ力そのものを松陰は「学問」と呼ぶのである。己が心に力あれば、必ずや人を動かすことが出来る筈だ。だがそれが出来なかつた、それを松陰は「学問浅薄にして」と記したのである。

さらにそれより五日後、処刑二日前に書かれた「留魂録」には「十六日の口書、三奉行の権許、吾れを死地に措かんとするを知りてより、更に生を幸ふの心なし。是れ亦平生学問の得力然るなり」という言葉がある。死を正面から見つめる力、それを松陰に与えたのも、またこの「学問」の力であつた。「学問」とはかゝる人生の急所において真実の力を發揮すべきものであり、その力に結びつかないものを「学問」という名前と呼ぶことは許されない。その学問の本来の姿がこれら松陰の言葉の中には、まことに鮮やかに示されているのである。

目次	
学問の力	(1)
日本の大学を明・暗二題	(2)
古典を読むところ	(4)
古信貴山の記	(6)
八幡・大正寺宿の記	(7)
☆ 合宿詠草より	

日本の大学の明・暗二題

小田村寅二郎

(暗) さきごろ「学費値上げ」をめぐって、月余にわたる紛糾を続けていた中央大学では、去る二月十六日の夜、突如として理事会側の全面的後退が決まり、値上げ案の白紙撤回といふことで、この紛糾に一つの終正符が打たれた。

マスコミはこれについて、あるいは値上げ案そのものがズサンなものであったからだとか、学生への説明が足りなかったためだとか、色々に批評したが、要は大学当局が、無法者の集まりである一部の学生群、それも他の大学の学生や、学籍不明のプロ的活動家の加わっている学生群の、頑強なバリケードの前に、みじめな降服を誓わせられにはかならない。しかも、全学部の教授会は、この得体的に知らない学生群の主張を受け入れるほかに事態收拾の方法なし、といつて、理事会にこの降服を迫つたというのであるから、事はきわめて複雑怪奇である。そしてその翌日の新聞には、理事と監事の総辞職(理事長はすでにその数日前に辞職済み)、全学部長の総辞職という大学側のすべての主幹部の引退が告げられ、同じ紙面には、鉄カブト姿(この口になぜこんもなのをかぶっていたのかわからないが)の学生群が勝利の万歳を叫んでいる写真が載せられていた。

報せられなかったことにきつと気付かれないにちがいない。それは、薩でこの学生群に大学側の情報を洩らすという卑劣な行動をしながら、いつも学生群の味方となつて共産革命派の少数の教官たちのことである。この教官たちこそ、学生群が勝利の快感に浸っているかげで、不敵な微笑を洩らしていたにちがいないからである。

それはともかくとして、由緒ある伝統をもつた中央大学という名門校の一つが、この日をもって教学の權威を失墜させてしまったことは、もはや疑う余地のない所である。一方、大学当局が持つている大学全体の管理運営権を事あるごとに弱体化させて次第に大学全体を人民管理の方向に移行させようと狙う連中が、この中大事件でも一つの勝利をおさめたことは事実である。また、大学教官という立場の良識ある学者たちが、案外に世事に疎いという欠点を持っておられるためか、それとも思想的問題の急所が、おわかりにならないためかはわからないが、とにかく同僚である不心得な少数の教官たちの作戦にうまうまと乗せられて、巧妙に操られてしまうような危険な状態におかれている、ということも、この事件を通じて一層はつきりして来たと思ふ。

は、これから先の日本の教学なるものは、一体どういふことになっていくのであろうか。まことに憂慮に耐えないところである。事は、なにも中大に限つたことではなさそうである。国立・長崎と私立大学とを問わず、これらもかなり類似のケースがあらわれて来ないとも限らない。この中大の二・一六(二月十六日)事件は、日本大学史上にも前例のないほどの醜態であり不祥事であつたと思われなければならない。

(明) しかしこのような憂うべき事件とは好対照に、まことに稀れな事例ではあるが、泥沼から立ち上つて最悪の事態を自主的に挽回している一つの大学のことをご紹介したい。国立・長崎大学では、ごく少数の学生の動きが起点となつて、それが次第に全学的に(といつても未だそのプロセスの段階ではあるが)波及していき、さきさきのエンタープライズ佐世保入港騒動の折には、この長崎大学が佐世保に一番近い総合大学でありながら、遂に学外の全学連三派の学生を一人も大学構内に入れなかったのである。

ご記憶の方も多かろうと思うが、つい三、四年前のこの大学は、マスコミの話題を提供するに事欠かないほど、乱れ切つた大学であつた。当時、国家予算上切つた大学に立派な学生会館が出来上つたときのことであるが、その建物の管理権をめぐつて激しい闘争が展開した。時の学生自治会の連中の中には、この大学を混乱におとし入れるために、関西のある大学を卒業したプロ活動家が、わざわざ改めて一年に入學し、すぐに自治会の重要ポストに選ばれていた。そして、「この会館は、学生たちを左翼陣営から切り離すための含みをもつて作られ

たものである。それは、いわずと知れた政府や文部省の謀略である。だからもしこの会館を使うのなら、会館職員任せ免権までを含んだ会館管理権をわれわれ学生側へ自治会へに渡せ」という常軌を逸した主張をした。国立大学内にある施設の会館職員が国家公務員であることは、誰れ一人疑うわけもなからうに、それすらも無視した発言であつた。俸給は国が持つて、雇傭するのは俺たちだ、という意味でもあつた。

これが発端となつて長期にわたる全学スト、教学によるバリケードの構築、深夜におよぶ学長軟禁するし上げ、警官導入、乱闘、学生処分、処分撤回闘争、集団断食による抗義等々、ありとあらゆる闘争が続いた。だがそうした時期が数ヶ月経過したころ、一般学生——それを良識派と味ふようになったが——のうちから教養部の学生十数名が、事の容易ならざるを自覚して、遂に立ち上つたのである。

どのような所から革命陣営のトーチカのような結末にいでんていったか。この諸君は、賢明にも地道に最も手近かな問題から取り組み出した。すなわち、社青同・民青同・自治会幹部らが、連日のように繰り返えしやつていたピラマキを重視し、そのピラの内容の検討から着手したのである。

ちょうどそのころ、学外にある同大学の女子学生寮に社青同の女子学生五名が不法入居して、裁刻所の退去命令にも従わないという事件があつた。彼らのピラの内容と、事の真相とを突き合わせていくと、書きなぐられているのは事実の虚構もはなはだしく、あることないことお構いなしであつた。こうした調査活動のあいだにも、良識派はなぐる、けるの暴

行を受け一年生の中には、きびしいつるし上げに泣き出す場面が何回となくあったという。

しかしこの十数名は、ついに調査をまとめ上げ、これを教養部学生に訴えた。それがくりかえされていくうちに、やがて教養部自治会の委員長選挙が近づいた。そして立候補して表面切つて雌雄を決することになったのである。暴力的妨害は一層はげしくなつたが、万全の策と周到な調査を持つて、虚構と破壊とに相對したこの勝負は、遂に良識派の勝利に歸し、45対25の大差をもって終了した。

この大学には六学部があり、それぞれ自治会を持つていたので、教養部ただ一つの自治会にはすぎなかつたが——一、二年生が教養部に属するので、人数からいへば全学生の半数がこれに所属する——それでも戦後はじめてともいふべき良識派（全学連三派でもなければ、日共でもない）が、自治会委員長はじめその重要ポストを占めることになつたのである。それが一昨年十二月であつた。

ついで翌四十二年四月に、重ねて820対490、同十一月には、僅差の激戦ではあつたが21票の差で、三たび良識派の勝利が続いた。この一拠点の確保は決して容易なことでは出来なはずはなかつたが、不撓不屈の母校愛が物の見事にこうした足場をつくり上げた。その中核の人数は、その後の努力にもかかわらず、さして増大していかなかつたが、それでも一人二人と、志を同じくするものを加えていつた。そして長い間閉鎖されたままの学生会館の問題に向かつて、新たに真剣な活動が開始されたのである。

この連中のやり方の特徴は、ここでも遺憾なく発揮された。すなわち現状分析についての驚くべき緻密な取り組みであ

る。先ず第一に、日本中の大学で学生会館を持つてゐる大学名を調べ、数名が手分けして、その一つ一つを現地に赴いて一つ残らず正確に調べ出した。片道の旅費だけしかなくとも長崎駅を発つた。途中車中泊の限りを利用し、その出来ないう時には駅のベンチで夜を明かし、大阪では警官に乞食と間違えられて訊問を受けたという。こうした骨惜しみをしない積み重ねの結果、すべての大学の学館規定の内容がわかり、そのすべてに優るとも劣らない内容、という視点に立つて、自校の学館規定の素案を作成した。そして教養部学生の同意を得て大学当局にそれが提出されたのである。すなわち教養部だけで単独使用をはじめ、という非常手段を打ち出した。かなりの迂余曲折であつたようだが、結局僅かの修正だけで、教授会を通してことになつた。

そして昨年暮れ、ついに全国でも例を見ない奇妙な方式、一学部単独使用開始という方式によつて、学生会館を使用しはじめることになつたのである。事ここに至るまでには、学館前にはられた社青同によるバリケードを、学校当局が躊躇して徹去しないの指摘し、当局の善処を要望することもいくたびかあつた。ついにこれも学生自らの手で暴力妨害を排除しつゝ、撤去してしまつた。かくして一部の学生が学館を使いはじめたが、そうなると思ふまでも、自然に出入りし始め、実質的にはいつの間にかに全学生が使うようになつてしまつた。懸案一つが急転直下、解決してしまつた形である。

とにかくこうして学内が徐々に正常化していったときに、はからずもエンタープライズの入港が近づいてきた。すると一月十二日、三派全学連の代表三名（都

学連書記長高橋、副委員長成瀬、ほか）が東京から乗り込んできた。そして学内で勝手に新聞記者会見を始めようとしたのである。しかも、つい一月前まで学内の全学連三派が使用反対を叫び続けていたその学生会館の中でそれを敢行しようとした。

事ここに至つて、大学当局も遂に決然と立ち上つた。そして「本学内では他大学の学生の集会を認めず」と内外に宣言し、新聞社にも一々それを通報した。学内では学生部員が総出で、この三名を實力をもつて大部構内から追い返したのである。それで三派は、これを中継拠点にする自信を失なつた。すぐる四年前、大部構内に社会党の宣伝カーが乗り入れられたことを知る者にとつては、これはまた夢のようなできごとであり、大学の權威の自主的奪回でもあつた。かくて、あの佐世保騒動の全期間を通じて、学内の三派全学連が佐世保に出かけていつたもの、この大学には他大学の全学連三派は、ついに一人もはいることがなかつたのである。

だが、このことはなぜかマスコミに載らなかつた。マスコミは、当時大量の記者を現地に派遣したはずである。また連日わたつて貴重な紙面やテレビ・ラジオの時間を、それに惜しみなく提供した。にもかかわらず、いま私が書き記したことは、完全に近いほど黙殺してしまつた。この長大の姿は、取り扱ひ方の如何によつては、果てしもないニュースバリューのある重要な事項であつたのではなからうか。なお、この長大の学生たちは、佐世保事件をただ見送つていたのである。バス一台を借りての苦勞をし、垂れ幕をはり、拡声器をつけた体制をととのえて、長崎から佐世保に向かつた。

全学連三派に向かつてその非を訴え続けたのである。マスコミは、これすらも取りふれたデモ反対者のバスと報道されたにとどまつた。それは小さく報道されたが、読者の関心を惹くようには書かれていなかつた。報道記者の能力が低下してのことか、それともマスコミ取材にすでに公正さが失われて政治色が浸透してしまつたためか、いずれにしても健康なマスコミとは、ほど遠いものに墮落しかけてゐることを感じさせる一例である。

私は長崎で上記の学生諸君と親しく会う機会を得た。教官にもお目にかかつた。そしてこの大学のきびしかつた正常化への歩みを、深い感動をもつて心にとどめたのである。その折リーダー格の一人の学生（安東敏君）はふと私に次のようなことを語つた。

「世間では愛国心ということが言われ出しているが、僕は愛国心とはこういうものではないかと思ひますがどうでしょう。か。すなわち、国民一人一人が、自分がいる職場や学園で、その周辺にある邪悪や不正や虚偽に對して、見て見ぬふりをしなくなることに、それに気づいたら勇氣を出して是正にぶつかつていくこと、ではないでしょうか。」

と。私はこの彼のいうところをききながら、これは彼の血みどろの尊い体験から生み出された言葉であり、愛国心についての何んという生きた解釈であろうか、とつくづく思つた。そして、私はふと吉田松陰の言葉を思い出した。「至誠に動かざるものはいまだこれあらざるなり」（まごころを尽して事に当たれば、そのまごころはどんな相手に対してもきつと通ずるようになり、相手を動かさな

い、ということはない)という言葉を。その言葉を呈するにふさわしいような諸君であると思つたからでもある。それは雪の降り出した二月二十九日の夕方、長

古典を読むところ

——女子高校生の「十七条憲法」読後感想文から——

行 武 靖 枝

(筑紫女子園高校教諭)

崎でのことであつた。

——民主公論三月号より転載——

(本会理事長)

近頃、情操を涵養するような教育が欠けているといわれ、女子教育に携はるもの一人として関心を寄せていたところ、偶然次のような文章を読む機会がありました。それは仏教の授業の宿題として、十七条憲法を読んだ感想を、生徒が担当の先生へ提出したものでした。読みすすむうちに世の中一般の常識と違って、真実の言葉が聞かれて感応する、日本人としての情緒が失われていないことがわかつてうれしく思いました。

生徒達のこういう心情が潤んだり色あせたりしないように、やがては心一杯に広がるようにと育てていくのが教育の大切なところではないでしょうか。

私の学校では毎週仏教の授業が行なわれ、宗教色のある点で多少他の学校と違いかもしませんが、他の同じ世代の女生徒も実際に聖徳太子のお言葉を味わつてみると、このような感想を持つのではないのでしょうか。女・教育を考えていただく折のご参考になれば幸いです。

末 永 洋子

太子がこの十七条憲法を作成された目的を考えてみた。太子がいらつしやうした時代の様子は、氏族同士の醜い対立、そ

してついに蘇我氏が有力となり、その勢力は皇室をもしのごうになつた。朝廷の役人達もおのづからぜいたくになり秩序がなくなつてきた。こんな有様ではいけないとお考えになり、それが具体的な形で現われたのが十七条憲法だつた。だから第一に示されたのが「和をもつて貴しとなし……」であり、その手段として「篤く三宝を敬へ」とされたのである。私はこの憲法を読む前、何か理解できていない、むずかしいことばかりが書かれていると思つて、内容等に読み入つた事はなかつた。しかしよく読んでみると私の思いあたることばかりで、自分自身に言われているような気持ちさえてきた。昔も今も人の心は変らな感じだと思つた。すると昔の……人はなほだ悪しきもの鮮し、よく教うるときは従う……」本当にその通りだと思つた。人間はみんな心の奥底には清く、美しく、素直なものが必ずあると思う。それが色々な雑念、世の中の醜い点、忙しさに染まつて悪い心になつてはだけだと思つた。そしてそれを拭い取るのは大変なことと思つた。でもそれを仏教を信仰することによつていくらかでも清い心に向かわせようと思つた太子。人間を肯定的にとらえてあるのが

うれしいし、太子の徳がうかがえるような気がする。

月 俣 まゆみ

二条に「篤く三宝を敬へ」とあります太子が後世「日本のお釈迦様」といわれるものなるほどと思います。上の者も下の者も三宝を敬うことが一番大切だといわれたのがなんとわかるような気がします。それほど仏の教えは大切なものだということがわかりました。

人間には悪人はいない、よく教えるに従うといわれた太子は人々を信頼しておられたのでしょうか。そう思うと私もしっかりしなければならぬと思つて思いました。

斉 藤 とみ子

「礼」たった一字で、人と人における作法を教えてくれます。

人と話している時、相手の人がある事について何も知らない時、教えてあげる前に、こんな事も知らないのかと心の片隅で軽蔑してしまいます。また、片方の心の中には、私だつて知らないことはたくさんある。あの人も何もしらないかもしれない。だから軽蔑するまえに自分自身のことを考え、反省しなければいけないと思います。

友達と心・気持が一致することはたびあることではないと思います。お互いの相手の気持を考えているからこそ一致するので、自己中心に考えていたら喧嘩になつてしまひます。私が相手のことをなにも考えないでズバズバと言つてしまふと気を悪くしてしまふばかりでなく、二度と私と口をきいてくれないかもしれません。太子が生きていらつしやうした時代は蘇

我氏や他の氏族が互いに争つていた時代でした。こんな世の中を「群臣礼あるときは位次乱れず、百姓礼あるときは国家自ら治まる」と、お互いに相手の気持を理解し、尊敬し合うことによつて、平和で明るい世の中になるとおつしやうしているのだと思います。

永 田 恵子

「礼をもつて本とせよ」の礼。一般に礼は「社会の秩序を保ち、人間相互の交際を全うするために必要な動作、作法」と考えてよいと思つてます。争いの絶えない世の中だったので社会の秩序を保つために礼を言われたのだと思つてます。しかしその奥深くにあるものは何か？感謝の気持を持つことだと思つてます。感謝の気持を持つことは人の心を和らげ、また、自分も怒むと思つてます。その人は嫉み、憾み、怒りなどの煩惱からのがれることができます。その時、その人は喜ぶ状態にあります。人には必ず良心があります美しい感謝の気持はすぐに他人に通じるものです。そこに自ら和が生じるのではないのでしょうか。今の世はあまりにも礼のない生活だと思つてます。「ありがとう」この言葉ほど人の心を和ませ、感謝の気持を伝える言葉はないと思つてます。

岡 本 喜久子

第六条の「人の善を匿さず悪を見ては必ず匡せ」は人の上に立つものの心がまよとして大切なことである。悪を見ては必ず匡すということは、たいへん勇氣のあることでもあるし、たいへん勇氣のないことでもある。「さわらぬ神に祟りなき」などという諺があるように、関係しない方が禍いを招くことがないなどと考えるは上に立つ役人としても資格はない。し

かし現代でもこのように考える人が大勢いる。私もその一人で見ても見ぬふりをすることがよくあり反省している。

樋口 智恵子

この憲法を読んでいくうちに、何となく太子のお人柄がわかるような気がしました。例えば、太子は、自分は身分の高い地位にありながらも、決してこの憲法を強い命令の形でおっしゃってはいない。また、この中に衆という言葉がよくでてくることから国民思いの立派な方だと思えます。

第十条は大変反省させられるところがあります。私の今まで過ごして来たあとをふり返してみると、学校生活でも家庭生活でも自分の意見ばかりを主張してきたような気がします。そういう自分に気づかずにいましたが、この十条に述べられているものはもっともなことだと思います。

これからは他の人の気持と立場をもっと深く考えて、その中に自分をいれ出しで行かなければならないと思いました。

正法地 芳江

十四条に、群臣百寮嫉妬あることなかれ。我すでに人を嫉めば、人また我を嫉む。嫉妬の思い、その極みを知らず。ゆえに智、己に勝るときすなわち悦ばず。才、己に優るる時すなわち嫉む。……

十七条の中からこの十四条を取りあげたのは「嫉妬」という言葉が書かれてあったからです。「嫉妬」、なぜ太子はこのような言葉を書かれたのか。何度も読み返している、なぜか太子自身が嫉まれることを経験されていたような気がしてきました。太子は全てに優

れておられ、人望も高く、やはり囲りにいる者は太子を羨やみ嫉んだことでしよう。いえ太子に対してでなくとも、豪族間の争いなどから、自然に感じとられたのかも知れません。何にしても、こんな人間の内心にまでも心を配られ、その上憲法にまでも戒めておられることに太子のご苦労がうかがえるような気がします。「嫉妬」醜いものだと思います。どんなに表に出すまいと思っても必ず表われるものです。嫉妬するというのは、世の中のでいちばん自分が可愛いからです。その可愛い自分より優秀な人がいればどうしても嫉まずにはいられないのでしよう。

「現代人」こう呼ばれている私達。

太子の十七条憲法は知っていても知らなかった私。何度も読み返してやつのことで意味だけをつかんだ状態です。この憲法は確かに古いものです。しかしその内容は、今の時代にも充分通用するものです。いえむしろこの憲法がなければいけないと思います。いつも自分のことしか考えない私達。現代だからこそこの憲法の心を知り実行して行くことが、必要だと思います。

河原 高子

第十六条では、太子の民に対する深い思いやりの心が現われていると思う。「民を使う時は適当な時期を選ばなければいけない。冬の時期などは比較的暇なのでこういう時に使い、春から秋までは忙しいので避けるべきだ」と説いておられる。もしあの忙しい時に一家の主人がいなくもしたら、その家の女子供は主人の分まで重労働に耐えていかなければいけないわけだ。それに一人でもいなくなると収穫にも影響を及ぼすと思う。このよう

に太子は常に国民の事を考え、役人たるものはこうであるべきだという考えを述べておられる。

久 永理 恵

一番心に残ったのは、怒り、嫉妬、恨み、これら人間の中でもっとも醜いものについて書いてある十条、十四条、十五条である。この三つのものは自分の心の中にありながら実際おそろしと思う。自分が相手を悪く思っているときには必ず相手も良くは思っていない。嫌なことを言われ腹が立ち言い返す。一瞬の内に怒り、恨み、憎しみの気持がはいっている言い返すだけ馬鹿なこと、又そのように相手を恨むだけでも相手の品位と同じだけに下がってしまうのだ。そう思ってもなかなか難しい。我必らずしも聖に非ず彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。我すでに人を嫉めば人もまた我を嫉む。嫉妬の患その極みを知らず。これらの言葉は私に、私の心の内にある醜い物をなおざりにしておくことを許してはくれないだろう。

岡本 恵美

十七条憲法を読んで最初に感じたことは、なんと憲法らしからぬ憲法なことだろうという事です。私は十七条全部の内容を知り、こんな私達の生活に密着しているものだとは思っていませんでした。人間の考えや行いはあの頃も今もずっと変わらないんだなと思いました。太子が生きていらつしやうった頃は豪族の争いが絶えなかった時代です。争いをなくして住みよい国にしようとする心とか恨みとかの人間の一番醜いところをまざまざと見せつけられて大変苦しまれ

たことでしょう。そしてその結果こういう十七条憲法が生まれたのだと思えます。

藤村 由美子

「和をもって貴しとなし忤うことなきを宗とせよ」との言葉から考えても世の中が乱れていたということがうかがえる。このような乱世の渦の中にいる人々の心をやわらわら、豊かにし心により所を与えようとされて、自ら仏教を奨励され三宝を敬えと言われたのであろう。「人はなほだ悪しきもの鮮し」というお言葉からも人々を信じていられるお優しい暖かなお心が感じられる。

桑野 美保恵

十七条憲法を読んで、私は自分で一つだけでも守ろうと考えました。自分の一生を通して、考えてみるとつまらないことばかりだが、人の悪口だけは言わなかったとか、人を憎むのだけはしなかったとか、たった一つでいいから守りたいと思いました。この憲法を読んで全部の意味はわからなくとも、これだけはと思うものを考え、又反省もし本当によかったと思えます。

宗我部 恭子

十七条憲法を読んで特に目立った語は礼・信・嫉妬・衆でありました。中でも嫉妬、という語を見た時、この時代でもこういう語があり、又使われていたのかとびびりしました。それにもまして、太子がよく人の心まで見抜いておられることにはそれ以上驚きました。現代は科学が高度に発達しましたが、人間と人間のつながり、人間の心の心の方はいつの世でも変らないものだなあとつくづく感じました。

信貴山の記

桑原 暁

楠正成の幼名を多聞丸と云うのは、彼の母が信貴山の毘沙門夫に折つてもうけた子だからだ、と太平記にある。多聞は毘沙門の訳語である。この多聞が聖徳太子のお名前（生駒山）の豊聰耳に通ずるのはちよつとおもしろいが、そんなことは別にしても、信貴山は太子を思い出させるところである。それは信貴山寺すなわち朝護孫子寺（かわつた）名称だが、その謂われをばくは知らない。）が太子の創建にかかると云う寺伝を信ずるからではない。信貴山は生駒山地に属する。生駒山は太子のみ子山背大兄王が蘇我入鹿の追求の手を遁れるために、斑鳩宮を脱出して、しばらく潜伏せられたところなのである。日本書記に――

蘇我入鹿、小徳巨勢徳太臣、大仁土師婆婆連を遣りて、山背大兄王等を斑鳩におそはしむ。是に、奴三成、数十の舍人と出でて拒ぎ戦ふ。土師婆婆連、矢にあたりて死す。軍衆恐れて退く。軍中の人相謂ひて曰はく、一人当千といふは三成を謂ふか。

とある。三成と正成とが成の字を同じくしていることが、――わらわれることをおそれずに云えば――ぼくの心をひくのである。それはどうでもよいが「一人当千」とあるのはまさに正成にそのままあてはまるではないか。書記は前記にすぐ続けて――

山背大兄よりて馬の骨を取りて内殿に投げ置き、遂に其の妃及びに子弟等を率ゐて間を得て逃れ出で、胆駒山に隠れたまひぬ……巨勢徳太臣等斑鳩宮を焼

く。灰の中に骨を見いでて、誤りて王死せしと云つてゐる。これは赤坂城脱出のときの正成の詐謀を思い起こさせる。正成は、死骸を穴の中に取り入れ、自分が落ち延びたところを見計らつて火をつけさせる。城の焼け落ちたあとで、寄せ手のものは、大きな穴の中に、多くの焼けた死骸を見つけて、「あなはれや、正成はや自害しつげり。」と云つた、とある。しかしこの似通ひも大したことはない。大事なことはほかにある。大兄王の「それ戦勝ちての後に、まさに丈夫と云はんや、それ身を損て国を固くせむはまた丈夫ならざらむや。」というみことばを正成の生と死にもあてはめてみたいのである。

信貴山については、絵巻物の絶品「信貴山縁起絵巻」を思い出さぬわけにはいかない。飛倉の巻（山崎長者の巻）が一般に親しまれているが、その延喜加持の巻の一コマに、護法童子が剣を片手に虚空を疾走する場面がある。それは信貴山の聖の法力の示現である。重いみ病の床に在った延喜の帝（醍醐天皇）に、夢ともなく、うつつともなく、その童子がきら／＼として見えたと云うと、心地よくなる。後醍醐天皇が正成の存在を夢告知せられたといふ伝えには、この説話がいくらか流れ込んでいるかと思われる。天皇の夢に、びんづら結うた二人の童子があらわれているのである。さてかの聖の法力で山崎の長者の米倉は空を飛行して山まで運ばれてしまった。山崎と云えはすぐに油が思い浮かぶ。絵巻の中に長者の屋敷で搾木で油をしぼり取つてるところが描かれている。ここは油の製造、販売を一手にひきうけていたところである。ところで正成は油には不自由しなかつたらしい。千早城では、投げ松明のさきくに火を付けて、寄せ手が我先にと渡ってくる橋の上に、薪を投げ集め水弾きをもって油を、「瀧の流るゝやうにかけ」て橋を焼き落した、とある。それに先立って、天王寺辺で宇都宮治部大輔と対戦した日には、「すべて大和河内紀伊国にありとある所の山々浦々に、かがりを焼かぬ所は無かりけり」ということで、「闇夜に昼を易へたり」というありさまであった。この無数のかがりには多量の油も使われたであろう。正成は山崎の油業者に手を打つことを忘れなかつたにちがいない。

北条幕府討滅の成つた日に、大塔宮護良親王は、信貴の毘沙門堂に腰を据えて帰洛しようとなさならなかつた。それは、足利高氏の逆心をすでに看破して、それを抑制する保障のないかぎり、戦國体制を解除するわけにはいかぬ、と云うことであつた。征夷將軍の宣旨あるべしということで親王はようやく信貴を立てて入洛された。親王のその日の様子を描いた増鏡の文は気持がよい。

十三日（元弘三年六月）大塔の法親王都に入りたまふ。この月ごろに、御ぐしおふして、えも云はずきよなる男になられたまへり。からの赤地の錦の御鏡直垂といふもの奉りて、御馬にて渡り給へば御供に、ゆしげなるものゝふどもうち囲みて、み門の御供なりしにもほと／＼劣るまじか／＼めり。

とある。しかし間もなくひきおこされた親王の悲劇は、今更云うまでもないことであり、また云うにしのびないことである。それは山背大兄王の悲劇を思わしめるものである。――四三二・一九稿（都立千歳高校教諭）

八幡大正寺合宿詠草より

東大一年 田代 民治
古川さんとふもとまで走りたる時
ふもとまで行かうと言はるる先輩の
声に答へて走り出したり
目の前の石を踏みつゝ足の裏の痛み
こらへてあとを追ひけり
走り終へふきてもふきても出づる汗
を立ちどまりつゝぬぐふ楽しさ
九大三 志賀建一郎
真一文字に平野を横切る 遠賀川の水
面を夕日は鏡く照らし
鹿兒島大二年 寿英博太郎
身をかがめこぶしをかためて友達
の思ひを述ぶる言の葉さびし
学問を我がものとされし先生の一語
々々を素晴らしと思ふ
早大四 今林 賢郁
「日本思想の系譜」を読みつゝ
残されし言葉にうつしく思ふなり古
人のつきさるいのちを
心こめ書き託されし言の葉のさやけ
さ胸にしみいるごとし
限りある命にはあれどこしへに伝
はりゆくは言葉なりけり
小柳陽太郎
東にひろごれる野のそのかなた瀬戸
内の海遠くかすめる
あたたけき春日をうけて夢のごと青
くかすめる海のものもしき
かの海のかなたに四國の国ありと思
ふもなつかし友が住む国
山田 輝彦
小柳兄の講義を聞きて
一すじにいのち燃やして生きぬきし
人さばにありわれらにのびないこと
息の緒にひたぶる生きし人をこそ神
とよびしかいにしへびとは

八幡・大正寺合宿の記

——今夏の霧島合宿教室をめざして——

昭和四十三年三月十一日より十五日まで、四泊五日の日程で北九州市八幡区の大正寺に於て、夏の霧島大合宿を目ざし幹部学生約四十名による合宿が行なわれた。この合宿に先立ち、昨年十二月二十三日から二十四日にかけて、中心メンバー四名（九大・志賀、上智大・津下、早大・斉藤、長崎大・白石）が福岡に集まり今回の合宿の具体的内容について話し合った。まず三月合宿は是非行わねばならぬという四人の意志が確認され、次に具体的に、日時、場所、費用等をほぼ決定し、前回の阿蘇合宿後の活動状況を見て、この合宿参加者の入選を行った。

三月合宿は夏の合宿教室開催の為の我々約四十名の意志確認と相互研鑽を目的としその為、運営は現在の一年二年生が中心となつて行い、今まで中心となつてこられた四年生はオブザーバーあるいは助言者として参加してもらふ事を確認した。この四人合宿後、三月合宿にやる間はまず、四人の連絡を密にする事に由りて、相互の意志疎通に努め、又各地区での相互の意志疎通も深めるよう各自が努めると同時に、東京から合宿案内状及び概文を参加者に送付する等、試験期をぬつての努力が続けられた。

合宿の前日三月十日夕刻、先の学生四名は福岡に集まり日程表の再検討、各スケジュールの責任者の決定等を行なつた。翌三月十一日朝福岡地区の学生数名を加え大正寺に向つた。山門をくぐり石段を上ると、先着の二君が庭掃除を始め

ている姿が見られた。合宿地大正寺は帆柱山を背に、前方は、東洋一を誇る八幡製鉄所、若く大橋を含む整然とした町並を見下す小高い丘の上にあつて、静かなたたずまいをみせ、日本の将来を担う大学生四十数名が真剣に語り合うには恰好の場所であつた。

四時半頃にはほとんどの諸君が集まりお寺の御厚意による火鉢を囲んで談談、夕食入浴をすませていよいよ第一日目、開会式は十一日午後七時から始まつた。国歌斉唱に続き早稲田大学の斎藤君が学生を代表して開会の辞を述べた。合宿中留意すべき点が述べられた後、日程の変更等諸種の説明があつた。次いで机を輪になして、この合宿に臨んだ各自の心がまえを含めての自己紹介に入った。一人ずつ立つて次々に各々の思いを述べ合つた。「日頃自分が考えている事をぶつつけあいたい」とか、「日本の古典を学びあいたい」、「学内運動の各地の現状を知りたい」あるいは「自分を強くさえてくれる何かを学びたい」等さまざまの思いが語られた。次いで班別に分れ、より緊密な討論の場での接触を深めていった。班は四年生だけの班も含め五班に分かれ、各班員は八名平均である。夜十時就寝の予定であつたが十一時を過ぎては皆床の疲れを忘れ班別の討論を続けた。しかし明日からのぎつりつまつた日程を控へ、十二時前には皆、寝床についた。

第二日目、十二日、朝七時起床。洗面掃除を了えて急いで庭に出た。昨日来の雨もすつきりあがり、しっとりした庭園の一隅に色あざやかな日の丸が掲げられた。全員整列して御製拜誦、それから体操をすまして食事にかかった。食事の用意及び食器洗いは全員一致協力して行い吉川工業の御厚意により毎朝あたかかみそ汁が提供された。朝の日程はまず九時から「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の全体輪読から始まつた。第一編の始めに言う。「聖徳太子は固有民族文化と大陸文化との交流接触の時代に出現せさせ給ひ、当代大陸の思想學術を博覧し給うたのである。けれども太子に於いてはこれらの思想學術はすべて切実の求道体験に融化して開展せしめられたのである。国家重大の転機に国民生活の運命を荷はせ給ひし御心は、時代の痛苦濁乱を管に客観視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全体生活の開導教化を急じて求道精進し給うたのである。……」

初頭から一字一句を追ひながら、本に則してまず自分の感想、疑問点が述べられた。初めの中は視点が飛び飛びだったので、まず一区切りの文章の主語、述語はどれかを押えて、次に意味をとり接続詞等の一字にも心を配るべきだと四年生からの助言があつたりした。こゝに傍点を施した接続詞「けれども」という一語には黒上先生の御心の重心がそれ以下で文章に現われている事を示しているのがある。黒上先生は太子の偉大さのそういう点を強調なさりたいのである。このように、太子の御心を読む場合は太子の御心と共に黒上先生の御心にも心を注がねばならないというむすかしがある。それ位の深い心の配慮が必要な事に気づいた。

午後に入つて、まず二年生の研究発表があつた。最初に九大の志賀君が三派全学連の九大占拠を体験して、その時の大側への態度に關し、大学の自治の理念が欠除しているのではなからうかとの研究発表を行なつた。次の二人の研究発表もそうであるが未熟ながらも教科書的なものでなく、自分の言葉で語りかける発表態度ですがすがしいものがあつた。次に上智大の津下君が「士規七則」についての研究発表をした。まず配布された「士規七則」のプリントを全員で読んだ。「義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長ず。」と彼が力強く語る松陰先生の御言葉は、今なお已むことなく我々の胸にひやしとせまて来た。次に長崎大の白石が「学問の態度はいかにあるべきか」と題して、太子の御本の中の明治天皇の御製（披書思昔、のこしおく書をしめればいにしへの人の声をもきくこゝちして、など十首）をひもといひて、研究発表をした。人のまごころにふれる学問態度を述べたいと語り、観念的な言葉を去つてすなおな気持で、自分の体験から言葉を話そうと述べた。日程の都合上、斉藤君の研究発表は十四日に予定していた。しかし班員の心の交流がまだ不

やはらかに動く心ゆおのづから出でし言葉の微妙の調べよ
ただけしき絶叫みつる今の世に古典のことばのひびきやけし
減びざる国のいのちよそを信じ生くる外なし今のこの世に

十分という事で班別討論を増したりした結果、彼の研究発表が十四日に至るも実現しなかった事は、彼も張つていただけに口惜しい限りであった。次に、班別討論に入った。夕食前、九大の諸君が歌唱指導を行った。全員で「元寇」及び「大楠公」を声高らかに合唱した。この日、東京から四国の愛媛に移転された長内俊平先生から一通のお便りがとどいた。

集ひ来し友の面わのおのおのもうつしくまぶたに浮びくるなり

また「約束を破るような者が、どうして国を守る事ができようか」との先生の力強いお言葉は深く皆の心をとらえた。

四年生の研究発表は今林先輩の「大本帝國憲法制定ノ告文、同じく宣布の勅語、同じく上諭」の研究があった。戦後の偏向した教育に於てな過ぎりがあったという所であるだけに興味深いものであった。とりわけ、御霊に対する天皇の呼びかけである御告文に重点を於て発表された。このあと、これまでの内容を総括しての班別討論が行なわれた。

三日目、十三日快晴。朝九時から「日本思想の系譜」中巻の一（国文研叢書）より、山鹿素行の「讀居重間から」という所の班別輪読を行った。このあと、「日本思想の読み方」と題して、小柳先生の講義があった。山鹿素行は「人間を律する基準は外にあるものではない。自分の内に作るものだ。」と言った。スローガンが無ければ生きてゆけないというのが昭和の時代で、戦後でも、民主主義とか平和といったスローガンでは求めた。しかし全て基準を人間以外の外にもってゆく事と闘わねばならぬ。自分一人でもぶつつかってゆける気力をもって生

きねばならぬと力説された。

午後からは和歌創作を兼ねて帆柱山登山を行なった。木の間にはまだ残雪を抱く山道で、相語り、歌を口ずさみつつ登った。山頂では靑空の下、くつきりつ浮び出た八幡の町々を見下すと、冷たい風がひんやりとほおに触れ、前方、洞海湾を望めば小島が宙に浮いて見える。西方には遠賀川が蛇行して走り陽に輝いて目に映える。記念撮影をしたあと、新鮮な感動を胸に抱いて下山した。大正寺に着くと和歌提出であるが、感動が再び蘇るのであるうか、夕食後と連絡会議を前にこの合宿で感じた事、この合宿で得た事をどう生かしてゆくかについての全体討論を行なった。連絡会議では小柳先生から霧島合宿の大きな日程について御説明があった後、地区別に分れて、日本への回帰第三集配布等の件について話し合った。このあと、小田村先生が明日の御講義を前にあらかじめ用意された宿題の執筆にかかった。

四日目、十四日。いつもの朝の日程を終えたあと、山田先生の「夏目漱石と近代化」と題しての御講義があった。西洋文明の挑戦を受けた明治の時代に育ち、明治を担って生き抜き、明治の精神に殉じた漱石の苦闘の人生は実に偉大であった。国を考える事がなく、故人を心でしのぶ事が実感としてわからなくなっている戦後の風潮を憂えられる先生の切なる訴えが漱石の人生を通して生々と伝えられた。このあと班別討論に入った。この頃か、ようやく班の雰囲気も和らぎ心の交流も深まって行った。午後に入り山田先生が我々の作った和歌の批評講義をされた。自分の思いを正確に伝えること、その為に言葉の選択に注意すること。合

宿に来て反省した和歌が多いが、反省を振り捨てる所に歌ができるのだと、和歌創作の基本を指摘された。続いて班別で相互批評を行った。すなおな歌、感情のこもった歌には大いに感嘆し、理屈っぽく思いが伝わっていない歌に対しては大いに戒しめあった。漱しきの中にも和気あいあいとしたものがあった。次に太子の御本輪読に際し、小田村先生から宿題の解説があった。その一つに「和を以て貴しと為す」に関する問題があった。それは「和」というものが大切だと考えて生きてゆくという御言葉」にほかならず「現実の一時一瞬に於て和する心を養ってゆかねばならない」のであって、「これではなければならぬ」というのではなくて、そうしなければならぬからそうすべく努力しようではないか」という事だといふ村先生の講義が行なわれた。初めに今日三月十四日は何の日かと聞かれた。誰も答えられなかった。慶応四年三月十四日は五ヶ条の御誓文が發布された日、明治天皇が天地の神々に誓って、万民保全の道を立てんとされた日であった。そのあと、自分達はどうか生きて行ったら良いかとお話の中で、「うそが通る世の中はインチキはいやだと思ふ心を持って生きて下さい。」そして「恋人でも良い、両親でも、兄弟でも、何らかの為なら生命をささげられるというような対象を見つけて下さい。」とお話になった。その様な精神が愛国心にもつながるのだ。このあと川井先生から霧島大合宿についての説明があった。パンフレットを手にした皆の顔はほころんだ。このあと、コンパが行なった。深みのあるすぐれた歌が次々と飛び出した。

五日目、十五日。いよいよ最終日であ

る。太子の御本を全体輪読したあと、川井先生から「歴史と人生観」（国文研叢書川井先生著）の読み方についての説明及び講義があった。マルクス主義批判書でもあるこの本が出来た事は、日頃学園で理論不足に悩む我々にとっては心強い限りである。又先生は現代のマスコミの無責任さを痛烈に批判された。寝食を共に相語り学び来たった四泊五日もいっしか過ぎて、思い思いの感想文執筆を了れたいよいよ閉会式である。国歌斉唱の後小田村先生の津下君が力強く閉会の辞を述べた。天が下人といふ人心あわせよろづのことに思ふどちなれ、をいただき、古川さん、行武先輩からも激励のことばがあった。全日程が終了した。次は霧島で会おう。思い出の大正寺を後にささぎまな思いを胸に抱いて友らは全国各地へ散って行った。最後に、この合宿を確すあたり国文研の方々はもちろん、大正寺吉川工業及び藤村さん、事務担当の行武さん小林さんその他多くの方々の御援助に感謝して結びのこばに致します。

（長崎大・経2 白石肇記）

編集後記 三派系全学連の暴動は国民の耳目を集め、その多数にとつて苛たしいものにも映つて展開する世界の状況と北爆停止と次々に展開する世界の状況と日本の政治の極端な遅れを思ふ時、日本の自主は勝ちとれるのか、保たれるのかと思ふ。学問に権威があるものなら、学生にも教授、大学にも威厳あり規律あり衆望を担ふはず。学生は学問に無縁なのか。学問の世界には、一世人心をつながらしめる「まごころ」は無用となつたのか。好ましくならざる学生事件の瀬発に對して、も一度学問と人生に向ふ姿勢の検討から反省したいものである。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

いざ立たん、学園正常化に

此の頃の学生運動・学園紛争の暴状は、まさに目にあまるものがある。統計によれば、昨年二月の明大入試妨害事件以来、砂川・羽田・佐世保・王子の各事件を経て、本年三月の第二次成田事件に至る約一年の間に、検挙者総数延一四九五名、負傷者総数四一七三名・警官三四七八、学生五五四(他に死亡一) 第三者一四一に上り、警備車の破壊、官庁民家の器物の破損等は枚挙にいとまなしと言われている。この驚くべき数字は、いわゆる学生運動がも早正當な意志表示行為の域を超えて、一種の局地的内乱の様相を呈しつつあることを物語るに十分であろう。事実、彼等三派全学連の使用する武器は、単に角材や投石用のコンクリート片のみに止まらず、先の尖った竹槍や劇薬入りのビン等、明らかに殺傷を目的とする兇器をすら用いるに至っていると言つた。

他方、代々木系全学連を主導力とする学園紛争も、このところとみに激化の一端を辿っている。昨年中に何らかの形で学園紛争の起きたところは、全国で九四大学・国立四三、公立九、私立四二に上り、その中で「パレード封鎖」や「ストライキ」などの異常事態に突入したのは、実に二四大学に及ぶと言われる。この間、集会や煽動の喧嘩はもとよりのこと、学園封鎖や入試阻止や試験ポイント、果ては大学当局者への暴行や監禁や職務妨害等、およそ静なるべき研学の場にあるまじき暴状が、何の反省もなく繰返されているのである。

これら学園内外の激発暴走が、真にしかるべき理由に基づいて行われているのであれば、我々は不快感を抑えてもそれを忍ばねばならぬ。しかし、彼等が理由として取り上げる事柄、例えば学費値上げ反対にしても学生会館や学生寮の管理

運営の問題にしても、或いは学校施設の処分や移転反対にしても、それ自体が目的であるとは考え得ない節が余りにも多い。それ自身が目的であれば、大学当局との接衝においてもっと常識的な平静な態度がとられて、しかるべきであろう。さに非ずして、これらの理由は一般学生をより多く結集員するための口実に過ぎず、真の目的は他にあること、すなわち明らかに言え、この種の学園紛争を通じて多数の学生に集団行動の訓練をほどこし、多数の圧力に自信を持たせ、あわよくば学校施設の全部または一部の管理運営の実権を奪い取り、以て他日の政治的大変動期(通常昭和四五年と目される)における革命拠点を固めるのが最終の目的であることは、実際に学園内の空気に触れている学生諸君ならば、直ちに看破できることと思う。まして「支配者から歴史を動かす鍵を人民の手に奪い握りしめよ。全日本、全世界の学生、人民の斗いの前に支配者をして戦慄せしめよ」と呼号する三派系全学連の終極の狙いが奈辺にあるかは、言わずとも知れている。

かくして、今や日本の学園は、終極において左翼暴力革命を目ざす知的暴徒の集団によって、無惨にも荒蕪の極致に陥れられている、というのが偽らざる現状であろう。

祖国の将来を左翼暴力主義者の手中に委ねることを肯じないもの、祖国の文化伝統の継承の上に、一挙革命に非ずして不断改革のつみ重ねによって堅実な未来を築こうと志すものは、この際、手に唾して立つべきである。彼等知的暴徒をして、超過激な行動に駆り立てる基盤、その偏曲せるイデオロギーに対して、果敢な批判論戦を開始すべきである。そのための同志を求め、そのための策を練るべきである。彼等知的暴徒にしても、所詮は一握りの学生集団にしか過ぎず、彼等の独断的な思い通りに対して嫌悪感を抱く学生は、諸君の周囲に数限りなく存在する筈である。それらの俥友をして、無関心から脱却し、学園と祖国を自らの手をもって防護する決意に目覚ましめねばならぬ。我々が「国民同胞感の湧出」を祈念し、「祖国と共なる生の自覚」を力説して来たのは、そもそも何のためであったのか。その祖国が、そして我等の学園が危局に曝されているのを、坐視して見過すとすれば、我々の学園は死せる知識にしか過ぎない。知識は決意に、決意は実行につながるべからぬ。いざ立たん、同志諸君、学生諸君!

(鹿児島大学助教 川井修治)

目次

いざ立たん学園の正常化に……………	川井 修治	(1)
孝明天皇の御製について……………	夜久 正雄	(2)
葉鏑の記……………	桑原 暁一	(5)
葉山女子合宿詠草より……………	……………	(6)
早大紛争と私……………	今林 賢郁	(6)
早かけがえのない友を得たうれしさ…	山田 苑枝	(7)
第13回学生青年合宿教室案内……………	……………	(8)

孝明天皇の御製について

夜久正雄

最近、「日本思想の系譜」(中の二) 一國文研叢書No.61の編集にたづきはつて、孝明天皇の御製(天皇のお作りになつた詩歌をいふ)と御宸翰(御手紙)とを読みかへして、私は戦慄した。

今年の元旦の新聞に、今上天皇の「孝明天皇御陵」と題する二首が発表された。既に、本誌二月号に広瀬君の書かれたことで、重複するが、次にかゝる。

百年の昔しのびで陵ををろがみをれば
春雨のふる
春ふけて雨のそぼふる池水にかじかな
くなりここ泉涌寺

広瀬君はこの二首の御歌を味読して、「明治百年といはれ、いろいろ行事も執り行はれてゐるが、その明治維新直前の激動期に、身も心も砕かれ、御年三十六才といふ若さで崩御された孝明天皇を追憶する者の少ないのは残念である。」と論じた。さう言へば、明治百年は孝明天皇崩御後百一年にあたるわけで、たしか去年は、孝明天皇百年祭が行はれて、国鉄の車内ピラに、孝明天皇を祭る平安神宮のお祭りのことが書いてあったことを思ひ出す。

孝明天皇のおなくなりになったのは、慶応二年(一八六六)十二月二十五日である。翌慶応三年(一八六七)一月九日睦仁親王(明治天皇)御年十六才にて踐祚(先帝の崩御直後に、皇嗣が皇位をう

け継ぐこと)、翌慶応四年八月二十七日即位、九月八日、年号が明治と改元されたのである。そこで、慶応四年が明治元年となつて、今年を明治百年といふのは、慶応四年(一八六八)すなはち明治元年を崩御の年月以後を数へると百一年になるといふわけである。

私などどうっかりしてゐて気がつかなかつたが、去年の十二月二十五日には、孝明天皇百年祭の神事がとり行なはれたのであらう。今上天皇の御製は、春季のお歌であるから、神事に先立つて春季に御陵に御参拝になられたのではあるまいか。「百年の昔しのびで」といふ御言葉は、文字通り百年前といふ事実そのまゝであるが、維新直前の孝明天皇の御晩年の御苦斗をおしのびする今上天皇の深いお心がこもつてゐると思ふ。遠い歴史の悲劇をしめやかにおしのびになる深い哀惜の情感が言外にあふるばかりである。昭和の激動期を導かれる今上天皇の御感懐がおのづから孝明天皇の御心情に通ふからであらう。

明治百年の記念行事は、明治天皇をおしのび申上げることが根本であることは言ふまでもないが、明治の基礎をおきつたことになった孝明天皇の御精神を憶念することを忘れてはならない。

いまさらながら、孝明天皇百年祭のこ

とに心及ばなかつた自分の迂濶さが恥づかしかった。孝明天皇をおしのびになる今上天皇のお心のこもつた御歌を拜誦してさう思つたのである。

それにたまたま、「日本思想の系譜」の「中の二」は、幕末の文献資料の選集となつて、孝明天皇の御製と御宸翰との項を私が分担することになつたのである。前に、といつても二十年以上にもなるが、戦時中三条実美の歌集の研究を刊行した時、孝明天皇の御製集を読み、御宸翰を読む機会があつて、独特の強烈な、悲壯な語調に魂をゆすぶられたのであつた。今度また衝撃にも似た強い感動を受けたので、その感想を述べてみたいと思ふ。

広瀬君が前記論文の中に引用したのは、次の五首である。

さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふも国を思ひつ民おもふため(元治元年「述懐」)

天が下人といふ人こころあはせよろづのことに思ふどちなれ(同前)

人しらず我が身ひとつに思ひつくす心の雲の晴るるをぞ待つ(慶応元年「独述懐」)

日々日々の書につけても国民の安き文字こそ見まくほしけれ(又久三年「書」)

むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとつしくおもへ池の水鳥(「水鳥」)

特の御言葉に、痛切な御情意がしのばれるのである。

第一首目の御歌の「泣きみ笑ひみ」は「泣きつ笑ひつ」と意味は変わらないと思ふが、内にこもつた感じがする。国歌大観で引いてみたが用例はなかつた。国事に一喜一憂する人の心がまぎまぎと迫ってくる独特の御言葉つかひである。「国を思ひつ民おもふため」の「つ」も前の「み」と同じく並列の意味であらう。「さまざまに」「泣きみ笑ひみ」「国を思ひつ民おもふため」といふ、一種の重複が、起伏屈折しながら、みかけるやうに作者の痛切な情意を伝へるのである。

激しい強い情意が言語の制約を破るかと思はれる、そのざりぎりの線で抑へられてゐるといつた調子で、そこに作者の心のはりさけるばかりの緊張が表現されるのである。

第二首目の御思想は、挙国一致、国民協同の精神を鼓吹せられたのであるが、「よろづのことに思ふどちなれ」といふ稚拙なやうな和語がかへつて痛切な表現となつてゐる。天皇が討幕に反対されたことは有名であるが、それは幕府の為政者幕臣もまた国民であるといふお考へにもついでに全国民の和衷協同を願はれたからにはかならぬのである。明治維新を単なる政権の交代とせず、全国民の協力による改革運動とした精神的原動力はここに

にある。

第三首目「わが身ひとつに思ひつくす」第三句余りが痛切である。困難ともいふべき幕末の内憂外患に対して、文字通り天皇は「わが身ひとつに思ひつくす

わが身ひとつに思ひつくす

「責任を負はれたのである。天皇の御地位を祖宗と国民に対して深く御自覚なされた天皇は、一切の責任を御一身に負はうと決心なされたやうである。そこからあの既倒回天の御勇気が生れたのであろう。それは孤独感といふよりも強い責任感とみるべきであらう。自己の責任を感じるのには、自己自身以外にはないといふ意味で孤独であるが、しかしそこには目に見えない連帯感がある。

「日々日々の書につけても」「国民の安き」ことを願はれ、むらがりさわぐ水鳥を見て、内憂外患のうれひをとみにせよ、と呼びかけられる、深い激しい憂国の御情意がしのばれる。読みなれた御歌であるが心うたれた。

前述の拙著「梨のかたえとその研究」に掲げた御歌は誰か先輩の教導を得て選択したものであるが次のごとくである。

秋雨

詠めつゝ思ふも淋し秋の雨の降るがまにまに木の葉ぬれけり
 「秋の雨の降るがまにまに木の葉ぬれけり」といふ精妙の自然鑑賞と一首に行きわたる寂寥の感情は作者の精神の真実を示すものである。

冬夜

鳥羽玉の夜すがら冬のさむきにもつれておもふは国民のこと
 「夜すがら冬のさむき」といふ実感についで「さむきにもつれておもふ」といふ同情心の御表現は切実そのものと拝される。

寄神祝言

言の葉のたむけうけてよ国民のゆたけ

きことを神もおもはゞ

倒置法で、「言の葉のたむけうけてよ」を最初に置いて強調する。強く率直な語調である。他をかへりみる余裕のない、没頭した御姿勢が、痛切な情意のまっすぐな表現となるのであらう。「言の葉のたむけ」といふのは、神仏にさげける和歌のことである。天皇の御製を今度しらべてみて気づいたことであるが「御法楽」の和歌が、全体の三分の一くらいあった。「法楽」といふのは、神社仏閣において神仏にさげける和歌をよむ歌会のことである。「孝明天皇紀」の記事を見ると、今日宮中歌会に行なはれるやうな歌会が、神社仏閣に対して行なはれたやうである。そこで御製はじめ歌会の和歌が、神社の方向に向って朗詠されたことが記されている。「言の葉のたむけ」は、文字通り、神仏に対して朗詠される歌である。この御歌は、歌そのものが神にさげられたものであるが、同時に「言の葉のたむけ」はこの御歌をもさすものである。「うけてよ」といふ痛切、切実な、率直な御訴への言葉は、神をあふぐお心の深さを示したまふものと思ふ。

柳

うちなびく柳の糸のすなほなるすがたにならへ人のこころは
 寄氷述懐
 天地にみつるさむきのおつ氷あつくもおもひつくすねがひよ

竹雪深

国のことふかくおもへといましめの雪のつもるか園のくれ竹

夏歌

身につもるうきをば今日に夏衣いざや涼しきよをわたらなむ
 傍点を付したところが、それぞれ前後の脈絡をもつ個所であるが、自然現象に寄せて思想感情を述べる脈絡が、自然でしかも非凡で、作者の情意の痛切なことをあらはしてゐる。そしてその情意の中心は、国をおもひ民をおもふ天皇のお心である。国と民とを思ふ天皇のお心が、これほど直接に、痛切に、また率直に表現されたことは、孝明天皇以前の文献史上にさう多く見られないのであるまいか。このものに寄せての述懐の言葉の脈絡の力強きは、記紀や万葉前期の歌謡の序詞の表現に通ふものがある。

「寄氷述懐」の「天地にみつるさむき」といひ「あつ氷あつくもおもひつくす」といひ御言葉には、言葉にならないほど深く切実な御心が、一首の全体に行きわたりますみずみに充ちみちて、行動に移らうとするぎりぎりの情意を表現してあると思はれる。かうした情意の自覚としての作歌こそ真の歌というものであらう。

「あつくもおもひつくすねがひ」とは国と民との安からむことである。だからこそ「竹雪深」の御歌に、降りつもる雪を見て、それを、「国のことふかくおもへといましめの雪」と受取られたのである。ここにはただ国と民のために文字通り身心をさげ奮斗されるお姿があるのみである。「夏歌」の御歌のくもりなき節奏は、無私のお心にめぐまれるやすらぎであらう。聖徳太子の「神情開朗

にして小葉の凝滞なし」との御言葉をさながらあふぐおもひがする。

天晴有鶴声

あさ庇日影うららに空見ればさもうれしげにたづ鳴きわたる
 「さもうれしげに」といふ一句が作者が自然と全く一如になったことを表現してゐる。この対象との共感といふことが人生の根本体験である。無心の鶴のいのちにも徹するものは、作者の無私の同情心であつてこれなくして遂に人生は地獄だ。

樵夫入山

一ふしをうたふ樵夫の声とほくなるや深山にわけてゐらむ
 遠ざかりゆく樵夫の声を聞きながら、樵夫の行く方々に思ひをはせる、その微妙な心持が、心理の自然の開展のまゝに語調にのせられてゐる。「ひとふしをうたふ樵夫の声」といふところまでは、むしろ概括的表現であるが、「とほくなるや」のこの「や」で遠ざかる樵夫の声に集中する作者の心情があらはされ、一転して樵夫の行方に行者の心が馳せられるのである。ある時間の経過をたどつて一点に集中する作者の心情が、その心理的経過のまゝ表現されてゐる。「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」といふ表現法に似たところがあつた。

浦夏月

三熊野の浦のゆふなぎはのめきて涼しくいつる夏の夜のつき
 「はのめきて涼しくいつる」の句に清爽な御心が生き生きとあらはれる。

社頭花

おのづからたむけともなれ神のます杜
のこずゑに咲ける桜は

倒置法による強調が、作者の敬神の情
意を表現して、自然で率直である。どの
お歌もみな絶唱である。

孝明天皇の御製は、題を定めてお詠み
になったお歌が多いと思はれるにかゝは
らず、不思議にも、概念的類型的なお歌
が少なくない。ほとんどのお歌にも、強い
痛切な情意がよまれてゐる。

それは天皇が、はげしい御性格であつ
たといふよりも、その御生涯を緊張充実
した御姿勢でお送りになられたことを意
味するものだと思ふ。

幕末の激動期をいつからとするかは人
によつて違ふのかも知れないが、嘉永六
年ペリー来航以後がふくまれることはま
ちがひない。孝明天皇が踐祚なさつたの
は弘化三年(一八四六)で、この年既に
外国船が琉球、長崎に来てゐる。嘉永六
年は、孝明天皇御治世第七年に当る。幕
末の激動期すなはち孝明天皇の御治世な
のである。この約二十一年の間に、日本
はいわゆる幕藩体制から王政復古の体制
に移り、それはやがて明治の「帝國憲法
」の天皇中心の近代国民国家に移行し
たのである。その原動力は、外国の侵略
意志に対する日本の自立の意志であつた。
幕末の攘夷は、無智のアナクロニズ
ムではない。身をすて、国を守らうとす
る精神の叫びであつたのである。この精
神を實踐し鼓吹されたのは、外ならぬ孝
明天皇そのお方であつた。御製は次の通
りである。

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこ
ゝろにかゝる異国の船
寄風述懐

異人とともにほらへ神風やたゞし
らずと我が思むものぞ
同

こと国もなづめる人ものこりなくはら
ひつくさむ神風もがな
碇

うたでやむものならなくに唐衣いくよ
をあたに猶おくりつゝ
また

神ごころいかにあらむと位山おろかな
る身の居るもくるしき
の御製は、安政五年井伊直弼の日米調
印独裁に対して、天皇が公卿に示された
といふ宸筆の勅書の御精神と同じもので
ある。勅書には、時勢を憂慮されその責
を御自身に求められる御心情が精しく述
べられ、「実以身体茲ニ極り手足置ク所
ヲ知ラザルノ至」といふ痛切な御心が憚
るところなく吐露されてゐる。かくのご
とき御心に対して、幕末の志士は感奮興
起したのであつたらう。幕末志士の勤皇
思想は、国学儒学の流れを汲むものであ
つたことに違ひはないが、その勤皇感情
は、直接には、私は、孝明天皇の御精神
に對しまつるものであつたと思ふ。

散らぬそのまに
は、この間の消息を劇的に伝ふる一例で
ある。

次にかかげる幕末の人々の歌も、みな
単なる勤皇の觀念の表現ではあるまい。
直接には孝明天皇に對しまつる忠義感情
の表現であつたと、御製御宸翰を読んで
私は思ふのである。

すべらぎの星となへますころかとおお
もへば里に鳥のねぞする(三条実萬)

大君につかへささぐる我がこころ都の
そらに行かぬ日ぞなき(徳川齊昭)

君が代を思ふ心の一筋に吾が身ありと
は思はざりけり(梅田雲浜)

大君のためには何か惜しからむ薩摩の
瀬戸に身は沈むとも(僧月照)

大君の憂き御心をやすめずばふたたび
国にたちはかへらじ(有村雄助)

惜しまじな君と民のためならば身は
武蔵野の霧と消ゆとも(和宮内親王)

露のまも忘れがたなき大君の御代の栄
えを祈りつ我は(有馬新七)

つぎてよ峯の松風(松本奎堂)

おやおやの親よりうけしすべらぎの厚
き恵みはあに忘れめや(乾十郎)

つくしてもなほつくしても君がため賤
のいのちのあらむかきりは(安積五郎)

かくばかりなやめる君の御心をやすめ
奉れや四方の国民(平野国臣)

いそたびくりかへしつづつ我が君のみ
ことし読めば涙こぼる(久坂玄瑞)

もししきの軒のしのぶにすがりても露
の心を君に見せばや(真木保臣)

大君のおほみ心をやすめむと思ふこゝ
ろは神ぞ知るらむ(中岡慎太郎)

御宸翰勅書勅諭について述べることは
できなくなつたが、御製の切実さ率直さ
がそのまま御文章に示されてゐて感涙を
禁じえない。時勢に真正面からぶつつか
つて逃避も自惚もなく現実そのものと対決
されたをしい御精神を仰ぐのである。
御製を拜誦し御宸翰勅書を読むと、天皇
政治の実内容は、つまり王政復古の精神
は表現されてゐることがわかる。これ
が、明治に継承され成文化されたのであ
る。明治百年を思ふ人には是非この孝明天
皇の御製御宸翰勅書を読んでもらひたい
と思ふ。そこに明治のなまの原型があ
る。それを知らずしては、明治はわから
ない、と極論してもよいと思ふ。

(亜細亜大学教授)

薬狛の記

桑原 暁 一
(都立千歳高校教諭)

推古紀(日本書紀)に見える薬狛の記事を摘記する。

十九年夏五月五日、兎田野に薬狛す。鶏鳴時を取りて、藤原池のほとりに集り、会明をもつて乃ち往く。粟田細目臣を前部領と爲し、額田部比羅夫連を後部領と爲す。この日、諸臣の服色、皆冠の色のままなり、各々鬘華を著せり。すなはち大徳・小徳は並びに金を用ゐ、大仁・小仁は豹(なかつかみ)の尾を用ゐ、大礼より以下は鳥の尾を用う。

廿年夏五月五日、薬狛す。羽田に集りて、相連きて朝に参趣る。その装束、兎田の猶の如し。

廿二年夏五月五日、薬狛す。

この日に菖蒲(あるいは蓬)を軒に掛けて、厄病除けにする風習を考え合わせれば、いくぶんは首肯せられよう。この記事で目を惹くのは、これに参加した諸臣がウズをさすことである。推古紀でウズを著用する記事は、このほかに二つある。一つは、十一年十二月に冠位十二階が施行せられ、それに伴って服飾が制定せられたが、元日にはウズをさす、ときめられたことである。もう一つは、十六年秋八月に唐の使客を迎えた日に、皇子・諸

臣、悉く金のウズをもつて著頭にした、とあることである。ウズをつけることがきわめて重大な意義を担っていたことが察せられる。ヤマトタケルノミコトのお歌として伝えられる歌に

いのちの全けむ人はたみこも平群の山のくまかしが葉を うずにさせ その子

とある。「うずにさせ」とは、「うずとしてさせ」と云うことである。それは、いのちの全きこと、すなわち、まめで、すこやかであることを祝福するしるしである。正月元日あるいは薬狛の日にウズをさすことの意義はそれである。ウズをつけるのも、その長途の平安を祝福するためのものではないか。クマカシの葉が、それとは異質の、金その他にかわつても、そのあらわす意義にかわりはあるまい。

さて、この薬狛というのは、薬草を採集することだとも、薬用の、鹿の袋角を取るためだとも云われる。そのいづれにせよ、それは、多少の実益を兼ねた、野遊・遊山の類であるとは思われない。それは、聖徳太子の創建にかかる四天王寺に、施薬・療病・悲田・敬田の四院が設置されたことと切りはなせない、重大な意義をもつた行事であると考えられる。

有名な鑑真和尚は、「経の文を正さしむれば、口に誦して多く直す。薬の名を問へば、鼻にかきてみな弁ふ」(「三宝絵詞」による。)と云われている。聖徳太子が師とせる高麗の惠慈、また惠慈と前後してやってきた百済の慧聰について、

推古紀は、「この両僧は仏教を弘演めて並びに三宝の棟梁たり」と云っているのだが、やはり医薬の心得もあつたのではなからうか。

慧聰の名は、法華経寿量品に「譬へば良医の智慧聰達にして、明らかに方薬に練し衆病を治す云々」とあるのを思わしめる。惠慈の弟子と思われるものの中には唐に往つて医学を勉強したものがあつた。太子の薨去した翌年の三十一年七月に来朝した新羅の使節といつしよに大唐留学生の惠齊・惠光及び葉惠日・福因等そき帰国した太子の薨逝を伝え聞いて、いそぎ帰国したと思われる。ところでこの四人のうち三人に惠の字が付いている。それで彼等は惠慈の弟子であらう、と、ぼくはかんぐるのである。この四人の中の、葉福因は、十六年九月に唐に遣わされた留学生八人の中に見出される。してみると、彼は、まる十五年間在唐したことになる。また、その八人の中に、惠の字の付く、惠明・惠隠というのがある。これらも惠慈の弟子であらう。いづれも太子の配慮によつて、えらばれて遠く唐に留学したにちがいない。

薬狛という語は推古紀以外に日本書紀に見出されない。しかし、それはひきつゞき行なわれたらしい。天智紀の七年五月五日の条に、「天皇、蒲生野に縦狛したまふ。云々」とある。このときのことには万葉集に出てよく知られている。天皇の蒲生野に遊狛したまへる時額田王の作れる歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見えずや君が袖振る

皇太子(大海人皇子、後の天武天皇)も、答へませる御歌
むらさきのにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

とあつて、そのあとに「紀に曰く」として、前記の天智紀の記事が附記されている。縦狛と云い、遊狛と云つても、それは薬狛とかわりのないことかもしれない。しかし、そこには本来の意義よりも遊楽気分のほうが、よけいに感じられる。それは薬狛だけのことでない。一般的に、自他の身の「くすり」になるものを求める意気込みが薄れつゝあつたのではないか。法隆寺が炎上したのは天智天皇の九年四月のことであつた。(四三・三・二〇春分の日に)

追記
去る四月三日、佐賀のS大兄のお供をして、聖徳太子の御廟(河内・磯長)に詣でた。紙面の都合を慮つて、くわしいことは云わないが、その途々、「黒上先生の、磯長参拜の長詩をよんだ覚えがある。それが、いつ、どこであつたかは忘れたが、その一部はそらんじている。」とぼくが云つたら、S大兄は、「その長詩をぼくは持っている。ぼくのところで見たのではないか。」と云われた。帰宅して間もなく、S大兄から、黒上先生の「磯長参籠」の詩を書き送つてきた。そして、それが、大正九年、先生廿一才のときのものであることを知つておどろいたのである。(四月十八日記)

磯長参籠
黒上正一郎
御墓山の茂木がもと

御廟のまへに轟なきしきる
しづかなる夜半なりき

おほまへの砂地にぬかづきまつり
念ひまつる太子のみ言

恋慕渴仰つきざる思ひの
わが胸ぬちらにみちわたりしか

二
陵のおほまへに燈をともし
憲章を誦しまつり夜は更けぬ

久遠劫よりこの世まで
あはれみましますおほみめぐみよ

念ひまつる我等がこころは
和国の教主聖徳王と

その一語にきはめしめらるゝか

三
彼の海の本に非らずとのたまひし
祖国憶念と

共に是れ凡夫とおほせられし
内的平等感と

そを統べしむる帰命三宝の原理を
示したまひし十七憲章の和の、

また片岡山のみうたの
悲痛なることばのリズムよ

いま胸のうちに生きしめらるる

四
その夜ひろげし憲章のすりぶみは
君がたまひしそれなりししか

そのみこころにつらなりまつる
そはまた通ふ、古への名もなき民の

「日月は輝きを失ひて天地既に崩れぬ
べし

今より以後誰を待まんや」とふ
悲痛なる言葉よ

あゝ、その不思議の開展よ

(大正九年九月作)

葉山女子合宿詠草より

(三月三十日より三日間。葉師寺、藤沢に次いで三回目の女子合宿。各地の女子大生、今春卒業生など十四名参加)

梅田 咲子

風邪のため行けぬと告ぐる友の声受話器の奥に小さく聞ゆ

逆光にきらめく波のうねり寄せ岩に襲ひて高く舞ひ散る

岩の間の窪みに寄する小波の寄するがままに海くさゆらぐ

三宅 教子

ざわざわと波うち寄せて吾が坐る岩の近くにしぶき砕けり

薄雲におほはれくれればいつしかに海と空との境も分かず

青砥 道子

砂浜にすわりて母子の遊び居るむつまじき様に心ひかるる

人かげもまばらになりし午後後の浜に波の寄せ来る音のさびしき

島田 寿子

よせる波かへす波にも声たてて波うちぎはに遊ぶ子供ら

幼な子の海に向ひて走れるをみまもる人の顔もほころぶ

夜久 和子

果てしなき海のただ中かくれ岩によせては波のくだけ散りゆく

白波を背にもくもくと動く人なにをさかすか岩の間に

合宿を終へて

田川美代子

何もせず何も想はずイスに深く身をうづめたり心持よきかな

しみじみと胸にみちくるよろこびに身はふるひけり涙ぐみけり

末の娘の我がゆく末を案じ給ふ老い母のもとに帰りゆきなむ

ふるさとに心おちつけ子を教ふ仕事にすべてをささげつくさむ

国民文化研究会主催の合宿教室に参加し、今春大学を卒業した諸君が「第五葦牙」といふ文集を刊行した。あしかびとは古事記冒頭の「國稚く、浮べる脂の如くして、水母なす漂へる時に、葦牙のごと萌え騰る物に困りて成りませる神の名は、ウマシアンカビヒコチの神」により、四年前の卒業生が始めて「第一葦牙」を刊行し、以下順を追って今年も葦牙を襲名して第五を名乗る。こゝに紹介する二篇の他、何れも真剣の志を語っている。執筆者次のとおり——心を鍛えて過ごした四年間(天皇と政治) 九大古川修、歌のころ・東京女子大梅田咲子、ありがたかつた一輪説(の体験) 九大津利比古、「斉唱」と「心の統一」 九大島津正弘、和歌創作に求める心 玉川大勝山啓子、大いなる生命に目覚めて 富山大岸本正、真の友々を求めて 早大大河原倫子、対話の欠けた学生生活 京大溝江優、「信じるということ」 京大井上慎一、深くつきつめて考えることを知った 共立女短大寺田和子、自己の「甘さ」との戦い 富山大中田一義、我が思想の断片 京大福島義治、日本の女性として 西南大古川慶子、現代学生のあり方 下関市大梅谷道明、与えられた課題 熊本大堀切勝之、学生生活断章 早大加山和秀、相対性の自覚と人類への貢献 玉川大原正昭、心の核を踏まえて 九大脇坂佳秀、感慨 亜細亜大島海利明、富沢賢治の教育的性格と今日的課題 玉川大山本満、しきしまのみち欄 東京女子大梅田咲子編

早大紛争と私

早稲田大学政経学部
今林 賢 郁

ぼくが四年間の大学生活をふりかえって、もし何かを記すとすれば、ぼくは何よりも昭和四十一年の早大紛争について語らねばならない。この事件にぶつかるまで、ぼくの学問態度は、自分の身でもって確かめ、体得したこととび出さず、できる限り観念的に走った言葉を使わない、ということであった。しかしその一方では、大学という最高学府に学ぶ者である以上、物事に対するときには、常に科学的で客観的態度を固持していなければならぬ、という今にして思えば奇妙な錯覚にとらわれていた。ぼくは、「科学的思考法」という言葉の魔術に魅せられがちであったことも事実である。ところが、あくなき理論体系的追求

と、それから導き出される合理的論理的判断力を養うことのみが学問の道である、という考えがいかなる結果をひきおこすかを、決定的にぼくが思い知らされる時がきた。すなわちこれが早大二年の末におこった早大紛争であったのである。この紛争がいかなる結果を大学内に生みだしたかは後述することにして、この事件によってぼくは、それまでのぼくの学問態度が、果してどこまで通用するのかが、現実的に確かめなければならなくなつた。もし自分の生き方は別だ、といつて傍観すれば、それまでの自分の生き方がいかに加減なものであったことを、自ら認めなければならぬ破目に立たされたわけである。従って、この事件は、マスコミの大問題であつただけでなく、ぼく一人にとつても実に重大な問題であつた。

思えば、一五〇日間にも及ぶあの紛争が始つたのは、大学の構内には木枯らしのふきぬける寒さの厳しい一月下旬であつた。

つた。ところかまわず立ち並ぶケバケバしい立看板とマイクを片手に怒号する自治会の連中の姿が、今でもありありと浮かびあがってくる。紛争の内容については、当時のマスコミにも盛んにとりあげられたので、既に御存知の方も多いと思われるが、事件の渦中であって、それをつぶさに体験した者として、簡単にその内容を記しておくことにする。

紛争の当初においては、純粹に授業料値上げ反対運動という一面もみられないわけではなかったが、その内幕は、一九七〇年の安保再改定時期に、日本に革命を成就しようともくろむ政治分子が、早大内に革命の拠点をつくろうとする不穏な動きであったことは、まづ間違いないと思われる。学費値上げ反対運動の名の下に巧みにカモフラージュされたこれらのこの隠された意図に、物の見事に乗せられていく一般学生の動きをばくはいらだちと驚きをもって眺めていた。早稲田大学の授業料問題が、ヴェトナムその他の政治問題と同じ次元で考えられ、しかもそう考えることが「科学的思考法」であるといつて、平気でいるかれらの論理のまやかしに、ばくはまづ疑問をもつた。更に、自己の政治的見解に同意する他大学の政治分子を学内に入れて、応援演説をやらせるといふのは、それこそ「学園の自治」をふみにじる最も甚しきものではな

い。このような疑問を抱いたばくは、自己の無力は十分に承知しながらも、自分の所信を全学友に訴える必要を感じた。だが、それを一人でやることは大変勇気のいることであった。ばくは逡巡したが、その時思ったことは、一般学生は現在の学生運動に疑問をもちながらも、その正常化のために一人がいくら頑張っても

結局はダメだ、というあきらめから、この状態を放任放置し、それが結果的に益々自治会の連中を増長させ、現在のようにな許し難い状況を生み出しているのだ、ということであった。そして、それがいかに多くの混乱と迷惑をひき起していることか。このように考えたばくは、自分の氏名と住所を書き入れた三千枚のピラをまくことを決意し実行した。

ばくはその反応を期待と不安ともって見守っていた。全く反応がないかもしれない、しかし一人は共鳴する学友もいるのではないか—このいう気持でいたばくに、早速、二通、三通と共鳴する旨のハガキが舞い込んできた。ばくはこの便りに再び力づけられ、活動を再開した。ピラもまたいたし、議論もやめた。こうして五人が十人となり、十人は二十人となり、着実に友はふえていった。だが事あるごとにばくは、自分のいたたけな活動する勇気をなくしてしまうことも度々であった。そのようなとき、いつもばくの心を支え、再びふるいたたせる力を与えてくれたのは、聖徳太子の「一人出家すれば魔宮皆動す」といふ御言葉であった。自分のためらなさを痛感し、もう一切の活動をやめようかと思つたとき、ばくはいくたびこの御言葉を心の中に念じたことだろう……

心の底からわが心を開き、又人の心の中にとびこんでゆけば必ず人のこころは通い出すものだ、という信念のみがばくを支えていたが、いざ実行してみると、その事がいかに困難なことであるかを身にしみて思った。だが、その困難をのりこえて、お互いの心が通い出した瞬間、ばくが味わった辛さ苦しさは、たちまち

びを胸にひめつつ、ばくは更に友を求め、学内の同意に語りかけていった。必ずばくの気持をわかってくれる学友がいることを信じながら。

紛争は結局、全学投票という形で解決したが、そのあとに残されたものは、大当学当局と学生たち、あるいは学生相互間の癒しがたいほどの心の荒廃であった。学内にはひからびた殺伐たる雰囲気充滿し、ばくはこの悲惨な状況の中でいたたまれない気持であった。しかし、この悲惨な状況に深く思いをこらしている学友は少なかつたのである。何故にこのようにな傷ましい状況が生れてしまったのだろうか—この問題に様々な思いをめぐらすとき、ばくがいきつくものはやはり次のようなことであつた。

紛争の間中、学内に横行したものは、「合理的」「論理的」思考法という言葉を展開していく中でお互いが深く傷ついていたのではないだろうか。「科学的思考法」という言葉に権威をもたせ、すべてを科学の名の下に物を言っていた連中が、実はあの紛争のリーダーたちであり、それを背後から好意的に見ていた教官たちであつたのである。その学生や教官たちは、人間の情意情操などには、平素から余り関心もなく、ことに学問の世界からはそれを排除しようとしていた。その結果が紛争を長びかせ、学内に救い難い心の荒廃と人間不信の情を生みだしていったのではないかと、ばくは思つた。科学が精神を支配し、それがうみ出す弊害の恐しさは、たまたまばくが経験したこの一事件の中にも如実にあらわれて、自分自身を考へ、着実に思考していくことの大事さと、それ以上に、そのむ

づかしさをまざまざと痛感したのである。なぜなら、それは、安易でいかに加減な理論を自己の中に介在させることを拒絶しなければならなかつたし、あらゆる目的意識やほからなかつたし、物事に向うことを意味したからである。およそ自己の痛切な体験から発した言葉ではなく、ボール玉のように一方から他方へとのりやう園の中で、ばくが知りえたことは次のようなことであつた。

いかなる理論体系をくみだしても、それをとり扱う人の心がその理論に屈服している限りは、その人は理論の「とりこ」になつてしまうこと、そして、柔軟で強靱な精神をもつためには、つねに自己の心を鍛練しながら、人の心の々々ゆらぎまでもわかるような人間にならなければならぬ、ということであつた。以上のように、この早大紛争によつてばくは、学問するということの厳しさをあらためて考えさせられ、それはこの世に生きる姿勢を整えることを生々しく迫つた事件でもあつたのである。これから的人生において、さまざまな問題にぶつかる時、ばくはおそらく、この事件によつて学び知つたことをいづれも思い出しながら、物事に処してゆくことだろう。

かけがえのない
友を得たうれしさ

共立女子大学短期大学文科
山田 苑 枝

冬休みも終りに近づいた頃、母と雑談をしておりましたら、母がこんな話をしてくれました。

何時か弟(高校二年)との会話の中で、天皇制をどう思うかという事にな

り、弟は、「国の象徴としての天皇は認めるけれども、それ以外の事は疑問に思う」と言ったそうです。母は信じ切つていた弟からのこの意外な言葉に驚き、終戦の時の御製や明治天皇の御製を示して、大御心の深さと、その大御心に応える為に命を捧げて出陣した若い人達の思いなどを母なり精一杯話したところ、弟は「わかった、僕は恥かしい」と言つて考えこんでしまったそうです。そしてそれか

第十三回学生青年合宿教室 案内

この「合宿教室」は、本年で十三年目を迎える。その間の参加者数は、数年前にすでに二〇〇名を突破した。当時、学生であったそれらの人たちは、いまは社会人として、社会各層で縦横の活躍をしておられる。

かえりみれば、それらの諸君の学生時代は、祖国軽侮の風潮が一般的であつて、「日本の良さ」を求めようとするこの「合宿教室」に参加することさえ、大変に勇気のいることであつた。それだけに、それらの諸君は、いま、ここ十年間における日本の社会風潮の推移について、どれほど感慨深く見守つておられることであろうか。いままでの日本は、自然の推移にまかせても良かったかもしれない。だが、これからはそうはゆくまい。国全体、国民各層を挙げて、いまいまだ敗戦後二十余年の足あとを見直さねばならなくなつた。いわば、格段の速度と決意のもとに改めて時代脱皮が要請されてきているからである。

その脱皮とは何か。一部の人がいろいろうように、それは、階級闘争に立つ政治的革命を呼び寄せることか、それとも、祖国日本の榮ある文化伝統と日本の情緒

らが大変で、弟は自分の考へてゐる事や、和歌を書き込んだノートを持ってきて感想を求めた、暇があるとお母さん、話そう」と言つて、深夜まで付き合つたりする事が度々で困つてしまつたけれど、「話し合うというのはいい事ね」と嬉しそうに話しました。

私は、その話を聞いて、国民文化研究会の主催で行なわれた雲仙の合宿に参加した当時を思い出しました。学ぶ事の

主催 大学教官有志協議会 社団法人国民文化研究会

に立つての躍進を求めることなのか。いま日本は、その岐路に立たされている。ではこの時代に、どう対処し、どう生き抜けばよいのか。それこそ、この「合宿教室」の課題でなければならぬ。

ひるがへつて、いまの学園には羽田・佐世保騒乱に見られるような極端な暴力主義や無気力な享楽主義が充滿してゐる。これが日本の大学の本来の姿だとは、とうてい思われぬ。この実情に対して、われわれは、豊かな情意と、その上に立つた理論と、体験に密着した思想とを、日本全国の学園に新生させたい、と念願する。

諸君の先輩たちも、例年のように、勤め先での貴重な有給休暇を活用して、諸君の相談相手となるべく、この「合宿教室」の助言者として全国から集まて来られることでもあらう。その数は今年も四十名を越えるかも知れない。先輩と後輩とのつらなりの中で、人生を追求する輩とは、また榮しさも格別のものである。

会場は、九州の名勝、霧島国立公園である。長い夏休みの一期間を相集い相語らつて、日本の青年の行くべき道を、全身身を傾けてお互いに考へていこうでは

厳しさに姿勢を正し、日本人として生まれた喜びに涙を流し、心と心のふれ合いがどんなに大切なものであるかを体験し生きている事の素晴らしさを感じてほしい。しかしそれからの私は、古典を読むにしても、和歌の創作をするにしても自分の未熟さを反省させられるばかりで、苦しむ事が随分多くなりました。昨年の春に藤沢で開かれた女子班の合宿と、夏

期日 八月三日(土)より七日(水)

場 所 霧島国立公園「キリシマ第一ホテル」

参加者 男子の大学生および社会人約二〇〇名(女子については紹介または推薦による)

講義 (仮題)西洋文化との対照における日本文化の問題

ドイツ文学者 竹山道雄氏

これからの国づくり―物心両面の理想は何か 木内信胤氏

世界経済調査会理事長 木内信胤氏

日本が赤化したら―ロシア革命の体験 評論家 高谷覚蔵氏

その他特別討論・テキスト輪読・和歌創作・高千穂登山

費用 参加費、学生三五〇〇円、社会人五五〇〇円(食費・宿泊費・プリント代含む) 参加学生の片道旅費は主催者負担

申込 六月一日から七月十日まで

申込先 東京都中央区銀座七の三柳瀬ビル内 社団法人国民文化研究会 宛

ないか。全国各地からの参加を期待します。

阿蘇での合宿に参加しましたが、自分の思った事を多少なりとも話す事ができ、お友達が熱心に聞いて下さった事がとても嬉しく、又思った事を言葉にして話す難しさとは、言葉に託して自分の思いを話すことは、自分自身をしつかりと確かめることになるということを知り、その為にも勇気を出して、東京八日会に出席するように心掛けました。東京八日会というのは、国民文化研究会の合宿に参加できなかった在京の方々が、毎月三回、集まつて勉強が続けられているのです。八日会に参加できなかった方々の輪読や和歌の相互批評での真剣な態度におされ、たじたじたこともありました。真面目に学問に取り組み意欲を与えてくれる八日会には、何時までも私の心に残る事でしょう。

今、残り少ない学園生活を振り返つてみますと、余りにもあつてなく過ぎ去つた二年間で、希望した学科に入りながら、入学当時の願いを何一つかなえることができず、胸を張つて卒業できないのが残念ですが、私には、学園の学問とは別に、勉強する場がありました。そして何時迄も心の支えにできる多くのお友達を得ました。勉強は強いて勉める事によってこれから先も続けていけると思

いますが、誰を思い出してもシーンと胸が熱くなるような、かけがえのない良いお友達にできた事が何よりも嬉しく、本当に幸せだと思つています。

編纂後記 藤の花つじの花が美しく、山野の新緑が鮮やかである。この春卒業して社会に出た多くの後輩友人の顔が目に見え、彼らの志を学園で受け継がうと、その思ひを綴つたも一つ若い友人達の心のこもつた印刷物も一二に止まらずに書いた。心をついにしよう、交流を実現しようとするその世界に、心は帰順しようとする。その願ひと信は動かざるものだ。憂ひに心の乱れることはあつても

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間 360円

真実の報道とは何か

関係がこう語った、自動車事故で二人死んだーなど、日常ニュースとして伝えられる事柄は、多くの事実のなかでニュース性のあるファクトと解される。それはそれでよいのだが、このような報道がすべて々真実かどうかとなると問題がある。当局の思いつきの発言なのか、成案を得たうえで言っているのか、事故にしても、原因はなお検証を要する、といった問題が残る。別の例をあげると、米空母エンタープライズの佐世保入港のさい、全学連の出撃拠点となった九州大学の模様は細かく伝わったが、全学連の入構を拒否した長崎大学自治会の動きはそうでない。両校で行なわれた事実をそのまま公正に報道することによって、はじめて全学連をめぐる客観的事実―真実の報道に近づくことが出来るのだ。

区別して報道するという趣旨である。歴史の由来からいえば、党派に片よった政争まがいの報道はお互いにやめようという知恵から生まれたモットーであるが、いまではなんとなくすべての報道についての一般の原則とされてきている。しかし、全学連騒動の報道をとってみても、一方の事実は伝わるが、もう一方の事実は抹殺される。また全学連を声援という一面だけが拡大強調される場合が多く見受けられる。というように、報道が事件とイデオロギーのつきまぜである。そこで、いまの報道姿勢について二つの疑問がわいてくる。一つは、客観的報道というカクレミノの中で、極めて主観的な伝え方が行なわれていないか。二つには、客観的事実の報道なるものが果たして可能なか。

第一の疑問は、裏を返せば、すべての報道は本来主観的なものであるということである。なぜならば、あらゆる出来事がすべて報道されるのではなく、そのなかから取捨選択して伝えられるものであるからだ。つまり、当初において無数の材料の中から、記者の理解と価値判断に基づいて、ニュースとして表に現われるのであるから、そのままが客観的事実とは断定できない。ましてや特定のイデオロギーにとらわれた立場から事件をみて報道した場合は、客観的事実という錯覚を讀者に与えながら、全く主観的なことを伝えているわけだ。ごくありふれた事件、たとえば交通事故の場合、あまりの痛ましさに「集まった人々は怒りをぶちまけていた」と結ぶ記事について、京大の会田雄次教授は「誰がどこへ怒りをぶちまけ、どうしてくれといっているのか、具体的に何と何がしからんといっているのか」と指摘して、「怒りをぶちまけている」で済ます記事が多すぎると述べている。この場合、この報道のすべてが真実であることにはならないわけである。

このことは第二の疑問―客観的事実の報道は果たして可能かにも結びついてくる。記者個人が全く客観的に伝えたと信じてても主観が混じっていることは前述の通りである。だから客観的事実の報道というものは、むしろその中身は、丹念に追及する主観の累積といった方が実際のよいのである(官庁や会社の発表人事等決まり物に類するニュースは別である)。さればこそ記者(執筆者、デスク、整理、校閲を含めて)の鍛錬が要求されるのである。

今年二月初め、倉石発言が大問題となった。アメリカの情報艦ブエブロ号捕事件を機に、日本海波高しの情勢下で

倉石農相(当時)が記者団に対し「日本の漁船の安全操業のためには、軍艦や大砲を持たなければだめだ。他国の誠意と信義に信頼している憲法は他力本願だ。他人のお情けで生きている我々は」と語ったことがそれである。これは事実である。大きな問題を含んでいるだけに、この発言をめぐる政界、言論界とも議論は活発であったが、いささかも触れられなかった点の一つである。

それは、倉石発言を当初に報道した何人かの執筆者の態度についてである。具体的には、倉石氏と一問一答する報道が欠けている。倉石氏が記者会見を打ち切るようにして早々に立ち去ったとしても、ひつつかまえて問答する見識が記者に必要なのだ。大変なことをいうと考えたとしたら、かえって食いついて質問するのが基本の態度である。それは人間の修練の問題だと思ふ。だから倉石発言の報道は、事実ではあるが、真実に迫っていないと見る。客観的事実―真実の報道は可能かどうかのポイントは、ここにあると思う。

(共同通信社企画委員 浜田収二郎)

目次	次
真実の報道とは何か	浜田収二郎
情操と学問の記	田脇原村
磯長・天寺から	桑原
勝意・経義疏	梶里
情意・世界	江本
大いなる生命に目覚めて	江本
☆第13回学生青年合宿室内	江本
☆新刊案内	江本

情操と学問と

— 高校生に話す折々のことば —

宮 脇 昌 三

1. 「思いやり」ということ

日本語の「おもむ」ということばは、たいへん複雑で多岐な意味合いを持っています。元來は、「面」（おもむ）を活用させたことばで、「……という顔つきをする」という原義から発したものと書われています。「しつたり顔に思ひて」（栄華物語）とか、「もの悲しらにおもへりしわが児の刀自（とじ）を……」（万葉集卷四・七二三）などは、そのもとの意味に使われている例であると言われます。あとの例は、大伴坂上郎女（おほとものさかのうへのいらつめ）が、他郷に出て、留守居をしている、自分の娘の大嬢（おほいらつめ）に贈った歌で、自分が出てくるとき、「物悲しそうな顔をして」門に立って自分を見送っていたお前（まへ）のことが忘れられない、という長歌の一節です。上古の人々にとっては、顔の表情と心の動きと、別のもものではなかつたからでありましょう。

この「おもむ」という語も、のちには段々広義になって、考えることも、願望することも、想像することも、心配すること、また愛することも、みな意味するようになりまし。総じて心の働き全般をあらわすようになったのであります。しまいは、たゞ心におけるはたらきであることを示すだけの用法も生じました。「おもひなやむ」、「おもひわす

る」などは、「なやむ」また「わすれる」と殆んど同じであります。

しかし、一方では依然として、強い心のはたらき、たとえば「願望望む」また「愛する」といった用法も残っているのであります。

「おもむ」ということばは、感情の働きをあらわす用法が多いのは、われわれの接する常識と一致いたしますが、しかし一方では、理性的な思考という面もありません。「おもひほどく」（心に悟る）「おもひわく」（分別する）などはその例です。

「おもひやる」という場合、「おもひ（名詞）を遣（や）る」と殆んど同義で、うさを晴らすという意味を持っていますが、「おもひやる」という名詞になる「おもひやる」は、やはり「おもふ」という動詞が充分生きています。心を動かして、対象の方に近づき、更に対象の中に入りこもうとする、指向性、むしろ志向性というべきでしょうか、そうした性質を持っています。

「おもひやる」ということの実例を古歌に拾ってみましょう。

万葉集卷三挽歌に、「上宮聖德皇子、竹原（たかはら）の井にいでまし、時、竜田山のみまかれる人を見て悲しびて作りまし、御歌一首」として、
家にあらば妹が手まかむ草庇旅に臥（

こや）せるこの旅人（たびと）あはれ家にいれば妹（妻）の手を枕にして安らかに眠るであろうのに、草を枕にして先で伏し倒れているこの旅人よ、あゝ、と「思ひやつ」たのであります。

また金槐和歌集卷之下の源実朝の、次の有名な歌は、「物いはぬ動物」への「おもひやり」です。

物いはぬ四方（よも）のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

この「おもひやる」という、日本人が古くから伝えてきた、心の自然な態度は、仏教の「慈悲」や儒教の「仁」などの教えによつて、いよいよ助長されてきました。

論語里仁篇に、曾子のことばとして、

「夫子之道、忠恕而已矣」とあるのは、孔子先生の教え、即ち「仁」は、要するに「忠恕」だということ、この「恕」にあたる最も適切な日本語は、「おもひやり」ということばです。また孟子公孫丑篇に見る「惻隱（そくいん）之情」というのも、根は同じ心の働きを指すものでありましょう。

芭蕉風雅の道を示すものとして、三冊子（さんぞうし）には、次のような文が見えます。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞ありしも、私意をはなれよといふ事也。習へといふは、物に入つてその微の頭はれて情感するや、句と成る所也。たとへば、ものあらはにいひ出でても、そのものより自然に出づる情にあらざれば、物我二つに成りて、

その情誠に到らず。師の心をわりなく（注、強いて）探れば、其の色香わが心の匂ひとなりうつる也。

凡そ生あるもの、有情の存在におのずとわが心に移して、相手の気持になりうる心の習いを持つてきた日本人にとつて、俳諧芸術論としての、物心一如、感情移入ということは、到りがたくても、入り易い道であつたと思ふのであります。

自他不二・物心一如など、むずかしいことばであります。日常の用語として日本語には「惚（ほ）る」（ほれる）というのがあります。元來は放心する、ぼんやりするという意味で、何故ぼんやり放心するかというと、わが心が、対象にひかれ、対象にむかつて抜け出していつて、自我の意識を失なうからであります。もつとも「老いばれる」などは、ぼんやりするが主でしょう。また「あくがる」（あくがれる）というのも、「あく」（＝事、所）から「離（か）る」——離れるの意味です。

「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」というのは、意識的に修煉して「惚れ」「あくがれ」ることでもあると言えましょう。

相手の時処位にわが身心を置くことが「思ひやる」ことであつて、その相手が苦しみ悩んでいるとき、そこに「恕」や「慈悲」のころ、即ちおもひやりやわれみの心が生ずるのであります。

敗戦後の凄しい世相の転変は、こうした、世界的視野においても大事な民族文

化精神を喪失せしめたのではないかと憂えるのであります。そのマイナスの影響は、前時代を知らぬ若者、青少年において鋭角的に作用するのであります。

最近における青少年の、目をおおむしめるような、むごたらしい惨虐行為の頻発は、この「思いやり」の心の涵養に著しく欠けていることと無縁ではありませんまい。いや、直接の原因であるように思われます。

2、感情の陶冶について

数年前、ある山の中の高等学校に勤務していたころのことです。ある日、生徒会長もやったことのある、比較的優秀な生徒（男子）がやってきて、いきなり、

「先生、人類の未来の理想は、感情なんかなくしてしまつて、理性だけで行動する人間になることにあると思ひます——」といった意味のことを、熱っぽく説きだしたのであります。

この生徒は、平生も多少変わったところがあつて、状況にあわなない意味のわからぬ言葉を突然大声で叫んで、はたの者をびつくりさせて、しかも本人はけろりとしているといったようなことがまゝある生徒でしたが、この時も、そのあまりとつびな発想に啞然としたことでした。

かれが言おうとしたことの趣旨を、今思い出しても、ぼくのこのとばで少々補つて、まとめて見ると、ざつと次のようなことだつたと思ひます。

——人間に感情という、始末のわるいものがあるので、人間はお互いに憎みあつたり、疑ひあつたり、嫉（そね）んだり

して、みにくい争いが絶えない。感情などというものは、未進化の人間にあるもので、その点でまだ人類は、縄文土器時代と比べて、本質的には進歩していません。月の世界へ旅行できる現代において、世界の平和を実現するには、この、人間につきまとう前時代の遺物みたいな感情というものをなくさねばならない。人間に感情というものがなくなれば、無用な人間同志の争いが止むばかりでなく、感情に煩わされずに、科学もうんと進歩するに違ひない、云々。

ぼくは、暫らく啞然然としたまゝ聞いているうちに、ぼくも、この生徒の年ごろに、意識過剰とでも言いませうか、感情過多や妄想の感情に悩まされて、自分に感情のあることを、ひどく重苦しい負担に感じたことを思い出したのであります。

始めて坐禅という経験をするとき、無念無想になろうとすればするほど、とつびようしもない妄念が去来するように、青年時代は、自分のプライドにかけて許すことのできない、恥ずかしくいまわし理想は、避けようとするほど、そんな自分に襲いかつてくるもので、そんな二十年以上前の、青年時代の記憶が蘇つてきたのであります。だから、この生徒の、エクセントリックな思考にも多少の同情を感じて、

「君の気持も、ぼくの若いころを思い出してみると、わからないでもないが——」と前置きして、次のようなことを話したのであります。

——人間から感情をなくそうとするなど

は、ことばの真の意味において、不可能であるばかりでなく、そんな必要は毛頭ない。ヒューマニズムまたヒューマン（人間のな）ということばは、人間の持つ、豊かなしかも純化された感情を主内容とするもので、人間らしいということ

は、理性と、これに調和した感情によつて支えられるのである。キリスト教で言う「愛」も、仏教の「慈悲」も、感情というものを抜いては考えられない。感情というものが、浮いては消え、消えては浮かぶ泡のような、はかなく脆い存在で、何ら頼りにならないと考えるのは、君の考えがちがいだ。感情は持続され、向上も墮落もでき、醜くもなり、美しくもなるのだ。人間の行動を、正しく、また悪く規定するのは感情だ。つまり人間を實際に動かす原動力の主たるものは感情であることは、明らかな人間の事実である。たとえば、悪い例だが、復讐の鬼となつて、十年も二十年も仇をつけねらうという、物語によくある執念も、持続された人間の感情だ。

人間から感情をとつてしまおうなどいうことこそ、妄想の感情だ。だから、君のやるべきことは、感情を不断の努力によつて、美しく豊かにすることだ。そのために芸術があり、また宗教があるのだ。

凡そこんな内容のことを長時間話し、またかれの反論も聞いて、多少議論めいたことにもなりましたが、ついにかれは、「わかりました」ということを言わないうで、別れてしまったことでした。

か、の、「感情無用論者」は、その後大

学にも行き、卒業して、二、三年はたつころだが、どうしているだろうか、時折ぼくの念頭に去来するのです。「感情無用」というような、徒勞な、かつ不毛の道を傷つき歩んでいないことを念じているのであります。

実際、われわれの日常経験においても、およそ人生または人生観にわたることにおいて、理論、——その精度の低いのを理屈（りくつ）といふ、もっと悪いのを、へりくつと言ふのですが、——で言いまかされても、相手に心服するなどということはありえないのです。「道理の感覚」ということばもありますように、「道」といふ、人間の在り方の正しい道すじも、それは単に理性というような、抽象化された機能によるものではなく、もっと総合的に直観的に、即ち全人的に把握されるものであることを示しているものであります。

世には、呪詛憎悪という感情を、有力な手段にしている哲学も、時には宗教さえあります。このことは逆に、人生にわたる理論は、感情なくしては、それこそ絵にかいた餅であり、無力な空中楼阁であることを証明しているのであります。

人間の精神機能を、知情意の三つに分析し、人間陶冶のめどとしてきたのは、ギリシア以来のことと、今日でも、これ以上明瞭適確な定説はないようでありませんが、この三分説は、また一方、情即ち感情の部面を、知力、意力の下位にあり、次元の低いものとして、限定的に認証された、過少評価されるといふ過誤を犯してきたように思われるのであります。

特に明治以降の日本の学問の中において、感情を理性の庄服下に入れ、「人間の学」としての実質を失なってきた傾向を否むことはできないと思います。通常純粋理性の学といわれる数学さえも、この人間の感情なくしては成立しないとは、数学者岡潔氏のことばであります。美しく豊かな感情をきたえ養なうことが、勉学—学問を求めると必須不可欠の道であり、それは学問の目標でもあり、人格の向上ということの実質的内容であると思うのであります。

〔長野県東御市高松町〕

磯長・天王寺の記

桑原 暁 一

正平三年(北朝貞和四年)の正月に楠正行・正時が戦死した、そのすぐあとに高師直は吉野行宮を炎上せしめた。そのことは太平記に出ている。ところで太平記にはなぜか出ていないが、このとき師直の弟師泰は河内へ向かって、正行を失なつた楠、和田を攻め、そのついでに聖徳太子の河内磯長廟を破壊し、あまつさえ太子尊像を傷け、砂金以下の重宝を略奪したのである。そのことは園太曆に出ている。太平記にも師泰が河内に向かったことは伝えられている。

貞和四年正月五日、四条頼手の合戦に和田・楠が一族皆しびて、今は正行が舎弟次郎左衛門正儀ばかり生き残りたりと聞えしかば、この次でに残る所なく、皆退

治せらるべしと、高越後守師泰三千余騎にて、石川河原に向城を取つて、互に寄せつ寄せられつ、合戦の止む隙もなしとある。師泰は磯長殿に乱暴を加えただけでなく、太子創建の天王寺の所領を押し領した。右の記事のあとに太平記は云う。

今年石河川原に陣を取つて、近辺を管領せし後は、諸寺諸社の所領、一処も本主に充て付けず、殊更天王寺の常燈料所の庄を押へて知行せしかば、七百年より以来、一時も更に絶えざる仏法常住の燈も、威光と共に消えはてぬ。

と。ところでこの天王寺の金堂が大地震のために崩壊したことがあった。それは、正平十六年(北朝・康安元年)の八月廿日のことである。また太平記を引

南方には、この大地震に諸国七道の大伽藍どもの破れたる体を聞くに、天王寺の金堂ほど崩れたる堂舎はなく、紀州の山々ほど裂けたる地もなければ、これ外の表示にはあらじと、御慎み有つて、様々の御祈どもを始めらる。則ち般若寺円海上人勅を承つて、天王寺の金堂を作られるに云々

とある。以上によつて明らかである、天王寺あるいは磯長御廟は南方(南朝)の世界の存在であつたのである。

話はあとさきになるが、河内国藤井寺の合戦で正行のために破られた足利方は、山名伊豆守時氏、細川陸奥守頼氏を両大将として、六千余騎を住吉天王寺へ差し下した。大手の大将時氏は住吉に陣を取り、搦手の大将頼氏は天王寺に陣を

構えた。正行はこれに当惑した。——住吉天王寺両所に城郭を構へられれば、神に向かひ仏へ向かつて弓をひきなを放つ恐れ有りぬべし。不日に押し寄せ、まづ住吉の敵を追い払ひ、唯攻めに攻め立てて、急に追ひかくる程ならば、天王寺の敵は、戦はで引き退きぬと覚ゆるぞ。

と苦慮したのであつた。彼の世界の相違は、これによつてさらに明らかである。正成が天王寺で聖徳太子未來記を披見して世の成行きを予知したという、大平記の伝えをばくは好まないが、正成が太子にみちびかれた人格であることを示すだけの意味はあるであらう。

さて、正行の同志である和田新発意源秀・阿間の了願の二人のことは前に一度取り上げたことがある。(拙稿「小歌うたい」)それで、彼等の出てくる太平記の記事を再び持ち出すことはしないが、若き源秀に了願が付き添つたかどうで、二騎だけで山名の大勢の中へ懸け入っているのである。そのことは、この二人が同志であるというほかに、何か特別の間柄にあるのではないか、を思わせらる。つまり二人が真宗仏光寺の了源にかゝりある同信でもあるのではないかと臆測せられるのである。明治のすぐれた史家・原勝郎博士は、「真宗が京都及び近畿に弘布したのは、鎌倉時代の末十年間で、これは主として、存覚の弟子なる仏光寺の了源の力である」と云つた。(日本中世史)鎌倉時代の末十年とは後醍醐天皇の治世である。了源は、親鸞にはじまり、真仏・源海・了海などと次第相

承した法系を受けついでと云われる。「了」とか「了」とかいう文字は仏光寺にゆかりのある文字なのである。了源は仏光寺を創めたとき、聖徳太子孝養像(現存・重文)を造建している。建武二年の歳暮に伊賀山中で暗殺されたという。それは彼の活動がいかに精力的なものであつたかを示すものであらう。ところで和田源秀は別に賢秀とも記されてあつて、むしろこのほうが通りがよいのだが、源秀とあるのに従つたわけである。阿間の了願については、太平記(巻廿一)に、諸国の官軍を数え上げる中に「淡路には阿間、志字知」とあつて、淡路の住人であることがわかる。(阿間は安間とも記されている。)

和田源秀のほかにもう一人の源秀がいる。それは、有名な結城宗広であつて、彼は入道道忠と称しているのだが、源秀とも記されている。晩年に了源を知つて、源秀の別号を持つようになったのではなからうか。また彼が北畠顕家に従つて再度西上する途中、尾張の熱田で五百余騎をひきつれて馳せ加わつたのは、大宮司の摂津入道源雄であつた。「源」が付くからと云つて、すぐ了源にかかわせるのはどうかと思うが、少くとも阿間の了願・和田源秀はたしかではないか。

その生涯を聖徳太子にみちびかれた親鸞の門流、必ずしも楠・和田の同志ではない。しかし楠・和田の同志の中に、親鸞門流とおぼしき源秀・了願等を見出すことはうれしいことである。

(四三・五・五端午の節句の日に)

(独立千歳高校教師)

勝鬘經義疏から

梶村 昇

ひとりて読んでみると、分かったような気がして、何気なく読み過ぎてしまっていたところも、何人かで読み合わせをしてみると、そこに大切な意味のあったことに気付かせられて、いかに、ひとりの読みというものが、底の浅いものであるかを痛感させられる。ここ二年ほど、先輩諸兄の勝鬘經義疏の読み合わせに出席させていただいて、そのたびにこの思いにかられてきた。そこで、一、二そのような点を申し述べてみたい。

勝鬘經義疏はご承知のように、序説、正説、流通説と分かれており、正説はさらに十四章に分科され、最初の三章は帰依・受戒・発願と勝鬘夫人ご自身の行が述べられ、続いて、「摂受正法章」「一乗章」と化他の行へと進んでいる。この二章が本経の眼目であることは内容からいっても、分量からいっても明らかである。

さて、この「一乗章」の冒頭に、経の本文は「仏勝鬘に告げたまはく、汝今更に一切諸仏所説の摂受正法を説くべし」と。勝鬘仏に白さく、善い哉世尊、唯然りと。」とある。太子はこれを受けて

「第一には仏説くべしと命じ、第二には勝鬘勅を受けて説く。前の摂受正法章には言を発する毎に勝鬘先づ請ひて

説かんと求め、今此章には、仏自ら先づ命じ給ふは、前の章には既に是れ他分の深行なれば、敢えて自ら宜へず、故に求に隨つて命じて説かしむるなり。上來の其所説は、理に契はざることもなく、疑ふべき所なし、所以に其請を待たずして先づ命じて更に説かしむるなり。」

と釈しておられる。勝鬘經はいうまでもなく、在俗の信者である勝鬘夫人が「仏の威神を受けて」、つまり勝鬘が仏と感応相承して、その信ずる所を説くという構成になっているのであるから、仏が説くべしと命じ、勝鬘が勅を受けて説くことは当然であつて、敢えてこれに解釈を加えるまでもないことのように思われるのである。しかし、太子はそれを以上のように詳しく述べられ、しかも、一乗章だけではなく、義疏の冒頭にも「所以に如来、説く毎に諸仏の発願に同ずと讃じて、則ち為に述成し給ふ」と述べ、勝鬘夫人の説くことが諸仏の発願されたことと同じであると讃歎され、發言する毎に賛成し給うということを明記されている。摂受正法章にも「承仏威神とは、外形の端爾なるを威と曰ひ、内心の測り難きを神と曰ふ。而るに今承くとは、直に是れ如来『已れ説くことあるは其所弁を恣にせよ』と許し給ふにて、異術をもて木石に相加へて、能く之を言はしむと謂ふには非ず。前の三章には威を承けんと求めず、但此章より乃ち威を承けんと請ふ。則ち所謂自分他分も亦証すべし。」と詳釈されておられる。すなわち、太子は勝鬘夫人の所説に如来が同意し賛成す

るということがらを非常に重視せられたということである。

これをどのように受け取つたならよいのであろうか。心の病氣の中で最大の病氣は、物事を断定して人に譲らないことであるといわれる。人の言葉など受け入れる柔軟性を持ち合わせていないということである。すなわち、自分の言うことが絶対であり、他は間違っていると断ずることであり、自己絶対化、自己神化である。そこには自己の所説を認証するよくなものは何も認められないということであるといわれる。今日、このような連中がいかに多いかは毎日の新聞の報ずるところであるが、太子在世の当時にあつても、とくに摂政として政治の掌に當つておられた太子にとっては、その感を深くしておられたものがあつたであらうと拝察される。その時に、勝鬘夫人が、しかも、仏の威神と感応した夫人が、その所説に仏の同意と賛成を必要としたということは、太子のお心にとつての大きな開眼ではなかつたのではなからうか。しかも、「前の三章：嘆仏真実功德章・十大受章・三大願章：には威を承けんと求めず」と、自分行にはその必要でないことを明し、「但此章：摂受正法章：より乃ち威を承けんと請ふ。則ち所謂自分他分も亦証すべし」と、菩薩行としての他分行にはその必要であることを示し、自分他分を峻別しておられるところに、太子のきびしい人間観を拝察せられた思いがするのである。仏の前においては人間は等しく人間であるということである。そこにこそ「我必ずしも聖に

あらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」の人間平等感の根元があり、「世間虚偽」の痛感も生まれてくるものと思われるのである。しかし、「世間は虚偽」であり、人間は「虚偽の衆生」であるだけではどうにもならない。そこに帰依と行善の道が示されなくてはならない。と書くとは非常に段階的であり、論理的に思われるが、實際には、帰依と虚偽の痛感とは同時性のものである。同じ「一乗章」の中に、「衆生は尽く仏と作るべきに、而も衆生は尽く仏と作ることなければ、即ち如来の常住なること明らかなり」とあるのは、衆生が尽く仏となることがないので、それがとりもなおさず仏の常住を示すものだということであつて、それは逆説ではなくして、帰依と人間への痛感との同時性を示されたものであると思う。太子は十七条憲法の中に「其れ三宝に帰せずんば、何を以てか柱れるを直さむ」と仰せられている。太子にとつては三宝こそ人生を超えて帰依すべきものであり、三宝こそ人生に順つてまかれるものを直していくものであり、それは段階的なものではなく、帰依感情において同時性のものであつたということと思われる。勝鬘が説く所のものを、如来がそのたびに同意して賛成せられるということ太子が重視せられたのは、太子と同じく在俗の信者である勝鬘夫人の生き方に、人間の真実の姿、それは常に永遠なるものとの関連において人間を総合的に統一把握していく姿を発見されたからであらう。自己を絶対化してはならない。常に永遠なるものとの関連に

おいてなきなければならぬ。それを經典は如來と勝鬘との關係において示し、太子はご自身に引きあてて深く注目せられたものと思う。
(兼福理大教授)

情意の世界

江里口 淳一郎

私の記憶にあやまりがあればおゆるしを願うとして、本居宣長先生ではなかつたかと思うが、人の言葉は真似しようと思えば、真似のできないことはない、しかし、姿というものはいかに真似しようとしても真似のできないものだ、というような意味のことをのべておられたように覚えている。

この先生の表現を、私なりに解釈してみようと思つて原稿用紙に向つた時、たまたまロバート・ケネディ議員を撃事件を知らせるニュースがとびこんで来た。民主主義を政治の基調とし、高度にすすんだ機械文明をもつアメリカに、このような惨事があいついで起こるということは、アメリカのもつ病根の深さと思うとともに、そのような不測の事態がわが国にもおこらないとは断言できない不安にかられた。

いまやアメリカにかぎらず、「情意のアンバランス」という幽霊が全世界をおおいはじめた。幽霊が泣きだしたのだ。この情意の世界をのぞきこんでみる

と、一つは言葉となつてあらわれ、いま一つは姿勢、態度となつてあらわれてくる。そしてまた、言葉や姿勢、態度は情意の世界に制御装置の役割をもつてのぞむのである。

言葉を磨くということは、心を磨くということに通ずるが、言葉は人間特有の産物である。それが証拠には、言葉は訓練を必要とし、大脳皮質のなかにある論理機構を通りぬけて表現されるからである。

組織化されたもの、組立てられたものからでてきた言葉は、一応、生命とはきはなされた存在である。この言葉が生命をはなれたとき、それは幽霊となつてさまよいはじめる。言葉は胎児と同じなのだ。産みっぱなしでは育たないし、それ自体に生命を与えてやらねばならぬ。すてられた言葉は、いつしか人間を呪いはじめる。

いろんな胎児だけをくらべてみると、誰が父親か母親かはわからない。「この胎児はあなたのものですよ」とか、「この胎児は私のものですよ」とかいつてみたところで、どれもこれも似ていてわかつたものではない。

幽霊はなんとかして足をもとんとする、定着したいと思つし、胎児は育ててくる母親をさがし求める。平和、自由、独立、愛国心といったすばらしい幽霊たちは、いまもさまよいつづけている。幽霊に生命を与えるのは幽霊の心かわかるような人の情意しかない。やわらかい、しなやかな、明るい、開かれた心をつみつけて幽霊は定着する。ここで平和

という言葉は平和の地に安住するのだ。幽霊が好きですか、きらいですかなどといった二者択一的な次元の低い質問をしてみたところで幽霊は成仏しようにもない。

そこで、古人はこの幽霊がでないように、幽霊がでて驚いたりさわいだりしないように、いま一つの心、強い、ねばりのある心をきたえるために武芸をたしなんだと思われる。

「心正しからざれば剣また正しからず」といって暴徒をたしなめた豊前中津藩士、島田虎之助のことについては御存知のかたもあらうと思うが、大森曹玄先生の「剣と禅」という御本を参考にしながら、いささか書き綴つてみたいと思ふ。

島田虎之助は、幼少の頃からすこぶる勝気で乱暴だったという。二十七才のとき郷里を去り京坂を巡遊して天保九年、江戸に入った。

ここでも片っ端から道場を荒しまわつたが、下谷車坂の井上伝兵衛の道場で、どうしてか勝つて天狗の鼻をへしおられたしまった。

この井上の紹介をもつて、男谷静吾を師とすることに。男谷の門にはいつてからは「節を折りて書を読み、痛く自ら貶損」し、とあるように、粗暴なふるまいはいつしか影をひそめ、「剣の要は人を撃つにあるのではない。一点の勝心もなく、静かなること山の如く、疾きこと電の如く、物と争はず、相手の精神を奪つて我が剣上におけば敵は自然に畏縮して自由に撃つことができる。それなの

に精力を勝敗などの争闘の間において、利不利を念とすることは到底本當の術を体得することはできない、されば剣道には君子の剣と小人の剣とがある。」といつて「君子の剣」を唱道したといわれる。

相手の精神を奪うところに剣の修練の一つの行き方があるわけであつて、精神を奪うというのは殺すのではなく、自由に撃つための予備段階にほかならない。

この自由に撃つためには、自分とはかけはなれた三尺の剣を、自分と一体化して、自由自在に駆使しなければならぬ。このためには、自分というものを絶対の無にして完全に三尺の得物に没入し去り、その性に従つてこれを運用しなければならぬのである。

絶対の無は借りものではない、なぜなら、それは自分自身だからである。そこに姿がうつしだされる。

絶対の無の姿か、三尺の得物と遊離した分裂の姿か、ごまかしようのない姿があらわれる。

統一された姿、分裂した姿、それは言葉と同じように、人の心の表現形式である。無為にして他を制圧するような姿は言葉よりもつと直接的であり、きびしい。

姿の修練は論理機構とは何のかかわりあいのないところに意味があるのであつて、理屈ばかりこねていたところで剣の達人になれないこと必定である。

ここにまた姿は、情意の世界から出発しなくてはならない宿命をもつてゐる。

大いなる生命に目覚めて

富山大学工学部卒
岸本 弘

(前号紹介「第五葦牙」より転載)

今林兄から本紙発刊計画のお便りを頂いた時、私は少なからずとまどった。この「葦牙」を発行する趣旨は、私達の四年間の活動を後輩諸兄に語り伝える事にあると言う。しかし私には語り伝える程のものは何もない。今ようやく真の学園を学ぼうとする心が目覚めた所であり、これから十年後、二十年後、或は五十年後には、私にも語り伝えたいものが擱めるかもしれない。私にとって今語り得るものは、現在に至ってようやく学園に目覚めたいきさつだけである。私の現在に至るまでのいきさつを知って頂くことが後輩諸兄の求道の一助となるならば、それも結構であるが、私たちがこれから共に求めんとするものは、実に峻険な高峰であることも大いに心しなければならぬ。

行きつ戻りつして来た大学生活の四年間を省みれば、学園の進展に於いていづれが先か後か定め難いものがある。わずかに四年間の学生生活に於いて、私達は先輩とか後輩とか言うことにはこだわっていない時ではあるまい。共に祖先や先輩に導かれて、至らざる自分の姿に目覚め、他と共に生を求め続けなければならぬ。それは果てしない求道精進であり、又人間であるが故に死ぬまで続けなければならぬ自分自身との闘いでもある。

私が現在ようやく学び得たものは、何事にも至らない自分の姿に目覚めた事であり、それ故に友を求め、共に助け合って生きてゆかなければならない、と知らされた事である。そしてこの求道精進こそ、私達が生きてゆくために怠ってはならない学園であると思う。これで私の結論は出てしまったのであるが、ここに至るいきさつを順次述べて見たいと思う。

一、中学・高校時代から大学に至る運動部生活

現在も私の思想生活の一端を貫くものは、中学時代から十年間に亘る運動部生活によって培かれた体験的精神である。中学に入学して初めて運動部に入った第一の目的は、病弱だった自分の体に自信をつけることであつた。その初期の目的は、知らず知らずの内にどうにか達せられたが、それとともに私はスポーツを自分とは切っても切れないものと感ずるようになった。辛くとも汗を流して、無我夢中で動いている自分が一番好きであつたが今もそれは変らない。又共に苦しい練習に励む友ほど、親しく感じるものはない。大学に入って初めて合宿やコンパを経験したが、クラブのコンパ程自分が素直に溶け込める所は他になかった。そして自分がスポーツマンであると言う誇りは、何にも増して自分の生活を力づけてくれた。どんな苦しい時にも「

練習の苦しさを思えば何でもないと自分に言い聞かせながらがんばって来た。しかし大学一年の時、そのゆるぎないはずの自信にふとした事で疑問を抱くようになった。それは(同じ)クラブの先輩が政治運動に関心を持ってクラブを去って行った時である。自分も果してこれでよいのだろうか……。そしてその冬、私はその疑問に対する私なりの考えを「僕は三等スポーツマン」と題して大学の機関紙に投稿したことがある。今から考えて見ると、それは私のスポーツ哲学、人生哲学への目覚めであつたとも言える。私はその中でパスカルの「人間は考える葦である」と言う言葉を引用して、次の様に書いている。

「パスカルは宇宙の中に思惟する人間の位置(存在)を認識した。しかし我々は人間の中に肉体の感激をもって人間であることを認識する……」

それは理屈だけで物事を考えようとする知識人への反撥であり、何とかして自分の生活を正当化しようとする苦しいあえぎでもあつた。現在私はその手記を読み返して見ても、自分の心の根底を流れる考え方は変わっていない。それどころか当時の気迫を現在欠いているのではなからうかと反省させられる事が度々ある。

二、初めて城島大合宿に参加して

大学二年の春、私は何処の誰とも知らない学生から第十回城島大合宿の案内状を受取った。合宿地が私のまだ見知らぬ南国九州と言うことも併せて私の興味を引いた。初めて参加した城島合宿は私の先人観をはるかに超越するものであつ

★新刊案内★

昨年八月、阿蘇において行われた第十二回「学生・青年合宿教室」における講義を中心としたもの

『日本への回帰』第三集

青年・学生運動の新しい展開
— 大学教官有志協議会
社団法人国民文化研究会 編

目次

一、学園、人生、祖国

「国」について考える

……小田村寅二郎

今上天皇の御歌について

……夜久 正雄

三、合宿教室における講義

指導者の教養……太田 耕造

世界の転機と日本……木内 信胤

日本民族の中核性格

……林 房雄

バトナム問題について

……山本 勝市

パネル・ディスカッション

……日本のこころ

三、日本のこころ

日本の世界像の系譜

……名越二荒之助

聖徳太子「十七条憲法」

……小柳 陽太郎

短歌創作の意味……山田 輝彦

年間活動報告

一年の歩み……古川 修

第十二回「合宿教室」のあらまし

……伊藤 三樹夫

歌集「学生、青年の作品より

新書刊三〇七頁定価三〇〇円五十円

た。致村先生の「士規七則」の御講義、小柳先生の「講孟余話」の御講義、私は胸に焼きつくような熱いものを感じた。私の生命はこの合宿の御講義等を通じてさらに大きな生命に結びつくことが出来たのである。太子の御言葉を用いるならば、それは他と共なる生命への目覚めであったと言える。私が運動部生活を通じて学んだ事も他と共なる生活生命に変わりはないが、ともすれば運動部偏重に

第十三回学生青年合宿教室 案内

この「合宿教室」は、本年度十三年目を迎える。その間の参加者数は、数年前にすでに二〇〇名を突破した。当時、学生であったそれらの人たちは、いまは社会人として、社会各層で縦横の活躍をしておられる。

かえりみれば、それらの諸君の学生時代は、祖国軽侮の風潮が一般的であった。「日本の良さ」を求めようとするこの「合宿教室」に参加することさえ、大変に勇気のいることであった。それだけ、それらの諸君は、いま、ここ十年間における日本の社会風潮の推移について、どれほど感慨深く見守っておられることであろうか。いままでの日本は、自然の推移にまかせても良かったかもしれない。だが、これからはそうはゆくまい。国全体、国民各層を挙げて、いまいまだ敗戦後二十余年の足あとを見直さねばならなくなった。いわば、格段の速度と決意のもとに改めて時代脱皮が要請されてきているからである。

その脱皮とは何か。一部の人がちがいうように、それは、階級闘争に立つ政治的革命を呼び寄せることか、それとも、祖国日本の栄ある文化伝統と日本の情緒

陥り易いものでもあった。私が新しく知り得たさらに大いなる生命。それは決して抽象の世界ではなかった。祖国の歴史を導び自らもその中に身を投じようとする最も身近な現実具体的な生活生命である。世には理想の世界を夢見て世人に訴えるのに現実の具体的な生活其盤を見失っているものが少なくない。

主催 大学教官有志協議会 社団法人国民文化研究会

に立っての躍進を求めることなのか。いま日本は、その岐路に立たされている。ではこの時代に、どう対処し、どう生き抜けばよいのか。それこそ、この「合宿教室」の課題でなければならぬ。

諸君の先輩たちも、例年のように、勤め先での貴重な有給休暇を活用して、諸君の相談相手となるべく、この「合宿教室」の助言者として全国から集まって来られることであろう。その数は今年も四十名を越えるかも知れない。先輩と後輩とのつらなりの中で、人生を追求することとは、また楽しさも格別のものである。

会場は、九州の名勝、霧島国立公園である。長い夏休みの一期間を相集い相語らって、日本の青年の行くべき道を、全心を傾けてお互いに考えていこうでは

展開の場と言うことであった。これも又初参加の城島合宿に於いて岡潔先生が物事を判断するには知情意の三つがあるが、その中でも、とくに情は決して欠いてはならないと御指摘になられた。論理の是非を決し難い時も、一度情意の有無を問えば容易に正邪を判断出来るものが少なくない。

三、大学に友を求めて
大学に帰ってからの生活基盤はやはり

期日 八月三日(土)より七日(水)まで四泊五日

場 所 霧島国立公園「キリシマ第一ホテル」
参加者 男子の大学生および社会人約二〇〇名(女子については紹介または推薦による)

講義 (仮題) 西洋文化との対照における日本文化の問題
ドイツ文学者 竹山道雄氏
これからの国づくり―物心両面の理想は何か
世界経済調査会理事長 木内信胤氏
日本が赤化したら―ロシア革命の体験
評論家 高谷覚蔵氏
その他別討論・テキスト輪読・和歌創作・高千穂登山
費用 参加費、学生三五〇〇円、社会人五五〇〇円(食費・宿泊費・プリント代含む) 参加学生の片道旅費は主催者負担
申込 六月一日から七月十日まで
申込先 東京都中央区銀座七の三柳瀬ビル内 社団法人国民文化研究会 宛

運動部生活であった。いや以前にも増して私にはこの生活基盤が尊く思われた。国家生活と言うも、それは理屈の世界ではない。一人一人が身近な生活に真剣に取組む姿は、取りも直さず国家生活を自らに直結した問題として考える姿に繋がるのではなからうか。

私は先づ身近な運動部に友人を求めた。私と友人との結びつきは思想でもなく、主義でもなかった。それは平常の生活である。私や友人が何も平常完璧な生活をしていると言う意味ではなく、失敗を重ねながらも、共にスポーツを通じて励んでいると言う親近感が、私達を結びつけたと思う。

そうして友から友へと私達の絆は拡がり深まっていった。運動部に入っていない友人も何人もいるし、これからさらにいろいろな人と語り合う努力を続けなければならぬ。そして色々と生活環境の違う人が等しく黒上先生が遺された聖徳太子の御本に真向う時、そこに何ら隔たりのない内的平等の世界、即ちお互いに心の通い合う世界が展開されるのである。

編集後記 別掲広告のとほり昨年の合宿の記録が「日本への帰郷」第三集として出版された。合宿の終わった直後から、録音テープ―速記録―要旨編集―各先生方の補筆修正といった具合に、九州岡山の担当者と東京との間に用紙の束が往復し、多忙な公務の傍ら、担当者の集中の努力の積み重ねの中、そしてこの記録が生み出された。第一回の合宿教室以来、参加者と主催者の間に鋭く意識された思想上の断層の問題は、いまはその言葉で必ずしも言ひあはせられない問題になつてきたと思ふ。一つの歴史的生命につながるうとする双方の努力と祈りが、この記録の中に滲み出てゐるやうに思ふ。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

日本はどうなるのか

最近色々な職場にゆくと「日本はどうなるのだろう」という不安の声をきかされる。それは中堅どころの地位にある人々で真剣に日毎の仕事に打ち込んでいる人々の声である。

たしかに日本のみならず今日世界全体がどうなるのか予想の立て難い時代ではある。

ベトナム和平交渉とベトナムの大攻勢、ボンド危機、ドル防衛、五月革命といわれるフランスのゼネストでドゴール政権危うしと見えつゝ六月の総選挙ではドゴール派が圧勝する。かういった事象の内部的な関聯と前後の脈絡を克明に究明する資料がはつきりと示されないまま、日本国内では学生運動を先鋒とする革命的な動きが全国的に起りつゝある。

「東西の風に東西すること勿れ」といった古人の言葉の如く、我々は今こそこの世の動きと日本の歴史と将来について深く考え、世に立つ道を誤らぬ様一致協

力せねばならない。

四十年前私が旧制高校に入った時既に左翼的学生運動は全国的に拡がっていた。もっとも客観情勢や、その形は今日とは異っていたが、その頃これに対する対策なり、思想問題に真剣に取り組む人々は残念乍ら少かった。思想こそは政治経済に先行する、人生の根本を決定するものであるという自覚と修練が足りないまゝに支那事変から太平洋戦争に突入し敗戦となった。

終戦後の思想の混乱は更に深刻化し、法律学にいう「公の秩序、善良の風俗」「信義誠実の原則」等が素直に第一義的に考えられない位、今の秩序を破壊して新しい秩序を立てようという動きが活発化して来ている。

これだけ思想問題が重要であるのに何故多数の人がこれになじまないかといえ、まづ「思想」という言葉から世界大思想全集の様なむづかしい書物を聯想

し、カントとかヘーゲルとかいった難解な文章を聯想するからであるが、思想とは元来国家の大事から日常茶飯事に至る具体的事柄の中の、ごく当り前の物の道理と事実の認識に基づく判断意志の行動をいうのであって、それは観念理想の哲学をつねに批判して生きようとする意志行動をいうのである。

今日よくみられる様に自分は絶対に正しく相手は間違っているといつて一方的に相手を攻撃する。一人できかなければ多数の勢をかりて攻撃する。かういうやり方では自分のいう事を相手に納得させる事は出来ないにも拘らず、日本国内でも学生運動や労働運動の一部にかうした場合が多くみられるのは、形式固定化した思想に進歩がない証拠である。

五月革命といわれるフランスのゼネストに於いても労働組合、学生にはそれぞれ改革されるべき幾多の条件があり積年の不満が爆発したものとみられるが、左派の行動は破壊に次ぐ破壊の後に来るべき具体案に欠け、フランスの栄光と愛国心に訴えるドゴールの声をまづ軍部が支持し、総選挙に持ち込んでドゴール派の圧勝となった。政府の公約した労働者学生の経営参加を今後どういう形で行うかといった幾多の問題をかゝえ乍ら一応五月革命が納つたのはフランス思想の中に真の進歩を求める展開がつねに行われ、それがマルキシズムの形式固定理論の抑圧をはねかえしたものとみられるのである。

デカルトからベルグソンに至るフランス哲学の発展は、二十世紀の先頭をゆく

生理心理学の発達を促し、こゝに精神科学と自然科学の相関が体験的に明かにされつゝある現状を左翼思想家、左翼運動家はじっくりと研究してかゝらねば今度の様にとんでもない誤算をしようのである。フランスゼネストの最中に、どうしたらあのようにゼネストが出来るかをフランスに行って研究したいといつていた日本の労働運動家もこの際現代フランス文化の発展内容を再認識し、日本のゆくべき道を考えるべき時である。

学問のあまりは亡国の因となると数十年前に警告された先人の言葉が今更の様に耳にきこえて来るが、我々はこの際

じっくりと腰をすえて子細に国民文化を研究し、思想を研究し、政治経済の問題を考え、冒頭にもどつて日本の進路はどうあるべきかについて、漠然たる不安感を脱却して勇往邁進、求道の一步をふみ出すべきである。

(労働科学研究所維持会事務局長

高木 尚一)

目次

日本はどうなるのか	高木 尚一	(1)
「学生問題」を考える	小田村寅二郎	(2)
三条実美と前田慶寧	広瀬 誠一	(4)
「黒部の太陽」から	岡村 義一	(6)
古典の窓・雨月物語	小柳 陽太郎	(8)
☆ 同胞歌壇		

「学生問題」を考える

小田村 寅 二郎

(本会理事 氏)

日本全国に拡がってきた学生騒擾は、ことしの秋にかけて一段と激化していきそうである。この憂うべき事態に直面して、大学当局者は(文教、政治の府の人々も)、次第に懐(おう)悩の色を濃くしてきた。あらゆる努力の積み重ねの中からも、なかなか自信ある対策が出て来ないからでもあろうか。それと同時に、各種のニュースは、文教政策の根本的修正、治安対策の建てなおし、新たな立法措置の企てに至るまで、色々のことを報道してくる。こうしてそれぞれの識者

大切だと思う。さらに言えば現下の問題も、結局は、学生が学生らしくなく、教官が教官らしくないところに、問題がからみ合って生まれているので、これを解きほぐすには、それなりの精神的努力と、従来の惰性から脱出する勇気が必要になる。こういう「努力」とか「勇氣」とかは、「策」から生まれるものではなく、一意発心の決意から生まれるものと思う。問題のポイントは、その辺にありそうに思われてならない。

たちによって、いつか局面を打開する良い知恵が生み出されることは、大変喜ばしいことで、その成果を一日千秋の思いで待ちたいと思う。また、大学教官がこの問題についてつくしてこられたご心労に対しては、心から敬意を表するものであるが、私はここで、学生問題といわれる問題の根底にあるごく手近かな問題点で、しかも長いあいだ放置されっぱなしでいた、いくつかのポイントを、気づくままに率直に列挙して見たいと思う。

私が日ごろ考えることは、学生問題というものには、対策などという「策」では、案外効果が挙がらないような気がしてならない。学生問題は、窮極する所、「教授と学生の付き合い方の問題」なのだから、むしろ「策」は第二にして、学生の真心に取りくむ道を求めることが、

まず、端的に学生の方から触れよう。一体、学生たる者が、ヘルメットと角材と石つぶてで武装して学生運動をする、ということはどういうことなのか。まさか老いぼれた大学の警備員に対する武装ではなからう。それは、いうまでもなく、国家秩序への反抗の武装ではないか。このような武装は、革命の戦士のスタイルであつて、学生たる者とは、本来全く不釣り合である。彼らについて、はっきりしていることは、彼らは、すでに自分自身が学生であることを二義的に棚上げしていることである。彼らは、革命の闘士を以て自ら任じているからである。

この問題を等閑に附しておくから、問題がこじれ放題になっていくのではないのか。もともと、学生を革命の尖兵に見立てたのは、共産革命に共通して見られた所である。それはあくまでも、共産革命を是認する立場に立つてのみ、肯定されることである。しかし、いまの日本は、「自由」を何よりも大切にすることを、国の基本方針としてしている。政治に対する批判の自由一つを取ってみても、共産国家の言論弾圧などとは、比較にもならぬほど「自由」が守られているではないか。「自由」のもとにあるからといって、「自由」が依つてもつて立つ基盤までを否定するような革命的志向は、この「自由」の世の中では、無制限に行動させるわけにはいかない。従つて「自由」の世界において、学生は学生であるか、それとも、共産革命の戦士となるかは、二者択一の問題であつて、それを両立させようとするなどのことは、決して黙認してはならないことである。同年輩の勤労青年が、社会に出て働いているときに、彼らが学生であり得ているのは、革命戦士として革命の尖兵になつてもらうためか、それとも、勤労青年に代つて真理を探究し、国家社会の健全な発展に役立ってもらいたいためか、そこをはつきりさせる必要がある。それなのに、彼らは、真理の探究どころか、一つ覚えのイデオロギーで自己満足し、社会に向かって、傍若無人の活動を開始するに至つては、もはや彼らをこの「自由」社会の中で公然と学生として処遇する必要はなくなつてしまつていゝのではなからう

か。彼らは学生たる身分を、手前勝手に乱用して、実は革命戦士をもつて自任しているけれども、それはいつまでも黙認してよいことではないと思う。学生運動と革命活動は、これを峻別することが必要である。学生だけが革命家だか区別のつかなくいつまでも学生扱ひしている所に、実に大きな問題が伏在してはいないであらうか。

次は、思想の自由が大学になくなつてきていることについてである。大学はもともと思想の自由の府でなければならぬ。ところが、実情はと見ると、ある大学のある文科系の学部では、マルクス学説者によつて教授会の過半が占められてしまつていゝ。こうなると、ひとたび空席が出来ても、思想の自由は名目だけで、その系列の学者だけが、あとが主要員の資格者となる。すでに思想の自由は、彼らの反政府言説を守るための方便に墮してしまつて、肝心の思想の自由などは、見るかげもなくなくなる。こういうことだから、学生もその真似をすることに。例を学生自治会に見ればよい。大学には、全学生を対象とした学生の自治会があるが、これまた、思想の自由を標榜してなければ、大学の学生自治会らしくないはずだ。ところが、全国ほとんどすべての大学内の学生自治会なるものは、すべて赤旗を掲げながら、集会を運営している。あれは、思想の自由の学園ということと、一体どういう結びつきになるのか。赤旗はいうまでもなく、数多くの思想の中の、一系列の思想を象徴す

ること、誰れ一人知らぬ者はない。思想の自由と、赤一色が、どうして一つに結びつき得るのか。こうした大学らしからぬ事態、すなわち、学生自治会が一つの系列の思想運動に占領されているのを、教授たちは、よもや全学生の意志の表明によるものと信じているわけもなからう。学生自治会がそのような偏向と独断に堕して、すでに二十余年を経過しているのだ。ある私大のことであるが、マルクス主義に同調しない文化団体には、自治会が頑張ってクラブ室さえ与えない、という例もある。ずいぶん徹底したところまできているようだ。そうしてこの間、教授たちは、その学生たちに、平気で思想と学問の自由を講説してきたというのにも、実におかしなことではないか。

また、その自治会の幹部の選挙のデータは、すでに定評のあるところ。民主主義を高らかに講説する大学の足下で、その講義を聞いてはるはずの学生たちが、権謀術数とデマの張り合い、はては腕力の登場までに及んで、選挙の主導権を取り合ってきた。このこともすでに久しい。だが教授たちは、それも見て見ぬふりをしてきた。いかにも学生たちは、立派な選挙を施行しているかのよう

に。さらに、全学連も問題である。全国の大学内の自治会が、横の連絡をとるために出来たという全学連には、各大学自治会から納付金が上納されている。莫大な額である。一般学生は、大学に納めるお金と一緒に、大学にそのお金を託してき

た。大学を通じ、自治会に。そしてその一部は、自治会を通じて全学連にとけられた。そこまでは、まだいいとして、う。だが、その全学連の委員長その他の幹部が、すでに学生でなくなっている者が就任していることについては、当該学内自治会が、純粋な学生団体でなくなっていることを意味しなければならぬ。だが、教授たちは、平気で自分の大学の自治会と全学連のつながりを黙認してきた。それが過去二十年間の大学当局であり、教授会であったのである。これも少くも学生の誤らざることを憂う人々には、常識では納得できることではなさそうである。つい最近この七月十六日にも、秋山勝行が、中核派の全学連の委員長に再選されている。彼は学生ではない。それでも全学連であり、全国の大学当局も教授会も教授一人一人も、一向に学生ならびにその大学の学生自治会に、そのことについての注意を喚起しない。学生でない者が幹部である全学連ならば、各大学は、その大学自治会を、即時命令をもって縁切りさせるのが至当な方法ではないのであろうか。学生が学生らしくなくなっていることについては、まだ指摘すべきことが沢山あるが、紙数の関係で、いま一つだけにとどめておく。

それは、学生のいう自治ということについてである。自治とは何か。自ら治め、自制しうる人々が、自治能力ある人間とされてきた。それは、今も昔も変わりはない。そこで学生の自治というのは、大学との関係において、学生の自治とい

うるものであるから、大学の器物を破壊するような事態が起れば、自治会自らが立ち上って、その加害学生を自らの手で検束し、学生同士の間で、その非を明らかにする行動力がなければならぬ。それが全く逆で、自治会幹部自ら破壊の先頭に立つ、というのであれば、すでにその自治会は、学生自治の有資格者ではなくなっているはずである。このことについても、かつて大学の教授会の問題に取り上げられたということを聞いたことがない。学生自治について猛反省を促すなり、それでも反省しなければ、自治そのものを取り上げてしまふ根拠は、いままでいくらでもあったのに。私はこの点もおかしいと思うのである。

そこでこんどは、教授らしくない教授のことに移るが、大体私は次のように考えている。学生が、学生らしくあればいいものを、学生らしくなくなってきたならば、教える者がそれを指摘しなければならぬ。一度や二度では駄目であろうが、そのことに問題の要点があることが、常々教授同士のあいだで確認され合っている。しかしそれを指摘する勇気が、教授の一人一人になくなってしまっているならば、もうそれでおしまいで済む。

残るのは泥沼の展開だけになること必定である。また、学生が学生らしくなくなってきた傾向を、我が意を得たり、と思っているような、不らちな革命派の教授が一人でもいるのならば、他の教授が、そのことを、教授会の問題に取り上

げる勇気がなければならぬ。その勇気もない、というのならば、それもそれでおしまいで済む。

あるいは、学生が学生らしくなくなっていることに、我が意を得たり、とはいえないまでも、内心、革命戦士の養成が出来たことを心ひそかに喜んでいような教授が、一人でもいる場合も、同じことがいえる。それよりも、学生たることを極端に逸脱した学生を、あえて不問に附しておいて、逆にその学生たちが言うことを支持するような発言が、教授会の過半を制するようにならば、そのような教授会の存在は、すでに教育的機能を喪失したも同然であると思う。これは、手がつけられない重症の事態といふべきである。ところが、この重症状況の教授会が、全国の大学の各所に統出しているのが、日本の現状ではないであらうか。とすると、問題は、学生問題ではなく、教授問題または教授会問題になってしまう。なぜならば、教授会の決定は、その当該問題に関する限りは、実質的に、最高の権威あるものとされているのが慣例であり、制度上は上の機関、たとえば評議員会とか、学長、総長とかいうものがあるのだが、それらは、教授会の決定に容易に反対し得ないのが実情のようである。

そこで、このことを整理すれば、どういうことになるか。もし、ある教授会の全体を覆う雰囲気、すでにマルキシズム信奉に傾いている場合、または、政府や文部省を権力悪と決めてかかっているような場合は、いかに学問と実践は別だ

といつても、その思想は、学生たちに対する教育的効果を生んで、学生に反政府、反文教政策、反大学当局というような過激な政治行動をも、暗に支持し兼ねないことになろう。また、ときには、過激な行動の現象面の一部だけは、やつと世間の手前もあつて処分の対象にする場合でも、蔭ではその学生たちの革命的な心情に称賛を惜しまないような教授が、少なからず控えていた、などという奇妙な現象も起こり勝ちになる。

例えば過激の東大の安田講堂占拠事件（占拠学生の言語道断な狼籍ぶりはニュースでくわしく報道されたが）に際して、大河内総長は、単独の判断で警官導入を要請した。それで狼籍者たちは、いち早く逃げ失せたとのだが、この総長の決断に対して、某学部教授会の内々の意向というのが、洩れ伝えられてきた。それは、「教授会の同意も得ずに、警官を大学構内に導入するとは何事だ」という言い分のものであつた。いくつかの学部の学生自治会が、同じような主張をして、果敢にストにはいつたが、どうしたことか、教授会もそれに同調しているのか、一向に学生をたしなめる気配が見られなかつたのである。この場合などは、明らかに教授陣と学生の過激派とが通じ合つていたとも見られ、そのために一般学生の正義感をも煽動していくことになつて、暗黙裡に、総長を孤立させるような反抗姿勢が生じてしまう。また同時に警察官という社会治安の責に任ずる公的存在に対する見方にしても、大学教授や学生ともあろう者が、それを一方的

に大学に対する権力悪と決めてかかつているのも、どういふものであろうか。

また、警察官ばかりではない。自衛官に対する教授や学生の対し方にも問題が多い。自衛官が大学に来て学ぶのに反対した学生騒動も、あちこちで見られた。しかしそれは学生たちだけでなく、背後に同調の教官たちもいたことも、銘記すべきである。同じ国家公務員である大学教官が、何という偏狭な立場で大学に立て籠ろうとするのか。これらの一部の教官たち（助教、助手、副手の中にもそれらの者が少なくないので、教授だけで

三 条 実 美 と 前 田 慶 寧

広 瀬 誠

はないから、ここではあえて教官と呼ぶが）こそ、実は、長い年月に亘つて、全学連三派を育てあげた人々ではなかつたのか。

このように見てくると、今日、激化の一途を辿つている学生騒擾の問題を、もし本質的に解決させようとするには、実は、意外なところに問題のポイントを移さねばならなくなるかも知れない。学生問題であるよりも前に、教官たちの、自らの姿勢を正す問題、その方途と決意の在り方の問題の方が、はるかに緊急なのかも知れないからである。

加賀藩史料、明治二年六月二十六日の条に「三条実美及び岩倉具視、前田慶寧の東京邸に臨む」といふ項目を掲げ、「前田宰相中将の館にまかりて」と題する次の二首を書きとめてゐる。

白山の雪打ちとけてもろとも心に底をくむぞ嬉しき（実美）
あたなりとなそみこし路の雪水とけてこそなれ朝政（具視）

前田慶寧は加賀百万石最後の藩主であつた。金沢に本拠を置き、越中・能登・加賀三国を支配し、近江の海津にも領地を供つ大藩が、いよいよといふ土壇場になつて、朝命を奉ずるか、幕府に従ふかは、きはめて重大であつた。具視の歌は、加

てゐる。

これに比べて実美の歌はまた何といふ淀みのないすがすがしい一首であらう。雪白き白山は加賀のシンボルであるから「白山の雪」とまづ歌ひ出し、「白山の雪どけ」といふことを序にして「心の底まで打ちとけて、お互ひの真意を汲むことができて、本當にうれし」と、何のわだかまりもなく、さわやかに読みくだしてゐるのである。「くむ」も雪どけ水の縁語かもしれぬが、そのやうな技巧など気にもつかぬくらゐ、一首のしらべはどこどほりなく、清純卒直である。あふれ出るやうな情意が、因襲の修辭をとかしこんでしまつてゐる。この一首をくちすきかゝり、白山の清らかな雪どけ水が、読者の心まで洗つてくれるやうな、清爽感をおぼえるのである。

一口に勤皇派といつても、誠実純真のまごころを一貫した人と、策謀的な人があつたわけで、歌のしらべは淨琉璃の鏡のごとく、これを写し出してゐる。維新後百年の歴史も、実美の如き純情と、具視の如き謀心とが、からみあつて展開し、国運に明暗さまざまの影を交錯させて来てゐる。策略も陰謀も、時としては國のため必要なことがあるが、そのやうな政治悪をすこしでも浄化してゆく努力が大切で、実美の歌のしらべが政治家の心情に上げ潮のやうにさしてゐることが切に望まれてならないのである。

さて、実美・具視両公の訪問を受けた前田慶寧とはどんな人物だつたのだから

幕末国事多難の時、加賀藩の大勢は佐幕に傾いてゐた。当時の藩主は斉奏、世子は慶寧ではあるが、慶寧は勤皇の志厚く、文久三年六月上府せよといふ幕命を拒み、かへつて翌元治元年四月朝命を奉じ手兵を率へて上京し、宮廷を守護せんとした。そのままで幕府の体面まる潰れとなるので、幕府ではあわてて、慶寧に京都守護の命を下し、いかにも慶寧が幕命に従つて居るやうに見せかせ、体裁をとりつくりつたといふ。佐幕派が大勢を占める藩の中で、世子を中心とする勤皇派が激しくもあがつて来てゐたのである。

慶寧配下の勤皇派藩士は長州藩と提携するため京都でひそかに活躍した。慶寧自身も長州に深く好意をいだき、幕府に對して、その長州敵視政策を改めさせるため、くりかへし努力してゐる。やがて長州藩兵が京都を目ざして接近してくると、幕府は慶寧に對して伏見出兵を命じたが、この時も慶寧はきっぱり幕命を拒絶してゐる。一方、長州側に對しても輕挙せぬやう忠告し、「挙国一致王事に尽す事」を双方に強く勧告したのであつた。

しかし元治元年七月つひに禁門の変暴発し、長州軍は敗れ去つた。当時、慶寧側では一人の長州落武者をかくまひ、ひそかに護衛をつけて送り返してやつたといふ。しかし事すでに敗れたとみて、慶寧は京都を出て近江海津に引揚げた。

事変後、慶寧は幕府の嫌忌をうけ謹慎を命ぜられた。慶寧に從つた勤皇派藩士は悉く処刑された。その後藩論は佐幕一

辺倒となつてしまつた。加賀百万石の威力に對して遠慮気味だつた幕府は、この時から急に強氣になつて、足もとの乱れた加賀藩の首の根を押さへつけたのであつた。

慶寧の謹慎が解かれたのは翌慶應元年四月。その翌年の二年四月には藩主斉奏は隠退し、慶寧がそのあとを相続して藩主となつた。しかし手足と頼む勤皇派藩士はすでになく、慶寧はむなしく騒然たる世情を傍觀した。内治には積極的な姿勢をとり、すぐれた治績をあげたが、尊皇佐幕の問題からは手を引いた。会津の松平容保などに近づき、むしろ佐幕的できへあつた。腹心の部下を悉く死なせ、謹慎の罰を受け、危く相統権も剝奪されさうになつた慶寧の、心の痛手は深く、さまざまに思ひ迷つたのであらう。

慶應四年一月、京都の風雲急を告げると、幕府は加賀藩に出兵を命じた。慶寧はただちにこれに應じ、一月五日徳川慶喜に力を協さんため藩兵の出動を命じた。藩兵は越前長崎まで進撃したが、鳥羽伏見における幕軍敗北の報を得て、十二日行動を停めた。鳥羽伏見の官軍が、単なる薩長軍でなく、錦旗を奉じてゐたことを知つて慶寧は恐懼し、一月十五日の朝命を奉体し、二十六日には官軍となる請書を朝廷に上り、征東軍の先鋒を勤めさせていたきたいと願ひ出た。かくて四月二十日東北諸藩を討つため加賀藩兵は越後路へ進入を開始した。

この間の加賀藩の変転きはまじりない向背が、朝廷注目のまどだつたのである。二月二十九日には藩の重臣が朝廷へ参向

して慶寧の行動について弁解してゐる。北越戦争における加賀藩の戦力・財力による貢献は絶大であつたが、戦争当初の変節的と疑はれる行動がたつたので、加賀藩は残飯をくはされ、新政の枢機に参加しえなかつた。加賀藩勤皇のつもりあがり挫折、理想と保身との交替、それを慶寧は一身に集めて体現してゐる。

以上の事情を知つた上で、条・倉両公の歌を読み味はふと、腹に一物を持つてゐる具視と、相手の本来の善意を信じて、心の底からうちとけて温情をそそぐ実美との相違がはつきりしてゐるのである。

慶寧は明治七年病歿した。四十五才であつた。かへつて父の斉奏が明治十七年まで生き、七十四才の天寿を全うしてゐる。あまり長からぬ慶寧の生涯は、挫折多く鬱屈したものであつた。その生涯に白山の雪の如き一点の清光を点じてゐるのは、三条実美から贈られた一首でなかつたかと思ふのである。

附 記

(一)慶寧は実美に答へる返歌を詠んだのかどうか。加賀藩史料に何ら記すところないのは残念である。しかし、文久・元治の頃、慶寧の下にあつて、慶寧の手足となつて勤皇のため奔走し、禁門変後捕へられ、元治元年十月十九日処刑された加賀藩士小川幸三・福岡惣助が、いまはのきはに辞世の歌を残してゐる。

敷しまや我があきつ洲の武士は死ぬとも朽ちじ大和魂(小川幸三)

我が靈はやがて雲路をかけりつ御階のもとに走せまるるべし(福岡惣助)

幸三の歌は吉田松陰の辞世「身はたとへ武蔵の野辺に朽ちぬともどめおかまし大和魂」を思はせる。惣助の歌は、孝明天皇御製「一戈とりてまもれ宮びとこのへのみはしの桜かぜそよくなり」に奉答したものであらう。

幸三・惣助はじめ三十六名の加賀藩士処刑者は明治二十四年、靖国神社に合祀された。

(二)富山市重杉俊雄氏所蔵、三条実美短冊かみばかりうつりゆくよをいたづらにかみのをこのすぐすべしやはこの一首も、「白山の」の一首も、三条公歌集「梨のかた枝」に未収録の作である。これらの歌を「梨のかたえとその研究」の著者夜久正雄さんにお知らせして、感想を書き添へておいたところ、夜久さんは私見に同感され、具視の歌については「どうも歌は無理のやうですネ。政略の背後にある支配意志が浄化されないのですネ」と書いて寄こされた。

なほ、最初に、実美・具視の歌を對比して論じたのは川田順氏の『幕末愛国歌』(昭和一四)であらう。その中で「岩倉公はどこまでも豪邁剛直の大政治家である」、これに對して三条公は「至純至忠、温厚謙敵の人である」として「両公共に愛国の士たる事は同じきも、人柄の差によつて、歌の表はれ方が明瞭に異つてゐる」と説かれてゐる。

次に夜久正雄氏は「梨のかたえとその研究」(昭和一八雜誌連載、昭和一九年行本)の中で両公の歌を比較検討し、岩倉公の歌には知的技巧の修辭的興味が優勢で、思想上重大な欠陥を示すと批判

し、情意に直接する三条公の歌の意義を説かれた。三井甲之氏また『三条実美伝』(昭和一九)において両公の歌を比較して、具視の歌に「自我感情を露呈せしめた騒音の交ったシラベ」があると批判、幕府の意志の危険をそこに指摘された。私も昭和一八「宣長と篤胤」(国学院雑誌四九ノ一)の中で、両公の歌をひきあひに出して「自力的に固定的に表現する岩倉具視と、うらなげき、なげきこひのみ、さげびいのりし三条実美との相違」を論じたことがある。一昭和四三・六・一五稿(富山県立図書館司書)

「黒部の太陽」から

—— 太田垣氏と般若心経 ——

岡村 義一

今年になって封切られた映画の中に「黒部の太陽」というのがあった。三船プロと石原プロ合作の映画で、いろいろの意味で、かなり注目を集めた映画であった。

この映画は、黒部ダム建設の原動力となった関電トネル(大町ルート)の破壊突破にスポットを当て、日本の映画には珍らしいスケールの大きい作品であった。

私は封切前、この映画の原作「黒部の太陽」(木下正次著、講談社刊)を読んでいたので、興味と期待を持って、映画を観ることができた。しかし、それは原作から得た感動とは別個のもので、実は失望に近いものを感じたのであった。これは、活字文化と映像文化の違いであるとい概に断じ切れない、複雑な問題があるのではないかと考える。

映画では、この世紀の事業完成の原動力ともいえる太田垣士郎氏の行跡には、殆んど触れていないように思った。

「神話への出発」という目次に始まる原作は、活字を通して、行間に滲みでる黒四建設の苦闘が、心憎いまでに書かれていて、読者の胸を打たずにはおかない。

然し、私がこの書から得たものは、唯単なる感動だけではなかった。この書を通して、改めて「般若心経」なるものの神秘性に触れ、その価値の持つ偉大さを知る機縁に恵まれたことである。

(1)二十世紀に於ける日本の誇り
有史以来、始めて敗戦と言う、冷峻な歴史の事実を体験したわが国民は、精神的にはこの二十年間、全く国民的自覚を失っていた感さえあった。これを称して、或著名な豊眼の士は、「戦後も敗け続けている」とさえ嘆いたくらいである。

輝かしい明治維新に始まる近世日本の国是は、「富国強兵策」であった。二百数十年間続いた鎖国政策は、国内で一心の平和は維持できたものの、開国によって広く海外に目を転じるとき、東海の一小国として独立を保つためには、この

方策をとる以外に生きる道はなかったのではないかと思う。

もともと優れた民族で、長い歴史伝統を持つ日本人は、挙国一致、天皇を中心に、近々数十年間に、世界の三大強国とまで注目されるようになった。特に国防の面では、無比の精鋭陸軍、世界を震撼させた軍艦の建造、更に今だに語り伝えられる零戦の出現等、数え挙げればきりない行跡を残している。

大東亜戦争の可否については、後世の史家が、公平に審判を下す時期が到来するであろう。唯われわれが永遠に忘れてはならないことは、大君のミコトかして各地に散っていった英霊の為に、大東亜のわが民族が存続する限り、敬虔なる感謝の祈りを忘れてはならないと思う。

さて、このような歴史の事実と、黒四ダムの建設を比較することは、到底できないであろう。しかし、あえて私の言いたいのは、七年の歳月を費し、五百億の工費、延べ一千万人を動員し、しかも百七十一人の尊い犠牲者の上に建設された黒四ダムは、或意味では宗教と科学が一致し、日本人の手で築き上げられた「二十世紀の神話」の一つであると言っても過言でないと思信るからである。

世界の驚異的である我が国の経済的繁栄には、黒四ダム建設にみられるような陰の因子があることは否定できないと思う。

目に見える物質のみを信じて、その背後にある精神が信じられなくなりつつある日本である。自然科学が優先して、精

神科学(特に、道徳、哲学、宗教の領域)が軽くみられる今日である。

このような意味で、建設途上、不可能を可能に転ぜしめた、黒四ダム建設の秘密を追求し、そこから日本建設の原理を学びとることが、現下の急務であると考えられる。

(2)心打たれる物語の山
何と言っても黒四ダム建設の原動力となったのは、総指揮をとった関西電力社長太田垣氏の、深い宗教的信念を支えられた不動の信念に負うところが大きい。

この書の圧巻とも言うべき、太田垣氏の数寄を極めた人生行路から、到達し得た人格が、ダム建設に従事する全員に、染み透っていったのではないだろうか。

太田垣氏は少年の頃、ふとしたことで一本の鋏を飲み込み、それがなんと七年近くも気管の中にあつたと言う。医者であつた父も、当時の医学では如何ともし難く、本人を含めて死期を待つのみだつた。しかし、母方の祖母は熱烈なお大師さんの信者で、生前から、

「士郎よ。望みを失ってはいけない。お前はお大師さんが助けてくれる。お前の鋏は、お大師さんが必ず取って下さる。」

と言って士郎を励まし、自分は毎日裏山の温泉寺に詣でて、自分の身に代えてもと、士郎の快癒を祈っていた。

しかし、この祖母の祈りも空しく、鋏が入ってから六年目、お大師さんの日の二十一日に、この世を去つた。そして、その一周忌の日のことである。法事が終

って昼寝をしていた土郎少年に、「土郎土郎！」と呼ぶなつかしい祖母の音が夢うつつに聞えた。土郎は思はず跳び起きて「はいっ」と大声で返事をして咳き入った。その咳とともに、鉦が飛び出したと言のである。驚喜した土郎は、飛んでいって父に報告すると、

「土郎！お前を助けてくれたのはおばあさんだ。ということは弘法大師さまだ。お前はきょうから一日に千回、南

同胞歌壇

しきしまのみら

東京 夜久 正雄

伊勢神宮に初詣でして、五音に聞く二見ヶ浦の初日の出そがひの山ゆ出づるなりけり

まかがやく初日うれしも遠く来て二見ヶ浦に立ちてをろがむ

何といふすがすがしきか内陣の拜殿のしるきとばり目にしむ(内宮参拝二首)

まかでくるまろし路にしていただきしこのとよみきの身にしみにけり

みはるかす太平洋は山なみのかなた音なく日をてりかへず(朝熊山にて)

三月十三日明治神宮・明治神宮崇敬会主催の明治維新百年記念式典に参列して、五首

みな人と声の限りをはりあげて「君が代」ことはぎうたひまつりつ

天皇陛下萬歳と声はりあげて一万二千の

無大師遍照金剛を唱えなさい。私も唱える。」

土郎の話を聞いて、医師で無神論者で、神仏などは全く無視し続けて来た父が、涙を流して言ったという。

「これらの出来事を、偶然の暗合と解するのもよい。また深い人生の神秘とう

なずくのもよい。ともあれ、すべては『事実』であって、太田垣土郎氏がそれによつて、その人生観に、大きな影響を受

人となへけり
よろづよをとなへまつれば壇上の宮殿下
妃殿下のみ手あげたまふ
高松の宮殿下にこやかにゑみたまひ満堂
の人を見わたしたまふ
うつくしき宮妃殿下の高貴なる気品あたりを
はらひたまへり

桂浜にて
桂浜に向ふ車のバスガイドは竜馬の最後を語りて終りぬ
太平洋の極まる彼方を望むがに立てる竜馬を仰ぎあかすも
小柳大兄に(国民同胞四月号によせられし歌の返しに)

われを友と賞で給ひますか帆柱の岡ゆはるけく偲ぶとふ歌
わが住める里はよきかも雲雀たつ声をききつ、日々を眼覚むる
四国嶺にただに向へるわが庭に移せるつじも花をひらきぬ
心知る友はまさねど相ひ共に働く仲間の日ましかなく
母無事帰省せりとの便りをうけて

西条 長内 俊平

北九州 山田 輝彦

「舞姫」を読む
花やげる伯林の街菩提樹下さざめく人波うつつにうかび来
功名と恋と君らはいづれをかえらぶと問へばもだす生徒ら
とつかに胸うつと言ふ
情いたく胸うつと言ふ
鷗外の若きいのちはうるはしき文のしらべに今も思づく
楠若葉ゆらぎやますも校庭に風吹きてある午後の一とき
若きらの瞳きらきらかがやきてうなづく時はうれしかりけり
明治てふ御代になひたるますらをのかなしきいのちつきゆくは誰ぞ

ただけば否定できない。
破砕帯が全く絶望に類したときも、この仕事に全身身を傾けていた太田垣氏は、心の中で「南無大師遍照金剛」を唱え、弘法大師を祈り続けていたことである。

そして、
(あの一本の鉦を吸い込んだ時、俺の生命は終わったかも知れないのだ。それを……こうしてこの年まで生かしている)

待ちわびし無事到着のみ便りを立ちつゝ、読みぬ夕陽り来て
加茂川にともに拾ひし青き石を母は床の間に飾りしといふ
母がことに賞でし四国嶺窓あけて一日果つる迄眺めてゐたりき
すこやかにゑみたまひ満堂
訪ひ来る時の今より待たるる

真言宗の家に生まれ、お大師さんの伝説を聞かされて育った私は、もともと「般若心経」たるお経は、うろ覚えに知っていた。

幼時を回想すれば、数々の想い出が浮んでくる。月一回のお大師講というのがあった。近所の数軒が集って、「般若心経」を挙げ、松風センペイを囃りながら四方山話に花が咲いて楽しい時を過ごす頃であった。また、春、菜種の花の咲く頃になると、白衣のお遍路さんが、御詠歌を唱えながら、リンリンと鈴を振りながら廻って来た。

ただいて……。俺はそのお礼のためにも、何を捨てても、人のため、世のために尽くさねばならない！
と心に期していたことである。
関電トンネルが完遂しなければ、黒四ダムは日の目を見なかったらうし、またそのためには破砕帯突波が是非必要であった。
私はこの書を繰り返し読みながら、黒四ダムの完成は、太田垣氏の功績によるものだと思った。そしてまたあの偉大な弘法大師が、日本へ始めて紹介したといわれる「般若心経」の功德によるものだと考えたのである。
(8) 宗教を求めん心

多感な少年時代、技術者志望の私を、除々に文学方面へ引つ張った友人某があった。放課後の友人と西国三番の札所で名高い粉河寺に詣でたものである。そして、時間のたつのも忘れ、真面目に人生を語り、宗教を論じ、また死についても真剣に語りあったのを覚えている。

古典の窓

青々たる春の柳、家園(みその)に植うることなかれ、文はりは軽薄の人と結ぶことなかれ、楊柳茂りやすくとも秋の初風の吹くに耐へめや、軽薄の人は文はりやすくして亦速やかなり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶えて訪らふ日なし。

(西月物語・菊花の約)

☆

今日は九月九日、重陽菊花の節句。義兄弟の契りを結んだ赤穴(あかな)安右衛門が出雲の国から、ここ播州加古の地に帰りつくべき日であった。丈部(はせべ)左門は早くより起きて友の帰るのを待っていた所、約束とは言え遠い百里をへだてた所、今日誤りなく着くともかぎらぬ、友来りてより支度すべしと老母は言葉を送るが、赤穴は信ある武士、約を違えるはずはないと酒飯の用意をして、左門は「心酔へるが如く」友の来るのを待っている。かくて日は西に沈み、銀河の影きえぎに、月影つめたく、犬の吼ゆる声すみわたり、遠い浦浪の音もすぐそこに迫るがごとくであった。だが友は来ない。月の光も山のはにかくれ、さすがに戸を閉さんとする時「おぼろなる黒影(かげろひ)の中に人ありて、風のまに／＼来るをあやしと見れば」赤穴宗右衛門であった。左門は踊りあがる心持して友を迎えるが、友と見しは

友にあらず、死せる友の霊のかりの姿であった。友の雪がいう、「自分はそなたと別れて出雲に帰ったが、国人は新たに城を乗り取った尼子経久の勢に屈して、旧主塩冶掃部介の恩義を忘れて顧みようともしない。かゝる人情軽薄の所に居るべき理(ことわり)なく、貴君との約を果すべく去ろうとしたが、城主は我を城より出そうとはせぬ。かくて月日はすぎ約束の日に戻ることが出来なくなった今、自分に残された道は、魂となって千里を越え、貴君との約束を果す以外にはない。かくて、自ら刃に伏し今夜、陰風に乗って菊花の約(ちぎり)に付いたのである。」語り終えた赤穴は「今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へ」といって座を立つと見えだが、その時すでに姿は見えなかった――

初めに掲げた一文は、この上田秋成雨月物語中の一篇「菊花の約」の冒頭の部分である。秋の風に耐えずして散る楊柳できえも、春には又芽ぶくこともあるが、軽薄の人は一度離れば又訪うことはない。その友情離れ如き世相の中に、まさに菊花の如く花開いた友情を、秋成は心をこめて描くのである。そこには妖気のためよう、秋成独自の世界が形造られているが、余情深き背景の中に、切々と描かれたこの友情の表現は、まさきもない日本の心情のあらわれとして数ある古典の中でも特に珍重すべき一篇であろう。

(修猷館高校教諭 小柳陽太郎)

太田垣氏は、夢多い少年時代に、一本の鏡を飲んだことよって、生きるあてのない灰色の少年時代を過ごさねばならなかった。いまだ心のうすくものがある。友人たちが屈托もなく遊びたわむれているかたわらで、胸に抱く一本の鏡を思いわずらい、明日の死を考えねばならなかったのである。

それは、悲しかっただろうし、恐ろしかっただろう。日ごと日ごとの死との対決――その間に深く人生を考え、そのかなさや空しさや、またそれ故に尊さを骨身に徹して考えたことであろう。運命といってしまうは、それまでである。しかし私たちの人生は、そんなに簡単に割り切れるものではない。

だから士郎少年の体験は、人生そのものを深く厳しく考え、人間としての幅をたぐいなく広いものに育て上げていったのではないだろうか？

思うに「死」というものについて、深い恐れを抱くのは、むしろ少年時代ではないかと思う。青年から壮年、そして老年へと近づくにつれて、むしろ恐れが薄らぎ、人生の諦観が、死もまた待つべきものと、長い年月の間に、自然に悟ってくるのではないだろうか。

とまれ、太田垣氏の黒四ダムにかけた情熱と信念は、こういった少年時代に鍛えられていったのである。

われわれ人間にとって、生きていく上での根本問題は、「人間は如何に生き、そして何をなすべきか」ということではないだろうか。しかし、このことを解決

するためには、「何が人生において価値があるのか」ということを真剣に追求することが大切である。

人は常に、意識するとせざるにかかわらず「生きがいのある」人生を求め、「働きがある」友人や、「尽くしがいる」夫や妻に尽したいと思っている。そしてこういった人生の神秘を開く鍵は、案外青少年時代に、与えられているのではないだろうか。

「般若心経」の冒頭の一節は、
観自在菩薩。行深般若波羅密多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。(観自在菩薩が深く波羅密多を行ずる時、五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまふ)とあり、心経の中心になっている。黒部の太陽を通して、般若心経に接する機縁に恵まれたことを私は感謝する。さ、やかな研究によって感じられたことについては稿をあらためて述べたいと思う。

(岸和田市小学校教諭)

編集後記 本会夏季合宿の第一回は霧島で九十名が参加した。今年第十三回は二度目の霧島で(八月三日〜七日)三百名を越す参加者が予想される。この間、世界の大事、日本の経済的国力何れも大きい変化があったが、社会をゆるがす事件はほとんど道徳的衰弱に由来して、あとを絶たずますます深刻化して来た。これに対処する道は「策」ではない、と本誌で小田村理事長が言つてをられるが、お互ひ日本人としての内から発する志に閉こらるもそのあたりであらう。「信」が心に芽生へ、大きいきつとなつていくことを、間近い合宿を前にして折る。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階
 月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間 360円

「日本を守る」とはどういふことなのか

長内俊平

（今春、幹部学生合宿に集ふ若い友らによせて）この便りが着く頃は、合宿の日程も半ばを過ぎてゐることと思ひます。合宿には、小田村さんをはじめとして、小柳・山田・川井さん達が出られてゐる様子、それに参加者の諸兄も皆「おい」と呼べば、「おい」と答へる顔ぶれで、敵しいなかにも楽しい生活が偲ばれ、仲間に入れてもらひたい気持がなお去りません。

ところで今日は、参加出来なかつた代りに、一寸この頃考へてゐることを書いてみる氣で筆をとりました。

しかし人に物を言ふことは、実はおそろしいことなのです。何故かならば、言つてゐる本人が、言ふことのどれ程「行ひ」として身についてゐるのかと考へますと、全く薄氷を踏む思ひがするからなのです。そう言つた心を汲みとられながらお読み載ければ幸です。

私達は、よく「日本を守る」「國の為に」といふ言葉を使ひます。しかしこの場合、「日本」とは何かといふことは皆お互によく知つてゐるつもりか、或は自明のこととして「守る」といふことの議論なり話に集中し勝ちです。しかしあらためて「日本」とは一体何ですかとよかされてみますと、これ程漠然としたものはないことに気がきます。

このことは、丁度正体の分らないものを守ろう守ろうといふてゐるのに似てをりませう。そこで何よりも大事なことはこの正体をつきとめるといふことにならざる筈です。「日本」といふ正体はつきりして参りますと、「守る」といふことの意義、「守り方」といふものが自づと明らかになるのではないかと思ふからです。

しかしそれは申ししても、秋自身、自下暗中模索といふところでありまし

て、最近僅かばかりほのぼのとして来たところのものを諸兄に：上手に話すことは出来なideせうが：申しあげてみようと言ふわけなのです。

さて「日本とは我である。」これが今私のゆきついた結論です。何か禅問答のようですが、こうした基本的問題はそうならざるを得ない性格のものなのでせう。万言を費しても説明のつけれない一つの悟りの問題なのですから。

従つてこのことから「日本を守る」といふことは「我を守る」といふことになります。

近頃「日本の伝統文化を守らなければならぬ」といふことが、識者の間によく言はれてをりますが、この場合、日本の伝統文化といふものが、我のそとにあるものとして把握され、それを守るといふことは、外からの侵害を防ぐといふ風に取扱はれてゐるのを多くみかけます。

しかしこれでは、日本の伝統文化を骨董品扱いにしてゐるといはれても仕方がありますまい。真に日本の伝統文化を守るといふのであれば、万が一、大地震でも来て、その大事なものが壊されてしまつても、それと同じようなものを、つくりうる日本人が、日本に残つてゐるといふことでなければなりません。しからば「守る」といふことは、外界からの侵害を防ぐといふことでなく、正しく日本の伝統文化を、誰かできなくして、「我」がうけつぎ、我が身を以つて行ずるといふことでなければならぬといふことになりませうか。

即ち「日本」とは我の外にあるもので

はなくて、我自身なのであります。別な言葉で言ふならば、「我は小さい日本そのものである」とでもなりませうか。

なおここでいふ我とは、他から個立して存在しうるものではなくて、朝昼晩そのなかにあつて初めて我たりうるところのものである。その中とは、自然、親子兄弟、祖先のみたま、さらには友人、隣人、学校、勤務先、といふことになりませうか。

そうだとしますと、私が学生ならば、「我を守る」とは、それとの関りあいなしには我たり得ないところの「学園を守る」といふことになり、それが具体的な「日本を守る」実内容といふことになりませうか。

結局日本といふものは、抽象的に存在するものではなく、「我とのかかはり合ひ」のなかに敵存するものなのでせう。次に先にも一寸触れましたが、守るといふことを、今少し考へてみます。

我々の友人、先輩諸兄のなかの少なからぬ方々が終戦の折自決されました。

目次	
「日本を守る」とはどういふことなのか	俊平 (1)
思想の原点	長内俊平 (2)
有情の記	山田加藤 (4)
文明の戦い	桑原善之 (5)
長崎大学信和会から	白石 (8)

その方達にとりまして、「日本を守る」といふことは、決して他からの侵害を防ぐといふのではなくて、我との対決といふギリギリのところまで、自決といふ行為そのものをもって日本を守ったといふことが言ひうると思ふのです。彼ら先輩は我を守りぬいたのです。そうした先輩達の生命のつみあげが日本といふ実内容でないでせうか。即ち「守る」といふことは、外界からの侵害を防ぐといふのではなくして、自ら心に期したところの誓ひを、不断の努力と精進をもって行ずる、といふ極めて厳しく困難な道そのものを言ふのであります。

尾崎先生の「人生劇場」のなかの吉良常や飛車角は、一言も、「日本を守る」と言つてをりませんし、彼らはおそらくそんな大それたことを考えるのは我々のからではない。ただおれは、己に背かざる生きかたがしたいと念じ、それを行じたに過ぎないというでせうが、そういう人達の生き方それ自身が日本といふ実内容なのではないでせうか。

いろいろと前後左右つじつまの合はぬことを書きつらねて参りましたが、私がかつて、八日会の友らに向つて、「八日会には来なくてもいい」と申したことがありました。それは、自分の行つてゐる学校で、何もしないものが、夜だけ集つて輪読したところで何になるかと言ひたかつたのです。我との対決なしの集いは、おなぐさみにしかすぎません。我と対決して絶望に近い悩みをもち、友や先輩を訪ねて行かずに、生きてゆけない。そうした者の嘆きの交し場所が、八

日会であり、合宿なのではありませんまいか。

だんだんと激して参りまして、最初に申しあげた慎みの心をついに忘れかけて来たようですので、魂に残る合宿生活を送られるよう心から念じつゝこの辺で筆を擱くことに致します。

こうしてお便りを書いてをります小生の家の真向ひに、四国山脈がうすうすと覆に被はれて立っております。この美しい自然を眺めてをりますと生きてゐるこ

思想の原点

—古くして新しい問題「国家」—

山田輝彦

との幸をしみじみ感じます。諸兄のなかには、まもなくお勤めに出来る方もをりませう。どうか一度足をのぼして小生宅を訪ねてくれることを心からお待ちしてをります。

ひばりたつ声をきく、春霞たなびく四国嶺をあかず眺むる
集ひ来し友の面はおのおのおも現し
くまぶたに浮び来るなり
合宿参加の若い友らに
合掌
(電報開発伊予電力所)

八月十五日の意味
めくるめくような八月の太陽が、まっ青な空に燃えていた。昨日までの激しい物音が一瞬どこかへ消えてしまったような底知れない不気味な静けさが満ちていた。我々はその日、まさしく一瞬の間であるが「国家の死」という事実を全身で実感した。二十四回目その日が今年もまためぐつて来る。その時の仮死状態から、日本の国はまことに不死鳥のように蘇った。この民族の活力は世界中の人々から讃嘆の眼をもって注目された。しかし、国の深部に残った傷痕は決して癒えてはいない。むしろ傷は年を逐つて深く内攻して行くような気がしてならない。全世界の先進工業国といわれる国が例外なく背負わざるを得ない必然的な宿命

を背負わざるを得ない必然的な宿命

人間疎外や機械への隷属や個性の抹消など——と共に、敗戦によって受けた外圧的变化、この二つがダブつて、世界で類のない奇妙な混乱を醸し出している国、これがわれわれの祖国日本の姿である。

かつて漱石は「現代日本の開化」という講演で日本の開化は「外発的開化」であるといつた。外発的といふのは、昔が花になり、花が実になるといふ「内発的」な過程ではなく、外部の圧力によって己むを得ず行われた開化という意味である、そして、この外発的開化を促した圧力とはいふまでもなくアメリカとロシアの「黒船」によって象徴される西洋列強の武力であった。そうして「近代化」と称せられる一連の現象が、極めて急テン

ポに実現されて行つた。同じ漱石はこの講演より二年程前の「それから」(明・42)に於て、近代の文明は人を孤独にするものだといっている。大地は続いているけれども、その上に家を建てたら切れ切れになつた。家の中の人間も切れ切れになつたといふ彼の言葉には深い悲しみがこもっている。そして、その原因を「道義欲と生活欲の矛盾、衝突」によるものだと言っている。その「生活欲」は「泰西から押寄せたつなみ」のように明治の日本を呑みこんだ。いうまでもなく、彼が「生活欲」といつたのは、強烈な自己主張であり、生存の本能であり、ヨーロッパ流のあくの強いエゴイズムを指している。それは「自己中心」のエネルギーであるから、他者の存在を前提とし、それとの調和によって生きようとする「道義欲」とは矛盾する。道徳の体系の最高のところにあるものは「自己犠牲」であるから、自己に徹底的に執着するところからは道徳への通路は閉ざされてしまふ。そういう強固で頑迷なエゴを否定なくコントロールするためには強大な権力政治しかない。「国家の本体は権力である」というマルクス主義の国家観はそういう所から出て来る。このういふ個と全との関係が鋭い形で出て来たのが「大逆事件」とである。石川啄木は「時代閉塞の現状」という論の中で、文学者が「強権」と対決すべきことを強調している。こういう重大な問題が思想的に未解決のまま、大正期に入る。大正期の思想の特色は「国家」の観念の欠落である。明治の二十年代の国粹主義は、社会主義をも包みこ

むほどの開明性を持っていたし、「国家」は明治の人々にとつては、その消長が自らの運命に直接するという実感において現代人が想像もできぬ敏感な感覚によって支えられていた。しかし、大正期のインテリ層の関心はもっぱら「人類」に向けられた。武者小路実篤は、乃木大将の死とゴッホの死を比較して、後者を「人類的」であるとした。そういう空漠たる個人至上の思想がようやく人の心を倦ましめ始めた時、新しい連帯を呼号するマルキシズムが遼原の火のように人々の心を燃焼した。いわゆる昭和維新運動を推進した当時の革新官僚や青年将校の思想は、このマルクス主義の逆の投影である。こういう思想的な混沌が整理されないうまま、あの悲劇的な戦争が起り、運命の八月十五日が来た。その日は明治以来の日本のプロセスの、あまりにも悲劇的な総決算であった。

「柔社会」の虚無感

現代のあらゆる思想問題の中核にあるのは「個と全」の問題であると思う。もし、あのロビンソン・クルーソーのように絶海の孤島に一人で放置されれば、そこには全き自由がある。道徳は、他者の存在が前提であるから、一人の時には道徳の必要はないからである。しかし、和辻哲郎博士が「人間とは人と人の間柄である」と規定されたように、たった一人の人間は既に正確な意味で人間ではない。人間は自然の中に生物として生み落されるのではなく、正確には社会の中に人間として生み落される。もっと正確に言えば国家の中に国民として生み落さ

れるのである。いわゞ国家や社会は第二の自然といつてもよいであろう。古来文学の世界では「父と子」というのが大きなテーマの一つであった。「ハムレット」や「カラマーゾフの兄弟」や「チポールの主題が大きなウエイトを占めている。この場合「父」は「社会」の通念と權威の象徴であつて、息子は父の思想や生き方に反逆しながら、そこに自己を形成して行く。父は常に息子の行く手に鉄壁のように立ちほだかるものであり、それを乗り越えることなしには、前進はあり得なかつた。それは頑固であるという側面とともに、自己の体験に対する絶対の自信に裏づけられていた。こういう父の位置と性格は、人間の歴史が経験の継承であることを考えるとききわめて象徴的な意味を帯びて来る。父のきびしさが子のエネルギーを鍛え育てたのである。戦後「父」のイメージは変わった。それは、物わりのいい、ホーム・ドラマむきの「パパ」になつた。ある評論家が、先進諸国の無動機的な学生運動の原因を「柔社会」に求めたのは極めて正確な命名であつた。「柔社会」とは政治体制も社会倫理も、外面的には何らきびしい拘束を設けず、「物理的」な反逆でないかぎり、いかなる反体制運動もゆるしながら、結果的に体制側に吸収してしまう高度な管理国家を指しているようだ。「パパ」はこういう「柔社会」のシンボルであろう。しかし、何をしてもよい自由とは、水路のない水と同じで、溢れて大地に吸収されるだけだ。必然的な要求として、青年

のエネルギーは空漠たる観念の仮想敵を設定し、それに反逆する。彼らの志向するプロレタリア独裁の国家は、当然きびしい権力とノルマと倫理によつて枠づけられた「硬社会」となるであろう。

しかし、封建社会とは別の意味で、きびしい「硬社会」である共産圏の人民は、せいぜい次のような意思表示が可能であるに過ぎない。「チェコ作家同盟機関紙」に発表された「二千語宣言」という党批判の声明の一部である。

「多くの労働者は「われわれは支配されているのだ」と思っていたが、その実、労働者の名において支配していたのは、特別の訓練を受けた党機関と国家機関の役員たちで、彼らは打倒された階級（資本家階級）のあとがまにすわり、新しい支配者になつたのである」

《上》に在るだれかに、問題に対するたゞ一つの解釈と、たゞ一つの単純な結論を、いつも与えてもらおうという実現不可能な要求を、われわれは捨てよう。だけれども、めいめい自己の責任において、結論を引出さなくてはならないだらう。共同の一致した結論は、討論においてのみ見出すことができるが、そのためには、言論の自由が不可欠なのである

こゝに列挙されている独裁権力と言論統制の事実は、共産圏には当然存在する当り前のことであるが、こうしてその中の人民たちのなまの声を聞くと、まことに痛ましい。こういう社会をもちたらずとを人間性の解放と錯覚している人達にとって、そのあやまちを正す為には国家の秩序を正す以外にはない。それは必ず

しも権力の秩序だけを正すことではない。いわば精神の秩序を立てなおし、価値の序列を再建することだけならばならぬ。

生の支えは何か

一瞬間のように高まり、フランス全土をゆきぶつた「五月蜂起」はドゴールの圧勝に終わった。進歩的文化人の期待は見事にはずれた。パリの学生の壁に書きつけたスローガンに次のようなものがあつた。さうである。

「餓え死にしない保証が、退屈で死ぬかも知れないという条件で得られる社会を、われわれは拒否する」

これは大学生らしい、曲りくねつた表現であるが、「人はパンのみにて生くるにあらず」という言葉のくりかえしであり、何でもできる自由をもつた若者たちの、生き甲斐を求めるといふ叫びでもある。

人間は本能に従属する存在だという認識からは当然本能に従うことが善であるという思想が出て来る。「人間の自然」と「社会の掟」は相反するものであり、後者を前者に近づけることが進歩であると考えられて来た。西独の学生に人気のあるマルクーゼは、「反逆や抵抗は自然法に許された権利である」という発想で、既定秩序の破壊を強く肯定している思想家である。これも理念のない「柔社会」から当然出て来そうな思想で、発想そのものとしては少しも新しいものではない。どこに生の依拠を置くか。「柔社会」は理念を失い、「硬社会」は理念が硬直している。

古くして永遠に新しい問題は「国家」

の問題である。戦後占領軍の権力によって行われた「思想改造」によって、「国家」は「平和と民主主義」にふさわしくないものであり、「戦争と軍国主義」をになつたものとして、きびしく糾弾された。個人の任意の集合体であるに過ぎない「社会」と、血縁の歴史的集団であり、文化の母胎でもある「国家」が全く同次元におかれた。むしろ「国家」は戦後久しく「社会」の中に埋没してしまつてきた。しかし、「国家」はわれわれを拘束し得る法的な最終単位である。われわれに死刑を命ずることもでき、われわれの基本的人権を具体的に保障することもできるのは国家のみである。基本的人権是一片の「人権宣言」という文書によって保障されるものでなければ、「国連」という国際機構がそれをしてくれるものでもない。いわば、われわれ自身が合法的に選出した権力にそれを委託する以外にはないのである。しかし又、国家イコール国家権力という考え方は一面的である。国家とは国家権力や政府と同じではない。それは遠い祖先から未来の子孫へ継承される縦の次元と、横に広く同胞の生命を包括する横の次元を併せた、一つの文化共同体である。われわれの忠誠は、そのような一つの全体生命に向つて捧げられるべきである。一人一人のほかならぬ生命はその永久生命につながることによつて、自己のいとなみを未来につなぐことができるのである。われわれは久しく、共に国のいのちを仰ぐという素朴な経験を忘れてしまった。「国とは何か」という問は「人間とは何か」と

いう問と同じほどに答えるのがむずかしい。しかし、知的なアプローチにとつては、厄介な問題であつても、素直な心にとつて、これほど簡明なこともないであろう。人間にとつて最も根源的な問題とは、常にそういうものであつて、自ら国民の一人として真剣に、切実に生きてみることが体験なしになされる国家論はすべてむなし。

マルクスの「資本論」が、殆んど利潤を無視したような廉価で店頭を飾っている時、吉田松陰の著作を書店でさがすのは不可能であるというのは、今の日本がいかにいびつであるかという一つの証拠であろう。かつて詩人は

ものみな枯れて、残るは地熱
祖国のいのち

と歌つた。「個と全」の人類永遠の問題を考へる時、「国家」に固執する態度は決して古い姿勢ではない。むしろみずみずしい思想の地平を開くいとなみは、そこから始めるべきである。

(福岡県若松高校教師)

有情の記

桑原 暁 一

南朝に仕えるか、あるいは北朝(実は足利)に付くかは、どのみち利害得失の打算に依ること、一概に前者をもつて

正とし、後者を邪とするのは当たらない、との論が普及している。一往その通りである。例えば赤松円心(則村)は、千早に抱つた楠正成の孤軍奮闘に激励せられて、逸早く旗を挙げ、六波羅を攻めて、北条氏討滅に大きな働きをしたが、それに酬いられること少きを不満として、建武の日には高氏の手へ属して南朝を苦しめた。ところが正成の進退は始終かわることがなかつた。それで史家は、正成の進退についてあれこれの解釈を加えているが、それは史家自身の心性のいかなるものかを示すだけである。史家の実証主義は正成をなお不可解な存在とするが、しかし正成の人間は太平記にりっぱに実証せられている。太平記の描く正成を信ずるか信じないか、そのことがわれわれ自身の何たるかを実証する。正成が利害打算に無縁であつたとは思われぬ。しかしそれを感じさせないほど彼はそれを超えていた。そんなことは信じられない、というものは、その人自身にそういうところがないというまでのことである。武朝申状(武朝は菊池武光の子)によると、北条氏討滅成つた日に、正成は、この日を見ずに戦死した菊池武時をもつて功臣の第一として推し、自分などは運よくこの日に遭つて恩賞にあずかるものだ、と云つた、とある。実証史家はなぜかこの話に触れたがらない。美しいものは信ぜられない、というくせがあるらしい。湊川合戦のときに、兄菊池武重(武時の子)の使として、この合戦の状況を見に来た武吉は、正成とその一族の最後に行きあわせた。

菊池七郎武朝(武吉とあるべきところ)は、兄肥後守が使にて、須磨口の合戦の体を見に来たりけるが、正成が腹を切る所へ行き合ひて、をめぐり見捨ててはいかゞ帰るべき、と思ひけるにや、同じく自害をして炎の中に伏しにけり。

正平二年十一月の阿倍野の合戦において、楠正行は敗戦の敵兵に救いの手をさしつた。すなわち――

安倍野の合戦は霜月二十六日のことなれば渡辺橋よりせき落されて、流るる兵五百余人、甲斐なき命を楠に助けられて、河より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、暁の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠、情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、葉を与へて疵を療させしむ。かくのごとく四五日みな労はつて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながらも、その情を感じる人は、今日より後、心を通せんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがてかの手へ属して後、四糸繩手の合戦に、討死をぞしける。

正行のこの仁恵の心は彼亡きあとの楠・和田にそのまゝ伝へられた。正平十六年九月、楠・和田は渡辺橋を渡つて天神森に陣を取り、神崎橋を隔てて敵と対峙した。彼我の間の合戦は楠・和田に有利

であった。

半時ばかりの軍に、死する京勢二百七十二人、この内、敵に討たれて死する兵わづかに五、六人には過ぎず。そのほか二百五十余人は、みな河に流れてぞ失せにける。楠、父祖の仁恵をつぎ、情ある者なりければ、あるひは野伏どもに生け捕られて面縛せられたる敵をも斬らず、あるひは河より引き上げられ、甲斐なき命生きたる敵をも禁め置かず、赤裸なる者には小袖を着せ、手負ひたる者には薬を与へて、京へそ返し遣はしける。身の恥は悲しかりけれども、悦ばぬ者はなかりり。

楠・和田には、敵味方を超える、普遍的な人倫意識が見出される。それがありがたい。史家は何々史書にすがって、自分の甲羅に似た穴をつくって、それがほんとうの歴史だ、と思ひ込んでいる。なるほど一枚の借金の古証文は重要な史料として、さまざまのことを示してくれるであろう。しかしあえて破り棄てられた証文も少くないであろう。それは実証史家の思い及ばぬ世界の情報である。

足利高氏の清水寺願文について、今は亡き吉野秀雄先生がその内容と筆蹟とをあわせてひどく感心しているのを読んでガッカリしたことがある。(吉野秀雄著「心のふるさと」)先生を敬愛していただけにうらさびしい気持を味わった。その願文は左のとおりである。

この世は夢のごとくに候、尊氏にだう(道)心たばせ給候て、後生たすけさせをはしまし候べく候。猶々とくとんせい

(通世)したく候。だう心たばせ給候べく候。今生のくわほう(果報)にかへて後生たすけさせ給候べく候。今生のくわほうをば直義にたばせ給候て、直義あんをん(安穩)にまもらせ給候べく候。建武二年八月十七日 尊氏花押

この建武二年八月十七日という時日は、湊川合戦に大勝して入洛し、八月十五日に光明天皇を押し立てた直後で、彼の得意の絶頂の日であった。ところでこの願文が心にもない、いや、弟の直義を欺く下心のあるものであることは、やがて直義を毒殺したことによって弁解の余地はない。彼は直義を欺くために仏を利用し、仏をも欺いたのである。楠氏の「情有る者」であるのに対して「情無き者」と云わねばならぬ。ほくにはこの願文は、遊女の起請文以下のものと思えぬ。それは云い過ぎであろうか。

ゆかない。戦争は非生産的であり異常事態である、「不戦」これがつきあいの基本とならざるを得ない。しかも農耕と自然の四季との関係は深い、人と人、人と自然との融和、これこそ最も生産的であり、理にかなったものである、という位

文明の戦い

一 日本文化再発見の意味と展望

加藤 善之

戦後民主主義の体験の中で、周辺の人々の行動や心づかいの変化からして、どうもこれは尋常の事ではないと感じて

農耕民の生き方

たのは私ばかりではない。その問題点の端著をようやくつかんだのが丁度五年前(それまでに十八年かかっていた)。その頃和辻さんの「風土」を読んで「ヨーロッパに雑草はない」という(文字通り)雑草も生えない風土の不毛性をいった)言葉を知り、大変な衝撃を受けた。その時直観があった。その頃を前後として竹山道雄さんの「ヨーロッパの旅」をはじめとする次々に出版された参考文獻によつて様子が次第に明らかとなり、私の直観の適中していたのを確かめることができた。戦後の生活体験だけで問題点の必要は判断できたであろう、海外旅行の必要はなかつた訳である。それをひとからげに要約してみよう。

われわれの知る限り日本民族は農耕民である。特に氷河期を終ると日本列島は島国化した。閉鎖的になり、その上稲種が入つてからの農耕による定着性は決定的であつたらう。人の心や、つきあいの在り方にも重大な影響があつたらうと思われる。日常のつきあう人は同じ相手であり当然に仲好くすることを第一に考えるようになったであろう。この土地は生産性も高く魚貝類や山菜、獣も多い。行動半径は短かくてすむ。水稲は水利や開拓による協力も必要であろう。島国であるからして逃げることはできない。どこに行つても農耕民である。悪い事はできない。争いもあつたであろうが、戦いが非生産的であることは一度経験すれば忽ちわかる事である。又、如何に戦いの最中と雖も種を蒔くのを中止する訳には

ゆかない。戦争は非生産的であり異常事態である、「不戦」これがつきあいの基本とならざるを得ない。しかも農耕と自然の四季との関係は深い、人と人、人と自然との融和、これこそ最も生産的であり、理にかなったものである、という位

うした融和のプロセスの歴史、それが記紀の神話ではなからうか、だからこそ「ことむけやわす」という言葉も生れたのである。

牧畜民における「戦い」

然しながら他の大陸ではそうはゆかなかつたらしい。斯る視点に立つ研究書も多く出てはいないけれども、そうしたものを参考にし今西錦司氏の「人類の誕生」を説を用いつつ述べてみよう。大陸では、農耕民は自衛しなければならなかった。人口が増大し集団生活を営むようになり、余剰産物を蓄積するようになってくると、必ずや外敵にそなえて城壁で囲んだ居住地を作った。その外敵というのが大方牧畜民、遊牧民であった。中国でいう夷狄は何時も遊牧民であった。

遊牧民にとって略奪は生産行為である、それは悪業に入らない。オアシスや牧草地を手に入れ他部族を侵入せしめないう事、それが生産であり、農耕民の新しい土地開拓に匹敵する。又農耕民の穀物を手に入れる事も同じ事。このようにして争奪は激烈をきわめたであろう。相手を抹殺して勝つ事、これが生産である。このようなところから騎馬民族は生成されたらしい、このようなことが何千年何万年も繰返されたと思う。善とは勝つ事であり、仲好くする事ではない。少くとも基本的には、これが遊牧民にとっての生活原理である。従って個人という単位も、集団という単位も、同一の生活原理、即ち斗争に勝つ事を第一義とするものであつたらしい。大陸では斯る遊牧民同士や遊牧民と農耕民との争いが激しかったと思う。征服や屈服、妥協もあつたであろうが、結局は自ら防衛すべく、戦いに勝つという遊牧民の論理の方へ同化する方向をとつたであろうと思う。日本

列島とは反対である。少くとも異常ではなく常時戦時態勢である。土地生産力は高くはなかつたし、ヨーロッパでは雑草も生えない。鯖田氏は慢性的食糧不足と云っているが、力こそ生であり生産であつたらしい。善とは勝つ事であり、謙讓さえも敗北であり死である。略奪して彼方に飛ん進まねばそれだけの事であり、弱肉強食が論理である。無行動や静止は即反生命に連なる。人々の人生観はこれを基盤として成立する。斗争心自己主張は当然激化し、自己防衛、積極性、打算は深化する一方であつたらう。人の心を信ずるなどという事は考えられなくなってくる。この人間不信、これがヨーロッパをはじめとする地域で思想の根柢をなす問題点であろう。人間不信、それは空気の如き常識でありことさらに論議の対称にはならぬ位である。この世界での信用とか仲好くするという事は契約することであり、契約や約束を守ることであり、人の心まで信用すればどんな事をされるか知れたものではない。朝日新聞に掲載された(四〇・一〇・一八一—一九)ゲドワインの思想はこうして形成されたのである。一「権利思想」はこのような背景から生れた集団生活の為の契約であり妥協であろう。「権利」こそ嘗ての剣であり銃であり、権利の主張なき者に生存の約束はない。

集団生活のための方法

このようならば、個人の意識では集団生活はできない、それを組織し統率するための説得力ある論理、力、即ち政治原理というものが考えられてくる。如何なる方法で、手段でその強烈な自己主張を説得し統率するか。力でやるか、方法をやるか、それを心に喰い込ませるには

人の心では駄目であるから、超自然的權威によるか、のいづれかにならざるを得まい。兎に角、集団として力を発揮するのだければ他の力の対抗はなるまい、となると猶一層の強力な統率力が必要となる。強烈な個人意識と強烈な団結意識とが共存する。個人意識も市民意識も国家意識も、そして政治学もこうした斗争の世界に於ける対抗、断絶の論理の中ら育成される。そうした事の調整役として、階級主義も絶対主義も、自由主義も合理主義も発生する。よく言われるサツパリした人間関係も、すぐれた技術も弁論も、こゝから生れる。そこは技術の世界であり、行為と心の世界ではない。勿論これが全てではないが重要な問題であろう。中世に於ける超自然的權威にとつてかわつて、こうした政治原理が集団生活の基盤となる変革、そのことをルネッサンスといふのではなからうか。斯くしてヨーロッパに於ける集団生活の方法、即ち政治原理は卓越した手段方法(法治主義、政治体制、株式会社等)を発明するに至る。その根本精神は、集団統治の方針として、その個人的自覚に依りところを求めない、という事であり、自我を改めることをせず逆に活用するのである。労働災害に於ける安全運動の中にフルブルというものがあつたが、個人がどのような失敗や不安全行為をしても災害の発生しないように方法や設備を考え、というあの精神である。又、個人がいかに悪業を犯しても社会がそれを矯正すべきである、社会はそれをなすらう、人の心の方が余程当てにはならない、頼りうるもの、それは力であり手段である、即ち、法、規則、制度組織、武力である、とする精神のことである。

幸か不幸か日本列島に定着した人々

は斯る体験もなかつたしそうした方向の必要性もなかつた。人そのものがよき人格になるべき方向をこそ常に志向し、如何なる制度方法と雖も所詮人そのもの次第である、という考え方が定着し長い間、最近に至るまでこの考え方が何時も主流であつた。日本の世界に秘境たる所以も其処にあるし、それは照葉樹林帯というめづまれた風土と島国の人々自身もあつたかと思ふ。この国の人々自身も又そうした方向での人間のつきあいを死守し深める人生観に徹しようとする死守した。この意味で他の国々とはまことに異質であり、それが政治原理の必要性を生まなかつたのであろう。然し乍ら、こうした方向をチェックするような危機が無かつた訳ではない。

大陸に於ける人類の進化が進むに従い、人口増大や組織化、遊牧民の論理が浸透し、興亡は常ならず、政治原理の巨大化につれて、それらの要請するところ、必要に迫られて文字(コミュニケーション)の手段)を発明し、人々の知恵は急速に高度化してきた。こうした人口増大、経済の拡大、政治原理の巨大化というような重大な変革の時機、それが、四・五千年前から二千年前位におつたのであろう。その時代には地球上のあらゆるところで争いや移動があつたであろう。旧約聖書創世紀に、人間が悪事を働きたして神によって大洪水がおこり、正しい人間であるノア家族だけが箱舟で助けられるところがあるが、これがどうも十万年位前に当るらしい。ところが、この十万年前もその後の子孫も、どうしても原罪から逃がれることが出来ないといふのが聖書思想である。この事は、前述のような斗争、人間不信の中での人々の生活という点からするならば、なる程

とうなづけることである。中国に於ける堯舜の時代というのも、このような牧民民との争奪のなかつた黄河流域の農耕生活で、平穩な生活原理の維持できた何千年か何万年か前の時代を指しているのではなからうか。

このようにして人間集団生活の中に複雑と混乱が激化してその頂点に達する時、次々と予言者や聖人が出現した。そして最後に或る処では釈迦、孔子、又あるところではキリストが現われて、こうした混乱を心の世界の問題として把え、即ち「生活原理の新たな在り方」として提出するに至つたのではなからうか。

日本文化の位置

そして、このような生活原理の巨大化(宗教、道徳)と政治原理の体制化(政治組織制度)という二つの集約化傾向が進められ人々はこれに依つて生きてきたと思ふ。こうした二つの潮流が日本列島に第一に入つてきたのが中国大陸からであり、それが動機となつて日本も有史の仲間入りをする。第二に入つてきたのが西歐文明としてであり、これらは共にその中に遊牧民の論理を含んだものである。従つて方法によつて多数を統治する手段、というものを教えられたのである。そしてその当時の日本に於てもそれは或る程度現実的必要性もあつたのである。そしてそれと同時に、人間不信、斗争の思想も入つて来た。即ち律令政治の背景にあるもの、民主主義政治の背景にあるもの、換言するならば、斯る律令政治や民主政治を創り出さざるを得なかつたその土地では何がなされてきたか、

そのなされてきたものの考え方や、この政治原理のよつてきたる生活の原理も併せて入つてきたのである。この大陸の生活原理と日本列島の生活原理とはあまりにも異質であり真向から衝突する結果になつたのである。即ち文明の戦いである。

日本に於けるそれは、要するに一人一人の人格次第であつた。人が第一、法や制度は本来あるべきものではないという考えである。そこで情を中心とした人の心と心のつきあひが世の中の秩序を支える根本となつてくる、それを身に体した中心に天皇が位置する。天皇はその生活原理の模範であり、心の姿勢の中心でありそれが全体を統制した。日本人はそのようにして天皇を創造した。釈迦やキリストのごとき出現の要はなかつたらしい。ということとは、有史以前に於て、既に人間生活において「つきあひ原型」というものがほぼ完成していたということになりはしないかと思ふ。それが第一次の大陸文化の流入期に混乱し、第二次西洋文明の流入に於て大きく動揺しているであろう。その意味に於て白村江の敗戦も大東亜戦争の敗北も文化的に同義であり、明治以後の混乱も、聖徳太子、大化の改新時代の混乱も同質である。西洋文明と日本文明の融合は未解決である。明治維新の真に達成さるべき時期はむしろこれ以後であり、決して明治は過ぎかつてはいない。

こうした文明の流入過程で、流入した生活原理や政治原理と日本のそれとの比較の中で、自然に自らの価値に自信と誇りに気付いてきたと思ふ。それが聖徳太子憲法十七条となり、三経義疏、記紀、萬葉となり、伊勢神宮の造営ともなつたのであろう。このようにして前述した二

大潮流は二千年の歴史の中で融化された。それが可能であつたのも、それ以外に直接的な遊牧民の論理の侵入がなかつたからであらう。元の襲来や、西歐植民地政策が、仮令一時期、一地域にでも成功しておつたならばそれはゆかなかつたと思ふ。恐らく、数千年か数万年前に大陸の農耕民が辿つたのと同じ運命にさらされ、あのような「つきあひの原型」は残される事はなかつたのであろう。今や、西歐の底に深く潜む、あの遊牧民の精神と論理の前に、日本列島はいや応なく立たされていく。そしてそのもつ二大傾向は第一次のそれより更に強力であり、物質文明を併行させて陰に陽に、プラスともマイナスともなつて押し寄せている。

然し乍ら、この精神、論理は開放的大陸社会の論理であり力と斗争の中から生まれたものである。それは自ら開発した物質文明の中から、原子爆弾という力を発明し、コミュニケーションを発達させ開放社会を閉鎖社会に変質してしまつた。マクルーハンはこのマスメディアを問題にした。即ち、その精神や論理の有用性をもつ開放社会は終焉しつゝある、それは閉鎖社会では通用し難い性質をもつてゐる、換言するならば政治原理を主流とする支配だけではすまされぬそうした状況が明らかになりつゝある、という事である。こうした地上の変化に応じた新たな論理、考え、思想、生活原理、の出現が要求されつゝあるようだ。然しながら、斗争や力や人間不信を前以て前提としてきていたようなものの考え方、即ち民主主義や社会主義も追求すれば所詮そこに至るようであるが、これらは質的に同じものであり兄弟にすぎず、共に政治原理ではあり得ても生活原理たり得る

ものではない。今は政治原理的社会ではあつても生活原理的社会ではなく、西歐ルネッサンス文明の役割はその終焉を要求されつゝある時代になつてきたようである。こうした反省や見方はあちこちに既にみられるのであるが、それならばその変質の方向やめやすには何があるのであらうか。よく聞かれるのが、東洋に、日本に、ということである。それを言い換えるならば農耕民の論理の中にあることであらうか。だがその大半は二千年四千年前に滅んでしまつた、未だ在るとするならばこの日本に少し残つてゐるということであらうか。そこを考へようではないか。とまあそう受けとられる見解が、ヨーロッパにもアメリカにも日本にもみられる。こうした事にもよる日本の自信と回復という把え方に飛びつく傾向も出てきている。だがそれは自力によるものと果して云ひうるであらうか。その把え方のものが、同じ自力ではあつても既に無意識に遊牧民の論理に依存している面もあるようだ。そこでこの日本を変つてしまつたと観る者、変らないと観る者の両者があるが、この変りにくいと観る者、変り得るもの、それは何か、を考へねばなるまい。前者が生活原理的なものとすれば後者は政治原理的なものである。まずそこから手をつけるべきであらうか。とするならば変りにくいものの中に何か価値あるものがある筈である。その中に在る農耕民の論理を把むべきである。正確には、植物的な農耕民の情緒とでも言うべきであらう。岡澤さんは、その情緒を直観で把え自得し、体得し、この遊牧民の論理に對抗して「日本の情緒」と名付けたのではなからうか。然し乍ら、この日本列島に住む農耕民の後裔等は、今や遊牧民の論理を深部に持つ政

治原理にすっかり参ってしまっている以上、この「日本の情緒」なるものが奇態にさえ映るようである。

岡さんが情緒といわれるものは、日本民族の深部にあって、他文明を批判し撰取する原体と思われる。それは個性的な問題で、合理的比較の問題とは次元がちがうが、いわゆる「日本的な」性格とも関係するから数々の問題点はある。然しながら、それでも猶且つこの日本の情緒なるものが世界の話題にのぼるを得ぬ日が遠からずやってくるであらう。

昭和四十三年七月二十日記

(山陽電報軌道、山口営業所誌)

長崎大学信和会から

川井修治先生講演会を開く

去る六月二十日、我々は鹿児島大学助教川井先生(国文研副理事長)をお招きして「マルクス主義と現代」と題しての講演会を長崎大学中部講堂において開催し、その夜は、学生三十数名及び社会人人数が集い、先生を囲んで、懇談会をもつ事ができた。この講演会は、教養自治会連孝には全学連系の巻き返しによって、僅少で敗れはしたものの、何らかの形で学園の為に尽そう、再起自治会を目指そうという我々の切なる願いに、先生が答えて下さったものであった。そうした先生の御厚情にお応えするために、我々は全学友に呼びかけるべく連日の努力を傾けた。一般に日頃催される学内諸教授の講演が低調であるだけに、開始直前まで気が気でないだったが、私が先生を講堂にご案内した時、講堂は満員の聴衆に埋っていた。率直に言って、その時私は涙が出る程うれしかった。私が、先生御紹介の折にふれた如く、まさに先

生の思想が戦後教育を受けてきた我々にあって、全く異色のものであるが故に、反応は大きかった。学問の立場からのマルキシズム批判の講演は学内においては我々にとって全くの初体験であった。それ故、二三の三派系学生のちよつとした怒号を除いては会場は終始緊張の中にあつた。しかも質疑応答に入ってから、三派系の学生すら、例の質問か自己主張か解らぬ質疑を論じる前に先生に敬意を表したのである。又、翌日のあるマル経教授の講義では全時間を費して川井先生批判がなされた。社会人の中からも我々当てに感激の手紙がまい込んだ。

思うに戦後の偏向した教育の中で喘いでいる学生の中の多くが、実は真の教育を模索しているが、それがなかなかみあたらないという所に問題がある学生は、長々と唯物史観を展開したあとで「先生のいっていることはでたらめだ」「先生の態度は高圧的だ」という発言をした。質問をしているのか自己主張をしているのかわからない態度である。人の意見に良く耳を傾けて聞く姿勢からこの対話の姿勢は生まれるし、又、相手の言っている事がでたらめだ等と言えば対話にならないのである。それはむしろ、言葉の暴力でありケンカである。先生は「相手の言っている事がでたらめだ等と言えば、もう対話の場は形成されないではないですか。高圧的と言うのが皆さんの為に言っているんですよ。少くとも正常な情緒から出たものであればお答えします」と答えられた。

私はこの事実から次の二つの事を考えさせられた。一つは日頃の教育が一方的かつ事務的であるが為に学生教官に相互の心のふれ合いがない。その結果学生の

質問の仕方、対話の姿勢等が少しも養われないのであり、教官は学生の非を正す事をせず、なれ合ひですましてしまう。だから川井先生のような方が戒めのことばを述べられると「高圧的」といった言葉が学生の中から生まれるのではないか。それは第二点とも関係する。つまり人の心と心の交わりが少なくなり、自分の世界だけにどしどし込みがちに個人主義的風潮が生んだ対話の姿勢の欠陥である。人の心の中に入ってゆこうとするたえまぬ努力を続けている中に、つまり、人と和やかにやってみようとする根本姿勢のつみ重ねからこそ対話の姿勢、融和の精神が生れるのではないだろうか。かかる姿勢を求める意志が平生にないから、人の話をきく場合にもその言葉の端々ばかりが気になつていわゆる腹を立てる事になりかねないのではあるまいか。非をみてそれを戒める事のできる人間が全く少ない今日、我が大学における先生の講演は実に貴重であつたと思うのである。

講演内容はマルクスの資本主義崩壊の予言不適用という事を中心にお話しがあったが、ここでは割愛させていただきます。先生著「歴史と人生観」を読んでいただきたいと思う。

夜の懇談会ではまず川井先生から次のお話しがあった。講演の時「人が信じられない」と言った学生がいた事から、「知的な理解あるいは分析といった事はかなりやるが、心情において貧しいとか、ちよつとした人の心の動きにすなおに感じるといふ情操の訓練がなおざりにされているのでしよう。そうした前提のない人には、いくら言っても心情には響かないんですね。こういった人にはイデオロギー以前の人間の暖かみをもって接してあげる事が第一じゃないかと思いま

す」とおっしゃった言葉は、日頃理論には理論をもって対抗すべきだと考えがちな我等にとつても大いに反省させられるべき戒めだった。戦後の日本において失なわれたものについて、「戦後の思想混乱の一つでもあるがエゴを満足させ、自分に感覺的な楽しさを与えるものにしかり関心をもちたい」という、風潮が流れているように思う。人間社会というものはそのフックターも、少くとも、一つ越えた共同体的な次元で、自らの欲望を制するということ事が常識を納得させる生き方であると思う。それが今日見失なわれていると思う」といわれた言葉は、私自身日頃直面し悩んでいる問題であるが故に実に尊く思われたのである。いまの風潮は人々を自分だけの数にどしどしこもる方向に追いやりがちである。それが昂じて人が信じられぬと結論を下す様な者も出てくるのではなからうか。心を開いて、他と共に人生に没入すべきだと、改めて感じられたことである。

(長大・経3 白石肇記)

編集後記 七月号の発行が非常に遅れて御迷惑をおかけしたので、この八月号は三日から始まる霧島合宿に出席する前に印刷いたしました。寄稿者の方々へ御協力教室の経過報告については、とりあへず九月号を特集としておしらせする予定。新しい合宿教室参加者には、七月号以降がお渡しされることになるが、どうか心をこめて読んでいただきたいとお願ひします。軽いタッチのものも少くても読みが、どれいふ執筆者の深い思ひがこめられていることを感じとつてお読みいたゞければ幸甚。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-3 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間 360円

第十三回合宿教室開催さる

第十三回学生青年合宿教室は、第一回合宿教室ゆかりの地、鹿児島県姶良郡霧島町の、キリシマ第一ホテルで開催された。今回は「世界の動向と日本の進路」

「基本的な人生観の探求」をその中心テーマとし、合宿前半では、既に世界の態勢からは終焉に近づきつつあるが、未だに我が国では最盛の感のあるマルクシズムに対する基本的な洞察力を得ることを主眼に、第一日目、川井修治氏、第二日目、高谷寛蔵氏の講義を軸として研修が進められ、次いで木内信胤氏による「これからの国づくり」より順次我々の文化に対する、また人生に対する基本的態度の探求へと展開して行き、第三日目、小田村寅二郎氏、国武忠彦氏、第四日目、竹山道雄氏、小柳陽太郎氏、第五日目、夜久正雄氏の講義を軸として研修は進められた。この間、山田輝彦氏による和歌

創作導入講義と全体批評が、それぞれ二日、第四日の夜行なわれ、今年も合宿参加者全員によつて千数百首の和歌が創作された。

◇参加者総員三九九名◇

毎年参加者数は上昇の一途をたどり、本年度の参加者数は、男子学生一七五名、二二班、教員五三名七班、社会人一九名二班、女子学生二二名二班、講師、来賓のほか主催者側大学教官有志協議会、国民文化研究会会員、会友合わせて七二名、総員三九九名、計三二班編成の大合宿であった。なお国民文化研究会会員参加者の過半数は、従来の合宿教室に学生として参加した経験をもつ所謂国文研若いグループの面々であった。

◇合宿経験学生の積極的参加◇

昨年度の合宿教室後、全国各地に帰つて、それぞれの地方で学友達と研鑽に励

むと同時に、一年間全国的に連絡を保ちながら、今春は八幡の大正寺で小合宿を営み、夏合宿に備えて来た二十数名の学生諸君は、合宿開始二日前の八月一日午後参集、地元の国文研会員と共に、諸準備にとりかかると。合宿の具体的準備が学生の手で行なわれ始めたのは、昭和三十七年頃からであるが、最近では一層積極的になり、合宿全般を通しての規律、指



(合宿教室全参加者)

揮、朝の行事、間奏音楽の手配、開会式閉会式の司会等も学生の手で行なわれるようになった。中でも、学生班の各班長を務める仕事はそれぞれの班の参加者相互の心の交流を支える中心になるだけに、非常に困難な役目であった。

◇国民文化研究会新世代の活動◇

合宿教室も十三回を数えるに至り、その間第一回第二回合宿に参加した学生

も、三十才台となり、最初合宿教室を計画運営した人々の当時の年令に近づきつつある。二・三年前から、こうした合宿教室の卒業生が、国民文化研究会の先輩達の実践して来た事業の重大さを自覚し、その意志を継承し、各自でできることから積極的の助けをしようとする動きが起り、第十一回雲仙合宿から、合宿運営の細案検討、実施と、後輩達への相談相手といった若いグループが年一回の研修合宿を二月に持つことが昨年から恒例となり、相互研修を進めると共に、夏の合宿の運営、合宿参加者の感想文集編集発行、合宿レポート作成の一部分担任に当り、また各地での学生グループ育成に努力を傾注して来ている。本年は、第一回合宿教室参加者で、国民文化研究会の若いグループの一員国武忠彦氏が講義を一つ担当し、国民文化研究会の相続の一步が更に加えられるに至った。

◇ 大部分の参加者の在籍大学には、学生暴徒の破壊活動が続発している。不安の眼をこらす者にも、改革の意志に燃える者にも、日本人としての生き方の問題を強く投げかけ、自らその一步を踏み出す力が、限らない祖先の恩恵を含めて、全参加者の協力のうちに与えられた合宿であった。

(岡山操山高校教諭 三七将之)

合宿教室特集号

合宿教室の経過

第一日 (八月三日)

午後二時三十分より開会式。開会宣言、国歌斉唱に続き、我々の祖先の御霊に対する敬肅な黙祷をもって合宿は始まった。次に大学教官有志協議会を代表して明星大学の奥田克巳先生、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生のご挨拶があり、学生を代表して鹿兒島大学の松木昭君が決意を述べた。

オリエンテーションでは上智大学の津下有道君と国民文化研究会の沢部寿孫さんが、近頃の大学の騒動は学問の姿勢と無関係でない。人生における基本的な態度、つまり互いの真剣に生きた人生経験を真心を持ってぶつつけあうという姿勢がないからではないかと訴え、この合宿はそのような姿勢を学ぶ所であると述べた。



川井修治先生

国家の役割について

今日の我が国の現状は、経済的には、曲がりなりにも繁栄を続けているが、国民の心と心のつながりは見る影もなくなくなつてしまっている。このような現状の底にある根本の問題は一体何であろうか。自己の利益のみを追求し、果ては、「個人に利をもたらしめない国家は、力で倒してもよい」というような意見を、はばかるこ

となく口にする。自我主張ばかり行なっていけば、いつか共同体全体に破綻をきたし、結局は自己崩壊に終つてしまふ。我々は自己のみの利益を追求するのではなく、自己を越えた「真我」に自己を生かして行く努力をしなければならぬ。左翼学生運動の現状はどうであろうか。量的には、全学生の約一パーセントの活動家によって動かされているといった微々たるものである。がしかし実質的には実に重大な意味を内包している。それは「憂うべき我が国の現実」が、その根底にあるからである。この混乱の拡大しつつある我々の学園を祖国を、いかにすべきかの重大な決定点に今我々は立っているのである。対策の第一は、良識と勇氣ある学生自身の「発憤」である。つまり「生命的憤り」という情意の問題なのである。

国家の役割についての考え方が、この混乱の非常に大きな部分を占めているように思われる。ヘーゲルのいわゆる人倫としての国家とは、統一と調和のとれた世界であり、より良い人生を送ることのできる世界である。この世界の中では国民の意志の統一は不可欠であり、これは国家の目的とするところである。これに対し、権力としての国家は共同生活を統制し、秩序を保つものとして不可欠である。そしてそれは、国家の目的を達成し、守成していくための手段である。この二つの国家の役割は絶対切り離すことのできない不可分の関係にある。ところが現在横行している左翼思想は、ほとんどすべて、権力としての国家は問題にしない。この点に非常に大きな誤りがある。



高谷覚蔵先生

第二日 (八月四日)
日本は共産化するか

「共産主義とは何か」を考へる場合、共産主義者がそれをどのようにとらえているかを知らなければいけない。私はソ連の共産革命に参画し、彼らの共産主義プロレタリア独裁の暗黒の圧制を逃れて日本に帰った。

レーニンが、プロレタリア独裁への革命において、彼の兄がはいっていたナロードニキの影響を強く受けている。それは、ツァーリズムを倒すには、ツァーを殺すより他に方法がないとする思想である。後になって、レーニンの率いるボルシェヴィキが勝利したとき、この思想を世界の共産党に押しつけた。日本の天皇制はツァーリズム以上に専制的であるとして、日本共産党もこれを受け継ぎ、天皇に対する憎しみと同一視している。ツァーに対する憎しみと同一視している。ロシアという土壌で育った他国の思想、しかも、過去のツァー時代の思想を現在の進歩した日本にあてはめようとしている。革命後のロシアでは、プロレタリア独裁が個人の独裁となり、思想統制、焚書、目的の粛清等を行ない、権力そのものが目的となり、新しい特権階級が発生した。この矛盾は実にひどくなり、批判も出てきた。一九六一年フルシチョフは、経済発展の手段は独立採算制、貨幣制度、信用であるというテーゼを発表した。これが示すように、自由化しなれば経済は破滅するのである。革命後五〇年経った現在、経済の発展にマルクス主義が役立たないこと、資本主義国がマルクスの予言した方向と逆に向っていること等、ソ連の現実はマルクスレーニン主義に反するようになっていく。大学においてもマルクス主義は馬鹿にされている。このようなソ連で今一番強調されているのは、民族の伝統であり、民族的愛国心である。

日本は現在世界で最もマルクス主義研究が盛んな国である。そして民族意識の低下、マルクス主義と戦う勇氣の欠除、共産主義の本質をあまりに知らなすぎること等が指摘される。革命は国民がそれを欲さないから起こらないのではなく、革命に対する抵抗力の強さが問題なのである。この点で日本は、革命の可能性のある状態の国と考えられている。そこで我々に必要なのは、イデオロギーに対する批判的能力と自国を正しく評価する目を持つことである。これから大切なのは物質ではなく、精神なのである。

これからの国造り

―物心両面の理想は何か―木内信胤先生
最近の世界の情勢は、目まぐるしく変



化しているが、これらの流れの底にあるものは、今までの権威とされていたものが、その権威を失いつつあること、日本の

実力が広く世界に、特に欧米に認められつつあることであろう。欧米では精神的救いとして宗教を求めて止まない。ところが絶対神に囚われたキリスト教は、基礎的なものの考え方の欠陥により廢棄しつつある。このキリスト教の廢棄は西歐文明に破綻をもたらした主原因である。いかに物質文化が発達しても、精神文化が欠けては正しい国の発展は望めない。国造りの理想も物量的目的にあるのではなく物心両面に亘らなければならぬ。私の国造りの方法論は最近流行の「未來学」のそれではない。私の方法論は単なる「傾向線」の延長ではなく、既に起こりつつある「変化の意味」を判定し、その変化の中の意味のあるものを延長することにあり。

まず構想については「政治改革」と「教育刷新」がその二大支柱をなす。「政治改革」に於いては、西欧の精神的土壌に育った議会制民主主義や多数決の制度を、単に借りてくるのではなく、真に日本人の心情に合った政治制度にしなければならぬ。又、流動の激しい世界に対応できる制度にしなければならぬ。「教育刷新」に関しては、現在のようなレッテル教育、マスプロ教育ではなく、人間を鍛え上げることを主目的にし、真に実力のある人間の育成に勤めることが必要である。又、専門教育は一生の問題であることを考え、実務経験後の大学教育

を考える必要がある。

次は、以上の構想を支えるところの「体系的なもの考え方」の問題である。我々は「平和、平和」と空念仏を唱えているが、平和自体に価値があるのでは決していない。平和な状態に於いて真に意義のある充実した良き人生を送ることにこそ価値があるのである。又、「自由」そのものに価値があるのではなく、「自由」な状態に於いてのごとを為し得ることと真の価値があるのである。「法」ということに関しても同様である。「法」は議会で決められたものではない。人々が集って決定したことは、単に多くの人が好ましいと考えたことに過ぎない。真の「法」とは、人が知っていようと知っていないと、そこに存在しているものなのである。このような基本的なものの考え方と、我々の置かれていく立場に於いて、日々、足下の問題をつ一つ解決していく実践とによって、新しい真の理想は実現せられていくのである。

和歌創作について

山田輝彦先生



漱石の「行人」の中に、「人間と人間をつなぐ橋がない」という言葉があるが、西洋の人にはこの気持ちが大きいのではないだろうか。芭蕉の「秋深き隣は何をす

る人ぞ」の句にしても、深き秋という同じ自然の中に生きている深き秋かのような情が出てくるが、このように日本では水や空気のように感じられたものが西洋には

ない。feelingとかemotionとかの言葉はあっても、それは日本の「情」という言葉とは意味合いが違っている。情とは心が通うということ、日本人は心の微妙な動きを俳句や和歌に託し、互いに心を通わせ合ってきたのである。だが現在はこの情が通わなくなっているのではないだろうか。かえって、こういう情意が日本に合理的精神の育つことを阻んでいると考えている人が多く、中野重治は「歌」という詩に於いて、「全ての風情を擯斥せよ。」と言って、民族的情意を拒絶しなければ革命は采いことを歌っている。

千規は自分の目でものを凝視した実感ののっつって、歌を作れと言っている。茂吉は、和歌は生命の現われであり、写生とは生命を写すことであると言っている。理屈や空想では和歌は作れない。幕末の志士の遺歌は今日でも力強く我々に響いてくるものを持っている。彼等は和歌の専門歌人ではない。しかも若くして死んでいった人が多い。

かくすれば、かくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂 吉田松陰 自然に「か、や」の韻が流れ、緊張した気持ちがあるまま詠まれている。 閑夜ゆく星の光よおのれだにせめては 照らせ武士の道 伴林光平

星に自分の行く道を照してくれとひたすらに祈っている姿である。命をかけているものの中に、生命の安らぎを感じているが如きこれら志士達の歌は、まごころから歌いあげられたものである。人間を究極に於いて動かすのは赤誠なのである。

第三日 (八月五日)

「法そのもの」と「その法を生

む背後にあった立法の精神」と

小田村寅二郎先生



この講義ではこの合宿で問題になってくる大、学、学生問題、神話教育の問題、天皇制についての疑問に先づこの問題に先づ触れたい。いづれも「法そのもの」とその法を生む背後にあった「立法の精神」と無関係ではないからである。

学生問題は、窮極する所、「教官と学生」のつき合い方の問題なのである。羽田事件の裁判でもほとんどの学生生活動家が、自ら革命の闘士と自認しておる。日本は今「自由」を何よりも大切にすることを、国の基本方針としている。その自由をも否定し去らんとする自由は許されたいはずである。自由を享受することと、無政府状態とは根本的に異なるものである。今ほとんどの大学の自治会は、思想の自由を標榜しながら、赤旗を例外なく掲げて運動を展開しており、そこには一片の思想の自由もないではないか。学生問題は学生自身はもちろん、このような状態を放置しておいた教官、為政者の問題でもある。

明治時代、日本は西洋の物質文明の優れているのに驚愕のあまり、自らの精神文明をも拙劣なものであると思ひ込んでしまった。しかし考えてみれば、例えば法をとってみると西洋においては法がなければ争いが発生するような個性迷執の精神しか持ち得なかつたが故に契約説が

発達し、法の技術が発達したので、日本では、文章で書いた法がなくても互いに情意と信頼でとにかくやって来た。だから法の技術はあまり発達しなかった。法には必ずその法を創り出した立法の精神というものがあつて、日本の法の背後には、日本人が長い間にちかちかしてきたものがある。このことは神話に關しても同じことが言えるのであつて、すばらしい神話を生み出した事実はそのだけすばらしい人間を、國を、造り出そうとする意志がその背後にあつたと考えなければならぬ。

長い人間が心と知恵の限りを尽して築き上げてきたものを、何故に子供達に教へてはいけないのか。また何故に、彼等自身がそれに気づくまで待たねばならないのか。神話教育を否定するものはただ単に神話を否定するというよりも、その神話を生みだした民族のつみ重ねられた努力そのものを否定しようとする以外の何物でもない。憲法の問題も、その法を生みだした精神にまでさかのぼって考える必要がある。

天皇制に対する疑問が班別討論でも問題になったようだが、我々は天皇制がどうとか、こうとか議論する前に、天皇制を生み出し、承け継いで来た祖先達の情意に徹入し、また國民を思う天皇の御心に直接触れてみる必要があるのではなからうか。

このような基本的考察を抜きにして、その場がその時に流れた議論が盛んであるがその中に我々が浮遊してはいけません。我々のなすべきことは今すぐ我々の困りにあるこれらの誤れる点を一つ一つ正して行くことではないか。

韓国 岳登山

午後一時過ぎバス五台でえびの高原に

向う。汗を流して韓国に登る。緑の山々にふちどられた大浪の池の青い水面、白煙をかすかにはきだす新燃岳の彼方に、雲に頂上をつつまれた高千穂の峰。我々のほおを涼しい風がなせて通る。合宿での疲れも緊張も忘れてしまふ心の安まる一時であつた。

歴史における客観的評価とは
なにか

日清、日露の
両戦役に参加し
明治天皇崩御の
後、夫人と共に
自害した乃木希
典は、今もなお
我々の心の中に
乃木大将として



生き続けている。この乃木大将をも、その生前から今日に至るまでに、いろいろな人々が尊敬の目で、あるいは批判の目で見てきた。しかし、歴史の中に、人間が客観的に描き出されるとは一体どういうことなのか。それはまた客観的な歴史とは何かに関連する問題でもある。所謂「昭和史論争」は、この問題に關しての重要な手がかりを我々に提供してくれている。この論争の中で、達山茂樹の「昭和史」に対する批判的は次のような点である。

「昭和史」は人間不在の歴史である。かの大戦争の時代に於ける両極端の人間は描かれているが、その中間にあつて、常に述べていた國民の感情は全く無視されてしまつてゐる。歴史家は共感の苦惱、すなわち、その時代に実際に生きた人々の中へ飛び込んで、彼等の人生を追体験することがぜひ必要である。人間不

在の歴史とは、単に人間の名がその中に出て来ない歴史のことではない。その時代に生きた人々の喜びや、悲しみが、読む人の心に生き生きと迫ってくるならば、その歴史は人間の生きた歴史と成り得るのである。

これに対する達山茂樹の反論は「人間は、支配、被支配の階級的存在である。それ故歴史の客観性は、被支配者の立場、民衆の立場に立つ批判以外にはあり得ない」と言い、彼の立場は、所謂二七年と三二年テレーに立つものであることを明らかにしている。

しかしテレーという現実政治の文書そのまま思想的歴史批判の立脚点としたことに大きな誤りがある。それでは、歴史を書き、歴史を読むとは一体何なのか。それは、人間の生の源は何か、日本人とは何かを歴史に求めることであり、歴史の中で生きた人々の人生から、我々の生き方を求めることである。

慰靈祭

両側をかがり火に守られた祭壇の前に「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさね守る大和島根を」の朗詠で慰靈祭は始まった。明治天皇御製拜誦、祭文奏上の声は、草原の夜空に響き、我々の心に、この上のない感動を呼び起こした。祖国のためにその生を捧げた祖先の生命と、我々の生命とが一つの流れとなつて連なつてゐることを、ひしと感じる一瞬であつた。溢れんばかりの感動をじつと胸に留めながら歌う「海征かば」の全員斉唱の歌声が、周囲の山々にこだまして、慰靈祭は滞りなく終つた。

第四日目 (八月六日)

西洋文化との対照における日本文化の問題



竹山道雄先生
他の国の事を判断するのは難かしいことである。ベネディクトの「菊と刀」はキリスト教以外のものは、深い良心がないと

いう前提のもとに書かれてゐる。西歐人は極めて自我中心なので、そのため社交や法意識が発達してゐるのである。訴えたり訴えられたりしてゐる。そこには隣人の愛というものが無い。ヨーロッパの長所は、分析的な面ですぐれていることである。日本人は直覺的に生活の知恵をつかんで来たが、分析的なものがない。このように文化はそれ自體の価値を持つてゐるのであつて、他の規準で判断してはいけない。もっともナチスの文化には、この事はあてはまらないだろう。

今まで日本の文化について、西歐の規準で判断されてきた。他國の社会制度、特に人々の心の中の宗教心を理解するのは難かしい。例えば、日本の古事記に出てくる神は全く別のものである。キリスト教の神は、絶対無限のものであり、又長い間不寛容であつた。全人類の中で、キリスト教を信じない人は悪魔であるから、それを倒すのは神にたかえることである。信じるか信じないか。信じなければ殺す。このようにして一つの精神形態が出来た。

古事記の中に出てくる神は無限絶対のものではない。無限絶対なもの象徴するものができない。無限感というものが心に描けるだけである。「何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに

涙こぼるる」という歌によく表わされている。日本では功ある人が神となる。乃木神社、松陰神社等を見てもわかる。天皇を現人神という時、神を^{カミ}と混同するど、とんでもないことになる。又、日本では仏壇と神棚の両方を祭っている。宗教が混然としている。宗教的の心髓が通っていないという。しかしこれはキリスト教の尺度で判断するからである。知られざる所へ登るためには、どの登り口からでもよいというのが、日本的宗教感であるのではなからうか。

芸術創造の場合、西洋人の芸術は生活から離れている。額ぶちの中に絵がある。他の世界と区別されている。日本では、お茶、お花、庭、絵も生活と密着していた。芸術は空気のようなものであるから、芸術とは何かということを考えなかつた。

芸術は過去からの蓄積が新しい形で現われる他はない。そこに日本人にしか生み出せなかつた芸術がある。芸術全体を四つのカテゴリーに分けると、印象芸術(世界の美しさに共鳴したもの、桂離宮)構成的な芸術(土器、建築)表現的芸術(心の中の叫びを表現したもの、仁王像)暗示芸術となる。この最後のものが日本独特のものである。日本の芸術には間がある。一番本質的な一点に集中して隅まで書かない。「古池や蛙飛び込む水の音」という俳句は、水の音を出すことにより静かきの無限のものを表現している。びょうぶ、音楽等、鑑賞する人をして、その細かい一か所に集中さす力を持っている。

このように、これまで「模倣の国である」と自他共に片付けていたことを考え直す必要があると思う。

班別討論

単なる知識や、概念的な言葉のやりとりで流れてしまし、勝ちな班別討論ではあるが、回を重ね、班の友人達と、班別討論では語り尽せなかつた話を、夜遅くまで熱心に語り合っていく内に、我々の生活に密着した、内容ある充実したものになっていった。友人の言葉を、友人の気持ちになって理解していくことのむずかしさを、あらためて痛感させられたのも班別討論であった。そしてまた、自己の思いが、友人達に伝わったときの、何物にも代え難い喜びを味わうこともできた。一つの問題を、共に心を傾けながら熱心に考えていこうとする班員達の真摯な態度、拙い我々に、真心のこもった助言をしてくださる国文研班付の先生方の尊い御心、これらが一つに融け合った班別討論の雰囲気は、この合宿以外の場ではなかなか味わうことのできない貴重なものであった。この雰囲気、我々の学園にも取りもどしたいと友人達は互いに語り合っていた。

古典の読み方について

小柳陽太郎先生



この合宿に於いて、先生方が心を砕いて、我々の為に講義をして下さっている。しかし講義の後の質疑応答を聞いている

と、「先生はこう言われましたが、私はこう思うのです。」先生はこのような言われましたが、この点が欠けていると思うのですが、等々の質問が続く。先生の言葉に感動したのなら、何故我

々は「だがしかし」と言う前に、素直にその感動を心に留めようとしなければ、「だがしかし」と言う時、心の中では、感動を感動として受けとめようとせず、冷たく打ち消そうとしてするのである。これで講義を聞く者の心の姿勢と言えるであろうか。根本の原因は、我々が、先生方のお心の中へ割って這入って、先生方のお気持ちを憶念しようとしなない点にある。

この事は単に人の話を聞く時に限らず、書物を読み、古典を読む時の心構えにも通じるのである。この心なくして、深い意味の込められた言葉は分かるはずがない。「心を定める」という姿勢が出来ていないのである。「疑ふ勿かれの義功利者流の知る所にあらず。」という言葉がある。これは、松陰先生の「講孟餘話」の中の「余因徒となりて神州を以て自ら任じ、四夷を挫伐せんと欲す。人に向ひて是れを語れば、駭愕せざるはなし。然かれども、仁の不仁に勝つては猶ほ自ら信じて断じて疑はず。」の強い御言葉によって実によく説明されている。本

当に心から感動したら、その感動をしつかりと心の内に留めて、決して疑うことのない。この心の姿勢は、自己の利益のみを求めている者には到底分かるはずのものでない。そこには、底す人の心と、聞く者の心とが一つに堅く結ばれているのである。「小乗の疑滞」という言葉がある。小乗とは自己にとらわれている人のことである。すなわち、自分にとらわれている人には、素直に感動できない心の滞りがあると言うのである。これに対し、「神情開朗」と言うのである。これは、例えば、先生方の心に、言葉に感動したら、その感動を素直に心に留め

第五日(八月七日)

今上天皇の御歌と孝明天皇の御歌について



夜久正雄先生
私達は天皇についてどういふ姿勢をとつたら良いのでしょうか。憲法上の天皇は法的制度的なものであるが、実質的内容的にその法をうちたてている精神があるはずだ。

天皇に対する精神的関係、国民感情は明治では崇拜と同時に親愛の感情が深く流れていた。大正期に入り、国際社会での日本の安定という安心感もあり、国事を無視するような人道主義、自由主義などが入り、マルキシズム運動は、ロシアのツァーリに対する憎悪感をそのまま日本にあてはめようとした。戦前戦中に入

ると、天皇に対する国民感情は、敬して遠ざけるという形式的な方向に流れていった。戦後は激しい憎悪感や、形式的崇拝を要求されたことへの反感など、大統領制を信ずるものとの反撥などが一般国民の間に大きく広がっている。それでは天皇御自身は国民に対してどのような御心を抱いておられるのでしょうか。私達が天皇に対して正しい心の姿勢をとるためには天皇の御歌を知ることが大切で、日本民族は、和歌を作ることにより心を磨き自分の精神生活を知ってきたのです。歌を作ることにより天皇と同じ心の経験をし、天皇の御歌を読むことにより心の通い合いができる。それを建国の昔より行なってきたのです。このようにしてきた日本文化の根底には天皇が常に居られるのです。

孝明天皇御歌

あさゆふに民やすかれとおもふ身のころにかかる異国の船
戈とりてまよぬ宮人このへのみはし
ただならぬ国の危機に立ち、国のゆく末国民のことを案じて歌われた孝明天皇の御歌に対して、国の志士達は立ちあがるのである。

天翔るたまのゆくへは九重の御階のも
とをなほや守らむ 大橋巻子
いざ子ども馬に鞍置け九重のみはしの
桜ちらぬその間に 宮部鼎蔵

孝明天皇を深くお慕いしておられる今
上天皇の御歌を読んでいきましよう。
港まつり光りかがやく夜の舟にこたへ
てわれも、御召艦の御通過を知った

この御歌は、もし火をふる
国民が打ち振る対岸のともし火に向って
甲板でたゞ一人敬礼を続けてをられたと
いう、最近あきらかにされたお話を想い
起させる。天皇の国民に対する深い御心

を、時と所をへだて、同じ「ともし火」
の中に知ることができるとは、
海の外の陸に小島にのこる民の上安か
れとただいのるなり
ただ祈る御心、この国民をおもいたも
う御心こそ天皇の眞の御心なのです。天
皇について色々論議する前に、必ずこの
天皇の御歌を研究していただきたいと思
うのです。

全体意見発表

全体意見発表では十数人の人が力強く
自分の思いを述べた。紛争が続いている
東大のある学生は「自分自身は身近な問
題をさけてきた。先生の講義を聞いて、
これからはそれと真正面から取り組ま
なければならぬ」という気がした。「と述
べた。又他の学生は「この合宿を通じて
反撥もあつたが時々目頭が熱くなること
があつた。日本人の血が流れていたのだ
という気がした。」「学問にはまごころ
がなければ相手に響かない。又日本人と
しての運命的な自覚こそが学問を始める
第一歩であることが解つた」と述べた。

全体意見発表

全体意見発表の後で小田村理事長より
「今の人達の言葉を聞いて非常にうれし
く思った。しかしまだ悩んでいる、苦し
んでいる、声にならなかつた感想がある
に違いない。背伸びしないで正確に確実
に自分を形成していただきたい。人生は
人間として本物になろうということでは
ないだろうか。学問も本物になろうとす
るために学ぶのである。」と学生達の胸
に深く響く言葉があつた。

全体意見発表の折しも天を突くような
夕立にみまわれたが、それも静まった中
で感想文執筆をし、十二時より閉会式が
あつた。奥田先生と井生先生の言葉の後
に岡大医学部二年田中輝和君の挨拶があ
つた。最後に「進めこの道」を声高らかに
斉唱し、それぞれの帰郷地に向かい螢の
光の音楽に送られて霧島を後にした。送
る者送られる者は、いつまでも手を振
つて別れを惜んだ。(岡山大学・斉藤利明
田中輝和 神戸大学・安藤幹雄記)

参加者の感想文から

先輩に導かれて

西南大 英三 小野 吉宣
班長として、班の運営がうまくいかず
悩み、長内先生に「僕は自分の今まで持
っていたものが全部なくなつてしまつた
気がします。」と言うと、先生が「何も
かもなくなつても、君にはまだ情熱が残
つていないか、今晩徹夜してでも
明治天皇御製を『どうも先輩助けて下さ
い』と念じて読んでみなさい。」といわ
れ、一時半頃まで、じつと拝誦しまし
た。この時ほど、御製のもつ力にふれた
ことはありませんでした。心が一つにま
とまり、新たに力が湧いてくるのを覚え
最後までやり通すことができました。
自分がこのように鍛えられる場が与え
られ、立派な先生方に教えられるうけられた
ことは、僕にとって非常な喜びです。

人の心が感じられる

中央大 法四 石井 茂雄
合宿を通して、人の真情というものが
感じられた。何よりも、全ての人間が真
に生きぬいていくということを知つた。
私は、自分とつきあひがいかに甘かつ
たかを、痛切に感じた。私は、今まで、
自分と自分の心と慣れあつていたのであ
る。一つ一つの行為は生きていなか
つた。一つ一つの言葉は単なる記号とし
てしか用いていなかつた。私は、和歌を通
して人の心と言葉というものをかすかな
がら理解しえた。そこには生を大事に扱
い、一つ一つの生が感じられた。しみじ
みといつたわりというものが感じられた
のである。私はこれから自分を大事にした
いと思う。又、自分と真剣につきあひた
いと思う。又、言語とも、社会とも、真

のつきあひをしたいと思う。なにより
も、この合宿はそういうことを教えてく
れた。

和歌のすばらしさ

岡山大 法文一 井上 雅茂
爆撃にたふれゆく民の上をおもひい
きとめけり身はいかならむとも
身はいかになつともいひきとめけり
ただたふれゆく民をおもひきて
霧島合宿で始めて知つた、和歌とい
うもの美しさ、日本的な響き、情緒。そ
れはもう、まったく素晴らしいものであ
つた。特に右に引用した今上陛下の御歌
には、理屈なしに、本当に国民の身を案
じて下さつた御心がはつきりと表われ
ていて、何か目頭が熱くなるような気がす
る。この御歌からでも、あのマツカサ
ーとの会見の場面がはつきりと想像でき
るではないか。人間のこころ、日本のこ
ころ、このすばらしいものが失なわれて
いる現在、和歌に按ずることによつて、
「ああ、自分は日本の国に生まれて来て
本当によかつた。」と皆が言えるよう
に、いろいろな機会に和歌創作を広めて
行きたいものだ。

感動はどこからくるのか

長崎大 教三 安東 巖
この合宿における感想として、私は「
自分自身が日本人である。」との確信を
得た事をあげようと思う。あの幕末の志
士の偽らざる歌を読む時、くり返しくり
返し心の中で読み返す時、心の奥深くに
「ある種の感動」「胸を締めつけられる
ような想い」が湧き上つてくるのをどう
しても抑える事ができない。日本精神の
素晴らしさを語られる諸講義において

も、僕はいくたびもそのような感激に身を震わせた。その感動はどこからくるのか。「自分は日本人なのだ」「日本人としての血が流れているのだ」「そのような自觉の芽ばえから来るのであると思う。」

友こそ最も大切なものだ

鹿兒島大 法文二 藤田 初

友や先輩と討論する場合でも、知識だけでは相手に自分の心を納得させる事はできないんだ、自分の心を飾る事なく、卒直に相手にぶつつけなければ無意味なのだという事がわかったような気がします。それと共に、自分の気持を本当に自分でくれる友達が、どれほど自分にとって必要であるのか、人生にとって最も大切なもの、失ってはならないものは、友達であると痛感しました。友達の有難さをわからせてくれた、という点において、この合宿に非常に感激しています。合宿に参加する前と今とでは、大げさなようですが、自分が異って見えるような現在です。

自分を偽ってはいらない

九大 法二 水永 正憲

この合宿に於て、自己を偽わない生活をしようとする努力し、また現に生活しておられる師の在ることを知った。しみじみと、かつ厳しさと共に語られるその一つ一つのことが、自分の胸深く痛いまで、しみ込んできた。自分をよく見せよう、という考えを振り捨て、一切自分を捨ててぶつかっていかば、必ず自分もそうした生活がやれるのではなからうか、と今はそんな気がする。学園に於て行なわれている暴力黙認・全くの非干渉的態度を、断固として打ち砕かねばならない。それは、とりもなおさず自分自身の問題である。恐れてはならない。自分を偽ってはいはならない。まぢがっ

ている者に対しては、堂々と、はっきりと異議を述べねばならない。必ず、今誓ったことを行う覚悟だ。

心を開いて語りあう

東京大 理工一 青山 直幸

師と学生、友と友とが心を通いあわせることは、いかに喜びに満ちたことであるか。毎日毎日、いろいろな事をし話あいました。祖国・学園・人生というような問題から、時事さらには、たわいもない雑談まで。しかし、その内容は別として



(講堂にて)

ても、赤裸々な人間同士、心を開いて語りあうことがいかに大切であり、又自分を知るためにいかに重要であるかということがわかりました。

小田村先生が最後に言われた「ほんもの人間」ということが、頭の中に焼きついてはなれません。これからの毎日、本心に真剣に、ほんもの人間になるために努力しなければならぬと決意しております。

素直な心に気がついて

岡山大 医二 小田 幾世

私の和歌創作は完全な失敗に終わりました。思った事も表わせず、作っても理解されない。友のようになぜ作れないのか、と悔やしくてなりませんでした。でも自分でそれだけ苦労して、始めて友人の、恩師の歌の良さに気がつく事ができたのです。友人が素直に詠んだ歌を見て、始めて自分のまぢがった態度に気がついたのです。私に素直な心が欠けていたのです。その心なくしては、どんなに心の動揺をよもうと思っても、人は理解してきれなかったのだと思います。

私が一番心動がされたのは、友人のひたむきな素直な姿でした。その姿に感動し、素直な心に気がついて、始めて先生方の言おうとなさった事、講義の奥にあるものが、心の中に実感として受け入れることができました。

心の姿勢のあり方を知った

長崎大 医二 藤野美和子

心晴れぬままに四日目ともなり、私はこの合宿で何を待たのだろう、とぼんやりしてその日の講義を聞いていました。しかし、小柳先生の激しい御言葉聞いた時、自分の心の中に一つの変化が起るのを感じました。それは、「部分的、また

に私はずべてを受け入れることはできない。けれども、そのためにその他の本心に素晴らしいことや、心に訴えるものまで受け付けられないのは良くない」ということでした。このことによつて私は、人の心の姿勢のあり方を知つたような気がします。人のまごこの心を素直に自分の心に入れる。このことを知ただけでも、私はこの合宿に来たことを本心に良かったと思えます。

教育の現場にこの感動を

熊本人吉東小教諭 早川 亘

すばらしい合宿生活だった。ほのぼのとした感動を忘れることができない。規律正しい生活の中で熱気あふれる学習の雰囲気は、一時の眠気に私を誘う余地すら与えなかった。友との美しい心のふれあい、慰察察に涙して感動したあの素晴らしさ、全く口にはあらわされぬ五日間であった。

私は教育者である。現場に帰って奮いたたねばならないことはたくさんある。今までは小乗の疑滞のごとくして、たこが恥しめてならぬ。しかし今は、教育者としての使命感の確立に自信をもつてすすめるような気持で一杯だ。教育の現場の正常化に発憤し、五日間のこの感動を祖国を築く子供の教育に役だたせたい。

真の教育の姿を見た

熊本人吉市立第一中教諭 源島 駒男

合宿教室に初めて参加して、一番感銘をうけたことは、講師の先生方、国文研の先生方の人柄と教育されるその姿です。国を愛えて、若き後輩に少しでも本物をわからせようと導かれるその熱情は、話される一語一句に血となり力となつて、われわれの胸に伝わってきました。休み時間をもさらに、われわれと共に語り合われる、さらにはまた、自分から班別の部屋を訪ねられる姿に頭の下がる思いがしました。私も教師の一人として今まで生徒の前に立っていません。今では、教育者として、いや、その前に人間として恥しい思いを更に強く感じています。この合宿で、諸先生方が体で示された教えることの本当の姿、真の教育の姿というものをもう一度考え直したいと思えます。

合宿詠草より

慰霊祭にて

東京大 石井 英一
国のためたふとき命を盾にして倒れし御
霊よ安らかに眠れ

立命館大 池之上晃敏
知らざりし友と心こめ語らふも今日限り
かと思へば淋し

九州大 桑野 正紀
生くる意味解らぬと悩むわが胸に友の言
の葉深くしみいる

早稲田大 広瀬 清治
言の葉を語らむとして友どちの思ひ高ま
り絶句するらし

言の葉はよし語らずも君の思ひ我が胸内
にひたに迫り来

亜細亜大 鈴木 雅教
さはやかなる風をうけつゝあがりける日
の丸あふぎてわが身引きしまる

日本大 加藤 邦泰
友どちと語りつくしたる言の葉を深く心
にとどめゆかなん

今上天皇の御製を拝唱して
早稲田大 原川 猛雄
御歌をば読みつゝ思ふ大君の国民思ふ御
心深きを

東京大 石村 善悟
山石に足とられつゝも元氣よく小学生の
走り登り来
子供らは汗をふく我のかたはらを声はり
あげて走り過ぎゆく

長崎大 安東 巖
語りつゝ胸あつくなる日頃よりつみかさ
ねきし思ひ述べれば
学園を正しくなさむと説く友と語りて尽
きず夜の更くるまで

中央大 田所 健
合宿の集ひ終りしその後もここに学びし
を忘れじと思ふ

富山大 山田 滋
韓国の山の頂き立ちをればま白き霧の登
りくる見ゆ

鹿児島経済大 相徳 和義
感激のほとばしるまゝに言の葉を述ぶる
友らの力強きよ

長崎大 橋本 晃一
来年もあはんといひてみ友らと手をと
りあへば胸あつくなる

慰霊祭にて
防衛大 太田 文雄
国のため倒れしあまたの英霊がまぶた閉
ぢたる我れに迫りく

命捨て御国守りし防人のあとをつがむと
かたく誓ひぬ

小田村先生の御講義を拝聴して
上智大 北崎 伸一
かくまでに愛へたまふか先生の御心思へ
ば涙あふれぬ

常日頃抱きし思ひことごとく語り尽さむ
短きつどひに

鹿児島大 戸沢 正志
ひたすらに国を思ひて妻子捨てしみ祖の
おもひを切に偲びぬ

長崎大 松岡 淳
玉川大 植村真理子

友がきのつどひたのしもこよひわれ語ら
ふままに心なごみぬ
岡山山大 小田 幾世
心から素直に詠みし友の歌に幾度となく
涙あふるる

皇学館大 幡掛 節子
難聴御迷惑を顧みず参加して
聞きとれぬ師の御言葉に耳すましただ
ひたすらに口元を見る

合宿に参加しおもひを深めたこと
ちちははが祈りをこめしいのちゆえわが
身ひとりものにはあらず

福岡県八幡西高校 村田 英雄
音をたてゝ登るパスより眺むればさつま
の山は遠くほの見ゆ

慰霊祭
熊本県八代小学校 加世田和馬
靖国の神となりしわが兄もこゝに来ま
すか山のまつりば

宮崎高千穂相互銀行 石山 礼三
夜ふけまであすの別れをしみじみと語ら
ひをればおもひあふるる

鹿児島山形屋 當房 忍
はじめての友に我が思ひ述べたしと思へ
ども言葉にならずもどかし

全体意見発表(最終日)
亜細亜大学教授 夜久 正雄
沛然と雨ふりいでぬ若きらの全体意見発
表の時

壇上に立ちてをしく若きらが語ること
ばの涙ぐましも

若きらが心のゆくへしのびつゝ語ること
ばの身にしみけり

若きらのをくしき声はごうごうと降る雨
音にまぎれざりけり

雨はれて明るくなりぬ別れゆく友らの旅
のゆくて思ふに
われらいま別れゆけども相おもふ三百の
友ありと思はむ

参加学生の大学名一覽(49大学)

- 九州大 鹿児島大 長崎大 熊本大 大分大 佐賀大 鹿経大 福岡大 西南大 福教大 鹿工短大 九州女大 熊本女大 福岡女短大
- 岡山山大 山口大 富山大 神戸大 金沢大 皇学館大 同志社大 関西大 立命館大
- 東京大 東京工大 防衛大 中央大 早稲田大 上智大 玉川大 明星大 亜細亜大 明治大 日本大 法政大 慶応大 一橋大 独協大 拓植大 東洋大 千葉大 国立音大 東海大 東理大 学習院大 実践女大
- 東北大 秋田大 東北院大

編集後記 この合宿特集号の前半は、岡山山の三宅将之君を中心として岡山・神戸大グループが、後半の感想文、和歌の集録は、八幡製鉄勤務の今林賢郁君、九大の小柳左門君等福岡グループが分担編集して下った。特に学生諸君が試験前の時間を割いての執筆は感謝に堪えない。合宿が終つて一ヶ月の間に、チェコの受難国内学生騒擾の深刻化など極めて刺激的な事件が相繼いでゐる。ほんもの、人間にならうとする試煉は、一波は万波にひびきあひながら日常目前にある。心を定めて前進しよう。合宿教室では各講師先生方、それぞれのテーマで講義を進められながらその間に共通の基底があつて、それが強く感じられた。それは今年に始まつたことではないが、新しい見方、考へ方が日本に確立しつつあると信じらる。聴講する若い世代と先生方の心の触れ合ひの中から、古くして新しい一つの思想が日本に生れてくるといふ実感があつた。

(朝の国旗掲揚)



国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18 御瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南都町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共)年間 360円

国のいのち

チエコ事件に思ふ

第二次大戦終了後、ソ連に占領された東欧諸国には、ソ連の武力援護のもとに、モスクワ亡命派を中心として次々に革命政権が樹立された。チエコの場合特に、議会制民主主義による平和的政権交替を装った、謀略革命であったことは有名である。それらの政権のもとでは、その国の歴史よりさきにロシア・ソ連の歴史が教へられたり、ロシア語の修得が義務化されたりして、個々の歴史、伝統、言語に愛着する各国民の屈辱感、言ひ難い深刻なものがあつたと思ふ。ソ連を中心とする社会主義経済圏の中で、国情を無視した強引な工業化や、計画経済独特の国際的搾取に対する、各国民の恨みや不満も深いものがあらうこともまた容易に察せられる。

ハンガリーが民族の自由と独立を求めて、蘇つたと見えたと同時にソ連の大軍によって押しつぶされたのは十二年前。そして今度はチエコが再びソ連東欧軍によって蹂躪され、更にきびしい内政干渉

を受けるにいたつた。条約に基づき要請もないのに、突如大軍を以てチエコ国土を侵し、民衆を殺戮し、政府要人を拉致するなど、他国の独立主権を公然と犯したソ連の暴挙を、全世界が非難したのは当然である。

日本の各界の反応も然りであつたが、最も目についた非難のことは、大國の軍事的侵略に向けられたものであつたと思ふ。ベトナム戦争をアメリカのベトナム侵略といふ一色でぬりつぶしてきたジャーナリズムにとっては、共産主義体制の実体と失望を目前にしなが、それを同胞に警告し教訓化することよりも、事の性質では格段の相異があるアメリカの行動を片目でにらむのでなければ不合理であつたのか。主権侵害、武力抑圧といふ事実に対しては、ありとあらゆる暴力を逞しうする全学連もこれに嘸みついた。要するに誰しもがその侵略に驚き、ソ連体制の維持に示された暴力的性格を直観し、認識し、チエコの運命に率直な

同情を惜しまなかつた。無防備中立論のかけがえがなくなつたのも事実である。ただこの事件を、現に進行中の歴史的事実として直視するためには、ソ連、チエコ並びに東欧各国政府の動きを、正しい情報にもとづいて見守ることがのほかに、一國の興亡については、中んづくチエコ国民の、侵略され、挫折してもなほ残るべき悲憤の気概、その悲しみを胸に浸み透るまでに理解し、その念を持ち続けねば、そうでなければ出来ることではあるまい。※反対、絶対反対といふ、殆ど考へることをやめてしまつた様な概括論では、この恐るべき、また日本人にとつては身に沁みる教訓となるべき事件も、一つの定式として背くと同時に忘れてしまふことになるのではないか。

チエコ事件に限らず、暴力反対といへば一応とはる。強権の発動を暴力とする。更に國家権力を即ち暴力とする、となればもう無政府思想であり、國家とは何かについて更めて検討を加へねばならぬ。暴力をこゝ迄拡大し、それが一つの思想として育つについては、暴力に対する嫌悪と憎しみの感情の極まるころと思はざるを得ない。憎しみの情は極限に達する、極限に至つて論理に転ずるのはみやすい道理である。極限の論理は抽象だから、破壊の論理にはなり得ても、生々として息まず、何が起るかかわらない現実のための論理ではない。

なぜ暴圧を以て他國の主権を侵すことを、誰もが憎むかは、条約や法律で決められてゐようとあまいと、してはならぬことに決つてゐるからである。それが

天下の法である。それは國家の存在が、諸國民にとつて、即ち人類にとつて優すべからざる事実だからである。國家は、価値ある個有文化の保持者として、また、同胞とその祖先の多数の献身によつて維持することの出来た「共同の追憶」といふ、かけがいのない資産の所有者として、何人にも侵しえないのちだからである。

國家はまた國民生活の統一體であり、國際社會の鍛錬なる単位であるから、秩序、公益、外交の事などに當るための權力機構をもつ。しかしながら、真に國のいのちを支へるのは權力機構ではなく、祖國感情ともいふべきものである。チエコの運命を眼前に見て確められることである。「抵抗」は極限の論理を伴ふ感情の発作から起るのでなく、永久なるものいのにちを托す、生の痛感に戦力のみなものがあつた。最終の勝利を願ふチエコ國民の悲しみを、日本人としての國家防護意志の中に反射照合して、今日の日本を思ふこと切なるものがあつた。

目次

國のいのち	久助一之輔	(1)
「大東亞戦争を見直そう」二題	正之助	(2)
白鷺の記	荒原孝悌	(4)
日本國憲法について	越前原井田	(5)
日本の知識人と生活人	桑田	(6)
五箇条の御誓文	柴田	(7)
昭和四十三年度の慰靈祭献詞	磯	(8)

(下関・実業 宝辺正久)

『大東亜戦争を見直そう』二題

名越二荒之助

一、「シドニー物語」余聞

昭和三四年八月に行われた阿蘇合宿教室の開会式で、小田村理事長の行った挨拶は強い印象を残した。それは昭和十七年五月、シドニー湾内に突入して戦死した日本の海軍軍人（特殊潜航艇三隻六人突入、濠洲海軍はその中二隻四人の遺体を引揚げた）に対して、シドニー地区司令官グールド少将が、海軍葬の礼をもって吊った話であった。当時シドニー湾外に待機していた日本の潜水艦は、連日のように輸送船を撃沈し、市内に向けて砲撃を繰り返していた。当然オーストラリア国内では、敵国軍人の海軍葬には反対論が出た。しかしグールド将軍は敢然として

「かくのごとき勇敢なる行為は、単なる一国家一民族の独占物ではない。それは人類のものである。オーストラリアの青年よ、鋼鉄の棺桶（特殊潜航艇のこと）に乗って日本の国に殉じた、この四人の青年将校の千分の一の志でよいから、それをもって国のために尽して貰いたい」

と訓辞し、厳粛な葬儀を挙行した。

私はその後シドニー海軍葬にまつわる資料を集め、拙著「大東亜戦争を見直そう」の第二部、「大東亜戦争に花開いた武士道物語」第四章の中に、「シドニー海軍葬と日濠の交流」と題して全貌をまとめて紹介した。

今夏の霧島合宿で、関正臣先輩（元陸佐）にその要旨を紹介した所、「それはそっくり々浪曲々になるから、名越君是非書け」と強くすすめられた。側で聞いていた会員の松浦良雄氏（二四班班長・熊本市立竜南中教諭）は、資料に詳しく、私がまとめた以外の話や、歌を紹介して下さった。

また「シドニー物語」の主役となった故松尾敬宇中佐の母堂まつ枝刀自も、拙著を読んで、いろ／＼新事実を教えて下さった。私はこゝに拙著に掲載しなかった部分を、是非とも書き残しておきたいのである。

松尾刀自訪濠の由来

海軍葬が終わってから、オーストラリアでは松尾艇長の腹に巻かれていた血染の千人針と、引きあげた特殊潜航艇その他を、濠洲の靖国神社にあたる「戦争記念館」に安置した。濠洲国民はこれによつて、日本軍人の忠勇武烈を偲ぶよすがとしているのである。

まつ枝母堂（83）は、我子の血に染った千人針だけは返してほしかった。しかし一たん記念館に納めたものは、外に持ち出さないう規則があつて、その願いがかなえられない。戦争記念館のマックグレース館長は、刀自の願いが果されないことを伝えるために、熊本県山鹿市久原の郷里を訪ねた。

やがて日本からも、刀自を答礼も兼ねて、千人針に対面させてあげたいという運動が起つた。刀自ら一行は今年の四月二十八日、訪濠の旅に発つたのである。

出発にあたって刀自の歌

空に海にあまた勇士の母をまつ心しのびとねむらざりけり
外国のあつきなさけに答へばやと老いを忘れていきみ旅だつ
あたゝかき人のなさけにつゝまれて鹿島立ちする今日よろこび
みんなみの勇士の靈にさゝげむと心をこめし故郷の花

一老婦人による日濠の交流

オーストラリア国民は、心をこめて刀自ら一行を迎えた。新聞は連日一面トップに刀自の一挙手一投足を詳しく報じた。駐濠日本大使館員も、「佐藤総理以上の大歓迎ぶりです、民間使節として日濠間にしっかりと心のキズナを作つて下さった」と、文句なしに認めている。

シドニー湾での刀自の歌

それぞれにしみしと思ふ海の上に神酒と花東さゞげおろがむ
花おほふしき紙波間に見えかくれいつかは六つの魂にとどかむ
海底に色紙花を捧げつゝ呼べば勇士のほゝえみの声

このような母堂の心は、そのまま濠洲の人々に通じたのであろう。新聞は最初「ミセス・松尾」と報じていたが、次第にそれが「マザー・松尾」になり、「勇者の母」に変わっていった。

どこかの国のカメラマンたちは、非礼な態度で吉田茂総理の写真を撮ろうとするので、総理からコップの水をかけられたことがあつたが、オーストラリアのカメラマンたちは、腰の曲つた刀自にポーズをとることさえ頼まなかった。刀自が杖をついて歩いている所を、カメラマンたちは、地べたに寝転んで撮つたりした。

首都のメルボルンで記者会見が行われた。その時ある記者が

「貴女は最愛の令息が、親を残して戦死して、今どんな気持でおられますか、さぞ淋しいでしょう」

という意味の質問をした。現在の日本であれば、このような質問は普通のこと、見過されるであろう。しかし側にいた接待係将校は、この記者の感傷的にして非礼なる質問に憤慨した。「勇者の母に対して、淋しいでしょうかとは何事であるか」と、しかし刀自はその質問に対して、極めて自然にキッパリと答えた。

「私の息子は国のために忠義を尽してくれました。それは親孝行をしてくれたことでもあるのです。私は心から満足していますから、すこしも淋しいとは思いません」

人の子の親として、自分の子の死を悲しまない者がおろうか。刀自も令息の戦死後次のような歌を残している。

君のため散れと育てし花なれど嵐のあと
の庭さびしけれ

しかし日本では、古来武人の母は、息子の戦死に涙を見せない奥ゆかしさを持っていた。戦後二十数年、日本の魂を失った浮薄なる世情の中であって、刀自は武人の母としての面目を失わなかった。

翌日記者会見の内容が新聞に掲載されると、各紙はこぞって松尾母堂を、「勇者の母」から「世界の母」とまで讃えた。

国家のお金を全然使わない一民間の老婦人の使節が、オーストラリアの国内にこのように深い感銘を残した。ゴートン首相は刀自と対面し、その健気な心根に打たれて、千人針を返すという異例の措置をとった。

濠洲を去るにあたって刀自の歌

ひと日ひと日かへるその日の近づきて名残はつきじ濠洲の国
老いさをこの地にとまで思ひし國を今
発つことの心さびしも

うしろ髪ひかる、思ひこの国はあまた勇士の散りし地なれば

濠洲の旅ぞたのしきにしえの浦島太郎もかくやありしか

三十年のながき願ひのお礼ごと果してや
すし今日のよろこび

英霊への回帰

こゝで私見を述べさせて貰えば、日本では戦後戦死者を大死とさげすんだことさえあった。戦争中松尾中佐の供養塔に足しげく参詣して、備えつけの芳名録に記帳していた人々の中で、戦後ひそかにやってきて、墨くろぐろと消していった人もかなりいたらしい。最近はそのような便乗論が次第に失せつゝあると言われるが、また本格的なものではない。

松尾刀自は「濠洲の旅ぞたのしき」と歌い、自分を浦島太郎にたとえておられる。まことにその通りであったであろう。敵国軍人の母を、あたたかく国を挙げて歓迎し、「勇者の母」「世界の母」とまで讃えたのである。それに較べて日本はどうか。戦死者に対する評価は相変わらずつめたいと言わねばならない。このような意義ある訪濠の旅も、日本の新聞は二段抜き程度で短かく伝えたに過ぎなかった。

たしかに現在人命尊重は叫ばれる。しかし「地球よりも重い」人の命を捧げた英霊二五〇万の心は忘れられたまゝである。それが証拠に靖国神社は一宗教法人になり下ったまゝで、教科書で教えられない。

修学旅行で東京に行けば、ライオンダンや東京タワーは見ても、靖国神社はオミットされてしまう。たまに靖国神社に行っても、「見学」するだけで、「礼拝

「することを教えない。「大東亜戦争」と「祖国」と「戦死の意義」を再発見する大運動が起らない限り、たとい沖繩は返されても、「戦後は終わった」とは言えないのである。

二、林保校長の訓話事件

今年の八月十五日、東京都の林保校長（府中市立第五中学校長）が、全校生徒を前に「大東亜戦争の意義」について訓辞を行った。「大東亜戦争は、世界歴史の大勢からすれば、東洋から西洋人の東洋侵略勢力を排除するためのものであった」に始まる七項目からなるもので、始めの部分は拙著の趣旨に極めて近いものであった。

これを知った都教組北多摩支部では、「教育の軍国主義化がピッチを早めつゝある時、倉石発言にまさるとも劣らぬ許しがたいできごと」として、校長の即時罷免要求の運動を進めつゝある。

林校長と期日も同じ八月十五日、「大東亜戦争を見直そう」を刊行した私は、一言せざるを得ない。日本教師会から乞われるまゝに「大東亜戦争の意義はどう教えるべきか」を十五枚に書いて、その機関紙「日本の教育」に送っておいた。その要旨を簡条書きすれば、次のようになる。

一、戦後日本人の大東亜戦争観は、極東軍事裁判におけるキーンン検事の論告通りに洗脳されたために、偏向していると断ずるよりほかない。パール判事の「日本無罪論」や、ローリング判事の意見は、今尚黙殺されたまゝである。

二、日本軍だけを侵略者と見るのは、コップの中の思考に過ぎない。ロシア、オランダ、イギリス、アメリカなどは、約三〇〇年以上も前から、AA諸国を武力を背景に植民地にしてきたではないか。このことは欧米の学者もはっきりと指摘している。

三、「真珠湾のだまし討ち」を日本人だけが信じているのは喜劇というべきだ。ルーズベルトは参戦するために、あらゆる挑発を日本に対して試みた。ABCD包囲陣然り、ハル・ノート然り。無理難題をふっかけて日本を追い詰め、真珠湾の米艦隊をオトリにして欧州戦争に裏口から介入した。このことはアメリカの元歴史学会会長ピアード博士以下多数の学者や軍人が証言している。

四、極東裁判であのような判決を下した当のアメリカが、日本を侵略者とは教えていない。アメリカの教科書では、十八世紀から二十世紀にかけて起った一連の侵略戦争を「インペリアルイズム（帝国主義）」という章に入れて、「帝国主義に一番おそく目覚めたのは日本であった」というように客観的に評価している。

六、文部省の日本史に関する指導要領にも、第二次大戦の世界史的意義を教えるように書いてある。その意義の把握には「民主主義陣営対全体主義陣営のたゞかい」（米英等）、「持てる国対持たざる国のため」（ドイツ）、「資本主義相互間の闘争」（スターリン）などいろいろあるが、「西欧植民地主義に対する日本の反撃」という一面も無視することはできない。このことはトインビーや、

ウエルズも指摘している。

六、世界史に関する文部省指導要領には、「A A諸国の独立と解放運動の原因や流れをつかませる」ことを強調している。A A諸国の独立の原因を追求する時、日露戦争と大東亜戦争の影響を無視しては解明できない。これを証明する資料は無尽蔵というほどある。

七、第二次大戦に於て参戦諸国は果して戦争目的を達成したのか。イギリスは戦争に勝って植民地のすべてを失い、戦争目的に敗れた。ドイツは戦争に敗れて「欧洲新秩序建設」という戦争目的を失った。日本は戦争に敗れて、戦争の最終目

的とも言うべきものを、予想を超えて実現することになった。結果としてそう

つたのは、「まぐれあたり」ではなくて、歴史の必然性にそうしたものがあつたからではなかったか。タイ国の新聞はこれを、「身を殺して仁をなした」と述べている。

八、日教組は林校長を罷免すると言っている。それでは生徒に「抵抗感」を植えつけ、「三十坪斗争」を呼号し、文部省の指導要領に反対して、「自主編成」を唱えている偏向教師たちは、どのように処置したらよいのであろうか。

(岡山県立笠岡高等学校)

白鷺の記

桑原 暁一

白鷺城の異名のある姫路城は城郭でありながら、そこに法隆寺に似通った、高貴な美しさがある。天守閣だけ取ってみても、三基の小天守と大天守とのアンサンブルな取り合わせの妙。三基の小天守と大天守とを結ぶ渡櫓の中庭に面した側部の見事さ。そして何よりも白鷺の籠―それは本来は防火を目的としたものだそうだが―の清爽感。

この城の美しさには法隆寺のそれを思わせるものがある、と云ったが、それ以上に、案外法隆寺の直接の影響もあるかもしれない。というのは、この天守閣の

この城と前後してできた熊本城・名古屋

城などを造り出した慶長期の築城技術そのものの発達に由るものあるのは云うまでもない。しかもほかの城とちがったものが、この城にある。たとえば家康の造った伏見城について、藤岡通夫先生は云う、「天守の整備された形態は一分の隙もないが、あまりに理智的な冷やかさと硬さがあり、姫路城のような温雅な気分は到底見られない。」(伏見城には)

あたかも爪をかくす猫のような用意周到な鋭さがある。それは、家康の個性を反映したと考えるべきか、また時代の当然の推移と云うべきか。」と。

この城にあつてはほかの城にないもの―法隆寺を思わせるような―とは何か、それは高貴性であり、清楚な美しさでありいかめしくない威厳である。それはどこから来たのか、それについて直接に法隆寺の影響もあるかもしれぬ、とさつき云つたのである。しかし影響というのは物理的現象ではない、それは影響される主体をぬきにしてはありえぬことである。

姫路城を造つたのは池田輝政である。彼の二度目の妻は家康女であり、関ヶ原合戦に功があつたということで、三州吉田から姫路に移封され、かつて秀吉の築いた城を全面的に造りかえたのである。ぼくの云いたいことを結論から先に云うと、輝政は、桂離宮の創始者八条宮智仁親王の芸術的感化の中にあつたのではないか、ということである。

八条宮は後陽成天皇の皇弟で、幼名を古佐丸と云われた。かの天正十六年四月の聚楽第行幸の折には古佐丸君も天皇に

伴なわれて、秀吉以下諸將の歓迎を受け

られた。その中に輝政もいた。古佐丸君は十歳で秀吉の養子に迎えられた。しかし、秀吉に実子鶴松ができたためであるう、足掛二年で離縁になった。それは天正十七年末のことである。ところで、輝政の後添として家康女を取りもつたのは、ほかならぬ秀吉である。これほど秀吉の近くにいた輝政が八条宮に対して長く敬愛の念を抱いていたであろうことは容易に察せられる。輝政は慶長十八年正月に五十歳で歿したのであるが、姫路城天守閣のできあがったのは彼の四十六歳のときであり、この時宮はずでに三十一

歳であつた。輝政が宮の感化の中にあつたと考えても不思議ではない。彼は死ぬ前の年の九月に上洛して参議に任ぜられた。將軍秀忠の推挙によるものだが、彼の望みがかなえられたものと思われる。それは彼の京都への強い関心を示しているのではない。

さて八条宮が丹後宮津藩主京極高知の女(常子)を妃に迎えられたのは、その三年後の元和二年十一月である。妃の父高知はその六年に歿し、そのあとを嗣いだ子の高広(妃の弟)は寛永三年に輝政女(すなわち家康外孫)と結婚した。八条宮の薨去は寛永六年四月であるから、この結婚は―そのいきさつをぼくは知らないが―少くとも宮の受容せられたものだと云えよう。そのことはさかれば宮と輝政との親密の度合がいかなるものであつたかを測定させるに足りる。

八条宮の創始せられた桂離宮に、加藤嘉明進上と云われる奥州白川石(松琴亭

のそばにかかっている(石の橋)があり、また加藤清正進上と伝えられる赤間石(いわゆる「天の橋立」)の傍に立っている石)がある。それは伝説の域を出ないものではないが、そのような伝説のできるだけのわけはある。——彼等兩人はいずれも、かつては秀吉の有力な部将であった。主人の秀吉が、その器量を見込んで養子に迎へたほどの八条宮に對して、彼等は親しみと尊敬とを持っていたはずだし、宮の重大な仕事に協力しないはずはない、ということがこの伝説のもっともらしきを支えていると思われる。くりかえして云えば、彼等がふたりとも、かつて秀吉部将であったという事実を見逃してはならぬのである。輝政も、彼等と肩をならべて、秀吉の下にあった。そして八条宮への親しみと尊敬は彼等とかわりがなかったであろうと察せられる。しかも輝政女が輝政復後とはいへ八条宮妃の弟と結婚したこの事実は、宮と輝政との間を近づける有力な証拠である。

一四三・九二編(都立千歳高校教諭)

日本国憲法について

亀井孝之

憲法は国家の根本法であり、最高法規でありますから、国民がその内容を守

すべきであることは言ふまでもありません。また、憲法を遵守するといふことは、単に条文に表はされたものを理解し尊重すればそれでよいといふものではなく、その条文がいかなる国民感情(祖先の願ひ、とも言へます)と歴史的事実を背景にして出来上つたものであるかについてまで、思ひをせながら尊重することであると、私は考へてゐます。

そこで、日本国憲法が制定された歴史的事実と、憲法の背景となつてゐる国民感情について、考へてゐることを述べてみたいと思ひます。

日本国憲法は大日本帝国憲法を昭和二十一年に全面改正したものであり、その特色は、国民主権、平和主義、基本的人権尊重主義等であります。この憲法の特色がすなはち国民の願ひを成文化したものであると言へるわけですから、この特色を生み出した国民の願ひについて研究することが、同時に憲法の背景となる国民感情について研究することになりま

す。しかし、特色の全部について述べる時間がありませぬから、その一つである国民主権を生み出した国民の願ひについて述べたいと思ひます。

国民主権といふのは天皇主権に對して生れたものですから、憲法の条文上においては日本国憲法と大日本帝国憲法における天皇の地位の変わり方を見るのが、国民主権を考へる上での重要点となるわけ

ます。

では、「元首」を「象徴」と改めた」と願つた国民感情の変化は、一体どんな理由であつたのでせうか。帝国憲法を制定する時には、すでに存在してゐた天皇を、いかなる条文で規定したならば国民感情に合致したものになるかを、当時の人々が研究した結果「元首」といふ言葉になつて表はされたのだと思ひます。その元首を象徴に改めた方がよいといふ国民の総意の変化は、なぜ起つたのかと言ふと、私は、国民感情が変化したのでなく、太平洋戦争に負けて日本が占領軍の支配下におかれたといふ事実によつて、国民感情には関係なく改正といふ事態が生じたのであると思ひます。つまり、太平洋戦争に敗れなければ憲法改正といふ問題は起らなかつたと私は思ふので

す。

戦争に負けたら憲法を改正しなければならぬとは思へませぬし、国の最高法規である憲法を、外国の支配下にある状態で改正してもよいとは思へませんが、それでも、敗戦を機に国民が反省して、天皇に對する国民感情の変化とまでは言へないまでも、帝国憲法ではだめだつたから改めよう、と考へて改正したものであるなら、それは国民の意思を背景にして出来上つたものと言ふことが出来るかもしれません。

それでは、憲法改正の問題が起るに至つた當時の、終戦から憲法公布の二十一年十一月までの一年余りの間の国民一般の気持はどんなものであつたのでせうか。

昭和二十年八月十五日の終戦は、日本が連合軍によつて首都を完全占領された結果の敗戦といふ形ではなく、ポツダム宣言受諾といふ一種の談判による終戦であることが明らかです。そこで八月十五日

以前の日本に、連合国と和平を結ぶといふ動きがあつたことは誰も否定出来ないわけですが。国内においてはもちろんのこと、対外的にも日本政府はソ連を仲介にして和平をはからうとしてゐました。その動きが実を結ばないうちに七月二十六日にポツダム宣言が発せられたのです。そして基本的是宣言を受諾しようとしてゐながら、八月十五日まで終戦が延びたのはなぜかと言ふと、単に軍の独走とばかりは言へない複雑な国民感情があつたからであると思ひます。殊にポツダム宣言を受諾する際においても、「三国共同宣言ニアテラル条件中二八、三国共同統治ノ大権ヲ變更スル要求ヲ包含シテラザルコトノ諒解」下ニ日本国政府ハ共同宣言ヲ受諾ス」といふ通告を出すほど、国体を護持するといふ気持が国民の間には強かつたのです。

終戦を決める閣議が難航したことはよく知られてゐますが、意見がまとまらなかつた原因も、国体の護持が出来るか否かにかつたわけですから。この意見の分裂をまとめたのが、御前會議における今上天皇の次のお言葉でした。

「国体問題について、いろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文(バーンズ回答)の文意を通じて先方は相当好意をもつてゐるものと解釈する。要は我が国民全体の信念と覚悟の問題であると思ふから、この際先方の申入れを受諾してよいと考へる。」

この言葉を受けて、閣議において終戦の決定がなされたのですから、国民はその信念によつて終戦後も国体を護持し、日本の復興をはからうと考へてゐたはずであると思ふのです。それなのに、なぜわすか一年余りであつさり憲法を全面改正することに、よつて国体を変更したので

せうか。憲法改正に至った事情については、今日では次の事が公然の事実となつて知られてをります。

昭和二十一年二月二十六日にワシントンで開かれる極東委員会において、ソ連が日本に共和制をしくことを提案し、その実現により日本を混乱に陥れ、その機に乗じて北海道進駐の野望を果たさうと策動し、それが中国等に支持されさうとあることが明らかになったので、GHQが、これを阻止するためには日本の憲法を改正して、天皇の権能を全面的に剝奪して、日本は民主化してゐるから共和制をしく必要はないと主張するほかはないと考へ、民政局において一週間て原案を書きあげて(菅原裕著「東京裁判の正体」による)、それを元にして日本側のいはゆる松本案を全面的に検討し直すやうにと、マ司令部から幣原首相に示唆を与へてきた。この原案を松本國務大臣と現人事院総裁の佐藤達夫氏が翻訳、改正して三月四日にマ司令部に提出したところ、原案を改めた部分の説明を求められ、日本側は佐藤氏一人が立ち会つて翌五日の午後四時までかかつて作り上げたのが現在の日本憲法なのです。もちろん憲法を改正するのですから、帝国議会の議決を経た後公布されたのですが、この議会において、大部分の議員が改正することによつて国体が変更しないかどうかの疑問を提出し、変更することはないといふ確認のもとに可決されたのです。それも、はじめは大部分が改正に反対であつたのですが、ポツダム宣言の第十二項にある「日本国国民ノ自由ニ表明セル意思ニ従ヒ平和的傾向ヲ有シ且責任アル政府が樹立セラルルニ於テハ連合國ノ占領軍ハ直ニ日本国ヨリ撤収セラルベシ」と

いふ条項を信じて、一日も早く独立したいとの気持から、最終的には改正に賛成したのです。

日本が分割されるのを防ぐためと、一日も早く独立するためには憲法改正も止むを得ない、と考へて改正したものであるなら、自発的意思でなしに、しかも外国の占領下にあつて改正が行なはれたとしても、仕方がなかつたのだと思ひます。そして、それ故に、日本国憲法が国民の総意に基いて確定されたといふ、その総意は分割されるのを防ぐためと独立のためといふ意志の総意であつて、今日一般に言はれてゐるやうに「国家再建の基礎を人類普通の原理に求める」といふ国民の総意によつて平和憲法を制定したのであるといふものでは決してなかつた、といふことだけは全国民が再確認した上で憲法について考へるべきであると思ふのです。以上重要な問題を時間がないために簡単に述べましたが、要は、自国の憲法制定の経緯とその裏にある国民感情について、国民がもつと知るべきであるといふことであります。

(論議部理事 大卒・選挙権者)

日本の知識人と生活人

柴田 悌輔

ヴェトナム戦争に関連する問題を取り上げる最近のジャーナリズムの論調(投書欄も含めて)、及び世論調査の結果と称するものを、何か釈然とせぬままに読んでゐるうちに、私はふと奇妙な事に気が付いた。

事はヴェトナム戦争に限らなくてもよ

い。毎日、国内、外を問わず、是非善悪を別として、自分なりにこうあるべきでないかと判断せざるを得ない問題が可成り出てくるのである。私はそうした問題を日々報道されるニュースを素材として私なりに考え、私のク考をまとめていた積りである。最近、素材であるべきニュースが単なる素材でなくなつてはいるが、私の考えに近い善の知識人の論説を無意識に探している私自身に気が付いた。自分の考えをまとめる事をさぼつてゐるのである。これでこのところ毎日いららす理由が判つた。つまり腹の立つような論調ばかり読まされては黙然とせぬ筈である。どうやら最近の私は自分で大事件についての考えをまとめる事をやめてそれを代弁してくれる知識人を探していたのである。

これはまことに奇妙な現象である。そしてまわりをみてみると、この奇妙な現象の余りに多い事に気が付いた。正直なところ私はいま仕事で面白くて仕様がなバルンス・営業部門にいる為、会社のバランス・シートも良く読めるし、損益が自分達の努力で、交つていくのを見るのも楽しい。又、扱ひ商品の関係上、私自身の持つてゐる権限と責任は恐らく他の部門とは比較にならない位大きい。自分の仕事に喜びと生き甲斐のない事程、みじめなものはない、その面では幸せであるといひ切れる。と同時に、幸せである為には私の時間フルに仕事に投入しても足りない程、考え、行動しなければならぬのである。

以上、弁解めくが、これらの事が先の奇妙な現象が私自身に起きてゐる大きな原因ではないだろうか。

戦後二十余年、日本の経済の発展は奇

跡とさえいわれている。特に秀でた経営者が輩出したとも思えないし、特に有効な経済政策が施されたとも思えない。高度な知識と技術と労働力を持つ、一般従業員の層の厚さが大きな原因であると思われる。戦後、国体に寄せられた信頼感、国家に対する愛国心が、企業に対する忠誠心、及び愛社精神にすりかえられていた。犠牲になつたのは愛国心ばかりではなさそうである。物質の繁栄の陰に隠れ、取り残されたもの、それは物を考えるという作業を知識人に委ねてしまつた生活人の無数の存在ではないだろうか。

知識人と生活人、この日本人精神の奇妙な二重構造が、現在のマスコミの偏ばな論調を生み、更にそれが、健康な生活人の皮膚感覚には決して理解出来ない集団・革命に近い将来に必ず実現すると思つた全学連を生じさせてしまつたのではないだろうか。

知識人というものを具体的に考へてみると、学者、評論家、作家、教職に従事する者、ジャーナリストそして大学生も含まれる、私は考へてゐる。従つて多くの生活人は、私は知恵人であつた筈である。その為私は知識人と生活人が単純な思考分業を行つてゐると思つた。生活人の健康な感覚は謙虚に知識人の思考を取り入れはするが、知識人は決して自分の肉内である筈の生活人の感覚を理解しようとしない。これでは既に分業をする筈の知識人としてさえ、その資格はないのではないが、生活人は無意識ではあるかも知れないが、自らの時代と民族の宿命を素直に感じとり、実践してゐるのである。これらの実生活を正確に把握しようとする知識人は既に民族にとつて有害なる啓蒙者でしかない。これ

らの実生活を時と場所を超越して昇華させるのが知識人の職務ではないのだろうか。

知識人、特にジャーナリズムは、自分の思考に合せた実生活のみをビック・アップするのではなく、幅広い健康な生活人の感覚をしろとうするべきである。

生活人は決して単純な思考分業をしてはならない。報道のうち、何が真の素材であるかを発見する力を持ち、更に知識人にたよることなく、自分の考えをまとめる努力をまず行うべきである。

(昭和中央大卒・三愛石油)

「五箇条の御誓文」

磯貝保博

「明治百年」ということで、昨年から再び「明治」がマスコミを中心として騒がれ始めた。そして様々な形でそれが取り扱われている。そうした中で、私にとっては「明治百年」が意外にも、非常に身近なところにあった。そのきっかけを与えてくれたものは、昨年、私の祖父が新潟県小千谷市で行なわれた、戊辰戦後百年忌に招待され、その時持ち帰った小冊子であった。その小冊子には戦死者名簿と戊辰戦役略史が記載されていた。

当時、私の曾祖父は長州藩干城隊の分隊長をつとめていた。そして——明治戊辰年七月二日、古志郡福島村水門にて戦死、年二十七才——略史によれば福島村水門附近は激戦地であったという。この簡単に記された曾祖父の記事を読みながら、言いようのない感慨が胸にこみあげ

てきた。こんな事が直接の契機となって当時の様子を知らたい気持ちになった。ところで、こうした身近な関心事以外に「明治」について考えてみたい理由がもう一つある。それは、長い日本の歴史の中で今日ほど「国是」の喪失してしまつた時期はないのではないかという憤りからくるものである。国会に於ける与野党の防衛問題論戦、さらには倉石発言や教科書検定問題等々に関するマスコミや知識人の言動を見ているとそれは「国是」を同じ日本人として共通な基盤に立てて考えることのできなくなつてしまつた今日、それは、同時に、日本の国民同胞

の喪失につながる問題でもある。今回、特に五箇条の御誓文を読んでみたいという気持ちの底に、こうした問題に対する言いようのない憤りを少しも明確にしたという気持ちがあった。

ご承知のように、慶応三年十一月九日、王政復古はなされた。時の新政府の急務は第一に関東平定、第二に外国との交際をいかなる形で行なうか、第三に「国是」を一定し、新政府の内治・外交に対する方針を中外に宣明することであつた。少なくともこの三点は当時の改革推進者にとって共通の心事であつたと思れる。しかも、その改革はいまだかつて、彼らを経験したこともない未知の問題ばかりであつた。それだけに、当時の改革者にまづもつて必要とされたものは大いなる気魄であつたと思う。五箇条の御誓文こそは、正に彼らのそうした気魄の中から考えられて出てきたものに違いない。

五箇条の御誓文については、由利公正が草案し、福岡孝弟がこれに手を加え、木戸孝允が大成したものと考えてよい。

この間の事情については詳しく述べれば長くなるので割愛したいと思うが、ここに一つだけ簡単に記しておきたいことに、最初の草案者である由利公正その人の思想の中に生きていたと思われる横井小楠という人物のことである。彼は北畠親房の神皇正統記を愛読し、自ら南朝史の編述にも著手していた。そして彼の最も仰望したのは楠公父子であつたという。明治の時代精神を形成した源の一つに、こうした人がいたということは意味深いことに思える。

- 一 上下心を一にして、盛に経論を行ふべし
- 一 官武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして、倦まざらしめんことを要す
- 一 旧来の陋習を破り、天地の公道に基くべし
- 一 智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし

我国未曾有の変革を為んとし、朕躬を以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯国是を定め、萬民保全の道を立んとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ

さて、あらためて五箇条の御誓文を当時の事情に心をかよわして読み返してみれば、これが天皇絶対主義の表明であるとか、さらに明治維新がブルジョア革命であるとかの、いわゆる歴史の評価がいかに曲解されて意味づけられているかわかる。つまり、五箇条の御誓文の性格は、最後の部分的に的確に表現されている。それは天皇みずから天地神明にお誓いになられたものであつて、決して百官公卿諸侯の代表者であつたか、国民の上

な天皇の姿勢ではなかつた。それは、同時に出された五箇条の御誓文の注記ともいうべき御宸翰をみればさらにあきらかになる。「今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日之事、朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立ち古列祖の尽させ給ひし跡を履み、治蹟を勤めてこそ、始めて天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし。……」とあるをみるとかがわかると思う。

天地神明に誓ひとある言葉は決して軽々しく判断できるものではない。この言葉のもつ意味内容がわからなければ、恐らく日本の長い歴史伝統の中で、日本人が一体何を守り何を伝えようとしてきたかは理解できないと思う。それだけに今日の私達の感覚から、この言葉が次第に理解しにくいものになつてしまつた事実は本当に憂うべき問題だと思つた。そして、今日の「国是」喪失も、決してこの問題と無関係ではないように思えるのである。

「戦後二十年にかける」とはある進歩的文化人が言った言葉であるが、「国是」は定まるはずがない。日本の長い歴史を通じて、私達の祖先が心の中で大切にしてきたものを正しく伝えようとする姿勢がないかきり、それは不可能だと思つた。御宸翰にもあきらかのように、五箇条の御誓文が、当時突然として作り出されたものではなくて、日本人が辿つてきた幾千年の歴史の心の中から生れ出たものであることを私達は深く心にとめて読むことが大切だと思うのです。

(昭和中央大卒・講談社)

昭和四十三年の

慰霊祭、執行

にわかに秋めいた去る九月二十一日、飯田橋の東京大神宮で、今年も恒例の慰霊祭が厳かに行なわれた。この祭典は、私たち「しきしまのみち」につながる同統の友らで、昭和六年以来、執り行なってきたもので、当時わずか三十才でこの世を去られた黒上正一郎先生の御霊をお祀りしたのが最初であった。その後、先生のお教へにつながる同信師友の物故者あい続き、またさきの大東亜戦争で、あまたの戦死者を出したのも、そのみたまも、あわせお祀りしてきたものである。今年も、御遺族をはじめ、本会顧問の太田耕造先生、亜細亜大学教授井上孚磨先生、城西大学教授松田福松先生そのほか在京者、五十余名の御参会を得た。また全国からの献詠は、一四〇余首にも上り一つ一つ神前で朗読された。こゝには、紙面の都合でその一部しか掲載出来ないのが残念であるが、当日の盛儀をお想ひいただければ幸いである。

☆

東京 高木 尚一
夕闇の巷をゆけばたへがてに神のまもり
をひた祈るなり

岐阜 奥村 松枝
夫は逝き娘らは嫁きてわれひとり戦死せし
息子をたゞに恋ふ日々

熊本 河崎 昇
兄としてたゞ祈る弟のみたまやすかれと
祈る真心

東京 勝田 文子
時々の夢物がたりに花さかせよるこぶ親子
ふしぎなりけり

東京 松吉 基順
国のため散りにし兄と思へども恋ふる心

のやみがたきかな
神々の安らに坐しこれの世の悲しきさま
を守らし給へ

遠子 花見 達二
かくり世とあらはにの世と往き来してた
めしもあらぬたのしみをする

東京 井上 孚磨
とこよゆく世のさまみればたゞかひてた
ふれし人のいやしたるべ

埼玉 松田 福松
三井甲之先生の詩歌論文集をくりか
へしよみまつりつ

中野 岡村 誠之
いまは亡きわが師の君のくさくさのみ文
たふとしこの時にしも

伊勢 幡掛 正浩
年毎にわが恋ふらくはまさりつつはるけ
くも亡友はなりにけるかも

東京 中村 武彦
秋風に友のみたまを祭る日は旅にありて
もおろがみまつる

東京 石井 良介
神代ゆもあゆみ来りしまさみちを友らい
よいよたたかひすすむ

東京 田中 米喜
雨晴れて空久々に澄みわたりみたまのか
たらひ聞くが思ひす

東京 伊沢甲子磨
菊香る秋の朝は亡き志士の心を偲び茶を
たつるなり

名古屋 高橋 鴻助
おぞましく世の乱るればけふまつるみ霊
いかにといやしぬばるゝ

東京 桑原 暁一
みたまたちみくにまもらせしれもののは
びこるみにまもらせたまへ

黒上先生のみ墓をたづねて
ありましゝ日に遇ひ得ざりしわれなるに
親しき人に遇ふがこゝちす

東京 今井 照也
なき人の目のかゞやきも口の端のゑみす
らさだかに想ひ出づるかな

東京 三浦 貞蔵
み国ぶり復へらむ御代をねがひつゝ露れ
し友らのいのちかなし

長野 宮脇 昌三
生き残るものら集ひて魂まつる同信相統
を今のうつつに

長崎 脇山 良雄
七〇年憂れたき年も遠からず天なる友よ
力そへたべ

熊本 瀬上 安正
たたかひつたふれたまひし師と友をひと
しは思ふ秋は来にけり

平塚 福岡 政夫
おもひまどふわれを導き広前にいたりし
友らいまはるまさず

大阪豊中 岸原 重二
田所大人のみにたまに
死の床に坐り直して述べられし君のみこ
とばひにに偲ぼゆ

富山 広瀬 誠
鳴きしきる虫の声々いや早く迫りくるか
も風さわぐ夜を

香川小豆島 高橋 皆雄
さわやかに澄む秋空をはるかに東の方
ををろがみまつる

鹿児島 川井 修治
この友ら生きてしあらば今の世をいかに
おぼさんこのくだつ世を

長崎 小泉 一也
友らつどふみたままつりのしのびつゝか
なしきいのちを思ふこのごろ

鹿児島 小川 幸男
火の国のますらをふりをそのまゝに散り
に友の面わすれず

佐賀武雄 毛利 潮
先達の行き給ひにしこの道ぞ大和島根の
命を捧がむ

長崎 田川美代子
み国守るみ祖のみ魂を安けくもなぐさめ
まつるはいつの日ならむ

福岡 田村 潔
師のみ姿まさ目に見えねどしきしまのみ
ちふみゆけばあふ心持する

富山 岸本 弘
胸内に寂しき思ひつゝのるとき太子の御本
ひもときて読みぬ

福岡 田中 利一
師の君のころのまことしのびつゝ幾世
わたりて読みつきゆかむ

編集後記 ことし早稲田を卒業して八幡製鉄八幡勤務の今林賢郁君が編集に参加しました。新入社員で多忙の様ですが、だんだん積極的取組むはずで「大東亜戦争を見直そう」本号掲載の名越君文中にあるやうに、同名の表題による同君著書が最近、原書房より出版されました(新書版二二二頁・定価三〇〇円)各地の遺族会からの依頼講演を内容としたもので、どんなレッテルを貼られようとも大東亜戦争の中に生き抜いた真実だけを、伝えなければならぬ、数百万の英霊のためにも、これから生れてくる無数の子供たちのためにも、とはじめに誌してあります▼亀井、柴田、磯貝三君の文章は「国文研若いグループ合宿記録」と題する冊子から転載したものです。今年二月若い会員十数名の合宿で行はれた研究発表と詠草の記録で、野間口行正君の編集発行になるもの。掲載されてゐる十五人の発表にはどれも、大学を卒業し社会に入つて間もない人達の、経験の中から真実を追求する姿勢がうかがはれ、一国民としての庶活が偲ばれるものばかりでした。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州→東京←全国)
 東京都中央区銀座
 7-10-18 柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南都町25-3 宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間360円

黙過できない暴走と怯懦

一 全学連騒乱と東大問題

十月廿七日(日曜)の政治座談会(NHKテレビ)では、今回の新宿暴動事件に対して自民党は騒乱罪の適用を速きに失した位と云ひ、民社党は遺憾乍ら賛成せざるを得ないと言へ、公明党は問題はあるが一応消極的承認といふ意志表示をし、社会党、共産党は反対であるとなし、共産党に至っては騒乱罪そのものをさへ撤廃すべしと主張した。

我國の国政担当の議員諸氏否公党自体の政見政策の此の大きな分裂不統一は、実にその儘国歩艱難、祖国の危機を裏書きするものである。

全学連中核派のリーダー秋山某の著書によれば、学園内のあらゆる問題をベトナム反戦、基地反対、安保放棄闘争(一見ヒューマニストの使命の如き錯覚を与へ易い)に結びつけ、集団暴力を以て警察・自衛隊その他の現状維持勢力を打倒し暴力破壊の革命を施行して政権奪取の尖兵たらんとする決意を示し、之こそ現代青年学徒に課せられた聖なる使命なりと

盲信してゐるのである。この盲信から来る暴走は、マルクス・レーニン主義を信奉しマルキシズムを唯一絶対最高の真理と思ひ「資本論」や「国家と革命」等をバイブルとしてゐる社会党、共産党と軌を一にすることは当然の事であつて今更弁解の余地はない。山形県上之山市に於ける約十年前の日教組大会の席上、志賀義雄共産党代議士は、「あと十年日教組が此の運動を堅持し強力に押進めるならば、やがて諸君の教へ子達は日本変革に起上つて大きな役割を果すであらう。」と日教組を礼讃激励したが、果して今日全学連暴動となつて花咲いてゐることは注目すべき事実であつて、実に青年学徒を動かすものは教育に在りと言ひ得るのである。

一國の興亡が教育に在ることは自明の事であるが、我國は終戦後、この教育に鋭いメスを入れられ、教育勅語の禁止を始め痛ましい歪曲を受けたのである。之等の事はアメリカ進駐軍の統治下に在つて

は万止むを得ないとしても昭和廿七年四月独立講義の発効後は、国民自身の自發意志によつて回復せらるべきものであつたのであるが遺憾乍らその復元能力に乏しく今日の重大時局を馴致するに至つたのである。これは超国家主義者といふ名の下に公職追放処分を強行したアメリカの日本弱体化政策の線に沿つて、国立公立大学の教授陣にマルクス主義信奉者が布石され、爾來固陋たる基盤が築かれ巧に学生を教育指導し又操縦しつゝある為でもあつて、此事は今春鹿兒島県に於ける明治百年記念祝典(皇太子、皇太子妃兩殿下を迎へての)に対し国立鹿大の教授陣から九十余名の反対声明署名者を出した一事を以てしても明瞭なのである。この様な教育界に於けるパチルスの存在の横行跋扈が常識の如くなつてゐることは、即ちマルキシズムを指導原理とする日教組といふ存在が依然として教育界の痛として猛毒を流してゐること同一現象なのである。

我國に於ては百二十年も前の共産主義思想理論の超克が極めて不十分不徹底であつて、マルキシズムによつて染脳された者跡を断たず、その魅力圏内に彷徨ふ者は教育界に於て予想外に多く為に教育界の後進性は甚だしく、今日見るが如き低調混乱ぶりを曝露してゐるのである。今日共産主義の没道義、非人間性、非文化性に就ては却て逆に共産圏内部の自由化の胎動となつて現はれ、ハンガリー、チェコ等の大矛盾となつて爆発し、弾圧の嵐が吹きすさんでゐるのであるがソ連軍のチェコ進駐は勿論中共の文化大革命

と雖も共産主義内部の深い矛盾、従つて反革命への脅威をさへも彼等が鋭く感じつゝある証査なのである。

昨今東大の実情は全く憤激に堪へない。之等の紛争に対処する教授陣の姿勢、特に学長の態度に至つては哀れむべく悲しむべしと云ふよりも寧ろ唾棄せらるべきものであり、実に多くの害毒を流し青年学徒をして益々道を誤らしめつつある。それは第一にマルキシズムに対する歴史的価値判断の不正、その発想法の誤謬(特に唯物弁証法の欠陥)に対する無批判或は追従等到底世界の文化進運に寄らず得べくもない理論的に信念的にマルキシズムを超克することなく、文教の重大責任の地位に在ることは時代錯誤の尤なるものであり、最も大きな邪道でさへある。第二に大学の自治に就ての正しい把握識見なく、安易に治外法團的な意識に便乗して学生に臨む怯懦な心情こそ最大の病根である。

元來日教組幹部の指導方針が革命を指向して居り、その影響下に育成された子

目次

黙過できない暴走と怯懦	関根 康弘	(1)
のりなほし「明治百年」	関 正臣	(2)
友松の記	桑原 暁一	(6)
東大紛争の中にあつて	石村 善悟	(7)

弟の中の理知にたけた者がエリートとして大学生に選ばれるのであるが、現今の大学側の受容れ体制や講義内容或は教授陣の教育態度を以てしては既に全学連式の成り行きは寧ろ当然の事と予測されるのである。

警察権の介入を蛇蝎の如く嫌ひ極力排撃しつつも自ら何等自治の能力なく学園外的一般庶民に多大の災害を及ぼしても恥づることなく、時に自らの権威を放棄して機動隊の導入を要請するなど余りにも無責任であり身勝手である。或は団交に応じて大衆の軍門に降り何等の覚悟も気魄もなく世間に対する申訳的な泣事を並べ、立入捜査の申入れを事前に学生に連絡する約束をするなどは如何なる詭弁を弄するも卑劣なる自己を証明するだけである。殊に一旦良識を以て吟味議決した苦の処分を撤回するに至っては、その為す所全く支離滅裂自ら墓穴を掘るものである。しかも今更に及んで辞職を以て責任を取るもの如き姿勢を示さうとするのは、社会を偽瞞し、力を恐れて一身の安全を巧みに計るといふ所謂進歩的文化人の姿を露呈したものであるが、これこそは学生に対する最大の媚態であり、無法の暴徒を黙認肯定したものであり、多数の暴力を愈々助長せしめるものである。誠に斯る卑怯愚劣なる一連の所業が最高学府を脊負ふ者の実態実状であることは日本の一大不幸であり痛である。終戦後の総長学長等の一貫した所信や態度は所謂占領憲法の礼讃とマルキシズムに對する怯懦と媚態であった。この様な教育界の思潮が祖国の本質価値、伝統の文

化内容を尊重する筈はなく、戦勝国の一方的な極東軍事裁判に阿附しては祖国を侵略者呼ばはりし少国民に前科者意識と奴隸精神とを植ゑつけて来たのである。敗戦の責任を問ふなどといふ形で巧に国内分裂を策する売国理論が民主主義、反戦、平和等々の美辞麗句を並べ宛も國家社会の平安を齎すものであるかの始き仮面をかぶって罷り通るなどは、日本の恥であり不幸であると共に全世界の爲にも黙過し得ないマイナスである。

隣邦中共に於ける文化大革命のアカギは日本の共産革命によって起死回生し得

るときへ云はれる。今日、日本の解放を主張し内政干渉のあらゆる謀略を用ひて、迫りつゝある一九七〇年に暴力革命を切望し真剣に画策しつゝある者は北鮮国と呼応し、日本の破壊と暴力革命を企図し又日常闘争を通じて実践しつゝある思想運動に対し、あらゆる拒否応答を展開し、天地容れざる不逞の思想行動を壊滅せしめねばならない。

皇祖発祥の地、霧島山脈の雄大な山麓に集ひ日本入として正しく生きる道を求めて四泊五日の合宿研修に参加した大学

のりなほし「明治百年」

閣 正 臣

一、スツキリしなかつた其の日
十月二十三日の東京地方は朝から雨で、一口中スツキリしなかつた。其の日は「明治百年記念式典」が行はれた日だった。ところが政府は二十八日の新聞に「明治改元満百年を祝う明治百年記念式典は、さる十月二十三日、東京の日本武道館で盛大に挙行されました云々」と述べてゐるから、行事が成功したと思つてゐるらしい（総理府広報室の「明治百年」シリーズ六十七）。

私は此の行事に對して深い関心があつたので、当日の夕刊を五種類（朝日、産経、東京、毎日、読売）買入れて読みくらべ、式典の模様を頭に描くことが出

来、式典の規模・構成は確かに盛大だったと想像する。然し私は、政府が何故「改元満百年」を「盛大に」記念しなければ成らなかつたのかといふ事が未だによく分らない。それは当日の天気やうにどうもスツキリしないのである。

当日の式典は、毎日新聞以外の各紙が一致して報道した通り単に「政府主催」の——政府のヒトリヨガリの——行事にしか過ぎなかつたのか。東京新聞の克明な報道、産経新聞や毎日新聞の好意的な記事を読んでも、どうも盛上りが感じられなかつた原因は、政府の捉へ方の曖昧さにあるのではないかと思ふので、そのことから述べることにする。

生諸君三百数十名と共に祀の庭を選びヒモロギを樹て、日本のためにその生を捧げた祖先同胞の靈を迎へて敬修された、あの夜空の静謐の中で慰霊祭の誠に莊嚴な式典を今回想しつゝ祖国の非常な時、ただならぬ有様を目に浮べ大方諸賢の御健闘を祈り、全国の同胞同志の奮起を切に祈念し期待する次第です。

大いなる時は来りぬ天翔り国翔りして御稔威仰がむ
たゞならぬ時を迎へて御民吾等神代の息吹いぶき放たむ
(鹿兒島高校教諭 関根康弘)

(一)「百年間」と「百年前」とを混同してゐるのではないか。

首相は式辞の中で
西欧先進諸國が、産業革命いらい三百年かかつた近代化を、われわれ日本人は、百年間で成しとげました(中略)この百年の苦難の歩みのなかから、われわれは多くの教訓を学びとるとともに、日本国民の英知と勤勉と活力に大きな誇りをもつことができます云々
と述べてゐる(産経新聞)。

近代化を達成したことがそれ程めでたい事であるならば「近代化達成記念式典」とすれば良いわけで、何も「明治百年」と銘打つ必要性もない。一体「百年間」を「記念」するとはどういふ事なのであらうか。
首相はこの「百年間」を近代化(首相の定義は「産業の発展」といふことらし

い」といふ観点から高く評価してゐるが「百年間」に対する評価は実は種々雑多なのである。

記念といふのは、特定の事件に就いて言ふのが普通なのである。我々が嘗て記念した紀元「二千六百年」にしても、それは、二千六百年前に神武天皇が即位遊ばされたといふ事実を記念するものであつて、その理念が今も続いてゐるといふ国民的合意があつたからこそ、時の政府が主催したかどうかに関係なく国民的行事と成つたのである。記念は飽くまでも過去における特定の事件を回顧するといふことが始まりであり、その回顧を同じくするといふことに終るのであつて、時間的経過そのものに本来的の意味は無

い。然るに政府は「明治改元」を念頭におき乍ら実際は「百年間」を対象としてしまつた為に、非協力・擲論乃至抗議までを招来してしまつた。政府にとつて不本意であり而も受け入れざるを得なかつた之らの事態を招いた原因は「前」と「間」を混同したことに胚胎してゐる。混同、これをゴマ化しといつてもよい。(一)「改元」と「維新」とを混同してゐるのではないか。

次に、政府は一応百年前を記念すつつもりであつたと解釈してみよう。そしてその事件を「改元」にしたわけである。確かに「明治改元」には、それ迄の改元には全く見られない重大な意味があり、即ち「今ヨリ以後、旧制ヲ革易シ、一世一元、以テ永式ト爲ス」といふ詔書に見られる所謂「一世一元」といふ制度の始

めであつたので、これは記念すべき事件である。

しかるに、報道された首相の式辞では、何もそのことに触れてゐないし、どの新聞記事も一向触れてゐないところを見ると、ジャーナリズムも政府も「明治改元」に対しては実は始めから何の関心も無かつたと断ぜざるを得ない。いはゞスローガンと実行との不一致があつたわけで、これでは盛上らぬのが当然である。今年が明治百年であると同時に、安和一千年であるのだから、寧ろ安和千年を記念した方が十倍も重みがあつたらうと皮肉を言つても見たくなるわけだが、安和一千年を採り上げずに明治百年を採り上げたのは「安和には無いが明治には有るものを」と言ふことであらう。それは何かといへば「維新」以外にはない。維新が無かつたら日本は近代化されなかつたであらう(衆議院議長祝辞は之に触れてゐる)。然し今日、維新といへば後向きで反動で右翼だといはれるのが一般である。政府はそれを恐れたのに違ひない。これは混同ではなくてゴマ化してゐる。

(二)此の様に見ると、当日の式典の内容はまことに空しいものになつてしまふ。

私は推察する、政府の発案には「明治時代は素晴らしかつた」とする前提があり、それを此の際、祝はうとしたのに違ひない。明治時代を全体として素晴らしいと見ることについては多少の異論があるが、或る一点に就いては確かにさう思ふ。其の一点を政府は採り上げるべき

であつた。私は、意識的な反対者に対しては身をかはし、善良な一般国民に対してはポーズでゴマ化すといふズルサを見る様な気がして、やりきれぬ思ひである。

昭和四十三年の今年、記念すべきものは「改元」後の百年「間」ではなくして、百年「前」の「維新」なのである。

二、百年前の維新を偲ぶ

百年前の我が国情を概観してみると、次の様であり、内戦に明け暮れたと言つてよい。

- 1・3 (慶3・12・9) 王政復古大号令
- 27 (4・1・3) 鳥羽・伏見の戦
- 2・8 () 天皇元服、大赦
- 3・8 () 東征大総督進発
- 29 () 勝沼の戦
- 4・1 () 鉄舟・隆盛会談
- 5 () 海舟・隆盛会談
- 6 () 江戸開城談判
- 6 () 五箇条の御誓文
- 5・3 () 江戸城受渡
- 11 () 宇都宮の戦
- 6・22 () 大総督江戸入城
- 7・4 () 奥羽越列藩同盟
- 8・12 () 上野の戦
- 9・3 () 長岡の戦
- 9・3 () 榎倉の戦
- 15 () 江戸、東京改称
- 15 () 二本松落城
- 19 () 江戸遷都の布告
- 8 () 猪苗代陥落
- 10・4 () 若松城包圍
- 12 () 明治天皇即位
- 23 (明1・9・8) 明治改元、大赦

- 11・4 () 20) 東幸、京都発軔
- 6 () 22) 若松落城
- 26 () 10・13) 東京着軔
- 12・8 () 25) 箱館の戦
- 15 () 11・2) 東征大総督解任
- 18 () 5) 蝦夷松前の戦

そして、此の時期を振り返り乍ら「幸福だった」としみる、思はれることは、この内戦に外国勢力が介入出来なかつたといふ一点である。双方が死力を尽くした当時の内戦に、外国が介入したとすれば、日本は今日英仏何れかの植民地に成つてしまつてゐたかも知れず而も介入の可能性は極めて強いものがあつたのである。

例へば百一年前の八月二十六日(慶三・七・二七)イギリスの外交官アーネスト・サトーは、大阪に於ける会談の際、公使パークスに代つて、西郷隆盛に対して次の様なことを云つて居る。「幕府の後楯に成つてゐるフランスに對抗できる強国は我がイギリスである。我が国と同盟しておかないと大変なことになるだらう。フランスが出兵する時イギリスも「警護のため」と称して出兵すればフランスと雖も引込むであらう。この件につき御相談があれば承る。」(註一)又その五六日後、即ち百年前の一月十九日(慶四・二・十二)フランス公使レオン・ロッシュは、江戸城に慶喜を訪問して次の様なことを云つて居る。「鳥羽・伏見で敗れてここに引揚げたまま何もせずに敵の制裁をお受けなさることは何共残念である。御先祖に対しても申訳があるまい。我がフランスは断然一瞥の

力をお貸しするから是非再挙をお図りなさい。」(註二)——

之等、英仏の申入れに対する西郷と慶喜との回答を読んで私は無限の感動を禁じ得ない。二人の回答は実に次の通りであった。

日本の国体を立て貫きて参る上に、外国の人に相談いたし候面皮(めんぴ)顔)はこれ無し(西郷)

日本の国体は他国に異なり、たとえいかなる事情ありとも、天子に向かいて弓ひくことあるべからず。祖先に対しては申し訳なきに似たれども、予は死すとも天子に反抗せず(慶喜)

当時の内戦はやがて戊辰戦争として激化拡大して行くのであるが、その首脳部(西郷は戊辰戦争に際し大総督府参謀となった)に於ける、この不思議な連帯感。討幕といひ佐幕といふ主義の相違を超えた遙かに深い根底に於て、日本人としての自負や、国家——その象徴としての皇室——に対する自覚は共通であり、半固断然たるものがあつた。このことに對し、今日、日本人たるものすべては如何に感謝しても感謝し足りることはない。

明治改元以後の百年間を「栄光の世紀」といふのは良い、「汚辱の百年」といふのも自由である。然し乍ら、栄光の世紀を齎したものが単なる英知や勤勉ではなかつたことは確かであるし、又英仏何れか一方——といふことは必然的に双方——が介入してゐたならば、我々はこの世紀の評価(それが栄光であれ汚辱であ

れ)を「日本語で発表する自由」を喪つてゐたであらう。その例証を私は同時期のバトナムに見る(註三)。幸ひなる哉我々は立派な先輩を持つてゐた。

對立する両者が共に崇敬してゐたものは何であつたか。そして又其の両者が、自分の生命のみならず祖先までも賭けて守らうとしてゐたものは何であつたか。それを明らかにすることこそ「明治百年記念式典」の焦点ではなかつたか。そして、そのことを百年前にいち早く闡明したのが維新である。

両者の姿勢を見ると、維新は、討幕側にとつても佐幕側にとつても——といふことは全国民によつて——内的に支持されるといふ形で発足したといひ得べく、それはさながら民族生命の奔騰であつたと云へるのである。其のエネルギーが、産業の発展を含む国力の進展を齎したのである。

私はここで「国運鬱然として興隆するに至」つた(明治天皇紀、慶応四年三月十四日の記事の末尾)ところの、御誓約の情景を見たいと思ふ。御誓約こそは維新の実体であり、世に「五箇条の御誓文」として知られてゐる。それは、純然たる神道祭式をもつて、百年前の四月六日(慶四・三・十四)に次の通りに行はれた。

(一)祭場の様子

京都、紫宸殿の母屋(おもや)の床上が祭場である。正面に、東面して神籬(ひもろぎ)を立てて神座としてある。神座の前に神饌用の机が二脚。神座にむかつて右手前に、南面して玉座。玉座は、右

に斜に神座に向ひ、四季屏風で囲んである。床には、筆墨が用意してある。

(二)祭典の次第

午の刻(十二時) 群臣着席。全員衣冠。母屋には公卿・諸侯。

南廂には殿上人(てんじやうびと)

東廂には徴士等。一月十七日、三職七科の制が定められた時、徴士の名称がある。二月三日に三職八局(総裁局、神祇・内国・外国・軍防・會計・刑法・制度の各事務局)の制に改められ、徴士は、参与及び各局の判事等に任せられることになつた。徴士は、諸藩士及び草莽の士であつて才能がある者の中からえらばれる。因みに西郷隆盛は徴士の筆頭で、参与に任せられてゐるので、今日は当然此所に着席すべきところであるが、一昨十二日に、東征大総督府参謀の一員に任命せられて従軍中につき欠席。

塩湯・散米による修祓があり、神祇誓(かみ、長官)白川資訓が着席。

降神。白川長官が奉仕して、天神地祇をこの神座にお招きする。

献饌。白川長官以下が奉仕し、米(飯?)・酒・餅・海魚・川魚・鳥・野菜・果物などを十台の三方によつて、神饌用の机に供へる。

出御。宝算十七の明治天皇が三条・岩倉(何れも副総裁)、中山忠能・正親町三条実愛(何れも輔弼)らを隨へて玉座につかれる。時に申の刻(十六時)。総裁有栖川宮熾仁親王は

当然御隨行なさるべきところ、二月九日、東征大総督に委任せられ、同十五日一速ヤカニ掃摺ノ功ヲ奏スベキ旨の勅令を蒙り、同日京都御進發、東征中のため御欠席。

祭文奉上。聖旨を蒙つて三条副総裁が奉仕(註四)

御拜。天皇玉座を立ち、親しく幣帛の玉串を、玉串机の上に立てて供し、神座を拜して祈念をこめ給ふ。

御誓文捧読。三条副総裁が、奉勅して奉仕。この御誓文は、有栖川宮熾仁親王(熾仁親王の御父君で前・神祇督)が、昨日清書して天皇のお手許に差上げておいたものである。捧読の情景は明治神宮外苑「聖徳記念絵画館」に壁面十二番として掲げてある。

誓約署名、聖旨を奉読すべき旨の署名で、その文は(読み下せば次の通り)勅意宏遠、誠ニ以テ感銘ニ堪ヘス。今日ノ急務・永世ノ基礎、此ノ他ニ出ツベカラズ。臣等、謹ミテ誓約ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ、胆勉(びんべん。つとめ励む)事ニ從ヒ、冀クハ以テ宸襟ヲ安ンジ奉ラ

ン。

とある。熾仁親王は御欠席なので二番目の実美から始める。彼は、中央に進み出て、先づ神座を拜し、次に玉座を拜し、次に執筆し「三条大納言」とあるところに「実美」と署名する。次に岩倉は「岩倉右兵衛督」とあるところに「具視」と署名する、その作法は実美に同じ。以下同

し作法で続行し議定の者が済んだところで一且中止。

入御。家来以下扈從すること出御の時と同じ。

誓約署名続行。(熾仁親王を含み、当日欠席した者は後日逐次参内して署名したもので、最終的には、署名者の累計は七百六十七人になった。)撤簾。献饌に準じる。

昇神。降神に準じる。これで祭儀全く終了。時に成の刻(二十時)

群臣退出。

以上で明らかな様に、明治天皇は、当日の最も厳肅な瞬間に於て天地神明の前にぬかづき給うたのである。五事を御自分のこととしてお誓ひ遊ばされたのであった。この事実を見落すと五箇条は単なる道徳律の美辞麗句に成り終つてしまふのである。

凡そ為政者が新方針を打出す時、被治者に面して宣説し布告し其の協力を要求し「期待」するのが通常である。けれども明治天皇におかれては全くさうではなくて、天地地祇の前にぬかづいて群臣と共に之に誓約せられたのであった(註五)そこに我々は為政者の理想像を見るのであり、躍々たる感動を覚えるのである。当日の参列者が署名に当って「死ヲ誓」ったのは、決して単なる形容でなく、実感そのものであったにちがひない。

百年前を記念するのに、其の日として改元の日をえらんだことについては譲つてもよいが、その内容においてこの御誓約のことに触れないことはゆづり得ない

のである。

三、御誓文を拝することの今日的意味

以上述べたことは、百年前のことであつた。然し、御誓約の事情を偲び、五箇条の御誓文を奉戴することが、実は今日只今の問題であることが、我々が昭和二十一年元日に詔書を賜はつてゐることで明らかである。この日読売報知紙は、その第一面中央のやや上部に次の通り報じてゐる。

天皇陛下には新生日本発足の年たる昭和廿一年の劈頭、特に詔書を渙発あらせられ明治大帝の下し給ひし、五箇条の御誓文を体して国民とともに新日本の国運を開かん旨御詔述あらせられた。

詔書

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初國是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、
一、広ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ経編ヲ行フヘシ

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一、旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

勅旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、旧

来ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民萃ケテ平和主義ニ徹シ、教養豊カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ図リ、新日本ヲ建設スベシ(以下略)

今日、人は自由や平和や繁栄を謳歌してゐるが、其の出発点が此の詔書であることを忘れては居らぬであらうか。五箇条の御誓文のことは、この様に今日のであり而も兎角すぐに忘れ勝ちなのである。

明治百年を祝ふのは良い、その場合は御誓約を偲ぶべきである。御誓約を忘れても良い、しかしこの詔書を忘れてはいけない。この詔書を「人間宣言」などといふ世迷言や、詔勅なるが故に「排除」して得々とするやうな増上慢をそろ／＼やめにしようではないか。

今日多くの人が或る空しさを口にしているが、それは神聖なるもの、厳肅なるものを実感し得ない自己神化教の亡者になつてゐることを示すもので、それは又、他とのつながりを断絶して「私」の生活の中に陥つてゐることを示すものである。

明治の始め、それまで個人として又國家として「私」といふ殻の中にせぐまづつてゐたのをやめて「広ク」「公」に目を向けた時自ら潑刺たる生氣が漲り始めたことについては嘗て小柳陽太郎氏が指摘したことがある(註六)そして又、岡潔博士は同じ趣旨について「あなたはあなたの幸福の為に一票を投ずる権利があるといふのではなく、あなたはみんなの幸福の為に一票を投ずる義務があるといふ様に成らなければ日本は良く成らない

と述べてをられる(十月十五日、亜細亜大学「明治百年記念連続講座」の講演)。「新日本建設ノ詔書」に於て陛下は、

形式的でない生々としたつながりを求められた。それは百年前の明治天皇のお心と全く一体である。明治天皇は御誓約当日の宸翰の中で、尊重のみを事とし表は推尊して実は遠ざけるといふ様な形式主義を戒められ「自ら身骨を勞し心志を苦しめ、艱難の先に立つ」と仰せられたばかりでなくその後の四十五年間を通じて之を実行なされた。今上陛下は、現人神と言つてさへ居れば充分だといふ様な形式主義やいつはりを排せられ、今年も亦御自ら田圃に降り立って田植をなさつたと承る。民主主義は戦後輸入の新思想なのではなく、我が皇室に於ては実行そのものなのである。

四、「明治百年」をのりなほす
この様に考へて来ると、
(一)明治百年とは維新百年のことだったのであり、
(二)明治百年は、栄光の世紀でもなく汚辱の世紀でもなく実に天皇の世紀だったのである。

民主主義の体現者とされてゐるリンカーンは、一八六三年十一月十九日——我が維新は一八六八年——ゲティスバーグ演説を次の様な言葉で結んだ。
ここで戦つた人々のし残した崇高な大事業に身を捧げるのが、生き残つた我々の務めである。それは、
(一)その後を受継いで忠誠を尽くす為
(二)戦死者の死を無駄に終らしめぬ為
(三)神のおかけを以て(アンダー・ゴ

（註七）新しい自由（フリーダム）をこの国に誕生させる為

（四）人民の人民による、人民のための政治（ガバーンメント）を地上から絶滅させぬ為

である（註七）

アメリカにおける戦死者・ゴッド、日本における戦死者・天神地祇——すべてこれ己を空しくしてゐる無私存在として天皇といふ具体的な人格に仰いでゐるのだが——を忘れる時国家は崩壊して行く。

明治天皇が維新の前後に於て神祇をまつり戦死者を弔ひ給うた回数は極めて多く、百年前の一年間だけでも夫々十回前後に及んでゐる。又今上陛下は、敗戦のことすら神宮に奉告し給うたと承る。

政府はやがて明治百年を記念して恩赦を行ふであらう。私は無定見な恩赦が齎すべき国内の動揺を憂へる。生きてゐる者、或ひは自分のことしか考へなかつた者に対する恩着せ以外に為すべきことを考へ及ばないのであらうか。（四三・二九）

（註八）

一、昭十六・八・二十、大日本文庫刊行会刊「勤王志士遺文集（二）」二五六ページ西郷の書翰による。西郷の回答は原文のまま。尚、昭三五・十・五、岩波文庫、アーネスト・サトー「一外交官の見た明治維新」（下）三九ページに西郷がこの日のことを大久保利通に書き送った同趣旨の手紙が翻訳収録されてゐる。

二、昭四二・十・十、平凡社東洋文庫一

昔夢会筆記」二九ページ慶喜公回想談による。慶喜の回答は原文のまま。

三、南ベトナムの現在の国語はローマ字つづりであつて、フランス人宣教師アレクサンドル・ド・ロードが考案したものである。フランス支配下急激に勢力をのぼし、我が明治四十一年には正式に学校のカリキュラムに採り入れられた。これより先、我が明治前一年、ベトナム帝国の柱石と謳はれた藩清簡が服毒憤死した時、最期の言葉は「いかなることもあらうともフランス人と行動を共にする勿れ！絶対にフランス語を学習する勿れ！」であつたといふ。

四、御誓約の祭文の全文

但し原文は宣命体であつて、漢字は総べて訓よみであると共に、特殊な文字もある。

そこで、送り仮名を全部平仮名に改め、句読点を付け、且つ、意味が著しく変らない範囲で漢字そのものも変へてみた。漢字を訓で読むことに変りはないが、わづらはしくなるのでごく一部を除き、振仮名は付けてゐる。

懸けまくも畏き天神地祇の大前に、今年三月十四日を生日（いくひ）の足日（たりひ）と撰び定めて、祢宣（ねぎ）のままに、天下の大政を執り行はむとして、親王・卿臣・国々の諸侯。百寮。官人共を率ゑ連ねて、此の神侯の大前に誓（うけ）ひつらくは、近き頃ほひ、邪者（まがもの）の是所・彼所に荒び猛びて、天下、さやぎにさやぎ、

人の心も平穩ならず。故（かれ）是を以て、天下の諸人等の力を合せ心を一つにして、皇（すべら）我が政を輔翼（あななひ）奉り仕へ奉らせ給へと、請ひ祈（のみ）申す礼代（るやじろ）は、横山のごと置き高成して奉る形を聞こしめして、天下の萬民を治め給ひ恵み給ひ、谷蠟（たにくく）の、さ渡る極み、白雲の、おりる向伏す限り、逆敵対者（そむきあたなすもの）は在らしめ給はず、遠つ祖尊の恩頼（みたまのふゆ）を蒙りて、無窮に仕へ奉れる人共の、今日の誓約（うけひ）に違はむ者は、天神地祇の忽ちに刑罰（つみなひ）給はむものぞと、皇神等の前に誓（うけひ）の吉詞（よごと）申し給はくと申す。

五、誓約は、祭文では「うけひ」と読まれてゐる。ウケヒとは神二祈リテ誓フ

友松の記

桑原 暁一

前稿「白鷺の記」を書きつづつてゐるうちに、^{海北友松}友松のことが頭にこびりついてしまつた。というのは、森脇先生の「桂離宮の研究」に紹介されている「智仁親王御記」（細川家に伝わるという）によつて、友松が親王の許に入入りしてゐたことを知つたからである。彼は親王が桂離宮の造営に着手される六、七年前

コトであり（大言海）記紀神代巻に出て来る言葉である。恐らく人間生活上でこれ以上に厳粛な儀礼はあるまい。

記紀によれば、天照大神はアメノオシホミミノミコトをウケヒによつてお生みになつてゐる。これはウケヒは新しい生命を生むものであるといふ信仰が古来あつたことを示すものと思はれる。誓約を行はれたことは、維新が革命ではなくて復古であつたことの証明にもなる。

六、昭四二・五・二〇、国民文化研究会「日本への回帰（第二集）」二〇八―二一〇ページ

七、昭三二・三・二五、岩波文庫「リンカーン演説集」一四九ページなどがあるが、ここには、広瀬誠氏の教示によつて要約改訳した。

（通稱聖大生部生部）

に八十三歳で亡くなつたのであるから、離宮の造営は彼の与り知らぬことである。しかし親王の芸術的修養の中に、友松の芸術が取り入れられなかつたとは思われない。友松は親王の兄君後陽成天皇のために、新調の琵琶の撥面にキリンの画を描いた、と云われる。その友松が親王の許に入入りしたのは不思議ではない。若き親王は、細川幽斉に歌学を学んだように、この老画家から画を――画技ではないまでも――学んだにちがいない。してみれば、桂離宮にも、どこかに「友松」が出てゐるのではないかと思はれるが、ぼくにはわからない。その中書院二

の間の「竹林七賢」の襖絵、同じく一の間の「水辺樹木と宿鳥」「李白観瀑」の貼付絵などは、狩野探幽一家の画いたものかと云われているらしいが少くともその画題は友松自身の取扱ったものである。このことだけ注意しておきたい。

さて、ぼくは今まで友松を二天宮本武藏が絵の師とした(直接か間接かは別して)という点だけで見てきた。そして両者の絵を漠然と同一水準において考えていた。それは、武藏のほうは実物を見て感心したことがあるが、友松のほうは実物はおろか、写真版でも、できのよくないものにしはお目にかゝっていかなかったであろうし、また一般に、彼は永徳・山楽・等伯等とともに桃山期を代表する画かきだと云われながら、彼等のかげに、なかば、かくれていた観があったからでもある。竹山道雄先生は、京都博物館で友松の「松に孔雀の図」を見た感想を、「これにくらべると、宮本武藏の絵すら、スケールの小さな趣味的な文人画に見える」と述べている。これにはぼくは目のさめる思いがした。そして先生は、「海北友松という大画家があまり知られていないのは、見る機会も少ないし通俗味もないからだろうが、まことに不思議なことである。」と云っている。(「京都の一品」)ぼくは耳が痛かった。

ところで、彼の画の性質を「武人的」と評するのがふつうらしく、ある美術書は「剣画一如」とか云っていた。この点では竹山先生もかわりが無い。そのところかぼくには腑に落ちないので、思いつきを書きとめておく。

彼の父は近江の浅井長政の幕下で、長政が織田信長に亡ぼされたとき、父は一族とともに戦死した。その時分友松は四十一歳であった。彼は幼くして東福寺の喝食となり、画かきとして世に立っていたので一族と運命を共にするのをまぬかれた。彼は武士の血は享けてはいるが武人ではないのである。彼は明智光秀の家臣斎藤利三と親交があった。山崎合戦のあと、利三は斬罪に処せられ、その首は粟田口で獄門に懸けられた。友松は真如堂の東陽坊長盛と謀り、長槍を振って番兵を追っばらひ、利三の首を収めて、真如堂の裏山に葬った、と云う。これを彼の武勇伝としてみるのはいかゞなものであらうか。彼は死物狂いであつたかも知れぬ。腕に覚えがあるからやつてのけたのだ、とは必ずしも云えまい。(友松の墓は利三の墓の隣りにある。今春、雪の舞い散る日に、ぼくは真如堂の墓地に彼をむらした。)またこんな話が彼にあり、そのどれも氣に人らず、悉くこれを返却した。後日氣に入った駿馬を手に入れた、得意になって乗りまわした。という。これなんか、今時の人が、たいていは自動車を乗りまわし、どうせ乗るなら高級車が欲しいと云つたようなものだ。駿馬を乗りまわしたからとて武士的とは云えまい。要するに、彼は画筆よりも重いものは持ったことのない画かきとはちがう、というだけのことだ。彼は平生、「自分は誤つて芸家に堕ちたが、願わくば、時運に際合して武門を起し、父祖の志を継ぎ、子孫に伝えたい」と云つてい

たという。そういう悲歎はあつたにしても、それはあくまで芸家に堕ちた者と言でなければならぬ。芸家でありながら、たえず武門に色目を使い、剣のほうの腕もみがいていた。ということではあるまい。このようなわけで、友松を武人とか武人的とか規定し、彼の画を剣画一如など形容するのはやめてもらいたいと思うのだ。それでは友松は、へたな宮本武藏になつてしまふ。

彼はたしかに武士の血は享けているが、決して武人ではない。もつと広い世界の空気を呼吸していた。宮本武藏が彼に、あるいは彼の面に学んだ、と云うがそれを云う前に、本阿弥光悦が彼に学んだことを云い忘れてはならない。実は、ぼく自身、このことに最近まで気づかなかつた。光悦は画家というよりは、書家であり工芸家であり、また、その裝飾性は友松よりも永徳、山楽のほうに近いとばかり思つていた。それならば、光悦は友松から何を学んだのか、光悦の芸術のどこに友松が生かされているのか、それを見究めることはぼくの力に余る。しかし友松と光悦が同じ世界にいたことだけはまちがいない。友松が智仁親王の近くに在つたように、光悦は親王の王子智忠親王の近くに在つた。そしてその世界は徳川のバーバリズムを寄せつけぬ世界であつた。

以上記しおわつてしばらく経つた昨日(十月二十日)、ぼくは建仁寺をたずねた。竹山さんの本に、十月十九・二十日に友松の画が公開される、とあつたからである。建仁寺の塔頭禅居庵・大中院・靈洞院(僧堂)などを歴訪し、さらに京都博物館をものぞいたのだが、ついに友松に会うことができなかつた。しかしぼくはこれでよいと思つている。ぼくに会つたとて、友松は決してよるこびはしないであらうから。一ぼくはこゝで、日本のすぐれたものに出会つたよるこびを語りたかつたのである。しかしそれは舌足らずでおわつた。(四三・一〇・廿一記)

東大紛争の中にあつて

石村 善悟

(東大文一・二)

医学部の処分問題に端を発した我々東大の紛争は、安田講堂を占拠した一部学生を排除する為に行なわれた機動隊導入を機に全学的規模に発展しました。

この異常事態にかんがみ、信和会での輪説会を行なつていた我々は、クラスの友人達を誘ひ、休み明けの九月二日、次の三つの要旨からなる文書をもって、駒場の学友に訴えかけることにしました。その要旨は、第一に現在問題となつてい

る大学の革新—学生の大学自治への参加—ということではなく、革命の前提に立つてのものではなく、学生の本分と良識から逸脱しない範囲のものでなければならぬ。又、大学の自治への参加—この根本には、自治、特に学生の自治—に対する強い決意と責任感が必要ではないだらうかということ。第二には、教官と学生の双方が互いに信頼し合い、互いに相手の意見に耳を傾けようとする、いわば相互信頼感に裏づけされた対話の雰

困氣をこの学園に復元しようではないかということ。第三にいつときも早くストを終結させ、社会に対しても教官に対しても我々学生は自治の担い手としての立派な責任感を備えているのだということを知らしめようではないかということ。以上の三つです。このアピールに対する反響は様々で、勿論頭からナンセンスときめつける者もいましたが、中にはこの趣旨に賛成してくれ、早速我々の有志のグループに加わってくれる人もでてきました。

一方この休み明けの頃はスト収拾の気運もかなり高く、原理研究会が学園止常化委員会の名で、又二日目三日目あたりからはクラスの有志によっても、いくつかのスト終結を訴えるビラが出されました。そして日本文化研究会の者が中心で開いたスト終結の為の全学投票を要求する集いには我々を含め約五十名の者が集まり討論を行ないましたが、広範囲な意見のまとまりがつかず数日で解散の憂き目にあつたのは非常に残念なことでした。しかし、その中から学部長提案の教養学部学部長会(自治会は拒否)を積極的に推進していくというグループが出、我々も全面的に協力して学部集会開催要求署名運動をおこなうに至りました。ところが二千数百名の署名が集まったにも拘らず教養学部学生自治の最高議決機関たる代議員大会では、これが大差で否決され、ついに実現にいたらないという結果になってしまいました。一般学生とその意見を代表しているはずの代議員大会との間にかくも大きな意識の差がある

ということとは非常に大きな問題ではないかと思えます。所謂一般学生というものは自治ということにはさほどの関心を示そうとしません。ですから代議員を選出する時にも、自分から進んで立候補しようとしなければかりか、誰でもいいからやりたい奴にやらせておこうといった気持ちで選んでいることが多いのです。当然代議員のポストにつく者は自治に積極的な考えを持つ者が多い結果になってしまいます。自分達の自治でありながら、それに対して明確な意識も責任感も持ち合わせないという無関心な学生の多いことがこの紛争を大きくこじらせてしまった一つの原因であると言えるかも知れません。日が経つにつれて学校に出てくる数も減ってゆき、十月も終わろうとする現在では七千名中わずかに千名余りの者しか登校していない状態です。自分の学ぶ大学の危機は顧みず自分一個のことしか考えない者の多いこと、そしてその中に当初いよいよ加減な気持ちでスト賛成の票を投じたものいることに非常に腹立たしさを感ぜずにはいられません。

さて、学部集会が公的に開けないのなら、我々の手でそれにかわるものを作ってみたい。こう考えた、我々が学部長に相談に行く、学部長としても、是非学生と親しく話し合いたいということでした。一部の学生運動家達を中心に双方の意見を交換するのではなく、教授と学生が直接互いの意見をぶつけ合い、そこから真のコミュニケーションを切り開こうという学部集会の意図がここ

に公開討論会という形で実現することになったわけだ。この時までに我々は数枚のビラと立看板により、その意思をアピールし且つ有志の数をふやしてきたわけですが、この討論会には四百名の学友が集まり熱心な討論が行なわれた。力対力の関係でしか問題が解決しないようになりつつある学園の中で、話し合いの中から問題解決の芽を少しづつでも育てていこうとする学友の少なからぬことを確信でき実に心強い気持ちでした。

こういう我々の動きに対し、しばらく沈滞していたそのほかのスト収拾の動きが、十月初め、全員留年の危機を前に再び復活してきました。その一つ大学改革準備会は、それまでの強硬なスローガンを柔軟なものにし、それに基いてストを収拾させようという活動を行なっています。さらに二十クラス程の有志代表が集まり、全学の意思を正当に反映していない代議員の改選を推進するクラス連絡協議会というものを結成しました。現在の協会の責任者を私が任されています。有志の会と同調して活動をやっていくことになっていきます。このように有志の会を含めて現在三つのスト収拾の動きがあるわけ、その支持者は約三百名程のうち実際に活動しているのは五十名前後です。現在のところなか／＼その呼びかけもうまくいっていないのですが、新しい局面が生まれようとしている今、この三つのグループが一体となってより一層の努力をしてゆきたいと思っております。

その正当性をはつきりと言明することなく(かといって黙まっていたという根拠も明らかにすることができず)いい加減な所で引込めようとしていることに端的に表われていると思えます。さらに、教官層の中にこのストを陰にひなたに支持し又それを行なっている学生に迎合する人達が多くあることには、言いようのない憤りを感じずにはいられません。医学部においてスト終結を宣した百十名の有志が、新しく医学部に抬頭してきたという教官達の為には日が続つて孤立化するという憂き目にあつているので、学生に迎合し教育者としての明確な態度すらとれないこのような教官層の存在が、今日の大学を混迷の状態に追いやって大きな因となつていっているように思えてなりません。我々が教官との相互信頼感の復元を訴えかけてもこのような教官がする限り、それもむなしなものとなってしまふのではないでしようか。

編集後記 今月号は関正臣氏の文章で大総代の理に配布されたプリントを根幹にまとめられたよすがが、維新百年の意義を明らかにして、資料としても勉強利用する価値が大きいと思ふ▼本部では今夏合宿教室の参加者全員の感想文集が発刊された。例年の通り在京の若い会員グループが編集の労をとつてゐる。一二〇頁の冊子ながら現在の破壊的混乱の環境にも抱らず、まごころを感じとらうとした若者の偽らざることは瑞々しく、新たな感動を呼び起すものであった▼十一月九・十日福岡で本会理事会開催。13回合宿教室のレポート作成のこと、来年合宿の期日並びに場所の決定、運動方針の策定などを議す▼本会派遣の団長副団長以下学生八名の東南アジア見学旅行団の出港は十二月中旬の予定となつた。

国民同胞

発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←東京→全国)
 東京都中央区銀座
 7-10-18 柳瀬ビル三階
 月刊「国民同胞」編集部
 下関市南都町25-3 宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共)年間 360円

心の拠りどころ

近ごろ思うこと

世界は激しく揺れ動いている。技術の急速な発達が我々の社会生活環境を急激に変えつゝある一方、交通通信手段の目ざましい進歩は、世界の一端で起つたどんな事件でさえも人々をして之を他人事とはさせなくしてしまつた今日、国内国外の様々の困難な問題が容赦なく我々の周辺に迫つて来る。思わざることのつきつきに起り、心のやすむ時とてないのが世の姿であることを思い、之に対処する真の拠りどころを求め心の切なるものがある。

中ソの対立や最近の東欧共産圏に見られるような共産諸国間の多極化軋抗争は共産主義理論の破綻を示し、共産革命五十年の歴史はマルクス主義者が終局理想社会として期待をよせた集団所有制度社会が何ら問題の解決にはならなかったことを教えつゝあるものゝ如くである。また一方自由圏に属する国においても、

高度に工業化された新しい産業社会、豊かな社会の巨大機構と人間疎外の問題に直面して「工業社会体制の諸目的を問ひ直さねばならぬ段階にさしかゝつてゐる」と警告させるに至つてゐる。東西問題はこゝのように、うちに様々の様相と課題を展開提示しながらもなお依然として現下世界における思想政治上の一つの大きな基本問題である。自由共産両圏の接点には南北朝鮮、東西ドイツの冷たい緊張と南北ベトナムの熱い戦火が民族分裂の言語に絶する悲劇を現出している。これら諸々の問題の影響の下に、又各国それぞれの特異要因からの影響も受けて、いまや世界各地に学生運動が起りつゝあり、その動きは容易に捕捉し難いほどに混沌としてゐる。フランスでは之を発端として所謂五月蜂起が勃発したが、日本においては敗戦後の甚しい思想混乱の影響も重なりあつて最近に至つては見るも

無残な様相を呈するに至つた。

以上はいま我々が直面している数多くの困難のうちの幾つかを点描したまでである。現代は正しく困難な時代であるが、しかし之は決して現代に限つたことではないことは言うまでもない。人類の歴史は人々がその時代々々の困難に如何に対処して生きて来たかといふことの積み重ねであるとも言える。人間の文化遺産とはその時々々の苦闘の成果であり記念塔であるとも言えるのではなからうか。そしてその中心課題はつねに人々如何に生きるか、その時々の場所における自己、個と全、個人と社会国家との関係であつたといつてよいであらう。そしてこのことは現代においても亦少しも變るところはない。この中心課題を先人苦闘のあとを尋ねつゝあらためて問ひ直し正しい対処の方向、真の拠りどころを見出さなくてはならないのである。

個といふ全といへばまず個人主義、全体主義という言葉が思い出されるが、主義というその語感には論理の分析によつて整理された概念を感じさせるものがある。論理の分析は概念思考を進める上に便利であり且つ有用なもので之を否定すべきではないが、このような論理上の概念としての個人と全体とは通いあうところがなく、ために個人主義に偏すれば全体を没却し、全体主義に偏すれば個人を没却するに至る、いずれも人生の事実を背くこととなるのを免れない。事實は全を離れた個もなく個にかゝらぬ全もないので、真に実在するものは「全のうちにあることを感じつゝある個」とでも言

うべきであらうか。例えば、国の法制度や政治経済の機構体制は国の重要な一面ではあるがそれが即ち国家ではない。全としての従つて真実の国家とは、国民の一人々々の、その同胞を、祖先を、子孫をうちに感ずる心を措いては存在しない。人と人との交わりによつて精神は生まれ、個人は心によつて全体につながるのである。「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ」一人皆覚あり、亦達れる者少し」の痛感はずなわち「篤く三宝を敬え」「詔を承けては必ず謹め」の全体帰属意思となる。「煩惱具足の凡夫」の痛感やがて弥陀の本願に帰命するのである。私はこゝに先人の苦闘のあとを見、日本文化、日本のこゝろの伝統を感ずる。謙抑の心といつては一面的にながれ微妙の消息を表現できぬうらみがあるが人生の事実に従う素直で雄々しい心でも言うほかはあ

まい。こゝに思想問題の根本があり、心の拠りどころがあり、思想の真贋を判定する基準もまたこゝにあると私は思う。平和といふ、独立といふ、自由といふ、人権といふ喧燥の論議もこゝにその本物であるか贋物であるかの批判の依拠が求められるのではなからうか。しかしこの基準は冷たい論理の尺度ではなくそれは念々に持続する心の問題である。それ故この根本にかゝる思想の問題に取り組む我々の作業は完結することない永久の事業であることを覚悟して不断の精進に心がけねばならぬと思うものである。

(百特金属工業・常務取締役 加納祐五)

世界戦略の見方

倉前 義男

一、自主性のない世論の心理

ベトナム戦の終結はいよいよ間近に迫ったように思われる。勿論、世界には思いがけない事態も不可測に発生するもので、こゝで断定はできないが、米ソの思惑は何かベトナム戦を終結にもちこみたい所にきていると見てよい。ベトナムも北ベトナムも、口では強いことを云っているが、数年間の戦争の悲惨さは骨身にしみているので、内心は早く終って欲しいと願っているのであって、この世に無限の戦争行為を望む者はいないのである。目下のところ、ベトナム戦の継続を希望しているのは北京の中共政権だけであって、それ以外には最早、この戦争で利得を得る者はいない。

敗戦以来の日本は、米國を筆頭とする占領軍の日本骨抜き政策の心理作戦にまんまとかゝってしまった。そのため、政府与党はじめ野党各派は勿論、ジャーナリズムも学界も米ソいづれかの世界支配論理に中毒して、その旗持ちをつとめてきた。米ソのほかに毛沢東路線と称する世界支配論理も登場して、今や日本の内部には、米、ソ、中、三者のいづれかの旗もちをするグループで埋まってしまつたと云つてよい。この中にあって、日本の主体性(あまり好きな言葉ではないが

……)を強く打ち出している勢力は微々たるものにすぎない。強硬な反共派は大むね、米國の世界支配の残酷さを指摘する勇氣を持たない。これは多分、資金的にCIAの裏口あたりから援助をうけているためであろう。その上、右翼の中にはソ連から資金をうけとつているグループもあると伝えられる。巧妙なソ連は、ワン・クッションおいて、右翼の仮面をかぶつた人物を通じて、狂信的右翼グループに資金を流しているが、それには、必ず日の丸の旗と星条旗を並べて走ること、日の丸より星条旗を少し大きくすることを求めているという。狙いは実に簡単である。日章旗と星条旗を並べた車の上から、激しい言葉で反共的スローガンを叫ぶことによつて、日の丸のイメージをこわそうとしているのである。日の丸は帝國主義の旗だというイメージ、日の丸を尊重する勢力は米國の手先だというイメージが、軽卒な右翼の行動によつて、若い学生などの中に拡がることは、ソ連にとつては都合のよい傾向だからである。まして、このグループが中共とトランプルをおこして、日本と中共の間が険悪になれば、ソ連としては願つたりかなつたりであろう。

でも、自民党を軸とする政府筋にも、米國流の世界戦略を鵜呑みにして、それを金科玉条の如く振りまわす人が多い。これは、きわめて危険である。社会党の唱えるような非武装中立論や、「ソ連は平和国家であるから決して侵略しない」などという書生論は、余りに非現実的であるから、これに引きずられる者は、余程頭の悪い人間か、もしくは、何もかも承知の上で、嘘を云つている者達であるから、その影響は今後、低下する一方で、決して日本国民の大勢を制する訳にはゆかぬであろう。最近の世論調査にもそれがはつきりあらわれている。

しかし、ほかに政権担当能力のある政党がないので、仕方なしに自民党を支持している国民の気持も知らぬ氣に、相も変わらず、政府与党筋が米國流の世界戦略にかぶれて、それに引きずられていては、日本の自主性は失われる一方であろう。米國が第二次大戦に勝利を得たあと、世界最大の工業力と軍事を保有し続けていける点から、米國式に事を運べば間違いない——という愚かな迷信が、相当、学識のある穩健な人士の間にも拡まつている事は、まことに残念である。

二、元寇のころの日本とシナ

奈良時代に唐の制度、文物をとり入れたときも、一部の人士は唐土の國家経営方針を萬能視した。しかし、その唐は呆氣なく滅びてしまつたのである。それに比べ、日本は一步一步と社會の基本的構造の進歩をすゝめて、平安時代末頃には、民衆の生活水準や、生産力の面でもはやくもシナを追抜いていたと云つてもよい。平安末から鎌倉時代のはじめにかけて、名刀正宗はじめ、すばらしい刀剣が製作されてきた事は、日本の冶金や金屬加工技術の進歩を示している。同時にその頃から日本の農業生産はヘクタールあたりの稲の收穫で一トンをこえはじめたし、西日本では二毛作が始まつていた。奈良時代頃はヘクタールあたり0・6トンの位であつたから約2倍にふえた訳である。これは耕作用の農器具の発達、とくに鍛や鎌などの鉄製農具が普及しはじめたためとみられる。このようにな中世における農業生産の飛躍的増大は、日本と西欧だけでおこつた現象である。そして、その日本と西欧だけが、封建制度に移行したということは、封建制というものが、中世の生産力の規模に一番適した管理機構だったからであろう。奈良時代のような律令制では、もはや管理不可能だったのだ。

しかし、シナでも、インドでも、あるいは西アジアでも中世の農業生産は一向に増大しなかつた。これは技術の停滞、

目次	
心術のりどころ……………	加納 (1)
世界戦略の見方……………	五男 (2)
岡潔先生にお会いして……………	祐義 (4)
学園に「信」の場を回復しよう……………	左門 (5)
外国人の見聞……………	正臣 (6)
つづきの記……………	関 (7)
戦没学生の手記に思う……………	桑原 (7)
	一昭 (8)

とくに鉄器生産の技術の停滞のためであらう。そのため、依然として、古代帝王制とでも云うべき、アジア的専制体制が残っていた。その意味でシナは鎌倉時代はじめに、すでに日本より後進化していたのである。そして、アジア内陸の大平原に突如、勃興したモンゴルの騎馬帝国は、その鉄器生産の技術と、機動戦術を駆使して忽ちユーラシア大陸全体を席卷してしまつたのであるが、シナやインドやサラセン、ペルシア、ビザンチンなどの広大な古代帝国が何故、あのように脆くもモンゴルに敗れ去つたのか、その理由もきわめて明白である。それは、この地域の農業生産が古代社会のまゝに停滞していたからに外ならない。遊牧騎馬民にとっては、日常の生活そのものが、そのまゝ、戦斗的であり、機動的である。であるから、誰かすぐれた人物が出て、これを統一すれば一挙に強力な軍事集団に転化し得る。しかし、農民の日常生活は戦斗的なものではないし、精悍な騎馬民の敵ではない。であるから、農業を主とする民族が、武力でモンゴルのような騎馬帝国と対決するためには、どうしても専門の武人を養成しなければならぬ。しかし、多数の武士団を養うには、それ相応の余剰生産力が必要である。だが、古代帝国時代の水準の農業生産力ではとうてい、モンゴルに対抗するだけのプロフェッショナルな専門武士団の維持は困難であった。しかも、国家を運営するマネイジメントの技術も古代の姿のまま停滞していたのでは、新しい集団機動戦術を發明して、電撃戦を敢行したモン

ゴルに対抗できる筈はなかつたのである。丁度、ナチス・ドイツがはじめて展開してみせた機甲師団の電撃作戦の前に、英仏もソ連も、はじめは全く手も足も出なかつたのと同じである。また、日本が、はじめて展開した海上航空力による電撃戦の前に、アメリカ太平洋艦隊とイギリス極東艦隊が一瞬にして壊滅したさまに酷似していたのである。ドイツの機甲作戦はやがて米国の物量とソ連の海戦術によつて阻止され、日本の海上機動作戦も、同じように米国の物量によつて阻止されてしまつたのだが、これは米國とソ連だけが日本とドイツの機動戦略に対抗し得る能力を持っていたからであつた。同じように、中世のモンゴルの戦略に対抗する能力を持っていたのは、東では日本、西ではドイツだけであつた点は注目すべきであらう。

これは、日本の農業生産が鎌倉時代に倍増した結果、多数の武士団を養うだけの余剰を産み出したからである。もともと、関東平野を舞台に「えみし」と対決していた鎌倉武士達は騎馬戦が得意であつたかも知れないが、しかし、蒙古の大平原で育つた本格的なモンゴル騎兵に比べると、鎌倉武士の騎馬戦は問題にならぬほど下手であつた筈である。しかも、元寇のとき、九州の北岸に展開して蒙古軍と戦つたのは、主として西國の武士団であつて、鎌倉の武士団は少数であつた。つまり、元寇を防いだのは西日本の農業生産の増大に支えられた西國武士団であつたのだ。当時、北九州の海岸に

て、多数の武士団が手弁当で配備されていたのであつて、その準備があつたらこそ、元の大軍の上陸を阻止し得たのだ。元の襲来は神風によつて撃退されたといふ説は大変な間違いである。六月はじめに襲撃した元軍は二ヶ月間も上陸できず、海上をうろうろした挙句遂に七月三十日の台風で大破したのであるが、その時溺死した蒙古の兵士は三万余で、上陸戦で死んだ蒙古の兵三万余、捕虜になつた蒙古の兵三万余、生還したもの三万余といふのであるから、台風で全滅したものでない事はきわめて明らかである。西の方ではロシア、ポーランドまで席卷したモンゴルも、ドイツ騎士団に損害は与へたものの、結局、これを征服できなかった。これも、ドイツ以西の西歐で農業技術の革命がおこり、農業生産が倍増していたことが最大の原因であらう。ルネッサンスも宗教改革も、この農業技術の向上に引き続いて、おこつた人間心理の变革であつたのである。

このように、中世の頃、モンゴルの支配下に入つた地域は殆んど例外なく後進國となり、モンゴルの支配をうけなかつた日本と西歐だけが近代化に成功したのである。これは、モンゴルがおこつた大破壊のために荒廃したからではなく、モンゴルの侵入を防ぎきれないほど、この地域は当時においても、すでに後進化していたといふ事を意味するのである。モンゴルは歴史に書いてあるように大破壊ばかりをやつた訳ではない。むしろ、東西の交通と貿易を保護してユーラシア大陸全体に通ずる広域文化圏を形づくつたという面で、大きな貢献を残しているのである。

三、米國の物量主義

さて、話がわき道に入つたが、このように日本は鎌倉時代の頃には、すでにシナを追抜いていたにもかゝらず、日本の教養人士はもとより、指導者階級の人々は依然として偉大な先進文明國中國への過大な畏敬を失なつていなかった。最近の毛沢東への過大評価も、このような伝統的なシナ崇拜の心理的残像である。これと同じように、黒船が東京湾口に押しかけてきて以来、日本は米國の機械文明とデモクラシーの政治運営技術に過大な評価を与へつづけている。ことに昭和二十年以来、七年間にわたつて米軍の占領をうけた日本人の心理の底には、米國への心理的傾斜は失せていない。この事が今後の日本の國家戦略にマイナスの効果をもたらすのではないかと案じられるのである。

いづれにせよ、余りにひとつのイデオロギーや、特定の國への依存と心理的傾斜を示すことは、國民の精神衛生に悪い影響を与えよう。米國の巨大な物量を基礎にした軍事戦略は、ソ連にも連鎖反応をおこし、そのためソ連の經濟的破綻をひきおこした。それは、東歐諸國への々しわよせを強くしている。米國としては、ソ連や中共に過重な軍事負担を負わせることによつて、その成長を阻止しようと考えているのかもしれない。しかし、そのような小手先の細工は結局、自分自身にはねかえつてくるだけである。

毛沢東にせよ、ベトナムにせよ、米国の軍事戦略に対して、人命を軽視したゲリラや人海戦術で反撃をこころみただけであって、ある意味では、米国の物質主義に対する東洋的精神主義の反撃である。それは、かつて日本が神風特攻作戦で敢行してみせたもの、ベトナム版であるとも云えよう。物質主義も精神主義も、それが極端に走ることはよろしくないものであって、双方のバランスが必要である。

今日の日本は、不幸にして、米国の物質主義にとりつかれて、政府与党が米国の物量の前に、ベトナムも北ベトナムもたちまち壊滅するだろうと考えたのも、そのためである。しかし、現実とは逆の結果になってしまった。我々は米國が何故ベトナムで失敗したか、その理由を深く考究すべきである。どちらが正義か、不正義かなどというとりあげ方は、それこそナンセンスである。それぞれの民族と国家の利害と威信をかけて戦争はおこなわれるものなのだ。正義、不正義の論議は閑人にまかせておけばよい。日本の将来を憂うる者は、米国のコンピュータ戦略が何故、米を作り、米を食べるモンズ・アジアの仏教徒の社会で失敗したかを、研究すべきである。マクナマラが米国防省にもちこんだシステム・アナリシスの手法は、いくつかの大前提を設定して、それをもとに戦略方程式をつくり、いくつ通りのシミュレーションを実施して、最も妥当と思われる戦略を、コンピュータ（電子計算機）ではじき出すことであつた。しかし、もし

大前提の中に間違つた前提が入つておれば、出てきた答は全く誤まつたものになる。古典的な十九世紀的戦略思想なら、選択の中が広いから（つまり、答が、あまいから）現実には直面した將軍なり、指導者の人間的なパーソナリティによつて、自由裁量の余地があつた。であるから、有能な人が上におれば失敗は少ない。その代り、無能なものが上にいると大失敗する（前者の例が日露戦争であり、後者の例がシナ事変である）。しかし、マクナマラ方式のコンピュータ戦略では、出てくる答が一応正確（中がせいまい）であるから、指揮官に自由裁量の余地を残してくれない。おかしな！と思ひながらも、ワシントンの命令するまま現地の將軍は動かざるを得ない。そこでもし、戦略方程式の前提条件に誤謬が含まれておれば、大変なことになるのである。

事実、ベトナムでは、これが致命傷になつた。今、ペンタゴン（米国防省）では、「シビリアン・コントロールか、シビリアン・コマンドか」という点で、制服と文官の間に大きな論争がはじまつている。

米国の戦略方程式は、キリスト教社会の平均的人間像を数値化して、コンピュータに入れてある。しかしベトナムは仏教徒の世界であり、キリスト教的一神教とは、根本的に精神風土が異なるのである。この点で米國は重大な失敗をおかしたのである。それはマクナマラ方式の全面勝利であつた。何となれば、アラブ

もユダヤも、典型的な一神教的風土で、そこに住む人間の反応は平均値として、きわめて類型的であるから、コンピュータにかゝり易いのである。それが中東戦の結果となつてあらわれた。

しかし、ベトナムだけでなく、日本も含めて、モンズ・アジアの多くの地

岡潔先生にお会いして

小柳左門

(九州大 医二)

域、あるいは中部アフリカなどは、マクナマラのシステム・アナリシスでは計算できない精神風土なのである。日本の若人は今こそ、米國の物質主義に対する眞の批判的方法を確立すべきであらう。

一四三、一〇、三一
(亜細亜大学講師)

十月二十日、長崎で岡潔先生の講演会があつた。一度岡先生にお会いしたいと前から思つていたので、知らせをうけると、すぐ行くことに決めた。夜は数十名の人々が先生を囲んでの座談会であり、翌朝先生は奈良に帰られるご予約であつた。それで、僕もその日福岡に帰ることにしていたので博多まで先生と同じ汽車に乗ることにした。その日は大勢の人が見送りに来ていた。先生の奥さんは、一人一人丁寧にお辞儀をされた。僕は、先生のお席の側に立つたまま博多まで行こうと思つていたので、奥さんがどうぞ自分の席に座って下さいと言われる。何度も遠慮したのに、とうとう奥さんは自由席の方に行つてしまわれた。奥さんは本当に気の毒であつた。先生は「やあ、どうぞ」といつてにっこりされる。僕は先生のすぐそばに座つたので、全く固くなつてしまつて思うように口が動かさなかつた。

汽車はやがて大村湾に出た。海の色が澄み切つて美しい。「わあ、きれいだな。ずいぶん深い色をしている」といつて、うれしうに眺めておられる。先生のお言葉には、独特の訛がある。聞いて気持のいい訛で、ちよつと真似てみたくなる。有明海を通るころは、丁度潮が満ちている時であつた。小さな波が二間ばかりの間隔をおいて、白波をたてて次から次とよせてくる。その波が、ずつと沖の方から迫ってくるのである。よせては返す波ではない。うねつてくる波ではない。まるで白旗をかけた大船軍が浜に向つて一気に乗り上げようとしている様な勢である。潮が満ちるといふのは、こんなに激しいものかと驚いて眺めた。先生はじつとその様子を眺めておられたが、やがて人麻呂の歌を大きな声で二度詠われた。

わかぬ浦に潮満ちれば瀧をなみ葦辺をさして鶴なきわたる

「鶴は昔は沢山いたのでしょうね」と聞くと、「日本じゅうにいたでしょう。」

僕も鶴の飛ぶのを見たことはない。一羽飛んでもそうなからうが、沢山飛ぶと綺麗だろうね。」

一時、又海を見て、「ギャー、ギャー、ギャー」といって飛ぶんだらうな」と仰言った。僕にはそのお声が、まるで本当の鶴の鳴き声のように感じられて、今でもそのお声が耳に残っている。

自然に浸り切っていると、声までが自然のままになるのかもしれない。「君にはこの歌が分りますか」とお聞きになったので、「はい。何となく分ります」と答えると、大きくうなづかれて、「この呼吸を忘れてはいけない。有明海のあの潮の満ちる様を君の心の中におさめておきなさい」と言われた。

自然の中にある心ではない。心の中に自然がある。先生のお言葉を車中でずっと胸に思い続けていた。

「自分は自然から作られたのだからか。」

「自分は自然の中からふわっと出て来たような気がします。」

「そうじゃない。自分なんてはじめるから無い。ここに君がいて、向うに外の景色があるんじゃない。君の心が窓の外を通りすぎて。そう思っごらんない。」

僕は昨日の講演で先生の仰言った不二不二ということを出した。「一人一人は個性があり、主体性がある。だから不二是。ところが人の悲しみが自分によく分る。心の中に自然があり、人の世が収められていると思うから、自分とは別ではない。だから不二です。個は

全に対して不二不二なのです。これが個人の中核です。僕と君達とは一つである。先生のこの厳粛さに満ちたお言葉に、会場は森と静まり返っていた。「人の悲しんでいるのを見ると、自分までが身を引きさかれるように悲しくなる。人が喜んでると、自分までが嬉しくなる。」先生はその事を強調される。夜の座談会の時、質問に答えて、「愛と慈悲とは全然ちがう。愛はずっとたどって行く」と憎しみになります。だから愛憎とよぶ」と仰言った。情は通い合うけれど、愛は自己対立すると言っておられるのだらう。

春雨や蓬をのばす草の道 芭蕉

芭蕉は全く春雨になりきって句を詠んでいる。自然の懐に温かく抱かれていて、自分と自然とに心が通いあつていて、その根底は「懐しい」という情だ。と、このように言われる。「死を見ること帰するが如し」という言葉も又、「懐しいなあ」という心だと言われる。心の中に時空と自然があつて、それを懐しく思う。それをじっと思っていたら、本当の自分というのは、不生不滅なのだというお言葉の意味が段々分りかけてきた。丁度稲の熟した時で、表の景色は黄金色に輝いていた。僕はほっとした気持ちで、その田を眺めた。「五尺の体は自分ではない。それを自分だと思つての間違つてしまふ。肉眼に見えるものに本質的なところは何も無い。肉眼に見えるものは自然のほんの一部です。君は医者になるのなら、自転車部品を直すと思つて

いれたい。愛別離苦は人の世の苦しみに

でも大きなものです。それを助けてやるのです。」

先生は旅のお疲れからか、うと／＼と居眠をはじめられた。すると突然目を開かれて、「君は何のために生きている」と聞かれた。僕が返答にとまどっている時、「それじゃ駄目だ。それだから、君はやるべきがみんな虚飾に終つて了う。

全然実行ができない。まるで紅おしろいを塗つたみたいだ。志をたてるというのは、そんなのじゃない。一つ分つたら、それをやり通す。それが志をたてることだ」先生にじっと睨まれてそういわれた時、僕は、はげしく心をゆさぶられる思

いだつた。「一つのことをやり通しなさい。それが分れば何でも分る。君は何も実行できてない。道元禪師は一つのこと分るまでには二十年かかると言つて居る。欲ばっちゃいけない。一つこれと思つたらそれを行う。二十年つづける覚悟でやりなさい」

先生は、お声は小さいが、しっかりと論すように仰言る。僕は必死にそのお言葉に耳をすまし、先生の目をみつめていた。そのお言葉を心の中でくり返し思っている時、ふと昨日の先生のお話が思い出された。「私は皇統を守るために生きているといつてもいい。それが私の天命です。」

先生は別れぎはに「自然に対してつづけんどんになつちやいけない。君がいて自然があるんじゃない。君の心の中に自然も、人の世もあるのです。」と言われやさしく微笑された。一汽車がホームを離れると、先生は深く

お辞儀をされた。奥さんが窓のところで手を振って下さった。僕はその間、何度も頭を下げていた。

学園に「信」の場を回復しよう。

—富山大学信和会合宿を目指して—

富山大学信和会合宿は会を重ねること既に二回、今心新たに第三回合宿を迎えるにあつて私の所信の一端を述べる次第です。

合宿活動の概要は山田滋君の手記による合宿案内に記載しておりますが、この信和会活動の根底をなすものは古典の輪読と和歌の創作です。

平常は皆、運動クラブ等、おもしろいものクラブ活動や、その他の学生生活に邁進しておりますが、輪読会や年に一度の合宿に各々の体験をもちよって語り合ひ、より充実した学生生活を目指しております。又そういう平常の生き／＼とした生活なくしては古典を本当に実のあるものとして学ぶことは出来ないと言つて度々今日まで貰っております。このことは取りも直さず山田君が合宿案内に述べられている『日本文化の実内容』にならうとする努力と言つことになるかと思ひます。そして今年には富山大学を含む全国的な大学紛争の中で第三回の富大信和会合宿を迎えようとしております。

もはや今日の大学紛争を無視して学生生活の生き方云々を論ずることは無意味であります。私達はあくまでこの問題を古典の輪読、和歌創作の姿勢からはずれるこ

となく考え直さなければならぬと考へております。今や暴徒と化した学生の前にもろくも大学の威信は崩れ去ろうとしております。いや既に崩れてしまったと言つても決して過言ではありませんが、その原因は何であろうか、それは一に「不信」であります。

学生に対して信ずるに値するものを与え得ず、又自ら信じられ得る存在となり得なかつた大学の教官、そして又、自らの信念、あるいは正義感を闘争と言ふ言葉と行動でしか示し得ない学生、今やこの暴徒と化した学生を警察力によって排除しなければならぬことは当然であり、それも時間の問題であると考へます。しかしその事は大学紛争の根本的な解決にならないことは言うまでもありません。それでは何をもちて根本的な解決とするのか。いささか悠長と考へられるかも知れないが、不信の渦巻く全国の大学に、そして我が富山大学に心から待たれるものは「信の回復」である。

信の回復なくしては、いかなる処置も目先の効果しか上げ得ず、如何なる制度の改善も形式主義に帰し大学に秩序の安定をもたらすこととはついに不可能であります。私達が今なさねばならぬことは信の回復であると言ざるが故に、私達は古典の輪読及び和歌の創作をやめず、信の回復とは「先づ己が行ずることにより成る」と信ずるが故に、先づ自分との対決を合宿に決意するものです。

全国の諸師・諸先輩・諸友よ、私達は過去二回の合宿において経験しなかつた試練の場に立たされてお

す。いや今こそ私達が過去二回の合宿で学んで来たものが本物であつたか否かを試される時であると考えております。この刷文をお送りする方々には、富山より遠くはなれた所におられる方もあり、私はまだ一度もお目にかかつたことのない方もいらつしやいます。御多忙の事とは存じますが、一人でも多くの方々に御参加頂き、この合宿が、大学紛争のみならず、日本の教育界の混迷に一条の光を注ぐ糸口となりますよう、ここに切なる思いをこめて御案内申し上げます。

富山大学平和会卒業生
富山県立富山高等学校教諭
岸 本 弘

昭和四十三年十二月三日

外国人の見た明治百年

関 正 臣

本誌前月号で私は、明治百年記念式典を主催した政府の意図について若干の批判を試み、明治百年とは維新百年のこととしか考へられない旨を言つた。

その後、明治百年に就いて述べたパラグアイ大使（ニコラス・デ・パリ・フレイチャイ・ドレ・リス）の言葉をもつた資料を読んだ。同大使は記念式典で在日外交団長として祝辞を述べた方である。

その一つは、十一月十八日の朝刊「続売」に載せられた総理府広報室の「明治百年」広報シリーズ第70号に「世界平和の推進者」といふ見出しで発表された同大使の言葉であり、もう一つは、月刊新聞「父母会談」第82号に載せられた式

典における在日外交団長の祝辞である。偶然同じ日に目にふれたこの二つの資料を読みくらべてみて私は、シリーズの方は、当日の祝辞の抜粋であると直感した。両資料の論の進め方や用語はソックリそのままである。しかも、今の政府ならば当然に無視或ひは削除すべき部分があり、やはりシリーズの方には載せられていない。

そこで、当日の祝辞を、おくれればせながら復元するために、シリーズには洩れてゐる部分を紹介したい。

一、シリーズ第一段の前に――

強固な封建制度に支配され、また過去二百五十年の間、世界から孤立していた日本国民が、封建制度を打破し、世界に門戸を開放したことは、特記すべきことであります。(明治百年の第一歩即ち明治維新に注目してそれを「孤立から開放へ」という風に捉へてゐる。――因みに首相は、その式辞においては、明治の第一歩については何も触れず、単にこの百年間を「近代化」の期間として一括してゐるにすぎない。)

二、シリーズ第一段の末尾の「特筆に値する諸改革」と概括してゐる部分――

さらに外交、経済、通信そのほか種々の社会面、なかならず、教育の面におきまして、きわめて色々な改革を断行したことは、さらに特筆に値する事柄であります。この教育部門においては、世界の隅々から知識が導入され、これが社会のあらゆる階級に普及され、すべての日本国民によって消化さ

れたのであります。(教育改革を特に重視注目してゐる)

三、シリーズ第一段と第二段との間に(前項に引続いて)――

明治天皇ご治世におけるこれら大胆な改革は、日本が二十世紀初頭における世界の最前線の国家の一員となり、奇跡の礎となつたのであります。

現在、天皇陛下の英知に満ちたご指導のもとに、驚異的な発展、進歩を示した昭和時代がつくり上げられ、いまや全世界の称賛と尊敬のマトとなつてをります。(明治初頭においては勿論、現在における天皇に対する注目)

南米のこの一使臣は、最後に「日本国民の先祖が示した英知と理想主義と努力と」を讃へてその祝辞を結ぶのであるが、簡潔ながら事実即した観察と、全体を通じてうかがはれる謙虚さとを嬉しく思ふのである。(四三・十一・十八夜)

長崎 田川美代子
シュプレヒコール怒声投石バリケードこれが学舎がおぞまじきかな
ありとあらゆる手段えらばずおのが我をつらぬかむとする心根憎し
人の生くる道は己の意見もて引きずりゆくものにあらずとぞ思ふ

○
野菜籠の中に忘れし玉ネギのいつ芽ぶけるか芽をいだしけり
うるほもなき所に忘れられ捨てられたるをネギは芽ぶけり
先はやみどりいろなしつややかに白く光れりネギの新芽は
われとわがうちにこまれる命のかきり生きむとわがうちの力はも
(本会女子同人機関誌「きづな」より)

つっじの記

桑原 暁 一

何回か楠正成父子について書いたが、正成に先立つこと凡そ百有余年、承久の日に於ける正成とも云うべき山田重忠のことを書きとめて、十回に亘る拙稿の打止めとしたい。ほくがこの人を心にとめたのは沙石集の伝える美しい話によつてである。

尾州の山田二郎源重忠というのは、承久の日に後鳥羽院の御方に付いて戦死した人である。武勇にすぐれているだけでなく、心やさしく、民の労苦のわかる、なまけ深い人であった。その所領の中に山寺法師があつて、八重のつゝじを持つていた。重忠はそれが欲しくてたまらなかつた。しかし、自分が欲しいように、かの法師とて手離したくはないであらう。領主の権力で、情容赦なく取上げるわけにもいかない、と思ひあぐんでゐた。そのうちに、チャンスが到来した。かの法師に大きな科とががあつて、その科料を徴することになつた。重忠は部下に命じて、科料として絹七疋四丈を納めるか、それとも八重のつゝじを出すか、二つに一つの返答をするように下知した。ところがかの法師は、絹を出さずという。重忠はがっかりした。主の心を知る部下の者は、「絹をまいらせては猶々御不審残ることもや候はんずらん、たゞ、つゝじをまいらせ給へ」と云つた。規定どおりの絹を差出すことは自分の罪科をあか

らさまに認めたことであり、なお余罪の嫌疑が残るであらう、つゝじを寄せと云うのは、万事儘便にすませようとの趣意であらうから、その通りにせよ、と云うことであらうか。そこで法師は力なく、つゝじを掘つて寄こした。

という話なのである。「かのつゝじ今にあり」と著者の無住は書きそえてゐる。彼はこのつゝじを見たにちがいない。実は彼は、重忠が亡母の菩提を弔うために建てた長母寺の住持であつた。

この心美しい重忠は承久の合戦で一番めざましく働いたのであつた。彼ははじめ河内判官藤原秀澄の副将として美濃の洲すま守つた。こゝはかつて彼の父泉冠者重満が、源行家とともに、平重衡と戦つて討死したところである。ところで東国勢の猛攻にたまらなくなつた御所方は総崩れになつて退却する中であつて、彼は杭瀬川の西岸に踏み止まつて、九十余騎で十余万の敵に相對した。しかしそこで力尽きた彼は退いて瀬田に拠つた。吾妻鏡には「山田次郎重忠独り残り留まりて、伊佐三郎行政と相戦ひ、是又逐電す。」と云つてゐる。折から大雨であつた。彼は唐笠をかきさせて指揮をとつた。彼戦の中であつて平然たる彼の姿が目に見えるようである。瀬田も破られて彼は京に入り、西山で自決した。実は自決するひまもなく敵兵に攻め寄せられたのだ

が、嫡子伊豆守重繼奮戦して敵を支え、そのひまに彼は自決して果てたのである。重繼は負傷して捕えられ、のち殺された。孫の十四歳になる又太郎兼繼は越後へ流された。重忠の一家一族みな御所方として戦ひつれた。一々は云われないが、重忠のいとこ足助重季の子重成の戦死したことだけを取上げておく。足助といふのははばくになつたらしい名前だからである。宗良親王の李花集に

遠江国に侍りし頃三河国より足助重春

しきりに誘ひ侍りしを、なほ思ひ定めぬ由申しつかはして

一すぢに思ひさだめぬ八橋のくもでに身をもなげくころかな

とある。太平記巻三・笠置軍事の中に

やゝ暫くあつて木戸の上なる櫓より、矢間の板をひらいて名乗りけるは、三河国住人足助次郎重範なるみも一天の君にたのまれまいらせてこの城の一の木戸を固めたり。前陣に進んだる旗は、美濃・尾張の人々の旗と見るは辟目ひらめか云々

とある。この「美濃・尾張の人々」とあるのにはばくは胸打たれるのである。承久の日に彼の父祖山田重忠等といつしよに働いたのは美濃尾張の人々であつた。

それをいま向こうにまわしてゐるわけである。重範はのちに六条河原で首はねられた。李花集の足助重春と太平記の足助重範とは兄弟か、さもなくば、ごく近い血縁のものであらうし、承久の足助重成の子孫であるにちがいない。尾張の山田氏の血縁がお隣りの三河に拡がっていたと思われる。尾州山田は今も名古屋市内

となり、足助は愛知県加茂郡にある。

承久合戦の御所方として、重忠のほかにほくになつたらしい人がいる。それは八田知尚である。筑後前司八田知家の子で筑後六郎左衛門尉と云はれた。親子ともに源実朝に仕えた。「沙石集」に、知家が実朝の上格を諫止した話がある。知尚は出でて後鳥羽院の西面の侍となり、左衛門尉に任ぜられた。承久の合戦では大井戸の守備に付いたが、敗退する御所方の中に彼も加わらざるをえなかつた。

筑後六郎左衛門尉、黒皮威の鎧に、赤の母衣懸けて、白月毛なる馬に乗りて落

行きけるを、武田七郎(信隆)、きたなし、余すまじ、とて追懸けたり。六郎左衛門取つて返す。御所焼と云ふ聞こゆる

太刀を帯びたりけり。御所焼とは、次家から焼かせ給ひけり。公卿殿上人、北面

西面の輩、御気色よきほどの者は皆給ひて帯びにけり。筑後六郎左衛門尉、都を

出でける時、今度偏ひとへけとて給ひけり。只今其太刀をぞ帯びたりける。武田七郎なるみ變

びたる所を抜き打ちに、馬の首、手網添たすへて、ふつと切つてぞ落したる。武田、

鎌を越えてひらりと下り立つ。(承久記)

とある。馬の首を切つて落すくらいなら、なぜ武田信隆なるみの人に切り易かつたといふことか。馬の首が切り易かつたといふことか。馬の首が切り易かつたといふことか。馬の首が切り易かつたといふことか。馬の首が切り易かつたといふことか。

しものびず、さりとて「きたなし、余すまじ」と、罵つて追ひすがる相手を振り切り

落して、「お前もこうなりたのか」

と、威嚇したということではないであろうか。ぼくは知尚の心のやさしさをこゝに見てとりたいたのである。彼は退いて宇治に拠つたが、そこで戦死した。

(四三・十二・三)

戦没学生の手記に思ふ

松本 昭

(鹿児島大・法文三)

戦没学生の手記を集めた「ああ同期の桜」を最近読み直してみた。私達の年齢と幾許も離れずして、祖国の危機にあつて、その青春を過ごさねばならなかつた戦没学生の手記を綴つた手記は、惻々と私の胸に迫つて来る。両親にもっとも孝行を尽したいといふ思ひを残しながら、或いは学問への情熱を棄て切れずに、戦争へと赴かねばならなかつた運命を決して呪ふことなく、それが自分の人生であると受け止め、その人生を精一杯生きようとしていたように思える多くの手記に接したのは心打たれることであつた。手記を読むにつけて、戦没学生の生命が悲しくも輝いているように感じたのは、私のみなのであらうか。

ところで、これも戦没学生の手記を集めた「きけわだつみのこえ」といふ遺稿集があるが、その「はしがき」と「あとがき」を読んで、私は疑問、といふよりはむしろ憤懣を覚えた。そこに述べられている編纂者の考えは、次の様なことなのです。「きけわだつみのこえ」は「満

州事変から太平洋戦争までを日本の十五年戦争として把握し、その長い煉獄下の学徒兵の姿をできる限り客観的に浮びあがらせよう」として、多くの手記を取捨選択して、編纂したといふのである。そして「学徒兵の姿を客観的(?)に浮びあがらせる」べく、この遺稿集が「数百万の人命を犠牲にし去つた戦争の複雑な諸様相と、国民を戦争へと追いこんでいった巧妙な統治組織と苛酷な軍隊制度とを、いま一度白日の下にさらし」そして又一戦争の進行に伴う国家政策の変更と国民生活の逼迫をえがき出すものでなければならぬ」といふのである。そしておこがましくも編纂者は言ふ、「手記のいたるところから戦争否定と平和への願いを訴えかける戦没学生のヒューマニスティックな精神が、広範な読者層の間に共感の渦を呼び起こし、かくて『きけわだつみのこえ』が、その後久しきにわたつて日本に於ける平和運動の精神的倫理的な源動力たりえたことは、まことに理由のあることであつた」と。戦没学生の手記は、このような編纂者のイデオロギ―とも称すべき意図の篩にかけられて、戦争を呪ひ、死にきれぬ思ひで死んでいった学生の手記は採られ、戦争を肯定して、従容として死に就いた学生の手記は捨てようとするのです。この様に、戦没学生の手記を取捨している編纂者の態度に對して、私は憤懣を覚えるのです。

果して、戦没学生の手記は、編纂者の言ふ様な「戦争の無意味」と「平和の願い」を語っているのでありませうか。「戦没者の遺稿を通じて日本人の戦争体験

の意味を繰返し問ひつづけていかなければならない」とか、或いは「戦争体験の遺産を継承せねばならない」と、ことごとしく戦争体験の意味を問題にしようとしています。そして、そのつまるところは、あたかも「平和」が最高にして絶対なる価値であるかの如く、平和を守れよとのヒステリックな主張となるのです。誰として平和を願わない者はいないでありませう。この素朴なる人々の願ひに訴えて、平和主義は、その地所を拡大しようとしています。編纂者の言ふ様に、「平和」そのものは命をかけてまで守るに価するものなのだらうか。私はそうとは思われなないので。それはともかくとしても、抽象的なイデオロギ―としての絶対平和主義を掲げて、その旗じるしである「不戦」と「平和」といふ名目の下に、或いは大東亜戦争に於ける国家政策の弾効といふ名のもとに、戦没学生の手記を取捨選択するといふ不遜なる意図をも正当化して、何ら胸の痛みを覚えることがないであらうか。たとえ、編纂者が如何なる思想・信念を持つてにせよ、それを戦没学生の手記の中に持込すべきでないと思ふ。その手記の中に、どうしてイデオロギ―を読むことが出来るのであらうか。表わし尽せぬであらう思ひを託した戦没学生の手記に、私はただにその思ひを偲ぼうとするのみである。そして、この戦没学生の悲しくもある人生が、祖国の命の中に脈打っている様に思えるのです。

(十月二十三日、鹿児島大学社会科学研究所 究会霧島合宿における所見発表)

松本君の発表を思ひ出でつづ

鹿児島 川井 修治

戦ひの場にたふれし先人の思ひをただに汲めと友言ふ

「生命あらば帰りに親に孝行せん」と述ぶるを聞けば涙ぐまるる

父母を故郷に残して征で立ちし二十年前のうつつに迫りく

みいくきにあまたの友を失ひてなほ生くる身のつとめざらめや

夕陽かけ西にうつろひ紅のみ空仰げば思ひはてなし

我等生くる祖国の生命たやさんとい騒ぐやからさわに満ちをり

ますらをのみ心つぎて祖国を護りて立たむ若き友らよ

~~~~~

### 編集後記

本年最後の号をお届けします  
桑原さんの文はことし始めから連続十回で、一応これで筆をおかれます。主として楠氏一族をめぐる、執筆者の信ずるところに従つて、縦横に歴史のつながりを探るといふ目覚ましい文章であつたと思ふ。厚く御礼申し上げます▼来年夏の合同合宿に至る迄のリーダーとして、次の四君が学生委員に決定されました。九州大学文二・志賀建一郎君、鹿児島大学法文三・松本昭君、東京大学文一・石村善悟君、岡山大学医二・田中輝和君。東南アジア見学団の便船春光丸の出帆予定日に合はせて、学生委員の初会合が二十四日横浜で行はれることになりました。健斗を祈ります。





発行所  
社団法人国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都中央区銀座  
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
下関市南都町25-3宝辺正久  
振替下関1100 電話22-1152  
毎月一回10日発行  
定価一部20円(送料別)  
(送料共) 年間360円

昭和四十四年元旦発表の

### 今上御歌を拝誦して

広瀬 誠

#### 宮殿の竣工

新しく宮居なりたり人々のよろこぶ声のとよもしきこゆ

明治宮殿は昭和二十年五月二十五日の大空襲で炎上した。戦後、宮殿の造営が建議されたが、天皇は「国民は住む家もなく困っている。住宅事情がよくなるまで待たたい」とおっしゃって、なかなか許可されなかつたといふ。しかし国民の

結句を終止形で「きこゆ」と結んだものは、これがはじめてである。よほど人々の声をうれしく思はれたのであらう。

もありあがる熱意はつひにかなへられ、工事は着工された。竣工は昭和四十三年十一月十四日。竣工を喜ぶ国民の声(喜びざわめく声であらうか、それとも万才の三唱であらうか)は御座所までひびいたのである。

明治天皇御製にも「目に見えぬ人の心のよろこびも声によりてぞ聞き知られる」(明治三九)とあるが、御座所をとよます人々の声をお聞きになって、渦まくやうな国民の喜びを知られ、その喜びをおのが喜びとされたのである。それは、新宮殿の完成もふくめて、広く、敗戦日本のめざましい復興を喜ぶ声である。君から民へ、民から君へ、喜びは喜びを呼び、新宮殿をとよまして秋晴の青空にもりあがっていくのである。

今まで発表になった今上御歌中「見ゆ」と詠まれたものは十一首を数へるが、「聞ゆ」はわづか三首である。しかも、

層雲峡より高原温泉に向ふ  
そびえたつ大雪山の谷かげに雪はのこれり秋たつらしも

天皇・皇后両陛下は昭和四十三年九月、北海道百年記念式典のため同地へ行幸啓されたが、その折、層雲峡にたちよられた。層雲峡から海拔一三五〇米の高原温泉に向はれ、その途次、大雪山の谷かげに残る雪に目をとめられた。

を知ってはじめて味はひ得る御作である。

初夏の残雪には、心をときめかすやうな強いきらめきがあるが、初秋なほ残る雪は蕭条としてわびしい。その古雪のたすまひに、しみじみと「秋」をお感じになったのである。(私は立山浄土山の谷あひに秋まで残る雪渓を毎年見て居るので、天皇の御覧に雪渓を毎年見てありと目に浮かんでくる。)

天皇はしばしば山の残雪を詠せられてゐる。「そびえたつ安達太郎山に白雪の残れるさまを汽車に見て過ぐ」(昭三五)、(霞立つ春の空にはめぐらしと雪の残れる富士の山見つ) (昭三六)「驚もなく高くそびゆる火打山雪のこれるを山越しに見つ」(昭三九)等々。いづれも春から夏にかけての壮麗な残雪である。古び細って秋まで残る雪はこのたびはじめて詠せられたのである。

万葉集には人麿の有名な「久方の天のかぐ山この夕べ霞たなびく春たつらしも」の一首がある。霞たなびくことから春立つと感ずるのは、きはめて自然である。しかし、残雪から「秋立つらしも」とつづく、多くの人にはちよつと意外であらう。残雪の季節による微妙な差異

それにして、人麿の一首が、初句から結句まで大きくゆらぎながら高まっていつてゐるのに対して、御歌は「雪はのこれり」で息をとめて、つぶやくやうに「秋たつらしも」と言ひ添へられてゐる。テレビで拝する天皇陛下の、お年をお召しになった御風貌がふと眼前にうかんでくるのである。

#### 稚内の公園にて

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

昭和二十年八月十五日終戦。その五日後の二十日朝、樺太真岡沖にソ連の艦船が現はれた。進駐と思つてながめて居ると、いきなり艦砲射撃をあびせて上陸攻撃して来た。この非道な攻撃のため真岡

在任の民間日本人約一千名が死んだ。ソ連軍は故意に平和的進駐を避け、樺太・千島のいたる所で、戦闘をしかけ、要所といふ要所を軍事占領したのであった。真岡電話局勤務の九人の乙女もまた、



ソ軍上陸と同時に青酸カリをのみ、最後の力をふりしぼってキイをたたき「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」の言葉を残して若い命を絶つた。(九人は十九才から二十四才まで。樺太在住民の内地引揚げがはじまったとき、父母兄弟が立いて「いっしょに帰ってくれ」と頼んだが、「大切な任務があります」といつて踏みとどまった、けなげな大和無子であった。)この話を聞いて私は総身の毛が逆立つ思した。

北海道最北端稚内の岡の上に、この殉職乙女の碑が建てられてある。碑にはブレストを耳にかけた九人の交換士のレリーフがはめこまれ、「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」と最後の打電の言葉が刻まれて居る。

昭和四十三年九月五日の夕方、天皇・皇后両陛下は稚内市長の案内でこの岡に立たれた。市長の説明を一言一言うなづきながら聞いて居られたが、説明が終ると、碑の前に進まれて、ていねいにお辞儀された。つづいて皇后も同じやうにされた。天皇はそれから双眼鏡を手にとられて、感慨深げに樺太の方をながめられた。あいにくこの日は曇って樺太は見え

ず、宗谷海峡の白い波頭が見えるだけであつたが、天皇はいつまでも暮れゆく北方を見て居られた。この地へのおたちよりは五分間の予定であつたのが、八分間に延ばされたといふ。

以上の事実は読売新聞社の「昭和史の天皇」によつたものであるが、このたび御発表の天皇御歌はまさしくその時の御感懐である。皇后も天皇に唱和して「樺太につゆと消えたるをとめらのみたまやすかれとたたいのりぬる」と詠ぜられてゐる。

天皇は昭和三十年八月十五日、那須にて「夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる」と詠ぜられ、三十四年千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて「国のため命さざげし人々のことを思へば胸せまりくる」、三十七年日本遺族会創立十五周年に際し「年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる」と詠ぜられてゐる。敗戦に關し、戦没者に關し、くりかへし「胸せまりくる」と詠ぜられてゐるのである。その御心をおしのびして、民我等の心も迫ってくるのである。

福井県の国民体育大会  
秋なかば福井あがたに若人は力のかぎり

天皇は毎年のやうに国民体育大会の歌をよまれ、そしてほとんどすべての御作に「若人」の語を使用され、力のかぎりさそふさまを歌はれてゐる。今まで発表

の今上御歌中「若人」の語は十三回、「きそふ」は七回(うち「正しくきそふ」二回、「力のかぎりきそふ」二回、「力をつくしてきそふ」一回)である。日本の

将来は若人の背にかかつてゐる。若人が正しく、力尽してきそふ姿に、かぎりない期待を寄せられてゐるのである。

「秋なかば福井あがた」とは母音のつづくりズミカルな調への美しさ。昭和四十年には「晴るるの日のつづく美濃路に若人は力のかぎりきそひけるかな」と詠嘆され、四十二年には「川もあり山もそびゆる広き野のこの武蔵野に若人きそふ」と平叙されたが、このたびの御作は、今までのお詠みぶりとはいささかちがつて「きそはむとする」である。今まさに始

豊岡市コウノトリゲージにて  
この秋の最中に見たるこうのとりの雛をもつらむその日思ほゆ

コウノトリは特別天然記念物で兵庫県出石地方に残存つわつ十羽ほどといふ。しかも近年ほとんど繁殖せず、絶滅が憂へられてゐる。古来「松上鶴」とか「鶴の巣ごもり」の画題・詩題で親しまれて来たのは、ツルではなく、このコウノトリのことで、気品ある美しい鳥である。その鳥に対して天皇はやさしい目なごしをそいで居られる。産卵し育雛し繁殖することを祈念して居られるのである。生きとし生けるものに寄せられる温いお心持が、ほのぼのと伝はってくるやうな美しい御歌である。

「この秋の最中」と時節を明示されたのは、鳥の生態・生物季節に対する、天皇の生物学者らしい御関心からであらう。

今上御歌で「思ほゆ」の語は初出である。「思ほゆ」を結句とする歌としては額田王・柿本人麿はじめ万葉集に五十首ばかり見えるが、大部分、遠く過ぎ去つたもの・遠く隔つたものを回想し思慕す

まらうとする行動に対する期待が、緊張した調べにみなぎつてゐる。美しい音調ではじまった一首は、次第に力強さを加へ、連体止めの結句に、満を持して放たぬ力をこめてゐるのである。「福井あがた」と県名を詠み入れられたのも異例である。天皇はさきに「福井県の復興」と題して「地震にゆられ火に焼かれても越の民よく堪へてここにたちなほりたり」(昭三七)と詠まれたが、その不撓不屈の越の民の健闘に強く期待されたのであらう。

る作である。近代では正岡子規以下多数の用例があり、そのすべてを点検することは不可能であるが、やはり懐旧的なものが多いやうに思はれる。斎藤茂吉の有名な一首「ゴオガンの自画像みればみちのくに山蚕殺ししその日おもほゆ」(明治四五「赤光」)も回想である。ところが今上御歌は未来へ向つての「思ほゆ」である。このやうな用例はきはめて少ないのではなからうか。多くの「思ほゆ」結びの歌が、しみじみとした回想的情調に浸されてゐるのに対して、今上のこの御歌は、ほのぼのとして明るい希望をはらんでゐる。

やがて第三皇孫が誕生されるであらう。「雛をもつらむその日思ほゆ」とコウノトリを歌はれたとき、生まれ出づべき可愛い皇孫のことが天皇の御心をかすめたのではなからうか。温い御心づかひが息づいてゐるやうな、こまやかな歌の調べを味はひつつ、私は天皇の美しい御人柄に深く感動するのである。| 昭和四四・一・三稿 | 富山県立図書館蔵







ということとは、代々木派の連中のいう、その言葉にふくませた意味を、大学側はそのまま確認したということにならないであろうか。このような不正確な対話をすると、これは、思想を専門とする加藤・大内・寺沢教授たちにとっては、学者として恥づべきことではなからうか。それとも、代々木派の連中と同じ思想に立つて同意したつもり、とでもいうのだろうか。

とにかくこの集会は、国民が長いあいだ理解してきた国立大学の在り方を、教官と学生で勝手に変革しようとしている集会、と見なさざるを得ない。それは、新旧の「接点」の在り方を重要視する点において単なる「改革」の対話ではなく、「革命」への指向をにじませた対話と受けとれる。これだけのことを学生に放言させておきながら、大学側がお迎えを続けるのだから、どうにもならない。すなわち

「加藤代行 従来の大学の自治は、……過去のものになりつつあるように思われます。そういう点で、過去において、当時の慣行を無視した、俗にいう『東大パンフ』といわれるものは、これを改め、廃棄して、新しい立場に立つて問題を考えたいと思つてゐる。……学生諸君には固有の権利があり、大学の自治の一角をになうものであるということ、われわれは積極的に認めていきたいと思つてゐる。」

「東大パンフ」とは、四十年十一月に東大総長の諮問機関である学生委員会がまとめた公式見解「大学の自治と学生の自

治」で、当時私は、その内容のいくつつかについて、本誌上で三回にわたり批判を続けたことがある。しかし東大パンフレットは、学生の自治は、大学の使命である教育と研究を妨げてはならない、などの、学生自治の範囲を限定したものであつて、これを廃棄するという加藤執行部の発言は、実に重大な意味をもつものである。私はあえて東大執行部に、改めて「学生の自治」について明確な所信を問はずにはおられない。その質問は、単に私人のものではなく、多くの国民からも、同時に出来るに違いないものと思つてゐる。

二、若い警官に、生命がけの協力をさせながら、それに心からの感謝の意を表しない東大教官たちは、まともな人間と言へるのか、私はそれに人間的な憤りを感ずる。それは「大学自治」以前の問題である。

いま進行中の東大正常化への歩みは、大学人たちが、それまで嫌いで嫌いでたまらなかつた機動隊に、その出動を要請し、一方ならぬお世話になつてのことである。しかも機動隊の若い警官たちは、われわれがテレビでそれを見たように、暴徒たちに対し、それこそ生命がけで立ち向かつてゐた。大学教官たちにとつては、それは、同じ国民であり、同胞であり、しかも若い後輩たちと呼ぶべき人々であつた。だがその決死的な働きぶりを傍らで見ていた教官たちの、あの冷たい視線——それが無数にテレビに映し出さ

れては、何と評したらいいのかわ。私は言ひようのない悲しさを覚えていたが——は、何と評したらいいのかわ。私は言ひようのない悲しさを覚えていたが——

それにしても二日にわたる機動隊導入のお蔭で、ようやく安田講堂が大学の手に戻つたとき、加藤学長代行は、まづ先に機動隊の適切な行動と、若い隊員の勇敢な作業に、一人の国民として、一人の人間として深甚の謝意を表すべきではなかつたか、そして彼らの活動を、憎々しげに見守つてゐた、少なからざる同僚および後輩の教官や助手たちに対し、毅然としてその非を指摘し、反省を促すべきではなかつたか。しかしそれらについて国民は一つも耳にすることがなかつたのである。

他人に少くしでも厄介になれば、心から礼を述べることが、まともな人間の付き合い方である。ましてや、自分たちの不手際と心得ちがいから、暴徒の排除作業を困難にしてしまつた上での、機動隊導入の要請ではなかつたか。頼まれる方にしてみても、すつきりした気持になれるものではなからう。そのことを考えに入れて見るだけでも、若い警官たちのあの勇敢な行動は、高く評価せられるべきであつた。とくに東大教官の立場からしては。負傷して後送される警官たちに、申しわけなかつた、すまなかつたと心から詫びる心が湧き出してこそ、教育者らしきもあるというものは、それが事実、正反対であつたということ、何という度はずれた感覚の持ち主たちであらうか。

いや、それどころか、もつとひどいことがあつたやうである。新聞がそれを巧みに報道してしたので、ご紹介しておこ。 (東京タイムズ一月二十日第十頁)

「二日目の攻防十一時間、あたりが暗やみに沈み始めた午後五時四十分、ついに、天守閣は機動隊の手に落ちた。安田講堂の裏手から護送車に乗せられる手錠姿の学生を、待ちかまえた報道陣や東大教職員がたちまち取り囲む。『よくやった……』『よくがんばつたぞ』全学共闘の学生などがはいれないはずの人がきから、突然そんな声が飛んだ。東大紛争の根の深さ、複雑さをそのまま見つけたやうな、幕切れの一瞬だつた。」

と。野次馬の群衆ならいざ知らず、無法学生を最後までほめたたえるこの声、それが「大学の自治」擁護派の一角に巢食つているのなら、そして、それに東大の執行部が引きずりまわされてゐるのなら、もう二度と東大構内に機動隊を導入して手伝つてやることはなからうではないか。今後いつまでも警官一人びとりを敵視する東大教官が一人でも教官として残るならば、若い警官たちに決死的の活動を強いられることは、まことに気の毒に耐えられないものである。何とか考え直してもらえないものであらうか。ついでながら話は飛ぶが、警官に対する心情の延長であらうが、自衛官の入学を拒否する国立大学の弊風も言語道断である。そんな国立大学などというものは、世界に一つだつてありはしない。

三、安田講堂の占拠学生検査者の中に、東大生が僅少であつたこと



について、なぜ東大執行部は、世間に詫びようとしぬのか。逆に東大生は、外人部隊よりも悪くなかつたような印象を世間と与えようとしている。何とも不思議なことではないか。

安田講堂内の検挙者の中に、全貌はまだ不明だが、東大生は数えるほどしかない、という。先に逃げてしまったからともいう。逃げたのは事実にはない。しかし大学当局は「逃げた」ではないのか。彼らが安田講堂を占拠しているあいだは、警官導入を要請せず外人部隊が来たから、導入を頼んだ、というならば、こんな馬鹿げた話はない。

東大生であろうが、外人部隊であろうが、暴徒たることに区別があろうはずはない。世間を騒がせ、公共の器物を破壊するにまかせておいて、しかも、その張本人である自分の大学の学生が検挙さわなかった、それは東大執行部にとつても全学生にとつても、不名誉きまわりないことではないのか。犯人が逃げ廻っていることについても、全東大生が、自治能力の喪失について懺悔し、そして自分らでつかまえることができなかつたことについて、また逃亡したことについて、とにかく世間にわびるべきである。

ところがまずきに輪をかけたことを首相がやってしまった。「外人部隊が主であったから破壊も一層ひどかつたのでしよう」とは佐藤首相の東大検分の折の言葉である。首相がノコノコ出かけていった不見識もさることながら、この話ぶり

くらいフザケているものはない。「なぜ東大生がいる間に警官の導入を要請しなかつたのか」、「あなた方は、どうやって張本人の東大生をつかまえるつもりか」と、そう発言してこそ政治家ではないか。そこに触れる勇気がない、それが今日の政治家というもののなか。自治の根本を忘れて首相と学長代理、いいコンビだと言ってしまうればそれまでだが、これは国民は納得できない。

その上、二十一日の加藤代行の談話は、さらにひどいものである。「全学共闘の諸君は各学部のみならず、学生大会や自治会で意見を展開してほしい」(一月二十二日東京タイムズ第一面)

「安田講堂を占拠した学生の処分は、しないというのが原則だが、それには議論があるだろう。私としては処分しないつもりだ」(同)

無法な学生どもを処分しない、というのも全くどうかしているが、その学生を含めて「全学共闘の諸君は」もないものである。どしどし「意見を展開してほしい」に至っては、もはや、この人ならびにそのブレインたちの人生態度からして聞き直してみたい。全く常識では皆目見当がつかない。



名もなき民の思ひ  
(「国のおきて」序論)  
長内俊平

「何か書け」と言はれれば、何かを書かなければならない。書く以上は、自分の心を、最もとらへてゐるものでなければならぬ。しかし、最も心をとらへてゐるものが、書くことに直ちになじむものとは限らない。今書くこともそういふなじまぬ状態にあるものを、なじまぬまゝに筆にしようといふのである。それは霧島の場合から帰って幾日も経たないころのある朝、私は身体に電気が走る様な感動に襲はれた。それは

国  
世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ(明治四十四年)

といふ、明治天皇の御製を拝誦してゐた時であつた。

感動といふのは、おそれ多いことであるけれども、これは、天皇の御遺言である。との確信が胸に襲つて来たからであつた。

民として、なしてゐることと言へば、僅かに毎朝欠かさず明治天皇の御製を神棚に向つて拝誦することだけの私であるが、その甲斐があつて、今日、天皇の御声をはつきりきくことが出来たといふよろこびと感動であつた。世の中はどんなに開けて行つても、いにしへの国のおきては決してたがへては相ならんぞ、若しそのおきてをたがへようとするものが

あつたら、長内、身をかへりみず、これを守り通してくれよ、たのむぞ、これが遺言である。との御言葉が、たしかにきこえて来たのである。

これを口外すれば、それは思ひあがりである。あれは神がかりである。と言はれるであらう。しかしこのみ言葉をきき得た感動は小生の胸に刻まれた事実である。

その日から私の心をとらへて離れないのは、天皇が身を以つて守れ々とおせられた「国のおきて」とは何であるかといふことであつた。天皇は、わたのむぞくとはおおせられたが、「国のおきて」とはこれである。とは教へて下さらなかつたからである。

「あゝそれが知りたい、それが分つたら命を捧ぐべき目標がはつきりする。何とか教へて戴きたい」と毎日毎日念じてゐるが今日まで教へては下さらない。

僅かにその感動の折、心にひらめいたものは、わが国は万世一系の皇統を上にお戴き、上は下を吾子の如く慈しみ、下は上を親の如くお慕ひ申す、そういう国柄である。そうした国柄はどんなに、便利な世の中にならうと、変へてはならんぞととおせられてゐる様に感ぜられたことだけである。

しかしその後導きが全然ないわけではない。

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつた代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)の御製から、「いにしへの国のおきて」とは、「かみつた代の国のすがた」と極め



て深いつながりがあるであらうといふことであり、また、

をりにふれて  
しる人の世にあるほどに定めてむふる  
きにならふ宮のおきてを

の御製から「国のおきて」とは「国のしきたり」につながるものであらうかといふことである。

しかし「しきたり」「さだめ」といふものもそれが形骸に墮する時は、生命を失ふ。そうであれば「おきて」もそれを生み且つ培う国民的精神風土との、密着不可分の関連においてこれを究明してゆくべきである。そうだとすれば、その解明の糸口は、いにしへの人達(我々の祖先)の国とのつながりにおいての「心ばへ」、情緒はどうであったのかを究明することによって見付けられそな気がするのであるが、いま私の心を離れないのは、この「いにしへの国のおきて」とは何かといふことであり、

さかしらるを言ふ者が、如何に多くをらうとも、明治天皇が、「たがへてはならぬ」とおせられた御言葉をただ信じ、これを行じてゆこうとの歓喜の思のみである。(未完) (電源開発伊予電力所)

(賀状に)

御題 星 枚方 木村松治郎

地のひかり夜空に映えうすあかり  
かそけくひかる星のともしも  
はてもなきみ空にひかる星かげの動くを見つゝうし世思ふ  
うつせみの世をもふこゝろ天地の神  
もしらさむ星またくげは

『天皇陛下』

丹治 正平

「拜啓天皇陛下様」は嘗て映画の題名だった。無学な兵隊が、素直な願いをこめて、真剣に書きつづった手紙を一同こまとして展開した物語りだった。

併し戦後、「天皇」の語を、恰も暴君と同義語の如く解し、ワンマンの象徴のやうに、乱用する風潮は、何ともやりきれないものであった。特にジャーナリズムでは、××天皇、〇〇天皇と、やたらに「天皇」呼ばはりするのが流行した。それぞれの社会で、実力を発揮する者があると、如何にも横暴で権力を恣にしてゐるかのやうに、天皇の二字をつける。

併し一、二の例外はあらうが、彼等の意図通りには進んでゐないやうだ。筆者には身近かな例では、決して暴君的存在ではなく、むしろ人情に厚く、物腰の柔らかな、庶民的な人物である。業界の纏め役として、他の意見をよく聞き、自己の利益を犠牲にしてをられる。その信念がのために尽力してをられる。その信念が固く、それを貫く実力があるために、天皇と呼ばれるので、決して暴君の理想はない。

ジャーナリズムや左翼者流が、悪意に満ちて、悪いイメージを作り上げようとしても、結局日本には、スターリンのやうな悪逆な暴君は存在しなかつたし、また存在し得ないから、彼等の目的は達しられないだらうと思ふ。これは国民性によ

ることで、国柄が根本的に違ふからではないかと思ふ。美しい国土、温和な気候、豊かな産物、非肉食の食生活などの上に育まれて来た国民性の故と思ふ。それを貫くのが建国の精神であることはいふまでもない。

「天皇」の語を最も悪しきまに乱用するのが学者である。学術論文の中で、初めから「悪」ときめつけて天皇の語を持ち出して来る。最も理論的であるべき論文の中で、やたらと「天皇制」をいひ、学術的の見せかけて、その実は安撫な感情をむき出しにしてゐる。理論の展開なら、理論らしく、天皇制そのものを掘下げて、正しく評価しようとすべきであるが、そのやうな態度が見られない。誠に噴飯ものである。

例へば、明治図書発行の教育学科学叢書の中の一巻、「現代教育原理」(一九六三年)に見よう。  
「明治二〇年代の前半において、天皇制支配とそれに強く結合させた国民教育の統制を完了していた結果は、日清戦争において十分その成果を発揮したといふべく……」(四三頁、土屋忠雄)

「最近の教育行政および学校管理作用の動向には、かつての天皇制官僚支配の伝統を彷彿させるものさえある」(二〇二頁)「教育におけるナショナリズムの盛行は、近代教育の特徴であったが、日本

においては、とくに天皇制の支配とあいまって、国家主義は極端化し、神秘化して、国民教育は臣民教育と化した」(二二頁)「日本の新しい民主主体制は、教育の体質を根本的に変革し、教師の使命を転換させた。……教師は天皇に仕える聖職者から、国民全体の奉仕者に転じた」(二二二頁、以上高木太郎)

ざつとこんな風である。平和とか民主主義とかを振廻はして、天皇制を悪玉扱ひするだけである。とても学問(教育原理)などといひ得るものではない。その粗雑さはあきれるばかりだ。

中村忠一著「日本化学工業史」(東洋経済新報社、昭和三十四年)では、開巻第一頁に「生産への近代化学の導入」の節で、「……国家はなによりもまず強力な近代的装備をそなえた天皇制軍隊の確立を必要とした」と。こゝで天皇制をいふ必要はあるのだろうか。今日、学者といはれる者達の頭の程度は、こんなものである。

併し筆者は、社史編修の仕事に携つてゐる関係で、労働組合の記録を調べて、思ひがけない記述に遭遇して驚いた。先づA社の「組合二十年誌」の一節に、終戦直後の国内情勢として、「天皇陛下下の人間復帰宣言……天皇陛下が総司令部にマッカーサー元師を訪問された。その時陛下が手土産として「ようかん」をお持ちになつて歓談されたようだったが、今にして想へば人間天皇としての御努力もさこそと想われる出来事であつたし、世の様の移り変りのあまりの激しさに転た感無量のものがあつた」



私はこの一文に心深く打たれた。天皇陛下、何とすなほな表現であらうか。この組合は、初の総評傘下であり、過激な運動に走り、企業の存立など眼中になかった。企業は傾きかけ、遂に従業員の中から組合民主化運動が起こって、総評を脱退した。

B社の場合はこれと異り、初めから非加盟で独自の道を行って来た。その「二十年史」に見よう。

『国内に目を向けると、昭和二十一年は、天皇の「人間宣言」によって幕をあけた、総司令部によって指令された種々の改革案は、憲法改正なくしては考えられないものであり、憲法改正の前提として、民主主義と相容れない日本人の精神状況を改めねばならなかったが、これが元日の「新日本建設に関する詔書」(人間宣言)であった』として、詔書の文章を掲げた。更に後年、その工場に御巡幸のあった時の一節は、「天皇陛下ご来場」として次のやうに述べてゐる。

「この日、幸いにも夜来の雨はすっかりあがり、さわやかな風薫るさつき晴れで、奉迎の会社幹部、従業員もよろこびに輝いていた。工場巡視の途中、染料部アゾ工場の前で車から降りられた陛下は、佐藤工場長の先導で、永年勤続者とともに労組幹部にも親しくことはを賜った」

「天皇陛下」、これが日本国民の心からの呼びかけである。期せずして両社の労働組合が、天皇陛下への真情を誰憚かることなく、すなほに、力強く吐露してくれたことに、私は深い感動を覚えた。

これが国民の率直な心であると思ふ。学者先生のやうにポーズをとったり、見せびらかしたりする必要のない、庶民のありのまゝの姿を見ることができた。

(三菱油化・社史編集室)

(賀状に)

名古屋 高橋 鴻助

早春 病癒えて

春日さし温とき芝に寝てをれば葉のなき枝の空に揺れをり  
身をつゝむ陽のうまささに天地の患おもひて眼を閉ちてをり

いわき 青山新太郎

朝雀さへづる声も明るくて晴れたる空に国旗かゝぐる  
元日の陽ざしあまりに明るくて嘘のやうなるおもひこそすれ

元日の子供らの声明るくて昼の障子の白きかがやき

富山 広瀬 誠

年の夜の暗きにおきて外見れば雪白々と降りしきる見ゆ  
雪降りて土を清めぬかくのごと荒びたる国清めたきかも

黒き渦とどろく大学あゝかくて日の本はいかになりゆくことぞ

年暮れて年あくるとききひたすらに御国の行末祈りてやます

## 野菊の山

三宅 教子

(岡山大学教育学部四年)

風はほんの少しばかり涼しくなってきました。何となくいそいで通りぬけて行くようです。深いみどりの山のすそのです。風は涼しげにかけっこをしていますよ。そのたびにつぼみをつけた野菊が心地よげにゆれるのです。そよ風のリズムに身体をまかせきって、うっとり夢見ているように……。

「可愛い野菊さん、つれて行ってあげようか。ぼくたちこれからずっと旅をするのだよ」元気のよい風が野菊を大きくくさぶります。

「どこまで行くの？」

「この山をずっと越えて——」  
その時野菊は、山を、その大きな山をはじめて見上げたのです。自分があまり小さなものだからそんなに大きな山がどっしりとそびえていようとは思ってもみなかったのですけれど……。野菊が驚いて目を見はったとき花びらががすかに開きました。

「こんにちわ、山さん」

野菊はせいっぱいのあいさつをしたのですけれど、それは声にはなりません。心の中でもぐもぐしただけだったのです。だってあまりに山が大きかったのですもの。山は黙っていました。まばたきさえしませんでした。笑っているのか怒っているのか野菊には解りませんでした。

したけれど、その動かぬ山の中には、力強いものが、ひそんでいるように思えました。野菊はもういねわりなんかしていませんでした。じつとじつと、ほんとにひたすら山を見つめていました。

お日様が西の方に傾いて、あたりはやわらかい紅に染まりました。野菊の頬はバラ色に輝やいておりました。何とその顔のかわいらしかったことでしょう。うしてじつと山を見上げていますと、静かな山の中には、あふれるほどの感情が動いているようでした。

「何と雄々しい方なのでしょう」

野菊はそっと小さな声に出してみました。その時お日様は、最後の光を山に投げかけました。山はほほえんだようでした。野菊はうれしくて、その夜はまんじりともしないで黒々とそびえている山を見つめておりました。夜の山はどことなく孤独そうでもありました。でもやはり、じつとして、堂々と坐っておりました。山は、その大きな心の激動をかみしめながら、遠い遠い所を向けているようでした。極みない夜空の星の彼方を見つめているようでした。野菊にはそれが解りました。野菊の見た星は、ちょうど頭の上に輝やいている星々でしたが、でもずっとずっとむこうにも星が輝いているのだな、と思ったのです。その時、山は低いうめき声をあげました。

野菊ははっとして息を殺して聞きました。そうです。山は泣いているのです。なげつ、なげなのか。野菊には山がなげ泣くのか、どうしてあげたらいいのか解らなくて、一人オロオロしていました。



それよりも驚いていたと言った方が良いのかも知れません。ただもう氣をほりつめておりました。

山は低く激しく、そして静かに泣きました。その声は、聞いている者の心をゆさぶらないではありませんでした。うっとりするような歌ではありませんけれど、心の底をゆり動かして、眠っているものを目覚まし、動かす力をもっておりました。

山は悲しいから泣いているのでも、又つらいから泣いているのでもないのです。それはあの無限の彼方への大きな大きな憧れから出てくるものでした。

野菊は聞いたのでした。しっかりと感動してしまつて、何を言うことも、思うこともできませんでした。そうですね、そんな時に計算問題なんかできるものですか。だからと言ってそれは頭の悪いことと一緒にではないのですよ。それは、これから太く強くなるための、そして計算問題よりも、もっと貴いものが身につくための大きな力なのですからね。

野菊はどうしたのか、ですつて？  
根をはりました。深く広く。そしてたくさんの花をつけたのです。そうすることが雄々しい山のすそ野に生まれてきた彼女にとって一番いいことだったのですから。  
(バルカノン第八号より転載)

各地大学の研修だより

編集部には、合宿教室に参加した各地の大学の研修グループから、お便りや写真印刷物を沢山いただきます。日本中のおど

ろくほどの多数の大学で、革命運動による破壊が次々に行はれてゐる中で、これと戦ひ、戦ひつゝ、学んでゐる学生諸君の動きを、その中から抜き書きしてお知らせしてみよう。

岡山大学バルカノンの会では、「明治百年祭粉砕」の動きが強かった大学祭に「明治維新の原動力を求めて」といふテーマの展示会を行った。(十一月二十二日〜二十四日)それに先立って、維新の政治過程、社会経済、世界に開かれる目、統一国家への動き、国学、洋学、尊皇思想、各藩の動き等八プロックに分けて分担研究し、週二回の中間発表、十一月十六、七日の合宿などを重ねて、「バルカノン第七号」(46頁細字騰写刷)にまとめ、大学祭で配布した。なほその後、三月発表を目標に、同じ要領で「安保問題の総合研究」を行つてゐる。

東京八日会(都下各大学々生有志)では、十二月七、八日に川崎市自協学舎で

(賀状に)

東京 沢部 寿孫  
ひよどりの鳴く声しきりぬ新らしき年を迎ふるふるさとの山に  
波頭ふりたて荒るる琴の海の真中を進みぬ小舟雄々しく  
たたかひのはげしさまきむこの年を生きゆく力神与へませ  
(きづなよ)

長崎 田川美代子

埋火の灰をかきつつこやみなく降りくるみぞれの音をきききき

合宿を行った。集るもの、東大・中大各四、早大・東工大・亜大・上智各二、法大・一橋各一、ほかに先輩四名。「講孟余話」の論議、東大生による共同研究「東大紛争」、体験発表、素行「謫居童問」に関する研究発表、和歌創作と相互批評小田村理事長の講義。研修を通じて「志をもつこと」「紛争の中といへども自覚を失つてはならぬ」「根本を踏まへた主張をする」と等々が繰り返し一貫して、討論の中心となつてゐた。

富山大学信和会では、十二月十四日から三日間、「学園に信の場を回復しよう」といふ呼びかけのもとに(本誌前月号紹介)熊野神社で行はれた。輪読、体験発表、和歌創作、中でも先輩岸本弘君の講義「祖国への道——信はどこに求められるか」、先輩中田一義君の体験発表「職場における信和会の心」、講師広瀬誠先生の講義「記紀の古伝承」は大きい感銘を与へ、紛争のために荒廃してゆく学

お隣りの赤子泣きたりそをあやす母の  
の声音もひそやかにして  
みぞれ降る寒き夜更はいとけなき幼  
心もわびしがるらむ  
久留米 久富 啓子

昭和四十四年元旦献詠

神前にぬかづき子と祝詞奏ぐ父のみ声の朗々たるかも  
古ゆ伝へ来しといふ大祓ひ無事につとめて年を送りぬ  
雪つげる声におどろき外に出れば小雪おどらす初春の風

園の中で、信和会の伝統を継承していこうとする強い意志を奮ひ起させるものであった。

長崎大学では十二月九日、有志百三十余名の奮斗も甲斐なく、ヘルメット赤旗角材の百数十名の三派全学連によって、学生会館前の防壁線を破られてこれを占拠され、更に十八日、佐世保帰りの他大、学三派系も不法入館を犯した。その時期二十四日から四日間、学生協議会(殆どの諸君が合宿教室に参加した)の主催で三十余名が集った。大村湾に臨む長崎大学「海の家」。講師山田輝彦先生の講義「至誠といふこと」、学生の研究発表、和歌創作。戦ひのさ中に作られた数多くの和歌があった。

編集後記 広瀬さんから巻頭の一文をいただいた。大晦日からの大雪で交通機関すべてとまった中を、郵便局に急いで投函されたのは三日の夕方とお便りにあった。それにも拘らず発行が大へん遅れて全く申し訳ない。御歌五首は、北日本、富山、北陸中日三紙に掲載、ほかに読売日経、産経に掲載分はこれと重複、また朝日毎日の富山版には一首も掲載されてゐなかつたよし▲東大問題は年初早々荒れに荒れて行くところを知らず。小田村理事長のご指摘は、国民としてまた人間としての憤りに発するものと見られる。ゆたかな国民同胞感は、厳しい道徳心であつて、思想学問の改革を支持するものはこの心をおいてほかにないのではないか。



# 国民同胞

発行所  
社団法人国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都中央区銀座  
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
下関市南部町25-3宝辺正久  
振替下関1100 電話22-1152  
毎月一回10日発行  
定価一部20円(送料別)  
(送料共) 年間360円

## 東南アジア旅行団帰国報告

団長 川井修治

### 一、関係各位に深謝

去る十二月三十日に神戸を出港、香港―マニラ―ミンダナオ各地を経めぐった我々旅行団十名(うち二名は学期試験のため、先にマニラより帰国)は、一月三十日に岩国に到着、全員無事に帰国することができた。一ヶ月の旅行間事故一つなく、皆が元氣旺盛に見学・研修の大事業を果し得たと御報告できることを、無上の喜びとした。そしてその後には、小田村理事長・田中理事以下すべての同志諸兄姉の配慮と憶念のあったことを銘肝し、ここに深甚の謝意を捧げたい。また加藤船長(八代の加藤理事の令弟)はじめ船員諸氏の温情と厚遇、小山海運関係諸氏の行き届いた配慮も、我々の旅行を快適かつ有効にするにあずかって力があったことを並記し、同じく謝意を表したい。

### 二、スムーズに運んだ旅程

東南アジア方面は我々にとって初めて

の旅行先であり、限られた碇泊期間の見学日程をいかに有効なものにするかが、当初からの気がかりの一つであった。ところが天の恵みか、そのすべてが予想外にスムーズに運び、まことに仕合せであったと思う。すなわち、香港では年頭のごったがえしの時期であったにも拘わらず、三日間の滞留をフルに利用し、香港島はもとより九竜から遠く中共国境の見学を果たすことができた。マニラでは領事館の方々の尽力もあって、フィリピン大学学生との交歓・座談会をもつことができ、更に翌日は現地大学生三人とタガイトイに同行することができた。ミンダナオでは、ブツアン・タガブリ・マナイの上陸見学のほか、一日は遠くダバオに宿泊、ミンダナオ大学の教官学生との座談会のみと時をもつこともできた。そしてその都度、見学や交流で得た成果を船中で討論集約し、或いはその印象を和歌に表現するといった深化定着のための時

間をもつことを常例とした。初めての旅行にしては、まず上出来の部に入れられるであろうと、誇らしくさえ思いう程である。

三、百聞は一見に如かぬ後進国の現状  
各地の見聞によって得た成果の詳細は、船路の船中数日をついやして作り上げたレポート(後刻出版予定)により、知っていただけだと思う。我々の概略のそして共通の感想の第一は「百聞は一見に如かず」ということである。例えば一口に後進地域と言われども、今迄それは単に書物の上の概念的知識にすぎなかった。それが今回の旅行により、その概念に生きた相貌が与えられ、また実情はありきたりの概念以上に複雑深刻であることを知ったのが、何よりの収穫であった。

香港は英領植民地であることは誰しも知っているが、その植民地体制というあり方が香港住民の生活に作用して、いかなる歪みと不幸と、そして絶望的とさえ言い得る無気力をもたらしているかを、我々は眼前に見ることができた。フィリピンは通念からすれば、東南アジアでは比較的進んだ国とされているが、その国にして「古代と近代の雑居」と評されるように、驚くべく前近代の要素が残存し、一見アメリカナイズされた近代生活の中に抜き難く混入している。政府の建設計画は立派にできているが、国民のレベルの低さ、財閥の専横、官吏の腐敗、密輸の横行、コネの万能……見るもの聞くもの驚きでないものはなかった。南方の住民は勤勞意欲に乏しいと言うが、こ

れなども一月というのに日本の真夏のよなな熱帯を体験してみなくては、とても理解できない問題ではある。ともあれ我々は貴重な「一見」の機会にめぐまれたわけであって、これが今後の我々の思想生活の上に、極めて有用な要素となってくれることを信じて疑わない。

四、外地より祖国を憶う  
収獲の第二は、日本を離れてみて、そして外国と比較してみても、しみじみと祖国の日本よき、有難さを痛感させられたことである。

植民地香港の東の間の華麗さ、希望なき現実主義は、言わずとも了解していただろう。独立国フィリピンにしても、千をこえる離島、多民族、多言語に分裂しており、統一国家としての機能は著しく阻害されているのが実状である。何よりもフィリピンの歴史は、スペイン及びアメリカの植民地支配によって中断されており、自らの、固有文化・精神の支えを持つことができない悲劇を担わされている。政府は国民意識を高揚するため、到る処にホセ・リサールの像を立てているが、学生インテリのそれに対する反応はあまり英敏

### 目次

- 東南アジア旅行団帰国報告……川井修治 (1)
- 東大に最悪の事態到来か……小田村寅二郎 (4)
- 「権利」という考え方について…加藤善之 (7)



ではなきさうだ。国民一般からも、活気と道義感に溢れた建設意欲を見てとるのが困難のようである。これが不幸にも統一と独立を保持することのできなかつた民族の宿命でもあるのであろう。

これと対比して我々の祖国日本は、早くから皇室を中心として国民的統一が完成され、それが代々の父祖の熱誠と努力によって連綿と伝えられて来た。我々の母国語・日本語は、馥郁たる伝統文化の香りを伝えると共に、我々の精神生活を細密にわたって表現する能力をもっている。それと、日常会話は土語（それすらも地域によって異なる）でやるが、学校の授業は英語でしかやれないフィリピン人と比較すれば、思い半ばに過ぎる可言えよう。そればかりではない。近代初頭以来の西力東漸に対抗して、見事に独立を守りぬいた日本の歴史、言い換えれば幕末明治の父祖達の奮闘努力が、いかに我々に幸いをもたらしてくれていることか。アメリカ文化の中に埋没し、アメリカにながしかの反感を抱きつつも、それから離れし得ないジレンマに悩むフィリピ



(神戸港にて、乗船前)

ンの知識人と接してみても、我々はいやという程独立日本の有難さと誇らしさを痛感させられたことである。

とも角、よるとさわる日本はいいなあ、日本は有難いなあの連発であった。

日本が熱帯にでなく、温帯に位置するという自然現象すらもが、我々の感謝の対象となつたという一事で、その間の消息を察していただきたい。

五、船内生活の厳しさ、和やかさ

一月の旅行期間完全に起居を共にする生活形体は、言うならば一種の長期の合宿教室と見てもよいであろう。ただ通常の合宿教室は四〜五日間で終るのに比し、今回は一ヶ月もの長い間息長く共同生活を維持して行かねばならぬところに難しい点がある。そのため工夫したことは、①共同研究としての全体輪読のほかに、各自がそれぞれの研究のテーマをもって替り番に発表すること、②生活規律は当番をきめ、その責任において厳格に実施すること、③時折コンパを行って和やかな気分を横溢させること、等である。

①については、各自が分担して訪問国の事情を研究発表すること、めいめいが得意とするテーマ（結果的には古典研究四、時事問題四となつた）についての発表との二種を課した。発表方法に巧拙はあれ、皆真剣に課題を果したと思う。

輪読テキストには、思う処あつて徳富蘇峯著『国史より観たる皇室』（新日本春秋社刊）を用いた。これは蘇峰翁が昭和二十一年遺言のつもりで執筆されたもので、憂国の感慨あふれる大文章でつづら

れてある。前項の日本のよき、有難さについての実感が、本書の趣旨とよく合致して、有意義であつたと思う。輪読のほか十名が次々に研究発表を行うのであるから、一日のうち少くとも半分は、この種の勉強のためにさかれた。

②当番には日直・日誌係・食事当番（二名）の三種を設けた。日直は朝の起床・体操・掃除に始まる一切の共同行動の指揮に当り、且つ翌日の日程表（団長室の扉に貼り出してある）を記入する義務をもつ。日誌係は毎朝の御製拝誦（簡単に感想をも述べる）を行なうほか、その日の日誌（書式は一定）をつける任に当りこれは一日も欠かさずに行なされた。

団員達は明治天皇御製をこのように継続的に読んだのは初めての経験らしく、御製がいかに博く深い内容を持つかに、あらためて感を深うしたというのが、異口同音の告白であつた。食事当番は食膳の配置・後片づけ及び夜食準備を担当し、これまたまめまめしく皆のために世話をやいた。こうして、長い期間生活規律は一条も乱れず、共同生活の実を挙げることができた。団員達も非常な気力をもつて任に當つてくれ、船酔いしひどい時など、任務である以上ふらさへながらも頑張る姿は、涙ぐましくさえあつた。

③時折のコンパは皆気心を知る仲だけに、まことに和気藹々たるものであつた。香港で購入したナポレオンが一層のきき目を発揮したことも争えない（但し酔うはよろしいが酔っぱらうてはならない、という団長の厳命が、終始守られたことを付記しておく）。その他輪投げや

百人一首（正月を過すのでわざわざ準備した）、また船員チームとのソフトボール大会（赤道に程近いタガリ海岸で、大汗をかいてソフトボールに興じたことも忘れ難い思い出となる）等々、息抜きには事欠かぬ快適な一ヶ月であつた。特筆すべきことは和歌創作であらう。

一ヶ月間に五回の和歌創作（総計五百首に近い）と相互批評の時間をもち得たことは、いささか鳥藩がましくはあるが、我々の内面生活の律動の一端を表示したもの、と言えるのではなからうか。

六、今後への決意

旅行中日本の状況については、船で受信するテレタイプにより、ほんの概略のことしか知るを得なかつた。我々の思いは片時も祖国を離れたことはないのであるが、その祖国の状況をさだかに知り得ないということは、旅行中に感じた唯ひとつのもどかしさであつたと言える。しかし、今その祖国の土を踏んだ我々の胸奥からは、なみなみなならぬ決意のあふれ来るのを、全身をもつて感じつつある。我々が愛して止まぬ祖国の地、我々が生命を賭しても護らねばならない運命の地は、ここを指して外にはないのだ。

一ヶ月の海外旅行は、就中、心知る友等と真情を隔意なくかわし合つて過したこの一ヶ月の旅行は、我々の心を逞ましくきたえ上げてくれた。我々は我々の前途に山積する課題に対して、とりわけ祖国の生命を防護する思想のたたかきに対して、一切のためらいを振り捨て、真向から立ち向つて行くことをここに誓うも



のである。(本会副理事長・鹿児島大学  
助教授)

鹿児島大・法文3 松本 昭

香港にとどまり住める人々は国を求むる  
心失せしか

日の本の国の命はいにしへゆ絶ゆること  
なく続きをるなり

いにしへゆ続ききたりし日の本に生を享  
けしを賞しと思ふ

一橋大・商2 北川 文雄

沖繩慰霊追悼式にのみて  
せつせつと思ひこめたる師の御声聞くわ  
が胸に熱き思ひ湧く

この海に御国守らむとたふれたる先人の  
思ひを継ぎ行かむ我らは

早大・文3 広瀬 清治

香港ハッピーバレー

過ぎし日にあまた人々の命かけ戦ひなせ  
るここ激戦場

建てられし忠霊塔の見えくれば散りにし  
人のひたに思はる

くるしかるらむことのくさぐさ思はれて  
たふれし人をひとりしのばむ

岡山大・医2 田中 輝和

鄭彩雲さんの熱心なガイドに接して

香港を正しく理解させむとて語らるる君  
の声高くして

質問のひとつひとつにまごころの限りつ  
くして君は答へり

香港の町の光とともどもに思ひ出さるる  
君がまごころ

長崎大・経3 佐藤 健治

ルネタ公園にて

国愛し独立のため殉じたるホセリサール  
の像のたちたる

像の前に銃を持ちたる兵士立ち独立の志  
士まもりをりたり

天あふき国のゆくす系祈ること足踏みは  
れり青銅の像は

副団長・九大大学院生 行武 潔

一月二十九日帰国を前に全体感想発表  
を聞いて

ともどもに謙め交しつ過ごしたる一日一  
日の想ひ出されぬ

日の本の天皇の尊さを今こそ知りぬと友  
らは語る

我も知りぬ国の真柱通りたるこの日の本  
の尊き姿を

一月をともにすごせし友とちと明日別る  
るはさびしかりけり

明日よりは別れ別れになりゆくも忘れざ  
らめや旅の草々

帰国

一と月の旅路終へたる我らいま日の本の  
地に帰り来りぬ

船ははや延岡の先すきゆきて豊後水道に  
さしかかりたり

日の本の土踏むはすぐ船はいま瀬戸内の  
海進みをるなり

吹きすさぶ風冷たかり南の国経めぐりし  
この身なりせば

我が帰国喜びくるるか大かもめ寄りつ離  
れつ船の後追ふ

団長 川井 修治

帰国の船中にて

一月の旅路を終へて船は今帰りつきたり  
瀬戸内の海に

速吸の瀬戸すきゆけば風をはやみ波立ち  
さわき白泡を噛む

右の手にま近く見ゆるは四国のや佐田の  
岬かよばひてやみむ

左手に遠くかすむは九州の島とし聞けば  
なつかしきかな

はろけくも旅しつるかなみんなみの常夏  
の国のこととも思へば

みんなみの旅を行きつつ片時も忘るるこ  
となしめぐし故国を

久々に帰りつきたるふるさと空はくぐ  
もり風寒きかも

日の本の行手危ふし天空をおほひし雲の  
乱るるがごと

我ら今奮ひ立たずば一月のむすび固めし  
甲斐なからまし

今宵一夜あくれば別るる時なりと思へば  
いよよ名残惜しけり

ちりちりに別れ行くとも変らじなますら  
たけをの立てし誓ひは



# 東大に最悪の事態到来か

小田村寅二郎  
(本会理事長)

東大の加藤執行部が学生集団との間に、去る一月十日署名した例の十項目確認書に対し、文部省は、遅まきながら二月八日、公式に「見解」を表明、

①学生に対する懲戒処分を暴力事犯まで処分の対象とせず、大学当局が学生側と過失相殺の形としていることは、結果として学園内の暴力を容認するおそれがある。

②警察力導入、捜査協力、学生・院生の自治活動の自由は、学生自治組織の性格、目的、規約、経理などの実態を明確にせず、政治的中立の保障がないまま、公認するのは、学園の秩序維持のうえに禍根を残す。

などの点を指摘し、さらに学園紛争の解決を急ぐあまり、大学当局が学生との間で、将来の大学運営に禍根を残すような措置はとらないこと。また、紛争解決に際し、大学制度の基本にかかわり、あるいは他大学に影響するような事項については、慎重を期すること。

と強調し、東大当局の独走にクギをさした。(二月八日毎日夕刊)

この文部省「見解」はもととも一月十八、十九両日の安田講堂への機動隊導入に先立って公表せられるべきもので、当時の話題を集めていた、入試是非の決定

如何よりも、東大紛争の内容からは、実は一層重要な課題であった。しかしとにかく可成り明快な文教当局の「見解」が出されたことは、何よりも適切かつ喜ばしいことであった。

ところが、この文部省「見解」に対し東京大学は、その翌日、ほぼ真向から対決の意志を示すかの如く、十項目確認書(二十六細目のうち学生側代表の全員が署名している十五細目について)の承認(批准)を敢行した。すなわち文部省「見解」の出された翌二月九日、日曜日にもかかわらず、東大当局は、午後二時半から十日早朝におよぶ評議会(東大において最高機関)を開いて問題の「十項目確認書十五細目全部」にわたって、何らの反省の色も示さずに、これを原案通り承認という挙に出たのである。

東大教官たちのいう「大学の自治」も学生をして言わしめている「学生の自治」も、もうここまできては、何らの権威もなくなくなってしまった。暴力を容認する大学などというものは、世界に一つだけ例があるわけではないし、固有財産の管理者としての責任感すらすでに全く喪失してしまっている、これらの思い上がった「自称自治者」たちは、日本以外の何処の国で安住の地を見出せるつもりでいる

のであろうか。二月九日の東大評議会の決議なるものが、もし、引かれ者の小唄の部類でなければ幸いである。とにかく東大紛争は、ここで一段と複雑化へ突入するわけで、(大学)対(学生)の対決に加え、(大学・学生)対(政府)の対決をそれに加えていくことは必定の形勢となった。

さて、私は本誌前号において、東大加藤執行部ならびにそのブレインの人たちの言動について、「何とも理解しかねることの統出」と題し、一月十日の秩父宮ラグビー場での大集会における対話内容および、十八、十九両日の安田講堂攻防戦の折の発言などを取り上げ、東大執行部当局者に対して、抑え難いくつもの疑問を投げかけたが、ここではさらに本質的な問題に言及したいと思う。

しかし、大学紛争における本質的な問題と云うと、すぐに、現在の大学の機構とか制度とかが取り上げられ、東大についていえば、マスプロ教育からの脱皮を急げ、に始まって、医学部内の徒弟制度的上下関係の改善とか、あるいは大学の自治の実体がいままで教授会の自治でしかなかったから、これに院生、学生を加えて名実ともに全学的なものにせよとか、あるいはマンモス東大を解体して大学院大学にした方がよいとか、等々が、いかに紛争解決の本質的課題かのごとく指摘される。それらの課題は、それぞれそれなりの意味を持ち、たしかに大学紛争の原因と関係をもつ本質的なものに相異なるまいが、しかし、制度・機構に

属する改革・改善は、一朝一夕に出来るものではない。まして東大などは、国立機関であり、僅かな改革にしても、文部省の立案、議会の協賛を経なければ実現の運びに至らない。事が大学に関することともなれば、拙速を尊ぶといっても限度がある。中教審の答申待ちの課題も山積してしまっていて、果たして当面のことにどれだけ役に立つかわからず、紛争解決への名案を、中教審の答申に過大に期待するのも無理のように思われる。

そこで、次第に泥沼化していきつつある今日の大学紛争に対して、「本質的な問題」と題して、政・財界その他有識者、評論家などから沢山の問題指摘、問題提起が出されてきているが、いまこの時点で扱うべき「本質的な問題は何か」ということを、まずこの際のはっきりさせてかかる必要があると思う。

本質的な問題とは、大学は、学生が学ぶために集まる所であるから、勉強ができる、ということが、すなわちそれである。勉強ができる雰囲気を持ったキャンパスは、すでに大学ではなくなっていると考えたい。学ぶことさえ出来れば、寺小屋でも塾でも、施設と教官の多様性を除けば、なにも大学に劣ることはなからう。そこで、大学紛争の解決は、あるべき姿における学ぶ場を取り戻すこと、その一語につきると思う。極端にいえば、制度も機構も、そのこととの関連においては、二の次、三の次の意義しか持ち得ない。それにあわせて第二に念頭に入れるべきことは、なぜわが国においては、こう



も大学入学希望者が増大したのか、入学した学生に対して親たちはよくその莫大な経済的負担に耐えてきているが、それはなぜであろうか、という点である。われわれ日本国民は善い意味にせよ、悪い意味にせよ、とにかく自分の子女の教育については、ことのほか熱心であり、真剣であつて、いわば親たる者の生活信条の第一がその点に集約されていることは、今にはじまつたことでもなく、いわば、有史以来ともいふべき、国民的特質の一つをなしてきたものであつた。日本において大切に守られてきた師弟道なるものは、その名称こそ支那から伝来した儒学のもたらしたものであつたが、その中味であるところの、自分より秀でた者を尊崇し、学び足りないところは無限に学びつくさなければやまない、という心情は、日本人の本来の身についたものであつて、師弟道が日本に開花したのも、実をいへば、その日本人の心情が先に存在し、その基盤の上において開花したものであつた。この日本人本来の、学んでやまぬ心こそ、親たる者の子女の教育に対する異常な熱意の本体であるから、子女を学ばせる学園紛争の長期化は、日本の親たるものに取つては、どうにも我慢のしかねることであり、絶対に妥協のできない問題である。この親および学生自身がその心の内奥に持つ「学び」への欲求を、ともかくにも満足せしめる事態にすることが先決である。その意味で、今日における大学紛争の本質的問題とは、今日の問題の特質にかかわることなく、紛争そのものの早期解決に集約されなく

てはならない。

つい先ごろ長友伊沢甲子磨氏のはからいで、安岡正篤先輩と御懇談の機を得たが、その折安岡氏は、カルフォルニア大学の政治学A・ターナー教授の発言をお話くださった。それはアメリカでの大学紛争についてのことか、あるいは国際会議のようなところで、世界的なスチューデントパワーについてのことであつたかは聞き洩らしたが、とにかくある会議の席で大学紛争の解決策が色々と討議された折、ターナー教授は黙つて聴いていたが、やがて発言を促されて言うには大学紛争の解決には、ただ一つ、本源にかえれ、ということしかない、教授があるのは教えるためである。学生があるのは学ぶためである。管理者があるのは管理するためである。それがその通りであればいいのだ。それだけである。という発言があつて、列席の人々の心を強く打つた、というお話であつた。そして安岡氏は、全くその通りで、支那の書「大学」に、そのことは明快に指摘してある、と目付け加えられておられた。今更、古書「大学」でもなからう、という人々もあられようが、紛争にあけくれする大学を再び静謐冷静な学園に立ち返えらすためには、やはり教育そのものに必然的に附帯する諸条件、諸制約を無視するわけにはいくまい。そしてそれらの諸条件、諸制約は、教育の方式が時代とともにいくら変遷していても、先立つ者が後を導き、後なる者が先を敬していくについては、人類における不変の鉄則があつて永

久に変わることはあるまい。学ぶ者の喜びが、教える人の馨咳を通じ、古人の息吹きに触れて生まれることも、古今同じであろうし、また教える者の生き甲斐が教える子の頭悩の生長のみならず人間としての内面的な生長をみつめる所にあることも、いつの世にも同じであろうと思ふ。

教と学の本義を、もしここに把え、かつ、それが大学においても絶対に欠けてはならない、との認識が確立すれば大学紛争の多くは、解決への曙光を見出すに相異なる。東大に例をとつてみてもわかるごとく、一般学生が、この一年間のストさわざと、ようやく倦怠を感じ、一日も早くまたもな授業の再開を祈り続けている実情は、実は、「学ぶ者」としての自覚が、自然によみがえつてきていることの証左である。また善意の教官たちが同じく静かな学生生活の復活と、教官としての本来の生甲斐に立ち返えれる日を、一日千秋の思いで待ち望んでいることも、同じく教官としての本然の欲求に外ならない。いまの東大内に欠けているのは、この学生と教官の本然の欲求を、素直に具現する勇氣だけである。この勇氣を振り起こして、各自の本然の欲求に向かつて自己の言動を集約していきさえすればいいと思ふ。しかし、それができなければ一切がダメにならう。いつまでも大衆団交だの、学生の固有の権利だの大学の自治などと、わめいている時ではなからうではないか。

そこで、具体的に必要なことは、教官が教える者としての自覚に立ち返り、学

ぶ者の立場と自覚を踏みはずしたような学生に対しては、今までのような妥協的・人気取りの態度を一切改めることである。入試が不可能になつたといつては、学生といつしよになつてデモつてみたり、そうかと思つと、次には学生に軟禁されたあげく、逮捕学生の保証金の支払いまで承知させられた田村教養学部長(東大)のプザマな教官ぶりや、全学連の暴力は否定しながら一方では現秩序否定に専念する日共系には、ねんごろに意を通じて恥じない教官たち、これらも、大学紛争の震源地であつたことを考えれば、すべては解決に向かうはずである。それに目を蔽う限り、東大に教と学が復活する見込は立つまい。良識ある教官がもし大学の正常化に真剣な決意を定めれば、教官の資格なき徒輩らといつまでも同席することもなくなるであらう。またいままで「大学の自治」の幻影に惑わされて、学生らからぬ学生に迎合を事としていた教官たちも、教える者の自覚に立ちかえる勇氣を取り戻していただきたいものである。長期にわたる紛争を通じて、われわれ局外者にもはつきりしてきたことは、学生の軟禁に屈しなかつた林健太郎文学部長、全学的非難に耐えぬいている豊川前医学部長たちの、信念ある一貫した姿勢が、意外にも良識派の学生たちの尊敬を集めてきている、という事実である。先生らしい先生、時に叱りとばして訓戒してくれるような気骨のある先生、その先生の一人でも多くあれかしと祈っているのが、現東大の一般学生のいつわらざる心境ではなからうか。全学



共闘にいつまでもお世辞をいい続ける加藤ブレン、秩父宮ラグビー場で、日共系学生の前にひたすら懺悔反省のみをくりかえした加藤ブレン、それらは、学生の本質的、本源的な教官尊崇の観念を根こそぎに奪い去ってしまったのである。この点に東大執行部は、どうか一日も早く気づいてもらいたいものである。

**紛争解決への最低条件**

改めて指摘するまでもないことであるが、ここ数年來の大学紛争は、ごく少数の例外を除いて、ほとんど同じような学生経過を辿っている。この発生経過を、大学当局者が「教える者の立場」をふまえて直視してきておれば、決して今日のような混乱を招くことはなかったと思われる。遅ればせながらも、そのことを回想して、過去の時点で、いつ、どうして誤まってしまったか、を正確に押らえることも、この際大切なことではなからうか。よって以下に記すことにした。

① まずはじめに、一部の学生の中に、「大学騒動を発生させようとする破壊意志」が先に存在し、

② 「騒動のキッカケになるものを鵜の目鷹の目で捜すことに、彼らの学生生活の意義」を求めていたこと。すなわち「騒動を誘発する計画とそれを実行にうつすプラン」が先在し、

③ それが見つかること、「善意の学生の素朴な正義感を駆（か）り立て、咳（げ）しか）ける」作戦に転じ、

④ そこに「大多数の学生の暗黙の了解

と支持を取り付けるため」に、彼らの主張を「喧嘩な集会の積み重ね」の中で、いつしか「全学的意見であるかのようにまとめあげる」

⑤ そしてひとたび獲得したこの「全学的支持らしきものをもって、大学当局との対決にはいる」という順序である。

紛争発生過程にみられるこの経過順序は、紛争の主導者が全学連三派の場合も、代々木日共系の場合も、少しも変わりがない。ただ相違するのは、その間の行動の中に、常規を逸した暴力行為を含むか、適宜に暴力を振うか、の点だけであって、一番最初に、すべてに先立って存在していた「破壊意志」そのものは、何の本質的の差異もみとめられない。

そこでこの経過の中でわれわれ国民がよく注目しなければならぬのは、彼らの紛争誘発計画に乗せられて登場する、一見全学生の意見なるものの構成の中味についてであって、そこには「現秩序を否定してかかる破壊意志」と「現状の缺點に気づいて、これを改革しなければならぬとする改革意志」とが、常に混合し時に競合しながら推移している事実である。現状を不満とする感情や判断は、若さと正義感に燃えるまともな学生たちから、いつも潜在している貴重な心情であるから、一部の策動家に煽動される危険にさらされていることも当然で、その結果、時として多くの学生の内心に「改革意志」を固めさせることがあることも、ごく自然の成り行きである。しかし、そこに生まれる「改革意志」はあくまでも

自己の現実的立場をそれなりに自覚し、邪悪なる現象的事象を矯正させようとする「改革意志」の枠内のものであって、一部の策動家たちのもつ社会機構の否定までも含む「破壊意志」とは、本質を根本的に異にするものであることを見逃してはならない。

そこで、大学紛争発生初期にみられるこの「破壊意志」と「改革意志」との混合体としての「全学的主張」なるものに対して、大学当局者たちがどういう心構えで取り組むかがきわめて重大なポイントになってくる。そして今日までの大学紛争で泥沼に墮つたものも多くは、この時点において大学当局者たちが、用意な取り組み方、すなわち、この混合体をもって、まともな学生として扱おうとしたことに起因している。それがまづかった、と気付いてもらいたいものである。

理由は至極簡単である。「破壊意志」の持ち主は、相手方の扱っても立っている立場そのものを否定してかかる。この否定的姿勢をこちらが確認した場合には、そこにはすでに「対話」の可能性がなくなっているわけで、これをまともな、学生だから、といって相手にする必要はなかったのである。破壊意志の持ち主といっても、個々の学生と、個々の教官とのつき合ひの場合には、それはなお人間の努力の効果が現れる余地が残されているが、公的折衝の場においては、対話は成り立たない。当局側がいくら「対話」だと主張してみても、客観的には教官と学生の対話というには、全く異質

のものが生まれてしまう。秩父宮ラグビー場での集會が、それを如実に示しているではないか。

相手の責任を追求し合うのは、「対話」ではなくて「談判」の部類である。談判なら談判らしくすればいいのであって、学生が学生らしくしなければ、当方は教官らしく首尾一貫していればそれでよい。それでは談判は決裂するだけではないか、ということになるが、決裂をおそれては談判の場にのぞむことすら間柄がっている。相手の誤りを指摘するに憚病になってしまった教官たちでは、いかんとも「談判」の場に登場する資格はなさそうである。そこではっきりしてやることは、

① 学生側のいう大衆団交などには（名目的には集會でも実質的には俗にいう大衆団交と同じような、多数の喧嘩さで相手方を圧倒するもの）、絶対に応じてはならないこと。

② 教官との会談の場で、ヘルメットをかぶったり、自己所属の派閥の腕章をつけたりする学生がいる場合には、直ちに会談を中止すべきで、あくまでもその大学の学生たる共通の立場に立たしめること。

③ 教官に向かつて「この野郎」とか「バカ野郎」などの罵声が発せられたときには、その発言者を直ちに確認するまで会談を中止すること、同席の他の学生がそれに協力しない場合もまた同じであること。

④ 多数者で一人または少数の老舎の教官を吊し上げるような、青年としてある



まじきフラちな行動は、絶対に学内において容認しないこと。

⑤公共の器物破壊が許されざることを社会通念を厳守するために、学内におけるゲバ棒その他武装を一切禁止、これに込せざる者は処分するも致し方なきこと  
⑥ましてや、学園にあるまじき暴力行為は、これを寛大に見過してはならぬこと。

以上の六項目は、大学の現場に多大の不満を持つ「改革意志」者たちでも、おそらく異議をさしはさむ余地はなからうと思う。通常の社会においては当然すぎるほど当たり前な事柄だからである。もしそれに疑問があるならば、私は提案する東大執行部は、全学生に対し、記名による返答を集めてみられよ、と。私の推測では、少なくとも70%以上の同意回答が得られると思うからである。

とすれば、大学当局が、これらの良識ある学生に呼応し、この六項目を堂々と宣言してこれを実行に移さず開かれ、大学紛争の解決への道は必ず開かれるに相異ないと思う。ただそのためには、東大評議会自ら、二月九日の評議会決定を、白紙撤回する大英断が絶対に前提条件になる。それが出来ぬというならば、もはや致し方はない。

いずれにしても、法規や規則がどうであろうとも、学生の本分を逸脱した学生を処分できない大学、国立大学の教官たるにふさわしからざる言動をほしきままにする教官を、大学から排除できないでいる「大学の自治」、ならびに、法規上、政府側は不届きな教官でも罷免できない

のだ、といつて、いつまでも見送っている文教当局と政府、これでは、大学紛争の解決は、絶対に不可能ではないか。私は東大生七〇パーセントの良識ある学生が、かわいそうでならない気がする。彼らを遂に見ずするつもりか、東大執行部および政府筋にあえて問わざるを得ない事態となったようである。

### 『権利』という

#### 考え方について

加藤 善之

『あなたは毎日生活していて、権利々ということばを実際に使用してみたり、その言葉を本気になって使う必要を感じたことがありますか』

このような質問を人に投げかけた人はありませんでしょうか。私は時々これやってみるのがあるが、すると、そう言われてみるとそれ程の必要性や痛感はないようです。といった程度の返事がはね返ってくるのである。

このような質問を私が考えた理由は単純である。テレビのドラマや解説、何らかの宣言や声明文、その他公の文書などあまりにもしばしばこの言葉を耳にする程それほどには私の実際の生活の中で、その言葉の必要の体験がない、という事からである。公害とか労働基準法などのからくる必要性はわかるのであるけれども、どうもこの言葉が人と人との関係に於て使用される場面に出くわすと、どうしてもそれ程の必要がわからないので

ある。

特に親子間や兄弟間や友人間などで使われるなどということには全く想像だにできない。時があるとしても冗談まじりに笑ひ飛ばす程度であろう。それが本気で使われるような家庭なら、それはたゞ事ならぬお家騒動でも起っているのではないかしら、と私は思う。ドラマの中など、なごやかで所謂民主的な家庭を描いたような場では、この言葉がよく使用され、各自分の人間を尊重しあうような情景が画面にうつしだされる。だがどうもそれが腑に落ちない。どうみても相手に迎合して、自分の本心を述べあっているとは思われない。人の心と心の間に距離を意識的に置いている。何か避けようとする。人間尊重などは認めてもあるまい。お互にお互のエゴを認めようという程度の事であろう。と思われるのである。

戦後二十年間、学生時代の試験勉強か、何か裁判にでも関係した事を処理する時か、そうした場合以外には、この『権利』という言葉の必要を感じた事は私には一回もない。心の底から、押えがたい渴望にでもなされて『権利』を主張しよう、主張しなければ大変だ、生きてゆけなくなる、などと思つた事なども一度もありません。こう言えば、世の学者文化人先生に戒められるかもしれない。今日では国際人権年という言葉さえもある時代であり、基本的人権ということは全世界共通の理念でさえある、とするならば、この『権利思想』とは一体何である。君のようなそうした考えが封建

的思想の残滓であり、古い。そういうことだから自我や自主性の成長をきまげ長い物にまかれてしまひ、日本の近代化や合理化がすまぬのだ。」と、相手にされないかも知れない。ほんの二・三年位前までは、このように言われると返事に困って黙ってしまったらどう。まあ言うとしても、「権利には義務が伴うものであり、自由の権利は他人の自由の権利も認めた上での事である、という事ぐらいはわかりますが」などと書物の受けうりの返事ぐらいしかかもしれない。然し乍ら、今の私ならばこう答えるであろう。「冗談じやない、権利意識に目覚めなければ生きてゆけないような、そんなとてつもない世の中にならば、大変な事である。一体先生は一人一人に権利を自覚めさせて逆にそんな権利を主張し合わなければ生きられないような、そのような大変な世の中に逆もどりさせようというのですか」と。そうすれば、「何を君は言うのだ。そのような大変な世の中にならば、権利を主張するのだ」と返ってくるかも知れない。ところが現実はどうであろうか。事実は次第次第に、御希望通りの、即ち、権利を主張する事を当り前と心得るような世の中に近づいてきているようである。そして面白い事には、それを最も強く教えている大学の中に於て、自らの教えた学生の方から自らにそれがはね返ってきた。まさしく御希望の青年が育つた訳である。君達の言うことはよくわかる、とうなづく外はあるまい。一人が『権利』という事で主張しはじめるならば、その



周辺の他の人々も又、少くともその人に對しては、權利思想を以て對するようになるのが普通だろう。そこに、真心から話をする心の姿勢が生れない限り、そこには話合いの場は発生しない。そこから人々は個人主義の傾向を辿る、そして人を信用する事をやめる。人は孤独の世界に沈むか、大集団的な普遍性、共通性の中に逃げこもうとする。(それは政治の世界にしか通用しない思潮につながるのである)即ち個人主義は孤独と大集団行動の中に於てのみ活路を見出す。数人、十数人の心知る友というような仲のよいグループ、親友同志などという世界は発生しなくなる。權利意識への目覚め、それは結果的には人を個人主義利己主義へかり立てるものになつてくる。

一体、權利、義務などという概念はどこ誰が、そして又どういう訳があつて考へ出されたのであろうか。それはこういう事ではなからうか。—そのような概念の下に生きてゆくことによつて、人々は協同生活が可能であるにちがいない。こうした概念が一般的に確立するのでなければ人間相互の協同生活が困難である。そうした概念の存在を許容する社会が確立するのでなければその世の中で生存する人々の生活がおびやかされる。そのようなおびやかす何らかの存在がある。—その存在に抗して生きる為にはどうしてこの概念が必要であつたのであろう。その何らかの存在とは何か。それを色々考へてみると、支配者とか、力をもつものとか出てくるが、つきつめてみると、し

よせん人間そのものらしい。その人間とは自分を除く他の人のことをさすようである。即ち、人間不信、人は信ずることができないものである、ということらしい。何らかの存在とは即ち人間を信ずべからずという確信のことであつた。いずれにしても、この概念を考え創り出さざるを得なかつた民族、社会集団は余程人間関係に間隙が多かつたに違ひあるまい。よほど争奪の激しい、人を信ずれば死に至るような世の中であつたのだらう。それとも何らかの巨大な力によつて日常の生活が圧迫されていたのであらう。恐らくそうした体験が長い間、何百年も何千年も続いて、どうしても信頼し難い事が余りも多く、それを克服し而もお互いに共に生きてゆくならば、斯る概念の上にも立つて、一人一人が武装できなくなればとも人間関係が維持できなくなる状態にあつたのではなからうか。剣と銃で自らを守らねばならぬ時代から、剣と銃を捨てねばならぬ時代に変つてゆく過程で、人々はそれに代るものとして、この權利という概念を創り出したのではなからうか。人と人とが心を通わせ信頼を寄せあつて集団生活をするそうした情緒でつながるといふ姿勢が中心に存在したい世の中にあつて、その情緒の面を捨象して、人間関係を權利、義務という取引の概念、いわば商取引の感覚で合理化し論理化整理して、それをお互いがわきままておくならば、形や論理で表わし難い人の心を信頼したり配慮したりするわずらわしさからも解放される。その代り自分は自分だ、というわけ

であらうか。仮令、それが個人主義、利己主義として相對立することがあつても權利、義務の概念の下に合理的に始末しようではないか、となつたのではなからうか。

よく考へてみると、「權利」という言葉の背後には「讓歩しない」「一歩もゆずらぬ」という含みがある。一体この強い意志、思想は何処から出てきたのであらうか。それは讓歩することが自分が生きられなくなるからであらう。こうしたことは、余程の「耐えがたい」体験が長い間続いた上でのことであらう、それとも、それほどに譲りがたい、守らねばならぬ何ものがあつたのであらうか。その通りである。そのまもらねばならぬの、それが生きるということであり、生きる權利、基本的權利ということになつたのであらう。こうした止むにやまれぬ思いが相當の根強さで人々の生活の中にあるのでなければこれ程普遍化する筈がない。ところが、私などはその必要性を殆んど感ずることがない、何か裁判沙汰にでもならなければ必要はないわけだ。

私にとって權利という言葉は未だ日本語になりきつてはいない理解しがたいものである。この言葉を使用することはまことに不本意である。權利思想それは人間不信という裏腹のパラドックスなのではないだらうか。それを主張する事は人を信ずるなど主張する事につながるのでなからうか。とするならば世界中がその渦中にある事になる、私が一人狂つていたのであらうか。

權利の概念が、若し今日に至つても尚

且つ人の内心に於て劍の代行を意味するのであるならば、即ち斗争と、人間不信を基底とするこの權利意識に立脚する民主主義の基盤はまことにあやしいと云わねばなるまい。そうした内心の存在する限り、民主主義が如何程理想化されようとも平和なぞは望むべくもあるまい。問題は民主主義に問題があるのでない、それは手段にすぎないから。そうした民主主義を生み出し、そしてそれを維持しようとしている内心そのものが問題なのである。もう一つ突つこんで云うならば、そうした民主主義を守らうとする精神構造は即ち、人が自らのエゴを守らうとする意志と、人は信じ難いものだという不信と、人生とは勝つ事である、人を倒しても勝たねばならぬという斗争心との三者から脱却する意志をもたぬ、という事を意味する。そうして脱却の意志が再認識されることなくして、民主主義の標榜はナンセンスであらう。

(山陽電軌山口営業所長)

編集後記 本会が派遣する海外旅行、本年は貨客船春光丸(四九〇〇トン)によつて一ヶ月にわたる東南アジア見学の旅に向ひ、川井団長以下十名、全員無事に去る一月三十日、岩国港に帰投した。目的を十分に達したその状況は掲載の記事にご覧いただきたい。広袤幾万里の洋上に英靈を偲び、またはじめて異国異民族にちかふれて祖国の活路を思ふ、異民族にたい経験の一端が知られる。すばらしい成果であつたと思ふ▼先月号につづいて小田村理事長の、大学問題に関する警告を載せることができた。事態は非常に深刻である。「破壊意志」は全国的に展開してゐる。明らかに察せず、勇気をもつて当らない、大学当局の迷蒙を断たねばならぬ。





発行所  
 社団法人国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都中央区銀座  
 7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
 下関市南部町25-3宝辺正久  
 振替下関1100 電話22-1152  
 毎月一回10日発行  
 定価一部20円(送料別)  
 (送料共) 年間360円

# 悲しみの感覚

(The sense of sorrow)

漱石は晩年学習院の生徒に向って講演した「私の個人主義」の中で、学問の目的、人生の目的を模索したあげく、「自己本位」の四字にたどりついて、ツルハシで脈脈を掘りあてたような喜びを感じたと記している。その「自己」とは、漱石にとっては「他者」に対する「自己」であると同時に、「他国」に対する「自国」の意識であった。そして、その強烈な自覚が外ならぬロンドンの客舎でなされたことも注目されてよい。いわば「自己」とは、「インディヴィジュアル」であると同時に「ナショナル」なものである、この二つの側面を支えたものは実に「土魂」であった。明治のいわゆる士族知識人の精神構造の典型の一つがこゝにある。このことについては前に「漱石とナショナルリズム」という短文でふれたことがある。

別の例を一つあげてみる。それは一貫して反体制の側にあった内田魯庵のこと

である。彼は「暮の二十八日」という社会小説の作者としても有名であり、プロレタリア文学などの系譜の先駆者として見られているが、彼は乃木殉死に際して、自分は常に思想上の新傾向の味方であるがと前提しながらも「勇気なき、確信なき新思想家輩もまた將軍墳墓の土塊を以て持棄とせられんことを欲す」と断言してはばからなかったのである。このように思想の相違を越えて人の至誠に全身的に共感できたところに、明治という稀有な時代を現出した根源があるであろう。これを志賀直哉が「下女の死」に比較し武者小路実篤が「人類的でない」と批評したことには思いくらべると、明治と大正の断層の深さに愕然とせざるを得ないのである。

その漱石が明治三十七・八年頃に書いたと思われる「英文断片」の中に次のように記している。これは世の「紳士淑女」に向ってなされた弾勁の言葉なのであ

るが、その中に「私は諸君の道徳的安全性に向い合った時、悲しみの感覚によって圧倒されることが時折あり」と記している。Moral safetyは、直訳すれば「道徳的安全性」であろうが、それは既成の道徳律に安住した、陽気な自己満足をかき立てるのである。そこには、道徳といふものは常に意志の緊張に支えられていなければならない、たちまち背徳に墮してしまうという、人間のかなしい性に対する痛感がないのである。人間は有限な生に宿命づけられながらも、無限のものを求めつづけるという意味で、まさしく悲劇的な存在なのであるが、そういう人間の存在を直観的に表現した言葉が The sense of sorrow—「悲しみの感覚」という言葉なのではあるまいか。

保守といわず、革新といわず、あらゆる思想はこの「悲しみの感覚」を忘れた時、硬化し、教条化し、その生命力を失うのである。歴史は先人の悲しき生命の累積であり、くりかえしのきかない事実である。明治という時点で、国家興亡の危機を精一杯生きた人々の体験を偲ぶことなしに、「明治絶対主義」というような概念で一括し、それは打倒すべき悪であることを繰り返して繰り返して教えられた多感な青年達が、空洞化された精神のむなしさに耐えられなくなるのは当然ではないか。また、その青年たちをたしなめる大人たちが、既成の道徳に安住し、それを支配の道具に使うほど無痛感になっているならば、相手の心を動かすに足りないことも自明であろう。

松陰先生の「留魂録」は、伝馬町の同

囚、沼崎吉五郎なるものが、三宅島に流罪に処せられた時、渾の中にかくして二十余年間保存し、明治九年になって、松陰門下で当時神奈川県令であった野村靖に伝えられたものであるという。人がいのちをかけた志が、どのような形で伝わって行くかを示す厳然たる事実であるが、きれいごとの教訓ではなく、まさに「悲しみの感覚」なのである。「至誠」という言葉を貫くために、松陰先生は短い生涯の全エネルギーとかがえがえない生命を捧げつくされたのである。

最後まで抵抗した安田講堂の時計台の前には「おっかさん、とうとうくるとこるまで来ちまったぜ。おれ、カッコよく散るぜ」と落書してあった由。ゲバルトのうら側にはこういう甘いセンチメンタリズムがあったのだ。こういう青年たちを作り上げたのは、実に「悲しみの感覚」を欠いた戦後のエセ思想であったことを痛感すべき時ではないか。

(福岡県立若松高校教諭 山田輝彦)

| 目次            |           |
|---------------|-----------|
| 悲しみの感覚        | 山田輝彦 (1)  |
| 名もなき民の思ひ      | 長内俊平 (2)  |
| 川端氏の記念講演について  | 高木晃吉 (4)  |
| 「謙遜勸勉集」刊行のことば | 亀井孝之 (6)  |
| 第三回梁山合宿記      | 野間口行正 (7) |
| ☆ 同胞歌壇        |           |



# 名もなき民の思ひ

——「国のおきて」試論——

長内俊平

(電器開発伊予電力所)

## 明治天皇御製

国

世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ(明治四十四年)

これは童心の季節の子に母の顔が見えるような気持である。そうするといつも見てゐて下さるお母さまといふ気持である。だからちつとも淋しくなかないといふのである。(二六六頁)

△一月二日、京都の染色工芸の弟子入りをして長男が敷入で帰って来て四日、妙に身体がむずむずするので、小雪のなかを、子供と外へ出る。足は気のむくま、海岸まで行ってしまつて帰りに木屋へ立寄る。息子が私に「吉田松陰」といふ小説を買つて贈りたいといふので、その本は手に入らなかつたが、子供がハイと手渡したのが、岡澤先生の「日本民族」。これを求めて帰る。(註一)

△一月半ば、一気に説了。そのなかの次のお言葉が身体を貫く。

○神道は行爲である。(一九〇頁)

○神々の共通意志は伊勢の内宮を主神と仰ぐことと、万世一系の皇統とである

日本の国土や人民はすべて神のものである。天皇はこれを慈しむべき義務を神々に負ふてゐるただひとりの人である。他の人々はこの義務を神々に天皇を通して負ふのである。(二二四頁)

○春めくや人様々の伊勢参り 芭門  
につと朝日に向ふ横雲 芭蕉

○私は伊勢神宮へおまゐりして、懐しいと思つた人は少ないだらうと言つた。その少ない人のひとりに明治天皇がおありになるのである。明治天皇が何度目かに伊勢神宮にお参りになると、それまではいつも晴れた日だったのに、その時は雨が降つてゐた。そうすると天皇は雨の日におまゐり出来て私はいへん嬉しいと仰せられた。しみじみと懐しく思はれたのにきまつてゐる。(二七六頁)

○日本民族の生命は日本の情操情緒である。これがいつたんの列島を去れば、ここは名も知らぬ土人の島になるのである。(三〇〇頁)

△二月十五日。夜半には、と眼覚める。眼覚めると「このごろ霧が深い、この霧が懐しいと感ずるのは何故であろうか」と考へ出し、その答へがまもなく、ひらめく。

これは前に観たことがあるからではないか。雲・雨皆そうなのではないか。今日降つた雨は、地に沁み大地を培み、ま

た蒸気となつて空に昇る。そして雲となり再び雨となる。昨日みた雨と今日みる雨は不二である。(同じものではない)しかし不二ではない。(別なものではない) そうだ。山をみて懐しいと思うのも、自分が幼い頃みただけではないのか。幼い時見なくても、祖先の誰かが観たのでなかつたのか。祖先も私の延長と思つてしまへば、いつか自分が観たのである。だから懐しいのである。そう思つたら自然に、今上陛下の次の御歌が心に浮んで来た。

## 海上雲邊

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

## 舞子にて

見わたせば海をへだてて淡路島なつかしきまでのどかにかすむ

陛下は沖にたなびく雲を懐かしいと思はれたのに違ひない。ただ美しいとか或はその景色に悠久の天地をお感じなされたといふだけでは足りない気がする。その雲は、淡路島は、いつか観られた雲であり、淡路島でなかつたのであらうか。御自らでなくても御祖先のどなたかが、だから懐かしく、立去り難い思ひでじつと眺められたのでなかつたであらうか。

このひらめきがあつたら、夏以来ずっと心をはなれなかつた「国のおきて」とは何かとはいふ答が、もつれた糸のほぐれるやうにほのぼのとして来た。しかしそのほのぼのとして来たのを述べた前に一寸、雲をみて「いくなあ」と感ずる本質は、「懐しいからである」といふ境地に至るまでの心の変遷をかいつまんで

述べておきたい。△十九才頃、山を観、花を観て美しいと感ずるのは、自分の心がそれを美しいと感ずるからであると思ひこむ。しかし考へてみれば……眼をつぶれば見えない。見える見えないに關らず山や花は客観的に存在する。

即ち、自分の心が、そう感じようと思つて美しい山なり川なりは厳存するのではないか。そうかも知れない。しかしここに国宝があつたとしても猫は小便をかけるかも知れない。そうすれば猫にとつて国宝の絵は無いに等しい。人も同じでないか。たとひ美しい山があらうと、美しいと感じなければ、われにとつてその美は無いに等しい。従つて「美とは自分の心のなかにのみ存在する。」(註二)

昭和三十九年八月、桜島合宿へ向ふ途中の船上から美しい桜島の景色に見入りながら、ハツとひらめくものがあつた。この宇宙にこそ(美の根元)といふものがあるのではないか。そのころにわが心が感応した時、美しいなあとといふ情緒がおきるのだ。だからわれのみでなく、美しい心の持主は、深きその差こそあれ、それに感応するのだと。私はそのことがひらめいた時の喜びを忘れることは出来ない。

それから五年経つて、今こころへの回は「懐しい」といふ情緒でないかといふところにたどりついたのである。(註三)



のとして来たのは、「懐かしい」といふ情緒が、いつかみたといふことから発するとすれば、それをたどりたりゆくと日本人にとってはつひに、内宮様にとどりつかざるを得ないのではないかといふことであつた。即ち日本人にとってこのころとは内宮様である。しかもこのころを知的にはなく、懐かしいといふ情緒的体験として感得し得たのでなかつたか。

春めくや人それぞれの伊勢参り

のなかに、我々の祖先達が内宮様をおがんで、ころ(大本元・懐しい心をおこさせるみなもと)と一体になり得たよるこび(情意的純粹体験)をみる気がする。

そのころを情意的体験として、持つことが出来なかつた国々の人は、これを知的に求めるしかなかつた。それがキリスト教であり、仏教でなかつたのか。

しかし知的なものは、いくら深く立ち入らうとも、ころを常にわが心とすることは、生き身の人間として、難事の中の難事である。そのため常にころと共なる生を生きんとすれば、徹底した修業が必要となつたのであり、それが禅であり戒律でなかつたのか。

しかし人はつひに、ころとの知的なつき合ひに耐へ切れない。それを情まは意として(実感として)……それが最も確かなものとして、かみしめることが出来るから、確かめたい願望にかられる。これがマリヤの像であり仏像であつたのではないか。

もう一度言ふ。日本では、内宮様をお参りするこゝろ、ころといつても一つに

なり得たのである。しかも実感として。

そうして来てみると、聖徳太子の仏典の御解釈が大陸諸師の解釈と色どりがまるで違ふ秘密もつけて来る気がする。(註4)

太子には、既にころ(内宮様)となる体験がおりになる。その秘密の鍵で、知的な理念追求の特色である万巻の仏典(真理は単純なものであるがこれを知的に説明しようとするれば万巻を要する)をお解きになつたのである。知知なるのを、またさらに知的に解釈するしか方法をもたぬ大陸諸師のそれとは、自ら色どりが違ふ筈である。

日本に浄土宗、浄土真宗の生れたのもこのころをそのまゝ、情感出来る精神風土があつたればこそであらう。

親鸞の「よきひとのおほせを被りて、信するほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るゝたねにやはんべらん、また地獄に墮つる業にてはんべらん、総じてもて存知せざるなり」(歎異鈔)の告白は一見自信なきに似て、天地崩るゝとも座を立たざるの大自若心よりわき出たものである。

この自若心は、ころを体感出来ないものから生れて来る筈はない。

△このほのぼのとして来たものをもととして、冒頭にかかげまつた、明治天皇の御製を仰きまつると、

「世はいかに開けゆくとも」とは、人間は億年を単位に進歩するといはれてゐる如く、千年や万年では、殆んど人の性(さが)は変らないと言つてよい。たしかに世の中は昔より開けたやうに見えるが、それ

は単なる物質文明が開けたにすぎない。

しかしこんなものは、本質的なものでない。蟻気楼のやうなものである。その証拠に自分を見てみなさい。泣き笑ひ(もつとも近頃愉快する様な偉丈夫はめつたに見かけなくなつたが)人をそねみ、なりあまけるをなり合せるにふたぐを好み(しかしこれは、本質的には懐かしいといふ情緒の根源であり、時を連続させようとする生きとし生けるものの無意識的願ひの実現方法であつて、最も敵愾にして大切ないとなみなのであるが)、何も分らず、ただ右往左往してゐるところをみつめたならば、昔の人より開けたとか進んだとか言ふことは出来まい。まずそのことをはっきり認識しなさいといふおさとしてあり、

「いにしへの国のおきて」とおはせられる「いにしへ」とは、単に古い、昔のといふ意味でなく、古今に通じてもとらないところの本源的、本質的なといふことであり、「国」とは、近頃学校で、人民と領土と統治権があればそれが国であると教へてゐるが、これは丁度時とは時間であると教へるのと同じ誤をしてゐる。時間は時のほんの属性にすぎない。歴史と言へば、仏教は、いつ日本に伝來したかとか、吉田松陰の書いた本の名は何かを知つてゐれば、分つたやうな氣になつてゐると同じである。

国といふのは、懐かしいといふ情緒の母体である。そのことの方が、実は権力機構又はその作用よりはるかに重要な要素なのである(註5)その証拠に素直な日本人に、日本とは何ですかと問ふた

時、その人は、懐かしい故郷の山々、父母、兄弟、友人、そして、今日まで日本を外国の手から守つてくれ、美しい文化を残してくれたみおや達を心に描く筈である。それが最も体験的な国の実体である。そのことを前提にすれば、

「国のおきて」とは、情緒の母体たるこの國の、懐かしいといふ情緒の本源的ふるさとである内宮様をころとし、万世一系の天皇を親とお慕ひ申すといふ、いにしへからうけつぎ来たところのこの國の最も大切なおきて(のり)；味けない表現をすれば祭政一致の政体；といふことになり、一首のおさとしは、

物質文明はいかに発達しても、人間の本质に変わりはないのだから、我々のみおや達が、幾億年かかつてようやく確立し我々子孫に残したところの、内宮様をころとして、万世一系の天皇を親と慕ふところの國の基本的な「のり」だけは決してたがへては相ならぬぞ、あひすまぬぞとの大御心と仰きまつるのである。

△以上息子を通して、岡先生の教へにふれ、懐かしいといふことはどういふことなのかのヒラメキから一つの試論を試みた訳であるが、この「国のおきて」とは何かといふことは親しく大御心に接した私の終生の課題である。どうか諸賢の導きを賜らんことを。こうして書いてゐると再び御声がきこえて来る氣がする。

「俊平よ、今迄お前の書いたことはお前が生きる力とはならぬと再三言つてゐる知的な直感に基くものでないのか。お前が、遺言を大切と思ひ、それを守らうとするならば、内宮様が、陛下が、懐



かしくてしかたがないといふ心を深める  
しかないのだよ。」と。この春には、お  
伊勢様に参りたくなるであらうと思つて  
ゐる。

(試論完)

註(1)或は本質的でないことを書いたやう  
であるが本を手に入れた時の叙述等  
も、実は深い意味をこめて、書いた  
ものである。

ところが眼に見える天使を使つたな  
らば、その天使は私の息子から岡先  
生の本そして私にとび移つたのが見  
えたと思ふからである。また二月十  
五日の夜は私の枕にとんで来たであ  
らう。その不思議な導きをただかし  
こみまつるだけである。字のわきに  
・・・をほどこしたしたのは、天使の足  
あとである。

註(2)この辺までは・・・とは自分の心と  
しか考へることは出来なかつた。宇  
宙に・・・があることに気付かなか  
つたのである。以下本文ではこのこ  
ろと心を混同しないやう、ひらかなと  
漢字で書きわけた。

註(3)懐しいといふ情緒は、美しいといふ  
情緒より非常に丸い味で深さが深い  
やうである。恋人に対するものと母  
に対するものとの違い。ミロのビー  
ナスと弥勒菩薩との違ひのやうなも  
のであるといつたらいいであらうか

註(4)太子の秘密をこのことに結論するこ  
とは、極めて一方に偏してをり憶念  
が足らぬことは、筆者もよく分つて  
ゐることごとくわつておかなければ  
ならない。

註(5)いかなる政体がいゝかといふ場合、  
ともすればこの権力機構とその作用  
の面を国の重要な役割と考へて論ず  
るあやまちをしがちである。共和制  
がよいなどといふのがこれである。

# 川端氏の記念講演について

—ハイゼンベルク博士の講演も想起して—

高木 晃 吉

昨年十月十八日付毎日新聞掲載の三島  
由紀夫氏の「川端氏の受賞に寄せて」を  
読んで、私はその素晴らしい文章に、魂消  
すような感激をいたしました。が、  
こんどは、川端氏のノーベル賞受賞記念  
講演「美しい日本の私」を読んで、その  
味わい深い文章に恍惚としてしまいま  
した。とくに、この両氏の主張が、ともに  
現代の唯物史観の感覚に一矢をむくい、  
人間精神の尊厳性を強調している点に、  
私は強い関心を寄せないではおれませ  
んでした。その文明批判的アプローチは、  
一昨年六月四日号の朝日ジャーナル誌に  
掲載された量子力学の泰斗・W・ハイゼ  
ンベルク博士の「ゲートの自然像と技術  
・自然科学の世界」科学の抽象化への危  
惧に対して——」を想起させます。ゲー  
テがニュートンの物理学、コペルニクス  
の世界像の台頭の前に、全人間の感覚世  
界を確保したのと、川端氏が宇宙開発に  
挑む文明に超然たる人間感覚の存在を主  
張しているとの間に、一脈通するもの  
があることを認めるからであります。そ  
うした意味で、川端氏の記念講演は、文  
学史的意義を感じるものであります。そ  
川端氏の講演のなから、藤の花と愛と  
月についての三つの叙述をとりあげて、  
川端氏の思想中核を追ってみます。

人にて、かめのなかにあやしき藤の花あ  
りけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりな  
むありける」という、在原行平が客を招  
くのに花を生けた話があります。花房が  
三尺六寸も垂れた藤とは、いかにもあや  
しく、ほんたうかと疑ふほどですが、私  
はこの藤の花に平安文化の象徴を感じる  
ことがあります。藤の花は日本風にそし  
て女性的に優雅、垂れて咲いて、そよ風  
にもゆらぐ風情は、なよやか、つつまし  
やか、やはらかで、初夏のみどりのなか  
に見えかくれて、ものあはれに通うや  
うですが、その花房が三尺六寸となると  
異様な華麗でありませうと川端氏は、  
藤の花の深い美しさを主張しているが、  
この藤の花の叙述をみると、正岡子規の  
『墨汁一滴』のなかの藤の花の理想を憶  
い出すのであります。夕夕餉したためお  
わりて仰向に寝ながら左の方を見れば机  
の上に藤を活けたるいとよく水をあげて  
花は今を盛りの有様なり。艶にもうつく  
しきかなとひとりごちつつそぞろに物語  
の昔などしぬはるにつけてあやしくも  
歌心なん催されける。此の道には日頃う  
とくなりまさりたればおぼつかなくも筆  
を執りて「瓶にさす藤の花ぶさ一ふきは  
かさねし書の上に垂れたり」「藤なみの  
花をし見れば奈良のみかど京のみかどの  
昔こひしも」々と子規は十首の和歌連作

を添えている。明治天皇も藤の花をよく  
賞でられ、明治二十七年には「ふちかつ  
ら釣花いけにさしてこそながしなひは  
見るべかりけり」と長い藤の花を味わっ  
ておられる。長い花といえは、花の詩人  
として有名な英国の女流詩人クリスチナ  
・ロゼッター女史の「水仙」——  
GROWING IN THE VALE BY THE  
UPLAND HILLY GROWING STRAI  
GHT AND FRAL LADY DAFFA  
DOWNDILLY OF STRAIGHT AND  
FRALを思い出します。とくに、私は  
FRAL という英語が好きです。その語  
感に FAINT な、ものあわれが漂って  
いるからであります。この FRALとい  
う言葉はロゼッターも非常に好きだつた  
と伝えられており、WHAT ARE FR  
AIL? SPRING BLOSSOMS AND  
YOUTH という他の詩句がロゼッターの  
思想をよく表わしています。それにして  
も、薄紫で細長い花房の藤の花と、弱々  
しい細い長い茎にあわい紫の可憐の花を  
つけた水仙との間に、共に初夏の花とい  
うほかに、なにか神秘的共通点があるよ  
うな気がするのであります。私は、その  
共通点を、フェイントな感覚であると思  
うようになっております。 FAINT  
FRAL. FINE. FEMININE と F のイ  
シニヤルの英語に、若い時から親近感を  
持っていた私であります。が、文明や文化  
が高度化したればするほど、このフェイ  
トなフェイリング、弱々しい微かな感覚が  
大切だと思つているのであります。三井  
甲之先生が、小女の心を持って々と詠歌心  
を説いておられたのも、このフェイント



の心を指しておられたものと思うのであります。愛もこのフエイントな感覚なくしては理解できるものでないと思うのであります。

川端氏は記念講演のなかで「いついつと待ちにし人は来りけり今は相見てもか思はん」このような愛の歌も良寛にはあつて、私の好きな歌ですが、老衰の加はつた六十八歳の良寛は、二十九歳の若い尼、真心とめぐりあつて、うるはしい愛にめぐまれます。永遠の女性にめぐりあへたよるこびの歌とも、待ちわびた愛人が来てくれたよるこびの歌とも取れます。「今は相見てもか思はん」が素直に満ちてゐますと言つていますが、七十余歳で、十六歳の少女に心を寄せた老ゲーテのことも思い込めて、川端氏は良寛を語つたのでないでしょうか。川端氏の愛についての所説は短いが、味い深いものがあるのであります。この川端氏の愛の思想について、ニューヨークのバクレー・パブリッシュ社発行の英訳本「千羽鶴」の裏表紙にあるニューヨーク・タイムス紙の評が注目されます。それは「KAWABATA PENCHANT IS FOR THE SUBTLE TRACE OF ... LOVE FROM THE PURITY OF INNOCENCE TO THE BLEAKNESS OF GUILT」というもので、鋭いキリスト教的アプローチを示していますが、三島氏の「川端氏の受賞に寄せて」にみられる愛の叙説は、ひとり川端氏のそれについて説いたものではなく、広く日本の愛を説いたものとして、また、愛の本質をえぐつた世界的思想であると私

は高く評価したのであります。三島氏の叙説をみると人間に対する真の愛情とは？ここに川端氏の文学の表面にあらわれぬ深い主題がある。すなわち、古典的な優雅な文体の下に、氏の文学には、近代文学のもつとも尖鋭な主題「そもそも人間が人間を愛することが出来るか？」という設問が隠れているからである。「愛の不可能」はあるとき叙情に漂い、神秘に融（と）かし込まれるが、不吉な雲のようにその作品の上に漂つている。そして「美」が、この不可能を嘲笑するかのようになり、あるいは「雪国」の雪の中から、あるいは「古都」の古い寺院の風光の中から、あるいは「千羽鶴」の風呂敷包を携えた美女の姿で、静かにあらわされて、謎のように通りすぎる。それは正に「通りすぎる」のだ。氏の文学はほとんどの場合、人間関係を峻拒している。こちらには愛の不可能の絶望をかみしめている人間があり、あちらには「閉ざされた」美が揺曳している。しかし、この通過の瞬間にかぐやく感覚の緊張、この悲しみの只中をよぎる絶対的喜悦にこそ「人間が人間を愛する」ということの可能性がちらと姿を現わすのではないだろうか」と書いてゐる。

此の三島氏の叙説を讀むと、酒人女王を偲はして詠みませる聖武天皇の御製「道に逢ひて笑まししからに零る雪の消なば消ぬかに恋ひもふ吾妹子」と、実朝のおく山の岩がきぬまに木の葉落ちてしづめる心人しるらめや」と、さらに、昭憲皇太后の御歌「恋々一時のまも身をばはなれぬ面影のなど鏡にはうつらざるら

む」の数々の和歌を思い出さないのであれば、川端氏も、三島氏も、現代の浅薄な思想に対して、強烈に徹底的に反発しているかのように思ひます。深遠な愛の真情がわからないでは、この人生は全く味気のない、つまらないものになつてしまふし、真の幸福もそこにはないと思つたのであります。カネでは買えない真に尊いものは、この深い愛ではないか。私は、この愛の絶対性を深く信じたいと思つたのであります。トインビー博士が昨年『LIFE』誌に「GOD IS LOVE」と書いてゐるが、賀川豊彦神父の言葉「愛なきものは神を知らず」は私の好きな言葉であります。しかし、キリストの教える愛も、三島氏の言う「愛の不可能の絶望」を感じさせるような峻厳なものであると思ひます。イエスは「おのが身を愛する如く、隣りの人を愛せよ」と説いている。おのが身を愛する如く、隣りの人を愛するようなことは、人間にとって不可能に近い。しかし、裏返えすと、おのが身を愛する如く愛しなければ、それは真の愛ではないし、「不可能の愛」こそ真の愛であることをイエスは説いていると思つたのであります。その点、明治天皇の御製「おのが身はかえりみずして、ひとのため尽すぞ人の務めなりけり」も同じ愛の思想ではないでしょうか。結局、自他の二境を存在させては、真の愛もわからずまいに終わるし、「愛の不可能」も超克できないのであります。

聖徳太子の維摩経義疏文殊問疾品に「自行外化を憶して以て心を調伏すといへども、若し自他の二境を存して、修業せ

ば、則ち修する所広からずして、物と其の苦楽を同じくすること能はず」と説かれてゐる。この「自他の二境」を存在せしめない発想は極めて、重要な人生態度である。この人間姿勢を、川端氏は「月に託して」と、私は見ます。これは非常に重要な認識論の問題であると思つたのであります。月を天体として見るか、もつと、多角的に見るか、その認識の仕方は、その人の人生態度を決するものとして、重視しなければなりません。ハイゼンベルク博士は「私たちが、こんにちでもゲーテから学ぶことができることは合理的分析という一つの器官のために、そのほかのすべての器官を萎縮させてはならないということだ。肝要なことは私たちに与えられているすべての器官をもつて現実とは本質的なもの、すなわち『ただ一つの善にして・真実なもの』を反映することになる、そのことを信頼することです」と説き、さらに、ハイゼンベルク博士は、ゲーテの「色彩論」の序編から「見る」ということは、かならず考察へ、考察は思想へ、思想は統合へ移ります。これの節を紹介しているものであります。これらのゲーテの所論は、川端氏の月の叙説を裏打ちしているように見受けられます。川端氏は明恵上人の「月を友とする歌」をめぐつて「月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一してゐます」と言つていますが、これは川端氏の自然観をあらわす重要な所論であつて、親鸞の「自然随順」にも通ずる思想と、私はみています。川端氏の「月」の叙説のなかに



は出て来ない和泉式部の月の歌を岡潔先生が林房雄氏との「心の対話」の四十七頁に紹介されていますが、味い深いものがあります。♪不貞で素行がおさまらなかつた和泉式部のような者でも六道輪廻を知っていた「くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月」と詠んでいる。これは播磨のひじり、性空上人に仏道を聞くために、たずねて行って会えずに書き残した歌です。岡先生は言っておられるのであります。月はたしかに自然科学的開発の可能性をもって参りましたが、その背後にある宇宙はまだまだ人間を隔絶する神秘の世界であつて、ニュートンの言葉「私の知らないことは海辺の真砂の如く無限である」はまだ生きていると思うのであります。我々は「自然没入」、「自然随順」でなければ、救われないのでないでしょうか。川端氏は、この救いを説いているように見るのであります。

川端氏は記念講演の最後を「私の作品を虚無と言う評家がありますが、西洋流のニヒリズムという言葉はあてはまりません」という強い言葉で締めくくっているが、その背景には、聖徳太子の御言葉「世間虚仮唯仏是真」があり、信仰がある故にニヒルではないし、西洋流のニヒリズムという言葉はあてはまりません。という川端氏の言葉には、熱烈な現代批判の悲願が込められており、なにか強いひびきを感じないではおれません。

(以上は、当社の社内研究誌に掲載したものの一部に手を加えたものですが、一昨年六月十日付国民同胞第六十八号所載の拙文「ゲーテとハイゼンベルク」の続編として、まとめたものであります。)

〔太平洋工業KK企画室主査〕

「明治・天正 昭和 謹選詔勅集」  
刊行のことば

斑鳩会 亀井 孝之

明治維新百年を記念して、ここに謹んで明治・大正・昭和三代の詔勅から、いくつかを選んで「謹選詔勅集」を上梓いたします。

戦前には、詔勅に関する編・著書が数多く出版されてきたやうですし、また教育勅語などは国民の生活に密接なものであつたやうですが、今日では読みたいと思つても、簡単には手に入らない状態です。私は学生時代に、国民文化研究会の合宿で聴講したいくつかの講義の中に、詔勅についてのお話があればあります

たが、残念なことに、原典にふれる機会もなく、当時から詔勅集を手にして勉強出来たらどんなに正確に考へられるか、と常々思つてをりました。そのやうな経験から、現在の学生諸君の中にも、当時の私と同じやうな感じを持つてをられる学生諸君がきつとあられることと思ひ、本書の刊行を思ひ立つたものです。

しかし、その反面、詔勅といひますとすぐに反撥される人たちも多いやうです。それは、明治憲法時代のものであつて、今日では役に立ちもしない、と言つて見向きもされない人々、また詔勅といふのは、天皇がお出しになられたものであり、天皇制そのものが戦争につながるから、そんなものは、といふ人々、ましてやいまさら詔勅を読み直すなどといふことは、全くナンセンスだ、といふ人たちも決して少なくないかもしれません。

しかし、私たちが、自分らの民族の長い歩みを、正確に学びたいと思へば、どうしても、過去の日本の文献を、先入観念なしに素直に読んでみなければならぬこととなります。さうだとすれば、詔勅は、その時代時代の国民の指標となつたものですから、詔勅を読み直してみることが、日本人すべてにとって、欠くことのない重要な事柄の一つとなりませう。かりに、日本の過去を批判したいと思ふならば、そのことは、さらに一層重要性を増して行くと思ひます。

そこで、本書は詔勅を読み易くするために、振仮名、句読点、濁点等を附しましたが、注釈はあへて附けることをやめました。それは、刊行の目的が学生、青

年に広く詔勅の文そのままを直接に味ひ、かつその内容を熟慮しながら受け取つていただきたいかつたからのことです。注釈といふものは、ともすれば編者の主観を示しすぎるおそれもあるからです。

本書には、詔勅のほかに、「聖諭記」と旅順開城に関し、参謀総長より乃木大将に伝へられた「聖旨」を謹載いたしました。「聖諭記」は、明治天皇の侍講である元田永幸が筆記したもので東京帝国大学の学風について、明治天皇が「入りて相となる可き」ところの「真成の人物」を育成すべからざるものと御心配なされてをられることを公にしたものです。

最後に、本書の編集に先立ち、昭和十六年に、日本学生協会が出版した「歴代詔勅御製集」をその継承団体である社団法人国民文化研究会の小田村宙二郎先生のお許しを得て、編集の参考にさせていただきます。また、編集・刊行全般について色々御指導いただきました亜細亜大学教授夜久正雄先生、編集・刊行全般にわたり終始ご協力を借しました長友、高村光紀、沢部寿孫、山本茂失、石井恭子、山内健生の諸君、それに城北整版印刷の井上社長にも、心から感謝し厚く御礼を申し上げます。

明治・大正・昭和 謹選詔勅集 昭和四十三年十一月三日発行 横浜市鶴見区鶴見町一四六七亀井方斑鳩会刊行 新書版八十五頁 頒価二二〇円―三五円

(本書を刊行した斑鳩会亀井孝之氏は昭和三十九年亜細亜大学卒、現在皇宮警察官。同会既刊のものは、小田村宙二郎



夜久正雄共著「天皇と天皇制についての基本的思考—三井甲之著—今上天皇の御歌解説、附萬葉集論」があり、本書は亜大同期の数人の同志が心をこめた刊行事業の第三次をなす。

### 第三回葉山合宿

#### —若いグループの集い—

さる二月八日(土)から十一日(火・紀元節)の三泊四日にわたって、葉山のアサヒビル寮で国文研の若い会員による合宿が開催された。一昨年、昨年に引き続き、本年で三回目である。各人忙しい仕事や、家庭をもちながらも、連休を借し、関東十四名、九州三名、浜松富山から各一人の総員十九名が参加した。なお、小田村理事長が途中からお出下さって我々の今後のあり方について助言をいたされたことはありがたいことであつた。

国文研にも一昨年頃から通称「若いUB」と呼ばれる若い会員からなるグループができ、夏の合宿教室の運営、感想文の編集などを行ない、国文研の活動に積極的に参加し、また学生の勉強会などにも参加することにより、先輩の憶いの後輩に伝えてゆく相続体制を確立しつつある。昨年は若い会員の結集を図り一層積極的な活動を行なうため、特に「相続体制の樹立」というテーマで合宿を行なつた。その中の国武さんの研究発表「乃木将軍について」が昨年の合宿教室の講義の一つに組み入れられたことは葉山合宿

をさらに有意義なものとし、その存在価値を高めた。

今年の合宿も、(一)参加者全員による研究発表 (二)夏の合宿教室に臨む体制 (三)和歌の創作および相互批評 (四)「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の論議を骨子として行なわれた。そして明治天皇の御製は毎朝欠かさず拝誦した。研究発表は、参加者が多いため、一人当り三十分の短い時間であつたが、職場体験、教育問題、平素から研究しているテーマなど各自が自由に選択した課題に従つてさまざまな角度から発表がなされたが、その多様性にかかわらず祖国の再建を願う心が一つになり、参加者に一層密接な心のつながりができ、明日に生きる力を与えてくれた。

昨年来、東京大学をはじめとして、各地で激しい学生暴動が行なわれ、世相は騒然とし、学生問題が国内の大きな政治問題と化してきた。この合宿でも、学生問題を含めた教育のあり方が重点的に取り上げられた。殊に教育にたづさわつている人の発表は自分の直接の体験にもとづいての話であつたので非常に印象が深かった。横浜で高校の教師をしている国武さんは、アンケートをもとにして、「生徒は、人生の教師としての信頼できる先生に接することを強く望んでいるが、教師はつまらない、全く信頼していない」と回答している生徒が半分近くもいる。「現代のサラリーマン化した教師に高校生が不満をもっている」と述べ、教育において教師が姿勢を正すことが最も大切なることを訴えた。そして、昨年教師にな

つたばかりの富山の岸本君、熊本の高島君の研究発表は教師の立場からの貴重な体験発表だったので心を強くゆさぶられた。熊本の中学校で教えている北島君は、中学生の道徳観念の欠如を具体的に話し、それは自分の責任を回避して社会変革を夢みる先生方の教え方に起因すると述べ、「そういう夢から醒めて、目の前にあるものをみなければならぬ。私には、毎日生徒だけが目に見えてくる。」

と結んだ発表は、教師の最も大切な姿勢のあり方を指摘しているように思えた。また、富山の高校で夜間部の生徒を教えている岸本君は、「夜間の生徒は学力が劣っているため普通の教科についていけない生徒が多い。それで半ば勉強もあきらめているようだが、無理に教科を消化しようとするのでなく、そういう生徒の実力に合わせて授業を進め、力に合ったように、例えば、小学校五年の数学の実力しかなければ、それに合わせて徐々に力をつけさせてから、高校の教科にはいつていくやり方で、生徒と一緒にその問題を考え生活している。これが私の仕事なのでそれに全てをぶつけている。」と話したが心の底から生徒のことを考えて教えているその人の言葉に深い感動を覚えた。

鎌倉の瑞泉寺は梅で有名であるが、すでに八分位散ってしまった残念であつたが、ほの暖かい冬の太陽の下で和歌の創作を行なつた。その日は夜が更けるまで厳しい相互批評を行なつた。

最終日の十一日は、小田村先生を交えて、学生運動、教育問題を中心として、

各地の学生の交流について活発な意見が出された後、合宿教室に至るまでの活動について、一人一人から決意が述べられた。これまでは全体的に古典などを通じて内面的なものを中心に求めていた若い会員も時事問題に対して積極的に取り組んでゆく方向が強くなつた。そして時事問題を取り扱うに当つても自分の生き方、人生観と切り離すことなく、これに統一して考えていかなければならないという姿勢であつた。

最後に、在京の大学生・六名を交えて話し合いが行なわれた。東京大学の紛争の渦中であつて懸命に活動を行なっている石村君、東京八日会のあり方に苦惱している津下・斉藤・広瀬君等の考えを聞き、その人達の活動の指針と一緒に考えた。具体策を導き出すことはできなかったが、自分のこととして考え、真剣に話し合いが行なわれた。

こうして合宿の全日程が終り、夏の合宿教室への参加を誓い合い、なごりを惜しんで帰路についた。

合宿の参加者は次のとおり。なお三宅将之さん(岡大37卒・岡山県立操山高校教諭)は、急にかぜをひき参加できなかったのは残念だつた。

上村和男(鹿大33卒・千代田コンサルタント) 本村正己(日大中退・警察庁) 国武忠彦(早大37卒・神奈川県立翠嵐高校教諭) 福田忠之(鹿大38卒・神奈川県立平沼高校教諭) 野間口行正(鹿大38卒・新技術開発事業団) 沢部寿孫(長大39卒・日商岩井) 紫田佛輔(中大40卒・三菱石油) 山本博資(早大40卒・川崎重工業)



大川寿雄(日大40卒・東京綱鉄工業) 小幡道男(早大41卒・小松電子金属) 山内健生(亜大42卒・国民文化研究会) 岩越豊雄(亜大42卒・箱根町立仙石原小学校教諭) 磯貝保博(中大42卒・講談社) 森重忠正(長大42卒・エー・アンド・エージャパン) 岸本弘(富大43卒・富山県立福光高校教諭) 北島照明(鹿大43卒・熊本県嘉島村立嘉島中学校教諭) 古賀保臣(明大42卒・メディクス貿易) 行武潔(九大大学院学生) 田村潔(九大大学院学生)

(新技術開発事業団・野間口行正記)

# 同胞歌壇

——しきしまのみち——

三重 植田 孝  
 「大東亜戦争を見直そう」(名越二荒之助著)を読み 沖繩に散りし主人のみ魂に

もも年の祖国の歩み説きませる真摯なみ教へ身内に浸み入る  
 わが胸の空虚を埋めてゆく道を指示せるみさとし消ゆるときなし  
 現身を散らしアジアに魂をよみがへらせつ天さかる君  
 南海の島に名もなく逝きし背に今日のよろこびいかにつたへむ  
 はからずも心の師をば得たる日のこのよろこびを亡き背につげむ

長崎 田川美代子  
 「大東亜戦争を見直そう」の中の一

章 シドニー湾に於けるグールド少将の美筆を読んで

わたつみのかなたの国に花と咲きし人のまことを知るがうれしき  
 たたかひのさ中において敵国の戦死者まつれり外国人は  
 己をおきて人を憎しとたたかふが人の常とぞ思ひしものを  
 おほざらのはてなく澄めるを見るごときグールド少将の御心なるかな  
 おほらけき外国人の御心にてらして恥ぢぬ人とならなむ  
 まことにあへば心通ふを彼我とへだつがかなし人の世の中

鹿兒島 川井 修治

## 東南アジア旅行所見

ヴィクトリア・ピーク展望台にて

イギリスの勝利のしるしと名づけたるヴィクトリア・ピークに今吾ら立つ  
 うす霧の流るる下にひろごれりビル立ち並ぶ美しき街  
 見はるかす海面のあたりここだけの船もやひせり行き交ふもあり  
 見る目には美しきされど貧しさと墮落の果てふ植民地香港  
 山峡の競馬場には今日もまた賭に興ずる人のむれをり  
 水もなき岩山肌小屋かけてからくも生くるあはれ難民  
 中共の苛政をいと故里を捨ててのがれし心やいかに  
 まがまがし力の支配消え去りて安らぎ来たる日はいつならむ

バター・コレヒドール島をのぞみ

海路ゆく左手はるかに見えくるは名にのみ聞きしコレヒドール島  
 こごしかる戦ありとふバターンの山々うすく朝がすみ立つ  
 わだつみの底ひゆ聞こえ来ることし散りて果てにし人のみ声の  
 船中現地人のワッチマンや労務者と接して  
 顔みれば手まねまじへてタバコねだるフイリピン人の性はあさまし  
 冷やかに黙殺すればへらへらと笑ひをるかな土語をしゃべりて  
 敗戦の直後以来の悪習と船長は言ふ思はざらめや  
 ザビエルの手紙思ひぬ日の本の民は名譽を知ると述べにし

ブツアン市にて橋のたもとに人あまたをり、何かとて立ち寄りてみれば幼きもあまたまじりて困難にうち興じをり昼の日中に  
 無残やなあけにそまりて砂の上に倒れふしをる敗けしにはとり  
 罪もなきにはとりどもを闇かはせ金を賭くるが何おもしろき

マナイ沖にて

明日こそは故国に向ひ帰る日の夜空はるかに星のまたたく  
 星屑のまたたく下に黒々と影を描けりマナイの山は  
 とぼしかるともし火のもと親子して安らぎをらむマナイの人々  
 船べりによする小波のさらさら恋しく

思はゆはるか妻子を  
 ファイリピンを去るに当りて

思ひきや生命ながらへファイリピンの古きいくさ場われとはんとは  
 みんなの海に陸に散り果てしはらから思へば胸せまり来る  
 みいくさに失せにし人を思ふにもみ国のさまの嘆かるかな  
 ますらをの思ひ入たる道のため残りし生命もやし尽さむ  
 たためらひはただに断つべしもろとも立ちて進まむ若き友らよ

編集後記 この春休みを利用して、九州太宰府、岡山県笠岡、千葉県銚子でそれぞれ西部・中部・東部地区の学生合宿が行はれてゐます▼去る二月二十二、三兩日、福岡で開かれた理事会において、本年度の「第14回合宿教室」の大綱の決定を見、早速合宿ビラクの印刷が出来上りました▼場所・阿蘇国立公園、日時・八月七日から十一日まで四泊五日、人員三〇〇名、申込・六月一日から七月十五日まで。講師・岡潔先生、木内信胤先生このほか大学教官有志協議会、国民文化研究会の諸講師▼各大学で進行してゐる全く異常の事態は、どうしたら打開できるのでせうか。大学管理方法の改革も必要ですが、学生も教授も一人一人が、学問にとりくむ姿勢を正してゆく以外にはない。回を重ねた合宿教室が、戦後のゆがんだ思想界の中で一貫して追求したことはそのことだと思ひます。ある意味ではささやかな試みですが、またしてもことしの夏が待たれます。



# 国民同胞

発行所  
 社団法人国民文化研究会  
 (九州→東京←全国)  
 東京都中央区銀座  
 7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
 下関市南部町25-3宝辺正久  
 振替下関1100 電話22-1152  
 毎月一回10日発行  
 定価一部20円(送料別)  
 (送料共)年間360円

## 人の生き方を正す 学問を

混迷した大学紛争の渦中で新学期が始まった。荒廃した大学に入学して、新入生達が現実をどのように受けとめているか想像に難くない。みずみずしい生命にみちあふれた青年が、人生如何に生きるべきかという痛感も感じ得ないままに、その特性を蝕ばまれていくことは国の行末を思うまでもなく恐ろしい。青年の特性を正しく受け止め、伸ばす能力はもはや大学には望まれないのではないか。大学の制度や機構の改廃とかの問題ではなく、一刻も早く魂と魂が火花を散らし合える学問を興すべきである。最近よく思想の断絶とか世代の断層とかいう言葉が使われるがこのような言葉を安易に使っている限り日本には破滅への道を余儀なくされる。大事なことは思想の断絶がもたらしている悲劇を痛感することであろう。私は思想の断絶をもたらした最も大きな原因として、誤った学問をして来たことが上げられると思う。

私達を生み、育ててくれた日本の歴史的背景を思う時、私達の意識されない部分に広々とした共通の情感があるのではないのか。日本人としての情感を互いの胸中に感じ合えること程幸せなことであるまい。

戦後思想は、歴史は精神の継承であるということを最も忌み嫌った。私達の生命が単独では誕生し得ず、また伝統し得ないのと同様に日本の歴史を展開させて来た先人の精神の継承なしには未来の日本を創造し得ないことを銘記すべきである。それにはお互いの情感の通い合いをさまたげている学問一人の生き方一人のものについて、国民各層、各世代の一人一人が今一度検討し吟味する必要がある。こと大学に限らず、学問と個人の生き方とは別個のものではない。学問とは単なる知識の取得であり、就職や栄達の道具に過ぎないと考えている限り学問と人生はおよそ無縁なものになる。大学紛争に当っての大学当局の姿勢やジャーナリズムの取り上げ方は、学問の在り方を全く無視したところから出発している点に重大な誤謬がある。

古来日本に於ける学問とは人間の中心生命に触れるものであり、学問することにより人そのものと考えられて来た。吉田松陰も講孟余話の中でこのことを述べ、これに対するものとして詩文の学、名物の学、顧問の学を厳しく排斥している。一体、自分自身の人生観や信念について深く考えさせられない学問程無味乾燥なものもないだろう。だが現実には大学紛争の経過で、教授自身が人生観や信念を明らかにせずして、いたずらに学生に迎合している姿の中には、学問の力は全く感じられないではないか。ジャーナリズムの取り上げ方をみても大学紛争の原因や実体を報道しても、個人の信念や生き方と不分離の学問の在り方については何ら問題にされてはいない。結局は学問の自由や大学の自治とかの美名に隠れて、学問が人の生き方とは無関係であることを暗黙のうちに認めている。実に卑屈な精神が感じられる。学問とは字の如く問うて学ぶことだと思いが、問うとはただ漫然と問いかけるといふ意味ではない。問うとはその事がわかんなかったらいつでも立ちも居れない激しい気持ちの表現であろう。自主独立の精神がみなぎっていたからこそ明治維新は成り、西欧列強の諸国と対等の立場で明治の時代は展開していったのだ。私達の祖先は先人に恥じることをない姿勢で生きようと、常に歴史を憶念することによって時代を切り開いて来た。学問とは時代を開展させる力を与えるものである。防人や維新の志士達は現実の動乱の中に国家の統一を

願いながら公に尽くす中に家庭生活の情意にあふれた人間のまごころともいえるべき確かなものをうたいあげている。この悲痛の情意に支えられた人間のまごころこそ私達の心のよりどころだと私は信じている。祖国の生命につながる学問が今日程必要とされる時はない。激動する内外の情勢に正しく対応してゆくためには、思想の混迷と誤謬をまたらしている学問を正すことが先決であろう。どのようにささやかでも、生命力にあふれた学問一人生き方一人をしていける人が一人でもいれば周囲に必ず影響を及ぼしてゆく。講孟余話の中で吉田松陰が立志や初一念という言葉で学問をするに当っての志の重大さを説き、更にこの初一念に誤りがあると気付いた時は、「百万の大敵を平ぐるの勇に非ずんば、痛く懲らすこと能はず」と学問の難しさを述べているのは注目される。

学問することにより人の生き方を正してゆく為には、学問を志す人の不退転の決意とその決意の持続以外にはないと思う。

(日商岩井 沢部寿孫)

| 目次          |            |
|-------------|------------|
| 人の生き方を正す学問を | 沢部寿孫 (1)   |
| 勇者、正岡子規     | 小柳陽太郎 (2)  |
| 内乱はこうして起る   | 名越二荒之助 (4) |
| 地方教師の憂い     | 村田英雄 (8)   |
| ☆ 同胞歌壇      |            |



## 勇者・正岡子規

小柳 陽太郎

## 煩悶すべからず

明治二十八年五月、日清戦争の従軍を終えて帰国の途についた正岡子規は船中で突然に咯血、神戸に上陸した時は重態だった。それから七年、三十六才で生涯を終るまでの日々は文字通り病に接し、病にくれた。しかし子規の生涯に接して目をみはるのは、病にさからうのでもなく、病に屈するのでもなく、その中で激刺として生き得た、まことに強靱な彼の姿である。病何するものぞと肩を怒らせるのでもなく、病の中にうらがなしい日々を過したのでもない。病というのは肉体をゆるがす嵐なのだが、子規の心は病に苦しめば苦しむほど、その嵐に身をまかせて、瞬時ともどまる時がなかった。墨汁一滴の次の言葉はその間の事情を語って、まさに絶品といつてよい。

「熱高く身苦し。初めは呻吟、中頃は叫喚、終りは吟声となり放歌となり、都々逸端唄謡曲仮声、片々寸々、又継又続候忽(しゆつこつ)変化自ら測る能はず」(三四・六・九)

これは逝去一年前の文章だが、それより五年前にも次のようなことがある。

「歩行し得ることここに五旬、体温高き時は三十九度に上り、低き時は三十五度七分に下る。忽ち寒くして粟肌に満ち、忽ち熱くして汗胸を濡す。しかも一日も精神の不愉快を感じたることなし。」(二九・三・一七 虚子宛)

このような文に接すると病の床に伏している人の姿ではなく、全身を嵐にうたせている偉丈夫の、力強い、眉根を思わせる。一日も精神の不愉快を感じたることなし——その言葉は

「精神は活潑なるべし、但し煩悶すべからず」(三三・三十一・三十 岡麓宛) という言葉とともに、子規の精神の逞しさを見事に表現している。人はこれを見て或は楽天的と言うかもしれない。しかし

佐保神の別れかなしも来む春にふた、びあはむわれならなくにの絶唱をはじめとする「しひて筆をとりて」という切々たる連作を残し得た子規の心を楽天的と呼ぶのはあたるまい。人間の悲劇は子規の心には正確に映じていた。しかしそのかなしい人の世の姿を前にしても、子規は煩悶はしなかった。

煩悶とは悲痛動乱の人生をさながらに生きるのではなく、その部分に執着し、自己一身の救済を得むとして悩む、めめしい姿である。精神が受ける不愉快の感もまたこれと等しい。そのようなめめしさをさわやかに洗い落して精神は激刺と動くのである。ともあれ子規の精神がしばらくもどまるところを知らず、自然の律動のまに揺れ動いたということは子規を理解する決定的なポイントであろう

## 感情と理屈

「自分が規則をこしらへて自分を束縛

しやうとしたところでそれが出来る筈のものではあるまい。無形の決心十分に強固ならずとて有形の規則で之を支へたところが、それが保てる筈もない」(二九・五・一四 虚子宛) 人生経験を概念的に整理して、その枠の中に逆に人生をはめこもうとする間接的固定的人生観は、流動的の人生態度に生きる子規が到底耐え得るところではなかった。

いつまでも学問はしたい、だが生活の煩わしきはこりく、だと虚子が言えば「誠に無垢清浄なる御考なれども、磯土に居る間、清浄な考へは兎角成立難致やう存候」(二九・五・二七 虚子宛) と答えている。無垢清浄とは人生のありのまゝの姿を無視して構築された概念の城にすぎぬではないか。生活に煩わされることなく学問に専念するという至極結構な話も、単に話にすぎぬのが人生なのだ。その様々の要素が複雑に入り乱れる「磯土」の中に精一杯に生きるところにこそ生き甲斐があるというものである。

月見ればちちに物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

「四たび歌よみに与ふる書」の中で古来有名なこの大江千里の歌に対して「上二句はすらりとして難なけれども下二句は理屈なり、蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶる者なるに、理屈を述ぶるは歌を知らぬ故にや候らん」

と批判して感情を貴び、理屈を歌と相容れぬものと断じたのも、理屈という間接的の人生把握の態度が、直接経験の世界に全力を傾けて生きた子規自身の、生命

的な反撥を買ったからに他なるまい。「我身一つの秋にはあらねど」という説明は、刹那にすぎゆく人生流転の姿の中で一体どれほどの意味があるのか。「若し我身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども、秋ではないがと当り前の事をいはば理屈に陥り申候」感情とは子規にとつては生命と同義語であった。

「小生は感情の上にては百年も二百年も生きられるやうに思ひ居り候故に、病氣のために速大の事業をやめる存申すことは無之候。併し道理の上よりは明日にも死ぬるかかと存候。涙もろきも衰弱の結果にして死期の近づきたるものと断定致候。但しいくら道理で断定しても自分は明日や明後日にはとても死ぬ事などは思ひもよらずと存候。感情が正しきま道理が正しきかといはば、いふ迄もま道理正しく候。それも拘らず感情正しきやうに思ふは即ち凡夫の凡夫たる所以に候。人間が凡夫でなかつたら衆もへちまもあつたものには無く候」(三〇・三・二八 虚子宛)

あくせく働いてみてもどうせ人生は短い——そういう囚われた判断ほど子規に無縁なものはない。いくら道理で判断しても心情はそれを許さない。その心情の世界に生きる以外にわれわれにはどこに道があるか。凡夫といふことは愛憎無限に生きる「磯土」のなつかしい人間の姿である。直接経験の世界は凡夫の世界である。その凡夫の表現として、直接経験の表現として日本には歌がある。その歌のあるべき姿に定着せしめたのが子規であった。



余れ程野心多きはあらじ

「世間野心多き者多し。然れども余れ程野心多きはあらじ。世間大望を抱きたるまゝに地下に葬らるゝ者多し。されども余れ程の大望を抱きて地下に逝く者はあらじ。余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり。されどそれさへも未だ十分ならず。縦し俳句に於て思ふまゝに望を遂げたりともそれは余の大望の無窮大なるに比して僅かに零を値するのみ」

(二九・一二・一七 虚子宛)

明治二十九年といえは俳句革新の業成つて、子規らの日本派が全国の俳壇を風靡した年である。その翌年三月先に述べた「歌よみに与ふる書」によつて短歌革新の火蓋が切られた。その時点において書かれた書簡の一節であることを思へば子規の精神の規模の大いさは衰弱した現代の思潮からすればまさにおもひを絶するものがある。その「無窮大」の野心を胸にいだいて子規は生きた。だがここで注意すべきは子規が野心を認めながらも「得意」をきびしく戒めたことである。

「俗界に立つ者野心あるを妨げず。昔日の無垢清浄なる兄に野心を生じたるを咎めずして寧ろ之を喜ぶ。然るに野心も得意も同じく是れ俗事なりとて之を混同するは非なり。得意は野心の敵なり。人苟も得意を感じんか、野心は最早成らざるなり。僕は兄が野心の多からずして得意に圧倒せられたるを歎ぜざるを得ず」

(三〇・一一・四 飄亭宛)

得意とは奔流する生命が、その生命の法則に反して停滞し、枯渇せんとするすがたに名付けたものである。風の如き人

生にも、うらかな小春日の射しこむやすらぎの刹那はあろう。しかしそれは得意の心とは本質的に異なるものだ。小春日のやすらぎには再び迫る動乱への予感がある。だが得意にはかゝる予感を欠いている。時間は固定化し、生命は活動を停止する。子規にはその固定に耐えきれない生命があった。子規はそれを「野心」と名付けたのである。

いうまでもないことだがこのはげしい野心を成就せしめるということは単なる物質的な欲望の拡大ではない。「得意は野心の敵」と書いた手紙のあとに次のことばがあるのも注意しておかねばなるまい。

「贅沢は大好きな方にて人の贅沢を見ても羨ましくなれどもきりとして出来ぬ贅沢を無理に為うとは思はず。且つ贅沢をして居る時もそれを常態なりとは思はず。寧ろ窮困を以て人の常態となすは僕の心得なり。故に三度の飯を喰ひ居る今日、飯の喰へぬ明日を忘れたることなし。(略)此心なくんば野心を成就すること能はずと自ら信ず。」

それは人生に対する覚悟である。物質生活の困窮は甘んじて受けねばなるまい。現に子規は肉体的にはまさに逼迫のどん底にいた。だがこの物質的、肉体的窮迫はむしろ人間に根源的な勇気を与えるものではないか。物質的な苦しみの中で道を楽しむことを忘れなかつた中国の聖賢の故事は、それはそれとして立派だが、子規のこの言葉にはもつと力強いそれだけにもつとさわやかな何かがある。

濺刺自由の精神

何ものも恐れず、何ものをも憚らず、平安以来の固定した観念を打破して「貫之は下手な歌よみにて古今集はくたらぬ集に有之候」と言い得たその背後に、われわれは以上述べてきたような精神の構造を読みとらなければならぬ。これは子規にかぎらず、明治の人々に共通な特色だが、いかなるところにもずかずかと足をふみ入れる大胆さが子規の精神の全体に漲っている。

「自分の俳句が月並調に落ちては居ぬかと自分で疑はるゝが何としてよきものと問ふ人あり。答へて云ふ、月並調に落ちんとするならば月並調に落つるがよし。月並調を恐るゝと云ふは善く月並調を知らぬ故なり。月並調は監獄の如く恐る可きものに非ず。一度其の中に這入つて善くその内部を研究し、而して後に娯娯に出でなば、再び陥る憂なかるべし」(墨汁一滴 三四・四・二二)

月並調がいけないということも、それを観念として整理してしまうことのようなことになるのである。芸術において、人生において判断を下すのは所詮自分以外にないではないか。このようなものが月並調だと一応理解はしても、そのような理解の仕方を用いて作品を解くということは結局不可能なのだ。それが芸術や人生のありようなのである。月並調でも何でもよい。その奥深く踏みわけて、自分の力で判断する濺刺自由の精神こそ最も大切な心のすがたでなければならぬ。「月並調は監獄の如く恐るべきものに非ず」という言葉ははげしい。古今調という観念の牢獄から歌を救い上げた子

規の活力の源泉をまぎらなくと見るおもしろがするのは私一人ではあるまい。

「余の考へては美の判断は二人ぎめでも三人ぎめでない。矢張り独りぎめでよい外はない。只独りぎめに善いのと悪いのといろいろある。」

あまりにもあつけない言葉だが、この「独りぎめ」の恐ろしさを思へば、子規の言葉の奥行の深さも自ずから理解されるのではなからうか。

最後にもう一つ例をあげておこう。

「先日短歌会にて最も善き歌は誰にも解せらるべき平易なる者なりと、ある人主張せしに、歌は善き歌になるに従ひいよ／＼之を解する人少き者なりと他の人は之に反対し遂に一場の議論となりたりと。愚かなる人々の議論かな、文学上の空論は又しても無用の事なるべし。何とて実地に就きて論せざるぞ。先づ最も善きといふ実地の歌を挙げよ。其の歌の選択恐らくは両者一致せざるべきなり。歌の選択既に異にして枝葉の論を為したりとて何の用にか立つべき。(略)或は解し易きにも善き歌あり、解し難きにも善き歌ありと思ふは如何に」(墨汁一滴 三四・三・二七)

美の判断を、歌の意味の難易という、あくまで外的なものにすりかえようとするずるさを子規は見逃さなかつた。われわれはこの言葉の中に、結局は何ものにも頼ることを許さない、一人々々の真剣勝負としての人生に、堂々と面をあげて立ちむかつた勇者子規の姿を思い描かないではおられないのである。

(福岡県立修猷館高校教諭)



## 内乱はこうして起る

現代の日本は、戦争の危機よりも、内乱の危険性の方が、遙かに大きく潜行しつつある。内乱こそ民族最大の悲劇であることを。

## ただことならぬ時代

「われわれはいつまでも棍棒にしがみついているわけではない。いつの日か必ず棍棒を小銃に、機関銃に、バズーカ砲にとつてかえるであろう」(プロレタリア軍団)

「七〇年闘争では、警察はおろか、軍隊も粉砕する。そのための新型火焰ビン(キュリー爆弾)はずでにできている。これは硫酸とガソリンを混合してビンに入れたもので、日共が火焰ビン闘争のときに使ったものの数倍の威力がある。パリケードは街路の石はもう古い、自動車も焼いてつくるつもりだ」(中核派)

「七〇年安保闘争は、帝国主義体制と対決する権力闘争への時代の突破口である。その際には、我々は政治体制の変革を狙うものとして、連統的に準市街戦を行う。学園はやはり全人民武装中枢権力の蜂起の基地としなければならない。」

(共産主義者同盟)

「一九一七年十月世界革命の旗をかかげレーニンとトロツキーに指導されたロシア武装蜂起を継承し、全世界武装蜂起を準備し、世界革命戦争を通じて世界ソヴェト社会主義共和国を樹立し、共産主義

名 越 二 荒 之 助

社会を実現する」(東大プロレタリア軍団)

引用が長くなったが、これらの物騒な紹介が、四十三年の九月頃週刊誌に出た。しかしその後十月に起った新宿騒動、今年の一月に起った安田トリデの攻防戦、神田に「解放区」を作るための市街戦の異様な光景を見せつけられてからは、笑っておれなくなった。彼らが武装蜂起の拠点とすると豪語している大学に次々と紛争が起り、それら大学はいずれも収拾能力を失いつゝある。今では全高連と称する高校生の組織まで育てられて卒業式の妨害その他が行われている。

やがてこの秋頃ともなれば、佐藤首相の訪米その他をめぐって、紛争は更にエスカレートしてくる。あと一年後に迫った第二安保闘争では、それら大学を拠点としたゲリラ戦が演ぜられるのではないかと。特に大阪で行われる万国博は、国際的影響力を持つので特に狙われる。昨年の十月、メキシコシティで行われたオリンピックが、メキシコの学生たちによって妨害せられ軍隊との間に激しい市街戦

が演ぜられた。それより五ヶ月前にはパリーのベトナム和平会談をめぐって(同市のカルチエ・ラタンにおいて)スト学生数千人による激しいバリケード戦が展開された。それらと同じように、日本も万国博と安保をからませて、都市ゲリラ化の様相はいよいよ濃くなっていくものと思われる。日本は日と共に、たゞごとではすまないどころか、危機が到来するよりに思えてならないのである。

## 日本における都市ゲリラの想定

一昨年来「ゲバラ日記」や、「ゲリラ戦争」等、十数種類の本がベストセラーズに名を連ね、ベトナムや紅衛兵の戦訓が一部学連の間で学習されてきた。

しかし日本は中南米やベトナム、中共等のような後進国とは違う。日本では特殊な様相を帯びたゲリラ戦争が行われるであろう。恐らくそれは新宿騒動を拡大した市街地の暴動、群衆心理の操作、現場での大衆動員を巧妙に行って、混乱状態を起すのが最初の狙いと思われる。

例えば、「最近の日本では一連の爆破事件が頻発している。羽田空港洗面所、東京の緑の窓口付近、特急ひかり号の未遂、山陽電鉄と国電横須賀線の電車内爆発などがそれである。もしこれらの多くの事件が、思想的背景を持った者や、政治的意図によって、同時に惹き起されたらどうなるか。また大都市のいたる所で、暴走学生や過激な青年労働者が、東京の山野や大阪の釜ヶ崎などのドヤ街住人を加え、かつ現場付近に集る野次馬群衆まで策謀手段により引き込んで、大集

団となって暴れだしたらどうなるであろう。恐らく全国の警察官・消防署員はキリキリ舞いで、クタクタになり、手の打ちようがなくなってしまうだろう」(「都市ゲリラ」原書房刊)

こゝに引用した文章は、著者市川宗明氏の想定であるが、これに似た例は、一昨年香港で起っている。現代は視覚によるマスメディアが発達しているから、世界の片すみで起ったことが、連鎖反動的に真似られてゆく。日本にも起らないという保障はない。「香港暴動」が日本で起ったらどうなるか。

「一昨年の香港暴動では、約四ヶ月間に、ホンモノ、ニセモノ取りまぜて、数千個の時限爆弾、仕掛爆弾が市内に設置されたり、投げられた。このようなやり方が、香港や日本のように限られた地域に人口と建物施設が密集し、林立する立地条件下の大都市における近代ゲリラ戦の常用手段となると考えてよかろう。

仕掛ける方は小人数でできるし、費用もそれほどかからない。しかしこれらを取りのぞく方の側はたまたまのものではない。発見されたらまず百メートル平方ぐらいに縄を張って、立入り禁止や付近住民の退避を強制しなくてはならない。これには大勢の警察官や行政官吏等が必要になる。

また爆弾を取りのぞくためには、専門家がいのち賭けてこれにあたらないならぬ。たとえニセモノでも、それは専門家でないと見分けがつかないから、その労苦と社会不安は大変なものである。



爆薬処理は引つ張りダコで、専門家は少数であるから、彼らは昼夜兼行で活躍しても間にあわないだろう。しまいには過労でブツ倒れるか、手さきが鈍って解体作業を誤って、自爆しないとも限らない。(一都市ケリラ)

内乱の発端

現在の日本では、学生を中心とする大衆紛争に手を焼いているが、混乱は前述の様相を帯びながら更に拡大されると見なければならぬ。それに日本では、社会党、共産党も七〇年をめざす安保廃棄闘争に対して、彼らと共通の目標を持っている。総評も七〇年にはゼネストを決行すると宣言してはばからない。

もし総評幹部が言うように、日本においてゼネストが行われれば、国鉄私鉄のほとんどの電車汽車がストップし、郵便も電信電話も、県庁も市役所も、小中高校も、ことごとくが機能を停止してしまう。全学連につながる一部の学生たちは国会、首相官邸、放送局、新聞社、主要駅を第一の攻撃目標とする。闘争が都市ケリラ化してくれば、電源・水源・発電所・ガス・港湾・空港等の要所を襲撃することもあり得る。

ゼネストに加うるに、このような全学連一派の攻撃が行われれば、国家の機能は完全に麻痺してしまう。そればかりではない。人心が不安に陥った中に流されるちょっとしたデマは、収拾つかない混乱をひき起すであろう。

人はよく「安保条約があるから大丈夫」という。しかし現行の日米安保条約は

内乱条項が削除されているから、内乱の鎮圧に米軍は出られない。米軍としても出動して反米感情に油を注ぐようなことは考えないであろう。ベトナムで手を焼いたアメリカとしては尚更のことである。

それに現在の日本国憲法には、非常事態宣言を発する規定がないのである。いかなる国でも、一地域における騒乱、あるいは全国的規模における内乱、あるいは戦争ともなれば、元首に非常大権が与えられて、いっさいの権力を掌握することができるようになっている。日本と同じように敗戦した西独は戦後これがなかったで、昨年非常事態に備えてこの法律を定めた。しかし現在の日本にはこれがないことを知らねばならない。

現在の日本では、このような非常事態収拾には、機動隊と自衛隊が出るよりほかなぬのである。しかし自衛隊や機動隊が、全国的規模で起った暴動に対して、どれだけ収拾する能力を発揮できるであろうか。

もし革命家のアジ演説に昂奮した一般群衆と、機動隊(自衛隊)が近距離に迫って対峙したとする。双方の間には憎悪の感情がむき出されて、今にも火が吹きそうな状態になる。その時乱を好む謀略家や野次馬が、双方に対して同時に発砲したらどうなるか。

ハンガリー動乱の時にも、ソ連軍と保安警察隊と民衆が対峙している時、最高裁の方角から一発の銃弾が飛んできた。

たゞそれだけで、たちまちブタベスト市民六〇〇名が死傷するという大惨劇とな

り、反ソ暴動に油を注ぐ結果となった。また一九〇五年の第一次ロシア革命の時も、三千名の群衆が「パンよこせ」のデモを冬宮に向けて仕掛けた。その時悪名高い憎ギボンが、デモ隊に対して発砲を命じた。有名な「血の日曜日」の事件である。この発砲はたちまち嵐のようにロシア全土に広がって、革命の波をかきわたるのに役立った。

更に昭和二十一年、当時の南鮮の大邱で暴動が発生したことがある。そのクライマックスはその通りである。

「大邱駅前通りで数発の銃声がおこり示威行進とすわり込みを繰り返していた労働者の二人が即死した。一夜あけて全市街は暴動の修羅場と化した。人が殺された。警察の武装を解除せよ、きのうまでの「米よこせ」を質上げせよ、の生活要求の叫びはかき消され、悪質官吏をたゞ殺せ、警察は武器をすてろの刺戟のかつ革命的な絶叫に変わった。興奮した群衆は大邱署めがけて利到した。その時女性を含む青年数十人(大邱医大の学生と看護婦)が屍体らしいものをくるんだコモをかついで、警察にやられたと叫びながら、革命歌を高唱して群衆の前を走って行った。この正体不明の集団のアジは、群衆の怒りを収拾のつかぬものに発展させた。大邱署は破壊され、市内各所で民衆の憎悪のマトになっていた警官が殺された」(林健彦著「韓国現代史」)

このように民衆というものは、官憲の発砲によって血が流されると、恐怖と激昂と憎悪がその極に達して、もはや何も

のによつてもおさめることのできないパニックを現出する。現在の日本には、こういう条件が日と共にそろいつゝあるように思われてならない。それにがらう日本人の国民性は熱しやすくさめやすいテンション(緊張)民族である。ヨーロッパで言えばラテン系に近い。フランスイタリヤ、メキシコ、韓国等、暴動が発生した国々の民族に性格が近い。このことも銘記しておかねばなるまい。

日本内乱と国際勢力の介入

日本の国内にゼネストが続き、国民生活の動脈にあたる部分が次々に破壊されれば、政府の威令は及ばなくなる。国民はどちらが正しいのか判らなくなり、マスコミが動揺して両派の立場を並列して書き立てる。いや革命派の方に有利な材料の方を多く紙面にのせる可能性がある。やがて自衛隊や警察の中にも、革命派に味方する勢力が芽生えてくる。かくして日本はロシア革命における二月革命(一九一七年二月)成功後の状態が、たちまち現出することになるのである。

現在四分五裂してしまつたかに見える革命勢力の中から、戦闘的政党を率いてレーニン的人材が出現すれば、この時こそ臨時革命政府を作らう。革命政府は新政府の名において、権力を行使できる。新政府が一部の自衛隊や警察を掌握したら、日本は完全なる内乱状態になる。革命政府は自陣営が不利と見れば、外国軍隊の導入さえ敢て行うのである。それに現在の日本には、共産国系(北朝鮮)の小数民族が、かなりの数に在し



ている。日本の国内に内乱が起れば、自国民保護のためと称して、北朝鮮政府は革命政府の要請がなくても軍隊を進駐することが考えられる。もしそうならば自由陣営所属の韓国が黙っているはずがない。南ベトナムにさえ派兵した韓国である。韓国系居留民団保護のため、果敢なる作戦行動をもつて、それに応ずるであらう。それだけでも日本の国内は北鮮軍と韓国軍によって蹂躪されることになる。

北朝鮮と韓国が、日本への軍隊進駐をやらなるとすれば、違った形で新しい作戦行動に出るに違いない。日本国内にこれだけの革命的條件が醸成されれば、北鮮は日本の革命派を援護するために韓国に進駐し、三十八度線を火を吹くことは容易に想像できるのである。

私は今こゝに、内乱に関係する国際反応を、北朝鮮と韓国に限ってのべたが、米国も中共もソ連も、日本の内乱を当然利用する。日本列島の争奪をめぐる虚々実々のかけ引きと武力干渉が、想像を絶する激しさで戦われるのである。

そもそも内乱というものは、同じ民族同志血で血を洗う惨事を繰り広げるのである。ある時は親子兄弟が、敵味方に分れてた、かう場合すらある。それは戦争以上の悲劇である。周囲の国々の国際勢力に翻弄されながら、民族の全精力を消耗して、勝敗が決まるまで戦われるのである。もし勝負がつかなければ、祖国は二分されて分裂国家を運命づけられる。その果ては国土は焦土と化し、有為な青年は戦陣にたおれ、民族の心は憎悪で色

どられる。それはいまのベトナム戦争を見れば明らかである。内乱こそは民族最大の悲劇と言わねばならない。戦後の日本では、戦争反対が耳がタコになるほど聞かされる。しかし内乱反対の声を聞いたことがないのである。

### 維新史の先例

私はこの原稿を書きながら、維新の先覚たちのことがちらついてならない。幕末の頃は極東の島国日本に対して、米英仏蘭露等の国々が、野心を秘めて迫ってきた。国内は幕府側と朝廷側に分れて、内乱の様相を帯びていた。当時のフランスは幕府側を後押しし、イギリスは薩長連合を後援した。しかし維新の先輩たちは、外国勢力の挑発に乗ることなく、事態を收拾した。その典型的な例が「江戸開城」であった。幕臣勝海舟、山岡鉄太郎らの奔走により、江戸城明渡し、談判が、西郷隆盛との間に持たれた。両者の間に立場が違っても、日本人として、そして人間としての心の触れあいがあった。彼らのナショナルインテレストを尊重するコンセンサスと、ヒューマニズムが外国勢力の介入を防ぎ、江戸を戦火から救うことになった。

現代の日本では、革命派と反革命派の間に、勝と西郷の間に交されたような肝胆相照すものがない。革命派の間には、階級史観とかマルクス主義とかいう外国製イデオロギーが、余りにも根強く巢喰うている。内乱を防止する一番よい方法は、そのイデオロギーの限界を見抜くことである。そして日本の立場から今後の

收拾策を生み出すことである。そういう思考能力がまず培われなければならない。

しかし現代は余りにも組織化がすすみ人間がメカニズムの中に埋没してしまつた。相互の間の自覚によって、自主的に事態收拾の道を開きあうことができなくなつてしまつた。この集団と集団が、個人の意志を超えてぶつかりあう現代にあって、内乱の危機はどのように防止したらよいであろうか。

### 内乱防止策

デモやゼネストや集団暴力や都市ゲリラによって、国内の機能が麻痺した時、自衛隊や機動隊の力ではどうしても收拾できなくなつてしまふであろう。政府はこのような内乱状態に至る前に、機先を制して手を打たねばならない。

思い出すのは昨年フランスで起つた革命的暴動である。五月十日北ベトナム和平会談が開始されたその日、大学の改革を叫ぶスト派学生五千人の反抗によって惹起されたバリケード事件は、労働者たちの共鳴を呼んだ。十三日午前零時を期して国内主要労組による大がかりなゼネストが、これに追い打ちをかけるように敢行された。国内二五〇近い工場が次々と労働者の手に落ち、フランスは一ヶ月以上にわたつてすっかり半身不遂に陥つてしまつた。当時のニュース・ウィーク紙は、この五月危機を二十世紀後半に発達してきた政治形態における、まがうかたなき革命と評している。

ドゴールはこの混乱期にあつたて、ま

ず軍部の指導者を掌握した。いかなる革命も、軍と警察を掌握した方が勝ちなのである。ロシア革命においても、優秀な軍隊が前線に釘づけされ、国内は厭戦気分がたゞよつていた。その時国内の残存部隊の中にいた兵士ソヴェトが蜂起して革命の主導力を握つてしまつた。革命の最期は軍事行動によって決するのである。

そのことをよく知っているドゴールはまず国軍の幹部を掌握し、その精銳部隊を、パリ周辺に配置した。戦車と砲と航空機で、水ももたらさぬ鉄壁の包囲体制をしいたのである。そして国会解散の宝刀を抜いた。スローガンは「アカハタが三色旗か」である。このように二者択一を迫られる時、アカハタを支持する国民は常に少数に過ぎない。ドゴール派は敗けようはずがない。五分の四近い議席を獲得して、フランス議会史上前例のない大勝利を獲得した。

日本でも国内が混乱し、内乱の危機ありと見たら、政府は自衛隊と警察を握つて、すかさず解散をぶつことである。議会議長の秩序を破壊するものに対しては解散によって議会政治の本道に立ちかえらすよりほかない。その時こそ、「アカハタか日の丸か」「独裁政治か議会政治か」という、民族の運命を決する課題を掲げて、信を問うべきである。戦後安穩になれた日本人に、天魔を分つ一大決戦を挑まなければならぬ。

国家の運命を守るために、いかにきびしい訓練があるかを、立候補者も選挙民も、全国民が参加する総選挙を通じて経



験する必要がある。かくして国民に民族の危機を自覚させ、議会制民主主義について本質的な政治教育をほどこすことができる。

しからばその選挙の帰趨はどうか。日の丸議会議派が、圧倒的に勝利することは間違いないのである。

(岡山県立笠岡商高教諭)

# 同胞歌壇

——しきしまのみち——

鹿児島 川井 修治

## 戦跡を巡りてよめる歌

シブヤン海に連合艦隊の奮戦をしのぶ

マリンドッケの島を左にすぎゆけば目路にひろがるシブヤンの海  
ミンドロの西に陽影ははや落ちて白雲一つ暮れ残りたる

東の方にぶ色の雲立ちて空をおほへり雨降るらしも

二十年まり五年前のこの海の悲しきいきさいたみてや降る

数知れぬ敵機の来襲身にうけてつひに沈みし武蔵艦はも

十八時の砲打ちもせで沈みたる男児のうらみいかにばかりかは

艦隊は傷つきたれどいざ行かむサンペル

ナルジノへと言ひし提督

国運を賭けしレイテの一戦に長蛇逸せし思ひやいかに

爆弾をいだきてもに突込みし特攻隊のいでしはこの時

黒がねの守りもつひに甲斐なくて空しく果てし連合艦隊

時うつり日は変れどもますらをの立てし

いさをは朽つべくもなし

シブヤンの海を見れば暮れかかる上甲板を去りがてぬかも

レイテ島をのぞみ陸軍部隊の勇戦をしのびて

ピサヤンの静けき海路船は行くレイテの島を左手に見て

右の方平たき島はマジランの上陸せしとみセブ島ならむ

風もなく晴れたる海は青くすみま屋の陽ざしきらきらと照る

穏やかなる船路を行けど悲しみに胸ふたがりぬレイテのぞめば

マッカーサーの反攻防ぎたたかひてあまたますらを失せしはこの島

一度は敵大軍をカリガラの平野に追ひつめうち破りけり

弾丸もなく糧なくつひに敗れぬる無念の思ひいかにばかりかは

椰子林の上に小高きあの峯はカンキポットかそれかあらぬか

カリガラのいくさに敗れいやはてに立てこもりしはあの峯ならむ

脱出をはかりてつひに空しくも海に没せし鈴木軍司令官

片岡に牧野、今堀諸将らも屍さらしぬ部

下らとともに

椰子林の茂れるあたりここだけの屍草むすと思へばかなし

みんなみの島の林に人知れず朽ちて果てにしみ霊おろがむ

スリガオ海峡に西村艦隊の最後をし

スリガオの海にかかればいつしかにみ空くぐもりスコールの降る

時の間に濛気海面をおほひつくし島影は

やも見えずなり行く

スリガオの海峡ゆけばしのぼるる西村艦隊突入のあと

月もなきやみ夜を白き丸太ひきしるべにしつつ進みきといふ

光消し声をひそめて進みしに敵ははやくも待ち受けてをり

優勢の敵艦隊の十字砲火に山城、扶桑つぎつぎに燃ゆ

燃ゆる火のほのほの中ゆ打ち出だす我が艦の砲たえざりきとふ

沈みゆく艦と生命をともしせり西村提督と坂艦長は

ますらをのたふとき生命のみにけむ海原くらく雨足しげし

この下にあまたますらを眠れりと思へばかなし心しなへて

再びは見ることもなきスリガオの渦まく潮路われ忘れめや

伊勢神宮参拝(一月二十九日)

内宮神苑にて 長崎 田川美代子

はるけくも来つるものかな玉砂利をふみ

ゆくこは伊勢の神宮

ととのひて清げなるこの砂利道をひともわれもと参りゆくかな

神風の伊勢の官居は冬の日といへどひまなく人の参り来る

参り路を歩み行きつつほのぼのとうれしくなりてふと笑ひけり

木のかけゆ人あらはれて不思議げに我を見つぬ面はゆきかな

五十鈴川

水底にしづみし石も清げなる五十鈴の川をけふ見つるかな

さはやかに風のわたれば下つ瀬ゆきざ波立てり清き川面に

流れゆく水に逆ふと見えもせず鯉二つ三つのぼりゆくなり

顔合はせえみ交はしつづ清き瀬に手をそそぎをり老いし夫妻は

日の本にかく美しき川のなほあるを知りぬといひし若人

足もとをひたと見つめて歩みゆくその若人に心ひかれぬ

皇大神宮にて

ありがたやさてもうれしや日の本にこの日の本に神はあませり

目に見えぬ神の御魂に守られてゆるぎなき世はありと知りぬる

なつかしきこのうれしさのしみじみと胸ひたしゆくいかに吾せむ

神まつるわざはまねてもまつる心をうれしきものとは念はざりしを

さわがしき国の内外のありさまをいかにか神はおぼしめすらむ

うまいやしきしづの女なれど国の為のひとにぎりの土になればうれしも



### 地方教師の憂い

村田英雄

私は地方の一私立高校に勤めているもので、昭和四十二年、四十三年の夏期合宿教室に参加させて頂きました。

小田村先生をはじめ、諸先生方の熱心な御指導及び愛国の熱情、そして若い学生諸君の熱のこもった学習態度。それらに接した時、敗戦以来、魂を失った世相に慣らされ、かつての日本も日本人の魂も、永久にもどらぬかと思っていた私は、大変な驚きと感激を受けました。

この会の存在は、吉野の奥地であってなお皇統の血を伝えた南朝方を思わせ、敗戦後日本人の日本は滅びてしまったかと思っていたのに、ここにまだ本場の日本の血が絶えることなく続いていたのかと感激しました。そして日本の前途に、敗戦後はじめて希望を持つ様になりました。合宿に参加する迄は、もうかつての日本は決して帰ってこないのだと、かつての日本の良さを書いたものを見るたびに死を想う思いでした。それが滅ぶことなく生きていたのですから。

敗戦後は、あらゆる出版物や新聞、放送関係の宣伝で、わが国の伝統や魂は否定され日本はソ連か中共の衛星国になるほか仕方ない運命と書いていました。それに反対して、日本人の日本に帰ろうという活字を見たことがありませんでした。

全くこの会の存在は現在の千早城であり、この会を盛り上げ、発展させれば、

やがては日本全土に志を同じくする者が一せいに立ち上り、満ち満ちてくると思えました。

地方におりましても最近では書店に、岡潔先生の著書や、日本の良識を示す書籍が少しづつ目につく様になり、前途に希望を持てますが、一方、学生問題と大学問題、労働運動、安保問題など、日本を混乱させ破壊に導く勢力も益々過激になり、左翼系教授、進歩的文化人、日教組の革命教育家、左翼礼讃の大新聞・放送関係など彼らの活動を見ると、また日本はどうなるのだろうかと不安にもなりません。

ことに最近の下剋上の風潮（学生が学長・教授の任命に加わる、或いは小・中高校に於て組合員が管理職の者を支配するなど）、そして法の軽視・無視（裁判の公判中に学生、労働者が平気で騒ぎ廻り混乱させ、それを裁判所は取締ることが出来ぬ）、或いは国家を破壊させる様な事を言っても、破壊行為を煽動しても罰せられるどころか、マスコミではかえって有名になり、文化人になり、高収入になる様な現状。全く亡国か革命の前夜と言わざるを得ません。

私なりの解釈では、敗戦により占領軍が日本を生体解剖し、日本の魂を抜いて占領憲法を入れ替えた結果、生体は異物のため拒否反応を起し、今日の様な危篤状態となったと思います。一刻も早く心臓をもとに入れ替えねば、日本という生体は死亡してしまおうと思います。占領軍に抜かれた日本人の心臓はすぐ傍にそのままあるのですから。そして占領軍はも

う存在しないのですから。

現在の下剋上の世相と、法の軽視・無視は、死の前の浮腫現象ではないでしょうか。死んでしまつて、共産国の衛星国になるか、それがいやなら一刻も早く、死ぬ前に心臓を自分の心臓にもどす手術をするか、どちらかにせねばならぬ所に来ていると思えます。

社会党・公明党・共産党などは、日本が早く死ぬのを待っている様です。そして自民党も、入れ替えられた心臓はそのままにして進む、と佐藤総理は言っています。（佐藤首相は占領憲法を革新政党同様平和憲法と呼び、私は平和憲法を守ると国会で言っています）自民党も、拒否反応が起れば死ぬのがわからぬのでしょうか。自民党の現状維持政策は、日本が共産化するのを手伝うだけだと思います。（福岡県八幡西高校教諭）

編集後記 巻頭を執筆した沢部君は39年長崎大学卒、若い会員グループの中心になって、在京大学生の輪読などを指導して下さつてゐる▼「正岡子規」の筆者、小柳さんは、三月中旬の九州地区学生合宿で子規について講義をされた。近年の福岡県高校教育の解放区を思はせる無道ぶりを、数人の同志と共に痛嘆、是正の努力を傾けてをられる▼「内乱」の筆者名感さんは、「大東亜戦争を見直そう」を出版してからますます忙しく、三、四月の春休みは、連日近県各地の遺族会から招きを受けて講演旅行に明け暮れたよう。文字通り寸暇をさいてのご執筆であった。

#### ☆開催予告

### 第14回学生青年合宿教室

主催 大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会  
期日 八月七日(木)午後二時より  
同十一日(月)午後一時まで  
四泊五日

場所 熊本県阿蘇郡阿蘇町小里  
「ホテル大観」

参加者 男子の大学生および社会人  
約三〇〇名(女子については紹介または推薦による)

研修テーマ  
A、世界の動向と日本の進路  
B、基本的な人生観の探求  
C、学園紛争の究明

#### 実施要項

①講義(題未定)

奈良女子大学名誉教授 岡 潔氏

「これからの国づくり」 世界経済調査会理事長 木内信胤氏

#### 講話

(お一人を予定交渉中)

② 別班によるフリー・トークング  
③ テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

④ 和歌創作および各自の創作作品の相互批評(思想および表現の正確さを修練するために)

⑤ レクリエーション(阿蘇登山)  
費用 参加費、学生三八〇〇円、社会人六〇〇〇円(食費、宿泊費、プリント代含む)参加学生の片道旅費は主催者側で負担

申込 六月一日開始七月十五日締切、申込先は本会東京事務局宛



# 国民同胞

発行所  
社団法人国民文化研究会  
(九州←東京←全国)  
東京都中央区銀座  
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
下関市南部町25-3宝辺正久  
振替下関1100 電話22-1152  
毎月一回10日発行  
定価一部20円(送料別)  
(送料共) 年間360円

## 大学あって日本なし

——学園紛争の根底にあるもの——

現在は昭和元祿時代ではなくて、昭和戦国時代と見るべきであろう。荒廃そのものの東京大学をはじめ、国立大学だけを見ても三十二校に及ぶ学園紛争が、いつ果てるといってもなく続いているのだ。ここでいう戦国時代とは、表面に現われたゲバ棒の横行や、建物封鎖などをめぐる攻防戦を指すのではなく、大学紛争の本質が、国民思想の混乱をむき出しにした「乱世」そのものであるからである。

文部大臣の緊急諮問に応じて、中央教育審議会は四月三十日、「当面する大学問題の対応策」を答申した。それによると、政府は紛争校の一時休校または閉鎖の措置をとることができるようにするなと思いついた意見を具申しているが、この具体的措置と並んで前段で、紛争の根底にあるさまざまな要因をかなり詳しく述べている。われわれは、答申の時期は遅すぎたからにはあるけれども、その内容はおおむね妥当なものと思う。加藤東

大学長はこの答申に対し「大学固有の領域に立ち入る」として強く反対する態度を表明したが、まだ目が覚めないのかといたい。このような前提に立って、中教審が大学紛争の由来するところに関して述べている次の一項目の二、三の言葉について、考えを述べてみたい。

「さらにわが国では、(今日の青年層とくに学生の意識や行動様式の中に起った大きな変化として「筆者注」戦後社会の特質に関連ある特徴も見られる。伝統的な権威の崩壊と民主化の過程における権利意識の高揚と責任感の軽視、イデオロギーの対立による社会生活各般にわたる過度の政治意識、青少年の訓育に対する成人の自信喪失と過保護の傾向などによって、青少年の中に自己主張の態度と行動力が育ってきた半面、責任転嫁の傾向と自己統御力の不足などが目立つようになった」と。

まず「戦後社会」について。大東亜戦

争を境にした「戦前」と「戦後」という言葉が使い慣らされてきた。そして戦後という場合、単なる時代区分ではなくて、戦前と全く違った——戦前の一切を否定したという意味に用いられがちである。どうしてそうなったのか。戦前・戦中とは全く関係ないといふふらずことによって、自説のお墨付と心得ているいわゆる進歩的文化人がどのように軽薄で、どれだけ主観的(というよりもおもしろい上がり)であることか。「戦後社会の特質」とは、かかる徒輩の言説の横行といつてよいであろう。私は、戦が終わって昭和二十二年七月南方から引き揚げて佐世保から故郷の新潟に向かう復員列車の窓から見た日の丸の小旗の波を、決して忘れたい。それは列車の進む先々に田畑仕事の手を休めて、日の丸の小旗をいつまでも振って送ってくださった多くのひととの姿であった。大東亜戦争の痛矢串は、全国民がひとしく受けるべきものと思う。戦時、平時をとわず、亡くなった今生きているわれわれと共に日本国民である。「戦前」「戦後」の呼称で日本を区切ることなど、そろそろやめたいものと思う。

次に、「民主化の過程」とあるが、大学紛争で使われている「民主化」とは、正しくは、明治元年の「五箇条の御誓文」に述べられている「旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ」の「旧来ノ陋習ヲ破リク」といってお言葉に尽きている。しかし、およそ「民主化」という言葉ほど、自己に都合のよいように勝手に解釈されてきた言葉は少ない。大学紛争におけるこの言葉の使い方を見ると、「

勝手気まま」と同じくらいに、程度の低いものである。民主化に、そのような低級な意味を持たせるなら、破れたぞうりのように民主化を捨ててもかまわないと思う。

最後に、「責任転嫁の傾向」ということについては(他の特徴もそうだが)なにも青少年に限ってはいないのである。政府が取り組んでいる大学立法の構想に対し、成田社会党委員長は、「大学立法に反対である。社会党の大学対応策といえは、まず大学を取り巻く社会環境を改める必要がある」(五月九日各紙)といいい、大学紛争の責任を社会環境に転嫁して片づけている。そうではない。大学紛争は、日本が問われているもので、日共系学生の目的は、大学あって国家なく反日共系学生の目的は、大学も国家もなくたど中共あり、である。この両者が相互に優位を争っているのが、今日の大学紛争の実情ではないか。両者に共通した点は、ともにその念頭に「日本なし」ということである。われわれは、この現状を断じて容認しない。(浜田収二郎、前共同通信社整理本部長、この五月から本会、副理事長、就任予定)

### 目次

|                     |          |     |
|---------------------|----------|-----|
| 大学あって日本なし           | 浜田収二郎    | (1) |
| 「日本思想の系譜」全五冊の出版を終えて |          | (2) |
| 同上全巻の目次紹介           |          | (4) |
| 生徒と共に               | 小林 国男    | (6) |
| 卒業にあたって             | 第六 葦牙 同人 | (7) |
| 新しい学生運動と同信相統        | 加部 隆三    | (8) |



## 「日本思想の系譜」全五冊の出版を終えて

—最終巻の「はしがき」から—

この「日本思想の系譜」文献資料集も、この巻でようやく全五冊の予定を完結することになった。二年余の歳月にわたり、本書刊行について多大の御支援と御鞭撻をいただいた文部省担当各官をはじめ、先輩知友諸氏に深甚の謝意を表させていただきます。

「日本思想の核心を、文献そのものによって若い世代の人々にご紹介しよう」という当初の私たちの願いも、これで曲りなりに達成したわけである。ただ「古代」「中世」「近世」と進ってきたこの文献資料集が、「近代」の部で、大正、昭和の時代まで及び得ず、明治時代で終わったことは、なんとも心残りするところである。それについては、他日を期すことにして、ここに一応の作業を終えることをご報告したいと思う。

さて、本書全五冊を通じての編集方針は、そのつど「はしがき」に記してきたが、諸資料の選択の仕方については、市販の同類書とかんりの相異が出ていることと思う。歴代天皇の御歌をはじめ、天皇の御心を尊崇しつつ書き残された数々の文献資料を取り上げてくると、時代を追うにつれて日本思想が次第に、深きと広さを増しつつ「開展」してきたさまが如実に受けとめられる気もするし、同時に簡素で力ある昔の人々の人生観が、時代を追うに従って、いよいよ価値高く評価されていくさまが、はっきりとうかが

われてくる。古きものに価値を認めようとする所に、日本思想の一つの姿がとらえられるようである。

よにかく、この「日本思想の系譜」の中に、われわれは、天皇および庶民によって調べ高く歌い上げられてきた「しきしまのみち」の詠草を、上代から近代にいたるまで「系譜」の中心に掲げたり、また君臣唱和の歩みを辿った本書においては、いきおい一般文献資料の取捨の上では、それなりの基準が生まれていったのは当然のことであつたと思う。いま最終巻の編集を終えるに当たって僭越ながら、編者としての私から、特に若い世代の諸者各位に、心からお願ひ申し上げたいことは、本書各巻が収録した歴代天皇の御歌を、いまひとつたび精読誦せられて、歴代の天皇がたのお心そのものを、各自の心の中にしみじみとお偲び申し上げてみていただきたい、それを怠つての天皇論議は慎むべきことではなからうか、と訴えたい。また、その天皇の大御心に応え奉らうと生きつづけた日本国民の「誠」のこもった生き方に対して、どうか日本の歴史伝統の具体的内容として自分の心の中に味わっていただきたいものと切望する次第である。

なお、最終巻のこの「はしがき」に記すのが、果たして当を得たものかどうかわからないが、私がつね日頃から心に

けてきた一つの問題、それは日本思想の将来にとって、是非とも克服しなければならぬ問題と考えるので、左にその問題の提起を試みておきたいと思う。(なお、同じことについて私はすでに他の場所でも何回かこれを指摘したが、竹山道雄氏もまた従来いくたびか類似的指摘をなさっておられることを附記しておきたい。)

## ゴッドGodの「神」との問題について

明治のはじめ、西欧文化、西欧思想が日本に入ってくると同時に、キリスト教の日本への布教も、本格化した。そして明治八年ごろまでの長い期間をかけて、キリスト教経典である新旧約聖書が日本語に翻訳された。しかしその際、布教のための方便であつたのか、それとも不用意な作業の結果であつたかはわからぬが「ゴッド」という信仰の対象になる大切な外国語に対して、翻訳者は、日本語の「神」という文字を、それに当ててしまったのである。外来宗教が、新しい布教の場へのぞむ折には、その布教の実績を高めるために、その土地に由来から伝えられてきた信仰用語を活用することがよくあつたようである。布教する側にとって

は、それが賢明の策であつたにせよ、受ける側には、重大な問題を生ずるものが常であつた。それは、外来文化が、土着文化を駆逐するに、大きな役割を果たすからである。

すなわち、わが国には、古来、「神」という言葉があり、その意味もまた、日

本独自の意味合いを含んで、呼称されたものである。「古事記」の中には、数えきれないほどの「神」の名が出てくるがこれもまた、西欧でいわれた「多神教」とは、趣きを異にし、宗教の掃衣の対象というよりも、親しみ深い祖先たちという感覚で受けとめられてきたのである。

われわれ日本人は、「神を祀る」と言い慣れてきたが、その「神」とは、生ける人間そのままの欠点多き性格を持ち、人間らしさを彷彿とさせる人格ばかりである。また先立って死んでいった人々に対して、その人々の在りし日の美しい心、そのまごころをたたえて、亡き人を「神に祀る」というのが、日本民族の伝統でもあつた。「神」という文字は、このように皆から日本に伝えられてきたばかりでなく、「神」の概念もまた、国民相互の暗黙の納得と理解の中で、いま記したような概念として、自然に形成されてきたのである。

そこに移入されたのが、キリスト教であり、「ゴッド」を「神」と翻訳して布教を開始した。そこで、明治以降の日本では、「神」の意味についての混乱が生じてしまったわけである。それは「神」と同じの争いではなく、「神」を崇めようとする日本人の心の中に、宗教的情操における混乱をよび起していった。

すなわち「ゴッド」の意味する「神」は、「全知全能」であるのに対し、日本の「神」の語を意味する「神」は、「欠点だらけの人格の延長」であつたからである。信仰に二つの対象が成り立つわけではないから、そこに一方の「神」を信仰







昭和四十二年三月に上巻を、四十三年二月と十月に中巻のその一、その二を、次いで本年三月に下巻のその一、その二を出版して一応の完結を見るに当り、全五冊の目次をここに掲載いたします。

日本思想の系譜

—— 文献資料集(上) —— 目次

はしがき

日本思想と和歌との関係について

凡例

一、古代

一 聖徳太子

二 古事記

三 日本書紀

四 萬葉集

五 最澄・空海

六 祝詞(延喜式)

七 菅原道真

八 紫式部

九 古代における歴代天皇の御歌

二、中世

十 平家物語

十一 慈圓

十二 法然

十三 親鸞

十四 源実朝

十五 後鳥羽院

十六 道元

十七 日蓮

十八 (参考資料) —— 御成敗式目

十九 北畠親房

二十 太平記

二十一 宗良親王

二十二 世阿弥

二十三 蓮如

二十四 中世における歴代天皇の御歌

附録

(一) 古代・中世に作成された、その他の史料の紹介

(二) 近世・近代に作成された、史料の紹介

(三) 日本精神史に関する主要叢書の紹介

(四) 書籍解題・目録・解説などの紹介

(五) コロンビア大学における日本思想研究書の紹介

(六) 年表・辞典などの紹介

あとがき

日本思想の系譜

—— 文献資料集(中・その二) —— 目次

はしがき

編者の三つの基本的立場について

一 日本における歴史教育は「土器」の説明から始めるべきではない

二 古事記の「神話」に取り組む姿勢について

三 アジア大陸文化を摂取された「聖徳太子」の評価について

凡例

一 戦国武将の和歌(武田信玄・上杉謙信・豊臣秀吉、徳川家康)

二 千利休

三 フランシスコ・デ・ザビエル

四 ルイス・フロイス

五 信長公記・川角太閤記

六 宮本武蔵

七 佐倉惣五郎

八 山鹿素行

九 徳川光圀

十 武道初心集

十一 契沖

十二 熊沢蕃山

十三 近松門左衛門

十四 坂田門左衛門

十五 松尾芭蕉

十六 荻生徂徠

十七 葉隠

十八 田中丘隅

十九 若林強齋

二十 富永仲基

二十一 与謝蕪村

二十二 田宗武

二十三 賀茂真淵

二十四 建部綾足

二十五 山県大貳

二十六 杉田玄白

二十七 林子平

二十八 藤田幽谷

二十九 本居宣長

三十 伴信友

三十一 世事見聞録

三十二 山片蟠桃

三十三 会沢正志斎

三十四 頼山陽

三十五 広瀬淡窓

三十六 渡辺華山

三十七 近世における歴代天皇の御歌(その一)

附録

(一) 近世思想史に関する主要な叢書類

(二) 近世における思想家の主な全集・選書類

(三) 事典・辞典類

(四) おもな研究団体、学会と機関誌

あとがき

日本思想の系譜

—— 文献資料集(中・その二) —— 目次

はしがき

凡例

四、近世(その二)

三十八 幕末の志士の和歌

(1) 高山彦九郎 (2) 三条実萬 (3) 平賀元義 (4) 藤田幽谷

(5) 御川斎昭 (6) 島津斉彬 (7) 安島帯刀 (8) 梅田雲浜 (9) 頼三樹三郎 (10) 月照 (11) 斎藤監物 (12) 佐野竹之助 (13) 有村雄助 (14) 有村治左衛門 (15) 有村兄弟の母・蓮寿尼 (16) 高橋多一郎 (17) 金子孫二郎 (18) 連田市五郎 (19) 静寛院和宮内親王 (20) 大橋巻子 (21) 有馬新七 (22) 是枝柳右衛門 (23) 清川八郎 (24) 田中河内之介 (25) 中山忠光 (26) 吉村寅太郎とその母雪 (27) 松本奎堂 (28) 藤本鉄石 (29) 安積五郎 (30) 乾十郎 (31) 平野国臣 (32) 藤田小四郎 (33) 武田耕雲斎 (34) 宮部鼎蔵 (35) 真木保臣 (36) 坂本龍馬 (37) 中岡慎太郎 (38) 武市半平太 (39) 野村望東尼 (40) 三条実美 (41) 橘曙覧 (42) 鹿持雅澄

三十九 平田篤胤

四十 二宮尊徳

四十一 大塩中斎

四十二 藤田東湖

四十三 伊達宗弘

四十四 村垣淡路守

四十五 横井小楠

四十六 佐久間象山

四十七 佐久良東雄

四十八 伴林光平

四十九 吉田松陰

五十



- 五十一 橋本左内
- 五十二 高杉晋作
- 五十三 久坂玄瑞
- 五十四 孝明天皇「御述懐一帖」
- 五十五 近世における歴代天皇の御歌  
(その二)「孝明天皇御歌」

- 附録Ⅰ 近世全期を通じての諸参考資料
- (一) 倭寇関係の資料について
- (1) 支那における倭寇の資料(その一)
- (2) 支那における倭寇の資料(その二)
- (3) ポルトガル人の目に映じた倭寇資料
- (二) 鎖国関係の資料について
- (1) 「第一回鎖国令」の全文
- (2) 「邪宗門吟味之事」の全文
- (3) 「天地始之事」から
- (4) 「ジャガタラ文」から
- (5) オランダ人カロンの「日本大王國志」から
- (三) 徳川幕府の諸法度および東照宮関係の資料について
- (1) 「武家諸法度」に関する資料
- (2) 「宮中の人々に対する法度」に関する資料
- (3) 「寺社に対する法度」に関する資料
- (4) 東照宮に関する資料
- (四) 幕末における外国関係(往復)文書について
- (1) ウォーカーの「修歳記録」から
- (2) 「アメリカ大統領ファイルモア」の「国書」から
- (3) 「ペリー来航に関する井伊直弼の上書」から
- (4) 「日米和親条約」から
- (5) 「日米修好通商条約」から

- 十六 新島襄
- 十五 二葉亭四迷
- 十四 菅沼貞風(附・福本日南)
- 十三 軍人勅諭
- 十二 馬場辰猪
- 十一 田口卯吉
- 十 千家尊福
- 九 福沢諭吉
- 八 岩崎弥太郎
- 七 大隅重信
- 六 勝海舟
- 五 西郷隆盛
- 四 岩倉具視
- 三 副島蒼海
- 二 三条実美
- 一 明治初期の詔勅

- 四十七 元田永孚
- 四十八 井上毅
- 四十九 大日本帝国憲法における「三つの前文」
- 二十 教育勅諭
- 二十一 伊藤博文
- 二十二 児島惟謙
- 二十三 内村鑑三(附・新渡戸稲造)
- 二十四 福島中佐・郡司大尉
- 二十五 樋口一葉
- 二十六 日清戦役に関する詔勅
- 二十七 三国干渉
- 二十八 国木田独步
- 二十九 陸奥宗光
- 三十 志資重昂
- 三十一 高山樗牛
- 三十二 正岡子規
- 三十三 森鷗外

- 四十八 東郷平八郎(附・佐久間勉)
- 四十九 野口英世
- 五十 河原操子
- 五十一 山田孝雄
- 五十二 山川健次郎
- 五十三 戊申詔書
- 五十四 「国民同胞和歌集・明治篇」
- 五十五 近代における歴代天皇の御歌「明治天皇御歌」

日本思想の系譜  
— 文献資料集(下・その一) — 目次  
はしがき  
凡例  
五、近代(その一)

日本思想の系譜  
— 文献資料集(下・その二) — 目次  
はしがき  
凡例  
六、近代(その二)

附録、参考資料  
(一) 国歌「君が代」と国旗一日の丸  
(二) 聖書、讃美歌の和訳について  
(三) 明治天皇の御巡幸について  
(四) 「明治孝節録」  
(五) 「明治忠烈伝」  
(六) 小学唱歌  
(七) ジョン・パチュエー  
あとがき

本書は、資料として社会教育関係者その他に無料贈呈され、また一部を青年学生サークルに配布されましたが、各位の御要望に応じて全巻の増刷を計り、幸いに五月末にはお求めに應ずることが出来ることになりました。頒価と送料は次のとおりです。(体裁：新書版・国文研叢書 No. 4 No. 5 No. 6 No. 7 No. 8 として、発行所：東京都中央区銀座7-10-18 社団法人国民文化研究会)

(硬皮) (単行本) (送料別)

- 上巻 三〇九 三二〇 五〇
- 中巻その一 三一七 三二〇 五〇
- 下巻その一 四〇九 四二〇 七〇
- 下巻その二 四〇三 四二〇 七〇
- その二 三八一 四〇〇 七〇
- 全五冊揃 一八八〇 一一〇



## 生徒と共に

小林 国 男

(福岡県立宇美高等学校)

私は去年四月に、クラス担任(三年生)となり、一年間を過したのであるが、その間、私にとって貴重な経験であったと思われるものを記してみたい。

その一つは「三分間スピーチ」として放課後担任出席のもとで行われる終礼のとき、週二回(水曜、土曜)そのときもよいから感想意見を三分間以内発表させるというのである。これは級長の発案で簡単に決まったのであるが、これが結局一年間続き、わがクラスの雰囲気、予想外の好結果をもたらしたのである。

引込み思案で、人前で話すことの殆んどなかった生徒が、ともかくも何か云わなければならぬ。初めは、教壇の上で、立つ立ったまま、頭をかくばかりで発言できない生徒、何も云うことはありませんと逃げかかる生徒に対して、私は叱る語調で発言を強制した。今、印象に残っているものを列記してみると、「床屋で髪をつんでいたら、隣のおやじさんが、女にほめられようとする男は多くなつたが、男にほめられようとする男は少いと話していたのを聞き、僕は男にみとめられるような男になりたいと思った。」(吉永忠)「秋の大きな夢を話します。それは私の一生を、美しい世界各地の保育園を巡り、めぐまれない子供達のお世

話をすることです」(白木幸子)「僕は

子供の頃、友達と得意になって池で泳いでいるとき、急におぼれかかり必死になって岸にやつとたどりついた経験があります。皆さんどうか夏休みに溺れ死しないように」(安高雄二)「私は将来、人目にたない平凡な家庭の主婦として一生を送ると思いますが、その生活の中で私は私なりの真実の生き方をしていきたいと思えます」(芹野路代)「自分達は父母の有難さをあまりにも知らなすぎるのではないか。父母は何も云わずにただ見守ってくれているが、父母達にはつらいことがあまりにも多すぎるのだ。だから我々もつと父母に感謝し、父母を大切にしなければならぬと思う」(矢部勝義)等であるが、たとえささやかで、中には他愛のない話であっても、それはそれなりにほほえましく、また真実にふれるものを感じさせるものであった。そしてこのスピーチは皆で討議するということでなく、友の意見を皆で静かに聞くという態度につながっていった所に又意義があったのである。たとえ短い話であっても皆が自分の話を心をすませ、耳をかたむけて聞いてくれるということ、得難い経験であったに違いない。普段の恣意的な談話とは違い、そこには勇気と緊張とそしてその発言に対する責任が伴

うのである。また聞く側の友達も、それまでは気がつかなかった友の新たな姿を発見し、あらためて友を見直す機会が得られたのである。このスピーチは皆の拍手でいつも終わった。そしてクラスの本当の連帯感、この三分間スピーチから生れてきたと思へるのである。

次の経験として、生徒に和歌創作の指導をしたことである。これは私にとって最も大切な指導目標であったが、導入が十月になってからであり、その後の時間の極度の不足と私の指導力不足のため、中途半端のまま終わってしまったのである。十一月、冬休み、卒業、の三回にわたるクラス歌集ができたのであるが、少しも上達せず、気持ちをはわけるが表現できなかつたのが残念であった。男生徒の歌が殆んどそうであったが、国語力低下のためであろうか。勿論私が全部簡単な感想をまじえて朗読してやったが、生徒は結構、面白く楽しく聞いていたようである。その中から比較的好い歌を拾ってみよう。

下校の際の火事 伊藤悦子

さむ空に黒き煙りの立ち登り行きかふ人の立ち止まりて見る

立ち登る煙とともに落ちし灰ま近くらしく人の走りつ

我もまたおもはずれば人群のかなたより聞こゆサイレンの音

息きらし角の店屋を曲がり見れば黒煙の中赤き火の家

養老院慰問(家庭クラブ行事)

重松恵子

古き歌を歌ふ我らに老人も手拍子合はせて歌ふがうれし  
踊ったりギター演奏してくれたクラスメートのありがたきかな  
さよならと手をさしのぶれば老人はかたく握りて涙ながせり

三留静枝

年の瀬のせまれば商ふ父母は今が勝負と働き給ふ

入江京子

卒業を前に  
友よいざ強く結ばむ友情の固ききずなを別れの日にぞ

最後に生徒に実例として示した私の作品の中から記させていただきます。

三年五組、駅伝クラスマッチに入賞す  
こがらしの北風寒き井野野辺のあぜみち  
ちコースを乙女らは走る

次々と駆けてすきゆく選手らはクラス番号のゼッケンつかけたり

駆けてくる選手の中にわがクラスの選手はここにたのもしきかな

おのがじし受け持ちクラスの教へ子を声はりあげて励ましにけり

男子女子ともががんばり学年中第一位となれりわれらがクラスは

抜かれてもいから自分のペースを守りつづけて走れといひしを

駅伝に走る選手も応援の生徒も心を合はするがうれし

全校の生徒の前で賞状を受けとるわれらが藤本崔本

二学期のクラスの協力いまここにあらはれにけりクラスマッチに

協力の榮あるしるしと賞状を教壇の上の額にかかけり



# 卒業にあたって

第六葦牙同人

私達は、過去国民文化研究会主催の合宿教室に参加した経験があり、今春大学を卒業する仲間であります。

(中略) 自国の文化を過去の遺物として葬り、あるいは日本文化を再発掘するといった、いわば国全体が「生き方」を失った、奇妙な時代に私達は遭遇しています。そういう中であって、自己の思いを貫いてゆくことは容易ではありません。私達は、社会に出るにあたって、元気に旅立ちたい。同様の主旨で、先輩達が発刊された文集「葦牙」の名をそのまま受けつぎ、本文集に、「第六葦牙」と命名しました。……(東工大・内田巖彦記、同文集はがしきより)――

(編集部から)――「第六葦牙」からここに転載する、伊藤、野口両君の文は誌面の都合で、多少程度抄出にすぎない。そのほかの寄稿者は次の通り。卒業にあたって・東京工大理・内田巖彦、大学生活をふりかえって・早大商・阿部孝郎、すなおにみつめる姿勢・岡山大教・三宅教子、人間の行動方針・神戸大工・野口豊太、生きた言葉・中大法・石井茂雄、学生生活を顧みて・共立女子短大・島田寿子、現代に欠けているもの・関西大法・柴田義治、日本文化の人的危機

・中大経・三輪隆彦、就職を前にして・鹿児島大法文・中西和夫。ほかに、和歌一〇一首。

## 大らかな生命の流れの中で

伊藤 三樹夫

(岡山大学理学部)

国文研から教えられたものは本当の意味での「主体性」である。それは個人しながみついた主体性でも、理論で擁護しなければ通用しないようなそれでもなかった。この現実世界を凝視することなくして、我々自身の主体性などありえない。生きるとは単に自分が生きることではなく、人々と共に、日本と共に生きることである。自国の文化や国家の在り方を無視した主体性などというものはありえない。問題は自己をとりまく同胞世界へのめざめである。それは小さな自己の内閉じ込めることによって保たれる安全でも、この生死波瀾の自己を離れて抽象の世界に逃避した平安でもなく、この自己をかかえながら動乱痛苦の世界に向ってゆく苦闘への意志そのものである。僕らは自己というものを広大な時代の流れの中でしっかりとみえる意志力を持たねばならない。僕が国文研から教えられ

た重大な点は、この西洋文明と東洋文明の激流の中にある日本文化のゆくえ、あるいは世界のゆくえに対してどう生きるかという姿勢であり、単に五十年や百年の自己を生きているのではなく、何千年何万年という長い経験生命の流れの中でのを考える態度である。

およそ戦後教育を受けて来た我々は、極力、日本人という意識が抹殺された世界に生きているが、そこで説えられてくる「世界人」とは先ほど述べて来た我々の実人生に具体的な生を見る眼を失った抽象人間に外ならない。平凡な生活人といわゆる進歩的文化人が説える「世界人」は同一でないが、そこに欠けている共通のものは、日本という具体的国土の中で、持続展開されている現実具体の全体国民生活への無関心であると言えよう。一方は自己の単なる日常性へ、他は平等や普遍等の抽象概念裡に埋没してしまい日本文化を荷なうべき日本人という感覚を忘れてしまっている。それはナシヨナリズム云々の問題ではない。我々が自己の生を他の運命の中いかに通わせているかというもつと本質的な我々自身の生き方なのだ。

## 大学紛争について思うこと

野口 明宏

(中央大学法学部)

だが、もっと重要な問題がある。それは戦後教育が我々に与えた功罪である。即ち自由・権利の主張ができるよう

になった反面責任を取る者がいなくなつてしまったのだ。権利と義務は盾の両面であるにもかかわらず何か事が起こり自己が不利になると「何々権がある」と開き直りそれをあらゆる手段行使し感情論まで持ちだしてまでも正当化しようとする。このような醜態を私はいやというほど見せつけられている。そしてこの傾向がますます発展するとそこには恐るべきことが始まる。つまり自己を鍛練もしないうちから自己の不利を全て他者のせいにしてしまふことである。自己の非を棚上げにしておいて他を責めるのである。紛争になると教学をそろって政府を責めることもめざらしくはない。誰も責任ある態度なぞ取るうともしない。これらの人々によって「大学の自治」という言葉が金科玉条のように述べられているのは奇妙というほかない。克己心のない者に「自治」運営ができればはずがない。まず自から治めることを放棄してしまつた大学はもはや自治を論ずる資格はないはずではなからうか。……(中略)

戦後二十余年を経た今日、日本をもう一度冷静に振り返ってみる必要があるのではないか。というのは、自己の立場に於ける責任を放棄して、無制限な自由を厚顔無恥に主張したり、自ら招いた失敗は物質によりさえすれば全て補うことができるとする考え方が横行している現状をみてそう思うのである。自己を振り返るとは、祖先が遺してくれた教訓を学ぶことである。まずこれら貴重な体験に触れずして、どうして明日の日本が語れようか。内外の喧騒に惑わされることな



く、あくまでこの態度を続けるべきである。

明治天皇の明治三十七年の御歌の中に  
いそのかみ古きためしをたづねつつ  
新しき世のこともさだめむ

という一首を見いだして、大いに感動したものであった。この御精神があつてこそ、明治の偉大な時代がひしひしと迫ってくる。古きためしを無視して、今日はいえ、新しき世のこともありえな

### 新しい学生運動と同信相統

加部 隆 三

「学生運動において問題なのは全学連が存在することでもなく、暴力が行使されることでもない。むしろ問題なのは、良識ある学生の意見が窒息してしまつてゐる所にある。今こそ学問を志す学友は勇氣を持ってキャンパス防衛に立たねばならない」と長崎大学のある学生が演壇で二千余の聴衆に訴へ大喝采をあびた。

これは長崎で数年前から言つてきたことが、漸くある少数範囲の良識派学生に火をともし結果となり、全国学生自治体協議会(全学協)の設立発足となつた基調であらう。五月四日(日)午後六時から開かれた東京九段会館でのことである。

筆者は招かれて定刻ギリギリに行ったのであるが、前日に続く連休の快晴日和であつたにも拘らず、会場は定員席を超

す男女学生で占められ、社会人とおぼしき者は一割位、報道関係者の取材(殆んどがカメラマン)が往き來する中でライトブルーの各ブロック代表旗が会組織の概貌をつたへてゐる。集まつてきた人達がサクラであらうとならうと、流石は東京である。新学期を迎えたばかりのタイムミングもあらうが、学生諸君のおも立ちは期待感にあふれ、ころよよい発言に即応、拍手を送る自意識がくみとれる。「全学連の暴力に断固反対し、知識の切り売りの場と化しつゝある大学制度を真に改革せんとする、良識派学生の集まり……」と称する彼等自身の中にあつて、僕は若い生命の躍動をおぼえた。「若人の歌」という十一項からなるリズムカルな詩を彼等は肩をくみあわせつゝ四曲うたつた。学生は敏感に反応する自意識を正しい組織に求め、活潑なうごきを新しい学生運動に力を協せようとしつゝあるのだ。「全日本学生文化会議結成に當つて」と題する宣言では東大生が「我には護るべき日本の文化、歴史伝統の最後の保持者であり、最後の代表者であり、且つその精華であることを以て自認する」という。

過去を大事にしなければならぬ。よりきたつた筋途から逃れることは出来ないし、その歴史が好ましからざるコースであらうとなかつたらうと兎に角その上に立つて文化の担い手となることが青年の使命なのだ。……ということが後半の記念講演で訴えられた会田雄次・福田恒存両講師の趣旨でもあつた。そして日本文化會議という先頭発足した所謂アンティ文化

人派に属する両講師が期せずして力説されたことは僕なりの解釈を以つてすれば文化の相統ということである。テーゼに對するアンティテーゼを繰り返してゐたのではドンブラコッコにすぎない。「新しい学生運動に期待する」と題して立たれた福田講師も全共斗の力に對抗しようとするなど言われた。学生はそれを機動隊に任せるとも言つていた。これは応答したのでなく、両者の発言を僕が心の中で融合反芻してみたのであるが、学生運動という新しい方式を従来の概念から独立させてゆくための陣痛は容易ならざるものがある。我々の勢力が小さかつた時マスコミは見向きもしてくれなかつた。……「最近の新聞、雑誌類では『全共斗にあきたらぬ右翼学生の起ち上り』などと言つて少しもポイントをつかんでくれない」と口惜しがる。その通りである。マスコミの罪は糾弾するべき多くの弱点を内包しているが、それらを地道に時事批判してゆくのでなければ單なるノロシに終つてしまふ。会場で聞かれた「カッコいい」というヤジも流行語がついに口に出たと言へばそれ迄だが、カッコいいことに憧れる若人もいるのだからノロシの連発では真の学生運動にはならぬ。

文化の担い手とは何か。文化を相統するとは具体的にどんなことをするのか。日本の人々が本当に手をにぎりあえる根源はどこにあるのか。それらをどうやって求め、如何にして自ら立ち、自ら励ます拠点とするのか。同信相統の本義を究め体得すべき時機は正に全国的に波及さ

れようとしつゝあるのだ。ノロシの連発をセラ笑つてゐる時期ではなくなつた。時のうごきに無表情であることが如何に大きい禍根をのこすか若人は痛感させられてきている。民族主義という詭語のスローガンが志とウラハラに逆用されることもありうる警告された福田講師の慎重かつ勇敢な発言に、新しい時代の息吹きを青年は感じとるべきであり、心して思想言論戦に對すべきであらう。(アジアドビジョン富士学院・教務局長)

編集後記 「信」の世界を「海」にたとへて「一信海」といふことばがある。生死波瀾をうちに湛へて一つの海、一つの鹹味に通ひあふころを偲ばせる。「日本思想の系譜」を本会が世に問ふころには、古今を通ずる一つの「日本の民」の「一信海」につながりたい、その志があるばかりだといへないだらうか。編集に当られた諸先輩諸友に感謝し、刊行の完結を喜びたい。

#### 第14回学生青年合宿教室予告

期日 八月七日より十一日まで  
場所 熊本県阿蘇町「ホテル大観」  
申込 六月一日より七月十五日締切



# 国民同胞

発行所  
社団法人国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都中央区銀座  
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部  
下関市南部町25-3宝辺正久  
振替下関1100 電話22-1152  
毎月一回10日発行  
定価一部20円(送料別)  
(送料共) 年間360円

## 「わだつみの像」私感

五月二十日、立命館大学の校庭に立てられていた「わだつみの像」が全共闘の学生に引きずり倒され、頭が割られ、腕が折りとられた。各新聞の社説は、戦没学生の嘆きや怒りや悶えを象徴した「不戦の像」を破壊するような学生に「反戦・平和」を叫ぶ資格はないときめつけた。もっともな正論である。その後投書欄にのせられた老若男女の批判のことはおおむね右に準じたものである。例外的には、戦後の「平和と民主主義」という擬制をうちこわし、新しい思想の地平を開く運動を肯定するというものもあつたが、これは平均的な日本人の感覚からするとやはり異質であらう。

その行為であつて、弁護の余地は全くない。自己の根源をつかもうとするいらだちは、青春に必然のものであろうが、それをこいう形形で爆発させることは原始時代の出現以外の何物でもないのだから、それならば一方の社説や投書欄に代表される思考系列が正しいのであろうか。私はそこに戦後思想の一つの重大な盲点が存在すると思う。それは「わだつみの像」の建立そのものがふくんでいる思想的虚偽を見のがしているからである。この像の制作費には戦没学生の手記「きけわだつみのこゑ」の印税があてられている。その戦没学生たちの声は、果して死にゆくものの、悲しみをこめたままの声そのまゝであらうか。残念ながらそうではなかった。それは「反戦」というイデオロギーによって選別され、編集者たちの「思想」によって私されたものであつた。私は最近小林秀雄氏の「政治と文学」をよみ、そこに二十年後の今日の思想

的混迷を予覚していた次のような記述をよみ愕然としたのであつた。少し長いが引用させて置くことにする。  
「前に「きけわだつみのこゑ」に触れましたが、あの本を読んだ時、直ぐ気付いた事があつた。が、言へば誤解されるだけだと考へ黙つてゐた。それは学生の手記に關してではない。編集者達の文化観の性質についての感想であつた。手記は編集者達の文化観に従つて取捨選択され、編集者達によってその理由が明らかにされてゐたからである。戦争の不幸と無意味を言ひ、死にきれぬ息ひで死んだ学生の手記は採用されたが、戦争を肯定し喜んで死に就いた学生の手記は捨てられた。その理由が解らぬなどと誰も言ひはしない。理由には条理が立つてゐるのである。たゞ私は、あの本に採用されなかつた様な愚かな息子を持つた両親の悲しみを思つたのです。私は、さういふ親を知つてゐた。彼は息子を軍国主義者などとは夢にも思つてゐなかつたし、彼自身も平和な人間であつた。戦犯が死刑になる世の中で、戦没学生の手記が活字の上で裁かれるなど何の事でもない。それはよく解つてゐるが、そこに何の文化上の疑念も抱かないといふ事は間違つてゐると思ひます。文化が病んでゐるのである。(中略) 遺言にイデオロギーなど読んではいけません。私は編集者達の良心を疑ひはしないし、揚足が取りたいのでもない。誤解しないで戴きたい。だから問題は微妙だと言つたのです。たとへ天皇陛下萬歳の手記が幾つ採録されてゐたところで、どれもこれも千萬無量

の思ひを託した不幸な青年の遺言であつたといふ事に関して、一般読者は決して誤読はしなかつたであらう。さういふ人間の素朴な感覚には誤りがある筈がないと私は思ふ。編集者達は言ふかも知れない、私達は感情を殺さなければならなかつたのだ、と。進歩的文化の美名の下にであるか。彼等はそれと氣付かず、文化の死んだ図式により、文化の生きた感覚を殺してゐたのである。(傍点筆者)  
こゝで小林氏が問題にしておられるのは、やはり歴史に對する姿勢であらう。われわれは過去の事実や人間をどのやうに無残に分析し、再構成することもできる。死者は抗弁しないからである。しかし、自己の恣意をできる限り抑制し、謙虚に歴史に對することをしないと、歴史は恐ろしい復讐をする。歪曲が大きければ大きいほど、歴史の復讐は残酷であらう。あの大東亜戦争という大きな悲劇の中で、いのちをかけて戦つた人々の遺したことを、反戦イデオロギーの宣布に使つたとすれば、例え手記に採録された人の魂といえども喜びはし

## 目次

|                  |           |
|------------------|-----------|
| 「わだつみの像」私感       | 山田 輝彦 (1) |
| 東洋と西洋            | 瀬上 安正 (2) |
| 「東大紛争両主役の考へ」について | 宮 昌三 (4)  |
| 勇氣の源泉            | 泉 一也 (6)  |
| オキナワ返還問題について     | 朴 昇浩 (7)  |



ないであろう。それはイデオロギーの正否の問題ではなく、文化感覚の問題である。戦死者の声を使って、自己の史観を正当づけようとする非人間性が問題である。

「わだつみの像」をひき倒した若者たちを作り出したものは、外ならぬ「わだつみの像」を作った人達である。もっと正確に言えば「わだつみの像」を作った人達の「思想」である。日本の戦後の思想が如何に間違つた基盤の上に立てられ、脆弱な仮構の上に立てられた幻想で

## 東洋と西洋

潮上 安正

ペスタロッチの「隠者の夕暮」岩波文庫を熊本国文研のテキストに使って、ふとかの東洋の音律を聞いたような気がした。それは聖徳太子と南洲翁遺訓を読んで感ずる共通のあの音律である。そして其の音律が中国の古典「大学」であることに気付いたのである。ペスタロッチは明治、大正の日本の教育を風靡したのである。

### 東洋

「大学の道は明徳を明かにするに在り。民を親しむにあり。至善に止まるにあり。」

之が「大学」の根本的な三つの綱領であつて、此の三つを夫々説明を加えて行くのである。明徳を明かにするということがその中でも中心であり、歴史の厚み

あつたか。われわれは今そのことを身にしみる感覚としてうけとらねばならぬ時に立っている。戦争を断罪し、過去を裁くことはたやすい。しかし、過去のすべてを、修正できぬ事実としてわが身にひきうけようとする覚悟なしには、本当の平和も民主主義も所詮はから念仏にすぎない。大学紛争の根は驚くほど深いのである。それは戦後日本人の怯懦から生れたものだからである。

(福岡県立若松高校教諭 山田輝彦)

を通して明らかにすることであろう。戦中、戦前を通じて日本を悪しげに云ふ現代の教育は明徳を明かにすることよりは遙かに遠くなつてしまつた。民主主義に最も欠けるもの、之こそ民を親しむにありということである。政治家に民を親しむ心がないのである。特に民主主義を謳歌する人々に於て然り、唯民に阿るのみである。民を親しむと、民を新たにすると二つの読み方が古来から争はれて来たのであるが、熊本に於ては実学党が、明德派「米田監物、元田永学」と親民派「横井小楠」派と二つに別れて相対立する様を「郷土の先哲を偲ぶ」で、石坂熊本市長が明かにされた。久し振りに立派な本に接して有り難かつた。

至善に止まるにありとは、抽象概念と

しての眞理など考える我々に中々判り難いが、(君にあっては仁に止まり、人の臣となつては敬に止まり、人の子となつては孝に止まり、人の父となつては慈に止まり、人と交はつては信に止まる)と第六章に出て来る。

「止まることを知つて而して后に定まることあり。定まつて而して后に能く静なり。静にして而して后に能く安心し、安くして而して后に能く慮る。慮つて而して后に能く得。」

「物に本末あり。事に終始あり。先後する所を知るときは則ち道に近し。」

現在、本末を取違え、終始を辨ぜず先後する所を知らぬこと甚しい。昨今各大学で紛争が起つて居るが、本末、終始先後を知らず夫等の大学こそ学問の道より遙に遠ざかつて居るのである。

「古の明徳を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其の国を治む。其の国を治めんと欲する者は、先づ其の家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は、先づ其の身を修む。」

修身の出所は此処から来る。そして道徳教育アレギーが現在の教育界を占めて、特に日教組は身を修めざるを以てモットーとして居る。

「其の身を修めんと欲する者は、先づ其の心を正しう。其の心を正しうせんと欲する者は先づ其の意を誠にす。」

心は正邪善悪何れの方向にも動いて行き止まる所がない。そこで心の向ふ所を誠にしなくてはいけない。「大学」では自らを欺いてはいけないと云つて居る。現在の学問は、自らを欺むき、他を省

ることのみに終始して居る。自らを欺いて何が学問であろうか。自らを欺き、他を欺く。現代の学校教育の弊が、ここに極はまつて居る。「東大」といふ本がベストセラーと云ふことであつた。東大のまづい所を色々並べて、如何にも東大を明かにしたように思つて居るのであるが、大学の在り方を日教組として出そうとしたが、文部省案の修正主義として受け取られ、自陣の崩れのを恐れて、大学の改革案は出せなかつたと書いてある。この所には自らを欺むき、又他を欺むく姿が浮刻りにされて居るのである。

「その意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すことは物に格るに在り。」現代の学問は知を致すことを専らとしているが、「大学」に於ては格物が学問の奥義であろうか。

(理性)知が人間の主人になつた。)と全学連のバイブルとしてあがめらるゝマルクーゼは、ヘーゲルの言葉を引いて来るが、知を致すことは眞の学問では部分に過ぎない。(物)森羅万象は動いて止まず、風の如きものであるが、この「物」を究める格物致知こそ最も大切なことである。

黒上先生は「太子が勝鬘經義疏に一乗の体は智解と善と、その何れを本とし何れを末とすべきかについて、当代大陸の学説が多く智解を本とするを批判したまひ、善を本とすべきを示して「若し(智)解を以て乘(悟り)と為さば、則ち乗の名広からず、善は即ち乃至一たび南無と称するもこれ善に非ずといふことなし。故に乗の名は広し。」と仰せられ、この



広き道を取るべきを示され」たのである。

岡澤先生も(心・知・情・意)の中で、情が納得しなければ、知がいくら頑張っても、心は納得しない。情が知と意に対して主人であると話して居られる。

「物格って而して后に知至る、知至りて而して后に意識あり。意識にして而して后に心正し。心正しくして而して后にその身修まる。身修まって而して后に家齊ふ。家齊ひて而して后に国治まる。国治まりて而して后に天下平かなり。」

真珠の首飾りが次第に大きくなり、極に達して又次第に小さくなるような反復に達して居る。

以上の文中「」の中の文章が古典「大学」の経首章の全文である。「大学」の以下十一章は此の首章の説明であり、それと同時に一章一章が独立した大文章であり、又それを構成する一句一句が珠玉のように光って居るのである。

### 西洋

ペスタロッチ「隠者の夕暮」は一八二節の短文からなるもので、古典大学と、その構成すら似た趣がある。

「神の親心、人の子心、君の親心、民の子心。総ての幸福の源。」副題ともつかぬ言葉が、「大学」前掲第六章の文章に何と近いことか。

「一、玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間、その本質から見た人間、そも彼は何であるか。何故に賢者は人類の何物なるかを吾等に語らぬのか。何故に気高い人たちは人類の何ものなるかを知らぬのか。……」

此の第一節は「天子より庶人に至るまで悉くこれ皆、身を修むるを以て本となす」と「大学」の第一章の句と全じである。

西洋の物の考え方は、部分部分の集合体が即ち全体であるというような発想で、東洋では、経首章のように全体の直観があつて部分が成立する。総合的直観性が根本をしっかりと把み、全体を先づ直観し、部分が全体の中にはまり込む。

日本語はいのちを玉の緒といふ。玉の緒こそ物の考え方において総合的直観性である。漱石の明暗の一節に近代インテリゲンチヤのチャンピオンのお延が考える。「団子を認めた彼女は、遂に個々を貫いている串を見定める事が出来ないうちに……」とある。団子の一つ一つ、真珠の一粒一粒について、西洋的物の考え方は詳しく説明するが、之を貫くものを提示しない。

近代日本特に近代知識人が西洋の翻訳文化の中にはまり込んでしまった今ではこの総合的直観性が完全に働かなくなつた。紛争を起して居る大学生が、部分部分は自づも納得し、如何にも確からしく構成したように考えているのであろうが、全体として見れば、世の中と全く相容れないものになつてしまつたのは、此の総合的直観性が働いて居ないからである。熊大紛争はケバのない紛争として有名であるが、スト一本部の占據一全学団交の強要一警官導入一が現在の状況でそれ等を繋ぐのは革命グループで、個々の参加学生はピエロとして躍り、学生による本部の占據という問題を忘れて、警

官アレギーに、取つかれ進歩的文化人教授も一緒に警官掃れの署名運動などに躍って居る。之等も総合的直観性が欠落して居るからである。

理性には「飛躍」が必要であるが、飛躍する時総合的直観性が必要になるのであつて、それが欠落して飛躍だけする時ゲバ棒で学問の改革が出来ると思ひ込むのである。

「三、人間の本质をなすもの、彼が必要とするもの、彼を高めるもの、そして彼を卑しくするもの、彼を強くしたり弱くしたりするもの、それこそ国民の牧者にも必要なものであり、最も賤しい小屋に住む人間にも必要なものである。」

ペスタロッチが教育作用の本質を人間そのものの育成にあるとする理念がここに出て来る。彼に於ては身を修むること一人間陶冶と、教育作用とは一致して来る。評者は王と庶民との本質の等しきを説くペスタロッチを見て、十八世紀の啓蒙的人間観と判断するが、彼自身は、四千年昔の遠い東洋の大学の道、中に人間の本质を見出しているといへないだろうか。

「七、満足している乳呑子はこの道において、母が彼にとって何であるかを知っている。而も母は幼児が義務とか感謝とかいふ音声も出せぬうちに、感謝の本質たる愛を乳呑子の心に形成する。そして父親の与へるパンを食べ、父親と共に囲爐裏で身を暖める息子は、この自然の道において子供としての義務のうちに彼の生涯の幸福を見附ける。」

此の節は、鮮かに齊家の中に国の平安

の根源を見出して居るのである。

「二八、散乱し、渾沌としている博識もまた自然の道ではない。」

「三三、暗い無知といふ生気のない空虚な荒野もまた自然の道から吾々を外らせる。汝の本性に就いての知識の欠乏は一人間より汝の知識を制限して、汝の本質の要求よりも狭いものにする。汝の關係するものに就いての最初の根本的概念の歪みと、殺人的に圧迫する圧制の暴力の歪みと、真理と幸福との悦楽の抑止、人類の第一の本質的の要求と關係における一般的国民啓蒙の不自然な欠乏、こうした汝の重苦しい影が、如何ばかり地上を暗くすることか。」

前半の自然の道は、致知、格物、格物致知であり、後半の長い文章は明德の反対概念である。

「六二、従つて父の家よ、汝は人類の総ての純粋な自然的陶冶の基礎である」

「六三、父の家よ、汝は道徳と国家との学校である。」

「七二、遙かに遠くに迷へる人類がさまよつて行く。」

「七三、神は人類に最も近い関係である。」

此の章の「」はペスタロッチの引用である。

### 日本と西洋

聖徳太子や、山鹿素行、二宮尊徳、吉田松陰、西郷南洲等の先達或は明治天皇井上梧陰(明治憲法の起草者)、元田永孚(教育勅語の起草者)等全て古典大学を生涯をかけて身誦した人達であった。「大学」は日本の歴史の重みに比敵する



書である。

今や日本には、近代知識人が氾濫して総合的直観性が働かないような教育が徹底して来たのであるが、ベスタロッチを学び、又素行の云ふ「学問の中の学問」である古典「大学」を身読して我々の本来の姿を発見して、近代インテリゲンチヤの誤りを正さねばならない。

このことは、ひいては西洋文化の先見性のなさを総合的直観性を持った「日本文化」に「東洋文化を総撰したもの」がリードすることになる。

ベスタロッチ「一二一」そして総ての国民は家庭の浄福を悦楽することに依つて、君主の親心に対する子としての純粋な信頼のうちに休らひ、そしてその君主が子たちを教育し向上させて、人類のあらゆる浄福の悦楽に到らせる父としての義務を果すことを期待している。

「一二二」人類のこうした期待は一箇の夢なのか。また彼等の幼な児のやうな希望は、彼等の低い地位における仮睡と懦弱との幻像なのか。」

彼が予言した偉大な王の出現を我々は明治天皇に於てまざまざと見る。侍講元田永学は、明治天皇の御二十才の時から召され、二十一年間に亘り古典「大学」の精神を明かにした。天皇陛下と元田侍講の「大学」により結ばれた君臣水魚の交り、石坂市長前掲書は明らかにして居るのである。

あゝ、日本。世界に人類の光明を点じた日本を罵倒する日本人よ。目覚めよ。日本人よ。

古典大学に「あゝ、前王忘れず」とある。日本人よ。人類の希望である前王を忘るゝ勿れ。(熊本県林業研究指導所)

# 「東大紛争両主役の考え」について

宮 脇 昌 三

去る昭和四十四年五月十八日(日)の朝日新聞は、山本義隆東大闘争全学共闘会議々長の朝日新聞に寄せた手記と、これに答えるかたちで「東大紛争に思う」と題した加藤一郎東大総長の見解とを、並べて掲載した。

この二つの手記は、現時点における両者(紛争を解決しようとする大学当局と紛争の直接の惹起者の一つである全共闘の学生集団)の考え方や立場を代表しているもので、相対比しつゝ検討し、両者の精神状況、ひいては、両者を含めた東大なるものの実態の一部を分析してみた。

先ず「あまり期待はしていませんが、疑問に答えて下されば幸いです」と問題を提起した、というより一種の詰問状を發した山本議長の手記は、(1)機動隊の導入について(2)大学の正常化とは何か、ついで以上に付随した大学の自治の問題とこの三つに要約できると思う。

## 一、警察力の導入について

このことについて、読者として先ず奇異にたえないのは、加藤総長も指摘するように(その総長指摘事項の内容の当否は別にして)、大学紛争の根本的原因の根は深いと思われるにも拘わらず、山本

議長は、

いま「正常化」という言葉が聞かれますが、一体何が「解決」したのでしょいか。機動隊にはじまった問題であるのに、いまや東大は機動隊万能主義がまかりとおっています。

と云うのである。即ち機動隊導入が、大異変の発端であるというのである。全共闘派自身が大学紛争の一つの起因なるにも拘らず、これはまさに奇怪な発想法と云うべきである。

山本全共闘代表の手記は、「総長、あなたは……」と言つて冒頭で始まり、次のように述べている。

あなたは一月四日「入学試験の実施の必要を理由に、学生諸君が十分納得しないままで事態の收拾をはかることを期待するわけではない。」と宣言され同十日機動隊に守られて「原則として学内『紛争』解決の手段として機動隊は導入しない」と「確認」されました。次いで一月十四日、記者会見で「入試実施のために警察力導入もやむをえない」と語り、十八日、八千の機動隊を導入されました。

私たちにはこの一連の論理がいかにつじつまが合うのか、いまだに理解しかねます。古いことを持出したのは、多くの教官が「人のワワサも七十五日」

とばかり、この問題にはおかぶりしたまゝ、ひたすら専門領域での権威と日常性をとり戻さんと「正常化」を急いでなさるように見受けられるからです。だが、おことわりしておきますがいまなお私たちの友人が数百名不法拘留され、総長が「負傷者が少なく幸い」といわれたにもかゝらず失明を含めて三百六十九人も負傷したことは決して忘れることはできません。これに対し、加藤総長は次のように弁明している。

本年一月九日夜、総長代行就任後はじめて警察力の出動を要請せざるをえなくなったのも、全共闘諸君が大挙して他の学生を襲撃し、生命の危険が切迫したと判断せざるをえなかったからです。事態はその後エスカレートしついでに一月十八、十九両日の機動隊出動となつてしまつたわけです。(中略)なお、十八、十九両日の機動隊の出動について、学生諸君の間に、世間にも、種々の誤解があるように思われるので、この際一言しておきたいと思ひます。私は、大学の本来の使命である教育と研究のためには、不法占拠の排除が必要であり、理性的な方法であるゆるる努力をしてもついに不可能な場合には、力を持たない大学としては、最終的には警察力の出動を要請することもやむをえない、とは思つていました。が、入試実施のため、あるいはその前提条件として、そのような手段をとらうとは思つていませんでした。たゞたまたまその時点で事態が悪化してし



まったくため、まことに残念でしたが、やむなく警察力の出動を要請したのでありそれが入試実施にプラスになるなどとは少しも考えていませんでした。

このやりとりは、総長釈明に理があり全共闘派は、その理に服すべきものと考えられるが、問題は、総じて大学の持っている、殆んど宿弊ともいふべき、やみくもの警実力不信任にある。九州大学の井上某教授が、はしなくも露呈した「警察は敵だ」ということばに、それは端的に示されている。

警察力というものも、長い歴史の間には、不法に、また不正義に行使される場合もあろうが、それを人道的に正していくことは、特に国立大学の法学部系教授の道義的任務といつてもいいのであるがそのためには、権力即悪という、幼稚な思考方式から脱皮し、国民的連帯感に立たねばならぬのである。

二、大学の正常化について

大学の「正常化」と言う場合、それは当然紛争の原因の究明から始まり、それを排除しまたは変革し、改善する方法を考えていくことになるのであるが、この点については、先に総長釈明を見ていきたい。

加藤総長は、

東大紛争がはげしくなつてから、早くも一年近い月日が流れました。この紛争の要因については、大学当局の手落ちや、決断のふさぎや、管理機構のまづさなど、いろいろ考えられ、また指

摘もされています。そういう点を、大学はきびしく反省し、改めるべきことは改めたいと考え、できるかぎりの努力もしているつもりです。

と、説き出し、次のように述べる。だが、これだけの紛争が生じた根本的な原因が、大学の対応のしかたや制度のまづさだけにあった、とは考えていません。問題はもっと深刻で、大学や教師のあり方そのものが問われているのです。学問それ自体の急速な変化、学問と社会の関係、教師と学生の価値意識のずれ等々、そのどれ一つをとってみても、大きな問題をはらんでおり紛争をつきつめていくと、そういう問題につきあたらざるをえません。(中略)

この紛争の過程で、大学や個々の教師まで、学生や社会から手きびしい批判をうけてきました。学問にたずさわる者の態度として批判は欠くことのできない要素であり、われわれはこれまでも、研究活動を通じてそれを心がけてきたつもりです。にもかゝらず、大学や学問のあり方それ自身に関する反省が不十分であったことは、これを率直に認めざるをえません。われわれは、この際学生諸君や社会から受けた批判を正當に受けとめ真剣に対処したいと考えています。(傍点筆者)

といふ「全共闘の学生諸君の誤り」は、第一に、現状の批判から解決への正しい展望をもつことなく性急に破壊へと走つたこと。

第二には、自分たちの思想だけが倫

理的にも論理的にも正しいと信じたことから、その思想の実現のために必要な手段としての行動がすべて正当化されるという信念を持ったことにありま

す。と指摘している。このような釈明をひき出した、山本代表、すなわち全共闘派の意見は次のようである。

ところで、いま「正常化」という言葉が聞かれますが、一体何が「解決」したのでしようか。(中略) 総長は「自

昨年夏の合宿教室の記録が出版されました。

大学教育有志協議会編 社団法人国民文化研究会

日本への回帰(第四集)

和歌を詠み、友と討論し、自己をみつめ祖国と人生と学問に思いをこらして来たこの十数年のわれわれの営みは、現実から最も迂遠の如くして、実は現実と最も深くかかわるものであったことを、われわれは確信する。この小冊子にもなる無量の思いを行間からくみ取つて下さるならば、特に紛争の中で思い悩んでいる学生諸君の手がかりの一助ともなるならば、編者として幸いこれに過ぎるものはない。――はしがきから――

目次

一、「国」のいのち

国家の役割……………川井 修治

「法そのもの」と「その法を生む

己批判」などと使いなれぬ言葉を口にされましたが、自身は「旧制度を温存したのがよくなかつた」ことにすぎません。私たちは単に制度を問題にしたのではなく、問題は、先生方の権力との緊張の忘却・専門領域への理没、権力的または無責任な態度、つまり人間の問題だったのです。さらに「自己批判」は態度で示すものです。(中略) もちろん、総長は倫理音痴で制度を物神化される方ですから、道義的にせめるつもりはありません。たゞ制度をい

背後にあった精神」と

……………小田村寅二郎  
今上天皇と孝明天皇の御歌 ……………夜久 正雄

二、合宿教室における講義  
これからの国造り――物心両面の理想は何か……………木内 信胤  
ロシア革命とソ連の現実 ……………高谷 覚藏  
西洋文化との対照における日本文化の問題……………竹山 道雄

三、学問と人生  
講孟余話――古典の読み方―― ……………小柳陽太郎  
歴史における客観的評価とは何か ……………国武 忠彦

短歌入門……………山田 輝彦

年間活動報告

歌集――学生、青年の作品より  
新書版 三三四頁

定価三〇〇円 千70円



かに合理化・近代化しても支える人間が、変らぬかぎり官僚的に窮屈になるだけのことと思われます。「正常化」といっても東大教授が「異常」な人間であることには、いまもむかしも変わりはないように思われます。(筆者傍点)

これは一面真相をついた意見であり、傾聴すべき点がある。特に「制度を問題にしたのではなく、人間の問題である」とつまり人間変革を要望している点は注目される。東大教授を「異常」ときめつけた点や、むろん、おしなべて変革を要望する人間の内容は、問題にすべきではあるが、学生が一般に教授の「権力的または無責任な態度」を責めているのは、うなずかれるのである。

文中「先生方の権力との緊張の忘却」というのは、権力に反抗する精神の弛緩を意味していると思われるが、これは逆に、従来の国立大学の、特に法文系教授のあり方について考えさせられるのである。権力即悪という心情的傾向、「国家」の存在への非科学的拒否、権力に反抗する姿勢をもって進歩的と考え、学生におもねる卑劣教師が少くなかったし、現在も多く指摘できるのである。日本「国家」の存在をことさらに無視しまたは悪しざまにいながら、国家の恩恵と庇護のもとにある図柄が、こゝで逆に明示されている。権力反抗を長らく培った大学の風土から、権力、さらに拡大して体制のすべてに反抗し破壊せんとする学生が生まれてきて今度は逆に「権力との緊張の忘却」をもって大学当局を責めているのである。

「専門領域への埋没」という、多少舌足らずのことばであるが、これは研究のみあって「教育」の不在という証言であったことは、昔も今も変りはない。六三三四の新学制において、失敗した一つ重大な事からは、「教育のなかった大学」ばかりにしたことである。つまり旧制高校また専門学校が果していた人間教育における役割を考慮しなかったことである。

このような、一面痛烈である全共闘派の質問に対し、総長の釈明は果していかにほど答えているであろうか。論理的には整然とし、もって服すべき理を備えているが、いかにも冷徹で、少くとも心情的には全共闘派学生の受け入れるところとはならぬであろう。

三、大学の自治について

以上諸所に引用したような全共闘派の考え方から、「大学の自治」についても次のような受けとり方をしている。

大河内氏の機動隊導入は「管理者的立場に重点をおいた」ことが誤りとされているが、器物損壊で私たちが告発するに、どう異なるのでしょうか。

(中略)したがって、総長が「大学の自治」を口にされても、それは大学の権力へのゆ着と学生の抑圧の結果的狀態にすぎないという私たちの以前の指摘を補強するだけのようです。「対話」とか「参加」とか、も、当局に結局はしたがう「良い子」との協調で

あって、「ころもの下に機動隊」であり、文部省にとっても「衛生無害」なことは見通しです。

「大学の自治」などと言っても、階級闘争の思想を、文字どおり闘争によって実現すれば、風の前の塵のように飛散してしまう実例がこゝにある。全共闘は正直にそれを実行したのであって、「大学の自治」の名の下に、隠密裡に大学を革命化し、これを実質的に占據しようとする徒党こそ、最も警戒されねばならない。

(長野県上田染谷丘高等学校長)

勇気の源泉

——「日本思想の系譜」

全五冊の刊行をよるこぶ

小泉 一也

東京工大楠谷繁雄氏は、「中教審の答申を読んで」の所論の中で、遂に「私は現在の日本は亡国一歩手前と考えている。教育も崩壊し、裁判も正義を失ってしまった。経済的な繁栄を誇っているようであるが、遠からず、経済もダメになり、日本は世界の三流国に転落し、中共ソ聯の属国になるであらうと思う。」と

なげかれ、ジャーナリズムの責任を強く訴えておられる。そして私も、現代の日本が崩壊した暁には、マスコミはどうその責任をとらうとするのであらうか。と憤りを感じる次第である。

現代の日本の「前途」と云わずとも今

我々の身辺に去来している、出来事を考えると、正直、何が起るかわからぬとの感慨をもつものは、私一人だけであらうか。今、筆をとっている間に、こゝ長崎でも、二十二才の青年が生活苦を理由に五十すぎの両親を二人とも一緒に殺すという事件が起ったし、一方裁判所の法廷では逮捕学生の公判を被告と傍聴人がインターナショナルをうたつたて妨害これつとめ裁判を不能にするとのニュースが報じられておる。

又、加藤東大総長(四十六才)は警察力の学内出動に對して、「大学の判断を尊重し、大学当局の要請によって出動するという従来の慣行を維持してゆくべきだと申したので」と、そして「大学が必要の場合に要請をためらうことが心配されているようですが、東大としては、これからも慎重にしかし十分の決意をもってことにあたり社会の期待にこたえたいと考えております」と見解を表明しているが、これと九大井上学長代理の警察に対する、国家権力に対する挑戦とどういふつながりがあるのかと敢えて反論せざるを得ません。

情報発達に伴う現代社会の急速な進歩は、その反対現象として人間を疎外し、「文化」を衰退せしめつゝあるのではないかとうれえざるを得ません。ドラツガールの「断絶の時代」が、知識人のベストセラーとなりつゝありますが、これとても「個人の偉大な経験とか、あるいは、芸術や人間の精神的生活の領域まで足をふみ入れることは殆んどしていない」と申しております。今日の日本の根本的な問



題の解明ということに眼をむけるならば、この事は見逃がすことの出来ない重要な課題と云わざるを得ない。

先頃、新入大学生と話す機会がありましたが、その対話の中から、「人間は一人では生きていけない」「人間の生命は有限である」「文化とは何か」「言葉とは」「歴史とは」「学問とは」等の命題に対して、何の疑問も感じないし、これらの事を考える必要性すら持っていない事を知り、世代の断層とは云え全く意外の感を受けた次第です。「自分がもの心のついた時、感じたのは、人生のかなしみであった」という先生の言葉を記憶しておりますが、青年学生の皆さんが、自分の人生をいつわることなく、深く自省し、自問し、率直に自分の感慨をもっておられるだらうかと思う。誰しも多感な青年期に一人一人、人生に対する指標なり、先人の教えなりをつぶさに感じとってもらいたいものである。今日、大学生となったよろこびはむしろエンジョイすることに変わってしまったのではなからうかとさへ思われる。

本誌先月号に紹介されたように、このたび「日本思想の系譜―文献資料集―」全五巻の完成をみたが、これは編者を中心とした先輩諸先生の大変な御努力によることは、「一日として心の安まる時がない」ものであったと、その「あとがき」にも記されておる通りである。

そして、「祖国のいのちにふれる」という言葉の通り、この資料に接する時、漸く私にも「日本の永久生命」が、また

「日本の歴史を追体験する」ということが理解出来るのではないかと思う。今日日本人の精神生活のより処は、この中から生れると云っても過言ではあるまいし、その「場」は与えられたものと訴えざるを得ない。即ち、現代に生きる、勇気の源泉となるものがこゝにあることを「外にタタカイ内に和する」の言葉の通り、日本の危機を救うべく奮闘しておられる方々に、訴えつづけたと思う。こう考えて今一度、編者の言葉を引用させていたゞき度い。

「私たちが、この「日本思想の系譜―文献資料集」を二年前から手がけたのは、実は敗戦によって生じた一時代の断層」をなんとか除去したい、そして若い世代の人々に、日本の文化と思想について正確に勉強出来る機会を与え、日本の思想の本質を、単に頭の中での知的な追求にとどまらずに、心を勞して味わってもらいたいためであった。

そして私たちは、若い世代の人々にたいして、古典を学ぶ場合の学究態度として、自己の心を古典の時代にまで移し及ぼすように努力してもらって、いわゆる「追体験」を伴った勉強の仕方、をぜひ身につけてもらいたい、と念願してきた。もし若い世代の人々が、この勉強のコツをも身につけてくれさえすれば、時代の混乱も徐々に氷解するに相違ない、と信じただけである。』の言葉は私も全くその通りと思うし、この機会に友ら相寄り、輪読の時間を出来るだけ多くもちたいものである。

(三菱重工・長崎造船所)

# オキナワ返還問題について

——韓国一市民からの苦言——

朴 昇 浩 (在釜山市)

(編集部註) — 筆者、朴昇浩氏には一昨年本会の第二次韓国見学生旅行団々長名越二荒之助氏が現地で二十数年ぶりに会った。筆舌を絶した韓国動乱の経験語り日本の知友の消息を問う朴氏については、昨年本会が刊行した訪韓学生研修団レポート「日韓・海と河の交流」に登場してくる。

私達は、最近米国と日本の間に進行しているオキナワの日本返還問題が、単なる米日両国間の問題でなく、極東地域の全般的安全保障問題と密接な関連があるという意味で深い関心を表明せずにはおられない。

今日の世界情勢は、兩大陣営に分かれているといっても、科学文明のお蔭で、時間と空間が短縮されて一つの世界を指向しているということには誰も異議がないはずである。オキナワ返還問題は、ひとり米日両国の内政問題にとどまらず、アジア地域の新生国家は勿論、将来の世界情勢を決定する問題といふべく、その見地からまことに重大なる問題といわねばならぬ。

最近日本は、平和憲法を立看板に泰平ムードに陶醉しながら、オキナワ返還問

題に挙国的運動を進め、いわゆる核付基地の早期返還から更に、無核基地の本土なみという目標を立てて強力に交渉している様であるが、大体私達は日本のこのような政策方向にひとつの疑問を抱くと同時に、これは日本自体の安保問題はさておき、極東の安保問題のために如何に無謀なことであるかを強調したのである。

なぜかといえば、日本の政策立案者はベトナム戦を中心とするアジアの険悪な情勢と、アジア大陸全体に虎視眈々としている中共の正体を正確に判断していないためであるといわねばならぬ。

日本は中共と接触するにおいて、政経分離政策を立てて目前の通商利益だけを追求しているが、自国の防衛態勢が整備されない限りこれは一種の蟹気楼の様なものであるといわねばならぬ。私達は現在中共が、ベトナム戦とソ連接続境にて行なっている傍若無人の行動を再び想起してみることがあるのではないか。今日の世界は結局武装された平和である。中ソ国境衝突においても、ソ連が核使用を示唆したところ、中共は核には核によって報復するといっている。中共はいま、米ソ両国を腹背両面に受けながら、好戦的



挑発態勢をかくさずにいるのである。彼の国力は米ソ兩國にくらべて問題にならないといえども、彼等は核開発、誘導弾開発を独自に進めているのである。今日世界は米中ソという三つの影響圏に分かれているといっても過言ではない。私達は今日の世界情勢がこんなに急変し新しい様相を見せている点から、また軍事上地政学上の見地から、アジアの要塞であるオキナワの返還問題がどれだけ世界的に重大な問題であるかを骨髄に徹する程痛感するのである。

だから私達はオキナワ返還問題に対して所信をのべたい。第一に、日本の受容態勢を指摘したい。日本は平和憲法を口実に、制限した自衛隊だけを持っているが、日本は米国のいないアジアの防衛面を代って担当出来る実力を持っているか。日本は自由陣営に属するアジアの唯一なる工業国だというなら、米国のない力の空間を埋める自信があるか、を聞きたい。日本はこれに先立ってまず憲法改定を当面の課題にすべきではないかと信するのである。

また、日本は韓国が主導していた太平洋閣僚理事会の機能を去勢するのに主動的役割をはたした。韓国はアジアの太平洋地域の自主的防衛力を構築しようとして、太平洋閣僚理事会の漸進的發展と共に軍事的安保体制まで目標にしていたのであるが、日本はいつもこれを妨害していたし、又これを一個の象徴的存在ににしてしまったのである。

日本は先進工業国だと自認しているが自国の国家利益だけを追求しているし、

隣接国家と苦楽を共にしてこれを援助する態度を持っていなかった。それにも拘らず、極東地域の軍事的要塞のオキナワを返還せよといっても、私達韓国をはじめ、自由中国、ベトナム、フィリピン、泰、マレーシアの国々は賛成しないだろう。ともあれオキナワ問題は、いま米日両国間の懸案問題にとどまらず、アジア地域の集団安全保障問題と直結している点を強調したのである。日本はオキナワの返還を交渉するに際して、当然の先行条件として、上に指摘した諸点の担当力量を培養すべきではないか。再びアジア諸国の希望と信頼を受くべく、「正道を踏み、国を以て憂<sup>たお</sup>へるの精神」と言った先人の気概を受け継がれる様、はるかに祈る思い切なるものがある。

~~~~~

編集後記 前号で「日本思想の系譜」全五冊揃いの時の送料を書き間違ったので、送料もとの代価を記して訂正します。小包の第一地帯二〇〇〇円、第二地帯二〇四〇円、第三地帯二一〇〇円、東京都内は一九五〇円。東京事務所へご注文下さい▼岡山大学バルカノンの会では、パンフレット「ア・モンテ・ヴェックス」を発行して学生、教職員に配布しました。紛争解決の所信と大学問題の研究を掲げたものですが、同志会員の今後の活動の資にも充てたいので二百円で購読して下さい。ことを望むよし。岡山市旭東町二丁目一一二八 田中輝和君宛へ。

☆開催案内
第14回学生青年合宿教室

主催 大学教官有志協議会
社団法人国民文化研究会

参加者 男子の大学生および社会人約三〇〇名(女子については紹介または推薦による)

研修テーマ

A、世界の動向と日本の進路

B、基本的な人生観の探求

C、学園紛争の究明

実施要項

①講義(題未定)

奈良女子大学名誉教授

岡 潔氏

「これからの国づくり」

世界経済調査会理事長

木内 信胤氏

(講話)

皇居外苑保存協会理事長

元侍従長 木下 道雄氏

②班別によるフリー・トーキング

③テキスト・資料の「輪読方式」による共同研究

④和歌創作および各自の創作作品の相互批評(思想および表現の正確さを修練するために)

⑤レクリエーション(阿蘇登山)

費用 参加費、学生三八〇〇円、社会人六〇〇〇円(食費、宿泊費、プリント代含む)参加学生の片道旅費は主催者側で負担

申込 六月一日開始七月十五日締切

申込書郵送先は本会東京事務所宛

場 所 熊本県阿蘇郡阿蘇町小里

「ホテル大観」

期 日 八月七日(木)午後二時より

同十一日(月)午後一時まで

四泊五日

期 日 八月七日(木)午後二時より

同十一日(月)午後一時まで

四泊五日

場 所 熊本県阿蘇郡阿蘇町小里

「ホテル大観」

期 日 八月七日(木)午後二時より

同十一日(月)午後一時まで

四泊五日

費用 参加費、学生三八〇〇円、社会人六〇〇〇円(食費、宿泊費、プリント代含む)参加学生の片道旅費は主催者側で負担

申込 六月一日開始七月十五日締切

申込書郵送先は本会東京事務所宛

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

制度の改革が全てか

無謀な厚かましさが勇氣ある忠誠心と見做され、臆病が態良く慎重さといふ仮面を被り、「中庸」が「優柔不断」を隠蔽する衣となり、全てのことに通じるといふことが何事に於ても行動を起さないといふことと同義になってしまった。

昨年九月一七日、岡山大学反戦会議を中心とする数十名の学生が、反戦、反安保、自衛隊武器弾薬庫撤廃を旗印に、岡山市内三軒屋にある自衛隊中四国武器弾薬庫にデモをかけての帰途、岡大を東西に貫いてゐる市道で、交通整理に当たつてゐた警官とトラブルを起した。学生達は直に警官を学内を南北に走る、所謂学内道路へ引きずり込み、狼藉を働いた。このため機動隊の出動となり、騒ぎは大きくなつた。二名の学生が逮捕された。これは学内であつたので不当であるとして早速学生達は厚生補導委員会に詰め寄り

翌日大学側はこの事件を「大学の自治の侵害」であるとし、学長声明まで出し、警察当局を非難した。教官方も学生も大部分の者は「連中がまた何か騒いでゐるわい」くらいの受取り方しかしてゐなかつた。「大学の自治の侵害」この言葉ほど学生運動の中で騒ぎを拡大するに好都合の大義名分はなく、全国の学園紛争でも始めてのものなので、これにうかつに乗つてしまつた大学側の不見識を憂慮しクラス討議でもこの点を突いて止まなかつた学生は極々少数でしかなかつた。パレードが即日築かれた。

逮捕された学生の一人が傷害罪で年末に起訴され、これを契機に、今年に入つて騒ぎは全学的となり、全共闘が自治会連合の規約を事実上無視して構成され、大学側の九・一七事件の処理の怠慢を糾弾し、スト権確立、パレード封鎖と進展した。それまで無関心そのものであつた学生達も、俄に学園の自由を、学園の自

治を、異様な口吻をもつて語り始めた。一部学生の傍若無人振りは、返つて学園の自治に対する忠誠心と見做され、学長事務取扱までが「起訴されたY君は身をもつて学園の自治を護つた」とまで団交の席で発言してしまつた。それから四日後、「学園の自治を護れ」と叫びながら、教官二百数十名が街頭をデモ行進した。

学園、教育が長期に亘り、全てを対象化し、観察せられ、計量せられ、実験せられ得るものとする所謂科学的精神のみにその根本を置いて来た。その結果、その精神の保有者である人そのものの生き方も、ただに客観視するに至り、「山路来て何やらゆかしすみれ草」といふ、素朴に内面から湧き上がる「生命」への共感を不可能にして来たのではあるまいか。無謀な厚かましさを厚かましさと断じ、臆病を臆病とし、優柔不断を優柔不断とし、全ての知識を活知識とするためには、素朴な「生命への共感」「生命への畏敬の念」を取り戻す努力を、さうしてこの生命を絶ち切らんとするものに敢然と立ち上る態度をこそ人生、学園、教育の根本に据ゑ直さねばなるまい。その態度を欠くところ、如何に制度の改革を唱へてみても、最早如何ともし難いところまで事態は来てしまつた。全力を投入すべき時である。

昭和38岡山大学卒・岡山県立岡山操山高等学校教諭 三宅将之

目次

(1) (2) (4) (5) (7) (7) (8) (8)	之郎誠郎博弘潔郁
将二 寅 陽 保 賢	宅村瀬柳具本村林
三小広小磯岸田今	かていて
てついで	全ぐに感神問想却
がめ歌	革を人雑精がみて
の立法防	の立集典骨の立か
度学業	制大万古反大い混

大学立法をめぐる

——政府・文部省に「行政責任」の自覚を——

小田村寅二郎

無法地帯のように、紛争と混乱の渦に巻き込まれてしまった日本の大学紛争はいままでのような政府や文部省の取り組み方では一向に埒(らち)があきそうもない。かりに、いま国会に提出されている「大学立法」が成立したにせよ、いままでのようなあいまいな行政姿勢——国家と大学についての不明瞭な解釈に基づく——では、とてもこの至難の局面を開くことは、期待できない。というのは、政府側は、大学人のいう「大学の自治を侵すな」の言葉に出遭うと、いつも不思議に畏縮してしまう。こういう態度自体に、すでに政治家、行政者としてのあるべき自覚に不徹底さがあり、そこに大学紛争を一層激化させてきた重要な問題が伏在している、と私は考える。

「国家権力は大学の外にあれ」という言葉をよく耳にするが、何もこの言葉の意味する所に絶対的価値があるわけではない。国家権力が「悪」だといふらず学者やインテリが少なくない今日の日本であるが、何故、国家権力そのものが、「悪」なのであろうか。デモクラシーの社会においては、国民の合意の上に政治が運営され、その運営についての執行者に、然るべき政治権力、行政権力が付与されるのは言うまでもないことである。

にもなってしまう。

いまわれわれが構成している社会では「国家権力と大学自治」との関係は、秩序の上では明らかに上下の関係に立ち、国家社会の現実の秩序を乱さない限りにおいて、学問、思想の自由が保障されるものである。(そのことは、マルキシズムの社会においては、さらにきびしく要請されている。)ましてや、現実の秩序を根本的に否定しようとする学問と思想は、いやしくも教育機関を兼ねるところとは別の場所において、その研究が進められるべきであって、日本の国立大学をいつの間にかにその種の場所に切り替えてしまう、ということは許されない。東大その他の教官がたは、よく、「大学の自治」に国家権力は介入できないといふそれが、「世界的に公認されている事実だ」、と傲然としておっしゃるが、物は言いようで、その方々が心の中で考えられるような意味でそれが公認されているとは思われない。とにかく「国家権力は敵だ」「警察は大学の敵」などと公言する京大の井上清氏・九大の井上正治氏などは、まともな秩序ある社会ならば、とつきの昔に国立大学教官の地位から排除せらるべきで、今日まで見て見ぬふりをしてきた政府や文部省は、その行政責務の遂行上に、重大な過誤を犯してきたものといわなければならない。

そこには生まれるものが、国家権力といわれるものではないのか。従って国家権力そのものは、実は、国民の合意の上には認められた合法的かつ合目的なものとして、国民自身が、すでにいち早く率先して認めているものにほかならない。大学の教官も学生も、日本の国民であることに間違いはないし、国家権力の存在自体については、もともと率先してこれに合意した一人であるはずだ。もし彼らが、日本国民の一人であることを忌避するならば話は別であるが、そうでない限りは、国家権力の肯定者の立場に立つ。ならばこそ、国立大学の教官は、国家権力から辞令をもらい、給与を与えられ、身分上も国家公務員たることを承諾して教官の地位についているではないか。また国立大学の学生は、国家権力の庇護を受けて、私大に比すれば格安の授業料で勉強ができるようになっており、また私大に比して格段の差のある優秀な諸施設の中で、勉強にいいしむ機会を与えられているのではないか。してみれば、国立大学の教官や学生たる者が、かりそめにも、「国家権力は悪だ」とか、「警察は大学の敵だ」とか口にするのは、自己存在の基盤である国家社会の存在自体を否定しようとすることであり、同時に自己否定

察権力の施行の度合いについて無制限であって差し支えないと言うのではない。権力というものは、ともすれば権力自体に物を言わせて事を運んでしまう欠点があるので、その行使に際しては、十分の理性が伴わなくてはならないし、かりそめにも、権力を誇示するような行使の仕方は、厳にこれを慎しなくてはならない。

それにしても今日、〇×式教育を受けた人たちは、物事を判断するのに、何もかも〇×式で結論を出そうとし、〇でなければ×、×でなければ〇と決めてしまう傾向が見える。だから、私がいま言ってきたように、国家権力の存在自体の正当性を主張すると、おまえは国家権力をオールマイティーと考える男だ、それゆえに大学の自治の否定論者だ、と決めてしまう。この〇×式思考法では「国家権力の庇護のもとに、大学の自治はじめて存在しうるのだ」というごく簡単な事実までもが、大変に理解しにくいことになって、「国家権力」と「大学の自治」とは、本来対立するもの、とうてい同居し得ないものと思ひこんでしまう。そして、その思考法のままで、現実問題として登場してきた「大学立法」の問題に取り結まうとするから、さらに無理がかさねてしまう。

私は、そうした学生諸君に提言したいのだが、もし、いま政府が出している、「大学運営に関する(五年間を限っての)臨時措置法案」について、まともに討議したいのなら、まず順を追って次のような姿勢で取り組むべきだ、と申したい。

一、この立法が生まれるには、それなり
の原因が現実の大学の中にあること。す
なわち混乱への対策であるということ。

それゆえに、大学人である教官も学生も
まず第一に、学内混乱の実態を、正しく
謙虚に、見直す所から出発する必要がある
。それを怠つてはいけぬ。「正しく
見直す」という「正しく」とは、こうい
うことである。「現在の日本国民は、そ
の総意によって、いま現存する社会秩序
を認めているから、この社会を改善する
こととは意図しても、否定することはしな
い」という立場に立つことを意味する。

これに反して、現社会を破壊して別途の
社会を創り出すために、大学の混乱をそ
の足場として利用しよう、という考え方は
、少なくとも現実社会の枠外に立つも
のであるから、その論者たちがいかに、
「科学的に見れば」とか何とか体裁をつ
けて主張しても、現実社会の中では「非
科学的」な言い分にはかならないし、そ
れゆえに客観性を持たせるわけにはいか
ない、と考える。別のいい方をすれば、
いま実在する国立大学は、いま実在する
国家権力と同一の秩序の中に存在してい
るものであって、このことだけではどうに
も否定し去ることの出来ない現実の厳然
たる事実であり、この事実の上に立つて
こそ、大学紛争の実情を把握し、その改善
にとりくむべきである。

二、次に、学生一人一人は、各自で自分
の見方考え方を定め、現実社会の改善を
はかる者として立つか、破壊をはかる者
として立つか、その点をはっきりと決め
る必要が生ずる。そうしなければ、双方

から同じスローガンが出されたときに、
——たとえば、今回の大学立法反対とい
うスローガンのように——呉越同舟で運
動を開始してしまうことになる。それは
学問にたずさわる者としてきわめて不見
識なことである。

そこで、前者の立場に立つ者は、後者
の立場に立つものと、はっきり決(たも
と)をわかねばならぬ。そう決心し、
それを行動の上に鮮明にあらわさねばい
けない。そのことがどんなに重要なこと
かを考えておく必要がある。

三、さて前者に心を定めた人は、後者と
たもとを分つてから、政府提案の法案の
内容について検討をはじめ、もし不審な
点が出れば、「どこが、どういうわけ
いけないか」という討議を始めればよろ
しい。その場合でもあくまでも、マルキ
ストのベースにまき込まれないで、冷静
に自主的にその検討がなされなければい
けない。

しかしなおここで注意しなければなら
ないことは、国立大学の中に少なからず
蟠踞しているいわゆる造反教官(革命の
尖兵を以て自らを任じている現秩序破壊
者たち)に対して、国立大学の教官の中
に、かなり多数の心情三派、心情日共の
教官が生まれてきたことである。これら
の心情的同調者たちは、本来思想的には
マルキストではないのに、行動的にはマ
ルキストと同調してしまふ意気地のない
人々のことである。この教官たちは、本
来はリベラリストの立場に立つ人が多い
のだが、どういうわけか、日本の政治家
や文教行政官たちと同じく、「国家と大

学についての基本的認識」についてきわ
めてあやふやな考え方をしておられる。
そのため、「大学の自治」は、国家権
力とは両立し難いもの、と思ひ込んで、
「大学の自治を守れ」という旗があげら
れると、〇×式思考法の学生たちと、全
く同じようにわけもなくそれに同調して
しまふ。西洋思想にもかぶれ過ぎたためか
日本という国柄がもとと好きでなく、
日本の歴史や伝統や政治への罵言がくり
かえされることも多ク、それらの素因が
やがて政治権力忌避の傾向を生むのかも
しれない。とにかくリベラルな立場と保
守政治とが、心の中で隔離してしまつた
リベラリストが、意外にも日本の大学教
官に多いようである。

その結果、「大学立法」という言葉だ
けで、すぐ反射的に「反対」と答える方
向に走り、そして行動面で、造反教官の
宣伝に乗せられて行動を共にしてしまふ
ことになる。赤旗を先頭にしていかに多
くのリベラリスト教官が、「大学立法反
対」のデモに加わっていることか。冷静
にとらえれば、まことにおかしな現象で
あり、ビエロにされている人々の哀れな
心情がまことに不甲斐なく見えてくる。
なんでそのような無理な立場に自分たち
を追いやっていくのか、もう少し理性的
な判断をなさらぬのだろうか、と思われ
てならない。

そこで、私はここに一つ質問を發して
みたい。赤旗デモに加わっている教官や
学生諸君、一体あなたがたが、いま、自
分たちのものだと思ひ込んでいる大学の
敷地も、校舎も、施設も、すべて大学に

関する「立法」に基いてできていること
を忘れてはおられませんか。大学の教官
の人数も学生の数も、ともにある法律に
基く規定によって決められ、教官の月給
の額も、学生の授業料の額も含めて、大
学で必要とするお金は、ことごとく国家
予算によつて決められています。考えて
みれば、あなたがたが大学の中にいると
いう事実は、すべて何らかの大学立法の
おかげであり、いな、あなたがたの身辺
のすべてが、大学立法によらざるもの皆
無、といった方がより正しい言い方にな
らないでしょうか。いまさら、「大学立
法」という行為が悪だ」というわけには
いかないではありませんか。立法行為その
ものを否定する人々とは、内容的に疑問を
出す人々とは、明らかにその行動を別に
すべきではありませんか。それを別にす
るといふそのことの中に、一番大切なポ
イントがあると思ひます。

しかし、いま政府が提出している法案
が妥当かどうか、ということについては
別です。私も次に述べるような理由で、
これには余り賛成し兼ねています。しか
し、赤旗プラカード組や、反対声明派や
反対署名運動派などに加わっておられる
教官の方々は、一体どうなのですか。そ
れでも大学の自治の守り手、担い手とい
えましようか。大学紛争の長期化と拡大
化に当面させられた政府が、紛争の解決
へ知能と行動を開始すること自体は、当
然すぎるほど当然のことです。政府なる
ものは、国民の負託に応えなければなら
ぬものです。国民が支持する国家権力を
破壊しようとする運動に、国民の税金が

使われるというようなことは、国民はとうてい納得するわけがないからです。

さてさいごに、私自身が今回の政府提出法案について感じることを記しておきます。私は以上申したように立法反対グループに対しては徹底して反対します。しかし、この法案よりも、もっと気の利いた法案を政府は出すべきであったと思っています。それは、

一、大学が非常事態に来ていることについての認識が欠けていること。正常な国家秩序の中で大学の自治が健全に運営されているのではなしに、国家秩序の破壊ということをして、大学の自治に許容された使命とさえする大学に変貌しつつあるのに、政府側は、旧態依然として、まともな相手に対するような姿勢で案文を書きあげていること。——従って立法の効果を得ることは大変にむづかしい、と思われること。

二、九ヶ月も紛争が続く大学に対して、その機能を停止することが法案に書かれてあるが、そのようなことを一々「臨時大学問題審議会」にかける必要など何であるのであろうか、と思う。そういう大事な決断を下すことこそ、政治の尊い使命ではないのか。最近の政治の悪い傾向であるが、何もかも審議会などにかけて一見いかに多数者に諮問したような形をとるが、これも事に沿うけりて、大学紛争の如きに対しては、むしろ行政当局が自らはっきりした政治責任を負って堂々と所信を行動に移しさえすればいい。徒らに審議会が決める、などという逃げ道に立とうとするから、物事が面倒になるばかりである。首相や文相の発言に法制局の検討を待つというとか、中教審の答弁待ち、とかいう発言が、今年になってからよく聞かれたが、何となく政治

というものの影が薄れてきていることを感じさせる。今回の大学立法案文などはことにその感を深くさせるもので、起草者たちが「大学の自治」の声におびえているとしか見られない。こんな腰だけ、政治家が行政官に從属するようなことでは、この大学紛争の解決など、及びもつかないのではなからうか。従って私

万葉集防人歌について

広 瀬 誠

天平勝宝七年(七五五)二月、防人の交替期にあたって東国諸国から召集された防人たちの歌った歌が、兵部少輔(軍事担当官)大伴家持によって集められ、万葉集最終の巻に収められて居る。その数約百首。徴集された若い農民たちが、関東の田舎暮らしの方言をまじへ、かつとつとして真情を訴へて居るのである。

採集した家持は「拙劣なる歌は取り載せず」といって、約半数を削り捨てて居るが、採録された歌も、決して洗練された巧みな歌ではない。しかし、洗練された専門歌人の作品以上に、われらの胸に迫る力を備へて居るのである。実例を示さう。

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉
葉せ忘れかかねつる
「父母が頭かき撫で」出征の門出の情景が目に見えるやうに活写されて居る。

の見る限りでは、この法案は通つても、それに伴う政治力が政府にあるかどうか気がなる。法案が通つただけでは改善の歩とはなるまい。従つて、要望したことは、法案の成否そのことよりも、政府ならびに文部省側に、政治と行政の責任感が、強く呼び戻されることである。(本会理事長)

さきくあれと」が訛つて「さくあれて」

「ことば」が「けとば」、「ぞ」が「せ」となつて居る。その訛りが作者の素朴な感情をなまなましく伝へて居る。

母は忘れせぬかも
父母をひたすら思ひながら、野を越え山を越えて長い旅をつづけてゆく防人の心が強く迫ってくる。「野行き山行きわれ来れど」

「ワガ……ワスレセヌ」と同じワの音を反覆して居るところに、忘れようとしても忘れられぬ思が綿々と尾を引いて居る。これは技巧をこらして同音をわざと使用して居るのではない。やむにやまれぬ気持が、おのづから同音を反覆してさそひ出すのである。

父母も花にもがや草枕旅は行くとも
ささごて行かむ
「ささごて」は「ささげて」の訛。「父母は花であつてくれたらよいのに。さう

したら旅路にも捧げ持つて行くのだが。「何といふ可憐な歌であらう。万葉には男女の愛情を歌つた作品は無数にあるが親子の情を歌つたものは意外にすくない。ところが防人歌には親子の情愛が集中的に歌はれて居る。それが防人歌の大きな特色となつて居る。純朴で健康な東国農民の生活がゆかしくしのばれるのである。

水鳥の発ちのいそぎに父母に物言す来て今ぞくやしき

水鳥が飛び立つやうな、あわただしい出発で、父母にろくに物も言はずに出て来たことを後悔して居る。出発のあわただしさを水鳥にたとへたところに、農民の生活環境が写し出されて居る。水鳥の羽音と防人出発のざわめきとが相重なつて耳もとにきこえてくるやうである。

唐衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして

着物にとりすがつて泣く子を置いて来たのだ。しかも母のない子を。「置きてぞ来ぬや」といふ異常に強い語が悲痛断腸の思ひを伝へて居る。(昭和十五年九月大陸で戦死された北白川宮永久王殿下はこの一首を愛誦されて居たといふ。殿下も幼少の御子一四才の道久王一を残して出征されたのであつた。)

葦垣の隈明に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ
道の辺のうまらの末に這は豆のからまる君を離れか行かむ

袖びつしりに泣く妻。ウバラの枝先にまつはりつり豆の蔓のやうに、からまりつて歎く妻。ひしと抱きあつて別れを惜しむ農民夫婦の姿が、田園の風景と相重なつていきづいて居る。

松の木を並みたる見れば家人のわれを
見送るに立たりしもころ

「もころ」は「ごとし」と同じ意味の古
語。松並木を見ると、自分を見送って
くれた家族たちの姿きながらで、なつかし
いといふのである。

家ろには葦火焚けども任み好けを筑紫
に到りて恋しけもはも

葦火を焚くやうな貧しくむさくるしい家
だが、我が家にまざるものはない。遠い
筑紫へいったら、その葦火焚くわが家が
どんなにか恋しいことだらう、といふ一
首である。さうかと思ふと、

我妹子と二人わが見しうち寄する駿河
の嶺らは恋しくめあるか

と、妻と二人ながめた駿河嶺(富士山)
を詠だらけの一首に歌って恋しがつて居
る。あるいはまた、

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ
妹ぞ昼もかなしけ

と、ふるさと筑波山のユリの花のイメー
ジに結びつけて妻のいとしさを、いささ
か艶めかしく歌って居る。この作者が同
時に「震ふり鹿島の神を折りつつ皇御軍
にわれは来にしを」と決然たる一首もと
どめて居ることが重大である。

大君のみことかしこみ磯に触り海原渡
る父母を置ききて

今日よりは顧みなくて大君のしこの御
楯と出でたつわれは

天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島を
さして行くわれは

父母を置いて海原を渡って行く悲しみに
たへて「大君のみこと畏み」国防の任に
つく決然たる気持を歌って居る。あるいは、
ひとすちに大君の御楯として出征す
る覚悟を歌ひ、天地の神々を祈って出征

する決意を歌って居る。これらの歌のひ
な緊張を思ふべきである。

防人の歌は一つ一つ切り離して味はふ
べきではない。百首をひとつづきの連作
のごとく読み味はふべきである。父母を
恋ひ、妻子を恋ひ、ふるさとの山や花を
恋ひ、家族の生計を気づかひ、国防の使
命感を全身的に歌ひあげて居る。一首一
首作者はおほむねちがつて居るが、それ
らを次々に読んでゆくと、防人たちの心
は同一一鹹味の大海にとき、大波のうね
りとなって迫ってくるのである。

戦時中、「大君のしこの御楯」等の数
首だけを強調し「滅私奉公」の題目とし
たのも一面的であつたが、戦後、その反
動で、防人歌のセンチメンタリズムを強
調し、あるいは厭戦的、反戦的などと説
くのも、勝手な曲解である。

「しこの御楯」の「しこ」は自分の卑
賤な身分を卑下した語である。しかるに
戦後、「しこ」はすべて醜悪なもの、い
やらしいものを意味することを集中の他
の用例によつて証明し、「これは、大君
の御楯となつて出征するのが、いやらし
いこと、憎むべきことだといふ気持で歌
つたものだ」と得々と説き、「顧みなく
ても」反語的用法だとうそぶく「学者」
がある。部分的に見て、全体を見ざる者
のあさはかな言である。この一首をくり
かへし味はつてみよ。この凛然たるしら
べのどこに厭戦的気分があるといふの
か。われらは一首全体の声調から、ただ
ちに作者の全精神を味得すべきである。

天明天皇七年(六六一)百濟救援のため
渡海出征して、白村江敗戦、日本軍徹
退後、敵地にとり残された四名の日本人
があつた。天智天皇三年(六六四)四人
は唐軍の日本進攻計画を探知し、それを

日本に急報しようとしたが、旅費がな
い。すると四人の一人大伴部博麻が、進
んで「願はくは我が身を売って衣糧にあ
てよ」といひ、一身を犠牲にして三人を
帰国させ、祖国に急を報じた。博麻は三
十年間も異国にさすらひ、持統天皇四年
(六九〇)やっと帰国。博麻は天皇から
その「尊朝愛国」を深く嘉賞された。(こ
れが愛国といふ語の日本最初の用例で
ある。)この大伴部博麻は筑紫出身の軍
丁、すなはち防人であつた。

天智天皇十年、唐国大使節の船が日本
に近づくとして「今われらに人船多
し。たちまちに對馬に到らば、かの防人
ら驚き射戦はむ」といって恐れ、誤解を
避けるために慎重を期したといふ。平田
俊春氏はさききの記事とこの記事(いつれ
も日本書紀)とに注目して「防人らの防
衛の意識がすこぶる盛んであつたこと」
を示すものとされ、「このように戦わず
して唐の侵攻を防ぎ、国家の独立を保つ
ことができたのは、一に大伴部博麻が一
身を犠牲にして唐の計画をわが国に報告
したことに基く」ことを考察され、「唐
使が對馬の防人の攻撃を恐れたことも、
博麻のような愛国の防人が多くいたこと
を示すものであり、それは万葉集に見え
る防人の歌によつても窺われる」と説か
れたところに、私は深い共感をおぼえる
のである。

防人歌を感傷的・厭戦的などと一方的
に説くのは、古代日本人に対する重大な
侮辱である。「私に背きて公に向ふ」父
母を恋ひ妻子を恋ひ故里を恋ひ、その悲
しみのゆらぐがままに祖国防護の任にお
もむいた防人の悲痛な心持は、百首の大
群作となつて万葉集の巻末を飾り、われ
らの前に力強く生きて渦巻いて居るの
である。(富山県立図書館司書)

古典雑感

小柳陽太郎

生者に対する死者の支配

最近高校三年生の作文を読みました。
いつものことながら文脈は乱れているし
誤字は多い。だがそんなことより、今さ
らのように恐ろしく感じたことは「もの
を考ふる」ということが一体どうい
うことなのか、それが全くわからなくなつて
しまつているのではないかと疑問でし
た。勿論その中には気のきいた人生觀察
も、シャレした風刺もないではない。だ
がそれは、その生徒が才気にまかせて築
き上げた自分だけの世界なので、それは
本来の「思想」とは何が異質なものだ
というように思われてならないのです。そ
こには言葉はある、しかし思想はない、
人間がこれまで続けてきた「ものを考
ふる」という営みとは何か違つたものがあ
る。それは作文を読みながら、そんな感慨
をしきりにおぼえながら。

では一体何故こんなことになつたの
か、そしてまた、これまで何気なく見過
してきた「ものを考ふる」ということは
一体何か、そんなことを考へていたとき
ふと心に浮んだものは、「フィディアス
とミケランジェロとの前には平伏せよ」
というロダンの言葉でした。ロダンは統
けという「前者の神々しい明浄、後者の
の猛烈な悲痛を讃歌せよ。讃嘆は高い精

神に対する一つの醇酒です。」
今の生徒に決定的に欠けているもの、それはこの「懺嘆」という言葉であり、偉大なものの前にひれ伏す心の姿勢ではないか。

「自然」をして君たちの唯一の神たらしめよ。彼に絶対の信を持って。彼が決して醜でない事を確信せよ。そして君たちの野心を制して彼に忠実であれ。」これもまたロダンの言葉ですが、「絶対の信」——そんな言葉も現代の子供たちの心とは程遠い。一人々々の「野心」が互いに何の連絡もなく雑然と横に並んでいる。それらを縦につなぐものは何もない。文化とは先人の業績に次のものを積み重ねることだとすれば、現代の高校生の中に見えるもの、それは凡そ非文化的な風景なのです。私が思想とは異質のものを感じたというのは、実はこの非文化的な風景だった。思想は、それが文化である以上、そして文化が継承の上に成り立つ以上、先人の業績に対する謙虚な姿勢の中にはじめて育つはずだ。とすればこのような姿勢を故意にチェックして、個人の意見をすべてのものに優先させてきた戦後の教育は、まさしく文化に対する挑戦だったと言えましょう。その中で育ってきた生徒の作文に、「決定的なもの」が欠けていっているのは、決して故なしではないのです。

アラランはその「人間論」のなかで次のように言っています。

「昆虫のはたらしきは、われわれをおどろかす。そして、これからもわかるように、昆虫のもつ感覚の鋭敏さは、われわれのおとらさず、また、その体の機構はきわめてうまくできている。だがよく考えてみると、彼らすべてに欠けているのは、記念物である。」その記念物とは、

「家であり、寺院であり、墓であり……伝説であり、礼拝と彫像であり、要するに、『生者にたいする死者の支配』である。」

「動物に欠けているもの、それはこの記念物の父である墓のまえに立ちどまりそれに石を一つかさねることである。」引用してゆけばきりがありませんが、要するにここでアラランが語っているのは謙虚ということであり、人間としての節度であり、敬虔である。それをアラランは「生者に対する死者の支配」という。死者のかけのささない、歴史という影を帯びない思想は思想ではない。生徒の作文に欠けていたもの、それはアラランの言葉でいえば、この「生者に対する死者の支配」であり、「墓のまえに石を一つかさねる」ことなのです。それは何もむづかしいことではない。人間と動物をわかつ基本なのですが、そのことに對する心構えが欠如している。子供たちのお喋りの中に、不吉なものを感じるのは私だけではないはずだ。

■ 解釈を許さない古典の世界

古典を読むという。しかし読むだけではだめなので、その中に「死者の声」を聞かなければ、古典を読んだことにはならないのです。だが現代の教育で扱われる古典は、逆に現代に奉仕する。古典はそれぞれの時代の高い価値は示しますがそれぞれ時代の限界という枠の中に閉じこめられ、飼いならされて、もはや現代を支配しようとはしないのです。

だが本来の古典とは、死者だけがもっている、あの強靱な世界であり、解釈を許さない厳密な世界である筈です。万葉集の一首を読んで、その意味を分析する

のは結構だが、いかに解釈を施そうともそのような営みの彼岸にそびえ立つ世界がある。古典を読むとは、その世界を信じていること。その世界から単に今の世に生きる糧をとり出すことではない。信じるか否か、その前で敬虔であり得るか否か、そのけじめが大切なのです。

江戸時代の人々は素説をもって学問の出発点としました。素説とは、あれこれの意味を詮索することなく、古典の字句をそのままに朗読することですが、そこには古典に対する基本的な姿勢が確保されていたと思います。だがそのような古典への接し方が可能だったのは、その時代の人々には、人間の存在が恣意を許さない、きびしい世界にとりまかれていますという認識があったからではないか。自然も、古典も、それぞれ完結して、その中で生きるとは、それを信じて以外にはない。人々はそういう覚悟を否応なしに要請されていたのです。壁はかたい。生きることはその壁の手応えを、肌を感じることでした。素説する人々は、その朗読の中に、手堅い壁の存在をたしかめていたのです。

だが現在とは全く違う。生徒たちは古典について様々の感想を語る。そこにはたしかに、読みの深さが、教師の胸をうつような言葉はある。すぐれた教師はそれらの言葉を巧みにまとめながら、問題を「整理」していくのです。しかしそこには敬虔というものは全く欠如している。規範のない無重力の世界で人々はたのしげに古典を語る。

だが山が人々に沈黙を強いるように、古典もまた人々の冗舌を拒絶するはずで、古典の前に立つたときには、襟を正すような一瞬がなければなりません。だが人々は馴れ馴れしい顔付きで古典の

中にはいつてゆく。丁度深山の静寂の中に、携帯ラジオをもちこむように。こうして人々は沈黙の世界を失ったのです。おもえば江戸時代の素説とは、実は沈黙の読書法だったのです。沈黙のないところに、「信」のないところに古典は決して存在しないのです。

さらに古典の「典」とは、いうまでもなく「のり」であり、人生の規範であり不変の文化価値を示すことばであることもここでたしかめておく必要があります。

■ 権威の喪失

現代の日本はまさしくこの「規範」を失ってしまった。万人がよって立つべき人生の法則、素朴な徳目すらも——それは世界中どこでも自信をもつ教育されている生活の基本ですが——親も教師も確信をもって教えてはくれない。そして二言目には個性を尊重するといふ。それは権威を失ったものの遁辞にすぎません。一人一人が意見をもちつことが大切だといふ。だが肝心の意見の持ち方そのものは誰一人教えてくれないではないか。個性を尊重するという前に、個性を強く逞しく鍛えるためにはどうすればいいかそれが問題なのに、その訓練の方法を誰一人教えてはくれない。「白痴はなんでも面白がる。彼は美しいイデオをばりばりと食べる。もぐもぐと噛み、歯をむき出して笑う。」(アララン・教育論) こうして訓練をうけないままに人々は人間であることをやめるのです。人間をして人間たらしめる訓練、それを放置した教育に一体何の意味があるのか。
道徳的情操を徹底して鍛えねばならぬ。美しい行為を美しい行為として感じ

とることの出来る心を、子供たちの胸に養わねばならぬ。だがそんなことを言う現代の教育者は「型」にはめてはいかないと非難する。しかし、あらゆるスポーツも楽器を扱う手先も、型からはいらないものが一体どこにあるのか。型の中に鍛えられたものだけが、型を破って本当の個性を伸す可能性を内に秘めているのです。だが今の子供たちは権威の失われた空しい世界の中で、型を身につけることもなく、勝手に大人たちを嘲り個性と名付ける。こうして荒涼たる精神の風土がいま高校の生徒たちの心の中に、はてしもなく拡がってゆく。「ものを考える」ということが一体どういうことなのか、それが全くわからなくなっている——作文を前にして私の胸をよぎった感慨は決してかりそめではないと思うのです。

(福岡県立修猷館高校教諭)

反骨精神

磯貝保博

「反骨精神」という言葉がある。「あの人は反骨精神があって、なかなか立派な人だ」などと、時代の流れや、既成の概念に立ちむかって自らの生き方、考え方に徹して生きる積極的な人生姿勢を指してこの言葉は使われる。ところで、この「反骨」という言葉を辞書でひいてみると「謀反気」とでてる。つまり、国家・朝廷にそむいて兵をおこすことということになる。すると、この「反骨精神」という言葉を辞書通りにうけとって考えてみると「反体制精神」とでもいう

ような今日の言葉に置きかえることができる。国家・現体制を否定し、既存の秩序を破壊するというゲバ学生、反体制理論が、奇妙なことになってくる。反骨精神の意味内容と同じになる。心情的に三派の心情は恐らくこの「反骨精神」を三派学生の気持の中に見出し、共感を覚えるところに根ざしているように思われる。

「反骨精神」と「反体制」の奇妙なとり合わせはさておき、現体制を批判し、革命を指向するゲバ学生の気持の中には自分たちだけが現体制の矛盾に真正面からぶつかっているという一種の殉教者的な反骨精神を認めることができる。しかし、ここで忘れてならないことは、この殉教者的な反骨精神が自分では気がつかないうちに一人よがりな革命的ヒロイズムに転化してしまっていることである。

四・五年前だったと思うが、いまパリは燃えているか? という映画が上映されたことがある。第二次世界大戦中パリを占拠したドイツに対するパリ市民のレジスタンス運動を題材とするものであった。当時、パリ市民の抵抗運動は当然弾圧された。しかし彼らは捕まれば殺されるのを覚悟のうえで果敢な行動を起した。単なるヒロイズムでなかつたことはその事実をもつてしてわかる。

今日のゲバ学生と当時のパリ市民とを直接比較するのはおかしいと思うが、機動隊の催涙弾の直撃をうけて負傷した学生を治療するために一時休戦を申し込んだゲバ学生の話しかつてパリ市民が聞いた「甘ったれるんじゃない」と叫ぶに違いない。

何かえたいの知れない国家権力が自分達の生活を破壊しつつあるという思想も、教をたのみとする思想も「反骨精神」と

はおよそ別箇のものである。今日、体制側と同じような意見をいえば、すぐ保守反動のレッテルをはられる社会風潮の中で、あるいは、「ゲバ学生の気持がわかる」などと大人ぶる人達の中で、「若い警官たちの気持がわかる」とはつきり云える人こそ、いゝ意味での「反骨精神」を持つている人だと私は思う。

(昭42中央大学卒・講談社)

大学のみが学問の

場にあらざる

岸本弘

国民同胞先月号の末頁に掲げられた合宿案内に「……大学をしてわれわれの存在を賭けるに足る学問の場たらしめるには、どのような方法が残されているのでしょうか……」と書かれた、三行余りの一文を繰返し読んで思ったことであるが、果して何が残っているのだろうか。もう何も残っていない、語るべきものも何も残っていない、いや残っていないと言えは大ウソになる。しかしそれは吉田松陰先生の士規七則の冒頭の一文「冊子を披繙せば嘉言美言の如く躍々として人に迫る。顧うに人言詰まず。即ち読むとも行わず」の言の如くである。

大学のみが我々の存在を賭けるに足る学問の場ではない、まづこのことから考え直そうではないか。確かに大学はかつて我々の存在を賭けるに足る学問の場であったし、又そうあらねばならないものである。しかしそれは、大学をして自分の存在を賭けるに足る学問の場でありたいと願ひ、かつ斯く行う者だけに言えることである。

を賭けるに足る学問の場ではなからう。人が真剣に物事を考え、真剣に物事を行おうとする時、それはいかなる境遇にあろうともその人の存在を賭る学問の道に繋がるであろう。ただ大学とは考え易く行い易く、なるべく回り道などしないように取計らわれた恵まれた温床に過ぎないのである。温床の花よ一度野に出で野の花を見るがいい。雑草の苦しみと美しさを知るがいい。そこから又生き、とした学問が蘇るであろう。学問を極めようとする人と大学を意識することとは何ら関係のないことなのである。

私は、今自分の大学生活を振り返って自分が学び得たものは何であろうかと考えると、適切な表現ではないかもしれないが、私はもともと大学らしくないものを大学生活で学んだのである。それはいわゆる思想でもなく、専攻した金属工学の知識でもない。私が学び得たと確信できるものは、人は自分に与えられた仕事に出来るかぎり、情熱を注いで取組まねばならないということである。こんな事は大学を出なくても学び得たであろうが故にもっとも大学らしくないものと言ったのである。私は現在定時制高校の教師として二年目である。今私の前に集ってくる生徒は自分の恵まれた学生生活と比べるという雑草のような苦しさで美しさを持った子供達である。

「日本への回帰」の冒頭の一文にも「学問をする者たちが否応なしにその姿勢を問われる時代が来ているのである」とあったが正にその通りである。私の今日までの学問姿勢が間違っていないかたすれば、それは生徒と接し合う一日、一日の生活の中に生きてこなければならぬ。それはもとより一朝一夕に断ずるべからぬが、私をして現在自分の存在を賭ける

に足る学園の場と言わしめるものは、この定時制高校以外にはない。ここに私の生活が肯定されるならば、それは又私の大学生活をして、大学は自分の存在を賭けるに足る学園の場であったことを肯定することに連るものと考えるのである。(昭和43富山大学卒、富山県立福光高校教諭)

いざ立て、思想の戦に

田村 潔

混乱いやまず大学にあって、当事者であるわれわれ学生が為すべきことは、先ず奮起して大学を護持する心に決めることである。学園の場を奪われ、思想の自由を侵され、研究の成果を破壊され、生の依拠を侮辱されて、いかでわれわれは生命的な憤を発せず、おられようか。いまだ発憤を躊躇する者は別として、大学の現状に直面したとき、大学を本来あるべき学園の場に回復せしめんと決心した者は、直ちに大学を守る運動を展開しなければならぬ。しかし大学を守る運動を起しただけでは駄目であって、その運動は永く持続されなければならぬ。しかも、大学の变化を一喜一憂する如き運動の展開であっては、決して大学を守ることはできないものと銘記すべきである。

発憤し運動を展開したことは、すなわちきびしい思想の戦いを開始したことで、その思想の戦いには非常な多難と危険が伏しているものと覚悟する必要がある。ところで私は至危、至難の思想の戦いのその中でも気概と勇気があれば、戦いの苦しみから逃避することはないと決意しているが、必の友だけは渴望してやまぬものである。

ぬものである。

心の友が全国にいたいと思ひ、友の名が次々に脳裏に浮ぶ時のあふれるような勇気はいかばかりか。「千万人と雖も我行かむ」と決心したものである。そして、「心の友とは何か」「友と心を通わす」ことはどういふことか。このことを心に反芻することを決して忘れてはならないと思う。真実に生き行く道を求め合う友と一緒に生きていくと信ずることの喜びはただ、和歌に詠むほかずべもないのである。荒れ狂う思想の戦のただ友にある友よ。孤立して戦いは出来ぬ、友と心を通わすといふことがどんなことなのか、真実の人間関係とはどういふことなのか。このことを忘れることなく、自らの人生体験に則しながら考えていてほしい。その時にこそどんなに苦しい思想の戦いに遇っても確信にあふれてつきすすむことが出来るであろう。戦いにのぞんで、強く強く戦わねばならぬ。(昭43長崎大学卒・九大大学院医科)

混乱からの脱却を求めて

今 林 賢 郁

青春とは、生き甲斐の感情であり、それはまた、可能性の感情でもある。と或る人はいつたが、生き甲斐という生の充実感も、そして、かけがえのない生命の尊さにも信じていることができないままに、この多感な時代を生きようとすると、人はどのような精神の混乱を経験するか。

青春の栄光と苦惱のすべだが、不可知なるものに向つての、純粋な情熱を燃え

つくす緊張した日々の連続の中にあるのに、今我々が味わっている苦痛は、思想なき繁栄の中に投げこまれ、自己の情熱を傾ける対象とてなく、いたたまれないままにすすす青春の日々である。それはまさに青春の喪失とでも称すべきものであろうか。我々は時として、自己は一体何者であり、自己の全存在を賭けるべき価値は果して存在するのか、というひどく根源的な問いに激しおそれるものがある。その答えを求めて精神は苛立つが、それが自己との存在にかかわるような問いである以上、手軽に答えが得られようはずもない。陰謀と派閥抗争という陰惨な空気の中で荒れ狂う政治学生の行動の中にも、はたまた、個人主義の学生たちにも、この共通の問いと苦しみはあるはずだ。だが、この問いに對して何物も与えられず、既存のあらゆる価値がすべて信じられなくなったとき、自己の切実な心情を託すものとして、学生の中に果食つたのが外ならぬ暴力の論理の肯定ではなかったか。

人は確かに、破壊へのエネルギーを噴出すことによって、一時的にはある種の快感を味わうことはできるが、そのような形でしか、よるこびを見出せないところとは傷ましいことだ。そこには、心からわき上る精神的やすらぎは絶対に存在しない。それでは、全体を覆うこの無気味な虚無感の中であって、生の充実を求めてやまぬ者に残されているものは何か。この問いに對して、ぼくは、今迄自分の歩んできた道をただ歩き続ける以外に、そして、それを破壊する者に対しては、不断的戦いをいどむ以外に術を知らないといふのみである。

てひたすら努めてきた。友を思い、古を追憶する中で、「他と共なる生」という人生の真実に、深々と身をひたすよろこびを知ったし、そのよるこびを支えられて、学園に向う姿勢も整えてきたばかりとて、すべてがその初心にはじまり、すべてがそこに帰っていくのである。

我々が当面している事態の深刻さと異常さを、わが身わが心の痛みとして、その打解にま向おうとするとき、我々がなさなければならぬことは、得意そうに「断絶の時代」を説くことではなく本当に「断絶」があるのなら、それをうめようとする心を傾けた努力のみである。最早、生半可な教養論や御説教が通用する時代ではない。憂いに心の乱れることはあつても、「共感の世界」を求めようとして生きた初心にたへて、そこに心を定め(昭和43早稲田大学卒・八幡製鉄)

編集後記 合宿教室も回を重ねて14回を数へるにいたつた。今年も三百人を超える大合宿になりさうだが、本号は合宿地阿蘇で、はじめての参加者を含めて全参加者に手渡されることになる。それぞれの執筆の方々の文章の底にある、折りが、はじめてこれを手にして下さる人達にどうひびくだろうか▼アポロ11号の偉業は驚嘆に値ひする。過去の海洋航海者たちの果した認識の拡大とそれを導いた理性と勇氣、その新紀元版でもあらうか。それにつけても、わが日本国民の内なる病ひと、同時に日本国民の回生力について、新鮮な認識と、篤い信念と理性と勇氣と、われらに足らざることにいかにか大であることか。



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南都町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

自国サデイズの典型

—極東文化裁判としての教科書検定訴訟—

第一次訴訟と川井証言

家永訴訟としてジャーナリズムを賑わすようになった教科書検定訴訟は、実は二つの裁判を含んでいる。提訴者は東京教育大学文学部、日本史学第二講座担当の家永三郎教授。

彼は昭和廿八年以来、高校日本史(三省堂版)を刊行していたが、昭和卅五年の高校教育課程の改正に際するよう、従来の「日本史」を書き直し、昭和卅七年に検定申請を行なった。処が、文部省の検定基準に照して、特に「記述の正確性」(内容の選択)の面で非常に多数の欠陥があるために不合格となった。当時、検定審査会に關係して、現在駒沢大学における森谷教授が、一余りに間違が多いので、出版元の若手にでも書かせたとしか思えぬ位ひどいものだった」と公開の席で酷評されるのを聞いたことがある。それ程の代物であって、学者の

戸田 義雄

良心に照らして恥ずかしくてならぬ所なのに、訴訟手段に出たのだから、「何か異常なもの」が原告本人にありそうにうかがわれる。

彼の教科書原稿は全部で三三三箇所欠陥が検定基準に照らして指摘されている。それを彼自身次のように分類している。

- (1) 思想審査にわたるもの 八〇件
- (2) 些細な点でもよいもの 一三六件
- (3) 文部省の主張自体の誤っているもの 五件
- (4) 家永本人が誤りとして承認できざるもの 九九件

この原吉本人の分類の当否は一応こゝで問わないとしても、僅か三百頁程の本の中で、本人が九九件の誤りを自認せざるを得ないというのだから、ひどい代物だと云わざるを得ない。

検定申請をした翌卅八年に前年不合格となった原稿を訂正して改めて検定申請を行ない、数々の修正意見が付された上

で合格し、教科書として出版された。

然るに、最終の検定完了後一年以上も経った四〇年六月になって突如国を相手どって百八十万円の損害賠償請求の訴訟をおこしたのである。理由は、先の昭和卅七年の不合格処分と、卅八年条件付合格処分は、学者の良心を侵害し、精神的苦痛を与え、印税収入を失わせたからというのであった。

この方を便宜上第一次訴訟と呼び、目下駒田裁判長係の下に進行中である。

去る七月十八日、午前から午後の前半にかけて、家永側の証人として久司高朗(教科書共闘会議議長)なる者が証言した。証人は闘争経歴豊かで言論の雄らしく、出版会社について検定を受ける際の文部省側の非道振りを自身の体験談として言葉がみに、力をこめて力説した。傍聴していて私はこれを国側がどう反論するか、心を痛めていた。国側代理人として「あなたは先程の証言の中で、普通選挙法の下で選挙権をもつ資格は、納税額十五円以上の者とされ、国民のパーセントにもみため、と教科書原稿に書いた所、削除を命ぜられたと言われた。しかし事実には照らしてその事はおかしいように思われる。現にこゝに見本として教科書をもってきておる。例えば『日本書籍』刊行の分では九〇頁『東京書籍』刊行本では一二〇頁にちやんとその記述があり、検定により削除するような事は全く考えられない」と。

すると、証人は全身に怒りをこめた姿勢で、

で、

「その教科書は卅五年の高校教育課程改正前のものでせう。同じ教科書でもどんどん変ってきたらんですよ。そんな古いものを持ち出して物を言われても困る」と、唾を吐くように答えた。

「では、この教科書の出版年月日を調べてみます」と国側弁護士がもたもたしていた時、

駒田裁判長が「私の手許によこして下さい」と命じた。裁判長は『日本書籍版』は昭和卅六年、『東京書籍版』は昭和四十二年です」と即座に云い切った。

自国サデイズの典型	戸田 義雄	(1)
天皇皇后陛下の行幸を	啓	(2)
富山県植樹祭にお迎へして	廣瀬 誠	(4)
お伊勢さま雑記	関 正臣	(5)
「動物農場」の著者	原 一	(7)
父への手紙	長内 俊	(7)
☆阿蘇合宿ししまのみち草抄		

これで証人の偽証は明瞭となった。これを野球なら九回裏の満塁逆転ホームランと云う所なのだろう。それにしても裁判長は立派であった。彼の父は大審院判事だったそう、息子の彼も、よき日本の法曹界の伝統を継ぐ人の一人と思われた。

久司証人に代って、午後の後半に国側の証人として出廷されたのが本会の川井修治氏である。家永側は川井氏の証言にまともに立ち向えぬので、証言中の言葉

うことを、「国益本位を捨て、」と云う論理の衣で包む。これが自国テイズムの陰性タイプである。

第二のタイプは、原告家永自身の発言にみられる自国サディズムの陽性タイプである。

去る七月十二日、午後第二次訴訟法廷で彼自身、はっきり自分の口から言ったことだが、今次大戦に際して、自分は戦争犯罪人ではないが、消極的に戦争遂行に加担したことにより一種の原罪めいたものを感じている。そこで、その贖罪行為として、「国のあやまち」を指摘し、正すことを自分の使命として、このことを、「新日本史」なる教科書の根本のねらいとしたのである。

そこで、この教科書を学んだ者は、二度と戦争をしないようになる。そうすることが、憲法前文にあらわれた平和主義を教育にとり入れることになるとの意図である。

私に云われれば、歴史教材にことかりて、広島原爆記念碑に刻まれた永久の悪文の如く、「もう戦争はしません、誤ちは繰り返しません」式の洗脳教育をやろうと云うようにみえる。それが心底からの罪意識でもって殉教者気取りでいるのだから事態は変にねち／＼している。

この「国のあやまち」と云う評価はどこから来るのか、そもそも問題だが、おしなべて戦後のニューレフトには「国のあやまち」を自から正すと言う良心意識で固まっているから始末がわるく、実質は自国サディズムであることを気付か

ずにいる。例えば、ライシャワー大使との「近代化論争」において、東大、井上光貞助教授(当時)の露呈した心情は、史実の客観的、実証的分析による結論ではなく、日本人として過去の戦争を必要以上に恥すると云う自省自戒の心情であった。然も、終りまでそれをはっきり言はずに、実証史家のポーズをとるのだから性質が悪い。井上光貞の思想態度は、家永と同じく、自国サディズムの陽性タイプであると言つてよい。

家永の意識では「国のあやまち」は日本の今次大戦突入において極まるから、このことについては、イデオロギー的偏見も、先の自国サディズムによる曲解をものともしない。言わずもがなの論証を試みようとするから、A・B・C・D包圍陣にも眼を向けぬのは勿論、アメリカ歴史学会長、故ビアーズ教授の「アメリカが仕掛けた戦争である」と言った良心的発言にも耳をかさない。

それどころか、ソ聯が終戦間際に、国際信義をふみにじて日ソ中立条約を一方的に打破し、満州に侵入した事実も書かない。却って、昭和十六年四月の関東軍特別大演習にはふれる。これはバランスを欠いた記述ではないかと言つて検定側のコメントに対し

「この演習はソ聯侵入をねらったものだから、日ソ中立条約に対する潜在的な背信行為」と強弁してやまない。(詳しくは、家永著「太平洋戦争」、一〇五―一六頁参照)『関特演』を「条約違反の未遂あるいは

予備、陰謀」と規定するに至っては、極東軍事裁判のキーナン検事の再来としか思えない。

去る四月、慶応大学の中村菊男教授が国側証人として出廷し、この『関特演』の多様な性格を証言した所、原告側弁護人は強引に家永説に彼をひき込もうと、巧妙な法廷戦術をとった。

私は思わず、「これは極東文化裁判だ」とつぶやいた。家永側は、勝者として連合軍側にあたる「国共合作出先機関」なのではないのかと疑つてみた程だ。

この裁判は、日本がみずから敗戦処理をなしうるか否かを、はからずも証明する機会となったように思われる。だから「敗戦処理の文化的側面」と云う把え方が正しいように思う。

(国学院大学講師)

阿蘇合宿教室

しきしまのみち詠草抄

八月七日ノ十一日

奥田 克巳
いつしかに遠くきにけり草千里草を踏み
つつ語らひゆけば
ふたたびとここに立つ日のありやなしや
雲流れゆく阿蘇千里原

夜久 正雄

丘のべの大木のもののみやしろに灯ひと
つづきていよよなつかし
はるかなる大観峯のいただきにたださせ
る日もいつつかかけりぬ
さみどりのこの草原のそここに友あゆ
む見ゆうたよむならむ

小柳陽太郎
岡先生の御言葉をきゝて
人の話を正確に聞く心なき者とは語らず
去れのとたまひし
身の毛よだつおもひに聞きぬ師の君の火
を吐くこときつよきみことは

山田 輝彦

討論の席にもだして語らざる友よ昔はわ
れもかかりき
窓近きポプラの群葉風立てばさわさわと
鳴る潮騒のごと
若きらの討論の声き夜ふけて叫ぶがごと
く聞えくるかも

松吉 基順

岡澤先生のご講義を聞きて
四年前み教へうけし師の君の変らぬ姿に
心躍りぬ
今の世のただならぬさま嘆かるるみ声き
びしくひびきわたれり
おのが身の至らぬことの今さらに思ひし
られぬみ教へ聞きて
講義終りて窓ゆ眺むる外輪の山はだ青く
目にしみ入りぬ
窓の辺のポプラの梢伝はりて吹き入る風
のさやかなるかな

山内 健生

小田村先生の御講義を聞きて
マルキスト教授学生にこの国の歴史を論
ずる資格なしといふ
獅子吼する師の御言葉のはげしさに思は
ず我は戦慄覚ゆ

倉前 義男

見逢るかす久住大野に矢の如く雷雨は迫
る草の葉を揺りて
草を喰む雄牛の背なに雨かかり風吹きす
さぬ広き野中を
削ぎ立てる阿蘇外輪の山並みも雨にけふ
りてさだかに見えず
青々と稲の葉しげる国中に陽はさききた
る雨あがるらし

天皇・皇后両陛下の行幸啓を富山県植樹祭にお迎へして(てがみ)

広瀬 誠

拝啓 六月に入っても肌寒い日が続きますが、おかはりごさあませんか。お元氣をお祈り申上げて居ります。

さて、本年の植樹祭は五月二十六日当県で行はれ、両陛下の行幸啓を仰ぎました。私も県職員はそれぞれ仕事を割当てられ、私は観光班で、県外招待者をバスに乗せて大会場へ誘導し、式が終るとまたバスに乗せて、二泊三日の観光のお世話をする役で、多忙な毎日を送りました。(直接陛下に奉仕する係に選ばれなかったことは残念でした。)

しかし、緑滴るやうな頼成山の会場で、玉音朗々とお言葉を賜はるのを拝聴。(ラヂオ、テレビでは、しばしば拝聴しましたが、ちかか玉音を拝したのとはじめてでした。)式終り、両陛下が還御になる時は、私のすぐそば(一メートル半ぐらゐのところ)をお通りになり、私は声をかぎりに万才を唱へました。

両陛下の御車が動き出すと、すぐ私は北日本放送(民放)のマイクの前で、「天皇陛下の植樹祭のお歌について」約五分間アナウンサーと対談し、植樹祭実況放送(カラーテレビ)のしめくりと

て全県下に放送されました。飾りけのない、ありのままの清らかな御作風の中に陛下の美しいお人柄が拜されることを例をあげて語り、まのあたりお姿を拜し、まのあたり玉音を拜した感激に結びつけて、アナウンサーと対談し、「このやうに美しいお心の天皇をいただくことの幸福」を語りました。お姿を拜した直後だったので、よほど私も興奮して居たのでせう、あとで何人もの人から「ずる分感激して居たね」とか「興奮して夢中になって居たね」とかいはれました。「広瀬さんの生涯における最上の日だったね」といつてくれる人もありました。

植樹祭の前日(二十五日の日曜日)には、広貫堂(製菓会社)へ行幸啓になったのですが、その折も、私は奉迎し、雨の中で万才を絶叫しました。この時も、わづか一メートル半ぐらゐのところ、万才を絶叫して居ましたが、天皇陛下はしげしげと私の方を御覧になってお通りになり、つづいて皇后陛下はここに可笑ひながら私を見て行かれました。多忙で数日、新聞を見るひまもなかったのですが、あとで、富山新聞に「ひととき大声で万才を絶叫して居たのは広瀬さんで……お車が見えなくなるまで叫びつづけていた」と特筆されてあるのを知って驚きました。

両陛下は県下の各地をおまはりになりましたが、城端の縄が池といふところで水芭蕉の群落を大層お喜びになった由。(前から見たいと思っておいでだった由ですが、実物を御覧になったのは、このたびがはじめてださうです。)大伴家持

がしばしば遊覧した万葉史跡の渋谷崎(しづたか)現在「雨晴」と呼んでゐます)で御一泊。それから二十八日には立山山麓の吉峰といふ所で、お手播き行事。(植樹行事のほかはじめての事の由)それからケーブルカーで立山高原の一角、大観台(一〇〇メートル以上の高さのところ)までお登りになり、そこから称名滝を御覧になりましたがいにくの雨でした。

しかし生物学者の陛下は、原始林の中で、さまざまの珍しい植物を見つけて喜ばれ、とくに、ここにも水芭蕉の咲いて居る湿地が林間にあるのを見つけられてわざわざ車を止めさせられて、お喜びになった由。また人工飼育されてゐる雷鳥・カモシカも観察されました。

二十九日お帰りになる日になって、やつと天候回復しました。御到着の時から「立山が見えなくて残念だ」とおっしゃって居られた由ですが、この最後の日に立山も晴れました。(すこし霞んでゐる本当に鮮明な晴れ方ではありませんでしたが。)

富山県を去られるに当って、知事を通じて「御感想」が発表されましたが、その中に「本県は、美しい自然に恵まれ、景勝の地が多く、このたびの旅行では、立山をはじめ雄大な自然に接し、美しい植物や珍しい動物をみる事ができ、心のなごむ思いがしたが、観光や産業の開発に当って、このような自然の美や生物をできるだけ、そこなわないよう配慮してほしい」とありました。このたびの行幸の御感想をどのやうな御歌におよみに

なることかと、今からのしみです。

なほ、植樹祭のおこりは富山県にある由で、昭和二十二年北陸行幸の折、陛下が、「木を伐ったあとは、ちゃんと植ゑてゐるか」と御下問になったので、これに恐縮し、正規の手つづきを踏まずに、陛下にお手植をお願いしたところ、御許可になったので、大急ぎで準備して細入村といふところで、三本の杉をお手植していただきました。(これまでは、他の殿下方はお手植されても、天皇陛下はお手植されぬしきたりだったのを、はじめて慣例を破ってお手植されたことです。)それで、「このやうな行事を毎年したら」といふことになって、翌二十三年から全国植樹祭が始まり、その第二十年目から、起点ともいふべき富山県で行はれたといふわけです。

二十年前のお手植の立山杉はすくすく生長して居り、ちやうどお帰りになる高山線の車窓から見える地点です。で、細入村民集ってお手植杉の周囲に紅白のマシ幕を張り、村民総出でお召列車を奉迎しました。陛下は車窓から、二十年前のお手植杉をなつかしきうに御覧になり、村民に会釈しながら通過されました。

本当にこの数日のことは、書いても書いても書き尽せぬくらゐで、陛下が富山県境をお去りになる時間、急にさびしさがこみあげて来て、どうにもなりません。

なほ、今までの植樹祭では、お言葉を賜はるといふことはなかったさうで、今回初めて玉音朗々とお言葉を賜はった

のだといふことです。

来春の勅題は「花」ですが、このたびことのほか水芭蕉をお喜びになられたので、ひよっとしたら水芭蕉の花をお詠みになるのではないかと、こんな想像は慎むべきですが、そんな気がしてなりません。

話前後して、とりとめのないものになりましたが、一筆、感激をお伝えいたしたく筆をとりました。

御健勝をお祈り申し上げます。敬具
昭和四十四年六月八日

追伸

お伊勢さま雑記

一、土下座

合宿教室の折、岡潔先生から「伊勢の神宮に参拝する様」お教へを頂いてゐたので、高野山からの帰途、今日、内宮（ないくう）にお参りして来た。先生から又叱られさうだが、外宮（げくう）にはお参りする時間が無かった。

お伊勢さまは、公式には「神宮」とのみ申上げ、内宮には天照坐皇天御神（あ

今上御製 秋田県植樹行事
湖のながめえならずと聞く大森に杉を植ゑむと思ひしものを

（昭和四十三年六月二十一日御発表）
右一首、青山新太郎氏から知らせていただきました。

昨年の秋田県植樹祭への行幸は、震災のため、お取り止めになったので、そのお気持ちをよまれたものと拝察します。

「思ひしものを」といふ語、今上御製にはじめて拝しました。

（富山県立図書館蔵書）

一 広瀬誠氏のこの手紙は、夜久正雄氏に宛てられたものでした。御諒解をえて本紙に掲載させていただきます。

関 正 臣

までらしますすめおほみかみ）をおまつり申上げてある。

内宮は、石の階を登り切ったところの御門が一般の参拝所で、御門の空間一杯には清らかな白い布が垂してあって内側は直視できない。朝九時半頃、雨もよひで風も無く、その布は、そよよもしなかつた。

私は一ト月程前に、神宮の神官達が全員砂利の上に坐してお祭りしてゐる写真を見てゐたので、私もそれに倣ふことに

した。真正面ですみかたが遠慮して向って右の端の方に、靴を脱いで砂利の上に立つた時は、まだ羞づかしさがあつた。立つて拜んでゐる人ばかりの其の場にそぐはない異様な行動を執り始めようとすることへの羞づかしさであつた。然し、思ひ切つて坐つてしまつて正面を仰いだ其の時、正面の布を透して、御社殿の向って左側の干木（ちぎ）がシルエツトになつてほのかに見えたその途端、私は思はず平伏してしまつた。

今思ひ返してみても、その時の私には羞づかしさとか体裁とか、凡そ他人に対する思惑は何も無かつた。もつと言へば自分が居るといふ意識すら無かつた様な気がする。祈りたいことを用意して居たが、それすら突然に失せてしまつた其の心理状態は、自分にもよく分らない。とも角かういふ経験は、数回お参りした今迄に、ついぞ一度も味はつたことのないものであつた。

お参りをへての帰り路で、私はフト或る写真を想ひ起してゐた。それは、終戦のその日、二重橋前や靖国の社頭に土下座する人々の写真であつて、毎年八月十五日が近づくとジャーナリズムのどこかで必ずと言つて良い位に取り上げられるものであり、今年は靖国の方が或る週刊誌に載つてゐた。

実は私は今迄此の写真にどうもついて行けなかつた——心からの畏敬感はあるのに、さういふ感情を其の人たちによつて拒否されてゐるやうな感じがあつたのである。

けれどもそのもどかしさは今日豁然と

して消滅し、その人たちの心持が惻々として胸に迫つて来たのであつた。これは時機や場所などの条件は違ふけれども「土下座」を自分がした為だと思ふ。

二十四年前のあの日、二重橋前や靖国の社頭に坐つてしまつた人たちは、自然にさうなつたのであり、天子様や護国の神々以外には何物も念頭に無かつたに違ひない。そして又其の時、祈つたり願つたりする気持さへ失せてゐたに違ひない。それこそは眞のまつろひであつたのだ。私は二十年以上もたつて始めて當時の同胞の心に触れ得た気がして愧ぢ入るばかりである。私は「祈る」といふことばかりが好きだ。人生は祈りにきはまると信じてゐる。けれどそれが何と生意気でキザなものであつたことが。

特に関心を持って調べたわけでもないのに、断定は慎むけれど、我が国最古の祝詞（のりと）として現存してゐる延喜式（えんぎしき、西暦九二七成）のそれには、祈願や欲求があまり述べられてゐない。このことは当時の人たちの祈りが「たゞ拜むこと」に徹してゐた為ではないかと想像する。恐らく我々の祖先の「いのり」は「たゞ拜むこと」即ち「ひたすらなるまつろひ」であつたと思はれる。そしてそれが本當の「まつり」であつたと思はれる。

平常心の儘で——即ち自己を自覚しながら、或ひは日常生活のままで——まつろふことはあり得ぬと考へて行くと、拜礼の本姿は、自分の姿勢を最も小さくした形としての土下座に成つてしまふのではないかと気が付かせられて来る。

私自身としては今迄どこに於ても土下座して拝んだことは無かつたし、近來、神社の作法でも立つてするものがふえつつあつて社殿の結構も自づとそれに合ふやうに改められる風があるので、他の神社一般に關しては何とも言へないけれど神宮は正に、坐して拝むべきものであるといふのが今日の実感である。

二、式年遷宮

神宮が、坐して拝むに堪へる(適切な言葉でないが)といふことは、その結構が、大昔——恐らく祖先が坐して拝んでゐた頃——のままであることと深い関りがあるやうに思はれる。

今の結構は、少くも今から一、九七二年前(垂仁天皇の二十六年)のものそのままと信ぜられるが、神宮に於て「古式を伝える努力」か「革新」の繰り返しといふ形で為されて来たといふことは刮目に値する。即ち神宮における伝統の継承は、二十年毎の改造によつて行はれてゐるのである。この制度は、一、二八三年前に天武天皇が定められて以来、回を重ねること五十九回、四年後にはその第六十回が予定されてゐるのである(第一回は、一、二七九年前の持統天皇四年)。

この改造は、社殿のみでなく、ごく小さな調度品に至るまで一切に互るものでもしかも緻密に古式のままを再現するのであつて、そこに私は、保守と革新との概念的対立を超えた実人生そのままの総合的な発展の姿を見る心地がするのである。

何故二十年毎なのか今と成つては分らないし、元來この式年遷宮は、神宮最大のまつりであるところの毎年の神嘗祭(かんなめさい)の準備が、御社殿までも新しくしてしまふといふ所まで徹底したものと解せられ、世上の改築が意味するやうな、破損修理や増修では全くない。従つて伊勢の式年遷宮は、本質的には二十年毎の神嘗大祭といふことに成る。そして我々の祖先はこの制を固く守り伝えて来たのであつた。

尤も、二十年毎といつても第三十四回は満十九年毎であつたし、第四十二回までの間には八回に及ぶ期間の長短が記録されてゐる。そして亦その同じ記録は我が国未曾有の国難といはれた元寇や、日清日露の時代にも着々と準備が進められてゐたことを示してゐる。即ち元寇弘安の役の四年後には第三十二回、日露戦役終了の四年後には第五十七回が行はれてゐる。このことは我々の祖先が、国民生活の根底に於て神宮を実感してゐたことを示すもので、当時の国民にとって外寇への対処と国家生命への内省とが不可分であつたといへるのである。

然るに第四十回(西歴一、四六二)から第四十一回への間には実に百二十三年間の間隔がある。この時代は言ふまでもなく、応仁の乱にはじまる所謂戦国時代であつた。この時代は外寇こそ無かつたが、下剋上、群雄割拠・朝廷衰微と記される時代であつて、国民の心はバラバラであつた。時代こそ隔つてゐるけれど、マイホームとかレジャーとか空虚な権利の主張とか、総じて自己中心の生き方が

一般の今日は、精神的にどれほどの隔りがあるだらうか。

このことについて心配に堪へない私は読者に懇へたいことがある。それは、一人でも多くの人に知らせて何とかして四年後の式年遷宮を完遂すべく共に奉賛(お助けする、寄付する)しようといふ事である。奉賛は祖先が実践し、まだ見ぬ子孫が遠い未来から要求してゐる道なのである。

戦前は、遷宮は国の行事であつて、国民が直接関与する必要はなかつた。然し現在、神宮は法律的には三重県知事所轄の一宗教法人に過ぎず、従つて国とは全く關係が無いし国は関与することを禁じられてゐる(憲法第二〇条一、三)。神宮を思ふ國民の物言はぬ心が実は憲法を運行せしめてゐるのであるに拘らず、憲法自身は、国といふ統一の神宮への関与を否定してゐるのである。けれども神宮は元來、憲法以前の存在である。それ故國民は、政治上の主義や宗教上の立場を超えて奉賛できるのである。我々は第六十回を完遂することによつて、昭和四十年代の國民が独立した國民であり、協同する國民であつたことを、後世に立証したいと切に願ふのである。

経費総額は三十二億円で、四十三都道府県には夫々伊勢神宮式年遷宮奉賛会の地方本部が設けられて募金活動を行つてゐるので詳しいことは近くのお宮に聞けば分る(大阪・福岡・鹿児島は未結成。四十三のうち二十四の本部長は知事)。

去る四十一年秋、総本部が財団法人として発足した折、陛下は早速御内務金(

百万円)を賜はり、爾來毎年このことが続いてゐる。このことは、平たくいへば陛下が御自分の生活を切り詰めていらっしゃるごとなのであつて、我々は到底黙つてゐるわけには參らない。「個人生活は専ら拡充すべきもの」といふ考へは、向ふ四年間は棚上げしてかからなくてはならない。

実は今年には神宮にとつては「親詣百年」なのである。去年を、明治百年(明治維新百年ではなく)としてしか把握できなかった者にとつて親詣百年の意義は分らないであらうが、御歴代のうち始めて明治天皇が神宮に参拜遊ばされたといふ出来事は、国史の上で極めて重大な意義を持つものである。それは明治二年三月十二日(新暦で四月二十三日)のことであつた(吉川弘文館、明治天皇紀第二、七七ページ)。そして四年後に完成する御社殿は、その時陛下が親詣なされたところと同じ場所に建てられる巡り合はせになることは何かの縁であらう(同年秋第五十五回が行はれ、その場所は現在の御社殿の位置と同じであつた)。

奇しき縁といへばまだある。それは、第四十六回が完成したのが元祿二年であり、第四十七回に至る二十年間のうちの十四年間は実に元祿時代であつたこと、而も第四十六回の時の御社殿は、第六十回の予定地と全く同じ場所に在つたといふことである。現代を昭和元祿といふのは良い。然しさういふ場合、どうか同時にこの事実をもよく併へてゐる欲しいものである。一四四、八、一八一

(横浜市舞岡八幡宮宮司)

「動物農場」の著者

桑原 暁 一

ジョージ・オーウェル(G. Orwell)の「動物農場」(Animal Farm)を何人かでいっしょに読んだのは七・八年前のことである。これは共産社会を諷刺したものであることは、広く知られているが、ぼくらの使ったテキストの編者はなぜか、そのことには触れず、かえりみて他を言っているのが気になった。オーウェルのことを、知ったのはうれしかったが、ぼくの貧しい読書力は、彼の他の著述に及ぶことがなかった。このごろ、彼の小さなエッセイをいくつか読んだのでそれだけをたよりに彼のことを書いてみる。

彼は父がその税関に勤務していたインドのベンガル州のある町で生まれ、やがて退官した父に従ってイギリスに帰った。イートンを出たあと、学資がないため、警察官になってビルマに赴任した。そこで彼は、自分がイギリス帝国主義の手先であることの苦しみと、現地のビルマ人(とくに僧侶)の、あくどいいやがらせに耐える苦しみとのさきみうちやがった。一九二七年にビルマを引き上げ、パリやロンドンで、英語の教授やホテルの皿洗いないろいろな仕事に就きながら著述にはげんだが、あまりパツとしなかつたらしい。この間の生活は、彼の「パリ・ロンドン落魄記」に写し出されてい

る。この時期に彼は共産主義にするべく傾斜した。一九三六年のスペインの内乱に、彼は共和派に加わって戦った。のどを撃ちぬかれたが、辛くもいのちは取り止めた。彼が共産主義を離れたのはこのころらしいが、そのくわしい事情を、ぼくはまだ知らない。彼のスペインの日の思い出を書いたというHomage to Cataloniaを見たらいくらかわかるかもしれない。共産主義からの転向の所産が「動物農場」(一九四五)である。第二次世界大戦では国土防衛軍の一員としてB・B・A(イギリス放送協会)ではたらいだ。彼は「英国輪」の中で、「プロレタリアンには国家はない、というのが本当なら、そういう人にとって一九四〇年は、そのことを身を以て示すべき時であった。」といっている。小説「一九八四年」を絶筆として肺結核のために、一九四九年ロンドンで逝いた。四十七歳であった。

彼のこの経歴をみて、ぼくは真の著作家とはかくの如きものかと思う。ペンは剣より強し、など云うが、彼はいわば片手に剣を、そして片手にペンを持っていたのだ。彼のエッセイに「気の向くままに」(I wrote as I please)と云うのがある。そこで彼は自然への愛を語っている。彼の共産主義からの脱却に、あるいはこの自然への愛が一つのはたらきをしているのではないか、と思う。

彼はまず春のよるこびを語る。春は「奇蹟」だと云われる。冬のとちがいに春が来るとはとも信じられないほどきびしい冬がつづく。「冬来りなば春遠からじ」

など云っていられないのである。それだけに春のよるこびは大きい。さて、その春や、そのほかの季節の変化によるこびを見出すとはいけないことなのか、と彼は反問する。われわれが皆資本主義制度の鉄鎖にうめいているのに、黒鳥(ブラックバード)の歌や十月の黄色い楡の木や、さては、金のかからぬ、そして左翼紙編集者のいうところの階級的視角などないいろんな自然の現象のおかげで、人生はしばしば、いっそう生きるに価するなど云うことは、政治的に非難せらるべきことなのか、というのである。(このついでに書き添えておきたいことがある。——ぼくはこの三月に、小雨降るアムステルダムそのほかで、楡の木やボダイ樹にむらがる黒い鳥を見た。スズメよりはずっと大きく、鳩よりは小さく、クチバシの黄色い鳥であったが、あれはここに出ている黒鳥ではなかったか。)彼はつづけて云う。もしも自分が論説の一つにこんなことを書いていたら、非難の書き舞い込むことまちがいない。非難のきまり文句は、「そんなことはセンチメンタルだ」ということだが、そこには二つの考えがまじっている。一つは、自然にであれ何にであれ、このまゝの生活に何らかのよるこびを見出すということは政治的事なかれ主義にはかならぬ。われわれは現実には不満を感じ、現に持たぬものをどん／＼見つけ出さねばならぬ、というのである。もう一つは、自然への愛など云って、機械文明にケチをつけるのはうしろ向きであり反動的である。現に、自然を相手にしている人々は自然を愛し

はしない。そこから少しでも多くの利益を引き出そうとするだけである。自然への愛なんてものは、本当には自然を知らない都会人のクセ(Urban Foible)にすぎない、というものである。彼のこれらの非難に対する批判は「タコ」で取りあげないが、要するに彼の云いたいことは——かりにユートピア社会ができたとして、そこに、初めて桜草を見つけたときのようなよるこびや、木や魚や蝶やガなどに愛情を寄せた少年の日の思い出などにまさるものがあるであろうか。そこでは憎悪と指導者崇拜にだけ、そのありあまる精力のほけ口を求めることになりはしないか——ということである。この「憎悪と指導者崇拜」は「動物農場」にも描かれている。「不正のない世の中」というものほど不正なものはない」という達人ゲーテのことばをもじって云うならば、不満のない社会は不満なものはない。——七月十二日記——(都立千歳高校教諭)

父への手紙

長内 俊 隆

「日本思想の系譜」(全五冊)「日本への回帰」第四集、届きました。

「日本思想の系譜」は本当に嬉しい送りのものです。いつかゆっくりひも解いてみようと思います。まだ何も読んでいませんが。

「日本への回帰」の「合宿教室のあら

まし』『歌集』——学生青年の作品より——などを読んでみて感じた事を書いてみようと思ひます。

歌集などをみると、感動を素直に表わして好感なものが多いのですが、合宿という集団求道友好の間に作った歌、感激した心というものは、なにかそれほどのもので流れてしまっている様な気がするのです。そういう「心を潔められた」という機会を持つということも素晴らしいのですが、僕は何も解らないのですが、やっている内容は何であろうと(素晴らしい道であつても)、その行った行為(合宿なり何なり)のもつ特殊な雰囲気というものは、現在行なわれている、いわゆる集団活動総てが持っているものなのではないかと思うのです。

そういうものに流されているということは総てに言える事なのかも知れません。

父さんが前に、こんな事を言っていたと思ひます。「私はかつて八日会の友らに向つて『八日会には来なくてもいい』と申したことがあります。それは、自分の行っている学校で、何もしないものが、夜だけ集つて輪読したところで何になるか、と言ひたかつたのです。我との対決なしの集いはおなぐさみにし過ぎません。我と対決して絶望に近い悩みをもち、友や先輩を訪ねて行かずに生きてゆけない、そうした者の嘆きの交し場所が、八日会であり、合宿なのではありませんまいか。」

こういうことに気づく人が余りにも少ないのではないかと流されている人間が

流されている人間を批判し、克服する事が許されているだろうか。そういう集いに出席したことの無い僕が、それらを語ることなど、尚のこと許されてはいないので。

三年程前に読んで頭に残っている言葉があります。(そこだけしか残っていませんが)

「西洋の近代が世界の近代を支配し、日本での近代化の問題は即ち西歐化の問題であつた。当然そこから伝統と近代という問題が起る。そしてニヒリズムが近代の帰結であるとき、近代化に対して樂觀的ではありえない。寧ろ、ニヒリズムから如何にして脱出するか、如何にしてそれを超えるかが現代の課題である。私はこの課題を自分自身に課した。そして日本の中世の宗教や文学、即ち伝統を、もう一度考えてみるべきであると思ひ、そこへ入つていった。西洋や新大陸、またアジアでさまざまな形で試みられたニヒリズム脱却の道は、結局は失敗や犠牲や苦惱のくり返しであつたと思ふ。そしてむしろ、ニヒリズムを徹底させニヒリズムをもニヒル化するという道、無をも無化し、空をも空ずるといふより外にそれを超える道はないと思ふにいたつた。」(唐木順三「詩とデカダンス」序より、昭和二十七年著)

はつきりしないのですが、ここだけが頭に残っています。合宿で歌を創るのも良いのですが、自分の生活に戻つた時にこそ創つたほうが尚良いのではないのでしょうか。

こう書いてきてみて、批判するといふ

事は余りいい気持ちのものではないな、批判より前に「自ら行じろ」という気持ちになつてきました。

話は違ひますが『吉田松陰』(河上徹太郎)の中で心にとまつた処がありました。(そこまでは読んで河上さんで余り快い人間ではないと思つてました)

「それにして今日では、君臣の義などといふと、天皇制が明治時代に名目論的に擬制化され、それが戦争で絶体的強権を背負ひ、更に戦後その全面的な否定を見たことは、今日まだ生々しい思想界の渦巻きをなしてゐて、そこにこだりなしに発言出来ないのが面倒である。ただ確かなことは黙察も松陰も、こんな天皇性論議と關係ないことである。彼等は何ものかに強要されたのではなく、天皇を自分の初心で発見してゐるのである、その一点で二人は純潔に結びつき合つてゐる。だから御望みなら天皇の代りに「神」とでも「イデオロギー」とでも「自由」とでも「民族の心」とでも置き換へて一向構はない。……」(僧黙察との出会ひ(1)P.26)

吉田松陰の解説書や評論などより、松陰自身の著書を読みたいと思つています。『講孟余話』などでも。(大きい字の本を捜していますが、何時読むかは解りません)

今日夜、京都で同じ關係の仕事をしてゐる一つ下の男が遊びに来たので、一緒に飲んで話をしました。故郷は新潟県小出町(奥只見ダムの近く)、母と兄弟三人、母は新潟に、姉と妹は東京で働いてゐるそうですが、余り話しので意な方

でないのですが、帰り近くに、「小さい頃、何も無い時に学校の修学旅行だったので、母さんは自分の着物を質に入れて、僕を修学旅行に行かせてくれたんだけど、その時は質に入れた事など一言も言わなかつたので知らずにおりました。後になつて人から聞いてそれを知つた時、そして今になって、母さんの有難みが解つた。今は、何か買つて母さんに送りたい気持ちでゐる。」と話してました。それは前は東京で、少しづれかかつてらしい。これを聞いて教育つていふのはこれだと思ひました。この手紙もそこから始まつているのですが、なげ、酒が入つてゐるので何を書いたのやら。この手紙が西条に着き、父さんの手に渡つた時、父さんも酒泥の中であれば幸いです。

七月一日 午前四時

(長内俊隆君二十二才、長内俊平氏長男。昭和四十年東京都立南多摩高等学校卒。日本の伝統工芸の継承を志し京都の小倉建亮氏の下へ入門、手描友禪を見習中)

編集後記 八月七日から十一日までの四泊五日の間お互いに全力をつくして、合宿教室は終了した。大きいうねりの様な感動が胸に残るその記録が、いまだ急ぎで若い会員と学生の手でまとめられ、来月号に報告されることになつてゐる。今月号は教科書裁判の当初から身を以て戦つてこられた戸田さん、感動の手紙(広瀬さんの)を回して下さつた夜久さん、どれも早くから原稿が届いてゐたのに又々発行が遅れて申し訳ありません。前からの読者にはおなじみの桑原さんが、新しい読者からの論評を送つて下さり、少しづつ続けて送つて下さるのではないかと楽しみにしてゐます。



発行所
 社団法人国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都中央区銀座
 7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
 下関市南部町25-3宝辺正久
 振替下関1100 電話22-1152
 毎月一回10日発行
 定価一部20円(送料別)
 (送料共) 年間360円

第十四回「合宿教室」開催

大学問題の核心に迫る

第十四回目を迎えた今年の「合宿教室」は「阿蘇」で挙行された。会場に選ばれたのは、草原の緑も鮮やかに雄大なカールデラを背景として今なお噴火の続く阿蘇中岳の麓、内牧の「ホテル大観」であった。八月七日から八月十一日までの四泊五日間、四〇〇名の参加者が渾然一体となつて現下教育界、ことに大学問題の核心に迫っていったのが、今年の特色であった。第一日目、参加者自由発言、主

下道雄先生のお話があり、さらに夜久正雄氏と小柳陽太郎氏の二つの講義によって日本文化の特質と人生に対する基本的な態度の探求が提起された。この間、山田輝彦氏による「和歌創作についての導入講義」と、全参加者によって創作された和歌作品についての、全体講評ならびに班別による相互批評が展開された。二千首近い短歌作品がたちまちにつくら

合宿教室特集号

催者側自由発言に続き、第二日目は、「真の学問と教育の場の実現」をテーマとして、鹿大教授川井修治氏、本会理事長小田村寅二郎氏の二つの講義を中心とし、次いで夕刻から木内信胤先生の御講義、そして第三日目は岡潔先生、第四日目は本

直接感情の表現によるものとの区別が、全員によって確認されていく、すばらしい合宿運営の一コマは、今年もまた充実さを伴って予定通りに完了していった。本年度の参加者は男子学生二二五名(二十三ヶ班)教員六三名(八ヶ班)社会人一五名(二ヶ班)女子学生一九名(二ヶ班)講師、来賓のほか主催者側大

学教官有志協議会、国民文化研究会会員合わせて八二名総員四〇四名、三四ヶ班編成の大合宿で、これは過去十四回の合宿を通じて最高の規模であった。

幹部学生の研鑽
 昨年の「合宿教室」後、全国各地の大学で、学友達と研鑽に励みつつ、学園紛争の無謀なエスカレート阻止に挺身してきた諸君が、昨秋、今春と二回にわた



(参加者全員)

り、九州、関西、東京の各地区で小合宿を行った。その上、今年始めての試みとして、これらの中から選ばれた四十数名が合宿教室開始に先立って八月三日から五日までの二泊三日間、幹部学生としての結束と、本格的な勉強とを兼ねて、合宿開催地において、自主的かつ積極的に「事前合宿」を試みた。

国文研―後継者層の準備活動

創立以来十四年も経つと、最初の中心者も四十才、五十才を越してしまふ。いきおい後継者層の育成と、後継者たちの自主的活動が、この「合宿教室長期継続」の「かなめ」になってくる。この要請に応えるかのように、いまから五年ほど前から「合宿教室」それ自体の運営については若い後継者層に、その全運営が托されるようになった。今年も十数名が助言者として、また運営委員として全国より馳せ参じた。合宿運営に至るまでには平素の研鑽の積み重ねの上に毎年一回、二月に相互研修会を持ち、又「合宿教室」の感想文編集や各地における学生の相談相手として活動して来ている。

* *
 さて今年のお全参加者の皆さん、大学問題の最中での合宿教室でもあったために教職員、社会人の参加者各位には、とくに社会人参加者各位には充分のお世話ができなかったらうらみがあつてまことに心苦しい思いが残ってしまったのですが、それでも各人それぞれの思いを持たれて阿蘇を下つてゆかれたことと思います。現実社会の持つさまざまな苦惱矛盾も、それを直視する見方、とらえ方によって、何もかも「社会に責任あり」といつて他人事ですすますべきでないことが、この合宿で解明されたと思ひます。

日本人として生きる、ということの意味を誤りなくとらえるよう、これからも心を合わせて努力してゆこうではありませんか。

(第十四回合宿教室運営委員長長沢部寿孫
 ・日商岩井東京支社勤務・昭和37年大卒)

この合宿に実現しよう

ほんとうの「教育の場」を!!

一、大学はこれでもいいのか
——学ぶということ

折しも激動の時期に開始された今回の合宿教室は、学問をする者すべてが、否応なしにその姿勢を問われる従来ない緊張した場となった。この合宿期間中に一貫して流れていたものは「大学はこれでもいいのか」という危機意識だった。ゲバルトを肯定する思想が、学生の間に公然と主張され、それを容認もしくは鼓舞する一部造反教官たち。「安保」へ向って結集されていく革命勢力の意図が日本の各大学を社会主義革命の拠点としようとしていることにあるのは、もはや明らかとなった。今日の大学には、殺人以外のあらゆる行為が許され、学園の中は全くの無法地帯と化してしまった。「大学の自治」はすっかり泥にまみれ、怒号と喧嘩のみがひびき渡る学園の中を英雄気取りに闊歩するゲバ学生。その一群の学生に対して、思想原理的のついに対決しえない大半の教授方々。はたまた学問の自由を奪われ、言論の自由を奪われていながら、何の痛感もないままに日々をすごす学生たち。こうして事態は、愈々深刻さの度合いが深まっていく。大学はこれでもいいのか——学問に志さず者すべてが、目ざめた心で、この問題に真

剣にとり組むことが、今日程強く要請されているときはない。今回の合宿教室でこの問題が一大テーマとなった所以はここにあったのである。

本来、教育の初心は、「教える者」と「教えられる者」とが、共に学ぶという厳しい姿勢を整えながら、お互いの間に熱い信頼関係をつくりあげ、そこに学問するよるこびを味わうことにあるはずだ。だが、今日の大学に、そのような「教育の場」は期待すべくもない。今日のゲバ学生を生んだのも、もとはといえば日本の大学が、その権威を守ることだけに汲々然とし、久しい間、この教育の根本を怠ってきた結果ではなかったか。

もしそこに今日の混乱の真因があるのなら、その失われた「教育の場」を回復する以外に、その誤りを正す方途はないのではないか。四泊五日間という短期間をもってしては、その実現は不可能かもしれない。だが、全力を傾けて、真の「教育の場」とはかくあるべきだと、みんなまで努力して創ってみようではないか、それを支えているのが、この我々一人一人なのだということをもし実感できればその体験こそ新しい大学を切りひらく第一歩となるはずだ。このような姿勢のもとに、合宿教室がはじまったのである。

日程が進むにつれ、真の「教育の場」を実現するためには、語る者にも聞く者にも、厳しい心の姿勢が必要とされるのだということが、時に激しく時に静かにお互いの中に感じとられていった。話し合いの場では、単なる知識の披露ではなく、また友の話したことこの整理でもなく、たった一言でもいい、本当に言いたいことを本当に思うことを話そうとみんなが心を傾けた。そのような「教育の場」は今まで我々が知っていた学問の世界とは、おおよそ違うものであったし、それは辛く苦しい場でもあったが、それをのりこえ、魂と魂がひびき合う世界を求め

て、魂と魂は続けられた。自己をみつめ、人生に思いをこらす学問の中から、青年たちの心の中に、素直な感情がめばえてきさえるならば、今日の誤った思想と学問方法は必ず打ち破られるだろう。そのような深い思いをこめて、本来の「教育の場」の実現へと、年令の差も学校の差もこえて、参加者全員の努力は集中されていったのであった。

二、友と語るといふこと

——班別討論を中心にして

合宿三日目、岡潔先生の御講義に対する質疑応答のできごとだった。一学生の質問に対して、「私はそんなことは云っておりません。君の云っていることはことごとくまちがっている」と、語気も激しく学生の言葉のまちがいを逐次指摘されたとき、参加者一同、思わず姿勢を正さずにはおれなかった。先生が、いかに御自分の一つ一つの言葉を大切になさ

っているかを身にしみて感じるとともに学問にとりくむべき厳しい姿にふれ、生涯忘れられることのない体験となったのである。

人の話を正確に聞くということは、一体どういふことなのだろうか。全身を耳にして相手の言葉聞き、心のたけをつくして語る中で、体験的に学ぶ人生態度、思考方法とはいかなるものか。そうした「場」を提供することもまた、合宿教室の主眼の一つだったし、それが、とくに「班別討論」という形式で試みられたのである。

「班別討論」は、何よりもまず、人の話を聞いたあと、贅言を弄さず、相手の心を偲び、その話を静かに思い返えす「場」であった。平素、いわゆる「討論」になれ、話し合うとは、相手の言葉を知的に理解し、あるいは概念を操作することにあると思ひこんでいた者は、この「班別討論」に少なからず当惑したであろうし、反撥も覚えたことであろう。だがその当惑も反撥も、班員の真剣なまなざしの前で、次第に打ち消されていったのではないだろうか。何故なら、この合宿でみんながひたすら求めようとしたものは、人の心のあり方そのものであったし、素直な人間の心に素直な情感をとり戻そうとする営みであったからである。班員お互いのそうした努力は、一人の人間の、人生体験の真実にもとづいた発言には、全員が耳を傾け、心を寄せてそれに聞き入るといふ雰囲気がつくりあげられていったのである。その反面、依然として、理論構成のみをもって、相手を説

きふせようとすする班員の発言は、厳しく指摘されるといふ緊張した場ともなったのであった。

閉ざされた思いで苦しんでいる友の心は、開かれた友の心によって必ずや開かれたにちがいない。「どうかしつかりぼくの目を見つめて話してほしい」という友の言葉に、そのまなざしに、心めざめた学友もいたことだろう。数日前までは全くの未知だった者同士が、夜がふけるのも忘れて語り合っていた情景は、友をえたよるこびもさることながら、苦しさをのりこえて、素直な自分自身に戻りえたときの安らぎに、深々と身をひたしていたのではなかったらうか。

合宿三日目に全員が和歌を創作した。友との語らいの中で、心がふれあった瞬間のうれしさを、三十一文字に託した歌がいくつもあった。その瞬間、救われた思いであったのとべた学生もいた。いまだ、心が開かれなのままに口ごもる学生もいた。だが、みんなが、心を一つにしよう、心を通わせようと力をつくしていることは明白だった。それは、合宿期間中、大きなうねりとなって、参加者全員の中に波うっていたのである。生命のない言葉がいかに空疎なものであることか。自己の思いを正確に伝えることはこんなに困難なことなのか。だが、自分の心の中にあるすべてを語ったとき、みんなが真剣に聞いてくれた、そのよるこび。人を疑うことにすつかりなれてしまった学生々活とは、確かに違った生活がここにはある。その中で、不思議なほど自分が生き生きとしている。そのような

思いが、心からわきあがってくるのだった。

三、日本の心

古典輪読と和歌創作

今回の合宿と同様、過去十三回の合宿教室においても「古典輪読」と「和歌創作」は大きな比重を占めてきた。「古典輪読」も「和歌創作」もひとえに言葉の一つ一つを正確につかむ修練であった。



(岡先生ご夫妻をかこんで)

古人を論ずる場合、古人の言葉に直接ふれる体験を第一としなければ、いかに理論をつみかさねようとも、所詮観念の遊戯に終り、我々の実人生とはかかわりのないものとなるであろう。こうして、今回の合宿でも、古典はいくたびかとりあげられ、文献にふれて正確に思考することの大切さが強調された。古典を読むということも、結局は、人の心にかかわり接するかという問題に帰着する。古人が

その生命をこめた言葉に、読む我々がどこまで迫っているか。古人の心の奥深く入っているかどうか。古典を読む場合のポイントには実はそこにある。自己のさかしらな思いをすてて、懸命に古人の言葉を理解しようとする傾ける。学問にとりくむ姿勢の出発点は、ここに定めなければならない。先人に学ぶとは、この虚心な姿勢にはじまり、その思いをうけつごうとすることだ。それは大変な努力が必要とされるが、我々は、この体験を抜きにしては学問は成立しないことを学んだ。この努力を通じて、古人の言葉が予想もしなかったような新鮮さをもたせて、生々しくよみがえってきたとき我々は、自己の中に古人が生き続けていることを知った。それは、自分が日本という国の歴史につながって生きているのだという、まぎれもない事実の再確認だったのである。

「輪読」という方法は、お互いの心を通わせながら、一つの言葉に心を傾ける修練であったし、班別にわかれての輪読は、班員相互の交流を深めるとともに、本を読むということの意味を考える上で、大きな効果を発揮したのであった。「和歌創作」は、「正確な思想表現」をするための重要な一方法である。創作をするにあたって、まず注意されたことは、感ずべき時に感ずるといふ心、自分の感動を素直に表現せよということだった。それは非常にたやすいことのように思えて、現在では実にむずかしくなってしまう。素直な心になり切るといふことと自体ひどく困難な時代になっている。

だからこそ、ここで「うた」をつくることによって、素直な物の見方を学ぼうとしたのである。

和歌の創作には、自分の思っていることを正確に表現する修練が必要とされた。自分の感動をもう一度追体験し、表現された言葉とその体験が一つになるまで、何度も何度も言葉をさがす。そうした修練の中で我々は、自分の考えたことを、正しく表現するということが如何にむずかしいかを痛感したのであった。事実をありのままに見て、それをありのままにうけとめていく。これは正しく学問の基礎ではないか。和歌を創作するとはすなわち、そうした柔軟な心を育てる修行の一つでもあったのである。山田輝彦先生によって、その「全体批評」が行なわれたが、相手の心に迫りながら、その人の選んだ言葉を味わいつつ、適確な批評が続けられた。和歌は、おそろしいほどにその人の心が映し出されるという実感をすべての者が味わうとともに、言葉に對するいい加減な態度がつよく反省させられたことであった。

我々の祖先は、千数百年もの長い間、悲しくも雄々しい心を三十一文字に定着させてきた。われわれは、歌をよむことによって、祖先の哀歌を味わい、我々もまたその伝統につながる事ができるのである。真実をうたいあげることが、とりも直さず、日本人の真実を求める心へつながるのだ。歌をつくるという体験は、そのようなことを学ばせてくれたのである。

合宿五日間の経過

第一日（八月七日）

爽涼の阿蘇高原、第十四回学生青年合宿教室は、午後二時、参加者総数四百余名をもって開催された。

旧知の友を見つけ駆け寄る者、同じ班となり早速熱心に語らいながら教室に行く者等——例年ながらのなごやかな、しかし緊張した雰囲気の下、まず班別自己紹介が始められた。四十分の後一同講堂に会しての開会式、開会宣言、国歌斉唱黙禱と厳粛に進行し、国民文化研究会の小田村理事長はその挨拶の中で「現在の日本の教育界は重大な危機に類しているが、我々はこの合宿で真の教育の場を実現しようではないか。」と、合宿教室の一大指針をお示しになった。

参加者自由発言

今年初めて試みられる、開会直後の参加者自由発言は、緊張した中、最初は発言もときがちであったが次第に種々の発言が出されるようになった。中でも「自分の考えを学園の中で訴えるうち何回もくじけそうになりました。しかし私はその度に勇気を奮い起こして頑張ってきました。」という友の発言には多くの者が心を打たれ、それに答えて「ほんとうに感動しました。」と述べる友も出、お互いが心を開いて真剣にぶつかり合おうとする雰囲気も早くも現われたのである。最後に学生リーダーを代表して岡山大学の田中君が「小手先の制度改革ではなく、大学人一人一人が自己の生き方を

問い直すことから出発せねばならない」と訴えた。

主催者側自由発言

冒頭、広瀬誠先生の『記紀の古伝承』の一節を感動こめて朗読された岸本氏。「大学人によって日本は支えられているのではない。」と声を大にして言い放たれた長内先生。又実際の教育の場にあつて数々の苦勞を重ねて来られた北島氏、国武氏、片岡氏の体験談等、我々の心をゆさぶるような発言が次々と出、熱気のもつた一時間半であった。

第二日（八月八日）

国家と大学

川井修治先生

先生は「大学問題は祖国日本の運命との関り合いの中で考えねばならない。大学が国家を軽々しく批判するのは間違っている。」と述べられ、更に「現在の左翼学生運動は改革を唱えながらその実国家の基盤そのものを否定する運動であり、断じて許されるべきものではない」とおっしゃった。

学問と教育を正しいそれぞれの軌道に載せる為

小田村寅二郎先生

先生は、集団に紛れ込むことにより自己自身で反省することから逃避する劣弱な生き方、討論における概念整理の乱用等を厳しく指摘され、又O×式思考法の誤りについて「矛盾というものをO×式に整理するのではなく、矛盾を内的に統一することが人間としてより大切なことである。」と述べられた。更に、種々の言語魔術からの脱皮が必要であると説かれ、例えば「大学は真理の探究の場であ

る」という言葉に対し「自然科学はともかく、人間が人間のことを扱う人文科学において『真理を探究している』などと自認してきたことはとんでもない増上慢である。今後は『大学は真心の探究の場である』と言い改めるべきだ。」とお示しになった。

これからの国造り—物心両面の理想は何か
木内信胤先生
偶然昨年と全く同じ題になったが、今年こそ本当にこの話しをしたい。何故なら新出発の機が熟しつつあるからだ。米ソ両国のリーダーシップが失われ、日本はその実力を再評価されつつある。このことは世界の超重要事件なのである。本来日本の実力は素晴しく大きく、又その経済力は今後増々増大するだろう。現在の西洋、特にアメリカ一辺倒から本来の日本の素晴らしさを見直す時期は近づいているのだ。だが、抜けている点はバカに抜けているので、沖繩復帰安保問題、大学問題等一步誤れば一気に穴に陥る危険性も充分争んではいる。それ等の問題をうまく処理し得た時、更に日本の実力は上り、再評価は進むであろう。その上に立っての新しい日本の内容は、眼に見える所では、人口の分散、公害の排除、自然美の回復、歴史伝統の保全等、経済的にも最高の能率が出るようなものを考えれば良い。又眼に見えぬ所



木内信胤先生
偶然昨年と全く同じ題になったが、今年こそ本当にこの話しをしたい。何故なら新出発の機が熟しつつあるからだ。米ソ両国のリーダーシップが失われ、日本はその実力を再評価されつつある。このことは世界の超重要事件なのである。本来日本の実力は素晴しく大きく、又その経済力は今後増々増大するだろう。現在の西洋、特にアメリカ一辺倒から本来の日本の素晴らしさを見直す時期は近づいているのだ。だが、抜けている点はバカに抜けているので、沖繩復帰安保問題、大学問題等一步誤れば一気に穴に陥る危険性も充分争んではいる。それ等の問題をうまく処理し得た時、更に日本の実力は上り、再評価は進むであろう。その上に立っての新しい日本の内容は、眼に見える所では、人口の分散、公害の排除、自然美の回復、歴史伝統の保全等、経済的にも最高の能率が出るようなものを考えれば良い。又眼に見えぬ所

では「物質」及び西欧文明を乗り越え、心の満足を追求し更に日本の個性を充分に發揮するようにすれば良いであろう。世界のリーダーシップは發揮し得ぬにしても遊惰には陥らぬような—そのような日本を、新しい宗教的な日本と呼ぶことができるであろう。

第三日目（八月九日）

西欧はまちがつている

岡 潔 先生



潔 先生
飄々とした中に確たる力のこもったお姿、優しい、がその響きが我々の心をゆさぶるように伝わってくる

御声、そして美しい御言葉、我々はその一つ一つにひきつけられるように御講義に耳を傾けた。「自然科学は物質現象の一部は説明できるが、生命現象は説明できない。現在日本人が依り所としている個人主義、物質主義は間違っている。」とのべられ、日本の現状を切に憂えておられる先生のお話しに我々は強く勇気づけられ、更に「物質主義、個人主義を排し、崇高さに対する感受性を鋭敏にすることが大切である。」とお話しには心洗われる心地がして、御講義で受けた感銘は班別討論の時間まで持ち越されたのである。

和歌創作について

山田輝彦先生

阿蘇登山に先立っての和歌創作の導入

講義では、先生は「歌は自分の感じた気持をありのままに詠むのであり、理窟を詠むのではない。」と仰言り、子規の歌を引用しつつ、初めて作る人達に初歩的な手引をして下さった。

阿蘇登山 講義終了後全員はただちにバスに乗り込み、一路阿蘇中岳へ向かった。白煙を上げる噴火口、遠く外輪山を見渡す眺望。山頂では記念写真を撮り合う者、グループで歌を唱う者、早速和歌創作に取り組む者等、どの顔にも笑顔がみちあふれ、緊張した日程の中、なかなかひとときはあつというまに過ぎ去って行った。

夜の日程に入り、『短歌入門』（日本への回帰・第四集）の中の留魂ということ々を中心に班別輪読が行なわれた。幕末の志士の遺歌には、明治維新が我々と同じ哀歎を持った人達のひたむきな心によってなされたことが鮮かに表わされており、我々はこれらの歌を読むことにより、世の中を真剣に生きた人達の心に触れる喜びを心から味わうことができたのである。

慰霊祭

阿蘇の外輪山に囲まれた宿舎の庭に祭壇が設けられ、平時戦時を問わず日本を国を守る為に、尊い生命を捧げられた総ての祖先のみ霊がここに祭られたのである。「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさる守る大和島根を」の朗詠で慰霊祭は始まった。夜久先生により明治天皇御製が拝誦され、小田村先生は「国を守りし祖の魂を受け継ぎ語り継がむ」と我等一同の決意を祭文にて奏上され

た。最後に「海征かば」を全員で斉唱、慰霊祭は厳粛な雰囲気の中でとどこおりなく終了した。

第四日目（八月十日）

宮中見聞談



木下道雄先生
先生は今年八十二歳という御高齢にも拘らず、この話を子々孫々まで伝えたいとの強い御言葉が示すように

に、終止直立の姿勢でお話しを続けられられた。「荒天下の分列式、玉座の天幕が撤去された」と聞けば青年達は大雨の中で雨具を脱いでしまう。青年達が雨具をつけていないのを御覧になれば、今度は陛下がマントを捨てておしまひになる。何とか暖かい上下の感応であろうか。というお話しをはじめとして、陛下の国民を思われる御心をありのままに語られる感動的なお話しの数々には、聞く者は皆目頭の熱くなるのを禁じえなかった。お話しをなさる木下先生も度々御声をつまらせられ、そのお姿にはお話しにも増して胸を打たれる思いがした。

和歌は日本文化の神髄である

夜久正雄先生

心から物事に感じ、その確かな感動を人に伝えることができた時は、真に生の充実感を覚えるものである。日本には古

来、物に感ずる心を養う道として、又感動を伝え合う国民芸術として和歌というものがあった。臣民が天皇の御心をその御歌によって偲び、その感動を歌に詠み、天皇の御心に応えてきた。この厳粛な事実こそ和歌が日本文化の神髄である所以を示している。

文字の学者日用を知らず

小柳陽太郎先生

山鹿素行の『謫居童問』を参考にされた御講義をして下さった。実生活の体験からかけ離れた観念に頼って学問する人々を文字の学者と言う。現在は何と観念をふりまわし、宙に浮いた理想論を掲げる文字の学者の多いことか。そのような学問態度では決して現実とは解らない。我々が習うべき学問態度とは、何事に当ても感ずべき所に感ずる心を持ち、日常体験、現実生活を自分自身の眼で直視していく。実知々というものを究める態度なのだ。我々は観念の杖を捨てて、自由潑刺とした心で実知を究める学問をしていかなければならない。

その後班に別れて「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読、夜は前日に提出した和歌の全体批評が山田輝彦先生によって行なわれた。先生は、主に学生の作った歌を引用されながら独特のユーモアをまじえて批評をされ、楽しい雰囲気の中和歌全体批評であった。その後各班毎の相互批評を行なったが、各人の合宿に臨む態度、更には生活態度にまで遡る徹しい批評がなされ、各人共改めて、言葉の持つ重要性を痛感させられた。

第五日目（八月十一日）

全体意見発表

四泊五日の合宿もいよいよ最後の日程に入り、この合宿で学び、感じた事を発表する全体意見発表となった。ある友は木下先生の御講話の感動を二首の和歌に表わして述べた。「友達を言っている事を汲み取り相手の心を憶念するという事がいかに難かしいか良く分った。」と、とつとつと語った友。「何を言ってもいいのかわからない。でも何か言いたくて壇上に上りました。」と、声をふるわせ顔を紅潮させる女子学生。しかし中には、皆と一緒に語り考えるのではなく、自分の殻から一歩も外に出ようとしない態度の発言もあったが、それも一参加学生により厳しくその間違った姿勢の指摘がなされ、緊迫した空気の内に全体意見発表は終わった。

最後に小田村先生は、合宿四日間をふり返りながら「私が講義で述べた『真心』と言う言葉がもうスローガンのように使われていた事は恐ろしい。『真心』は決してスローガンになるものではない。」とのべられ、そして「参加学生のうちに、自分だけの世界にとじこもり、心を開いて学んでいこうとしない人がいるがそれでは学問は出来ない。」と厳しくも暖かい指摘があった。

十二時より閉会式。上田先生・浜田副理事長の言葉の後に、参加学生を代表して、九大・医学部の小柳君が「一人出家すれば魔宮皆動ず」と、その決意を一語かみしめる様に述べ、合宿教室の全日程は終了した。

以上分担執筆 山口秀範（早大）岸本常男（巨大）伊藤哲朗（東大）北川文雄（一橋大）石村善悟（東大）

参加者感想文

心のつながり

早稲田大 政経二 山口 秀範
この合宿で僕は、心を開く努力をしよ
うと心掛けて来ました。そして、先生方
や、先輩方のお話を伺ううちに、次第に
心が素直になってゆくを感じ、その後
の友との話しうちに、自分の心を、こ
だわりなく言い放ったという実感を持
得ました。その時、自分の心の敷と、友
の心の垣根が一度に取り払われた気が
しました。友がうなづき微笑んでくれた
ことが、とても大きな喜びでした。師や友
との心のつながり、その喜びを広げ伝え
たいという気持ち、それが困というもの
と自然に結びつくような気がします。人
との心の触れあいを大切に、そうした
美しい心の交流を妨げるものに対しては
敏感に反撥する。このような心を持った
人のつながりが日本だと考えました。

言葉を正確に受けとめる

岡山 大 医二 田中 輝和

岡先生の御講義の質疑応答のとき、質
問した学生が先生の御言葉を正確に受け
とめていないのを、先生がきびしく御指
摘されました。それを見て私もはっとし
ました。岡先生御自身の使われる言葉の
一つ一つが、先生の御心の中の明確な実
体とかたく結びついているのを感じまし
た。そして、先生の御心の中の実体を表

現するには、この言葉しかない、そのよ
うな言葉を常に使われていることも同時
に感じました。この時、人の心を憶念す
るとは、友人の心にじかに触れるとは、
その人の言葉を正確に受けとめ、その言
葉に結びついている心の中の実体や、感
動を正確に把握し感じることが、最も
大切なことだと思つたのです。

自らの縛を解こう

九州 歯大 三 深水 康寛

今、胸の内を渦まいている、何か涙で
目頭が熱くなる様な思いをこの合宿以後
も探し求めたいと思つています。阿蘇に
来る以前の友人つき合いのもどかしさ、
友人の胸の内に入つて行けなかつた自
分を、今は心から「あれではないなかつた
のだ。自分の心を包みかくさず友達に話
せば必ずや通じ合えるのではないか」と
言い聞かせています。この合宿で自分の
心の底を話して、自分は一人宿のたと
う以前までの考えが恥ずかしくなつて以
前の自分に対してこっけいに感じて来ま
す。聖徳太子の御言葉に「若し自らに縛
有りて、能く彼の縛を解かんは是の処有
る事なし」とおっしゃつていらっしゃる
にしみて痛い程自分の心に伝わつて来
ます。

岡先生に叱られてから

玉川大 教一 松岡 康生

三日目の岡潔先生の御講義の時、強い
おしかりを受け、班に帰つてからも班員
から批判を受けた。しかしそれらの言葉
がうれしかった。実にうれしかった。卒
直に批判してくれる人、それが何の抵抗
もなく心に入つてくる。そういう人に会

えたこと、そういう自分になれたこと。
人間というものの交わりの中にもそうい
うものがあるということ。この合宿教室
に警戒心を持っていたというのが正直な
ところだったが、でも今は、思い切つて
飛びこんでみてよかったです。来てよかつ
た、その気持ちでいっぱいだ。

おそろのおそろマイクに向かひしその後

一喝されて唇かみしむ

木下先生のお話

明治大 工三 中村 敏幸

木下先生のお話を聞いて感動し、涙
をこらえるのでせいいっぱいでした。慰
霊祭の時の気持と合わせて、この感動を
大切にして心の中であたためて置きたい
と思います。又、体験に基づいた御話と
いうものの重みというものを痛感しまし
た。自分は天皇というものについて何年
も考え、又、陛下の御人柄について何人
かの人に御話を伺つたり、書物を読ん
だりしましたがこれ程強烈に自分の心に訴
えてくるものはありませんでした。

最近では、心から「君が代」も歌える

鹿大 法文三 岡本 幸信

夜久先生の御講義で先生は、「感じる
ことのできる人間になれ。」という意味
のことを言われましたが、私はそれを聞
いて、今までの自分が、何と「感じない
人間」かということを感じました。自
分の周囲の人や物や事に対して感じて、

豊かな気持を絶えず心の中のために学問
に対処する。それは、つらい事や悲しい
事も感じるでしようが、逆に、それだか
らこそ、人生を味わうことだなあと
思いました。たとえ、それが短い生であつた
としても、精一杯感じながら生きたなら
素晴らしい一生だと思ひました。

真心の触れあひの体験

防衛大 四 太田 文雄

私は心を深く感動させるといことが
いかに素晴らしいものであるか、また、
真心の触れ合いというものが一体どのよ
うなものであるかを身をもって体験し
た。班別輪読で幕末志士の歌に触れ、今
まで発見し得なかつた新鮮なものを初め
て把んだような気がしたのである。人と
人、人と祖先とが真心をもって接する
ということこそ歴史なのだとかわかしめ
て来た。と同時ににはじめの自由発言の
時、まだそのような姿勢すらできていな
かつた自分が偉そうな歴史観を述べたこ
とをはずかしく思つています。もう一つ
の体験は、木下先生の御講義であつた。
陛下の思いやりのある御心に接して感激
のあまり何回か泣いてしまった。隣りの
人も泣いていた。いつしか、あの場に
いたほとんどの人が鼻をすすりあげて
いた。これが本場の日本人であり、日本
の姿なのだと思つた。

理論の支配する世界と違つた世界

東京大 教養一 加来 至誠

「杖を取り去つてみる、そのあとに何
が残るのだ」と厳しいお言葉で小柳先生
は語られましたが、そのことは今年の二
月頃から真剣に感じておりました。自己

否定などと言うけれど、それは理論にとりつかれた自分であるからこそ安易に他の理論にとつかわられ、過去の自分は否定されるといふことになるのだと思つて苦しんできましたが、木下先生の御講話を拝聴し、理論の支配する世界と全く違つた世界があることを全身がふるふる程の感動をもつて確信しました。それこそ人間の「生活」であると思ひました。その「生活」に心の奥底から感じ入ることのできている自分自身も、確かに現在「生活」をしているのだと思ひました。



(慰 靈 祭)

慰 靈 祭

九州大 医三 前田秀一郎

私は、一瞬一瞬を大切に全身全霊をかけて生きていく気迫が今まで足りなかったことを感じています。班別討論において友達と言わんとするところを正しく推

し測ることができず独断に落ち入り易い自分に気がついた時には特にそう思ひました。しかしながらそれ故にこそ、あやしめやかな慰霊祭に於いて日本のために尽くし、後世に思いを託して亡くなった多くの人々の御霊に支えられて生きているのだと感ずることのできた時に生じた勇氣、友達との間に心が通つたことを感ずることのできた瞬間に生じた喜び、先生方の信念のこもつた一字一句おろそかにできないお言葉に接した時の心の溶ける様な感動、或いは身の引き締まる様な緊張感やおそれ、自分の愚かさを指摘され痛感した時のおそろしさ、それらを大切にしてゆかねばならないと思ひます。

真剣に生きねばならぬ!

長崎大 工一 西田 伸二

この合宿においてばくは何かつかんではずだ。でもそれが何なのかハッキリしない。だが人として生活していくさいの自分の姿勢を正さなければいけないことがわかつた。一人の人として真剣に生きること、考えることの苦しさの一端をいまみることができたのは大きな収穫であつた。言葉はそれを実感として自分の心の中で感じなければ無意味であることもわかつた。長崎大学に帰り活動をやつていく中において、何かいままでに欠けていたものが加わつた気がする。何だかハッキリしない。でも何かがあつた。真剣に生きねばならぬ。今、自分に言いきかせるのはそれだけだ。

和歌を初めてつくつてみて

岡山大 医一 中川登紀子

和歌を初めてつくつてみて、言葉の厳しさを痛感致しました。こんなにもつづくに自分の生き方を写しだすものがあるという驚き、ただもう何を気負つてもだめだ、そういう思いでがくせんとなりました。しかし、その中から胸の中に、すがすがしいものが、わきあがつて来るのをどうすることもできませんでした。素直に見ること、ここからもう一度始めるつもりです。いっぱい矛盾をどっかとひき受けたまま、まっすぐに生きてるのが感じられたあの防人の歌に、目頭が熱くなつて仕方がありませんでした。どうしようもない矛盾をいっぱいひきさげて、生きて行かねばならない人間が、自我や小我の世界を捨てて無私の心になりたいと思ふ、その悲しみの中に真心がある」と言う小田村先生の言葉が胸にピンとひびいてまいります。とにかく、身の囲りにあるささいなことから始めてゆきたいと思ひます。

何ものにも流されず

奈良女大 文二 小山 街子

大学でマルキシズムの首尾一貫した思想をつきつけられた私は、心の中の迷いに目をつむつてしまひ、デモに何度も参加しました。そして、安保反対、大学立法反対と叫びながら、何か自分の声ではない声で叫んでいる空虚さはどうしようもないものでした。この合宿はマルキシズムと全く相反する思想だから、その思想もかじつてみて自分を中和するの無駄ではなからう、そんな生意気な思ひ上がつた考えて合宿に来たことが、今は恥

ずかしくてたまらない気持です。しかし今は、この合宿に来て本心に心打たれる人々と接することができたのが心からうれしく思えます。私はもう一度生まれ変わった気持で、自分の目でものを見、自分の頭で考えたい気持で一ぱいです。何ものに流されることもなく、自分のこの足で大地に立ちたいと思ひます。自由な豊かな心で、人間の心を、感激で自然に流れ出る涙を持つ心を求めて行こうと思ひます。

真の学びの場を表現していた

熊本市立池田小教諭 伊藤 トキ

日本の姿はどうあるべきか、今後どのように進むべきかなど、みんな話して合いたい、教え導いて欲しいと求める心、又諸先生方の、自分の本心から、学生青年に訴えて祖先の伝統をよりよく守り継いだ日本になして行きたいと願ひ話される心、その二つの心が一体となつて、真の学びの場を表現していたのは得がたいものでした。木下先生のお話しに、終戦後、天皇というイメージにまつわつていたものが清々しく洗い流されるような気持でした。小田村先生の、全身全霊を打ちこんで話される姿に、眼を見る思いでした。

国の問題も、女性は女性なりに考え、今後の日本をよりよくするには共に考えるようにせねばならないと思ひます。女教師の参加は、私一人でありましたが、もっと多くの人々に参加してほしいと切に望みます。

合宿詠草より

東京大 広瀬 豊
 一日の日程を終へ友どちと庭におりたち
 星を眺むる
 天の川はさみて白く輝ける七夕の星ひと
 きは明し

上智大 北崎 伸一
 木下先生の御講話を聞きて
 祈るとき思ひをこめて先生は声をつま
 らせ話したまふか

鹿兒島大 金津 洋雄
 合宿所に来た母の手紙を読み
 合宿で何かつかめと書き給ふ母のことば
 に涙こぼるる

長崎大 熊本 司
 吉田松陰先生の和歌を友と詠じて
 先生の親思はれし御言葉にわがふるさと
 の父母をしのびぬ

早稲田大 古川 忠
 塙上に立ちて指揮せる我が友の強き姿に
 心打たれぬ

明治大 豊島 典雄
 学び舎の命護れと訴ふる君の言葉強く
 ひびけり
 思ひ述べ演壇下る後姿に湧きあがりけり
 強き拍手は

東京大 石村 善悟
 熔岩の石をふみしめ登る背に涼しき風の
 吹きあげて来ぬ
 登り来て頂きに立てば友どちの手をふり
 ながら登り来る見ゆ

長崎大 北村 好信
 美しき我が友どちのまなざしは弱きおの
 れの力とならむ

東京大 伊藤 哲朗
 慰霊祭にて
 祭壇の前にみ歌を詠み給ふ師のみ姿のか
 がり火にはゆ
 よりみぐるみ歌の言葉たどりつつ一声一
 声耳すまし聞きぬ

東京大 青山 直幸
 小田村先生の御講話をお聞きして
 一点を見つめたまひて述べらるる師のみ
 姿のせまりくるかも

名古屋工大 江副 正信
 この仲間また会ふことを願ひつつ一人一
 人の顔を
 見てゆく
 防衛大
 太田文雄



(草千里より中岳を望む)

ふと見れ
 ばとなり
 にすはりし友どちも涙おさへてむせびを
 るなり

富山大 浜岸 悦夫
 すめらぎの国民思はるる御心を偲びて涙
 おさへかねつも
 わが胸にこみあげてくる喜びは明日より
 私の力とならむ

九州大 井上 敏勝
 先生の説かるる言葉のきびしさに思はず
 はつと師の目見つむる

日本大 岡野 滋樹
 小田村先生の最後のお話にし
 言の葉をだいにせよといましましめらるる

師のお話の心にせまる
 かみしめていひきとすと述べたまふ師
 の顔みられずじつとつむく
 法政大 岩田 博行
 やうやくに心ひとつになりし友との別れ
 せまるはかなしかりけり

熊本大 加藤 和彦
 あらはせぬ胸の思ひに絶句する友の瞳に
 涙光れり
 九州大 小柳 左門

合宿終りて後に
 阿蘇の野の緑に映えて日の丸の旗ははた
 めく友去りし後
 雲もなく晴れしみに空にそびえたつ根子岳
 の姿忘れえぬかも

長崎大 加治木 加治木
 全体意見発表にて
 何かしら心に迫るものありておもはずあ
 げし我手なりけり
 我が心整理つかぬままに登りたりただ何
 事か言はまほしくて

熊本市花園小 東 正和
 憂きことも楽しきことも今日よりは歌に
 のこして忘れじと思ふ
 八代市高田小 金橋 良治

天皇の深きみこときたまふ師の言の葉は
 しばしとぎれつ
 人吉市第二中 小松 正
 火口壁はひ登りくる噴煙のたちまちにわ
 が視野を閉ざせる
 生命たぎつ音と聞きをり太古より鳴る大
 阿蘇の火口にたちて

八代市松原小 成田 行次
 今日よりは学びしことを心してわが教へ
 子に向はむと思ふ

八代市松原小 成田 行次
 研修に立出つ我を見送りし病臥の妻のこ
 とは悲しも

合宿教室終了のしらせをいただきて
 三浦 貞蔵

肥後の国阿蘇のみ山ゆ合宿のをはりを告
 ぐるみたよりつきぬ
 大阿蘇の山はみざれど信の友らつどひし
 み山ときげばこほしも

合宿に加はりましけむ友どちのみすがた
 つぎつきわがまなかに
 み友らがつどひしぬびつ地図ひらきゆく
 みちすちをさがすまたのし

いまころはみ山をくだりふるさとをさし
 ていそく若き友らは
 長からぬ日数はあれどもまごころのまじ
 はりむつばむ途ひらけしか

テレビみつ新聞よみつつむらぎものこ
 ろのいたまぬ日はなかりけり
 かりこものみだるる世にも信の友らふえ
 ゆくとおもへばこころもなごみぬ

思ひまどふこともありなむをそのときは
 心の友と語りたまへや
 へだてなく語りあひなばすすみゆく道は
 ひらけてまどひもはれなむ

正しきをつらぬきとほすはなかなかに苦
 しかれどもこらへしのばむ
 八月十六日

(三浦氏は川崎製鋼取締役・昭和14・九月迄)

編集後記 この合宿教室がどのやうに準備され、五日間がどう経過していったか運営を担当した若い会員と学生の中から数人が本誌の全文を執筆しあるひは編集してくれて、ほぼ概略をお知らせすることが出来たと思ふ。合宿のスケジュールは事前によく検討されたものにはあるが、その展開と参加者の心の開かれる過程とは必ずしも一致しない、その重苦しさを打ち払ってまごころに触れる喜びを得たとすれば、一人一人の努力と、講師諸先生のお人柄から溢れ出るいのちのことばと、すべての合成力によるものとも言へようか。ありがたい事だと思ふ。



発行所
社団法人国民文化研究会
(九州→東京→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

宇宙時代の限界

地球時代と太陽系時代

アポロ一号が月に到着して、人類は宇宙時代に第一歩を踏み出したと言われる。しかしそれは正確な言い方ではない。月といっても、それは地球の衛星に過ぎない。月世界旅行といっても相変わらず地球の範囲の拡大である。アメリカは続いて一九八五年までに、人を火星に送る計画を発表した。火星は地球と同じ惑星であるから、そうなれば惑星間旅行ということになる。しかしまだ宇宙時代とは言えない。地球も火星も太陽系の一員である。火星旅行を正確に言えば太陽系時代に移ったということになる。

しかし残念なことに、火星は太陽から地球以上に離れた凍原境であって、人が任んでいない。また地球より太陽に近い金星の地表は、摂氏五〇〇度もあって、到底生物の住める条件はない。だから火星や金星旅行が実現したとしても人類が大挙移住して住みつく訳にはいかない。いくら太陽系惑星の間を往来して、太陽

系時代を謳歌しても、所詮は地球の領域の拡張であり、人類社会の延長に過ぎない。コロンブスのアメリカ大陸発見ほどの歴史的影響力は、持たないと言わねばならないのである。

銀河系宇宙時代

人類のように高度な文明を持つ生き物が太陽系にいないとすれば、どこにおるのか。そのためには太陽系以外の恒星系を探さねばなるまい。たとえば太陽系に一番近い恒星に、ケンタウリ・プロキシマがある。あるいはそれ以外の恒星系を探索せば、人間あるいはそれ以上に高度な生物の住む惑星がある。それら惑星と地球人類とが外交交渉や戦争を行うようになれば、「恒星系対恒星系」の新時代が開かれる。このような時代を正確に名づければ「銀河系宇宙時代」ということになる。そのような宇宙時代の主役は現代の人類時代において国家が主役であるように、惑星が主役であって、宇宙そのものはあくまで舞台装置にしか過ぎぬ

のである。

もしこのような真の意味での宇宙時代が到来すれば、地球は一つの有機体を形成しなければならなくなる。他の惑星人たちと交渉するための世界政府は、好むと好まざるとに拘らず簡単にできてしまう。人類は名実ともに統一体となって、宇宙の諸惑星に対処せざるを得なくなる。そうなれば在来の国家という単位は、現在の地方公共団体のような行政的な意味でのつながりしか持たないようになる。国家間の紛争は、かつての戦国内乱時代にあつたような、兄弟垣に相せめぐ愚として忘れ去られてしまうであろう。世界政府論者や人類主義者の夢は、この時に実現されるのである。

宇宙時代の限界

しかしこのような宇宙時代は、我々人類時代には到底やってこないのである。他の惑星生物と交流する時代は、空想科学映画や未来小説には画けても、現実のものとはならない。理由をあげよう。

①太陽系に一番近いケンタウリ・プロキシマでも、光の早さで行って四年半かゝる。往復九年である。アインシュタインの相対性原理によれば、物質は光の早さになったら形を失ってエネルギーになってしまう。人間は光の早さに到達したら、人間としての形を失ってしまうのである。現在の弱い人間の体力では、たとひ光子ロケットを開発しても、ケンタウリ・プロキシマとは交流できない。やがて人類時代が終って、超能力を持つ新々人類の時代にでもならなければ、宇宙時代を実現することはできないのである。

②地球のように大気、気温、水等、生物が生れる条件が整ひ、恒星のほとりを自転しながら公転して、昼夜と四季の変化をもたらすような、冷暖房完備の惑星は一千万個の恒星系の中で、一つくらいしかないと言われる。太陽系に一番近いケンタウリ・プロキシマにたいてい行ってもそこに生物が住んでいるという確率はほとんどないのである。

地球への回帰

人間の欲望は限りがないから、宇宙競争は今後いくらかも拡がるであろう。しかしその行きつく先はたいしてバラ色ではなさそうである。もうそろそろその限界を知って、狭い地球一家の現実生活の中に、心の故郷を見出したいものである。地球は何とすばらしい宇宙のオアシスであることか。ソクラテスは「汝自身を知れ」と言い、禅家は「脚下照顧」と言っている。我々もまた地球という絶妙なばかりにできあがった宇宙の逸品に目を開こう。宇宙時代と言ひ、世界国家といふ幻想を捨て、謙虚に地球と国家と自己を見つめよう。それが人間生活を豊かに花開かす道でもある。

目次

宇宙時代の限界	名越荒之助	(1)
科学から見た宇宙	奥田克己	(2)
夢と現実	北山山	(4)
科学者の生活	木原野矢	(5)
科学者の生活	山内健	(6)
科学者の生活	山内健	(7)
科学者の生活	山内健	(8)

(岡山県立笠岡商高教諭名越二荒之助)

科学と教学

奥田克己

学問とは何か

合宿教室の目的は学問、人生、祖国を学究することであると度々聞いているが良く考えて見ると、人生や社会を研究するのが学問であると考えば、合宿教室の目的は学問探究の一語に尽きるとも考えられる。そこで学問とは何かと考えるに、私はこれを科学と教学とに分けて考え、両者の相違を明確にしなければ、両者とともに正しく理解することはできないと思う。科学は自然科学、社会科学、人文科学の総称で、分科の学すなわち多数の専門分野に分けて研究する学問であり、元来西欧において発達したものである。しかも西洋文明は科学文明であるとも呼ばれるほどに、科学は西洋文化の学問的基盤をなすものである。それが日本に伝来したのはせいぜい幕末から明治にかけてのことで、それ以前の日本には科学は皆無であった。たゞし日本でも古くから技術は相等に発達していたが、科学とは何かということを確認するために、科学と技術とは切り離して考えねばならない。技術は科学の応用である場合が多いが、必ずしもそうではない。日本は神代の頃から鉄器文明を持っていた、くわし矛盾するの国と呼ばれたほどであるが、これは製鉄技術が進んでいたのを科学としての金属学が発達していたとは

考えられない。機械工学や冶金工学は学問であるが、科学の応用としての技術の学問であって、科学ではないと考えなければ、科学の性格を正しく理解することができない。技術は人間社会に役立つために、与えられた目的または仮に設定した目的が先づあって、その目的を達成するための手段方法の適否を論ずる学問であって、適否はそのときの環境条件によって相違するから、永久にこれだけなければならないとか、絶対にこれだけなければならないとか、絶対にこれが最善であるというような、絶対的な硬直した結論は出るのはないものなのである。それに対して科学は真実を探究すること、すなわち科学すること自身が目的であって、それが人間社会に役立つかどうかは、科学としては問題外な役立つかどうかは、科学として問題外な星を研究するのは、それが何かの役に立つからではなく、宇宙の果てはどうなっているのか、真実を知りたいという人間本然の欲求に基くものである。このように科学と技術とは学問の性格が根本的に相違するので、両者を明確に区分しなければ、科学とは何であるかを正しく理解することができない。自然科学の分野では、科学は理学、技術は工、農、医学などと呼ばれて比較的良く分離されているが、社会科学や人文科

学の分野になると両者が未分離のまま同居混乱している場合が多く、このことが思想混乱の根本原因であるといっても過言ではないと思う。したがって思想混乱の根源を解きほぐすためには、先づ学者が科学とは何か、学問とは何かを正確に理解し、学問の姿勢を正すことが先決であると私は思う。

教学とは何か

日本には科学の渡来以前から学問と呼ばれていたものがあつた。しかしそれは西洋の科学とは本質的に相違するものである。両者は文化の系統を異にし、両立することはできても、これを一本に組み合わせることは絶対に不可能なものである。それなのに両者とともに学問と呼ぶのでは、話が混乱するのが当然である。そこで私は日本の学問を科学と区別するために教学と呼び、科学、教学および技術の学を総称して学問と呼ぶことを提唱したい。そうなることかつ吉田松陰が学問と呼んだのは教学のことであり、われわれが合宿教室で探求している学問も教学ということになる。なお教学は私が一人決めににした新語ではなく、明治天皇もしばしば御用いになったことは幼学綱要の序などを見ても明かなことである。明治天皇は新装成った東京帝国大学をご視察になったとき、東大が教学を軽視して洋学一辺倒になっていることを深く憂慮せられ、渡辺総長にご親諭を賜わったことは聖諭記に見られる通りである。然るにその後教学の旗は年とともに色褪せ、今では全国の大学が余す処なく

科学一色に塗り潰されてしまったのは何故であろうか。思うにその原因のひとつは、西洋崇拜の一般風潮の中で、学者もまたその例外ではあり得なかつたためであることはいままでもないが、私はこれにはもつと本質的な原因があると思う。それは科学が論理的体系的に構成されているのに対し、教学は一向に論旨が透徹せず、科学を見た目で教学を見ると教学はいかにも近代的迷蒙の如くに見られたためである。しかし教学は本来論理的に論述することのできない学問なのでこの点科学に比して見劣りがすることはどうにも致し方ないことなのである。だからもし科学と教学とが対立し競合すると、教学には勝味はないが、科学と科学との関係はそんなものではなく、両者ともに人間にとって欠くことのできない重要な学問であり、しかも双方がそれぞれ正しい姿勢を保つならば、言い換えれば正しい科学と正しい教学とは少しも矛盾競合する処はなく、立派に両立することができはるはずのものなのである。何となれば科学と教学とは問題領域が別なのであるから、お互に持ち前の領域内に納まっている限り、対立競合することはあり得ないからである。処が実際は科学と教学とが衝突しているように見える論争が至る処に見受けられる。教学が行き過ぎて科学の領域に侵入すると、科学者は早速神がかりだと批難する。神がかりとは科学と矛盾することらしい。処が場合によっては、正しい科学とは少しも矛盾していないのに、科学の方が間違っているために、神がかりだと誤認することもあ

る。また科学は人間性を喪失させるとか科学は人類を不幸に導くとかと科学を批判する声もあるが、これも結局科学が何であるかを知らぬことから来る愚論である。何となれば科学は真実を探究する学問であつて、それ以外には何の目的も持っていない。したがつて科学が進歩したために人類が不幸になるとすれば、それは科学の罪でも技術の罪でもなく、技術を駆使した人間の罪であり、人間がそうなつた原因は教学が忘れられていたためである。

一方科学の側からの越境暴走は裏に眼に余るものがある。最もひどいのは教学の存在理由を全然認めず、学問は科学だけで十分だと考えている人が余りにも多いことである。おそらく日本の大学教授の大部分はそう考えているらしい。だからこそ大学の講義は科学一色になつていくのである。このような学者達は科学とは何であるかも考えたことがなく、まして科学には限界があることにお気づきなく、あらゆる問題を無理に理屈だけで解決しようとするから妙な理屈が氾濫して思想混迷の原因をなしているのである。だから現代の思想混迷を解きほぐすには、教学を復興する前に、先づ以つて科学の姿勢を正し、科学の限界を越えた屁理屈を排除することが先決である。教学は論理的でないから学修が困難たというのには科学の雑音に邪魔されるためであつて、この雑音さえ排除されれば、教学そのものはいとも容易に理解しうるものなのである。その証拠には明治大正の頃までは多くの小中学校で教学が教えられ

相等の効果を挙げているのである。私などもそのような課程を経て来たので、何の疑問もなく自然に教学が身についたと思う。処が戦後になると、小中学校の科学教育は進歩したが、教学は一切教えないことになつたので、高校大学と進んで後に始めて教学を教えようとしても、もはや科学アレルギー症を起こしていて素直には受け付けなくなつていたのである。このような学生に教学を説くためには、多少廻り道ではあるが、先づ科学とは何かを知らしめ、科学には限界があつて、その先の問題領域を解明するために、教学によるの外はないことを納得させた上で、教学の話に入るのが紛れのない学修コースであると思う。

歴史について

以上長々と抽象的な議論をして来たので、ここで少し角度を変えて、具体的な応用問題について述べよう。学校教育における歴史科のあり方については、いろいろと議論が紛糾しているようであるが大別すると二つに分れると思う。ひとつは科学の外には学問はないと考えている科学者の見解で、これによると歴史学は当然社会科学の中の一文科ということになる。然るに科学は真実を探究する学問で、実証性こそ科学の要件であるから、歴史学もすべて物的証拠に基づいて立論されなければならないことになる。化石人類学や遺跡考古学などは、その意味において正しく科学であるが、古事記などの古文書や伝承などは後世において捏造されたもので物的証拠とは見なされない

から科学としては無価値である。したがつて天照大神も神武天皇も兒島高德も、その実在を証明するに足る物的証拠が見当たらない以上、歴史上の人物と見なすことはできないというのである。この意見は科学としての歴史学に関する限りにおいては正当な意見で全くその通りである。しかし問題は別の処にあるので、科学の外には学問はないと考える処が重大なる過誤なのである。前にも述べたように、明治以前の日本には科学は無かつたはずであるが、古くから歴史はあつた。古事記日本書紀は素より、太平記、平家物語、さらには大日本史、日本外史などいづれも科学の渡来前から日本にあつた歴史書である。これらは科学の一文科としてではなく、教学の教材として重んじられて来たものである。抑も科学はずべての事象を外界の現象として観察する学問であるから、科学としての歴史学は形に現われた人間の行動だけを研究の対象とするものである。それはそれでひとつの学問であるが、教学はそれと異り、人間の心を探る学問なので、教学の中の歴史は故人の心を探してこれを後世に伝えるための学問である。ところが心を論述することができないから、これを文書によつて表現しようとするれば勢い文学にならざるを得ない。だから科学の歴史は砂をかむような事実の羅列だけでよいが、教学の歴史は感動をこめた文学でなければならぬ。古事記などもこれを文学として味わい、これを通じて故人の心を汲みとつてこそ、教学上の貴重な文献であることが知られる。ではあるが

教学は文学そのものではない。文学は学とは書つても、私はむしろ芸術に属すべきもので、和歌なども同様であるが、これらは文芸と呼ぶべきであると思う。処で教学は学問であつて真実を探究する点では科学と変りはないが、その真実は心の内面あるいは主観的真実であつて、科学が客観的真実を探究するのは焦点の合わせ方が違うのである。たとえば兒島高德が実在したか否は教学としては重要な問題ではなく、当時誰からともなく高德伝承が拡がり、これが当時の人心に少なからぬ共感を与えたという歴史的事実に第二の間違ひは、歴史学は社会科学の中の単一の分科であると考えていることである。ところが歴史は科学の総ての分科に分類すべきもので、物理学には物理学史が、造船工学には造船技術史があつてよいはずで、何も社会経済史や政治外交史だけが歴史学ではないはずである。それらの中で人間にとつて最も重要なのは思想史であると思うが、思想とは何かを考えて見ると、何も社会思想だけが思想ではないはずで、人間の心の動きはすべて思想なのである。その心の真実を探究するのが教学であるから、教学のための歴史こそ、人間にとつて最も重要な歴史であるといつても言い過ぎではあるまい。

要するに科学としての歴史も必要だが、教学としての歴史はそれ以上に重要なので、初等教育においては先づ教学の歴史から教えて行くべきであると思う。(工学博士・明星大学教授)

夢から覚めよ

北島 照明

(熊本県鹿馬鹿中教諭・田43鹿馬鹿大卒)

私の学校のある三十三才の最も働き盛りの先生曰く「大学の学生運動が無かったら、社会はまだまだ不安になり政治は乱れるでしょうね。」と、いかにも真面目な口調でいわれた。

それを聞いていた一女生徒曰く「でも先生、学生があんなことしていいのですよか。」まだ何か言いたげであった。すると、その先生「学生運動が無い場合を考えてみなさい。あれがあるから社会の統一が成り立っているのだ。」とにこやかにいわれた。私はその笑いを見て背筋が寒くなるのを覚えた。何と冷たい微笑であつたらう。生徒はこのまゝ話題をそらして何事も無かつたように職員室から出て行った。ここに現代教育の悲劇がある。生徒を見つめる教師の心は温かくなかつた。この先生は何も教えることができない。教えるべき内容の持ちあわせもないのである。この先生には生徒は見えない。見えるのは社会変革後の幻の城が見えるだけである。この幻の城のあざやかなイメージに較べると目前の教育現場がいかに色あせた古くさい伝統に従順していることか。新鮮味は全くなく、教育熱も湧いてこない。これらは現体制の矛盾がしからしめた結果に他ならない。そこで科学的論法は一足飛びに結論を導き出す。

悪玉の張本人は文部省、その命令下にある教育委員、それをそのまま受け取り命令する校長、教頭の管理者であると頑固に思い込む。すると、自分がいかに世の政治悪に取り囲まれていることか。自分のこの正しさに較べると……。そこで

この先生は今の体制からは自分のこの不安な焦燥を取り去ることができないと本気で思い込む。その上に、この現代の病根は現代資本主義である、と更に論理は飛躍していくのである。だから、今、性急に取組まねばならないことは、現体制に対する国民的権利の主張であり、革命分子の育成に精出すということである。私は出来るだけ先生達の気持になるうとして書いたつもりである。

全く馬鹿馬鹿しい浅はかな論法ではないか。しかし、教師の側はこの浅薄な科学的論理的思考でも結構だろうが、この深層はこれら教師に指導された児童生徒の心の中にある。

この一年間に起つた学校内外の事件を上げれば自明であろう。

(学校外の事件)

- (1) みかんどろぼう (四貫)
- (2) 金の盗難(教え切れない)
- (3) スケート場にて靴を盗む
- (4) タバコを買って高校生と遊ぶ
- (5) 古墳荒らし
- (6) 自動二輪にのり回す
- (7) 小学生に乱暴する
- (8) 道路に押しピンをばらまく
- (9) 火薬遊び
- 00 その他

(学校内の生活)

- (1) 道路で朝会つても挨拶せず
- (2) 職員室に黙ってはい
- (3) 廊下を走る
- (4) 注意されると反抗する
- (5) 帽子をかぶって教室を英雄取りでのし歩く
- (6) 掲示をはがしてそのまま平気でいる
- (7) 言葉の乱れ甚しい
- (8) 壁板をはがしてストローのたきつけにする

だいたい思いついた時、記録したのもこれだけある。まだまだきりはない。しかし、これが全てであるとは言い難い。A君と剣道をやっていた時、A君曰く「先生の面のつけ方ゆるいです。ひもが下がっています。」これを聞いた時はうれしかった。心が救われた思いであつた。しかし、大方の生徒を見た場合、彼等の程度は、しつければ幼稚園、学力は小学五、六年、世俗の知恵は大学生、といつても過言ではあるまい。生徒を責めることはできない。彼等は永遠に気づかずしく、わがまま、図々しいことをやめずに繰返すだらうから、次の世代も、また次の世代も……。

彼等の野放図な冒険心は教育の新原理や学習指導法にはお構いなく、かきたてられ成長する。その結果はいつも雑然としていて。このような野蛮でやくざな心を「自発性」「主体的」という美名で粉飾して、野放しにする時、野蛮な心に拍車がかかかき、野獣の心と化するのである。このような心にとつては、吉田松陰の四規七則の「一、凡そ生れて人たらば宜しく人の禽獣に異なる所以を知るべし」

の心は、いかに笑止と映ることであろうか。ただ目前の推移を見ておれば「自発性」といういともさわやかなタッチの文字のもとに開放され野放しにされた彼等の肉体は、二十数年前の規格品の椅子を破壊しながら目覚しく成熟する。それも殊に時の流れの深い部分から影響されながらである。ここにくらげにも似た骨無し人間ができあがる。ただ大事なことはこの怪物からは決して目を離してはいけない。この真相は生徒を愛し、教師たるに誇りを抱き、生徒を教えて日々の生活の糧を得ていると自覚した、一生活人に徹するだけだと自得するところから開けてくる。

そこに立てば深憂すべきものが見えてくる。「若者は反抗するのがあたりまえ」「第三次世界大戦は起ると思うか」「ぼろ校舎をつくらせた政治家に問題がある。」と、自ら責任を回避して冷たい心をもって社会変革を夢見るやくざごころつき先生の心正しからざるにあるということに気がつく。この先生達には生徒は見えてない。自分の生活を見つめ、じっくり内省する忍耐力を失っている心に、人の心をおしはかり指導することができようか。真意は生徒のほうを知っている。「あの先生遅刻ばかりしている。」「先生も叱つてばかりいないで清掃したらいいのに……。」生徒の不信、不満はつるばかりである。そこで教師たる威厳でもって生徒を引っ張ってはいけません。「反抗心を失ってはいけません。それが若さというものです。」と一方で訓育し、また一方で「生徒は先生の言うこ

とは必ず守るのです。」と訓育される。あいた口がふさがらないとはこのことであらう。最早、ここに至れば教育すべき何ものもない。これが現代教育の悪疫であることに気がつかれないのである。

夢から覚めよ。毎日、目に飛び込んでくるものを見つめよ。生徒だけが見えてくる。ただ目前の事態に冷静に処する忍耐力が必要である。怪物達は永遠に怪物であることをやめないものであるから。孟子曰く「吾未だ己を枉げて人を正すものを聞かざるなり。況んや己を辱しめて以て天下を正す者をや。聖人の行は同じからざるなり。或は遠ざかり、或は近づき、或は去り、或は去らず。其の身を潔くするに帰するのみ。」

子規と啄木

山田 輝彦

鶏頭の十四五本もありぬべし

著名な子規の句であり「写生」の典型といわれているものである。晩秋の子規庵の庭先に、真紅に燃えている花の、野生のただけだけ生命力をしっかりと受けとめている。「写生」というと、何か生命力の稀薄な、受動的な態度のように聞えるが、子規の生命は最期まで衰弱を知らなかった、肉体の病という宿命を異常な意志力によって克服していった過程は見事という他はない。子規は生涯業病にとりつかれ、死んだ時には背中が潰瘍から蛆がこぼれ落ちたと伝えられているが

その思考の中には微塵もセンチメンタリズムがなかった。中江兆民が、喉頭癌が何かで咽喉に穴をあけ、余命の短いことを予感して「一年有半」を書いたとき、彼は「仰臥漫録」の中で「浅薄ナコトヲ書キ並ベタリ」と批判し、死を売り物にして世間の同情を集めることについて苦々しい感想を洩らしている。「居士は咽喉に穴一ツあき候由、吾等は腹、背中、臀ともいはず蜂の如く穴あき申候」と書いて、病気の重さでは俺の方が先輩だといわんばかりの口ぶりである。彼の「写生」には、こういう現実凝視の裏づけがあるのであり、そういう現実から逃避して「観念」の世界にとじこめることを本能的に拒否した。彼が「理屈」といって嫌ったのは、こういう現実遊離の「観念」に安んずる姿勢を意味したのであった。子規の余り長くない生涯は、興隆期日本の運命に直接していた。悲喜動乱の人生に随順して生きた。日清戦争が勃

発すると、矢も楯もたまたまらずに従軍した。それはやみがかたい生命の欲求からであり、軍閥の提灯持ちから出た行為ではなかった。「小生今迄にて最も嬉しきもの」の一つに「初めて従軍と定まりし時」と書いた子規は「従軍記事」の中で従軍記者の処遇を知らぬ一部将校の見識を批判することを忘れてはいない。日露の戦雲が急になって来ると、彼の感覚は敏感にその危機を感じとっている。「墨汁一滴」の中には「不平十カ条」というのがあるが、その二番目に「いくさの始まりそうで始まらぬ不平」と書いている。彼の思考はいつも国民感情の動きと離れ

ていない。こういう子規だったから「楳の前に空涙は無用に候。談笑平生のごとくあるべく候」と何のてらいもなく、遺言に書くことができた。死ぬものと残るものとはお互いに「相損つ」という現実を知りすぎるほど知っていたからである。

子規は足なえになってから、好きな旅行もできなくなった。知人の徒然坊が箱根から数葉の写真を送って来たとき、彼は数首の連作を作っているが、それは羨望の念の直接の表現であり、屈折した嫉妬のような感情は全く表われていない。足たゝば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

というような歌をよむと、彼の生命は狭い病床六尺の現実をこえて世界の涯まで飛翔している。カラッとして少しも停滞がない。例えば啄木の次のような歌と比較するがよい。

友がみな

われよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て妻としたりしむ

こゝにはやり場のない自嘲や屈折がある。子規と啄木とは、共に病氣との戦いの生涯であったが、子規には悲惨という影がない。彼の生命力は肉体の病をのりこえているからである。しかし、啄木には大きなかけりがある。それは日露戦争という時代を境にした、その前と後という時代的背景もあろうが、もつと生得の本質と関係がありそうだし、又彼らの若き日に傾倒した学問とも関係がありそうに思われる。子規はその芸術の精神や方法をもつばら伝統的なものに学んだのに

対して、啄木は少年時代のワグナーへの耽溺から、晩年のクロポトキンに至るまで、もつばらハイカラな新しいものに心を動かした。彼の生の基準はいつも外にあったように思われる。彼が幸徳秋水の大逆事件に心を動かされ、明星派の歌人で弁護士でもあった平出修から、裁判記録を借りて読み、「時代閉塞の現状」という論文を書いたことはよく知られている。これは「自然主義」の果たした役割が、強権——つまり国家権力の批判に及ばないことを指摘し、これからの文学が強権の批判の立場をとるべきことを強調したものであった。晩年社会主義者になったのだという視点からの啄木評価は、今日の左翼学者の通念となっている。進歩的文学者であるというイメージは定着しかけている。そして、ロマン主義の詩人から社会主義者へという過程は、現在のインテリの精神構造に訴えかけて来る絶好のテーマをふくんでいるのである。

啄木には「甘え」がある。天才としての自持は、しばしば凶々しきとなって表われて来る。彼の社会主義への接近は、そういう天才を天才として遇しない社会への憎悪や嫉妬から発していることに間違いない。そして、そういう個人のエゴイズムが、公憤や社会主義の姿を取って表われて来るのは、左翼思想のすべてに底流している思考の型である。「われは知る、テロリストの悲しき心を」と歌った啄木の心の中では、幸徳秋水の姿が美化されていたことは疑いない。大逆事件はでつち上げだという説も感情論である。秋水の愛人菅野スガは、「天皇暗殺

「の確信犯であり、ツアーに爆弾を投げたロシアの女のテロリスト、ソフィア・ペロフスカヤの心酔者であったという。その管野スガは、かつて秋水の弟子、荒畑寒村の愛人であったが、彼が赤旗事件で入獄中に秋水と恋愛関係を結んでしまへたのだ。出獄してそれを知った寒村はピストルを持って秋水を追いまわしたという。こういう無残酷薄な人間関係を啄木は果して知っていたのか。

啄木と子規。それに社会主義、国家主義というレッテルを貼るのはたやすい。しかしそこに明治という現実を生きた生き方の二つの典型をよみとるのは、必ずしも容易ではない。
(福岡県立若松高校教諭)

素朴な道学者

桑原 暁 一

研究社叢書に入っている「素朴な道学者」(A Rustic Moralist)という本は、標題だけは前々から見知っていたがはじめて手にとって見たら、意外にも反共の(広くは反全体主義の)本であった。著者はDr. William Ralph Ingeで編者の紹介によると、オックスフォードケンブリッジの哲学、神学の教授で、The Gloomy Dean というあだ名で広く知られている人だと云う。Dean というのは、彼は二十余年間、セント・パウルス・カセドラルの Dean (副監督)であったからである。原著は一九三八年に公刊された。この叢書はその抄略本で

ある。

ばくの西欧の旅の最後はロンドンで過ごされた。宿舎は、セント・パウルス・カセドラルのすぐそばにあった。その宿舎は牢獄というほかはない殺風景なものであったが、ぼくの部屋の窓はこの壮麗なカセドラルに向かって開かれていた。ちようど復活祭(イースター)の時期で、その入口には、黄色いラッパ水仙(Gatfodis)を売る男女の姿があった。

さて、著者インゲのもの云い方はすべて断定的である。何とかではなからうか式の云い方はしない。「もはや革命はないか」という章で彼は曰う「革命という革命は少数の暴徒のしわざであつて、ある階級のやつたことではない。

と。そしてフランス革命とロシア革命を引き合いに出している。ロシア革命はツアー打倒のためであった。ということになつているが、そんなことはない。ツアーはとつくにいなくなつてた。そして民主的憲法を作るための国民会議の招集日の夕方にクーデターが起つたのである。この会議にはポオルシエヴィストは取るに足らぬほどの少数しか加えられていなかったのだ。インゲはこれだけしか云つていないが、ポルシエヴィストは「多数派」というその名に反して実は少数派であつて、いわゆる少数派のメンシエヴィキと大してかわりはない。革命はその少数派によつてひき起こされたもので、彼等の口にする「労働者・農民」という階級によるものではない。と云いたいのであろう。この章のあとのほうで

彼は、ロシア革命で殺された人数を出しているが、革命当初の五年間に殺されたのは百八十万人で、そのうちの八十一万五千人は農民であつた、(ソヴェットの記録による。)と云つているのも、この革命が労働者農民の階級革命ではない、ということを示そうとするものである。フランス革命については、ロシア革命以上に手きびしく通説をやつつける。歴史家というものは未来のことにかけてはへほなくせに、過去を変更する力をもつている、それは神様でもできることではない。そしていつもレースの終つたあとで勝者の肩を持つ、と云つているのは痛快だ。

フランス革命はブルジョア革命だ、と云うことになつてはいるが、ほんとうだろうか。処刑された一万二千人のうち、七千五百人は、小農であり手工業者であり商人であつた、と彼は云うのである。そしてフランス革命は農民の悲惨に起因する、という根づよい通説に異議を提出する。一八八〇年に出た、ドクターリグビーという篤農家の書簡集を証拠として持ち出している。この人はフランス革命の起る数年前の一七八九年にフランスをはじめヨーロッパ各地を旅行した。彼がフランスで見出したものは、すばらしい出来ばえの作物と、健康で幸福そうな人々であつた。ところがフランスをあとにしてドイツに行ったところ、フランスにこそあると考えられる万悪がそこにあつた、と。ここで彼は云う「革命というもの、どうにもならぬ事情 (desperation) からひき起こされるのではなくて

むしろ景気が上向いていて (on a risin market)、政府が弱体であるときに起こるものである」と。ほんとうに革命を要するところでは、革命を起こすだけの力もない。革命を起こす力は、実に革命しようとするその社会から与えられる、ということか。このあと著書は次のように断定する。「革命の指導者は断じて労働者ではない。それは中産階級のインテリで、年齢は若い。

と。この章は次のことばで結ばれている「イギリスの政治家たちで、「新しき文明」について本を書いたり、またクーラック (Kulak) の「清算」(liquidation) について、得々として座わり心地のよい椅子から放送したりするものがある。彼等を見ると、彼等に、彼等自身の薬 (their own medicine) を一服差し上げたくなる。――

クーラックというのは、ソ連で集団農業に反対した自立農民のことを、コミュニストがこのように呼んだので、原義は「拳」ということだそうである。そのクーラックたちを、流刑や強制労働に処したのが、いわゆる「清算」である。ところで、「彼等自身の薬」とはどういうことか。彼等は共產病にかなりとりつかれてはいるらしいから、彼等に、彼等自身の薬を飲ませたい、ということか。しかし自信はない。一体、one, own... という云い方はおもしろい。この本の「ロボットの世界」という章の最後には、his own man ということばが出てくる。辞書には、自由の身、ということだとある。インゲは、全体主義社会では、人間

にロボットになる、指導者の云いなりほうだいになる。しかし人間は完全に自由でなければならぬ、と力説するのである。——七月廿七日記——
(都立千歳高校教諭)

反「安保」のねらいは何か

山内 健生

(神奈川県立新藤高等学校教諭・昭和43年都立千歳高校大卒)

「七十年の」の日米安保条約のいわゆる「再検討期」を控えて国内は騒然としている。

左翼学生革命運動のセクトによる内部対立は想像以上のもののように「内ケバ」によって死者が出ているほどだ。こうした異常なまでの対立にもかかわらず、反「安保」という姿勢において全く共通している。

左翼全体を組織的に見ても、大は日共・社党総評から、小は全学連の一分派にいたるまで反「安保」という点で統一がとれている。各々の組織によって、反「安保」の意思表示は「破棄」「廃棄」「粉碎」……というようなちがいはあるが、日米安保体制を否認することで共通している。

安保条約第六条に基づいて、日本に米国の軍事施設がある。このことは日本列島が米国の軍事力圏内に組込まれていることに他ならない。今日の世界の実情において、安保条約がなくなるといふこと(即ち、米軍が日本から撤退するという

こと)は、いままで米国の軍事力圏内におかれた日本列島が、中ソの軍事力圏内におきかえられることを意味する。たとえ「中立宣言」を発しようとも、客観的地理的にみて、日本列島が中ソのミサイルの射程距離内におかれることには変りない。即ち、現在と「全く異なる政治力学的環境」におかれるのだ。

米軍が撤退したあと、日本海の対岸や千島樺太の突端の「大砲」の筒先が日本列島に向けられた場合のことを考えるとぞっとする。

ソ連の軍事力圏内におかれることが何を物語るかは、戦後の東ヨーロッパの解放(共産化)が実例をもって示してくれている。そこでの共産化は、議会での共産党の議席数とは無関係だった。陸つづきの国境線の近くまで来て駐留している赤軍の軍事圧力を背景にした国内共産党の活動によって、共産化が行なわれたのだ。今日のチェコの悲劇はチェコ共産党が政権を掌握する過程にみられたのだ。そこにあるものは、圧倒的に優勢な武力をもつもの意向に添うために汲々としなければならぬ小国の悲劇である。

日本をこの「全く異なる政治力学的環境」に組込もうと行なわれているのが、左翼の反「安保」運動だ。反「安保」の側から、米国の軍事的に結びつくこととの「危険性」が強調され、とにかく米国の手を切ることが日本の「安全保障」につながるのだ、という論旨の主張がくり返えされていく。しかし安保条約がなくなつたあとの「日本を取り巻く国際環境」について一言も触れようとはしな

い。「現在の日本の支配階級を支えるものは日米安保体制である」という左翼の主張は真実をついている。彼らは安保条約が現在の日本の政治体制を支える重要な柱であるということとちゃんと知っているのだ。「現在の日本の支配階級」を転覆させるため、即ち「革命」のために安保条約を破棄しなくてはならないのだ。ここに反「安保」に結集されている左翼運動の本質がある。

さらに「全世界人民の解放(共産化)」をを目指す国際共産主義運動との関連も無視しえない。各国の内部に共産党の細胞を植えつけ、それを培養して内部から「革命」達成の客観情勢をつくろうと働きかけていることだ。

現在国内で展開されている左翼学生運動の背後にある「友好商社」の存在は何を物語っているのだろうか。大学の教棟を占拠し、校門に「造反有理」と書きつけ、そして「毛沢東」の肖像画を掲げている事実は笑話ではすまされない思想戦の真実を物語るものだ。偶々この場合は国外勢力との結びつきが表面化した一例であって、実は他のところで、もっと深く巧妙に浸透しつつあると考えるのは杞憂だろうか。原水爆禁止の大会が反「安保」集会に変質し、日本母親大会が「安保破棄」を討議しているということは何を意味しているのだろうか。「この子を戦場に送るな」というプラカードを掲げてデモ行進している若い母親は、安保条約さえなくなれば、「平和」になると思い込んでいるようだ。日共は「自衛中立」を唱え「自主独立

路線」を以って、国民にアッピルしようとしている。しかし、いわゆる「反代々木系学生」を「トロッキスト学生」ときめつけ攻撃しているところに、日共がソ連を中心とする国際共産主義運動の影響下におかれていることが証明される。共産主義イデオロギーと無関係なものは「トロッキスト学生集団」というようないい方はしない。中ソ対立の反映で国際共産主義運動の主導権争いが国内にもちこまれているのだ。

大学が学外政治団体と結んだ学内者によって破壊されている。これと同じことが国外勢力と結んだ一部のものたちによって企てられているというのはいさぎだろうか。それ企ての具体的な動きが左翼の反「安保」であると思う。

「七十年」は単に「日米安保条約」の是否が問われている外交政策上の問題ではない。その本質は「日本共産革命」をめぐる思想問題である。反「安保」に結集された左翼運動の本質を見抜く必要がある。

安保条約の「欠陥」や「危険性」が議論されていることは自由な政治発言として歓迎すべきことだが、それが「日本革命」への客観情勢をつくりだすために世論を利用しようとして発言しているのか、日本の主体性回復の地道な運動に裏づけされた発言か、を正確に認知し識別する必要がある。

いまこそ小難しいロジックを離れて「真に日本のことを心配するのは、日本人しかないのだ」という平常の感覚を取戻さねばならない。

慰霊祭・報告

初秋、九月二十日、東京大神宮において恒例の慰霊祭が行はれました。昭和五年、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創葉」の遺著を残して亡くなられた、黒上正一郎先生をはじめ、その道統につながる物故者(病死・戦没)八十余柱を御祭神とし、御遺族・会友・会員等四十余名が参会し、行はれましたが、例年の通り全国各地から多数の方々、中でも戦後、合宿教室を通して会員となった方々から多くの献詠があり、殿かのうちにも、にぎにぎしく執り行はれました。

慰霊祭の行事は、明治天皇御製拝誦に始まりますが、当日、夜久正雄氏によって護送ならびに拝誦された御製をここに御紹介申し上げ、いまあらためて拝誦するこの御歌をしをりに、慰霊の第一義に思ひを深めたいと存じます。

明治天皇御製拝誦(御題の下の数字は御作の年度―明治何年の意)
漆川懐古(三五)

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世をふるらむ
をりにふれたる(三七)

戦のにはにたふれしすらをの魂はいくさをなほ守らむ
鏡(三八)

国のためののちをすてしものふの魂や鏡にいまうつらむ
秋夕(三九)

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく
写真(三九)

国のためかばねをすてしますすらをのすが

たをつねにかかげてぞみる
凱旋の時(三九)
外国にかばねをさらしすすらをの魂も都にけふかへるらむ
子(四〇)

かなし子にかりたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを
往時(四二)

おもかげもみえずなりけりいにしへの人のことばは耳にのこれど
おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして
神祇(四三)

わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ
蟲声(四四)

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは
花(四五)

あかず見し山べのさくら春の日のくれてののちもおもかげにみゆ
惜春(四五)

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるこちこそすれ
をりにふれたる(四五)

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな
若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり
ことのはの上にぞのころうつせみの世になくなりし人のまこと
次に献詠者は六十五人の多数に上りますので、甚だ勝手ながら、ごく一部の御紹介にとどめさせていただきます。

献詠

生垣に泌みいるごとく紅芙蓉花咲く庭に秋空高し
東京 高木 尚一

天がける神のみたまを仰ぐと朝の光のうるはしきかな
神を想ひ人を想ふ 逗子 花見 達二
皓々と月照しかば街涯の山の雪木はみな見えにける
東京 井上 孚磨

めに見えぬたまや寄り来るうちつけに世になき人を思ひ出づるは
東京 中村 武彦

天翔るみたまの声に目をさまし起ちたる子らに力かし給へ
東京 加納 祐五

友らよむうたのしらべはひさかたの空にきえつつ神にかよはむ
東京 夜久 正雄

みたままつりみ名よびまつればなき人のかげに立ちつついやなつかしも
東京 小田村寅二郎

かへりみれば射る矢のごとし過ぐる日の年月越えてそのかみしのぼゆ
上田 宮脇 昌三

撰取不捨南無無量光仏もるともにみ国のいのちにつかへまつらむ
東京 三浦 貞蔵

みをしへを生くる力と堪へがたく忍びがたきをたへしのびさし
東京 浜田収二郎

なき友の生きてしあらばとひたすらに思ひてやまずけふこのごろは
西条 長内 俊平

つらなりゆくは難しと思へどなほあとをたどらむと願ふをみそなはし給へ
横浜 関 正臣

まの嘆かるるかな 富山 広瀬 誠
なき友ら心砕きし国の憂いや渦巻きて迫りくるかも
福岡 九大病院にて 佐藤 周助

いたつきのとこにふしつみそとせのむかしはろくくしぬびまつるも
在ハワイ 三宅 将之

とつ国に離れてあれどもとらを偲びつともにも魂祭らむ
東京 沢部 寿孫

みくに護りていのちすきにしみおやらの心を継ぎていまぞ生くべし
久留米 合原 俊光

天翔る御霊よ神よ動乱の世に立ち闘ふ力与へませ
福岡 友池 仁暢

雄々しくも生きたる人を偲びつつたゆたふ心をはげましてをり
東京 磯貝 保博

霊祭る列につらなる日の六たび親しみましぬ面影しのびて
遺稿集発行計画をききて
東京 山内 健生

亡き人の思ひ伝ふるくさぐさのみ文の刊行待ちに待たるる
富山 岸本 弘

虫の声のしげく聞ゆる秋の夜に太子を偲びをり越後山里に
編集後記 二つの台風が消え去ったあと秋冷にはかに加はり、晴天がつゞく。コスモスが満開を保ち、朝日に向って鳥がなく。当地の海峡にかゝる大橋の建設も軌道に乗った感じですが。今月も心のこもった多彩な原稿を寄せていられたヤング持場職場で精魂を傾けてをられたヤング会員の文章が、これからもだんだん本誌上に登場し、にぎはせてくれるものと期待してゐます。

国民同胞

発行所

社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

日本民族の正念

「平和の大海へ注ぐ一滴の水」(三井甲之著) をよみて

高木尚一

忙しいという時の「忙」という字は、「心が亡びる」と書く様に、仕事に追われすぎると心の生長がなくなるとは、最近或人の講演速記の中で読んだ。日常の挨拶でも「お忙しいでしょう」ということは半ば相手を祝福している場合が多いし「いや忙しくて仕方ありません」と答える時には、半ば得意な時が多い。そして「心が亡びる」或は「心を亡ぼす」ことを嘆く人は少い。

交通は日毎に便利になり、昔の人が想像もしなかった様な交通機関の発達により人々が相接する機会はいくらでも数多く与えられ乍ら、心の交流、深い思い、精神の共鳴、心からなる対話は次第に少なくなつて、何百年か前に、不便な山野を大半歩いて布教してまわつた親鸞の言葉などが、今だに生き、と生命あふれるものとして我々の心を打つのはどうい

事であろうか。

又最近或テレビの中できいたせりふに「いや今の私にとって大切なのは「聖徳太子」の方だ」というのがあった。私は瞬間はっとして思いなおすと、それは、「お金」という意味であった。あゝ、エコノミック・アニマル。アニマルとは歴史の感覚のないもの、歴史を知らないもの、バイタリテイはあるが、過去現在未来を貫く古人に対する憶念と、将来の改革と進歩の観念のないものをいう。

大蔵省印刷局で印刷される日本国紙幣の、五千円札と一万円札には、聖徳太子の肖像が印刷してある。併し乍ら太子の肖像になった御著作、その偉大な文化的価値については学校でも教わらない。印刷局では紙幣に虫がつかぬ様、印刷の時に防霉剤をしみこませるが、この紙幣を使用する人の心がくさる事は考えない

であろうか。

政治とは人の心を治めることである。明治時代の文豪二葉亭四迷は、その小説「平凡」の中で「私は以前政治家の仕事などはその日その日のやりくり仕事にすぎないと思つていたがそれは誤りで、政治家とはつねに或精神界を相手に仕事するものだ」と後になってから分つた」と主人公をして述べせしめている。

こゝでもう一度考え直してみると、日本人のバイタリテイの奥底には、現在の学校教育の動向にも拘らず、建國以来うけつがれた素直で敏感な批判力と勇猛心があらわれていて、外人がエコノミックアニマルと評するのは、日本文化の主流を知らないからである、ともいえる。むしろ今こそ日本人自身自らの正念に立ちかえる時であると思う。

こゝ一月あまり「三井甲之存稿」の別集として刊行された「平和の大海へ注ぐ一滴の水」をくり返しよみ耽つている。本書は著者最晩年の遺稿であつて、殊にその後篇は昭和二十二年四月十日著者が自宅にて脳溢血で倒れた後の病床日記をその主な内容としたもので、あれだけ教をうけ乍ら倒れた後お見舞にも行かなかつた事をくやみつ、著者の柔軟な自然随順の心境を表現するコトバに直接ふれて、無限の信界につながる思いに日々を送つている。

同書三頁に般若心経を誦して究竟涅槃の心境が開発進展することを述べた後に、「思想せず、考慮にとらはれず、唱へる

のである。コトバのしらべのまゝに唱へ、よむのである。それが唱名におちつくのである。唱名が念仏である。念よりもむしろ唱が主となるので、唱名の「しらべ」が大切である。深思静観冥想から解放されるのである。考へずにサトルのである。サトルは目がサめる。疾く目サメルのである。」

このことは曾て私が三井先生のもとにお伺ひした時冬枯れの田んぼ道を歩き乍らくり返し教えられた。

目次

日本民族の正念	高木尚一	(1)
高校教師はこれでいいのか	国武忠彦	(2)
田所兄の憶い出	桑原暁一	(4)
中部太平洋を訪れて	倉前義男	(5)
(短歌) 法隆寺頌	夜久正雄	(6)
レプケ著「ヒューマンイズムの経済学」	津下有道	(7)

た時の先生のコトバの中で「アマテラスオホミカミ」という音声が今尚ははっきり耳に残つている。同書の右の文につゞけて「信楽開発の時刻の極促」である。物理学的の速度をも考ふべきである。これはサトルことを理解するために学術的に考へるのである。サトルことは考へることを抱納するので、弁証法的に

排斥するのではない。」

これは前にいう、思想せず、考慮にとらはれず、唱へるといふことを補足するもので、「サトルことは考へることを抱納するので弁証法的に排斥するのではない」という点は味ふべきコトバである。

先輩の田所さん方が日常の生活の中で親鸞聖人の顕浄土真実教行證文類序の開巻の最初のコトバ

「ひそかにおもんみれば難思の弘誓は難度海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」

これは聖徳太子の十七條憲法の中の「剋く念うて聖と作る」といふお言葉に通ずるものだ、といわれていたことを思い出すが、ひろくなり狭くなりつゝつながってゆく我々の思想生活がこうした先人の生きたコトバに現実を支えられていることを思うと日本はありがたい国だと思ふ。

次にもう一ヶ所前掲「一滴の水」から引用すると、同書三八頁に

「ヴントが最後に英米の実利主義の哲学に対して独逸の理想主義イデアリスムスを説いたのは世界大戦（第一次）筆者注の悲劇にもなったもので、敵味方に分れたことによる研究の対象の分裂にわさはひかれて全世界的統一依拠を失ったからであろう。悲しむべきことには彼もその意図に反して、つまりは哲学者であったからで、哲学の到達した所は燦然たる文化殿堂のさびしさと硬直であらう。そこを一步ふみ出せば、実際ふみ出さざるを得なかつ

た世界は「俗諦」のそれであった。ゲルテは独逸哲学の末路を予言してをった。」

著者のいわんとするのは英米の実利主義哲学もドイツの理想主義哲学もどちらも採るべき要素を持っているのに、英米とドイツが敵味方に分れたために研究対象の分裂にわざわいされてヴントが一方をすて一方による考へ方に固執する結果になったというのである。燦然たる文化殿堂のさびしさと硬直、そこを一步ふみ出した世界は「俗諦」であるとは、文化の全世界的統一依拠を失ったことにより、ドイツが真俗相依の国になり得ないことを示すと共に、日本の現在のアカデミズムの行つづまりをも示している。この行つづまりの打開は、全文明国の精神発達史上の重大問題である。

日本は第二次大戦で敗けたけれども、日本文化の伝統は古来損取不捨であり、敗れて尚全世界的統一依拠を失つてはならず、益々その文化史的使命遂行の責務は重くなりつゝあることを自覚せねばならない。

最後に前掲「一滴の水」にしろされた三井先生の和歌の中から晩年の寂滅為楽自然随順の心をうたわれた数首を引用し、感想を述べよう。

世の中にくさぐさのこと起るまゝにまかせてながむるこゝろゆたけし
かにかくにせむと意志して生くるなれど
そをたちきりて生くるすべあり
わが思ひおもひ切りつゝ空わたる日をみ

るごとくみつゝくらさむ

うつそみのいのちしぬるをしる時し人のいのちはとこしへならむ
永生を生くるをしへを宗教と名つけしことわりいまさりたり

ふりそゝぐ天つ日かけを身にうけてまことありがたしと思ひつゝあり
日のひかり身にそゝぐことをむらぎもの心にもふがくすりなりけり

右の歌の第二首目「かにかくにせむと意志して」とあるのは、生きてゆく中にその時々々の行動を支える様々の意志があるが、「そをたちきりて」というのは、仏の本願力といはれた超個人的意志につながる、自力のいはからいを捨て、他力の信に生きるその意志過程をさすもので、この点理くつに走る前に議論をやめて、静

高校教師はこれでいいのか

かにその前後、歌をふくめてそのしらべを追つてよみ、サトル以外にない。

また最後の歌

日のひかり身にそゝぐことをむらぎもの心にもふがくすりなりけり
日のひかりが絶えず自分の身にそゝいでいることを心に思うことがくすりにな

る、ふりそゝぐ日の光が自分の身をつねに照らしていると思念し、心を天地にたなび、天地のリズムに心を合せることにより、病気がいやされるということであり、つねに死に直面しつゝ、神に祈り自然のめぐみをおおき生きる作者の心があらわれない。

以上はいいたい事のほんの一端であるが、今日の日本の表面の混乱のあらしが大きければ大きいだけ、日本民族の正念は表面にあらわれないことを信じつゝ、擲筆する。

(財)労働科学研究所維持会事務局

国 武 忠 彦

(神奈川県立横浜翠嵐高校教諭 昭37年大卒)

十七校で五千五十人を数えている。

とくに過激的な反代々木系の組織拡大がいちじるしく、昨年末の調査では二千七百二十人だったものが、現在では二倍近くにふえている。この急速なふくれあがりには、なお増加の見通しであり、七〇年安保を目ざしこれらが大大々な統一組織「全国高校生連合」が結成さ

(一) 高校紛争に「対策」はない
大学紛争が下火になりかけたのと対照的に、高校紛争が燃えさかってきた。
ハイスクール・パワーまたは「全学連予備軍」などと呼ばれる高校生の政治組織は、十月初に警察庁が明らかにしたところによると、代々木系が九百六十五校で一万五千人、反代々木系が五百四

れることは時間の問題となった。
それにしても代々木系、反代々木系を
合わせると、組織力は一千五百校を越
え、人員は一万七千人近くになるが、高
校総数からみて、三校に一枚で、なんら
かの政治組織がつくられているという事
実は、注目せねばなるまい。

警察庁はこの事実をもとにして、文部
省に「善処」を申し入れてきたが、文部
省は「これは一片の通達を出して解決す
るような問題ではない」と答えてきた。
それには過去のいきさつがある。昭和三十
五年の「安保騒動」のとき、「高校の
生徒会や生徒が政治活動に巻き込まれる
ことのないよう指導体制を確立する必要
がある」さらに「生徒が政治的組織を結
成するのは好ましくない」という二つの
通達を出した。この通達は今でも「生き
て」いるが、実情は生徒会の連合はおろ
か、全国組織まで結成されそうな気配で
ある。

こうした経験があるので、文部省とし
ては「一片の通達」がいかに無力である
かよく知っていたのか、去る十月三十一
日に発表された文部省の統一見解は、積
極的な「通達」の形をとらず見解表明に
とどまった。高校生は「望ましくない」と
は「禁止」校外では「望ましくない」と
国として初めて見解をまとめたのである
が、これは当然の指摘である。「一片の
通達」が無力であるからといって、それ
では「教育的な立ち場」からの対策にし
ても、そう新しいとつびな対策は出てこ
ない。現場の教師としては、どう対処し
たらいいのか。

高校生の問題が、通達よりも教育の問
題でなければならぬことはよくわか
る。政治集会やデモに加わることが好ま
しくないということは、「一片の通達」
によって押しつけられるべきでなく、教
育の結果として実現されるべきだとい
う意見もよくわかる。現在の紛争が若者の
甘ったれだとか、外部勢力の扇動であ
るとかいうことだけでは説明しきれぬもの
が多い。馬車ウマのように受験勉強にか
り立てられることに、感受性ある若者が
反発するのは当然だとか、不満や悩みを
持っている生徒と真正面から教師は話合
わなければならぬとして「学校生活に
むなしさを持ち込むな」というのが一般
的な結論のようである。

それでは、現代の高校生にとって「む
なしさ」とは何なのか。殆んどの高校生
が、予備校化と教師がつまらないことの
二つをあげている。「教師がつまらな
い」ということは具体的にどういうこと
か。「自由」（二月号）のなかで、高橋
正夫教諭は生徒からのアンケートの結果
として、「教師の冷淡」「生徒との遊離」
「教師の無理解」「教師の形式主義」
「権威による抑圧的姿勢」などをあげ
ている。しかしそれが更に「教師の不勉
強」「平板単調な授業」「魅力のない講
義」「内容の貧困」などを生徒があげる
におよんでいるのを見ると、学校がつま
らないということは教師のつまらなさで
もあると断言してもよさそうである。な
ぜ教師はつまらない存在なのだろうか。

(一) 人間の顔を失った教師
生徒のころは、知識と経験をつんで
日に日に複雑になっていく。この複雑な
生命は、もつと己れを完全たらしめんた
め更に高きものをめざしてあがれてい
る。それは安心とはならず、かえって不
安となつてところを苦しめることになる
だろう。「このような生き方ではないのだ
らうか」「正しく生きるとはどういうこ
となのだろうか」「何のために自分は勉
強しているのだろうか」「友情とは何だ
らうか」。青春に人生上の悩みと迷ひは
たえない。わたしたちは、このような溜
息をつきながら生きていく生徒と一度で
もいから共に生きたことがあつたのだ
らうか。このころとところがぶつかるよ
うなことがあつたのだろうか。
緻密な論理的な話でなくてもよい、と
ぎれ／＼のことばでもよい、前後矛盾す
ることであつてもよい、ただ生徒の思索
と体験にびびり合つた、すなわちここ
ろとところがびびり合つたような話を
交わしあつたことがどれほどあつたの
でしょう。

生徒に付き合うことは、実に苦しいこ
とかもしれない。しかしそのために自分
は教師としての精力の半ば以上を費やし
たといえるような人がわたしたちの周囲
にはどれほどいるのだろうか。「そんなも
のは自分で勝手に考えろ」とか「青年と
はとかく感傷的になつてそんなものに一
時夢中になるときがあるものだ」とか、
「教師は自分の教科を教えるだけで充分
なのだ」こんなことを考えてはわたした
ちは面倒くさくあしらつてきたのではな
かつたでしょうか。しかし、わたしたち
が生徒の苦悩をみてみぬふりをしたとき

に、わたしたちは一体どのような人間に
なつていけるのだろうか。騒ぎが起つてから
職員会議で明け暮れし、遠くからマイク
で「生徒のみなさん」と呼びかけるよ
うなことは、もはや「人間の顔を失つた教
師」でしかないことを生徒たちは敏感に
感じとつていけるのです。

わたしは、教師の最低条件は「人生い
かにいけるべきか」を切実に問いつづける
意欲だと思つています。この意欲が教
師にとつて一番大切なものだと思つてい
ます。「あの先生は、いわゆる生徒との
対話などは殆んどやらない。授業中に余
計なことはいわない。しかし授業は大変
おもしろい」このような噂をされる先生
の授業をさきえていけるものは、きつとこ
の問いに身を焦がして生きておられるか
らだと思つています。

とこまで、わたしたちはなぜ生徒と話
しあわないのだろうか。生徒には知られな
い沢山の学校業務に追われているからだ
らうか。それもわからないではない。し
かし、それだから生徒と話しあわないの
だろうか。仕事之余りに忙しむというの
は云いのがれのような気がする。そんな
ことより問題は、わたしたちが教師とし
ての生命を失つてしまつていけるからのよ
うな気がする。なぜなら、わたしたちに
飽くことを知らざる知識欲の追求がある
だろうか。わたしたちの授業内容は、き
わめて通俗的なとき／＼の刹那的な知
識の連なりを思わせぬか。わたしたち
の生命は、沈滞し荒廃し乾からびたま
まにはなつていないだろうか。切実に悩
み苦しむこともなければ、つよい欲びも

ない。

わたしたちが、このような己れの内面に手きびしく立ち入ろうとしないことが、ひいては生徒の精神生活に無関心になるのではなからうか。わたしたちの精神生活が充実しておれば、それは覚えず知らずあふれ出ていくものである。わたしたちは、自分自身の精神生活に自信もなければ威力もない。わたしたちの内面には、ただ蒼ざめた衰えた羞かしいような空虚さと型にまいった概括的な思考力しか存在してはいないようだ。もしこの状況が真実ならば、教育の危機は遠いところにはない、文部省でもなければ過激派学生でもない、まさにわたしたち教師自身の内面にあることを自覚しなければならぬ。

(三) 教師はサラリーマンではない

「教師は労働者である」これは日教組の倫理綱領のなかの有名な言葉である。わたしはこの言葉に出会うたびに悲しくなる。なぜこんな当りまえのことをわざわざうたわなければならぬのだろうか。うたうにしても、もつと別な形で教師を表現できなかったのだろうか。労働者と呼べば、工場で働く工員も、会社や銀行で働くホワイトカラーも、デパートのセールスもみんな同じ労働者である。同じ労働者ではあるけれども、正に教師に相応しい表現がほかに考えられなかったのだろうか。わたしたち教育労働者には特別な労働倫理や精神はありえないのだろうか。しかし倫理綱領を読んでも、それは無駄のような気がする。なぜなら「教師は労働者である」ということは、

田所兄の思い出

桑原 暁

今日(十月廿五日)小田村兄からの電話で「田所広泰遺稿」出版の打合せがわせた。報らせがあった。それはぼくに亡き田所兄のことを憶い出させて、堪えがたくさせた。その憶い出まきりがないが、そのたった一つのことを書き記して、その堪えがたき思いを追いつ追うとするのである。

それは昭和何年のことであつたか。ぼくが旧制一高の、一年のときか、二年のときか、すべてはつきりしない。ぼくは昭信会が窮屈でたまらなくなつた。大つばらに許されている本は、明

治天皇御製集と、三井甲之先生の、「明治天皇御集研究」と、黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の三冊であるように思われた。田所兄そのほかの先輩は、黒上先生没後間もなくのこと、極度に緊張していたと思われる。ぼくのように、直接黒上先生を知らぬものには、その緊張感はずぐには同感できぬものであつた。

田所兄と同学年の、新井兼吉兄の研究発表のあつた時など、ぼくは、たゞ彼の手にしている原稿の減ることだけを気にしていた。居眠るものは、田所兄の、卓を叩いての叱咤に目をパチクリさせた。

とにかく、ぼくは、昭信会が窮屈でたまらなくなつた、それで、同級の、O君をかたつて、脱会を申し出でよ

うと、世田谷代田の田所兄のところにむいた。何か祝祭日の日であつたようにおぼえている。ぼくらを迎へた田所兄は、例のように、うれしさを全身にあらわして、迎えてくれた。ぼくが云い出したのか、O君が云い出したのか、それはおぼえておらぬが、昭信会をやつていく自信はないから止めさせてもらう、というようなことを云つたかと思われる。これに対して田所兄は、卓上の花瓶を手にして、自信といふのは、この花瓶のような固定したものをつかむといふのではなくて、どこまでも、ほんとうのことを求める、ということではないか、と云つた。ぼくは、

それで、気持ちが悪く、いっしょに行つたO君とは別々の気持ちで、田所宅をあとにしたのであつた。

きびしさの欠如が見られるということはい、自分が決めたのではない制度や慣行にしたがつて、日々だいたい同じ仕事をやつている。「この仕事の代償として一定のサラリーを受けるが、そのサラリーと組織体のなかでの地位は、年功序列制度というエスカレーター装置によって、しだいに高みへと昇るようにつくられている」なるほど現代の教師が、このサラリーマンの定義といかに共通しあつているかよくわかる。そのため教師はこのサラリーマンのなかに、総理府その他の調査統計にはくりこまれてはいる。またこのサラリーマンには職業にたいする心構えの弛緩、すなはちゆるみ、だらしなき、

「教師は単なるサラリーマンであつて欲しい」といふ気持ちが生徒にはつよい。だから教師のストライキにも大多数のものが情情的には賛成できないでいる。しかしそうした生徒の期待にもかかわらず教師はサラリーマン化して行く。現在の学校の組織体のなかで、ほとんど

教師として心を勞して一生懸命働くことの喜びをうたつたものではなく、一日も早く革命がくるように階級闘争をおしすすめていく自覚を促がしている言葉だからである。わたしたち教師は、ここに一般賃金労働者と自己をびつたり重ねあわせることによって、仕事も権利意識も欲びも悲しみも不満も満足も全く一般賃金労働者もしくはサラリーマンと同じ意味あいの消極的なものにみずから墮してしまつたのである。

サラリーマンとはどういうものか。「一定の組織体の困いのなかで働いている」「自分のものでない設備や器具を使

きびしさの欠如が見られるということはい、自分が決めたのではない制度や慣行にしたがつて、日々だいたい同じ仕事をやつている。「この仕事の代償として一定のサラリーを受けるが、そのサラリーと組織体のなかでの地位は、年功序列制度というエスカレーター装置によって、しだいに高みへと昇るようにつくられている」なるほど現代の教師が、このサラリーマンの定義といかに共通しあつているかよくわかる。そのため教師はこのサラリーマンのなかに、総理府その他の調査統計にはくりこまれてはいる。またこのサラリーマンには職業にたいする心構えの弛緩、すなはちゆるみ、だらしなき、

「現在の学校の組織体のなかで、ほとんど

中部太平洋を訪れて

(ミクロネシア)
倉前義男

に人間の自由や主体性を確立していくことができるか。このような組織社会は結局資本主義社会であり、これを破壊することによって、人間があくまでも自分を生かしながらいかに協力し進歩していくことのできる新しい社会をつくる以外にない」と。しかし教師の多くにみられるこの性急な解決案は、なんと子供らしい単純な考え方だろう。生徒たちはそんなことを望んでいるのではない。「先生もっと勉強してきてください」「もう少し面白く授業ができないのですか」「単なるテーチング・マシンにはならないでください」とお願いしているのです。

わたしたちはサラリーマンとは多くの共通面があるにもかかわらず、はっきりと区別されなければならぬ一点は、対象が人間であることです。その人間の「こころ」の世話をしなければならぬ。わたしたちの労働の性質はつねにチャレンヂ(挑戦)されているのです。不断に精神集中や緊張を要求され、また創意工夫が求められている仕事なのです。それだけに教えた結果には重い責任がともなっているのです。

さてそうすると、わたしたちは最後につぎのことを確認しなければならぬ。わたしたちは教師という職業に興味があり、あるいは生きがいを与えられているがゆえに献身するのではない。むしろその逆がほんとうなのです。仕事それ自体に献身し奉仕しなければ仕事の満足も仕事の喜びもほんとうの幸福もないということ。

十一月十七日、佐藤首相訪米の騒ぎが一段落したあと、夕刻の七時に羽田を出発して、ゲアム島(大宮島)へ向いました。到着したのは夜の十時でしたが、通関手続きや入国手続きをすませて、東急ホテルに着いたのは十二時前でありました。そして、あくる朝の午前五時に起き六時すぎの飛行機でサイパン島へ向い、僅か三十分の飛行でサイパン飛行場へ到着しました。こゝは硫黄島やアッツ島(熱田島)その他の島々と共に、大東

亜戦争の過程で数万の将兵、住民が玉砕した島であります。私は埼玉県下の小都市の市議や遺族、青少年ら二十数名のグループに講師として参加を要請されたのですが、日頃から念願していた夢がかなうので喜んで参加した次第でした。

サイパン島訪問はあくまで、この島に散った人々の慰霊を目的としており、買物ではないということで、手持ちのドルも百ドルまでに制限しました。そして、サイパンとゲアムのホテルで、夜は私と国土開発研究所の田村氏の二人が講義をおこない、夜遊びも一切させないというきびしい日程を組んだのですが、一同それをよく守り無事二十一日に羽田に帰ってきました。

慰霊のためには日米将兵の碑と、サイパン島民の碑をつくり、日本で入魂式を

おこないそれを飛行機でサイパンまで運んだのですが、相憎、佐藤訪米と同じ日になった為、長い碑をもちこむことが許されず、真中から半分に切って空港へもちこみ、現地で継いで建立しました。

慰霊碑は有名なバンザイ・クリーフの絶壁の真上に立てましたが、現地のサイパン島民が喜んで奉仕してくれました。

大東亜戦争末期、昭和十九年にサイパン島に千八百機の航空機と数百隻の米國艦隊が来襲し、猛砲撃のあと十五万人の大兵が一挙に上陸して、わが守備軍と凄じい激斗を交え、わが軍は司令官以下全員玉砕、島民は約十万人の日系人と数千のカナカ、チャモロの現住民らが、これも多くは自決して悲愴な戦は終わったのですが、島の北端にあるバンザイ・クリーフの絶壁から数千人の婦女子が米兵のとりこになるのを拒否して、眼下の荒海へ身を投じて死んでいった話は、余りにも有名です。

私達は身の毛もよだつこの絶壁の上に立ち、下をのぞいたとき、肝が冷える思いがしました。絶壁の下は荒波によって洞穴のように深くえぐられ、打よせる荒波が洞穴の中に轟然たる音と共に突入しては、はね返り、そのしぶきが百米近い絶壁の上まで飛び散ってきたほどです。

慰霊碑を建てたあと慰霊祭をおこなっ

たのですが、はじめに国歌を斉唱しはじめた途端に遺族の代表達や年配の人々は哭き出しました。私は鎮魂の祝詞を奏したのですが途中で感きわまり、しばし中絶した程です。そのあと、水道工屋のオヤジさんが、大木惇夫の「海原にありて歌える」の一節を朗唱し、
云うなかれ 友よ!!
別れを、
生き死を

常の世を……
と高唱した時には二十才台の田舎の青年たちも、みな嗚咽した程です。そのあと全員が献詠し、「海ゆかば」をうたったあと、遺族達が寄せ書きした国旗と、献詠の歌を書きしるした短冊を断崖の上から海へ投じて式を終りました。

日本という国は不思議な国で田舎町の平凡な市会議員や中小企業のオヤジさん達や、町の青年たちも、明日の慰霊祭に捧げるために歌をつくらうと提案すれば、全員、まがりなりにも三十一文字の歌や、十七文字の俳句をつくってしまうという事です。それはサイパン島の現地にきたという感銘がおのずから感動をよびおこしたからでしょう。水道屋のオヤジさんは中学も卒業していない人ですが、短歌の創作をたしなみ、大木惇夫の詩を宙にそらんじているという人で、日本の文化的伝統は田舎の町や村で平凡にくらしている人々の間に、確実に守られているという事実を今度ほど痛感した事はありませんでした。

そして、現下の日本の青少年が、自民

党政府の施策に反撥して、不穏の空気を示しているのも、根本はあの大東亜戦争に殉じた数百万の英魂を正しく祭ろうとしないからであると痛感しました。おそらく、全共斗やベ平連などに参加している学生や青年たちも、あのサイパンの萬歳タリーフの上に立ち、歴史の悲劇と、民族の壮大な叙事詩を実感すれば、日教組などがおこなっている虚構のイデオロギーなどは忽ち吹き飛んで、日本人としての純粹な感動をとりもどす筈です。

島民の人口は今のところ数千人ですが、市長以下、主だった人々はすべて日本に対して深い愛着と敬慕の念を失なっておらず、「私は少し色は黒いですが日本人であります」と自己紹介して日本語の名刺を差し出す有様で米国の二十五年にわたる信託統治は余り功を奏していないようです。ベトナムにあれだけの金と軍隊をつぎこみながら、遂にベトナム人の心をつなぎとめることのできなかったアメリカの失敗は、マリアナ群島においても同じ結果を招いています。

も、ソ連や中共と共通したものを含んでいるようです。大東亜戦争で結局、日本が不利な戦局を承知の上で、日米決戦に踏み切らざるを得なかったのも、米国の世界政策、中でも太平洋における西進の構えに膝を屈するわけにゆかなかった為でありました。

米海軍大学の教官として「海上権力史論」(一九九〇年)をあらわした有名な地政学者アルフレッド・セイヤー・マハンが述べたように「米国は英国について海洋国になり得る。そのためには、パナマ運河の開削と、ハワイの入手が必要である」という戦略を教科書通りに実行して、パナマ地峡に騒乱をおこしてカイルア国をつくって運河を建設し、ハワイ王国を滅ぼしてこれを併呑し、ついで、米西戦争でグアム島とフィリピン群島を手に入れて太平洋を西へ西へと進んできた訳です。その土地を奪い取りながら、西部へ西部へと移動してきたように、百年前からは太平洋上を軍艦に乗り換えて西進してきたと云えます。米国の太平洋戦略は、幌馬車隊を艦隊に乗り換えたただけで、その中実は大陸型の征服主義だったと云うことでしょう。

米国の世界政策はフィリピンから中

国大陸へ進出し、また朝鮮半島へとりつくために、沖縄と台湾を入手し、また、インドシナ半島(ベトナム、カンボチャ、タイなど)に足場をきづこうと企図していたのですが、その米国の進路に立ちはだかった者こそ日本だったと云えます。日清、日露のたゞかいで朝鮮半島の主導権をにぎり、オホーツク海、日本海、黄海東シナ海の制海権を握った日本、第一次大戦によってマーシャル、カロリン、マリアナの南洋群島を手に入れて西太平洋の広大な海面の制海権を握っていた日本、これが米国の百年來の太平洋戦略の邪魔物であった訳です。

大東亜戦争はこの米国の太平洋西進政策の結果、ひきおこされたものであって日本が極東で演じた役割りは、ロシア、ドイツ、アメリカ、英国などの極東への進出を、くい止めることにあつた事は明らかです。不幸にして、大東亜戦争で日本は敗れ、米国は念願通り朝鮮半島、琉球、台湾、シナ、インドシナに進出して足がかりを定めました。しかし、歴史とは面白いもので、日本のあと釜に据つた米国は忽ち朝鮮戦争で多大の出血を余儀なくされ、シナ大陸からは毛沢東によって締め出され、インドシナではベトナム戦で大失敗を演じて退散しようとして

ベトナム戦を終結させ、七十三年には韓国から米軍をひきあげるというスケジュールにしたがって今後進められると見られます。

今年七月二十五日、ニクソン大統領がグアム島で記者会見して発表したグアム・ドクトリンを見て、米国が東南アジア、極東への過度の介入を反省して、戦線の縮少を考慮していることはあきらかです。それにひきつづいて、八月七日付の米国の「USニューズ・アンド・ワールド・レポート」誌が、米軍部は太平洋の防衛線をグアムまで後退させる意向を持っていると述べた事も見落すべきではありません。同誌は、その理由として「沖縄はやがて日本に返還されるので基地としての役割りは減殺される。また中共の核兵器と中距離弾道弾の進歩に伴ない、シナ大陸から五百マイルの近くにある沖縄は基地として役に立たなくなる。そこでシナ大陸から二千マイルの距離にあつて中共のミサイルの射程外にあるマリアナ諸島の四つの島、サイパン、テナン、ロタ、グアムの基地化が必要となる」と指摘しています。

私がサイパン訪問を考えたのは、これらの状況を考慮しての事です。サイパンテナンでの慰霊と共に、今まさに大きく転針しようとして、ある米国のかくされた表情を、グアム島とサイパン島でつかんでしようという狙いでした。幸いに現地の人に接してある程度の認識と情報を得ることができました。詳しくは申し上げられませんが、米国が七二年までにサイパン、テナンなどに大規模な基

法隆寺頌

夜久 正雄

昔来し旅館の前よりつつしみていまま
のぼる太子のみ寺

おもかげの松並木道ゆめにあらずかく
て昔もまゐりたりしか
門を入ればあなすがすがし法隆寺一瞬
に心清められつつ

ここに見る調和の世界空気がへ清しとおもふみ寺のうちは和を以て貴しとなすとのらしたまひし太子のみ心目に見る伽藍がらんけふ見れば釈迦三尊の御かたちたふとかりけりをろがみまつるあたらしき四面の壁のただ白く壁画とこしへに見ゆよしのなき

二

中門のきだはしにみてやすらへば一すぢの道とほりてかなし
法隆寺南大門の見通しの並木道くる人かゞやけり
一すぢの道をまゐくる老いし人幼なき人みな日にかゞやけり
中門のきだはしにみて心よりやすらぐおもひむかしにかはらす

三

朝夕にみ寺の塔を妻子らとあふぎまつりて学ぶすけき
あらしだつ風ひたふげば金堂の軒の鐺つよくひゞきわたりつ
あらしだつそらにそびゆる塔の屋根の鐺はゆれつゝしきり鳴るなり
思はざるあらしにあひていかるがのみ寺の鐺の鳴るを聞くかも

四

あなかしこ、あなきらきらし、救世観世音菩薩の像をろがみまつる
思ひきや年月ながくあくがれし夢殿秘仏けふをがまむと
よるこびのをどる心に夢殿のきだはしのほりみほとけをがむ
あなかしこ聖徳太子のおん顔ににせま

つりしといふ観世音菩薩
おごそかにきびしくされど口もとに神秘のゑみをたへますなり
ありし日の太子のみすがたみこころをまふぎまつるとおもふもかしこし

五

山背の大兄の王のみはかとふ荒れし古墳に立つがかしこき
かしこきや王の古墳とつたふれば松ふく風のひびきもかなし
世をあげていたみまつりけむ王のみはかのゆくへ人知らずとふ

六

南無頂礼聖徳太子ともろごゑにとなへまつるも聖靈殿に
老若男女のこゑごゑとけあひてひとつひびきとなるがかなしき

七

七京にて
梢より梢にかけて暁をとよもす鳥よなに鳥ならむ
いかるがの里にも聞きし鳥なりけり京のやどりにしきりとよもす
あかときをひとり告ぐとか鳥一羽鳴きぞとよもすねむれる町に
雨雲の雲足はやみ東山見えがくれする明けゆく空に
この見ゆる山のすがたをさながらにうたひたまひし大みうたかしこし
東山うたひましましけむ明治天皇御製をおもふ京のやどりに
夜はすでに明け放れけり二階より見おろす池に鯉あそぶ見ゆ
山鳩は朝寝すらしもも鳥の最後に鳴きぬ夜は明けたるに

地を設定することは確実なようです。それと共に沖繩の基地要員を相当数、サイパンに移住させよと考えているようです。七二年の沖繩返還までには沖繩の基地は大幅に縮小され、多数の基地労働者が解雇されるでしょう。日本政府としては、これの救済に努力するでしょうが、一部はかつての委任統治領であったサイパン、テニヤンなどへ移住して、米軍基地で働こうとするかもしれない。太平洋の島々には四十万人位の日本人が住んでいたものであって、その大部分は沖繩出身の人々でした。これが戦後、沖繩や本土へ引き揚げてきたのですが、あの楽園のような南海の島々に再び帰りたいと念願している沖繩の人は数方を下りますまい。その意味からも米國はマリアナ諸島の要塞化にもなつて、多数の沖繩の労働者を移住させ易いと云えます。今年の十一月はじめ、サイパン、テニヤンの住民達が住民投票をおこなった結果、七〇%が民族自決、三〇%が米國への帰属を表明したそうです。私としては、小さいながらも南海上の小独立国となり、平和な楽園をきづいてもらいたいと思うのですが、国際間のきびしい対立は、再びマリアナ群島を軍事化しようとしつゝあります。沖繩返還は同時に、かつての日本の領土であったサイパン、テニヤンの基地化という思わぬ副産物ともなつてい

る事実を忘るべきではありません。と同時に七十三年度以後の日本の防衛は米國に依存できないのだという事実を直視してゆくべきで、「安保があれば大丈夫です」などという腰抜け自民党の腐った根性を叩きなおす必要がありそうです。昭和四十四年十一月二十四日 (昭和大学講師)

と
レブケ著「ヒューマニズムの経済学」を読んで思うこと
津下 有道
(上野大学・法工)

家族——「死に対する唯一つの救い」(テニス)——がくずれ去るとともに、それにとりまわつて、「世代」というものに對する感覚が失われて行く。個人はただ単に生きてる社会で方向を見失うばかりではなく、死んだ過去のもの、生きてる現在のもの、そのあとにつづくべきものという時間の系列での位置づけをすることができなくなる。
ここに掲げた文はレブケの「ヒューマニズムの経済学」の中の一節である。
——社会改革・経済改革の基本問題——と副題のついた此の書物の中で彼は西歐社会の崩壊の危機を目的に、その原因たる病根を剔出し、危機克服への努力を訴えている。社会が単なる個人の集合体に墮落してくるとき、人々は生活の根を失っている。近代的企業に於いては到底職人の自らの仕事に対する愛着を生み出すことを望み得ない。人間社会の基本的単位であった家族に於いては「家族のメンバーを一つに結び付ける生産的活

動」はあとかたなく消え去った。「例えば家族のものが力を合わせて庭作りをするとか、お茶の間の燈火のもとでみなが協同して手仕事を」ことがなくなつた。「このような家族においては、教育ということも永遠に討論されながら、ほとんど解決の見込みのない問題にならざるを得ない。両親とか、兄とか姉とかいう家族の成員が、ごく自然な教え手、導き手としての役割を果さなければならぬほど、この仕事は学校に押し付けられるようになる。以前では学校に入れてはじめて人間をつくるのではなしに、人間そのものは一般的に成熟したがたて前提とすることができた。そして、この人間をつくるという任務を、学校は充分に果し得ない。そこに現代の学校問題が生まれてくる。」そして、遂には「子供達が『国家青年団』に組織されて、支配的に国家イデオロギーの方向に訓練をうけ、集団主義の教育原則の祭壇に犠牲にされる。これとやらんで精神生活が間違つて解釈された仕方では民主化されることがある。また一方では、歴史的な、哲学的な文学的な教養が犠牲にされることも、その代りに、技術面の、科学万能の方向をとつた功利主義的な教養が広く行きわたるようになることもある。」レプケがこのように観取した第二次大戦前後の欧州の社会の様相は現在の我国の事態に酷似している。学生の暴走について言うならば、日共系と反日共系を問わず、彼等を破壊の衝動へ追いやるのは、マスコミを利用する煽動者の歪んだ権力意志によるのみならず、彼等自身の中に口を開け

た何かしら満たされない空虚感にその根源があるように思われてならない。しかも、これは何も暴走学生に限つた話ではない。今の日本の家庭の中には「家族の成員を一つに結び付ける生産的活動」などどこにもないと言つて良い。それに代わつてテレビ、ラジオ、映画などのおよそ役に立ちそうもない代替品が幅をきかせている。自分の身近に自然のない都会人はレジャーと称して自然を追いかけ回している。極端なところでは、親は吾が子を物か何かのように「良い学校」へ入れるために奔走する。それ程教師を信用し、それ程我と我が子を愚弄している。社会が自然的有機的な統合を失つて人と人との関係が単に平面的なものとなり、お互いに何ら内面的つながりが無い、例えて言えば砂漠の一粒一粒の砂粒の関係になつた時、社会は崩壊する。レプケは次のように言つている。「本当の共同社会というものは、たんに個人と個人とをむすぶ水平的な一線の上だけにできあがるものではない。それはまさに円天井のようなものであつて、下の部分が上の部分をささげるとともに、同じように上の部分が下の部分と一緒に結びつけている。即ち、共同社会は、いかなる場合にも二次元だけでは成立しない。それは三次元から構成されている。それは必然的にピラミッド型をもち『階層秩序的』でなければならぬ。これは次のような事を言い表わしている。家族を最も単純で、最も純粋な共同体の例として考えれば、家族のメンバーは、単に同じ段階のものにあいだ(例えば両親同士、兄弟姉

妹の間)だけではなく、同時に上から下へ、或は下から上へ向いた結びつき(両親から子供へ、或は逆に子供から両親へ)によつても結ばれている。そしてこの二重の関係が家族という共同体に備わっているが為に、「あのような幸福とあたたかきがあり、それと並んで「ある種の緊張関係が避けられない。」この基本的な社会組成の単位が崩れ去つたとき、冒頭に掲げたレプケの言葉のように、「個人はただ単に生きている社会での方向を見失うばかりでなく、過去と将来に結びついた今の位置付けが出来なくなる。人口の流出に伴う農村の衰微、都市の巨大化などの傾向は益々共同体の分解の速度を速めている。レプケの提唱する社会改革の方向は此の日本の大方の趨勢と逆の方向を向いている。即ち「中央集権化(人口も工業も経済も)の動きを分散化する」というのがその眼目である。そして分散化の最大の目標は、「大都會を犠牲にして、新しい、いくつかの小規模の中心をつくる」ことであると言つている。そうすることによつてのみ、「あたらしい本当の共同体を生み出し、人間が自然な生活をなし得る条件」をつくり出せると言うのである。

「福祉国家」や社会主義社会のバラ色の未来を説く言葉は相変わらず衰えないが、それらが多く、人間をあたかも皮か木材のように心得て、簡単な操作を加えればどうにでも変造することが出来るという科学万能主義の人間観と結び付いている事実は注目されて良い。大切なことは人々を行動に駆り立てる理想を描くことではない。松陰先生の所謂「人の人たる所以」についての透徹した認識を持つことが常に前提とされなければならない。人間についての無知から来る傲慢さが社会を覆いつくそうとするとき、社会は身動きの取れない乾涸びた存在に転落しよう。そのような社会では中央の指令に基いてあらゆる社会の構成・物の生産から言葉の使い方に到るまで「計画通りに」「合理的に」決定されるだろう。こうした破壊への道が、何よりも先づ根本的に誤つたものであることが衆人一致して認められねばならない。そして何よりも今は、此の崩壊の一步手前迄来ている自然と、家を基礎とする人倫の秩序とが蘇生させるための知恵と道義的意志とが呼び起こされねばならない。ペスタロッチは次のように語つてくれている。「近き関係に依つて育成された力は何時も遠き諸関係に対する人間の知恵と力との源泉である。」

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

ゲートと社会主義

桑原 暁

ゲートから、フランスの社会主義者サンシモンの徒の考えについてきかれたエツカーマンは、「彼等の趣意は、各人は各自の幸福の不可欠の条件として、全体(Das Ganze)の幸福のために働くべし、ということらしいです。」と答えた。ゲートは云う、「各人はまず自分の幸福をつくり出さねばならぬ。そうすれば最後に、キつと全体の幸福が生ずるであらう。サンシモンの説は非実際の、実行不可能のように思われる。まるで自然に反し、まるで経験に反し、数千年の事物の推移に反している。各人が個人として、おのれの責務を果し、各人が自分の手近かな職業の範囲内で有能であれば、全体の幸福は自然と生ずると思う。私自身、作家として、大衆(Die Masse)が何を望んでいるか、どうすれば全体のためになるかなど、問うたためしはなかった。たえず自分を聰明にし、自分をよりよくし、自分の人格の内容を高めようとしたりにすぎなかった。」と。彼はさらに

「私の説の要旨は、さしあたって父は家のために、職人は顧客のために、僧侶は相互愛のために気を配れ、そして警察は人の喜びの邪魔をするな、ということだ」と付け加えている。

サンシモンを、フランソワ・フーリエとならべて、空想的社会主義者だ、ときめつけられていることはつとに承知している。しかし、それにケチをつける、いわゆる科学的社会主義を誇るマルキシズムも空想的であることにかわりがない。ゲートはマルキシズムは知らなかったが、もしその説をきいたら、同じように批判したであらう。彼等は「数千年の事物の推移」を、すべて階級闘争の歴史だ、ときめつけ、それを否定した共産社会において、はじめて真の歴史がはじまる、と云っているからである。一言にしていえば、マルキシズム共産主義は不自然なのである。それを実行すれば必ず無理が出来て、自然に戻ろうとする動きをまぬがれることができない。ぼくの感心

するのには、共産社会でその無理をガマンしている、そのガマン強さである。そこではそのガマン強さが最大の美德であるらしい。死ぬよりはマシということか。

それではゲートは「全体」ということを考えなかったか。いな、その逆である。彼は語る、「国家における不幸は、だれもが生活し、享受しようとはしないで、支配しようとするのであり、芸術における不幸は、だれもが作り出されたものを楽しまうとしないので、自分でまた作ろうとすることだ。」これを、さっきの「全体の幸福」にひっかけて云うと、「全体の幸福」を考えると、これは、実は、その名において、全体を支配しようということだ。だから実際においては目前の個々の幸福を祝福することはしないで、それこそが「全体の幸福」を妨げるものだと、ブルジョアの的とか何とか云ってそれを取り上げようとする。

つぎゲートは云う、「さらに全体の中へ入って行こうという真剣さも、全体のためにいさゝか寄与しようという気持もない。人々は何かして自分の名を認めさせよう、世間の眼に、できるだけ自分の存在を明らかにしよう、とばかりしている。……どちらを見ても、自分をえらく見せようとする人ばかりで、全体のために、職務のために、自分を後まわしにするような、誠実な努力はどこにも見当たらない」と嘆いている。これを見ると、さきほどの「私自身、作家として、大衆が何を望んでいるか、どうすれば全体のためになるのかなど問うたためしはない。」と云うのと、くいちがって

いるようだが、実はそうではない。「全体」と云っても二通りある。一つは、千差万別の個々人から抽象された「全体」であり、もう一つは、共存する千差万別の個々人を総括する概念としての「全体」である。この個人と全体とのかわりについてゲートは言う、「人間の持っているいろいろな能力をどれもこれも完成することは望ましいことだが、人間にはそんな力はない。だれでも、実際には独自の存在になるほかにない。しかしすべての者が共存しているとはどういうことか、そのことははっきり把握されねばならない。」

ゲートのこのことをきいてエツカーマンはゲートの「ウィルヘルム・マイスター」のことを思い出した。そして「あの中でも、同じように、すべての人間が総括されて人類(die Menschheit)が出来あがるのであり、われわれはたゞ他人を尊重することを限りにおいてまた尊重されるものであることが語られている。」と感想を加えている。ここでぼくは、かの「我必らずしも聖にあらず彼必らずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ」の聖語を思い起こさざるをえない

一四四・十一・四(都立千歳高校教諭)

ゲートと社会主義	桑原 暁	(1)
独断的教育を排するために	名越二荒	(2)
鹿大封鎖無血解除の記	川井 修	(4)
友におくる歌	長内俊平・青砥宏一	(7)

独断的教育を排するために

——教科書裁判の法廷に立って——

二つの教科書裁判

教科書裁判と言っても、二つある。一つは東京教育大学教授の家永三郎氏が、「新日本史」という教科書を書いて、三十七年に文部省に対し、検定申請をした所不合格になった。氏はこれを修正のうえ出版した。ところが四〇年六月になって、その時の精神的苦痛と、教科書が発行できなかった損害とについて、国を相手として損害請求訴訟を東京地方裁判所に提訴した。これが第一次訴訟と言われ

る。もう一つは四一年になって家永氏は、先の条件付合格本を再び改訂したいと、文部省に申請した。この結果不合格となったので、四二年六月、今度は文部大臣を相手に、教科書検定処分取消請求訴訟を起した。これを第二次訴訟と呼んでいる。

原告側はこの二つの訴訟においていずれも、検定制は憲法及び教育基本法違反であるとし、教科書検定廃止、自由発行、自由使用を主張している。また日本共産党はこの裁判を、戦後三大裁判の一つに取りあげて熱心に取り組み、日教組と日高教左派はあらゆる集会や機関紙を通じて、家永訴訟を勝ちとろうと呼びか

名 越 二 荒 之 助

けている。(マスコミは教科書裁判の判決が来春出るだろうと報じているが、それは第二次訴訟の方で、第一次訴訟の方はまだ訟人訊問も終わっていない)

本会副理事長の川井修治氏(鹿児島大学教授)は今年の七月、私は十一月十四日、どちらも一次訴訟の証人として法廷に立ったのである。

出廷前夜

私の場合、午前十時から十二時までが主訊問。この方は証人が国側弁護人の質問に答える形式で進められるので、予定通りにやれば大してミスなく進められよう。気になるのは午後後の反対訊問である。特に私には「大東亜戦争を見直そう」という著書がある。家永氏には「大平洋戦争」(岩波刊)がある。氏は常に「出廷し、必ず反対訊問に立っている。

氏は恐らく「教育公務員は政治的に中立でなければならぬ」と証人は主張しながら、「大東亜戦争を見直そう」のような戦争讃美論を著わしているではないか」というように指摘するのではないか。それに対して私がもし、「家永氏の『太平洋戦争』は日本の過去の暗黒面だけを強調したサディズム史観ではないか」などと応戦しだすと、論争は拡がって泥

試合になる。これでは私が法廷に立つ意味はなくなってしまう。

誰かが私に「入学試験に臨むようなものですか」と言っていたが、私にはそれどころではなかった。入学試験なら本人が落第すればあきらめもつく。しかし教科書裁判は決して私ごとではないのである。「教科書問題協議会」や「教科書をまもる会」という組織ができて、本会の戸田義雄先輩(東大・国学院大学講師)など、熱心に運動を盛りあげておられる。また本会会員各位からも折にふれて激励を頂いている。どんなことがあっても失敗は許されない。しかも裁判はやり直しがきかないのである。

責任を感じたすとそれが無制限に拡がって、その前夜は巖流島決闘に臨む武蔵の心境がちらついてならなかった。私はひとり九段会館の一室を借りて、反対訊問のあらゆる場合を想定して準備した。しかしいくら準備しても、これで充分ということはない。自己とのたゞかに疲れて、途中で小田村理事長に電話して激励を受けたりした。

法廷と主訊問

法廷は正面の高い所に裁判官が三人、その下に書記官と速記者、そして証人席。証人の左に原告側の弁護士三人と家永氏。証人の右に国側弁護士一人と教科書検定課長。その後文部省視学官、教科書調査官、事務官等が並んでいる。傍聴席は約三十人、そのうち三分の一が本会関係の人々で占められ、あとは原告側

傍聴人と見えた。

最初私が証人として宣誓文を読みはじめると、昨夜の悲壮感はどこかへ消えて緊張感が残った。私は平素の調子ができて、時に傍聴席に爆笑をさそいながら、メモに従って述べていった。主訊問の内容は、「自由」二月号に書くことになっていたので、その方を参照して頂くとして、こゝではあらずに紹介する。

私は、まずイデオロギー色を持った教材のあつかい方について述べた。「公務員は全体の奉仕者」を謳った憲法や、特定の政党や宗教を支持したり、反対することを禁じている教育基本法を引用し、「資本主義と社会主義」、「安保問題と沖繩問題」などは、授業でどう取りあげたらよいかについて、文部省の指導要領に照しながら具体的に授業の展開例を示した。

続いて私は最近の高校の教育現場の实际情况を向けた。高校の教育現場は全共闘系、民青系の高校生組織が全国的規模で作られつゝある。平和な私の郷里岡山県でも、中核派、社学同、ヤングベ平連等新左翼と言われる組織が二十三校に作られ、日共系組織は十数校にあると言われる。これら左翼高校生集団の運動の根柢は、反権力であり、反体制である。当面の運動方針として沖繩奪還、安保粉砕、日帝打倒の三本の柱を打ちたて、いる。私がこのように証詞を示しながら紹介し始めると、原告側弁護人の方から突然被告弁護人に対して「証人の証言は教科書問題とどういふ関係があるのか」と詰

めよった。ちょっとエキサイトする一幕があったが、駒田裁判長の方から「証言の取捨はこちらで行うから続けるように」発言があった。私は続いて現職にある教師集団(日教組・日高教左派)は、現場でどのように教えようとしているのかその例として毎年一万人を集めて行っている教育研究全国集合の内容を紹介していった。三十坪の教室の中で、生徒を洗脳しようという「三十坪闘争」や「文部省の教育課程反対自主編成」の相言葉は、この集合の中から生れたものである。昭和三十九年岡山で行った教研集会で言えば、日本共産党が最も熱心に取り組んでいた。岡山市内にはりめぐらされたポスターやビラは、日共以外は見られなかった。全体が強い反政府反文部省反権力の路線で貫かれ、この時既に一九七〇年をめざして「平和の戦士」を育てようという呼びかけがなされた。今年熊本で行われた第十八回教研集会では、家永三郎氏が記念講演に立ち、全体の流れは岡山教研以上に政治主張が目立った。私はその例として、その時採択された「国民の皆さんに訴える」と題するアピールを紹介して、いちいち批判を加えた。これら教研集会の根柢を流れるものは、反権力反体制であり、当面する運動方針には、神編即時無条件返還、安保廃棄、米帝並びに日本独占打倒の基本路線が謳われている。これは暴力肯定を除いたら、新左翼と呼ばれる高校生集団とその本質を同じくしていると断ずるよりほかない。

高校生に大きな影響を与えつゝある勢力は、これら左翼集団ばかりではない。創価学会も今年八月十五日、日大講堂に二万人を集めて、第二回高校部総会を開いた。その他の新興宗教や既成宗団、民族派学生等、高校生への働きかけは踵を接するばかりである。

まとめ―教科書検定を廃止したら

このように教育界に各種のイデオロギーや宗教教義が混然と入り込もうとするとき、教科書の検定をやめたらどうなるか。歴史の教科書は唯物史観で色どられ「政治経済」の教科書は米日独占打倒、安保放棄の政治色を帯びたものが、当然登場してくる。勿論中には安保賛成色の教科書も出てくるであろう。「倫理社会」の教科書には創価学会史観で色どられたもの、キリスト教史観でまとめられたものなどが出てきて、学校は恐るべき思想宣伝の場となる。

そもそも生徒は、教師が採択した教科書を忌避する自由も能力もない。唯物史観で教育を受けたら、その世界しか知らずに卒業することになってしまう。これでは広く客観的のものを見て健全なる批判能力を育てることはできなくなる。これはそのまゝ、憲法に謳われた「教育を受ける権利」の制限行為となる。

現在行われている文部省の教科書検定には、不満はあるが、基本的には教材を公平に、広く客観的にとりあげる態度を貫いている。独断や主観を排し、国民の最大公約数的な良識を打ち出すべく、あらゆる努力を重ねている。私としては当面現行検定制度の改善を願う方向で支持するよりほかないのである。

反対質問

私は午前中の主訊問で、事実を正確に伝えるために、露骨と思われることまで大胆に発言した。恐らく午後の反対訊問では、厳しいまきかえしが行われるに違いない。私は今までよく高教組の執行部と大論争を重ねてきているので、過去のそれらの体験をすべて動員しようと、心ひそかに手ぐすねひいていた。

いよ／＼反対訊問に移ると、原告側弁護人は極めて低姿勢で紳士的である。高教組幹部のイメージとはすっぴかり違う。しかもこちらが期待したほど肉迫してこないのである。いまも私の脳裡にはつきり残っている二、三の例を紹介しよう。

最初の弁護人は、戦前の教育と戦後の教育についていろいろ質問した後、「証人は主訊問において、教育公務員は文部省の指導要領の線にそって授業しなければならぬ」と強調しておきながら、『大東亜戦争を見直そう』の中には、指導要領が防衛問題を取りあげないとして、その内容を攻撃しているではないか」という趣旨を問うてきた。それに対して私は答えた。

「私がああ文を書いた時は、灘尾前文相が記者会見で防衛問題を教えることを強調した直後であった。世界各国どこでも祖国の防衛のためには尊い身命を捧げることを教えている。戦後の日本がそれに触れなかったのは残念とい

うよりほかない。しかし私はそこに書いた通りに授業している訳ではない。それに祖国の防衛は私ひとりではできないものではない。まず国民みんなが防衛問題に関心を持つことである。そのためには何としても世論喚起が必要である。指導要領に防衛問題を取りあげてほしいという要望を、国民のひとりとして述べた訳である」

次の弁護人は、証人が役員をしている国民文化研究会というのは、どういう団体かと聞いてきた。私は黒上正一郎先生の名前を出して、「(家永氏は本会の桑原暎一氏と一高時代同級生で、黒上先生の警咳に接したことがある由) 聖徳太子の信仰思想と日本文化創業にして研究する会だ」と答えた。そのほか会として研究しているテーマを二、三出すように求められたので、古典研究が精一杯で、特別取りあげるものはないと述べた。また証人は社会主義や安保問題の教え方を例示したが、あの展開例も結局は証人の主観ではないか、と聞いてきた。「私は社会主義や安保に対する私見は別に持っている。しかし教師は私見をもって授業すべきではない。中正な立場で授業すべきだと強調したのである。私の例示のどが主観的で、どのように授業するのが客観的なのか、具体的に指摘して貰いたい。

その指摘がより中正な道にかなうと理解したら、私は謙虚にその意見を受け容れるであろう」

最後の弁護人は、「証人は教師たるもの、イデオロギーには限界があることを知らねばならないと強調したが、それは

「どういふことか」と聞いてきた。

「イデオロギーでものを見れば、どのようにでも見ることが出来る。例えばこの法廷でも、きれいな場所ばかりを取りあげて説明すれば、すばらしい部屋という立論はなりたつ。またきたない部分ばかりを集めて強調すれば、こんななよれた部屋はないということも出来る。それと同じように安保条約でも、防衛費が安くてすむ、経済繁栄に寄与できるなどというように、よい面ばかりを強調すれば、こんなよい条約はないことになる。これと反対に、アメリカの傭兵になる、基地公害がある極東条約が不備であるなど、悪い面ばかりを集めて理論を構成すれば、こんな悪い条約はないように印象づけることも出来る。しかし、言っておくが、個人の政治的意見には中立はない。これはレーニンや毛沢東の言っている通りである。教師にも個人としては政治的意見や宗教的信条があるろうが、それだけを教えるは教育公務員としての責任は果せない。教師はイデオロギーというものの性質をよく知った上で、授業にあたらなければならぬ。このことを強調したのである」

以上で再反論もなく、家永氏からの訊問もなく、反対訊問は三十分ばかりで終わってしまった。私が最も強調した日教組教研集会については、全然訊問はなかった。その夜は本会の先輩諸氏に招かれて心から慰勞して頂き、永い間の緊張からやっと解放されたのである。

(岡山県立学園高等教師)

鹿大封鎖無血解除の記

川井修治

(鹿兒島大学法文学部教授)

一、無法のまかり通る学園の惨状

自分達の要求が通らないうと、学内施設の一部または全部を封鎖することにより大学運営に重大な支障を与え、この封鎖を質草にしてごり押しに要求を貫徹しようとするのが、この頃の暴力学生の常套手段となつて来た。鹿兒島大学においても、御多分にもれず、評議会が「団交」を拒否したことを理由に、全共闘(革マル派)総勢五十名程度)が大学本部を封鎖したのは、この九月十七日のことである。この日の状況は次のようであったと言ふ。十七日午後六時頃(事務官の退庁直後)、十数名の全共闘学生が本部に乱入、宿直員をとり囲んでマスターキイを渡せ、と迫つたのである。くだんの宿直員は最初の程は抗弁したけれども、何せ多勢に無勢、強奪同様の形でキイを奪われ館外に押し出されてしまった。キイを奪つた彼等は各室を解放、ロッカーやスチール製の机を引き出して出入口に積み上げ、後でそれに穴をあけて針金で縛着嚴重なバリケードをきづいてしまった。武器としては、コンクリートブロックを四階の屋上に集積(まともに当れば重傷をうける)、生協から牛乳ビン二百本を奪ひ、多数の角材や青竹を館内に搬入した。彼等は「学園を革命の砦に化した」とイキがったことであろうが、その仕業たるや、無法者のそれと何等異なるところ

はない。

あけて十八日、出勤して来た本部事務官達(男子だけでも約百名)は変りはてた自分達の職場の状況に驚き且つ憤激した。果然、「職場を返せ」という自然発生的な声がわき上り、一部の勇敢な事務官達はバリケードに手をかけ、これを撤去しようとした。内部に居た全共闘は、牛乳ビンを投げつけ消火器の水をあびせて妨害し、ために一人は顔面に軽傷、今一人は消火器の薬液をあびて咽喉部に傷害を受けた程であった。騒然たる情勢に驚いた町野学長は、マイクでもつて双方の直接行動の停止を命令した。こうなつては事務官達は手を引かざるを得ない。かくしてチャンスは失なわれた。秩序に忠実な側は隠忍を余儀なくされ、秩序を無視する無法者の側は傲然として公共建造物の中に籠居する、という奇怪な事態が、二ヶ月近くも続くことになつたのである。

一口に本部封鎖というが、これは大学にとつては運営の中核機能が麻痺することを意味する。学部封鎖ではないので、講義に直接支障はないが、重要書類が押えられたままであるので、諸手続(教職員員の移動や俸給の計算から共済組合の仕事や奨学金の支給に至るまで)は停滞、建設作業は中断、業者への支払は中止、電話も杜絶(交換室が本部内にあるから)……という具合に、影響するところは絶大である。まして退庁後不意に封鎖されたのであるからたまらない。事務官の私物や金品はそのままであり、某課長の如きは出張中であつたため十七日支給の俸給を入手することができなくなつた。一月分の給料はおあつげといふとんだ悲劇をすら生んだのが、この封鎖の産物であつた。このような状態、学園の中に暴力がまかり通り、ために大学全体が甚しい迷惑を蒙るような状態を、無為のままに遷延させることが、いかに大きい罪悪であることか、誰の目にも明らかである。大学執行部が、勇断をもつてこれら一にぎりの無法者を制圧・排除し、学園の秩序を確立することが何よりも急務であることは、言わずとも明らかである。

二、呆れはてた大学側の弱腰

ところが驚く勿れ、大学執行部(学長・評議会)が示した対策は、何と「団交再開」であり、そのための予備交渉を開始するといふことであつた。「団交」という言葉そのものが、本来労働組合の用語で、学園には無縁の用語であるが、ここではいきさつ上使うことにする。癪にさわるけれども……。一体、全共闘が「大学立法反対の具体的実行」を議題として団交を要求して来たのに対し、評議会が「そのような重大問題について学内の意見を集約する時間的余裕がない」ことを理由にこれを拒否したのは、ついでこの間のことではなかつたか(これが彼等の封鎖の口実となつた)。それを一週間もたないうちに、態度を百八十度

転換、一旦拒否した団交を今度は受諾するというのは、どうしたことなのである。僅か一週間のうちに、学内意見集約の余裕ができたというのであろうか——そんなバカな筈はない（この一週間は封鎖とそれにつづく混乱で、大学立法などを論じているヒマはなかった）。それは本部封鎖を質草にして迫って来る全共闘に対し、評議会があっさり屈伏してしま

った、と言うよりほかに説明の様がない。相手の弱点を握って、威迫的に要求をつきつけて来る全共闘のペースに、うまうまと乗せられてしまった、と言うよりはかに理田の求め様がない。こんなへっぴり腰で、言い換えれば、独善と狂信に盲いたまま理も非もなく押しつけて来る全共闘に対し、「話し合い」だの「説得」だのが通用すると思っている底抜けの樂觀に支配されている限り、事態の早期収拾など、到底見込みはないのである。

果せるかな、団交再開のための予備交渉で、評議会は全共闘にいい様にあしらわれた。例えば、団交再開の条件として彼等は、「封鎖を攻撃する事務官の代表者を処分せよ」とか、「封鎖に関する件で我々を処分しないこと」とか、まるで身勝手な言い分をつきつきに出してくる。これを交渉委員が評議会にとりつき熱議の未解答を出し、また全共闘のところへ——裏扉を少し開いてもらって——持って行く。教授会には学部選出の評議員がその都度でんまつを報告、ああでもない、こうでもないの論議が延々と続けられる。かと思うと、十月中旬から十日間予備交渉は一時中止、と一方的に通告

して来る。何のことはない、一〇・二一の国際反戦デーに封鎖学生の主力が上京するから、の話である。何しろ、交渉委員の中になれつきとした全共闘のシンパがいるのであるから、実は交渉も何もあつたものではないのである。こうして実に一月半——その間町野学長辞任の中間劇さえも加わる——、まるで一握りの全共闘に引きずられるままに日を重ね、十月も終り近くなつた。

この頃は毎日が憂鬱であつた。二日置きくらい（時には連日）に開かれる教授会では、全共闘の暴状が報告され、どうしようどうしようの小田原評定のむし返しである。私は当初から、あの過激イデオロギーに盲いた全共闘の頭を撫でようとする程、つけ上るばかりであること、団交という非人間的な場で大学改革を議すること程、没理性的なこととはな

いこと、当局は彼等の不法不当を厳しく糾弾する姿勢を示すこと（でなければ五千三百の学生、千八百の教職員は浮かばれない）、必要ある場合には、合法的な力（警察力）を用いる決意を固めること……を力説したが、私の意見は「川井さんの強硬論」というわけで（間々同趣旨の発言もあつたが）、とても教授会の主流となる見込はなかつた。一体こういう場では、「あくまで話し合いで行くべきだ」とか「大学には力は無縁である」とかいうセンチメンタルな発言が、「教育的配慮」というレッテルの下に幅をきかせ、またその辺りに口裏を合わせておく方が最も無難なのである。そんな生ぬるいことではどうにもならない、と思っ

ている人も、発言するにはかなりの勇氣が要るし、従って散発的にしか出て来ないのが常である。学外の知人から、「鹿大はどうなるのですか？」とたずねられる度に、「いや、全くどうにもなりませんよ」と答えねばならない自分に、何とも恥ずかしい気がし、無力感に責められてならなかつた。

三、湧き上がる「自力解除」の気運

そうした頃のある日のことである。研究室の廊下でふと法学科のG教授によびとめられた。この人は思想的には私と反対の立場にある人なので、意外に思いながら話を聞いてみると、次のように言う。「自分は刑法の担当で法の厳正な執行を教育する立場にあるが、本部封鎖というような犯罪行為（不退去罪・器物破損罪・公文書毀棄罪・傷害罪・強盗罪等）が、教育的配慮の名の下に公然罷り通っている現状は、全く心外に堪えな

い。学問と現実処理との矛盾を痛感させられている。君の平素からの発言には、思想的立場はとも角、この件に関しては、其鳴を禁じ得ない。自分は、警察力要請は最後の手段としてあり得るとは考えるが、その前に、自力救済としての自主解除を断行するのが第一だと思う。法学科でも大体はこの考え方に同調する線が出つつあるが、君の協力を得たい」と。その内容はまことに重大、その態度はまことに真剣である。立話も何だからと研究室に招き入れ、私も言った。「あなたが本気でやられるのであれば、私も徹底的に協力しよう。ただこの意見をいきなり教授会に提案したのでは、あの生ぬるい

日和見的意见が大勢を占める現状から、とても最終的決定に至り得ないばかりか、とんだ邪魔の入る公算が多い。それよりも自力解除に賛同する教官を全学部に求め、ある程度の有志教官の数を背景にして、直接に学長代行・評議会の決断を促してはどうであらうか。この方法は一種の非常手段ではあるけれども、形式にこだわって会議会議のつみ重ねをやっていただけでは、とても効果のある実行は期し得られまい。先ず是非公開で有志教官の賛同署名を得ることから着手すべきであらう」と。かくして忽ちの中に行動方針は一決、直ちに有志教官の糾合と署名運動が隠密裡に開始された。

反応は上々であつた。平素は発言しない教官も、これと見当をつけて一対一で話を切り出すと、自分もかねてからそう思っていたと本心を吐露し、署名に応じられる事例が相ついだ。当初は五十名程度の賛同署名が集まれば……と目算を立てていたが、僅か一週間のうちに全学部を通じて百二十六名（全教官の五分の一強）の署名票が集つたのは、望外の喜びであつた。もっとこまめに当れば、半分以上にすることもそう困難ではない、とも考えられた。だが、署名はあく迄手段にすぎず、目的は封鎖解除の実行であり、しかも事は急を要する。十一月八日正午をもって署名は一応打ち切り、その結果をたずさえて「鹿大正常化教官協議会」（署名運動のためにつけた団体名）の代表が学長代行に面会し、意中を訴えることになつた。

とは言え、その間の苦心は実に並々

らぬものがあつた。見当をつけた相手が研究室でつかまらぬ時は、手わけして自宅を訪問した。協議会の主要メンバーは三日をあけず会合を持ち、方策を話し合つた。日曜日の早朝を期して晩の急襲をかける、という案も出た。いや白昼公然と封鎖解除を呼びかけ、その後で教官代表が堂々と入館する方がいい、という案も出た。いづれにせよ、矢面に立つのは我々自身であり、しかも相当な危険が予想される場面においてである。けれども誰かがバリケードに手をかけない限り、解除の実行はできないのであり、その「誰か」の役目は、当然の責任として我々教官が引き受けねばならない、という気持は、すべてのメンバーに共通のものであつた。私自身、事を敢て行う以上、怪我はおろか、生命の危険すら覚悟しなければならぬ、と本気で考えたものである。

勿論、教官だけで解除を断行するのはとても不可能である。教官協議会を中心に、有志の事務官や学生を出来るだけ多く結集することが、不可欠の要件である。事務官の方は、前記の九月十八日の衝突以来「職場奪還」気構えに燃えており、直ちに呼応する態勢をとつてくれた。学生の中にも、学生協議会（主力メンバーは夏の阿蘇合宿教室に参加）を中心に「封鎖解除実行委員会」が結成され学内に封鎖解除の気運をより上げると共に、大々的な署名運動（当日までに千二百の署名を集めた）を展開中であつた。十一月の初旬には、かくして教官・事務官・学生有志をつなぐ解除決行の気運が

鬱然としたもり上がりを見せ、時刻を待つばかりとなつた。

四、無血解除、成功!!

八日の学長代行との会談では、代行は教官の間に封鎖解除の真剣な動きが露頭して来たことは有難く思うと冒頭した後、解除の呼びかけは何時始めても結構であり、場合によっては自分もマイクをとつてもよい。唯、解除の実行には危険を伴うことでもあるし、よ程慎重にやつてもらいたい。評議会で現在各学部集會↓全学集會のつみ上げによつて、解除を求めた声を全学的に喚起しようという構想を進めているので、それとの兼ね合いを考慮してほしい、との意向を示された。全学集會などと言つて、数千人の教官や学生を集めて言いたい放題を言わせてみて、果して代行の期待されるような結論が出るかどうかは甚しく疑問であるし、仮にそのような結論が出たにしても、口で言うだけでは何にもならない。結局誰かが危険を覚悟でバリケードに手をかけなくては、封鎖は解けはしない、という反論が口まで出かかつたけれども我々としては代行の意向を無視するわけには行かぬ。それではと敢ず、解除決行を伴わない呼びかけだけを行なつてみよう、ということ、その期日を十三日に予定した（十五日以降、佐藤諷米反対のために主力が上京する形勢があつたので、その前に実施）。当日は呼びかけたの計画であるので、事務官や学生達にも決して直接行動には出ない、という確約をとつつけたのは言う迄もない。

十三日午後三時過ぎから、いよいよ封鎖解除の呼びかけが実行に移された。「中村学長代行の所信表明に従い、直ちに本部封鎖を解いて退去しなさい」「本部封鎖により、全学がいかに大きい迷惑を蒙っているか、反省しなさい」と大書した垂幕が掲げられ、そのまん中に強力マイクがセットされた。その廻りに教官・事務官・学生有志が三百人程勢揃いしている。どうしたわけか、四階建ての本部の中には人影も見えず森閑として静まり返っている。私は進行係のような役を引き受けさせられていたので、先ず「今日のこころみは解除決行を伴わない呼びかけだけであり、危険性もあることだし、みだりに本部の建物に近づかないように……厳重に我々教官協議会の統制に従つてほしい」と前置きし、最初のアピールに入った。その要旨は、本部封鎖は法律的に言つても、道義的に言つても、不法不当の行為であること、そのために全学が甚大な迷惑を蒙っていること、全共闘の諸君に真に鹿大を憂する心があるならば、直ちに封鎖を解くべきであること……で、もの四・五分を要したであろうか。

ところが、このアピールの最中に、本部の窓に数名の人影が見えだした。てつきり全共闘の連中が反撃に出るのだろうかと思つていると、どうも様子がちがう。それらの人影は次々に窓を開けて手を大きく振り「誰もいないぞ〜」と合図をしているではないか。玄関の上に掲げられていた赤旗がへし折られて、ひらひらと舞い落ちてくる。あれは味方の学生達なのだ!! 廻りの事務官や学生達も

「入ろう〜」とざわめき出し、早くも何人かは玄関の方へ走り寄つて行く。アピールを終つた私も、マイクを次の番のG教授に渡しておくや、一散に玄関わきの窓の所に駆け寄つた。そして中から手を振っている学生に怒鳴るように声をかけた。

「中はどうなっているんだ。全共闘はいないのか?……」

「いません。誰もいません。」

「二階や三階はどうなんだ?……」

「二階や三階にも誰もいません。完全に空屋です」

この答を聞いた時、私の胸の中に「よし、やるんだ」という気持がむくむくと頭をもたげて来た。この瞬間に私は、この天から降つてきたようなチャンスに断然乗すべきだという決心が全身にみなぎつた。この時身体中ががぁーと熱くなつた感覚を、私は今もあざやかに記憶している。

マイクの所に走り帰つた私は、G教授の袖をひいて「状況が変りました。アピールを早く切り上げて下さい」と囁いた。G教授は専門の立場から、本部封鎖が刑法上の犯罪に当ることを説明されていたが、すぐと打ち切つてマイクを私に渡された。私は言った。「今明らかになつたところでは、本部の中に全共闘は一人も居ないということである。我々は呼びかけのためにここに集つたのであるが呼びかける相手がいないのでは、これ以上続けるのは意味をなさない。呼びかけはこれで終るべきだと私は判断する。そこで、我々の前に横たわっているのは、

鼠一匹いない空屋である。この空屋は大学のものであり、我々のものである。我々が我々のものである空屋に入って行くのに、誰が文句をつけられよう。一つ我々教官を先頭に、皆で入ってみようではないか。……」。これが合図となった。ドッと拍手と喚声が湧き、三百人程のものが一せいに本館の中になだれ入ったのである。

後で知ったことであるが、全共闘の連中は全く油断し切っていて、本当に本館内には人っ子一人居なかつたのである。彼等は教官のアピールなんか、何程のこととはあるまいと多寡をくり、別の場所ですて新たな教養部封鎖のための作戦会議をやっていたのだ、と言う。味方の学生が入ったのも、まさに偶然のなせる業であつた。三名程の工学部の学生が呼びかけに加わるためにやって来たところ、裏側の窓があいているのに気がついた。一体どんなになっているのか偵察でもしてやろう、もし全共闘がゲバ棒などで襲いかかって来たら、逃げ出せばよいぐらいの気持ちで、窓から入ってみた。ところが豈はからんや、誰も居ない。そこで「やってしまえ！」というわけで、早速工学部から道具と人数を呼び集め、窓から合図をした、というのである。工学部だから道具には事欠かない。ペンチや鉄線鉋や金切り鋸……お手のものの作業振りで、

「石やピンが飛んでくるかも知れないから、お互にくっつき合わず、適当な間隔をとるように……」などと注意をして、とんだ茶番を演じていたような恰好である。それにしても、幸運な偶然が重なったものである。おかげで解除そのものは何等の力を要することもなく、何等の犠牲を出すこともなく、完全に無血の裡に二十分程で完了したのであつた。

五、本部防衛の見事なたたかいぶり

解放されたばかりの本館内に入ってみると、内部は目もあてられない程の乱脈ぶりである。机椅子は部屋の片隅にころがっており、書類は床に散乱している。廊下には角材の束やピンが置かれてあり、その中にはアンモニアの薬液がこぼれられているものもある。三階の廊下には焚火でもしたらしく、ビニールタオルの床が黒く焦げており、便所には多数のセックス器具が放置されていたとか……。安田講堂の荒廃ぶりはかねてから聞かされていたが、彼等封鎖学生はかくも無恥無慚なのかと、憤りを通りこえて情なくなつてしまふ。そうした乱状も、久々に自分達の職場に帰って喜々満面の本部事務官達の手により、甲斐々々しく片付けられて行く。機動隊導入による攻防戦を経なかったため、被害を最少限度に止め得たと、自ら慰めたい心境が湧く。

青砥君への便りのはしに
愛媛西条 長内 俊平
久しくも願ひでありし友の住む出雲路
つひに訪ふを得たりき
行く車峠を越えて山陰に入りゆくま
まに心ときめく
山深くわが乗る車のたどるらし紅葉の
色の美しき増しき
深みゆく秋のしじまに並みたてる紅葉
の色の美しきかな
宮柱太敷くとふことばさながらに出雲
の大社の構へ杜なる
友の姿駅舎にありてにこやかにほほ笑
みたりわがゆくさきに
言の葉に出して言はねど友の肩抱け
互に心は通ひぬ
友と会ひしその喜にまさらむか友が常
いふ母堂に会ひ得て
この酒はうましうましといくたびも賞
めつつ飲みほす部下の嬉しむ
わがことの賞めらるること心持しては
めつつよるこぶ言葉ききさるつ
「正月みたいだ」と一人の部下のもら
したるそのことにはなべてつくせり
夜遅く訪れし故にみ子達の頭なでられ
ざりきと申ししてよ
奥さんが土産に賜ひしと珊瑚石何か
尊く神に供へぬ
忙しきなりはひあらむをわがためにさ

きて二日を尽させ給ひぬ
帰りにて玄関入れれば吾子のよき声飛び
出しぬ妻もつづきて
一夜とは思はれざりき遠くゆきて友を
訪ねしこれの旅程は
友と会ひし一夜のうれしさあたたかく
残りあるごと筆とる今も
友と歩みし松江の空青深く柔げる陽
ざしのみちし小道よ
かへし
島根玉造 青砥 宏一
わが里を訪ねて伊予に帰りと思ふた
ちまち便りとききぬ
四国なるみ山の木もて漉きにたる和紙
に寄せ書うたかきてあり
みづくきのあともしるけく書きつけし
うたよみあげぬ声も高らに
ふたたびも三度もよめば君のなきけ通
ひくるなり我等の契りよ
けはしかる顔したらむと思ひしに福々
し顔と妻は語りぬ
石鎚のふもとゆ来りし君のうたその高
きよりしらべ高しむ
君とともに訪ね来ませし皆様によろし
くことづて伝へ給へや
今頃は家居にありて奥様とみ子らと語
り居まきかと思ふ
君のうたいただきすぐに四首つくりこ
よみ六つくり君に送らむ
の戦いなのだ。何が何でも再突入しよう
という不逞な意志に対し、学園のため、
正義のために自分達の手で本部を守り抜
くかという清冽な意志が、どれ程上廻る
か問題なのだ。しかも解除側の学生諸
君は見事にこの問いに答えてくれた。身
体をはつてもみ合いにおいて、はた

またマイク合戦においても、一步もひけをとらず、これらの学生諸君は立派にその任務を果たされた。人垣の先頭に立って、襲いかかる全共闘に面と向い「帰れ、帰れ」と連呼してこれを退けたM君O君T君H君等、二時間近くもマイクを握りつづけて防衛側の進軍ラッパを吹きならす役目を果たしたK君(霧島合宿教室で、「北辰斜め」の冠頭言をやった彼の美声を記憶しておられるだろう)、彼等に腕をつかまれると「これは何だ、君達は暴力団なのか」と泰然としてきめつけたJ君……これらの諸君の水際立った活躍ぶりを書き記すには、何頁あっても足りないくらいである。私もマイクをとって「本部の解放は既に終わったのだ。これを再封鎖しようとする暴挙は許されぬ。全共闘の諸君は、無用のトラブルを避けるため、直ちにこの場を退去しなさい」と、繰返し／＼叫びつづけた。夕闇迫る頃、さしもの全共闘も力つきて、ついにこの場を引き上げた。本部の解放と防衛は、かくして見事に達成されたのである。

六、道連れ、大学正常化
 五十七日ぶりに本部封鎖が解け、我が鹿大にも一陽來復の春がめぐり来ったと私達は素朴に喜んだ。学内を歩いていると、見知らぬ事務官や教官までが感謝の言葉を浴びせてくれ、私達のささやかな努力が今こそ報いられたと、ひそかに満ち足りた思いであった。全国で稀な例だと文部省も驚いていたという。ところが大学という所は奇妙な所である。革マルや民青は「右翼による暴力的解除は容認できない」とアジリ出した。何をか右翼としてひたすら学園の正常化を目ざして蹴起しただけで、そこに何等のイデオロギーも介在していない。何をか暴力という力が必要としなかったし、暴力的衝突が生じたのは、全共闘がゲバ棒をもっておそいかかったからではなかったか。やつかみ半分のセクトの宣伝は度外視するとしても、評議会が「大学の正式機関の決定をまたず、封鎖解除の直接行動をとるに到つたことは遺憾である」と表明するに至つては、どうしたことであろう。呆れてものが言えないとはこの事だ。甚しきは、川井(学協)と本部事務官とが組んでやった陰謀だ、というような流説すら一部でふりまかれた。協議会の教官も、また事務官も、憤慨し失望した。そんなことを言うなら、本部をもう一度全共闘の手に渡して、評議会構想とやらを実行してみるがいい、という声すらあげられた。

この中で内紛をおこすのも不本意なので、評議会に出席して当日の事情を説明することにした。私は、十三日の解除実行はあらかじめ計画されたものではなく、たまたま本部が空屋であつたという好機に乗り、突進の決断でもって実行に踏み切つたものであること、その決断が評議会構想と逸脱したことは認めなければならない。あつたときと信ずること、今回の解除はどの力も必要としなかつたという点で、「自力解除」と言うには当らず、むしろ「自然解除」と称する方が適切であること、そしてその結果は鹿大のために絶大のプラスを生んでいると信ずること……を、事細かに説明し、同席した三教官もそれぞれに同意旨のことを裏付けてくれた。この説明が、やがて全学に「鹿大広報」をもって周知されるならば、前記の根のない流説も消え去って行くことであろう。

それにして、大学正常化の道はまだまだ遠いことが痛感させられる。正常化を完遂するには、大学の持つている根深い欠陥の幾つかが克服されねばならぬ。今回の事件に関して曝露された欠陥の第一は、評議会―教授会で構成されている合議制の非能率と無決断である。平和時においては合議制の妙味も發揮されようが、非常時には全く用をなさないことが今回程痛感させられたことはない。五十七日から、あれだけ会議を重ねておきながら、その効果は僅か三十分間の決断と実行にはるかに及ばないではないか。執行力の強化・権限集中の問題を、真剣に考慮すべき時期に達したと思ふ。第二に、合議制に参画する教官自身が、あまりにも抽象論のみ多く、現実処理のセンスを殆んど持ち合わせていない、という点である。何事によらず、論理と手続きが完璧になっていないと、行動に出られない不可思議な思考の持主があまりにも多い。とどのつまりは、「教育的配慮」だの「説得による平和的解除」だのという安易な言葉に逃避してしまふのが落ちである(そう言う手合に限って説得などは一つも実行しないし、こんな口先ばかりの人間では全共闘の狂信の前に無力であるに決つている)。第三に、教官の内部に(時には評議員の要職に)全共闘や民青のシンパが居て、どうにもならないことである。会議の情報などはすくなく漏れまわし、彼等のふりまく「柔らかなムード」(結局全共闘の言いつと妥協することを意味する)が、どれだけ事態の収拾を困難にしたことか；大学正常化はこのあたりから手をつけなければ、いかに制度改革を架空に論じてみても、実効はさらさらないものと思われ。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

昭和四十五年元日発表の

今上御歌を拝誦して

廣 瀬 誠

あらたまの年をむかへて人々のこゑにぎはしきにひ宮の庭

年賀の民草が満ちみちて、にぎやかに
ざわめく新宮殿の庭。それを心からお喜
びになつての御作である。ニギハシキニ
ヒミヤノニハと「ニ」音の反覆、さらに
「ニ」を含めて八回もくりかへされる「
音の美しいひびき。その玉と玉とが揺れ
あひ鳴りあふやうな音調の中に、喜びの
お心持があふれてゐる。

なほ、戦後の今上御歌で枕詞を使用さ
れたのは、これははじめてである。年も
新しく、宮殿も新しい。そこに「あらた
まの」の枕詞が実感を伴つて生きてゐ
る。ちなみに、戦前にも枕詞の御使用は
ただ一例あるだけで、やはり「あらたま
の年を迎へて……」と大正十三年に詠ぜ
られてゐる。

繩ヶ池にて(富山)

水きよき池のほとりにわがゆめのかなひたるかもみずばし
ようさく

山中の池辺にひっそりと咲く水芭蕉の
清らかな花をはじめて御覧になつて、

「長い間、見たい見たいと思つてゐた念
願がかなつた、夢がかなつた」と喜ばれ

感動され、詠嘆されたのである。「わが
ゆめのかなびたるかも」とは、まことに
清純なお喜びの深々と息づいてゐる御表
現である。天皇みづから御自身に對して
ささやくやうに歌つて居られる。「わが
ゆめのかなひたるかも」「みずばしよ
うさく」の転置もいかにも自然で美しい。
まことに感銘深き御歌である。

なほ今上御歌は厳密に歴史的仮名遣を
お用ひであるが、この植物名に限つてミ
ズバシヨウと新仮名遣を使用した。
・(漢字なら水芭蕉、史的仮名遣ならばミ
ヅバセヲ)これは植物学界の申し合せに
準拠されたのもあらうか。生物学者と
しての陛下の御配慮をおしのび申上げる
のである。

仁別森林公園にて(秋田)

下草のしげれる森に年へたる直き姿の秋田杉を見つ

前年、秋田の植樹祭への行幸は地震の
ためお取止めになつて、その折、「湖
ながめえならずと聞く大森に杉を植ゑむ
と思ひしものを」と残念さうに詠嘆され
た。その秋田県へ行幸され、杉の老樹が
自然のままの姿で茂り立つさまをつくづ
くと御覧になつたのである。とくにその

がある。樹木の直き姿を詠ぜられた例と
しては昭和三十七年に「からまつ林直き
幹」の御作がある。

「直き姿」に感銘せられ、「見つ」と強
く結んで居られるのが印象的である。
なほ杉の品種名を詠み入れられた例と
しては昭和二十六年に「吉野杉」の御作

古代日本人は「明き清き直き心」とい
ふ語を愛用したが、「あらたまの」は
「明」、「水きよき」は「清」、そして
この一首は「直」である。明き鏡、清き
玉、直き剣は古來皇位の象徴であつた。
この三首が並べられたのは偶然かもしれ
ないが、私はそこに偶然にして偶然なら
ざるものを感じるのである。

長崎県の国民体育大会

長崎の県の山と海の辺に若人きそふ秋深みつつ

陛下には昨年五月二十六日頼成山での
植樹行事が終つてから、この繩ヶ池へ行
幸されたのであるが、その植樹行事につ
いては「頼成もみどりの岡になれかしと
杉うゑにけり人々とともに」と詠まれ、
この一首を六月富山県へ下賜された。ど
ちらかといへば類型的な御作である。毎
年植樹祭ごとに各地で同じやうな御歌を
お作りである。しかしそこに、何のてら
ひもなく、「心をこめた平凡な挨拶」を
くりかへされる、陛下の真卒で誠実な御
人柄がにじみ出でゐると思ふのである。
ちなみに、皇后の御歌は「ふりそそぐ
小雨もやみて頼成に杉の若木をうゑにけ
るかな」とやさしく詠ぜられてゐる。

ゆく秋の平戸の島にわたりきて若人たちの角力見にけり
 久しくも五島を觀んと思ひるしがつひにけふわたる波光る
 灘を

長崎県の複雑に入り組んだ山と海。その中で若人は競技をくりひろげてゐる。肉眼で見たまの直写ではなく、競技行事全体を地理的大観の中に位置づけて把握されてゐる。地図を拡げて行事計画をきかれた上での御作といった趣がある。天ノ浮橋から国土を眼下に見おろしての御作とでもいふべき広大さがある。

同じやうな傾向は昭和四十二年埼玉國体の折の「川もあり山もそびゆる広き野のこの武蔵野に若人きそふ」の一首にも拝されたが、いかにも天皇の御歌たるにふさはしく、注目すべき御詠風である。

第二首目。秋深き離島で、醇朴な若者たちの角力を見て興ぜられたのである。

「ひさしくも見ざりし相撲ひとびと手をたたきつつ見るがうれしき」と詠まれたが、田舎の若者の角力の素朴さをひとしほ、めでられたのであらう。天皇は技術本位の取り方を好まれず、真正面からぶつかりあふ全力的な取り方を喜ばれると洩れ承はつてゐる。

第三首目。長い念願であつた五島列島へ、波のかがやく灘をわたつて渡島されただのである。「思ひぬしが」「つひにけふわたる」といふ、曲折した、字余りの表現に、御心の躍動のほどを知るのである。「波光る灘を」そのきらめく波の揺

らめきが目の前にもりあがつてくるやうである。

同じく宿願を果された感激の御歌であるが、水芭蕉の歌の方はみづみづしく、ひそやかである。内にこもつて息づいてゐる。五島の歌の方は力強く躍動的である。外に向つて呼吸してゐる。昭和二十四年「潮のひく岩間藻の中石の downstream をとる夏の日ざかり」の絶唱をものされた、あの強烈な光線と潮波の揺動をふと思ひ出すのである。この活気みなぎる御作を拝誦して、御年すでに七十才に近くなられた陛下が、かくも若々しく健康でいらつしやることを知り、私は心から感悦するのである。(四五・一・一稿)

△富山県立図書館蔵

波に日の出

脇山良雄

掛軸の山水画を見るときは下から上へと見てゆくものと云う。一番下の方には釣糸をたれた軽舟が浮んでゐる、風そよぐ葦、岸べの小みちをゆけば橋上の老翁は杖をついて友を訪ねるものらしい。奇岩青苔の坂道、老樹のかけをくゞつて登る、中腹には行ひすました清居があつて書齋の窓から、君子が読書につかれた眼差しを対岸の瀧に向けてゐる。霧こむる

谷間の幽邃から、目路を上げれば、裏山の山頂は突兀、その又後方、山は又山を呼んで重疊、連峯の容態いよゝ、奇高なのが次第にかすんで天涯の中に消えてゆく、大陸の蒼穹はたゞ溟溟として悠遠夢幻の世界に引き込んでゆく。

中一尺高さ三尺ばかりの小画面によく雄大の氣宇、脱俗の氣韻を表現する山水画の境地は、まさに東洋美術の独壇場であつて西洋画には之をもとむべくもない。本邦はよく之を伝へて更に独自の発達をなしたので山水の名画或は名手妙しとしない。然し山水画は元来これ支那大陸の景の写生に発してゐるが故に描かるゝ画面の規模は必然的に、彼が大陸的に雄大なのに反し我國のは島国的でスケールが小さくなると云う差異が出てくるのも無理はない。然らば我國の山水画の図柄は所詮小規模であつて中国の山水画の雄大大陸のなるに圧倒されるより外ないのであらうか。かゝる観点から想ひをめぐらして見ると我々はこゝに一つの面白い現象を発見する。

「富士の山」である。この山の標高必しも世界第何位であることを要しない。その山容の清純にして優雅なること支那はおろか世界のいつこにもその比を見ることができない。裾野から山頂にいたる二つの曲線を延長して天空に至れば、想ひは溟溟悠久の境に遊んで魂は自ら清浄化される概がある。この気品この雄大、豈に中国風光の追隨を許すものではない。

士の山」この絵を大家の画伯も描けば三才の童子も描くではないか。之を描かない日本人は一人もゐないであらうと云うその現象である。国民画或は民族画とも云うのであらうか。山形は至つて簡單或は之に雲を配し、三保の松原を配し帆かけ舟を走らせて楽しむ。精粗巧拙、老若男女、國民一人のこらず描く親愛きわまりなき風光「富士の山」は、日本人固有の画面である。日本人のテストパターンとも云はうか。

むらぎもの心のはるゝ朝かなはるかに富士の山も見えつ、(明治天皇御製)

富士の山に次いで今一つの発見「波に日の出」である。潮の香たゞよう太平洋のあなたから爛々たる太陽が昇つて来る。人類が絵に描くことのできる写景として之より雄大な画面は他にあり得ない筈である。大陸の奇岩突兀、巖々の連山も、波に日の出の前には規模の宏壯を誇るわけにはいかない。開放的な親しみ、明快強烈しかも崇高莊嚴の「波に日の出」、我々は今や島國にはあらずして大洋洋國であるとの自負と法悦をおぼえる。

而してこの絵も亦日本人たるもの老練の画伯も描けば童子も描くではないか。他國にこの例ありや否や——信仰的な意味に於て太陽を描き拜するものは他國にもその例はある。然し美的觀賞の対象として、そして現実の風光の写生画として発達したものはないやうである。

我々は自らの心の絵として之を描き、この国土を愛することの表現として之を描く。我々は自らの國を「日の本」とし

て意識してゐる。「波に日の出」を床間にかけて正月を祝ふ。白扇にも描いて喜び旗に描いて国旗とした。明快高貴なること万国旗の中に於て異彩を放つ。以前ならば戦場にはためく日の丸を讃へたいが、今ならばオリンピック優勝の日の丸を思へばよい。林立する赤旗のデモよりも一本の日の丸の行進の方が圧倒的効果のあったのを目撃痛感したことがある。

富士の山、波に日の出につゞいて今一つ面白いのを発見する。今度は大きく書いて絵には描けないけれど飽迄も具体的な実景であることに変わりはない。「日本晴れ」である。一点の雲もなく晴れわたった大空を見て「日本」を連想するとは、いかなる国民であればであろうか、いかなる国柄であればであろうか。不学なる私は他国にかゝる例の有る無しを知らない。然し我々が思索に行き詰つて、「日本とは何ぞや」の疑問に苦しみとくには「晴れわたった大空を見よ、これが我が日本だ」と答へてやればよい。

日本人の心ばえは如何に、心情は如何に、日本人たるものは如何にあるべきかを考へる者よ。こゝに古来の日本人が目ざして来たそのイメージが端的に明示されてゐるではないか。

朝みどりすみわたたりたる大空のひろきをおのが心ともがな(明治天皇御製) この御歌は天皇御自身が典型的な日本人であることを心にかけてゐられたことの証拠である。そして我々国民自身もそうありたいと心かけてゐるところである。天皇は政治的には日本人の中心に坐して居られ肉体的にも典型的な日本人種であら

れると思ふが、その御心がけ御心もちに於ても最も生粋の日本人であられることが理解できる。天皇は別段教訓歌として歌をよまれるわけではない。御自分の心もち心がけを素直に詠まれるのであるが常に生粋の日本人でありたいと心がけてゐられるが故に、そして我々も亦そうありたいと心がけてゐるが故に、お歌の心が直ちに我々の心をうち教へ励ますと云うことになる。之は歌の功德でもあるが本来、天皇のお心と我々の心は一つであると云う左証なのである。

富士の山、波に日の出、日本晴れと述べて来たが之らは何れも現存する具体的な実景である。われらが生れたこの国土に見出せる最もよきものを端的にとらへ肯定したゞけのことである。フィクショナルで捏造でもない。日本人は模様かきの天才ありと云はれてゐる、その性質にピッタリ合ふのかも知れないが、富士や日の出を我々はあたりまえのことと描くその実景の中に絶妙の理想境を味得するのが天才かも知れない。私はこゝで「天皇制」そのものも、具体的な自然現象の理想の姿のあることを発見し得た日本人の、天才的な文化的一大収獲なのだ考へる。

血のつながりも極めて濃く、民の心を自らのお心とさるゝ一系の天子、そして天子の御使命を国民も亦自分のつとめと覚悟してゐる——情は之父子——と云う人間的結びつきそのものを肯定し守り育て、来た、その歴史的裏付けは有史時代に入つてからだけでも既に二千年を経てゐる。

西洋の政治思想では哲人政治を以て、又支那の政治思想では王道政治を以て至高の境地となすが、之が現実に顕現実行せられた時代は古来絶無とはしないが稀少であったと云はねばならない。之は理想を飽迄概念の上に構築し而る後現実社会を之に符合せしめんとするからなかなか六ヶしくなる道理である。日本人は実景の中に自らの精髓を感じ得し三才の童子も之を理解し親和する。単純正直な日本人の文化的所産として「天皇制」もこゝに一貫したものとあることを感じる。

日本晴れを説いたので今度は「はれ」について考へて見よう。「はれ」は勿論晴天のことであるが「はれの時」「はれの場所」など云うは、公式の、表立ったであり、かくれなき、正々堂々たるの意味を内包する。横綱の土俵入りははれの姿の典型である。天覧角力の土俵入りこそ最高である。

宮中での「はれ」の行事は折々の節会殊に重いのは新年の御儀であろう。「はれの御膳」と云へば新年に大膳司が、献る天子の御饌のことである。国民にとつて「はれの場所」と云へば天子の御前に参すること、特に新年に参することである。初つ日の出を拜む心で参るのである。氏神に詣て、はじめ新年の気分になるのも同じ意味である。古語拾遺(古事記・日本書紀に次いで重要な古典)に天の岩戸が開いて大御光がさし出で、天地にかざやいたとき諸神喊声をあげられた。

あなたのし(手足をのび／＼と) あなたさやけ(さば／＼して) おけ(かけ声) 諸神歡喜の様子がうかゞえるではないか。「はれ」は元來感動詞でもある。「あ」を冠して「あはれ」とは喜怒哀楽すべて心に感じて発する語である。「天晴れ」は上天初晴の意であるが、日常「あっぱれ」と用ひて独特の感情を表はして来た。国民の性格の表れであろうか。「天晴れ」は日本の心構の日本的な本命になつてゐる。花咲翁が枯木に花を咲かせる殿様が弱をかざして「天晴れ／＼」とほめる。日本人は幼児の頃から天晴れなる日本男子、天晴れなる大和撫子たらんと心がけてゐる筈である。この世に生を享けたからには、天晴れなる働きをし、天晴れなる業績をのこして死にたいと考へてゐるのが日本人の普通であり自然である。

近頃はやりの覆面ヘッピリ腰のデモ姿はどうも病的な感じがする。泥棒や忍者とひとしくまともな部類に属することは

目次
今上御歌を拜誦して.....広瀬 誠 (1)
波に日の出.....脇山 良雄 (2)
観念への奉仕者.....三浦 貞蔵 (4)
再び「動物農場」の著者について.....桑原 一 暁 (5)
モノとココロ.....高木 晃 吉 (6)
「高教組脱退」に關すること.....岸 本 吉 弘 (7)

できない。お世辞にも天晴れとは云つてやれない。

天晴れる青年は胸を張り大空を仰いで、面を輝かし、手足をのばして闊歩してもらいたい。

さし上る朝日のごとくさわやかにもたまほしきはこころなけり

(明治天皇御製)

このお歌何と日本人的気魄の横溢した大描写ではないか。

新らしい日本がこゝから産れて来る。

△長崎・宇宙書店主△

観念への奉仕者

三浦貞蔵

昨年夏の国文研主催合宿において、高谷覚蔵氏が、ソ連では『人をからかふときにお前はマルクス・レーニン主義者である。』といふほどにマルクス主義が衰退しつつあると述べたことは、氏が曾て共産主義者としてソ連において教育をうけたと聞くだけに、殊更強く印象に残っている。氏は更にいふ。ソ連における若い世代の国家建設に対する情熱の原動力は伝統的な民族主義的愛国心である、独ソ戦争においてロシア人が勇敢に戦ったのも、共産主義のイデオロギーではなく、ロシア人の伝統的なナシヨナリズムであり、それによってソ連が勝つたことは歴史的事実であり、爾来ソ連では民族主義的な愛国心の涵養を教育の最大目的としてゐる、と。しかもそのためには古い専

制政治時代の歴史すら復活されてゐるといふ。

最近の朝日新聞紙上に『世界の防衛』と題する特派員報告が連載されつつあるが、それを見ると、ソ連の国防国家建設に対する努力に並々ならぬものが感ぜられ、支那事変前後から戦時中における『軍国日本』の比ではない。軍隊における教育訓練の充実徹底はもとよりのこと共産党の責任による民間防衛組織がつくられ、軍民団結をはかる行政指導が行はれ、学童(男女を問はず)から大学生にいたるまで軍事知識の普及や軍事教練の強化がなされてゐるといふ。

襲はむとするものは身構へなればならぬ。襲はれむとする恐れや不安を感ずるものも、自らをまもるために身構へなければならぬ。これは個人たるも集団たるを問はぬ共通の心理である。革命後五十年なほ国際共産主義運動即ち世界革命の野望を堅持するソ連は果して襲はむとするものであるか。或は襲はれむとする恐れと不安に戦くものであるか。祖国防衛を名とする強大なる軍事力が、攻撃は最大の防衛なりとして、他国侵攻に転用される危険は絶対ないとは何人も保証し得ないことを思はねばならぬ。第二次大戦末期不可侵条約を無視して満州に侵攻した、ソ連の無慚無愧の行動を吾ら日本人は忘れることはできない。

このソ連では、義務教育を終えた青年は十八歳になると、憲法の定めるところに従ひ、兵役に服する義務がある。彼らは入隊当日軍旗を前にして、一人々々が『軍人の誓』を誦上げる。その誓の核心

は何か。祖国への忠誠であり、祖国防衛への献身であるといふ。『ソ連国民の愛国心や防衛意識が高いことは西側でも知られているが、現代ソ連人の愛国心、国防意識は対独戦の生々しい体験と切離して考えることはむづかしい』と前述の特派員報告は伝へてゐる。

民族・祖国・歴史・伝統・愛国—これらの観念は、元来祖国をもたぬ『労働者』にとつては無縁のものであった。否、峻拒さるべき筈のものであった。従つてソ連において民族主義、歴史的伝統、愛国心を教育の最大目的としてゐるとすれば、それはマルクス思想における国際主義背反であり、マルクス主義に対する変節であり、冒瀆といはねばならぬ。しか

しかる変節と冒瀆を敢へせざるを得ないといふことは、前述の高谷氏も指摘することく、共産主義の旗印のもとでは多数の『労働者』の精神は昂揚振起しがたいことを示す例証に外ならない。つまり共産主義はマルクスやその他の亜流が信奉するとき価値高き社会生活の指導原理たりがたいことに帰せざるを得ない。

共産主義の核心は、いふまでもなくプロレタリア独裁の思想であるが、ベルヂャエフは『プロレタリアート』と労働者を区別せよと説く。即ちマルクスによれば、『プロレタリアート』とは搾取され、圧迫され、生産手段を奪はれ、資本に隷従する悲惨な階級であるが、やがて彼らは集団的な力を得る。その力は資本主義社会崩壊の運命に際会して示され、人類解放を自己の任務とするメシア的使命を帯びた階級、これが『プロレタリア

ート』である。『プロレタリアート』がもし勝利を占めるにいたれば、社会と人間生活は合理化され、統制と秩序が与へられるであらう。かくみれば、『プロレタリアート』とは、吾々が日常見做れてゐる実際の労働階級ではなく、『まさに一箇の神秘的観念であつて、客観的実在ではない。』と。

ベルヂャエフの見解をロシア革命に適用すれば、かういふことが出来る。即ちロシア革命は『プロレタリアート』の『プロレタリアート』による、『プロレタリアート』のためのものであつて、労働者は緑なき衆生であつた。労働者天国は、つひに到来しないのが当然の理である。

何人も、文化的な人間であるかぎり、そしてよく考へれば、超経験的な『観念』に奉仕することは躊躇せざるを得ない。それは自由なる精神の堪へがたいところであり、生命的に反撥せざるを得ないからである。

『ソ連社会帝国主義 わが国の神聖な領土を侵し けだもの本性をまる出しにして 七億中国人民は 怒りをこめてこれに抗議し 断固排撃する 反帝反修の闘争を あくまで戦ひぬく』勇しいが、詩情の枯渇したこの歌は中国国境における両軍衝突以来、北京放送が放送しはじめたものであると東京新聞は伝へてゐる。また同紙十一月二十三日版には、中国共産党が発したといはれる『八・二八』命令の内容が紹介されてゐる。中国国境における異常な緊張感もさることながら、中共内部の統一が決して

容易ならざる事態にあることを推量しうるが、それは兎も角「警戒を高め、祖国を保衛し、戦う準備をせよ」という毛沢東主席の偉大な呼びかけにしっかりと呼応するために、敵情(対?)観念を樹立し、反侵略戦争の準備を十分とのえ軍民連合防衛を強化して、随時に侵入する敵をせん滅する準備をせよ。」とある。『毛沢東語録』がわが国でも翻刻されてゐるときが、つひ見たことはない。いづれにせよ、中共は渺くとも対外関係については、民族的愛国心に訴へて所信を貫かうとしてゐることは右にあげた例からも知ることが出来る。それは或は戦術的な一時的方便かも知れぬ。しかしさうであつたとしても、民族的愛国心を振起せねば民心を統一して外に当ることが至難の業であることを物語つて余りある。東欧の共産圏諸国が、政治的または経済的に何らかの形と方法においてソ連の支配から脱出すべくもがいてゐる事実も亦看過しがたい。

勤労に生きる労働者にとって至上至高のもの、二つなき貴重な生命にも代へうるもの、それは祖国の独立と自由である。共産主義国家の現実はこれを語つて余りあるとみることが出来る。

マルクス主義の『科学的』破綻は、これまで常識に富む学者思想家によって指適されてきた。またマルクス主義の凋落は世界的傾向であるともいはれてゐる。しかし日本の学界思想界における現状はこれに逆行しないと果していひうるか。

(一一・三〇記)

▲川崎製鉄取締役▲

再び「動物農場」の著者について

桑原 暁 一

S スペンダーの「創造的要素」(筑摩叢書)に、「動物農場」の著者G・オーウエルが取り上げられてゐることを知つた。それは、有名なエリオットといつしよにして論評されてゐるのだが、ここではオーウエルにかかわる一部分だけを抽出する。スペンダーによると――

オーウエルの小説「一九八四年」の主人公ウインストン・スマイスが全体主義社会「ユーラシア」で与えられた仕事は、証拠湮滅である。それを基にすれば過去の真相を構成しうる証拠が、今日になると都合がわるいと、政府もしくは党は、自分の今日・将来に合致するように、それを書き替へる必要がある。すなわち、彼に当てがわれた役割というのは、「タイムズ」紙のバック・ナンバーを書き替へることなのである。「ユーラシア」では、あらゆる出版物は、その日の党の政策に合致するように、絶えず修正され、変更されなくてはならぬ。――

さて、このあと、スペンダーは、ウインストン・スマイスが、拷問室で、党の指導者オブライアンから聞かされたセリフを紹介する――

将来の世界では、党に対する忠誠心以外には、忠誠心というものはなくなる。「偉大なる兄弟(桑原注・同志といつてもよいであろう。)に対する愛のほかに

は愛はなくなる。敗北せる敵に対する勝利者の笑いのほかに笑いはなくなる。芸術も文学も科学もなくなる。我々が全能となつたときは、科学も必要でなくなる。美と醜との区別もなくなる。……

ところで、ウインストン、このことは忘れるなよ、つまり、そこでは権力の持つ陶醉感が日増しに増大し、こたえられぬものになる。勝利のもたらす興奮、抵抗力を失つた敵を踏みつける快感がそこにある。将来の世界がどんなものか解りたければ、人間の顔を踏みつけている靴――しかも、いつまでも踏みつけている靴を思へばよいのだ。――

このセリフの内容に似たことは前稿でも触れたかと思うが、いま、このセリフに接してあらたに、全体主義社会のあさましさがぼくの胸に来る。そのことは、「一九八四年」を待つまでもなく、現実のことである。ここに「われわれが全能となつたとき、科学も必要でなくなる」と云われている。ぼくは去る慰霊祭(四十四年度)の献歌歌の一つに

マルキシズム共産主義の国々に科学よ興れ自然にかへらむ

と詠んだ。何か本当のことが云えた気がしたが、甘い考えであつた。

それはさておき、スペンダーのその先をもう少し追うことにしよう。――

こんな世界では、スマイスの見つけ出す唯一の価値は、人目を憚かるような、私生治的価値しかない。彼とジュリアとの恋愛事件――それを、ある真夜中に彼は思い出す(以下は原作からの引用)――

彼女が自分の着物を傍らに投げ捨てた

あの身ぶりを。投げやりで、しかもたしなみのある、あの身ぶりは、あたかも、「偉大なる兄弟も」、「党も」、「思想警察」をも葬り去ることができるようであった。身ぶり一つで、一つの文化の全文を、一つの思想体系の全部を葬り去るがごとく見えた。……彼はふとシエクスピアという語を口ずさみながら目を覚ました。――

マルクス・レーニン全集をもつてしても、ジュリアの、着物を投げすてる所作一つに匹敵することができないのである。マルキシズムには女は出て来ない。出て来るとすれば、階級闘争の女闘士としてであろうか。しかしそれは、本當の、女の歴史ではない。「彼(スマイス)は、シエクスピアという語を口ずさみながら目を覚ました。」というのは、どういふことか、よくわからないが、シエクスピアの作品には、男にせよ、女にせよすべて「人間」がいる、ということであろうか。

なお、この本では、オーウエルについて、「オーウエル、エリオット論」のほかに、「オーデン論」でも引き合いに出している。その一部分を引いておく。――

オーウエルは、その、ヘンリー・ミラー論「鯨の内部」において、一九三〇年代の若いイギリス作家のある人々について次のように云つてゐる。――なぜ、これら若い人々がロシア共産主義社会のような、遠隔なものに引き寄せられるのか。作家ともあるうものが、なぜに、とうてい理性では律せられぬような形態の社会主義社会に魅力を感じるのだろうか。

(四四・十二・九)

附・「解放の囚人」について

前稿、「ゲーテと社会主義」で、サンシモン流の、「個人の幸福の不可欠の前提として全体の幸福がある」との説に対する、ゲーテの批評を取り上げたが、それを書いたすぐあとで、サンシモンのと全く同じ文句がある本を見た。それは、アメリカのリケット (Ricket) 夫妻の「解放の囚人」(Prisoners of Liberation) である。著者夫妻は、清華大学に二年、燕京大学に一年、中国の文学・哲学を勉強した時点で、スパイの嫌疑で逮捕され投獄された。在獄四年、刑期六年の判決(在獄四年加算)を言い渡されたが、すぐに釈放され、一九五五年九月、夫妻は相前後して、香港經由でアメリカに帰った。香港で彼を待ち受けていた記者団は、彼の口から、彼等の期待するごとき、中共の実態を引き出そうとするのだが、中共を肯定する彼の答弁は、彼等の失望と反感を買うだけであった。「彼は洗脳された。」と彼等はきめつけるのであった。しかし彼は、「自分は洗脳されたのではない。理性的に、あれこれ熟慮した末に、中共を肯定するに到ったのです。」と云う。その熟慮の行き着いたところは、「個々人が進んで、社会全体の幸福 (Happiness of society, as a whole) に自己を合致させるときにのみ彼個人の幸福が確かなものになる、ということを理解するのに、自分には在獄四年がかかったのです。」と云うことである。彼は、「自分の経験が洗脳と云われるなら、感化院だって、一種の洗脳所では

ないか。それなら、洗脳ということは中共に限らず、世界のどこにだってあることではないか。」と云う。この論法でいくと、中共ぎらいの連中は全部感化院行きの非人間だ、ということになる。それはとにかくとして、「社会全体の幸福」とは何か。実際にはそれは配給される幸福ということであり、裏がえせば、みんなが同じように不幸である、と云うことにほかならぬ。それがなぜわからぬのであろうか。(四五・一・三)

△都立千歳高校教員

モノとココロ

企業経営者の責任

高木 晃 吉

物量投入によって、共産主義が超克できるとされた。この論理に従って、ベトナムを中心に、東南アジアに大量のドルが投入されたが、その結果は、どうなったであろう。

衣食足って、礼節を知るといふ論理に従って、経済優先の政策が展開された。その結果は、果して、その通りになっていくか。

私は、このモノ先行の論理を清算しなければならぬと思います。モノの増加(△M)イコール、ココロの定安(△S)ではない。△M+△Sであり、時に、△M=△Sとなると思うのであります。

欧州大手電機メーカー、オランダ・フリップス社の技術担当重役のジョゼフ

・バジール氏著「人間回復の経営学」は欧州のベスト・セラーとして、日本でもさいきん出版され、注目されているが、その百八十一頁に「質素な食物をとる習慣によって促進される清らかな生活」を説いている。聖者マタイ伝第十九章二十一節に If you would be perfect, go sell what you possess and give it to the poor, and you will have treasure in heaven. とあるが、モノとココロは正比例的でなく、むしろ、反比例であることが説かれている。そして、すくなくとも、モノの優位性は否定されねばならないのである。黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の一〇八頁から一〇九頁にわたって「太子が維摩経義疏に維摩居士の善徳長者が財施を福徳の行として修せるに對し之を弾呵して法施をすすめし所以を釈し給ひ『前略、但己が財施を極と為すが故に浄名が此の呵を致すことを明かすなり』」とあり、「財施を極となす」事を戒しめておられるのである。

衣食足って礼節を知るところではない。モノが満ち足りてくると、むしろ、そこには、恐怖が生れてくる。ハーマン・カン博士は、日本の将来に対して「豊かさの中の不幸」を警告しており、木内信胤先生も、ある経済誌の中で「日本は自らの強大なる物力の故に、却って破滅の運命に陥るだらう」と警鐘を鳴らしておられる。また、福田恆存先生は昨年末関東経営者協会主催の講演会で、デパートの包装荷造りヒモの使い捨てが人命軽視の風潮に連つていると言っておられた

が、たしかに、モノがありあまるような状態になると、モノのありがたみがなくなる。ありがたみがなくなれば、ココロが通わない。そこに、豊かさの中の不幸々が出てくる。消費は美德なりとか使い捨ては善なりといった倒錯言論が表われ、社会混乱、現代不安の一因をなしている。

企業は、労働生産性を上げるために、労働装備率を上げねばならない。それは必要条件であって、十分条件ではない。十分条件をなすものは、高率の労働装備即ち設備投資を稼働させる、経営者即ち企業人の知情意である。すなわち、モノはココロによって生きるのである。このことを、三井甲之先生は、黒上先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の序のなかで「此世にあるものは、動かぬ物ではなく、動く心である」と明示されている。聖書第四章四節の Man shall not live by bread alone, but by every word that proceeds from the mouth of God. も大切な啓示である。

世界は、対共産主義の論理を転換しなければならぬ。即ち、モノによって共産主義が崩壊するのでない。従って、共産主義諸国は、消費材生産を増強しても、共産主義体制が崩れることはない。大砲優先からバスター優先に政策転換しても恐れることはない。また、西欧諸国は、資本を投入しても、共産主義体制が崩れることがないことを知る必要がある。従って、西欧諸国は不採算な投資をやめるべきである。ドラッカー博士が近著「断絶の時代」の中に、「今日の世界で必要と

されるのは金でなく、ビジョンである』
と言っているのが注目される。

また、日本は、経済成長優先の論理を文化国家建設優先の論理に転換しなければならぬ。たしかに、モノの生産力は強大になった。今後、その傾向を続けよう。しかし、富の蓄積は未だしである。それは生産力の合理的配置(投資)とその合理的配分(消費)がなく、ロスがあるからである。それは、なぜかと言えば、モノを生かすココロが未成熟であるからである。具体的には、もつと公共投資に生産力を回らすことである。再生産性の高いものへ投資することである。経済大国といひ、海外援助が粗上に乗っているが、日本経済は、まだまだ底が浅い。郎屋のなかには、豪華なカラーテレビがあるが、糞尿、下水処理に至っては、依然、三等国並み。これでは、富裕国家、文化国家と言えた姿ではない。もつと、悪いことには三等国並みの住宅環境に、産業公害が加わって来るのである。木内先生は、「公害絶無の日本、美観をぐつと重んじた国になること」を提唱しておられる。

日本人は、どうも、さいきん、上つらしかないし、外に向きすぎる。モノ中心で、ココロを見ないからである。ピジネス・マンが、海外でエコノミック・アニマルといわれるのも、バジール氏が経営者や管理者に大切だとしている哲学や芸術のココロを解せず、モノを売ることだけだからである。また、日本のピジネスマンは、課長とか、部長といった外面的

なステータスに大きな価値を認める。ところが、企業組織の巨大化、安定化に伴ってステータスへの距離が拡大して行く。いきおい生活の目標がぼけてきて、生きがい論が台頭してくる。もともと、人間というものは、はじめから、生かされているもので、生きがいがあったりもなくても生きて行かねばならない先天的な義務と責任がある。「おのが身はかえりみずして人のため尽すぞひとの務なりける」という明治天皇御製どおり、人のためになつたかどうか人が人の生きがいであつて、自分中心の生きがいであつては、救いがない。バジール氏も前書の中で「本当の知識は他人の知識を殖やし、他人を行動させるために知識をもつていし、他人を行動させるために知識をもつていしよに上昇していくために、何ものかを他人に与えることである」と明言している。さらに、氏は「昔のギリシヤの巫女によつて下された次のような神託を耳にする『おまえが他人にもたらすものは倍になって、おまえに返ってくるだろう。他人とおまえの間には、どちらが得をしたのかわからないほどの絶えまのない交換が続くだろう』」と書いているが指導者階層に、この辺の神のプロセスが理解できていないところに、大きな問題がある。ドラツカー博士は、知識階級の倫理性がいよいよ重要化してくると言っているが、その回答は悲観的である。なぜかといへば GIVE and TAKEを

「give for man ans take from god」モノは人に、神からココロを得ると解することができないどころか TAKE and

TAKEで、与えるのはクズばかりであるからである。アメリカでは、川が燃え、橋が落ちた。油が流れているからである」と、Business Week 誌の最近号は報じている。日本も、川が燃える恐怖が近づいている。同誌は六九年十一月一日号の論説で「The new Responsibility of Business — The problems of race relations, urban decay, and environmental deterioration are threats to the whole structure of U.S. society, including the U.S. business community. These are problem that must be solved and business must contribute all that it can to solving them.」と訴えている。しかし、国家政策としては、やはり、経済成長一本ヤリ的なあり方から、文化国家建設の総合政策へ質的発展をしなければ、救いようがないであらうし、具体的には、或は集約的には、木内先生やシカゴ大学のフリードマン教授の所説のように、通貨供給量を操作して、物価上昇の抑制と適当の経済成長(日本の場合10%)を維持することでありましょう。そして、落着いた経済の運営することが急務である。現在日本はあまり、ホットな運営でありすぎる。ただでさえ技術革新によつて、経済社会が高圧化しているから沈静化させねばならない。モノが充満しすぎて、ココロにプレッシャーがかかりすぎている。

Business Review 誌の昨年六—八月号に、ロンドン大学のアンシエン教授が書いて「To prosper in a fast-changing world top business Lead-

ers must think more like philosophers than efficiency experts」という論文の主張は、新しい方向を示したものでないかと思われるのであります。
(大平洋工業株式会社取締役・企画部長)

「高教組脱退」に関すること

岸 本 弘

去る十一月十三日に公務員共闘の名の下に教職員を含む全国的なストライキが行なわれましたことは既に御存知のことと思ひます。ここ富山県に於いても、県下四高校に授業くい込みがあり、ストに参加したものは三十二校約四百名、又日教組傘下小中学校に於いては五十校約四百名で合わせて八百人の教職員が何らかの形でストに参加したことになりました。私はそのスト騒ぎの中にあつて何が出来たか、残念ながら何の力ともなり得ませんでした。私のやったことと言へば「十一、一三闘争の本質をみきわめよう」並びに「高教組脱退声明」の二枚のプリントを校内の職場大会の席上配布しその他御名前を存じ上げている方々にお送りしたことでした。

「高教組脱退声明」の項目だけを紹介致しますと
一、違法行為を決定し、これを実行せんとすること。
一、一連の言動は特定の政治団体に従属するものである。

一、組合の組織は個々の組合員の自由をふみにじるものである。

一、反体制勢力に資金を与えること。

以上四つの項目に各々註釈を加え、教育者としての立場から断じて違法行為の許さるべきものでないこと、又誰れもが関心を持たざるを得ない給与問題にからまる左翼革命思想に根ざす政治的策略こそ最も憂慮すべき問題であることを訴えました。

私としてはいつかは明確にしなければならぬ自分の態度を明確にしたまでのことであり、今日までの低迷を恥かしく思っておりませんが、高教組を脱退しなればならないことは加入時に於いて既に意図していたことでもありました。中へて加入していたのは、暫くは組合の中身を置いて、その実態を自分で確かめ、又私個人の意見というものが果して組合の中でどれくらい反映するものであるかを確かめたかったです。

最初の内は私の意見が特異であるという事で、執行委員会でも取上げられたという事で、その内に段々と取沙汰されることもなくなってゆきました。私が指導部の方針に反論を唱えようとも多勢に無勢で否決されてしまい、意に添わぬ決議事項を前にして、自分も高教組の一員であるという不愉快と言います余りある思いを幾度となく経験させられました。その中で成果と言うのも恥かしなことですが、私は脱退時、定時制の代議員をしておりまして、そこで組合のピ

ラはほとんど職場で配布せず、一切の指令に対して知らぬ、存せぬという顔をし職員室に貼られたビラは全部破棄する始末で分会長を初め役員連中はほとんど手を焼いていたようです。大会で無視されようともせめて自分の職場で抵抗をと、組合員であることを逆手にとって、今暫く組合の中にいて阻止活動を続けてやろうという気持もありましたが、富山県では初めての授業くい込みという実際行動を伴うストライキが決議されては、もはやこれ以上高教組の汚名に甘んずることは出来ず脱退を声明するに至った次第です。

ここで富山県高教組の実態に触れますと、指導部の指令に諸手を上げて賛同するものは二割にも満たぬ現状であります。大半はこれもつきあいだから仕方がないとして常に人の顔色を見て行動するもの、批判的立場を取りながらも行動のみを批判するに止り、或は経済問題のみを論じて得々とするもの、最も憂慮すべき思想問題の核心を誰一人つこうとしない実状であります。私はここに今日の大学紛争の根は深いといわれる一因をまざまざと見せつけられる思いが致します。

一人や二人が決然として脱退しても教育界の病根を断つには余りにも無力とも言えましようが、今私は組合の中に身を置いていた一年半余の活動を振り返る時、なおさらに無力や無気力な活動であったと認めざるを得ないのです。決して青年として取るべき道でなかったと深く反省させられるのです。青年として為すべきことはやはり信ずる道を真直ぐに進む

ほかに術はない。五体に情熱をかき立てようとも如何程のことが出来るか一切の予測は不可能ですが、私は今かすかにもさわやかな風に吹かれる思いがするのです。

先日小柳先生より頂いたお手紙に「日教組問題は私達が合宿でとりくんでいる問題のすべてを含んでいる」とありましたが、今まで学んできた学問の姿勢を失うことなく具体的な問題に取組んでゆきたいと考えております。

組合問題というものも、日々の学校生活、即ち生徒と共に真剣に学問の場を求め姿勢というものも、決して切り離して考えられない問題ではあります。けれども自分の人生観というものを抜きにしては考えられないということに於いて、かつ又一人の教師の人生観の内に統一されるべきものであるということにおいて、単なる思想問題、単なる生徒指導の問題として個々別々にかたづけられるものではないとあります。

今こそ教育に携え者が心を空しくして学ばねばならないのは「教育に関する勅語」であり、そこに込められている日本民族の生命ともいふべきものであると思えます。御存知の様にその中の一文に「斯ノ道ハ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」とありますが、私は先づこの「皇祖皇宗」のお心をひたすらにたずねまわることから始めたいと考えております。

日教組問題、高教組問題に端を発する日本の教育界の病根をさらに深くつきつめていく過程に於いて私が失ってはならないもの、いやさらに育んでいかなければ

ばならないものは、心の豊さということであろうと思えます。私の人生は今皇祖皇宗のお心をたずねまわることになり、終生尽きるところのないものと思われるのです。

富山県立福光高等学校教諭

編集後記 謹んで新年のおよろこびを申し上げます。七〇年代の幕明けとして今年になってから、国際的激動また内政の革新、科学技術の飛躍的進歩と人間の回復などさまざまな展望が新聞やテレビを賑はしてゐます。経済成長の実力が確信されるところからか、日本人としての個性が自覚されるべきだと論も二三に止まりません。風潮甚だ然るべしと思ひますが、思想、教育の戦後二十五年の混乱が傷つけてゐる姿は現実に見る通りで、これを革新する事業は容易ではありません。本誌執筆者各位の関心は一にここに集中され、平生その持場、職場で国民として生きようとする姿勢そのものを表現しようとしてきてゐる、先輩も後輩も「国民同胞」といふ誌名にいささか添ってゐようかと、各執筆者に謝意を表し新年号をおくりませう▼恒例のごとく今上御歌について広瀬さんの感想文をいただき（主として地方紙に多く掲載されてきたよし）から直ちに起草、翌日発送していただいたものです。新年、何よりも天皇陛下のお心にふれしめられ、陛下の萬歳を心から祈念せしめられることをよろこびます。

国民同胞

発行所
社団法人国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都中央区銀座
7-10-18柳瀬ビル三階

月刊「国民同胞」編集部
下関市南部町25-3宝辺正久
振替下関1100 電話22-1152
毎月一回10日発行
定価一部20円(送料別)
(送料共) 年間360円

「心身共に穎敏なるを欲す」

——百号刊行に当って——

福沢諭吉といえ、あの「学問のすゝめ」の冒頭の一句「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」によつて、民権論者としての一面のみが強調されるきらいがあるが、彼には次のようなきびしい言葉がある。「文明論之概略」の最後の部分である。

余輩に於て独立を以て目的に定むと雖も、世人をして悉皆談家と爲し、朝夕之に従事せしめんことを願ふに非ず。人各勤る所を異にせり。亦これを異にせざるべからず。或は高尚なる学に志して談天彫竜に耽り、随つて窮め随つて進み、之を楽みて食を忘るゝ者もあらん。或は活潑なる営業に従事して日夜寸暇を得ず。東走西馳家事を忘るゝ者もあらん。之を咎むべからざるのみならず、文明中の一大事業として之を称誉せざるべからず。唯願ふ所は其の食を忘れ、家事を忘るゝの際にも国の独立如何に係る所の事に逢へば忽ち

ち之に感動して、恰も蜂尾の刺蝟に触るゝが如く、心身共に穎敏なるを欲するのみ。▽

彼の言うところは明らかであるが、国家の危機に際しては、蜂のつげに触れた時のように敏感でなければならぬといっているのである。私がかつて教えを受けた旧制高校の老教授は、少年期に受けた日露開戦の鮮烈な印象を次のように話されたそうである。友から間接にその話を聞いて、私も強い感動を受けた。その話は次のようなものであった。

△日露開戦の日(明治三七・二・四)
私はある知人の村長のもとに寄寓して、中学受験の勉強をしていた。その日はひどい雪だった。夜ふけに役場の小使さんが連絡に来た。雪は霏々として降りしきり、寂として声もない中に、戸を激しく叩く音がする。村長はかけ下りて、オオヤツタカと言った。間髪を入れず、ハイヤリマシタという答えが返つて来た。そ

れだけの問答で、すべてが瞬時に了解されたのである▽

まさに切り結んだ白刃が、発止と音を立てたような緊張した一瞬である。ラジオもテレビもない時代に、恐らく開戦の報はそのようにして津々浦々に広がって行ったのであろう。これはまきれもない歴史の証言だから、こゝに記して置くのである。われわれは久しくこういう歴史の感覚を忘れてしまつてゐる。日露戦争が侵略戦争であるかないかという、判断や解釈に先だつて、こういう事実を敵として存在しているのである。唯物史観の信奉者たちは言うであろう。それは当時の人民が権力者による官製の思想にこまかされていたのだ。彼らは反戦の意識が低かつたのだと。それで万事の解釈は終つたことになる。しかし、そこから本當にすこやかなよろこびが湧き上つて来るか。残るのはやり切れないマイナスの感情だけではいか。強烈な生命感を持つ青年ほど、こういう姿勢からは強い「心の飢え」を感じるに違いない。大学紛争で狂気のようなゲバルトを誘ひ出したものは、例えばこんなところに一つの根本的原因があるのではないかと。単に歴史観の問題だけではなく、現代の病根の最大なるものは、国のいのちに対する敏感さの欠如である。ひたむきな「まごころ」の喪失である。それは思想以前の、国民全体の、生きる姿勢の弛緩であると断ずることができよう。

国が敗北によつて受けた傷痕は大きく深い。就中「歴史の断絶」と「思想の分裂」は生命体としての国家の解体、崩壊

の凶兆である。われわれは「国民的合意」という政治的次元よりも、もっと深いところで、国の生命の蘇生を念ずる。それ以外に国民の内的統一の原理はあり得ないからである。

このさやかな機関誌も百号を数えるという。安保闘争後の停滞と混沌の中で祖国へのやみがたい真心を唯一の支えとして出発してからは、はやくも九年の歳月が経過した。

目次

- 「心身共に穎敏なるを欲す」……………山田輝彦 (1)
- 百号記念・回顧座談会…………… (2)
- 二つのエッセイ(紹介)……………桑原暁一 (6)
- ☆出版予告 1. 愛国の光と影—田所広泰遺稿集
- 2. 欧米名著邦訳(明治)集
- ☆「国文研論叢」発行事業計画

人の感銘を呼び、二人が心を決すれば、四人が必らず動ずるにちがいない。美わしい日本の国土に、人間が信じ合う道が永遠にのみみえられないはずはない。けわしい道のりであろうとも——国民同胞感の波動の拡大に向かつてあらゆる智慧と才覚を結集しよう▽と。今こそ志を定めて限りある命を燃やしたいものである。

△福岡県立若松高等学校教諭山田輝彦▽

百号記念・回顧座談会

本年度事業審議の二月定例理事会の席で、本誌百号発刊を記念して座談会をもった。別に司会者も設けず、自由に放談して貰った訳である。出席者は次の通り。(五十音順)

小田村寅二郎(亜細亜大講師・本会理事) 小泉一也(三菱重工工業長崎造船所資材課長) 長内俊平(電源開発伊予電力所事務課長) 川井修治(鹿児島大学教授・本会副理事長) 加藤敏治(八代市助役) 加藤善之(山陽電軌山口営業所長) 桑原暁一(東京都立千歳高校教諭) 小柳陽太郎(福岡県立修猷館高校教諭) 宝辺正久(宝辺商店社長) 名越二荒之助(岡山県立笠岡高校教諭) 浜田収二郎(本会副理事長) 山田輝彦(福岡県立若松高校教諭)

編集と投稿の裏ばなし

宝辺 本誌は昭和三十六年十一月に創刊号を出した。当時の発行部数は二千二百部。(現在は四千部) 下関には加藤善之君、田中敬一君がいるので、三人でやってみると言われて、言わば騎虎の勢いでやってきた。ラーメンをすりながら、時にビールを飲んで、けっこう楽しい思い出はある。よくできた、と言われることがあるとすれば、それは編集者の功績ではなく、掲載された作品が、心の動きに密着した表現であったからと言えよう。考えてみれば、百号まで八年三ヶ月のコトバの積み重ねの歴史でもあった。

加藤(善) コトバの積み重ねの歴史といわれたが、その通りだと思う。新旧世代のひらきを超えて、お互に通じあうコトバを見出す努力の連続であった。編集に行きつづると、山田さん小柳さんに来てもらって相談したものだ。

浜田 一口に百号というが、大変なことだったと思う。小さな会の機関誌が、途中で中断することなく、ともかく続いてきた。編集者の感慨もひとしほのものがあると思う。

小田村 時事問題は扱わない。巻頭言は多少それに触れるものが多いが、それについて、国家国民生活にとり組む、その意味で、同人誌ではなくて、国民誌というべきで、それが百号続くということは重大な意味がある。さかのぼって過去のものを読んでみると、どの作品も生きと今に迫ってくるものがある。

桑原 「国民同胞」という誌名の由来は？
宝辺 創刊当時出した合宿記録の「国民同胞感の探求」からとった。

山田 巻頭の文字は小柳君の筆蹟です。
加藤(善) 「国民」はやめてたぞ「同胞」だけにしたらという意見もあった。
小田村 「国民」というのは、抵抗を感じる時代だった。

桑原 百号を出す間で一番つらかった時期は？

宝辺 私は自分で商売しているので、その方が苦境に追い込まれた三十八・九年

ごろが一番苦しかった。
小泉 創刊した頃、どんな反響があったか。

宝辺 ハガキを封入して、短大も含め、あらゆる大学宛に送った。どれだけ大学の責任ある人の手に渡ったか疑問だが、その頃は神戸医大の遠藤先生の返事があっただけだった。

山田 紙質を変えたことがあったが。

宝辺 第二十二号から小田村理事長の指示で上質紙に変えた。ポケットに入れたり出したりして読んでもすりきれなくなったと思う。

小田村 創刊号から八号くらいまで、ほとんど残っていないと聞いたので、それからは五百部ぐらゐ余計に刷ってほしいと頼んでおいた。残っていない号はリコピーで立派におきなえると思う。百号を記念して合本することも考えられる。何かよい方法があれば、教えてもらいたい。

長内 締切りギリ／＼のときに、宝辺君から何か書け、と言ってくる。実に困ることだけど、かえってそれが一つの支えになる。単なる編集者なら、簡単に時間がながいからと言ってことわるが、相手が宝辺君だとそうはいかない。さらばといつて過去にこんなことを考えた、といつてそれを今更書くわけにはいかない。今の今思いつくあることを書かなければならない。それが自分を支えることにもなる。

小柳 「国民同胞」に書く時は、真剣勝負のつもりで書く。思想がどうのこうのというよりも、それがコトバになるところが一番苦しかった。

コトバそのものが試される。それがコトバのイのた。

宝辺 「国民同胞」は普通の商業誌ともして同人雑誌とも違う。投稿をのせて貰えない。ずいぶん狭き門だとポヤク声をたびたび耳にする。

小田村 学生諸君にとつて、「国民同胞」は登竜門になっている。地方の各大学のサークル活動で生れた出版物の中から、よほどいいものが選ばれて、国民同胞にのるしくみになっている。だから自分のものが載ると祝杯をあげるものまで出てくる。

小泉 宇宙書房の脇山さんが、今度書いたから、載ったら是非よんでくれと期待しておられた。

加藤(敏) 僕は教育長の頃に一回書いただけで、執筆の思い出は特にない。さきごろ結婚させた娘が、日記をつけている。その中で古事記を読みたい。ヒマを見て図書館で勉強したいと書いていた。それは高校時代から「同胞」を読んでいるからであろう。またある指導主事があるからであろう。またある指導主事が、「同胞」を読んだの感想に、自分の人間としての、また教師としての生き方に向を与えてくれる、と言っていた。

忘れ得ぬ記事と作品

小田村 自分は宝辺君の編集後記を一番に読む。苦心の数行の中に、厳然と歴史仮名遣いを守っている。世間の雑誌では執筆者の中に歴史仮名遣いを固守するものはあっても、編集者はみな新仮名遣い。その点「国民同胞」の編集長は正反對である。

桑原 本誌に投稿する人で歴史仮名遣い

を守っている人は?

宝辺 関さん、広瀬さん、長内君、若いところで亀井君。このごろは夜久さんもそうだ。

山田 機関誌というものは、左右を問わず、仲間うちにか通用しない方言がある。それに較べて「同胞」紙には、開かれた思想を開かれたコトバで語る努力がある。だから会員でなくても読めば判る。昨年十二月号の川井さんの「鹿大封鎖無血解除の記」、名越さんの「教科書裁判出廷記」は、わが会が時代の最先端の課題とまともに取り組んでいることを示す文章で、うれしかったし感動もした。それから古い原稿では四〇号にのつた小柳君の「文武論」が印象に残っている。この作品は、「敗戦前の日本は文が失われ、戦後は武が失われた。この精神の跛行症状を山鹿素行と大隈大武を引用しながら展開したもので、既成概念の呪縛を断ち切るすばらしいできばえだった。

名越 小柳さんの書いた七三号の巻頭論文、「時勢を見る目」松宮観山と山県大武は、「文武論」の系列に入る早見だった。感心していたら、「新日本春秋」にも転載された。やはりいゝものは誰が見てもいゝのだ。世間は盲目ではないと思つた。

加藤(善) 小柳さんの「古典の窓」、あれをまとめて国文研シリーズとして出して貰いたい。

宝辺 「文武論」にしても、「時勢を見る目」にしても、小柳君の書くものはすべて古典研究の中から生れたものばかり

だ。これらをまとめて、是非とも一本にすべきだ。(小柳氏躊躇する模様)

名越 こういう仕事は若いうちにやっておかないと、できるものではない。それに我々は一方で毎日毎日死ぬる準備をしているようなものだ。早くできる時にやっておかないと、いつ交通事故で駄目になるかも判らない。

宝辺 「同胞」にのつた山田君の一連の作品は、国家と個人、全と個の問題を追求している。これを一冊にまとめられぬか。

長内 合宿で行なう山田さんの短歌入門講義は、夜久さんよりうまいかも知れない。夜久さんとの共著という形でもよいから、「短歌入門」を一本にしてもいい。

名越 文章の評価には主観がつきものであるから、誰の文章がよいかなど、決められるものではないが、山田さんの文章は、「安心して読める」とか、「一級品だ」とかの言葉をあちこちで聞いている。

加藤(善) 名越さんのものが一番印象に残るという人がある。タッチがジャーナリスチックだから入りやすいし、すぐ役にたつ。

川井 構想が非凡で、表現が平明——山田 今度原書房から出した「内乱はこうして起る——祖国再発見のために」という本も、名越君の本領を発揮したもので、「国民同胞」と無縁ではない。

名越 あの本は初版を八千部出し、日本遺族会が五千部買ひとり、あと全国の書店に出した。内容から言えばそのうちの六、七割は「国民同胞」に書いたものばかりだ。宝辺さんから書けと言われなかつたら著書も目の目を見なかつたらう。

桑原 加藤(善)さんが「特功隊の死」の最後に書いた「民主主義は政治の方便であつても、生活の原理ではない」という言葉が忘れられない。

名越 笑い話を紹介しよう。私の学校で生徒会の幹部を集めて合宿することになった。担当の〇教諭(国民同胞の愛読者)がテキストを作つた。私の所へ配られた謄写の印刷物を見ると、小泉信三、福田恒存などの文章の中にまじつて、加藤善之の「権利」という考え方」という文章がある。加藤善之というのはどういう評論家かと思つて、中味を読んで驚いた。(笑い話ではないではないか、という声)私が今も忘れられないのは体験をまとめた小品である。関さんの「靖国の銀杏」、それから山田美智さんの「皇居清掃奉仕に参加して」……

宝辺 「皇居清掃奉仕」は、「東京タイムス」に転載された。

桑原 「同胞」には圧縮したドラマがほしい。そして鮮烈な印象をとどめる芸術的表現をもすこし考えて貰いたい。昔の正大賽の人はよく詩をつくつていたものだ。

名越 本誌の前々身である「異風」にのつた川井さんの「満洲のブユ」は、体験をもとに書かれた短篇ドラマだが、緊張感のなかに作者の人間が生きていて、今も忘れられない。

川井 いま学校でナチスの講義をしているが、ナチス運動はそのまゝ歴史のドラマである。彼らの運動体験は我々にとつ

て教訓も大きい。紙数が貰えれば書きたいことは沢山ある。

宝辺 夜久さんの「国士の悲歌・田所広泰寸描」はドラマチックで感銘を受けた。それを読んだ岩国の地田直彦さんからすぐ感激あふれる手紙を貰つた。(地田さんは、田所さんたちが憲兵隊につかまつたとき、差入れなどに奔走された方である)

小柳 その他夜久さんの書かれた「師友寸描」学徒戦死者の歌」と題する一連の追悼文は、痛ましいばかりの感動を与えられた。まさしく昭和の悲歌だった。

山田 和田山儀平君のことを書いた「海原のうた」は、印刷のミスがあつて残念だった。

名越 「海原のうた」に感動した僕は、首藤雅也を書く責任があると思つて、「大東亜戦争神話曲——未完の天才・首藤雅也戦中時代寸描」を二十五枚書いた。これは彼が門司に入隊し、即日帰郷になつて帰る途中、汽車の中で詩を書き始めた。彼は言葉があふれて下車することができず、郷里の福岡を過ぎ、とうとう熊本から鹿児島、宮崎とまわつて、九州を一周してしまつた。その間に彼の詩人的才能は大東亜戦争の終曲まで体験した。この凄惨な精神生活を、彼の詩を引用しながら展開したものだ。しかし引用した詩も、私の文章も特異な言葉であつて現代の青年にはとても理解できないだろうといつてポツになった。これが「国民同胞」に投稿して採用されなかつた最初の作品だ。しかし今度出す戦死者の遺稿集には、是非採用してもらいたい。

小柳 小田村さんの「大学の自治と学生の自治について」は三回、三ヶ月にわたって連載されたが、これは一冊のパンフレットに出すべきだった。一度に読んだ方が、どれだけ効果があるか知らない。

山田 毎年年頭に広瀬さんによって今上御製が紹介されるが、新年の読みものとして実にはさすがしく目がさめる思いがする。評釈も鋭く具体的でしみとほるようだ。

長内 広瀬さんは図書館につとめているので、全国の新聞から御製を集めておられる。今年の台宿にはこういう方には是非参加して貰いたい。

これからの本誌

小柳 若い諸君の登場が少ないのでは：宝辺 今林（賢郁）君が編集に協力しただけから、一ページ半とか二ページを引き受けてくれる。その分だけ彼が若い人の原稿をあつめて編集するようになっていく。

山田 今林君はその点大いに力になってくれている。

宝辺 三十九年の徳地 合原、柴田の諸君の福岡合宿の研究発表を中心に、若い人々のものが紙面を埋めたことがある。あの二十八号は力強かった。これからはもっと新人が登場する方法を考えたい。百号記念で募集する「国文研論叢」の原稿募集はそういう意味でも意義がある。学生諸君も、これはという作品ができたらドンドン編集部宛送ってもらいたい。また理事はかの皆さん方も、新人を発掘して新鮮な作品を紙面にのせるよう協力

されたい。

名越 僕は肺活量が大きくて欲張りな性格なのだろう。どうも書きだすと長くなくて、五枚程度のものでは書いた気がしない。二十枚くらいはほしくなる。しかし僕ばかり紙面を独占しては、という気になって筆がにぶり勝ちだ。本誌を八ページ以上にしろとか、いっそ冊子にしたらとかいう声は、僕以外にもある。

長内 八ページ以上にしろ、という意見には反対だ。たとえば「ありがとう」と一言ですむことを長つたらしく言うようなもので、ページをふやせば余分のゼイタクをつけることになりかねない。だいたい一般に書かれている文章には三分の二の無駄がある。八ページの中にエッセンスを盛り込むことで、続けてほしい。

桑原 一ヶ月一回発行ではなくて、二回出してほしい。僕にとって一番待たれる雑誌は「国民同胞」なのだから……小泉 「国民同胞」には、国を思う人々のいのちがこもっているもので、自分をふくめて、若い諸君といっしょに真剣に読み、かみしめたいと思う。

長内 ハタハタという魚を、僕が大好きだからといって、おとなりに差しあげたところで、さほど喜んでもらえないだろう。だから「国民同胞」誌は、僕の大事なものであるだけに、メッタに人には見せないことにしている。

桑原 六十才に手のとどきそうな私に一言言わして貰いたい。「同胞」は小田村君や宝辺君らの献身的努力によって、これからも継続されるであろうが、私は大きなことは望まない。この老人を感激さ

せて一晩眠れなくするようなものが、一年に一つか二つ出れば、それでよいのではないか。しかし私の期待をかなえてくれるものは、若い青年諸君の作品であってほしい。

国文研創立十五週年を迎えて

小田村 国文研も創立十五週年を迎えるが、これからは合宿を繰り返すということになるのか。それともこらで新しい運動方法を生み出すのか。私も年と共に老境に近づいてゆく訳で、卒直な意見を聞かせて貰いたい。

川井 合宿を中心とする人材育成の運動を、生ある限り続けたい希望はある。しかし小田村、浜田両先輩が駄目になると形はおのずから違ってくる。とても全国合宿や風をまき起すようなことはできない。しかし地域、地域にわかれてもやらねばならない。鹿大における限りそれを拠点にしてやることになろう。また若いOB諸君の中から新しい人材が期待できる訳だが、自分としてはこれから大学教職の後継者を作ってゆきたい。やはり大学にいた方が時間的その他で条件がいよ

うに思う。

小田村 実務にたずさわって、豊富な社会経験を積みつゝある人の中にも、すばらしい人材が育ちつゝあるもので、いちがいに大学教職がいゝとは言えないだろうが……

桑原 思想的相統は不可測なものであつて、思想はどこでどうつながるか断定できないものがある。最近私は、一高昭信会の前身であつた瑞穂会を起した沼波環（昭）（昭和初期の一高教授）のことを調べ

たいと思つている。この人は徒然草の研究者だが、虎の門事件の時は国を憂えて羽織の裏に「七生報国」と血書したようなはげしい人だった。この人の創つた瑞穂会と呼ばれて里上先生が講義した内容が要約されて、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」が生れた。思想伝統の源流をたずねなければ、黒上先生も理解できまい。その黒上先生は、信仰は近角常観、思想は三井甲之、友情は梅木紹男に学んだと言つておられる。このように人は人、思想は思想を喚ぶのである。各人がそれぞれの土地で孤軍奮闘しておれば不可測のつながりが広がってゆくものだ。それを信じよう。

小田村 国文研の運動が戦後起つてきたのも、まことに不可測の機縁というよりほかない。終戦直後福岡郊外の油山で自決した寺尾博之君の慰霊祭を毎年九州の友人たちで行なつていた。その頃川井君が東京から鹿児島へ赴任していった。川井君はソ連から帰つた直後だったのだ。燃えていた。九州の友人に火をつけてまわつて、第一回の合宿を霧島で持った。その合宿には田所さんの従兄にあたる迫水久常氏からの援助もあつた。僕も浜田、島田君らの協力で資金活動をして参加した。あの頃夜久君は病気が治つたばかりで、僕が連れてゆかなかつたら、とても参加できる状態ではなかつた。もしあの合宿がなかつたら、自分たちは東京で別の動きをしていたらうに、後半生は九州の諸君たちによつてすっかり変えられてしまつた。

小柳 あの合宿で私たちは小田村さんを

講師として招いたつもりなのに、それ以来すっかり母屋をとられた恰好だ。小田村 双方とも半生をしばられることになってしまったわけだ。

浜田 私たちは東京にいて敗けてくやし、何とかしなければという気があった。そこで小田村さんと相談して三つの会を作った。一つは経済人同志会(代表・加納祐五氏)、一つは教育懇話会(代表・南波惣一氏)、一つは国政研究会(小田村・浜田・島田)。それぞれ別の会合を不定期ながら持つて運営していた。そこへ九州の諸君による台宿の報を聞いて

よいことをしてくれたと思った。露島合宿レポートの原稿が届いたので、その巻末に「国政研究会」の紹介を色ペリッヂでさせて貰った。その頃は「平和と独立」という言葉がはやっていたので、これは「独立と平和」でなければならぬという発議を書いた。また坂田道太氏、大達文相らから日教組の資料をダンボール二箱分貰ったので、それを調べて、「日教組問題研究大綱」を書かせて貰った。昭和三十一年のことだった。

名越 僕が日教組の正体を知ったのは、あの色ペリッヂに解説された資料と川井さ

んから送られた「新しく教師になった人々に」の写しによる。ここで厚くお礼申しあげます。

山田 油山に集った頃が、自分が一番フラフラしていた。それで来川井さんのスピリットに励まされてやってきた。

小田村 僕も川井君のスピリットに終戦後を捧げたようなものだ。彼はソ連から復員してきて、何かやろうと僕を励まして昭和二十八年から隔月刊行の「新公論」を始めた。彼は二号まで出して鹿児島に行く都合宿計画に呼んでいったが、そのあとは香川君らに助けられて継続した。

川井 いちがいにそうとは言えまいが、寺尾君という人は、ずいぶん能動的な性格の持主だった。

山田 私が福岡連隊に入隊するとき、當時軍需管理部にいた寺尾少尉は、わざわざ管門まで送ってくれた。

桑原 昭和十六年の普平全国合宿が終るとすぐ、関東地区は長野県の本崎湖畔で地方別合宿を行なった。私はその時「なつかしき木崎の湖よ」といふ歌を作った思い出がある。合宿が終ると長野市公会堂で講演会を持った。早く蔣政権と手を握るべきだという内容だった。主催者側は六、七十名はいたろうか。その時の隊長手塚頭一君、副隊長名川良三君の演説は勇氣凜然としてあたりを払っていた。この二人は戦死して今はない。その時ピラを配った隊員の中でひとりも記憶がない。今も生残って初心を貫いてる人はいないのではないかも。そもそも人材を大量に養成しようとしても、歩止まりはすくないものだ。人の心はもともと一対一でつながってゆくものだ。私が合宿参加者になるべく少なくて、という意味もここに

月刊「国民同胞」通算百号発行記念
「国文研論叢」発行事業計画

本誌読者のうち、左記応募資格を有する方々(現在、社会人であると学生であるを問わず)が、平素研鑽して来られている諸研究に対し、その発表機関を御提供申し上げよう、との趣旨によりまして、継続年度事業にすることが可能かどうかは、未定であります。が、まず今年は左記により、一つの文集の作成を計画いたしました。

- ◇ 文集の名称、「国文研論叢」(昭和45年)
- ◇ 文集の概要、A5版、150頁前後
- ◇ 配布方法、無償配布(本誌読者対象として希望申出により一人一冊)
- ◇ 配布時期、昭和四十五年度後半期
- ◇ 募集原稿のほかに、当会々員による研究論文が附加されることもある

一、原稿応募要領
一、応募原稿は、四百字詰用紙15枚な

いし30枚
一、締切り、昭和45年8月20日(到着分)まで
一、送付先、東京都中央区銀座七七一〇一八柳瀬ビル内、社団法人国民文化研究会「国文研論叢」係

一、応募資格、国民文化研究会・大学教官有志協議会共催にかかる合宿教室参加経験者に限る(昭和31年の第1回から、昭和44年の第14回の各教室を含む)

一、応募者は、応募原稿の冒頭、右肩上に次の各項を必ず記入のこと。①第〇回合宿教室参加、②年令、③現在の勤め先とその担当内容(教職者の場合は専攻科目を)、④最終出身校とその卒業年度(応募者が在学生の場合は、大学名と科と何年生かを③に記入のこと)

一、審査委員、桑原暁一・夜久正雄・戸田義雄・小田村寅二郎・浜田収二郎

一、採用の分については、執筆者に掲載書十部を贈呈

名越 僕はソ連抑留五年で帰ってきてからは、復讐心に似た激情が動くのをどうすることもできなかつた。その反作用で今日まで来たようなものかも知れない。

もし川井さんと国文研運動がなかつたらずいぶん偏狭な冒険主義的なことをやっていたと思われる。

小柳 佐高出身の末安悟郎君がいた。寺尾さんを兄のように慕っていた。その寺尾さんが自決されたから、翌年九大病院で亡くなった。彼は寺尾さんのカゲを求めつゝ死んでいったようなものだった。美しく短かい彼の生涯は、混沌の中に一条の道を開いてくれた。それが私の心の系譜になつてゐる。

山田 小柳君のエネルギーの秘密がよく判らなかつたが、いまわかつた。

桑原 寺尾さんという人はずいぶん反抗的な所があった人と記憶している。それが比叡山合宿(昭和十七年)以来みちがえるように成長した。人間の中のホンで寮の委員をしていた。高知高校(旧制)モノといふのは、そういう経路をたどるものかも知れない。低抗なくすなりついてきた者は、あとに残らないようだ。

宝辺 日本の運命と、国文研のあり方について何か。

桑原 日本が将来も心配するとキリがないし、悲観と楽観が交代する日常なのだ。が、いま頃は高校生の中からも「先生、日本に共産革命など絶対に起きさせませんよ」と激励してくれるようなのが出てき

山田 文春二月号の「紛争はほくらのお祭りだ」という高校生座談会を読めば「戦前の日本大衆、戦争に参加した多くの大衆が、天皇のために死ねたんだから、死の覚悟ができたんだから、すばら

しいと思う」と発言して、天皇制への羨望を訴えている。要するに高校生たちはその若さにふさわしい献身犠牲の対象を求めているんだ。

小柳 修 修館高校で卒業式に「君が代」を歌うか歌わないかのアンケートをとった。歌うというのが七二%も出て、アンケートを書かした教師の方が面くらう始末だった。

桑原 若い世代はこうだなど、簡単に断定はできないのだ。もしそうだと思想の伝統は相続できなくなってしまう。

小田村 我々は国文研の将来はどうなってもよい。たゞそう言う育ちつゝある若い人々と広く心を開いて、お互に助けあってゆくことはできないものか。明治以降日本の学校では、基本的な学問と派生的な学問との位置づけをはっきりさせないまゝに社会に送りだしてきた。バラバラに授業して、すべてを同じ尺度で評価して、採点してそれで終りになってしま

うから、統一的な意志とか精神を育てることにならない。中教審あたりでカリキュラムを云々しても、立っている前提に対する反省がなされないから、結局機構いじりになってしまふ。この悪循環を断ちきって、我々の求める教育を国家の施策の中に具体化できるような方策はないものか。

桑原 東大安田講堂事件の時、夜久君が切歯扼腕して自分ひとりでも行つて毛沢東の写真を引きずりおろしたい、しかしそれもできず自分の無力感をなげくのみだと言っていた。「日本思想の系譜」のはしがきにも一貫して書いてあるが我々はあゝもした、こゝもほしかったと思つて努力すれば、するほど不備な点が目立つて、学問はいよいよ無限なものだと感ずる。自分が至らず駄目だということを知

らされるばかりだ。せめて一冊の本を書くとき、あるいは短かい原稿を書くとき渾身の力をこめてあたりたいたいと思う。そこに全力投球してゆくことで、自分の精神はどこかに生きてゆくと思ふよりほかないのではないか。

二つのエッセイ (紹介)

桑原 暁 一

風と木と

G・K・チェスタトン (1874~1936) のエッセイ集「怖るべき些事」(Tremendous Trifles) (研究社叢書) の中の一篇「風と木と」(The wind and the trees) の内容を、かいつまんで紹介したい。

強風にその梢を吹き乱されている大木の下に坐して、ぼくは思い出したことがある。それは知り合いのある坊やの云つたせりふである。吹き裂かれる空と激動する木々の下を歩いていた彼は、この不穏な空気を散々こぼしたあげくに、母親に云つた、「ねえ、どうしてあの木を取り去ってしまったの。そして、風はなくなるのに」となかなか頭の良さ、自然なミステイクではある。風を起すのは木であるという考えほど、人間的、且無理のないものはあるまい。現代の哲学者改革論者、社会学者、政治家の九十九パーセントがその考えでいるほどに、人間的であり無理のないものである。わが小さき友人は現代主要の思想家たちにそっくりである。たゞ彼のほうがすばらしいだけのことである。さて、この場合、木はすべての目に見

える物を代表しており、風は目に見えぬものを代表している。風は、その望み次第のところ吹く精気 (spirit) であり木は、精気の望むところで吹かれる物質である。向こうの丘の木が突然狂い出すというので、風がある、とわかるのである。すべての煙突の煙出しが町の空一面に狂い出すということ、事実、革命があるとなわかるのである。いまだ革命を見たものはない。モップが宮殿へ流れ込み、血が溝を流れ下り、ギロチンが王座よりも高く揚げられ、牢獄はぶちこわされ、民衆は武装する。それらは革命ではない、革命の結果である。世界の歴史において、革命らしい革命で、目に見えぬ事物の領域での不安と新しいドグマにみちびかれぬものはなかった。すべての革命は抽象的なものから始まる。たいいてい革命は、えらく (pedantically) 抽象的なものから始まる。

大きな人間のドグマは、風が木を動かすということである。大きな人間の異説は、木が風を動かすということである。物的環境がひとと道徳的環境を造り出すということになるとそれは、重大な変化のすべての可能性を阻むことになる。どうしてか? もしも自分の環境が自分をまったく愚かものにしたとすれば、自分が宜しくそのような環境を改変しようとすることもおぼつかなくなるからである。すべての思想を環境の所為 (accident of environment) として理解する人は、ほかならぬ自分自身の思想——思想環境説そのものも例外ではない——を自らぶちこわし、あやぶんでいるものにほかならぬ。人間の心を究極の権威を持つものとして遇することは、どのような思考——勝手気ままな思考にすら——必要である。道徳的眞実が第一だ、ということ

が本当にわからなければ、どんな改革もできないであろう。

すべての大きな歴史的動因は経済的なもので、したがって、現代のデモクラシーをして、経済的動因に基いて行動せしめるように、声を限りに叫ばねばならぬ、とする人々がおる。イギリスの極端にマルクス主義的な政治家たちは、彼等の理論に従って世界がいつも為すところを、世界をして為さしめようとして空しく努力ながら、小さな英雄的少数党として、立ちあらわれたい。 (注・世界が彼等の理論通りに動くのなら、彼等が少数党であるのは奇妙ではないか。) むしろ、事態が純粹に経済的たることを止めた途端に社会革命がある、というのがほんとうのところだ。デモクラシーを確立するために革命を持つことは決してできない。革命を持つためにデモクラシーを持たねばならぬのである。 (注・デモクラシーの下に多数党となって革命をすべきであつて、少数による革命はデモクラシーの破壊にほかならぬ、ということか) 風と雨とが止んだので、ぼくは木の光から立ち上つた。木々は、澄んだ日の中黄金の柱のように立っていた。木々の動揺と風の吹きすさびとは同時に止んだ。ところで、木が風をつくるのだ、と云い張る現代の哲学者がまだいるのかしら。――

著者チェスタトンはロンドンで生まれ美術学校に学び、文芸のあらゆる部門で活動した。そのパラドックス (逆説) で知られているということである。

本書の刊行は一九〇六年。随分古いもので、マックリオン等によるイギリス共産党結成 (一九二〇年) に先立つものである。物質 (経済) が意識 (観念) を決定するというマルクス等の唯物論は、木

がゆれるから風があるのだ、という小児の発想にそっくりだ、というのである。「純粹に経済的であることを止めた途端に革命はある」というのは、利害打算を離れて、時と場合によっては、死をも辞せず、というところに革命がある、ということか。(四五・一・一六稿)

ヒゲ削り談義

ロバート・リンド (1879-1949) のエッセイ集を漫然と見ていたら、前に紹介したイングの名が目についた。それは「人間の性質の変化」と云うエッセイの中で、「エレミヤからイング師に至るまで、予言者たちのすべての憂悶は、(人間の性質の)変化というものが、誤れる方向にあったという怖れから出ている」というのである。イング師と訳したのは Dean Inge) であり、憂悶と訳したのは gloom である。イングが gloomy Dean と仇名されていたことは前に書いたことである。それで、にわかリンドに親しみを覚えて、彼のエッセイを本気で読む気になった。こゝで取上げるのは、しかし、「人間の性質の変化」ではなくて、「カゲ削り談義」(A Sermon on shaving) である。

はじめの方に、安床屋でヒゲ削りの終わったときには、鼻口には石けん、あごには血、そして目には涙があるという話がある。また、ヨッパライ床屋にぶつかって、のど笛を切られないうちに、ヒゲが一部分しか削ってないのに、あわてふためいてそこを飛び出したという話もある。まるで落語にでも出てきそうなことである。——さて、あとの方で彼は云う。

私は何年前かに安全カミソリを買った。みんながそれを使っているらしく

たからである。しばらくの間は、新しいオモチャを持った喜びとともに、正直のところ、「完全なヒゲソリ」の喜びがあった。がしかし普通のカミソリの方がかうまく割れたものだという気がしてきた。だれだか、うまく剃るには、完全なカミソリだけではなく、完全な石けん泡 (lather) が必要であり、何々石けんが最上だ、と云うのを耳にして、私はその何々石けんを買った。一、二週間あとに私は朝のヒゲ剃りに著るしい改善をみとめた。ところが時間の経つにつれて、またはもや私は不満になってきた。私が何々カミソリや何々石けんを攻撃すると、友人たちはこんなことを云った。「大切なのは完全なヒゲ剃りブラシなんだ」私はすぐに良いブラシを買ってきて、水で顔を洗ひして、その包紙にある指示通りに石けんを附けた、そして何々カミソリを使って、大戦(第一次ヨーロッパ大戦のこと)以来はじめての満足なヒゲ剃りがつづけられた。もし、その石けんがなかったならば、鋭利なカミソリがあつても完全なヒゲ剃りはできなかったであろう。もし、そのブラシがなかったら、その石けんの効果もなかったであろう。また、そのカミソリの役を立ったのである。そこで私ははつぱやく、「何か一つのものだけにあまり期待をかけるな」と。吾々は、それが完全へのカギでもあるかのように、何か一つのものをあてにしがちであるが、実は、完全というものの内奥に達するには、どっさりカギが揃っていないければならない (without a whole bunch of keys) のである。完全なヒゲ剃りなどは、慎重な人には容易にできることだと思ふかもしれないが、

その秘訣がわかるのに私には半生かかった。完全な生活とか完全な社会とかができるのはもっと困難であろう。そのことについては、吾々は、ある一つのもの的重要性を強調し、他のもの的重要性を見落すという、同じ誤まりをしでかす。産児制限によって、私企業によって、国家主義によって、さては国際主義によって、それで文明を救おうと企てる、しかし他の等しい重要なものと一緒でなくて、それだけでよいというものではない。狂信家は、産児制限、共和制、あるいは共産主義などいふ語を口にすれば、それで天国への足がかりが与えられたと信じている。しかし、人間というものは、産児制限の下でもミゼラブルでありうるし、共和制でもミゼラブルでありうるし、プロレタリア独裁の下でもミゼラブルでありうるのだ。一つの壁だけで家は造られない。一つのプリンシプルだけで完全な社会は造られない。私は、完全な石けんと完全なブラシとで顔に石けんを塗ら、完全なカミソリで顔を剃った。ヒゲ剃り一つでもそうだ。それだけで完全だという、そんな黄金律のようなものがあるならば、モーゼの十戒など必要はなかったであろう。……今朝、ヒゲを剃りながらそんなことを、力をこめて、独りよがり、自分に云いきかせたのである。(四五・二・六)

—都立千歳高等学校—

出版予告

一、「憂国の光と影

——田所広泰遺稿集——

長いあいだ待望されていた故田所広泰先輩(国文研究員諸氏にとつての先輩)の遺稿集が間もなく出版されます。概要、B6版・五〇〇頁・上製本。

配布方法、「資料出版」として無償配布作成部数、二〇〇〇部
小田村理事長の序文(十四頁)からの一節

「この遺稿集の筆者であり、かつまた私どもにとつては先輩に当たる田所広泰さんは、終戦のあくる年、すなわち昭和二十一年に、三十六才の若さを惜しまれながら、東北地方の寒村、岩手県盛町の疎開先の仮寓で、胸患の闘病生活に力尽き、敗戦後の祖国の前途に暗澹たる憂いを馳せながら、その激しく短い憂国の生涯を閉じられた人であった。

その死に先立つ三年前、昭和十八年二月には田所さんを中心にした同志十余名が東条首相に直属する東京憲兵隊によって、東条の政策に反対する言論は、すなわち反戦・反軍・反国家であるとの嫌疑のもとに、百余日に及ぶ拘留を受けたが、田所さんは、なおそのあと同じ年に一回、翌十九年にも一回と続いて拘留され、それによって既往の病痕を再発させられ、やがてそれが原因で悲運の早逝となつたのである。それとともに、この昭和十八年以降、

田所さんは、その政治的発言、学術諸活動とともに政府(憲兵隊)によって完全に封ざられており、従つて、ここに集録したものは、主として昭和十七年すなわち三十二才までのもののうち、全作品から選ばれた約半分のものとなつた。(巻末に、わずかながら、終戦前後の日記から、和歌創作などを選んでその頃の心境を知るようすがに)とどめたことをご了承いただきたい) さて、この文集の目次が示すように田所さんは、詩人であり、哲学者であ

り、思想運動家であり、青年指導者であり、憂国の志士でもあったが、とくに「天皇に直属する生」(そういう題名の一文もあるが)を強く意識し、その見地に立って自己を厳しく猛省し続け、またその見地に立って世論に立ち向い、大学士風への批判に徹していった篤信の士でもあったのである。」

目次の中から

- 「所謂『日本学』の建設と『帝国大学』改革」(大学教授の適格性についての正しき規定を大学令に挿入せよ、而して胎動する全国的学生運動の将来に刮目せよ) (二十九頁)
- 「教育の意義は一変せり」 (二十九頁)
- 「學術の迷信から正信へ」(新潟高校生有志に) (二十九頁)
- 「現代に於ける精神科学の使命」 (三十一頁)
- 「本研究所構成生命体の生成史実」 (三十一頁)
- 「天皇に直属する生」 (三十一頁)
- 「概念思弁の対立抗争より直接経験の協力世界へ(責任、指導者、創造的綜合)」 (三十一頁)
- 「人間性の復活に開導せらるる現代神話の生成」 (三十一頁)
- 「現代の性格(ヒポテーゼの時代)」 (三十一頁)
- 「文武論」 (三十二頁)
- 「軍政論」 (三十二頁)
- 「戦争遂行の内面的力」 (三十二頁)
- 「歴史必然論とソ連礼讃論(細川嘉六氏の『世界史の動向と日本』について)」 (三十二頁)
- 「人間性の危機」 (三十二頁)
- 「現実感覚の鈍磨」 (三十二頁)

◇とくに御希望の向きは、その理由を附

して三月十日までに、本会東京事務所にお申出下さい。できるだけ御希望にそように努力いたします。但しその際、御職業(明細に)と御年令もお知らせ下さい。

二、「欧米名著邦訳(明治)集」

従来、当会が発行を続けてき、かつ大變御好評をいただいてまいりました国民文化研究会叢書「日本思想の系譜」(全五巻)の外編ともいへば、「欧米名著邦訳(明治)集」が近々、同叢書№10として発行されます。新書版四百余ページで、従来通り「資料出版」として関係者に二、〇〇〇部が無償配布されることになりま

す。幕末から明治時代にかけて、先人が心魂を傾けて、欧米思想の摂取と紹介に努めたあとを求め、古来蓄積されたわが国の文化伝統が、これを機会に見事に開花した姿を、文献資料に照らして解明するもの。現今のように欧米思想が未消化のまま放置され、あるいは、欧米合理主義とうたわれて偏重されたままでいいの。そうした不徹底な考えや一般論や先入感に蔽われるのではなくて、いはば身体をはって、持っている力を尽くして丹念に欧米名著に取り組んだことを、ありのままにたどらうとしているのが本書です。

目次

- 1 福沢諭吉「西洋事情」アメリカ独立宣言
- 2 中村敬宇「西国立志編」スマイルス
- 3 加藤弘之「国法汎論」ブルンチュリ

- 4 土居光華「英国文明史」バックル
- 5 聖書と讚美歌
- 6 西周「利学」ミル
- 7 島岡剛「社会平權論」スペンサー
- 8 外山他「新体詩抄」
- 9 中山兆民「民約訳解」ルソー
- 10 大森惟中「美術真説」フェノロサ
- 11 陸奥宗光「利学正宗」ベンサム
- 12 石川千代松「動物進化論」モールス
- 13 石川暎作「富国論」スミス
- 14 坪内雄蔵「該談奇談自由太刀余波鋭鋒」シエクスピア
- 15 二葉亭四迷「あひぶき」ツルゲーネフ
- 16 森鷗外「於母影」ゲーテ
- 17 若松賤子「小公子」パーネット
- 18 森鷗外「即興詩人」アンデルセン
- 19 内田不知庵「罪と罰」ドストエフスキ
- 20 綠堂居士「若きエルテルがわづらひ」ゲーテ
- 21 夏目漱石「ホイットマン」
- 22 姉崎正治「宗教哲学」ハルトマン
- 23 黒岩涙香「敵窟王」デウマ
- 24 内田魯庵「復活(カチュューシヤ)」トルストイ
- 25 上田敏「海潮音」ボードレール
- 26 秋水・利彦「共産党宣言」マルクス・エンゲルス
- 27 姉崎正治「意志と現識としての世界」ショウペンハウエル
- 28 生田長江「ツアラトウストラ」ニーチェ
- 29 小山内薫「脚本夜の宿」ゴッリキ
- 30 北村透谷「エマーソン」
- 31 三井甲之「ファースト」ゲーテ
- 32 明治天皇とグラント將軍の対話
- 33 河津祐之「フランス革命史」ミギユ
- 34 大津康「ドイツ国民に告ぐ」フイヒテ
- 35 元良・中島「心理学概論」ヴァント
- 36 「英訳古事記」チェンバレン
- 37 上田敏「神曲」ダンテ
- 38 「道徳原理」カント
- 39 林鶴一「科学と臆説」ポアンカレ

編集後記 座談会記事にもあります様に

発刊の昭和三十六年十一月には、第四回と第五回の合室教室の記録が「国民同胞」の探求に「続国民同胞感の探求」として既に刊行されてをり、更に第六回の記録と併せて三冊シリーズが計画されてゐた時になります。当時、小泉信三先生がこの書評を毎日新聞に寄せられて、「戦前派の人々も戦後派の人も何とかこの断層を取除くことは出来ないものかと、同じような謙虚さと忍耐とをもち取組んで行き、そして結局険しい今の世の中にも、時代の断層をこまかすことなく打開する道のあることがはつきり実証されたようであった」と紹介されたことは、今も感謝の念を禁じ得ませんが、安保闘争直後の生々しい合宿体験も思ひ出されてきます。「国民同胞感」といふ古いことばが、鮮やかな一体感の確信を表明することばとして映ったのも、その体験を通してであったと思はれます。機関誌の名前を「国民同胞」としたことも、その線上での名付けであったと思ひます▼住所変更通知を下さる方の御参考迄に申し上げますと、一番厄介な宛名印刷は、今は東京事務所の手井恭子さんが、毎月変更住所のガリを差し替へて、印刷した封筒全部を下関に送ってくれます。たいへんな仕事だと感謝してゐます▼一号から百号迄の目次総覧を附録としました。その附録の方に昨夏阿蘇合宿教室の記録「日本への帰郷第5集」出版のお知らせをしてゐますので御覧下さい。

訂正お詫び 一月号の今上御歌の中(一頁最後の行)「長崎の県」のルビがまちがってゐましたので「長崎の県」と御訂正下さい、深くお詫び申し上げます。

月刊「国民同胞」目次総覧

1号〜100号

(各号B5版8頁)

第1号 (36・11)

発刊に当って……………小田村寅二郎
二〇年前の学生生活から 学問・友情・祖国

山田輝彦

日本の晴姿をここに……………津下正章
「国民同胞」発刊を祝して……………黒岩一郎

鹿兒島大学合宿記……………別府次郎
慰霊祭から―亡き師友に献ぐる歌

先哲の言葉(山田輝彦・高島重則) 小柳陽太郎
☆第二回雲仙合宿感想文

☆各地たより ☆図書推薦
☆高校生に見た合宿

第2号 (36・12)

精神の回復を道義の確立を……………川井修治
現代教育の内側に欠けたもの

―ある教師志願者の手記―……………国武忠彦
ありとあらゆるものを持ってゐて

自分自身を持たぬ日本……………野口恒樹
集団によるつるしあげは民主主義に

おける合理性に果して合致しうるか

小田村寅二郎
旅(短歌)……………夜久正雄

先哲の言葉(福沢諭吉)……………小柳陽太郎
カメレオン学者……………名越二荒之助

☆第一号を読んでこう思う
☆歌のてびき ☆杜詩二題

☆大教協別府会合

第3号 (37・1)

〔この号12頁〕
変らないものの上に立つて変化の

大勢を直視しよう……………宝辺正久
「保守主義の本領」をよんで

小田村寅二郎

(小説) 歴史共和国探訪記―「自称夢遊病者」
の筆者が歴史共和国の歴史で偉業を遂げ、
幾回か敗北、山口三
矢の三人と面談した話

☆意見往来(野間口行正・平田正彦・
古市洋子・沢部寿孫) ☆短歌

☆読者のたより

第4号 (37・2)

大学の門を出る諸君へ……………同人会議より
黒上先生という人―われわれの思想との邂逅として

高木尚一

護憲論への疑問……………森三十郎
意見往来……………七夕照正・上村和男

先哲の言葉(福らん・教行信恵)……………小柳陽太郎
☆福岡会議から ☆提案 ☆短歌

第5号 (37・3)

戦後史からの解放―人間の条件と共に独立の条件を
恋愛論序説 神々の復活と人間の進歩

名越二荒之助

書評・丸山眞男著「日本の思想」 江里口淳一郎

意見往来……………仲和俊・酒匂優一
ベルグソンの言葉から……………高木尚一

無信の信……………桑原暁一

先哲の言葉(玉川直長・藤氏物語・玉の小櫛)

☆読者の便り ☆短歌 小柳陽太郎

第6号 (37・4)

日本外交の脱皮……………小田村寅二郎
私の宗教観―神と人と人類と……………山田輝彦

ジャーナリズム批判・綜合雑誌
「論争」に注目する……………名越二荒之助

意見往来……………齊藤正治・大勝洋祐
合宿の思出など……………小泉一也

先哲の言葉(兼好・徒然草)……………小柳陽太郎
☆短歌 ☆第七回夏期学生青年合宿
研修会予告

第7号 (37・5)

―学生幹部特別研究会号

学生幹部育成を本格化す
研修会日誌……………垣内拓

参加者名簿
習作短歌抄
感想文抄

参加学生申し合せ事項

第8号 (37・6)

協同研究の意義……………瀬上安正
結婚論(恋愛論続篇)……………福壽美の提唱

感想・カレルを読んで……………江里口淳一郎
雲揚艦事件……………加納祐一

流行歌について……………池上明
思考硬化症……………小川幸男

社会を支えるもの……………加藤善之
先哲の言葉(三菜実美・偶書一則)……………小柳陽太郎

☆読者の便り ☆短歌

第9号 (37・7)

合宿教室への誘い……………同人会議より
古事記について―わが神々のいのちの奔馳―

小柳陽太郎

若者よ、仏典を一度読んで見給え

黒岩一郎
国体は何処へ行ったか……………野口恒樹
ヨーロッパ紀行雑感……………大津留温

書評(福田恆存「現代の悪魔」・竹山道雄
「まぼろしと真実」)……………山田輝彦

☆合宿教室の歩み ☆短歌

第10号 (37・8)

共産主義の根源的克服のために
友情の歌……………川井修治

革命はこうして起る……………夜久正雄
―「ツツが終つたとき」を読んで……………名越二荒之助

わが万葉観……………宮脇昌三
古典の窓(大空起)……………小柳陽太郎

☆短歌

第11号 (37・9)

―第七回合宿教室特集号

国民同胞感の全国的浸透へ……………山田輝彦
福田恆存先生の講義

―現代の思想的課題―
木内信胤先生の講義

―これからの日本の経済と世界の経済
和歌習作抄

合宿教室の焦点―「班別討論」
2「古典の論議」

3「和歌創作と相互批判」
合宿教室日程表・参加者一覧

第12号 (37・10)

「人間」発見……………桑原暁一
―第七回合宿教室のはり書き感想文から

革命はこうして起る―「赤い太陽」を読んで
国民経済的考え方……………名越二荒之助

統一ヨーロッパ旅行雑感……………水野留温
古典の窓(正岡子規・歌よみに与ふる書)

☆短歌

第27号(39・1) 街頭の思い―物信と心理の形質―

小田村寅二郎 所謂「人間天皇の宣言」について

野口恒樹 共に手をとりあって前進しよう

合原俊光 古典教育について思うこと…小柳陽太郎

☆新春寸言(黒岩一郎・斉藤知正・津下正章・羽田重房・峰辰次・森三十三郎・大沢勲・酒匂優一・徳地康之・宮脇昌三・岡村義一)

☆同胞歌壇 ☆刷りぶみ「和歌通信」の紹介

第28号(39・2) 国家観を正せ―トイ・チナの書記に就いて―

川井修治 昭和三十九年新年発表

両陛下の御歌について…夜久正雄

夜久正雄 39年「前進の集い」開く…徳地康之

徳地康之 聖徳太子讃仰研究…合原俊光

合原俊光 「前進の集い」における発表 紫田悌輔

前進の集い「短歌抄」 山田輝彦

和歌相互批評のメモから…山田輝彦

合宿を終えて友に…合原俊光

☆前進の集い参加者名簿

第29号(39・3) 本会顧問 尾崎士郎先生の訃をいたんで

小田村寅二郎 開かれた交流―前進の集い通信文―

田村 潔 まごころを持つということ…加藤善之

高校生活の思い出…宝辺正久

古典の窓(日本書紀)…小柳陽太郎

☆同胞歌壇 第30号(39・4) 波立ちはじめた政局…川井修治

桜島合宿を目指して…西元寺紘毅

講孟余話小柳陽太郎先生の講義…田村 潔

合宿歌集抄 実朝の歌…山田輝彦

皇居清掃奉仕に参加して…山田美智

歌心と人生観…宝辺正久

☆同胞歌壇 第31号(39・5) 青年たちはいま安定ムードの中に放置されて

マスコミ展望日本再発見の動き…山田輝彦

和歌と人生…徳地康之

科学と短歌…江里口淳一郎

国士・田所広泰氏の書簡から

―昭和十七年から二十年を顧みて― 岡村義一

☆同胞歌壇 第32号(39・6) 憲法論議の空転を憂う…川井修治

「信」を求めて―学生の書簡集から

絵と歌と―田代二見画伯・寸描

岡山合宿記…夜久正雄

千年の英傑―史上最大の教訓―名越二荒之助

古典の窓(金田夏彦・化物の進化)…小柳陽太郎

マルクス主義の革命理論とロシア革命の

現実…川井修治

和歌・南伊豆ゼミ旅行…夜久正雄

和歌・今日の佳き日を…白井 伝

古典の窓(平家物語)…小柳陽太郎

☆同胞歌壇 第34号(39・8) 良識という事…柴田悌輔

「ますらを」の歌―歴代名歌講義―夜久正雄

「紫の火花」―岡村博士著―を讀みて

悠々たる心を…高木尚一

難感三題―情死・歴史・鎌倉焼― 桑原暁一

わが回想の昭信会…宮脇昌三

第35号(39・9) 体験と認識…西元寺紘毅

合宿教室の経験…徳地康之

参加者の言葉 和歌創作から

第36号(39・10) 祖国のいのちとともろともに…高木尚一

殉死と大逆―ナチヨナリズムとの関連において

女性として思うこと…山田輝彦

松下村塾を訪ねて…行武靖枝

世界最終Z革命…今林賢郁

慰霊祭だより 名越二荒之助

古典の窓(岸林光平・南山晴雲)…小柳陽太郎

九想…岩越豊雄・徳地康之・古川修

古典の窓(金吾物語十巻)…小柳陽太郎

☆同胞歌壇 第38号(39・12) 内に固め外に備うるの時…川井修治

短歌と歴史―野と政治―夜久正雄

歴史の底にあるもの…桑原暁一

空白への訣別(九州・京都・東京合宿手記)

古典の窓(露草野抄巻三)…小柳陽太郎

☆同胞歌壇 第39号(40・1) 現代思潮に対する 漢方療法(二)…小田村寅二郎

総評は何故つぶれないか…加藤善之

歌心…夜久正雄

学生生活の最後に…柴田悌輔

師友の賀状に…夜久正雄

東京八日会の合宿に思う…加部隆三

☆同胞歌壇 第40号(40・2) 現代思潮に対する 漢方療法(一)…小田村寅二郎

文武論―呪縛からの解放…小柳陽太郎

福岡合宿に於ける学生の研究発表

私達はどうな時代に生きているか

「まごころをつくす」に思う…今林賢郁

吉田松陰について…寺川真知夫

「期待される人間像」をめぐる

☆同胞歌壇 ☆熊大有朋会だより

高教組脱退↓除名記……………名越二荒之助

☆同胞歌壇

第42号(40・4)

ベトナムの風雲に思う……………川井修治
若き哲学学徒の手紙……………宮脇昌三
春季学生幹部会宿舎より
論語を読む……………小柳陽太郎
朴鉄柱先生の講話……………内田英賢
正岡子規と歌……………磯貝保博
「葦牙」を読む……………夜久正雄

☆同胞歌壇

第43号(40・5)

一つの視角―日本人のこゝろ……………山田輝彦
天皇論序説(1)―今や天皇統治の問題は真正面からとり
あけられねばならぬ……………川井修治
夜久正雄著「天皇と天皇制についての基
本的思考」出版あとがき……………亀井孝之
小詐欺師……………加藤善之

☆同胞歌壇

第44号(40・6)

民主主義不在論―いまの日本の政治では、民主主義
は果たして存在し得るであろうか……………小田村寅二郎
ベトナム論議に望む……………浜田収二郎
天皇論序説(2)―君主制一般にまつわる誤解の数々……………川井修治

第45号(40・7)

文化を創造する力……………長内俊平
モスクワで会った学生たち……………若泉 敬
一ジャーナリストの内政所感……………島田好衛
現代思潮に見られる致命的な盲点
―とくに学生運動について……………合原俊光

一つの提案……………上村和男
神を知る心の欠如……………高橋 勇
古事記を読み終りて……………今林賢都

第46号(40・8)

234=234、233=0論……………小田村寅二郎
―附名号の「民主主義不感症」に就いて―
天皇論序説(3)……………川井修治
アメリカの大学・学生気質……………吉田靖彦
訪韓を前にして……………井上慎一・永島 学

☆同胞歌壇

第47号(40・9)

―第10回合宿教室特集号
ひらかれた信と勇氣……………磯貝保博
合宿教室の経過……………井上慎一・西元寺紘毅
感想文の中から
☆合宿詠草から

第48号(40・10)

日本の神々―思想史の二つの課題……………山田輝彦
人間尊重論の暗い影……………加藤善之
慰霊祭献詩歌
福田恒存著「平和の理念」を読みみて
亀井孝之

第49号(40・11)

―この号12頁―
―国文研十周年記念の集ひ
新たなる決意で前進を誓う
ごあいさつ……………理事長 小田村寅二郎
祖国を護る心情をよび起こそう
学生代表 西元寺紘毅
〃本物〃だと感じさせられる
世界経済調査会理事長 木内信胤
いちばん因縁深いグループ
参院議員元郵政相 迫水久常
志を貫いて苦難の道を進ませよ
衆院議員 山本勝市

女子学生もとともに
歌人 共立女大教授 中河幹子

☆同胞歌壇

合宿訓練は道統継承の唯一の方途
参院議員元厚相 坂田道太
邪悪なものと戦う覚悟を
政治評論家 花見達二
「五箇条の御誓文」が日本のビジョン
元陸軍大将元文相 荒木貞夫
自分の生地をそのまま出そう
参院議員 源田 実
日本男子の心意気に生きよう
衆院議員 長谷川峻

第50号(40・12)

共産主義のたそがれ
―最近のソ連・中共を直視せよ……………川井修治
信の復活……………高木尚一
学生運動に思う
―聖徳太子のおとばによれて……………稲津利比古
和歌・宇佐神宮参拝……………夜久正雄
全国各地学生生活だより
―福岡・京都・東京・鹿児島・女子学生―
時流に勇氣ある発言を……………坂東一男
和歌・空路上京……………山田輝彦

第51号(41・1)

十二月八日未明―事実とそれに伴なう言葉―
小柳陽太郎
新刊の「今上陛下御製集」について
夜久正雄
十余箇国の境を越えて……………桑原暎一

新春隨筆(海都隨想津下正章・男らしさというこ
と長内俊平・新年郵歌会給に就進しよう 脇山
良雄・赤面心理三重野梯次郎)・「人間の建
造」を読んで磯貝保博・心を尽し創作する中
原正昭・人柄について森重忠正・批判につ
いて井上慎一)

☆同胞歌壇

☆和歌・国文研十周年記念出版物に寄
せて……………松田福松

第52号(41・2)

大学の自治と学生の自治について(1)
―附・東大當局発表のパンフレット「学生の自治と
学生の自治」を読んで……………小田村寅二郎
小歌うたひで―大事記より……………桑原暎一
古典の窓(宮本武蔵・五輪書)……………小柳陽太郎
☆国文研だより ☆同胞歌壇

第53号(41・3)

大学の自治と学生の自治について(2)
―附・東大當局発表のパンフレット「大学の自治と
学生の自治」を読んで……………小田村寅二郎
1号?50号「国民同胞」目次総覧

第54号(41・4)

大学の自治と学生の自治について(3)完
―附・東大當局発表のパンフレット「大学の自治と
学生の自治」を読んで……………小田村寅二郎
比叡山西教寺合宿の記……………福島義治
☆和歌・合宿での和歌創作

第55号(41・5)

農山村に在って―その荒廃の現状と問題点―
宮脇昌三
愛国者の日……………戸田義雄
比叡山合宿を終って―(感想文から)―
日羅のこと―聖徳太子研究の一こま
桑原暎一
和歌・神宮勤勞奉仕……………青山新太郎
和歌・二月靖国神社に詣つ……………小柳陽太郎

☆同胞歌壇

第56号(41・6)

神社について考へたいこと……幡掛正浩
明治天皇御製と山……広瀬 誠
ロバに水を吞ますもの

第57号(41・7)

天皇家の伝統―小泉信三先生の追悼― 川井修治
固定概念の打破―天皇と國家の問題― 山田輝彦
田代順一歌集「雲か萍か」を読んで 稲津利比古
陸軍士官学校で学んだもの……松吉基順
和歌・天皇誕生日、平和台競技場における祝祭に参加
小柳左門
古典の窓(謡曲・岡田川) ……小柳陽太郎

第58号(41・8)

教育観の是正を要す……加藤敏治
大学問題の行方―日本の文化史的使命に及ぶ―
高木尚一
心田荒る……上田通夫
読書案内(小泉信三「福沢諭吉」・竹山
道雄「京都の一級品」・鮎田豊之
「肉食の思想」)……山田輝彦
古典の窓(伊藤「春」日記) ……小柳陽太郎

第59号(41・9)

交流の苦斗の後に……岸本 弘
合宿教室の経過
参加者の感想文から
合宿詠草から

第60号(41・10)

日韓親善のかけ橋に

―日本学生義務訪問報告記―……川井修治
訪韓印象記(徳田浩士・古川修・福島義
治・磯貝保博)
現代流行歌批判―日本回廊の歌声を聴け―
名越二荒之助
自ら行ずることより―伝統継承の道―
長内俊平
古典の窓(山樞集・岡田只谷) ……小柳陽太郎

☆同胞歌壇

第61号(41・11)

歌御会始、詠進のこと……関 正臣
ソ連という古い国……倉前義男
和宮の御生涯……宮脇昌三
慰霊祭献詠
☆各地の集り―新薬師寺・東京・鳥見島―

第62号(41・12)

心の用意を……加納祐五
古事記研究……今林賢郁
歌集紹介(岸井道典「白山風水」・川路得良「水華」)
進みありて……夜久正雄
某月某日……江里口淳一郎
行為と道義心と……溝江 優
古典の窓(賀茂真典「四歌考」) ……小柳陽太郎
太宰府合宿報告記……島津正数
☆太宰府合宿歌稿より

第63号(42・1)

天皇御歌(昭和四十二年元日発表)
「清き一票」と「日本の政治」
―マスコミへの報告―……小田村寅二郎
日本の岐路―P・W・ツイツグ氏の所説―
川井修治

桑原暁一氏著「日本精神史鈔―親鸞と実朝
の系譜」紹介……夜久正雄

小田村理事長帰国報告会から……上村和男
☆各地区合宿だより
―富山・南九州・京都・東京―

☆同胞歌壇

第64号(42・2)

今上天皇御歌拜誦……夜久正雄
述而不作……山田輝彦
「日本」病気のこと……瀬上安正
鬼の話……小柳陽太郎
夜久正雄氏著「古事記のいのち」紹介
高木尚一
大東亜戦争は正義の戦争であった
―一般の麦地に落ちて死なば―名越二荒之助
(韓国からの便り)衣帯水的な地理的条件
朴 鉄柱
和歌・病床にて……小林国男
「きつな」合宿教室女子生会員の交流機関誌につい
て

第65号(42・3)

本有への回帰……幡掛正浩
経験を束ねる力
―竹山道雄著「樞の木と齋藤」から―
小柳陽太郎
馬子の問題―聖徳太子研究叢書―……桑原暁一
スタンレー・ウオッシュユバンの「乃木」
を読んで……古山 修
毛路線は一つの掟―集てしない反修主義闘争―
浜田収二郎
本会の運営を担う若手グループの集い
上村和男
和歌・「国民同胞」4月号の合宿詠草を詠む
青山新太郎

第66号(42・4)

「つけ加へる」といふこと……長内俊平
三井甲之と斎藤茂吉……広瀬 誠

大学における勉強とは何か……宝辺正久
三井甲之著「今上天皇御歌解説附「万葉集」
刊行のことば」……亀井孝之
自他を分かたず―聖徳太子研究叢書―桑原暁一
藤沢女子合宿の記録……梅田咲子
昭和42年春季太宰府合宿……井上慎一
太宰府合宿感想文抄

第67号(42・5)

生と死……山田輝彦
未成熟な言葉……加藤善之
落語「日本国憲法七不思議」
名越二荒之助
心の握え所……春藤純生
生の充実を求めて……片岡 健
「学友諸君に訴う」……早稲田大学信和会
和歌・二月十一日……青山新太郎

第68号(42・6)

ゲートとハイゼンベルク
現代思想と企業思想に関連して……高木晃吉
マルクス・イデオロギーからの脱却のた
めに……川井修治
特攻隊の記……加藤善之

第69号(42・7)

合宿への積極的参加を……小泉一也
草莽非運の志―赤報隊相良総三のこと
……宮脇昌三
防人の歌……沢部寿孫
クラブ生活に求めるもの……岸本 弘
中東動乱とマタイ伝……瀬上安正
「合宿教室」事務局からの緊急のお知らせ

第70号(42・8)

現代日本における一つの疑惑点
「戦争」と「平和」についての錯覚と虚妄―ベトナム問
題をめぐる「学者作家グループ」等の発言
小田村寅二郎

川出麻須美先生……………夜久正雄
黒上先生の御本を読んで思うこと

靖国の銀杏……………関 正臣
古典の窓(菅原道喜)……………小柳陽太郎

第71号(42・9) 第12回合室教室特集号

人生事実とわれら国民の道……………凶師博隆
合宿教室の流れ:志賀建一郎・小柳左門
合宿詠草より

参加者の感想文より
初参加の韓国学生団を迎えて

第72号(42・10)

漱石とナシヨナリズム……………山田輝彦
歴史の学——亜細亜大学と大田耕造先生の阿蘇合宿に
おける御挨拶原稿

心理的鎖国からの脱却……………倉前義男
大韓民国訪日学生団の案内をして

慰霊祭献詠
古典の窓(山県大武・柳子新巻)……………小柳陽太郎

第73号(42・11)

「時勢」を見る目——松野嶺山と山県大武——
明治天皇御製について……………小柳陽太郎

和歌・紀州勝浦にて友を偲ぶ……………夜久正雄
現世の愛情について(愛見の悲)

——岡山大学バルカソンの会——伊藤三樹夫
東西文化と日本……………瀬上安正

第74号(42・12)

今後の日韓関係はいかにあるべきか
——第二回日本学生訪韓研修旅行報告——

訪韓報告座談会——大学・高校訪問を中心に——
名越二荒之助

国防を考える——鹿児島大学、坊の津合宿——
松木昭・土直直彦

明治大学「国政研究会」から
繁水正博・豊島典雄

☆同胞歌壇

第75号(43・1)

背私向公の道を進もう
——過去の否定と忘却に反対する——

人間最高の宗教……………浜田収二郎
白鳥の記……………奥田克己
美しい便り……………桑原暁一
元旦随想……………長内俊平

「大学自治」に関する一資料
青年の思想……………高木尚一

和歌 広瀬誠・白井伝・丸山行雄
古川 修

第76号(43・2)

昭和四十三年元旦発表の 今上御歌を拜誦して

菊水の記……………広瀬 誠
私の生き方……………桑原暁一
人間の品位といはゆる「生活」について……………亀井孝之

偽者はゆるせない……………三宅将之
九大における不法占拠をめぐる……………田村 潔

国文研相統体制の樹立について
和歌・車中にて……………沢部寿孫
沢部寿孫

第77号(43・3)
国の個性——権力・反権力をこえるもの——
山田輝彦

自治権・運動組織・天皇の問題
——小田村理専長を囲む長崎談会——

北山林業の山本翁を訪ねて……………田村 潔
観心寺の記……………行武 潔

桑原暁一

「若い国文研グループ」第二回目の集い
沢部寿孫

ベトナムの堅琴——水島上尊兵の手紙——
名越二荒之助

第78号(43・4)

学問の力……………小柳陽太郎
日本の大学の明・暗二題……………小田村寅二郎
古典を読むところ

——女子高生生の「十七夜憲法」読後感想文から——
信貴山の記……………行武靖枝
八幡・大正寺合宿の記……………桑原暁一

☆八幡大正寺合宿詠草
——今夏の暑熱合宿教室をめざして——

白石 肇

第79号(43・5)

いざ立たん、学園正常化に
孝明天皇の御製について……………川井修治
葉山の記……………夜久正雄

葉山女子合宿詠草より
早大紛争と私……………桑原暁一
早大紛争と私……………今林賢郁

かけがえのない友を得たうれしさ
山田苑枝

第80号(43・6)

真実の報道とは何か……………浜田収二郎
情操と学問と

——高校生に贈る折々のことば——
磯長・天王寺の記……………宮脇昌三
勝鬘経義疏から……………桑原暁一

情意の世界……………梶村 昇
大いなる生命に目覚めて……………江里口淳一郎

第81号(43・7)

日本はどうなるのか……………高木尚一
「学生問題」を考える……………小田村寅二郎
三条実美と前田慶章……………広瀬 誠

「黒部の太陽」から
——大田恒氏と般若心経——……………岡村義一

古典の窓(雨月物語・菊花の豹)……………小柳陽太郎

☆同胞歌壇

第82号(43・8)

「日本を守る」とはどういふことなのか
思想の原点——古くして新しい問題「国家」——

有情の記……………山田輝彦
文明の戦い——日本文化再発見の意味と題ず——
長崎大学信和会から……………桑原暁一

川井修治先生講演会を聞く……………加藤善之
白石 肇

第83号(43・9)

第13回合宿教室特集号

第13回合宿教室開催さる……………三宅将之
合宿教室の経過……………斎藤利明・田中輝和・安藤隆雄

参加者の感想文から
合宿詠草から……………桑原暁一

第84号(43・10)

国のいのち——チエコ事件に思ふ——……………宝辺正久
「大東亜戦争を見直そう」二題……………名越二荒之助

白鷺の記……………桑原暁一
日本国憲法について……………亀井孝之

日本の知識人と生活人……………柴田佛輔
昭和43年の慰霊祭献詠……………磯貝保博

第85号(43・11)

黙過できない暴走と怯懦……………関根康之
——拳銃騒動と東大問題——……………関 正臣
友松の記……………桑原暁一
東大紛争の中にあつて……………石村善悟

第86号 (43・12)

心の拠りどころ「或ごん思ふこと」……加納祐五
世界戦略の見方……倉前義男
岡澤先生にお会いして……小柳左門
学園に「信」の場を回復しよう
——富山大学信和会合同主催して——

岸本 弘
外国人の見た明治百年……関 正臣
つづじの記……桑原暁一
戦没学生の手記に思ふ……松木 昭

第87号 (44・1)

昭和44年元日発表の今上御歌を拜誦して

何とも理解しかねることの続出 広瀬 誠
——大学問題をめぐって——……小田村寅二郎
名もなき民の思ひ(「国のおきて」序論) 長内俊平

「天皇陛下」……丹治正平
野菊の山……三宅教子
各地大学の研修だより——岡山・東京・富山・長崎
和歌木村長治郎・高橋瑞助・青山新太郎・広瀬誠・沢部寿
孫・田川美代子・久富啓

第88号 (44・2)

東南アジア旅行団帰国報告……川井修治
東大に最悪の事態到来か……小田村寅二郎
「権利」という考え方について 加藤善之

第89号 (44・3)

悲しみの感覚……山田輝彦
名もなき民の思ひ——「国のおきて」試論
川端氏の記念講演について 長内俊平
——ハイゼンベルク博士の講演も想起して——

高木晃吉
「明治・大正・昭和護憲詔勅集」刊行の
ことば……亀井孝之

第三回葉山合宿——若いグループの集い——

野間口行正

☆同胞歌壇

第90号 (44・4)

人の生き方を正す学園を……沢部寿孫
勇者・正岡子規……小柳陽太郎
内乱はこうして起る……名越二荒之助
地方教師の憂い……村田英雄
☆同胞歌壇

第91号 (44・5)

大学あって日本なし
——学問の根柢にあるもの——……浜田収二郎
「日本思想」の系譜全五冊の出版を終え
て——最終巻「はしがき」から——小田村寅二郎
日本思想の系譜(全五冊)の目次
生徒と共に……小林国男
卒業にあたって 第六葦牙同人
——よらかな生命の流れの中で——伊藤三樹夫
——大学争について思うこと——野口 明宏
新しい学生運動と同信相続……加部隆三

第92号 (44・6)

「わたつみの像」私感……山田輝彦
東洋と西洋……瀬上安正
「東大紛争両主役の考え」について 宮脇昌三
勇気の源泉 ——「日本思想系譜」全五冊の刊行をよう
こが——小泉一也
オキナワ返還問題について 朴 昇浩
——島国一市民からの苦言——

第93号 (44・7)

制度の改革が全てか……三宅将之
大学立法をめぐって
——政府・文部省に「行政責任」の自覚を——
小田村寅二郎

万葉集防人歌について……広瀬 誠

古典雑感……小柳陽太郎
反骨精神……磯山保博
大学のみが学園の場にあらず……岸本 弘
いざ立て、思想の戦に……田村 潔
混乱からの脱却を求めて……今林賢郁

第94号 (44・8)

自国サデイズの典型
——歴史文化批判としての教育権決定訴訟——
戸田義雄
天皇・皇后両陛下下の行幸啓を富山県植雄
祭にお迎へして(てがみ)……広瀬 誠
お伊勢さま雑記……関 正臣
「動物農場」の著者……桑原暁一
父への手紙……長内俊隆
☆阿賀合宿教室しきしまのみち詠草抄

第95号 (44・9)

第14回合宿教室特集号
第14回々合宿教室開催
——大学問題の核心に迫る——……沢部寿孫
この合宿に実現しよう、ほんとうの「教
育の場」を!!……今林賢郁
合宿五日間の経過……山口秀雄・岸本常男・伊藤
明・北川文雄・石村善昭
参加者感想文
合宿詠草より
和歌・合宿教室終了のしらせをいっただきて
三浦貞蔵

第96号 (44・10)

宇宙時代の限界……名越二荒之助
科学と教学……奥田克己
夢から覚めよ……北島照明
子規と啄木……山田輝彦
素朴な道学者……桑原暁一
反「安保」のねらいは何か……山内健生
☆慰霊祭報告

第97号 (44・11)

日本民族の正念
——早和の大海へ往々——瀧の水(三井甲之丞)をよみて——
高木尚一
高校教師はこれでいいのか……国武忠彦
田所兄の憶い出……桑原暁一
中部太平洋を訪れて……倉前義男
レタ著「ヒューマニズムの経済学」を讀
んで思うこと……津下有道
和歌・法隆寺頌……夜久正雄

第98号 (44・12)

ゲートと社会主義……桑原暁一
独断的教育を排するために
——教育裁判の法廷に立てて——……名越二荒之助
鹿大封鎖無血解除の記……川井修治
和歌・青砥君への便りのはしに
長内俊平
かへし……青砥宏一

第99号 (45・1)

昭和四十五年元日発表の
今上御歌を拜誦して……広瀬 誠
波に日の出……脇山良雄
観念への奉仕者……三浦貞蔵
再び「動物農場」の著者について 桑原暁一
モノとコロコロ企業経営者の責任……高木晃吉
「高教組脱退」に関すること……岸本 弘

第100号 (45・2)

「心身共に頑敏なるを欲す」……山田輝彦
百つ記念・回顧座談会
二つのエッセイ(紹介)……桑原暁一
☆出版予告
1. 愛国の光と影——田所広泰遺稿集
2. 欧米名著邦訳(明治)集
☆「国文研論叢」発行事業計画

国民文化研究会
既刊目録

- 一、国文研叢書 新書版(ナンバー・書名・著作者・発行年月・頁数)
 - No.1 古事記のいのち・夜久正雄・41-3
 - No.2 日本精神史鈔——親鸞と実朝の系譜・桑原暁一・41-11・279
 - No.3 弁証法批判の歴史・高木尚一・42-2・241
 - No.4 日本思想の系譜——文献資料集(古代中世) 小田村寅二郎編・42-3・309
 - No.5 日本思想の系譜——文献資料集(近世) 小田村寅二郎編・43-2・317
 - No.6 日本思想の系譜——文献資料集(近世) 小田村寅二郎編・43-10・409
 - No.7 日本思想の系譜——文献資料集(近代) 小田村寅二郎編・44-3・403
 - No.8 日本思想の系譜——文献資料集(近代) 小田村寅二郎編・44-3・381
 - No.9 歴史と人生観——マルクス主義の超克・川井修治・43-3・283
 - 二、「合宿教室」レポート(同数・開催地・年次・書名・発行年月・頁数)
 - 1 回霧島・31・混迷の時代に指標を求めて・31-11・88・A5
 - 2 回福岡・32・民族自立のために・32-10・53・A5
 - 2 回B岡山・32・民族復興の根柢を培うもの・33-7・113・新書
 - 3 回佐賀・33・民族の明日を求めて・34-4・250・新書
 - 4 回阿蘇・34・国民同胞感の探求・35-5・365・B6
 - 5 回雲仙・35・続国民同胞感の探求・36-6・433・B6
 - 6 回雲仙・36・続々国民同胞感の探求・37-8・325・B6
 - 7 回阿蘇・37・新しい学風を興すために第1集・38-5・248・新書
 - 8 回雲仙・38・新しい学風を興すために第2集・39-4・298・新書
 - 9 回桜島・39・新しい学風を興すために第3集・40-4・298・新書
 - 10 回城島・40・日本への回帰第1集・41-5・295・新書
 - 11 回雲仙・41・日本への回帰第2集・42-5・320・新書
 - 12 回阿蘇・42・日本への回帰第3集・43-5・307・新書
 - 13 回霧島・43・日本への回帰第4集・44-5・324・新書
 - 三、その他の研究資料(書名・著者・発行年月・頁数)
 - 6 聖徳太子の信仰思想と日本文化創業・黒上正一郎・41-3・294・A5
 - 歌よみに与ふる書、他四編・正岡子規・39-3・121・新書
 - 日韓・海と河の交流(日韓交流レポート)・浜田収二郎編・43-6・112・A5
 - 第10回「合宿教室」参加者感想文集・同人編・40-10・80・A5
 - 第11回「合宿教室」参加者感想文集・同人編・41-10・104・A5
 - 第12回「合宿教室」参加者感想文集・同人編・42-11・120・A5
 - 第13回「合宿教室」参加者感想文集・同人編・43-10・118・A5
 - 第14回「合宿教室」参加者感想文集・同人編・44-10・136・A5

出版のお知らせ
 昨年夏、阿蘇合宿教室の記録
 大学教官有志協議会編
 社団法人国民文化研究会
 はしがきから——日本の青年のエネルギーを、狂気に近い破壊の姿でしか現わし得なかつたというこの悲しい現実を噛みしめて見よう。「断絶」などという流行語で流してしまふには、痛ましすぎる現実ではないか。この問題を真に内的に解決できぬ限り、戦後はまだ終りはしないのである。……かつて松陰先生は師道の衰退を嘆いて次のように言われた。公師を取ること易く、師を撰ぶこと審ならず、故に師道軽し。故に師道を興さんとらば、妄に人の師となるべからず。又妄に人を師とすべからず、必ず真に教ふべきことありて師とすべし。大言壮語と増幅された観念語が氾濫するなかで、われわれは終始より立した精神であろうとした。地すべりのような解体現象の中で一人一人の「志」がためされていくからである。

日本への回帰(第五集)

三、講義
 これからの国造り——物心両面の理想は何か——
 世界経済調査会理事 木内信胤
 欧米は間違っている
 奈良女子大学名誉教授 岡 潔
 宮中見聞談……元侍従次長 木下道雄
 年間活動報告
 一年の歩み——霧島合宿より阿蘇合宿まで——
 東京大学経済学部三年 石村善悟
 第十四回「合宿教室」のあらまし
 九州大学医学部三年 小柳左門
 歌集
 新書版二九三頁
 定価三〇〇円 千七〇円

はしがき
 一、学問について
 鹿兒島大学教授 川井修治
 国家と大学
 目に見える現実の社会
 明星大学教授 奥田克巳
 「文字の学者日用を知らず」
 修猷館高校教諭 小柳陽太郎
 学問と教育をそれへの正しい軌道にのせるために
 国民文化研究会理事長 小田村寅二郎
 二、和歌について
 短歌入門——子規の歌を中心に——
 若松高校教諭 山田輝彦
 和歌は日本文化の精髓である
 亜細亜大学教授 夜久正雄
 国民同胞第百号附録
 発行所 社団法人国民文化研究会
 東京都中央区銀座7-10-18 柳瀬ビル三階 月刊「国民同胞」編集部
 下関市南町町25-3 宝辺正久
 毎月一回10日発行 定価一部20円

